明治三十九年十二月二十日印刷
明治三十九年十二月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
編輯兼發行者　國書刊行會代表者　市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印刷者　本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印刷所　内外印刷株式會社分工場

に及ぶ事偃曝談餘にみえたり故に三四月より七八月にいたり絲蓴と名づくるよし和漢の書共に多くみえたり且其上に水の淺深によりて蓴の肥瘦ある事齊民要術本草綱目羣芳譜等にみえたり多識篇の說を以て誤とするは聞えず又正月のかざりに用ゆるほだはらは此こもの老たるなるべしとあるは更に證據もなく其說はなはだ正しからず

大和本草云蓴和名ヌナハ沼ノ中ニ生ジ莖長クシテ縄ニ似タリ故ニ沼縄トイヘル意ナルベシ云々

按に此注誤れり沼にのみ生ずるものにあらず

和漢三才圖會云蓴性滑而長如二絲縄一故稱二奴奈波一則滑縄之略也

按に長如二絲縄一といへるは良庵が造語也西土の書にはーつも縄にたとへし事なし多く絲にたとへたり

和訓栞云ぬなはは沼縄の義なり云々

按に此注あやまりなり

本草綱目啓蒙云蓴ヌナハ沼ニ生ジテ縄ノ如ノ意云々子ヌナハ秋古歌

按に沼に生じて如レ縄の意といへるは上にいふが如し殊にネヌナハを秋と注せしは誤なり延喜式には正月にねぬなはあれば秋にはあらざるなり

古事記傳引二契沖說一云沼に有て縄の如く長きものなれば沼縄の義なりといへり

これも亦とるにたらず

九月より十一月に至て名ニ猪蓴ニ一名龜蓴又有ニ石蓴ニ絲最繁とあるによれば蓴の一種にして變生なるべし

ぬなは



○正誤

庖厨本草云石蓴倭名鈔ニコモ、海蓴ノ二字モ用フ（蓴與蒓同）多識篇ノ案ニシテ考ニ本草ニ南海石ニ附テ生ズ莖ノ長サ二三寸イロアヲシ涎滑アリテ脂ノ如シ又光瑩ニシテ水晶ノ如シ葉ノ間ニ椏アリ椏中ニ花アリ形圓ニシテ豆ノ如シ其葉錢ヨリ大ニシテ卷タリ慈姑ノ葉ノ如シ薑豉ニテ烹テ甚ダ美ナリ昔張翰ガ云シ蓴鱸之蓴ハ即是也○作者向井元升曰西國ニコモト云海草アリ其ノ様本草ノ説ノゴトシコマカニキザミタ、キテシヤウユウサカシホニテ調ズレハネバリナメラカニシテ脂ノ如シシヤウガ、クルミナドキザミ入テ甚美ナリ山藥ノトロ、汁ニマサレリサレバ石蓴ハコモナルコトウタガヒナシ多識篇アヤマレリ又コモノ長ジテ老タルハ色變ジテ紫ニナル正月ノカザリニ用フルホダハラハ此コモノ老タルナルベシ石蓴味甘性平毒ナシ水ヲ下シ小便ヲ利シ風祕シテ通ゼザルニヨシ五膈臍下ノ結氣ニヨシ煮テ汁ヲ用フ胡人ハ疳疾ヲ治スルニ用フ

按に誤れり蓴はもとより海に生ずる物にあらず古池、湖沼の水すみて清潔にあらざれば生せず鹽氣ある水にも生せずしかるを南海石に附て生じ長さ二三寸といへるはたがへり初生は尤二三寸なれども次第に生長せり其長ずるにいたりては長さ丈許

同書にみえたり

環蓴 本草和名蘇敬本草注

○按に霜降以後二月にいたるまでを環蓴と名づくるよしなれど環字證類本草に瑰に作りたればいづれか非ならん猶後の考を待のみ

茆 多識編本草大義和漢三才圖會詩經本草綱目群芳譜

○按に卯の音なり毛傳云茆鳧葵也詩義疏云茆與レ葵相似たり葉大さ如レ手赤圓く有レ肥斷著二手中一滑不レ得レ停也と齊民要術にみえたるを以て考るに茆は蓴の古名なり

露葵 多識編和漢三才圖會本草大義顏氏家訓本草綱目群芳譜

○按に葵朗が父の諱を純といへるによりて蓴菜を呼て露葵とすと顏氏家訓にみえたれば此時よりの名目なり

懸葵 格物論

○按に同書に蓴の一名なるよしみえたり

水葵 齊民要術本草綱目群芳譜

○按に江南の人蓴菜を或は水葵といふとみえたり

水戾 庶物異名

○按に蓴菜又水戾と名づくと同書にみえたれば異名なる事明白なり

缺盆草 本草綱目啓蒙附方群芳譜

○按に蓴一名缺盆草と群芳草にみえたり形ちを以て名づけたり

鶚蹏草 本草綱目啓蒙庶物異名通雅

○按に蓴の形鶚蹏に似たるを以てしか名付たり

馬蹄草 蔬譜本草綱目群芳譜

○按に蓴菜の葉馬蹄より小なれども形の似たるを以て名付たり

錦帶 庶物異名本草綱目群芳譜

○按に李時珍顏氏家訓を引て葵朗父が諱の事などをも引或諱二其名一謂二之錦帶一とみえたりさもあらんか猶考べし

銅拍子 和訓栞

○按に蓴菜の異名なり士清曰所により銅拍子とよべるは其葉の形の似たるをもてよべるなりとあるによれば方言にして西土の書にはいまだ見あたらず

石蓴 格物論

○按に蓴菜の一種なるべしいかにとなれば同書に

第に長舒し四月の比より葉水面にうかみ出であだかも蓮のうきはの如くなれども形ち細小なり故に萬葉集にも「吾心ゆたのたゆたにうきぬなはへにも奥にもよりかてましを」とみえたるは水面にうきてかなたこなたとたゆたふさまを心のさだまらざるによせてよめり

稗蓴 群芳譜

○按に三月の比の嫩莖の物をいふよし同書にみえたり且字書に稗は小也とあれば蓴の初生成事明也

稚蓴 和漢三才圖會本草綱目啓蒙正字通群芳譜

○按に稚と稗と義同じ幼稚の稚字にて二字共に通用せり

雉蓴 本草綱目啓蒙正字通

○按に名義詳審ならざれども稚字に通じて用ひしなるべし

雉尾蓴 本草綱目啓蒙格物論群芳譜

○按に三四月嫩莖末葉細如ニ釵股一黄赤色の物を雉尾蓴と名づくるよし群芳譜にみえたれば上に出せる稚蓴と同物なる事あきらかなり

絲蓴 本草和名和名類聚鈔蘇敬本草注格物論潜確類書群芳譜

○按に三四月より七八月に至るまでの通名なるよし和漢ともに同説なり

紫蓴 本草綱目啓蒙福州府志

○按に蓴は自から微しく紫色を帶れば名づく

油蓴 本草綱目啓蒙長箋正字通

○按に長箋に秋に入れば油蓴と名づくるよしいへれど雞跖集に蓴七八月に入れば食にあたらずといへるも蟲ありて蓴につくよしみえたれば食ふべからず宜なる哉時ならざるを不レ食といふ聖語を守るべし

瑰蓴 本草綱目群芳譜

○按に蓴九月葪泥中にありて漸粗硬なる物を瑰蓴と名づけ或は葵蓴と名づくるよし二書に出たり是蓴の老たる物をいふなり

葵蓴 同上

○名義上におなじ

猪蓴 群芳譜

○按に十月十一月のものを猪蓴といひ又龜蓴とも名づくるよしなれども味苦く食ふにたえざるよし

秋の夜の月をみにくる人さへに
　　ねぬなはたえぬひろ澤の池

○釋名

ぬなは古事記日本書紀延喜式新撰字鏡本草和名和名類聚鈔

○按にぬなはのぬはぬめらかなる義なは食料の義ははつけていふ辭にや又は葉をいふにやさて又形狀は葉やゝまろく莖は箸の太さにして夏月花をひらく尤古池湖沼中の水淸ければ生じやすく水汚濁なれば種るといへども消やすし且又水の淺深によりて肥瘦のたがひあり水深ければ莖肥て葉少し水淺ければ莖やせて葉多きよし齊民要術本草綱目群芳譜等にみえたり

蓴延喜式新撰字鏡和名類聚鈔埤雅顏氏家訓齊民要術格物論

○按に蓴は通稱にて菜字を添て蓴菜とも蒓ともいへり蓴と同義なり

蒓新撰字鏡康熙字典

蓴菜本朝食鑑大和本草本草大義和漢三才圖會齊民要術酉陽雜爼庶物異名

○按に古はぬなはとのみ稱して蓴の一字を用ひたりしを近世にいたりていつの比よりか蓴菜と稱せり又は淳菜ともかけり

蒓菜和漢三才圖會本草綱目

淳菜本草綱目啓蒙埤雅齊民要術

○按に蓴の性逐レ水滑故に淳菜といふよし埤雅にみゆ齊民要術も是におなじ

ねぬなは延喜式古今和歌集拾遺和歌集古今六帖八雲御抄酉陽雜爼格物論

○按に蓴菜の初生にして萠芽泥中より出ていまだ根につきたるものをさしていへり延喜式にも正月の條に出したればよくあへり又西土にても根蓴を稱美せし事あり酉陽雜爼にいでたり和漢同一といふべし

蓴龜酉陽雜爼

○按に是ねぬなはなり其證は蓴菜之根絕美江東謂二之蓴龜一と同書にいでたるにて義明かなりこれによれば蓴は嫩苗を賞味する事しられたり

龜蓴格物論群芳譜

○按に十一月龜蓴と名づくるよし同書にみえたり

うきぬなは萬葉集八雲御抄新撰六帖藻鹽草

○按にうき蓴は蓴の葉水面にうきたるを以て名付たり霜降の後蓴泥中より芽を萏み春にいたりて次

だいしらず　　よみ人しらず
ねぬなはの苦しかる覽人よりも
我そますたのいけるかひなき

古今六帖

ねぬなは　　たゞみね
くれはつることやおそきとねぬなはの
ねぬれは人のくるもしられす
山水に君はおひねとねぬなはの
くるまに〳〵も思ひますかな
戀をのみますたの池のねぬなはの
くれはそ物のみたれともなる

新撰六帖

ぬなは　　衣笠内大臣家良公
風吹はなみにたゞよふうきぬなは
うきなからやは世をつくすへき　　前藤大納言爲家
はらの池の水さひましりのうきぬなは
我にもあらす世にまきれつゝ　　九條三位入道知家
古川のしけきぬなはにつなかれて
なかれもやらぬせゝの埋木　　左京大夫行家(信實イ)
こもり江にしつみたにせぬうきぬなは
くるしき心いやかさぬらん　　右大辨入道光俊
いもと我今はぬなはのをしけれは
あひにはあはし戀はこふとも　　家良
ねぬなは
いかにせん沼に生てふねぬなはの
なかきうらみに命たえなは　　爲家
うきにのみ生るねぬなはなかきねに
思ひみたれて年はへにけり　　知家
くる人もなき物ゆゑにねぬなはの
なか〳〵し夜を待あかしつる　　行家(信實イ)
いたつらにつれなき人にねぬなはの
ねたくやしたの思ひ亂れん　　光俊

鮒魚一作レ羹食主ニ胃弱一鱸下食者至效又宜ニ老人一應レ入ニ上品一故張翰臨ニ秋風一思ニ吳中之鱸蓴羹一也藏器曰蓴體滑常食發レ氣令ニ關レ節急嗜レ睡脚氣論中令ニ人食レ之此誤如深也濕病後脾弱不レ能レ磨ニ化食一者多死予所レ居近レ湖々中有ニ蓴藕一年中疫甚飢人取レ蓴食レ之雖ニ病瘥者一亦死至レ秋大旱人多血痢湖中水竭掘レ藕食レ之闔境無レ他蓴藕之功於レ斯見矣

群芳譜（譜卉）云蓴一名茆一名錦帶一名水葵一名露葵一名馬蹄草一名缺盆草生ニ南方湖澤中一最易レ生種以ニ水淺深一爲レ候水深則莖肥而葉少水淺莖瘦而葉多其性逐レ水而滑性吳越善食レ之葉如ニ荇菜一而差圓形似ニ馬蹄一莖葉（按葉下色上脫字歟）色大如レ箸柔滑可レ羹夏月開ニ黃花一結レ實青紫大如ニ棠梨一中有ニ細子一三四月嫩莖未レ葉細如ニ釵股一黃赤色名ニ稚蓴一又名ニ雉尾蓴一體軟味甜五月葉稍舒長者名ニ絲蓴一九月萌在ニ泥中一漸粗硬名ニ瑰蓴一或作ニ葵蓴一十月十一月名ニ豬蓴一又名ニ龜蓴一味苦體澀不レ堪レ食取レ汁作レ羹勝ニ他菜一味甘寒無レ毒治ニ消渴熱痺一厚ニ腸胃一安ニ下焦一逐レ水解ニ百藥毒并蠱氣一

又云製用

四月食ニ蓴菜鯽魚羹一開レ胃　內景經

禁忌

蓴性雖レ冷熱食及ニ多食一擁レ氣損ニ人胃及齒一令ニ人顏色惡一損ニ毛髮一和レ醋食令ニ人骨痿一發レ痔關レ節急嗜レ睡脚氣論中令ニ人食一レ此誤レ人極深　七月勿レ食レ蓴上有ニ蝸蟲一殺レ人

『圖一面略レ之』

和歌

萬葉集卷第七（譬喩歌）

寄レ草

吾情（ワガコヽロ）湯谷絕谷（ユタニタユタニ）浮蓴（ウキヌナハ）邊毛（ヘニモ）奧毛（オキニモ）依勝益士（ヨリガテマシヲ）

古今和歌集卷第十九（雜體）

誹諧歌

題しらず　　たゞみね

かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたてしくるないとひそ

按に家集にはあひしりたる人のすみよしにまうづときゝてとあり下の句ねぬ名はたゝでとありて古今六帖にはかくれぬの底より生るとあり家集にはしたより生るとあり

拾遺和歌集卷第十四（戀四）

戻ニ又引ニ蔬譜一云一名錦帶一名馬蹄草
又引ニ墨莊漫錄一云杜子美祭ニ房相國一九月用ニ蓴鯽之
羹一蓴生ニ於春一至レ秋則不レ可レ食不レ知ニ何謂一而張翰
亦以ニ秋風動一而思ニ蓴鱸一々固秋物而蓴不レ可レ曉也
又引ニ長箋一云入レ秋爲ニ油蓴一云々
又引ニ雞跖集一云蓴入ニ七八月一不レ中レ食有ニ蝸蟲一故也
至ニ十月一冰凍蟲死雖レ老猶可レ食
又引ニ野客叢談一云陸機曰千里蓴羹千里地名在ニ建康
境上一其地所レ產蓴菜甚佳
本草綱目（水草類）　云蓴（別錄上品）
釋名茆（卯柳二音）　水葵（詩疏）　露葵（綱目）　馬蹄草
時珍曰蓴字本作レ蒓從レ純々乃絲名其莖似レ之故也
齊民要術云蒓性純而易レ生種以ニ淺深一爲レ候水深則
莖肥而葉少水淺則莖瘦而葉多其性逐レ水而滑故謂ニ
之蒓菜一幷得ニ葵名一顏之推家訓云蔡朗父諱純改レ蒓
爲ニ露葵一北人不レ知以ニ綠葵一爲レ之詩云薄采其茆卽
蒓也或諱ニ其名一謂ニ之錦帶一

集解

保昇曰蓴葉似ニ鳧葵一浮在ニ水上一采レ莖堪レ噉花黃白
色子紫色三月至ニ八月一莖細如ニ釵股一黃赤色短長
隨ニ水深淺一名爲ニ絲蓴一味甛體軟九月至ニ十月一漸粗
硬十一月萌在ニ泥中一粗短名ニ瑰蓴一味苦體澀人惟取
レ汁作レ羹猶勝ニ襍菜一時珍曰蓴生ニ南方湖澤中一惟吳
越人善食レ之葉如ニ荇菜一而差圓形似ニ馬蹄一其莖紫
色大如レ筋柔滑可レ羹夏月開ニ黃花一結レ實青紫色大
如ニ棠梨一中有ニ細子一春夏嫩莖未レ葉者名ニ稚蓴一稚
者小也葉稍舒長者名ニ絲蓴一其莖如レ絲也至レ秋老則
名ニ葵蓴一或作ニ豬蓴一言可レ飼レ豬也又訛爲ニ蓴龜蓴
焉一餘見ニ鳧葵下一

氣味甘寒無レ毒

藏器曰蓴雖ニ水草一而性熱壅詵曰蓴雖レ冷補レ熱食
及ニ多食一亦擁レ氣不レ下甚損ニ人胃及齒一令ニ人顏色
惡損ニ毛髮一和レ醋食令ニ人骨痿一李延飛曰多食性滑
發レ痔七月有レ蟲着レ上食レ之令ニ人霍亂一

主治消ニ渴熱痺一（別錄）和ニ鯽魚一作レ羹食下レ氣止レ嘔多食
壓ニ丹石一補ニ大小腸虛氣一不レ宜ニ過多一（孟詵）治ニ熱疸一
厚ニ腸胃一安ニ下焦一逐レ水解ニ百藥毒幷蠱氣一（大明）

發明

弘景曰蓴性冷而補ニ下氣一襍ニ鱧魚一作レ羹食亦逐レ水
而性滑服食家不レ可ニ多用一恭曰蓴久食大宜レ人合ニ

ハ葉ノ中央ヨリ出葉ハ水面ニ浮ビ根ハ水底ニアリ故
ニ莖長クシテ蔓ノ如シ莖及葉背ニ涎アリテ氷ノ如シ
嫩葉ハ卷テ荷ノ卷葉ノ如シ春夏採テ食用トス半夏生
ノ候ヲ過ル時ハ堅クシテ食フニ堪ヘズ六月ニ花ヲ開
ク紫色ナリ釋名茆　音卯ハ蓴也　音柳ハ女菀也
古事記傳(明宮巻)云奴那波久理は蓴を云和名鈔水菜部に
野王按蓴水菜也蘇敬本草注云自二三四月一至二七八月一
通名二絲蓴一味甜體軟霜降以後至二二月一名二環蓴一味苦
體澁和名沼奈波とあり(俗に専菜と云)萬葉七(三十四丁)に浮蓴邊毛(ウキヌナハヘニモ)
奥毛依勝益士(オキニモヨリガテマシヲ)さて久りとは添て云名にて三稜草など
の久理と同くて操依(クリヨ)せて採物なる故の名なるべし(蔓草類を某豆良と云類なり)
若是を蓴を操意としては調ひわろし(其由は次に云)
云々
詩經(魯頌)云思樂二泮水一薄采二其茆一魯侯戾止在レ泮飲レ酒
既飲二旨酒一永錫レ難レ老順二彼長道一屈二此羣醜一云々
埤雅云蓴逐レ水性滑故謂二之淳菜一
顏氏家訓云蔡朗父諱純遂呼二蓴菜一爲二露葵一
格物論云蓴生二水中一葉似二鳧葵一一名懸葵春生レ莖而
未レ生レ葉名二雉尾蓴一細長肥滑三月至二八月一葉舒長細
如二釵股一名二絲蓴一九月至二十一月一名二猪蓴一一名龜蓴

又有二石蓴一絲最繁
齊民要術云蓴南越經云石蓴似二葉紫一色青詩曰思樂二
泮水一言采二其茆毛一云茆鳧葵也詩義疏云茆與レ葵相似
葉大如レ手赤圓有レ肥斷著二手中一滑不レ得レ停也莖大如
レ箸皆可二生食一又可レ約二滑羹一江南人謂二之蓴菜一或
謂二之水葵一本草云治二消渴熱痺一又云冷補二下氣一雜二
鯉魚一作レ羹亦逐レ水而性滑謂二之淳菜一或謂二之水芹一
服食不レ可レ多
又云種レ蓴法近陂湖一可下於二湖中一種上レ之近二流水一者
可二決レ水爲レ池種レ之以二深淺一爲レ候水深則莖肥葉少
水淺則葉多而莖瘦蓴性易レ生一種永得宜二潔淨一不レ耐
レ汚糞穢入レ池卽死矣種一斗餘許足レ用偃曝談餘云春
蓴如二亂髮一不レ足レ異秋蓴長丈許凝脂甚滑季鷹秋風正
饞此也
酉陽雜俎云蓴菜之根絕美江東謂二之蓴龜一
潛確類書云蓴生二水中一葉似二鳧葵一浮二水上一花黃白子
紫色三月至二八月一莖細如二釵股一黃赤色短長隨二水淺
深一名爲二絲蓴一堪レ啜味甘寒九十月漸粗硬十一月萌
在二泥中一
格致鏡原云庶物異名疏騷蹝韻藻謂二卽蓴菜一又名二水

テ食ノ性寒滑脾胃虚冷ノ人不レ可レ食又發レ痔三月ヨリ八月ニ至テ氷多シ軟カニシテ甜シ九月ヨリ十二月ニ至テ硬クシテ味苦シ鹽ニツケテ久ニ堪ヘ遠ニ寄ス

東雅云蓴ヌナハ倭名鈔に玉篇穪敬本草注等を引て蓴はヌナハと注せり莖長く繩を延べしごとくにして涎滑なるをいふなり

滑かなるをヌといふことは前に注せり

和漢三才圖會水草部 云蓴、蒓同 茆、卯柳二音 水葵、馬蹄草、露葵、和名沼奈波、今云ニ蓴菜一

本綱蓴生ニ南方湖澤中一如ニ荇菜一而差圓形似ニ馬蹄一其莖紫色大如レ筋柔滑可レ羹水深則莖肥而葉少水淺則莖瘦而葉多其性逐レ水而滑故名ニ蒓菜一夏月開ニ黄花一結レ實青紫色大如ニ棠梨一中有ニ細子一春夏嫩莖未レ葉者名ニ雉蓴一葉稍舒長者名ニ絲蓴一其莖如レ絲也至レ秋老則名ニ葵蓴一或作ニ猪蓴一共味甘冷和レ鯽作レ羹可レ食

多食發レ痔和レ醋食令ニ人骨痿一

治ニ癰疽一以ニ蓴菜莖或葉子一搗爛傅レ之

未レ成即消治已成即毒散

按蓴惡レ泥喜レ沙故不レ生ニ淤泥中一其葉不レ出ニ於水上一

凡蓴菜不レ可レ盛ニ漆器一如犯レ之則漆色損也山城淀伏見川上多有レ之以ニ淡醤油一煮啜脆滑甘美

本草大義云蓴茆卯柳二音 水葵詩疏 露葵綱目 馬蹄草同上 和名潤菜一名滑菜 和漢一也訓ニ阿佐坐一非也蓴與ニ莕菜一雖ニ一類一少異也蓴菜莖著ニ涎滑一以爲ニ珍美一耳莕菜其莖無ニ涎滑一或曰本草不レ謂ニ涎滑有無一以レ何知レ之乎予答曰揚蟠蓴菜詩云、休レ説江東春日寒、到來且覔鑑湖船、鶴生ニ嫩頂一浮ニ新紫一、龍脱ニ香髯一帶ニ舊涎一、玉割鱸魚迎レ刄滑、香炊稻飯落レ匙圓、歸期不レ待ニ秋風起一、漉レ酒調レ羹任ニ我年一、云々此誠所ニ以珍ニ美涎滑一也

和訓栞云ぬなは新撰字鏡蓴をよめり沼繩の義也俗に蓴菜の青をもてよべり根ぬなはともよびくれはそといひかけたり又所により銅拍子とよべるは其葉の形の似たるをもてよべる也池に浮て生るものなれば歌に多くうきぬなはとよめり新撰字鏡に蘋をうきぬなはとよみ又滋をなめぬなはとよめり○みやまぬなはとよべる物は杜衡也

本草綱目啓蒙水草類 云蓴ヌナハ・ジユンサイ一名缺盆草

附方 淳菜埤雅 騎蹏草通雅 紫蓴福州府志 稚蓴一名雉蓴正字通

雉尾蓴群芳譜 葵蓴一名油蓴正字通

池澤中ニ生ズ葉形橢ニシテ深綠色厚シテ光リアリ莖

許邇斯豆、伊麻叙久夜斯岐如レ此歌而賜也云々
日本書紀（應神天皇紀）云十三年春三月天皇遣二專使一以徵二髮長媛一云々天皇知三大鷦鷯尊感二髮長媛一而欲レ配是以天皇宴二子後宮一之日始喚二髮長媛一因以上二坐於宴席一時撝二大鷦鷯尊一以指二髮長媛一乃歌之曰伊裝阿藝怒云云於レ是大鷦鷯尊蒙二御歌一便知レ得レ賜二髮長媛一而大悅之報歌曰瀰豆多摩蘆、豫佐瀰能伊戒珥、奴那波區利、破陪鷄區辭羅珥、委愚比苑區、伽破摩多曳能、比辭餓羅能、佐辭鷄區辭羅珥、阿餓許居呂辭、伊夜于古珥辭氐云々
延喜式（大膳）云正月最勝王經齋會供養料云々根蓴二把云云
又云仁王經齋會供養料云々根蓴一把（漬菜料）云々
新撰字鏡（草部）云蓴（純音）芼（三同正補各反苴蘘荷也蒲穗也借視倫反乎奴奈波）
本草和名云蓴（仁諝音純瓢立音義云蒓同）絲蓴（三四月至二七八月一通名二絲蓴一）環蓴（霜降以後至二十二月一名二環蓴一已上二種出二蘇敬注一）和名奴奈波（按環證類作レ瑰順抄與二此書一同）
和名類聚鈔（水菜部）云蓴野王案云（視倫反和名沼奈波）水菜也
蘇敬本草注云自二三四月一至二七八月一通名二絲蓴一
八雲御抄（草部）云蓴うきぬなは　ねぬ　一說こもくろめをも云り（按にこもくろめ未レ考得一）

藻鹽草卷第八（草部）云蓴（自二三月一至二七月一まである草也一說こもくろめなともいへりと云々）
うきぬなは　ねし（根無也益田池にもよめり）　すまの入江によめり
みさびましりのうきし（沼澤によめり）　ふる河のしげきつたにつながれて　ねぬなはのながれね
多識編云蓴（和名）　奴那波（異名）　水葵（詩疏）　馬蹄草（增補異名）　茆（卯柳）二音　露葵（綱目）
本朝食鑑（水菜類）云蓴
　和名奴奈今亦同或如レ字加二菜字一而稱レ之
集解處々湖澤雖二儘有一レ之而不レ多惟江州琵琶湖多有而肥美味亦佳葉如二荇菜一而差圓形似二馬蹄一每浮二于水上一其莖紫色大如二荇莖一而柔滑三四月稚蓴生レ芽時煮レ之則莖上着二凝粘如二煮葛粉一其味稍佳夏月開二黃花一結レ實靑紫色大如二小楝子一中有二細子一々墜二于水中一而自生也凡蓴作レ羹可レ食耳
氣味甘冷無レ毒（性滑不レ多食）主治未レ詳可レ考二綱目一
大和本草云蓴倭名ヌナハ嵯峨ノ大澤ノ池、伏見、宇治ノ池沼又諸州ノ池中ニ多シ今ノ俗ハ聲ヲ稱シテ蓴菜ト云是亦菜ナリ可レ食葉ハ荇菜睡蓮ニ似テ少長クシテ不レ缺是ヲ以爲レ異葉ハ水上ニ浮ベリ莖ノメグリニ冰ノ如ナル物アリ是ヲ賞トス煮テ羹トシ或酢味噌ニ

古今要覽稿卷第四百六十七

●草木部 水草

ぬなは　蓴　蓴菜　茆

ぬなはは漢名を蓴といひて古くは古事記日本書紀萬葉集を始として勅撰の歌集その外延喜式本草和名和名類聚鈔等にみえたりさて此物古池湖沼中に生ずいはゆるよさみの池、ます田の池、はらの池、廣澤の池等に生る事古歌の中にみえたり其形狀をいはゞ葉は荇菜に似てやゝ圓く馬蹄に髣髴たり故に馬蹄草の名あり莖は太さ筋の如くにして黄赤色柔滑なり莖上に凝粘して煮葛粉のごときものを著生す三四月嫩軟にして未葉小細なり其莖釵股をなして味甜美夏月花を開き其色紫赤色なれども色薄し花盛の間至て長し五月より七月初旬にいたるまで花あり花後實を結ぶ其實大さ指甲のごとく色は青紫にて中に細子ありさてまた蓴に數名あり時節によりて其名を異にせり初生をねぬなはと延喜式古今集拾遺集古今六帖八雲御抄みえしは本草和名に環蓴といひ注に霜降以後二月にいたり環蓴と名くとあり酉陽雜俎に蓴龜とみえたる是なり同書に蓴菜の根絕美江東謂二之蓴龜一とあるによれば根蓴なる事明白也三四月より七八月にいたる迄通名絲蓴と本草和名和名類聚鈔格物論潜確類書群芳譜みえ一說に三四月の中嫩莖なるを穉蓴又雉尾蓴と名づくる事群芳譜にみえたり九月より十月にいたつて萠芽泥中にありて漸粗硬なる物を瑰蓴或は葵蓴と名づくるよし本草綱目群芳譜みえ十一月よりしては猪蓴或は龜蓴又石蓴と名づくるよし格物論本草譜目群芳譜みえたり蓴といひ茆といふがごときは正名にして異名の如きは數名ありいはゆる缺盆草鵦蹏草馬蹄草を始として錦帶油蓴懸葵水葵水戻等の數名あり又是迄和書に不レ載漢名十四五名これあり其名目の如きは悉く釋名に載す其生ずる所によりて味の美不美肥瘦ある事をも具に辨せり

古事記明宮卷云天皇聞三看日向國諸縣君之女名髮長比賣其顏容麗美一將レ使而喚上一之時云々天皇聞看豐明之日於二髮長比賣一令レ握二大御酒柏一賜二其太子一爾御歌曰伊邪古杼母云々又御歌曰美豆多麻流余佐美能伊氣能、韋具比宇知、比斯賀良能、佐斯祁流斯良邇、奴那波久理、波閉祁久斯良邇、和賀許々呂志敍、伊夜袁

ノ如シ故ニタイコノブチト呼ブ一種ベニカハホネハ花赤黄色一種黄瓣紅蘂ナルヲシンクレナヒノカハホネト呼ブ共ニ根ハ粗ク長ク節多クシテ深綠色ナリ和方ニ多ク用ユ一種ヒメカハホネハ花葉皆小ナリ一種ヲカバハホネハ陸生ナリ形狀ハリウキンクハニ似テ莖垂レズ花瓣ニ尖リアリ

本草綱目水草類云萍蓬草藏器曰生二南方池澤一葉大似レ荇花亦黄未レ開時狀如二筭袋一其根如レ藕飢年可二以當一レ穀時珍曰水粟三月出レ水莖大如レ指葉似二荇葉一而尺徑四五寸初生如二荷葉一六七月開二黄花一結レ實狀如二角黍一長二寸許内有二細子一一包如二罌粟一澤農采レ之洗擦去レ皮蒸曝舂取レ米作二粥飯一食レ之其根大如レ栗亦如二雞頭子根一儉年人亦食レ之作二藕香一味如二栗子一昔楚王渡レ江得二萍實一大如レ斗赤如レ日食レ之甜如レ蜜者蓋此類也若二水萍一安得レ有レ實耶三四月采二莖葉一取レ汁煮二硫黄一能拒レ火又段公路北戸錄有二睡蓮一亦此類也其葉如レ荇而大其花布二葉數重一當二夏晝一開レ花夜縮入レ水晝復出也子氣味甘澁平無レ毒主治助レ脾厚レ腸令二人不一レ饑時珍根氣味甘寒無レ毒主治煮食補レ虛益二氣力一久食不レ饑厚二腸胃一藏器

救荒本草野譜云萍蓬草食二根及實一生二池澤中一其根如レ藕飢年可二以代一レ糧六七月開二黄花一結レ實狀如二角黍一可二作レ飯食一レ之

萍蓬子結レ實秋初如二角黍一　萍蓬根藕　形水底自生成飢年采得來充レ腹抵三却黄粱與二白粟一

『圖三面略レ之』

詩

覆醤續集

萍蓬草俗曰二加波保禰一

蕭洒萍蓬草、騷人未二愛吟一、插レ瓶嫌二水淺一、在レ沼好二泥深一、翠葉浮二青鷁一、青鷁船也黄花抽二玉簪一、麗容與レ蓮併、淨潔滌二煩襟一、

○釋名

かはほね 本草和名和名類聚鈔加波保禰　骨蓬 同上　鼓蘐 同上　骨髓 和方書

かは 同上　かはと 仙臺　たいこのぶち 本草綱目啓蒙　萍蓬草 拾遺

水粟 本草綱目　水粟子 時珍曰陳藏器拾遺萍蓬草即今水粟也其子如レ粟如二蓬子一也俗人呼二水粟包一又云水栗子言二其根味一也或作二水笠一已上本草綱目

かはほね　骨蓬

本草和名云骨蓬（倶腐黯骨故以名レ之）一名鼓根（出二崔禹一）和名加波保禰

和名類聚鈔云骨蓬崔禹錫食經云骨蓬（和名加波保禰）味鹹大冷無レ毒根如二腐骨一花黃色莖頭著レ葉者也

和漢三才圖會云萍蓬草水栗子水粟（本草綱目）骨蓬（倭名抄〇俗用川骨二字）萍蓬草乃源順載二崔禹錫食經一曰骨蓬根如二腐骨一（味鹹大冷）花黃色莖頭著レ葉者也紀泉攝河播州之池沼甚多夏月採レ根切片曝二於暑熱石上一如レ値二陰雨一則色變黑不レ堪レ用略似二腐骨一故呼曰二川骨一葉似二款冬葉一而略軟倭方多用入二金瘡折傷産前後藥中一以爲二破血止血之要藥一然本草不レ言二其功一者何耶近頃出二白花或紅花者一人以爲レ珍用二茶會之花一耳

大和本草云萍蓬草葉ハ芋ニ似テ厚ク光アリ莖ツヨク水上ニタチノボル葉モ花モ水面ニウカバズ根大ナリ夏月黃花ヲ開キ秋ノ末マデアリ一莖開二一花一堪レ賞本草陳藏器李時珍カ說可レ考倭流ノ外醫及女醫コノンデ用レ之性ヨク血ヲ收ム又ヲカヾハホネアリ陸生スカハホネノ花ニ似タリ

用藥須知云萍蓬草和名河骨和方打撲傷損ノ方中ニ入テ有二特功一庸醫誤テ莕菜トスルハ誤ナリ莕菜ハ荇菜ノ別名ナリ與レ此不レ同

地錦抄云川骨夏中より秋末迄花金色莖一本に一りんづゝ咲きさかり久敷もの

東雅云骨蓬カハホネ倭名鈔に崔禹錫食經を引て骨蓬はカハホネ根如二腐骨一花黃色莖頭著レ葉也と注せりカハホネといふ義不レ詳

根如二腐骨一といふ注によればその水中にありて根腐骨の如くなれば此名あるが如しされば此物倭名鈔にも水菜の類に見えて古の時には菜蔬となして噉ふ所の物にてあかせり蕾をオホネといひ蕊をコホネといひしによらば此物をかくいひし別に其義ありしもしるべからず但此ものゝ如きは骨蓬の字の音をよびてカハホネといひしと見えたり

本草綱目啓蒙云萍蓬草カハホネ池中ニ生ズ根ハ水底ニアリ葉ハ芋葉ニ似テ狹長ニシテ厚ク面ハ深綠色ニシテ背ハ淺シ、根ニ叢生ス水淺キ時ハ葉水上ニ見ル深キ時ハ水中ニアリテ體薄クシテ色モ淺シ夏ヨリ秋ニ至テ粗莖ヲ抽テ水ヲ出デ一花ヲ開ク五瓣黃色光リアリテ梅花ノ形ノ如ニシテ大サ一寸許瓣皆上ニ向フ中ニ黃蘂アリ其イマダ開カザル者ハ形圓ニシテ鼓槌

當レ夏晝開夜縮入ニ水底一晝而復出ニ於水面一也與ニ夢草一晝縮入レ地遇レ夜卽復出ニ一何背哉

夢草似レ蒲色紅卽方朔獻ニ武帝一者孫容穆思嘗遺ニ水仙花數木一如摘ニ之水器中一經レ年不レ萎也

○釋名

ひつじぐさ

○和漢三才圖會云此花未の刻より開く故に名づく

かめばす同上

これんげ

○地錦抄今名戸の通稱となりてひつじぐさ・かめばす等の名は呼事なし

睡蓮北戸錄

○正誤

本草藥名備考にひつじぐさ云々白色四瓣づゝ重り十六瓣といひ本草綱目啓蒙蓮藕の條にも白色四瓣にして四重内に黃蘂ありといへども岩崎常正が寫せし所四瓣三重にして十二瓣なり京地の產は十六瓣にして東國の種は十二瓣にや未だ詳ならず此花八ッ時比より開きて暮に合して又明日の八ッ時頃開けども晴天ならざれば開かず雨天はさら也又江州には葉の尺餘の種もありと見ゆれば此方の種のみ見ては決し難し



レ栽の圖に葉は圓にして佳なれども花を四瓣になして所レ謂花がつみのごとくなれば是と成し難し救荒本草には根藕根のごとしといひて腐骨の事は見えず又和漢三才圖會に花の種類をいひて近頃白花を出すといへども白花の事は蘭山もいはず如何なる種にや

和漢三才圖會云睡草俗云ニ瓠蓮一又云ニ羊草一本綱睡蓮卽萍蓬之類也葉如レ荇而大其花布レ葉數重當レ夏晝開レ花夜縮入レ水晝復出

按睡蓮池中有レ之花大寸餘如ニ白蓮狀一晝未時一時開レ花故名ニ羊草一

大和本草云睡蓮ヒツジグサハ京都ノ方言ナリ此花ヒツジノ時ヨリツボム荇菜ノ葉ニ似タリ酉陽雜俎及本草綱目萍蓬草ノ下ニ唐ノ段公路北戸錄ヲ引ケリ夏秋花サク花白クシテ數重ナリ蓮ニ似テ小ナリ其葉如レ荇其花夜ハツボミテ水中ニカクル晝ハ又水面ニウカブ故ニ睡蓮ト云北戸錄ニ所レ云ト相同他花ニコトナル物也蓴菜荇菜ノ類ナリ畿內江州西土處々ニ多シ他州ニモ多シ

地錦抄云小蓮花白小りん葉は水あふひのごとくあいらしき花葉なり

本草藥名備考云ヒツジクサ睡蓮北戸錄葉水面ニ浮ブ大サ一寸許リカウホネニ似テ短シ小イビツニシテ一方ニ切コミ有葉ノ脉蓮ノ如シ水面ニ浮ンデ大サ一寸餘ナリ莖水中ニ在テ見エズ白色四瓣ヅヽ重リ十六瓣有末ノ刻比ヨリ日ニ映ジテ開キ暮陰ニ萎ム一種江州葉尺餘ニシテ花又大ナルモノアリ

本草綱目啓蒙蓮藕條中云睡蓮ハヒツジグサナリ蓮類ニ非ズ小草也葉形橢ニシテ一ツノ切レアリ其紋脉ハ蓮葉ノ如シ葉ノ長サ二三寸花ハ大サ寸餘白色四瓣ニシテ四重內ニ黃蘂アリ其瓣細ニシテ末尖リ水面ニ出テ開ク日光ヲ受テ開キ夕ベニ萎ミ翌日又開キ四五日ノ後枯ル

酉陽雜俎云睡蓮南海有ニ睡蓮一夜則花低入レ水屯田韋郎中從ニ事南海一親見

本草綱目水草類萍蓬草集解時珍曰又曰段公路北戸錄有ニ睡蓮一亦此類也其葉如レ荇而大其花布レ葉數重當レ夏晝開レ花夜縮入レ水晝復出也

祕傳花鏡云睡蓮布レ葉間晝開夜縮入レ水次日復起生ニ南海一

獨覺餘聲引ニ北戸錄一云睡蓮葉如レ荇而大沈ニ於水面一上有ニ異浮一根菱耳其花布レ葉數重不レ房而蘂凡五種色

功ありあらは魚なりからはからさけ、あかはあかざ、かはゝかはほね也此方徳本の無盡藏にありかはほねは處々池澤流水中にも生ず流れ強き中に生ぜしは葉水上に立事あたはずして水の流れに隨ひて葉のびること二三尺に至り葉薄くしてわかめの如くに成てかはほねとは見まがふ物なり葉はかくの如くなりても花は水上に開くあり遠く見れば花のみ見ゆ萍蓬草の花は一時に開かずして盛長し多く植置に早きは小滿一候より開きはじめおくるゝは小雪に至れば花は比類なし故に先に咲たるは實も早熟せり萍蓬草實の形を時珍の說に角黍の如し長さ二寸許といへども本邦の萍蓬の實は大なる物とても一寸四五分にして本には花瓣存してあり花瓣も殼と共に綠色也時珍の說には角黍の如き內に細子あり罌粟の如しといひ釋名に水粟の名ありて時珍曰陳藏器拾遺萍蓬草卽今水粟也その子粟の如く蓬子の如しと見ゆれど川骨の殼を破れば白瓤ありて實は麻子の如くにして正圓なり西土の萍蓬草の實は粥飯となすともいへり本邦の川骨子も粥となさば佳なる歟未だ試ず又時珍の說に其根大さ粟の如し又雞頭子根の如し儉年是を食ふ藕香をさす其味栗の如しといへば佳なる品なり本邦のかはほねは白くして其太さ一握にも過るありて骨の如し故に川骨といふこの根もまゝ食すといへども苦味ありて煮といへども煮へがたく柔滑ならず嚙ても綿を嚙が如くにして食し難しといへりされば西土の萍蓬とは別種と思はるれど和名鈔に根腐骨の如しといへるはかはほねに當れり本草和名に骨蓬といひ一名鼓根崔禹に出といひ和名鈔にも骨蓬となし是又禹錫が食經を引ていへば禹錫が食經に所レ載と藏器時珍がいへる種は異なれども皇國にいふかはほねは本草和名和名類聚鈔所レ載の骨蓬となして佳なり萍蓬草に的當の水草は和產未レ詳となしかはほね和方用る所皆血にかゝはりて血を治るに用ゆれども本草綱目萍蓬草の根の主治煮食補レ虛益二氣力一久食不レ饑厚二腸胃一と藏器の說なりその子の主治にも助レ脾厚レ腸令二人不一レ饑と時珍の說なり血證に用ること少しも見えねばかはほねは本草和名和名類聚鈔にいふ骨蓬となし其血鉦に用ひしも禹錫が食經に見えしが皇國自生の草なれば古より用ひしにやしるべからずかはほねの種類は本草綱目啓蒙に詳なり又救荒本草野譜に所

古今要覽稿卷第四百六十六

●草木部 水草

ひつじぐさ 睡蓮 かはほね 萍蓬草

ひつじぐさ漢名睡蓮唐の段公路が北戸錄に載せ本草綱目に載すされども萍蓬草集解に時珍曰又段公路北戸錄有二睡蓮一亦此類也といへりひつじぐさ・もぬなは・あさゝの類にて莖長くして葉水上に浮生す花は白色にして四瓣づゝ重り十二瓣にて小蓮の如し故に地錦抄にこれんげといへり祕傳花鏡にも諸蓮の中に入たり此花夕陽八つ時頃より開く故ひつじぐさといへり暮に水中に入又明日未の刻より開く事四五日也されども全く沈にあらず暮に至りてつぼむ故沈といへり此花所々流水中池にも生ず岩崎常正曰石神井村三寶寺池中殊に多しと又谷中幡隨院池中にも生ずこの花小暑一候より開きて土用過れば花も終れり實は大さ中梅の如くにして綠色中に褐色の子あり蘿蔔子の如し又本草綱目萍蓬草集解に時珍曰昔楚王渡レ江得二萍實一大如レ斗赤如レ日食レ之甜如レ蜜者蓋此也といへり又水草類云水萍本經中品蘋吳普本草萍蓬草拾遺莕菜唐本草蓴別錄下品と次第していへば萍蘋莕蓴共に葉の水上に浮ぶ草なり萍蓬草集解に藏器の說に萍蓬草南方池澤に生じて葉大にして莕に似て花また黃といひ時珍の說にも三月水を出莖大さ指の如し葉莕菜に似て大なり徑り四五寸初生荷葉の如し六七月黃花を開き實を結ぶ狀角黍の如し長さ二寸許内に細子あり罌粟の如しといへるは皇國にいふかはほねに的當といひ難しかはほねの葉大なるは尺餘芋葉の形にして深綠色一根より叢生して高きは三尺餘にも及ぶ皆立て水上に浮かまざる性にてうきくさの類にあらずされども本草和名に骨蓬一名鼓根出崔禹和名加波保禰といひ和名鈔にも骨蓬崔禹錫食經に云骨蓬和名加波保禰といひ味鹹冷無レ毒根如二腐骨一といへるは卽今いふかはほねなれども此文萍蓬草釋名集解の中に見えず腐骨の如しといへるによるは藏器の說に根藕の如し飢年以て穀に當つべしといへる物にや和方に打撲傷損を治し又あら・から・あか・かは・の四味黑燒とし產後血暈に用ひ又金瘡一切血にかゝはりたるに用て

やちやん〱藻は其花三瓣にて大さも五六分あり
て其開くも早きは五月よりも開けば弘景の五月有
花白色といへるにも當れり

○釋名

うきくさ（本草和名・和名類聚鈔） かゞみぐさ（古歌） たねなし（同上） なき
ものぐさ（同上） うきくさ とんすがへし（丹波） たつなみ
さう（紀州已上本草綱目啓蒙） 水萍（本草和名本經 水萍となす） 蓱（和名類聚鈔） 苹（周禮萍氏 禮月令）
水花（本經） 水白（別錄） 水蘇（別錄已上三名本草綱目脫字） 蓱（爾雅 中浮萍） 薸（爾雅江東謂ニ之）
藻ニ浮萍（本草綱目集解） 浮萍子（同上） 小萍子（同上） すつぽんのかゞ
み（泉州） やつはな（同上） とうかめつる とらかめのかゞ
み・とちも（尾州） とちのかゝみ（同上） とちかゞみ・とうか
めはす（讃州） かめはす（越後） すつぽんのかさ（丹波） こまのあ
しがた（伊州） かへるゑんさ（江戸） かつぱのたまし・ぜに
もく・じやん／＼もく（共同上） ちやん／＼も（駿州） とんが
めぐさ（勢州） くさあふひ（野州） どちがら（參州） ひるじろう（豫州）
○已上本草綱目啓蒙所レ載なれども江戸にてはち
やん／＼もかへるはすと呼へり
蘋（詩召南采蘋 吳晉本草） 水鼈（芣菜集解） うきくさ・よつば・田字草（通名）
たのしも
かたばみも
○已上本草綱目啓蒙所レ載にして蘭山時珍の蘋を
田字草となすによればこゝに時珍の說を載す
蘋（吳晉本草） 芣菜（拾遺） 四葉菜（卮言）

田字草

○時珍曰蘋本作レ薲左傳蘋蘩蘊藻之菜可レ薦ニ鬼神一
可レ羞ニ於王公一則薲有賓之義故字從レ賓其草四葉相
合中折ニ十字一故俗呼爲ニ四葉菜田字草破銅錢一皆
象レ形也諸家本皆以レ蘋註水萍蓋蘋萍二字音相近也
按韻書蘋在眞韻蒲眞切萍在庚韻薄經切々脚不レ同
爲レ物亦異今依ニ吳晉本草一別出ニ於此一

○正誤

本草綱目啓蒙云蘋ウキクサ・ヨツバ・田字草（通名）云々夏
花ヲ開ク白色四瓣ナリ故ニ白蘋ト云
これ時珍が蘋を田字草とせしに隨て先輩皆田字草
を以て蘋となせども後の誤を襲て古を失ふべから
ず爾雅よりして古人のいふ所は皆今云ちやんち
やん藻にして明なり岡村尙謙が本草古義に詳にし
て岩崎常正が本草圖說にもちやん／＼藻を蘋とせ
り又上文夏花を開く白色四瓣と見ゆれども常正も
未だ花を見ず實とおもへるものは其形耳かきのこ
とくにして少しまかりて生ず老て黃褐色にして枯
るかゝれば花開くといへども極めて細小にして見
るにもたらざるべし是を以て白蘋となすとは何ぞ

深き心をしる人のなき

又巻第十八雑歌下

ともだちの久しくもうでこざりけるもとによみてつかはしける　みつね

水の面におふるさ月の浮草の
うきことあれやねを絶てこぬ

古今六帖

うきくさ　人丸

ときゝぬのこひみたれつゝうき草の
浮ても我は有わたるかは

根をたえて水にうかべる浮草は　伊勢
池のふかきを頼むなるべし

小野小町

わひぬれば身をうき草のねをたえて
さそふ水あらはいなむとそ思ふ

水の面におふるさ月のうき草の　みつね
浪の上にや種をまきけん

新撰六帖

うき草　衣笠内大臣家良公

水のおもにねさゝて生る浮草に
むなしき世をそ思ひしりぬる

水まさる沼の五月のうき草の　前藤大納言為家
うきたつとても行方もなし

九條三位入道知家

水の面にねをはなれたるうき草の
さためなき身はあすをやはまつ

左京大夫行家

さそふみつありて行瀬のなくはこそ
世をうき草のさても絶なめ

右大辨入道光俊

なのみして身はうき草のしたしみつ
さもこえやすくみえしみつ哉

夫木和歌集巻第二十八雑部十

萍　読人不知

うき草六

こもり江にひまなくうける浮草の
まなくそ人は戀しかりける

正三位知家

寶治二年百首

さのみやはうきに年へんうき草の
ねも見ぬものをいひもたへなく

唐徐　夤

採ニ盡汀蘋一恨ニ別離一、鴛鴦鸂鶒總雙飛、月明南浦夢初斷、花落洞庭人未レ歸、天遠有レ書隨ニ驛使一、夜長無三燭照ニ寒機一、年來泣淚知多少、重疊成レ痕在ニ繡衣一、

萍　　同

爲レ實隨レ流瑞色新、泛レ風縈レ草護ニ遊鱗一、密ニ行碧水一澄涵レ月、澀ニ滯輕橈一去採レ蘋、此物何名腰下劔、無根堪レ並鏡中身、平湖春渚知何限、撥破閒投獨璽綸、

絮化レ萍　　元謝宗可

點ニ綴離人一恨已多、水流雲散爲消磨、半篙晴浪星無數、兩岸東風雪幾何、脫レ白定知沾ニ化雨一、取レ青應三是謝ニ恩波一、滿池好護蒼天影、休下逐ニ東歸一繞中汴河上、

萍菴　　明杜瓊

間把ニ浮萍一號ニ葉舟一、百年身世總如レ浮、若爲有レ跡成ニ栖泊一、可三是無根任ニ去留一、楊柳晚風移ニ別浦一、桃花春水泛ニ中流一、楚謠驚斷江湖夢、隨處忘レ機逐ニ海鷗一、

詠レ萍　　明闕名

錦鱗密砌不レ容レ針、只爲ニ根兒做一不レ深、曾與ニ白雲一爭ニ水面一、豈容明月下ニ波心一、幾番浪打應レ難レ滅、數陣風吹不ニ復沈一、多少魚龍藏在レ底、漁翁無レ處ニ下レ鈎尋一、

五言絕句

萍　　元宋元

風波長不レ定、浪跡在ニ天涯一、莫レ怨身輕薄、前生是柳花、

七言絕句

浮萍　　唐陸龜蒙

曉來風約半池明、重疊侵レ沙綠罽成、不レ用臨レ池重相笑、最無ニ根蔕一是浮名、

浮萍　　唐皮日休

嫩似ニ金脂一颺似レ煙、多情渾欲レ擁ニ紅蓮一、明朝擬下附ニ南風信一、寄ニ與湘妃一作中翠鈿上、

宮詞　　明朱權

小三立東風一半掩レ門、楊花撲レ面也親レ人、妾心已作ニ沾レ泥絮一、不下化ニ浮萍一到中水濱上、

萍　　明鎦師邵

乍因ニ輕浪一疊ニ晴沙一、又趁ニ迴風一擁ニ釣槎一、莫レ怪狂蹤易ニ漂泊一、前身不レ合ニ是楊花一、

古今和歌集卷第十一 戀歌一

浮草の上は茂れる淵なれや　　よみ人しらず

宿二澧陽一　明　郭武

蘋花風急水茫々、今夜孤舟宿二澧陽一、誰在二江城一吹二畫角一、五更殘月一天霜、

寄二陳叔莊一　明　周鼎

郭外何須二頃田、江湖春水綠如レ煙、扁舟蕩漾不二歸去一、日暮蘋花風滿レ川、

五言古

詠レ萍　齊　劉繪

可レ憐池內萍、氛氳紫復靑、巧隨レ浪開合、能逐レ水低平、微根無レ所レ綴、細葉詎須レ莖、漂泊終難レ測、留連如レ有レ情、

賦二得池萍一　梁　庾肩吾

風翻乍靑紫、浪起時疎密、本欲レ難二無根一、還驚能有レ實、

浮萍　北魏　馮元興

有レ草生二碧池一、無レ根綠二水上一、脆弱惡二風波一、危微苦二驚浪一

萍間二穊荷一效二王司馬體一　宋　謝翱

初萍半含レ絮、頃刻開二數畝一、荷圭浮二其間一、風雨足二解后一、百年遊子心、欲レ作二千歲久一、昔爲二浮萍根一、今爲二穊荷藕一、荷高刺已生、魚遊觸二其首一、離々荷下萍、吹向二白魚口一、

賦二得萍一贈二陳久中一　明　楊基

浮蹤散二寒星一、一夕生二無數一、魚跳翠乍開、漚過靑還聚、微風和レ影去、急雨連レ根露、惆悵別レ君時、楊花滿レ衣絮、

萍　明　薛蕙

參差如二霰布一、的皪似二星出一、魚戲影初開、鳥散文仍密、幸因二雲雨會一、且免風波失、無レ裨二江海流一、徒謝芳菲質、

五言律

萍　唐　李嶠

二月虹初見、三春蟻正浮、靑蘋含レ吹轉、紫蔕帶レ波流、屢逐明神薦、常隨二旅客遊一、既能甜似レ蜜、還遶楚王舟、

萍　宋　李覯

盡日看二流萍一、誰原造化情、可レ憐無用物、偏解及レ時生、泥滓根蒟淺、風波性質輕、晚來堆二岸曲一、猶得レ護二蛙鳴一

七言律

覽下柳惲汀洲採二白蘋一之什上因成

而稍尖長者荅也其花並有二黄白二色一葉徑四五寸如二小荷葉一而黄花結レ實如二小角黍一者萍蓬草也楚王所レ得萍實乃此萍之實也四葉合成二一葉一如二田字形一者蘋也如レ此分別自然明白又項氏言白蘋生二水中一青蘋生二陸地一按今之田字草有二水陸二種一陸生者多生二稲田沮洳之處一其葉四片合レ一與二白蘋一一樣但莖生二地上一高三四寸不レ可レ食方士取以煅レ硫結レ砂煮レ汞謂二之水田翁一項氏所レ謂青蘋蓋即此也或以二青蘋一爲二水草一誤矣又雑草云滿江紅時珍曰主二癰疽一入レ膏用

『圖六面（田字草、紫背浮萍、同異種、品字も、あかうき草、さんしやうも）略之』

詩歌

佩文齋詠物詩選

五言律

秋日汎レ舟賦二蘋花一　宋徐　鉉

素艶擁二行舟一、清香覆二碧流一、遠煙分的々、輕浪汎悠々、
雨歇平湖滿、風涼運瀆秋、今朝流詠處、即是白蘋洲、

五言絶句

永嘉贈レ別　唐陳　陶

芳草温陽客、歸心浙水西、臨レ風青柱楫、幾日白蘋谿、

秋水觀　元虞　集

湖深山影碧、天淨月光空、幸自無二波浪一、蘋花謾晩風

秋江晩渡　明錢　宰

落日歸棹緩、滄江秋思加、雙鱗上二荷葉一、一雁下二蘋花一、

七言絶句

酬下曹侍御過二象縣一見上レ寄　唐柳　宗元

破額山前碧玉流、騒人遙駐木蘭舟、春風無レ限瀟湘意、
欲レ採二蘋花一不レ自由一

吳興秋思　唐陳　陶

不三是苕谿厭二看月一、天涯有レ程雲樹涼、何意汀洲騰二風雨一白蘋今日似二瀟相一

題二曹雲西畫一　元倪　瓚

吳松江水碧二于藍一、怪石喬柯在二渚南一、鼓レ枻長吟採レ蘋去、新晴風日更清酣、

懷レ友次二陳石泉韻一　明偶　桓

楓林葉赤露華濃、來往晴沙一徑通、遙望美人秋水隔、
蘋花吹老楚江風、

又云蘋（呉普本草）普曰水萍一名水廉生二池澤水上一葉圓小一莖一葉根入二水底一五月有レ花白三月采日乾レ之弘景曰水中大萍五月有レ花白色非二溝渠所レ生之萍一乃楚王渡レ江所レ得卽斯實也恭曰萍有二三種一大者名レ蘋中者名レ荇葉皆相似而圓其小者卽水上浮萍也藏器曰蘋葉圓濶寸許葉中有二一點一如二水沫一一名芣菜曝乾可二入レ藥用一小萍是溝渠間者禹錫按爾雅云萍蓱也其大者曰レ蘋又詩云于以采レ蘋于二澗之濱一陸機注云其粗大者謂二之蘋一小者爲レ萍季春始生可レ糝蒸爲レ茹又可下以二苦酒一淹上之按酒今醫家少用二此蘋一惟用二小萍一耳時珍曰蘋乃四葉菜也葉浮二水面一根連二水底一其莖細二於蓴莕一其葉大如二指項一面青背紫有二細紋一頗似二馬蹄決明之葉一四葉合成中折十字夏秋開二小白花一故稱二白蘋一其葉攢簇如レ萍故爾雅謂二大者一爲レ蘋也呂氏春秋云菜之美者有二崑崙之蘋一卽此韓詩外傳謂二浮者一爲レ藻沈者爲レ蘋臞仙謂二白花者一爲レ蘋黃花者爲レ莕卽金蓮也蘇恭謂大者爲レ蘋小者爲レ莕楊愼巵言謂四葉菜爲レ莕陶弘景謂楚王所レ得者爲レ蘋皆無二一定之言一盖未三深加二體審一惟據二紙上一猜度而已時珍一々采視頗得二其眞一云其葉徑一二寸有下一缺而形圓如二馬蹄一者上蓴也似レ蓴

うきくさ



本草古義云水萍宇岐久佐（本草和名 和名鈔）俗名杼宇賀米乃加賀美（杼宇賀米者鼈也此名與二庚辛玉冊水鼈之名一相似）又知也牟知也牟毛生二池澤溝渠中一葉圓厚而脆背有二泡子一開二白花一卽陶注大萍而蘇注蘋也一種阿佐々（本草和名 和名鈔）葉比レ前稍長面青背紫花黄色卽蘇注荇也一種葉圓如二螺靨草一而小下有二白鬚根一隨レ流往來有二背面皆綠者一有二面青背紫者一卽蘇注小浮萍也一種阿加宇岐久佐狀如二扁柏一而細小背面皆紅此綱目雜草類滿江紅也欒肆以爲二小浮萍一誤矣又一種俗名二波奈賀都美一四葉相合中折十字卽四葉菜一名田字草也一名水蘋證類作二水薪一

毛詩（召南）云于以采レ蘋南澗之濱

周禮（秋官）云萍氏下士二人徒八人

鄭司農云萍讀爲レ蛢或爲二萍號起兩之萍一玄謂今天問萍號作レ蓱爾雅曰萍蓱其大者蘋讀如二小子言平之平萍氏一主二水禁一萍之草無レ根而浮取三名於其不二沈溺一〇蛢蒲丁反

又云萍氏掌二國之水禁一

水禁謂下水中害レ人之處及入水捕二魚鼈一不上レ時

禮記（月令 季春）云萍始生

爾雅云萍蓱註水中浮萍江東謂二之薸一〇萍音平蓱音餅薸音瓢其大者蘋註詩曰于以采レ蘋疏舍人曰萍一名蓱大者名レ蘋郭曰水中浮蓱江東謂二之薸一陸機毛詩義疏云今水上浮萍是也其粗大者謂二之蘋一小者曰レ蓱季春始生可レ糝蒸爲レ茹又可苦酒淹以就レ酒註詩曰于以采蘋召南采蘋篇文也

本草綱目云水萍（本經 中品）別錄曰水萍生二雷澤池澤一三月采暴乾弘景曰此是水中大萍非二今浮萍子一藥對云五月有レ花白色卽非二今溝渠所レ生者一楚王渡レ江所レ得乃斯實也藏器曰水萍有二三種一大者曰レ蘋葉圓闊寸許小萍子是溝渠間者本經云水萍應二是小者一頌曰爾雅云萍蓱其大者蘋蘇恭言有二三種一大者曰レ蘋中者曰レ荇小者卽水上浮萍今醫家鮮レ用大蘋惟用二浮萍一時珍曰本草所レ用水萍乃小浮萍非二大蘋一也陶蘇俱以二大蘋一註之誤矣萍之與レ蘋音雖二相近一字脚不レ同形亦迥別今釐二正之一互見二蘋下一浮萍處々池澤止水中甚多季春始生或云楊花所レ化一葉經レ宿卽生二數葉一葉下有二微鬚一卽其根也一種背面皆綠者一種面青背紫赤若レ血者謂二之紫萍一入レ藥爲レ良七月采レ之淮南萬畢術云老血化爲二紫萍一恐自有二此種一不二盡然一也小雅呦々鹿鳴食二野之苹一者乃蒿屬陸佃指爲二此萍一誤矣

一種有ニ陸生者一多在ニ稲田沮洳之處一其葉四片合レ一與レ蘋一樣但莖生ニ地上一高三四寸不レ可レ食是靑蘋也

用藥須知云田字草蘋(ウキクサ)本草別名莕同

本草綱目啓蒙云水萍カヾミグサ古歌タネナシ同上ナキモノグサ同上ウキクサ・トンスガヘシ丹波タツナミサウ紀州一名鴨㵐事物異名㵐水簾蘋集解九子萍埤雅擁蓮名物法言鴨蓐品字箋水中萍子草附方瓢南寧府志浮藻大倉州志水穢正字通名アリ同水衣典籍便覽池星同上魚食採取月令蛙食村家方釋名水花本經水白別錄水蘚別錄版本二此文脫ス宜シク補フベシ夏月田澤止水上ニ生ジ水面ニ浮ブ葉大サ一二三分形圓ニシテ光アリ面綠色ニシテ背ハ紫色ナル者眞物ナリ二三葉アツマリ生ズ四葉ニナレバ分レテ兩科トナル三葉ノ裏ニ細キ鬚根アツマリ二三分ノ長サアリ一名紫萍集解紫背萍附方紫背浮萍同上一種葉小ク橢ニシテ水馬齒ノ葉ノ如ク米粒ノ大サニシテ面背共ニ綠色ナル者ハ靑萍ナリアヲウキクサト呼ブ一種アカウキクサハ淺溝及ビ止水面ニ多シ冬モ枯レズ形柏葉ノ如ニシテ厚ク軟ナリ甚繁殖シテ水面ニ滿ツ其面紅色或ハ紫色是滿江紅ナリ雜草ノ部ニ出ヅ藥舖ニ賣ル所ノ浮萍ハ皆コノ滿江紅ニシテ眞物ニ非ズ藥ニハ紫背浮萍ヲ用ユベシ

又云蘋ウキクサ・ヨツハ田字草通名タノシモ・カタバミモ一名水鑑草聖濟總錄水田草同上十字草通雅靡蘋同上覆雪名物法言水蘋百病主治池澤田中ニ生ズ根ハ蔓ノ如ク泥中ニ長ク延ク春葉ヲ生ズ大サ一寸許小葉四片一莖ニ合成ス酢漿草葉ノ如ク田ノ字ノ形ニ似タリ其質銀杏葉ノ如シ夏花ヲ開ク白色四瓣ナリ故ニ白蘋ト云集解ニハ陸生ヲ靑蘋トシ水生ヲ白蘋トス然レドモ元一物ナリ水草ナレドモ水涸ク寸ハ陸草トナル集解ニ藏器蘋葉圓濶寸許ト云者ハ別物ニシテスツポンノカヾミノコトナリ莕菜ノ集解ニ水鼈ト云リ

又莕菜條下云水鼈スツポンノカヾミ泉州ヤツバナ同上ドウガメヅル・ドウガメカヾミ・トチモ尾州トチノカヾミ同上ドチカヾミ・ドウガメバス讚州カメハス越後スツポンノカサ丹波コマノアシガタ伊州カヘルヱンザ江戸カツパノダマシ・ゼニモク・ジヤン〳〵モク共同上チヤン〳〵モ駿州ドンカメグサ勢州クサアフヒ野州トチカラ參州ヒルジロウ豫州池澤溝渠中ニ生ズ圓ニシテ厚ク一缺アリ色黃綠ニシテ光リアリ葉背中心ニ泡子アリテ高シ數葉圓ニ布ク八月莖ヲ抽テ花ヲ開ク三瓣大サ五七分白色ニシテ内黃ナリ

に成て水に沈三月ごろより浮び出て忽緑葉を生じて繁茂せり表緑色裏紫色にして細根あり是紫背浮萍といふ藥用となす浮萍なり又葉の形長みありて表裏共に緑色なるを青萍といへり又葉の形青萍のごとくにして色淡し三葉附て品字のごとくなるを品字藻と呼べり又ひのきの葉のごとくにして多く簇り生ずるあり是を藥肆にて浮萍と誤り用ゆ是は本草綱目雜草部に載たる滿江紅にてあかうき草といふ此うき草冬を經て凋まずして冬より春かけて赤紫に染故に滿江紅と名づけしは稱すべけれど雜草部に入しは誤なり又俗にさんしやう藻といふは其葉山椒に似て丸く一株にて肥たるは四五葉生じ深緑色にして根は細し長さ一寸より二寸にいたり黄褐色にして柔軟なり是水上に浮び生す是を埤雅に所レ載の槐葉蘋なりといへり俗にさんしやうもと呼よりも槐葉といへるはよく形樣にかなへり此等共に水上に葉を生ずればうきくさと稱して佳なり

本草和名云水萍一名水花一名水白一名水蘇一名水中大萍一名蘋(大者也已上二名出二蘇敬注一)一名水華(出二雜要決一)一名藻(小者也出二崔禹一)一名七英一名水英(已上出二兼名苑一)水中大馬萍一名馬菜一名馬葉(已上出二小品方一)一名苹一名藻(音瓢出二爾雅一)和名宇岐久佐

和名本草云水萍

味辛酸寒无レ毒和名ウキクサ三月採レ之曝十五月花白水上有レ之蓮花　已前有レ花　一本五月有レ花白水上有レ之

和名類聚鈔云萍説文云萍(薄經反亦作レ蓱和名宇木久佐)無レ根浮二水上一者也

多識編云蘋(和名與豆波乃宇幾久佐)異名芣菜(拾遺)増補異名四葉菜(方言)田字草

和漢三才圖會云浮萍本綱浮萍池澤水中甚多季春始生或云楊花所レ化一葉經レ宿即生二數葉一葉下有二微鬚一即其根也有二背皆緑者一又有二面青背赤若一血者一謂二之紫萍一入レ藥爲レ良七月採レ之　浮萍(辛寒或曰酸)性輕浮入二肺經一達二皮膚一能發二邪汗一治二時行熱病一甚有レ効又利二小便一治二水腫一(爲レ末服レ之)又能止二吐衄一

蘋(芣菜四葉菜田字草)本綱蘋葉浮二水面一根連二水底一其莖細二於蓴莕一其葉大如二指頂一面青背紫有二細紋一頗似二馬蹄决明之葉一四葉合成二中折十字一夏秋開二小白花一其葉攢簇如レ萍　蘋(甘寒滑)下二水氣一利二小便一又擣レ之塗二熱瘡一良

古今要覽稿卷第四百六十五

●草木部 水草

うきくさ　萍　蘋

うきくさ漢名水萍本草和名和名本草和名類聚鈔とも小蓱をよめり歌にも詠じ處々に多く生ずれどもうきくさに種類あり本草和名水萍の一名多く載せたるに蘋あり注に大者也といへるは藥用となす品にあらずして俗にいふちやん〳〵も也陶弘景の說に此是水中大萍非二今浮萍子一藥對云五月有レ花白色といへるは卽ちやん〳〵藻なり古よりうきくさと呼べるも是をさしていへるなるべし又藏器の說に水萍有二三種一大者曰レ蘋葉圓潤寸許といへり本草和名の水萍の一名とせしに隨ふべし時珍蘋を萍の條下に出して四葉菜田字草又破銅錢等の釋名を附せしは誤なりこの田字草は下濕の地に多く生じ葉の水上に浮ぶものならず爾雅にも蓱其大者蘋といへり故にうきくさと古いひしは今のちやん〳〵藻となして可なり本草綱目蕃菜集解に庚辛玉册云鳧葵黃花者是蕃菜白花者是白蘋卽水鏡草一種泡子名二水鼈一といひて水鏡草は蕃の一名なればちやん〳〵藻はあさゝの一種なり詩の召南に于以采レ蘋といへるも是にて大萍を古へ蘋といひ後に水鼈泡子といひしを是として蘭山も蕃菜集解に所レ載に依て水鼈はすつぽんのかゞみを上として處々の方言二十許を揚て其花は八月莖を抽て花を開くといへども早きは五月より開きて七月頃より實を結ぶ綠色にして蓮實より小にしていはゆる棠梨のごとし五六月開き花の莖は一寸四五分にて上に三瓣の白花を開く是實を結べり又後れて開く花は其莖下一寸許は綠色にして夫より上一寸許の莖は白くして花と色を同ふす尤下の綠莖と白莖の隔に苞あり此花は實を結ばず藥用とせり水萍を蘭山はかゞみくさ古歌たねなし同上なきものぐさ同上うきくさ・とんすがへし丹波たつなみさう紀州といへどもかゞみくさ・たねなし・なきものくさ等ばかりうきくさとよめり何處にも止水に生ず今俗あひるもと呼家鴨の餌とすこの草三月ごろより生ず故に禮月令季春萍始生また楊花の化する所ともいへり此草冬に至り霜を經ぬれば盡く枯たるごとく

ふことは如何なることにや詳ならず蘭山二月白花を開くといふ種は稀なる種にて多く有ことなしされども江州紀州勢州但州土州等には多く生ずるかはしれざれども此方にてはまつも・くじやくも・ゑびもの類ことに多くして是即聚藻となす也

しはしましろもいとはれやせん
中務卿の見こ

又

六帖題御歌
とにかくに人の心はみたれもの
なひくとみるもたのまれぬ哉
美　作

又

禎子内親王家歌合池水一重淺
春の池にひとへ殘れるうす氷
あをむ玉もゝかくれさりけり

○釋名

も　もは共に和名鈔　たまも萬葉集　かはも　いづものはな　かはなぐさ已上三名古歌と本草綱目啓蒙　藻詩

水藻

○本草綱目時珍曰藻乃水草之一有ㇾ文者潔淨如ㇾ澡浴ㇾ故謂ㇾ之藻ㇾ

惡草典籍便覽　雲蘿上同

梟藻

○同上といへどもまた、も・もは・たまも・かはも・いづものはな・かはなぐさと同して藻類の總名となして佳也

まつも　ゑびも　くじやくもの類は聚藻にして一名

薀藻埤雅と本草綱目啓蒙

やなぎも　さゝもは馬藻一名柳葉菹救荒本草

菹草

○同上と蘭山なせども爾雅に莙は牛藻なり注に似ㇾ藻葉大なるを江東呼て馬藻となすとみゆれば莙を本名とし牛藻とし馬藻とす

○正誤

本草綱目啓蒙水藻ハ水中ニ生ズル藻類ノ總名ナリ集解兩種ニ分ッ其一ツハ聚藻フサモ江州キンギョモ、エビノス紀州ノボリ但州クジヤクモ勢州スヾモ土州流水底ニ生ジ水ニ隨テ靡キ流ル、コト長ク數尺ニ至ル葉ハ至テ細ク絲ノ如シ節ゴトニ多ク聚リテ蓬子菜ノ如シ二月白花ヲ開ク五瓣黃蘂大サ三四分水上ニ出テ開ク

かくいへば蘭山は岩崎常正が日光に產する其葉たちもに似て八月白花を開く種のみを聚藻となせしのみにて松もの類もいはずくじやくもといへどもくじやくもは勢州とあれば是又勢州の方言にて此邦にいふくじやぐもともいひ難しきんぎよもゝゑびのす紀州とあれば是又きんぎよもはくじやくもゑびのすはゑびもともいひ難し總てこの聚藻をい

疃無二一存一摩二挱犂耙一淚如レ湧田中無レ牛叜無レ種

『此間採色圖九面（まつも、同異種、同上、たちも、同異種、同上日光産 同救荒本草所載くじやくも、ゑびも、いらも、水豆兒、みつんぼう）略レ之』

やなぎも



和歌

萬葉和歌集卷第三

譬喩謌

紀皇女御歌一首

輕池之納回往轉留鴨尚爾玉藻乃於丹獨宿名久二

又十一 古今往來歌

寄レ物陳レ思

水底生玉藻打靡心依戀此日

敷栲之衣手離而玉藻成靡可宿濫和乎待難爾

右柿本朝臣人麿集出

貫之集

いつしかもけふをくらしてあすか川
わたりてはやく玉もかつかん

夫木和歌集

藻　　伊勢大輔

永承四年十一月内裏歌合池水

池水のよゝに久しくすみぬれは
そこの玉もゝひかり見えけり

又　　民部卿爲家卿

久永元年七社百首

ひをのよるあしろにかゝるなかれもの

ノ説ニ郭璞註ト云フハ三蒼ノ註ナリ爾雅ノ註ニ非ズ

救荒本草蘭山口授云菹草綱目水藻條下ニ出ル馬藻ナリ和名ヤナギモナリ

詩經召南采蘋云于以采ニ藻于彼行潦一

又小雅魚藻云魚在々レ藻有ニ頒其首一云々

又云魚在々レ藻有ニ莘其尾一云々

又云魚在々レ藻依ニ于其蒲一

爾雅釋草云莙牛薻註似ニ藻葉大江東呼爲ニ馬薻一○莙其隕切藻音早疏莙一名牛藻江東呼ニ馬藻一々之葉大者也

詩召南云于以采レ藻左傳云蘋蘩蘊藻之菜以ニ此草好聚生一故言ニ薀藻一薀訓レ聚也毛傳云藻聚藻也陸機云藻水草也生ニ水底一有ニ二種一葉如ニ雞蘇一莖大如レ箸長四五尺其一種莖大如ニ釵股一葉如ニ蓬蒿一謂ニ之聚藻一又云扶風人謂ニ之藻聚一爲ニ發聲一也此二藻皆可レ食煮熟挼ニ去腥氣一米麵糝蒸爲レ茹嘉美楊州饑荒可三以當ニ穀食一也

本草綱目水草類云水藻頌曰藻生ニ水中一處々有レ之周南詩云于以采レ藻于レ沼于レ沚于ニ彼行潦一是也陸機註云藻生ニ水底一有ニ二種一葉如ニ雞蘇一莖如レ筋長四五尺一種葉如ニ蓬蒿一莖如ニ釵股一謂ニ之聚藻一二藻皆可レ食熟挼ニ去腥氣一米麪糝蒸爲レ茹甚滑美荊揚人飢荒以當ニ穀食一藏器曰馬藻生ニ水中一如ニ馬齒一相連時珍曰藻有ニ二種一水中甚多水藻葉長二三寸兩々對生卽馬藻也聚藻葉細如ニ絲及魚鰓狀一節々連生卽水蘊也俗名鰓草又名ニ牛尾蘊一是矣爾雅云莙牛藻也郭璞注云細葉蓬茸如レ絲可レ愛一節長數寸長者二三十節卽蘊也二藻皆可レ食入レ藥以ニ馬藻一爲レ勝左傳云蘋蘩蘊藻之菜卽此

氣味甘大寒滑無レ毒主治去ニ暴熱々利一止レ渴擣レ汁服レ之小兒赤白遊疹火焱熱瘡擣爛封レ之藏器

發明思邈曰凡天下極冷無レ過ニ藻菜一但有レ患ニ熱毒腫幷丹毒一者取ニ渠中藻菜一切搗傅レ之厚三分乾卽易ニ其效一無レ比

救荒本草云菹草上音鮓卽水藻也生ニ陂塘及水泊中一莖如ニ麄線一長三四尺葉形似ニ柳葉一而狹長故名ニ柳葉菹一又有レ葉似ニ蓬子葉一者根麄如ニ釵股一而色白味微鹹性微寒救飢撈ニ取莖葉連嫩根一揀擇洗淘潔淨剉碎煠熟油鹽調食或加ニ少米一煮粥食尤佳

又野譜云牛尾蘊食葉生ニ深水中一葉如レ髮莖如レ藻冬月和レ魚煮食夏秋亦可レ食

牛尾瘟不ニ敢呑一疫氣重流ニ遠村一黃毛牸鳥毛皦十莊九

松藻くじやくもの類となせども岩崎常正いふ牛尾蘊は日光に一種の藻あり其葉はたちもに似て互生にて八月五瓣白花を開く是救荒本草野譜に載する圖に照し見るべし牛尾蘊は日光の産五瓣白花を開く藻にて的當なりといへり尤蘭山も五瓣白花を開くといへども何の藻を指しにや本草綱目啓蒙には聚藻ふさもきんぎよもゑびのすのぼりくぢやくもすゞも流水底に生し水に隨て靡き流ること長く數尺に至る葉は至て細く絲のごとし節ごとに多く聚りて蓬子菜の如し二月白花を開く五瓣黄蘂大さ三四分といへにゐては是となす所なし此日光の産の外に在ことなし牛尾蘊と載て花ある藻を出せしは救荒野譜なれば是に隨ふべし本草綱目時珍の説に聚藻葉細如絲及魚鰓狀節節連生卽水蘊也俗名鰓草又名牛尾蘊いへども花を開く事はみえず蘭山は二月白花を開く五花黄蘂といへども常正か圖せしは綠藻にて八月開くといへり

和名類聚鈔海菜類云藻毛詩注云藻音早和名毛一云毛波水菜也文選云海苔之彙海苔卽海藻也崔禹錫食經云沈者曰藻浮者曰蘋音頻今案蘋又大萍名也

和漢三才圖會云藻音早馬藻　水蘊　菹音鮓和名毛一云毛波　本綱藻水草之有レ文者水中甚多有二數種一　馬藻葉長二三寸兩々對生入レ藥用レ之　水蘊一名牛尾蘊又名鰓草葉細如二絲及魚鰓狀一節々連生

菹水藻也農政全書云生陂塘及水泊中莖如二麁線一長三四尺葉形似二柳葉一而狹長故名二柳葉菹一

氣味甘大寒滑凡天下極冷無レ過二藻菜一但有レ患二熱毒腫丹毒者一搗傳レ之厚三分乾卽易其效無比

大和本草云水藻類亦多シカルモアリ杉藻アリ松藻アリ

又云松藻松杉ノ葉ニ似テ靑シ石上ニ生ズ生ニテモ乾テモ可レ食

本草綱目啓蒙云水藻ハ水中ニ生ズル藻類ノ總名也集解兩種ニ分ツ其一ハ聚藻フサモ江州キンギヨモ・エビノスモ紀州ノボリモ但州クジヤクモ勢州スゞモ上州流水底ニ生ジ水ニ隨テ靡キ流ル、コト長ク數尺ニ至ル葉ハ至テ細ク絲ノ如シ節毎ニ多ク聚リテ蓬子菜ノ如シ二月白花ヲ開ク五瓣黄蘂大サ三四分水上ニ出テ開ク其一ハ馬藻ヤナギモ・サヽモ溝瀆水中ニ多シ此モ水底ヨリ生ジテ水ニ隨ヒ靡キ流ル、コト數尺葉ハ長サ二三寸潤サ一二分兩對シテ生ズ又一種互生ズル者アリ時珍

蘭山いふ葉長さ二三寸濶さ一二分兩對して生ず又一種互生する者ありといひて對生を主とし互生を一種となせども江戸近邊に生ずるは互生にして對生は未だ見ず又互生の種に葉のことに細くして絲のごとくなる多くあれども蘭山是をいはず又兩對の種は葉二三寸濶は一二分といへども互生は葉二三寸にて幅四五分の物あり又右にいふみつんぼうを水豆兒と成すは非也予先年淺草川にて一種の水草の流るゝを揚て岩崎常正に見せしに此草の根に豆のごとき根あれば水豆兒的當の水草なりといへり其後流水池沼ともに心をつけて見れども未だ此生ぜしを見ずされど常正に見せしを寫し置しを出すその形狀は根より上を切たるごとくにて其莖至て細くして四五分間に節ありて舊葉の殘り附て夫より上一寸餘の節間となりて葉を生ずるは上に向て長きは一尺五六寸に至り短きは二三寸にて節より枝を出し生ず葉の濶一分許にして綠色なり其若葉には本の方に白き魚卵のごとくなる物並びて六七粒葉中にあり葉の先は細く糸のごとし又一種の水草は綠莖綠葉にして葉の長さ一寸有餘にて兩邊に荒き鋸齒ありて幅一分餘にてこの鋸齒も軟刺のごとし莖にも綠刺を生ず肌に刺ほどにはあらざれどもこの刺先尖りて身にふれは少し痛む是も岩崎常正に聞にしらずといへり其後佐藤成裕に此圖を見せて聞にいらもといふと答へたれども生ずる所はわきまへずといへり是も淺草川へ流れ來れる種なれば何れ川上の流枝川用水なぞに生ぜしなるべし六七月の中にはせきせうもの刈たる物夥く流れ來りて船路の害にも及べり又上にいふくじやくも柳もの類中川の上曲金新宿渡しより先にはくじやくもにも二間に餘るありやなぎもゝ葉は四五寸に及ぶありて多は互生なりといふ蘭山の兩對を正として又一種互生する者ありといへるはいぶかしけれども京都邊琵琶湖などには對生の種多くして互生は稀なる歟此邦にも互生のうちにたま〳〵對生の物生ずれども一節にして上下は互生なり對生すれば枝を生ずと岩崎常正いへり又救荒本草に菹草また柳葉菹といへるは此やなぎもにて救荒本草蘭山口授にも菹草綱目水藻條下に出る馬藻なり和名柳藻なりといへり救荒本草に出す所の圖は互生なり又救荒本草野譜に所載の牛尾蘊は蘭山口授にマキモ小大根筑前草モ金魚モ卽聚藻といへば

古今要覽稿卷第四百六十四

●草木部 水草

も　もは　藻

もといふは衆藻中の惣名なり漢名藻を玉藻などいふがごときも文采ある義の美稱也此物水中に生じて葉の水上に出ざるあり水上に浮むあり皆是をすべて藻といへり大和本草にも水藻類多き中にかるもあり杉藻あり松藻あり又松藻松杉の葉に似て青し石上に生じ生にても乾ても食べしといへり松も杉もといふは一物にて今多く松もと呼べり松もを聚藻とす本草綱目啓蒙にふさも或はきんぎよも或はゑびのす或はのぼり或はくじやくもといふ又すゝもの類聚藻なりといひて松もといはず松もは池澤溝渠共に生じて繁茂す是蘭山のいふふさもなるべし又松もと形狀同くして葉每に點あり手にふるれば軟刺のごときものあり又松もに似て葉殊に細くして先の尖り針の如く細くして上に向ふて生ずるあり是二種は溝渠に生ぜずして流水又は水田に生じて常の松ものごとく繁茂せず又くじやくもと呼は松もに比すれば葉殊に細くして其形孔雀の尾に似たり故にくじやくもといふ莖は松もより太く柔軟にて淡紅なり莖葉ともに柔軟なる故に金魚を養ふ者其卵をする時是を用ゆ蘭山のいふきんぎよもゝ是なるべし又くじやくもと同し形狀にて三寸許の莖を出して黃花を開くあり其形豆花に似て大さ三四分なり是をみつんぼうと呼て救荒本草所載の水豆兒に充るといへども當らず此みつんぼうの葉はくぢやくものごとくにて丸く粟粒より大にして內空なる物付けり是蘭山のいふすゝもにや又たちもと呼は其莖葉水上に出づ是蘭山のいふのぼりなるべしたちもに又一種莖葉ともに小にして長さ二三寸にして葉間に小なる淡紅花を付くるあり花の形は分明ならず又ゑびもといふは形狀松ものごとくにして節ごとより幅一分長さ七八分の葉を生ずる事五六にして松もに比すればまばら也此藻は池沼流水にも生ずれども汐水の入る川に殊に多くして手長ゑびしらたの生ずる所に多し是又蘭山のいふゑびのすなるべし又やなぎもさゝもは馬藻とすこれも一種にあらず

定信朝臣の蜀紅蓮と呼べるは此花戸にいふ種と異なりて常の紅蓮のごとくにして鮮紅なり蜀紅と呼て可なり彼白花紫斑の種は斑蓮といひて可なり此斑文のある種も一ならず天竺斑蓮と呼は殊に紅斑にして尤美なるは是に及びなし又不忍白蓮といへるも潔白にして邊に紫の斑あり又錦邊蓮前にいふ一線に紅邊の通りたる種にあらず邊に紅暈あれども一線に通らずして隔ありて斑點の形をなせば錦邊とはいひ難し斑蓮の類なるべし

『圖四面略之』

河原甚三郎源滿忠
校正兼鈔錄　古田吉藏源元來
日吉偉三郎源德夫
編修兼校正　若菜三男三郎藤原信孝
校正兼圖畫　中山新吾平秀元
校正兼淨寫　松村榮輔藤原直好
編修兼校正　梅田小太郎源義禮
南條正之助藤原近行
校正兼淨寫　栗山兵左衞門藤原定興
林源三郎源高典

校正兼鈔錄　山下官左衞門源正房
校正兼淨寫　橋本太刀允藤原好春
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
編修兼校正　大河戶晉平藤原儀成
總判　屋代次郎源通賢

祕傳花鏡云錦邊蓮白花每瓣邊上有二一線一紅暈或黃暈

又群芳譜に金邊蓮（瓣周圍一線色微黃）ともいへり

群芳譜云一種曰二錦邊蓮一蒂綠花白作レ蘂時綠苞已微界二一線紅一矣開時千葉每葉俱以二胭脂染一レ邊眞奇種也云々

『圖二面（つまべに同上黃暈蓮）略レ之』

詩

張木威集

七言律

絳邊蓮

月華初上闘二花枝一、擎出金塘色相奇、玉佩層々沿二彩綫一、粉衣葉々繞二紅絲一、粧誇西子休二全淡一、朱愛東鄰要二細施一、舞編霓裳香欲レ綻、霞光千縷射二清池一、

每葉蓮

每葉蓮普通の紅葉にたがふ所は立葉生ずれば必花を生ずる故に名く葩も常の蓮の葩より丸く尖らずして色も常の紅蓮に勝れり葉も若葉のうちは紅を帶び莖も葉莖花莖ともに下の方紅を帶べり此每葉蓮の名は諸書ともに見えされども故桑名少將（定信朝臣）の蓮譜圖中に每葉蓮の圖あれども花やせて葩も細ければ盆植の漸く開きしを寫されしなるべし此每葉蓮いづれの種にや詳ならざれども今まゝあり

『圖略之』

芍藥蓮　湘妃蓮

芍藥蓮二種ありて外葩は大にして中の花瓣小にして芍藥のごとし白芍藥と呼ぶは白し又瓣の先紅暈にして紅條の鮮なるあり今の人多く植て愛玩なせども是も諸書に載せず又湘妃蓮と呼ぶも白の芍藥蓮のごとくにして外の葩黃を帶べり此湘妃蓮といへるも諸書に見えず今花戶にまゝあり是等本唐蓮の種なるべし大和本草に近年世上に唐蓮多く植る品多しといへる遺種なるべし

『圖三面略レ之』

蜀紅蓮　斑蓮

蜀紅蓮を斑蓮といふは白色に紫色の斑文あり是も處々にありて斑蓮といひ蜀紅蓮と呼べり又故桑名少將

同踰並根草、雙異猶鳴鸞、以レ茲代ニ萱草一、必使三愁人一
歡上、

詠ニ同心芙蓉一　梁朱　超

青山麗朝景、元峰朗夜光、未レ及清池上、紅蕖並出房、日分雙蔕影、風合兩花香、魚驚畏蓮折、龜上礙荷長、雲雨流ニ輕潤一、草木隱ニ嘉祥一、徒歌涉江曲、誰見緝爲レ裳、

七言絶句

詠ニ雙開蓮花一　唐劉　商

菡萏新花曉並開、濃粧美笑面相偎、西方彩畫迦陵鳥、早晩雙飛池上來

百花詩

七言絶句

並蔕蓮　雲間潘嶠稺峯

品超ニ清潔一葉田々、蔕並舒紅色共鮮、塵偶似レ難ニ相比擬、風情羨レ爾水中仙、

同心芙蓉

芙蓉須レ識卽紅蓮、一莖花分兩合レ妍、況是心同難ニ間解、斯人直可レ讓ニ花賢一

顧仲方百詠圖譜

五言律

並蔕黃荷花

分得西池瑞、亭々並蔕開、尹邢妃子立、姊妹趙家來、共浥金莖露、雙浮桂魄杯、豬裳無ニ艷態一、阿母弗ニ相猜一、

つまべに　くちべに　へりとり　錦邊蓮

つまべに錦邊蓮其花白くして邊紅なり此蓮紅蓮白蓮の中に植れば皆つまべにとなるといへり今は多くあれども是唐蓮なるべし地錦抄に唐蓮花白きは大りんくちべには小ぶりといへりある人の池中につまべに多く繁茂して夥しく成りし故蓮堀に命じてほらせんといひしが此つま紅は葉の存せしうちはゆるし給へといひて堀らざりし故いかにと問ふに此つま紅の莖の刺は常の蓮より尖り強くして肌を破るにたへ難し先年この蓮を堀りて難儀せしといへりとぞつまべには處々にあり祕傳花鏡所載の錦邊蓮にして白色每瓣邊上有ニ一線一紅暈或黃暈といへる種にして錦邊蓮なれども張木威は絳邊蓮といひて七言律あり又或黃暈といへるは未だ見ざれども菊地容齋曰京の淸水觀音境內に辨財天の小池中に黃邊の白蓮あり日に映し見れば銀の花瓣に金の幅輪を鏤たるごとしといへり

蓮一名同心蓮自㆑是一種不㆑足㆑爲㆑瑞○宋起居注太始二年嘉蓮一雙駢花竝實合跗同莖生㆓預州鱧湖㆒○宋書文帝時天泉池樂㆓遊苑池㆒玄圃圓池竝㆓二蓮同幹○宋史興國中内出㆓玉津園端瑞一盆㆒示㆓輔臣㆒花與㆑葉悉以合歡而生

群芳譜云並頭蓮晉秦和間生㆓於玄圃㆒謂㆓之嘉蓮㆒今所在有㆑之最易㆑生能傷㆓別蓮㆒宜㆓獨種㆒

圓機詩學活法云並頭蓮　事實姉妹爭㆑寵歐陽永叔詩漢宮姉妹爭㆓新寵㆒、湘浦皇英有㆑所㆑思、天下從來無㆓定色㆒、況將㆓鉛黛㆒比㆓天姿㆒、○兩枝映照羅隱詩、兩枝相倚更風流、映㆓照幽池㆒未㆓肯休㆒、桃葉桃根雙姉妹、斜低㆓青蓋㆒各遮羞○合跗同莖宋泰始中嘉蓮一雙並實合跗同莖生㆓於豫州鯉湖㆒○連㆑帶垂㆑芳柳雙蓮表是使㆔雙華㆓擢㆖秀連㆑帶重㆑芳香激㆓大王之雄㆒影耀㆓天泉之水㆒○二女兩妃並蓮詩一女佩遺臨㆓漢水㆒兩妃絃絕怨㆓湘烟㆒、

詩

事文類聚後集

七言古

觀㆓雙頭白蓮圖㆒　周知微

君不㆑學叔隗季隗南歸㆑晉又不㆑學大喬小喬東入㆑吳、一種桃根與㆓槐葉㆒若爲化作㆓雙芙蕖㆒臨淮政成有㆓餘暇㆒坐令㆔學室㆒生㆔瀟洒㆓臨㆑溪一幅萬里寬、移得浙川入㆓圖畫㆒天空水濶江茫々、想見女英與㆓娥皇㆒九嶷雲深蒼梧遠、氷姿泣㆑露不㆑成㆑粧、苦㆑心抱㆑恨何時了、香骨應㆔甘沒㆓秋草㆒不㆑如回㆑首謝㆓秋風㆒分作㆓尹邢㆒來㆓漢宮㆒、

五言律

同心芙蓉　朱超

灼々荷花瑞、亭々出㆓水中㆒、一莖孤引㆑綠、雙影共分㆑紅、色奪歌人臉、香亂舞衣風、名蓮自可㆑念、況復兩心同、

七言律

南池嘉蓮　姚合

芙蓉池裏葉田々、一本雙枝照㆓碧泉㆒、濃麗共妍香各散、東西分㆑艷蔕相連、自知政術無㆓他異㆒、縱是禎祥亦偶然、四野人聞皆盡喜、爭來入㆑郭看㆓嘉蓮㆒、

佩文齋詠物詩選

五言古

詠㆓同心蓮㆒　梁蕭統

江南采蓮處、照灼本足㆑觀、況等連枝樹、俱耀紫莖端、

いへり又格致鏡原に引て云ところ孝經援神契ニ王者ノ德至ニ於地ニ華苹注に華苹は並頭蓮なりといひ又祥瑞圖に雙蓮芣となすといへり梁の蕭統の詠ニ同心蓮ノ詩に以レ玆代ニ萱草ニ必使ニ愁人ノ歡ヲ上なぞいひて祥瑞となせり

日本書紀舒明天皇紀云七年秋七月瑞蓮生ニ於劒池ニ大和國高市郡石川村一莖二花

又皇極天皇紀云三年夏六月戊申於ニ劒池蓮中ニ有ニ一莖二蕚者ニ云々

續日本紀元明天皇紀云和銅六年十一月丙子大倭國獻嘉蓮云々

又光仁天皇紀云寶龜八年六月戊戌楊梅宮南池生ニ蓮一莖二花ニ云々

三代實錄清和天皇紀云貞觀十二年七月九日巳未從四位下行伊勢守多治眞人貞峯獻ニ蓮一莖二花ノ本草綱目雜草云雙頭蓮一名催生草主ニ婦人難產ノ左手把レ之卽生又主ニ腫脹ノ利ニ小便ノ衞生易簡方治ニ大人小兒牙疳ノ搗爛貼レ之秘傳花鏡云並頭蓮紅白倶有ニ一幹兩花ノ能傷ニ別花ノ宜レ獨

格致鏡原云孝經援神契ニ王者ノ德至ニ於地ノ則華苹感華苹

並頭蓮　祥瑞圖雙蓮爲レ苹○眞珠船雙頭蓮卽合歡蓮一名嘉



雙頭蓮

古今要覧稿巻第四百六十三

●草木部 水草

雙頭蓮

雙頭蓮日本紀舒明天皇七年秋七月瑞蓮劔池に生ずる一莖二花あり又皇極天皇三年六月劔池において一莖二蕚の者あり又續日本紀和銅六年十一月丙子大倭國嘉蓮を獻ずと又光仁天皇寳龜八年六月楊梅宮の南池一莖二花を生ず又三代實錄にも清和天皇貞觀十二年七月蓮一莖二花を獻ずと右の續日本紀和銅六年嘉蓮を獻ずといへるも雙頭蓮なり雙頭蓮一名合歡蓮一名嘉蓮一名同心蓮とも時珍は雙頭蓮一名催生草主婦人難產左手把レ之卽生といへり祕傳花鏡に並頭蓮紅白倶有一幹兩花といひ又顧仲方百詠にも並蔕黃荷花と云て圖を載せ詩もあり雙頭並頭並蔕ともに同じ古は一莖二花一莖二蕚を奇といひて稱せしなり又詩に詠せしは梁の朱超が詠同心芙蓉といふ五言古詩あり又劉商が詠雙開蓮花といふ七言絶句あり又韋莊が合歡蓮花の七言絶句あり雙頭蓮何處にも蓮の多く生ずる中には極めて雙頭も生ずべけれども遙にみては見えざるべし偶目前に見る故奇としてめづれどもみえずしてしらざる者あるべし近比田安家庭池に雙頭蓮二三花生せしと聞り昨年も武藏國足立郡草加在百姓の田中に多く蓮を植しに雙頭の蓮三本生ぜしとある人いひし故共に行て見るに一本は散り一本は開き一本は莟なり卽是を圖して彼田安家庭池にてしたしく見し人に見せしにかくのごとしといへり疑ふ所は顧仲方百詠に出せし並蔕黃荷花の圖は其莖叉をなして左右にわかれたり又成形圖說に出す所の圖も叉を成してわかれたり見る所の雙頭は常の蓮莖にして唯二花並ぶのみされば成形圖說に所載顧仲方百詠に出す所は是ならずして今圖せしを以是となさん尤日本紀にも一莖二花と見え又一莖二蕚といひ續日本紀にも一莖二花とみえ祕傳花鏡にも一幹兩花といひて叉を成すとは見えず西土には一蔕三花のものあり是を品字蓮と名く一蔕四面の物を四面蓮といへり皆一莖より生ず一種年々雙頭に開くは大坂の豪商鴻池善右衞門にあり甚祕藏して外へ出さず淡紅色なりと 水戸殿家臣 佐藤成裕

『此間彩畫九圖略レ之』

たりハチスとは蜂巣也其房の似たるをいひし也ミは即實也
荷はハチスノハといひ芙蕖菡萏はハチスノハナにしてすでに開きしを芙蕖といひいまだ舒ざるを菡萏といふなり
本草綱目啓蒙云果ノ部ニ列スル故蓮藕ヲ本條トス其莖葉花實各名異ナルコト釋名ニ詳ナリ春宿根ヨリ新葉ヲ生ズ初出ノ葉ハ小ナリゼニハト云コレヲ荷錢ト名ク其次ニ出ル葉ハ稍大ニシテ水面ニ浮ブヲミツバト云コレヲ藕荷ト云フ其次ニ出ル葉ハ莖長ジテ水上ニ出ルヲタチハト云コレヲ芰荷ト云コレハ藕ノ節ニ兩對シテ莖ヲ出ス其一ハ葉其一ハ花ナリ故ニタチ葉出レバ必花サク花ニ紅白アリ皆炎天ニ開ク紅白一處ニ栽エレハ白キ者必枯ル芙蓉ハ本ト蓮ノ一名ナリ今ニテハ木芙蓉ヲモ略シテ芙蓉ト云フ故ニ蓮ヲ木芙蓉草芙蓉ト稱シテ分ツ一種天竺蓮(同名アリ)花形大ニシテ白色瓣邊一分許深紅色美ハシコレヲ錦邊蓮ト云祕傳花鏡ニ出ヅ又一種江州野州郡田中ノ蓮池ニ千葉ナル者アリ俗ニ觀音蓮ト呼ブ他所ニ移シ栽テ育シ難シ其花尋常ノ者ヨリ小ニシテ莖上ニ二三四五花簇リ開ク千瓣ニシテ內ニ房ナシ此種本和州當麻寺ヨリ出テ即中條姬コノ蓮絲ヲ以テ曼陀羅ヲ織ラレシ故コノ蓮ニハ絲ナシト俚俗云ヒ傳フ即集解ニ千葉者不レ結レ實ト云者ナリ又祕傳花鏡ニ品字蓮ト云ハ尋常ノ花形ニシテ一莖ニ三花開ヲ云ヘリ其二花開ク者ハ集解ニ合歡並頭ト云者ナリ集解ノ夜舒荷ハ詳ナラズ云々(是より下文はひつじぐさにて垂蓮なれば載せず) 碧蓮詳ナラズ繡蓮ハ紅瓣ニ黃緣ナリト汝南圃史ニ云ヘリ（ ）蓮實ハチスノミ、ハスノミ蓮房ノ中ニアリ實ナリ俗ニ蓮肉ト云未熟ノ時ハ柔ニシテ生食スベシ秋ニ至リ熟スレバ皮堅クシテ石ノ如シ故ニ石蓮子ノ名アリ別ニ一種古渡ノ石蓮子アリ形甚蓮實ニ似テ光滑ナリ凡ソ蓮肉ハ味甘シ破ル時ハ內ニ青芽アリ是ヲ薏ト云俗ニシヤクシト呼ブ味苦キ故一名苦薏ト云藥ニハコノ薏ヲ去リ肉ヲ用ユ古渡ノ石蓮子ハ內ニ芽ナクシテ肉全ク苦シ何ノ實ナルコト詳ナラズ修治時珍ノ說ニ一種石蓮子狀如二土石一而味苦不レ知二何物一ト南寧府志ニハ藤生ト云本草經疏本草滙醫學正印ニハ廣中樹上ニ生スト云蓮實ヲ種ルニハ礪石ニテ頭ヲ磨シ破リ下ス時ハ早ク芽ヲ出ス

生ト紅花ノモノハ蓮多ク藕ヲトレリ種植ノモノト白花トハ蓮スクナク藕ヨシ花白キハ香シ紅ナルハ艶ナリ千葉ノモノハ實ナシ○蓮花數種アリ合歡並頭ノモノアリ夜舒荷アリ夜ハ布テ晝ハ巻ク睡蓮花アリ夜ハ水ニ入ナリ金蓮アリ其ノ花黄ナリ碧蓮アリ其ノ花碧ナリ繡蓮アリ其ノ花繡ノゴトシ○相感志ニ云荷梗ヲ以テ鼠穴ヲフサゲバ鼠ヲノヅカラサル○蓮實一名菂味甘性平澁毒ナシ中ヲ補ヒ神ヲ養ヒ氣ヲマシ百疾ヲ除ク久食スレハ身ヲ輕クシ老ニタエ飢ズ年ヲ延ブ十二經脈ノ血氣ヲ補益シ上下君相ノ火邪ヲ安靖ニシ心腎ヲ交ヘ腸胃ヲ厚シ精氣ヲ固シ筋骨ヲ強クシ虚損ヲ補ヒ耳目ヲ利ス寒濕ヲ除キ脾泄利久ヲトヾメ赤白濁ヲ治ス女人ノ帶下崩中諸血病ニ多食スレバ歡喜スツキクダキテ米ニ和シテ粥飯ニシテ食スレバ強健ニナルムシ熟シテ食シテヨシ○食禁生ニテ多食スレバスコシ氣ヲ動ス○大便燥澁ノ人ハ食スベカラズ○藕元升曰本草ニ蓮子ノ條ニ出テ果ニ用フ吾人ハコレヲ菜ニ食ス故ニ爰ニ其性味ヲ載セズシテ菜ノ部ニウツシ出セリ○藕藌又菜ノ部ニウツス

地錦抄云天竺蓮とうれんの如くにて花のかさね萬葉なり色もうすし

又云蓮花紅白くちべにいろ〳〵有

又云唐蓮花白きは大りん、くちべには小ぶり、葉はつねのれん葉に同じ少しの器物に植て花咲指南次第にて春植たる實生に秋花咲なり

又云金蘂蓮唐れんなり花うす紅にて金色の筋ありとす

用藥須知云蓮肉ハスノ實ナリ一名石蓮肉ト云至熟極梗キヲ云ナリ非二別物一近來一種漢ヨリ渡ル石蓮肉ト云アリ非二眞石蓮一樹實ナリ蠻夷ノ中ヨリ出ツ何培元本草必讀云治二痢疾一禁口者石菖蒲石蓮肉非二此石蓮一無レ功コトヲ賛ス其他清心蓮子飲等ニハ誤テ不レ可レ用明繆仲醇ノ本草經疏ニ非二眞蓮實一コトヲ辨ズ本草ノ石蓮ト云ハ別ニ有リ一種ニ非ズ老蓮ノ堅實ナルモノヲ云樹生ノ石蓮ト云ハ破二開之一內無レ心味苦辣非二常用之物一

東雅云蓮子ハチスノミ倭名鈔に爾雅注を引て芙蓉又荷とす其本は藕ハチスノハヒ其莖はハチスノクキ其葉は蕸亦作レ荷其花は菡萏其子は蓮其中は謂レ的蓮は謂レ房也的は謂二蓮中蓮一蓮子はハチスノミと注し

脾胃二經一主下補レ中養レ心益二氣力一除二百病一交二心腎一
厚二腸胃一固二精氣一强二筋骨一補二虛損一除二寒濕一止中脾
泄久痢赤白濁女人帶下崩中諸血病上○得二茯苓山藥白
朮枸杞子一良○蓮味甘氣温性嗇稟二清芳之氣一得二稼穡
之味一乃脾之果也脾者黃宮所下以交二媾水火一會中合木
金上者也土爲二元氣之母一々氣既和津液相成神乃自生
○蓮蕋華開時采陰乾味甘濇性温無レ毒主下淸レ心通レ腎
固二精氣一烏二鬚髮一悅二顏色一益レ血止中血崩吐血上功大
抵與二蓮子一忌二地黃葱蒜一○蓮房味苦濇性温無レ毒主下
破レ血治中血脹腹痛及產後胎衣不上レ下酒煮服レ之○水煮
服レ之解二野菌毒一正二血崩溺血一○房入二厥陰血分一消
レ瘀散レ血與二荷葉一同レ功
庖厨和名本草水菜類云蓮藕倭名鈔ニハスノハヘ又云ハ
スノ子多識篇ニハチス又云ハス考本草根ヲ藕トイヒ
實ヲ蓮ト云莖花葉ヲ荷ト云一名ハ菡萏一名芙蕖諸處
ノ湖澤陂池ミナ有レ之○元升曰第七卷水果部蓮實ノ
條下ノ註ニ詳ニ載テコヽニ略レ之藕味甘性平毒ナシ
熱渴ヲ主トル留血ヲ散シ肌ヲ生ジ久服スレバ人心懽
テ怒ヲトドム食ヲ消シ酒毒ヲ解ス病後ノ乾渴ニツキ
シホリテ汁ヲ服ス煩悶ヲノゾキ胃ヲ開キ霍亂ヲ治ス
產後ノ血悶ヲ破リツキクダキ膏ニシテ金瘡ト折傷ニ
オホヘバ暴痛ヲヤム蒸食スレバ甚タ五臟ヲ補ヒ下焦
ヲ實シ胃口ヲ開ク蜜ト同シク食スレバ人ノ腹臟肥テ
蟲ヲ生ゼズ糧ヲ休スベシ汁ハ蟹ノ毒ヲ解スツキクダ
キ水ニ澄シテ粉ヲトリ食スレバ身カロク年ヲ益ス○
藕蔤倭名鈔ニハスノワカハヘ多識篇同ジ考本草藕節
ノ上ニ莖ヲ發ス五六月ニワカキヲトリテ用フ
又水果類云蓮實和名鈔ニ藕ヲハチスノハヒ又云ハスノ
子爾雅ヲ引テ云其子ハ蓮其中ハ的和名ハスノミ郭璞
云蓮謂レ房也的謂二房中子一也多識篇ニハチス又云ハ
ス○元升曰今俗ニハスト云考本草根ヲ藕ト云實ヲ蓮
ト云莖花葉ヲ荷ト云一名菡萏一名芙蕖諸處ノ湖澤陂
池ミナ有レ之蓮子ヲ種レバ生ズルコトオソシ藕芽ヲ
種レバ發シヤスシ淸明ノ後ニ莖ヲオコシ葉ヲ生ズ六
月七月ニ花ヲ開ク花ニ紅白粉紅ノ三色アリ花心ニ黃
鬚蘂アリ長サ一寸餘其內ハ蓮也蓮房中ニ菂アリ六七
月ニ嫩キヲトリテ生ニテ食スレバモロクヨシ八九月
ニトリオサメテ殼ヲ斫リ去テ蓮肉ト云冬ヨリ春ニ至
リテ藕ヲホリ取テ食ス藕ハ白クシテ孔アリ絲アリ大
ナルハ肱臂ノ如シ長サ六七尺凡ソ五六節アリ大抵野

此類乎○蓮肉
菂薂　澤芝　石蓮子　水芝　中心青者名苦薏一
名蓮薏
○本綱蓮實至秋黑堅如石剥去黑殼謂之蓮肉以
水浸赤皮青心生食甚佳入藥須蒸熟或晒或焙乾
用之○氣味（甘温濇）止脾泄久痢赤白濁脾之果補中養
神益氣力除百疾（得茯苓白朮良大便燥濇者不可食）用之不去苦
薏令人作吐○藕（波知須乃禰）蔤（和名波衣俗云嫩根）一名藕絲菜○本
綱蓮根五六月嫩時名蔤如竹之行鞭者節生二莖
一爲葉一爲花盡處老則爲藕花葉常偶生不偶
不生故曰藕凡白花藕大而孔扁生食之味甘煮食不
美紅花及野藕生食味澁煮蒸則佳冬春掘之食皆白色
有孔有絲大者如肱臂長六七尺凡五六節（以甕水供食則不損）
（口油煠麪米果食則無渣）○藕（甘）散留血生肌止怒解酒毒及病後
乾渇（煮忌鐵器）○藕（平澁）治吐衂欬及血痢
凡産後忌生冷物獨藕不同生冷者爲能破瘀
血故藕亦節有治産後血悶口乾腹痛之功（上）
寺島良安云藕有二節蔤出於其末節七八月採
蔤生食之煮亦佳得酸愈良至冬孔中絲多甚稠煮
之亦不絶掘蜘絲冬春掘藕煠充果食俗云食藕

則三年以前古疵再發也此大齟齬于本草之説○、
荷葉　蕸（荷同）　藕荷（俗云浮葉）　芰荷（俗云立葉）○本綱嫩者名荷
錢（象形）貼水者名藕荷（生藕者）出水者名芰荷（生花者）止
渇落胞破血治産後口乾心肺躁煩○寺島良安
云蓮凡四月生浮葉五月生立葉六月別生一莖
莖頭生菡萏也今人用荷葉裹飯及未醬當暑不
餧○蓮花（芙蓉水華）　芙蕖　蓮蕋（佛座鬚）　本綱蓮花（苦甘温）鎮
心益色駐顏輕身難産催生蓮花一葉書人字
呑之即易産（忌地黄葱蒜）○蓮蕋（甘濇温）清心通腎固精
氣烏鬚髪悦顏色益血止血崩吐血（忌同前）
圖解本草云蓮實、藕實、菂薂、石蓮子、水芝、澤芝ハス
ノミ蓮藕節生二莖一爲藕荷其葉貼水其下旁行
生藕一爲芰荷其葉出水其旁莖生華也其葉清明
後生六七月開華華有紅白粉紅三色華心有黄鬚
蕋長寸餘鬚内即蓮也華褪連房成菂菂々在房如蜂子
在窠之狀至秋房枯子黑其堅如石謂之石蓮子八
九月收之斫去黑殼貨之四方謂之蓮肉○以水
浸去亦皮青心生食甚佳○入藥須蒸熟去心○或
曝或焙乾用○亦有每一斤用豬肚一箇盛貯煮熟
搗焙用者（上）○入水沉者佳○蓮實味甘濇性平無毒入

云荷葉無レ花時亦自香ト今試レ之然リ蓮池ニ立ル葉ノ
香モ花ト同〇唐蓮ノウヱヤウ花譜ニ詳ニス
和漢三才圖會（水果部）云本綱蓮以レ子種者生遲以二藕芽一種
者最易レ發二其芽一穿レ泥成二白蒻一卽蔤也長者至二丈餘一
五六月嫩時沒レ水取レ之可二作レ蔬茹一俗呼二藕絲菜一節
生二一莖一一爲二藕荷一其葉貼レ水其下旁行生レ藕也一
爲二芰荷一其葉出レ水其旁莖生レ花也其葉淸明後生六七
月開レ花花有二紅白粉紅三色一其花未レ發爲二菡萏一已發
爲二芙蕖一（芙蓉水華）花心有二黃鬚一蕋長寸餘鬚內卽蓮也花褪二
連房一成レ菂（蓮實也）菂在レ房如二蜂子在一レ窠之狀一六七月采二
嫩者一生食脆美至レ秋房枯子黑其堅如レ石八九月收レ之
斫二去黑殼一謂二之蓮肉一冬月至レ春掘レ藕（根也）食レ之大抵
野生及紅花者蓮多藕劣種植及白花者蓮少藕佳也其花
白者香紅者艷千葉者不レ結レ實也其莖爲二荷莖一乃負
レ葉者取二負荷之義一菂中青心二三分爲二苦薏一荷梗塞
レ穴鼠自去煎湯洗二鑞垢一自新物性然也蓮產二于淤泥一
而不二爲レ泥染一居二于水中一而不二爲レ水沒一根莖花實凡
品難レ同淸淨濟用羣美兼得自二蒻蔤一而節々生レ莖生
レ葉生レ花生レ藕由二菡萏一而生レ蕋生レ蓮生レ菂生レ薏其
蓮菂則始而黃々而靑々而綠々而黑中含二白肉一內隱二
靑心一石蓮子堅剛可レ歷二永久一薏藏二生意一藕復萠芽展
轉生々造化不レ息故釋氏用譬二妙理具存一矣有二合歡並
頭者一有二夜舒荷一夜布晝卷睡蓮花夜入レ水金蓮花黃色
碧蓮花碧色繡蓮花如レ繡皆是異種

古今醫統云蓮萠技二淨瓮中一經レ年移種則發レ花碧色芙
蓉先一夕以レ靛水調以レ紙蘸二花蕋一上用レ紙裹レ之來日
開レ花亦成二碧色一

寺島良安云蓮生二於泥一而淸淨性忌二糞溺油膩物一周茂
叔之云菊花之隱逸者也牡丹花之富貴者也蓮花之君子
者也且諸佛喜以二蓮華一爲レ座亦取二淸淨之義一耳〇有二
倭蓮唐蓮二種一倭蓮子如二小椎一唐蓮子稍小閏二月斫二
去頭尾尖一用二小器一盛レ水投レ之中レ日則五七日生二白鬚
根一候二葉生一移二栽於瓮一其葉花小艷美可レ愛有二白紅
粉紅口紅之數品一二一池中不レ可二襍栽一變成二其多者色一
〇金絲蓮　紅花有二金黃色理文一最爲レ珍〇大紅蓮
花淡赤色形似二芭蕉花一而從レ下開上凋落亦然五六寸
爲レ臺稍成レ岐有レ花不レ實〇天竺蓮　花紅千葉而一刻
開凡日午以後萎翌朝得二日光一唯天竺蓮晝夜不レ萎經二
五六日一悉落焉（此處有誤脫歟）〇山海經所レ謂大華山（五嶽之一在二陝西一）高
五千仞廣十里山頂有レ池池中千葉蓮華服レ之羽化者亦

花者蓮少藕佳也世俗所謂蓮者佛之所愛故欲枯衰時池中浸僧衲則不死大抵蓮素喜藍汁今僧衲染藍故然焉今有養小蓮子盤中而賞花者先將好土合砂煉水暴日細末入于木盤中貯水用蓮實以鑪或砂磨核頭令薄而後種之則其手必發花遲者經年開花又種酒盞空樽尤可也當時家女爭弄之

蓮根氣味甘平無毒

以鹽水食則不損口同油煙米麪果食則無渣

煮忌鐵器

主治除煩悶熱渇開胃消食解酒毒及蟹毒散產後留血此主心脾血分之疾四時可食令人心懽

蓮實即蓮肉也氣味甘平濇無毒李時珍曰嫩菂性平石蓮性溫

主治發明附方詳于綱目花褪連房成菂菂在房如蜂子在窠之狀六七月采嫩者生食脆美至秋房枯子黑其堅如石謂之石蓮子斫去黑殼謂之蓮肉也

大和本草水草類云諸家ノ本草ニ蓮肉ノ性甚好コトヲホメタリ心脾ヲ補フ今按ニ清心寧神補中強志補虛益損ノ能アリ凡蓮ハ一物ノ內用ル處多シ實ハ即蓮肉ナリ又コレヲ菂ト云實ノ內ノ青芽ヲ薏ト云味苦シ蓮花蓮蕋ヲモ用ユ蕋トハ花心ノシベナリ藕ハ蓮根ナリ藕節ヲモ用ユ葉ヲバ荷葉ト云蓮鼻ハ帶也蓮房ハ實ノマハリノ房也蜂房ニ似タリ故ニハチスト云フハ畧語ナリ凡草木ノ中一物ニテ花葉根莖子等數品ヲ用ル事多キハ蓮ヲ第一トスベシ其花紅アリ白アリ紅白一處ニ植レバ白ハ枯ル近年世上ニ唐蓮多ク植品多シ○居家必用十一卷水芝湯ノ方アリ蓮肉ヲ拯テ炒燥カシ一斤粉草一兩微炒右爲細末每二匁入鹽少許沸湯點服此湯夜坐過饑氣乏則飮一盞大能補虛助氣日本ニテハ甘草ヲ蓮肉ノ十分一加フベシ良方也○蓮根ヲ煮ルニ鐵器ヲイム銅器ヲ可用醋ヲ加ヘテ煮レバ黑色ニ變ゼズ生藕ヲツキクタキ汁ヲ取リ水飛シ陰乾ニシ餻餌トス○石蓮子トス本草蘇頌曰其菂至秋黑而沉水爲石蓮子時珍曰石蓮剉去黑殼謂之蓮肉今藥肆一種石蓮子狀如土石而味苦不知何物也又曰嫩菂性平石蓮性溫○按才草石蓮肉蓮子至秋黑堅如石ナルヲ云別一種アルニ非ス薛立齋本草約言及李中梓カ藥性解ニ蓮肉ト別物トス誤ナルベシ別ニ石蓮子ト稱スルハ不可用○許彥周詩話

云々
又同上云七寺東西寺佐比寺八坂寺野寺出雲寺聖神寺盂蘭盆供養料云々荷葉三百枚云々又四節料云七月二十五日云々蓮子參議以上五房五位以上三房又同上東宮云々荷葉三十枚又同上河内國云々蓮根五百六十節

本草和名云藕實楊玄操音吾荷反一名水芝丹一名蓮本條一名水曰一名靈芝一名澤芝一名芙蕖一名菡萏已上五名出兼名苑一名水華出古今注一名加實一名蝕實一名蓮華一庸扶容葉名荷小根名芋大根名實初根名交與已上出大清經一名石蓮黑者出拾遺和名波加知須乃美按醫心無加字和名本草云藕實味甘平寒無毒和ハチスノミ八月採レ之並葉共

和名類聚鈔蓮類云蓮子爾雅云荷芙蕖其實蓮音連蓮子和名波知須乃美

又蓮類云芙蕖爾雅云荷芙蕖符芙音同蕖音渠郭璞注云芙蓉音容江東呼爲レ荷也○藕爾雅云其本蔤音密和名波知須乃波比郭璞注云莖下白蒻音弱在二泥中一者也○茄爾雅云其莖茄音加和名波知須乃久木○蕸爾雅云其葉蕸胡歌反郭璞注云蕸亦荷字也○菡萏爾雅云其華菡萏上胡感反下徒感反並上聲之重兼名苑註云蓮花已開曰芙蕖未舒曰菡萏也○蓮爾雅云其子蓮音連其中的郭璞云蓮謂二房的一謂二蓮中子一也

新撰字鏡云蔤美筆反荷本乃白久支

多識編云蓮藕和名波知須又云波須根名藕爾雅實名蓮爾雅和名波須乃美藕實本經菂爾雅菂音吸爾雅石蓮子別錄水芝本經澤芝古今注莖葉名荷和名波須乃波嫩者荷錢形象貼水者藕荷生藕者也出水者荷生花者也蓮花和名波知須乃波那又云波須乃波那芙蓉古今注芙蕖同水華蓮蕋鬚和名波須乃波那志倍佛座鬚

本朝食鑑水菜部云蓮根處々泥池及沼澤湖多有レ之以二蓮子一種者生遲以二藕芽一種者最易レ發二其芽一成二白蒻一卽蔤也長者丈餘五六月嫩時沒レ水取レ之則得此謂二藕絲菜一華人賞レ之而作二蔬茹一本邦自レ古號二波惠一而賞レ之歌人亦詠レ之節生二一莖一一爲二藕荷一其葉貼レ水其下旁行生レ藕也一爲二芰荷一其葉出レ水其旁莖生レ花也其葉清明後生六七月開レ花花有二紅白紛紅三色一花心有二黃鬚蘂一長寸餘鬚内卽蓮也又有二千葉紅者一近頃有二白蓮葩之端淡紅一二者一呼謂二口紅一或有二碧色者一今在二駿陽一土人所レ謂卽是佛之靑蓮座也予未レ見レ之若一池中以二紅白一而雜種則其少者枯盡故築レ塘隔レ之然池廣過二四五十步一兩方相阻種レ之則倶盛美近代種二子芽一者鮮矣惟采二新根一而穿レ泥種レ之則旁行易レ蔓既蔓茂而復采レ根根皮灰黃或白其節黑有レ鬚刮二去根皮一則純白有レ孔有レ絲其根大者如二肱臂一長六七尺煮蒸而熟則淡黑或熱湯中入二嚴醋少許一煮レ之二三沸而取出則白而不レ變レ黑亦奇也凡野生及紅花者蓮多藕劣種蒔及白

古事記云大長谷若建命雄略天皇坐長谷朝倉宮治天下也云々亦一時天皇遊行到於美和河之時河邊有洗衣童女其容姿甚麗天皇問其童女汝者誰子答白己名謂引田部赤猪子爾令詔者汝不嫁夫今將喚而還坐於宮故其赤猪子仰待天皇之命既經八十歲云々天皇大驚吾既忘先事然汝守志待命徒過盛年是甚愛悲心裏欲婚憚其極老不得成婚而賜御歌其歌曰中略赤猪子答其大御歌而歌曰

久佐迦延能伊理延能波知須波那婆知須微能佐加理毘登々母志岐呂加母

菅家文草卷四云丙午之歲四月七日予初莅レ境巡ニ視州府一府之少北有ニ一蓮池一池之近東有ニ一長老一云是蓮也元慶以往有レ葉無レ花仁和以來花葉俱發適至ニ夏末一已過ニ花時一長老之言誠而有レ驗爾時予向ニ僚屬一作ニ是唱言一採ニ摘池中百千萬莖一分ニ拾二部內二十八寺一聞者隨喜見者發心加ニ之香油一東西供養乃謂自我爲故將レ貽ニ後人一至ニ于去年一亦復如レ是意之所レ約不レ爲レ不レ諧今茲春日不レ雨入レ夏無レ雲池底塵生蓮根氣死天與レ人失心與事違非ニ佛力之不一レ至蓋人心之不レ信聊叙ニ文章一便以嗟嘆云爾

門外小池池內蓮、問來誰種又誰穿、稚膚葉展纔承レ露、淸溜溪通不レ導レ涓、提レ筇一時風景改、下レ車三度月光圓、及レ看灼々新花發、終信皤々故老傳、心誤絳幡依ニ岸陣一、眼疑紅燭出レ泥燃、西方色相聞爲レ寶、南群榮華見可レ憐、尋繹凡夫機ニ利鈍一、混ニ成樂處一善因緣、同僚偃レ草稱ニ權首一、闔境奔波供ニ佛前一、都計道場唯四七、擬施世界滿ニ三千一、人皆採擷分レ頭去、我獨思惟合掌眠、未ニ昔離ニ心於魏闕一、如今享福不ニ唐捐一、先祈海內長無事、次願城中大有年、從自初來言已立、欲令後到禮相沿、豈圖此歲無ニ膏雨一、何罪當州且旱天、風卷ニ春山一雲宿レ澗、火燒ニ夏日一地生レ煙、毒龍貪惜ニ神通水一、邪鬼呵留智惠泉、祝史疲馳頒幣社、禪僧倦着讀經筵、悲哀鄭白源流涸、夢想ニ龔黃一德化宣、近見ニ塵飛一芳蕚死、遍知土熱稼苗煎、善根道斷呼ニ甘樹一、眞實謀窮稔福田、莫レ笑芳修偏少力、應慙政理每多レ愆、魂迷案レ轡顚ニ羸馬一、手揺楊薪爛ニ少鮮一、儒館罷歸雖ニ叱咄一、吏途躓步更迍邅、刻レ肌刻レ骨身爲レ鏤、此偈寧非ニ薄命篇一、

延喜式大膳職云正月最勝王經齋會供養料云々荷藕半節

ば蓮房も用ゆべし亦はちすの絲を用ひて物を作りし事は西土には見えざれども中將姫の蓮の絲にて織し曼荼羅といへるは大和國當麻寺の什物にて人皆知所なり亦成形圖說にも寛政の比蓮布を製せるよし見えたり拾遺記に漢の昭帝柳池に御遊の時池に芙蓉あり芳氣十里の內に聞えたりと亦唐の張昌宗姿貌美なるを以て帝に幸せらる楊再思といふ人は六郎蓮花に似たりとは非なり正に謂ん蓮花六郎に似たるのみと評せり六郎は張昌宗が事又齊の東昏侯奢侈を好み黃金を以蓮花を鏨成してこれを地につらねて妃の潘玉奴をして其上を行しめていふ步々蓮花を生ずとて花美を樂めりと又續世說に後唐の馬郁秘書監となる時に張承業權貴にして事を用ゆ賓客燕集するに珍果を陳列すれば賓客張氏か權威を憚りて敢て先甞る者なし然るに馬郁は其珍果をかならず食ひ盡せり因て張承業その主者に命して他日馬郁いたらば唯乾蓮子を以て前に置のみせよと戒めけり然るに或日馬郁來りければ主者いひ付の如くす馬郁その食ふべからざる事を知て韡中より一つの鐵槌を取出して乾藕子を打碎きて食ふ仍て承業大に笑ていふ公の爲に是を易ん吾按を敗る事なかれといへり世俗蓮は佛の稱する物なればとて吉事には忌きらひて用ひざる故に障子屛風等に書くをも嫌へども其盛の長きも蓮に及ぶ花なくして其香も殊に勝れり徒然草の家にありたき木はといふうちにも池にははちすといへり篤信も凡草木の中一物にて花葉根莖子等數品を用ふる事多きは蓮を第一とすべしといへり花の清潔にして殊に大輪にて香も是におよぶものはなければ蓮を愛せし人多きなり周茂叔も蓮は花の君子なる者なりといへり阿彌陀經にも極樂國土有七寶池八功德水充滿其池中底純以金沙布地四邊階道金銀瑠璃玻瓈合成上有樓閣亦以金銀瑠璃硨磲赤珠碼碯而嚴飾之池中蓮華大如車輪青色青光黃色黃光赤色赤光白色微妙香潔といひてみな莊嚴のみを盡せしなりまた翻譯名義集に分陀利此云白蓮華叡師云未敷名屈摩羅將落名迦摩羅處中盛時名分陀利體逐時遷名隨色變故有三名云々天竺にてもいまだひらかざるを屈摩羅といへるよし是は漢名にいはゆる菡萏とおなじきなり將落迦摩羅といふといへるはいかならんか漢名は見えず處中盛時名分陀利といへるは白蓮と同名なれどもこれ漢名の芙蕖なり

るも上下を磨して泥中に植置ば生ぜざるはなしとい
へり蓮子熟して黒くなりたるを石蓮子といふ諸書に
見えたり用藥須知に蓮肉はすの實なり一名石蓮肉と
いふ熟するに至て硬きをいふなり別物にあらず近來
一種漢より渡る石蓮肉あり眞にあらず石蓮樹實なり
蠻夷の中より出づ何培元本草必讀云治二痢疾禁口一者
石菖蒲石蓮肉非二此石蓮肉一無レ功ことを贅す其他淸
心蓮子飲等には誤てもちふべからずといへり又はす
の根は九月末十月に至らざれば生ぜず五月より九月
までは蔤蒻のみにして葉花を生ずるも蔤より生ず蔤
蒻ともに和名はちすのはひといふ證類本草救荒本草
等の圖に藕より花葉を出せしは誤なり此はひの延る
事夏より九月まで縱橫にはひて二三間にも及ぶあり
このはひに節ありて葉花を生じ末秋に至りてはひの
止りに藕を生ず故に藕を堀るは冬より初む今七月比
新蓮根とて出す此小なるは作りばすとて花葉を去り
其精氣を泥中のはひに持せて小根を生ずる也和訓栞
にはちすのはひ和名鈔に蔤を訓せりはひは延の義な
るべし云々延喜式に荷葉七十枚波斐四把半と見ゆ藕
牙也と注す後撰集に「蓮葉のはひにそ人はおもふら
ん世にはこひぢの中に生つヽ」はひを古は食用とせ
し也今にても酒肴に酢に漬て食ふ人あり香有て美味
なりと藕も大いなるは五六尺に至る又それより小藕
を生ずる枝の如し藕は泥中より堀出せし時は潔白に
して美なり宿を越は色つきて小點をあらはす藕の孔
は十孔なり尤大いなるは十孔の間にまた小孔を生じ
て數極りなけれども十孔を性とす淸商も食用として
藕を持來る其藕大にして一握に過る長さも五六尺に
過生にて食ふに味梨のごとしと本邦にても越後にて
は酒肴なぞに生藕を食味可なりといへり風土により
て然るべし又淸人蓮肉を多く持渡り自藥に用ひ食用
ともなせり亦藕粉も持渡れり是蓮根を舂水飛して製
せし物を甚稱美せるよしされども其色潔白ならず蕨
の粉の如き色にして美ならず故にこの方の葛粉にお
とれり大和本草に生藕をつきくだき汁を取水飛し陰
乾し餅團子とすといへり亦花も蕋も用ゆれども花は
ゆひき熟し水に浸し置ても澁みあり葩こはければ食
用とはなし難しと亦その房も食する事致富全書冬服
食方に蓮房取二嫩者一去二皮子幷蔕一入レ灰煮又以二淸水一
煮去二灰味一同蕉脯法焙石壓令レ扁作レ片食レ之といへ

どよみ西土にても顧仲方か百詠に露珠といひて蓮葉に露のたまりし圖有て詩もあり又若葉を延喜式に稚葉といへり今もきざみ飯に煮雜へてはすめしと呼て食す菘飯に優りて香氣有て美味なり延喜式膳大にも盂蘭盆供養料の供に荷葉あり又萬葉集の歌の傳記にも備二設酒食一饗二宴府官人等一於レ是饌食盛レ之皆用二荷葉一と見えて上古饌食をもるに用ゆ中元には蓮葉に飯を包みて上下共にさし鯖を添て祝ふ今の人おほく七月靈祭の佛事の供物に備ふ類のみにして人事には用ふることまれなり又生葉を乾し藥用となす又蓮の葉莖をつらね採て葉の正中より莖に孔を明けて酒をつぎて其莖の元より吸ふを藥なりとて人のなす事なり是は雞跖集に魏の鄭公慤夏月三伏の際に賓僚を率て使君林において暑を避るに大ひなる蓮葉を取て酒を盛り簪を以葉を刺て柄と通はしめて莖を屈輪囷(マゲ)て象の鼻の如くして是を傳へて各其酒を吸はしむこれを碧筩杯と名つく東坡が詩に碧盌時作二象鼻彎一白酒猶帶二荷心苦一といへり蓮の葉は秋分よりおとろへ初めて寒露に至れば多く枯る蓮は寒を嫌ふ故に芽を出すも夏の季に至らざれば生ぜず枯るゝも諸草よりはやし枯葉を白樂天は詩に衰荷といひ黃濟は敗荷と作れる詩あり花は紅色を本色となして多く紅花なれども其中に差別ありて深紅あり淡紅あり大輪あり小輪あり瓣白くして上の紅なるあり白色にして紅條の通りたるありまた赤褐色にして黃を帶べるありこれらはまゝ常の紅蓮のうちに生ぜりまた白蓮は香殊に紅に勝れりその蕾は綠色常なれども黃を帶べるもありまた蓮の實七月比いまだ熟せざるを生にて食ふ黑く熟せしも食すこれは藥用となして蓮肉といひて脾胃を補ひ心を淸くし中を補ひ志を強くし虚を補ひ損を益すみな實の功なり其最もちふべき實を首とし蓮藕と稱せるなるべし蓮といふは實の總名にてくはしくいへば蓮房といひて實をつゝむものなり實は蓮肉といひ菂といふ菂の內の青芽を薏といふこの青芽菂のうちにさかしまに成てあり故に實の下を切て泥中に入置は五六日の中に芽を出し葉を生して其まゝ置ても三年にして花を開く地錦抄にも指南次第にて春植たる實生に秋花咲といへば手入をなさば早く花を生ずべしされば多く實を植て生じなば極めてかはりたる花も生ずべし佐藤成裕曰蓮子は四五十年を經た

古今要覽稿卷第四百六十二

●草木部　水草

はちす　はす　蓮

はちすは古名にしてはすは通稱なり古事記をはじめ日本書紀續日本紀三代實錄延喜式萬葉集菅家文草の詩にも見え本草和名和名本草共に藕實をはちすのみといひ和名類聚鈔蔬類に蓮子はちすのみと出し亦蓮類を出して芙蕖爾雅にいふ荷は芙蕖郭璞注云芙蓉江東呼て荷となす藕ははちすのねその本は蔤はばちすのはひ注にいふ莖下の白蒻泥中にあるものなり茄ははすのくき其葉は蕸注にいふ蕸また荷の字なり其華は菡萏兼名苑にいふ蓮花すでに開くを芙蕖といふまたのびざるを菡萏といふ其子は蓮其中は的注に蓮は房をいふなり的は蓮中の子なり以上爾雅兼名苑　亦多識篇にも詳なり神農本經上品の藥なり本草綱目水菰類にも載すはちすは和名鈔に爾雅を引ていふごとく莖葉花實根共に各名を異にすれども實の名なる蓮を通稱として本草にも蓮藕となし日本紀續日本紀三代實錄萬葉集菅家文草にも蓮葉また蓮荷をはちすと訓し西土にても周茂叔が愛蓮說惠遠が白蓮社詩にも採蓮曲といひ觀經阿彌陀經にも池中蓮華大如二車輪一と見えたり詩の鄭風には隰有二荷葉一また陳風に有二蒲與レ荷また有二蒲菡萏一といへり凡てはちすは立夏より漸く浮葉を生ず初めて出る小なる浮葉をせにばといふ漢名を荷錢といへり詩にも荷葉初浮二水上錢一、蓮葉出レ水大如レ錢などいへり夫より大なる浮葉を生ずるをみづはといひ是を漢名藕荷といふ夫より立葉を出す是を漢名芰荷といへりたちは生ずれば蕾を出して早きは小暑より開きて大暑を盛とす故に張秋穀も消夏三友の一となせり此三友は蓮花素心蘭梔子花なり蓮花は小暑より開きて大暑立秋處暑迄は盛にしておくるゝは白露に至れり浮葉立葉も追々に生ずる故七月魂祭の比にもみのりたる實あり又未だ開かざる蕾も多し是にて盛の久しきはしらるゝなり又是よりおくるゝものも多し又歌には葉を詠ぜし事多く花をよめるは稀なり萬葉集にも「はちす葉にたまれる水の玉に似たる」また古今集にも「何かは露を玉とあさむく」な

せきせうもへらも漢名苦草この藻も水中にありて水上に葉の出るものならねどもといへばひるむしろ水藻下に附此藻水中に叢生して水の流にしたがひ長さは三尺餘にも及ぶ葉柔軟にてし薄く折やすし蘭山一種葉邊に軟刺あるをかうかいもといふといへるは淡水の流て生ずる種にはあらずして淺草川中川戸根川なその沙水の入川に生ずるは少しいらあり故にはらきりもと呼べり此せきせうも苦草といひて時珍が本草綱目に初て見えたれども皇國西土共に古へよりなきにあらず范安仁が畫きし水魚の圖中に見え元信が畫し鯉の側に松もと此せきせうもを添たり又田舍の用水に生ずるもは水かれて後は泥中より緑の葉を生じてせきせうもとは絕て別種と思はるゝなり又水增し其葉を浸せは元のごとくになりて水中に繁茂す和漢三才圖會に苦草本綱苦草生ニ湖澤中一長二三尺狀如ニ茅蒲之類一婦人白帶煎湯服之佳と綱目の集解主治を載るのみ大和本草にも苦草は見えず

本草綱目啓蒙云苦草セキセウモ江州ヘラモ同上江州琵琶湖ニ多シ根ハ水底ニアリ葉ハ黑三稜ニ似テ薄クチヂレテ叢生ス一種葉邊ニ軟刺アルヲコウガイモト云フ

本草藥名備考云セキセウモ苦草江州本綱十九

本草綱目水草類云苦草綱目時珍曰生ニ湖澤中一長二三尺狀如ニ茅蒲之類一氣味苦主治婦人白帶煎湯服又主好下嗜ニ乾茶一不上已面黃無ㇾ力爲ㇾ末味ニ炒脂麻一不時乾嚼ㇾ之時珍

『此間圖ニ面略之』

○釋名

せきせうも本草綱目啓蒙 本草藥名備考

○按に此藻水中に叢生し流にしたがひてなびけり長さは三尺餘にものぶる物なり軟にして折やすく形狀あたかもせきしやうの如く色常に青緑なる故此名あり

へらも同上

○按に江州の方言なり此も琵琶湖に多く生ずるよし蘭山の說也へらもといふ義は形狀竹べらの如くにしてむらがり生ずる故にしか名付たり

苦草和漢三才圖會本草綱目啓蒙藥名備考本草綱目

○按にせきしやうもの漢名なり此水草二種あり一種は葉細長く一種は少し葉のはゞ廣し葉廣き種は沙入の河水中に生ずるものといへり

リテ何年モ不レ枯花ハ五分程ノ穗ニナリテ粟ノ如ク細カキモノ綠色ニシテ形分明ナラズ石菖ノ花ヨリモ短シ

本草藥名備考云ヒルムシロ眼子菜一種和名鈔蛇床子ヲ訓ジテ比流牟之呂トス此ニ從テ藥店此實ヲ採リ蛇床子トシテ貨ス大ニ誤ナリ蛇床子ハハマゼリノ實ナリ

又云ヒルモ眼子菜一種

本草綱目（水草類酸模附錄）云鷹舌別錄曰味辛微温無レ毒主二霍亂腹痛吐逆心煩一生二水中一五月采レ之弘景曰生二小水中一今人五月五日采乾以治二霍亂一甚良

救荒本草（野譜）云眼子菜食レ葉生二水澤中一葉青背紫莖柔滑而細長可二數尺一六月采レ之熟食

『此間圖二葉略之』

○釋名

ひるむしろ

淸少納言枕草紙にみくりひるむしろとせしは卽鷹舌にして佳なれども和名鈔に蛇床子の和名とせしはいかなる誤にや和名鈔にも水草の部とはせざれども蓱うきくさ蒲かま菰こも菖蒲あやめぐさ劇草かきつばた蛇床子ひるむしろ三稜草みくり莎草莞おほゐ藺ゐといへる中に蛇床子を入しは和名鈔の誤となすべし

ひるも（通名）　ひりこ（信州）　ひりもの（丹波）　かはかづら（羽州米澤）

天童草（藥撰集）　鷹舌（別錄）　眼子菜（救荒）

○正誤

本草綱目啓蒙（酸模附錄）云鷹舌詳ナラズヒルムシロニ充ツル說ハ非ナリヒルムシロハ救荒野譜ノ眼子菜ノ一種ナリ

蘭山鷹舌に充るは詳ならずといへども昔より今に至りて霍亂腹痛吐逆心煩に用ひて卽効あるは別錄所レ載の効にして陶弘景も霍亂を治す甚だ良といへるを何として非なりといひしにや形狀は詳ならざれども其効は卽鷹舌なりかゝる効能有て賤民の急危を治す良藥を無能の眼子菜となさん哉然ども此方民間に傳はりて人の多く知るは先輩の功なり鷹舌の名は古くして眼子菜の名は後なるものなり

せきせうも　へうも　苦草

古今要覽稿卷第四百六十一

●草木部 水草

ひるむしろ　ひるも　鷵舌　眼子菜

ひるむしろ清少納言枕草子ひるも通名漢名鷵舌眼子菜もその葉水上に浮生して是又うき艸なり世の人此莖草を採陰干して霍亂食傷に煎服して効あり又眼疾に生葉を眼胞に黏じて治すといへり其葉の形眼を張ごとしと救荒本草にいへり鷵舌といふも葉の形なるべし其形狀竹柏のごとくにて色深綠光澤柔軟にて根は泥中にありて莖細長にして葉互生ず枕草子にみくりひるむしろといへるは卽今人のいふひるもにて漢名鷵舌眼子菜となして佳なれども延喜式和名鈔に蛇床子の和名とせしはとるべからずみくりひるむしろ共に水草にしてみくりは三稜なり大和本草には三才圖會救荒本草に依てひるむしろを眼子菜となし蘭山も救荒本草に元つきて酸模附錄の鷵舌に充るは非なりといへども今上に載ごとく其効あるは卽鷵舌となして佳なり

鷵舌は本草和名に見えて一名に練石艸爛石草卽馬矢蒿出陶景注といひて和名は載ざれども鷵舌となすべし佐藤成裕もひるむしろは鷵舌にして佳なり眼子菜は後の名なりといへり岩崎常正が本艸圖譜にも酸模附錄の鷵舌をひるむしろとなせりひるむしろに一種葉細くして水中にありてその先水より出てひるもと同じ葉を生ずる種あり是又ひるもにして水上に出ざれば葉の細く成物にや

本草和名云鷵舌練石艸一名爛石草卽馬矢蒿出陶景注ニ

清少納言枕草紙云草は云々みくりひるむしろ云々

大和本草云眼子菜倭名ヒルムシロト云水中ニ生ズ莖長ク水中ニ蔓延ス水上ニノボラズ葉ノウラ紫色也亦面ニ葉ウカブ葉ニ筋アリ光アリ俗說ニ陰干ニシテ爲レ末服ス治ニ傷食霍亂ニ甚有レ効煎服亦可ナリト云三才圖會艸木第十卷ニ眼子菜生ニ水澤中一青葉背紫色莖柔滑而細長可ニ數尺一トアリ救荒本草曰

眼子菜采レ之熟食六七月採其葉如レ此



救荒本草蘭山口授云眼子菜ヒルムシロ此圖ヨリ幅狹シ莖モ絲ノ如ク細シ池中又溝渠ノ邊ニ生ズルモノナリ春ナクシテ秋アリ又大江筋ニハナシ根ハ水底ニア

芡盤閙々開二碧輪一城東壕中如レ疊レ鱗漢南父老舊不レ識日々岸上多少人駢頭擷鬆露二秋熟一綠刺紅針劄二寒玉一提レ籠當レ筵破二紫苞一老蚌一開珠一掬吹臺北下凝祥池圃田東邊僕射陂如今兩處盡湮沒異日此地名應レ馳物貴二新成一味尤美可レ惜飄零還入レ水料得明年轉更多一匝清波流二珠子一

○釋名

みづふゝきのみ本草和名和名本草　みづふゝき和名類聚鈔　みづふき通稱　おにばす俗稱　けとう仙臺　いばらばす丹波　芡實音儉

○本經上品　雞頭本經　雁喙同上　雁頭古今注　鴻頭韓退之　雞雍莊子　卯蔆管子　蔿子音唯　水流黃

弘景曰此卽今蔿子也莖上花似二雞冠一故名二雞頭一頌曰其苞形類二雞雁頭一故有二諸名一時珍曰芡可レ濟二儉歉一故謂二之芡一雞雍見二莊子徐无鬼篇一卯蔆見二管子五行篇一楊雄方言云南楚謂二之雞頭一幽燕謂二之雁頭一徐青淮泗謂二之芡子一其莖謂二之蔿一亦曰レ葰鄭樵通志以二鉤芙一爲レ芡誤矣鉤芙陸生草也其莖可レ食水流黃見レ下

雞頭菜卽葰菜也

○以上本草綱目

雁膳通雅　鳧頭正字通　雁實事物異名　雁喙實三才圖會　水陸丹發明　菱弟名物法言　雞頭菱南寧府志　吳雞事物紺珠　雞味兒同上　鴻頭蘇氏韻輯　居寒蓮鄉藥本草　雞壅埤雅　水中丹江南通志　雞豆同上　雞頭蓮福州府志　藕梢菜正字通

○以上本草綱目啓蒙

開レ花背レ日　王直方詩話京師會靈觀凝祥池芡最盛僕射陂在二鄭州一世亦稱二其貢レ芡　學圃雜疏芡在二京師一産者形如二刺蝟一而有二粳糯一糯而大者味勝二杭産一　淮南子雞頭已レ瘻注二瘻頸腫疾一雞頭治レ之　七脩類藁雞頭煮者以二防風一水浸レ之經レ月不レ壞生者每一斗用二防風四兩一換レ水浸レ之可二以度レ年

詩

事文類聚

古詩

初食二雞頭一有レ感　歐陽永叔

六月京師暑雨多夜々南風吹二芡觜一凝祥池鑽會靈園僕射荒陂安可レ擬爭レ先園客採二新苞一剖レ蚌得レ珠從二海底一都城百物貴二新鮮一厥價難レ酬與レ珠比金盤磊落何所レ薦滑臺醱醅如二玉醴一自慙窮二食萬錢廚一滿口飄浮嗟二病齒一却思年少在二江湖一野艇高歌菱荇裏香新味全手自摘玉潔沙磨軟還美一瓢固不レ羨二五鼎一萬事適情爲可レ喜何時遂買二潁東田一歸去結レ茅臨二野水一

食二雞頭一　蘇子由

芡葉初生縐如レ縠南風吹開輪脫レ轂紫苞青刺攢二蝟毛一水面放レ花波底熟森然赤手初莫レ近誰料明珠藏二滿腹一剖開膏液尙模糊大盎磨聲風雨速淸泉活火曾未レ久滿堂坐客分二升掬一紛然咀嚼惟恐レ遲勢若二群雛方脫粟一東都每憶會靈沼南國陂塘種無レ足東遊二塵土一未レ應レ慊此物秋來日常食

律詩

食二雞頭一　樓廷秀

龍宮失レ曉惱二江妃一也養二鳴雞一報二早暉一要レ啄二稻粱一無二半粒一只敎三滿頷飽二珠璣一

食二雞頭子一　同

江妃有レ訣煮二眞珠一菰飯牛酥軟不レ如手擘二雞頭一金五色盤傾二驪頷一琲千餘夜光明月供二朝嚼一水府靈宮恐二夕虛一好與二藍田飡玉法一編歸二辟穀赤松書一

又

三危瑞露凍成レ珠九轉丹砂鍊久如鼻觀溫芳炊レ桂歇齒根軟熟剝レ胎餘半甌鷹爪中秋近一炷龍涎丈室虛却憶吾廬野塘味滿山楝葉正堪レ書

佩文齋詠物詩選

古詩

采芡　文同

種法用二麻豆餅屑一拌二匀河泥一植下則易レ盛其實惟蘇
杭出者殼軟薄而肉糯且大味極腴美他處者止堪三收作二
芡實一舂粉食入レ藥用
重訂增補陶朱公致富全書云芡
甘平開レ胃止レ渴益レ腎遺精白濁帶下久服耳目聰明
輕レ身耐レ老
俗名二雞頭一至レ秋作レ房如二雞頭一實藏二其中一圓白如
レ珠爾雅翼云芡花向レ日菱花背レ日姑蘇志云吳江出者
殼薄色綠味腴長州車坊出者色黃有二粳糯之分一秋間熟
時收レ子包浸二水中一二三月撒二淺水內一待二葉浮一面移二
栽深水一以二麻豆餅屑一拌二匀河泥一種レ之梅聖俞詩云蝟
毛蒼々傑不レ死銅盆矗々釘頭生吳雞門敗絳幘碎海蚌
扶出珍珠明
格致鏡原云芡實古今注芡一名雁頭　本草經雞頭生二
雷澤一　爾雅翼芡實有レ稍若二雞雁實一然一名雁喙內有
レ米圓白如レ珠久食宜レ人莊子名二雞壅一　管子名二卯蔆一
說文一名鴻頭又名二暖菱一　楊雄方言北燕謂二之夜一青
徐淮泗之間謂二之芡一南楚江淮間謂二之雞頭一或謂二之
雁頭一或謂二之烏頭一　孫公談圃芡甘滑可レ食名爲二水
硫黃一　埤雅芡葉似レ荷而大上有二數十蹙衂一如レ沸菜

生而有二芒刺一其中有レ米可三以濟二飢蓋其蓬蹲如二雞
嘴一故曰二雞頭一　仇池筆記芡暖菱寒芡開レ花向レ日菱



弘景曰仙方取此合蓮實餌之甚益人恭曰作粉食益人勝于蔆也頌曰取其實及中子擣爛暴乾再擣篩末熬金櫻子煎和丸服之云補下益人謂之水陸丹時珍曰案孫升談圃云芡本不益人而俗謂之水流黃何也蓋人之食芡必咀嚼之終日囁囁而芡味甘平腴而不胒食之者能使華液流通轉相灌溉其功勝于乳石也淮南子云貍頭愈瘊雞頭已瘻註者云卽芡實也

又云附方（舊一新三）雞頭粥益精氣强志意利耳目雞頭實三合煮熟去殼粳米一合煮粥日々空心食

玉鎖丹治精氣虛滑用芡實蓮莖方見藕節下

四精丸治思慮色慾過度損傷心氣小便數遺精用秋石白茯苓芡實蓮肉各二兩爲末蒸棗和丸梧子大毎服三十丸空心鹽湯送下（永類方）分清丸治濁病用芡實粉白茯苓粉黃蠟化蜜和丸梧桐子大毎服百丸鹽湯下（摘玄方）

又云雞頭菜卽蔿菜也（芡莖）氣味鹹甘平無毒主治止渴除虛熱生熟皆宜（時珍）

又云根氣味（同莖）主治小腹結氣痛煮食之（士良）

又云附方（新一）偏墜氣塊雞頭根切片煮熟鹽醋食之法天生意

救荒本草云雞頭實一名芡實一名雁喙實幽州人謂之雁頭今處々有之生澤中葉大如荷而皺背紫有刺俗謂雞頭盤花下結實形類雞頭故以名之中有子如皂莢子大艾褐色其近根莖蔌（音耿）嫩者名蔫（音肇）蔌人採以爲菜茹實味甘性平無毒

救飢　採嫩根莖食實熟採實剝人食之蒸過烈日晒之其皮卽開舂去皮搗碎爲粉蒸煠作餅皆可食多食不益脾胃氣兼難消化生食動風冷氣與小兒食不能長大故駐年耳

又野譜補遺云雞頭根食根生水中夏秋取之煮熟油鹽拌食　采雞頭淸波渺々搖輕舟年々采得如琳球玳筵羅列陳珍饈年來穀貴雞頭夌但采雞頭根濟餒

祕傳花鏡云芡一名雞頭一名雁喙一名蔦子葉似荷而大上有蹙衂如沸面靑背紫莖葉皆有芒刺平舖水上五六月開紫花花下結房有刺如蝟上有嘴如雞雁頭狀實藏其中去殼肉圓白如珠秋間收老子以蒲包包浸水中二三月撒淺水中待葉浮面上方可移栽深水芡花小而向日開同葵之性

先一瓣ヲ開キ鳥ノ喙ヲ開クガ如シ日中ニ至リテ滿開ス暮ニ至レバ萎ミテ鳥喙ノ如シカクノ如キコト數日滿開スル時ハ四瓣ニシテ四層深紫色外瓣ハ深綠色卽蔕ナリ花終テ後蔕落ズシテ梂上ニアリ梂漸ク大ニシテ三寸許リ熟スレバ內ニ柔肉アリ肉中ニ圓子アリ大サ無患子（ムクロジ）ノ如シ外皮淡黑色乾ク時ハ灰色トナル內ニ白仁アリ此子卽芡實ナリ雞頭ノ大サニ丸ズト方書ニアルハコノ大サヲ云ナリ又石榴（ザクロ）子ノ如キ白子モ雜レリコレハ未レ熟セザル者ナリコノ根形蓮藕ニ同ジ唐山ニテハ嫩莖ヲ採リ食フ藕梢菜ト名ク正字通ニ出ヅ

周禮（天官籩人）云加籩之實蔆芡㮚脯蔆芡㮚脯
加籩謂ニ尸既食一后亞獻レ尸所レ加之籩重言レ之者以ニ四物一爲ニ八籩一蔆芰也芡雞頭也栗與饋食同鄭司農云蔆芡脯脩○蔆音陵芡音險㮚古栗字重直用反芰其寄反

本草綱目云芡實別錄曰雞頭實生ニ雷澤池澤一八月采レ之保昇曰苗生ニ水中一葉大如レ荷皺而有レ刺花子若ニ拳大一形佀ニ雞頭一實若ニ石榴一其皮青黑肉白如ニ蔆米一也頌曰處々有レ之生ニ水澤中一其葉俗名ニ雞頭盤一花下結レ實其莖嫩者名ニ蔿蔽一亦名ニ蓰菜一人采爲ニ蔬茹一宗奭曰天下皆有レ之臨水居人采レ子去レ皮擣レ仁爲レ粉蒸煠作レ餅可ニ以代一レ糧時珍曰芡莖三月生レ葉貼レ水大ニ于荷葉一皺文如レ縠蹙衄如レ沸面青背紫莖葉皆有レ刺其莖長至ニ丈餘一中亦有レ孔有レ絲嫩者剝レ皮可レ食五六月生ニ紫花一々開向レ日結レ苞外有ニ青刺一如ニ蝟刺及栗毬之形一花在レ苞頂亦如ニ雞喙及蝟喙一剝開內有ニ斑駁軟肉一裹レ子累々如ニ珠璣一殼內白米狀如ニ魚目一深秋老時澤農廣收爛取ニ芡子一藏至ニ囷石一以備ニ歉荒一其根狀如ニ三稜一煮食如レ芋

又云修治詵曰凡用蒸熟烈日晒裂取レ仁亦可ニ春取レ粉用一時珍曰新者煮食良入ニ澀精藥一連殼用亦可案陳彥和暇日記云芡實一斗以ニ防風四兩一煎湯浸過用且經レ久不レ壞

又云氣味甘平濇無レ毒

弘景曰小兒多食令レ不レ長詵曰生食多動ニ風冷氣一宗奭曰食多不レ益ニ脾胃兼難ニ消化一

又云主治濕痺腰脊膝痛補レ中除ニ暴疾一益ニ精氣一强レ志令ニ耳目聰明一久服輕レ身不レ饑耐レ老神仙（本經）開レ胃助レ氣（日華）止レ渴益レ腎治ニ小便不レ禁遺精白濁帶下一（時珍）

發明

ト名ヅク花下ニ實ヲ結ブ其莖嫩キヲ蔿ト名ヅク又葰菜ト名ヅク人コレヲトリテ蔬茹ニス其子ヲトリ皮ヲサリ仁ヲツキ粉ニシテムシ乾シテ餅ニス糧ニ代フベシ李時珍ガ曰芡莖三月ニ葉ヲ生ズシバミテ縠ノ如シ蹙衄（シクヂク）トシテ沸カゴトシ面アラク背紫ニ莖葉ミナ刺アリソノ莖長キハ丈餘ニ至ルソノ中ニ孔アリ絲スヂノ如シ嫩キハ皮ヲハギテ食スベシ五六月ニ紫花ヲ開キテ日ニムカフ苞ヲムスブ外ニ青刺アリ蝟刺栗毬ノ如シ花ハ苞頂ニアリ雞喙蝟喙ノ如シ剝ヒラケバ内ニ斑ナル軟肉アリ子ヲツヽミテ累々トシテ珠ノ如シ殼内ノ白米ハ魚目ノ如シ七月八月ニ澤農廣クオサメトリテ以テ荒歉ニ備フ其根ノ形三稜ノ如シ煮テ食シテ芋ノ如シ○元升曰芡莖ハ水ノ淺深ニ隨テ長ジテ水上ニ浮ブ廣クシテ圓ニシハミテ色青シ葉莖トモニ刺アリ和名ミツブキ西國民間ニ又オニハスト云莖ノ嫩キヲ蔬茹ニシテ食ス

又云芡實味甘性平澁毒ナシ濕痺腰脊膝痛ヲ主ル中ヲ補ヒ暴疾ヲ除キ精氣ヲマシ志ヲ強クシ耳目ヲ聰明ニシ久服スレバ身ヲ輕クシ飢エス老ニタヘテ神仙ナリ粉ニシテ食スレバ甚ダ益アリ仙方ニ蓮實ト合テ餌ニ作リ食スレバヨク華液流通シテ轉タ相灌漑ス其功乳石ニ勝レリ故ニ又コレヲ水流黄ト稱ス

本草一家言云雞頭實味甘平生二溼痺腰脊膝痛一補レ中除二暴疾一益二精氣一強レ志令二耳目聰明一久服輕レ身不レ耐レ老神仙一名雁喙實生二池澤一名醫曰一名芡生二雷澤一八月采レ之案說文云芡雞頭也廣雅云葰芡雞頭也周禮籩人加籩之實芡鄭玄云芡雞頭也方言云葰芡雞頭也北燕謂二之葰一青徐淮泗之間謂二之芡一南楚江湘之間謂二之雞頭一或謂二之雁頭一或謂二之烏頭一淮南子說山訓云雞頭已レ瘻高誘云水中芡幽州謂二之雁頭一古今注云葉似レ荷而大葉上蹙縐如レ沸實有二芒刺一其中有レ米可二以度一レ飢卽今蔿子也

本草綱目啓蒙云芡實池澤中ニ多シ葉ハ蓮ニ似テ大ナリ水面ニ浮生ス面深綠色ニシテ光リアリ刺多クシテ皺アリ背ハ深紫色ニシテ芋葉ノ如キ綠色ノ粗ナル文脈アリテ刺多シ莖ヲ切レバ穴アリテ蓮莖ニ同シ皮ニ紫刺多シ水多キ年ニハ莖甚長シ時珍ノ其莖丈餘ト云モノナリ水少キ年ハ莖短シ六月別ニ莖ヲ抽テ水上ニ出テ一花ヲ開ク形鳥ノ喙ノ如シ長サ一寸餘末尖ル故ニ雁喙ノ名アリ花下ニ刺梂（イガ）アリテ拳ノ如シソノ花始

レ圓にして四孔は大にて四孔の外の小孔は殊に小くして針穴の如し蓮莖は莖中に穴ありてめぐりに有穴も同じ大さなり肉なくして硬く食ふべからずみつぶきの莖は肉多くして軟なる故肥ても葉たゝずして浮生ず蓮は一葉一花を生ずれどもみつぶきは葉よりも花多く生して早く生ぜしは實となりても未だ開かざる花もありて盛久しき物なり黄花は日に向て開き菱花は日にそむきて開くといひ周禮にも菱芡といひ事文類聚にも菱に附して芡を載佩文齋詠物詩選にも菱芡一類として菱の詩十二三首を載尤菱は采菱歌もあり芡の詩も五六首ありと雖も事文類聚に載る所多くして載ざるは文同與可の采芡の七言古一首なり

本草和名云鷄頭實（陶景注曰上華似二鷄冠一故以名レ之）一名鴈喙實（仁諝許穢反）一名芡（仁諝音儉）一名蔦子（楊玄操音于軌反出二陶景注一）一名蓓（音匹扶反出二崔禹一）一名葰（玉篇楊葉反唐韵羊捶反）一名鴈頭（已上二名出二疏文一）一名陰腹腸一名天門精一名天禹一名曜（已上出二大清經一）一名天川虫（出二神仙服餌方一）和名美都布々岐乃美

和名本草云雞頭實

味甘平无レ毒和ミツブキ八月採レ之有レ刺花下結レ實

○美都布々岐乃美

和名類聚鈔云芡爾雅注云芡（音儉和名三豆布々木）一名雞頭草其實似二鳥頭一故以名レ之

和漢三才圖會云芡生二池澤一三月生レ葉貼レ水大ニ于荷葉一皺文如レ縠蹙衂如レ沸面青背紫莖葉皆有レ刺其莖長至二丈餘一中有レ孔有レ絲嫩者名蔿菆（一名蒍菜）剝レ皮可レ食五六月生二紫花一花開向レ日結苞外有二青刺一如二蝟及栗毬之形一花在二苞頂一亦如二雞啄及蝟喙一剝二開肉一有二斑駁軟肉一裹レ子累々如二珠璣一殼内白米狀如二魚目一取收食其根狀如二三稜一煮食如レ芋

又云按芡生二池澤一狀似レ蕗故俗名二水蕗一似レ蕗而生二山谷一者曰二欵冬一俗名二山蕗一（今名二豆和一者也）牛蒡似レ蕗而葉大故和名曰二馬蕗一（牟末布布木）皆以二和名一可レ辨

大和本草云芡實葉ハ蓮ニ似テ大ニシテ葉水上ニウカビ皺アリハリアリ實ハ莖上ニアリ苞ノ形雞頭ノ如シ故ニ雞頭實ト云苞アリテツヽメリ其内ニ實數十顆アリマルシ實ノ内白クシテ抹スレバ采粉ノ如ク味モ亦甘美ナリ藥トシ食トス毒ナク性ヨシ凶飢ヲ助ク池塘ニ多クウユベシ莖ノ内ニアナアリ絲アリワカキ時皮ヲ去テ食フベシ根ハ煮テ食フ芋ノ如シ

庖厨和名本草云芡實倭名鈔ニミツブキ多識篇オナシ

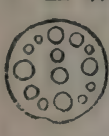
考二本草一一名雞頭水澤ノ中ニ生ズ其葉ヲ俗ニ雞頭盤

古今要覽稿卷第四百六十

●草木部 水草

みづふゝき 芡

みづふゝきは今みづふきともいひ俗稱をおにはすといひ古は實を稱してみづふゝきのみといふを今芡實といひ漢名を芡といふ又一名雞頭一名雁喙一名雁頭一名鴻頭一名雞雍一名卯蔆一名蔿子一名水流黃は皇國固有の種にして本草和名和名本草和名類聚鈔にも見ゆれども歌に詠せしはなし池澤流水の中に生じ花も六月より開き七月殊に盛にしてを後るゝは八月に至る盛長く愛すべき花なれども莖葉ともに刺の多きを惡みておにはすげどういばらはすと呼て惡稱を付れども神農本經上品の藥にして周禮天官籩人にも蔆芡栗脯といひ本草綱目には蓮藕芰實芡實と次第して水果類にのせたり浮草の類を出せば芰の條下にあてさてみづふゝきの葉大なるは車輪の如くになれども立ことあたはずして水上に浮べば是又うき草中の巨大なる物なり其形狀は本草綱目啓蒙に詳なり唐山にては嫩莖を採り食ふ藕梢菜と名く正字通に出るといへるは本草綱目芡實條下にいふ雞頭菜卽蔿菜芡莖也といひて其氣味鹹甘平無毒といひ主治も止渴除虛熱生熟皆宜と見ゆれば生にても食ふべしふきは苦味あれどもみつふきは苦味なくして味よし莖にも刺あれども皮を剝は皮に刺付てとれり尤蘭山の藕梢菜といふといへるは本草の外に出る名なればのするなり又葉の背深紫色にして芋葉の如き綠色の粗なる文脈ありて刺多しといへど芋葉に比すべきにあらずみつふきの葉は表は皺文のみにて葉筋は見えず唯皺文の中に直なる一條の見ゆるのみなり背をみれば卽中の一條直に通り枝莖を出し又三條づゝ左右に出て八條の枝莖より多く小枝莖を生じて葉中に縱橫せり葉莖は八條の枝莖の中央に附此八條の枝莖八方へ別れし所の莖は四角にして幅二分厚さ五分計にて障子の骨に似たり故に紫色の葉は凹にして莖のみ目に立なり此莖も黃褐にして綠色ならず花莖葉莖ともに黃褐なり又



其莖を切れば穴ありて蓮莖に同じといへどもみつふきの莖の孔は如

○釋名

ひし

ひしは皇國固有の種にて日本書紀應神天皇の條にもひしからと見え萬葉集に君かためうきめの池のひしとるといひ又豐國のきくの池なる菱のうれをなど詠り本草和名和名本草和名類聚鈔藻鹽草にも見えて大古より今に方言もなく通稱なり

菱實（音妓）

○別錄上品

稜（別錄）水栗（風俗通）

沙角

時珍曰其葉支散故字從レ支其角稜峭故謂ニ之蔆ー而俗呼爲ニ蔆角ー也昔人多不ニ分別ー惟王安貧武陵記以ニ三角四角者ー爲レ菱兩角者爲レ蔆左傳屈到嗜レ芰卽此物也爾雅謂ニ之蕨攈ー音眉又許愼說文云蔆楚謂ニ之芰ー秦謂ニ之薢茩ー楊氏丹鉛錄以レ芰爲ニ雞頭ー引ニ離騷ー緝ニ芰荷ー以爲レ衣言蔆葉不レ可レ緝レ衣皆誤矣案爾雅薢茩乃決明之名非ニ蕨攈ー也又埤雅芰荷乃藕上出レ水生花之莖非ニ雞頭ー也與レ蔆同名異物許楊二氏失ニ于詳攷ー故正レ之○已上說本草綱目

翻雞（事物異名）　紫角　子陵　胡速兒（共同上蒙古名）　菱角（本經逢原）　水菱（本草蒙筌）　蟾蜍股（事物紺珠）　未栗實（鄉藥本草）　菱栗（村家方）　花一名水客（事物紺珠）　穿萍（名物法言）

○已上本草綱目啓蒙所レ載

　　　　　河原甚三郎源滿忠
校正兼鈔錄　吉田吉藏源元來
編修兼校正　日吉偉三郎源德夫
編修兼淨寫　若菜三男三郎藤原信孝
校正兼圖畫　中山新吾平秀元
校正兼淨寫　松村榮輔藤原直好
編修兼校正　梅田小太郎源義禮
　　　　　南條正之助藤原近行
　　　　　栗山兵左衞門藤原定興
校正兼淨寫　林源三郎源高典
校正兼鈔錄　山下官左衞門源正房
校正兼淨寫　橋本太刀允藤原好春
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
編修兼校正　大河戶晉平藤原儀成
總　　判　屋代次郎源通賢

菱荇沼　　宋　薛　濤

水荇斜牽綠藻浮、柳絲和レ葉臥ニ清流一、何時得下向ニ谿頭一賞上、旋ニ摘菱花一旋ニ泛舟一

菱渚　　宋　林　逋

含レ機絲錦翻ニ新葉一、滿レ篋青銅瑩古花、最愛晩來鷗與レ鷺、宿煙翹雨便爲レ家

菱沼　　宋　楊　萬　里

柄似ニ蟾蜍一股樣肥、葉如ニ蝴蝶一翼相差、蟾蜍翹立蝶飛起、便是菱花著レ子時、

和歌

萬葉集卷第七 覊旅歌

君爲浮沼池菱採我染袖沾在哉（キミガタメウキヌノイケノヒシトルトワガソメシソデヌレニケルカモ）

右柿本朝臣人麿歌

又卷第十六 有由縁雜歌

豐前國白水郎歌一首

豐國企玖乃池奈流菱之宇禮乎採跡也妹之御袖所沾計武（トヨクニノキクノイケナルヒシノウレヲツムトヤイモガミソデヌレケム）

古今六帖

ひし　　人　ま　ろ

あすへては心細見の池に生る
　ひしの下根のなかれこそすれ

新撰六帖

ひし　　衣笠内大臣家良公

水艸ゐる入江のひしの蔓絶す
　この世を深くおもふはかなさ　　前藤大納言爲家

いかにして池のひしつるうき事は
　はしめもはても思ひわくへき　　九條三位入道知家

いかにせん人しれぬまのみこもりに
　ひしの下根の絶ぬ歎きを　　左京大夫行家

みさひ交るひしの浮蔓とに角に
　みたれて夏の池さひにけり　　右大辨入道光俊

古さとの池におりたちとるひしの
　すみきひしくはなき身也けり

夫木和歌集卷第二十八 雜部十

ふなはたを敲くも淋し宵の間に　　爲頼
　ひしとる船やさとに歸らん

破二輕浪一、長鬟弱袂披二參差一、釵影釧文浮蕩漾、笑語哇咬顧二晩暉一、蓼花綠岸扣レ舷歸、歸來共到二市橋一步、野蔓繫レ船萍滿レ衣、家々竹樓臨二廣陌一、下有二連檣一多估レ客、攜レ觴薦レ芰夜經過、醉踏二大隄一相應歌、屈平祠下沅湘水、月照二寒波一白煙起、一曲南音此地聞、長安北望三千里、

採菱圖　明杜瓊

碧谿秋高水初落、菱花已老菱生レ角、紅裙綠髻誰家人、小艇如レ梭不二停泊一、三々兩々共采レ菱、纖々十指寒如レ冰、不レ怕指寒并刺損、只恐歸レ家無二斗升一、湖州人家風俗美、男解二耕田一女絲レ枲、採菱郎是採桑人、又與家中助二生理一、落二日青山一斂二暮煙一、湖波十里鏡中天、清歌一曲循二歸路一、不レ似二耶谿一唱二採蓮一、

五言律

菱　唐李嶠

鉅野韶光暮、東平春溜通、影搖二江浦月一、香引二棹歌風一、日色翻二池上一、潭花發二鏡中一、五湖多二賞樂一、千里望難レ窮、

五言絶句

江行　唐錢起

細竹漁家路、斜陽看レ結レ罾、喜來邀レ客坐、分與折腰菱、

菱　宋梅堯臣

紫角菱實肥、青銅菱葉老、孤根未レ能レ定、不レ及二寒塘草一

采菱舟　宋朱子

湖平秋水碧、桂棹木蘭舟、一曲菱歌晩、驚飛欲レ下鷗、

過高郵射陽湖雜詠　元薩都刺

霜落大湖淺、漁家懸二破罾一、此時生計別、小艇賣二秋菱一

題谿樓　元余闕

谿水綠悠々、高樓在二谿上一、日暮望二江南一、舟中採菱唱、

六言絶句

望亭飯僧作　明僧洪恩

隔レ岸長松疎柳、雙谿一片湖光、夜聽二漁舟共語一、風吹菱芡時香、

七言絶句

看采菱　唐白居易

菱池如レ鏡淨無レ波、白點花稀靑角多、時唱一聲新水調、謾人道是采菱歌、

栗。

又云菱米同上不知種所自出植於旱山不假耒耜不事灌漑逮秋自熟粒米粗糲

又云倒生菱莖如亂絲一花十葉根浮水上實沉泥裡泥如紫色謂之泥泥菱食之令人不老

又云翻雞菱玄都有菱碧色狀如雞飛、名翻雞菱仙人鳧伯子常採之

祕傳花鏡云蔆花蔆一名蘚苔與菱本一類俱其實之角有不同四角三角曰菱兩角曰蔆又兩角而小曰沙角其葉似荇扁而有尖光面如鏡一莖一葉兩兩相差如蝶翅狀叢生成團花有黃白二色背日而開晝舒夜炕隨月轉移猶葵花之隨日也實有紅綠二種又有早出而鮮嫩者名水紅菱遲熟而甘肥者名餛飩蔆種法重陽後收最老者烏蔆至二月盡發芽撒入水中著泥卽生若有萍荇相雜須速撈去則蔆出始茂一種最小而四角有刺者曰刺蔆野生非人所植花紫色人曝其實以爲蔆米可以點茶池塘內若欲澆糞用粗大毛竹打通其節貯肥於內注之水底若以手種者能令其實深入泥中再灌以肥未有不盛者也昔漢昆明池有浮根蔆其沒水下蔆出上又玄都有雞翔蔆碧色狀如雞飛仙人鳧伯子甞食之

詩

佩文齋詠物詩選菱芡類

五言古

採菱曲　梁　簡文帝

菱花落復含、桑女罷新蠶、桂棹浮星艇、徘徊蓮葉南

採菱曲　梁　陸罩

參差雜荇枝、田々競荷密、轉葉任香風、舒花影流日、戲鳥波中蕩、游魚菱下出、不與文王嗜、羞持比萍實

采菱詞　唐　儲光義

濁水菱葉肥、淸水菱葉鮮、義不遊濁水、志士多苦言、潮沒具區藪、潦深雲夢田、朝隨北風去、暮逐南風旋、浦口多漁家、相與邀我船、飯稻以終日、羹蓴將永年、方冬水物窮、又欲休山樊、盡室相隨從、所貴無憂患、

七言古

采菱行　唐　劉禹錫

白馬湖平秋日光、紫鱗如錦綵鴛翔、蕩舟游女滿中央、采菱不顧馬上郎、爭多逐勝紛相向、時轉蘭橈

面如レ鏡葉下之莖有レ股如二蝦股一一莖一葉兩々相差如二蝶翅狀一五六月開二小白花一背レ日而生晝合宵炕隨レ月轉移其實有二數種一或三角四角或兩角無角野蔆自ヨ生湖中一葉實俱小其角硬直刺レ人其色嫩青老黑嫩時剝食甘美老則蒸煮食レ之野人暴乾剝米爲レ飯爲レ粥爲レ餻爲レ果皆可レ代レ糧其莖亦可二暴收一和レ米作レ飯以度二荒歉一蓋澤農有利之物也家蔆種二于陂塘一葉實俱大角㬮而脆亦有下兩角彎卷如二弓形一者上其色有レ青有レ紅有レ紫嫩時剝食皮脆肉美蓋佳果也老則殼黑而硬墜二入江中一謂二之烏蔆一冬月取レ之風乾爲レ米生熟皆佳夏月以二糞水一澆二其葉一則實更肥美案段成式酉陽雜俎云蘇州折腰蔆葉兩角荊州郢城蔆三角無レ刺可二以挼莎一漢武帝昆明池有二浮根蔆一亦曰二青水蔆一葉沒二水下一蔆出二水上一或云玄都有二雞翔蔆一碧色狀如二雞飛一仙人鳧伯子常食レ之

又云氣味甘平無毒詵曰生食性冷利多食傷二人臟腑一損二陽氣一痿レ莖生二蟯蟲一水族中此物最不レ治レ病若過食腹脹者可二暖薑酒服レ之即消亦可レ含二呉茱萸一嚥津時珍曰仇池筆記言蔆花開背レ日芡花開向レ日故蔆寒而芡暖別錄言芰實性平豈生者性冷而乾者則性平與

又云主治安中補五臟不レ饑輕レ身別錄蒸暴和レ蜜餌レ之斷レ穀長生弘景解二丹石毒一蘇頌解レ暑解二傷寒積熱一止二消渴一解二酒毒射罔毒一時珍擣爛澄粉食補中延年臞仙

芰花氣味濇主治入二染鬚髮方一時珍

烏蔆殼主治入二染鬚髮方一亦止二泄痢一時珍

救荒本草云蔆角本草名二芰音伎實一一名蔆音陵處々有レ之拖レ蔓生レ葉浮二水上一三尖鋸齒葉開二黃白花一々落而實生實有二二種一一種四角一種兩角兩角中又有二嫩皮而紫色者一謂二之浮蔆一食レ之尤美味甘性平無レ毒一云性冷

又云救飢採二蔆角鮮大一者去レ殼生食殼老及雜小者煮熟食或晒二其實一火燔以爲レ米充レ糧作レ粉極白潤宜レ人服食家蒸暴蜜和餌レ之斷レ穀長生又云雜白蜜食令二人生レ蟲一云多食臟冷損二陽氣一痿レ莖腹脹滿薑酒飲或含二呉茱萸一嚥二津液一即消

治病　文具二本草果部芰實條下一

又野譜云菱科食二莖葉一夏秋采熟食

采二菱科一采二菱科一小舟日々臨二清波一菱料采得餘幾何竟無三人唱二采菱歌一風流無二復越溪女一但采二菱科一救二飢餒一

華夷珍玩考云武陵記兩角曰レ菱三角四角芰通謂二之水

ヲ利ス

○風菱

一名折腰菱カタチ弓ノゴトシ老タルヲ取殻ヲサリ風ニ乾コレヲ菱米ト云

味甘性平毒ナシ中ヲ安ジ五臓ヲ補フ

○烏菱

兩角ニテ形折腰菱ト似タリ略小シテ色クロシ煤炭ノ如シ内ノ肉白シトイヘドモヤヽ青黒シ冬盡ルトキ汚泥ノ中ヨリホリオコシトル熟シテ食スレバ甚香美ナリ

味甘性平毒ナシ功ハ風菱ト同ジ

和訓栞云ひし菱子を訓ぜり蒺蔾もよめり鰭蔆(ヒレシ)の義なるべしひし蔓ともいへり菱に兩種あり小なるを黑菱といふ稜硬して人を刺す大なるは稜脆し三河國岩堀の菱は二稜なりといへり

本草綱目啓蒙云芰實水澤中ニ多ク生ズ根水底ニアリテ葉ハ水面ニ叢生ス形扁シテ蛺蝶ノ翅ノ如シ夏花ヲ開キ實ヲ結フ形三角四角或ハ兩角アリソノ角皆尖リテ人ヲ刺ス初綠色秋ニ至リ熟スレバ黑色煮テ白肉ヲ採リ食フコレヲユデヒシト云フ時珍ノ說ニ野菱家菱ノ別アリ形小ナルモノハ野菱ナリ形大ナルモノハ家菱ナリ唐山ニハ品類多キ事汝南圃史ニ見エタリ

山陰志云越人謂二小者一爲二刺菱一巨者爲二大菱一四角者爲二沙角菱一松江府志云菱湖泖及人家多種レ之有二青紅者一最早七月初有之名二水紅菱一稍遲而大曰二雁來紅一曰鸚歌青々而大者曰二餛飩菱一極大者曰二蝙蝠菱一其最小者曰二野菱一吳郡志云折腰菱唐時甚貴レ之今名二腰菱一有二野菱家菱二種一近世復出二餛飩菱一最甘香腰菱賤矣蘇州志云折腰菱多兩角乾レ之曰二風菱一近又有二軟尖花蔕二種一

爾雅釋草云蔆蕨攈注蔆今水中芰○蔆音淩攈音眉疏蔆一名蕨攈郭云蔆今水中芰者字林云楚人名レ蔆曰レ芰可レ食國語曰屈到嗜レ芰俗云蔆角是也

本草綱目云芰實弘景曰廬江間最多皆取火燔以爲レ米充レ糧今多蒸暴食レ之頌曰蔆處々有レ之葉浮二水上一花黄白色花落而實生漸向二水中一乃熟有實二二種一一種四角一種兩角兩角中又有二嫩皮一而紫色者謂二之浮蔆一食レ之尤美江淮及山東人暴二其實一以爲レ米代レ糧時珍曰芰蔆有二湖濼處一則有レ之蔆落二泥中一最易二生發一有二野蔆家蔆一皆三月生レ蔓延引葉浮二水上一扁而有レ尖光

紫灰一以入二香爐一能保レ火故人以爲レ珍焉

東雅云菱ヒシ此もの丶名は仁德天皇の御歌にも既に見えたれども其義のごときは詳ならず

古語には刀をばヒといひけり此もの丶實核角ある事の刀に似たればこの名ありけるにやさらばシといひしは詞助なり魚をとる器にヒシといふもの丶あるは此物によりて名づけいひしと見えたり

大和本草云菱實一名蔆又作レ菱水中ニ生ズ實四角三角兩角アリ果トス生ニテモ蒸テモ食フ飢ヲ助ク河內州茨田ノ池ニ多シ花黃白色八九月實ヲトル性不レ好トイヘドモ凶年ニ民ノ飢ヲ救ソ古人コレヲ用テ飢饉ヲ救シ事合璧事類ニ多ク引ケリ

和漢三才圖會云菱和名ひし無角者名二三河菱一蔆落二泥中一最易レ生云々野人暴乾剁レ米爲レ飯爲レ粥爲レ餻爲レ果可レ代レ糧其莖亦可二暴收一和レ米作レ飯以度二荒歉一蓋澤農有利之物也云々家蔆種二于陂塘一云々老則殼黑而硬墜二入江中一謂二之烏蔆一冬月取レ之風乾爲レ果生熟皆佳夏月以二糞水一澆二其葉一則實更肥美凡蔆花開皆背レ日黃花開向レ日故蔆寒而芡暖

庖厨備用和名本草云菱實和名鈔ニヒシ菱字ヲ用フ多識篇同ジ考二本草一一名蔆三角四角ノモノヲ蔆トス兩角ノモノヲ菱トス蔆ハ泥中ニヲチテ尤生ジ易シ云々菱實味甘性寒毒ナシ中ヲ安シ五臟ヲ飢サズ身ヲカロクシ丹石ノ毒ヲケシ暑ヲ解シ消渴ヲトヾメ酒毒射罔ヲ解スツキクタラシ水ニ澄シ粉ヲトリテ食スレバ中ヲ補ナヒテ延年ナリ

○水紅菱

兩角ニテ色紅ナリ五六月ニ盛ナリワカキトキ果ニ食ス最モヨシ

○雁來紅

四角ニテ色紅ナリ八月雁來ル時熟ス故ニ比名アリ

已上三種性味功用オナジ

○沙角蔆　家ニ種スルモノ兩角ニテ光滑柔軟ナリ

味甘香シ性冷毒ナシ中ヲ補ナヒ飢ズ曝シ乾シテ屑ニヒキテ米ニ和シ飯ニシテ食ス

○餛飩蔆

形ノ圓ナルニヨリテ名ヅク兩角四角ノモノモ間々アリ色青クシテ大ナリムシ食テヨシ

味甘性平毒ナシ五臟ヲ補フ飢ズ顏色ヲヨクシ大小腸

一つ實のつきたるあり此實も兩角にて上の方に角ありて小にして美なれば其實より莖葉を生じて染たるを其まゝ圖せしが岩崎常正圖せし内にもかくのごときは見えねばひしの類も盡すべからず又市中にてひきてあきなふひしに角の先尖らずして丸きもあれば三角の種もあるべし三角は蘭山の說にも先の尖らずじて丸きとひめひしのことはいはず尤西土に品類の多きことはいへども詳にはのべす彼水菱雁來紅といひて雁來紅は四角にて色紅なり八月雁來る時熟すといひ水紅菱は兩角にて紅色五六月に盛なりなどいへるも詳ならず又餛飩菱は形圓なるによりて名くといへるも詳ならず又無角の種もありといへり無角を餛飩蔆といへる歟いまだ詳ならず

日本書紀（應神天皇紀）云十三年秋九月中髪長媛至レ自ニ日向一便安ニ置於桑津邑一云々於レ是大鷦鷯尊蒙ニ御歌一便知レ得レ賜ニ髪長媛一而大悦レ之報歌曰瀰豆多摩蘆豫佐瀰（ミツタマルヨサミ）能伊戒珥奴那波區利破陪鷄區辭羅珥委愚比菟區伽破（ノイケニヌナハクリハヘケクシラニキクヒツクカハ）摩多曳能比辭餓羅能佐辭鷄區辭羅珥阿餓許居呂辭伊（マタエノヒシガラノサシケクシラニアガコヽロシイ）夜于古珥辭氏（ヤウコニシテ）云々

本草和名云菱實（仁諝音寄寄反）一名蔆（揚玄操作レ菱）菰首（仁諝音孤出ニ陶景注一）菱（音馬）一名蕨蘪（音眉）一名猪鼻一名水栗一名薢茩（皆垢二音已上四名出ニ兼名苑一）

和名比之

和名本草云菱實味甘平無毒和ヒシノハ浮水上花黃白色有ニ二種一四角一種兩角一種比之

和名類聚鈔云菱子說文云菱（音陵）秦謂ニ之薢茩一（皆后二音）楚謂ニ之菱ニ（音岐字亦作芰和名比之）

藻塩草云菱ひしつる

ひしのつるたえず共またたちすとも

菱の浮葉

みさひえのひしのうき葉にかくろへてかはつ啼なり夕立のそら云々

本朝食鑑云菱（和名比之今亦同）湖澤處々多有レ之菱子落ニ泥中一最易ニ生發一三月生レ蔓延ニ引葉一浮ニ水上一扁而有レ尖光面如レ鏡葉下之莖有レ股如ニ蝦股一一莖一葉兩々相差如ニ蝶翅狀一五六月開ニ小白花一背レ日而生晝合夜炕隨レ月轉移其實有ニ數種一或三角兩角四角無角嫩青老黑葉實俱小其角硬直刺レ人謂ニ之烏菱一嫩時剝食甘美老則蒸煮食レ之一種々ニ于陂塘一葉實俱大角而大而脆亦有ニ兩角彎卷弩者一其色有ニ青紅紫一此亦與ニ烏菱一同煮熟作レ果野人以爲ニ救荒之具一者也近世取ニ菱殼一燒作ニ

古今要覽稿卷第四百五十九

●草木部 水草

ひし 芰 菱

ひしは古今通稱なり漢名芰一名を蔆といふ此物皇國固有の種にして應仁天皇紀に「みつたまるよさみの池にぬなはくりはへけくしらにゐくひつく河またえのひしからの」とみえ萬葉集にも人麿の歌に「君かためうきぬの池の菱とると」とよみ豐前國の白水郎の「豐國のきくの池なるひしのうれを」と詠し又古今六帖新撰六帖にもひしの歌數首を載たりさてひしは處處の池澤に多く生じて其實に兩角三角四角ありといへども兩角多くして四角は稀なり三角の種は未だ見ず西土には野芰家菱となして家菱は實を植て糞水をそゝぎ肥したるなり野菱といへるは自生の種にして培養せざるなり皇國には野菱のみなれども大なるもあり岩崎常正が天草の産とて寫生せしはこれ雞翔菱にして雞飛のごとく仙人鳧伯子常に食ふといへるは是ならんといへども是又蘭山の松江府志を引て極大者曰二蝙蝠菱一と同物なるべし又殊に小なるをひめひしと呼莖葉ともに小にして其實三分許なり總てひしは實の大小兩角四角にて種々あれども莖葉は異なることなし何れも三月實より長莖を出し莖上に葉を生じて水上に浮ぶ是又浮草にして莖長くして蔓のごとし此蔓よりも又枝蔓出て繁茂せり花は葉間より出て莖の長さ一寸四五分にして四瓣の白花を開き黃蘂あり又黃色ありといへとも未だ見ず早き花は五月末よりも開く先に開きたるは實を結べり花を開きし時は莖細けれども實の長ずるに隨ひて莖も太りて下に垂也初め綠色にて熟するに及び色黑くなりては落るなりひしの花は日に背き晝合して宵月に隨て轉移すといふ說あれども晝開けり是白樂天の詩に菱池如レ鏡淨無レ波、白點花稀青角多といへるは實に盡せりといふべし又ひし三月芽を生ぜし比うるはしく染るあり江都金杉西藏院に池ありて白蓮あり三月中旬の頃是を見しに未だ蓮は浮葉も出ざるに水上に鮮紅の葉多く見ゆればあやしく思ひて池の邊に寄見れば菱の葉の染たるなり彼染し菱の葉を乞て圖せしがそれに

付水葵澤葵のごとき皆葉の形狀葵に似たるを以て名付たり

莕（爾雅唐本草作ニ莕菜ー） 鳧水（唐本） 水葵（馬融傳） 水鏡草（土宿本草） 醫子

菜（野菜譜） 金蓮子 接余

○時珍曰按爾雅云莕接余也其葉荇則鳧葵當レ作ニ荇葵ー古文通用耳或云鳧喜食レ之故稱ニ鳧葵ー亦通其性滑如レ葵其葉頗似レ莕故曰レ葵曰レ莕詩經作レ荇俗呼ニ荇絲菜ー北人謂ニ之莕公鬚ー淮人謂ニ之醫子菜ー江東謂ニ之金蓮子ー許氏說文謂ニ之𦺇ー音戀楚詞謂ニ之屏風ー云ニ紫莖ー屏風文綠波是矣已上本草綱目

蘅（正字通） 澤葵（陸璣集解） 金蓮兒（救荒本草） 藕蔬菜（同上） 綳𦾔（瑯琊代醉）

翠帶（名物法言） 公鬚（同上） 接餘（說文） 萎餘（埤雅）

葉、盡裏中當時醒酒鯖、上

次二余仲庸松風閣韻一

宋裘　萬頃

已著二遺經一洗二此心一、更尋二流水一濯二吾襟一、經ㇾ旬不ㇾ涉谿邊路、荇帶二苔錢一如ㇾ許深

水荇　明彭　紹　賢

泉分二石竇一瀉二珠光一、坐挹磯邊水荇香、何處歌聲最幽宛、臨ㇾ流那復羨二滄浪一、

五言絶句

江行　唐錢　起

幽思正遲々、沙邊濯弄時、自憐非二博物一、猶未ㇾ識二鳧葵一、

古今六帖

あさゝ

みるからに思ひますたの池におふる
あさゝの浮て世をはへよとや

新撰六帖

あさゝ　衣笠内大臣家良公

水まさる沼のあさゝのうきてのみ
あるは有ともなき我身かな

池水に生てふ草のあさゝのみ　前大納言藤爲家
うきはならひとぬらす袖哉

おもふこと底ふかゝらぬうきねより　九條三位入道知家
心あさゝのさてそおひぬる

みれは又あさゝ生てふ澤水は　左京大夫行家
底の心のねをやあらはす．

右大辨入道光俊

君といへは生るあさゝの池水に
うき〳〵とのみなるこゝろ哉

按に藻塩草淺砂の條新撰六帖の和歌のみを引て別になければこゝに省けり

〇釋名

あさゝ（本草和名和名本草　和名類聚鈔多識編）

〇按に古今通名なれどもあさゝの義つまびらかならず源君美はアサ、とはアサ、キなり淺水に生じて花さくをいへりと或人の說なり萬葉集抄に重就といふものゝごとくアサアサといふに似たり水淺き所にあるの義なりけんもしるべからずといへり又鳧葵はかもといふ鳥此あさゝを好み食ふ故に名

各爲レ末同二菜根一以レ水一鍾浸二宿去レ滓一日點數
次七日見レ効也　孫氏集効方

救荒本草云荇絲菜又名二金蓮兒一一名藕蔬菜水中拖レ蔓而生葉似二初生小荷葉一近レ莖有二椏劐一（音鴉藿）葉浮二水上一葉中擷レ莖上開二金黄花一其莖味微甜酸無レ毒
救飢　採二嫩苗一煠熟油鹽調食

祕傳花鏡云鳧葵一名荇菜一名金蓮花處々有レ之葉紫赤色形似レ蓴而微尖長徑寸餘浮二於水面一莖白色根大如二釵股一長短隨二水淺深一夏月開二黄花一亦有二白花者一實如二棠梨一中有二細子一入レ藥用

群芳譜云荇菜一名莕菜一名鳧葵一名莕公鬚一名荇絲菜一名水鏡草一名孌一名屏風一名醬子菜一名金蓮子一名接余處々池澤有レ之葉紫赤色形似レ蓴而微尖長徑寸餘浮二挺水面一莖白色根大如二釵股一長短隨二水淺深一夏月開二黄花一亦有二白花者一實大如二棠梨一中有二細子一氣味甘冷無レ毒治二消渇一利二小便一去二諸熱毒火丹遊腫一

典故　爾雅曰莕接余其葉苻叢二生水中一莖如二釵股一葉在二莖端一隨二水淺深一詩曰參差荇菜左右流レ之三相參爲レ參再相差爲レ差言二出之無一左右言二其求レ之無一レ方王文公曰蒌餘惟后妃可レ比焉其德行如レ此可三以比二妾餘草一矣若二蘋蘩一所レ謂餘草舊說藻華白荇華

格致鏡原云荇爾雅莕（同荇）接余葉荇郭註叢二生水中一葉圓在二莖端一長短隨二水深淺一江東人食レ之　陸機詩疏接余白莖葉紫赤色正圓莖寸餘浮在二水上一根在二水底一與二水深淺一等大如二釵股一上青下白鬻二其白莖一以二苦酒一浸レ之脆美可レ食　顏氏家訓荇黄花色如レ蓴可レ用爲二祭祀之俎一　埤雅荇亦名二鳧葵一舊說藻華白荇華黄
群芳譜荇菜一名荇絲菜一名孌一名屏風一名醬子菜一名金蓮菜形似レ蓴而微尖　農田餘話荇菜爛二煮之一其味如レ蜜名曰二荇酥一　留青日札池州人呼レ荇爲二荇公鬚一言二其亂生如レ鬚也　洞冥記且露池有二連錢荇一荇如二錢文一　庶物異名疏武夷君傳緗蘂紫荇也

『此間彩色畫一枚（あさゝ）略之』

詩歌

佩文齋詠物詩選

七言絶句

胥門閒泛　　唐皮日休

靑翰虛徐夏思淸、愁煙漠々荇花平、醉來欲下把二田々

音荇經侍節切疏莕菜一名接余其葉名㆑荇郭云叢㆓生水中㆒葉圓在㆓莖端㆒長短隨㆓水深淺㆒江東食㆑之亦呼爲㆑莕詩周南關雎云參差荇菜是也荇與㆑莕同陸機疏云接余白莖葉紫赤色正圓莖寸餘浮在㆓水上㆒根在㆓水底㆒與㆓水深淺㆒等大如㆓釵股㆒上青下白鬻㆓其白莖㆒以㆓苦酒㆒浸之肥美可㆑案㆑酒

本草綱目（水草類）云莕恭曰鳧葵卽莕菜也生㆓水中㆒頌曰處處池澤有之葉似㆑蓴而莖澀根甚長花黃色郭璞註爾雅云叢㆓生水中㆒葉圓在㆓莖端㆒長短隨㆓水深淺㆒江東人食㆑之陸機詩疏云荇莖白而葉紫赤色正圓徑寸餘浮在㆓水上㆒根在㆓水底㆒大如㆓釵股㆒上青下白可㆓以按㆑酒用㆓苦酒㆒浸㆓其白莖㆒肥美今人不㆑食醫方亦鮮㆑用㆑之時珍曰莕與㆑蓴一類二種也並根連㆓水底㆒葉浮㆓水上㆒其葉似㆓馬蹄㆒而圓者蓴也葉似㆑蓴而微尖長者莕也夏月俱開㆓黃花㆒亦有㆓白花者㆒結㆑實大如㆓棠梨㆒中有㆓細子㆒按寧獻王庚辛玉冊云鳧葵黃花者是莕菜白花者是白蘋卽水鏡草一種泡子名㆓水鼈㆒雖㆑有㆓數種㆒其用一也其莖葉根花並可㆓伏㆑硫煮㆑砂制㆑礬此以㆓花色㆒分㆓別蘋莕㆒似㆓亦未㆑穩詳見㆓蘋下㆒

正誤恭曰鳧葵南人名㆓豬蓴㆒堪㆑食有名未用條中載也志曰鳧葵卽莕菜葉似㆑蓴根極長江南人多食㆑之今云㆓是豬蓴㆒誤矣今以㆓春夏細長肥滑者㆒爲㆓絲蓴㆒至㆑冬粗短者爲㆓豬蓴㆒亦呼爲㆓龜蓴㆒與㆓鳧葵㆒殊不㆓相似㆒也而有名未用類卽無㆓鳧葵豬蓴之名㆒蓋後人刪去也時珍曰楊愼卮言以㆓四葉菜㆒爲㆑莕者亦非也四葉菜乃蘋也

氣味甘冷無毒主治消㆑渴去㆑熱利㆓小便㆒（唐本）擣㆑汁服療㆓寒熱㆒（開寶）擣傅㆓諸腫毒火丹遊腫㆒（時珍）

附方一切癰疽

及瘡癤用莕絲菜或根馬蹄草莖或子卽蓴也各取㆓半碗同苧麻根五寸㆒去㆑皮以㆓石器㆒擣爛傅㆓毒四圍㆒春夏秋日換四五次冬換二三次換時以㆓虀水㆒洗㆑之甚効保生餘錄

穀道生㆑瘡

荇葉擣爛綿裹納㆑之下部日三次范汪方

毒蛇螫傷

牙入㆓肉中㆒痛不㆑可㆑堪者勿㆑令㆓人知㆒私以㆓荇葉㆒覆㆓其上㆒穿以㆑物包之一時折牙自出也肘後方

點㆑眼去㆑瞖

莕絲菜根一錢半擣爛卽葉如㆓馬蹄㆒開㆓黃花㆒者川練子十五箇膽礬七分石決明五錢皂莢一兩海螵蛸二錢

カハホネハ荇菜ト一類ニ非ズ荇菜ト睡蓮ト葉ハ相同シテ花異レリ蓴菜ハ葉ニ切タル處ナシ小蓮葉ノ如シ荇菜睡蓮ノ葉ニハ切レタル處アリ

又云アサヾ池沼ノ中ニ生ズ葉モ花モ萍蓬草ニ似テ別ナリ萍蓬草ハ莖ツヨクシテ水上ニ立ノボリ根地上ニアラハルアサヾハ莖カウホネヨリ長ク水中ニ橫タハリテヨハク葉ハ水面ニウカビ水上ニ不レ上花ノ形色ハカウホネニ似タリ五六月水面ニ黄花ヲヒラク新六帖光俊ノ歌ニ云見レバ「又アサヽオフテフ澤水ノソコノ心ノ根ヲゾアラハス」是アサヾノ根ノアラハルヽヲイヘリ荇菜ヲアサヾト訓ズルハ誤ナリ荇菜ハ根アラハレズ又古歌ニ「水マサル沼ノアサヽノウキテノミアルハ有トモナキ我身哉」コレアサヾノ水ニウカベル事ヲイヘリカウホネノ葉ハ水上ニ立ノボリテ水面ニウカバズ荇菜ヲアサヾト訓シ萍蓬ヲアサヽト云ハ皆非ナリ

東雅云荇アサヾ倭名鈔に爾雅注を引て 荇亦作レ莕アサヾといふ叢ニ生水中一葉圓在ニ莖端一長短隨ニ水深淺一者也と注せりアサヾの義未レ詳

或人の説にアサヾとはアサヽキなり淺水に生して花さくをいへりといふなりいかゞあるべき萬葉集抄に重就といふものゝごとくアサアサといふに似たり水淺き所にあるの義なりけんもしるべからず

又この菜に鳧葵の名あるによりて俗にカモアフヒといふものをもて疑ふことありまた是たま〳〵鳧葵の字のカモアフヒといふ名に相合ふのみカモアフヒといふものべつに是一物なり

本草綱目啓蒙云莕菜池澤中ニ生ズ葉ハ水面ニ浮ビ根ハ水底ニアリ故ニ莖ノ長短ハ水ノ淺深ニ從フ莖ハ細シ葉楕ニシテ蓴菜ノ如ニシテ小ク一方ニ缺アリ面ハ綠色背ハ紫色周邊ニ雲頭齒アリ夏月花ヲ水上ニ開ク大サ錢ノ如シ五瓣黄色ナル者ナリ一種莖ニ葉互生シ葉間ニ數十花簇生シ黄色ナル者アリ又一種葉大ニシテ葉間ニ數十花簇生シ瓣末白ク本黄ナル者アリ金銀蓮花ト云フ通名ナリ

毛詩（國風周南）云參差荇菜左右流レ之窈窕淑女寤寐求レ之參差荇菜左右采レ之窈窕淑女琴瑟友レ之參差荇菜左右芼レ之窈窕淑女鐘鼓樂レ之

爾雅（釋草）云經履註未レ詳莕接余其葉苻註叢ニ生水中一葉圓在ニ莖端一長短隨ニ水深淺一江東食レ之亦呼爲レ莕○莕

古今要覽稿卷第四百五十八

●草木部水草

あさゞ莕　荇

あさゞ漢名莕一名荇一名鳧葵一名水葵一名水鏡草一名靨子菜一名金蓮子一名接余また其葉を荇といへり荇は詩の周南に參差たる荇菜と見え皇國にても古今六帖新撰六帖に詠せし歌あり本草和名和名本草ともに鳧葵を首とし和名類聚鈔には荇とす古へより今に至りて方言もなくあさゞ通稱とすその形狀は本草綱目啓蒙に詳なれども夏月花を水上に開くとのみいへり此花は小滿より開きて芒種盛にして終れり蓮花に先だちて開けり此草ぬなは同類にて蓴の集解に蓴葉鳧葵に似たりといひ莕は蓴に似たりといひ又その根も蓴莕共に釵股のごとしといへり又その實も蓴莕ともに棠梨のごとしといへり此棠梨今みつばかいどうこりんごやまなしともいへり此實は小にしてぬなはあさゝの實の如し又蓴莕ともに水葵といへり

本草和名云鳧葵一名莕菜與荇同一名接與一名猪蓴出蘇敬注一名茆音邪一名水葵已上出兼名苑和名阿佐々

和名本草云鳧葵味甘冷无毒和安佐不

和名類聚鈔云荇爾雅注云荇菜上音杏字亦作莕相名阿佐々叢ニ生水中ニ葉圓在レ端長短隨ニ水深淺ニ者也

多識編云莕菜キヤウサイ和名阿左々今按增補フ俗云加波保爾異名鳧葵キ唐本水葵馬融傳水鏡草土宿靨子菜野菜譜金蓮子接余

和漢三才圖會云莕あさゝ荇其花如ニ小蓮華ニ而浮ニ于水上ニ甚美近ニ于人家ニ池未レ見レ之

金蓮花　銀蓮花　畫譜云金銀蓮花有ニ二種ニ湖中甚多園林盆蓄レ水種レ之但取ニ二色重臺者ニ可レ愛蓋此莕之一類也

大和本草云荇關雎ノ詩ニ詠ゼル荇菜是ナリ又莕ト云其葉ハ馬蹄ニ似タリ又ヨク睡蓮ニ似タリ葉ノ形蓴菜ノ如クニシテ其端分ル事唯蓮ノ如シ蓴菜ノ葉切レザルニ異ナリ葉水面ニウカブ單ノ黃花ヲ開ク莖根長シ水面ニウカブ江州唐崎ノ水中ニ多シ荇菜ヲアサヾト訓ズルハ誤ナルベシ、アサヾハカハホネニ似タル水草ナリアサヾハ根アラハル荇菜ハ根アラハレズ蓴菜ニ似タリ凡蓴菜荇菜睡蓮此三種ハ似テ一類也アサヾ

○蘴蕘蕪菁也陳楚之郊謂之蘴魯齊之郊謂之蕘關之東西謂之蕪菁

大芥 同上趙魏之郊謂之大芥

辛芥 同上

○其小者謂〻之辛芥〻或謂〻之幽芥〻

蘆菔 同上

○其紫華者謂之蘆菔實如小豆羅匐二音

温菘 同上今江東名温菘　菈遾 同上洛荅

者純ニ九英一九英根大而味短一削浄爲レ葅甚佳今燕京人以レ瓶醃藏謂ニ之閉甕菜一

子氣味苦辛平無レ毒主治明目別錄云々爲レ油入ニ面膏一去レ黑䵟皺文蘇恭和油傳蜘蛛咬藏器壓ニ油塗一頭能變ニ蒜髮一孟詵入ニ丸藥一服令ニ人肥健一尤宜ニ婦人一蕭炳

『此間五圖（なの花・同上實・からし・おほね・同上實）を略す』

詩

覆醤續集

見ニ菜花一

寒陰無ニ物華一、春色入ニ田家一、梅謝先ニ千卉一、蕪菁徧放レ花、聯珠詩格

種レ芥　　方　秋　厓

不レ論ニ青紫一已離々、煙濕ニ春畦一手自治、一笑摩挲空洞腹、是間儘納幾須彌、

百花詩

菜花　　潘　鍾　嵠　穉　峯

畦菜花齊金色黄、春風吹動遠浮レ香、東連西接盈ニ十頃一、義別成レ蹊挑李行、

をち

○釋名

○本草和名、和名類聚鈔共に乎知と書たり○名義未レ詳

あぶらな通稱　芸薹本草和名、和名類聚鈔、天工開物　芸薹草唐本　寒菜胡居士方　胡菜同上　薹菜埤雄　薹芥沛志　油薹本草選　油芥閩書　臭菜盛京通志　塌科菜食物本草　菜花菜同上　芸薹芥群芳譜　苦心菜浙江通志

たかな本草和名多加奈　こほね和名類聚鈔古保禰　とうな　しろな　い

んげむな本草綱目啓蒙　菘別錄　白菜綱目　玉芝名物法言　晩菘正字通　あを

な本草和名、和名類聚鈔、阿乎奈　かぶら　かぶらな　かぶな　かぶ本草

芸北戸錄　蒻奴事物紺珠　葑姜同上　張相菘閩書　青菜山東通志

綱目啓蒙　蕪菁別錄　蔓菁唐本草　九英菘食療　諸葛菜綱目　四時

菜月令廣義　大頭芥食物本草會纂　葑菜事物異名　芴菁北戸錄　冥菁急就篇

葍精通雅　禾菁鄉藥本草　からし本草和名、和名類聚鈔、加良之　芥別錄　辣菜群芳

譜　芥菘通雅　辛芳名物方言　鷄脚事物紺珠　芥天同上　香薩利殺

跋金光明經　家芥子附方　小芥子　辣芥子共同上　黑芥子白芥附方

○本草和名蕪菁條下所載の諸名菘の條下にいふ諸名また芥條子にも鼠芥雀芥等の一名もあれども多く古名にして今詳ならず

葍本草和名　葑楊氏方言　蕣同上

研末二泡過一爲二芥醬一以値二肉食一辛香可レ愛劉恂嶺南異物志云南土芥高五六尺子大如二雞子一此又芥之異者也

又云白芥恭曰白芥子粗大白色如二白粱米一甚辛美從二戎中來一藏器曰白芥生二太原河東一葉如レ芥而白爲レ茹食レ之甚美保昇曰胡芥近道亦有レ之葉大子白且粗入レ藥及レ啖最佳而人間未二多用レ之時珍曰白芥處々可レ種但人知レ蒔レ之者少爾以二八九月一下種冬生可レ食至二春深一莖高二三尺其葉花而有丫如花芥葉青白色莖易レ起而中空性脆最畏二狂風大雪一須二謹護レ之乃免二折損一三月開二黄花一香郁結レ角如レ芥角其子大如二粱米一黄白色又有二一種一莖大而中實者尤高其子亦大此菜雖二是芥類一迥然別種也然入レ藥勝二於芥子一

又云蕪菁弘景曰蕪菁蘆菔同條蘆菔是今温菘其根可レ食レ葉不レ中レ噉蕪菁根細二於温菘一而葉似レ菘好レ食西川惟種レ此其子與二温菘一甚相似而俗方無レ用惟服食家鍊二餌之一而不レ言二蘆菔子一恐不レ用也俗人蒸二其根一及作レ菹食但小薰臭爾恭曰蕪菁北人名二蔓菁一根葉及子皆是菘類與二蘆菔一全別體用亦殊陶言二蕪菁一（本ノマヽ）似二蘆菔一蘆菔葉不レ堪レ食是江表不レ產二一物一埋二喪其眞一也

菘子黑色蔓菁子紫赤色大小相二似蘆菔子一黄赤色而大數倍且不レ圓也大明曰二蔓菁一比二蘆菔一梗短葉大連二地上一生厚潤短肥而煇其色紅頌曰蕪菁南北皆北土尤多四時常有春食レ苗夏食レ心亦謂二之臺子一秋食レ莖冬食レ根河朔多種以備二饑歲一菜中之最有レ益者惟此爾其子夏秋熟時採レ之宗奭曰蔓菁夏月則枯當二此之時一蔬圃復種謂二之雞毛菜一食レ心正在二春時一諸菜之中有益無損於レ世有功采擷レ之餘收レ子爲レ油燃燈甚明西人食レ之河東大原所レ出其根極大他處不レ及也又出二西番吐谷渾地一機曰葉是蔓菁根是蘆菔時珍曰別錄以二蕪菁蘆菔同條一遂致二諸說猜度一或以二二物一爲二一種一或謂二二物全別或謂在レ南爲二萊菔一在レ北爲二蔓菁一殊無二定見一今按二物根葉花子都別非二一類一也蔓菁是芥屬根長而白其味辛苦而短莖粗葉大而厚濶夏初起レ薹開二黄花一四出如レ芥結レ角亦如レ芥其子均圓似二芥子一而紫赤色蘆菔是菘屬根圓亦有二長者一有二紅白二色一其味辛甘而永葉不二甚大一而糙亦有レ花葉者夏初起レ薹開二淡紫花一結レ角如二蟲狀一腹大尾尖子似二胡盧一巴不レ均不レ圓黄赤色如レ此分レ之自明白矣其蔓菁六月種者根大而葉蠹八月種者葉美而根小惟七月初種者根葉俱良擬レ賣

シカラズ只乾菜ト爲シテ良ナリ筑前ニテスハリカブト云是蓮花白(正字通)ナリ

本草綱目云蕓薹恭曰別錄云蕓薹乃人間所レ噉菜也宗奭曰蕓薹不二甚香一經レ冬根不レ死辟レ蠧於二諸菜中一亦不二甚佳一時珍曰蕓薹方藥多用諸家註亦不レ明今人不レ識レ爲二何菜一珍訪考レ之乃今油菜也九月十月下種生レ葉形色微似二白菜一冬春採二薹心一爲レ茹三月則老不レ可レ食開二小黃花一四瓣如レ芥花結レ莢收レ子亦如二芥子一灰赤色炒過搾レ油黃色燃燈甚明食レ之不レ及二麻油一近人因有二油利一種者亦廣云

子氣味辛溫無毒主治二夢中洩精與レ鬼交一(思邈)取レ油傅レ頭令二髮長黑一(藏器)

又云菘弘景曰菘有二數種一猶是一類止論三其美與二不美一菜中最爲二常食一宗奭曰菘葉如二蕪菁一綠色差淡其味微苦葉嫩稍濶頌曰揚州一種菘葉圓而大或若レ箑啖レ之無レ滓絕二勝他土者一疑即牛肚菘也時珍曰菘即今人呼爲二白菜一者有二二種一莖圓厚微青一種莖扁薄而白其葉皆淡青白色燕趙遼陽揚州所レ種者最肥大而厚一本有二重十餘斤者一南方之菘畦內過レ冬北方者多入二窖內一燕京圃人又以二馬糞一入レ窖壅培不レ見二風日一長出苗葉皆嫩黃色脆美無レ滓謂二之黃芽菜一豪貴以爲二嘉品一蓋亦倣二韭黃之法一也菘子如二蕓薹子一而色灰黑八月以後種レ之二月開二黃花一如二芥花一四瓣三月觀レ角亦如レ芥其菜作レ葅食左良不レ宜二燕晒一

又云芥弘景曰芥似レ菘而有レ毛味辣可二生食一及作レ葅其子可二以藏一冬瓜又有レ莨音郎作レ葅甚辣恭曰有三三種一葉大子粗者葉可レ食子入二藥用一葉小子細者葉不レ堪レ食子但作レ齏又有二白芥子一粗大白色如二白粱米一甚辛美從二西戎一來頌曰芥處々有レ之有二青芥一似レ菘有レ毛味極辣紫芥莖葉純紫可レ愛作レ齏最美有二白芥一見二本條一其餘南芥・旋芥・花芥・石芥之類皆菜茹之美者不レ能二悉錄一大抵南土多芥相傳嶺南無二蕪菁一有レ人携レ種至レ彼種レ之皆變作レ芥地氣使レ然耳時珍曰芥有二數種一青芥又名二刺芥一似二白菘一有二柔毛一有二大芥一亦名二皺葉芥一大葉皺紋色尤深綠味更辛辣二芥宜レ入二藥用一有二馬芥一葉如二青芥一有二花芥一葉多二缺刻一如二蘿蔔英一有二紫芥一莖葉皆紫如レ蘇有二石芥一低小皆以二八九月一下レ種冬月食者俗呼二臘菜一春月食者俗呼二春菜一四月食者謂二之夏芥一芥心嫩薹謂二之芥藍一瀹食脆美其花三月開二黃色一四出結莢一二寸子如二蔴子一而色紫味辛

同シテ色淺シ又油ヲ採ルベシ蕓薹ノ一種也又云菘形狀油菜ニ似テ色淺ク葉最厚シテ筋白シ醃藏ニ宜シ城州加茂スイクキナモ菘ノ一種ニシテ汝南圃史ノ梵菜ナリ一種ヲランダナハ葉長大ニシテ琵琶ノ形ノ如ク厚シテ白色ヲ帶ビ甘藍ノ形狀ニ似タリ年ヲ經ル者ハ高五六尺葉皆枝梢ニ聚リテ重葉牡丹花ノ形ノ如ク冬月觀ニ堪タリ其莖末粗ク本細シ根ハ塊ナクシア鬚アリ故ニ苗大ナル者ハ倒レ易シ春ハ叢葉中ヨリ莖ヲ抽テ漸ク花形ナクナリテ葉互生ス油菜ニ後レテ花ヲ開ク穗ノ形油菜ヨリ長大ナリ花モ大ニシテ色淺ク甘藍ノ如シ花後莢ヲ結ブ根枯レズ枝ヲ採リ扦插シテ活シ易シ是顚ノ說ノ牛肚菘ナリ汝南圃史ニ云春曰二春菜一

又名白菜秋曰二葵菜一又名二秋菜一晩冬者曰二踢菜一

又云芥カラシ葉油菜ニ似テ小ク鋸齒細ク皺紋多シ花實油菜ヨリ小ナリ品類多シ時珍ノ說靑芥ハ常芥ナリ大芥ハオホガラシ一名オホバガラシ・トクワカナ讃州タカナ九州葉長大ニシテ二尺許深綠色上巳ノ艾餻多クコノ葉ヲ雜ヘテ色ヲ助ク葉ヲ煮レバ臭氣アリテ葱ノ如シ子ハ辛味少クシテ葉ハ辛シ一名春不老河間府志八斤菜群芳譜芋芥菜盛京通志萬年靑閩書同名多シ馬芥ハ詳ナラズ花芥ハイラナ、葉微紫色周邊ニ細碎缺刻多シ華亭縣志ニ紫花芥ト云飲食集ニ花葉芥ト云一種大葉ニシテ周邊ノ缺刻極テ深細ナル者ヲ俗ニシユンプラント云一名チリメンナ紀州八丈菜勢州ソデナ同上是亦花芥ナリ紫芥ハムラサキガラシ一名アカヾラシ常芥ノ形ニシテ紫色ナル者ナリ

又云白芥シロガラシ・江戸ガラシ一名白胡芥閩書形狀芥菜ニ同クシテ只苗微白ヲ帶ブ子色黃ナリ藥ニハコレヲ用ユ

又云蕪菁カブラ・カブラナ・カブナ・葉、油菜ニ似テ大ナリ根モ大ニシテ食フベシソノ品一ナラズ諸州ニ名產アリ根ノ形圓アリ扁アリ扁長アリ大アリ小アリ近江カブラハ根最大ニ七八寸ノ闊サニシテ扁ク下ニ一尾潔白煮食ヘバ軟美ナリ江州大津尾花川名產ナリ此種ヲ他地ニ栽レバ形同ジケレドモ味劣ル是九英蔓菁ナリ天王寺カブラハ攝州天王寺村坂田ノ產ヲ名品トス乾シテ他州ニ多ク出スホシカブラト云形小ナルモノ多シソノ近村ノ產ニシテ坂田ノ產ニ非ズ坂田ノ產ハ根四五寸ノ闊サニシテ扁ク近江カブラノ形ニ似テ尾ナク周邊ニ鬚多シ煮食ニ宜シカラズ又藏菜ニ宜

大葉芥ナルベシ葉最大ナリ味モ亦佳陳扶搖ガ花鏡ニ烟草ヲ春不老ニ似タリト云ヲ以可レ知レ之今時春不老ト云芥アリ葉ニスカシ多シ是眞ノ春不老ニ非ズ其種紅夷ヨリ來レル丶ルベシ其葉ノ形倭漢ノ類ニ異リ又イラナト云芥アリ葉ノ兩傍ニ刻アリ葉色微紫ナリ味ヨシ時珍ガ所レ謂花葉多二缺刻一トハ是ナルベシ又一種實多ク葉小キアリ實芥ト云凡芥子八九月ニ種フ蘿蔔ヨリオソクマクベシ苗長ジテ移シウヱベシ狂風ヲオソル上ニムシロコモヲオホヒテ防グベシ李笠翁カ云芥子陳者絕佳愈老愈辛以レ此拌物無二物不一レ佳食中之爽味也予每レ食必備竊比二子夫子之不一レ撤レ薑云入門曰芥葉多食動二風氣一有二便血痔疾一者忌レ之○白芥子藥性解云氣虛及肺胃中有レ火者咸禁レ食レ之○和俗曰芥子田螺ト同食スレバ殺レ人

又云蔓菁蕪菁トモ云莖モ根モ紅紫色ナリ又白色ナルモアリ菘ニ似テ一類別種ナリ菘ハ諸ノ種トモニ皆葉莖長ク色淡靑ナリ蔓菁ハ莖葉短シ色モ味モ亦異ナリ莖葉根トモニ味菘ニオトル只花實ハ相同ジ菘ト大ニ同ク小異レリ農政全書ニ凶年ニ貧民久ク菜類而已ヲ食ヘバ色アシクナル只菘ト蕪菁トヲ久シク食ヘバ色不レ惡根ト莖ニ澤アル故也トイヘリ然ラバ凶年ニ多ク種ベシ一名ヲ諸葛菜ト云劉禹錫ガ嘉話錄ニ諸葛孔明在二陣中一兵士ニ蔓菁ヲ多クウヱシム六益アルコトヲイヘリコノ故ニ諸葛菜ト名ヅク三月黃花ヲ開キ四月ニ實ヲ結ブ油トス菘ト同ジ蔓菁ニモ種類多シ菘ノ別種ト混ゼリ赤カブアリ其根紅ナリスハリカブアリ根大ナリ菘根モ蔓菁根モ茹トシテ食ベシ味ヨクシテ久ニ堪フ乾蘿蔔ニマサレリ老病ノ人生菜ヲ不レ食シテ是ヲ食シテ可也且泄痢ヲ止ム但嗜レ酒甘味ヲ嫌フ人或有二積滯一人ハ少芥子薑椒ナドノ辛物ヲ加フベシ不レ然バ停滯ス中滿ノ人不レ可レ食本草綱目啓蒙云薹薹アブラナ秋分ニ栽ヘ春ニ至テ莖ヲ抽テ二三月黃花ヲ開ク四瓣未ダ花ヲ開カザル已前ニ中心ヲ摘ミ食用トス時珍冬春採二薹心一爲レ茹ト云フ是ナリ薹心ヲ菜汞（餘姚縣志）ト云古名クヽダチ一名クキダチ（南部）ツヂ（備前）中心ヲ摘ムハ枝ヲ多ク出シ花實多カラシメンガ爲ナリ正字通ニ摘レ心爲二菜茹一旁心結レ子可レ搾レ油ト云四月ニ至テ子熟スナタネト呼ブ搾テ油トナスヲナタネノアブラト云フ附方ニ菜子油ト云フ一種京ニテハタケナト呼ブモノアリ和方書ニ眞菜ト云ソノ形狀アブラナト

辛味ニ不レ佳其根長不レ堪レ食惟用レ臺作レ葅良華人好食レ之

又云菘菜子油塗レ頭長レ髮塗レ刀劍不レ鍮（有ニ足疾ニ者不レ可レ食レ之）菘菜今畿內種レ之者稀也採ニ其葉ニ播爛合レ醋去レ滓和ニ魚鱠ニ謂ニ之青醋ニ又用ニ其莖ニ作レ葅ニ甚良華人賞レ之故長崎多種レ之今以ニ蕪菁萊菔之葅ニ稱ニ莖漬ニ者起ニ於此ニ乎

又云辛菜今唐人謂ニ芥辣ニ倭食ニ索麪ニ爲必用レ之物四月其角莢熟半枯時苅レ之取レ子晒乾碎末篩去レ皮收レ之用時盛レ盞隔レ紙上注レ水浸ニ芥粉ニ則甚辣合ニ醋末醬（スミソ）ニ和ニ魚鱠ニ最良或有用ニ芥青葉ニ合レ醋和ニ魚鱠ニ（俗云ニ阿乎乃太ニ）亦可往々有ニ鯽鱠ニ亦用レ之而雖レ不ニ甚害ニ合食禁不レ可レ不レ知

又云蕪菁云々油塗レ頭能變レ蒜

今俗麁而不ニ柔軟ニ髮名ニ韮髮ニ所レ謂蒜髮是乎

蔓菁以ニ此莖葉ニ稱レ菜（訓奈）根稱レ蕪（加布良）蓋菜乃蔬之通稱而此冠ニ子（ナタネノアブラ）諸菜ニ也猶ニ以レ櫻稱レ華矣云々

又云蔓菁子油俗云ニ種子油ニ一名ニ水油ニ凡蔓菁子油今爲ニ燈用ニ第一但塗レ髮微臭不レ如ニ胡麻油ニ燃燈者胡麻油爲レ勝而光燄小而不レ如ニ水油之光ニ又綿實油光勝ニ於水油ニ故綿實油少和ニ合之ニ則愈佳

大和本草云菘京都ノ水菜・ハタケ菜・天王寺菜・近江菜・イナカノ京菜白菜ナド云物ハ皆菘ナリ今人多クハ不レ知レ菘ホリイリナド訓ジ又コヲホテト訓ズ皆非也菘ハ大根ノ類ニハアラズ蕪菁ノ類ナリ蕪菁ト相似テ一類別物也菘ハ莖長ク葉莖淡綠色根白シ味ヨクシテ蔓菁ニマサル根小ナルアリ大ナルアリ三月黃花ヲ開ク滿地如レ金結レ子油トス云々其油ヲ婦人髮ニヌルモ無レ害又刀ニモヌルベシ

又云油菜蕓薹トモ云本草ニ出タリ其葉モ根モ皆菘ニ似タリ其實ヲ油トス諸州ニ多クウヱテ利トス三月ニ圃中花サキ滿地如レ金葉莖ノ味菘ニオトレリ菘蔓菁ト一類別種也農夫山野ノ草茅ヲ燒キ其アトニ卽油菜ヲウ、民俗油菜子ヲモカラシト名ヅク芥子ニハアラズ

又云芥々子ヲケシトヨムハ誤ナリケシハ罌粟ナリ芥ハ種類多シ○白芥尤ヨシ實カラク葉大ニシテ他ノ芥ニマサレリ子ハ藥トス爲レ末テ諸食品ニ加フ味ヲ助ク○大葉芥アリ王世懋ガ瓜蔬疏ニ芥多種以ニ春不老ニ爲ニ第一ニトイヘリ他芥ヨリ薹遲シ是ヲ以テ名ヅク是

又野菜類云芸薹本草云芸薹（雲臺二音和名乎知）味辛温無毒七卷食經云芸薹宜煮噉之

又蕓蒜類云芥本草云芥（音介和名加良之）味辛歸鼻者也

本朝食鑑云菘（訓多加奈）釋名辛芥（源順○菘似芥及蕪菁而大味辛故名之乎）菘莖圓厚微青或莖扁薄而白其葉皆淡青白色畧似蕪菁狀最肥大而原味微辛如芥莖菘子色灰黑八月以後種之二月開黃花如芥花四瓣三月結角亦如芥云々

又云芥（訓加良志）辛菜

源順曰和名賀良之俗用芥子根細而甚辛薰好通口鼻必大按芥音介不獨菜辣而芥子最辛烈食之先通眼發淚通鼻出涕者也

芥有數種俱似菘有柔毛葉深青者曰青芥此所常用之芥也有大葉皺紋色深綠者李氏所謂大芥也二芥辛辣俱可用冬春夏三時有之芥心作薹而高三月開花黃色四出結莢一二寸子大如穄子而色赤紫味甚辛辣二芥葉莖及子俱作蔬食又有葉如青芥多缺刻如蘿蔔又有葉紫如蘇者又有低小而葉莖硬者此三芥亦爲蔬食不及前之二芥也一種有白芥者大抵似芥而葉刻缺有了青白色莖易起而中空性脆最畏狂風大雪可謹護之三月開黃花香郁結角如芥角其子大如粱米黃白色此亦與芥同種其下種采收亦同時須入藥用也本邦古者用芥子者少和名惟言菜今用菜者少惟用芥子者多而食魚膾茹蔬者必以芥子而和者不少言能解魚毒進食爾

又云蕪菁（訓加布奈或阿乎奈）蔓菁（本朝式）莖立（同上）葑（源順）葑（同上）下體（同上）菜

近俗○本朝式訓蔓菁曰阿乎奈和名亦同莖立者訓久々多知至春二三月莖肥大高立作臺故名今亦稱之源順曰楊雄方言蔓菁曰葑毛詩云采葑采菲無以下體注云下體根莖也和名訓加布良順

又曰豐唐韵蔓菁苗也菜近俗通訓奈以爲蕪菁之稱也

又云蕪菁者上下平素日用之菜而不俟諸葛之種此民間所每有四時俱采之狀類芥而莖粗葉大而厚闊根長而白或肥大而短其味辛苦大抵七月下種冬初生仲冬采葉采根而用云々蕪菁子多油民間采油代麻油亦貨于四方以多爲燈用菘芥俱多油併稱菜種油也

和漢三才圖會云蕓薹莖葉子根皆辛而微有煙草之

芥、芥より白芥、白芥より蕪菁を出すされども油の說のみゆるは芸薹を蕪菁條下のみにて餘條にはみえず天工開物には菘菜子芸薹と出すのみにて芥子より油をとる事は見えざれども今皇國にては專らからしの種よりしぼり用ふ又蕓薹・菘・芥・蕪菁各別條にいふべきなれども何れの菘よりしぼりても菜種の油と呼ゆゑに諸菘をこゝに載す又萊菔子油是もまた天工開物にのせその油五臟を補ふとみゆれば殊に油の上品なるものなれども本草綱目萊菔の條に根の氣味主治子の氣味主治あれども油の事は見えず天工開物に萊菔子每石得二油二十七斤一（甘美異常益二人五臟一）と見えたれば菘子よりもまされるものにてその料菘菜子・芸薹に三斤をとれども菘を擇品類の中には每石十二斤得るとみゆれば萊菔子は料もすくなからず殊に五臟を補ふ功あれば皇國にても萊菔子より油をしぼり用ひたらば極て西土の油よりまさるべし萊菔の西土の產に勝れるによりてなり

本草和名云蕪菁（仁諝音無崔禹音武）一名蔓菁（北人名レ之出二蘇注一）又有莑根（仁諝音勞）蘋菁一名豐（陳楚名也）一名蕘（魯齊名也）一名大芥（趙魏名）辛芥小者一名幽芥（已上五名出二七卷食經一）菟延子（子也出二神仙服餌方一）一名九英（出二拾遺一）和名阿乎奈

又云菘（仁諝音崧蘇敬曰不レ生二北土一）牛肚菘（大葉）𦶟（サツ）菘（薄葉）白菘（似二蔓菁一已上三名出二蘇敬注一）一名冬繁一名葹耳一名牛耳一名白葉（已上四名出二兼名苑一）和名多加奈

又云芥又有莨（楊玄操音良出二劉景注一）白芥子（出二蘇敬注一）鼠芥（鼠食二其花一而皮毛皆頭落故以名レ之（多紀安長曰頭當レ作レ頭々頭古文蓋假頭之義））雀芥（雀食二其子一而能飛翔故以名レ之已上二名出二崔禹一）和名加良之

又云芸薹（或作二蕓字一）和名乎知

又云溫菘黃菜（又作二黃菜一）又有二莘菜一（根細而味辛）邈白菘（出二崔禹一）蔄蘱一名香綏（出二七卷食經一）和名古之

和名類聚鈔（園菜類）云蔓菁蘓敬本草注云蕪菁（武青二音）北人名レ之蔓菁（上音蠻和名阿乎奈）楊雄方言陳宋之間蔓菁曰レ葑（音封）

又云蔓菁根毛詩云采レ葑采レ菲（菲音斐）無レ以二下體一（和名加布良）注云下體根莖也此二菜者蔓菁與葍之類也

又云辛芥方言云趙魏之間謂二蕪菁一爲二大芥一小者謂二之辛芥一（音介和名多加奈）

又云溫菘崔禹錫食經云溫菘（音終和名古保禰）味辛大溫無レ毒者也

又云辛菜崔禹錫食經云又有二辛菜一（和名賀良之俗用二芥子一）根細而甚辛羶好通二口鼻之氣一

古今要覽稿卷第四百五十七

●草木部　油料

な　菘菜

なたねのあぶら皇國にてはいづれの菘種よりも油を搾り日用の最とす燈油はさらなり食饌に專ら用ひて上品なり尤天工開物供饌食用胡麻萊菔子黃豆菘菜子爲レ上と見ゆれば菘種は油料の最用なりすべて菘は秋蒔て冬秀で春も早く花をひらく花信風にも雨水一條菜花と見えて雨水一候より開て挿花となして梅とともに高貴の殿上にも薫れりその色鮮黃にしてめづべきなり凡黃色の花菘にしくはなし滿池如レ金と（大和本草）いへり菜の畑にまづ目を富や金世界と（栗本瑞仙院）いひしもむべなり詩にも蕪菁黃世界などいへりその功は本草綱目蕪菁條下にいふ花氣味辛平無レ毒主治二虛勞眼暗一久服長生可二夜讀一書二月三日采レ花陰乾爲レ末每服二錢空レ心井華水下とみゆれば花に大功あり花も共に蔬となして食ふべし昔の世俗は花には毒ありとて莟は捨しといへども今にては莟ばかりを摘て莖葉よりも稱せり莖葉花實共にすたらず其用莫大にて年月を費さゞるは菘に勝れたるはなし又あぶらなは漢名蕓薹一名油菜といへば油となしてまさりたる物にて本草綱目蕓薹の集解にも燃燈甚明といへども天工開物には上にいふ胡麻・萊菔子・黃豆・菘菜子爲レ上麻蘇・芸薹次レ之といへば燃燈にはあぶらな可なるべけれども食料にはをとるべし又油にしぼるにも菘と芸薹との勝劣もなかるべし天工開物に菘萊子每石得二三十斤一また芸薹子每石得二三十斤一と見えたり芸薹も菘も油をしぼるに甲乙なければあぶらなのをとれるよりも菘を多く蒔べし又本朝食鑑に蕪菁子多レ油民間采レ油代二麻油一亦貨二于四方一以多爲二燈用一菘芥倶多油併稱二菜種油一也とあればかぶらなは諸菘にまさりて一名菜（本朝食鑑）とも見ゆれば蕪菁は菜の第一なるべけれどもすべての菘種より油を搾り用ふ殊に今皇國にては芥子より油をしぼり用るに諸菘にまされるといふ其數はからしなはいかにも莢ごとに實のり能して空莢なく其料諸油にまさるといへりなたねの油も芸薹を本草綱目には始に出しそれより菘、菘より

○新校正是また同意なるべし

きたんぽゝ

○これも其汁蒲公英のごとくなる故呼べり

こくどのくわし、あかねぢ、かうしらき、

○この四名共に紀州の方言なれども名義詳ならず

こくどのくわし・かうしらきは果となして食ふを

いふ歟

あぶらみ

○城州貴船の方言これ即油を採ゆゑにいへり

あぶらぎ

○江戸これもあぶらを取よりの名なり

しろはだ

○豫州これは、しらき・しろき等の轉語なるべし

いはゝせ丹後　もえき土州

ちんくわ

○仙臺これ仙臺にて珍果と書て甚稱美すといへり

充しものにて大和本草にもしらきより油を取る事をあげたり蘭山はしらきを婆羅得に充るは穩ならず鳥臼の一種とせり故に藥名備考にもシラキ鳥臼一種また同書にコクドノクワシ鳥臼一種と見えてこの說佳なるべけれどもしらきの實は果となし又油となしても饌食に供すれば鳥臼に勝れりしらきを婆羅得に充鳥臼の一種となせども共に的當とすべきとも覺えず

大和本草云婆羅得本草喬木部ニアリ江州ニテ白木ト云畠ニウフ實アリ油ヲ取ル葉ハ似レ柹而大小アリ又チシヤノ木ノ葉ニ似タリ

花彙云婆羅勒シラキ・コクドノクハシ處々深山中コレアリ樹ノ高サ丈餘枝條四散シ葉互生ス形チ朱果葉及ビ映日果(ユノビバ)葉ニ類シテ薄軟コレヲ斫レバ白汁アリ初夏枝梢ニ花サク穗ヲナス長サ二寸許青黃色頗フル籩實穗ニ類スソノ實下垂ス形チ千金子(ゾクズイシ)ニ似タリ團圓三路中ニ三子アリ各房ヲ專ラニス採テ果食ニ供シ及ビ油ニ搾シ用ヒテ鐵器ニ塗ル

本草綱目啓蒙云婆羅得詳ナラズシラキニ充ル古說ハ穩ナラズシラキハ鳥臼ノ一種トスル說ヲ優レリトスシラキ(江州)ハ一名シロキ(新校正)コクドノクハシ・木タンボポ・アカ子チ・カウジラキ(紀州)アブラミ(城州貴船)アブラキ(江戶)シロハタ(豫州)イハヽゼ(丹後)モヱギ(土州)チンクハ(仙臺)此木山中ニ多シ高サ丈餘葉ハ柹葉ニ似テ斷レバ白汁出故ニ木タンポポノ名アリ夏初葉間ニ三四寸ノ長穗ヲ出ス栗穗ノ狀ノ如ク黃白色穗ノ本ニ實ヲ結ブ形續隨子ニ似テ大ナリソノ莖長ク下垂ス實コトニ三四子アリ大サ三分許正圓ニシテ黑白斑文アリ仁ヲ搾テ油ヲ取リ自鳴鐘ニ用ベシ秋ニ至リ紅葉美シクシテ落ツ

本草綱目(喬木類)云婆羅得(宋開寶)釋名婆羅勒(時珍曰婆羅得梵言重生果也)婆羅得生二西海波斯國一樹似二中葉柳樹一子如二草麻子一方中少用之時珍曰按王燾外臺祕要婆羅勒似二草麻子一但以二指甲一瓜レ之卽有レ汁出卽此物也子氣味辛温無レ毒主治冷氣塊中補腰腎破痃癖可下染二髭髮一令上レ黑

『此間圖一面(しらき)今略之』

○釋名

しらき

○江州方言この葉を切れば白汁出るゆゑ名に負たり

しろき

湖郁晩眺　　樊阜

郁南郁北總ニ西風一、柏葉先レ霜淺著レ紅、野鳥飛邊堪レ入レ畫、數家籬落夕陽中一、

○釋名

たうはぜ　なんきんはぜ

○この二名本草綱目啓蒙實より蠟を取ゆゑ名く

りうきうはぜ

○本草一家言この木初て琉球より渡ると云

烏臼木唐本草　鵶臼

○時珍曰烏喜食ニ其子一因以名レ之陸龜蒙詩

柏

○正字通巨九切　音舅　烏柏木名本作ニ烏⿰木咎一　唐本草作ニ烏臼一　陳藏器云葉可レ染レ　皂子壓爲レ油塗レ頭令ニ白變レ黑爲レ燈極明唐陸龜蒙擬野疏詩行歇每依ニ鵶舅影一挑頻時見鼠姑心廻瀾字義⿰木咎俗作柏非

⿰木咎（カウ）

○廣韻古老切玉篇公道切並音果說文木也又集韻下老切音皓義同又唐韻古勞切類篇居勞切並音高類篇桔槹機器或作ニ桔⿰木咎一皐與レ咎古字通又集韻巨九切同レ柏正字通⿰木咎卽柏字函史作レ柏卽本草烏臼樹見柏字註又集韻居六切同レ椈見ニ椈字註一已上康熙字典

⿰木舊 天工開物云⿰木舊俗柏字　了臼大倉州志　美膽蓬窻續錄　柏油樹萬病回春

李

○長沙府志獮猴桃ト同名と已上了臼以下本草綱目啓蒙

○正誤

花彙云鵶臼リウキウハゼ、サツマハゼ

この鵶臼は烏臼の一名にてりうきうはぜ・さつまはぜも烏臼の俗名なれば可なれども一は葉漆ニ類シ細小ニシテ厚シ深秋鮮紅觀ルニ堪タリ身及び花實並ニ漆ニ似タリといへるは歌に詠ずるはじにして絕て別物なり松岡玄達の本草一家言に往昔輿化客陳元贇以ニ山漆一問しに烏臼と答へたりとて甚謬妄の說なりといへり

しらき　こゝどのくわし

しらきの實よりも油を搾り用ひ饌食となして甚美味なり此實外皮白くして黑斑あり堅き皮あり破れば白肉ありいりて食ふに香氣ありて味佳なり仙臺にて珍果と呼て稱美すといへりしらきは古說には婆羅得に

別錄原製用採ニ臼子一在ニ中冬一以レ熟爲レ候採須ニ連レ條剝レ之但留ニ指大以上枝一其小者總無レ子亦宜ニ剝去一則明年枝實俱繁盛剝刀長ニ四寸廣半寸形如ニ却月鉤一及在ニ鉤内一以ニ竹木竿一爲レ□令ニ刄向一上剝時向レ上□之不レ傷ニ枝幹一剝ニ下枝一仍充ニ燎爨一揀取淨子曬乾入レ臼舂落外臼穰篩出蒸熟作レ餅下搾取レ油如ニ常法一卽成ニ白油一如レ蠟以製レ燭若穰少不レ滿ニ一搾一卽作レ餅入ニ他油ニ餅中一雜搾レ之搾下盛ニ油瓶中一置ニ一草帚一候ニ油出一令定臼油卽凝附草帚不レ雜他油其篩出ニ黑子一石磨麤礱碎簸ニ去殼一存ニ下核中仁一復磨或碾細蒸熟搾レ油如ニ常法一卽成ニ清油一燃燈極明塗レ髮變レ黑又可レ入レ漆可レ造レ傘凡製レ燭每臼油十斤加ニ臼蠟三錢一則不レ淋レ蠟多更佳常時肆中賣者臼油十斤雜ニ清油十斤一白蠟不レ過ニ一二錢一其燭易レ淋收子一石可レ得ニ臼油十斤一淋中一畝之宮但有ニ樹數株一生平膏油足レ用不ニ復市買一用レ油之外其木仍可レ壅レ田可レ燎レ爨可レ宿レ火其葉可レ染レ皂其木可ニ刻レ書乃雕ニ造器物一且樹久不レ壞至ニ合抱以上一收子愈多故一種卽爲ニ子孫數世之利一接博子種者須レ接之乃可レ樹如ニ杯□大一卽可レ接大至ニ一兩圍一亦可レ接但樹小低接樹大高接耳接須ニ春分後數日一法與ニ雜果一同問ニ之山中老圃一云臼樹不レ須ニ接博一但於ニ春間一將ニ樹枝二一振轉碎ニ其心一無レ傷ニ其膚一卽生レ子與接博者同試レ之良然若地遠無レ從取ニ佳貼者一宜レ用ニ此法一此法農書未レ載農家未レ聞恐他樹亦然宜ニ逐レ一試レ之

通志昆蟲草木略云烏臼曰楼曰桕柳田人謂ニ之柳一葉杴臭而可レ染レ皂子可レ壓レ油爾雅楼桕柳

『たうはぜ烏臼、同上實、同上熟實并仁の三圖 今略レ之』

詩

水亭秋日偶成　林和靖

巾子峰頭烏臼樹、微霜未レ落已先紅、凭レ欄高看復下看、半在ニ石池波影中一、

暮秋　陸放翁

烏桕微丹菊漸開、天高風送雁聲哀、詩情也似ニ并刀快一、剪得秋光入レ卷來、

佩文齋詠物詩選

行田　方岳

屋頭烏桕午陰密、牛與ニ牧童一相對眠、不ニ是宮中催稅急一、十年前已學レ耕レ田、

ニ染ム夏細花ヲ着ク黃白色實葉間ニ生ズ烏飯子（ナンテン）ヨリ大ナリ生青ク熟黑色二品共ニ實ヲ用ヒテ蠟ヲ取ル然レドモ黍葉ニ類スルモノハ眞ニアラズ

本草綱目云恭曰生二山南平澤一樹高數仞葉似二梨杏一五月開二細花一黃白色子黑色藏器曰葉可レ染レ皂子可レ壓レ油燃燈極明宗奭曰葉如二小杏葉一但微薄而綠色差淡子八九月熟初青後黑分爲二三瓣一時珍曰南方平澤甚多今江西人種植采レ子蒸煮取レ脂澆レ燭貨之子上皮脂勝二于仁一也

桕油氣味甘涼無レ毒主治塗レ頭變レ白爲レ黑服二一合一令二人下利一去二陰下水氣一炒レ子作レ湯亦可藏器塗二一切腫毒瘡疥一時珍

秘傳花鏡云臼一名烏桕一名桱柳出二浙東江西一樹最高大葉如レ杏而薄小淡綠色可二以染一レ皂花黃白子黑色可下以取レ蠟爲上レ燭其子中細核可二窄取一レ油止可二燃レ燈油一レ傘不レ可レ食食則令二人吐瀉一木必接過方結レ子不レ接者雖レ結不レ多秋晚葉紅可レ觀亦秋色之不レ可レ少者廣群芳譜云烏臼一名鵶臼（烏喜食二其子一因以名レ之或云其木老則根下黑爛成レ臼故得二此名一）樹高數仞葉似二小杏葉一而微薄淡綠色可レ染レ皂五月開二細花一黃白實如二鷄頭一初青熟黑分二三瓣一八九月熟咋レ之如二胡麻子一汁味如二猪脂一壓レ油燃レ燈極明南方平澤甚多根皮味苦微溫有レ毒治二頭風一通二二便一慢火炙合脂汁盡黃乾後用子涼無レ毒壓レ汁梳レ頭變レ白爲レ黑炒作レ湯下二水氣一易レ生易レ長種レ之佳者有レ二曰葡萄曰穗聚子大而穰厚曰鷹爪曰穗散而殼薄臨安人每田十畝田畔必種二臼數株一其田主藏二收臼子一便可レ完レ糧如レ是者租輕佃戶樂種謂二之熟田一若無三此種二於田一收糧租額重謂二之生田一江浙之人凡高山大道溪邊宅畔無レ不レ種亦有下全用二熟田一種者上樹大者或收二子二三石一忌レ近二魚塘一令二魚黑一且傷レ魚

彙考增羅逸長青山記山之麓□朱村蓋考亭之祖居也自倚レ石嘯レ歌松風上下遙望木葉着レ霜如二渥丹一始見性以爲二紅花一久之知レ爲二烏桕樹一蓬窻續錄陸子淵豫章錄言饒信間桕樹冬初葉落結レ子放レ蠟每レ顆作二十字裂一一叢有二數顆一望レ之若二梅花一初綻枝柯詰曲多在二野中（カ）十亂石間一遠近成レ林眞可レ作レ畫此與二柿樹一俱稱レ美蔭園圃植レ之最宜

集藻詩散句增宋陸游烏桕赤二於楓一園林九月中唐陸龜蒙行歇每依二鵶臼影一桃頻時見二鼠姑心一元方夔烏桕數家村　宋陸游烏桕新添二落葉紅一　烏桕猶爭二夕照紅一

やかなるべし尤植やすく長じ安きものならん群芳譜に田畝平澤より高山大道溪邊宅畔植ざる處なしといへり又烏臼に薄蔔臼鷹爪臼の二種あり皇國に渡れるは蒲蔔臼なりといへり薄蔔臼は穗聚子大而穰厚鷹爪は穗散而殼薄と見ゆれば是も桂なるべけれどもいまだ渡らざるならんこの實より油をしぼる法は天工開物廣群芳譜に委しくみえ其葉にては皂を染木材は器物を雕し久しくして不レ壞といひこの木を植置ば子孫數世の利なりといへり

本草和名云烏臼木唐

和名本草云烏臼木

味酸微寒无レ毒和似ニ杏梨花黃白子一〇唐

大和本草云烏臼木本草喬木類葉似ニ梨杏一采レ子蒸煮取レ脂澆レ燭貨レ之本草ニ所謂桕油燭ハ卽烏臼木ノ蠟燭ナリ葉ハ蕎麥ニ似タリ近年異邦ヨリ來ル

本草一家言云烏臼肥前佐賀郷名ニ琉球波世一近來自ニ琉球一將ニ來於長崎一土人搾レ油及製レ蠟故名ニ蠟木一又稱ニ加牟弖羅一木葉似ニ加津羅一而圓扁結レ實攢簇數子似ニ梧桐子一往昔興化客陳元贇以ニ山漆一充ニ烏臼一謬妄之說也

本草綱目啓蒙云烏臼木トウハゼナンキンハゼ烏臼ハ漢種ナリ今諸國ニ栽ル者多シソノ葉圓ニ扁クシテ尖アリ數多ク互生ス嫩ナルハ色紅長スレバ色綠枝葉甚繁密ニシテ日光ヲ透サズ納涼ニ宜シ故ニ依ニ鵶臼影一ト云夏月枝梢ゴトニ花穗ヲ生ズ長サ三四寸黃白色ニシテ栗穗ノ如シ穗ノ本ニ實ヲ生ズ形圓微扁ニシテ三道アリテ續隨子ノ如シ初ハ綠色熟スレバ黑褐色コレヲ破レバ三子アリ大サ豆ノ如シ外ニ白粉アリテ核ヲ包ム唐山ニテハコノ白粉ヲ採リ製シテ蠟トス烏臼蠟ト云唐山ニテ漆及ハゼノ實ヨリ蠟ヲ採ルコトナク烏臼實ヨリ採ノミナリ其蠟蟲白蠟ヨリ柔ニシテ上品トス是ヲ皮油品字箋ト云白粉ノ內ニ硬核アリソノ內ニ仁アリ採ル油ヲ清油物理小識木油南寧府志ト云食用ニ堪ヘズ惟燈油トナシ傘ニ用テヨク水ヲ防グト云コノ蠟及ビ油ヲ採ル法天工開物ニ詳ナリ秋ニ至リ落葉ノトキ紅葉ニシテ美シ故ニナンキンハゼト云

花彙云鵶臼木土ニ產セズ今移シ來リ往々コレヲ植フ二種アリ一ハ葉漆ニ類シ細小ニシテ厚シ深秋鮮紅觀ルニ堪タリ身及ビ花實並ニ漆ニ似タリ一ハ葉金木蘭ニ似テ扁薄ナリ淡綠色ニシテ邊齒キレコミナシ秋ニ至テ亦紅

古今要覽稿卷第四百五十六

●草木部 油料

たうはせ 烏臼

たうはせなんきんはぜ漢名烏臼は西土にては燈油となし蠟となして油料の最上なり初異朝より皇國にも渡りし物なれども今は多くなれり庭園に植て夏日辟暑のたすけとなすべし此木葉を出すは遲く棗と同時芽を生ずれども枝長きは尺にも至りて又三枝の新葉生ずる故に盛花より秋かけて繁茂すされば方岳の詩に屋頭烏臼午陰蜜と云へり花は四月より生じたるととまりに生ずるは夏至よりも開く又そのとまりより二枝三枝を生ずる所に花を生ずるは小暑一候より開く又二枝三枝生せし頂にも開く處暑の頃盛なれば咲初めは五月末六月中より七月に至尤小暑に開きしは散て再生すれども花の形は椎の花の如くにて蕊は淡綠色に黄を帶開けば黄色なり花は觀るにたらず實は花より生ずれども一房に多きは六七もみのる實の形は續隨子の如くにして先尖りて三縱道あり熟して靑黑色なり破れば仁あり一房に之あり白粉仁を纏ふ此粉にて蠟を製すを皮油といへり天工開物に燈則桕仁內水油爲レ上とみえて燈油の最なりまた造レ燭則桕皮油爲レ上とみえて饌食には當らざれども油料の上なりこの木いつの頃渡りしにや本草和名康頼の和名本草ともに烏臼唐と見ゆれども和名類聚鈔には見えず大和本草に近年異邦より來るといへりこの木四月新葉生ずるに紅色を帶て美なり長じては綠色なれどもかさねがさね新葉を生ずれば頂に紅色絕ず八月末に至りて悉く綠色にて九月半よりはまた紅葉となりて美なり故に林和靖が句に微霜未レ落已先紅又陸放翁が句に烏桕微丹菊漸開また樊阜が句に桕葉先霜淺著紅ともいへり志村知孝曰先年岡村尙謙巢鴨の花戸にて烏桕の三尺許の小木を得て岩崎常正が富坂の拜借地に植しを當年みるに其丈三丈に餘り枝葉繁茂する事餘木に勝れり予も其頃實生の小木二本得て植しが一木は蠹のために害され一本は漸八尺許に成て當年初て花の二度開くをみたり依て思ふにこの木も極めて向陽の高き所にて倍養を加へなばその生長殊にすみ、

五瓣ニシテ小シ後實ヲ結ブ大サ南天燭子ノ如シ秋ニ至リ熟シテ黑シ又一種大葉ノ者アリ又圓葉ノ者アリ俱ニ漢名詳ナラズ

『此間彩畫八圖略レ之』

ては黒もじにまされり實は黒もじに似て大いなり是は葉と實は大にして枝は細く白し故にしろもじといへりこれも九州にてしろもんじやといふとぞ又日光にてさんなめ、あぶらちやんともいふと聞傳たへ常毛採藥錄にいふサンナメはこのしろもじに異なり油に搾り用るゆへ|あぶらちやんと呼りと釣樟の一名に烏樟の名あり烏はくろなりもじの反みなればこの木の實即黒色なればくろみともいへる歟詳ならず

大和本草云黒モジ山中ニ生ズ葉漆ニ似テ又榎ニ似タリ葉ニ囗ノ異アリ冬ハ葉落ツ皮黒クシテ香氣アリ故ニ是ヲ用テ牙杖トス皮ヲツケ用ユ又ホヤウジト名ヅク又其枝ヲ雛トス雅致ヲ助ク二月ニ小黄花一所ニ多クアツマリ開ク秋實ノル榎ノ大サノ如シ肉ニ油アリタブノ實ニ似タリ

本草一家言云樟、烏藥、釣樟一二物種類相類大者謂二之樟一小者謂二之烏藥一和名爵金花又稱二畑爵金一又關東人呼二白文字一故釣樟之條有二矮樟之名一是樟木之矮小者也釣樟和名黒文字是也根有二直根連珠之二種一樟和名久須之木釋神代卷磐樟船者云二久須一者臭木之義非也樟是香木而臭物　樟者不朽之略諷下　此木經二數百年一而不三朽腐二又能化レ石故有二久須之稱一葉圓而有二木理章一故名レ樟也烏藥似レ樟葉有二三尖一釣樟葉狹長本草載二天台烏藥一其根連珠氣極而辛香今藥肆稱二括烏藥一者是上品樟有二大葉小葉之二種一根味次二烏藥一若無二烏藥一則樟、釣樟之二根亦可二代用一功大抵相同

按俗用二楠字一訓二久須之木一非也楠自是別物楠本作レ枏杜子美草堂前所レ栽枏與レ此別物也

花壇地錦抄云くろもじ葉えの木のごとく木青しやうじにつかふくろもじなり

廣益地錦抄云黒もじ本春中　花は黄色にて一所にあつまり咲見るにたえず實秋くろくちいさくむすぶみるかいなし木の皮くろく香氣ありやうじにけづりて用ふ牙のくすりなりとぞ

本草綱目啓蒙云釣樟詳カナラズクロモジニ充ル古說ハ穩ナラズクロモジハ一名クロモンジヤ豆州クロモンジ和州トリキ越後トリシバ仙臺マツブサ南部クロトリギ野州チシヤ信州ヒシヤ同上ネソ越前フグキ雲州山中ニ多シ小木ナリ高サ六七尺木皮淡綠ニシテ黒斑アリ香氣多シ皮ヲ連テ牙杖ニ製シ賣ル葉ハ細長クシテ堅ク柯樹葉ニ似タリ春初未タ葉生セザル先ニ花ヲ開ク三五簇生ス淡黄色

樟、釣樟の三種はありて烏藥のみ自生のなければ取よせられしにや享保年中漢種二品渡ルト本草綱目啓蒙いへりこの二品天台烏藥、衡州烏藥なり今多く植るは天台烏藥なり西土にても天台烏藥ヲ名產トス略シテ台烏ト云佗所ノ產ハ土烏藥ト云同上衡州烏藥は葉三縱道をなせども冬は寒にいたみて多く枯根も香なく恐らくは烏藥にあらずと岩崎常正いへり又釣樟を和漢三才圖會にはくろたぶと訓本草綱目集解蘇恭藏器の二說を少しづゝ引又主治を少し引て自のいふは楠、樟難レ長一歲僅一寸而有二數抱大木一桐梓易レ長一歲數尺而不レ有二大木一以爲下商人戒貪二多利一而好レ奢者富不レ久得二小利一而守レ儉者福不上レ盡といへるは五雜俎に松柏の長じがたくして數抱の木あり桐は一年數尺のびて大樹なく小人の大利をむさぼるを楠樟に比していへるのみ釣樟にくろもじを充しは何人にや蘭山も古說にといへり田村元雄は釣樟に鳥つけしは一名とりつけのき通俗にいふせきしやうぼく一名しやうぶのきを充これは莖葉共に菖蒲の香あり春小黃花を開き隨て實を結ぶ九月にいたりて紫黑色に染る黑文字の實と同じ共に油を搾るべしせきしやう木は霜葉黃赤色

光澤にして美なりこのせきしやうぼくを本草綱目蓽澄茄附錄の山胡椒に充てヤマカウバシ　サルスベリ　トツナギ　トリツケノキ　トリツケシバ　ヤブゲヤキ泉州　ヤブゴシヤウ大坂　タマノキ播州　タンバ藝州　山野に多シ小木ナリ葉細長ニシテ尖リ厚クシテ互生ス夏葉間ニ小花ヲ開キこの夏花を開くといふは非なり三月葉莖を生ずれば卽蕾を生じて開くなり後實ヲ結ブ形落霜紅實ノ如ニシテ熟スレバ黑ク味辛シソノ形味倶ニ蓽澄茄ニ似タリ木ヲ折レバ香氣アリと本草綱目啓蒙にいへり本草綱目の文には山胡椒唐本草恭曰所在有レ之似二胡椒一色黑顆粒大如二黑豆一味辛大熱無レ毒主二心腹冷痛一破二滯氣一俗用有レ効といへる文を合せ見れば田村の釣樟に充しはこの山楜椒にこゝろつかずといふべけれども其功に心腹冷痛を治し滯氣を破るといへるは樟、釣樟の功と同じければ玄達がいはゆる烏藥樟、釣樟を代用して可なるといへるにかなへば其性も同じくして油料となしてもくろもじの實に異ならず又しろもじと呼木これも灌木にてくろもじと同時に花を開く黑もじよりもひらくは早くその花黃色にて細少なり一所にあつまりさく枝は殊に細くしてしほらしく枝ぶりよく揷花に用ひ

み（伊豆八島にて圓葉の桂をいへり）　しろたぶ（筑前）　うらじろ（奥州）　つゞのき　あぶらぎ（薩州）　すゝべい（同上）　しろつゞ（肥前）　をきのみのき

豊前といへるは大和本草にいへると同じく桂の實の黒赤にて方俗の呼ぶ所なり

みやまくす（俗稱）　またみ　からだも（共同上）　かばのき

品川邊にていへりこのみやまくすまたみと呼ぶ木は上にいふだも、たぶ、だまと呼桂の類にはあらずして佐藤成祐の楠に充しものにて同名異物なり又からだもともいへり故に上にいふからだも同名ありといへるはこれをさすなるべし伊豆八島にてしろだみと呼も是なり

くろもじ

くろもじの實より油を取事は大和本草に見えたりこの木もくすの木に似て香ありて灌木なれば卽樟の條下に載る釣樟に充る古説は穩ならずと（本草綱目啓蒙）見えたれども當不當は油料にかゝはらずくろもじの油も極て樟樹子油に劣まじ其子の形狀氣味ともにくすの實に似たり大和本草には肉に油アリタブノ實ニ似タリとのみいひたれども天工開物所載の樟樹子油の料大いなれば黒もじなぞも廣大の油なるべしこの木處々山中自生多し大宮八幡の山中にも生じ近國にては駿河甲斐伊豆より多く出來るを楊枝に削り用ひ墻にも作れり又挿花につかふは十二月より正月頃蒼の帽をかうぶりたるを用ゆ開くは二月に至る花は簇生して下りて黃瑞香のごとくにして淡黃色觀るにたらざればそのひらかざるを用ゆる最茶席の花は皆蒼を用ゆ蘭山は釣樟に充は穩ならずといへども玄達の一家言には樟、烏藥とあげ若無二烏藥一則樟、釣樟之二根亦可二代用一功大抵相同ともいへりこの烏藥の實よりも油をとる本草綱目啓蒙にも油ヲ搾リ燈ニ用ユベシといへり烏藥の一名に矮樟の名又矮脚樟（物理小識）ともいひ葉も三縦道にて樟の小なる木なれば至當のものなり今漢種多くありて官園はいふに及ばず處々に多く植て藥用に備ふ樟楠の二種は皇國固有の木又くろもじも處々山中自生多く九州にてもくろもんじやと呼とくろもんじやは卽くろもじの轉なり本草和名、和名類聚鈔等には見えざれども古より呼來れるにや楠、

レ此云ヘリクスタブノ葉モ桂葉ト同ク三スヂアリ白タブハ中ノタテスヂヨリ又枝スヂ處々ワカルクスタブノ實ハ冬熟シテ黑シコレモ肉ヲ去レバ其内ニ實アリクスタブノ葉ノ形ハ桂ト同ジ味モ桂ニ似テ香氣ヤヤスクナシ白タブヨリハ香アリ味辛シ木理クスノ木ニ似タリ良材ナリ白タブクスタブ二樹共ニ大木アリ本草ニ所レ載木蘭ヨクタブノ木ニ似タリ然レドモ木蘭ハ花蓮ノ如シトイヘル ハ異ナリ白樂天集所レ謂木蓮ト老學菴筆記所レ載ノ木蓮ト恐與二玉蘭花一一物而與二木蘭一異乎白タブ、クスタブノ實イヅレモ火ニ入レバヨクモエ油多ケレバ也トモニ上ノ肉ヲ去中ノ實ノ油ヲトリテ蠟燭ニ作ル白タブ楠タブ共ニ樹モ葉モヨク桂ニ似タリ香氣モ能似タリ二物共ニ桂ノ類ナルベシ桂ノ實モ亦ダモニ似タリ同類ナルベシ荏桐ヲダモト訓ズルハアヤマレリ

本草綱目啓蒙云天竺桂　ヤブニッケイ　山中ニ自生多シ甚大木アリ葉形桂葉ト同ジ只三縦道末マデ通ラズ横脈アリ香氣少シテ莽草ノ氣アリ圓葉狹葉濶葉數品アリコノ樹皮ヲ採リ松浦桂心ト稱ス肥前人松浦ヨリ出ス故ナリ味澁ク最下品ナリ近年根皮ヲ出スコレヲ眞ノ根皮ト云微シク辛味アリテ樹皮ニ優ルト雖ドモ藥用ニ堪ズ實ハ櫧實ノ如ニシテ三四粒朶ヲナシテ下垂ス熟シテ黑色上ニ白粉ヲ生ス外家ニ用ユクロッヅト云又一種葉背ニ白毛アル者アリ臭氣多シ至テ下品ナリコレヲシロダモト云

『此間彩畫四圖略レ之』

○釋名

たぶ・

和漢三才圖會樟俗云太布また大和本草にもタブと見え本草綱目啓蒙には天竺桂にタブの名見ゆ

だま

だも

ともにたぶの轉にて本草綱目啓蒙天竺桂の條下に詳なり

やぶにつけい　松浦につけい　ほとけたらし　だもだま　たぶ筑前　くすたぶ同上　たぼ加州　くすだも　あぶらしば　めんどだも勢州　だまくさ豫州　だまがら同上　くすめんどう　からだも同名あり　こがのき播州　あさかい因州　あさだ阿州　くろあさだ　むつ共同上　くろつゞのき肥前　しほだま上總　くろだま豆州　こがいのき長州已上本草綱目啓蒙載　くさだ

白タブハ中ノタテスヂヨリ又枝スヂ處々ワカルクスタブノ實ハ冬熟シテ黒シコレモ肉ヲ去レバ其内ニ實アリクスタブノ葉ノ形ハ桂ト同ジ味モ桂ニ似テ香氣ヤヽスクナシ白タブヨリハ香アリ味辛シといへるは全く桂の和産をいふなるべし九州四國には自生ありといへばいふなるべし今はまゝ庭園にも植てにつけいと呼漢種の桂より葉大にしてやはらかなり實熟して紫黒色にして莖寸餘にして細く三四粒を結べりこの實も滋潤にして脂のごとし又伊豆八島の中よりだみと呼て多く渡す皆蠟に製すしろだみ、くさだみの二種なりくさだみと呼はその實生のわづか三寸許のものを採よせしを見るに丸葉の桂なり大和本草にくすたぶといへる形狀は卽和産の桂にしてくすたぶと呼又島々にてくさと呼て桂の實をいふもくすの轉にや又白だみと呼ものは右にいふ楠にて赤たぶ黒たぶの類なるべし成祐のいふたぶは此方にてみやまくすと呼葉の形狀まではしひに似て本狹く先廣し立夏の頃新葉の中より長さ五六寸の莖を出し小枝分て五瓣の花を開く黄綠色にして穗のかたち南天燭の如にして婆娑たり花の數は多けれども實の數は少しこの實は桂、天竺桂よりも大にして熟して紫黒色なり內の核堅硬ならざれども滋潤ならざれば蠟に可なるべしさて實の赤色なるを赤たぶといふといへりこの赤黒のたぶは楠となしくすたぶは桂となし又一種やぶにつけいは天竺桂となせば桂楠の類共に油料の最なり又蘭山の楠に充しゆづり葉も桂の實のごとく紫黒色にて少し大なり共に油蠟に用ゆべし

和漢三才圖會云樟俗云二太布一按樟木似ㇾ楠而木理略麁堪二水土一也不ㇾ如二楠之強一其葉似ㇾ楠而狭長厚背有二微毛一有二赤樟烏樟之二種一黒樟乃釣樟（赤者實亦赤、黄者實亦黑）

但烏樟葉則無ㇾ毛

大和本草云タブノ木方土ニヨリダマトモダモトモ云漢名シレズ桂ノ類也二種アリ一種ハ白タブト云葉ハ桂樹ニ似テ香氣スクナシ冬赤キ實ナリツヾノミト云鳥好デクラフ其實ノ大サ木槵子ヨリヤヽ小ナリ肉ヲ去レバ其內ニ圓實一アリ肉トモニ黒ヤキニシテ小兒ノ白禿瘡ニ胡麻ノ油ニテ付ル能イヤス○一種クスタブト云其葉白タブニ似タリ最ヨク桂ノ葉ニ似タリ桂葉トクスタブノ葉ハタテスヂ本ヨリワカル凡他木ハ其葉ノ筋中ニ一條アリ桂葉ハ三條アリ本草ニモ如

古今要覽稿卷第四百五十五

●草木部 油料

たぶ　だも　だま

たぶも油料の最にして今多く用ひて蠟となすたぶも樟楠の異同ありて其說紛然たる木なり和漢三才圖會には樟をたぶとなし楠をくすの木となし大和本草にはたぶの條をあげて委しくのべその實の油を採りて蠟燭に作る事をばいへども和品と成して漢名シレズ桂ノ類也といひ本草綱目啓蒙には楠をゆづり葉となせども佐藤成祐の說には楠はたぶの木なり良安が樟楠をたがひたるは大なる誤なりまた篤信がたぶを和品とせしも同日の誤なりたぶを材となしてくすと呼たぶとくすと共に斑文あれどもたぶは斑文あらく樟はたぶに比すれば細なり今麻布櫻田町秋月筑前守門の扉は日向國より取寄し材にて一枚の板なり秋月にては多く樟楠を用ゆ日向高鍋城主なれば國より來るを用ゆ薩摩大隅日向などには樟楠ともに巨大なる樹多くして是を牛かくしと呼べり樟よりも楠に大木多く板となして九尺の物あり船に作るイトマンへ渡すくり船も樟楠にて作るくり船は長二間半幅三尺五六寸四尺許皆丸木をくりたる船なり皇國にては太古より船材となしてうきだからと呼古もくすもたぶも共に船とせしなるべし又長崎渡崎にて（この渡崎は西土の船匠多く居て清商の乘來る船の損じたるを修覆する爲に設し所なり）大なる板を削るを見て何の木と問チヨンモウとこたえたりチヨンは樟なりモウは木なり樟木の船材となすの證明けしたぶの說決せざれども其樹大にして船材となして木理もくすと同樣にてたぶの方樟よりも美なり材と成してくすと呼字にても楠樟ともにくすのきと讀は漢名を銘しなば成祐の說可なるべしたぶに二種あり大和本草にも二種アリ一種白タブト云葉桂樹ニ似テ香氣スクナシ冬赤キ實ナリツ、ノミト云とあるは今いふやぶにつけい、又うらじろにつけい、あかたもともいふ又一種クスタブト云其葉白タブニ似タリ最ヨク桂ノ葉ニ似タリ桂葉トクスタブノ葉ハタテスヂ本ヨリワカル凡他木ハ其葉ノ筋中ニ一條アリ桂葉ハ三條アリ本草ニモ如レ此云ヘリクスタブノ葉モ桂家ト同クミスヂアリ

者也 黂（爾雅又作レ䕎） 苧（同上又作レ芓） 麻母 麻仁 麻子（ともにあさのみの漢名なり）

さくらあさ（萬葉集櫻麻さくらをと訓り） をあさ はなあさ（通俗） 麻勃（一名花麻花上勃々者）

あさから（古語拾遺麻柄を訓り） をから（通俗） 麻骨（訓蒙字會）

績麻骨（物類相感志）

○正誤

本草綱目啓蒙云方莖直上七八尺對生す

蘭山はかく云れども初生かいわりより二葉を生じ三叉より五叉の頃迄は對生すれども夫より七叉となりては皆互生なり尤本草綱目所レ載の諸說にも對生とも互生ともいはず啓蒙にのみ對生の文あり

家集

我戀ははしめもしらす賤の女か　麻のをたまき末のみたれは　好忠

三百六十首中

わかまきしあさをの種をけふみれは　千枝に分れて風そすゝしき

後柏原院御集

今ははや蓬に交るあさはかに　心ともなきこゝろをもみむ

○釋名

を 和名類聚鈔 麻和名乎　あさ 同上 阿佐

そ

萬葉集に夏麻引をなつそひくと訓又奈都素妣久また奈都穪妣久とも書りこの夏そひくといふはあさを刈ことなるべし今も六月土用に入て刈水に浸して製すいにしへは生なるをもそと呼しものにや今にては緒となしたる物をそといへりうみそあをそたゝみそなどいへりその名は和名鈔等にも見えざれども萬葉集には素とも蘇とも書たればふるき事也本居宣長大祓詞後釋云菅曾(スガソ)の曾は佐乎(サヲ)のつゞまりたるにて緒なる物を何にまれいふ名也その佐(サ)は眞(マ)に通ひて眞緒(マヲ)の意也かくさまにいふ佐の眞に通ふよしは別にくはしく云りさて麻をも曾といひて即某麻(ナニソ)とも書は麻(アサ)はむねと緒(ヲ)に用る物にて即乎(ヲ)ともいふと同じ是にても曾(ソ)は佐緒(サヲ)なることをさとるべし萬葉九に即直佐緒(ヒタサヲ)ともあるは直(ヒタ)となり菅曾(スガソ)といふも菅(スガ)を細くさきて緒(ヲ)にしたる物なる故に菅眞(スガサ)緒(ヲ)の意也○考に割(サキ)の約志(シ)なるを曾(ソ)と轉じいふといはれたるはいと物遠し引れたる萬葉の眞穪木綿(マソユフ)も眞佐緒木綿(マサヲユフ)也割(サキ)たるよしにはあらず然らば佐(サ)を眞(マ)の意とする時は眞佐と同じことの重なるはいかゞと思ふ人あるべけれど眞と佐とは意は通ひておなじけれども言は異なる故に同意の言を重ねてもいふこと萬葉にさはに多み(本ノマヽ)となどもあるごとし正(マサ)しといふ言も眞佐しにて是を重ねたる言ぞかし麻を青割(アヲサキ)といはれたるも信(ウケ)がたし阿佐は青曾(アヲソ)の意にてもあらんか

こをりくさ 古名古歌本草綱目啓蒙　ぬきくさ 同上　ひねり 土州方言同上　麻

總稱　大麻 本經　火麻 日用　黄麻 俗名　漢麻 爾雅翼漢麻者以別胡麻也　山絲

苗 救荒本草以上の和名漢名は共に麻の一名雌雄をわかたず　あさのみ 本草和名阿佐乃三　をのみ 和漢三才圖會乎乃美　めあさ　みあさ 共に實を結ぶをいへり　苴麻 禮記爾雅註苴麻之盛子

櫻麻乃苧原之下草露有者令明而射去母者雖知

又卷第十二古今相聞往來歌

寄レ物陳レ思

櫻麻之麻原乃下草早生者妹之下紐不解有申尾

又卷第十三相聞

從古言續來口云々夏麻引云々

右作者未レ詳

又卷第十四東歌

奈都素妣久宇奈加美我多能於伎都洲爾布禰波等杼米
牟佐欲布氣爾家里

右一首上總國歌

奈都素妣久宇奈比乎左之氐等夫登利乃伊多良武等曾
與阿我之多波倍思

右武藏國歌

可美都氣努安蘇能麻素武良可伎武太伎奴禮杼安加奴
乎安杼加安我世牟

柿本朝臣人麻呂歌集出也

右上野國歌

雜歌

爾波爾多都安佐提古夫須麻許余比太爾都麻余之許西
禰安佐提古夫須麻

右作者不レ知

新勅撰和歌集卷第十七雜歌二

題しらず　平泰時

世中の麻は跡なく成にけり
心のまゝの蓬のみにして

夫木和歌集卷第二十八雜部十

文永四年毎日一首中　民部卿爲家

櫻麻のおふの山はた歸りあへす
つくりかへてもなにいそくらん

十題百首　寂蓮法師

賤の女か心涼しきまとゐかな
櫻麻ちるおふの下風

久安百首　郁芳門院安藝

夏草や茂みののへの麻のはに
なと夕立の玉をぬくらん

正治二年百首　土御門内大臣

かのはやす麻の立枝にしるき哉
夏の末はになれるけしきは

正三位知家卿

花爲二三物一疑而不レ決謹按呉晉本草云麻勃一名麻花味辛無レ毒麻藍一名麻蕡一名青葛味辛甘有レ毒麻葉有レ毒食レ之殺レ人麻子中仁無レ毒先藏二地中一者食レ之殺レ人據二此說一則麻勃是花麻蕡是實麻仁是實中仁也普三國時人去レ古未レ遠說甚分明神農本經以レ花爲レ蕡以藏レ土入レ土殺レ人其文皆傳寫脫誤爾陶氏及唐宋諸家皆不二考究一而臆度疑似可レ謂レ疎桌今依二呉氏一改二正於下一

麻勃

普曰一名麻花時珍曰觀二齊民要術一有レ放レ勃時拔去雄者之文則勃爲レ花明矣

救荒本草云山絲苗本草有二麻蕡一音焚一名麻勃一名荸音字一名麻母生二太山川谷一今皆處々有レ之人家園圃中多種蒔績二其皮一以爲レ布苗高四五尺有二細線楞一葉形狀似二柳葉一而邊皆有二叉牙鋸齒一毎八九葉攢二生一處一又似二荊葉一而狹色深青開二淡黄白花一結レ實小如二菉豆一顆一而區圖經云麻蕡此麻上勃々者味辛性平有レ毒〇麻子味甘性平微寒滑利無レ毒入レ土者損レ人畏二牡蠣白薇一惡二茯苓一〇採二嫩葉一煠熟換レ水浸去二邪惡氣味一再以レ水救飢淘洗淨油鹽調食不レ可二多食一亦不レ可レ食動レ風子可二炒食一亦可二打油用一

『此間彩色圖二面（あさ初生、同上五六月の物、さくらあさ、）今略レ之』

和歌

萬葉集卷第四相聞

藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子歌一首

庭立麻手刈干布慕東女乎忘賜名　略解云麻手の手は乎の誤

又卷第七雜歌

夏麻引海上瀉乃奥津洲爾鳥者簀竹跡君者音文不爲

右作者未レ詳

羈旅歌

麻衣着者夏樫木國之妹背之山二麻蒔吾妹

右者藤原卿作未レ審二年月一　略解云契冲曰藤原北卿にて房前卿なるべし

又卷第九挽歌

過二足柄坂一見二死人一作歌一首

小垣内之麻矣引干妹名根之作服異六白細乃云々

右田邊福麻呂之歌集出

又卷第十一古今相聞往來歌

寄レ物陳レ思

又（豳風七月）云禾麻菽麥
又（大雅生民）云麻麥幪々
禮記（內則）云子執麻枲學女事以供衣服
爾雅（釋草）云蕡枲實（蕡○蕡扶刀切）註（禮記曰苴麻之有蕡）疏（枲麻也蕡者卽麻子名也故云蕡枲實也云々）
又云枲麻（註別二名）疏（麻一名枲故註云別二名禹貢青州云厥貢岱畎絲枲是也）
又云莩麻母（註苴麻盛子者○莩音莩）疏（苴麻之盛子者也一名莩一名麻母）
文選（詩類）潘安仁河陽縣作云曲蓬何以直託身依叢麻黔黎竟何常政成在民和位同單父邑愧無子賤歌豈敢陋微宮但恐忝所荷
荀子云蓬生麻中不扶自直云々
齊民要術種麻子法云三月種者爲上時四月爲中時五月爲下時大率二尺留一科既放勃拔去雄
群芳譜云大麻一名火麻一名好麻一名漢麻剝其皮績之可爲布其稭白而有稜細者可爲燭心
本草綱目云大麻本經曰麻蕡一名麻勃別錄麻花上勃々者七月七日采良麻子九月采入土者損人生太山川谷弘景曰麻蕡卽牡麻牡麻則無實今人作布及履用之恭曰蕡卽麻實非花也爾雅云蕡枲實儀禮云苴麻之有蕡者註曰有子之麻爲苴皆謂子也陶以蕡一名麻勃謂勃々然如花者卽以爲花麻重出麻子條誤矣既以蕡爲米穀上品花豈堪食乎藏器曰麻子早春種爲春麻子小而有毒晚春種爲秋麻子入藥佳壓爲油可以油物宗奭曰大麻子海東毛羅島來者大如蓮實最勝其次出上郡北地者大如豆南地者子小頌曰麻子今處々種之績其皮以爲布者農家擇其子之有斑文者謂之雌麻種之則結子繁他子則不然也本經麻蕡麻子所主相同又麻花非所食之物如蘓恭之論似當矣然本草朱字云麻蕡味辛麻子味甘又似二物疑本草與爾雅禮記有稱謂不同者耳又藥性論用麻花者云味苦主諸風及女經不利然則蕡也子也花也其三物乎時珍曰大麻卽今火麻亦白黃麻處々種之剝皮收子有雌有雄雄者爲枲雌者爲苴大科如油麻葉狹而長狀如益母草葉一枝七葉或九葉五六月開細黃花成穗隨卽結實大如胡荽子可取油剝其皮作麻其稭白而有稜輕虛可爲燭心齊民要術云麻子放勃時拔去雄者若未放勃先拔之則不成子也其子黑而重可搗治爲燭卽此也本經有麻蕡麻子二條謂蕡卽麻勃謂麻子入土者殺人蘓恭謂蕡是麻子非花也蘓頌謂蕡子

本草和名云麻蕡 楊玄操音墳 一名麻勃 此麻花上勃々者 牡鹿也 蘇敬注曰蕡即麻實也陶景爲花大誤也 人精 出太清經 華名青葙 出神仙服餌方 和名阿佐乃三

和名類聚鈔 織機具 云麻苧說文云麻 音磨和名乎一云阿佐 枲屬也爾雅注云枲 司里反和名介無之 麻無子名也周禮注云苧 直呂反上聲之重和名加良無之 麻屬白而細者也

和漢三才圖會云麻 和名乎又云阿佐 處々多種之甲州上之白苧下總之岡地苧多運送于江戸丹波丹後但馬因幡出雲石見安藝豐後肥後並多出煮披苧送于大坂品類最多惟如畿內及東南諸州多種草綿而種麻者希○造苧法去麻梢葉取莖浸流水剝皮和炭汁略煮之再浸水以竹篦刮去粗皮用白皮晒乾謂之煮扱今呼麻曰苧故呼苧麻曰眞苧 麻苧見于濕草部 麻仁 乎乃美 鳩鷃鴒喜取食之故難多收價十倍於胡麻而功劣於胡麻故不爲食品惟入藥用○麻稭 乎加良又云阿左加良 麻莖也正白而輕虛俗間聖靈祭用爲箸或每爲燭心或畫工作試圖爲燔筆亞于杉木

大和本草云大麻一名火麻子雌ハ子アリ麻仁ナリ雄者名枲麻又牡麻ト云實ナシ雌雄共ニ皮ヲトリテ布トス宿根ヨリ不生毎春實ヲマク上世ニハ麻仁ヲ五穀トス月令ニ食麻トアルハ麻仁ナリ今ハ食セズ胡麻ハ上代ノ穀ニハアラズ麻仁ノ功能多シ本草ニ見タリ麻葉ヨク瘧ヲ治ス用ヤウ本草ニ見エタリ日本紀舊事紀ニ麻ヲウヘシ事アリ日本ニ上代ヨリ有之也

用藥須知云麻仁火麻仁是ナリヲノミナリ花アサ實アサノ二種アリ花ヲ開クモノハ不結實蒙頭ノモノ結實ミアサト稱ス是アサノ雌雄ナルベシ麻葉誤テ食ベカラズ令人狂笑不止亦不可不知

本草綱目啓蒙云大麻春種ヲクダス方莖直上七八尺對生ス形細長葉八九圓ニナラビテモミヂノ葉ノカタチノゴトクニシテ長大ナリコレニ雌雄ハケムシ古名ヲアササクラアサト云フ花ヲ生ジテ實ヲ結バズ釋名ニ苴麻苧麻ト云フ一名麻母 救荒本草 大麻ノ皮ヲハギタル跡ノ楷ヲアサキト云フ一名アサガラコレヲ麻骨 訓蒙字會 ト云一名續麻骨 物類相感志 食物本草ニ花名麻勃子名麻蕡ト云フ釋名ニ花名麻蕡麻勃ト云ハ本經ノ文ニ據ルコレハ誤ナル事正誤ニ辯ゼリ

詩經 王風丘中有麻 云丘中有麻

又 齊風南山 云蓺麻如之何

又 陳風東門之枌 云南方之原不績其麻

又 陳風東門之池 云東門之池可以漚麻

古今要覽稿卷第四百五十四

●草木部 油料

あさ　大麻

を一名あさ一名あさのみ大麻は本邦固有のものにて今に民家庭園に植皮を以絲となし布となし其用多くして生民に益ある物なりその緒を取たるををからと呼又あさから麻柄とみえたり古語拾遺このをからに功用あり火藥に用るは第一なりすでに桐杉松さはら等を用ゆれども銕砲にはをからに勝れるはなし又この黒燒積聚疳症に用てよしといへりまた今世七月靈祭に用ゆしかれどもこの生葉には毒ある物なり用藥須知に令レ人狂笑不レ止といへりある人の園中に繁茂したる葉を其僕採てゆびき味噌にあへて食せしに間もなく人事をしらずなりたりときけりしびれの病を麻木といふも是等の事よりいひしなるべし佐藤成祐は花にも殊の外毒あり救荒本草にも麻上花勃に者味辛性平有毒實も皮を去り仁ばかりを食すれば上氣する物なり皮と共に食すれば害なしといへり延喜式に麻子油ありこの物春種を下し夏長じ七月より實を結べは油料となして佳なるべけれども今に至りては絕て麻子油を用ざるも故ある事なるべし食饌には用ひずとも燈油には搾り用ゆべきものなりさてこれに雌雄の二種ありて雄は花を開きて實のらず雌は花なくして實のるといふげに花開くものは實のらず花をひらくものをさくらあさといへり此名ふるく萬葉集の歌にも詠その花多くあつまり生ず蒼淡綠色にして五瓣の小白花を開く皆下に向ひ開く蘂は淡黃にして花に比しては蘂大ひなりこの花盛長く立秋よりひらき本經にいふ麻蕡七月廿日采といふにかなへり始め白露に至りて花葉とも枯實のるものなくして初めより小實の形をなして綠色の皮をかふむりて多く二粒つゝ並附熟するに至て苗葉枯槁す櫻あさより凋む事遲し又緒を取糸となし布となすには土用に入て刈水に浸して製すいまだ花實を生せざる時なり又生葉をみな月御祓にもちゆるなり西土にも神農本經より禮記內則に女子執二麻枲一とみえ詩にも諷し和漢ともに大古より今に至る迄生民日用の廣大なる事はのぶるに及ばざるなり

レ枝、養レ材三十年、方成二棟梁姿一、一朝爲二灰燼一、柯葉無二子遺一、地雖レ生二爾材一、天不レ與二爾時一、不レ如二糞土英一、猶レ有二人掇一レ之、已矣勿二重陳一、重陳令二人悲一、不レ悲二焚燒苦一、但悲二采用遲一、

古今六帖

和泉なるしのたの森の楠の　　きのいらつめ
千枝に分れて物をこそ思へ

〇釋名

久須乃岐本草和名和名類聚鈔　くす通稱

豫樟

慧琳音義大方廣三戒經下音章豫樟大木也南中異物志云生七年方知若作レ船必與レ龍鬪

樟楠

同上佛般泥洹經之羊反豫樟木也生七年而可レ知也極大木也佛母般泥洹經樟枏梓上掌穰反顧野王云大木也考聲木名也中納潭反郭注爾雅亦大木也俗作レ楠經作レ柟誤也下茲死反考工記云攻木之工梓爲レ器也考聲云又木名也尙書曰楄樟豫樟是也經律異相樟梓上音章下音茲死反並南方大木名也〇時珍曰其木理多二文章一故謂二之樟一

櫲樟

康煕字典櫲集韻羊洳切音豫櫲樟名本作二豫章一

椪

蘭山の本草綱目啓蒙に引二品字箋一康煕字典椪集韻類篇並側羊切音莊木名似二豫章一其小似レ桃と見えたれども品字箋の文には豫章の一名にて决したる名なるべし

香樟雅通

〇正誤

用藥須知云楠ノ字ヲ俗ニクスノ木ト訓ズ非ナリ

按にクスノ木に楠字を用るは慧琳音義佛母般泥洹經の樟枏梓の注に枏納潭反爾雅亦大木也俗作レ楠經作レ柟誤也とみえて唐の代の俗字なりされはこそ古よりクスノ木とよみて稱號にも用ひたり近世舶來の淸人に法帖の表紙に代る材を問たれば香楠と書て答たり卽皇國の樟なりされば淸俗にも用る字にてはあるなり又慧琳音義經律異相樟梓の注に並南方大木名也とみえ又玉篇楩木似二豫章一司馬相如子虛賦に楩楠豫章爾雅釋木闕レ楩疏楩及豫章皆南方大木之名也以上康熙字典ともみえたり

その香あるをもて奇となせしにや或は其石と化りぬるを奇也として此名有にや其詳成事は聞えず浮賓とは杉と櫟樟との兩樹は船材となすべき事をいふ也其舊說にはみえたり

本草綱目啓蒙云樟クスノキ大木アリ天竺桂葉ニ似テ短ク樟腦ノ氣アリ互生シテ冬凋マズ春新葉ヲ生ジテ舊葉落ツ夏月小花ヲ開ク白色微黃後小圓實ヲ結ブ秋ニ至リ熟シテ黑シ用テ蠟ヲ採ルコノ木中心赤黑色ニシテ香氣强キ者眞ノ樟ナリコレヲ煎ジテ樟腦ヲ採ルベシ中心赤黑色ナラザル者ハイヌクスト呼ブ一名シロクス豆州樟樹老タル者ハ木理美シコレヲ玉モクト云又老樹火ヲ生ジ自ラ燒ク物理小識ニ豫章老則出レ火自焚不レ宜レ近ニ家室一ト云先年城州八幡社外ノ老樟自ラ燒タリ是腦アル故ナリ

本草綱目云樟藏器曰江東舸船多用ニ樟木一縣名ニ豫章一因レ木得レ名時珍曰西南處々山谷有レ之木高丈餘小葉似レ楠而尖長背有ニ黃赤茸毛一四時不レ凋夏開ニ細花一結ニ小子一木大者數抱肌理細而錯從有レ文宜ニ於雕刻一氣甚芬烈豫章乃二木名一類二種也豫卽釣樟見ニ下條一

通志昆蟲草木略云豫章其木甚大南都之郡因レ此得レ名今人謂ニ之樟木一

華夷花木鳥獸珍玩考云樟正義云豫今枕木章今樟木二木生至ニ七年一枕樟乃可ニ分別一又豫章郡名應邵曰有ニ豫章一生ニ於庭中一故以名レ郡按此樹最大可下解爲ニ卓面一及爲上船其氣中烈熬ニ其汁一可レ爲レ腦置ニ水上一火燃不レ熄結レ子可レ笮レ油神木廠所若ニ大木一皆永樂中肇建ニ宮殿一之賸物也其最巨有ニ樟扁頭一

樟木其頭扁盖當時穿レ之以施ニ拖曳者力一也廠中木惟此最鉅守廠者特以ニ樟扁頭一呼レ之入者心觀レ焉圍二丈長四丈餘騎而過ニ其下一高可ニ以隱一近年覆レ芘不時風雨震淋朽腐已侵レ半矣當時殿閣之用如ニ扁頭一類吾不レ知ニ其幾一

『此間くすの木の畫二枚略レ之』

詩歌

白氏文集

寓意詩

豫樟生ニ深山一七年而後知挺高二百丈、本末皆十圍、天子建ニ明堂一、此材獨中レ規匠人執ニ斤墨一、采度將レ有レ期、孟冬草木枯、烈火燎ニ山陂一、疾風吹ニ猛焰一、從レ根燒到

しにいはれたるこそたれかはかずをしりていひはじめけんとおもふぞおかしき云々

八雲御抄云しのだのもりのちえはくすの木也云々

和漢三才圖會云楠葉似ニ櫧葉ニ而光澤背淡白邊略反卷莖微赤五月開ニ細白花ニ帶レ黄其子如ニ豆大ニ而靑色本細似ニ細口梨形ニ其木堅實耐レ水以造レ船其根株經レ歲者變爲レ石

大和本草云樟腦樟ト楠ト一類二物也國俗ノクスノ木ト云物二品アリ一品ハ香ツヨク木心黑赤樟腦ヲ煎ズ是樟ナリ一品ハイヌグスト云香少シ木心赤黑ナラズ是楠ナリ楠ニハ大木アル由本草ニイヘリ今所々楠ノ木多シ佗木ニ楠ホド大ナルハナシ楠ノ根ニ米泔ヲソソゲハ必枯ル

○文海披砂曰建寧都司有ニ五代時樟木ニ其竅中可レ設ニ數席ニトイヘリ大木ハ傍朽空シキアリ日本ニモ如レ此大木アリ

用藥須知云樟腦クスノキヲ煎ジタルモノナリ樟ハクスノ木ナリ楠ノ字ヲ俗ニクスノ木ト訓ズ非ナリ楠ハ柟ト同ジ此ト別ナリ方書ニ韶腦トイヘルモ韶州ノ樟腦ナリ

東雜云楠クス倭名鈔に和名本草を引て楠はクスノキ日本紀に櫲樟を讀事亦同じとみえたり舊事古事等の紀に二柱の神鳥之石楠船神を生み玉ひしとみえ又舊事紀に鳥磐櫲樟船を生み今の載ニ蛭兒ニ流放棄つとみえしをば日本紀には蛭兒をば載ニ天磐櫲樟船ニ放棄つとみえたり又舊事紀日本紀に素戔烏神眉毛を拔散し玉ひしが櫲樟となりしに杉と櫲樟此兩樹者可ニ以爲ニ浮寶ニとの玉ひしともみえたり石楠といひしは今も俗に此樹久しくして石となれるなどいふ事は太古の時よりいひつぎし所と見えたればかくはいふ事とぞみえたる

倭名鈔に日本紀に櫲樟を讀事楠に同じとみえしは東璧本草に據るに櫲樟似レ楠而一類ニ二種なりとみえたり我國の俗にはもとこれその類なるを以楠と櫲樟と並に呼てクスといひしなるべし又石楠花といふものイハクスといひしものにはあらず別是一物なり詳に下に見えたり

古語にクシともクスともいひしは後の代に奇と云る如くなれば奇の字讀てクシともクスともいひけり或は其材の浮寶となしつべければ奇となせしにや或は

彌遙切音蟭蟲名又通志六書略紕招切同㆑螵或作㆓蟁
蟁㆒蜱の正は蜱にてヒヘウ兩音なり今ヒマと云へ
り

蓖

康熙字典に蓖唐韻邊兮切音鎞玉篇蓖麻本草葉似㆓
大麻子㆒如㆓牛蜱殼㆒中白肉如㆓續隨子㆒仁油可㆑作㆓
印色㆒子無㆑刺者良有㆑刺者毒字作㆑蓖亦作㆑萞
萞玉篇同蓖と同上に見えたり
萞麻諸書共に如㆑此

くすのき 樟

くすの木の實より油をとり用る事は上に出す草麻子と共にその料をいへり天工開物に菎麻子、樟樹子、毎石得㆓油四十斤㆒と見ゆれば油となして益多き物なれども油を採る事はいまだ聞ず本邦にても蠟を採ることは本草綱目啓蒙に見えたり蠟となせばその初めは極めて清油なるべしくすのきは殊に喬木にて莖葉ともに香高しその葉は桂に似て少し薄く三縱道あり五月末白き細花一莖に五六開く隨て實を結ぶ大さ三分許綠色にして冬に至りて紫色に染この頃冬を經ても落ざるありこの核は薄くして破れやすしわれば白仁あり滋潤にして香あり極て清油多くして跡は蠟に佳なるべしこの木を煎じて樟腦とす是燈となして水中にも消ず火藥の用殊に多し

日本書紀神代巻云拔㆓散胸毛㆒是成㆑檜云々眉毛是成㆓櫲樟㆒已而定㆓其當㆑用乃稱㆑之曰杉及櫲樟此兩樹者可㆔以爲㆓浮寶㆒云々

又紀繼體云正月甲申天皇行㆓至樟葉宮㆒云々

又紀欽明云夏五月戊辰朔河內國言泉郡茅渟海中有㆓梵音震響㆒若㆓雷聲㆒光彩晃曜如㆓日色㆒天皇心異之遣㆓溝邊直㆒此但曰㆑直不㆑書㆓名字㆒蓋是傳寫誤失矣入㆑海求訪是月溝邊直入㆑海果見㆓樟木浮㆑海玲瓏㆒遂取而獻㆓天皇㆒命㆓畫工㆒造㆓佛像二軀㆒今吉野寺放㆑光樟像也云々秋七月辛酉朔甲子幸㆓樟勾宮㆒云々

本草和名云楠材楊玄操音南和名久須乃岐

和名類聚鈔云楠唐韻云楠音南字亦作㆑柟和名本草久須乃木木名也櫲樟豫章二音日本紀讀上同木名生而七年始知矣

清少納言枕草紙云くすの木はこだちおほかる所にもことにまじらひたてらずおどろ〳〵しきおもひやりなどうとましきをちえにわかれてこひする人のため

アツマリテ神樂ノ鈴ノ如シ實ハ圓ニシテ七分外ニ柔刺アリテ栗毬ノ如シ時珍子無レ刺者良ト云和産ナシ熟スレバ中ニ三子アリ形雲實（ハマサ、ゲ、ハシ ヤツケツイバラ）ノ如ク白黑斑アリ此仁ヲ搾リテ油ヲ採リ印色ニ合セ及ビ紙ニヒクベシ秋深テ苗根共ニ枯ル

本草綱目云蓖麻恭曰此人間所レ種者葉似二大麻葉一而甚大結レ子如二牛蜱一今胡中來者莖赤高丈餘子大如二皂莢核一用レ之亦良保昇曰今在處有レ之夏生レ苗葉似二葎草一而大厚莖赤有レ節如二甘蔗一高丈餘秋生二細花一隨レ便結レ實殼上有レ刺狀類二巴豆一青黃斑褐夏采二莖葉一秋采レ實冬采レ根日乾用時珍曰其莖有レ赤有レ白中空大如二瓠葉一每葉凡五尖夏秋間椏裏抽二出花穗一纍々黃色每枝結レ實數十顆上有レ刺攢如二蝟毛一而軟凡三四子合成二一顆一枯時劈開狀如二巴豆一殼內有レ子大如二豆殼一有二斑點一狀如二牛蜱一再去二斑殼一中有レ仁嬌白如二續隨子一仁有レ油可レ作二印色及油紙一子無レ刺者良子有レ刺者毒

祕傳花鏡云蓖麻在處有レ之夏生レ苗葉似二葎草一而厚大莖赤有レ節如二甘蔗一高丈餘而中空夏秋間椏裏抽二出花穗一纍々黃色隨レ便結レ實殼上有レ刺狀類二巴豆一青黃斑褐點再去二斑殼一中有レ仁嬌白如二續隨子一仁有レ油可レ作二印色及油紙用一

三才圖會云蓖麻在處有レ之夏生レ苗葉似二葎草一而厚大莖赤有レ節如二甘蔗一高丈許秋生二細花一隨レ便結レ實殼上有レ刺實類二巴豆一青黃斑褐形如二牛蜱一故名レ之夏採二莖葉一秋採レ實冬採レ根日乾胡中來者莖子更大味甘辛有二小毒一主二水癥一又主二風虛寒熱身體瘡癢浮腫尸疰惡氣一笮取レ油塗レ之

『此間からかしはの畫一枚略レ之』

○釋名

からがしは

和漢三才圖會に唐栟はその葉をいふといへり

からえ同上

唐荏はそのあぶらをいふといへり

たうごま通俗　たうのごま遠近子實名和方書

蜱麻

本草和名和名類聚鈔西土の書にては千金方に見え皇國にては上に引ところの二書に見えたたり蜱は康凞字典に蜱唐韻符支切集韻頻彌切音陴爾雅釋蟲不レ過二蟷蠰一其子蜱蛸註一名轉蟭蟷蠰卯也又廣韻

花と葉と互生するものにて又をなせば花を開き葉を生じ又花を開くものなれば初め開く花は實を結び熟するも七月よりありて段々生長すれば丈餘にも及びて花葉ともに盛をなせども十一月に至りて莖葉根共に枯る又ある人の曰この實皮を去り細き竹串にさして燈となせば卽時に蠟燭の代となして甚光明なりといへり隨て竹につらぬきて燈となすにそのひかり白黄にして恰も樟腦の火の如しこれは核を破りて其ままにてかくの如くなれば搾りて淸油とりて後を蠟となしたらは極めて淸光なるべしさてこの種は菘菜子よりは不便なれども油料の最なり食饌にあたらざれどもその救危難產等に用るは他の子種の及ぶ所にあらず

本草和名云萆麻（蘇敬注云其子如レ蜱故名ニ萆麻ー）一名荷蜱一名蜱麻一名野蜱一名仙人骨一名故麻（已上五名出ニ兼名苑ー）和名加良加之波

和名類聚鈔云本草云萆麻（上音釜示反和名加良可之波一云加良衣）

和漢三才圖會云蓖麻和名唐榊言ニ其葉ー唐荏言ニ其油ー今俗稱ニ唐胡麻ー出於ニ和州ー者良紀州藝州之產次レ之近頃煉成用代ニ蠟燭ー又取レ油法蓖麻仁去レ殼五升用ニ水一斗ニ煎レ之沫出盡取ニ一點ー入レ水不レ散爲レ度

大和本草云蓖麻子西土ノ方言タウゴマ其子巴豆ニ似タリ有ニ斑點ー仁有レ油印色トシ油紙ニ用ユ有レ毒損レ人不レ可ニ輕服ー但外治ニ用ユ其功多シスツテ腫物ニ付ル又難產ノ催生ニスツテ足心ニツク子生ルレバ早ク洗去ベシ口眼歪邪右ユガムニハ左ニ貼ク左ユガムニハ右ニ貼ク手臂腫痛ニモツクル一日ニシテイユ偏頭風ニモ乳香ト合シテツキマゼヌル右本草通言ニ出ヅ胞衣不レ下ニモツキテ足心ニヌル下ラバ早ク洗去ベシヲソケレバ子腸出子腸出テバ卽此膏ヲ頂ニヌレバ子腸入ル又難產ニ二方ノ手ニ七枚ツヽ兩手ニ十四枚ニキラシムベシ右本草ニ見エタリ附方ニ功能多シ可ニ考用ー又油ヲセンズル法アリ可レ見丹溪曰追レ膿拔レ毒爲ニ外科要藥ー

本草綱目啓蒙云蓖麻一年ダチノ草ナリ春分種ヲ下ス苗高サ一丈許莖ハ直上シ枝ナク圓ニシテ空虛アリテ竹ノ如シ徑リ一寸餘及白色ニシテ粉アリ又紫色ナルモノアリ葉節ニ互生ス大サ一尺餘モミチ或ハ八角金盤ノ葉ノ如シ七ツ或ハ九ツニ深クキレ岐ヲナシテ鋸齒アリ附方ニ九尖蓖麻ノ名アリ葉モ白色ヲ帶ブ秋ニ至テ莖梢或ハ葉間ニ花アリ日ニ向テ開ク黃白色辟屑

古今要覽稿卷第四百五十三

●草木部 油料

からがしは　草麻

からかしは一名からえ和名鈔たうごま俗稱漢名草麻また萞麻は春種を蒔て夏長じ秋に至りて實を結ぶその形狀は本草綱目啓蒙に詳なれどもその葉の形をもみぢ、八角金盤（やつで）のごとしといふは誤なりもみぢ、やつで共に葉の本に莖つくたうごまは蓮の葉の如く葉の中に莖付て多く八岐に分れて上下二葉左右三葉つき八方に開き東西南北乾艮巽坤を書ても可なる葉形にて八角金盤の名はたうごまの葉に銘じたきものなりたうごまの油は本邦にては外科の用印色の用のみなれども天工開物に萞麻子每石得二油四十斤一また造燭則槽皮爲レ上萞麻子次レ之と見えたれば清油を搾りてあとを蠟となすべし志村知孝曰昨年天保八萞麻子十粒を蒔しが二本生長して七月より花を開き實を結びたり兩度の嵐に吹倒れ枝も折しを漸起し竹など添てたすけ置しかば又生氣盛にして花を開き實を結びたり是は一年たちの草なれどもその性強くして九月十月の霜にはおとろへずして花を開き實を結び十一月にいたりて霜の嚴しきに絕ずして凋めりその十粒蒔て二本生じ兩度の嵐に倒れたれども十一月迄の種を計り見るに六合に近かりき

この十粒の種は年を經しにや年は經ずとも種の生じ難き類にやいまだ詳ならず

されば駿河國安房國などの暖地にて培養を加へなば其料ことに多かるべし萞麻に赤莖白莖の二種ありて赤莖のかたは強く霜にもいたむ事遲しといへり

本草綱目に蘇恭保昇の說ともに赤莖時珍の說に其莖有レ赤有レ白と見え三才圖會祕傳花鏡みな赤莖といへり

皆莖赤といへりこの草初生貝わり葉丸く夫より上は五六岐なれども多く六岐にして對生し夫より上八岐にして互生す

八岐の葉全體にして梢上迄變ずる事なし八九と云は非なり

根上より三四尺直立して又をなし分れて立のぼるに

許二植レ之不レ倒爲レ度髹レ物白粉辰砂綠靑等和調其色鮮明

大和本草云荏本草綱目紫蘇集解時珍曰其面背白者卽白蘇乃荏也故本草ノ目錄ニアリテ後ハ荏ヲシルサズ油ヲトリテ雨衣ニスル是紫蘇ノ類也國俗荏油ヲ桐油ト云誤ナリ

本草綱目啓蒙云荏エヽエゴマ苗葉花實皆紫蘇ニ同クシテ香氣アリ唯葉ノ色靑ク花ノ色白シ野圃ニ多ク栽ヘ子ヲ收メ油ニ搾リ雨衣傘ノ用ニ供シチヤンヲ製ス又子ヲ用テ小鳥ニ飼フ原野自生ノモノヲ野荏ト云俗ニノヱト呼ブ子小ニシテ香氣殊ニ烈シク小鳥モ食フコトアタハズ原本目錄ニ荏アリテ本條ヲ闕ク新校正ニハ證類本草ヲ以テ補フ

證類備用本草云荏子味辛温無レ毒主二欬逆一下レ氣温中補レ體

葉主調中去二臭氣一九月採陰乾陶隱居云荏狀如レ蘇高大白色不二甚香一其子硏レ之雜レ米作レ糜甚肥美下レ氣補益東人呼爲レ䓋音魚以三其似二蘇字一但阴二水邊一故也笮二其子一作レ油用煎レ之卽今油帛及和レ桼所レ用者服食斷レ穀亦用レ之名二重油一唐本注云別錄荏葉人常生食其子故不レ及レ蘇也今按二陳藏器本草一云荏葉擣傅二虫咬及男子陰腫一江東以二荏子一爲レ油北土以二大麻一爲レ油此二油俱堪二油物一若二其和漆荏一者爲レ強爾臣禹錫等謹按孟詵云荏子其葉性温用時擣レ之治二男子陰腫一生擣和レ醋封レ之女人綿裏內三四湯簫炳云又有二大荏一形似二野荏一高大葉大小荏一倍不レ堪レ食人收二其子一以充二油絹帛一與二大麻子一同其小荏子欲レ熟人採二其角一食レ之甚香美大荏葉不レ堪レ食日華子云荏調レ氣潤二心肺一長二肌膚一益二顏色一消二宿食一止二上氣欬嗽一去二狐臭一付二蛇咬一子下レ氣止レ嗽補レ中塡二精髓一

食療

生欬逆下氣其葉杵レ之治二男子陰腫一謹按子壓作油用亦少破レ氣多食發二心悶一温中補レ中益レ氣通二血脉一塡二精髓一可二蒸令一レ熟烈日乾レ之當レ口開レ春取レ米食レ之亦可休レ粮生レ食止レ渴潤レ肺

梅師方

治二虺中一レ人以二荏葉一爛杵猪脂和薄傳上

本草綱目に荏の一條を治ともに漏しゆゑ證類本草の文を詳にそへ入しこと右の如し

あれば今いふサンシヤウ虫なる事明なり蔓椒の蔓の字に疑惑して決せざれどもとても蔓生する山椒のある事なし今米澤白川邊にてはイヌザンシヤウより油を取用るといへりさりながら目には佳ならずして纔て燈とすれば目しびれるといへり佐藤成祐昆陽漫錄にいふ葉山椒に似て秋にいたり五味子の大さの赤實を結び小兒實を食ふ土人實を取て油となしホソキと云といふ如何なるものにや詳ならず

日本書紀皇極天皇云秋七月不盡河邊人大生部多勸㆑祭㆑蟲於㆓村里之人㆒曰此者常世神也祭㆓此神㆒者致㆑富與㆑壽巫覡等遂詐託㆓於神語㆒曰祭㆓常世神㆒者貧人致㆑富老人還㆑少由㆑是加勸捨㆓民家財寶㆒陳㆑酒陳㆓菜六畜於路側㆒而使㆑呼曰新富人來都鄙之人取㆓常世蟲㆒置㆓於清座㆒歌儛求㆑福棄㆓捨珍財㆒都無㆑所㆑益損費極甚於㆑是葛野秦造河勝惡㆓民所㆑惑打㆓大生部多㆒其巫覡等恐休㆓其勸祭㆒時人便作㆑歌曰「禹都麻佐波柯微騰母柯微騰枳與曳俱屢騰擧預能柯微乎宇智岐多麻須母」此蟲者常生㆓於橘樹㆒或生㆓於蔓椒㆒蔓椒此云褒曾紀其長四寸餘其大如㆓頭指許㆒其色綠而有㆓黑點㆒其貌全似㆑養㆑蠶

本草和名云蔓椒一名豕椒一名猪椒一名彘椒揚玄操音直例反一名狗椒揚玄操音義作把居其反　一名樛揚玄操音彪　一名豨殺　已上二名出蘇敬注和名保曾岐一名以多知波之加美和名類聚鈔云蔓椒本草云蔓椒和名以多知波之加美一云保曾木

荏　ゑ　ゑごまその形狀紫蘇と同して莖葉の綠色なるのみ實も紫蘇子より大なるのみまた天工開物に蘇麻形似㆓紫蘇㆒粒大㆓于胡麻㆒といふもの卽荏なるべし本草綱目紫蘇の集解に九月半枯時收㆑子々紅如㆓芥子㆒而色黃赤或謂此亦可㆑采㆑油如㆓荏油㆒といへり紫蘇子のあぶらは荏油の如く傘挑燈雨衣等の用には立まじけれども食料となさば佳なるべし

本草和名云荏子一名蕉揚玄操音魚而作蘇　重油其子作㆑油曰煎名也　和名於保衣乃美

和名類聚鈔云荏野王案云葉大而有㆑毛其實白者曰㆑荏而枕反和名衣野王案云葉細而香其實黑者曰㆑蘇

新抄本草云和名乃良衣一云㆓奴加衣㆒

此二物雖㆓一類㆒其狀不㆑同耳

和漢三才圖會云荏關東多種蒔用㆑子搾㆑油爲㆓燈油㆒又引㆓傘挑燈雨衣等㆒不㆑燃而能凌㆑雨又煉代㆑漆造法密陁僧大滑石中枯礬少入㆑油以㆓文火㆒煉用以㆓燈心寸

新梁新脊正新暑、緇衣使者念二山翁一、　、

七言絶句

對客　元　薩都剌

石榴花開光照レ屋、胡桃大陰滿□簾、焚香終日對レ客坐、時有二白雲一來纖々、

古今六帖

くるみ　つらゆき

鶯に春しられけはなけれとも
春くるみちのものにそ有ける

新撰六帖

くるみ　衣笠内大臣家良公

夏山のすそ野にしけるくるみはら
くるみいとふな行て逢みん

前藤大納言爲家

時雨にもぬるゝくるみのかはかすて
おのか心となにゝそむらん

九條三位入道知家

うきふしをなけきくるみのそめほねは
あまたつらさの數そ重ぬる

左京大夫行家

夏山のしけみかくれのひめくるみ
かねてみまくのかたき戀哉

右大辨入道光俊

山からのまはすくるみのとにかくに
もちあつかふは心なりけり

蔓椒はいまだ諸家産物の書に決したる說もなく紛然たる物なれども小島春菴の僕に信濃の者あり我國にホソキといふものありといひしゆゑ採よせさすれば即イヌサンシヤウなりしかばホソキの名彼國にのこれりといへり又皇極天皇の紀に常世蟲の事ありこの蟲橘樹に生じ或は蔓椒に生ずといふによれば決定せり蔓椒を油料とせば蜀椒の類いづれの椒にてもしかるべし又昆陽漫錄云蔓椒日本紀に蔓椒此云保曾紀トアリテ今山椒ノ葉ニ似テ秋ニ至テ五味子ノ大サノ赤實ヲ結ビ小兒實ヲ食フ土人實ヲ取テ油トナシ保曾紀ト云トアリコレ古ノ蔓椒ナルコト疑ナキガ如シトイヘドモ常世ノ蟲アルコトヲ詳ニセザレバ蔓椒ト定ガタシ尚信濃ノ人ニ尋定ムベシといへり是常世の蟲を何と思ひて疑を興せしにや橘樹に生じ蔓椒に生ずと

ニグルミヨリ長大ニシテ核モ亦大ナリ一寸餘ニシテ皺多シ故ニ仁モ大ニシテ岐多シ本邦ニ多ク栽ル者ハオニグルミナリ略シテクルミト云一名ヲグルミ加州ヲツコロミ東國大木ナリ葉ハ漆葉ニ似テ大ク邊ニ細鋸齒アリ春新葉ヲ生ジ夏花アリ栗ノ花ノ形ニ似テ長大ナリ穗ノ長サ六七寸黃白色下垂ス花ハ至テ細ク栗ノ如シ後實ヲ生ズ形桃實ノ如ニシテ青シ熟スレバ黑色内ニ核アリ甚堅硬ニシテ厚シ火ヲ以テ微シ燒ハ皮微シ開ク時及ヲ入テ破リ仁ヲ採リ食用シ又小鳥ニ飼フ一種ヒメグルミ一名メグルミ加州核薄シテ皺少ク中仁採リ易シ集解出ニ陳倉一者薄皮多肌ト云者ニシテ陳倉胡桃ト名クベシ山胡桃ノ中ニテ仁全ク採レ馬鞍ノ形ノ如ナル故上品トス一種カラスグルミハ越後ノ産ナリ核自ラ開キテ鳥ノ口ヲ開クガ如シ故ニ名ク一種奧州會津大鹽村ニ權六グルミト云アリ核小ニシテ壓ヲジメ口捺子トナスベシ是宍澤權六ノ園中ニ產ナル故ニ名クト云甲州ニモコノ種アリ一種羽州野代ニ形圓大ニシテ殼薄ク手ニテ碎キ仁ヲ出スベキモノアリテウチクルミト云フ

本草綱目云頌曰胡桃生ニ北土一今陝洛間甚多大株厚葉多陰實亦有レ房秋冬熟時采レ之出陳倉者薄皮多肌出レ陰平者大而皮肥急提則碎汴州雖レ有而實不レ佳江表亦時有レ之南方則无時珍曰胡桃樹高丈許春初生レ葉長四五寸微似ニ大青葉一兩々相對頗作ニ惡氣一三月開レ花如ニ栗花一穗蒼黃色結レ實至レ秋如ニ青桃狀一熟漚爛皮レ肉取レ核爲レ果人多以ニ櫸柳一接レ之案劉恂嶺表錄云南方有ニ山胡桃一底平如ニ檳榔一皮厚而大堅多肉少穰其殼甚厚須ニ推レ之方破一然則南方亦有但不レ佳耳

詩歌

佩文齋詠物詩選

七言古

送ニ鶴林長老胡桃一裹茶三角一　　元　薩　都　剌

胡桃殼堅乳肉肥、香茶雀舌細葉奇、枯賜無レ物不レ可レ用、寄與說レ法談禪師、竹龍吐レ雪澗水活、茅屋煙炊樹雲薄、竹院深沈有ニ客過一、碎レ桃點レ茶亦不レ惡、

七言律

胡桃　　宋　楊　萬　里

三韓萬里半天松、方丈蓬萊東復東、珠玉鎖成千歲實、氷霜吹落九秋風、酒邊膈膊才車響、座上須臾榛欏空、

トリテ諸品物ヲ煎ジ食ス味胡麻ヨリカロク無レ毒ト云木草ニ婦人ノ髮脏ネバルニ研末シテ摻レ之

くるみ 胡桃

和名類聚鈔云胡桃七卷食經云胡桃味甚甘温食レ之有レ油甚美和名久留美 博物志云張騫使二西域一還時得レ之故曰二胡桃一也

本朝食鑑云胡桃春初生レ葉長四五寸類二栗及奴留天一葉兩々相對有二惡氣一樹高數丈三四月開レ花蒼黃色作レ穗如二栗花一結レ子似二小桃一而青至レ秋黃熟漚二爛皮內一使レ核槌碎取レ仁爲レ果鬼胡桃核圓似二桃核一而甚堅硬難レ碎炭火燒過入レ水取出以二鐵石推一急槌二核之合處一則易レ敗其仁脂少味不レ美姬胡桃核扁略類二菱實一而稍堅亦以二鐵石推一直槌二核之合處一則易レ破其仁脂多味美又有二唐胡桃者一此華韓之種本邦未レ栽レ之華舶多齎二于長崎一價亦極賤其核易レ碎味亦稍美也今本邦日用爲レ果者姬胡桃而用二鬼胡桃、唐胡桃一者鮮矣工匠磨二木器一後塗レ油以發レ光者亦用二胡桃之油一也或用二胡桃青皮一濾レ汁染レ衣其皂如レ漆久而不レ變世最愛レ之耳

和漢三才圖會云山胡桃南方有レ之底平如二檳榔一皮厚而大堅多肉少レ穰其殼甚厚須二推レ之方破一

胡桃仁甘能入二腎肺一最虛寒者宜痰火積熱者不レ宜二多食一利二三焦一益レ氣養レ血潤レ肌黑二鬚髮一多食去二五痔一多食動風脫二人眉一同レ酒食レ多則咯血與二破故紙一同爲下補二下焦腎命門一之藥上故古有レ云黃檗無二知母一破二故紙一無二胡桃一猶二水母之無一レ鰕也胡桃能制レ銅

胡桃青皮苦澁烏二髭髮一與二科斗一等分搗泥塗レ之一染卽黑 治二白癜風一與二硫黃一同摻レ之 染レ帛黑色枯皮亦佳水煎染レ之

按胡桃有二數種一、唐胡桃自二中華一多來近頃本朝亦往々種レ之其葉似二檞之葉一而末不レ尖無二刻齒一長五六寸但兩々不二對生一此與二本草之說一少異其實核圓大而色淡皮薄易レ破仁脂多味最美也養二山雀一者破以餌レ之喜食レ之鬼胡桃核形似二桃核一而團甚堅硬炒過入レ水破レ之其仁脂少味不レ美

姬胡桃核微扁仁脂多味美本草所レ謂南方山胡桃而倭胡桃是也其油磨二木器一甚光澤用二其皮一染レ帛黑色久不レ變凡胡桃與二銅錢一共嚼合則錢成レ粉制レ銅之證也

一種有二澤胡桃一岸澤多有レ之雖レ結レ實不レ堪レ食其材略似レ欅而理粗匠人以僞レ欅

本草綱目啓蒙云眞ノ胡桃ハ韓種ニシテ世ニ少シ葉オ

未ダ熟セザル者ナリ又藥家ニ黒胡麻ノ上品ナル者ヲ呼デヌメゴマトス皆別ナリ亞麻ハ蠻國ヨリ來リ外科ニ用ユル所ノ者ナリ藥家ニ誤テゴマニント名ケ賣ル形狀胡麻子ヨリ大ニシテ扁ク褐色ニシテ光リアリ水ニテ濕セバ脂腋出テ子ヲ包ムコト羅勒子或ハ車前子ヲ濕スガコノ脂腋ヲ去リテ用ユ

本草綱目亞麻　一名鵶麻一名壁虱胡麻蘇頌曰亞麻子出ニ兗州ー威勝軍苗葉倶青花白色八月上旬采ニ其實ー用時珍曰今陜西人亦種レ之卽壁虱胡麻也其實亦可レ搾レ油點燈氣惡不レ堪レ食其莖穗頗似ニ茺蔚子ー不レ同

つばき　山茶

つばきの油は佳品珍味にして上古の人めでし物なれば本草和名に引ニ崔禹錫食經ー云不死藥二十一種云々海石榴油その一なり又光仁天皇寶龜八年に渤海使史都蒙の請へるによりて海石榴油一缶おくられし續日本紀ことあり後世にいたりては時珍の本草綱目山茶の集解に海榴茶、石榴茶、躑躅茶、串珠茶、一捻紅等の類をあげ又主治には吐血衂血腸風下血等に用ゆる事をあげ又子の主治には婦人髮脯研末摻之といふのみにて更に油料の事を載せざるは遺憾なり本邦にては日用にも物をゆひき熟し食ふに胡麻のあぶらにまさりて其色鮮にして美味なりつばきの油を木の實といひ、かたし油、かたあし長門かたいしのあぶら肥前又婦女などは髮を梳るに用ひて胡麻にまさるといへり

續日本書紀光仁天皇紀云寶龜八年五月癸酉渤海使云々但都蒙等比レ及ニ此岸ー忽遇ニ惡風ー有レ損ニ人物ー無ニ船駕去ー想レ彼聞レ此復以傷レ懷言念ニ越鄕ー倍加ニ軫悼ー故造レ船差レ使送ニ至本鄕ー幷附ニ絹五十疋絁五十疋絲二百絇綿三百屯ー又緣ニ都蒙請ー加ニ附黃金小百兩水銀大一百兩金漆一缶漆一缶海石榴油一缶水精念珠四貫檳榔扇十枚ー

和名類聚鈔云椿唐韻云椿勅倫反和名豆波木木名也楊氏漢語抄云海石榴和名上同本朝式等用レ之

和漢三才圖會云海石榴卽山茶花之一類也樹葉花實似ニ山茶花ー而大其實狀圓似ニ花果ー而老枯則殼四裂中子如ニ海松子ー剝レ皮取レ仁搾取レ油謂ニ木實油ー塗ニ刀劔ー則不レ生レ鏽以拭ニ漆器ー則出レ艶塗レ髮亦艶美然髮不レ潡和ニ麻油ー爲ニ髮油ー佳但千瓣者不レ結レ實

大和本草云ツバキノ實ニ脂アリ無レ毒好事ノ者油ヲ

多若使ニ夫婦一同種上即生而茂盛本事詩云胡麻好種無ニ人種ヽ正是歸時君不レ歸ヽ又種時忌ニ西南風一不レ忌則悉變爲レ草矣

〇釋名

うごま　ごま

うごまは烏胡麻ごま和漢通名也

胡麻

本草和名云本出ニ大宛一故名

一名狗虱一名方莖一名鴻藏

楊玄操音松羊反已上本條

一名莫如一名三光之遺榮一名古地之更生一名流朱一名九斐

斐は變の字なるべし胡麻に九蒸九暴の事あれば九變といひし事も有にや

一名鹵昌一名合胰已上七名出ニ大清經一　一名秋之流靈秋は秋の字なるべきにや

青蘘楊玄操松羊反　巨勝苗也

本草綱目には葉を青蘘□□し莖を麻藍となせり古は青蘘を巨勝苗なりといへば莖葉ともにいひし也

巨勝本經　方莖吳晉　狗虱別錄　油麻食療　脂麻衍義　葉名青蘘音箱
莖名麻藍

音皆亦作レ稭時珍曰按沈存中筆談云胡麻即今油麻更無ニ他說一古者中國上止有ニ大麻一其實爲レ蕡漢使張騫始自ニ大宛一得ニ油麻種一來故名ニ胡麻一以別ニ中國大麻一也冦宗奭衍義亦據ニ此釋一故麻今併ヨ入油麻一焉巨勝即胡麻之角巨而方勝者非ニ二物一也方莖以レ莖名ニ狗虱一以レ形名油麻脂麻謂ニ其多脂一由也按ニ張揖廣雅一胡麻一名藤弘亦巨也別錄一名ニ鴻藏一者乃藤弘之誤也又杜寶拾遺記云隋大業四年改ニ胡麻一曰ニ交麻一本草綱目に載ところなり

ウゴマ和名鈔　ゴマ　一名黑脂麻本草必讀　黑油麻外臺祕要　黑荏子鄉藥本草　坎髓本草滙　油髓子種杏仙方　方金證類本草補品字箋　苰勝通雅　湖麻同上　白油麻一名油子苗救荒本草

本草綱目啓蒙に載する所なり

亞麻子これも油をしぼりて益あるものにて天工開物燃燈則權仁內水油爲レ上芸薹次レ之亞麻子次レ之とありて燃燈となして佳なるものなれども本邦にはなきものなり

本草綱目啓蒙云亞麻ヌメゴマ　アカゴマ

一名鼈蝨胡麻本草逢原常ニアカゴマト呼ブ者ハ黑胡麻ノ

ブハ熬ラズ日乾シテシボル故ニ油匠ニハホシコト云フ是生油ナリ常油ハ熬テ搾ル故ニイリコト云フ是香油ナリ胡麻ハ方莖直上高サ二三尺葉長ジテ對生ス葉三尖ニシテ蘭草葉ノ如シ夏葉間ニ花ヲ生ズ地黄花ノ如ニシテ白色微紫後角ヲ結ブ長サ八九分熟シテ黑色角ニ二稜四稜六稜八稜ノ分アリ二稜四稜ナル者ハ白胡麻ナリコレヲ二方胡麻四方胡麻ト呼ブ六稜八稜ナル者ハ黑胡麻ナリ六稜ノ者ヲ六方胡麻ト呼ブ八稜ノ者ハクルマ胡麻ト呼ブ八子微黄色ナルヲアブラゴマト云フ集解頌及ビ時珍ノ説黄麻子ハ大麻子ト同名異物コレハ大和本草ニイチヒト云ル者ニシテ莔麻ノイチヒト同名ナリ莔麻ノ下ニ詳ニス

本草綱目云時珍曰胡麻卽脂麻也有ニ遲早二種黑白赤三色一其莖皆方秋開ニ白花亦帶紫艶者一節々結レ角長者寸許有ニ四稜六稜者一房小而子七稜八稜者房大而子多皆隨ニ土地肥瘦一而然蘇恭以ニ四稜一爲ニ胡麻一八稜爲ニ巨勝一正謂ニ其房一勝巨大也其莖高者三四尺有ニ一莖獨上者一角繁而子少有ニ開レ枝四散者一角繁而子多皆因ニ苗之稀稠一而然也其葉有ニ本團而末鋭者一有下本團而末分三丫如ニ鴨掌形一者上葛洪謂ニ一葉兩尖爲ニ巨勝一者指レ此蓋不レ知三烏麻白麻皆有ニ二種葉一也按本經胡麻一名巨勝吳晋本草一名方莖抱朴子及五符經並云巨勝一名胡麻其説甚明至ニ陶弘景一始分ニ莖之方圓一雷斅又以ニ赤麻一爲ニ巨勝一謂三烏麻非ニ胡麻一嘉祐本草復出ニ白油麻一以別ニ胡麻一並不レ知ニ巨勝卽胡麻中丫葉巨勝而子肥者一故承レ誤啓疑如レ此惟孟詵謂三四稜爲ニ土地肥瘠宼一宗奭據ニ沈存中之説一斷然以ニ脂麻一爲ニ胡麻一足ニ以諸家之誤一矣又賈思勰齊民要術種收胡法卽今種ニ收脂麻一之法則其爲ニ一物一尤爲レ可レ據今市肆間因下莖分ニ方圓一之説上遂以ニ茺蔚子一僞爲ニ巨勝一以ニ黄麻子及大藜子一僞爲ニ胡麻一誤而又誤矣茺蔚子長一分許有ニ三稜一黄麻子黑如如ニ細韭子一味苦大藜子狀如ニ壁蝨及酸棗核仁一味辛甘並無ニ脂油一不レ可レ不レ辨梁簡文帝勸醫文云世誤以ニ灰滌菜子一爲ニ胡麻一則胡麻之訛其來久矣愼微曰俗傳胡麻須ニ夫婦同種一卽茂盛故本事詩云胡麻好種無ニ人種一、正是歸時君不レ歸、

祕傳花鏡云胡麻一名巨勝昔張騫自ニ大宛一得來故故胡麻又云結實作レ角八稜者名ニ巨勝一六稜四稜者爲ニ胡麻一一云胡麻卽芝麻有ニ遲早二種黑白赤三色一秋開ニ白花一亦有ニ帶レ紫艶者一節々結レ角長有ニ寸許一房大者子

搾レ油也肇二於城州山崎攝州遠里小野一而今乃油肆多有二大坂一運二送諸國一

別有二荏油・蕪菁子油・綿子油・鯨油・鰯油・魛油・桐實油等一

一種白搾油　用二白胡麻一碓碎粉搾レ之其粎再三碎蒸搾レ之油正白色婦人用爲二髮油一甚良又以二黑胡麻一如二前法一搾者名二黑搾油一勝二於白搾一

一種炒胡麻油　不レ論二白黑赤一用炒レ之碎末蒸搾レ之油赤黑色可三以熬二煉食物一又爲二燈油一

丸胡麻油冬亦不レ凍燃レ之光焔小如二推子形一而不二閃動一其煙煤少故白絲絹家及細眞匠人用レ之佳也又阿蘭陀流之外科用レ之代二佛狠機油一

大和本草云胡麻　芝麻・脂麻・巨勝子・皆胡麻ノ別名ナリ漢ノ張騫西域ニ使シテ此種ヲ取カヘレリ胡國ヨリ來リシ故胡麻ト名ク上世ニ五穀ノ一ツトセシ麻ハアサノ實也胡麻ニアラズ後世ハ大麻ハ穀トンテハ食ハズ胡麻ハ穀食トス胡麻ノ其苞四角六角八角アリ六角ヲ好トス黑白アリ服藥トスルニハ黑キヲ用ユ食品ニハ白キヲ用ユ黑胡麻本草ヲ見ルニ上品ノ藥也服食ノ法アリ可レ考水ニ入レ沈メルヲ用ユ是實ヨク入タルナリ水ニ浸シユリテ土氣ヲ去蒸籠(セイロウ)ニテ半日ムシ手ニテモミテ皮ヲ去日ニホシテヨク干タル時皮ノ殘タルヲモミ去ル或日ニホシテ後皮ヲモミ簸テ皮ヲ去爲レ末炒レ鹽テ十五分一加ヘ日ニ温酒ニテ服シ或飯及諸食品ニ加ヘ湯ニ入テ食ス身ヲウルホシ虛ヲ補ナヒ氣力ヲ益シ筋骨ヲ堅クシ白髮ヲ黑クシ腰脚ノ疼痛ヲ治ス時珍云以二胡麻一同レ米修レ飯爲二仙家食品一胡麻油藥ニハ生ジメヲ用ユ香油ト名ヅク食ト燈ニハ炒タルヲ用胡麻苗ハ旱(ヒデリ)ヲオソレズ大旱ニモ能生長ス是亦煮テ食ス

本草綱目啓蒙云上世五穀ノ一トセシ麻ハ大麻(アサ)ノミナリ次ニ本條アリ胡麻ハ原中國ノ產ニ非ズ大宛ヨリ來ル故ニ胡ノ字ヲ添ユ然ルニ天工開物ニハ強テ五穀ノ麻トスル者ハ誤レリ胡麻ニ黑白黃ノ品アリ藥用ノモノハ皆黑胡麻ナリ粒ニ大小アリ薩州ノ者ハ大ナリ黑胡麻ヲ巨勝子ト云フ故ニ巨勝子圓ニハ此品ヲ用ユベシ然レドモ舶來ノ巨勝子皆茺蔚子ナリ故ニ賣藥家皆茺蔚子ヲ用テ巨勝子圓ヲ製スルハ甚誤ナリ茺蔚子ヲ以テ僞ルコト時珍ノ說及濕草類茺蔚ノ條下ニ詳ナリ白胡麻ハ食用トナシ搾テ油トス其シラシボリト呼

亦佳以二其價貴一不レ便二下民之用一於レ是以二蕪菁子油・芥子油・菘子油・木綿實仁油・鯨鱁鰐油等一而亂レ之其價亦賤矣有二山茶子油者一此俗稱二木實油一參遠等州取レ之以販二于伊勢神宮之燈油一復諸州所在有レ之用レ之塗二刀劍及銅鐵器一則不レ鏽故人々收二藏之一有二榧子油者一多出二和之吉野一其地多レ榧之故乎其油淸澄味美不レ厚宜レ爲二食用一然油少價貴有二胡桃仁油者一此亦油少價不レ賤而販レ之者少矣今瘍科專用二胡麻油一煉レ膏治二諸瘡金傷一學二阿蘭陀流一者用二保留止加流油一其實似レ杏仁味似二榛子一本邦種レ之不レ長惟用二蠻船傳送一者其油不レ賤而少故以二性相似一而代用二胡麻油一阿蘭陀國流之治用レ油者多草木金石鳥獸魚蟲俱皆有レ油浸レ油引取レ油也

和漢三才圖會云黑胡麻（甘平）益二氣力一長二肌肉一塡二髓腦一堅二筋骨一明二耳目一補二肺氣一止二心驚一利二大小腸一久服不レ老

其中巨勝而肥者卽巨勝子也今市肆間僞者多用二眞胡麻烏色者一當二九蒸九曝熬擣餌レ之（與二茯苓一相宜）

白者（用取レ油爲レ勝）　赤者（狀如二老茄子殼一厚油少但可レ食爾不レ堪二服食一）

葉（甘寒）名二靑蘘一候二苗出一采食滑美不レ減二於葵一也又以レ湯浸レ葉良久涎出稠黃色婦人用レ之梳レ髮

花（甘）生二髮禿眉毛不レ生者一

采二最上標頭者一陰乾爲レ末以二烏胡麻油一漬レ之日塗愈

又生二肉丁一擦レ之卽愈

油（甘微寒）名二香油一妙熟乘レ熱壓二出油一謂二之生油一（但可二點照一）再煎鍊者謂二熟油一（熬レ物可レ食不レ中二點照一）入レ藥以二黑麻油一爲レ上白麻油次レ之須二自搾一若二市肆者一不レ惟已經二蒸炒一而入雜レ之以僞也油生二于胡麻一同レ質而異レ性也（胡麻溫油寒）

麻籸（音辛）一名麻枯餅窄二去油一胡麻滓也荒歲人亦食レ之可二以養レ魚肥一レ田

積レ油滿二百石一則自能生レ火衣絹有レ油蒸熱則出二火星一是油與レ火同レ性矣用以煎二煉食物一（俗云油阿介）左能動レ火生レ痰

按胡麻（黑白赤）有二三色一其夏至半夏生之交下レ種六月開レ花七月實熟最有二早晩二種一性惡二霖雨一其形狀皆如二上說一但白胡麻莖節々葉對生如二車輪一而葉花共色淺以爲レ異耳處々皆有レ之而多出二於九州一今自二中華一所レ渡巨勝子者色不レ黑疑是以二茺蔚子一僞者乎惟倭黑胡麻大粒者佳也

古今要覽稿卷第四百五十二

●草木部 油料

胡麻

胡麻のあぶらは供御の料胡麻油を用ゆ（延喜式主殿寮）とみえまた天工開物にも油供二饌食用一者胡麻とあれば油料の最なり凡胡麻を種るに三四月といへども立夏より蒔てよし又晝夜重寳記云胡麻は三月節の末より六月土用迄に種を蒔七月八月實熟すといへりその形狀は本草綱目啓蒙にあげその角に二稜四稜六稜八稜の分ありて二稜四稜のものは白胡麻なりといへども近鄉に種るものに二稜四稜なるものいまだみずといへり近鄉のものは黑白ともに五六稜なりといふまた花は皆白くしてすこし紅色を帶ものなれどもこれも紅紫色にして美なるものありといへり啓蒙にも夏葉間に花を生ず地黃花の如くにして白色微紫といへば紅紫色の美花のものは見ざるとみえたり黑胡麻白胡麻はあれども黃胡麻は稀なり先年岡村尙謙が家にて見たりしに下總國香取郡大和田村中野貞純より饋る所なりといへり

本草和名云胡麻

陶景注曰本出二大宛一故名二胡麻一

和名類聚鈔云胡麻陶隱居本草注云胡麻（音五萬訛云字古末）本出二太宛一故以名レ之

本朝食鑑云胡麻卽油麻也有二遲早二種黑白赤三色一三四月下レ種五六月生レ苗高三四尺葉本末細長中大方莖有レ節七八月開二白花一亦有二帶レ紫艶者一每レ節結レ角長寸許四稜六稜者房小子少七稜八稜者房大子多京師五畿多種レ之以二山崎之產一爲二第一一卸二諸州一多種レ之亦不二相及一黑白俱常用而爲二滋腎烏髮之藥一或用二搾レ油滓一抹レ餅而食此號二胡麻餅一事詳二子糯餅條一

又云胡麻油胡麻蒸熟打レ搾壓レ袋滴下取レ油作二食油一作二燈油一作二雨具一作二塗髮一就レ中作二燈油一者最多黑胡麻少白胡麻油多故城州山崎及海西諸州悉用二白胡麻一其不二蒸炒一而生取者號二白志保利一此塗髮之用而所レ取亦不レ多凡本邦以レ油爲二貨殖之盛一而民間最爲二大業一諸州雖レ出レ之不レ及二城之山崎一而使二山崎一爲二油之大肆一也故麻油價貴者燈之熏煙少而食用塗髮

校正兼鈔錄　山下源左衛門官正房
校正兼淨寫　忠內鉊太郎紀弘光
校正兼圖畫　葦名廉三郎平盛榮
校正兼淨寫　兒山諦之助平紀言
校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春
校正兼淨寫　小林好太郎源直溫
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
編修兼校正　大河戶晋平藤原儀成
總　　判　屋代大郎源詮丈

夜半におく白露おもみ山ちさの
花もや今朝は風を待らん

白雲木

白雲木その葉柹の葉に似て丸く先尖りて大なり葉間より莖を出し花を開くちさの木に似て少し大なり一朶に多きは二十餘も開く本よりひらきはじめて末にいたる白色五瓣花莖長くさがりて開く花信は早く穀雨三月中三候よりひらくちさの木は小滿四月中より開く實もちさの木に似て大なれば油料となすにもこの實まさるべし此もの諸家に其形狀を述るもの稀なりこヽに何人の著述せしものにや其書名もさたかならざれども白雲木を論せし事詳なれば左にのぶ

白雲木越州魚沼郡下船渡村ノ山中ニ産ス喬木ニシテ文ヲナシ樹ノ肌辛夷ニ似タリ春新葉ヲ生ズ圓葉一尖深綠色大ナルハ長四五寸モアリ三四月ノ頃葉間ヨリ六七寸ノ莖ヲ抽キ穗ヲナシ五瓣ノ白花ヲ着ク方言不レ知東都ニモ稀ニアリテ植木屋ニテ白雲木ト唱フ

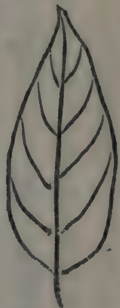
白雲木處々深山中ニ多ク有レ之未其漢名ヲ不レ詳一說ニ玉鈴花ヲ以テ充ル然レドモ玉鈴花ノ名本草及諸書ニ是ヲ不レ載偶一抄錄中ヲ閱ルニ黃海山花圖詠ニ玉鈴花ヲ出ス曰樹高大蘢葱夏月碧陰中白花串々有類雕刻香甚トアリ按ルニ夏月碧陰中白花串々ト云ハ相近シ有類彫刻香甚ト云ハ合セズ再按ルニ本草摩厨子ノ附錄ニ齊墩果アリ曰高二三丈皮青白花似レ柚トアルニ依テ今來チシヤノ木ニ充ツ東都ニテヱゴノ木ト云モノナリチシヤノ木花柚ニ似タレドモ皮青白トアルニ合セズ白雲木花亦甚柚花ニ似タリ且嫩枝青色ナルハ皮青白トアルニ近カラン歟然レドモ齊墩果其葉形ヲ載セズ是恨トス共ニ確的シ難シ尙後考ヲ俟ノミ右田安公御說ナリ

按ルニ近年白雲木ヲ接ニヱゴノ木ノ體ヲ用ユコヽヲ以テ考レバ花實モ一般ナリ只花穗ヲナシ葉大ナルノミ其性ハ一ナリ

校正兼鈔錄　荻野小七郎　小野易
　　　　　　南條正之助藤原近行
　　　　　　堀小市郎　菅原晴延

編修兼校正　若菜三男三郎藤原信孝
　　　　　　栗山兵左衞門藤原定輿
　　　　　　林　源三郎　源高典

大和本草云チシャノ木花四五月開ク形柑ノ花ノ如ク白シ香モ柑ニ似テ柑花ヨリ大也花頗ヨシ花多クサク葉ノ形カクノ如シ賣子木ヲチシャノ木ト云ハ非也



本草綱目啓蒙夷果類摩厨子附錄齊墩果チサノキチシャノキ俗ロクロギ紀州ホト、ギス同上チナイ豫州藝州チナヱ石州チヤウメ江州チヤウメン土州ヱゴ江戸サボン加州タカノヱ丹州ジ、ヤ佐州ボトボトノキ越前ザトウノツヱ同上山野ニ多シ木ノ高サ丈餘枝條旁ニハビコル春新葉ヲ生ズ形橢ニシテ尖リ鋸齒ナク互生ス夏月葉間ニ花ヲ開ク莖長ク下垂ス五瓣白色大サ六七分形柑橘花ニ似テ香氣アリ後實ヲ結ブ苦櫧實アカガシノノ如ク徑リ二分餘長サ三分餘秋ニ至リ黒ク熟シ上ニ白粉アリ破レバ仁ニ油アリ採テ小鳥ニ飼フ木皮白シテ靑ト黒トノ細斑アリ用テ器物ニ作ルコノ木ヲ傘ノロクロニ用ユ故ニ紀州熊野ニテロクロギト云フ

和歌

萬葉集卷第七譬喩歌

寄レ花

氣緒爾念有吾乎山治左能花爾香君之移奴良武

又卷第十一

寄レ物陳レ思

山萵苣白露重浦經心深吾戀不止

古今六帖

山ぢさ

我か如く人目まれらに思ふらん
　白雲ふかき山ちさの花

新撰六帖

山ぢさ　衣笠内大臣家良公

足曳の山ちさの花露かけて
　咲る色これわれみはやさん　前藤大納言爲家

咲とたに誰かはしらん白雲の
　晴せぬやまの山ちさの花　九條三位入道知家

木かくれの日影も寒き山ちさは
　花の上なる露そくるしき　左京大夫行家

年くるゝ爪木にましる山萵の
　只一枝はうなゐ子かため　右大辨入道光俊

古今要覧稿巻第四百五十一

●草木部 油料

かはぢさのあぶら

かはぢさのきは本草和名和、名類聚鈔ともに賣子木を訓り和漢三才圖會にも賣子木となしてその形狀木材の用實は山雀好みて食ふといふのみにて油料のことはみえず北國筋にてはこの油を用るといへりこの實よりとりたるは清潔にして佳なるものなれどもその核堅硬にてつきくだくに便ならざるものなりといへども所々山野自生多くあるもの故に田舍人にしめし置きて落こぼれるをあつめさせなば一秋に多く油料のたすけなるべしと栗本瑞仙院の說なり賣子木は本草綱目灌木類に載て本草綱目啓蒙には賣子木サンダンクワとなし和名鈔にはカハヂサノキと訓じ多識編にチシヤノキと訓ズ皆非なりといへども賣子木の當不當にはかゝはらずかはぢさのき山ぢさ古歌ちしやのき、ゑご江戸近郷は本草綱目夷果類摩厨子附錄載たる所の齊墩果なりこのもの春新葉を生じ四月花を開くその花莖細く一莖より三四多きは五六輪もさかりて開く白色五瓣梅花に似てさき尖り黃蘂あり香もよしこの花には蜜蜂好みて群り來るものなりこの花散ずして五瓣のまゝにて落花せり後實を結ふ實も花と同しく一莖に三四粒實のることの實外皮淡綠色にして內に褐色の核あり破れは白肉ありこれ山からの喰ふものなり卽あぶらを搾るものなりこの實の外皮淡綠色熟して少し黑褐色を帶われ落て核は帶につきてあるものなりその形狀和漢三才圖會に載する所も本草綱目啓蒙に云齊墩果と同じ左に詳なり

本草和名云賣子木和名加波知佐乃岐

和名類聚鈔云賣子木和名賀波知佐乃木

和漢三才圖會云知佐乃木處々山中有最丹波多レ之高者二三丈徑一二尺皮粉靑白色老則淺褐色中心白其葉似ニ梅嫌ウメモトキ木葉一而尖長二寸許面靑背淡冬凋春生三四月開レ花不レ碎而白單瓣似ニ野梅花一而朶稍長垂不レ作ニ大朶一但每ニ二三攅生耳結レ實狀如ニ小蓮子一初靑後黑殼堅肉白色山雀喜食レ之其材稠堅堪レ作ニ楊枝一又作ニ傘之轆轤一伐レ樹則嫩蘖生ニ於株一易レ長採レ之作ニ箕之緣一

も多く作らばその益莫大ならん苗をゆひきて食料によしといへり

〇正誤

清少納言枕草紙云草は云々又わさととりたてゝ人めかすべきにもあらぬさまなれどかまつかの花らうたたげなり名ぞうたてげなるかりのくるはなとぞもじにはかきたる春曙抄にすなはち此草紙に鴈のくる花と書よしいへり鴈來紅といふものにや

按に草の花の中に鴈來紅を入べきやうあらんや殿村常久が千草の根ざしに云枕草紙は諸本異同ありて誤字などもいと多きおもむきなればかまつかの花のつかはつほの誤またかりのくる花とあるかりは中間にへもじを脱してかへりの誤のくるはめくるの誤にてもと古本にはかまつほの花云々かへりめくる花とありけむをはやくより誤り來りたるなるべしかまつほの花は本草和名に旋復華和名加末都保一名加末保康頼本草類編に旋復花和名加末川保云々一名金沸草又加末保と見え延喜典藥式に旋覆花幾斤などみえたり伊勢集にかまつほぐさ「山田をしそほつはかりももりつれは秋はからむとわかまつほくさ」と見えたるものにて今世をぐるまといへる草花なりそは春苗出て二三尺はかりにものびたり細長き葉莖のこなたかなたにつきて秋莖の末に菊に似たる錢ばかりなる黄なる花多くさくものなりさて旋復花とかけばかへりめぐる花とぞもじにはかきたるとはいへるなるべし

種をいへるなるべしまひゆ・とうひゆ・とうのひゆは白莧・人莧の類をさして呼なるべし

莧

○本經上品時珍曰按陸佃埤雅云莧之莖葉皆高大而易レ見故其字從見指レ事也

あかひゆ赤莧

○和名類聚鈔染色具

蕢

○爾雅釋草蕢赤莧註赤莧一名蕢今莧之赤莖者本草綱目蕢作レ蕒

花莧（赤莧亦謂二之花莧一本草綱目）　紅囿（汝南圃史）　跛鼈還丹（事物紺珠）

琉球ひゆ

○この葉中紫黑の斑點あれば大和本草に斑莧は白莧の變色なりといへるより琉球ひゆにあつべし

むらさきひゆ・紫莧

○これは上にいふ白莧・赤莧・琉球ひゆのごとく長く生長せず野莧の紫色なるをいへり

いぬひゆ　のびゆ　細莧　野莧（道傍自生をさしていへり）　はげいとう（通俗）　がんらいさう（佐州）　雁來紅（本草綱目隰草類青葙子附錄陶朱術條下）　老少年（同上）　春不老（通雅）　還少年（遵生八牋）　秋紅（三才圖會）　秋色（閒情偶寄）　還童草（同上）　映日紅（汝南圃史）　百日紅（事物紺珠）　後庭花（救荒本草）　秋葉（灌園草木識）　老來嬌（臺灣縣志）　きがんらい（花戸）　雁來黃（祕傳花鏡）　にしきさう（花戸）　もみぢさう（同上）　十樣錦（本草綱目雁來紅條下祕傳花鏡）　錦西風（祕傳花鏡）　錦布衲（詳芳譜）　玉樹後庭花（汝南圃史）　十錦（空明子茸城賦）

せんにんこく

○元朝鮮より長崎へ渡りし時仙人穀といふ名を銘して渡せりとぞ

老鎗穀

○龍沙紀畧佐藤成祐長崎にて間野三圭（この三圭は長崎御施藥所に勤仕して產物學にも委しき人なり）の家にて初て見て瓔珞鷄冠なるべしといひしが三圭曰是は龍沙紀略に老鎗穀莖葉如二鷄冠一高丈許實如二栟櫚子一深赤色取レ粒作レ粥香美といへるをこの仙人穀に充て佳ならんしからば實は花の誤となせば栟櫚の花は粟粒のごとくなれば可なり初てこの花を見てこの本名をしることの說感に堪たりとて別れぬといへりこの子粥となして香美とあるによりて二匙許ありしを煮て試しか粘滑ならずして殊に美味なりこの種近來渡りしに米澤にては油を搾りて菸菓子にも勝れりと聞はいかに

收五莧俱氣味甘冷利無毒並利ニ大小腸一治ニ初痢滑胎通竅一明レ目除レ邪去ニ寒熱一白莧補レ氣除レ熱赤莧主ニ赤痢射工沙虱一紫莧殺ニ蟲毒一治ニ氣痢一

彙考增易夬封莧陸夬々疏董遇云莧人莧也南齊書王智深傳智深家貧無ニ人事一嘗餓五日不レ得レ食掘ニ莧根一食レ之　南史蔡樽傳樽在レ呉興不レ飲ニ郡井一齋前自種ニ白莧紫茄一以爲ニ常餌一詔褒ニ其清一　詢蒭錄南人呼ニ莧菜一北人呼レ莕乃人莧音誤也

集藻　七言律詩　增宋方岳羹レ莧琉璃蒸乳壓ニ豘膏一、未レ抵ニ齋厨一格調高、脫粟飯香供ニ野莧一、荷レ鋤人飽撚ニ霜毛一、斷無文伯可ニ相累一、比似ニ何曾母太豪一、見說能醫ニ射工毒一、人間此物正騷々、

詩散句增唐杜甫レ莧也無レ所レ施何顏入ニ筐篚一　宋王安石紫莧凌風怯　金史蕭迎レ風紫莧因循老

別錄增物類相感志紅莧煮ニ生麻布一則色白如レ苧爾雅翼青泥殺レ鱉得レ莧復生學圃餘疏莧有ニ紅白二種一素食者便レ之肉食者忌ニ與レ鱉共食一　原製用ニ赤莧根莖一可ニ糟藏食レ之甚美味辛取ニ鱉肉一切ニ豆大一以ニ莧菜一裹置ニ土中一一宿卽變ニ小鱉一試レ之屢驗

『此間彩畫六圖略レ之』

詩

覆醬續集

雁來紅

仙女來妝剪レ錦歟、驚レ人紅草秀階除、秋園再得蘇卿信、艶葉先レ霜花不レ如、

秋紅（秋紅雁來紅也）

寒草婆娑色欲レ燃、怪看雲錦落ニ寥天一、秋深莖葉盆妖艶、爲解人呼老少年

雁落紅、

數株秋紅手自植、未レ霜枝葉映レ日艶、却疑滄海變ニ桑田一、珊瑚叢生奪ニ秋色一、

華夷花木鳥獸珍玩考

雁來紅（三才圖會既引レ之）

○釋名

ひゆ

本草和名和名類聚鈔ともに比由

ひやう（俗稱）　ひよ（筑前江州）　ひい（備前雲州）　からひい（備前）　ひいな（阿州）　ひやうな（紀州）　まひゆ　とうひゆ　とうのひゆ

○播州この諸名本草綱目啓蒙所載なれどもわけていへばひよひ・いひいな・ひやうな等の名は野生の

莧實氣味甘寒無毒主治青盲明目除邪利大小便去寒熱久服益氣力不饑輕身（本經）治白瞖殺蚘蟲（別錄）益精大明肝風客熱瞖黑花（時珍）

又（隰草類青葙附錄）云雁來紅 時珍曰莖葉穗子並與雞冠同其葉九月鮮紅望之如花故名吳人呼爲老少年一種六月葉紅者名十樣錦

救荒本草云後庭花一名雁來紅人家園圃多種之葉似人莧葉其葉中心紅色又有黃色相間亦有通身紅色者亦有紫色者莖葉間結實比莧實微大其葉衆葉攢聚狀如花朶其色嬌紅可愛故以名之味甜微澁性涼

救飢採苗葉煠熟水浸淘淨油鹽調食晒乾煠食尤佳

□玄扈曰莧屬也可作恒蔬

祕傳花鏡云十樣錦一名錦西風葉似莧而大枝頭亂葉叢生有紅紫黃綠相兼因其色雜出故名十樣錦春分撒子於肥土中蓋以毛灰庶無蟻食之患苗生後以雞糞壅之長竹捍扶之可過于墻夏末卽有紅葉矣大凡秋色其根入土最淺俟苗長一二尺卽宜土壅雨過再壅則無風傾之虞矣

又云老少年一名雁來紅初出似莧其莖葉穗子與雞冠無異至深秋本高六七尺則脚葉深紫色而頂葉大紅鮮麗可愛久愈妍如花秋色之最佳者又有一種少年老則頂黃紅而脚葉綠之別收子時須記明色樣則下子時間雜而種秋來五色眩目可觀

又云雁來黃卽老少年之類每於雁來之時根下葉仍綠而頂上葉純黃其黃更光彩可愛非若老葉黃落者比收子下種法一如老少年以上數種秋色全在乎葉亦須加意培植扶持若使蜉蝣傷敗其葉便減風味矣

三才圖會云老少年一名秋紅一名雁來紅有作詩曰翔雁南來塞草秋、未霜紅葉已先愁、綠珠宴罷歸金谷、七尺珊瑚夜不收、

臺灣縣志云老來嬌一名雁來紅初生鮮色至老而色轉鮮紅可愛

廣群芳譜云莧凡五種赤莧（一名蕢爾雅云蕢赤莧註云人莧之赤莖者本草云一名花莧莖葉深赤）白莧・人莧（俱大寒又名糠莧、胡莧味勝他莧但大者爲白莧小者爲人莧或謂之細莧其實一也其子霜後方熟細而黑色又細莧俗名野莧猪好食之亦名猪莧）紫莧（莖葉皆紫無毒不寒吳人用以染爪者）五色莧（今稀有）諸莧皆三月種葉如藍莖葉皆高大易見故名（莧或曰莧從見諧聲也）開細花成穗穗中細子扁而光黑與青葙子・雞冠子無別老則抽莖甚高六月以後不堪食子霜後始熟九月

莧ハイヌビユ、一名野ビユ・アカヒイナ（阿州）道旁及壁側ニ多ク生ズ高サ七八寸莖赤ク葉ハ小クシテ末凹長サ一寸許互生ス夏秋ノ間枝頂ゴトニ穗ヲナス二三寸許細小花ヲ開ク莧ニ似テ赤色

又云雁來紅・ハゲイトウ・ガンライサウ（佐州）ハゲイトウニ數種アリ雁來紅ハハゲイトウノ內ニテ脚葉ノ色紫ニシテ秋ニ至テ頂ニ深紅色ノ葉ヲ出スヲ云一名春不老（通雅）還少年（遵生八牋）秋紅（三才圖會）秋色（問情偶寄）還童草（上同）映日紅（汝南圃史）百日紅（事物紺珠）後庭花（救荒本草）一種脚葉綠色ニシテ秋ニ至テ頂ニ黃色ノ葉出ルヲ雁來黃ト云フ花戶ニテ黃ガンライト云フ十樣錦ハニシキサウ・モミヂサウト呼ブ此モハゲイトウノ內ニテ秋ニ至テ紅綠黃紫ノ四色雜ル者ヲ云一名錦西風（祕傳花鏡）錦布衲（群芳譜）玉樹後庭花（汝南圃史）十錦（空明子茸城賦）

本草綱目（柔滑類）云別錄曰莧實一名莫實細莧亦同生ニ淮陽川澤及田中ニ葉如レ藍十一月采、李當之曰莧實卽莧菜也弘景曰莧實當ニ是白莧一所以云細莧亦同葉如レ藍也細莧卽是糠莧食レ之乃勝而病冷利被レ霜乃熟故云十一月采又有ニ赤莧一莖純紫不レ堪レ食馬莧別一種布レ地生レ實至微細俗呼ニ馬齒莧一恐非ニ莧實一也恭曰赤莧一名藚音匱經言莧實一名莫實疑莫字誤矣保昇曰莧凡六種赤莧・白莧・人莧・紫莧・五色莧・馬莧也惟人白二莧實可レ入ニ藥用一赤莧味辛別有ニ功用一頌曰人莧白莧俱大寒亦謂ニ之糠莧一又謂ニ之胡莧一或謂ニ之細莧一其實一也但大者爲ニ白莧一小者爲ニ人莧一耳其子霜後方熟細而色黑紫莧莖葉通レ紫吳人用染レ爪者諸莧中惟此無レ毒不レ寒赤莧亦謂ニ之花莧一莖葉深赤根莖亦可ニ糟藏食一レ之甚美味辛五色莧今亦稀有ニ細莧一俗謂ニ之野莧一猪好食レ之又名ニ猪莧一時珍曰莧並三月撒種六月以後不レ堪レ食老則抽レ莖如ニ人長一開ニ細花一成レ穗穗中細子扁而光黑與ニ青葙子・雞冠子一無レ別九月收レ之細莧卽野莧也北人呼爲ニ糠莧一柔莖細葉生卽結レ子味比ニ家莧一更勝俗呼ニ青葙一苗爲ニ鷄冠莧一亦可レ食

菜氣味甘冷利無レ毒

恭曰赤莧辛寒鼎曰莧動氣令ニ人煩悶一冷中損レ腹不レ可ニ與レ鼈同食一生ニ鼈瘕一又取ニ鼈肉一如ニ豆大一以ニ莧菜一封裹置ニ土坑內一以レ土蓋レ之一宿盡變成ニ小鼈一也機曰此說屢試不レ驗

主治白莧補レ氣除レ熱通ニ九竅一（孟詵）赤莧主ニ赤痢射工沙虱一（蘇恭）紫莧殺レ蟲毒治ニ氣痢一（藏器）六莧並利ニ大小腸治一初痢滑レ胎（時珍）

レ之雁來紅、十樣錦共見二于濕草部一
又云雁來紅老少年十樣錦俗云加末豆加乃花
按に此和名誤なり委くは正誤に辯ず
大和本草云莧本草ニハ六種アリト云我邦ニハ四種アリ白莧・赤莧・斑色莧・野莧也白莧ヨシ斑莧ハ白莧ノ變色ナリ野莧ハ自然ニ野生ス本草ニコレヲ細莧ト云野莧トモ云莖紫色ナリ白莧ニオトレリ凡莧ハ實堅ユヱ夏生ズ旱ヲオソレズ旱歳ニハ却テ滋生ス野莧ハ下品ナリ本邦ニ昔ヨリアリ白莧ハ外國ヨリ來レルユヱニ唐莧ト云性冷ナレドモ輕淡ニシテ病人ニ不レ妨味好シ早ク折レバ繁枝生シテ葉多シ煮テ和物トシ羮トシ豆油ニヒタシ食フ赤莧ハ色紫紅ナリ葉莖至レ秋大ナリ其葉方五六寸ナル者有レ之
又云老少年雁來紅也九月其葉鮮紅一種六月葉紅者十樣錦ト名ヅク本草靑葙子ノ附錄ニアリ此草ハ花ナシトイヘドモ其葉紅色花ノ如シ雞冠花ノ類ナリ實ヲ收メテ春マクベシ
東雅云莧ヒユ名義不レ詳和名鈔に本草を引て莧味甘寒也とみえし事もあれば或は其性の寒なるによりて此名ありけんもしるべからず

ヒユとは冷をも莧をもいふが故なり
染色具に本草注を引て赤莧あり莖葉純紫不レ堪レ食レ之と註せしは是をもて染料となしけるなり又陶隱居本草を引て馬莧一つに馬齒莧漢語抄にウマビユといふと注せしは卽今俗にスベリビユといふこれなり
用藥須知云雁來紅、雁來黃
花鏡云雁來紅卽老少年色紅者每雁來之時下葉仍レ綠而頂上葉純黃可レ愛非二若老葉黃落者比一
老少年卽還少年　西風錦卽十樣錦
本草綱目啓蒙云莧ハ總名ナリ數種アリ食用ノ者ハ人莧白莧ナリ故ニ單ニ莧ト云ハコレヲ指ス人莧白莧同物ニシテ大小ニテ名ヲ異ニス卽今俗ニヒヤウト呼ブモノナリ春種ヲ下ス苗鷄冠ニ似テ紅ナラズ葉モ亦相似テ圓ニシテ尖リ互生ス秋ニ至リ高サ四五尺葉間ゴトニ穗ヲナシ花ヲ開ク極テ細小ナリ後小黑子ヲ結ブ光リアリテ雞冠子ノ如シ熟シテ苗根共ニ枯ル○集解赤莧アカヒユ一名紅莧汝南圃史跛鼈還丹事物紺珠紫莧ハムラサキヒユ一名アカビソ南部莖葉紫色ニシテ紫蘇ノ如シ五色莧ハハナビユ葉ニ數色雜リアルヲ云本草衍義ニ莖高而葉紅黃二色者諸之紅人莧可レ淹二菜用一ト云細

及ぶ其色深紅にして美なり仙人穀よりは油をしぼり食饌となして甚佳品なる事は聞たれども未だ莧菜子より油を搾る事を聞かずされどもこれ又極て可なるべし天工開物樣子莧菜子と次第せしもこの樣子はつばき山茶花茶子をさしていひたるなるはつばきの油につゞきて上品なるべし又本草綱目莧實氣味甘寒無レ毒といひ主治には青盲明レ目除レ邪利二大小便一去二寒熱一久服益二氣力一不レ饑輕レ身本經と實の能かくの如くなれば油となしても其功はしられたり雁來紅も莧の類なれば其能も同じかるべし本草綱目青葙附錄に附して氣味主治等も載ざれども莧の氣味主治と彷彿なるべし雁來紅は枕草紙にもみえて名だかけれども今植樹家庭園に植てなかめとするは十樣錦多くして雁來紅は稀なり十樣錦は初めより紅黃綠にて美なれば多くこれを愛せり雁來紅も葉は綠色に紫色を帶て美ならず秋に至て上の葉鮮紅にいたる又雁來黃は生じて其葉綠色にして美ならず八月ごろより葉元黃色にして頂上に至りては全葉鮮黃にして美なり雁來黃も十樣錦より稀なりこの三種共に葉間に實を生ず

本草和名云莧實仁諝音胡辨反一名馬莧一名莫實一名莧菜・白莧・細莧亦同一名糖莧・赤莧一名蕢達位反馬莧一名馬齒莧本條一名鵝莧出兼名苑一名慈䓈出大清經和名比由

和名類聚鈔野菜類云莧本草云莧音現去聲和名比由味甘寒無毒也

又染色具云赤莧本草註云莧又有二赤莧一和名阿加比由莖葉純紫不レ堪レ食レ之

清少納言枕草紙云かまつかの花らうたげ也名ぞうたてげなるかりのくるはなともしにはかきたる

按に雁來紅をかりの來る花とはいふまじきなりくはしくは正誤に辨ず

本朝食鑑云莧訓比由本朝式亦同田野家園處々多有レ之其下レ種培養者長大也其野生者細小也狀類二荏藍一雞冠而長大者四五尺大抵三月撒レ種苗葉似レ藍而小圓有二皺文一莖葉俱可レ作二蔬茹一六月勁梗不レ堪レ食開二細花一成レ穗或着レ莖結レ子其穗中細子扁而光黑與二雞冠子一相同九月收レ之不レ收則至レ冬不レ凋又有二紅莧一初嫩時赤長而紅老而紫莖葉同色可レ食可レ愛霜後不レ變亦佳

和漢三才圖會云莧似レ藍而微圓有レ皺六月開二細花一成穗子扁光黑似二雞冠子一人採二莖葉一爲レ蔬野生者葉小又有二莖葉敷レ地者一赤莧莖葉亦紫色高者三四尺略似二雁來紅一而美也五色莧亦似二十樣錦一而共種二庭園一愛

古今要覽稿卷第四百五十

●草木部 油料

ひゆ 莧

ひゆのあぶらは天工開物油供饌食者云々搽子莧菜子とみえ又油をしぼる條に莧菜子毎石得二油三十斤一とあれば其料も多き物にて蒔種をまたずして路傍園砌に生ぜざる所なきは卽天の賜ものにして蕎にもまされり蕎は冬春の賜にして莧は四月より生ずれば蕎莧交代して蒼生のたすけとなれども皇國にては未だ莧菜子より油を搾る事をきかず是も種類多し普通のひゆは莖淡紅にして直立せずこれ野莧也又野莧と同じ形狀にして莖葉紫色なるは紫莧なるべし又おあがりひゆと呼は莖葉淡綠にして長三四尺に至る是食料に最可なりこれ白莧なり大和本草に白莧は外國より來れるゆゑに唐莧と云といへり又琉球ひゆと稱するはその葉の筋紫黑色にして斑文のごとし此ひゆの穗は殊に長くたれ下りて仙人穀のごとくなるありこれ琉球より渡りしものなるべし又あかひゆあり形狀は上の二種に似て莖葉ともに赤しこれは和名類聚鈔染色具にいふ赤莧にして染ものに用ひたるものにて其莖葉純紫不レ堪レ食レ之といへども本朝食鑑には紅莧初嫩則赤長而紅老而紫莖葉同色可レ食可レ愛とみゆれば是又食ふべしすべてひゆは葉の先尖らずしてくぼめるをもつて衆葉に異なりとすひゆの實は葉の上のみならず葉間ことに實を結ぶ性なれば細小なりといへども料多かるべし又雁來紅・雁來黃・十樣錦の三種も共に莧の大さにして葉の先尖りて莧のごとく葉の末に穗の出ざるを異なりとすその實葉の間に生じて莧にことならず雁來紅を本草綱目靑葙附錄陶朱術條下に載しは誤なり今又仙人穀と呼草庭園に植て花を詠め其子はいりて食ふに味美なりこの種は近來琉球より渡りしといへども今多くなりて出羽國米澤に多く作り油を搾り用ふに甚淸潔にして菘菜子にも勝れりその種るに荒地日陰に蒔ても生長せざることなく甚便利なりといへり春種を下し生じて三四寸許の時より花を生じて莖葉花ともに長じて三四尺に至る是も花は莧の如く葉間にも生じ穗のたれ下る事二尺餘に

油九斤吳下取油食後以其餅充豕糧菘菜子每石得油三斤油出清如綠水棉花子每百斤得油七斤初出甚黑濁澄半月清甚莧菜子每石得油三十斤味甚甘美嫌性冷滑亞麻大麻仁每石得油二十餘斤此其大端其他未窮究試驗與夫一方已試而他方未知者尚有待云

猪膏三十斤造雜工已下仕丁已上藥料 縫殿寮油五升御服所并寮中十二月晦夜料 造酒司油四升御酒殿十二月晦夜料 左右馬寮車油三斗八升三合寮別一斗九升一合二勺 飼青御馬所料油二斗二升寮別一斗六升 樝椒油一斗六升寮別八升 猪膏六升四合寮別三升二合 乳牛院油一升十二月晦夜料 畫所油五升 作物所油三斗 內侍司命婦已下女嬬已上十二月晦夜雜給料油六斛五斗二石中宮料 侍從所月料油三升小月二升九合 賀茂齋院料油一斛一斗正月元日節料六斗四月御禊料五斗 賀茂齋內親王月料二斗一升小月減七合 親王并妃夫人各月別九升小月減三合 親王頓料六斗下知名號之日所行

凡諸祭及節會等所須油皆待印書出充數各見本司式

凡供御料用胡麻油自餘充雜油

凡量收諸國進中男作物雜油中男一人胡麻油七合荏油五合海柘榴油三合麻子油三合呉桃子油三合樝椒油五合猪膏五合

凡油十斛別納以爲不動

十二月晦夜供奉內裏并大極殿豐樂殿武德殿儺料等雜物樝椒油七斗六升六合胡麻油四斗

天工開物膏液云宋子曰天道平分晝夜而人工繼晷以襄事豈好勞而惡逸哉使織女燃薪書生映雪所濟成何事也草木之實其中韞藏膏液而不能自流假媒水火馮藉木石而後傾注而出焉此人巧聰明不知于何稟度也人間負重致遠特有兵車乃車得一銖而轄轉舟得一石而罅完非此物之爲功也不可行矣至葅蔬之登釜也莫或膏之猶啼兒之失乳焉斯其功用一端而已哉

油品凡油供饌食用者胡麻一名脂麻 萊菔子 黃豆 菘菜子一名白菜 爲上 蘇麻形似紫蘇粒大于胡麻 芸薹子江南名白菜 次之 搽子其樹高大餘子如金罌子去肉取仁 次之 莧菜子次之 大麻仁粒如胡荽子剝取其皮爲緝索用者 爲下 燃燈則櫵櫵俗柏字仁內水油爲上 芸薹次之 亞麻子陝西所種俗名壁虱脂麻氣惡不堪食 次之 棉花子次之 胡麻次之燃燈最爲竭 桐油與櫵混爲下桐油毒氣熏之柏油連皮膜則凍結不清 造燭則櫵皮油爲上 蓖麻子次之 櫵混油每斤入白蠟凍結次之 白蠟結凍諸清油又次之 樟樹子油又次之其先不減但有避香氣者 冬青子油又次之韶郡專用嫌其油少故列次 北上廣用牛油爲下矣 凡胡麻與蓖麻子樟樹子每石得油四十斤 萊菔子每得油二十七斤甘美異常益人五臟 芸薹子每石得三十斤其耨勤而地沃榨法精到者仍得四十斤陳曆一年則空內而無油 搽子每石得油一十五斤油味似猪脂甚美其枯則止可種火及毒魚用 桐子仁每石得油三十三斤 櫵子分打時及油得二十斤水油得十五斤混打時共得三十斤此須絕淨者 冬青子每石得油十二斤 黃豆每石得

又云賀茂神祭料油二升
又云新嘗會供奉料(中宮准此)油三升四合
一升八合小齋侍從候所三度ノ料一升六合解齋夜ノ料
又云正月最勝王經齋會料油四斗二升(堂僧房料)
又云正月修眞言法料油一斛四斗二升五合三勺
二斗二升二合三勺五太菩薩幷十二天ノ料九斗六升三合佛供幷僧沙彌三十二口ノ料二斗一升僧房料三升行事所ノ料
又云正月修大元帥法料油一斛四斗五升一合
八斗六升一合護摩壇供料三斗四升僧供料二斗四升僧十五口房料一升行事所料
諸寺年料油聖神寺四季料別三斗五升二合
法華寺料月別三斗(小月減一斗)
靈巖寺料月別三升(小月減一合)
東寺年料一斛六斗六升六合
一斛六升五合眞言中台五佛左方五菩薩右方五忿怒從正月迄十二月燈料三斗春修法料三斗秋灌頂料
神護寺燈料月別三升(小月減一合)
常住寺年料三斗五升二合

延曆寺灌頂料一斗(寮家送之)
喜祥寺春地藏悔過料三升(冬料准此)
七箇大寺盂蘭瓮料胡麻油四斗九升(寺別七升)
諸司所請年料
典藥寮胡麻油四升一合(煎供御地黄料)猪膏二百十三斤十五兩(造供幷中宮春宮坊御藥及人御料)大膳職胡麻油一升二合(供御幷中宮御索餠糖料)內藏寮胡麻油二斗八升七合麻子油二升五合
二升二合伊勢太神宮御鞍二具用途料六升五合麻子油二升五合造年料御靴幷絲鞋等料二斗盛山陵幷所所荷前料
又圖書寮云油三升
二升ハ元日ノ御、幷中宮ノ御、裝束所燈料一升ハ奉寫年料新翻ノ仁王經所料
陰陽寮油一斛五斗九升三合
漏刻所料自三月迄八月六箇月夜別四合自九月迄二月六箇月夜別五合
又兵庫寮云胡麻油六合(五合修理甲一百領料一合造大祓太刀幷伊勢神宮祭鞍料)猪膏五合(同造大祓太刀幷神宮鞍料)猪膏小二十斤(造鼓吹ノ生等藥料)隼人同荏油一斛三斗八升(造年料油絁料)內匠寮油三升五合(造年料草筥料)猪膏十五斤(造雜工等藥料)木工寮胡麻油一升一合猪膏五合(並造年料雜物料)

油をとり跡は蠟となして可なり蓖麻につゞきては續隨子可なりこの物春植ても秋うえても時節にかゝはらず秋の末に種をおろして霜雪のうちにても生長するものなれば植るに便利なりこの實油多くあり是も毒ありて燈油にして久しければ目にあしといへり又木にホルトあり漢名膽八樹伊豆に多し方言ホンハノ木といふまた九州邊四國に多く生ずといへどもいづくにもあり葉は楊梅に似て鋸齒なく四季に葉相かはるものにてもつこく、かなめもちのごとく下葉紅葉して美なりこの實大さ六七分橄欖に似て小なりこの油食用にも可なり罌子桐、あぶらぎり是は諸國に多くうゑて油料となせども毒つよくして夜學などに眼を勞すれば必明を損ずつゞてき草綿子油これ又毒あり用べからざるものなれども今の燈油皆どくゑ、わた種なりといへりこれらの油を用ひんより魚油を用ゆべく魚油は光明にして眼に害なし今迄誰も用ひざれども油料となして可なる物は齊墩菓ぢさの木ゑごといふもの近郷山野自生多し春新葉を生じ四月に至りて五瓣白花を開一莖二三さがりひらく後實を結ぶ外皮淡綠色にして內に褐色の核あり此核中に白肉あり水油となし蠟ともなるべしこの實をやまがらの餌とするのみなりこの物油を取るにはよきもの也諸人にしめし置てあつめさせなば一秋に油料の助おほかるべし栗本瑞仙院の說なり又ぢさの木につゞきては白雲木漢名は玉鈴花といへりこれもぢしやの木の類にて葉丸く先尖りて鋸齒なく大葉なる柿葉のごとく花はぢさの木の花に似て長さ四五寸の莖を出して多く花數二十餘もつきて淸明の頃より開くぢさの木の花より早しこの實もそれに似て大にして一條に八九も實のれり日光にてゑごといへり又合子草、すゞめうりこの實きはめて油料に可なるべし此もの溝瀆のほとり極てありこの實潤澤にして其性味つばき茶山花に似て少し苦味ありこれを岡村尙謙仙沼子に充しものにて古專ら用しもの是又油料となすべし又蠟をとるには此方にては漆實、はじの實この二品の蠟殊に良品なり又佐藤成祐曰筑前にて楝の實より蠟をとり用殊食して美味にはあらねども食用に可也といへり

延喜式主殿寮云釋奠料名香二兩 愛藏人所 胡麻油二升

又云鎭魂料樓椒油二升四合

又云園韓神祭料油二升

鳥好テクラフといふものは即今いふやぶにつけいにして天竺桂なるべし又烏臼はあぶらとなし蠟となすその油を清油といひその蠟を皮油といふ油料によきもの也この木も今は多くあり實種て能生るものなり向陽の地に種培養を加へなば生長すみやかなるべしこの木芽を出すは遲く立夏一候の頃より出て棗と同じけれども四五月生ぜし枝葉より又六七月迄枝葉を出し繁茂せり屋頭烏桕午陰密と方岳の詩にも云へりこの木四月より枝葉を生じ五月末より六月にいたりて花あり實を結ぶ秋も早く霜降より染はじめて寒露に至り紅葉鮮紅にして落葉せり油蠟となす事は本草綱目天工開物に詳也烏臼につゞきて油料の良材は大和本草にいはゆる婆羅得シラキ江州ニテ白木ト云畠ニ植ウ實アリ油ヲ取ルといふもの本草綱目啓蒙に云婆羅得詳ナラズシラキニ充ル古說ハ穩ナラズシラキハ烏臼ノ一種トスル說ヲ優レリトスといふもの其形狀は本草綱目啓蒙に詳なり此實より油をとり自鳴鐘に用るとは啓蒙にいへども食用として美味なる事は載せずこの實外皮白くして黑斑ありて美なるもの也これを仙臺にて珍果啓蒙にもチンクワ仙臺と呼て果子とすといへば烏臼にもまさりたり尤烏臼は蠟となし油となして益はあるものなれども食料にはならぬものなり又冬青子油天工開物これも處々に多くあり人家庭砌にも植置ものにてその種類も多しといへども何れも圓實を結ぶはじめは綠色熟すれば赤色にして美なり又江戶もちと云ものは實大なりといふ冬青實より油とる事は本草綱目には見えず天工開物樟樹子油冬靑子油ありて樟油につゞきて用る也此外黃豆といふはしろ豆にして云に及ばざれども油となすにはしろまめを用る方しかるべし黑豆は諸豆のうちの上品にして藥用に用ゆ此方にて南部の眞黑と云もの小粒にして眞黑色なりすべて豆より油をとるは餘物に勝れり蓖麻トウゴマこれは春分の頃實を種て生長すれば七八尺丈にも及べり其形狀は本草綱目啓蒙詳なりこの油は今は唯印肉に用るのみにして燈油に用る事は曾てなし直ひ高しこのもの多く種て油料とすべし是も春まきて秋は實のれり天工開物蓖麻子毎石得二四十斤一この油と胡麻油と同じくよしといへば大に益あるものなる事は明也蓖麻も毒あるものなれども罌子桐の油よりは毒すくなし蓖麻子にて水

しが五升許有しを自身しぼりしにその油清潔にして殊に美味なりといへり又出羽の國秋田にてはあけびにて油をとる事常のことなりと岡村尙謙いへりまた年月をかさねずして利を得んには菘にしくものなし秋まきて冬秀て早春より花開（花信風にも雨水一候菜花とあり）三月にいたれば實のれりいづれの菘にても實のらざるはなし蕓薹（アブラナ）は多くあぶらに益あるべきものなれども芥子にはしかずといへり（天工開物芸薹子菘菜子を載たれども芥子はのせず）からしなは種にしひな無く實數多くして實を採に益多しといへりいづれの菘たねにても物をゆびき熟して食ふよし天工開物には萊菔子も油料となして胡麻の次黄豆菘菜子の上に出したれば萊菔子油上なるものなるべし此方にてはいはざる事なり又自然生のものには莧も油料となす事同書に見えたり莧は何れの地にも多く生じて菜蔬となしても可なるものなりひゆは立夏過より生じて夏生長し冬來ても凋む事遲しこの實油の料として可なるものならば薺を天の賜といふにもまさりたるものなり莧も種々あり是も本草綱目啓蒙に詳なり莧を油料とせば雁來紅十様錦の類皆莧の大なるものなり又奥州米澤にては仙人穀にて油を採といへり仙人穀はいかなる日影にまきても實のらざる事なく大に益あるもの也と此草の實は罌子粟に似て少し大きくいりて食し美味なる事はしれども油となす事は未しらず又樟あり油をとる事に本草綱目には見えざれども天工開物には樟樹子油あり又本草綱目啓蒙には蠟をとる事を載たれば此方にては天工開物にもとづきて採覺たるものかすべて蠟はあぶらをとりたる跡の凝たるを用ゆるものなり又大和本草に黒もじの實より油をとる事を載たり黒もじもくすの木の類なりとて釣樟に充しものなり蘭山は黒もじを釣樟に充るは穩ならずといへり當不當はしばらくをく又くろもじに勝りたるは白もじ又あぶらちやんと呼ものは猶油料によしと云上州碓水峠越州魚沼郡諸山にも多く產すといへり又大和本草にいはゆるタブノ木またダマ・ダモとも云桂ノ類也二種アリ一種ハ白タブと云今たみと云て伊豆八島の中より多く渡る此方にもまゝあり大木あり一種クスタブ其葉白タブニ似たり最ヨク桂葉ニ似タリ桂葉トクスタブノ葉ハタテスヂ本ヨリワカルといふは桂の下品にして葉大なるものなるべしまた冬赤き實ナリツヾノミト云

て詳なる事は詳なれども其花の栗に似て長大といひしは眞の實を結ぶ花に心づかざりしなりすべて栗、くるみ、なら、かしは、□はしばみ、はりの木のたぐひのさがる花は實は結ばぬものなりくるみの實を結ぶ花は別に二三寸許の莖を出しその半より小實の形にして六つ七つつきて二瓣の花を開くその色鮮紅にして甚美なるものなり尤も時珍も實を結ぶ花のことはいはずたゞ三月開レ花如二栗花一と云しより皆是に隨て云なり又槾椒はホソキといふ物にてある人の信濃國より取よせたるを見しにその國にてほそきと呼ものは卽イヌザンシヤウなりそれを蔓椒にあてゝ相違なき證には日本紀皇極天皇に虫を祭て福をいたすといふ條にこの蟲生二橘樹一生二蔓椒一と云々注に蔓椒此に褒曾紀と云とみえたりホソキの名信濃の方言に傳はりてイヌザンシヤウなる事明なりこのとこよの蟲橘に生じ或は蔓椒に生ずといへば卽今いふサンシヤウ蟲山椒に生じ又柚、蜜柑、金柑の類に生ずるものなり紅毛にてそのつく蟲にて其草木の同性たるをしるといふ事もあり閉美は詳ならず和名類聚鈔に据を閉美とし木腫節中爲レ杖也と云のみにて證とすべき事なし

また和漢三才圖會ゴ子ツ、ヤブテマリと云木に充ててまりの類にてその木堅實にして杖となしてよき事のみにて實を結ぶ事もみえずすべて手まり類は皆實は結ばざるものなり又麻子油は大麻なりアサノミといへり春種を下して畠に植雌雄の二種あり雌あさと呼もの實を結べり是も委しく本草綱目啓蒙に見えたり志村知孝曰閉美を今按に油料のものならんには大和本草にいはゆるヒヾ・ヘヾ・イヌガヤといふものにこそ油を採にはよきものなれ旣に此方にてはアブラガヤと云處々に多くありて生長しやすきものなり其形狀は大和本草に詳なればこゝには略す又眞の榧のあぶらは絶品なり吉野ガヤといふは實長くして澁味なく是は果子に用て上品なる故に油とするには形丸くして生食に佳ならざる物を用るよしそれすらはなはだ可なるものなり又蔓椒佐藤成裕曰米澤にてイヌザンシヤウにて油とり用る是も目にはあしくシビレルといへりにまさりて油の多くあるは椒にしかずこの木も處々に多くありて長じやすきものにて實も山椒のごとく黑澤にて椒目のごとし油をとるには便なるものなり又木道の子にしくはなしと信濃の人はいへりある老人子孫のあけびを食せし種をため置

古今要覽稿卷第四百四十九

●草木部 油料

油料

あぶらの物にあらはれしは延喜式主計凡諸國輸調の條に海石榴油一升五合壹岐島一升三合三勺また凡中男一人輸作物の條に漆、金漆各一合五勺胡麻油七合荏、槾椒油各五合海石榴、呉桃、閉美、又伊勢國胡麻油、槾椒油、尾張國胡麻油、甲斐國胡桃油、美濃國金膝、胡麻油、荏油、越前國胡麻油、荏油、呉桃子、拌油、但馬國胡麻油、槾椒油、因幡國胡麻油、海石榴油、阿波國閉彌油、槾椒油、胡麻油とみえたりつばきの油は壹岐の島因幡國より調せしと見ゆ今は伊豆八島の中より貢せり是本草和名不死藥二十一種の一にして海石榴油海島の中にありとあるは誠にこの國の至寶なりこの不死藥二十一種の中海石榴油石決明の二種は殊に多くしてよろこばしき國なり椿は處々に多くあるものなれば人は拾置て油の料となすべきなり又茶山茶の實にて製したる油はつばきにまさりて香氣ありて殊に美味なりといへり大和本草ニ茶梅(サザンカ)實ニ油アリ山ニ多キ村民取テ利トス又榛の實よりも油を取る事天工開物に見えたりこの榛實はつばき茶山花をさして共榛といひしものなるべし茶の實はつばき茶山花より圓扁にして丸きものなり霜降の時より花盛りなるに實もともにあるものなり又金漆は和名類聚鈔に金漆樹楊氏漢語抄を引てコシアブラノキとせり或人青木なりといふ又出羽國にて古志阿不良と云木は喬木葉如ニ辛夷葉一莖仲郎如ニ太良木一尺許葉五葉注幹如レ朴初夏細花開秋黑實房形注といふものはニンジンボク、イヌボウ城州鞍馬イモノキ野州播州イドチ日光武州大嶽山中北陰ノ地ニ生ズ樹高大葉海桐ニ似テ長大ニシテ薄クシテ淡綠色鋸齒アリ五葉一莖ニ周リ附テ五葉ヲナス人參ニ似タリ故ニニンジンボクト名ヅク枝葉對生スといへり漢名椴といへり胡麻も一種にあらず種類あれども是は本草綱目啓蒙に詳なれば略す荏ゑごまこれは田舍にて圃に作りまた自生もあり其形狀は紫蘇に似て莖葉皆青し實を結ぶ事も紫蘇に似て少し粒大なり胡桃を處々に多くありて目前のものにて本草綱目啓蒙にその種類をあげ

然るを時珍の說に去レ水曰レ瀉如二澤水之瀉一也といへるは舃或は瀉に作るによりて遂に誤りて瀉と混同して其說をなせしものなりされど本草和名澤蕮の註に仁諝を引て音昔といへる外にまた楊玄操を引て音私也反といへるによる時は本草書には此物利水の功あるを以て舊より誤りて澤瀉にて通用せしもしるべからずといへ共其義は爾雅に從ふを以て本義とはなすべし

水瀉同上

○瀉字まさに潟に作るべし下の鵲瀉の瀉また同じこれを水潟といへるは其苗水中に生じて其葉また舃に似たるによりて名付し事其義澤舃の如しされど潟字は即舃と同音なれども其義に至りては即鹵地の事にして足履の事にあらざればこれはたゞ其音を假借せしのみにて其實は舃に作るを以て正とす

鵲潟同上

○鵲字疑らくは鵲の壞字なるべし鵲は即古文の舃字と同音也後人漫に其字の異なるによりて誤りて二字を合して一名とはせしものなるべしこれは爾雅に蕍舃とあるは蕍一名舃なるを釋藥性には直に其二字を合して蕍舃を以て一名とせしに同じ

至て小さく食ふに堪ざるものなりこれによりて其義を考ればおもだかといふ語のもとはおもひたがひの省呼にて其草をのぞみて久和井かと思ひて採てこれをみれば其根究て細小なるもの故に始めにおもひしとは其物全く違ひぬるを以ておもだかとはいひしなり夫より轉じては澤瀉にもやがて其名を冒せしものにてもあるべし淸少納言枕草子におもだかも名のおかしきなり心あがりしけむとおもふにといへるは全く名によりて面高の義にいひなせしものなればそれを以てこの草の名義とはなすべからずされど枕草子にいへるおもだかは卽常のおもだかにして此澤瀉の名にはあらざるべし

奈計比 多識編修治、纂要圖解本草

○なげひの儀いまだ詳ならず憶にけひの反きなればなげひは卽奈岐にしてこの物の名にはあらざるに似たり

美豆奈岐 同上

○按に今俗にみづなぎとよぶものは專ら蔛草をさしていふされど本草啓蒙に澤瀉をおもだかと訓せしは非なりといふ說によればこれもまた其名を誤れるものなるべし

なゝと 紹水本草綱目

○名義詳ならず本草啓蒙にとの下にうくさの三字ありてなゝとうくさは佐渡の方言なりといへりこれによりて考れば琉球にて席におる草を七島といへば此なゝとうも蓋し七島の義にして其原は烏芋の名なるを誤りてこれに假借せしもしるべからず

匙おもだか 本草啓蒙

○此葉の狀匙の如しよりて名づく

澤おもだか 俗稱

○此物水澤中に生じて其根ほゝおもだかに似たるによりて名づく

澤瀉 神農本經

○岡村尙謙曰瀉まさに舄又は蕮に作るべし蓋し傳寫の誤りなり爾雅に蕍蕮疏に蕍一名蕮卽藥草澤瀉也圖經本草また爾雅を引て蕮與レ舄同私夕切とあれば卽足履也かゝれば寫は猶車前を陵寫舄といへるに其義同じ此草水澤中に生じ其葉の狀全く舄に似たるによりて草冠を加へて澤瀉とはいへるなり

藥舖ニ鬻ク所舶來ノ者ヲ上品トスレドモ今少シ仙臺ヨリ出ル者多シ舶來ニ次テ上品トス古ハ丹波近江越後ヨリ水澤瀉ヲ出ス今ハ否ラズ

按に本草疑辨に越後より出る澤瀉は輕虛にして丹波より作り出すものは色白く堅實なりといへば凡天和の比丹波よりいづるものは今の仙臺にて作るものと蓋し同種にして其根堅實の物なりこゝに古は丹波越後より水澤瀉を出すといへるは輕虛と堅實の二種を混同して其說をなせるにや旣に丹波の產の堅實なるよしはその說用藥須知にも詳にみえたり

證類本草引ニ集註本草一云澤瀉今近道亦有不レ堪レ用惟用ニ漢中南鄭青代一形大而長尾間必有ニ兩岐一爲レ好此物易ニ朽蠹一常須ニ密藏レ之葉狹長叢ニ生諸淺水中一仙經服食斷穀皆用レ之

又引ニ圖經本草一云春生レ苗多在ニ淺水中一葉似ニ牛舌草一獨莖而長秋時開ニ白花一作レ叢似ニ穀精草一五月六月八月採レ根陰乾今人秋末採暴乾用漢中出者形大而長尾間有ニ兩岐一最佳

本草原始云澤瀉以ニ漢中出者一爲レ佳色黃白痕有ニ鬚毛一去レ毛酒浸用

『此間紹興本草所載ノ澤瀉同上ノ齊州澤瀉外四畫略之』

○釋名

奈末爲（本草和名、和名類聚鈔、康賴本草）

○按になまゐの義いまだ詳ならず蓋しなまゐはもと烏芋の名にして此物もやゝ其根烏芋に似たる所あるによりて其名を假借せしものなるべしさればなまゐは生字の義にて熟に對していひゐは藺にして今のふとゐなり凡烏芋は其苗頗るふとゐに似て其根生にて食ふべければなまゐとは名付しなりまた新撰字鏡に茢を奈萬井と訓せしもその苗根ほゞ烏芋に似たるによりての事なればそれにても其おほよそはをしはかるべし

於毛多加（本草和名、康賴本草、淸少納言枕草子）

○岡村尙謙曰本草啓蒙に古より澤瀉をおもだかと訓せしは非なりおもだかは東醫寶鑑の野茨菰なりといへりされど古は野茨菰も澤瀉も其土地によりては同名に呼なせしもしるべからず扨今の俗におもだかとよぶものは其莖葉全く久和井に似て根は

又云阿波國三十三種云々澤瀉一斤
本草辨疑云澤瀉唐アリ和ニ二種アリ越後ヨリ出ルハ輕虛ナリ唐ト形ハ異ナレドモ輕虛ハ一同也近年丹波ヨリ多ク作リテコレヲ出ス色白堅實ニシテ所見ヨシ
又云和産越後ノ輕虛ト丹波ノ堅實ト何レカ佳ナリトセン愚考ルニ主能ヲ以テコレヲ云ハ是水ヲ滲スノ藥也丹波ノ者堅實ニシテ濕ヲ引ベキ形ニアラズ土茯苓濕ヲ滲ス堅實ヲ下トシ輕虛ヲ上トスルトキハ此堅實モ不可ナルベシ越後ノ輕虛ヨク唐ニ似タリ濕ヲ滲スベキ形也根ノ形越後丹波唐三物各別ナリ其中越後ハ唐ニ近シ丹波ハ遙ニ異也然トモ丹波ハ皮ヲ去易ク色潔白ニシテ所見ヨキ故ニ主能形狀ノ考ナク專ラ丹波ヲ貴ンデ越後ヲ賤ンズ今ハ越後ヲ用ヒザルユヘニ藥舗ニ不レ貯レ之惜哉用ル人審レ之
和漢三才圖會云按澤瀉出二於丹波一堅實肉白爲レ上越後之産輕虛而爲レ次然越後者形狀似二乎唐澤瀉一丹波者稍異
大和本草云澤瀉水田ノ中ニ生ズ其葉狹長一根ヨリ葉多ク叢生ス丹波ノ土民是ヲ田ニウヱテ利トス又藺草アリ葉ハ澤瀉ニ似テ根ハ澤瀉ニアラズ本草ニ見ヘタリ
用藥須知云澤瀉和有二二種一仙臺丹後ノ産ヲ上トシ近江ノ産ヲ下トス或曰凡通劑ハ輕虛ヲ好トス堅實ナルヲハ惡シト云燈草茯苓ノ類ヲ引テ證トスルハ誤リナリ藥物ノ主治意量臆度ヲ以テ詰究シガタシ琥珀拾レ芥磁石吸レ鐵以二道理一詰究スベカラズ今澤瀉モ亦然リ丹後ノ産ハ實シテ性全シ江州ノ産ハ輕虛ニシテ性アシヽ斷ジテ丹後ヲ上トスベシ今藥店通用ノモノ丹後仙臺多シ上ナリ
本草啓蒙云澤瀉水澤中ニ生ズ奥州仙臺ノ産眞物也春舊根ヨリ苗ヲ生ズ葉ノ形車前葉ニ似テ大ニシテ厚ク數葉叢生ス夏ノ末莖ヲ抽コト高サ三四尺節ゴトニ三枝ヲ分チ枝ゴトニ三叉ヲ分チ叉ゴトニ一花ヲ開ク三瓣白色大サ三分許下ニ三萼アリ花後實ヲ結ブ圓小ニシテ薄ク圓ニ並ビテ冬葵子ノ如シ霜後苗枯ル諸國自生ノ者ハ葉ノ形羊蹄葉ニ似テ長ク花ノ色淡紫其根至テ小クシテ輕虛コレ卽本草原始ニ載ル所ノ水澤瀉ニシテ下品ナリ
按に今傳る所の本草原始に水澤瀉の名なし引書疑べし

古今要覽稿卷第四百四十八

●草木部

なまゐ　おもたか

なまゐ一名おもだか一名なけひ一名なゝと一名匙おもだか一名澤おもだかは西土にいはゆる澤瀉一名水瀉一名鵠瀉といへるもの是なり此草彼にては汝南池澤(證類本草引ニ名醫別錄ー)漢中南鄭(同上引ニ集註本草ー)涇州華州(同上引ニ唐本草ー)山東河陝江淮(同上引ニ圖經本草ー)に產し皇國にては近江大和若狹出雲美作備前備中阿波(延喜式)に生ず其他の諸國また多し今藥舖うる所のものは多くは陸奧仙臺より來る其根堅實にして性最よろし(用藥須知)今また近江よりいづるものは其根輕虛にして性わろしといへど(同上)いにしへ近江よりいでしものはいかゞありけんされど小野蘭山の說に仙臺のものは眞物にて其他諸國のものは根至て小さくして輕虛なりといへるによれば古近江より出しもまた大和若狹出雲等に產せしも共に其根輕虛のものなるべしよりて憶に其根輕虛なるは葉の狀頗る紫蕚葉に似てやゝ厚し此卽弘景のいはゆる葉狹長叢ニ生諸淺水中ーといへるものにて其根堅實なるものは葉の形車前葉に似ていと大なれば此卽蘇頌のいはゆる葉似ニ牛舌草ー獨莖而長といへるとよく合り此種近道總て自生なしといへ共輕虛のものは處々水澤中に往々產するを見るされど弘景の說に形大而長尾間有ニ兩岐ー爲レ好といへば西土には其葉狹長にして根の形大なるも一種別にありしにやいまだ其實をしらず扨此物の味其鹹なるは常なり然るに藥性論には澤瀉味苦しとみえたり此種國產ある事をしらず紹興本草圖する所三種の澤瀉あり其味苦きものも蓋しこれらの內にあるべきにや

延喜式(典藥寮)云諸國進年料雜藥大和國三十七種云々澤瀉四斤

又云近江國七十三種云々澤瀉三斤

又云若狹國二十四種云々澤瀉六兩

又云出雲國五十三種云々澤瀉一斤三兩

又云美作國四十一種云々澤瀉一斤三兩

又云備前國四十種云々澤瀉十斤

又云備中國四十二種云々澤瀉一斤八兩

いぬよもぎ 本草啓蒙
○按にいぬは犬蓼犬山椒の犬とおなじ
きくよもぎ 同上
○按に此葉に似たり故に名づく
くさぎく 俗稱　菴䕡 神農本經 名醫別錄
○按に醫學入門云菴舍屋間中多種レ之以辟レ蛇といひ本草原始にも菴䕡中有レ蛇培レ此蛇自辟レ之江南人家多種レ此以辟レ蛇故有二菴䕡之名一といへりまた本草綱目には菴草屋也閭里門也 此草乃蒿屬可三以蓋二覆菴閭一故以名レ之とみえたり按に 太平御覽に吳晋本草を引て菴䕡を奄閭に作り說文に奄覆也といへば奄卽菴字の義にあらず其說によりてこれをいへば此草もて里門なとを奄覆する事あるにより奄閭の名ありとはいはれまじきにやされど時珍とく所のものと古の菴䕡とは其物も異なれば奄菴音通にて辟蛇の說まされるにや
䕡蒿 救荒本草
○按に證類本草に廣利方を引て菴䕡蒿の名ありこれによれば䕡蒿は卽菴䕡蒿の上略なり

る菊葉の如し脚葉はかく大なれども梢葉に至ては牡蒿よりも細小にて花實は常の艾の如し此卽本草綱目に載る所の菴蕳にして古の菴蕳にはあらずされど紹興本草に圖する所の寧州菴蕳は蓋しこれと一物なるもしるべからず猶考べし

本草大義云蟾艾救荒本草所レ載之蔄蒿也紹興本草所レ圖秦州産寧州産者未レ見ニ於此邦ニ艾類也

本草綱目啓蒙云形菊葉ノ如シ艾葉ニ似ズ背ニ白毛ナシ斷レバ艾葉ノ氣アリ秋ニ至リ穗ヲナシ黃花ヲ開ク花實共ニ同シ卽艾ノ屬ナリ（此卽時珍のとく所のものをいふ）

太平御覽引ニ吳晉本草ニ云菴蕳生ニ上黨ニ葉青厚兩々相當七月花白九月實黑七月八月十月採

證類本草引ニ集注本草ニ云狀如ニ蒿艾之類ニ近道處々有仙經亦時用レ之人家種レ此辟レ蛇也

又引ニ本草圖經ニ云今江淮有レ之春生レ苗葉如ニ艾蒿ニ高三二尺七月開レ花八月結レ實十月採レ實陰乾今人通以ニ九月ニ採江南人家多種レ此辟レ蛇

救荒本草云蔄蒿田野中處々有レ之苗高二尺 餘莖 葉似レ艾其葉細長鋸齒葉抪レ莖而生味微苦性微溫 救 飢採ニ嫩苗葉ニ煠熟水浸淘淨油鹽調食玄扈先生曰可下作ニ恒蔬ニ省過上

こゝにいふ其葉細長は卽一葉の狀をさしていふまた太平御覽以下はすべて古の菴蕳をいふ

本草綱目云菴蕳葉不レ似レ艾似ニ菊葉ニ而薄多ニ細丫ニ面背皆青高者四五尺其莖白色如ニ艾莖ニ而粗八九月開ニ細花ニ淡黃色結ニ細實ニ如ニ艾實ニ中有ニ細子ニ極易ニ繁衍ニ藝苑者以レ之接レ菊

『此間くさやつてノ畫略』

○釋名

ひきよもぎ（本草和名、本草大義）

○按に神田玄泉の說にひきよもぎは蟾蜍艾の儀なりといへり一說にひきよもぎは卽低字の意にて此もの艾に似て艾よりは其丈ひくきものなるによりて名づくともいへり

もみち草（俗稱）

○按に此葉雞冠樹葉に似たり故に名づく

くさやつで（同上）

○按に此葉八角金盤葉に似たり故に此名あり

しとけ（出羽國方言）

○名義詳ならず

て牡丹人參に混同してかくいへるにやまた上文にいはゆる總州人參の名甚だ疑ふべし

防葵辨云凡貞享ノ頃ヨリ元祿年中迄ハ防葵ヲ以テ朝鮮眞人參ナリト心得御當地藥店ニテモ賣買ス其直段目形一兩ニツキ白銀五六匁セシ也又下谷邊ニ煉藥ヲ製シ人參入タリト名乘カケテ是ヲウル其頃御上ヨリ御吟味ノ儀有㆑之其下谷人參修今ノモノト先年ヨリ御香見御用被㆓仰付置㆒候稻野信濃大掾ト云ルモノ兩人トモニ御奉行所ヘ被㆓召出㆒眞僞決斷ノ儀被㆓仰付㆒候處ニ其時日ハ七月中旬ト覺シカ下谷ヨリハ鉢植ノ防葵ヲ持參シ信濃ハ今世俗ノ云トコロ三椏五葉草ヲ鉢植ニシテ持參ス兩草ナラベ見ル所甚タ違ヘリ信濃曰人參ハ本草ニ其味甘微苦トアリ卽コノ草トリクワヘ見玉ヘ甘ク苦シ又本草ニ三椏五葉トアリ卽是三椏五葉ナリ又其子ノ形大豆ノ如ク初青ク熟シテ紅シトアリ是見玉ヘ少シモ違フコトナシ貴殿持參ノモノハ本草毒草ノ部ニ出ル防葵トイヘル物ナリト罵詈ス扨下者ノモノ防葵ノ根ノ人參ニ少シ似タルヲ以テ爭論スレドモ御奉行幷諸人見來ノ上ニテ信濃持參ノモノ本草人參ノ條ニ克相協ヘリ是ニヨツテ其防葵人參ハ暫ク御停止ニテ信濃ニ和人參賣買ノ御免御町奉行御觸ニテ和人參入用ノモノハ信濃方ニテ相求可㆑申旨被㆓仰付㆒賣買セシトカ其頃諸人トモニ信濃人參ト云リ幸信濃國ヨリ今ノ三椏五葉草ヲ掘出シ是ヲ賣モ信濃ナル故ニ兩名ヲ兼テ信濃人參ト諸人唱シ也其節信濃ハ中橋南三町目東側ニ居住セリ其頃ハ眞人參幷今云三椏五葉草ヲ知ルモノスクナカリキ近頃マデモ此防葵ヲ眞人參ト覺シ人多シ予兼テ信濃ニ謂テ云是ハ眞防葵ナリ御上ニテモ何方ニテモ防葵ト申草也ト申募候樣ニト敎ヘシ故於㆓御奉行所㆒予カ敎ヘシ通リ申募シ也

ひきよもぎ　くさやつて　菴蕳

ひきよもぎ一名もみぢ草一名くさやつで一名しとけば漢名を菴蕳一名蕳蒿といふ其葉は八角金盤に似て極めて細小にて箕峯楓よりはやゝ大にして且厚し秋白花を開き實を結ぶ頗る鬼督郵に似たり出羽の人は常に此物を採て蔬となすよし此卽吳晋本草に菴蕳葉靑厚花白といへるもの也一種いぬよもぎ一名きくよもぎ一名くさぎくありその葉牡蒿に似て缺刻深く頗

平野人參ト名付朝鮮種眞人參ナリト心得御當地藥店ニテモ賣買ス云々

證類本草引ニ本草圖經ニ云今出ニ襄陽ニ諸郡不レ聞レ有レ之其葉似レ葵每莖三葉一本十數莖中發ニ一幹ニ其端開レ花如ニ葱花景天輩ニ而色白根似ニ防風ニ香味亦如レ之

○釋名

平野人參防葵辨本草啓蒙

○平野は攝津國の地名なり

牡丹人參千金方藥註本草啓蒙

○此葉牡丹に似たり故に名づく

御赦免人參同上　御免人參本草啓蒙

○小野蘭山云古は御免を蒙り嫩根を製して和人參に充て賣る故に御免人參等の名あり

代人參人參譜

○按に凡貞享の比より元祿の比迄は此ものを以て人參に代用ひし故に此名あり

五島防風千金方藥註本草啓蒙

○蘭山云肥前の五島にて多く栽出す故に名づく

削防風本草啓蒙

○蘭山云此種老根は大にして白色今は其根を縦に剖き削り防風と稱してうるこれ防風の僞物なり

きぼうふう千金方藥註本草大義

○按に此根防風に似て堅強なる事木の如し故に名づく或はきは卽僞の字音なりともいへり

一名しやこ本草大義

○名義詳ならず

防葵證類本草引ニ唐本草及本草圖經ニ

○蘇敬云其根葉似レ葵花子根香味似ニ防風ニ故名

○正誤

人參譜云防葵根葉皆有レ毒誤投ニ於舌上ニ則口舌強立處不レ能ニ言語ニ治レ之以ニ黑豆汁或甘草汁ニ解レ之矣

防葵辨云此草本草ニ氣味ノ諸說區々ナレドモ其内辛寒ニシテ無毒トアル說可也ト覺ユ此草ハ根人參ニ甚類シテ蘆頭ノ所孔穰ナリ氣味臊腥ナリ然トモ無毒ナル故ニ舊ヨリ人參ニ代テ諸藥ニ加テ害ナカリシコト尤ナリ然ルヲ本草毒草部ニ入タルコト予イブカシク思ヘリ此根ハ少シ狼毒ニ似タル所アル故ニ諸家混ゼシナラン去ナガラ狼毒トハ格別ナルモノ也これによれば人參譜說とところのものは別に一種有毒のものなり蓋し常盤の八丈草などを誤り

實皆似二茴香一生二肥土一者高六七尺許其根似二人參一黃白色蘆頭有レ毛而已

本草綱目啓蒙云今種子ヲ傳ヘテウヱ世上ニ誤テ朝鮮人參ト云葉ハ牡丹葉ニ似テチイサク白色ヲ帶テ粉ヲカケタルガ如シ子生ヨク三年ニシテ花實ヲ生ズソノ葉初ハ數箇叢生ス三年ノモノハ薹ヲ抽ルコト三四尺葉互生ス葉間ニ枝ヲ生ジ夏月枝梢ゴトニ小白花ヲ開キ傘ヲトス大葉芎藭ノ如シ花後實ヲ生ズ又大葉川芎ノ如シ實熟シテ苗根共ニ枯ル故ニ二年ノ秋根ヲ取リ用ユ防葵辨阿部云防葵ハ文祿年中ニ太閤秀吉朝鮮國ヲ討タシメ玉フ節諸大名渉リ玉ヒテ戰ハセ玉フニ歸陣ノ節朝鮮ノ奴婢ドモ眞人參也ト唱ヘシ故ニ實ト心得テ來攝州平濟郡平野ニ植始シモノアリテ能繁茂セシ故其頃御上ヨリ上意トシテ其所ノ土橋九兵衛トヤラン大ナル百姓アリ此モノニ被二仰付一夥敷耕作セシ由聞傳ヘ侍ル此モノ、子孫今ニ相續セシナリ之ヨリ段々近右河內澁河郡久寶寺村同國若江郡八尾村抔ト云ル所ニ段々作リ殖(フヤ)シ賣廣メシナリ右平野邊ニ往古田村丸ノ末葉ノ由ニテ田村源太郎トヤラントテ鄕士ノ樣成モノアリ幷ニ木村長門守苗裔トテ今ハ姓名ヲ改テ安井助左衛門抔トイヘル輩等モ右防葵ヲ手作セシト聞シ此平野ヨリ八尾迄ハ一萬七八千石モ惣高ノ所ト聞シ畑ニ大方此防葵ヲ耕作セシモノ多カリキ依レ之大坂道修町ハ諸人見來ノ通リ三四町ハ外ノ商買ナク皆藥店タリ予數十年以前此所ニテキ、シニ藥店

防葵



『此圖ノ次とかり防葵ノ一圖略之』

百六十軒有レ之由此所ヘ右防葵人參ヲ出シテ多ク賣買モ日本國中藥種屋ヘ此所ヨリ賣出セシ也其頃ノ人

古今要覽稿卷第四百四十七

●草木部

ひらのにんじん　ほたんにんしん　襄州防風

平野人參一名牡丹人參一名御赦免人參一名御免人參一名を人參一名五島防風一名削防風一名しやこ一名きぼうふうは卽紹興本草に圖する所の襄州防葵なり葉は牡丹葉に似て小さく白粉をおひ夏月枝梢ごとに小白花を開きて傘狀をなし花後實を結ぶ共に大葉芎藭の如し本草啓蒙此種は文祿年中豐臣大閤朝鮮を征せられし時始めて携來りしものにて皇朝固有の品にあらざるよし防葵辨呉晋本草に房葵莖葉如レ葵上黑黃二月生レ根々大如二桔梗一根中紅白六月花白七月實白太平御覽引とみえたれど平野人參は其葉牡丹に似て葵葉に似ずまた木草和名に房葵をやまなすびと訓せしもの今詳ならず松岡子勅の說に防葵數種あり一はきぼうふう一名牡丹人參一は濱防風一名伊勢防風一は淸政人參一名朝鮮人參一は芹に似たるものなり並に眞なり用ゆべし千金方藥註といへり此說何によりてかく數種を以てすべて眞物とせしにや疑はしされど濱防風一名伊勢防風は雷公のいはゆる防葵在二葵州沙土中一生採得二十日便蚌用レ之惟輕爲レ妙證類本草引といへるものに近かるべし一種とがり防葵ありその形狀前條と全く一樣にて每葉たゞ尖銳なるを異なりとす此種は嘗て朝鮮より携來りしにはあらず蓋し皇朝固有のものなるべし因て憶に菊茶及び臭椿のごときも皇朝固有のものなるはいとたしかなる事なれども西土より携來りし後に其くさ〴〵の自生ある事をしれるによりてすべての菊茶及び臭椿を人々西土より移し栽しとおもひあやまれる類ひもあれば尖り防葵及び常の防葵のごときも肥前五島或は薩摩などにおほく產するものは恐らくは皇朝固有のものにて必ず西土より來れるものを移し栽しにはあらざるべし

本草大義云防葵和漢一也薩州割(ワリ)防風云者疑可二此者一矣

人參譜云總州人參正名防葵今往々人家多栽レ之俗呼名二代人參一者卽是也二月生二嫩苗一其葉似二牡丹及勺藥之葉一者綠色表裏皆有二白粉一七八月間莖端有レ花々

按に厨事類記に今按汁實盛ニ于別坏一可レ居加レ之但
供寒汁之時實興利實山薑夏蓼板目鹽都呂々（トロヽ）薯蕷橋葉等
盛ニ同盤一居加レ之又云或説ニ寒汁ニ鯉味噌ヲ供ス
鯉ノミオロシシ皿ニモリテマイラスダシ汁ニテア
フヘシ板目鹽ワサビ山ノイモオロシテ盛ベシタチ
バナノ葉イルベシとみえたれば古にとろゝといへ
るは卽今のより芋の事なればいまだ未曾汁に和せ
ざる以前の名にして此物を調和せし後の稱にはあ
らざるべし且つくね芋をするときは其粘滑なる事
頗る爲もちのごとき物なるに本朝食鑑にこれを
比ニ薯蕷一則不レ粘といへもまた誤りなるべし

本草綱目云入レ藥野生爲レ勝供レ饌家種爲レ良
按にこれは其形の肥細に拘りて其説をなせし物な
れど蘇頌の説に種者極肥美山生者根細味更眞美と
いへるぞよき又本朝食鑑云家種者味不レ及ニ山産一
故人レ厨亦宜ニ山産一といひ大和本草にも圃に多く
つくるは味山より出るに劣れりといへりこれまた
皇國の産をよくあぢはへしものなり

○按に鴨脚子は今いふ銀杏なり此芋の狀頗る銀杏葉の如し故に名づく

大和芋同上

○按にこれは京師攝陽などの方言なり此物大和國に產するものを上とす故に名づく

大黑いも本草啓蒙

○按に形によりて名づく

きねいも同上

○按にきねは卽杵字なり此芋肥大にして且長き事杵の如しよりて名づく

奴加古本草和名 和名類聚鈔

○按にぬかごは蓋しねけごにして此子秋に至りて熟する時はおのれと葉間よりぬけ落るものなるが故に脫子(ヌケゴ)の意なるべし其かとけとは原より音通なるは其例殊に多し

むかご和漢三才圖會

○按にむはぬの同韻通なり

薯蕷神農本經

○名義いまだ詳ならず

野山藥救荒本草

○本草衍義云山藥按本草上一字犯㆓預英廟㆒諱下一字曰㆑蕷唐代宗名預故改㆓下一字㆒爲㆑藥今人遂呼爲㆓山藥㆒

熊掌薯蕷漳州府志　佛掌薯鎭江府志

○按に以上二名は其義字の如くにしてともに一意なり

○正誤

本朝食鑑云甘藷近俗稱㆓豆久爾伊毛㆒

按にこれ大なる誤りなり凡西土にて甘藷といへるは全く今の薩摩芋の事にして此物とは別種なりされど戸田越前守及び久世大和守より薯蕷を甘藷と稱して奉るは其名義本草の甘藷とはさらに異なるものなればこれは和漢同名といふものにて本草の名を襲ひしにはあらず

和漢三才圖會云自然生不㆓太滑㆒味亦不㆑美

按にこれは下品の山芋を試ていへるものなるべし

又云佛掌薯研擂和㆓末醬汁㆒入㆓青苔末㆒食㆑之如㆓黃蜀葵之粘㆒故謂㆓之止呂汁㆒

卷懷食鏡云倭俗以㆓薯蕷佛掌薯㆒研㆑之和㆓味噌汁㆒少煮令㆓調粘㆒名㆓與呂々汁㆒

美但性冷二于北地者一耳彼土人單呼爲レ藷音若レ殊亦曰二山藷一而山海經云景山北望二少澤一其草多二藷薁一音與二薯蕷一同郭璞注云根似レ芋可レ食今江南人單呼レ藷音儲語或有二輕重一耳據二此注一則薯蕷與レ藷乃一種南北之産或有レ不レ同故其形類差別然字音殊儲不レ同蓋相傳之訛也

本草綱目云薯蕷入レ藥野生者爲レ勝若供レ饌則家種者爲レ良四月生レ苗延蔓紫莖緑葉々有二三尖一似二白牽牛葉一而更光潤五六月開レ花成レ穗淡紅色結レ莢成レ簇莢凡三稜合成堅而無レ仁其子別結二於一旁一狀似二雷丸一大小不レ一皮色土黄而肉白煮食甘滑與二其根一同王旻山居錄云曾得下山芋子如二荊棘子一者上食レ之更愈二於根一即此也霜後收レ子留レ種或春月采レ根截レ種皆生

漳州府志云藷薁本草名二薯蕷一此外有二蜜藷薑蕷熊掌藷凡數種一

鎭江府志云山藥茅山有二一種一形如二手掌一名二佛掌薯一

『此次紹興本草所載ノ永康軍薯蕷ノ畫同上明州薯蕷ノ畫同上眉州薯蕷ノ畫同上滁州薯蕷ノ畫並ニやまついも、ながいも、つくねいもノ三圖略之』

○釋名

也末都以毛 本草和名 和名類聚鈔

○按に此即山芋の字の和訓にして和漢通名也山野に生じて其狀芋に類するによりて名付しものなれど芋をいもと訓ずる義いまだ詳ならず

自然生 和漢三才圖會 大和本草

○按に生字或は薯蕷の二字に作る

山乃伊毛 和名類聚鈔

長芋 和漢三才圖會 用藥須知

○按に形芋に似ていと長し故に名づく

まいも 本草啓蒙

○按に此即やまいもの上略也小野蘭山の説にまいもは筑前の方言なりといへり

つくねいも 本朝食鑑 和漢三才圖會

○按につくねは即束或は掬字の意にして今樂燒の茶椀を轆轤を用ひずして手にて作るを手づくねといふにおなじ又常にはねの字を略してつく芋ともいへり

地紙芋 下野方言

○按に此物狀扇面の如し故に名づく

鴨脚形 用藥須知 本草啓蒙

アリト云此理アルベシ腫テ硬キ瘡ニ生ニテスリクダキテ付レバ消散スト丹溪云ヘリ今試ルニ有レ功婦人乳癧痛不レ可レ忍生薯蕷ヲ研タタキ付ル甚効アリ痒ヲ忍フベシ零餘子性味ヨシ又佛掌薯アリ是薯蕷ノ類ナリ

用藥須知云山藥ナガイモト稱スルモノ是也自然生ヲ上トスツクネイモ又大和イモトモ云ヒ又鴨脚（イテフガタ）形ト云モノハ佛掌薯ト名ク帶二蘞味一モノアリ不レ可レ入二藥用一

本草啓蒙云薯蕷家ニ栽ユル者ヲナガイモト云根ノ形圓ニシテ長サ一二尺食用ニ良トス救荒本草ニ家山藥ト云又山中自生ノ者ヲジネンジヤウト云救荒本草ニ野山藥ト云家山藥ヨリ根細クシテ堅ク長シ至テ長キ者ハ六七尺ニ至ル藥用ニ良トス頌ノ説ニ南中一種生二山中一ト云者是ナリ國ニヨリ家山藥ナクシテ此品ヲ藥食共ニ用ユルアリ筑前モ然リ又一種ツクネイモト呼ブ者數品アリ和州ノ産ヲ良トス故ニ大和イモト云其形扁ク枝アル者ヲイチヤウガタト呼ブ漢名佛掌藷鎮江府志一名掌藷撫州府志其形肥厚ニシテ人形ノ如キ者ヲダイコクイモト呼ブ漢名觀音薯陽春縣志一名人薯南寧府志又最肥大ニシテ長サ一尺餘ナル者キネイモト呼ブ是皆山藥ノ類ナリ苗ノ形狀モ異ナラズ

證類本草引二呉氏本草一云薯蕷生二臨朐鍾山一始生赤莖細蔓五月華白七月實青黃八月熟落根中白皮黃類レ芋

又引二集註本草一云薯蕷今近道處々有レ之東山南江皆多掘取食レ之以充レ糧南康間最大而美服食亦用レ之

又引二唐本草一云薯蕷日乾搗細篩爲レ粉食レ之大美且愈レ疾而補此有二二種一一者白而且佳一者青黑味亦不レ美蜀道者尤良

又引二圖經本草一云薯蕷今處々有レ之以二北都四明者一爲レ佳春生レ苗蔓二延籬援一莖紫葉青有二三尖角一似二牽牛葉一更厚而光澤夏開二細白花一大類二棗花一秋生二實於葉間一狀如レ鈴二月八月採レ根今人冬春採刮レ之白色者爲レ佳青黑者不レ堪近都人種レ之極有レ息春取二宿根頭一以二黃沙一和二牛糞一作レ畦種苗生以作稍本草綱目以作レ作々二似竹一レ援々高不レ得レ過二一二尺一夏月頻漑レ之當年可レ食極肥美南中有二一種一生二山中一根細如レ指極緊實刮磨入レ湯煮レ之作レ塊不レ散味更眞美云食レ之尤益レ人過二于家園種者一又江湖閩中出二一種一根如二薑芋之類一而皮紫極有二大者一一枚可二重斤餘一削二去皮一煎煮食レ之俱

其マ、用ユト

本草辨疑云藥舖ニ二種アリ自然ニ生ズルト作リ山藥ト也山城大和ニ多ク作ル自然生ニモ又然リ自然生ハ肉黒ク見分惡キ故ニ人賤レ之作山藥ハ色白ク所見ヨキ故ニ人貴レ之非也所見ニ惡クトモ米ノ粉カケタル自然生ヲ折テ中ノ白ヲ可レ用其餘ハ不レ可レ用

本朝食鑑云薯蕷山中野處自然生稍短而堅實者製作ニ山藥一宜レ入ニ藥用一家種長而肥豐者宜レ入ニ厨用一其味不レ及ニ自然生之山產一故入レ厨亦宜ニ山產一和、城、河、丹、江、紀諸州最好與之南部野之二荒駿之富士根甲之郡内武之八王煉間等處皆佳京師江都市上惟肥厚者足レ作レ蔬矣

又云甘藷近俗稱ニ豆久禰伊毛一根似ニ薯蕷一而不レ長如ニ老薑芋魁一皮紫或灰黒肉白或黄微青味亦同比ニ薯蕷一則不レ粘莖葉亦同然葉不レ尖而微圓零餘亦生レ氣味甘平無レ毒主治亦與ニ薯蕷一同是薯蕷之種類也

和漢三才圖會云薯蕷其根長尺許周ニ二三寸灰黄色肉白可ニ煮食一名ニ之長芋一江戶之產肥大而佳救荒本草云生ニ山野中一者藤頗紫色葉似ニ家山藥一而大微尖根比ニ家山藥一極細瘦硬皮色微赤名ニ野山藥一是俗云自然生也不ニ太滑一味亦不レ美病人每食不レ妨

又云豆久禰芋葉比ニ薯蕷一葉團頗似ニ黄獨葉一而略小其根似ニ佛手柑一而肥大如ニ攫浸者一故名レ之鎭江府志所レ謂佛掌薯是也薯蕷佛掌薯並呼曰ニ山芋一本草亦相混矣然根葉異而長芋脆而粘少也佛掌薯餅播則正白色其粘滑如レ糯(モチ)傳ニ湯火傷一即愈出ニ於和州一者良信州亦可

大和本草云薯蕷ハ園ニモ多クツクル味山ヨリ出ルニオトレリ山ヨリ出ルヲ俗ニ自然生ト云味最ヨシ凡薯蕷根ハ每年生ヒ替ル他物ニ異リ故ニ八月ニハ新舊二根アリ蓋夏ノ間ニ新根漸生ズ秋末ヨリ後ハ舊根ハクサル新根ノ形舊根ト同シ奇異ナリ花ノ後三角ナル物生ス非レ花非レ實眞ノ實ハ零餘子ナリ藥ニハ山ニアリテ年數ヲ久ク歷テ肥大ニシテ皮赤ク四面ニヒゲアルヲエラビ用ユ臘月性ヨシ雷銅ハ銅刀ニテ赤皮ヲ刮リ去リ涎ヲ洗去蒸過シテ乾シ用ユトイヘリ圃ニツクルハ藥トスベカラズ凡山藥ハ腎ヲ補ヒ脾胃ヲ益ス虛人久服スベシ生ナルヲ丸ナガラ鹽ヲ加ヘ煮テ果トシ食フ只氣ヲ塞ク積滯アル人忌レ之金瘡產婦薯蕷ヲ食ベカラズ大毒ナリ又產後ニトロヽ汁大毒也不レ可レ食或云山藥ハ頭小ク尾大ナリ是ヲ以テ下部ヲ厚ク補フ功

又云近江國七十三種云々薯蕷一斗
又云參河國二十一種云々薯蕷二斗
又云遠江國十三種云々薯蕷三斗
又云駿河國十七種云々薯蕷二斗
又云伊豆國十八種云々薯蕷一斗
又云甲斐國十二種云々薯蕷二斗
又云相模國三十二種云々薯蕷一斗
又云安房國二十八種云々薯蕷五升
又云上總國二十種云々薯蕷四斗
又云下總國三十六種云々薯蕷一斗
又云常陸國二十五種云々薯蕷二升
又云美濃國六十二種云々薯蕷二斗
又云越前國十八種云々薯蕷二斗
又云加賀國七種云々薯蕷一斗
又云能登國五種云々薯蕷一斗
又云越中國十五種云々薯蕷二斗九升
又云丹波國四十三種云々薯蕷二斗二升二合
又云丹後國二十四種云々薯蕷一斗
又云但馬國二十一種云々薯蕷一斗
又云因幡國二十種云々薯蕷四斗
又云伯耆國二十種云々薯蕷九升
又云出雲國五十三種云々薯蕷六升
又云石見國十四種云々薯蕷一斗二升
又云播磨國五十三種云々薯蕷九升
又云美作國四十一種云々薯蕷十五兩
又云備前國四十種云々薯蕷四升
又云備中國四十二種云々薯蕷五升
又云備後國二十八種云々薯蕷一斗四升
又云安藝國三十二種云々薯蕷一斗
又云周防國十九種云々薯蕷八斗
又云紀伊國三十五種云々薯蕷六升
又云讃岐國四十七種云々薯蕷一斗
又云伊豫國三十二種云々薯蕷八升六合
又云土佐國十三種云々薯蕷一斗二升

大同類聚方云也萬都以母味甘久少蒸久微香無レ毒五月有レ花八月結ニ小丸實一九月採レ根乎

修治纂要云山藥ハ自然ニ生ズル山ノ芋ヲ用ユ銅刀ニテ皮ヲ削リ去テ薄クヘギテ米ノ粉ヲフルイカケテ風ノ吹トコロニ乾ス用ル時湯ニテ洗ヒ剉ミ焙ル郷里ニツクル山ノ芋ハ不レ用也一説ニ焙リ蒸コトヲ嫌フ只

下野宇都宮下總の關宿などに產するものは其狀極て大にして全く扇面の如し土人これを地紙芋（デガミイモ）といひ其小なるものを鴨脚芋（イチヤウイモ）といふ此亦佛掌藷の一種にして其名を西土にては扇面藷などいふべきものなれど諸家本草及び府志縣志にも其名絕てこれ有事なきをみれば西土にはかゝる形にしてかく大なる物はさらにあらじとぞおもはる

按に此種西土にもいと大なる物ありて一枚可二重斤餘一なといへる事圖經本草にみえたれど憶に其形狀をいはざれば其物に至りては何とも定め難けれどそれは蓋し本草啓蒙にいはゆるだいこく芋きねいもの類ひにして此地紙芋にてはあらざるべし又京師の方言に鴨脚形一名大和芋といへるは其形全く此鴨脚芋と一般にしてまた大なるものにはあらず扨この地紙芋は其味極て甘美なる事さらに他種の比すべきなきを以てもとより甘藷と稱して戸田越前守及び久世大和守より年ごとに寒中に至ればこれを奉ず武鑑其地だいこく芋又きね芋といふものあり本草啓蒙に詳なり又ぬかご一名むかごといへるは卽山芋の子の名にて西土にてはこれを零餘子又は山芋子といへり其形まるきものは無患子の如く長きものはなつめの如しそれに大小ありてまたひとしからず其味薯蕷よりはやゝ劣れりまた長芋つくね芋にも共に此子を結ぶ事全く山芋に同し又按に延喜式に薯蕷とあるは全く薯蕷子にして根をさしていへるにはあらず其分量をあげて二升五升或は七斗九斗などしるされしにて其義は明らけし憶に本草拾遺に零餘子功用強二於薯蕷一といへり皇國の古はこれらの事によりて藥用に供するには必ず其子を用ひしものなるべし

出雲風土記云意宇郡凡諸山野所在草木云々白朮薯蕷

又云島根郡凡諸山野所在草木云々葛根薯蕷

又云秋鹿郡凡諸山野所在草木云々蜀椒薯蕷

又云楯縫郡凡諸山野所在草木云々升麻薯蕷

又云飯石郡凡諸山野所在草木云々前胡薯蕷

又云大原郡凡諸山野所在草木云々女萎薯蕷

延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥大和國三十七種云々薯蕷七斗

又云攝津國四十四種云々薯蕷六升

又云伊賀國三十三種云々薯蕷五升

又云尾張國四十六種云々薯蕷一斗

古今要覽稿卷第四百四十六

●草木部

やまついも　つくね藷いも　ぬかご

やまついも一名やまのいも俗名自然生は西土にて薯蕷一名山芋一名野山藥といへるもの也古より皇國山野におのれとおひ出しものいと多き故延喜の比も大和攝津伊賀尾張などの三十八ヶ國より貢せし也凡皇國に此種のいと多きよしはたとへば出雲國は九郡なるに意宇郡島根郡秋鹿郡楯縫郡飯石郡大原郡（出雲風土記）等の六郡におの〳〵おのれと生出しにて其餘の國々もおしはかるべし又延喜式に載せられざる國にも産せし事有べけれど種々の物を貢せし故に此物をば貢せぬにてもあるべし今に至りては山のいもの生出ぬ國はあらじとぞおもはる一種出羽國鳥海山に産するものは根の長さ二尺ばかりにして其左右に長短はひとしからねど季指の大さなる枝根あひ並て本より末に至るこれは全く薑蕷（ツクネイモ）に其形佛手柑の如きものあるとおなじ種類なるべけれど西土及び近道には絶て此種ある事を聞かず扱園圃に養へるものを長芋といひ或はまいもといふ此卽西土にいはゆる家山藥なり世多く蔬となして日用に備るものなれ共其味に至りてはすべて山野におのれと生出しものをよしとす凡これをうゆるにもしその根下に物をおく時は其物の形に隨て圓くも四角にもいてきぬるもの也さきに下野宇都宮の人其墻邊におのれとおひ出しを年を經て堀採しに其地をほる事やがて三尺許にして徑り二尺ばかりなる其形いとひらたくして圓くいできし山芋を得たりそれは其土の堅き事岩はの如くなるによりてそれより下に根をおろす事あたはずしてかくは變せしものならん西土にてもこれらの事に早くより心付しものとみえて藥性論に劉敬叔か異苑を引て薯蕷人植レ之者隨二所レ種之物一而像レ之也とみえたり一種つくねいもありその形おほよそ老生姜の如くにしていと大きし此卽西土にいはゆる薑蕷にして蘇頌のいはゆる江湖中出二一種一根如二薑芋之類一（圖經本草）といへるものと同種也又其形熊掌の如く或は佛指柑の如きものは西土にいはゆる熊掌蕷一名佛掌藷なり又

に作るを證とすべし此卽交趾の方言なり

川穀救荒本草

○此苗川澤に生じ其仁麥に似て粥飯となすべし故に名づく或云川穿音通

穿穀米壽生保元

○此穀中心に孔ありて線を以て穿つべし故に名づく

屋菼名醫別錄

○說文云菿或作菼菿雚之初生也一曰薍一曰騅从レ艸剡聲これによるに菼はもと雚の嫩苗の名なれども此に屋菼といふ時は屋をもふくべき其苗の長大なるをさしていふ

葡蘆藥性纂要

○葡蒲音通此葉蒲のごとくまた蘆のごとし故に名づく

解蠡神農本草

○玉篇云蠡薄之扁欲レ破也また劙と通ず玉篇云蠡解也分割也又廣韻云劙分破也これによれば解蠡は此實皮薄くして兩指を以て推す時はそのまゝ解破するによりて名づく本草綱目に其葉似二蠡實葉一而（ネヂアヤメノハ）

解散といへるは誤れり

○正誤

圖經本草云薏苡開二紅白花一作レ穗（和漢三才圖會云薏苡出レ穗開二小白花一本草謂二紅白花一非也）

本草綱目啓蒙云眞ノ薏苡ハ兩手ヲ以テ推ストキハ皮破ル一種トウムギ一名朝鮮ムギアリ城州田城鄕ニ多ク栽ユ仁ヲ採リ粉トナシ食用トス藥舖ニ出サズ子形濶ク短クシテ尖リ皮厚ク硬シ擊タザレバ破レズ皮ノ色褐ニシテ微黑堅ニ筋多シ秋後苗根共ニ枯ル

按に唐麥朝鮮麥は其種海外より來れるものにて卽周防の方言に四國麥といへるもの也其子つし玉よりは細にして皮薄軟なるものなれば兩指を以てこれを按すれば其皮忽ちに破るゝなり然るを此に子濶短にして尖り皮厚硬にて擊ざれば破れざるものとす其義疑ふべし既に用藥須知にも薏苡三種あり唐麥といふもの眞也皮柔に粒大なりといへるによれば此に四種とせしは誤りなるべし或は鬼じゆず玉を方言によりては唐麥ともいへばそれらの混同にてもあるべきにや

○鬼は其狀魁異なるをいふ

薏苡子 神農本草素問呉越春秋

○本草綱目に薏苡名義未レ詳といへど本草原始には薏意也苡實也又云實凍者良故云ニ苡實一とみえたり岡村尙謙曰說文に蓄、从レ艸、啻聲啻从レ艸㠯聲これによるに蓄苢は卽憶以の聲なり其啻字說文に从レ言从レ中といふ時は蓄に作るを正文とす或は蓄を轉して蓄に作り再び轉じて薏に作る薏はもと意字卽从レ心从レ音字なればその聲正に蓄字と異なり然るを後世その二字を以て一つとなすものは卽从レ日从ニ二東一字を曹に作る類なるべし凡憶字後世億字に作るもまた此例なり

贛 名醫別錄

○本草綱目云贛乃其堅硬者有ニ贛强之意一按に說文云贛艸也从レ艸贛聲一曰蓄苢本草和名別錄を引て贛字艸冠なし又仁諝を引て云音貢凡贛字古音夅後世音感これによるに仁諝の說よく古音に叶へりされど夅を夂に作るはその省略なれば下の貝に工字を連ねて貢字を以て音注となす其意古人と異なり扱漢書藝文志に豫章郡縣名贛また琅邪郡縣名贛楡あり凡收靡ある處を收靡縣と名づけ當歸多きによりて當州の名あるによれば贛縣は贛多きによりて其名を得贛楡縣は贛と楡との二種あるによりて其名を命せしものなるべし注に如淳を引て贛音感とあるは蓋し其地の方言なるが後には遂に正音となりしものなるべきか

起實 同上

○按に本草綱目に別錄を引て起を芑に作り音起と注せり時珍曰似ニ芑黍之苗一故有ニ芑實之名一今按に芑字はもと苢字の下體を缺しにて本文は卽苢實の誤りなるべし凡本草中後人本文の字を改め其音注の字を以て一名とせしもの多し既に此條にも贛米を以て感米に作る類なりまた苢實の名本草原始遵生は牋等にみえたり蓋し古よりいひ傳へし名なるべし

感米 千金翼方

○證類本草に雷公を引て槭米に作る此卽贛米也凡贛字に夅感の二音あるは其義上文にみえたり

蘀珠 集注本草

○蘀まさに贛に作るべし本草和名に陶注を引て贛

○釋名

つしだま 本草和名 和名類聚鈔

○つしの義詳ならず古語拾遺に薏古語都須とみえたり蓋し須と玄と音通なるべしされど後の人の說につしたまは卽數珠玉の意なるべしといへど古につすといひつしといへるは別に其義ありて數珠の義にはあらざるべし

玉づし 新撰字鏡

づゞだま 本草綱目新校正 庖厨本草

○此實を以て念珠とす故に名づく

じゆづだま 庖厨本草 本草啓蒙

○向井元升の說にしゆづたまは西國の方言也といへり

すゞたま 本草啓蒙

○阿波國の方言なりといへり松岡玄達の說に薏苡をじゆずだまと名づくるは念珠の義にあらず鈴玉なるべし其實鈴を聚めたるに似たり故に名づくとこれ一說なり

すゝだま 同上

○伊豫國の方言なりといへり

ずゞご 江戸方言

八石 庖厨本草 本草啓蒙

○向井元升は薏苡仁の一種をば石と名づくといへれど小野蘭山は上總國の方言なりといへり扨は石は八穀の意なり此物を以て粥飯となす時は其功五穀に勝れり故に俗に八穀と名づく

すだめ 本草啓蒙

○三河國の方言なりといへり按にまとめと音通すだめは卽すゝだまの訛轉なり

唐麥 用藥須知

○按に解蠡は享保中唐山より來り其狀麥に似たり故に名づく

朝鮮麥 千金方藥注

○名義唐麥のごとし

四國麥 本草啓蒙

○周防國の方言也といへり

くすだま 同上

○美作國の方言なりといへり按にくすは卽藥字の義なり

鬼じゆずたま 本草纂本 草啓蒙

イラダカノ數珠ト稱シ役小角ヲ信ズル者コレヲ用ユ是彝珠ナリ藥舖ニ賣ル所ノ薏苡仁ハ皆川穀仁ナリ石臼ヲ用テ粗磨シ仁ヲ採ル又彝珠仁ヲ以テ唐ノ薏苡ト名ケ賣ル皆僞品ナリ藥ニハ眞ナル者ヲ用ユベシ然レドモ眞物ハ未ダ藥舖ニ出ズ

呉越春秋云越之前君無余者夏禹之末封也禹父鯀者帝顓頊之後鯀娶於有莘氏之女名曰女嬉年壯未孳嬉於砥山得薏苡而呑之意若爲人所感因而妊孕剖脅而產高密云々

後漢書云馬援在交阯常餌薏苡實用能輕身省慾以勝瘴氣南方薏苡實大援欲以爲種軍還載之一車

證類本草引集注本草云薏苡近道處々有之多生人家交阯者子最大彼土呼爲彝珠馬援大取將還人讒以爲眞珠也實重累者爲良

又引圖經本草云春生苗莖高三四尺葉如黍開紅白花作穗子五月六月結實青白色形如珠子而稍長故呼薏珠子小兒多以線穿如貫珠爲戲八月採實採根无時今人通以九月十月採其實中仁

本草綱目云薏苡人多種之二三月宿根自生葉如初生芭芽五六月抽莖開花結實有二種一種粘牙者尖而殼薄卽薏苡也其米白色如糯米可作粥飯及磨麪食亦可同米釀酒一種圓而殼厚堅硬者卽菩提子也其米少卽粳穇也但可穿作念經數珠故人亦呼爲念珠云其根並白色大如匙柄糺結而味甘也

『此間彩畫二圖略之』

薏苡仁



和漢三才圖會云按薏苡苗類レ黍葉闊分レ枝出レ穗結レ實其稍茁開ニ小白花一凡草木花落而結レ實此花與レ實別也其實青白色滑硬形團末微尖端出ニ白絲三條一略乾則絲脫去爲レ孔上下通小兒貫レ線以爲ニ念珠一其中子如ニ精麥一而大卽薏苡仁也能治ニ喉痺一呑ニ一二枚一有ニ二種一而一種殼薄米多一種殼厚硬米少堪レ爲ニ念珠一故曰ニ之菩提子一與ニ菩提樹之子一同名而別也近頃俗間八月朔日用ニ果蓏饈餅一贈ニ答之一必以ニ薏苡枝葉實連者一飾レ之未レ知ニ其據一

大和本草云薏苡大小アリ殼ノ厚キアリ小ニシテ殼ウスク咬レ之牙ニネバリツクヲ良トス是ヲ食ニモ藥ニモ用ユ大ニシテマルキヲ穢米ト云又菩提子ト云藥ニ不レ用俗用テ數珠トス實少ク味薄シ皆宿根ヨリ生ズ又實ヲウヱテモ當年ニミノル宿根ヨリ生ズルハ皮厚クシテ皮ヲ去コトムヅカシ毎年實ヲマクベシ靑葉ヲ煎シタル汁香ハシ茶ニ加ヘ煎シ服ス武火ニテ少ノ間煎ジ早ク可レ飮久クスレバ香氣ナシ本草薏苡葉作レ飮氣香暑月煎飮暖レ胃益ニ氣血一トイヘリ香味性トモニヨロシ

用藥須知云薏苡仁三種アリ和名唐麥ト云モノ眞也皮ヤワラカニシテ色白肉厚ク粒大野生ノモノハ皆眞ニアラズ其名川穀トモ䕯珠トモ云フ念珠ニ作テ小兒ノ翫戲トス下品ナリ乏時ハ可ニ通用一

千金方樂注云薏苡和名朝鮮ムギ南山城淀ノ邊多ク出ス

本草綱目啓蒙云眞ノ薏苡ハ享保年中ニ渡ル春種ヲ下シ苗長ジテ高サ四五尺葉互生シ形蜀黍葉ニ似テ狹短川穀葉ニ異ナラズ一根ニ莖ヲ叢生ス夏月葉間ニ實ヲ結ブ形川穀ヨリモ細小ナリ實上ニ花アリ玉蜀黍花ニ似テ小シ實熟シテ淺褐微黑色實中ニ自ラ穴アリ貫クベシ重累シテ生ズル者モアリ皆兩指ヲ以テ推ス時ハ皮破ル仁ハ麥ニ似テ潤ク白色外ニ褐衣アリ實熟メ苗根共ニ枯ル一種ジユズダマアリ野邊荒廢ノ地ニ多シ春宿根ヨリ多ク叢生ス莖葉ハ薏苡ニ異ナラズ子大ニシテ白色光リアリ或ハ黑色或ハ黑白斑駁皆皮甚硬擊トイヘドモ破レズ實中ニ自ラ穴アリ穿テ貫珠トナスベシ小兒採テ玩トス野人用テ馬飾トス是救荒本草ニ載スル所ノ川穀ナリ一種オニジユズダマアリ亦宿根ヨリ叢生ス形川穀ニ異ナラズ實川穀ヨリ潤ク扁クシテ堅ニヒダアリ色モ同ジ殼甚堅シ俚人穿テ數珠トス

古今要覧稿卷第四百四十五

●草木部

つしだま　すゞご　薏苡子

つしだま一名たまつし一名づゞだま一名じゆずだま一名すゞだま一名すゝだま一名ずゞご一名八石一名すだめは西土にいはゆる薏苡子一名贛一名起實一名感米一名川穀一名穿穀米なり其苗を屋菼といひまた葥蘆といふ野外川澤荒廢の地極て多し春宿根より叢生し苗高さ四五尺に至る葉は莖につきて互生し菼葉(アシハ)に似て細し夏をむかへて葉間に實を結び實上に花あり玉蜀黍(タウキビ)花に似て小さし此即延喜式にいはゆる大和近江より貢せし所の薏苡花也此花枯萎する比は實の色或は白或は黑或は黑白相雜りて其殼至て硬し故に兒童戯に絲にて穿ち連ねて手繦とす此即神農本經に薏苡生二平澤一といひ素問に搏而堅如レ循二薏苡子一累累然といへるもの也また呉越春秋に鯀娶二於有莘氏之女一年壯未レ孶於二砥山一得二薏苡一而呑レ之因而姙といへる薏苡もまたこれをさしていふ一種鬼じゆずだまあり其苗前條と一樣たゞ其子潤大にて扁く竪に皺積あるを異なりとす此殼また至て硬し故に世の人或は採て念經數珠とす此即集注本草にいはゆる幹珠なり後漢の馬援交趾より携來りしも蓋しこれと同種なるべし又一種唐麥一名朝鮮麥あり其實前條に比するにやゝ小さし熟する時はすべて淺黃白色にて黑白間雜の別なしその殼甚だ柔にて兩手にて捻ずる時は殼忽ちに破るゝなり此即神農本草にいはゆる解蠡也嘉祐本草に藥性論を引て薏苡暴二於日中一使レ乾挼レ之得レ仁といへるもまた此解蠡をさしていふ

延喜式(典藥寮)云諸國進年料雜藥大和國三十七種云々薏苡花十五兩

又云近江國七十二種云々薏苡花一斤八兩

按に説文蓄字注に蓄英の名あり蓋し蓄苢華なるべしされども古より方書此花を用ゆるものをみず式にいはゆる花字恐らくは仁字の誤りなるべくおもはるれど其方量を載て僅に十五兩其多きものといへ共一斤八兩などいふ時は必ず仁にてもあるべからず

レ欝也蓋不レ忘レ故也以ニ此二書一證レ之則蓍者山田原野易レ得之草而非ニ王劉褚徐諸子所謂神怪不測之物一也決矣又張華輩謂無レ蓍亦可下以ニ荆蒿一代上也果然荆蒿者亦以爲レ有ニ神靈一乎可レ笑尤甚矣

本草臆斷云　宋鄭樵蘇頌輩説レ蓍他草木書（原書有缺文）漫駕ニ其説一潤色其形狀如ニ已目擊者一也我邦亦因ニ其説一充下以稱ニ羽衣草一者上而無ニ復異論一也予私謂蓍者非ニ一物之稱一也按晏子曰蒿草之高者也爾雅云蘩之醜秋爲レ蒿蓋蘩之類至レ秋則高ニ於衆草一故通呼爲レ蒿也以レ是推レ之凡草之莖幹存ニ於深秋一者可レ謂ニ之蓍一也故孔子曰蓍之爲レ言耆也老人歷レ年多而更レ事久似ニ能前知一（王充論衡）埤雅云蓍蒿屬也从レ耆草之壽者也六十曰レ耆卦之別六十有四蓍數窮ニ於此一他諸書所謂蓍老多壽之稱則以ニ草莖之老存者一爲レ蓍則穩當爲レ得ニ其實一也

按に蓍はもと一種草の名なり鄭樵蘇頌等とく所のもの皇國のいはゆる羽衣と其形狀全く相符する時はこれ即一物なり詩に云苞蓍韓詩外傳に云蓍薪の蓍もともに此物をさしていふ然るを今蓍者非ニ一物之稱一也又草之莖幹存ニ於深秋一者可レ謂ニ之蓍一也といへるはこれ一時論說の辭にて其實はしからずもし其說につきてこれをいはゞ茵陳は舊根によりて生ずるを以て其名を得しものなれどおよそ草の舊根より生ずるもの至て多く石首魚は其首中に碁子の如き石あるによりて其名を得しものなれどまた首中に石ある魚極て多しかゝれば首中に石あるものはすべて石首魚にして舊根より生ずる草は皆茵陳なりといはゞ可ならんや命名者の意必ずさはあらじ畢竟澄元の說は漢人の蓍に神怪不測の說を附會せしを無稽の言とせしより遂に此强說も出來しものなれば取捨すべし

證類本草引二本草圖經一云今蔡州上蔡縣白龜祠傍其生（其上有落字歟）如レ蒿作レ叢高五六尺一本一二十莖至多者三五十莖生レ梗條直所三以異二於衆蒿一也秋後有レ花出二於枝端一紅紫色形如レ菊八月九日採二其實一日乾入レ藥今醫家亦稀用

釋名

はごろも草（結髪別居集本草啓蒙）

がんぎ草（同上）

○此葉周圍鋸齒ある事正にがんぎの鋸齒のごとし故に名づく

のこぎり草（本草啓蒙）

○のこぎりは卽鋸なりのこぎりさうは葉の形ノコギリに似たる故に名づく

からよもぎ（同上伊勢方言）

○凡皇國の俗舶來の物にあらずといへども常に目なれぬものをさしてからの字を冠してよぶ物多し此草大略艾蒿の類にて伊勢人はその田野道傍にて常にみなれぬ草なるが故に此名あり

蓍（神農本經易繫辭傳）

○本草綱目引二白虎通一云蓍之爲レ言耆也老人歷レ年多更レ事久事能盡知也埤雅云草之多壽者故字從レ耆

○正誤

證類本草引二本草圖經一云蓍爲レ筮以問二鬼神一知二吉凶一故聖人贊レ之謂二之神物一史記龜策傳云龜千歲而遊二蓮葉之上一蓍百莖共二一根一又其所レ生獸無二虎狼一草無二毒螫一徐廣曰劉向云龜千歲而靈蓍百年而一本生二百莖一又褚先生云蓍生滿二百莖者一其下必有二神龜一守レ之其上常有二青雲一覆レ之傳曰天下和平王道得而蓍莖長丈其叢生滿二百莖一

結髪居別集云按蓍草易二繁盛一也生至二三四年一乃一本可レ滿二百莖一昔人言其積二數十百年一而生二百莖一皆非二實錄一也若レ所レ云則是絕難レ致之物擧世不レ能二常得一豈有下古時欲レト乃取二蓍龜一已則棄レ之之理上哉本草臆斷云蓍爲レ物徵二之經傳一無二其說一至二漢劉向元充褚少孫輩一始鳴二神靈奇怪之說一遂令四人不レ知三蓍爲二何物一也詩云冽彼下泉浸二苞蓍一韓詩外傳云孔子出遊二少源之野一有二□□中レ澤而哭一其音甚哀孔子使三弟子一問上焉曰夫人何哭之哀婦人曰鄉者刈二蓍薪一亡二吾蓍簪一吾是以哀也弟子曰刈二蓍薪一而亡二蓍簪一有二何悲一焉婦人曰非レ傷レ亡

古今要覽稿卷第四百四十四

●草木部

はごろも草　のこぎり草　蔡州著

はごろも草一名がんぎ草一名のこぎり草一名からよもぎは卽圖經本草に載る所の蔡州の著草なり結髪別居集此草春のはじめ舊根より叢生し莖高さ四五尺に至る其葉細長にして鋸齒極て多し夏の末に其莖端細小枝を分生し單瓣の菊花に似たる小白花を開く又紅花のものありされど紅花のものはいと少くして白花のもの常に多し扨此種は古より皇朝にをのれと生出しものなれど寶永の比までは世に漢名をしるものなかりしを稻若水越前國に至り岡原上にて初めて此草を尋出し著草とさだめしより今に至りて人々その眞物をしる事とはなれりかく若水の心を用ひしは實に物色三十餘年の事なるよし詳に下文にみえたり又安永の比よりは此ものに二種ある事をしりて其莖大なるものをのこぎり草とし細莖小葉のものを羽衣草とすこれを藥に用ゆるには莖大なるものをもちゆるといへり千金方藥注

結髪居別集云按世無下識二著草一者上相承皆以二免篤白檠一當レ之用二其莖一爲レ藥余少知二其非一是也每過二丘陵原隰一登望以欲三一識二其眞一而不レ可レ得也寶永八年夏赴二北土一道經二越前州一遠覽二岡原上一有下叢生條直高四五尺異二於衆蒿一者上意三其非二凡卉一駐レ輿往見乃益知二其爲一レ近レ眞也第所レ見者白花與二圖經所一レ云紅紫色者一此獨爲レ不二相合一凡草木花皆有二紅白一變態不レ一則此固不レ足三以病二其色之殊一也然亦未三敢決二其眞一也在二金澤一日常致二奇卉異花一以レ此自適終得二花紅者一自喜之甚如レ奉二鼎呂一持歸植二之園中一斷然知二其爲レ眞而無レ疑蓋物色三十餘年得レ之難乎

本草綱目啓蒙云種樹家ニ多ク栽ユ宿根ヨリ數十莖叢生ス高サ四五尺葉ハ濶サ四五分許長サ三四寸細ク深クキレ鋸齒多シテ繁密ニ互生ス夏月莖端ニ小枝ヲ多ク分チ數十百花攢簇シテ蓋ノ如シ一花ノ大サ三四分五六瓣ニシテ中ニ黄心アリ瓣ハ淺紫色ナリ又紅アリ白アリ白花ノ者ハ野生アリ紅ナル者ハ北土ニ自生アリ是眞ノ著ナリ

　　　羅や月の色はすむらむ
久安百首歌に　　　　　　　藤原清輔朝臣
限なきよはひのみかはみるからに
　　　心ものふる白菊のはな
延喜十三年菊合に　　　　　坂上是則
なみとのみうちこそみゆれ住の江の
　　　岸に殘れる白菊の花
弘安百首歌に　　　　　後嵯峨院大納言典侍
おく霜にうつろはんとや朝な〳〵
　　　色かはり行しら菊の花
百首御歌の中に菊を　　　　土御門院御製
誰ゆゑにうつろはんとか初霜の
　　　たわゝにおける白菊の花

元亨元年龜山殿にて山家冬朝といふ事をつかうまつりける　民部卿爲藤
朝な〳〵かはらぬ色をそへてけり　山路の霜に殘る白菊

又卷第二十慶賀歌
建保二年八月十六日内裏秋十五首歌合に秋祝　前中納言定家
山水に老せぬ千代をせきとめて　おのれうつろふ白きくのはな

女院より菊をめされけるにそへて奉ける　昭訓門院新大納言
いく千世と秋のかきりもしらきくの　花にそ頼む君かめくみを

新拾遺和歌集卷第五秋歌下
延喜十八年女四のみこの屛風に　貫之
いつれをか花とはわかむ長月の　有明の月にかまふ白菊

崇德院の御時菊送夕秋と云事をつかうまつりける　大炊御門右大臣
いくかへり千とせの秋にあひぬらん　色もかはらぬ白菊のはな

長暦二年九月歌合に
匂ひこそ紛れさりけれ初霜の　あしたの原の白菊のはな

新後撰和歌集卷第五秋歌下
題しらず　法印定爲
うつろふとさかりをみする花なれは　霜に惜まぬ庭の白きく

又卷第六冬歌
殘菊を　左近中將師良
おのつから殘るもさひし霜枯の　草葉にましる庭の白きく

又卷第二十賀歌
文治六年女御入内屛風に　後京極攝政前太政大臣
君か代に匂ふ山路の白菊は　幾度露のぬれてほすらむ

新續古今和歌集卷第五秋歌下
應安六年九月十三夜三首歌講せられける時菊離月といふ事をよませ給うける　後光嚴院御製
うつろふとみるもかはらてしら菊の

色々に籬の菊は成にけり
たゝ一本の霜と見しまに　前大納言公任

又卷第六冬歌
題しらず　道洪法師
おのつから秋見し色もなかりけり
霜の下なる庭の白きく

風雅和歌集卷第七秋歌下
寶治百首歌に重陽宴を　冷泉前太政大臣
九重に千代をかさねてかさすかな
けふ折えたる白菊の花　藤原隆祐朝臣
めくりあふ月日もおなし九重に
かさねてみゆる千世の白菊

堀河院百首歌に菊を　前中納言師時
霜かれん事をこそ思へ我宿の
まかきに匂ふ白菊のはな

又卷第八冬歌
人々に歌をめしてあはせられ侍けるついでに庭
殘菊といふことをよませ給ける　後宇多院御歌
庭の面に老の友なるしらきくは
六十の霜や猶かさぬへき

新千載和歌集卷第五秋歌下
長元五年十月上東門院歌合に菊　讀人しらず
植てみるかひも有哉長月の
ためしにさける白菊の花

河原院歌合に露光宿ㇾ菊といふ事を
かさしにはをらまほしきを白菊の
花にやとれる露やこほれん

寛喜元年女御入内屛風に重陽宴の所　常磐井入道前太政大臣
九重にけふさく菊は少女子か
立まふ袖の雪かとそみる

題しらず　式乾門院御匣
見るまゝにうつろひにけり待人の
袖にまかひし庭の白菊　前右衞門督基顯
時こそあれ色にまかへて咲にけり
霜おく頃の白菊の花　前大納言爲世
初霜のおきあへぬ色も變りけり
露の籬の白菊のはな

又卷第六冬歌

九月盡日に菊を讀せ給うける　今上御製
うつろはて庭の白菊殘るらん
秋のかたみとあすよりはみん
續千載和歌集卷第五秋歌下
久安百首歌に　皇太后宮大夫俊成
山川の水のみなかみたつねきて
星かとそみる白菊の花
籬菊を　二品法親王覺助
あきふかき籬は霜の色なから
老せぬ物と匂ふしらきく
菊枝につけて奉らせ給うける　今上御製
仙人の千とせの秋をゆつり置て
君かためにとさける白菊
御返し　法皇御製
行末は猶長月の菊の枝に
かさなる千世を君にゆつらむ
題しらず　永福門院內侍
殘りける秋の日數も有物を
うつるはなにそ庭の白菊
暮秋菊といへる心を　伏見院御製
霜ふかくうつろひ行を秋の色の
かきりとみする白菊のはな
又卷第十三戀歌三
弘安七年九月九日三首歌講せられける時寄レ菊
戀といへるこゝろを　後近衞關白右大臣
うつろはん人の心もしら菊の
かはらぬ色もなに賴むらん
たのましな移ひぬへき白菊の　前大納言爲世
霜待程の契はかりは
又卷第二十賀歌
位におはしましける時おなじく奉らせ給うける
みつかきの久き世より跡とめて　法皇御製
けふかさすてふ白菊のはな
法性寺入道前關白內大臣に侍ける時家歌合に
萬代の秋のかたみとなる物は　藤原顯仲朝臣
君かよはひをのふる白菊
續後拾遺和歌集卷第五秋歌下
題しらず　贈從三位爲子
月ならてうつろふ色もみえぬ哉
霜より先の庭の白きく

題しらず　　前中納言定家
山水の老せぬ千世をせきとめて
　おのれうつろふ白菊の花
いつまでに老せぬ秋とかざしけん　藤原基任
　いたゝく霜の白菊のはな
文保三年百首歌奉ける時　　前大納言實教
日數こそうつろひはてめ暮て行
　秋をは殘せ庭の白菊
秋歌に　　權大納言實直母
しらきくの一色ならすうつろふや
　八重咲花のしるし成らん
又卷第八雜秋歌
題しらず　　權大僧都宋親
秋にみし色も匂ひもそれなから
　霜に殘れる庭の白きく
置霜に殘れる庭の白菊を　　源直賴
　秋なき時のかたみとそみる
又卷第十四雜歌四
題しらず　　宗覺法師
白菊のうつろひはつる契りゆゑ
　ぬれてほすまもなき袂哉
玉葉和歌集卷第五秋歌下
御前に菊をおほくうゑさせ給へりけるを辨乳母
申けるをたまはせざりければ「ほしとのみみて
やゝみなん雲のうへに咲つらなれる白菊の花」
と申て侍ければ　　後三條院御製
色々にうつろふ菊を雲の上の
　ほしとはいかて人のいふらむ
寶治二年百首歌奉ける時重陽宴
　　常磐井入道前太政太臣
むらさきにつらぬる袖やうつるらん
　雲のうへまて匂ふしらきく
もゝしきの大宮人のけふといへは　兵部卿隆親
　かざしにさせるちよの白菊
天曆七年内裏菊合によめる　　中務
たつのすむみきはの菊は白波の
　それとつきせぬ影そみえける
庭菊　　前大僧正慈順
枝も葉もそれともみえす暮ぬるを
　花こそ殘れ庭の白きく

又卷第八冬歌

後一條院御時中宮齋院に行啓侍けるに庚申の夜月照ニ殘菊一といへる心をよみ侍ける

色さむみ枝にも葉にも霜降て　有明の月を照す白菊　權大納言長家

又卷第二十賀歌

承保三年大井河に行幸の日内よりめされける歌

うつろはて久しかるへき匂ひかな　さかりにみゆる白菊のはな　辨乳母

續古今和歌集卷第五秋歌下

尹子内親王賀茂の齋院におはしましける時菊花につけて奉らせ給ける

ゆきてみぬ人のためにと思はすは　誰かをらまし庭の白菊　亭子院御歌

延喜御時の菊宴歌

初霜とひとつ色にはみゆれとも　かこそしるけれ白菊の花　藤原俊蔭

百首御歌の中に

よそにゆく秋の日數はうつろへと　またしもうとき庭の白きく　土御門院御歌

九月盡日内裏にて三首歌講せられけるに暮秋菊

行秋のかたみとたにも契おけ　うつろふ菊の花の白露　中納言爲氏

又卷第六冬歌

殘菊を

枯はてん後恐へとや白菊の　うつろふ冬は色まさるらむ　權大納言顯朝

おなじ心を

うつろはむときやみわかん冬の夜の　霜もひとつにさける白菊　源順

又卷第二十賀歌

崇德院の御時法金剛院に行幸有て菊契ニ千秋一と云ことを講せられ侍けるに

雲の上の星かとみゆる菊なれは　空にそちよの秋はしらるゝ　待賢門院堀川

續拾遺和歌集卷第十賀歌

菊花秋久と云ことを

いか計老せぬ秋をかさぬらん　千世のかさしの白菊の花　太宰權帥爲經

新後拾遺和歌集卷第五秋歌下

合に殘菊をよめる　藤原基俊
けさ見れはさなから霜をいたゝきて
おきなさひゆく白菊のはな
月照㆓菊花㆒といへる心をよみ侍ける　内大臣
しら菊の葉におく露に宿らすは
花とそ見ましてらす月かけ
籬菊如㆑雪といへる心をよみ侍ける
雪ならは籬にのみはつもらしと　前大僧正行慶
おもひとくにそ白菊のはな
百首の歌讀侍ける時菊の歌とてよめる
さえ渡る光りを霜にまかへてや　藤原家隆
月にうつろふ白菊の花

新勅撰和歌集卷第五秋歌下

後冷泉院みこの宮と申ける時なしつぼのおまへの菊おもしろかりけるを月あかき夜いかゞと仰られければ　大貳三位
いつれをかわきてをるへき月影に
色みえまかふ白菊のはな
あしたにまゐりて侍けるに此歌の返しつかうまつるべきよし仰せられければよみ侍ける
月影にをりまとはるゝ白きくは　權大納言長家
うつろふ色やくもる成らん
康保三年內裏菊合に　天曆御製
かけみえてみきはにたてる白菊は
をられぬ波の花かとそみる
崇德院月照㆓菊花㆒といへる心をよませ給うけるに　右兵衛督公行
月影に色もわかれぬ白菊は
心あてにそをるへかりける
月影にかをるはかりをしるへにて　按察使公通
色はまかひぬ白菊のはな

又卷第七賀歌

後冷泉院御時殘菊映㆑水といへる心を人々つかうまつりけるに　權大納言長家
神無月殘るみきはの白菊は
久敷秋のしるし也けり

續後撰和歌集卷第七秋歌下

閏九月菊といへる心を　從二位顯氏
大かたの秋よりも猶長月の
あまる日數に匂ふしら菊

白菊のうつろひ行そ哀なる
かくしつゝこそ人もかれしか
相模公資にわすられて後かれが家にまかれりけるにうつろひたる菊の侍ければよめる
植おきし人の心はしら菊の　藤原經衡
花よりさきにうつろひにけり
又卷第十六雜二
實方朝臣のむすめにふみかよはしけるを藏人行資にあひぬときゝてこの女のつぼねうかゞひて見あらはしてよみ侍ける　右兵衛督公信
朝な〳〵おきつゝみれは白菊の
霜にそいたくうつろひにける
又卷第十七同三
世中をうらみてこもりゐて侍ける比やへ菊を見て讀侍ける　前大納言公任
おしなへて咲白菊は八重〳〵の
花の霜とそみえ渡りける
金葉和歌集卷第七戀歌上
長實卿の家の歌合に戀の心を人にかはりて
白菊のかはらぬ色も賴まれす　春宮大夫公實
うつろはてやむ秋しなければ
詞花和歌集卷第三秋
關白前太政大臣家にてよめる　源雅光
霜かるゝはしめとみすは白菊の
うつろふ色を歎かさらまし
だいしらず　曾禰好忠
草枯の冬迄見よと露霜の
置てのこせる白菊の花
又卷第七戀上
堀河院御時くら人に侍けるに贈皇后宮の御方に侍ける女を忍びてかたらひ侍けるをこと人にものいふときゝてしらぎくのはなにさしてつかはしける　源家時
霜おかぬ人の心はうつろひて
おもかはりせぬ白菊のはな
返し女にかはりて　大納言公實
白菊のかはらぬ色も賴まれす
うつろはてやむ秋しなければ
千載和歌集卷第五秋歌下
法性寺入道前太政大臣内大臣に侍ける時家の歌

古今要覽稿卷第四百四十三

●草木部　しらぎく四

和歌二

古今和歌集卷第五秋歌下

寛平御時せられける菊合にすばまを作りてきく
の花植たりけるにくはへたりける歌吹上の濱の
かたに菊うゑたりけるをよめる

秋風の吹上にたてる白菊は
　　花かあらぬか波のよするか　　菅原朝臣

菊の花のもとにて人のひとまてるかたをよめる

はなみつゝ人待ときは白妙の
　　袖かとのみそあやまたれける　　紀友則

しらぎくの花をよめる

こゝろあてにをらはやをらん初霜の
　　置まとはせる白菊のはな　　凡河内躬恒

寛平御時にきくの花をよませさせ給うける

久方の雲の上にてみる菊は
　　あまつ星とそあやまたれける　　藤原敏行朝臣

此歌はいまだ殿上ゆるされざりける時にめ
しあげられてつかうまつるとなん

又卷第二十慶賀

女八のみこ元良のみこのために四十賀し侍ける
に菊の花をかざしにをりて　　藤原伊衡朝臣

よろづ代の霜にもかれぬしらきくを
　　うしろやすくもかさしつる哉

後拾遺和歌集卷第五秋下

中納言定賴かれ〴〵になり侍りけるにきくの花
にさしてつかはしける　　大貳

つらからん方こそあらめ君ならて
　　誰にかみせん白菊のはな

上東門院菊あはせし給けるに左のとうつかまつ
るとてよめる　　伊勢大輔

めもかれす見つゝくらさん白菊の
　　花より後の花しなければ

いもうとに侍ける人のもとにをとここずなりに
ければ九月ばかりに菊のうつろひて侍けるをみ
てよめる　　良暹法師

つらかりし秋の別につれなくも　前大納言良教
かれなて菊の何殘るらん

又卷第二十賀歌

題しらず　後一條入道前關白左大臣
菊の露つもりて淵と成までに
老せぬ花を君のみそみん

新續古今和歌集卷第五秋歌下

應安六年九月十三夜三首歌講ぜられける時菊籬月といふ事を　權大納言爲遠
わかてみる月もあやなしよるはかり
うつろふ菊の籬ともかな

菊をよめる　凡河内躬恒
あたらしく我のみや見ん菊の花
うつらぬさきにこん人も哉

家にて人々題をさぐりて五十首歌よみ侍けるに殘菊匂といふ事を　鹿苑院入道前太政大臣
花と見し籬も今はあれはてゝ
霜に匂へる菊の一もと

又卷第六冬歌

延喜十七年閏十月菊の宴をさせ給ける時三條右大臣おほんかざし奉るとて「たかために長き冬まて匂ふらんとはゝ千とせと君はこたへよ」と奏し侍ける御返しに　延喜御製
色ふかく匂ふ菊かなあはれなる
をりに折ける花にや有らん

前栽の霜がれたるを見て　欣子内親王
霜かるゝ千種の花の籬より
秋みしよりも哀なりけり

正治百首歌に　二條院讃岐
面影に秋の名殘をとゝめ置て
霜の籬に花をみる哉

又卷第十七雜歌上

殘菊をよめる　津守國基
我宿の籬に菊をうゑさらは
花みぬ冬やさひしからまし

今は昔に菊のさかつき

黒戸のまへにきりをうゑられたりけるを

開ぬれはよそにこそみれ菊の花　堀河　中宮
天津雲ゐの星にまかへて

入道二品親王性助家に菊をうゑさせける

移しうゑは千世まて匂へ菊の花　法眼　行濟
君か老せぬ秋を重ねて

寛平御時菊合に紫野の菊をよめる

名にしおへは花さへ匂ふ紫の　よみ人しらす
一もと菊におけるはつしも

又巻第六冬歌

延喜十三年の菊合に　是則

きくの花冬の野風にありもせて
今日迄とてや霜は置らん

菊の花こきも薄きも今迄に　躬恒
霜の置すは色をみましや

又巻第六

元弘三年立后屏風に　後宇多院宰相典侍

咲そむる籬のきくの露なから
千世をかさねん秋そ久しき

崇徳院位におはしましける時法金剛院に行幸侍て菊契二千秋一といふことをよませ給けるに

君か世の數にかさなる物ならは　三條内大臣
きくは幾重もかきらさらまし

又巻第十一戀歌一

文永七年閏九月内裏三首歌に寄レ菊久戀

つもりては袖にも淵となりやせん　大藏卿隆博
泪は菊の露ならねとも

又巻第十八雜歌上

だいしらず　二品法親王寛尊

うつり行まかきの菊の色にこそ
秋の日數の程もみえけれ

新後撰和歌集巻第五秋歌下

題しらず　法皇御製

程もなくうつろふ菊の露のまに
ことしの秋も又や暮なん

又巻第六冬歌

殘菊を　藤原隆祐朝臣

霜かれの籬の菊の花かたみ
めならふ色もみえぬころ哉

る歌　よみ人しらず
いくたひか霜はおきけんきくの花
やそ嶋なからうつろひにけり
弘安七年九月九日龜山院に籬菊露芳と云事を講せられけるに位におはしましける時奉らせ給ける　前大納言爲兼
秋ふかき籬の露も匂ふなり
花よりつたふ菊の雫に
文保二年百首歌奉りける時　前中納言實任
めくりあふ秋をこそまて雨露の
めくみをうけし菊のさかつき
長月やといふことをはじめの句におきて暮秋二十首歌讀せ給うける　後宇多院御製
長月や雲ゐの秋のことゝはん
むかしにめくるきくのさかつき
弘安七年九月九日龜山院にて籬菊露芳といへる事を講せられけるにいまたみこのみやと申ける時奉らせ給ける　伏見院御製
咲匂ふきくのまかきの夕風に
花の香やとす袖のしらつゆ

題しらず　式部卿久明親王
露おきし籬の菊の花の上に
結ひかへたる今朝の初霜
終夜對菊といふ事を　徳大寺左大臣
はつ霜のもろともにこそおき明せ
うつろふ菊のうしろめたさよ
又巻第六冬歌
佛名の菊の花を御覽じてよませ給ける　冷泉院御製
秋ならて霜夜にみゆる菊の花
時過にける心地こそすれ
又巻第十六上雜歌
家十首歌に菊霜　山階入道前左大臣
はらひかね我もとゆひも霜ふりぬ
籬の菊の上とみしまに
新拾遺和歌集巻第五下秋歌
寶治百首歌奉ける時重陽宴を　前大納言爲家
もろ人のけふ九重に匂ふてふ
菊にみかける露のことのは
百首歌奉し時菊　關白前左大臣
なか月の豐のあかりは名のみして

題しらず　　謙德公
たくひなき色にも有哉菊の花
　いかなる露のおける成らむ
延喜御時の菊合に　　貫之
うつろふとみゆる物から菊の花
　さけりし枝そかはらさりけり
わきもこか日も夕暮の菊なれは　是則
　あかすそ花の色はみえける
又卷第六冬歌
　延喜十七年十月御前の菊の宴の日
神無月時雨にまさる菊の花　源公忠朝臣
　秋果にきとみえすも有哉
風雅和歌集卷第七秋歌下
九月九日を　　花山院御歌
萬代をつむともつきし菊の花
　長月のけふあらんかきりは
寶治百首歌に重陽の宴を　山階入道前左大臣
なか月の菊のさかつき九重に
　いくめくりとも秋はかきらし
位の御時三首歌講せられけるついでに庭菊を

百敷やわか九重の秋の菊　後醍醐院御歌
　心のまゝにをりてかさゝむ
題しらず　　源光行
夜もすから光は霜をかさぬれと
　月には菊のうつろはぬかな
屛風にをんなの菊花みたる所　貫之
置霜の染まかはせる菊の花
　いつれか本の色には有らん
又卷第八冬歌
　後京極攝政左大將に侍ける時に家に六百番歌合
し侍けるに殘菊　　正三位經家
染かふる籬のきくのむらさきは
　冬にうつろふ色にそ有ける
菊をみてよめる　　藤原道信朝臣
こむらさき殘れる菊は白露の
　秋のかたみにおけるなりけり
新千載和歌集卷第五秋歌下
　康保三年內裏歌合の時一番の人に花を奉らしめ
給りあさかれいのおましのかたにやそ嶋をつく
りて菊を植させ給へりその菊のはに書付たりけ

題しらず　　入道前太政大臣
神無月梢のもみち庭の菊
　秋の色とはなに思ひけん
菊宴せさせ給うける　　延喜御製
秋過て殘れる色も神無月
　霜をわけてそ惜むへらなる
延長六年十月女房常寧殿の御前に菊植ける時讀侍ける　　まちしかのこ
置霜に色はみえねと菊の花
　こ紫にも成にけるかな
又卷第七賀歌
延長六年內裏にて御まへに菊植させ給て人々歌つかうまつりけるに　　大輔
もゝしきにねをしとゝめて菊の花
　君みぬ秋はならしとそ思ふ
又卷第十九釋敎歌
佛供養し侍ける時導師に菊枝にさして送り侍ける　　法性寺入道前關白太政大臣
たくひなき御法をきくの花なれは
　つもれる罪は露ものこらし

續千載和歌集卷第五秋歌下
延喜御時菊合に　　藤原興風
なりはてゝ花なき時の花なれは
　うつろふ色の惜くも有哉
重陽の宴を　　新院別當典侍
ゆくすゑの秋をかさねて九重に
　千世にてめつる菊の盃
又卷第二十賀歌
文治六年女御入內屛風に山中に菊盛にひらけたる邊に仙人ある所　　前中納言定家
限なき山路の菊の陰なれは
　露もや千世を契おくらん
鳥羽殿前栽合に菊を　　藤原顯綱朝臣
君か代はきくのした行谷水の
　なかれを汲て千年をそまつ
弘安七年九月九日三首歌講せられける時菊花宴久と云ことを　　龜山院御製
千年まてかはらぬ秋はめくりきて
　移ろはぬ世のきくの盃
續後拾遺和歌集卷第五秋歌下

又卷第二十雜歌
ひともときく
あたなりとひともときくか物からに　躬恒
花のあたりは過かてにする
堀河院御時藏人頭にて殿上にさぶらひける朝出させ給てといたしきときのふたをくつかうふりによめとおほせと侍ければつかうまつりける
此里といはねとしるき谷水の　橘廣房
雫も匂ふ菊の下えた
續拾遺和歌集卷第十賀歌
後一位倫子七十賀に讀侍ける
宇治入道前關白太政大臣
君かため千世をかさねてきくの花
行末遠くけふこそはみれ
百首歌の中に　式子內親王
結ふへき末もかきらし君か世に
露のつもれる菊の下水
新後拾遺和歌集卷第五秋歌下
小野宮おほいまうちぎみの屛風の繪を長月の九日のかたかけるをよめる　貫之
露とてもあたにやはみる長月の
菊の千年を過すと思へは
文保三年百首歌奉ける時　前大納言爲定
分過る山路のきくの花の香に
ぬれてもほさぬ袖の白露
又卷第八雜秋歌
貞和二年百首歌に　後三條前內大臣
露のよと何か思はんぬれてほす
山路の菊の千世の行末
玉葉和歌集卷第五秋歌下
菊を讀侍ける　平齊時
咲初し櫻よりきくにうつるまて
花のいく色なれてみつらん
寛平菊合にたみの丶島の菊をよみ侍ける
たみのともいまはもとめし立かへり　讀人不レ知
花の雫にぬれんと思へは
延喜御時菊合に　平希世朝臣
きくの花霜にうつるとをしみしは
こき紫にそむるなりけり
又卷第六冬歌

匂そまさる萬世の秋

續拾遺和歌集卷第五秋歌下

白河殿七百首歌に水邊菊　　後嵯峨院御製

くみてこそ千年もかねてしられけれ

ぬれてほすてふ菊の下水

續後撰和歌集卷第七秋歌下

菊をよみ侍ける　　源公忠朝臣

うつろはん色を見よとて菊の花

露も心をかけるなりけり

又卷第八冬歌

圓融院に一本菊奉とて　　侗侍藤原灌子朝臣

時雨つゝ時ふりにける花なれと

雲ゐにうつる色はかはらす

御返し　　圓融院御製

いにしへをこふる泪の時雨にも

なほふりかたき花と社みれ

又卷第二十賀歌

天暦七年十月后宮の御方に菊植させ給ける日う

へのをのこども歌つかうまつりけるついでに

心して霜のおきける菊の花　　天暦御製

千世にかはらぬ色と社みれ

同き十三日庚申夜女藏人御前に菊花奉りけるに

みこたち上達部まゐりつかうまつりてよもすが

らろく給はせける時いまだ侍從にてさぶらひけ

るが菊をかざしてよみ侍ける　　大納言重光

時雨にも霜にもかれぬ菊の花

けふのかざしにさしてこそみれ

題知らず　　入道二品親王道助

我宿の菊の朝露色もなし

こほさて匂へ庭の秋かせ

新勅撰和歌集卷第七賀歌

九月九日從一位倫子菊のわたをたまひておい拭

ひすてよと侍ければ　　紫式部

菊の露わかゆはかりに袖ふれて

花のあるしに千世はゆつらむ

菊をよみ侍ける　　元輔

我宿の菊の白露萬代の

秋のためしに置てこそみめ

長月に匂ひそめにし菊なれは　　康資王母

霜も久しくおける也けり

今よりは又咲花もなき物を　權中納言定頼
いたくな置そ菊の上のつゆ

又卷第七賀歌

題しらず　藤原興風
山川のきくの下水いかなれは
ながれて人の老をせくらむ

延喜御時屛風うた　貫之
いのりつゝ猶長月の菊の花
いつれの秋か植て見さらん

文治六年女御入内屛風歌　皇太后宮大夫俊成
山人のをる袖匂ふ菊の露
打拂ふにも千世はへぬへし

又卷第十六雜歌上

淸涼殿の庭に栽給へりける菊を位去給て後おぼしいでゝ　冷泉院御歌
移ふは心のほかの秋なれは
今はよそにそきくの上の露

新勅撰和歌集卷第五秋歌下

月前菊といへる心をよみ侍ける　鎌倉右大臣
ぬれてをる袖の月影更にけり
籬の菊の花の上のつゆ

延喜十七年十月菊の宴の日御かざしとて奏し侍ける　三條右大臣
たかためになかき冬まて匂ふらん
とはゝ千とせと君そこたへむ

續古今和歌集卷第五秋歌下

晩風知菊といふことを　白河院御歌
夕暮の風のふかすは菊の花
匂ふまかきをいかてしらまし

又卷第六冬歌

殘菊を　延喜御歌
散果て花なき時の菊なれは
移ふ色のをしくも有哉

又卷第十一戀歌一

題しらず　曾禰好忠
朝な〳〵君に心をおく霜の
菊の籬にいろはみえなん

又卷第二十賀歌

九月計菊花を　聖武天皇御歌
もゝしきにうつろひわたる菊の花

永承四年内裏歌合に殘菊をよめる

紫にうつろひにしを置霜の　中納言資綱
猶しら菊とみする也けり

又卷第十九雜五

つくしよりのぼらんとてはかたに侍けるに館の菊の面白侍けるをみて　大貳高遠

とりわきてわか身に露や置つらん
花よりさきにまつそうつらふ

又卷第二十釋敎

懺法おこなひ侍けるを佛に奉んとて周防内侍の許にきくをこひ侍けるにおこせて侍ける返事に

八重菊にはちすの露をおきそへて　辨乳母
九品までうつろはれつる

金葉和歌集卷第三秋歌

郁芳門院歌合に菊をよめる　中納言通俊

盛なるま垣の菊をけさみれは
また空さえぬ雪そ積れる

鳥羽殿の前栽合にきくをよめる

千年迄君か摘へき菊なれは　修理大夫顯季
露もあたにはおかしとそ思ふ

詞花和歌集卷第三秋

九月十三夜に月照二菊花一といふ事をよませ給ひける　新院御製

秋ふかみ花には菊の關なれは
下葉に月も洩り明しけり

だいしらず　道命法師

今年又咲へき花のあらは社
うつろふ菊にめ枯をもせめ

千載和歌集卷第五秋歌下

菊の歌とて讀る　祐成法師

あさな／＼籬の菊のうつろひは
露さへ色のかはり行かな

新古今和歌集卷第五秋歌下

五十首歌奉し時菊籬月といへるこゝろを

霜をまつ籬の菊のよひのまに　宮内卿
おきまよふ色は山のはの月

鳥羽院御時内裏より菊をめしけるに奉るとてむすびつけ侍ける　花園左大臣室

九重にうつろひぬ共菊の花
もとの籬を思ひしる哉

又巻第十七雜秋

題しらず　よみ人しらず

かのみゆる池邊に立るそか菊の
しけみさ枝の色のてこらさ

天暦御時菊のえん侍けるあしたに奉ける　忠見

吹風に散物ならは菊の花
雲ゐなりとも色はみてまし

ものねたみし侍ける男はなれ侍て後に菊のうつろひて侍けるを遣すとて　よみ人しらず

老か世に慶事きかぬ菊たにも
うつろふ色は有けりとみよ

後拾遺和歌集巻第五秋下

にしの京にすみ侍ける人の身まかりて後まがきのきくをみてよめる　惠慶法師

植おきしあるしはなくて菊の花
おのれ獨ぞ露けかりけり

上東門院菊あはせせさせ給けるに左のとうつかまつるとてよめる　藤原義忠朝臣

紫にやしほ染たる菊の花
うつろふ色と誰かいひけむ

後冷泉院御時后の宮にて人々翫庭菊題にて讀侍ける　大藏卿長房

朝またき八重咲菊の九重に
みゆるは霜のおける也けり

菊花おもしろき所有ときゝて見にまかりにける人のおそくかへりければつかはしける　赤染衛門

きくにたに心はうつる花の色を
見に行人は歸しもせし

天暦御時御屏風にきくをもてあそぶ家有ところをよめる　清原元輔

うすくこく色そみえける菊の花
露や心のわきて置らん

屏風のゑに菊花さきたる家にたかすへたる人やどかるところをよめる　大中臣能宣朝臣

かりにこん人にをらるな菊の花
うつろひはてむ末までもみん

五條なる所にわたりてすみ侍けるにおさなきこどもの菊をもてあそび侍ければよめる　中納言定頼

我のみやかゝると思へはふる里の
籬の菊もうつろひにけり

ひるは思ひにあへすけぬへし

後撰和歌集巻第七秋歌下

となりにすみ侍ける時九月八日いせが家のきく
にわたをきせにつかはしたりければ又のあした
をりてかへすとて　い　せ

數しらぬ君かよはひをのはへつゝ
なたゝる宿の露とならなん

返し　藤原雅正

露たにもなたゝる宿の菊ならは
花のあるしやいくよなるらん

なが月のこゝぬか露のなくなりければ
い　せ

きくの上におきゐるへくはあらなくに
千とせの身をも露になす哉

だいしらず　よみ人しらず

菊の花長月ことに咲くれは
久しき心秋やしるらむ

なにしおへは長月ことに君か爲　よみ人しらず
かきねの菊は匂へとそ思ふ

ほかのきくをうつし植て

ふる里を別てきける菊の花
たひなからこそ匂ふへらなれ

男の久しうまでこさりければ

なにゝきく色染かへし匂ふらむ
花もてはやす君もこなくに

又巻第十二戀四

わすれ侍にける女につかはしける

きくの花うつる心をおく霜に　よみ人しらず
かへりぬへくもおもほゆる哉

返し

いまはとてうつりはてにし菊の花
かへる色をは誰かみるへき

拾遺和歌集巻第三秋

三條のきさいの宮のもき侍ける屛風に九月九日
の所　もとすけ

我宿の菊のしら露けふことに
いくよつもりて淵となるらん

題しらず　みつね

長月のこゝぬか毎につむ菊の
花のかひなく老にける哉

古今要覽稿卷第四百四十二

●草木部きく

和歌一

古今和歌集卷第五秋歌下

人のせんざいにきくにむすびつけてかへける歌

植し上は秋なき時やさかさらん　花こそちらめねさへ枯めや　在原業平朝臣

是貞のみこの家の歌合のうた　きのとものり

露なから折てかさゝん菊の花　おいせぬ秋の久しかるへく

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

植しとき花待遠にありしきく　うつろふ秋にあはんとや見し　大江千里

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

ぬれてほす山路の菊の露のまに　いつか千年を我はへにけむ　素性法師

おほさはの池のかたに菊植たるをよめる

ひともとゝ思ひし花をおほ澤の　池の底にも誰かそへけん　とものり

世中のはかなきことを思ひけるをりに菊の花を見てよめる　つらゆき

秋の菊匂ふ限はかさしてん　花よりさきにしらぬ我身を

是貞のみこの家の歌合のうた　よみ人しらず

色かはる秋の菊をは一とせに　二たひ匂ふ花とこそ見れ

仁和寺に菊のはなめしける時にうたそへて奉れと仰られければよみて奉りける　平貞文

秋を置て時こそ有けれきくの花　うつろふからに色のまされは

人の家なりける菊のはなをうつし植たりけるをよめる　つらゆき

咲初しやとしかはれは菊のはな　色さへにこそうつろひにけれ

又卷第十一戀歌一

題しらず　素性法師

音にのみきくの白露よるはおきて

いへ共こゝには論せず

枯三于枝上一花瓣扶疏者多落盛開之漸覺離披二風雨一擻レ之則飄散二滿地一矣據レ此則毆王二公文章擅二一世一彼此相笑豈非三于草木之名猶未二盡識一而不レ知三有レ落有三不レ落者一耶若夫可レ餐者乃菊之初開芳馨可レ愛者耳若衰謝而後豈復有二可レ餐之味一哉或云詩之訪レ落以レ落訓始也落英之落蓋謂二始開之花一耳然則介甫之引證殆亦未二之思一歟といへりこれによれば和訓栞に菊にもちるものありといへるは其說もとづく所ありといへ共菊は一重のものといへ共さらにちるものにあらざれは菊譜後序の說も信しがたし且或人の說に落を以て訪落の落とせしは其說脫落の義とせしよりはやゝまされりといへ共或は人所二聚居一謂二之村落一よし字彙にみえたれば落英の落は卽村落の落にして菊は一蒂に數葩聚りてさくものなるが故に落英といひしもしるべからず又抱朴子に南陽酈縣有二甘谷一生二甘菊一菊花墮二其水一味爲變といひ詩學大成にも甘谷中水甘美上有二大菊一落水從レ山流下といへど菊は其花墮落するものにあらざる事既にいへるが如くなれば是また妄誕といふべし然るを我甲斐國風土記にに至りては鶴郡有二菊花山一流水洗レ菊としるせしは其文いと穩かにして且皇朝の人の心の正直なる事をおもふべし又日華本草に菊有二兩種一花大氣香莖紫爲二甘菊一花小氣烈莖青小者名二野菊一といへるは全く本草綱目によりてよく其形狀をとけるなり然るを圖經本草には其花微小味甚甘此爲レ眞有二青莖一而大葉細作二蒿艾一氣味苦者花亦大名二苦薏一といへるは誤なり既に其說の誤れるによりて時珍の本草綱目を作るに至りては其文を改めて花微大味甚甘者爲レ眞其莖青而大葉細氣烈似二蒿艾一花小味苦者名二苦薏一といへりかくいふ時は其花の形狀日華本草と一般なれば其說よろしけれどそれは全く時珍のみづから改め作りしものにして本草綱目の舊文にはあらずといふべし既に苦薏の形狀はかく日華本草に詳なればさらにいふべくもあらねど其種を以て園蔬內種肥沃後同一體といへる說はいかゞあらん予いまだ試みず又集註本草及び本草拾遺にいはゆる白菊は夏菊の白色なるものなれば圖經本草にいはゆる南陽菊潭の白菊及び本草綱目に白菊秋月采レ之といへるものとは其種全く異なるを諸家本草絕て其異同をいはざるものは踈漏の至りなり其他菊につきて諸家の說誤少なからずと

わけて人いたれるかたをよめる素性法師とありて歌には「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年を我は經にけむ」とよめるを以てはじめとすそれより下りては白川院七百首に山路菊といへる題にて「消ぬまや千年經ぬらん朝ごとに山路の菊に置るしら露」又耕雲千首に山菊とありて「名にしおふ山路のきくの花の露千年の秋を契り置らし」などみえたるは全く素性の歌に本づきてよみしものなればいづれにも山路のきくは絕てよの常の菊にはあらじ且素性の歌の詞書に人いたるかたとあればその菊は筆ずさみに畫がきし菊にてうゑたてし活本のものにはあらず然るを和訓栞に歌に山路菊といへるは本草にいへる苦薏なるべし群芳譜にも菊與レ薏有二兩種一とみえたり苦薏一名野菊にして和にのぎくと稱するは馬蘭一名紫菊なり嫩葉をよめなといふといへるはさらに素性の歌の詞書にも心付かずして漫に畫書し菊に活本の野菊を擬せしものなれば杜撰の甚しきなり又馬蘭一名紫菊といへるは卽今の俗のコレ菊といふ物にてよめなとは其狀相似てやゝ異なるよしは大和本草草木辨疑などにくはしくみえたれば今さらいふに及ばずその菊與レ薏有二兩種一といへるはいと古くよりある說なれば枹朴子或は本草綱目などを引べきに却て近頃の群芳譜を引しは全く其原をしらざるなり又すべての花は其さかり過ぬれば風雨にさそはれてちり行ものなれど菊花にかぎりては八重一重のたがひありといへ共其まゝ皆しぼみつきてさらにちりうせぬものなるに桓武天皇の御製及び在原業平の歌には菊にもちるとよまれたるはすべての花は風雨にさそはれてちり行は常なるが故にそれにならひてちるとはいへるものなれど其實は俗に物のなくなるなどいふ意にて菊の花一葩々々になりてすべての花のごとくちりぬるをいふにはあらず然るを和訓栞には菊にもちるものありとて楚辭の夕餐二秋菊之落英一といへるを引て其證とすされど楚辭の落英は西土にても彼是の說々あり筠廊偶筆曰王介甫殘菊詩云黃昏風雨打二園林一殘菊飄零滿地金、永叔見レ之戲曰秋花不レ比二春花落一爲報詩人子細看、介甫聞レ之笑曰歐陽九不レ學之過也豈不レ見二楚詞夕餐二秋菊之落英一乎余心竊疑レ之因考レ史正志菊譜後序云花有二落者一有二不レ落者一蓋花瓣結密者不レ落盛開之後淺黃者轉レ白白色者漸轉レ紅

くは皇國の古より自生せし菊なれば其さま他の國より來りしものとは稍異なりとて歌よむ人々もまた其說をとなへて古今集に菅原朝臣のよめる「秋風の吹上にたてるしら菊は花かあらぬか波のよするか」といへる歌などを引て其證とし彼是いひうめきぬれどこれもまたいみじきひが事なり既に八雲御抄にも凡菊は寬平の菊合以後殊に名物とはなれりとみえたり其寬平の菊合といへるは左方古ねの菊は殿上童に立君をつくりて花におもてをかざさせてもたせたりいま九本をばすばまをつくりてぞしけるそのすばまのさまは思ひやるべし面白き所の名をつけきくにはゆひつけたりと其時の記にみえ其面白き所といへるは山城の皆瀨嵯峨の大澤池紫野大井の戶難瀨攝津の田蓑島奈良の棹河和泉の吹居紀伊の吹上濱伊勢の網代逢坂關の十所の名を其すはまのさまによりてそれぞれに名付て歌よまれしものなれば原よりたはむれにもうけなしたる事にて其十所には必ず古よりおのれと生出し菊あるにあらず然るを或人の說にその十所の內にてたゞ紀伊の吹上濱のみ古よりおのれとおひ出し菊ありといふはいと／＼しひごとなり且秋風の吹上にとよめる歌のことは書にも寬平の御時きさいの宮の菊合にすばまをつくりて菊の花植たりけるにくはへける歌とありて又ふきあげのはまのかたに菊をうゑたりけるをよめるとありかゝれば菅原朝臣の歌は全く吹上濱に行て其實景をのぞみてよまれしものにはあらずこれも同じくすばまに作られし吹上濱のけしきをいひしものなれば其濱に古よりおのれと生出し菊ありといふ證にはなすべからず凡寬平は今をさる事既に一千年にちかければ今吹上濱に白菊多くありといへ共それは此歌によりて後の人の植たてしものゝ年を經ておのれと繁茂せしものなればそれを以て古の證とはなしがたし扨菊の名所はその菊合によめりし十所をもとゝしてそれより難波江住吉の岸二見浦布留野神山朝原野々宮武藏野更級山などはまたその後の名所なれどもすべてこれらは其所ことに必ず自然生の菊ありてそれをよみしにはあらず或は移し植しものをみてよめるもあり又は絕て菊なしといへ共それを題詠にては有さまによみなせしも多かるべし又山路菊といへるはもと仙家の菊にして絕てよの常の菊にはあらずこれは古今集に仙宮菊を

菊地の字をうめたり朝鮮にても舊より菊を久々といへるばまたその字音を用ひしものにて其國の方言にあらず又和名鈔に菊擧竹反俗云本音之重といへる事あり今按に本音といへるは卽擧竹反にしてその重といへるは擧竹反なれば伎由久なるを其伎由を約むれば久となりて卽久々の音也その伎由久の三言久々の二言となるは本音の擧竹反より再び轉じ來りしものなるが故にこれを本音の重とはいひしにやあらん

節華神農本經

○本草綱目云節華之名取三其應二節侯一也

女華本草綱目

○女は卽委蕤を女委或は女草といへるに其儀おなじ本草綱目に崔寔の月令を引てまた女華菊華之名也といへり

○正誤

類聚國史に平城天皇大同二年九月乙巳幸二神泉苑一四位已上共挿二菊花一とありて歌には美耶比度乃曾能可邇米豆留布知波賀麻と皇太弟のよませ給へるによりてある人は菊の一名をふぢばかまといふといへり

按にいみじきひが事なりこれは全く國史を傳寫するもの蘭を誤りて菊字に書たがへたるものにてかならず菊をふぢばかまといひしにはあらず

又仁明天皇承和十二年九月癸丑是日重陽節也天皇御二紫宸殿一賜レ宴令レ賦二九日洗レ蘭之題一同上とある蘭字も菊字の誤り也

按に嘉祥元年九月乙丑重陽節也天皇御二紫宸殿一是日同賦三雨洗二白菊一といへる文によれば洗蘭の上に雨字を脱せしものなるべし

後人絶て此義をしらず漫にふぢばかまを以て菊の一名となすは誤なり或はいふ大同二年九月乙巳は卽ち九日にして挿二菊花一は重陽宴なればなりとこれまた大なる誤り也大同二年の重陽は癸巳にして乙巳にあらず乙巳は卽二十一日なり既に癸巳の重陽なる事は類聚國史につまびらかなれば此日忌避る事ありて其宴を二十一日にかへ給ひしにもあらず且桓武天皇の志具禮乃阿米爾菊乃波奈と菊を字音にてよみ給ひしより大同二年までは僅に十一年のあひだなればその内に菊をフヂバカマと名付し事はあるまじきなり扨近比何ものかいひ出だしけん紀伊國吹上濱のしらぎ

ばこの物をおはぎといふも其蒿類なるによりてなるべし扨本草和名には菊花和名加波良於波岐とありて加波良與毛木の名はみえず然るを和名鈔には加波良與毛木を以て本條の名とし加波於波古を以て一云と注せしは故ある事なるべし

野ぎく

名義字の如し卽和漢通名なり

あぶらぎく

此花を以て一切の無名腫物或は毒虫のさしたる或は湯火傷などを治するに香油にひたし置て用ゆる時は卽効あるを以て名づく

辛與毛岐 新撰字鏡

○辛は萬葉集にいはゆる辛藍の辛と同じ意なれば卽韓字の義にして味の事にあらず此種は其始韓地より來りしものなるが故にかく名付しなり

まさりぐさ

まさりは卽勝字の義なり寛平菊合に「すへらきの萬代までもまさり草たまひしたねをうゑし菊也」

翁草

篠目抄に「秋くれは花はわかくや霜なから名は翁草色にはへつく」とみえたり又延喜式に白頭公をおきなぐさと訓じ藏玉集には松を翁草といへるは異物同名なり

菊 神農本經 本草綱目

○按に菊はもと花の名にして草の名にあらず詩唐風に椒聊之實蕃衍盈匊毛傳に滿手曰匊また說文に在レ手曰レ匊徐曰手掬レ米會意玉篇に匊ニ兩手一也滿手也手中也物在レ手也とみえたりこれによれば凡匊といへるは兩手にても一手にても手を以て掌中に屈めしさまを向ふよりしてこれをみれば五指皆屈まりて頗る此花の咲出しに似たればそれにかたどりて此花を菊とは名付しなりもし徐說の如く其手を以て米などを匊する時は其さまいよ〳〵此花の開くに似たり然るを時珍は埤雅を引て菊本作レ蘜從レ鞠々窮也月令九月菊有ニ黄華一々事至レ此而窮盡故謂ニ之蘜一といひ本草原始には菊鞠也必鞠養而後得レ稱ニ佳菊一故名レ菊といへるは共に其說理あるに似て却て古人字を製せし本意を失ふといふべし扨菊はもと久々の音なり故に神代紀に久々理媛の久々に菊字を塡め和名鈔に肥後の郡名久々知に

古今要覧稿卷第四百四十一

草木部 菊之二

释名

加波良與毛木 和名鈔

○東雅にかはらとは川上をいふ也よもぎは艾の類をいふ白蒿一ッにかはらよもぎといひぬれど此物とは異なりとみえたり又多識編には茵蔯蒿、靑蒿の二種をもかはらよもぎと訓じ和漢三才圖會には黃花蒿をまたかはらよもぎと訓ぜり共に名同じきといへ共其物は異なり扨本條にかはらよもぎを以て今の野菊とせしは全く大和本草の說によりて也されど和名鈔引本草注菊有二白菊、紫菊、黃菊一和名加波良與毛木とあれば東雅もそれによりてかはらよもぎは卽今の菊なりといひしなれどこれは人參和名加乃爾介久佐とあれども西土の人參と皇朝の加乃爾介久佐とは其物全く異なるに其議同じければかはらよもぎは必ず今の野菊にあらずとはいふべからずさはいへ此ものは田野及び山側などにいと多くおひ出るものなれば其產地と名義とはやゝ違へりと皆人おもふべけれど廣く事を論ずるときは野菊といへ共川上の堤などにはよく生出る物なればかはらといふも田野といふも其意は一ッにておほよそに其名をおふせしものなるべし然らざればかはらよもぎは原是白蒿などの名にして菊もそれに似たる物なるが故に假借して其名をおふせしにてもあるべしまた東雅にかはらよもぎは今の菊なりといへ共今の菊は皇朝の諸國の川上ごとにおのれとおひ出る事いと稀なるものなればもし其說を主張していふ時は凡西土にて菊は南陽の菊潭などに多くおひいづるといひ皇國にてはそれにもとづきて歌には河邊の草となして其流を汲みて齡を延るよしをいへばこれらの事によりて其物は必ず處々の川上に生出る事なしといへ共其義によりてかはらよもぎの名はいできしものなるべし

加波良於波岐 本草和名 和名鈔 多識編

○於波岐はもと薺蒿の名なりそれより轉じてすべての蒿類をさしてはぎともおはぎともいふべけれ

餌家多用ニ白者一南京又有ニ一種一開ニ小花一花亦下如ニ小珠子一謂ニ之珠子菊一云入レ藥亦佳

『此間彩畫三枚(りやうりぎく、同一種、同一種、)略之』

山路の菊

歌に山路の菊とよめるは今何物たる事をしらずといへ共俗に龍腦菊といへるは處々の山間にをのれとおひ出て絶て田野にはなきもの也其葉は野菊よりも少さくして缺刻すくなし華は單葉白色にして或は微しく紅色を帶るもあり此種は花葉共に芳香野菊に勝れたるを以て龍腦といへる名をおふせしなりこれまた古より皇國にをのれと生出し菊の一種にして藥に入るにはこれもまたよし

本草拾遺云白菊味苦染ニ髭髮一令レ黑和ニ巨勝茯苓一蜜丸主ニ風眩一變レ白不老益ニ顏色一生ニ平澤一花紫白五月花抱朴子劉生丹法用ニ白菊花汁一和レ之

本草綱目云又有白菊莖葉都相似唯花白五月取亦主ニ風眩一能令ニ頭不一レ白仙經以レ菊爲ニ妙用一但難ニ多得一宜ニ常服一レ之爾

ス味甘キヲ撰ベシ味苦ク辣ナルハ不レ用黄ヌレザキ玉ザクラ菊味最甘シ可レ用一種小花千葉ノモノアリ味甚甘シ上トス本草原始ノ珠子菊ノ類ナリ單瓣味苦モノハ共ニ野菊ニ屬ス苦薏ト云雜品ノ菊ヲ用ベカラズ又菊ノ名ヲ冒シテ菊ニ非ザルモノ多シ非二菊類一ハマギク秋冥菊シホカゼシホ竈サツマ菊信濃菊ノ類是皆或菜部或花部ニ係ル世多以二野菊一充二菊花一ハ非ナリ不レ可レ用

本草啓蒙云菊花種類多シ大抵二品ニ分ツ藥食ニ用ル菊ト花ヲ賞スル菊トナリ藥用ノ菊ハ甘菊ナリ本草ニ說トコロハ此モノヲ指ス甘菊ハ元來色ノ黄白ニ拘ラズ味甘キ者ヲ用ユ然レドモ今本邦ニ傳ヘ栽ル者ハ皆黄色ナリ和名アマギク又料理ギクトモ云九月ニ花ヲ開ク大サ寸許或ハ寸餘瓣ハ常菊トチガヒ細筒子ニシテ末五出瓣多ク重テ心ナシ變ジテ濶瓣(ヒラシベ)トナレバ黄色淡クナリテ中ニ小心アリ此菊花葉共ニ苦味ナクシテ食料ニ充ベシ故ニリヤウリギクト云此藥ニ良トス今藥舖ノ菊花ハ奧州仙臺ヨリ出ス常ノ黄菊ニシテ味苦シ又夏菊ヲ用ル人モアレドモ宜シカラズ花ヲ賞スル菊ニハ春夏秋冬ノ分アリ皆花開ク時ヲ以テ名ヅクソノ冬菊ハ卽寒菊ナリ漏盧ノ條ニ單葉寒菊ノ名アリ秋後花サク葉ニ酒ヲ澆ゲバ霜ヲ蒙テ紅紫色ニ染テ美ナリ唐山ニテ賞スル秋菊ハ今ノ中菊ニシテ本邦ニテ賞スル大菊ニハアラズ范成大劉蒙史正志等ノ菊譜及ビ花史左編群芳譜祕傳花鏡ニ詳ニ載ス和書ニテハ菊經ニ詳ナリ

抱朴子云南陽酈縣山中有二甘谷一谷上左右皆生二甘菊一菊花隨二其中一水味爲レ變居民食二甘谷水一無レ不二壽考一

列仙傳云彭祖服レ菊長壽其歲七百餘歲顏色壯而如二十七八歲一也

證類本草引名醫別錄云菊有二兩種一一種莖紫氣香而味甘葉可二作レ羹食一者爲レ眞一種青莖而大作二蒿艾一氣味苦不レ堪レ食者名二苦薏一非レ眞其葉正相似唯以二甘苦一別レ之爾南陽酈縣最多今近道處々有取種レ之便得

本草綱目云菊華今處々有レ之以二南陽菊潭者一爲レ佳初春布レ地生二細苗一夏茂秋花冬實然菊之種類頗多有二紫莖一而氣香葉厚至柔嫩可レ食者其花微小味甚甘此爲レ眞有二青莖一而大葉細作二蒿艾一氣味苦者花亦大名二苦薏一非レ眞也南陽菊亦有二兩種一白菊葉大似二艾葉一莖青根細花白蘂黄其黄菊葉似二茼蒿一花蘂都黄然今服

本草綱目云苦薏處々原野極多與レ菊無レ異但葉薄小而多尖花小而蕋多如ニ蜂窠一狀氣味苦辛慘烈

あまぎく

あまぎくは其華葉を以て食料に供し或は菊酒となすものにしてたゞ其華大錢の如く千葉黄色のもの丶みなりこれに二種あり一種は其華斜紏をなす事頗る綟草(モヂズリ)の如く一種は其華斜紏をなさず庖厨家共にこれを呼て料理菊といひ且斜紏をなすものを以て最上とす此卽西土にいはゆる眞菊(本草綱目)一名甘菊(日華本草)といへるもの也されど西土のものは其華斜紏をなすや否やをしらず岡村尙謙曰菊は原海外より其種を傳へし物なるが故に歌にも古より其字音を以てよみ來れるは其證なりといへども今これを詳するに皇國にも一種太古よりから國の種と同じ草のたま〲山間に自然生ありとおもはる其生出し處のいとたしかなるは甲斐國鶴郡(甲斐風土記)なりまた延喜の比に甲斐近江下野若狹阿波讃岐より黄菊花を貢す(延喜式)とあるもまた自然生の菊華にしてさらにから國の種を移し植しものを貢せしにはあらずさはいへ此ものはいづれの國々にもいとおほく生出しものにはあらざるを以て菊華を貢せしはたゞ甲斐以下の六國のみ凡延喜の比藥物を貢せしに其物によりては或は五斤或は十斤極て多きものは十五斤よりすなはち七十斤に至るひとり菊華のみ僅に甲斐十兩下野五兩若狹二兩讃岐三兩とありて其最多きは阿波一斤近江一斤二兩とあるを限りとすかく分量の少なきをみても其種原より他の藥物よりは殊にまれなりしなるべしかく稀なるものなれば古より人おほく自然生ある事をしらざりしなるべし

延喜式(典藥寮)云諸國進年料雜藥甲斐國十二種云々黄菊花十兩

又云近江國七十三種云々黄菊花一斤二兩

又云下野國十四種云々黄菊花五兩

又云若狹國二十四種云々黄菊花二兩

又云阿波國三十三種云々黄菊花一斤

又云讃岐國四十七種云々黄菊花三兩

本草辨疑云菊ニ數種アリ藥舖ニアル者野菊アリ能似タリ味苦シ不レ可レ用山中ヨリ出ル小ニシテ味甘者眞ナリ花ニ黄白アリ二種共ニ可レ用

用藥須知云和ニ白紅黄三種一入レ藥黄ナルモノヲ上ト

ニシテ味甘ク秋冬堪レ寒テ久シクアリモロコシニハ菊花一木ニ多キヲコノメルニヤ范成大菊譜序曰至レ秋則一幹所レ出數十百朶トイヘリ唐繪ニカケル菊モ花多シ日本ノ好事ノ者ハ一莖只一花ヲツク故ニ花大ナリ菊ニ細子アルモアリ種レ之生ズ白菊ハ大ナレドモ味甘カラズ凡菊ノ葉春夏及秋ノ初マデワカキ葉ハ久シクユビキヲ食フベシ脾胃虚瀉ノ人ニハ宜カラズ菊ノ葉ヲ乾シテ茶トシ服ス色モ香モ好ト行厨集ト云書ニアリ花モ甘キハ生ニテモ乾テモ食フベシ苦キハ不レ可レ食胃氣ヲ損ズ

和漢三才圖會云野菊雞兒腸草二物相似而葉略薄小多尖味甚苦其花有ニ單葉一有ニ千葉一色黃者野菊也採藥人用ニ金剛山野菊花一充ニ眞菊花一者非也醫擇ニ家種單葉黃菊花ニ可ニ藥入用一

本草啓蒙云野菊ハ山足路旁ニ多シ原野ニハ稀ナリ一科叢生ス苗高サ三五尺枝ヲ分ツ事最繁シ故ニ千本ギクト呼ブ葉ハ花叉多シテ鋸歯密ナリ莖葉淺綠色斷レバソノ氣艾ノ如シ晩秋花ヲ開ク事甚多シ單瓣ニシテ大サ四五分心大ニシテ瓣短ク微ク香氣アリテ黃色ナリ故ニ一名苦薏ト云世ニ此草ヲカモ□イリトスルハ穏ナラズ蠻書ノ圖ニ異ナリ

本草拾遺云若薏味苦破レ血婦人腹內宿血食レ之又調レ中止レ洩花如レ菊莖似ニ馬蘭一生ニ澤畔一似レ菊々甘而薏苦語曰苦如レ薏是也

のぎく



古今要覽稿卷第四百四十

●草木部

かはらよもぎ

かはらよもぎ一名可波良於波岐俗名野ぎく一名あぶらぎくは漢名菊華一名節華一名女華なり此草は古より皇國の田野に自然生のものなれば諸國いと多し藥に入るには野生を採て其まゝ乾かすものゝよしさて後世西土にて菊華といへるは專ら園圃に養へるものを以て眞物とし田野のものをば薏花(抱朴子)或は苦薏(集註本草綱目)或は野菊(本草拾遺)など其名をおふせて眞菊にあらざるよしいひなせど古にいはゆる菊華といへるは必ず野菊華にして園圃のものにはあらず故に菊華生二雍州川澤及田野一(神農本經)といひまた九月菊有二黄華一(呂氏春秋禮記月令)といへり此黄華といへるも卽野菊華の單葉純黄色なるが自然と田野に生せしをさしていひし也かゝれば古の菊華は卽今の薏花なる事明らけし然るを抱朴子に菊華與二薏花一相似直以二甘苦一別レ之菊甘而薏苦といひ陶弘景もまた此說に因循して神農本經を注せしより遂に古の菊華をしるものなきはなげかはしき事なり又神農本經に菊華味苦といへば此華の苦きは原よりその本味なり故に唐天寶單方圖に白菊を載て汝南人呼爲二茶苦蒿一(本草綱目)といへりこれまた一證也畢究園圃に養へる甘味のものを尙うとみて眞菊とせしは全く服食家の一說にして神農氏の正義にはあらざるべし

大和本草云菊順和名ニカハラヨモギト訓ズ但ソレハ野菊ナルベシ古歌ニハキクトヨメリ蘇我菊ト云ハ八雲御抄ニ黄菊ナリトイヘリ上代ニハ未中夏ヨリワタラズ故ニ萬葉集ノ歌ニハ菊ヲ詠ゼズ其後ワタリシユヘ古今集ニハスデニ詠ズ八雲御抄云凡菊萬葉不レ詠歟寛平菊合以後殊名物トハナレリマサリグサト云鞠ハ菊ノ本字ナリ劉蒙ガ菊譜ニ三十六品ヲノセタリ花史ニ菊ノ品類ヲトク事甚詳其中有二治レ菊月令一十二月ノ治法ナリ中華ニモ近世其品類益多カルベシ日本ニハ今菊ノ品甚多シ不レ可二窮知一今案ニヒトヘナル黄花ニスクシテ甘キ菊アリ是藥ニ用ル眞菊ナルベシ又冬菊ハ寒菊ト云單ニシテ味甘シ又重葉ノ小菊黄色

打亂物緖思歟女倍芝世緖秋風之心倦介禮者
打亂緖秋風收倦　世緖女郎貌絶饒
芽野鳴鹿幾戀愛　林枝□鳥且耽饒

君丹依野邊緖離手女倍芝心一丹秋緖認濫
爲レ君栽二芝草一介開　手掘二池沼一蓮馥匂
在々處々玉盞泛　丹芝草見玉景美

女倍芝秋在名緖哉立沼濫置白露緖潤衣丹服手
良芝秋花最勝宜　泛名衣潤野客服
白露服複仙人狎　手抱二歌儛一共筵宴

女倍芝折手丹潤留白露者　嫉花之涙成介里
花貌孋秋風嫉音　人間寰中寒氣速
晴河洞中浪起早　露白烟丹姤涙聲

露草丹潤會保知筒花見砥不知山邊緖皆歷知丹杵
草露潤レ袖增秋往　山邊保花怨落堆
若逢眞婦女郎者　可レ惜生死遙別行

藝能敢取丹名禮　每秋往良芝良折
秋風丹吹過手來留女倍芝目庭不見爾砥風之頻禮留
秋風觸處露不レ閑　吹過浪花岸前發
竹葉隱低自引レ盃　相說黎氏女宴盛
泛成砥名丹曾立塗女倍芝那砥秋露丹生添丹兼
秋露泛レ灔添レ丹生　名兼レ成立曾無レ那
池內水文水雨紊　霧中叢併葉色薄
女倍芝往過手來秋風之目庭不見砥香許曾驗介禮
婆母過レ年自往來　庭前單香倍芝驗
秋風往山野寂寞　寒風來空堂閑等
女倍芝人哉見都濫三吉野之、置白露之姿緒作禮留
姿人留無見不レ得　花愛枝賞白露散
等觀莖翫心猶冷　俄喘息紅色遷移
女倍芝此秋而已曾已瞻杵緒玉砥貫手見江南
秋暮行草木寂寞　花宿白露無二盛時一
寒風俄來禮五連　女郎何惜留二花匂一
荒金之土之下丹手歷芝物緒當日之占手丹逢女倍芝
貞女香含吐二黃金一、　秋野行人服皆匂
芝草逢者者奢侈花　擿柯取□共不レ愛
女倍芝秋之野風丹打靡杵心一緒誰丹寄濫

秋風花繫草木靡　誰許寄濫止二野陵一
濤奢風侈林不レ閑　雲帳要凝池不レ明
乍枝花秋風丹散沼鞆色緒原分那野之、女倍芝
柯花俟レ秋風分散　池色隨レ起浪移落
花袖玉色易二遷移一、　郁女時々來問訊
長宵緒誰待兼女倍芝人待蟲之每枝丹鳴
秋月宵長光猶富　誰知九重似二官量一
兼識天地陰陽氣　素髮何歲化來秋
秋之野、緒定手人之不還禰者花之匂者不遺介里
秋野物色都何怜　路頭遊客花色詠
山中狩人柯先吟　無遺花上蝶羽匂
朗丹裳今朝者不見江哉女倍芝露之籬丹立隱禮筒、
月朗秋夕見何怜　早朝閑坐眺二黃菊一
霧帳月眉翳不明　風羽扇夕塵無レ晴
夕方之月人男女倍芝生砥裳野邊緒難過丹爲
父女郎不レ見心焦　月男別往併難レ逢
幼見野草與二芝花一　風秋催□林隈物
女倍芝拆野之、鄉緒秋來者花之影緒曾假廬砥者世留
野草芳菲紅絲亂　鶴響雲館紫丹凝
來秋花影尤盛宜　草木靡レ柯似二舞袖一

尙謙曰蘭山のいはゆるかのこさうは蠻名をはれりやなといひ彼醫神經强壯の劑に用ひてその根極めて芳香なるものなれば春女郎花の一名かのこさうの臭氣あるものとは別種なり然るに雌雄を以てその草を分ちしは恐らくは誤りならん且春女郎花一名かのこさうは近野にも多く生出るものなれどもはれりやなのかのこさうはいまだ本邦に自生ある事を聞かず此種は往歲蓋し海外より來れるものなるべし

詩歌

菅家萬葉集卷之上

秋歌三十六首

女倍芝匂倍留野邊丹宿勢者無綾泛之名緒哉立南
女郎花野宿二羈夫一　不レ許繁花負レ號區
蕩子從來無二定意一　未二嘗苦有レ得二羅敷一

名西負者强手將恃女倍芝人之心丹秋這來鞆
秋嶺有レ花號二女郎一　野庭得レ所汝孤光
追レ名遊客猶尋到　本自慇懃子尙强

又卷之下

女郎花歌二十五首

白露之置晨之女倍芝花丹裳葉丹裳玉曾懸禮留
孔子仁恩郁二山野一　白露晨々晞二玉裳一
山人洪勢併二林樹一　晴霧暮々懸二羽衣一

草隱禮秋過禮砥女倍芝匂故丹曾人丹見塗
女郎何葉節草隱　候周忘レ秋袖匂
終日秋野收二黄色一　通夕露孕染二花貌一

名丹饒手今朝曾折鶴女倍芝花丹懸禮留露丹奴禮筒
秋野草都號二女郎一　鶴潤鏡今朝增鵰
風馥多□今夕薰　自レ是野客千般喜

公丹見江牟事哉湯々敷女部芝霧之籬丹立隱濫
女芝露孕祕二籬前一　江公泣保翳侘敷
秋風吹來將二排却一　可レ惜草木且濫落

女倍芝移秋之程緒見手根障遷手露曾折鶴
芽花與二女郎一交レ袂　烟霞相催草木宜
天都秋山埜何怜　風露染手秋腸斷

秋之野緒皆歷知砥手少別丹潤西袂哉花砥見湯濫
是花中偏不レ愛レ郎　萬山都併花歷レ年
知行芽芝劣潤別　馥散野人醉□□

毎秋丹折行良咩砥女倍芝當日緒待乃名丹許佐里介禮
毎秋往良芝良折　當日相對猶不レ古

大和本草云宗砌法師カ藻鹽草ニ白花ナルヲ俗ニヲトコヘシト云又云ォホドチハ女郎花ニ似テ花白キナリヲトコヲミナノ花トモイヘリ男郎花ト云

○按に敗醬を藻鹽草にはおほどち但是は木歟とのみありて白花なるを俗にをとこへしといふ以下の文はみえず因て又案に袖中抄に女郎花といひおほどちといふは同事なりおほどちとはをみなへしに似て花のしろきなりされはをとこへしともいふ萬葉集にをとこをみなのはなとよみたるはこれかとみえたり此文をとりて大和本草に藻鹽草を引しは是大なるあやまりなり

東雅云江談に花色如二蒸粟一といひし事を文選を引て蒸粟に作るべしといひしは誠に然也されどこの花の如きは蒸粟にこそよく似てければ漢にしていかにいひしものにやあるらん似たるものどもあれどそれとおぼしきものいまだみず

○按に江談抄云花色如二蒸粟一俗呼爲二女郎一（順詠二女郎花一）或云近日以レ粟爲レ栗可レ怪之檢二文選注一木名也云云これによるに蒸粟を蒸栗に作るべきよしは或近日の四字にてその說の文選注に出しにはあらざるなり又女郎花の木名たるよしはその義旣に釋名中にみえたり且女郎花とおほどちとは一類二種なるは上文にいはゆる袖中抄にもみえてともに本草の敗醬なる事は明かなるを漢にしていかにいひしものにやといへるは考を失せし也

本草綱目啓蒙云時珍說トコロノ者ハ白花ノモノヲ指ス即男郎花（和名鈔）ナリ又南樓花（同上）ニ作ル

○按にをとこへしの名の物にみえたるは袖中抄を以て始とし和名鈔にはたゞ女郎花とのみありて男郎花及ひ南樓花の名なきは勿論の事なり然るをここに和名鈔を引てその名を載せしは大和本草に宗砌法師の藻鹽草を引て男郎花を辨ぜしと同じくこれまた傳聞のあやまり也

又云又一種春ノヲミナヘシト云アリ一名「カノコサウ」「キヌマキ」「サクラカハグサ」コレニ雌雄ノ二種アリ雄ナル者ハ葉黃花ノ敗醬葉ニ似テ小ナリ薄クシテ尖レリ三月ニ花ヲ開ク紅白相雜ル故ニ「カノコサウ」ト云雌ナル者ハ小草ナリ高サ一尺許花葉トモニ小ナリ俗ニ和ノ甘松ト云ハ誤リナリ根甚細小ニシテ臭シ全ク甘松ノ類ニアラズ

袖中抄引或萬葉抄云このてがしはとはおほく歌によみたれどもいにしへよりいまにいたるまでそのものとしりがたかりけるに範永朝臣の大和守にてくだりけるに奈良坂のほどにてしろきはなのいみじくおほくさきたりけるをみてくにとねりのともなりけるがともにはしりけるがゆゝしくさきたるこのてがしはかなといひけるを聞て馬をとゞめていかにいふぞととひければこのさきたるはおほどちとまうす物なりそれを此國にはこのてがしはとまうすなりといひければいみじうよろこびてそのをとこにものとらせけりとしごろおぼつかなかりつることなりいかにかくはいふぞとゝひければ葉のちごどもの手に似たればば兒の手のかしのやうなりとまうすなりといひけり

○按に國史草木昆蟲攷云萬葉集卷八に兒手柏をよみたる歌ありまた卷十六に謗二佞人一歌に「奈良山の兒手柏之兩面爾(フタオモ)」とよみたるは今もいふこのてがしはの葉の表裏のわかちなければこそ兩面とよみたれ卽本草彙言に載たる叢柏なりまきさくひとよみたるひとは異也その他の柏類はすべて表と裏明らかに分れるもの也といへりこれによるにおほどちを以てこのてがしはといふは大和國の方言にして萬葉集にこのてがしはといひしは卽叢柏一名佛手柏などいへるものなるを範永朝臣の傳聞のままにそれを一つに心得られしは誤り也故に顯昭もたゞし大和國の風俗にておほどちをこのてがしはといふ事は此ならやまのこのてがしはといふ歌につきてつくりいでたる物語也といへり扨尙謙曰萬葉集に兒手柏の兩面にとよみしはなほ兩心あるといふ意にて表のいろは青く裏は白きものをさして佞人の彼におもねりこれにへつらふ意なるべければその葉に表裏なきものにはあらざるべしといへるは其說いかゞあらん

和漢三才圖會云敗醬（俗云二羽衣一又云二鋸草一）葉大如レ柳而周鋸齒深六月開レ花白色巓有二黃點一又有二純白者一共根氣惡臭（葉晩萎折合宛似二鋸形一然漢所レ圖之形不レ合二本文一）

○按に羽衣草一名鋸草は卽稻若水のいはゆる蓍草となすものにして敗醬とは絕て別種也然るを寺島良安のその草を以て漫に時珍說ところの敗醬白花のものに擬せしはこれ大なるあやまり也

よみ茶をまた於保止知とよみしはともにこれと同名異物也又本草和名にその於保止知の止を以て都に作れるは蓋し一邦の方言なるべし或は都は卽音讀なりともいへり

ちめくさ 本草和名 和名類聚鈔

○按に國史昆蟲草木攷に敗醬赤眼を治とあればちめくさと命せし也なほ龍膽草疫を治するが故にゑやみぐさといふが如しとみえたり

加末久佐 醫心方

○按に加末久佐は卽旋花と同名異物なり

をとこへし 袖中抄

○此卽女郎花にむかへていふ

このてがしは 同上

○大和の方言なりといへり

をとこをみなの花 同上

○萬葉集の歌を引

思ひ草 藻鹽草引二寶院前栽草合一

とちな 本草綱目啓蒙

○とちな 信州 土州 とみえたり

みるな 同上

○みるな 勢州 とみえたり

春をみなへし 同上

かのこさう 同上

○此花の色によりて名づく

もみぢ葉の女郎花 同上　白山をみなへし 同上

金鈴花 同上

○種樹家の稱なりといへり

敗醬 神農本草

○名義上文にみえたり

鹿腸 同上　鹿首 名醫別錄　馬草 同上　澤敗 同上

鹿醬 嘉祐本草引二藥性論一

酸鹽 日華本草　地花菜 救荒本草

墓頭灰 同上

○按に本草綱目に集驗方を引て治二崩中赤白帶下一用二墓頭回一把一とみえたり回灰音通なれば蓋し一物なるべし然りといへ共小野蘭山は墓頭回本草原始に圖するものはこれと別物にていまだ詳ならずといへり

苦菜 本草綱目

○正誤

といふ事は本據ありといひけりされどむかし小野頼風といふものゝ八幡に住て京なる女とたがひにゆきかよひしにその女頼風を恨る事ありて河に身を投て死しけり死せし時にぬぎ置しやまぶきがさねの衣の土に朽て此花咲きたりけりといふ事あり此事また靈鬼志にみえし河文か女の塚に菊花を生ぜしといふに似たりし事なれば女郎花の字借用ひてをみなへしといはむも誠にしかるべし粧樓紀に木蘭を女郎花といひしはたゞ其艶なる事を記せしとのみゝえたり云々今按ずるに白樂天が詩に戲題木蘭花とありて紫房日照二臙脂一拆素艷風吹膩粉開怪得獨饒二脂粉態一木蘭曾作二女郎一來とみえ又舊より木蘭といひし女の名もありしなとによりて考れば本邦にてをみなへしにその女郎の字を塡しは此草の形狀最柔麗佳美なるによりて遂にその字を假借せしなるべしなほまた西土にて萎蕤を女草或は娃草といひしなど思ひ併せてその義を押はかるべし扱菊を女郎といひし事はまた本草和名にみえたれどもその郎字を證類本草に引しには節字に作り又本草綱目に雀寔か月令を引て女節、女華、鞠華之名也とみえたるによれば本草和名に菊を女郎といひしは卽節字の誤りにて必ず一名にはあらざるなり

姬押 萬葉集

○按に押は押照押靡の押と同じ事なるにそれをへしの假字に用ひしはめづらし今の俗にも押へすといふ語あるなどによりて考れば押といふもへしといふもその意一つなるによりて押字を以てへしの假字に借用ひしにてもあるべきにや

娘子部四 同上　娘部思 同上

○按に姬といひ娘といひまた娘子といへるはすべて女郎といへるにその意一つなり

美人部師 同上　佳人部爲 同上

○按に美人といひ佳人といへるはその意一つにて共に此草の佳美なるによりて也扱爲字は爲の刀々支爲毛利なとの爲にして委と同じ假字なるをこゝにしの假字に用ひしは卽訓にしてなほつをつとよむに同じかるべし

女倍芝 新撰萬葉集　おほどち 本草和名 袖中抄

○名義いまだ詳ならず新撰字鏡に蓀を於保度知と

㆑似㆓稀薟㆒の説あり蘇いまだ陶注の敗醬及び稀薟を解し得ざるによりての故成べし

嘉祐本草引㆓藥性論㆒云鹿醬陳敗醬是也

按に鹿字一本敗字に作る恐らくは非なり

日華本草云敗醬味酸治㆓赤眼障瞙努肉聤耳㆒云々

又名酸鹽（按に鹽一本[illegible]に作る）七八十月採

本草圖經云敗醬今江東亦有㆑之多生㆓崗嶺間㆒葉似㆓水莨及薇銜㆒叢生花黄根紫色似㆓柴胡㆒作㆓陳敗豆醬氣㆒故以爲㆑名八月採㆑根暴乾用（以上證類本草引）

救荒本草云地花菜又名䕠頭灰生㆓密縣山野中㆒苗高尺餘葉似㆓野菊花葉㆒而窄細又似㆓鼠尾草㆒葉亦瘦細梢葉間開㆓五瓣小黄花㆒其葉味微苦○救飢採㆑葉煠熟水浸淘洗淨油鹽調食

本草綱目云敗醬處々原野有㆑之俗名㆓苦菜㆒野人食㆑之江東人毎㆓采收㆒儲㆑焉春初生㆑苗深冬始凋初時葉布㆑地生似㆓菘菜葉㆒而狹長有㆓鋸齒㆒綠色面深背淺夏秋莖高㆓二三尺㆒而柔弱數寸一節々間生㆑葉四散如㆑繖顚項開㆓白花㆒成㆑簇如㆓芹花蛇牀子花狀㆒結㆓小實㆒成㆑簇其根白紫頗似㆓柴胡㆒呉普言其根似㆓桔梗㆒陳自明言其根似㆓蛇苺㆒者皆不㆑然

『此間彩畫四圖略㆑之』

白山女郎花



○釋名

をみなへし（萬葉集古今和歌集）

○按にをみなは郎女字にてへしの義いまだ詳ならず或はへしはなるべしといふ語の上略にてもあるべきにやといへるはいかゞあらん一説に此花美麗にして女の妖艶なるを押意なりともいへり

女郎花（同上）

○尙謙曰東雅云壒囊抄に靈鬼志を引て菊を女郎花

葉兩對ス忍冬葉ニ似テ鋸齒アリ只白山ヲミナメシハ此蔓ナシ

集注本草云敗醬出ニ近道ニ葉似ニ稀薟ニ根形似ニ茈胡ニ氣如ニ敗豆醬ニ故以爲レ名

岡村尙謙曰陶弘景また天名精を注して云此卽今人呼爲ニ豨薟ニ亦名ニ豨首ニとこれによる時はこゝにいふ、稀薟は卽天名精にして康頼本草に和名伊奴乃之利といひ今俗は山地黄或はがんくひさうといふものなり救荒本草に載る所の杓子菜またこれと一物なり然る時は此注にいはゆる敗醬は蓋し白花のものにして時珍のいはゆる敗醬と同種なり故に本草綱目に敗醬初時葉布レ地生似ニ菘菜葉ニ而狹長有ニ鋸齒ニといへるは卽伊奴乃之利一名山地黄の葉の初生地にしきて狀地黄葉の如くにして尖らず又菘菜葉に似て細鋸齒あるものと暗合なりまた綱目に敗醬根紫白頗似ニ柴胡ニといふもまた陶注と暗合なれば陶がいはゆる醬敗は卽白花のものなるはしるしこれによりて又按に本草和名及び和名鈔等におほどちを以て敗醬とせしは蓋し陶注に從ひしにて蘇注にいはゆる黄花のものは松岡玄達小野蘭山などのいはゆる白山をみなへしにして舊くよりいふ所の女郎花とその形狀暗合のものにあらざるによりて敗醬とは別物なりとおもひしなるべし

唐本草云此藥不レ出ニ近道ニ多生ニ崗嶺間ニ葉似ニ水莨ニ

尙謙曰吳氏本草に附子一名莨とみえたり莨菫もと通聲なれば水莨は卽水菫也此草水澤に生じてその苗附子に似たり故に水莨と名づく

及微銜

尙謙曰微銜正文麋銜に作るべし義本條にみえたり

叢生花黄根紫作ニ陳醬色ニ

尙謙曰本草圖經によるに色字まさに氣字に作るべし

其葉殊不レ似ニ稀薟ニ也

尙謙曰松岡玄達以來その葉似ニ水莨ニものを以て白山をみなめしとす今姑くその說に從ひてこれをいふときは蘇本條を以て地花菜和名女郎花たる事をしらずして却て一種の白山をみなめしを以て本條に充しはこれこころもをへたてゝ痒き處を摩するが如し且蘇のいはゆる稀薟はその葉似ニ酸漿ニ而狹長黄白色のものとす（時珍曰蘇云似ニ酸漿ニ者龍葵非ニ稀薟ニ蓋誤認耳）故に敗醬葉不

花からみけるけしきにてことかたへなびくをとこ立のけば又おきなをり此事をいへるやと云々又をとこ山によめるも此儀也又くねるといふ事は違する心なり弘賢曰序に一時をくねるとかけるは誹諧部に「秋の〻になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一時」といふ歌をあげしなりくねるといふ詞違する義にあらず詞の部にいふがごとし

いざおなじくば花々にみん　霜にをかる〻

長月のすゑ野の霜におとろへてさかり過たるをみなへしかな　うはをの枝　なびき布す野

大和本草云敗醬本草ニ載ル所蘇恭カ説ハ花黄ナリ時珍カ説ハ花白ト云其形狀倭俗所レ謂女郎花ナリ本邦ニテモ黄白二色アリ醫學入門云花黄ナリ古歌ニヨミ國朝ノ詩人ノ詠ゼシハ黄花ナリ白花ナルヲ俗ニヲトコヘシト云蘇恭カ説不レ出二近道一多生二岡嶺間一ト云日本ニテモ亦同山野ニ生ズ敗醬ト名ヅケシハ此花葉ノ臭醬ノ損ジタルガ如シト本草ニイヘリ今試ルニ然リ根モ同臭アリ黄花ハ七八月開ク白花ハ四月開ク又秋開クモアリ

本草綱目啓蒙云敗醬種樹家ニ多ク黄花ノモノヲ栽ユ即女郎花ナリ又山中ニ自生モアリ春舊根ヨリ苗ヲ生ズ葉ハ玉帚葉ニ似テ多ク叢生ス圓莖高サ三四尺節ニ對シテ葉ヲ生ズ菊葉ニ似テ岐深シ梢ニ至レハ變ジテ艾ノ梢葉ノ如シ夏末花ヲ枝梢ニ簇生ス未ダ開ザルモノハ細碎ニシテ粟粒ノ如ク深黄色巳ニ開クモノハ五出ニシテ色淺ク臭氣アリ採テ瓶花ニ供ス是黄花ノ敗醬ニシテ救荒本草ノ地花菜ナリ時珍説トコロノ者ハ白花ノモノヲ指ス即男郎花ナリ山野ニ自生多シ苗葉黄花ノモノヨリ肥大ナリ脚葉ハ岐深クシテタマホウキノ葉ニ似タルモアリ又岐ナクシテ細鋸齒アルモアリテ變葉多シ皆短毛臭氣アリ圓莖高サ四五尺四月ヨリ秋ニ至ルマテ白花ヲ開ク黄花ノ者ヨリ大ナリ又一種春ノヲミナメシアリ一名カノコサウト云高サ一尺許花葉トモニ小ナリ深山幽谷溪側ニ多シ俗ニ和ノ甘松ト云ハ誤リナリ根甚細小ニシテ臭シ又一種加州ノ白山ヨリ出ルモミチバノヲミナメシアリ一名白山ヲミナメシト云圓葉ニシテ四岐及ビ鋸齒アリカヘデノ草ノ形ニ似タリ對生ス莖高サ一尺許五月花ヲ開ク深黄色白花ノ敗醬花ヨリ大ナリ是蘇恭説クトコロノ敗醬コレナリ凡敗醬ハ根ヨリ長キツルヲ四方へ引キ小

藻鹽草云女郎花庭にはつれの事也又原にもたてるをみなへし或は月にたてろとよめりなまめきたてるなども又をとこ山にしたてるともうしろめたしなどもいへり　神なびのあさ小竹はらのをみなへし萬ふさだをるとよめり　うつろふとも　香ある物にいへり

おもひ草

「たれかおるさがの丶はらのおもひぐさわれなきならば花はさくらん」按に藏玉集にはらんの下に此歌因縁野邊の物語にありの數字有女郎花をおもひぐさといふ事は齋院せんざいのくさづくしにみえたり天智天皇草花異名にはす丶きと云り又しをんとも分明せずた丶し女郎花を思ひ草といふ事は前栽合に藏玉集には前の上に彼の字ありさだめらる丶條勿論なりさくらをも能因法師は詠ぜりと云々藏玉にあり拾遺〇「しら露のおけるめにする女郎花あなわつらはし人なてふれそ」白露のおきたるつまにすとをみなへしを云なりと云々女郎花をはをみなによせて人のつまとよむ事にて有に白露のおきたるめと云也只ゆきずりのつまにはあらず家にきたるうるはしきめといふ也

男山によめり　をみなへしの一時をくねる

古今の序にいへり平城天皇の御時小野頼風と云人あり八幡に住人なりけり京に女を持てたがひにかなたこなたに行かよひけるにある時京の女のもとに行ていつ／＼の比はかならずとちぎりてかへりぬその丶ち女待けれどもこざりければをとこの八幡の宿所にたづね行てとふに家なるものこたへていはくこの程はじめたる女房のまします所にゆき給ふとこたふ此女うらめしと思ひて八幡河のはたにゆきてやまぶきがさねのきぬをぬぎすて丶身をなげてしにぬをとこ行けるに家のをんなの云京の女房のおはしつるがかへり給ぬと云をとこあはてておひ行に河のはたに山ぶきがさねのきぬありかの女のつねにきたるきぬなりあやしみみれば河の中にかの女死てあり女をばとりあげて供養してかのきぬをとりてかへりかたみにこれをみるをとこ宮づかへによりて京にひさしくゐたりけるにかのきぬを見むと思ひてとりにやりたりければこのきぬつちにおちくちてをみなへしとなれるつかひ歸りて此よし云ければ頼風行てみるにをみなへしさきみだれたり頼風花のもとへよらんとすれば此

詩にもまた花色如㆓蒸粟㆒と作られたり然るを證類本草に本草圖經を引て書傳載玉之色曰本草綱目には書傳の二字を王逸玉論の四字に作る赤如㆓雞冠㆒黃如㆓蒸粟㆒白如㆓截肪㆒黑如㆓純漆㆒といひまた今儀州出㆓一種石㆒如㆓蒸粟色㆒彼人謂㆓之粟玉㆒或云亦黃玉之類但少澤とみえたりこれによれば粟は蓋し栗の誤字にてもあるべきにやとおもはるれども凡蒸粟といひまた蒸粟といへるは共にその色によりてたとへしものなれば此女郎花の如きは蒸粟にて最然るべし故に江談抄にも順朝臣の詩を引て或云近日以㆑粟爲㆑栗可㆑怪之とみえまた廣雅に蒸穛音栗麴金麴去菊塵黃綵也といへるにても蒸粟もまたその色をたとへていひしことはあきらけし

又云敗醬陶隱居曰敗醬和名知女久佐氣似㆓敗豆醬㆒故以㆑名㆑之

醫心方云敗醬和名久知女久佐又云加未久佐

按に久字疑らくは衍ならん

清少納言枕草紙云草のはなはなでしこからのはさら也云々をみなへしきゝやう

八雲御抄云女郎花姫部志姫押女によせてよむ　ふさだをるとよむ　うつろふといへり　香有物によめり古今萬に神なびのあさゝはらのをみなへし　野山　また澤に生るともいへり

袖中抄このてがしはの條云又或萬葉抄云範永朝臣の大和守にてくだりけるに奈良坂のほどにてしろきはなのいみじくおほくさきけるを見て云云ゆゝしくさきたるこのてがしはかなといひけるを聞て云々此さきたるはおほどちとまうす物なりそれを此國にてはこのてがしはとまうすなり云々いかにかくはいふぞととひければ葉のちごもの手に似たれば兒の手がしはのやうなりとまうすなりといひけり又云私云このてがしはを女郎花ともいひおほどち共いふは同事也おほどちはをみなへしにゝて花のしろきなりさればをとこへしともいふ同躰の事歟萬葉にをとこをみなのはなとよみたるはこれか「あきの野にいまこそゆかめものゝふのをとこをみなのはなにほひみに」たゞし大和國の風俗にておほどちをこのてかしはといふ事はひとへに此ならやまのこのてがしはといふ歌につきてつくりいでたる物語也

又をばなくず花の條に前の歌を引て云をとことはをとこへしといふはおほどちとてをみなへしの様にて花のしろきなり云云

古今要覽稿卷第四百三十九

●草木部

をみなへし　ちめくさ　敗醬

をみなへしを今はをみなめしといへりその文字を古は女郎花或は姫押或は娘子部四或は娘部思或は美人部師或は佳人部爲などさまぐ〜にかきしを延喜の比よりは專ら女郎花の三字のみを用ゆる事とはなりにたり故に和名鈔にもその三字を以て桔梗龍膽などの次に並べて漢名の如くに女郎花とかきしはなをはぎを鹿鳴草と書せし類なりさて女郎花の漢名を敗醬一名鹿腸一名馬草一名澤敗一名地花菜などいへるを深江の輔仁も順朝臣もともにその敗醬を以てたゞちめくさとのみよみて女郎花もまた敗醬たる事をしらざりしは其比いまだ本草學の今の如くに委しからざるによりてなり然といへどもたとへ女郎花の漢名を憶にしりたりとて歌などよまんには敗醬或は鹿腸或は澤敗などかゝへんはいかゞあらん扨敗醬に二種あり古より歌によみ詩に作りしは即黃花のものにて白花のものはいはゆるちめくさなりその一名をおほとち一名おとこへしといひまた大和の奈良坂にてはこのてがしは信濃及び土佐にてはとちな伊勢にてはみるなといふ或は萬葉集にいはゆるおとこをみなの花とよみたるもまた此白花のものなりといへり又一種はる女郎花一名かのこさうあり三月の比五瓣の細小なる淡紅花を開き日を經るときは白色に變ず又一種加賀の白山にいづるものを白山女郎花一名もみぢばの女郎花一名金鈴花といふその葉頗る雞冠樹葉の如くにして莖高さ一尺許に至り深黃花を開く此二種は古より歌によみ詩に作りしためしある事をきかず

本草和名云敗醬和名於保都知一名知女久佐

和名類聚鈔引ニ新撰萬葉集一云女郎花倭歌云女倍芝乎美那閉芝今案花如ニ蒸粟一也所レ出未レ詳

按るに新撰萬葉集云「女倍芝匂倍留野邊丹云々」その詩に「女郎花野宿羇夫云々」また「女倍芝人之心丹云々」その詩に「秋嶺有レ花號ニ女郎一云々」これ順朝臣のもとづく所なり扨蒸粟は此花黃色なる事頗る蒸たる粟粒の如くなるによりて也故に順朝臣の

人しれぬ尾花か本は中々に
　かれにし後そあらはれにける

又巻第十七雜歌上
　冬御歌の中に　　後鳥羽院御製

一年も今はすゑ野の村薄
　霜ふく夜半の風の寒けき

尾花にましり今日も暮しつ　　前參議雅有

秋夕露を

秋風に我涙さへさそはれて
尾花にあまる袖の夕露

又卷第五同歌下

寶治二年春日社歌合に聞二遠鹿一といふことを
よみ人しらず

住吉の遠里をの丶花薄
ほのかにき丶つ棹鹿の聲

又卷第六冬歌

千五百番歌合に　　中納言定家

花薄草の袂も朽はてぬ
なれて別れし秋をこふとて

又卷第九雜別歌

別の心を　　前大納言隆房

わかれにし人やはかへる淺茅原
まねく尾花はよそめ計そ

又卷第十羇旅歌

旅宿の心をよませ給うける　　後小松院御製

かりしくもうすき尾花の袂かな
松のね寒き露の枕に

又卷第十一戀歌一

寄レ草忍戀といふことを　　藤原秀茂

み草かるあら野の薄うらわかみ
またほに出ぬ物をこそ思へ

戀歌中に　　津守國助

しの薄秋の盛の露よりも
ほに出ぬまの袖をみせはや　　源頼益

ほに出てかよふとまてはみえすとも
まねく尾花の袖とたにしれ

貞和百首歌に　　竹林院前内大臣

ほに出ていさ亂なん糸薄
忍ふからにそ人もつれなき

又卷第十三同歌三

だいしらず　　鎌倉右大臣

待人はこぬ物ゆゑに花薄
ほに出てねたき戀もする哉

又卷第十四同歌四

絕後顯戀を　　法印慶運

秋田をよめる　爲道朝臣
夕されは野田のいなはのほなみより
尾花をかけて秋風そ吹く

又卷第十一戀歌一
だいしらず　前僧正宋緣
思ふとも誰かはしらん初尾花
またほに出ぬしたの心を

又卷第十二同歌二
秋風に音はすれとも花薄　躬恒
ほのかにたにも見えぬ君哉

新續古今和歌集卷第三夏歌
新玉津島社三十首歌に　後八條入道前內大臣
浪こゆるみつのうへ野の五月雨に
なひく水草やしのゝを薄

又卷第四秋歌上
だいしらず　權中納言範輔
岡のへの一むら薄ほに出て
まねくをみれは秋はきにけり

建武元年七月七日內裏にて七首歌講せられけるに
七夕の行あひになひく初尾花　前大納言爲定
今夜はかりや手枕にせん

だいしらず　源信明朝臣
わたつ海の渚の岡の花すゝき
まねきそよする興津白浪

秋の歌の中に　後京極攝政前太政大臣
うちなひく入江の尾花ほのみえて
夕浪まかふまのゝうら風

鶉鳴野原の日影ほの見えて　前大納言爲氏
尾花吹こす秋の夕風

露しけき尾花くす花吹風に　源師光
玉ぬきちらす秋の夕くれ

後九條前內大臣家歌合に　土御門院小宰相
ま葛はふおなし雛の花薄
からみぬ袖もしけき露哉

路薄といふことを　源滿元朝臣
玉鉾の道のゆくての初尾花
我袖かけて秋風そ吹

貞和百首歌に　前中納言爲忠
過かてに袖をかはして秋の野の

尾花の波にこほる月哉

又卷第十五戀歌五

だいしらず　安嘉門院四條

なひくともほには出しとしの薄

忍ひし中は霜枯にけり

又卷第十八雜歌上

暮秋霜　前大納言爲世

うら枯る野への尾花の袖の霜

結ひ捨てもくるゝ秋哉

百首歌奉し時寒草　入道二品親王覺譽

風さゆる霜のまかきの花薄

かれし人めに誰まねくらん

新後拾遺和歌集卷第四秋歌上

嘉元百首歌奉ける時　前大納言爲世

野邊ことにまねけはとても花薄

袖を賴てくる人もなし

題しらず　山階入道左大臣

まねくとて行もとまるも同し野に

人たのめなる花薄かな

民部卿爲藤よませ侍ける十首歌に

まねくとはよそにみれとも花薄　法印長舜

我かといひて問人もなし

野徑薄を　源賴之朝臣

打はらふ袖よりなひく初尾花

わくるを野へと秋風そふく

嘉元百首歌奉ける時　民部卿爲藤

花すゝき誰をとまれといはくらの

をのゝ秋津に人まねくらん

だいしらず　中務卿宗尊親王

今よりのたか手枕も夜さむにて

入野の薄秋風そふく

又卷第五同歌下　津守國冬

嘉元百首歌奉けるに

浪をこす尾花かもとによわる也

夜さむの末の松蟲の聲

又卷第六冬歌

文保三年百首歌奉ける時　前大納言爲定

枯殘る冬野の尾花打なひき

たか手枕に霜や置らん

又卷第八雜秋歌

おもふ心は風によすとも

又巻第十六雑歌上

前中納言定資家詩歌合に野径夕秋といへる事を

花薄まねく方にはとゝまらて　法印長舜

猶分まよふ野への夕暮

文保百首歌奉ける時　前中納言實任

枯はてん後こそうけれ花薄

まねくにたにも問人はなし

だいしらず　三善為連

風かよふ庭の小薄露ちりて

やとりかねたる月の影かな

題しらず　藤原基夏

男鹿なく矢田野の薄ほに出て

まねけと妻はつれなかりけり

又巻第十八同歌下

誹諧歌

だいしらず　信實朝臣

山里にたゝかりそめの薄かき

ふちする人もなき我身哉

新拾遺和歌集巻第四秋歌上

だいしらず　前中納言長方

夕されは尾花かたよる秋風に

みたれもあへぬ露の白玉

風ふけはまのゝ入江による波を　瑒子内親王

尾花にかけて露そ亂るゝ

秋の歌の中に　邦世親王

風さわく草の籬の花薄

おほふはかりの袖かとそ見る

だいしらず　上西門院兵衛

立とまる人はかた野の花薄

何とほに出てまねくなるらん

花薄袖に涙の露そへて　亀山院御製

くるゝ夜ことに誰まねくらむ

又巻第六冬歌

だいしらず　土御門院御製

見渡せはましる薄も霜枯て

緑すくなきゐなのさゝはら

前大僧正桓守すゝめ侍ける日吉社三首歌合に冬

月を　前大僧正實超

まのゝうらや入海さむき冬枯の

冬御歌に　院兵衛督
神垣のもりの木葉は散しきて
尾花殘れる春日野の原
又卷第十五雜歌上
秋歌に　兼空上人
うらかるゝ尾花か末の夕附日
うつるもよわき秋の暮方
新千載和歌集卷第四秋歌上
加茂社によみて奉ける百首歌中に薄
露ふかき朝の原の花薄　源兼氏朝臣
たかかへるさのたもとなるらん
嘉元百首歌奉ける時おなじ心を
吹結ふ野への尾花の秋風に　昭慶門院一條
露のみたれぬ袖やなからん
山里に住侍ける人の許より都の秋のけしきはいかにぞといひければ申つかはしける
秋風に尾花浪よる我宿そ　輔仁親王
山里よりも露けかりける
だいしらず　從三位氏久
まねくともよそにそ月の過なまし
尾花か袖に露のおかすは
又卷第十四戀歌四
八月ばかりにうちのとのゐにさぶらふに兵衛内侍といふ人の物いはんといふ頭の中將のたのめつるを聞てそれと思ひたるよとおかしくて御まへなるすゝきを折りて書つけてつかはしける
さためなくまねきつる哉花薄　權中納言定頼
ほに出てむすふ人もこそあれ
返し　兵衛內侍
おしなへてなひかぬ野邊の花薄
ほにはいつとも誰か結はん
此人わらは名すゝとなんいひけるとなん
だいしらず　祝部成仲
忍ひあへすほのめかすたに有物を
やかてもまねく花薄哉
しのひねの泪宿さん花薄　藤原隆氏朝臣
秋おく露は人もとかめし
貞永元年七月四日內裏にて三首歌講せられける時寄レ薄戀といへることを　前大納言爲家
たのましな秋の盛の花薄

尾花そしろき秋風の庭

秋歌あまたよませ給ける中に　伏見院御製

庭の面に夕への風は吹みちて

高き薄の末そみたるゝ

見渡はすそ野の尾花吹しきて

夕暮はけし山おろしのかせ

秋さむき夕日は峰にかけろひて　進子内親王

岡の尾花に風さそふ也

風後草花を　從三位親子

まねきやむ尾花か末も靜にて

風吹とまる暮そさひしき

百首御歌の中に　院御歌

吹かへりなひく薄のするゝゝを

のとかに渡る野への夕風

九條前内大臣家百首歌に遠村秋夕といふ事を

夕日さす遠山本の里見えて　藤原隆祐朝臣

薄吹しく野への秋風

薄を　二品法親王慈道

身をかくす宿には植し花薄

まねくたよりそ人もこそと八

秋歌の中に　前大納言爲兼

哀さもその色となき夕暮の

尾花か末に秋そうかへる

まねくとも賴むへしやは花薄　源重之女

風にしたかふ心なりけり

後法性寺入道關白右大臣に侍ける時よませ侍ける百首の歌の中に草花を　正三位季經

吹風のたよりならては花薄

心と人をまねかさりけり

だいしらず　前中納言定家

うちしめり薄のかれはおもりつゝ

西吹風になひくむら雨

風雅和歌集卷第七秋歌下

月前草花を　院御歌

風になひく尾花の末にかけろひて

月遠くなる有明の庭

崇德院よりめされける百首歌に

ほに出てまねくとならは花薄　前參議敎長

過行秋をえやはとゝめぬ

又卷第八冬歌

山本のをかやか尾花うちなひき
我袖まても通ふ秋風
閑院贈太政大臣家の前栽合に　讀人しらず
まねくかとみて立寄は花薄
うら吹風をなひく也けり
又卷第五秋歌下
秋霜をよませ給うける　御製
今よりの秋の色こそさひしけれ
末野の尾花霜結ふ也
又卷第六冬歌
邦省親王家の五十首歌中に寒草
枯殘る冬野の尾花風過て　權律師實性
夕霜はらふ袖かとそ見る
又卷第八離別歌
だいしらず　前大納言實敎
旅衣すその丶尾花打なひき
袖もひとへに秋風そふく
又卷第十一戀歌一
たいしらず　平泰時朝臣
露深く忍ひしものをしの薄
ほに出にける我思ひ哉
又卷第十二同歌三
だいしらず　安陪仲丸
秋の野の尾花か末をかき分て
きぬるもしるくあへる君哉
露深き新手枕の初尾花　常磐井入道前太政大臣
いつしかとまてたれ契けん
西四條齋宮いまたみこに物し給けるころ申送ける　權中納言敦忠
忘しと結ひし野への花薄
ほのかにみても枯そしぬへき
題しらず　中務卿宗尊親王
花薄初ほの枕そのまゝに
うらかる丶迄とはぬ君かな
又卷第十五雜歌上
だいしらず　讀人不知
秋されは尾花か上におく露の
けぬへく我はおもほゆる哉
籬薄を　前大納言尊氏
露にふすまかきの萩は色くれて

だいしらず　藤原顯盛
尾花ふくかり庵さむき秋風に
　うちのみやこは衣うつ也
百首歌奉し時　前關白左大臣押小路
我袖に露を殘して長月や
　末野の尾花うら枯にけり
題しらず　平　時　敦
長月も末野の原の花薄
　ほのかにのこる秋のいろかな
又卷第六冬歌
山階入道左大臣家十首歌に寒草霜　津　守　國　助
霜むすふ草の袂の花薄
　まねく人めも今や枯なむ
又卷第七物名
すゝきをしき　入道前太政大臣
忘れすよ霜のしたなる花薄
　をしき形見の秋の面かけ
誹諧歌
題しらず　信　實　朝　臣
まねくとてさのみも人のとゝまらは
　尾花かもとや所なるらん
又卷第八羇旅
名所歌よみ侍けるに眞野入江　源　親　長　朝　臣
かりねするまのゝ入江の秋の夜に
　かたしく袖は尾花なりけり
又卷第十三戀歌三
百首歌讀侍けるに　皇太后宮大夫俊成
難波めのあしのしのやのしの薄
　一よのふしも忘やはする
續後拾遺和歌集卷第四秋歌上
文保百首歌奉ける時　民　部　卿　爲　藤
露結ふしのゝを薄ほに出て
　いはねとしるき秋のきにけり
正治百首歌奉る時　皇太后宮大夫俊成
誰ための手枕にせん棹鹿の
　いる野の薄ほに出にけり
薄をよませ給うける　後二條院御製
白露のをのへの薄初尾花
　ほのかになひく時はきにけり
風前草花と云ことを　後西園寺入道前太政大臣

又巻第六冬歌
だいしらず
しほれふす枯葉の薄霜さえて
月影うつる有明の野へ
右兵衛督雅孝

又巻第八旅歌
覊旅の心を
露ふかき野への尾花のかり枕
かたしく袖に月そこと〻ふ
丹波長典朝臣

道助法親王家五十首歌の中に野旅
草枕かりねのいほのほの〴〵と
尾花か末にあくるしの〻め
西園寺入道前太政大臣

又巻第十四雑歌一
題しらず
尾花ふくほやのめくりの一むらに
しはし里ある秋のみさ山
金刺盛久

月を讀侍ける
出るにも入にもおなしむさし野の
尾花を分る秋の夜の月
法印能海

秋歌の中に
讀人不知

枯わたる尾花か末の秋風に
日影もよわき野への夕くれ
延政門院新大納言

又巻第十六同歌三
だいしらず
山人の眞柴にませてさす尾花
風ふかねともまねきてそ行

續千載和歌集巻第四秋歌上
麗景殿の薄にむすび付侍ける
九條右大臣

白露のおくよりみつる花薄
ほに出て風になひきぬる哉

だいしらず
花薄たか涙ともしら露の
袖にみたる〻秋のゆふ風
津守國道

嘉元百首歌奉し時鹿
花す〻きほのかにきけは秋霧の
たち野の末に男鹿鳴なり
入道前太政大臣

霧をよめる
かり衣すそ野の霧は晴にけり
尾花か袖に露を殘して
大江頼重

又巻第五同歌下

古今要覽稿卷第四百三十八

●草木部すゝき

和歌下

玉葉和歌集卷第四秋歌上

西園寺にてよませ給ける秋御歌中に

尾花のみ庭になひきて秋風の　永福門院
ひゝきは峯の梢にそきく

題しらず

色々の秋の野へをは花すゝき　刑部卿頼輔
まねかすとてもたへやすくへき

月影のいる野の薄ほの〴〵と　中原師員朝臣
山の端ならてあくるしのゝめ

原薄を

秋山のふもとの原の村すゝき　入道前太政大臣
ほすゑかたより秋風そふく

千五百番歌合に

色かはるは山か峯に鹿鳴て　大藏卿有家
尾花吹こす野への秋かせ

百首歌の中に

花薄ほむけの原を吹風に　權中納言經平
玉の緒とけて露そ亂るゝ

秋風を

また秋のうれへの色にむかふなり　從三位親子
尾花か風に庭の月かけ

秋御歌の中に

はつを花たか手枕にゆふさりの　後鳥羽院御製
籬も近く鶉なく也

又卷第五同歌下

秋夕を

花薄ほすゑにうつる夕日影　遊義門院
うすきそ秋の深き色なる

堀河院に百首歌奉ける時薄を讀侍ける

花薄ほに出てまねく比しもそ　前中納言匡房
過行秋はとまらさりける

野暮秋

野邊遠き尾花に風は吹みちて　從三位親子
さむき夕日に秋そ暮ゆく

影もとまらぬ袖の月かな
秋の歌中に
藤原景綱
なきあかす野原の蟲の思草
を花かもとや夜さむ成らん
又卷第六冬歌
冬歌の中に
左大辨經繼
霜ふかき野へのを花は枯はてゝ
我袖はかり月そやとれる
建保五年內裏歌合に冬野霰
花すゝき枯野の草の枕にも
玉ちるはかりふる霰哉
又卷第十一戀歌一
弘安元年百首歌奉し時
入道前太政大臣
人しれす思ひ入野の花薄
みたれそめける袖の露哉
題しらず
正三位知家
しるやいかにいはたのをのゝしの薄
思ふ心はほに出すとも
又卷第十五戀歌五同
だいしらず
藤原長經
またはよも思ひも出し花すゝき
かれにし中はほのめかすとも
又卷第十七雜歌上
だいしらず
前右衞門督基顯
今は世にたれかは我をまねくへき
なさけ有ける花薄かな

又卷第六冬歌
だいしらず　　小侍従
霜かれの淺茅色つく冬野には
をはなそ秋のかたみなりける
又卷第八雜秋歌
題しらず　　源親行
夕されは涙やあまるさをしかの
入野のを花袖そ露けき
又卷第九羇旅歌
題しらず　　大江頼重
草枕かりねの袖に露散て
尾花吹しくのへの秋風
又卷第十三戀歌三
弘長元年百首歌奉りける時初遇戀　　前大納言爲家
手枕に結ふすゝきの初尾花
かはす袖さへ露けかりけり
新後撰和歌集卷第四秋歌上
千五百番歌合に　　惟明親王
行人もとまらぬ野への花薄
まねきかねてや露こほるらん

百首歌奉し時薄　　天台座主道玄
頼ましな風のまゝなる花薄
心とまねく袂ならねは
三十首歌よませ給ける時草花露　　新院御製
夕暮はをはなか末に露おちて
なひくともなく秋風そふく
俊光朝臣住吉社にて人々すゝめ侍ける三十六首歌中に　　従二位行家
夕されは秋風吹て高圓の
をはなかうへの露そこほるゝ
弘長元年百首歌奉ける時薄　　常磐井入道前太政大臣
旅人のいる野の薄ほに出て
袖の數そふ秋風そふく
建保三年内裏歌合に　　信實朝臣
秋の野のを花にましる鹿の音は
色にや妻を戀わたるらん
又卷第五秋歌下
月歌の中に　　大藏卿重經
風わたる野へのを花の夕露に

たか手枕の涙そふらむ　大納言通方

建保三年内裏の歌合に

むさしのは月の入へき嶺もなし

を花か末にかゝる白雲

又卷第五秋歌下

文永二年九月十三夜歌合に野鹿を

夜さむなるほやの薄の秋風に　關白左大臣

そよさそ鹿も妻をこふらん

月をよめる　素暹法師

さをしかの入野の薄霜かれて

手枕さむき秋のよの月

だいしらず　鎌倉右大臣

蟲の音もほのかに成ぬ花薄

秋の末葉に霜やおくらん

又卷第六冬歌

千五百番歌合のうた　加茂季保

野へはみな霜かれにけりむら薄

ほのかに見えし里もあらはに

又卷第九離別歌

だいしらず

波かくる野島かさきに袖ぬれて　前大納言伊平

をはなかたしきねぬるよは哉

又卷第十一戀歌一

忍びたる人のもとに遣しける　謙德公

なそやかく忍へはくるし花薄

いかなるのへにほにはいつらん

又卷第十八雜歌中

百首御歌の中に野を　土御門院御歌

いなみ野や山本とほく見渡せは

を花にましる松のむら立

續拾遺和歌集卷第四秋歌上

行路薄といへる心を　藤原隆祐朝臣

袖かへる遠かた人は分過て

殘るを花に秋風そふく

建保四年百番歌合に　順德院御製

夕霧のまかきの秋の花薄

をちかたならぬ袖かとそみる

秋歌の中に　從二位家隆

秋山のすそのゝ薄うちなひき

くれ行風に鶉鳴也

しらせはや尾花かもとの草の名に
　おきゐる露の消ぬへき身を

又卷第十八雜歌下

後白川院かくれさせ給て後の秋長講堂にまいりて薄を見て　入道親王承仁

吹風に誰をかまねく花薄
　君なき宿の秋の夕暮

又卷第十九羇旅歌

おなじ道にてよめる　寂緣法師

行とまる所とてやは東路の
　を花かもとをやとゝさためん

續古今和歌集卷第四秋歌上

長久二年八月松尾社に行幸侍けるを春宮の女房車より草の花をかざしてさが野のさゝのうへにたてなべて物見侍けるを近衛司にてつかうまつりて侍けるがすゝきのくるまのもとにうちよせてよみける　中納言資綱

打まねくけしきことなる花薄
　行過かたくみゆるのへ哉

といひかけて過侍けるにとりあへず車よりいひいだし侍ける　辨乳母

行過ぬけしきともみす花薄
　まねくにとまる人しなければ

題しらず

花薄風になひきてみたるゝは
　結ひおきてし露やとくらん

中務卿親王家百首歌に　中納言

物思ふ人の袖にはあらねとも
　露けかりける花薄哉

六帖題にて歌讀侍し時すゝきを　太上天皇

糸薄こなたかなたにうゑ置て
　あたなる露の玉のをにせん

建仁の頃百首歌奉りしに　後鳥羽院宮內卿

と山なるならのはまてははけしくて
　を花か末によはる秋風

秋歌中に　中務卿親王

花薄おほかるのへはから衣
　袂ゆたかにあき風そふく

三百首歌中に

露に鳴を花かもとのきり〳〵す

堀河院に百首歌奉ける時忍戀　藤原仲實朝臣
逢事のかたの〻をの〻しの薄　ほに出ぬ戀はくるしかりけり
又卷第十二同歌二
だいをさぐりて歌讀侍けるに思草をよめる
したにのみいはてふるの〻思草　前中納言國道
なひくを花はほにいつれとも
又卷第十四同歌四
題しらず　寂蓮法師
花薄ほにたに戀ぬ我中の　霜おく野へと成にける哉
又卷第十六雜歌一
實方朝臣承香殿のまへの薄をむすびて侍ける誰
ならんとて女の讀侍ける　よみ人しらず
秋風の心も知す花薄　そらにむすへる人は誰そも
殿上人返しせんなど申ける程にまかりあひて讀
侍ける　實方朝臣
風のまに誰結ひけん花薄　うは葉の露も心おくらし

又卷第十八同歌三
内わたりのさうしにのべといふわらはにつたへ
て文などつかはしけるにのべ身まかりにける秋
讀侍ける　謙德公
白露は結ひやすると花薄　とふへきのへもみえぬ秋かな
續後撰和歌集卷第五秋歌上
薄を　權僧正範玄
花薄ほに出る秋の夕暮は　まねかぬにたに過るものかは
武士の矢田野の薄うちなひき　寂延法師
をしか妻よふ秋はきにけり
　二條太皇太后宮大貳
しら露は結ひおけ共花薄　草の袂はほころひにけり
鳥羽院御時前栽合に　大藏卿行宗
花す〻きまねかさりせはいかにして　秋の野風の方をしらまし
又卷第十一戀歌一
寄草戀　祝部成茂

又卷第六冬歌

百首歌中に　前大僧正慈圓

霜さゆる山田のくろの村薄
かる人なしにのこるころかな

だいしらず　和泉式部

野へみれはを花かもとの思草
枯行冬に成そしにける

又卷第八哀傷歌

みちのくにへまかりける野中にめにたつさまなるつかの侍けるをとはせ侍ければこれなむ中將のはかと申とこたへければ中將とはいづれの人ぞとゝひ侍ければ實方朝臣の事となん申けるに冬の事にて霜枯の薄ほの〴〵見え渡りて折節物悲しくおぼえ侍ければよめる　西行法師

朽もせぬその名ばかりをとゝめ置く
枯野のすゝき形見にそみる

又卷第十三戀歌三

だいしらず　權中納言敦忠

結ひ置し袂たにみぬ花薄
かる共かなし君しとはすは

又卷第十五戀歌五

だいしらず　右衛門督通具

とへかしなを花かもとの思ひ草
しほるゝ野への露はいかにと

又卷第十六雜歌上

九月ばかりにすゝきを崇德院に奉るとてよめる　大藏卿行宗

花すゝき秋の末葉に成ぬれは
ことそ共なく露そこほるゝ

新勅撰和歌集卷第四秋歌上

題しらず　權中納言長方

さらすとてたゝにはすきし花薄
まねかて人の心をも見よ

花薄草の袂をかりそなく
涙の露やおき所なき　參議雅經

心なき草の袂も花薄
露ほしあへぬ秋はきにけり　源具親朝臣

閑庭簿といへる心をよみ侍ける

まねけとてうゑし薄の一もとに
とはれぬ庭そしけりはてぬる　藤原信實朝臣

又卷第十一戀歌一

秋の野をすぎまかりけるに花の風になびくを
見てよめる　源親元

花薄まねかはこゝにとまりなん
　いつれの野へもつひのすみかそ

心ちれいならずおぼされけるころよみ給ける　四條中宮寛子

よそにみしを花か末の白露は
　あるかなきかの我身なりけり

千載和歌集巻第四秋歌上

草花告秋といへる心をよめる　法印靜賢

秋きぬと風も告てし山里に
　猶ほのめかす花薄哉

法輪寺にまうで侍けるにさが野の花を見てよめ
る　道命法師

花薄まねくはさかとしりなから
　とゝまる物は心なりけり

思野花と云る心をよめる　藤原伊家

今はしもほに出ぬらん東路の
　いはたのをのゝしのゝをすゝき

又巻第十一戀歌一

二條院の御時うへのをのこども百首の歌奉けり

る時よめる　源のみちよしの朝臣

我戀はをはな吹こす秋風の
　音には立し身にはしむとも

新古今和歌集巻第四秋歌上

題しらず　人麿

萬葉集巻十 さをしかのいる野の薄はつを花
　いつしかいもか手枕にせん

小倉山麓の野へのはな薄　讀人不知
　ほのかにみゆる秋の夕くれ

ほのかにも風はふかなん花薄　女御徽子女王
　むすほゝれつゝ露にぬるとも

百首歌に　式子内親王

花薄また露ふかしほに出て
　なかめしと思ふ秋の盛に

野へことに音つれわたる秋風を　八條院六條
　あたにもなひく花薄哉

又巻第五秋歌下

だいしらず　中納言家持

我宿のを花かすゑの白露の
　置し日よりそ秋風も吹

秋のさかりに成やしなまし

又卷第十七雜秋

だいしらず　　つらゆき

こてふにもにたる物哉花薄

戀しき人に見すへかりけり

後拾遺和歌集卷第四秋上

野花をもてあそぶといふ心をよみ侍ける

さらてたに心のとまる秋のゝに　　源師賢朝臣

いとゝもまねく花薄哉

又卷第五秋下

だいしらず　　源頼綱朝臣

夕日さすすその丶薄かたよりに

まねくや秋を送るなるらん

九月盡日終夜惜秋心をよめる　　藤原範永朝臣

明はては野へをまつみん花薄

まねくけしきは秋にかはらし

又卷第十一戀一

はじめて女につかはしける　　平經章朝臣

霜かれの冬野に立る村薄

ほのめかさはや思ふ心を

八月ばかりに女のもとにすゝきのほにさしてつかはしける　　祭主輔親

しの薄忍ひもあへぬ心にて

けふはほに出る秋としらなん

金葉和歌集卷第三秋歌

思野花といへることをよめる　　藤原伊家

いまはしもほに出ぬらん東路の

岩田のをのゝしのゝをすゝき

野花留人と云ることをよめる　　平忠盛朝臣

行人をまねくか野への花薄

今夜もこゝに旅ねせよとや

堀河院御時御前にておの／＼題を探りて歌つかうまつりけるにすゝきをとりてつかうまつれる

うつら鳴まのゝ入江の濱風に　　源俊頼朝臣

を花なみよる秋の夕暮

又卷第七戀部上

女のもとにつかはしける　　大江公資朝臣

しの薄うは葉にすかくさゝかにの

いかさまにせは人なひきなん

詞花和歌集卷第十雜下

秋風にあひとしあへは花薄
いつれともなくほにそ出ける

寛平御時きさいの宮の歌合に　在原棟梁

花薄そよともすれは秋風の
吹かとそ聞ひとりぬるよは
讀人しらず

だいしらず

はな薄ほに出やすき草なれは
みにならむとは頼れなくに
よみ人しらず

だいしらず

たれきけと鳴鴈金そ我宿の
を花か末を過かてにして

又卷第十戀歌二

またとしわかゝりける女に遣しける

葉をわかみほにこそ出ね花薄
したの心にむすはさらめや
源仲正

をとこのこざりければつかはしける

我かとの一むら薄かりかはん
君か手なれの駒もこぬ哉
小町があね

又卷第十一同歌三

忍びて仕侍ける女に遣しける　敦忠朝臣

あふことをいさほに出なんしの薄
しのひはつへきものならなくに

又卷第十二同歌四

いとしのびてかたらふ人のおろかなるさまに見えければ

はなすゝきほに出る事もなき物を
またき吹ぬる秋の風かな
よみ人しらず

拾遺和歌集卷第三秋

題しらず

秋かせをそむく物から花薄
行かたをなとまねく成覽
讀人しらず

だいしらず

まねくとて立もとまらぬ秋ゆゑに
あはれかたよる花薄哉

又卷第十二戀二

女につかはしける

よそにても有にしものを花薄
ほのかにみてそ人は戀しき
よみ人しらず

題しらず　勝觀法師

忍ふれは苦しかりけりしの薄

なとかほに出て戀すしもあらん

又卷第十三戀歌三

題しらず

花薄ほにいてゝこひはなををしみ
下ゆふ紐のむすほゝれつゝ　をのゝはるかせ

又卷第十五戀歌五

だいしらず

花薄我こそしたに思ひしか
ほに出て人にむすはれにけり　藤原なかひらの朝臣

又卷第十六哀傷歌

藤原のとしもとの朝臣の右近中將にてすみ侍けるさうしの身まかりて後人もすまず成にけるに秋の夜更てものよりまうできけるついでにみいれければもと有しせんさいいとしげく荒たりけるを見てはやくそこに侍ければ昔を思ひやりて讀ける　みはるのありすけ

君か植し一村薄蟲のねの
しけき野へ共なりにけるかな

又卷第二十

本ノマヽ
奧山の菅の根しのぎふる雪下

わきもこにあふ坂山のしの薄
ほには出すも戀わたる哉

後撰和歌集卷第五秋歌上

だいしらず　小野道風朝臣

ほには出ぬいかにかせまし花薄
身を秋風に捨やはてゝん

又卷第六秋歌中

人のもとにをばなのいとたかきをつかはしたりければ返事にしのぶ草をくはへて　中宮宣旨

花薄ほに出ることもなきやとは
昔しのふの草をこそみれ

返し　いせ

宿もせにうへなめつゝそ我は見る
まねくを花に人やとまると

だいしらず　讀人しらず

我宿のを花かうへの白露を
けたすて玉にぬく物にもか

又卷第七秋歌下

だいしらず　よみ人しらず

薄

又巻第七雑歌

詠草

妹所等我通路細竹爲酢寸我通靡細竹原

又巻第八秋雑歌

内舍人石川朝臣廣成歌

目頰布君之家有波奈須爲寸穗出秋乃過良久惜母

又巻第十秋雑歌

詠水田

我門爾禁田乎見者沙穗内之秋芽子爲酢寸所念鴨

秋相聞

寄花

吾妹兒爾相坂山之皮爲酢寸穗庭開不出戀渡鴨

秋芽子之花野乃爲酢寸穗庭不出吾戀度隱嬬波母

又巻第十四東歌

相聞

爾比牟路能許騰伎爾伊多禮婆波太須酒伎穗爾氐之伎美我見延奴己能許呂

可能古呂等宿受屋奈里奈牟波太須酒伎宇良野乃夜麻爾都久可多與留母

又巻第十七

高市連黑人歌一首　年月不審

賣比能野能須々吉於之奈倍布流由伎爾夜度加流家敷之可奈之久於毛倍遊　略解云於毛の下倍は保の誤也

古今和歌集巻第四秋歌上

だいしらず　平貞文

今よりは植てたに見し花薄ほに出る秋は佗しかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　ありはらのむねやな

秋の野の草の袂か花薄ほに出てまねく袖とみゆらん

又巻第十物名

をばな　讀人しらず

ありとみてたのむそかたき空蝉のよをはなしとや思なしてん

又巻第十一戀歌一

題しらず　よみ人しらず

秋の野のをはなにまじり咲花の色にやこひんあふよしをなみ

人めもる我かはあやな花薄

古今要覧稿巻第四百三十七

●草木部すゝき

和歌上

萬葉集巻第八秋雑歌

笠朝臣金村伊香山作歌

伊香山野邊爾開有芽子見者公之家有尾花之所念

日置長枝娘子歌一首

秋付者尾花我上爾置露乃應消毛吾者所念香聞

大伴家持白露歌一首

吾屋戸乃草花上之白露乎不令消而玉爾貫物爾毛我

阿倍朝臣蟲麻呂

秋野之草花我末乎押靡而來之久毛知久相流君可聞

冬雑歌

波太須珠寸尾花逆葺黒木用造有室者迄萬代

又巻第十秋雑歌

詠花

人皆者芽子乎秋云縱吾等者乎花之末乎秋跡者將言

詠鳥

秋野之草花我末鳴舌百鳥音聞濫香片聞吾妹

詠露

暮立之雨落毎一云打零者春日野之尾花之上乃白露所念

吾屋戸之麻花押靡置露爾手觸吾妹兒落巻毛將見

秋相聞

寄草

秋野尾花末生靡心妹依鴨

寄花

道邊之乎花我下之思草今更爾何物可將念

左小牡鹿之入野乃爲酢寸初尾花何時加妹之將手枕

蜓野之尾花苅副秋芽子之花乎葺核君之借廬

又巻第十六有由縁雑歌

小調王宴居取琴先詠歌

暮立之雨打零者春日野之尾花之末乃白露於母保遊

又巻第二十

八月十二日二三太夫等各提二壺酒一登二高圓野一聊述二所心一作歌

多可麻刀能乎婆奈布伎故酒秋風爾比毛等伎安氣奈多太奈良受等母

題しらず

手にとれは袖さへ匂ふ女郎花
　木の下露にちらまくもをし　　柿本人丸

又卷第九離別歌

伊勢におはしましける時をみなへしをうゑられ
たりけるに京へ歸りのぼり給ふとて

植置て花の都へ歸りなは　　蕭子内親王
　戀しかるへき女郎花かな

又卷第十二戀歌二

つれなかりける人の許にをみなへしにつけて

一夜たにねて社ゆかめ女郎花　　藤原範永朝臣
　露けきのへに袖はぬるとも

又卷第十五戀五同歌

寄女郎花戀といふ事を　　權中納言通俊

をみなへし手折る袖社匂ひぬれ
　うしろめたしと妹やとかめん

又卷第十七雜歌上

女郎花をよめる　　藤原通經

女郎花はなの下ひも打とけて
　誰とふしみの野へに咲らん

又卷第十九誹諧歌

ひえの山にかたりきてけづり花しけること侍る
にかたぎのかたにをみなへしをつくりたりける
を人々もてあそびければねたくて結びつけゝる

草も木も佛になるといふなれと　　僧都觀教
　女郎花こそうたかはれけれ

よめる　藤原元眞

嵐吹くと山のさとのをみなへし

うしろめたくも歸るけふ哉

郁芳門院の前栽合に女郎花　安藝

女郎花よるなつかしく匂ふかな

草の枕もおはすはかりに

風雅和歌集卷第五秋歌上

後宇多院大覺寺におはしましけるころ七夕七百首歌中に野女郎花を　前大納言實教

いくとせかさかの丶秋のをみなへし

つかふる道になれてみつらん

又卷第十八釋教歌

前大納言尊氏一品經歌とてすゝめ侍けるに安樂行品若入他家不與小女處女寡女等共語といふ文の心をよめる　藤原爲明朝臣

名にめて丶まよひもそする女郎花

匂ふ宿をはよきてゆかなん

新千載和歌集卷第十四戀歌四

いかでとおぼえける人のこと人につきにければをみなへしにさしてつかはしける

二葉より思ひし物を女郎花　權中納言敦忠

人のかきはにおひにける哉

新拾遺和歌集卷第四秋歌上

秋歌の中に　貫之

女郎花匂ひを袖にうつしては

あやなく人や我をとかめん

堀川院御時百首歌に　基俊

あたしの丶心もしらぬ秋風に

哀かたよるをみなへしかな

千五百番歌合のうた　二條院讚岐

女郎花よかれぬ露を置なから

あたおる風に何なひくらん

だいしらず　清原元輔

なへて唉花の中にも女郎花

おほかるのへは過うかりけり

新續古今和歌集卷第四秋歌上

新玉津嶋社三十首歌に　前大納言實名

我妹子かかたちのをの丶女郎花

思ひたはれぬ人やなからん

萬葉集

あたにのみいはれの野への女郎花　みて過かたき秋の夕くれ　よみ人知らず
うしろめたくも置る露かな

玉葉和歌集巻第四秋歌上

秋歌の中に　藤原行藤
うたてなと霧の朝けのをみなへし
花の姿を立かくすらん

後一條院御時上達部殿上人嵯峨野の花見にまかりて内に歸りまいりて侍けるに中宮の御方の臺盤所のみすに女郎花の枝をさゝれたるをみてよみ侍ける　堀川右大臣
一枝の花の色たに有物を
野へのにしきを思ひやらなん

をみなへしをよませ給うける　崇徳院御製
見し人も住あらしてし故郷に
ひとり露けきをみなへし哉

雨の降日女郎花につけて人につかはしける　中務卿具平親王
秋の雨になかめし程にをみなへし
うつろふ迄も成にけるかな

亭子院歌合にをみなへしを　よみ人しらず
白露の置るあしたの女郎花
はなにも葉にも玉そかゝれる

嵯峨野の花みにまかりてよみ侍ける　清愼公
歸なは恨もそする女郎花
こよひは野へにいさとまりなん

女郎花に露の置たるをみてよめる　中務
長き夜はいかに明して女郎花
曉おきの露けかるらん

又巻第十七雜歌四

建春門院かくれさせ給にける秋うへをかせ給ける御前のせんさいの盛なる中にをみなへしのさきこぼれたるをみて　中納言
露きゆる浮世に秋の女郎花
ことしもしらぬ花そかなしき

續後拾遺和歌集巻第四秋歌上

天暦御時前栽合に　謙德公
年をへて咲けんよりも女郎花
けふをさかりと匂ひまさなん

山里にあからさまにまかりてをみなへしをみて

昔のけふにあらぬなみたか

續後撰和歌集卷第五秋歌上

だいしらず　伊勢

秋の野の花の名たてに女郎花

かりにのみくる人に折るな

辨乳母さがのゝ花みにまかれりけるにつかはしける　陽明門院

露なから折てをかへれ女郎花

さかのゝ花も見ぬ人のため

續古今和歌集卷第四秋歌上

草花をよめる　中務卿具平親王

夕霧はほのかにみゆる女郎花

我よりさきに露や結はん

何ことを忍ふの岡のをみなへし　俊惠法師

思ひしをれて露けかるらん

本院贈太政大臣家の前栽合にをみなへしを

なひくとや人はみるらん女郎花　讀人不知

思ふ方にそ風もふきける

五百首御歌中に　後鳥羽院御歌

女郎花はなの袂に露置て

たか夕くれの契りまつらん

建長三年九月影供歌合に朝草花といふことを

白露の手枕の野の女郎花　左近中將經平

たれとかはせる今朝の名殘そ

廉義公家歌合に岸邊秋花　紀時文

行水に影を移せる女郎花

したの心を誰によすらん

又卷第八釋教歌

龜山の仙洞の持佛堂供養に法印聖憲を導師にめして女郎花の枝に菩提子の念珠をかけて布施に給はすとてつけ侍る　太上天皇

名にめてしさかのゝ秋の女郎花

これも菩提の種としらすや

續拾遺和歌集卷第四秋歌上

題しらず　よみ人しらず

いつかたに心をよせてをみなへし

秋風吹はまつなひくらん

新後撰和歌集卷第四秋歌上

秋歌の中に　入道親王道覺

露結ふ霧のまかきの女郎花

野花をみて道にとゝまるといへるこゝろをよめる

僧都範玄

落にきと語らはかたれをみなへし
今夜は花のかけにやとらん

新古今和歌集卷第四秋歌上

題しらず　小野小町

誰をかもまつちの山のをみなへし
秋と契れる人そ有らし

藤原元眞

女郎花のへの故郷思ひ出て
やとりし虫の聲や戀しき

千五百番歌合に　左近中將良平

夕されは玉散のへのをみなへし
枕さためぬ秋風そふく

又卷第八哀傷歌

廉義公の母なく成て後女郎花をみて

清愼公

女郎花みるに心はなくさまて
いとゝ昔の秋そこひしき

又卷第十六雜歌上

法性寺入道前太政大臣をみなへしを折て歌讀べきよし侍ければ

紫式部

女郎花さかりの色を見るからに
露のわきける身社しらるれ

返し　法性寺入道前攝政太政大臣

白露はわきてもをかし女郎花
心からにやいろのそむらん

新勅撰和歌集卷第四秋歌上

權中納言經定歌合し侍けるによみてつかはしける

按察使公通

女郎花しめゆひ置しかひもなく
なひきにけりな秋の野風に

題しらず　二條院讃岐

尋きて旅ねをせすは女郎花
獨やのへに露けからまし

菅家萬葉集歌　讀人不知

名にしおはゝしゐて賴まん女郎花
人の心の秋はうくとも

式部卿あつよしのみこの家に人々まうできてあそびなどし侍けるにをみなへしをかざしてよみ侍ける

三條右大臣

女郎花をる手にかゝる白露は

おもかはりせぬをみなへしかな

だいしらず　源道濟

よそにのみ見つゝはゆかし女郎花
をらん袂は露にぬるとも

金葉和歌集卷第三秋歌

草花告秋といふことをよめる　源雅兼朝臣

咲初るあしたの原の女郎花
秋をしらする妻にそ有ける

おなじこゝろをよめる　源緣法師

咲にけり口なし色のをみなへし
いはねとしるし秋のけしきは

女郎花をよめる　隆源法師

をみなへし咲るのへにそやとりぬる
花のな立になりやしぬらん

顯隆卿家の歌合し侍ける時女郎花をよめる　中納言俊忠

夕露の玉かつらして女郎花
野原の風に折やふすらん

女郎花をよめる　藤原顯輔朝臣

白露や心おくらんをみなへし
色めくのへに人かよふとて

女郎花よの間の風に折ふして
けさ白露にこゝろおかるな

鳥羽殿の前栽合に女郎花の心をよめる　攝政左大臣

あたしのゝ露吹亂る秋風に
なひきもあへぬ女郎花かな　春宮太夫公實

千載和歌集卷第四秋歌上

堀川院の御時百首歌奉ける時讀侍ける　大納言師賴

露茂き朝の原の女郎花
一枝おらんそてはぬるとも

法性寺入道前太政大臣の家にて女郎花隨風といへる心をよめる　前中納言雅兼

女郎花なひくをみれは秋風の
吹くる末もなつかしき哉

難事侍けるとき女郎花をみてよみ侍ける　前左衞門督公光

をみなへし泪に露や置そふる
手をれはいとゝ袖のしほるゝ

題しらず　藤原行家

吹風にをれふしぬれは女郎花
まかきそ花の枕なりける

又卷第十八雜歌下誹諧歌

かりにのみくる人におらるな

かりにとて我はきつれとをみなへし　紀　貫之

見るに心そ思ひつきぬる

陽成院御屏風に小鷹かりしたるところ

かりにのみ人のみゆれは女郎花

はなの袂そ露けかりける

又巻第六別

秋たびにまかりけるにいなみのにやどりて

女郎花我に宿かせいなみのゝ　よしのぶ

いなといふともこゝをすきめや

又巻第十七雑秋

三條太政大臣家にて歌人めしあつめて數多の題

よませ侍けるにきしのほとりの花といふことを

行水の岸に匂へる女郎花　源　重之

しのひに浪やおもひかくらん

房の前栽見に女どもまうできたりければ

こゝにしもなに匂ふらん女郎花　僧正遍昭

人の物いひさかにくき世に

題しらず　讀人しらず

船岡の野中に立る女郎花

わたさぬ人はあらしとぞおもふ

後拾遺和歌集巻第四秋上

人の家の水のほとりに女郎花の侍けるをよみ侍

ける　堀川右大臣

女郎花かけをうつせは心なき

水も色なる物にそ有ける

うへのをのこども前栽ほりにのべにまかりいで

たりけるにつかはしける　橘　則長

をみなへしおほかるのへにけふしもあれ

うしろめたくも思ひやる哉

題しらず　前律師慶暹

秋風にをれしとすまふ女郎花

いくたひのへにおきふしぬらん

天暦御時の御屏風にたかゞりする野に旅人のや

どれる所をよめる　清原元輔

秋の野にかりそ暮ぬる女郎花

今宵はかりは宿もかさなん

毎家有秋といふ心を　御製

宿ことにおなしのへをや移すらん

法皇伊勢が家のをみなへしをめしければ奉るをきゝて
女郎花折けん枝のふしことに　過にし君を思ひ出やせし　枇杷左大臣
返し
をみなへし折もをらすも古へを　さらに問へき物ならなくに　伊勢
又卷第七同歌下
だいしらず
秋風にちるもみち葉は女郎花　宿に折敷錦なりけり　よみ人しらず
又卷第十二戀歌四
あひしりて侍る女の人にあだ名たち侍けるにつかはしける
枝もなく人に折るゝ女郎花　ねをたに殘せ植し我ため　平まれよの朝臣
又卷第十七雜歌三
だいしらず
みや人とならまほしきを女郎花　のへより霧の立出てそくる　讀人不知

拾遺和歌集卷第三秋
題しらず
女郎花おほかる野へに花薄　いつれをさして招くなる覽　よみ人しらず
手もたゆく植しもしるく女郎花　色ゆゑ君かやとりぬる哉　小野宮太政大臣
くちなしの色をそ頼むをみなへし　花にめてつと人に語るな
女郎花おほく咲る家にまかりて　よしのぶ
女郎花匂ふあたりにむつるれは　あやなく露やこゝろ置らん
題しらず
白露の置くつまにする女郎花　あなわつらはし人な手ふれそ　よみ人しらず
嵯峨に前栽ほりにまかりて　藤原長能
日暮しにみれともあかぬ女郎花　のへにや今宵旅ねしなまし
だいしらず
秋の野の花のなたてに女郎花　よみ人しらず

　なに思ふとかまたきぬるらん
八月なかの十日ばかり雨のそぼ降ける日をみなへしほりに藤原のもろたゞをのべにいだしておそく歸りければつかはしける　左大臣
暮はては月も待へし女郎花
　あめやめてとは思はさらなん
延喜御時秋歌めしありければ奉ける
女郎花匂へる秋の武藏野は　貫之
　常よりも猶むつましきかな
人につかはしける　兼覽王
秋霧のはるゝは嬉し女郎花
　立よる人やあらんと思へは
だいしらず　よみ人しらず
女郎花草むらことにむれたつは
　誰松蟲の聲に迷そ
をみなへしひるみてましを秋のよの
　月の光は雲かくれつゝ
女郎花花の盛に秋風の
　ふく夕くれを誰にかたらん
白妙の衣かたしき女郎花　貫之
　さける野へにそ今宵ねにける
名にしおへはしひて頼まんをみなへし
　花の心の秋はうくとも　みつね
七夕ににたる物かな女郎花
　秋より外にあふときもなし　よみ人しらず
秋の野によるもやねなんをみなへし
　花のなをのみ思ひかけつゝ
女郎花色にも有かな松蟲を
　ともにやとして誰を待らん
前栽にをみなへし侍ける所にて
をみなへし匂ふ盛をみる時そ
　わか老らくは悔しかりける
すまひのかへりあるじのくれつかたをみなへしを折てあつよしのみこのかざしにさすとて
女郎花はなのなゝらぬ物ならは　三條右大臣
　何かは君かかさしにもせん
年比家のむすめにせうそこかよはし侍けるを女のためにかる〳〵しなどいひてゆるさぬあひだになん侍ける

物へまかりけるに人の家にをみなへし植たりけ
るをみてよめる
女郎花うしろめたくもみゆる哉　　兼覽王
　あれたる宿に獨たてれは
寛平御時藏人所の男共さが野に花みんとてまか
りたりける時歸るとてみな歌よみけるついでに
よめる　　平さだふん
花にあかてなにかへる覽女郎花
　おほかる野へにねなまし物を
又巻第十物名
をみなへし　　とものり
白露を玉にぬくとやさゝかにの
　花にもはにもいとをみなへし
朝露を分そほちつる花みんと
　今その山をみなへしりぬる
朱雀院の女郎花合の時にをみなへしといふ五文
字を句の頭に置てよめる　　つらゆき
小倉山みね立ならし鳴鹿の
　へにけん秋を知人そなき
又巻第十九俳諧歌

題しらず　　僧正遍昭
秋の野になまめきたてる女郎花
　あなかしかまし花もひとゝき
だいしらず　　よみ人しらず
秋くれは野へにたはるゝ女郎花
　いつれの人かつまてみるへき
後撰和歌集巻第六秋歌中
　おなじ御時の女郎花合に　　藤原興風
折からに我名は立ぬ女郎花
　いさおなしくは花々にみん
秋の野の露におかるゝ女郎花　　よみ人しらず
　拂ふ人なみぬれつゝやふる
女郎花はなの心のあたなれは
　秋にのみ社あひわたりけれ
大輔が後凉殿に侍けるに藤つぼより女郎花を折
てつかはしける　　右大臣九條
折てみる袖さへぬるゝ女郎花
　露けき物といまや知らん
返し　　大輔
萬代にかゝらん露を女郎花

右少納言大伴宿禰家持
多可麻刀能宮乃須蘇末乃努都可佐爾伊麻左家流良武
乎美奈弊之波母
右歌兵部少輔大伴宿禰家持獨憶ニ秋野ー聊述ニ拙懷ー
作之
又卷第二十
秋野爾波伊麻己曾由可米母能乃布能乎等古乎美奈能
波奈爾保比見爾
右歌兵部少輔大伴宿禰家持獨憶ニ秋野ー聊述ニ拙懷ー
作之
古今和歌集卷第四秋歌上
だいしらず　僧正遍昭
名にめてゝをれるはかりそ女郎花
われおちにきと人にかたるな
僧正遍昭がもとにならへまかりける時にをとこ
山にてをみなへしをみてよめる
女郎花うしとみつゝそ行過る　ふるのいまみち
男山にしたてりと思へは
是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣
秋の野にやとりはすへし女郎花
なほむつましみ旅ならなくに
題しらず　そのゝよしき
女郎花おほかる野へにやとりせは
あやなくあたの名をやたちなん
朱雀院の女郎花合に讀て奉ける
左のおほいまうちぎみ
女郎花秋の野風に打なひき
心ひとつを誰によすらん
秋ならて逢事かたき女郎花　藤原定方朝臣
天のかはらにおひぬ物ゆゑ
たか秋にあらぬ物ゆゑ女郎花　つらゆき
なそ色に出てまたきうつろふ
妻戀る鹿そ鳴なる女郎花　みつね
おのかすむのゝ花としらすや
女郎花吹過てくる秋風は
めには見えねとか社しるけれ
人のみることやくるしき女郎花　たゞみね
秋霧にのみ立かくるらん
獨のみなかむるよりはをみなへし
我すむ宿に植てみましを

古今要覽稿卷第四百三十六

●草木部をみなへし

和歌

萬葉集卷第七譬喩歌

寄草

姬押生澤邊之眞田葛原何時鴨絡而我衣將服

又卷第八秋雜歌

太宰諸卿大夫幷官人等宴二筑前國蘆城驛家一歌

娘部思秋芽子交蘆城野今日乎始而萬代爾將見

右作者未詳

石川朝臣老夫歌

娘部思秋芽子折禮玉桙乃道去裹跡爲乞兒

又卷第十秋雜歌

詠花

事更爾衣者不摺佳人部爲咲野之芽子爾丹穗日而將居

手取者袖幷丹覆美人部師此白露爾散卷惜

秋相聞

寄花

吾鄕爾今咲花乃女郎不堪情尙戀二家里

又第十一

寄レ物陳レ思

神南備能淺小竹原乃美妾思公之聲之知家口

又卷第十七

八月七日夜集二于守大伴宿禰家持舘一宴歌

秋田乃穗牟伎見我底利和我勢古我布佐多乎里家流乎美奈敝之香物

右守大伴宿禰家持作

乎美奈敝之左伎多流野邊乎由伎米具利吉美乎念出多母登保里伎奴

右拯大伴宿禰池主

日晚之乃奈吉奴流登吉波乎美奈敝之佐伎多流野邊乎遊吉追都見倍之

右大目秦忌寸八千嶋

八月十二日二三大夫等各提二壺酒一登二高圓野一聊述二所心一作歌

乎美奈敝之安伎波疑之努藝左乎之可能都由和氣奈加牟多加麻刀能野會

又卷第五同歌下
野草欲レ枯と云事を
初霜のむすふもまたて眞萩原　式部卿邦省親王
たかいねかてに色かはるらん

又卷第十一戀歌一
千五百番歌合に　後京極攝政前太政大臣
我戀は又しる人もしらすけの
まのゝ萩原露ももらすな

又卷第十四同歌四
百首歌奉りし時寄レ草戀　前大僧正義運
逢ことをいつとかまたん色かはる
人の心の秋のはき原

又卷第十五同歌五
だいしらず　紀貫之
秋萩の下葉はよそにみしかとも
ひとりねんとは思はさりしを

後福光園攝政家歌合に寄二萩戸一戀といふことを
物そ思ふ下葉色つく萩の戸の　頓阿法師
明るいく夜もいねかてにして

百首歌奉し時寄レ原戀　前攝政左大臣
わきもこのきぬにはすらしま萩原
うつろふ色にならすころもて

又卷第十七雜歌上
野徑萩を　源基之
秋萩の花すり衣打しほれ
行てにかゝる野への夕露

だいしらず　橘遠村
下葉まて色つく野邊の秋萩は
花にあまりて露や置らん

後小松院にて題をさぐりて五十首歌つかうまつりけるに月前露といふことを　勝定院贈太政大臣
風渡るふる枝の萩も花散て
月にそ殘る宮城のゝ露

擣衣を　紀俊豐朝臣
萩か花うつろふ比や春日野の
わか紫の衣うつらむ

萩のうは葉そ露けかりける
延文二年百首歌めされけるついでに　後光嚴院御製
秋をへて古枝にさける萩の戸の
花も昔の色やかはらぬ
野亭夕萩といへるこゝろを　從三位雅家
高圓の野邊の眞萩を便にて
夕露なから結ふかり庵
故鄕萩露を　明魏法師
里はあれてとはれし袖の色もなし
秋の野らなる萩の夕露
新玉津嶋社三十首歌に草花　從二位家尹
夕霧も立宮城野の秋萩は
木の下やみの錦なりけり
おなじ心を　權中納言雅緣
眞萩原千種の糸をくるす野に
日をへておるや錦成らん
前參議經盛家歌合に　刑部卿賴輔
秋の野は花のいろ〳〵おほけれと
萩の錦にしく物そなき
行路秋花といふ事を　修理大夫顯季
霧はれぬ花野の小萩咲にけり
行かふ人の袖匂ふまて
嘉元百首歌に　前中納言雅孝
明わたる野原の霧の絕間より
露にしほれてなひく秋萩
建長二年影供歌合に朝草花を　衣笠前內大臣
すかのねの長月の夜のあけたては
露けさまさる秋萩のはな
新玉津嶋社三十首歌に　頓阿法師
宮城野の朝露分て秋萩の
色にみたるゝ忍ふもちすり
だいしらず　中納言家持
秋風は夜ことに吹ぬ高砂の
尾上の萩のちらまくをしも
建保名所百首歌に　從三位家衡
高圓の野への秋萩散はてゝ
色なき露に嵐吹なり
建仁元年撰歌合に野月露凉　如願法師
萩原や露を秋風吹からに
袂をならすありあけのつき

宮城の丶露分衣朝たては
忘れかたみの萩か花すり　正三位通藤女
題しらず
露のぬきよはきもしらす宮城の丶
萩のにしきは秋風そ吹　藤原行輔朝臣
眞萩咲秋の花の丶すり衣
露にまかせて猶や分まし
文保三年百首歌奉ける時　前大納言爲定
咲てこそ野中の水にうつりけれ
古えの萩のもとの心は
百首歌めされし時萩をよませ給うける　御製
九重や今すむ宿の萩の戸も
いく世ふるえの色に咲らん
權大納言爲遠家にて人々三首歌よみ侍けるに
眞萩ちる秋の野風やさむからし　祝部成光
猶この暮は鹿そ鳴なる
だいしらず　太宰權帥仲光
棹鹿のしからむ萩に秋見えて
月も色なる野路の玉川
又巻第八雜秋歌

題不レ知　大江氏元
分つ丶や衣はすらん朝露に
ぬれて色そふ秋萩の花
秋の田のかりほの眞萩咲しより　前大納言善成
猶庵近く鹿そ啼なる
新續古今和歌集巻第三夏歌
延文元年六年内裏にて三首歌講せられけるつい
でに禁庭夏月　權中納言爲重
あけぬるかまた花さかぬ萩の戸の
露にも移る夏の夜の月
みな月のころ風すゞしく吹て村雨うちそ丶ぎた
るあした萩の戸のかたみすぐしがたくて
またさかぬ萩の下葉に露ちりて　後深草院辨内侍
涼しく成ぬ村雨の空
又巻第四秋歌上
だいしらず　相模
我宿の萩の下葉の氣色にて
秋は色にも出にけるかな
萩の露を御覽じてよませ給うける
秋くれは物思ふとしはなけれとも　花山院御製

嵐にさやく霜のした萩

又巻第九羇旅歌

守覺法親王家五十首歌に旅　大藏卿有家

櫻色に春立そめしたひ衣
けふ宮城のゝ萩か花すり

又巻第十二戀歌二

貫之が家の歌合に　よみ人しらず

秋萩におく白露の消かへり
人を戀しとおもふ頃かな

又巻第十八雑歌上

だいしらず　人丸

わきもこに（一云をとめら）ゆきあひのわせをかる時に
成にけらしも萩か花咲く

二品法親王道助家五十首歌に萩露

さきかくす野守か庵の篠のとも　從二位家隆
あらはにおける萩の朝露

秋歌とてよめる　法印淨辨

萩か花うつりにけりなしら露に
ぬれにし袖の色かはる迄

色かはるした葉をかけて秋萩の　平常顯
花の錦はおりかさねつゝ

秋歌とて　中務

人しれす萩のしたなる棹鹿も
ほに出る秋やねには立らん

又巻第二十同歌下

折句歌

藤原仲實朝臣のもとにうしをかりにつかはしける時萩のえだにつけて　俊頼朝臣

うらむとはしらてや鹿のしきりには
萩のはひえをしからみにする

返し　藤原仲實朝臣

うらめしと鹿をないひそ萩かえも
かるもにしつゝすくすとそみる

新後拾遺和歌集巻第四秋歌上

だいしらず　前中納言定資

棹鹿の朝立跡もあらはれて
露またらなる野への萩原

宮城野にしからむ鹿の跡なれや　從二位嚴子
本あらの小萩露もたまらす

名所百首歌奉けるに　前參議忠定

朝な〳〵みれともあぬか秋萩の
　花をは雨に誰ぬらしけむ
秋の御歌の中に　法皇御製
忘れすよ萩の戸口のあけたては
　なかめし花のいにしへの秋
だいしらず　讀人不知
鶉啼いはれの野への秋萩を
　思ふ人ともみつるけふ哉
建武二年内裏千首歌に秋植物　法印隆淵
宮城野の露わけきつる袖よりも
　心にうつる萩か花すり
文保百首歌奉りける時　法印定爲
萩の花をりてをゆかむ宮城野や
　木の下風にちらまくもをし
題しらず　人麿
秋風はすゝしく成ぬ駒なへて
　いさみにゆかん秋の花みに
春されは霞かくれにみえさりし
　秋萩さけり折てかさゝむ
我門に秋萩さけり此ねぬる　中納言家持
朝風はやし花ちりぬへし
百首歌奉りし時萩　前大納言公蔭
棹鹿のしからむ野への萩か花
　衣にすらんちらまくもをし
月前萩といへる事をよませ給うける
秋萩の露ちる花のすり衣　御製
　うつろふ月も影そ亂るゝ
伏見院に三十首歌奉ける草花露といふ事を讀侍
ける　頓阿法師
萩のうへの露となりてや雲井とふ
　鴈の涙も色にいつらん
又巻第五同歌下
だいしらず　伏見院御製
鴈金は雲井かくれに鳴てきぬ
　萩の下葉の露さむき頃
又巻第六冬歌
百首歌奉りし時寒草　等持院贈右大臣
霜ふかき籬の萩の枯葉にも
　秋のまゝなる風のおと哉
限あれは秋もかくやは閑佗し　御製

幾度かさかりみつらん宮城野の
　おなし古枝の秋萩の花
建武二年内裏にて人々題をさぐりて千首歌つか
うまつりける時秋植物　彈正尹邦省親王
露なから折へき物を宮城のゝ
　もとあらの萩に秋風そ吹
又卷第五同秋下
　題しらず　後二條院御製
秋風も夜寒に吹ぬさをしかの
　妻とふ萩の花や咲らむ
古き歌の詞にて歌よませ給ける時咲匂ふらむと
いふことを　伏見院御製
今よりや咲匂ふらん棹鹿の
　聲聞をのゝ秋萩のはな
秋御歌の中に　後伏見院御製
鹿の音も遠里をのゝ萩か花
　袖にうつしてかへる狩人
貞和二年百首歌奉りし時秋の歌
秋萩の花ちる風のさむけきに　前大納言公蔭
　むへこそ鹿も妻戀らしも

だいしらず　中務卿具平親王
鹿のすむ尾上の萩の下葉より
　枯行野へも哀とそみる
住吉の遠里をのゝ眞萩もて　人丸
　すれる衣のかさり過行
又卷第六冬歌
　百首歌奉し時寒草　權大納言實俊
吹風の音のみ秋のかたみにて
　霜枯はつる庭の萩原
又卷第十九哀傷歌
いときなき子どもにおくれて歎ける頃世中を何
にたとへんと云古ことを上におきてあまた讀侍
ける歌の中に　源順
世中を何にたとへんあかねさす
　朝日待まの萩の上の露
新拾遺和歌集卷第四秋歌上
　伏見院三十首歌に　從二位爲子
おきあへぬ朝けの露に開初て
　こ萩か末は花そ色こき
百首御歌に　月花門院

霜の朽葉そ一葉殘れる

又卷第九旅歌

旅歌の中に　正三位經家

ゆきすりの衣にうつれ萩か花
旅のしるしと人にかたらん

だいしらず　人麿

萬葉集卷三高市連黑人之作

いさやこらやまとへはやくしらすけの
まのゝ萩原手をりてゆかん

又卷第十三四戀歌

題しらず　永福門院

はれすのみ心に物を思ふまに
萩の花咲く秋もきにけり

人にたまはせける　光孝天皇御製

秋なれは萩の野もせに置露の
ひるまにさへも戀しきやなそ

戀の歌の中に　貫之

萩の葉の色つく秋をいたつらに
あまたかそへて過しつる哉

我宿の秋の萩咲夕かけに　讀人不知
今もみてしか君かすかたを

又卷第十四五戀歌

小辨かもとにまかりたりけるに人あるけしきなれば歸りてつかはしける　藤原道信朝臣

露にたに心おかるな夏萩の
下葉の色よそれならす共

又卷第十五上雜歌

だいしらず　只敏法師

しられすも夕の露の置そふや
庭の小萩か末にかたふく

新千載和歌集卷第四上秋歌

龜山殿にて山家草花といへることを　後嵯峨院御製

庵しめて今こそ庭と成にけれ
山のをのへの秋萩のはな

百首歌奉る時萩　權大納言實俊

露わくる袖にそうつるむらさきの
色こき野への萩か花すり

嘉元百首歌奉ける時おなじ心を　贈從三位爲子

秋風に亂れにけりなみちのくの
忍ふにはあらぬ萩か花すり

元弘三年立后四尺屛風に　前大納言實教

光まちとる萩のうは露
顯昭久しくをとづれざりければ申つかはしける
秋くれは萩のふるえも咲物を　前左兵衛督惟方
人こそかはれもとのこゝろは
返し　法橋顯昭
我心またかはらすよ初萩の
下葉にすかる露はかりたに
草花露深といふ事を　俊頼朝臣
あたし野の萩の末こす秋風に
こほるゝ露や玉川の水
萩をよめる　安嘉門院四條
さこそわれ萩のふるえの秋ならめ
もとの心を人のとへかし
萩の御歌に　永福院門
眞萩ちる庭の秋風身にしみて
夕日の影そかへに消行
風ふけは枝もとをらすおく露の　前中納言定家
ちるさへをしき秋萩の花
乾元二年伏見院五十番歌合に秋露を
しほれふす枝吹かへす秋風に
とまらすおつる萩のうは露
題不レ知　藤原公直朝臣母
一しきり雨はすきぬる庭の面に
散てうつろふ萩か花すり
秋ふかみ花ちる萩はもと過て　従三位盛親
殘末葉の色そさひしき
だいしらず　つらゆき
秋萩のみたるゝ玉は啼鹿の
聲よりおつる泪なりけり
又卷第六同歌中
正治二年後鳥羽院に奉ける百首歌の中に
萩のうへの鴈の涙のおく露は　式子内親王
こほりにけりな月にむすひて
又卷第七同歌下
秋霜をよませ給ける　後伏見院御製
夕霜のふる枝の萩の下葉より
枯行あきの色はみえけり
又卷第八秋
百首歌奉りし時　徽安門院一條
秋みしはそれと計の萩かえに

山階入道左大臣家の十首歌に野草花と云ことを
分過る人の袖まて宮木の丶
　萩の錦はうつろひにけり　三條入道内大臣
だいしらず
ふみ分て朝行みれは小萩原
　鹿の立野の錦也けり　瞻西上人
萩か花移も行か秋風の
　身にしむ暮にをしか鳴なり　藤原冬隆朝臣
宮城野の萩の下葉のうつろふを
　おのか秋とや鹿の鳴らん　皇嘉門院別當
題しらず
秋萩の花咲ぬらし我せこか
　衣かりかね今き鳴なり　前大納言爲氏
弘安百首歌奉ける時
秋風に夜渡る鴈のねにたて丶
　泪うつろふ庭の萩原　二品法親王性助
又卷第六冬歌
寒草風と云事を
宮城野の木の下露や氷るらん
　萩のふる枝に結ふあさ霜　平定宣

又卷第十一戀歌一
天暦の御門にたてまつらせ給ける
秋の野の萩のしたねに啼蟲の
　忍ひかねては色に出ぬへし　女御徽子女王
又卷第十五雜歌上
文永八年七月七日白河殿にて人々題をさぐりて
歌つかうまつりける次に
墨染の袖にも猶や移さまし
　古えにさける萩の花すり　後嵯峨院御製
題不レ知
我萩は盛すくるをいたつらに
　かさしにさして歸なんとや　よみ人しらず
又卷第十六雜歌中
うへのをのこども三首歌つかうまつりしついで
に朝草花
露よりも猶ことしけし萩のとの
　明れはいそく朝まつりこと　御製
風雅和歌集卷第五秋歌上
初秋露を
秋きてはけふそ雲間に三か月の　權大納言公蔭

月もうつろふ色やかふらん
百首歌の奉し時　左大臣
下葉ちる小野の萩原吹風に
床あれぬとや鶉なくらん
又巻第十四戀歌四
物申ける人に又かよふ人あると聞てつかはしけ
る　九條右大臣
秋萩のしたにかよひし鹿のねも
今はかひなく成やしぬらん
又巻第十七雜歌中
述懷の心を　前僧正公朝
かくしても有へき身とはしらすけの
まの丶萩原露もおもはす
續後拾遺和歌集巻第四秋歌上
うへのをのこども三首歌つかうまつりし時朝草
花　權中納言實任
色ことに咲匂ふらし朝露の
玉しく庭の秋はきのはな
康保三年八月十五夜內裏前栽合に
いつも咲花とはみれと白露の　皇太后宮大夫博雅

おきてかひあるけふにも有哉
だいしらず　爲道朝臣
よしさらはおつともをらん枝なから
見てのみあかぬ萩の下つゆ
色かはる萩の下葉の下にのみ　三條右大臣實
秋うき物と露やおくらん
正治百首歌奉ける時　正三位季經
宮城野の小萩を分て行水や
木の下露の流成らん
うへのをのこども三首歌つかうまつりし時朝草
花を　民部卿爲藤
高圓の野への秋萩散らぬまに
朝置露は消すもあらなん
秋の歌の中に　素暹法師
露深き庭の小萩のちらぬまに
とへかし人の袖はぬるとも
をる袖も色そ移ろふ白露の　前左大臣
結ふ籬の秋萩のはな
けふこすは悔しからまし宮木の丶　讀人不知
本あらの小萩花そ移らふ

朝な〳〵おくと見しまに白菅の　萬秋門院
まの〻萩原露そうつろふ
野萩を　藤原爲定朝臣
袖にこそみたれそめけれ春日野の
若むらさきの萩の花すり
百首歌めされしついでに　法皇御製
高圓の野への秋風吹たひに
袂にうつすはきか花すり
名所百首歌奉ける時　僧正行意
高圓の野ちの秋萩咲にけり
旅行人の袖匂ふらし
だいしらず　大納言旅人
さしすきのくるすの小野の萩の花
ちらむ時にし行て手むけん
思ふとちいさ見に行む宮城野の　後徳大寺左大臣
萩か花ちる秋の夕暮
秋萩のしたにかくれて啼鹿の　壬生忠岑
泪や花の色を染らむ
永承五年祐子内親王家の歌合に　相模
露結ふはきの下葉やみたるらん

秋の野原に男鹿鳴なり
鹿をよめる　小辨
さをしかの妻戀まさる聲すなり
まの〻萩原盛すくらし
百首歌奉し時　前關白左大臣押小路
紫のゆかりの色を尋てや
萩咲野へに鹿の啼らむ
男鹿なく萩の錦のから衣　忠房親王
きつ〻なれにし妻やこふらん
弘安百首歌めしけるついでに　龜山院御製
散にけり鹿啼野への小萩原
下葉の色も紅葉あへぬに
初鴈を　從二位行家
はきの上の露はいつより置つらん
今は雲井の雁そ鳴なる
鴈啼て萩の下葉の色付は　蓮生法師
我袖よりやならひ初けむ
又卷第五同歌下
月の歌の中に　皇后宮
秋萩の花野の露にかけとめて

獨おきゐてこふる夜そおほき
久しくまゐらざりける人に　光孝天皇御製
久しくも成にける哉秋萩の
ふるえの花も散返るまて
又卷第十四雜歌一
御讓位の日おまへの萩のわつかに咲そめたるを
をらせ給て大納言三位里に侍けるにつかはさせ
給ける　院御製
咲やらぬ籬の萩の露をこさて
我そうつろふもゝしきの秋
だいしらず　藤原重政
いたつらに移りも行かわきこか
ころも手すらん秋萩の花
又卷第十五同歌二
春日社に奉ける百首歌の中に野を
春日野は子日別れの春の跡　皇太后宮大夫俊成
都のさかは秋はきのとき
續千載和歌集卷第四秋歌上
夕暮かたにちいさきこにすゞむしを入て紫のう
すやうにつゝみて萩の花にさしてさるべき所の
名のりをせさせて齋院にさしおかすとてそのつ
つみがみに書付たりける　よみ人しらず
しめのうちの花の匂ひを鈴虫の
おとにのみやは聞ふるすへき
返し　選子內親王
いろ〳〵の花はさかりに匂ふとも
野原の風の音にのみきけ
題しらず　前左兵衛敦定
我宿の庭の秋萩咲にけり
朝置露の色かはるまて
高圓の萩さきぬらし宮人の　邦首親王
袖つき衣露そうつろふ
色ふかくうつりにけりなかり人の　從三位氏久
ま袖にわくる萩の朝露
建永元年和歌所三首歌に朝露草花
我袖を今朝もほしあへす飛鳥川　從二位家隆
ゆきゝの岡の萩のしら露
だいしらず　讀人不知
武藏野は猶行末も秋花の
花すり衣限しられす

露霜さむしさかり過行
我をかの秋萩の花風をいたみ　大納言旅人
ちるへくなりぬみん人も哉
千五百番歌合に　從二位家隆
秋風に本あらの小萩露落て
山陰さむみ鹿そ鳴なる
題しらず　貫　之
山遠き宿ならなくに秋萩を
しからむ鹿のなきもこぬ哉
我宿の秋はきの花さく時そ　躬　恒
尾上に鹿の聲高くなく
雁もきぬ萩も散ぬとさを鹿の　よみ人しらず
鳴なる聲はうらふれにけり
加茂社へ奉ける百首歌の中に鹿を
嵐吹籬の萩に鹿啼て　皇太后宮大夫俊成
さひしからぬは秋の山さと
だいしらず　人　麿
草深みきり〳〵すいたく啼宿の
萩見に君はいつかきまさん
又卷第五秋歌下

だいしらず　生阿法師
山本のすそ野の小萩ちりぬれと
錦を殘す峯のもみちは
又卷第六冬歌　土御門院御製
名所御歌の中に
宮城野や枯葉たになき萩かえに
をれぬ計も積るしら雪
又卷第九戀歌一
題しらず　讀人不レ知
秋萩も花野のすゝきほには出す
我戀わたるかくれつまはも
又卷第十二同歌四　山口女王
中納言家持につかはしける
秋萩に置たる露の風吹て
おつる泪をとゝめかねつも
冷泉院春宮と申ける時歌めしける中に　重　之
鳴鹿の聲きく時に秋萩の
下葉こかれて物をこそ思へ
だいしらず　人　まろ
秋萩をちらす時雨のふるころは

數々に月の光もうつりけり　入道前太政大臣
有明の庭のつゆの玉萩

露おもる小萩か末はなひき伏て　前大納言爲兼
吹かへす風に花そ色そふ

寶治百首歌めされける時萩露を

白露もこほれて匂ふ高圓の　後嵯峨院御製
野への秋萩今さかりなり

少女子か挿頭の萩の花のえに　前大納言爲家
玉をかされる秋のしら露

秋萩の花咲しより宮城野の　太宰權帥爲經
木の下露のおかぬ日そなき

おなじ心を　入道前太政大臣

ま萩原露にうつろふ月の色も
花になりゆく明ほのゝ庭

遠郷萩と云事を　皇太后宮大夫俊成

此里の眞萩にすれる衣手を
ほさて都の人にみせはや

萬葉集の詞にて二百首歌讀侍けるに衣にすらむ

秋萩のさくや花野の露わけて　從二位隆博
衣にすらん人なとかめそ

風後草花といふ事をよませ給うける　新院御製

夜すからの野分の風の跡みれは
末ふす萩に花そ稀なる

しをりつる風は籬にしつまりて　永福門院
小萩かうへに雨そゝくなり

守覺法親王家五十首歌中に　前中納言定家

里はあれて時そともなき庭の面も
本あらの小萩秋はみえけり

だいしらず　よみ人しらず

眞葛原なひく秋風吹ことに
あたのおほ野の萩の花ちる

秋風は日ことにふきぬ高圓の
野への秋萩ちらまくをしも

萩を　基俊

さをしかの今朝うらふれて鳴なへに
野原の小萩花ちりぬへし

だいしらず　笠金村

たかまとの野への秋萩いたつらに
ちりかすくらんみる人なしに

妻こひに鹿なく山の秋萩は　高圓廣世

古今要覽稿卷第四百三十五

●草木部 萩

和歌下

玉葉和歌集卷第四 秋歌上

だいしらず　寂蓮法師
秋はきぬとはかりこそはなかめつれ
まかきの蔦に萩の下露

秋歌の中に　前大僧正道玄
袖たれていさみにゆかんから衣
すその丶眞萩ほころひぬらし

萩をよみ侍ける　山階入道前左大臣
唐衣つまとふ鹿のなく時は
すその丶萩の花も咲けり

なかめ盡す日數や秋に移りぬる　從一位敎良女
小萩か末そ花になりゆく

咲やらぬ末葉の花は稀にみえて　章義門院
夕露しけき庭の萩原

題しらず　中納言家持
高圓の野への秋萩此ころの
曉露に咲にけるかも

屛風繪に花見る女車ありわらはの立よりて
萩花をる所　紫式部
さをしかのしかならはせる萩なれや
立よるからにおのれをれふす

嘉元內裏百首歌奉けるに萩露　關白前太政大臣
ちれはかつ風の跡よりおきかへて
おつるともなき萩の下つゆ

草花を　前參議爲相
植さりし今一もともくやしきは
花咲のちの庭の萩原

秋歌の中に　二品法親王守光
心をは色と夢とにわけとめつ
萩に鹿なく宮城野の原

三十首歌人々によませさせ給し時草花露を
なひきかへる花の末より露散て　院御製
萩の葉白き庭の秋風

みて

萩か花おなし匂ひに咲にけり　大藏卿行家

　うかりし秋の露もさなから

返し　よみ人しらず

見るたひに露けさまさる萩の花

　をりしりかほになに匂ふらん

庭のま萩の花そしほるゝ　民部卿資宣

だいしらず

此秋も猶たちなれて萩の戸の

花こそ老のかさし也けれ　平親清女

故郷の庭の秋萩今よりや

下葉の露も色かはるらむ　式部卿久明親王

鳴鹿の泪をそへて小萩原

花にもいとゝ露そあまれる　中務卿宗尊親王

秋歌の中に

小萩原夜さむの露のおきもせす

ねもせて鹿や妻を戀らん

又卷第五同歌下

中務卿宗尊親王家歌合に　前參議能清

露分る野原の萩のすり衣

かさねて月の影そうつらふ

文永七年八月十五夜五首歌めされしついでに野

月をよませ給ふける　法皇御製

見る儘に心そうつる秋萩の

花野の露にやとる月影

又卷第六冬歌

題しらず　今上御製

萩か花散にしその丶冬枯に

霜のふる枝の色そさひしき

又卷第十一戀歌一

住吉の社によみて奉りし百首歌の中に

皇太后宮大夫俊成

秋の野の萩のしけみにふす鹿の

ふかくも人に忍ふ頃かな

又卷第十五同歌五

だいしらず　行念法師

移り行心の色の秋そとも

いさしらすけのまの丶萩原

又卷第十七雜歌上

題しらず　惟宗忠景

人そうきもとの心はかはれとも

ふる枝の萩は今も咲なり

何にわか花の泪のかゝる覽　權中納言公雄

ふるえの萩も露そこほるゝ

又卷第十九同歌下

郁芳門院かくれさせ給て又の年の秋御前の萩を

野鹿といへる心を　從三位忠兼
みやきのゝ本あらの小萩今よりや
移ろふ色に鹿のなく覽
入道二品親王家に五十首歌よみける時
色替る小萩かもとは露散て　春宮大夫實兼
秋の野風に小鹿なく也
風前鹿といふことを　津守經國
片岡の裙野のくれに鹿鳴て
小萩いろつく秋風そふく
秋の歌の中に　蓮生法師
秋萩の咲て散ぬる夕露に
猶たちぬるゝ鹿そ鳴なる
つま戀るしかの泪や秋萩に　基俊
こほるゝほとに置る白露
又卷第五下同歌
野亭擣衣といふことを　按察使高定
秋花の移ろふ野へのかり庵に
誰いねかてのか衣うつらん
光明峯寺入道前攝政家秋三十首歌に
あかすみし花の盛は早過て　從二位行家
下葉かれゆく庭の秋萩
又卷第八雜秋歌
題しらず　よみ人しらず
夕されは玉ぬく野への露なから
風にかつちる秋萩の花
又卷第十四戀歌四
戀の歌の中に　前攝政左大臣
うかりける人の心の秋風に
萩の下葉の色もうらめし
新後撰和歌集卷第四秋歌上
建長三年九月十三日夜十首歌合に朝草花
朝またき野原しの原分きつる　冷泉太政大臣
我衣手のはきか花すり
萩を　仁和寺二品親王守覺
分ゆかはたか袂にも移るらむ
我しめしのゝ萩か花すり
百首歌よませ給ける時おなじ心を
いとゝ又おりてそ増る秋萩の　法皇御製
花のにしきの露のたてぬき
立こむる霧のまかきの朝あけに　權大納言公顯

秋歌とてよめる　　平　兼盛
月影に鹿の音聞ゆ高砂の
　尾上の萩の花や散らむ
秋歌中に　　大宮院權中納言
秋きぬと雲ゐの鴈の聲す也
　小萩かもとや露けかるらん
だいしらず　　皇大后宮大夫俊成女
うら枯て下葉色つく秋萩の
　露ちる風に鶉なくなり
又卷第十一戀歌一
題しらず　　右衞門督兼祐
人しれす思ふ心は秋萩の
　下葉の色にいてぬへきかな
又卷第十四同歌四
戀歌の中に　　在原元方
秋萩の下葉に人はあらね共
　心ははやくうつろひにけり
又卷第十七雜歌上
だいしらず　　權大納言公實
枝折して行人もかな秋萩に
　花の亂れて道もしられす　　正三位知家
日吉に奉ける歌合に
思ふより露そとまらぬ小萩原
　みさらん後の秋の夕風
續拾遺和歌集卷第四秋歌上
建長二年八月十五夜鳥羽殿歌合に野草花
萩か花誰にかみせん鶉なく　　前内大臣師
　いはれの野邊の秋の夕くれ
萩露といふことを　　權中納言公守
さらぬたに心置るゝ萩か枝に
　露もあたなる秋の夕風
題しらず　　土御門院御製
萩か花うつろふ庭の秋風に
　下葉もまたて露は散つゝ
野花移レ庭といふことを　　藤原範永朝臣
心有て露や置らん野へよりも
　匂ひそ增るあき萩の花
萩をよませ給ふける　　太上天皇
宮城野の木の下露も色みえて
　移そまさる秋萩の花

露しも置て散にけらしも

題しらず　俊惠法師

鶉なく裙野の小萩うら枯て
峯の正木そ色付にける

又卷第十六雜歌上

萩を　菅贈太政大臣

まとろますねをのみそ鳴萩の花
色めく秋は過にし物を

續古今和歌集卷第四秋歌上

光明峰寺入道前攝政家秋三十首に

關白前左大臣

いとはやも咲匂ふ覽をやまたの
かりほの宿の秋萩の花

俊頼朝臣

秋萩の露に月のやどれるを
秋萩の下葉に月のやとらすは
明てや露の數をしらまし

正治百首歌に　式子内親王

かり衣亂にけりな梓弓
ひくまの野邊の萩の朝露

萩を　大貳三位

消るたにをしけに見ゆる秋萩の
露吹おとす木枯の風

寶治二年百首歌に萩露　鷹司院按察

とへかしな庭の秋萩露けさの
是より增る宿はあらしを

十首歌奉りける時　前左大臣

ひとりぬる床はよさむの秋風に
下葉色つく庭の萩原

題しらず　人丸

萩の花散はをしけん秋の雨
しはしなふりそ色のつく迄

又卷第五同歌下

文永二年九月十三夜歌合に野鹿を

中納言爲氏

色替る野原の小萩たか秋に
あらぬ物ゆへ鹿の鳴らん

鹿をよめる　貫之

秋萩に亂るゝ露は鳴鹿の
聲より落るなみた也けり

建保四年百番歌合に萩を　順德院御歌

宮城野にしからむ萩や散ぬらん
あらはれてなく棹鹿の聲

又巻第十六雜歌一
だいしらず
鴈金の聲せぬ野へをみてし哉　心と萩の花はちるやと　源　季廣

續後撰和歌集巻第五秋歌上
鳥羽殿八月十五夜の歌合に野草花
置露も哀いかによ春日野に　殘る古枝のあき萩の花　前太政大臣
九月十三夜十首歌合に朝草花　太上天皇
忘れすよ朝きよめする殿守の　袖に移りし秋萩の花
露乍見せはや人に朝な〳〵　うつらふ庭の秋萩の花　土御門院小宰相
題しらず　權大納言忠信
故郷の萩の下葉も色付ぬ　露のみ深き秋のうらみに
み山にはをしか鳴なり裙野なる　本あらの小萩花やさくらん　源家長朝臣
久安百首歌に　藤原實清朝臣
妻こふる泪也けりさを鹿の　しからむ萩に置る白露
建保二年秋歌奉けるに　從二位家隆
あら鷹のはつくり衣露分けて　野原の萩の色そ移ろふ
秋歌中に　前内大臣家
鶉なく小野の秋萩打なひき　玉ぬく露の置ぬ日はなし
露ふかき秋の野原のかり衣　ぬれてそ染る萩か花すり　藤原隆祐朝臣
堀川院百首歌奉ける時鹿　基俊
朝露に移ろひぬへし棹鹿の　むねわけにする秋の萩はら
鹿歌とて　鎌倉右大臣
朝な〳〵露に折ふす秋萩の　はなふみしたき鹿そ鳴なる
又巻第七同歌下
秋歌の中に　よみ人しらず
秋萩の枝もとを〻に霜置て　寒き時にも成にけるかな
萬葉集巻十
秋されは妹にみせんと植し萩　人丸

へたてこし宿のあし垣荒果て
おなし庭なる秋萩の花

題しらず　よみ人しらず
白露のおりいたす萩の下紅葉
衣にうつる秋はきにけり

萬葉集巻十
此頃の秋風さむみ萩の花
ちらす白露置にけらしも

同巻八
あすか川ゆきゝの岡の秋萩は
けふふる雨に散かすきなん

棹鹿の聲聞ゆなり宮城野の　祐子内親王家小辨
本あらの小萩花さかりかも

白川院にて野草露濕といへる心ををのこどもつ
かうまつりけるに
かり衣萩の花すり露ふかし　大藏卿行宗
移らふ色にそほち行かな

家に秋の歌よませ侍けるに　鎌倉右大臣
道のへのをのゝ夕霧立かへり
見て社ゆかめ秋萩の花
故郷のもとあらのこ萩いたつらに
見る人なしに咲か散らん

白すけのまのゝ萩原咲しより　藤原基綱
朝たつ鹿の鳴ぬ日はなし

雲居寺瞻西上人歌合し侍けるに　權中納言師時
朝またき手折てをみん萩の花
上葉の露のこほれもそする

又巻第五秋歌下
題しらず　中納言家持
秋萩の移らふをしと鳴鹿の
聲きく山は紅葉しにけり

又巻第八羇旅歌
旅の心をよめる　眞昭法師
月の色も移りにけりな旅衣
すそのゝ萩の花のゆふ露

建保二年内裡歌合秋歌　前内大臣
くれは又わかやとりかは旅人の
かちのゝ原の萩のした露

又巻第十四戀歌四
秋戀といふ心をよみ侍ける　入道前太政大臣
萩の上の鴈の泪をかこつとも
戀に色こきそてやみゆ覧

又巻第八哀傷歌

従一位源師子かゝれ侍て宇治より新少將かもと

につかはしける　知足院入道前關白太政大臣

袖ぬらす萩の上葉の露はかり

昔忘れぬむしの音そする

又巻第十一戀歌一

題しらず　中納言家持按萬葉集有二大伴像見一

萬葉集巻八
秋萩の枝もとをゝに置露の

今朝きえぬ共色に出めや

秋風に亂て物はおもへとも　藤原高光

萩の下葉の露はかはらす

又巻第十四同歌四

題しらず　藤原保季朝臣

形見とてほのふみ分し跡もなし

こしは昔の庭のはきはら

戀歌とてよみ侍ける　前大僧正慈圓

我戀は庭のむら萩うら枯て

人をも身をも秋のゆふ暮

又巻第十五同歌五

藤原惟成につかはしける　よみ人しらず

打はへていやはねらるゝ宮城野の

小萩か下葉色に出しより

返し　惟成

萩のはや露のけしきもうちつけに

本よりかはる心ある物を

題しらず　相模

色替る萩の下葉をみても先

人の心のあきそしらるゝ

又巻第十六雜歌上

題しらず　祝部允仲

白露は置にけらしな宮城野の

本あらの小萩末たはむ迄

又巻第十八同歌下

野分したるあしたにおさなき人をだにとはざり

ける人に　赤染衛門

あらく吹風はいかにと宮城野の

小萩かうへを人のとへかし

新勅撰和歌集巻第四秋歌上

うへのをのことも隣庭萩と云心をつかうまつり

けるに

鹿聲兩方といふ心を　覺延法師
宮城野の小萩か原を行程は
　鹿の音をさへ分て聞かな
又卷第十八雜歌下俳諧歌
萩の露の玉とみゆるとてをりけれども露もなか
りければ讀る　藤原爲頼朝臣
朝露を日たけてみれは跡もなし
　萩の上葉に物やとはまし
新古今和歌集卷第四秋歌上
堀河院御時百首歌中に萩をよみ侍ける
川水に鹿のしからみかけてけり　前中納言匡房
　浮て流れぬ秋萩のはな
だいしらず　從三位頼政
かり衣われとはすらし露しけき
　野原の萩の花にまかせて
秋萩ををらては過し月草の　權僧正永緣
　花すり衣露にぬるとも
守覺法親王五十首歌よませ侍ける
萩か花ま袖に懸て高圓の　顯昭法師
　をのへの宮にひれふるやたれ

題しらず　祐子內親王家紀伊
置露もしつ心なく秋風に
　みたれて咲るまの丶はき原
萬葉集卷十
秋萩の咲敷野への夕露に　人麿
　ぬれつ丶きませ夜は更ぬとも
同卷八
さをしかの朝たつをの丶秋萩に　中納言家持
　玉とみるまて置るしら露
和歌所歌合に朝草花と云事を　左衛門督通光
明ぬとて野へより山に入鹿の
　跡吹送るはきのしたかせ
だいしらず　法性寺入道前關白太政大臣
風吹は玉ちる萩の下露に
　はかなくやとる野への月かな
五十首歌奉りし時月前草花　攝政太政大臣
故鄕の本あらのこ萩咲しより
　よな〳〵庭の月そ移らふ
又卷第五同歌下
家に歌合し侍けるに鹿をよめる
終夜つまとふ鹿の鳴なへに　權中納言俊忠
　小萩か原の露そこほる丶

萩をよめる　太宰大貳長實
しらすけのまの丶萩原露なから
　折つる袖そ人なとかめそ
詞花和歌集巻第三秋部
　七月七日式部大輔資業がもとにてよめる　源　元任
萩のはにすかく糸をも笹蟹は
　七夕にとや今朝はひくらん
　だいしらず　藤原伊家
秋萩を草の枕に結ふ夜は
　近くも鹿の聲をきく哉
又巻第十雜下
　世の中さわかしく聞えける頃よめる
朝な〳〵鹿のしからむ萩のえの　僧基法師
　末葉の露の有かたのよや
千載和歌集巻第三夏歌
　大宮の前太政大臣の家にて夏月如秋といへる心をよめる　藤原敦仲
小萩原また花咲ぬ宮城野の
　鹿や今宵の月になくらん
草花先秋といへる心をよめる
夏衣すその丶原を分行は　顯昭法師
　おりたかへたる萩かはなすり
又巻第四秋歌上
　題しらず　和泉式部
人もかなみせもきかせも萩の花
　咲夕かけの日くらしの聲
秋山の麓をとむるうす霧は　藤原伊家
　裙野の萩のまかき也けり
宮城野の萩や男鹿の妻ならん　藤原もと丶し
　花咲しより聲の色なる
心をは千草の色に染れとも　長覺法師
　袖に移るは萩か花すり
　權中納言俊忠かつらの家にて水上月といへるこ丶ろを讀侍ける
あすもこん野路の玉川萩こえて　源俊頼朝臣
　色なる波に月宿りけり
又巻第五秋歌下
　承暦二年内裏の歌合によめる　藤原正家朝臣
夕されはをの丶萩原吹風に
　淋しくも有かしかの鳴なる

置露にたはむ枝たに有物を　　橘　則長
いかてか折ん宿の秋萩

題しらず　　藤原通宗朝臣
秋風に下葉や寒く成ぬらん
こ萩か原に鶉なく也

草むらの露をよみ侍ける　　藤原範永朝臣
今朝きつる野原の露に我ぬれぬ
移りやしぬる萩か花すり

世をそむきてのちいはれ野といふ所をすぎ侍て
よめる　　素意法師
いはれのゝ萩の朝露分行は
戀せし袖の心地こそすれ

寛和元年八月七日内裏歌合に讀侍ける
いかにして玉にも貫ん夕されは　　藤原爲善朝臣
萩の葉分にむすふ白露

又卷第五秋下
たかゝりをよめる　　律師長濟
萩原も霜枯にけりみかりのみ
あさるきゝすのかくれなきまて

又卷第十哀傷歌
後冷泉院くらゐにつかせ給ひければさとにまか
りゐて侍りて又のとしの秋東三條のつぼねの前
にうゑて侍けるはぎを人の折てもてきたりけれ
ば　　麗景殿前女御
こそよりも色こそこけれ萩の花
なみたの雨のかゝる秋には

又卷第十四戀四
露おきたる萩にさして女のもとにつかはしける
庭の面の萩の上にてしりぬらん　　源　道濟
物思ふ人の夜はのたもとは

又卷第十六雜二
平行親くら人にて侍けるに忍びて人のもとにか
よひながらあらがひけるをみあらはして
秋霧は立かくせとも萩原に　　兵衞内侍
鹿ふしけりとけさみつるかな

金葉和歌集卷第三秋歌
太皇太后宮の扇合に人にかはりてはぎの心をよ
める　　僧正行尊
小萩原匂ふ盛は白露も
いろ〳〵にこそ見へ渡りけれ

後拾遺和歌集卷第四秋上

○萩盛待ㇾ鹿といふこゝろを　御製

かひもなき心地こそすれ小男鹿の
立聲もせぬ萩のにしきは

山里に鹿を聞てよめる　大中臣能宣朝臣

秋萩の咲にしもなと鹿の鳴
うつらふ花はおのか妻かも

土御門右大臣家歌合に讀侍ける　源爲善朝臣

秋萩をしからみふする鹿の音を
ねたき物から妻そ聞つる

だいしらず　安法法師

離なる萩の下葉の色をみて
思やりつゝしかそ鳴なる

宮城野に妻とふ鹿そさけふなる　藤原長能
本あらの萩に露や寒けき

殘なき命ををしと思ふかな　天台座主源心
宿の秋萩ちりはつるまで

物おもふ事有ける頃はきを見てよめる　伊勢大輔

起明しみつゝなかむる萩の上の
露ふきみたる秋の夜の風

みなとゝといふ所をすぐとてよめる　能因法師

思ふことなけれとぬれぬ我袖は
うたゝある野への萩の露かな

萩のねたるに露の置たるを人よみ侍けるによめる　新左衞門

また宵にねたる萩哉おなしえに
頓て置ぬる露も社あれ

おなじこゝろをよみ侍ける　中納言女王

人しれす物をや思ふ秋萩の
ねたるかほにて露そこほるゝ

八月つこもりに萩の枝につけて人のもとにつかはしける　和泉式部

限有ん中ははかなく成ぬ共
露けき萩の上をたにとへ

はらからなる人の家に住侍けるころ萩のおかしう咲て侍けるをいへあるじはほかに侍てをとせざりければいひつかはしける　筑前乳母

白露も心置てや思ふ覽
ぬしも尋ぬやとの秋はき

家の萩を人のこひ侍ければよめる

小男鹿のしからみふする秋萩は
　下葉やうへに成返るらん
秋萩はまつ梢より移ふを　たゞみね
　露のわくとはおもはさらなむ
又巻第十三戀三
　題しらず　みつね
かの岡に萩かるをのこなはをなみ
　ねるやねりそのくたけてそおもふ
戀しくは形見にせんと我宿に　赤人
　植し秋萩いまさかりなり
中將のみやす所のもとに萩につけてつかはしけ
る　廣平親王
秋萩の下葉をみすはわすらるゝ
　人のこゝろをいかてしらまし
だいしらず
しめゆはぬ野への秋萩風吹は　よみ人しらず
　とふしかくふし物をこそ思へ
又巻第十七雜秋
　題しらず　人まろ
萬葉集巻十
朝霧のたなひくをのゝ萩の花
　今や散らんいまたあかなくに
ちかどなりなる所に方たがへにわたりてやどれ
りときゝてある程にことにふれてみきゝて歌よむ
べき人なりと聞てこれが歌よまむさまいかでよ
くみむと思へどもいとも心にしあはねば深くも
思はずゝみてもいはぬ程にかれも又心みんと
おもひければ萩のはのもみぢたるにつけて歌を
なんおこせたる　女
秋萩の下葉につけてめにちかく
　よそなる人の心をそみる
だいしらず　人まろ
萬葉集巻十
此頃の曉露に我宿の
　萩の下葉はいろ付にけり
夜を寒み衣かりかね鳴なへに
　萩の下葉は色付にけり
又巻第十九雜歌
　やむごとなき所にさぶらひける女のもとに秋の
　頃しのびてまからむとおとこのいひければ
秋萩の花も植おかぬ宿なれは　讀人不知
　鹿立よらむ所たになし

年のつもりにける事をかれこれ申けるついでに
秋萩の色つく秋を徒に　貫之
あまたかそへて老そしにける
題しらず　よみ人しらず
秋萩の枝もとを〻に成行は
白露おもくおけは也けり
延喜御時うためしければ　つらゆき
さをしかの立ならすをの〻秋萩に
置る白露我もけぬへし
秋のうたとてよめる　ふかやぶ
いくよへて後かわすれん散ぬへき
野への秋萩みかく月よを
又巻第二十哀傷歌
七月ばかりに左大臣の母身まかりける時に思ひに侍けるあひだきさいの宮より萩のはなを〻りて給へりければ　太政大臣
女郎花かれにし野へにすむ人は
まつ咲花をまたてともみす
拾遺和歌集巻第三秋
だいしらず　みつね
露けくて我衣手はぬれぬとも
折てをゆかむ秋萩の花　伊勢
亭子院御屏風に
うつろはんことたにをしき秋萩に
折ぬはかりも置る露かな　つらゆき
延喜御時御屏風に
風寒み我から衣うつ時そ
萩の下葉もいろまさりける
又巻第七物名
はぎのはな　忠峯
山川はこのはなかれす淺きせを
せけは淵とそ秋はなるらん
よどがは　在原元方
植ていにし人もみなくに秋萩の
誰みよとかは花の咲らん
又巻第九雑下
みつねたゞみねにとひ侍ける　參議伊衡
白露はうへより置をいかなれは
萩の下葉のまつもみつらん
こたう　みつね

かんなりの朝ぼにめしたりける日おほみきなどたうべて雨のいたう降ければ夕さり迄侍てまかり出侍けるおりにさか月をとりて　貫　之

秋萩の花をは雨にぬらせとも
君をはましてをしと社おもへ

又卷第十四戀歌四

題しらず　よみ人しらず

宮きのゝ本あらのこ萩露をおもみ
風を待こと君を社まて

又卷第十五戀歌五

だいしらず　雲林院のみこ

吹まよふ野風を寒み秋萩の
うつりも行か人の心の

後撰和歌集卷第五秋歌上

女のもとより文月ばかりにいひをこせて侍ける

秋萩をいろとる風の吹ぬれは　よみ人しらす
人の心もうたかはれけり

返し　在原業平朝臣

秋萩をいろとる風は吹ぬとも
心はかれし草葉ならねは

又卷第六秋歌中

あひしりて侍ける女のあだなたちて侍ければ久しくとぶらはざりけり八月はかりに女のもとよりなどかいとつれなきといひおこせて侍ければ　よみ人しらず

白露のうへはつれなくおきゐつゝ
萩の下葉の色を社みれ

題しらず　よみ人しらず

秋の田のかりほの庵の匂ふ迄
咲る秋萩みれとあかぬかも

萩の花を折て人につかはすとて

時雨ふりふりなは人に見せもあえす
散なは惜み折れる秋萩

秋の歌とて　つらゆき

行かへり折てかさゝん朝な／＼
鹿立ならす野邊の秋はき

我宿の庭の秋萩ちりぬめり　宗于朝臣
のちみん人やくやしとおもはん

白露のおかまくをしき秋萩を　よみ人しらず
折ては更に我やかさゝむ

古今要覧稿巻第四百三十四

●草木部 秋

和歌中

古今和歌集巻第四上 秋歌

題しらず　よみ人しらず

秋萩もいろつきぬれは蛬
　わかねぬことやよるはかなしき

夜を寒み衣かり金鳴なへに
　萩の下葉もうつろひにけり

この歌は有人の曰かきの下の人丸が也と

秋萩にうらひれをれは足曳の
　山したとよみ鹿の鳴らん

秋萩をしからみふせて鳴鹿の
　めには見へすて音のさやけさ

是貞のみこの家の歌合によめる　藤原敏行朝臣

秋萩の花咲にけり高砂の
　尾上の鹿は今やなくらん

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にてあひて物がたりしけるついでによめる　みつね

秋萩のふるえに咲る花みれは
　もとの心はわすれさりけり

だいしらず　読人不知

秋萩の下葉いろつく今よりや
　獨ある人のいねかてにする

鳴渡る雁の泪やおちつらん
　物思ふ宿の萩の上の露

萩の露玉にぬかんととれはけぬ
　よしみん人は枝なから見よ

有人の曰此歌はならのみかどの御歌也と

をりてみは落そしぬへき秋萩の
　枝もたわゝにをける白露

萩の花ちる覽をのゝ露霜に
　ぬれてをやかんさよはふくとも

又巻第八離別歌

題しらず　よみ人しらず

すかるなく秋の萩原朝たちて
　旅行人をいつとかまたん

加和可禮牟

右一首大伴宿禰家持作レ之

朝霧之多奈引田爲爾鳴鴈乎留得哉吾屋戸能波義

右一首歌者幸二於吉野宮一之時藤原皇后御作但年月未二審詳一

以二七月十七日一遷二任少納言一仍作二悲レ別之歌一贈二貽朝集使椽久米朝臣廣繩之舘一

既滿二六載之期一而忽値二遷替之運一於レ是別レ舊之悽心中欝結拭レ涕之袖何以能旱因作二悲歌二首一式遺二莫レ忘之志一其詞曰

伊波世野爾秋花子之努藝馬並始鷹獵太爾不爲哉將別

右八月四日贈レ之

正税帳使椽久米朝臣廣繩事畢退任適遇二於越前國椽大伴宿禰池主之舘一仍共飲樂也于レ時久米朝臣廣繩矚二芽子花一作歌

君之家爾殖有芽子之始花乎折而插頭奈客別度知

大伴宿禰家持和歌

立而居而待登待可禰伊泥氐來之君爾於是相插頭都流波疑

又卷第二十

八月十二日二三大夫等各提二壺酒一登二高圓野一聊述二所心一作歌

安麻久母爾可里曾奈久奈流多加麻刀能波疑乃之多婆波毛美知安倍牟可聞

右一首左中辨中臣清麿朝臣

乎美奈弊之安伎波疑之努藝左乎之可能都由和氣奈加牟多加麻刀能野曾

右一首少納言大伴宿禰家持

宮人乃蘇泥都氣其呂母安伎波疑爾仁保比與呂之伎多加麻刀能美夜

安伎能野爾都由於弊流波疑乎多乎良受弖安多良佐可里乎須具之弖牟登香

麻須良男乃欲妣多天思加婆左乎之加能牟奈和氣由可牟安伎野波疑波良

右歌兵部少輔大伴宿禰家持獨憶二秋野一聊述二拙懷一作レ之

五月九日兵部少輔大伴宿禰家持之宅集飲歌

和我世故我夜度奈流波疑乃波奈佐可牟安伎能由布弊波和禮乎之努波世

七月五日於二治部少輔大原今城眞人宅一餞二因幡守大伴宿禰家持一宴歌

秋風乃須惠布伎奈婢久波疑能花登毛爾加射左受安比

何爲等加君乎將猒秋芽子乃其始花之歡寸物乎
鴈鳴之始音聞而開出有屋前之乎秋芽子見來吾世古
芽子花咲有乎見者君不相眞毛久二成來鴨
秋芽子之花野乃爲酎寸穗庭不出吾戀度隱嬬波母
吾屋戸爾開秋芽子散過而實成及丹於君不相鴨
吾屋戸之芽子開二家里不落間爾早來可見平城里人
藤原古鄕之秋芽子者開而落去寸君待不得而
秋芽子乎落過沼蛇手折持雖見不怜君西不有者
蜓野之尾花苅副秋芽子之花乎葺核君之借廬
咲友不知師有者默然將有此秋芽子乎令視管本名

又卷第十四東歌

相聞

伊香保呂能蘇比乃波里波良禰毛己呂爾於久乎奈加禰
會麻左可思余加婆

右上野國歌

譬喩歌

伊香保呂乃蘇比乃波里波良和我吉奴爾都伎與良之母
與多敝登於毛敝婆

右上野國歌

又卷第十五古挽歌

七夕仰二觀天漢一各陳二所思一作歌

安伎波疑爾二保敝流和我母奴禮奴等母伎美我美布禰
能都奈之等理弖婆

右一首大使

引津亭舶泊之作歌

秋野乎爾保波須波疑波佐家禮杼母見流之留思奈之多
婢爾師安禮婆

肥前國松浦郡狛島亭舶泊之夜遙望二海浪一各慟二
旅心一作歌

可敝里伎弖見牟等於毛比之和我夜等能安伎波疑須々
伎知里爾家武可聞

右一首秦田麿

又卷第十六有由緒雜歌

娘子等和歌

墨之江之岸野之榛丹丹穗所經迹丹穗葉寐我八丹穗氷
而將居

又卷第十九

吾屋戸之芽子開爾家理秋風之將吹乎待者伊等遠彌可
母

右一首六月十五日見二芽子早花一作レ之

秋芽子之戀裳不盡者左小鹿之聲伊續伊續戀許增益焉
秋芽子之散去見欝三妻戀爲良思棹牡鹿鳴母
秋芽子之散過去者左小牡鹿者和備鳴將爲名不見者乏焉
秋芽子之咲有野邊者左小牡鹿曾露乎別乍嬬問四家類
奈何牡鹿之和備鳴爲成蓋毛秋野之芽子也繁將落
秋芽子之開有野邊左牡鹿者落卷惜見鳴去物乎

詠レ露

冷芽子丹置白露朝々珠斗曾見流置白露
秋芽子之枝毛十尾丹露霜置寒毛時者成爾家類可聞
白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞
白露乎取者可消去來子等露爾爭而芽子之遊將爲
按に略解には爭をきほひてとよめり
日來之秋風寒芽子之花令散白露置爾來下

詠二黄葉一

比日之曉露丹吾屋前之芽子乃下葉者色付爾家里
秋風之日異吹者露重芽子之下葉者色付來
秋芽子乃下葉赤荒玉乃月之歷去者風疾鴨
秋芽子之下葉乃黄葉於花繼時過去者後將戀鴨

詠二水田一

我門爾禁田乎見者沙穗内之秋芽子爲酢寸所念鴨

詠レ月

我背子之挿頭之芽子爾置露乎清見世跡月者照良思
芽子之花開乃乎再入緒見代跡可聞月夜之清戀益良國
按に再は鳥の誤としてさきのをゝりとよみますらくをまさらくとよめり

詠レ風

芽子花咲有野邊日晩之乃鳴奈流共秋風吹

秋相聞

寄レ露

秋芽子之開散野邊之暮露爾沾乍來益夜者深去鞆
秋芽子之上爾置有白露之消鴨死猿戀爾不有者
元曆本下の爾を乍に作るツツとよむべし
吾屋前秋芽子上置露市白作吾戀目八面
秋芽子之枝毛十尾爾置露之消毛死猿戀乍不有者
秋芽子之上爾白露每置見管曾死努布君之光儀乎

寄レ雨

秋芽子乎令落長雨之零比者一起居而戀夜曾大寸

寄レ花

草深三蟋多鳴屋前芽子見公者何時來益牟

右二首柿本朝臣人麿之歌集出

眞葛原名引秋風吹每阿太乃大野之芽子花散

雁金之來喧牟日及見乍將有此芽子原爾雨勿零根

奧山爾住云男鹿之初夜不去妻問芽子之散久惜裳

白露乃置卷惜秋芽子乎折耳折而置哉枯

秋田苅借廬之宿爾穗經及咲有秋芽子雖見不飽香聞

吾衣摺有者不在高松之野邊行之者芽子之摺類曾

此暮秋風吹奴白露爾荒爭芽子之明日將咲見

秋風冷成奴馬並而去來於野行奈芽子花見爾

春去者霞隱不所見有師秋芽子咲折而將挿頭

沙額田乃野邊乃秋芽子時有者今盛有折而將挿頭

事更爾衣者不摺佳人部爲咲野之芽子爾丹穗日而將居

秋風者急之吹來芽子花落卷惜三競竟

按に元曆本急に作りたればハヤクとよむべし競竟を元曆本きほひ〳〵にとよみたり畧解には竟は互見の誤にてあらそひてみむなるべしとへり

我屋前之芽子之若末長秋風之吹南時爾將開跡思乎

人皆者芽子乎秋云縱吾等者乎花之末乎秋跡者將言

玉梓公之使乃手折來有此秋芽子者雖見不飽鹿裳

吾屋前爾開有秋芽子常有者我待人爾令見猨物乎

按に略解に猨は猿の誤なりといへり

手寸十名相殖之名知久出見者屋前之早芽子咲爾家類香聞

吾屋外爾殖生有秋芽子乎誰標刺吾爾不所知

白露爾荒爭金手咲芽子散惜雨莫零根

娘婦等行相乃速稻乎苅時成來下芽子花咲

朝霧之棚引小野之芽子花今哉散濫未猒爾

秋芽子戀不盡跡雖念思惡也安多思又將相八方

秋風者日異吹奴高圓之野邊之秋芽子散卷惜裳

大夫之心者無而秋芽子之戀耳八方奈積而有南

吾待之秋者來奴雖然芽子之花曾毛未開家類

欲見吾待戀之秋芽子者枝毛思美三荷花開二家里

春日野之芽子落者朝東風爾副而此間爾落來根

秋芽子者於鴈不相常言有者香（一云言有可聞）音乎聞而者花爾散去流

秋去者妹令視跡殖之芽子露霜負而散來毳

詠鹿鳴

左男牡鹿之妻整登鳴音之將至極靡芽子原

於君戀裏觸居者敷野之秋芽子淩左牡鹿鳴裳

鴈來芽子者散跡左小牡鹿之鳴成音毛裏觸丹來

大伴宿禰像見歌一首

秋芽子乃枝毛十尾二降露乃消者雖消色出目八方

大伴宿禰家持秋歌三首

秋野爾開流秋芽子秋風爾靡流上爾秋露置有

棹牡鹿之朝立野邊乃秋芽子爾玉跡見左右置有白露

狹尾牡鹿之胷別爾可毛秋芽子乃散過鷄類盛可毛行流

右天平十五年癸未秋八月見物色作

内舍人石川朝臣廣成歌

妻戀爾鹿鳴山邊之秋芽子者露霜寒盛須疑由君

大伴宿禰家持歌一首

高圓之野邊之秋芽子此日之曉露爾開葉可聞

秋相聞

弓削皇子御歌一首

秋芽子之上爾置有白露乃消可毛思奈萬思戀管不有者

山口女王賜大伴宿禰家持歌一首

秋芽子爾置有露乃風吹而涙者留不勝都毛

湯原王賜娘子歌一首

玉爾貫不令消賜良牟秋芽子乃宇禮葉和良和爾置有白露

巫部麻蘇娘子歌一首

吾屋前乃花子芽咲有見來益今二日許有者將落

大伴田村大孃與坂上大孃歌

吾屋戸乃秋之芽子開夕影爾今毛見師香妹之光儀乎

大伴宿禰家持攀非時藤花并芽子黄葉二物賜

坂上大孃歌

吾屋前之芽子乃下葉者秋風毛未吹者如此曾毛美照

右天平十二年庚辰夏六月往來

或者贈尼歌

手母須麻爾殖之芽子爾也還者雖見不飽情將盡

又卷第九相聞

大神大夫任筑紫國時阿部大夫作歌

於久禮居而吾者哉將戀稻見野乃秋芽子見都津去奈武子故爾

又卷第十夏雜歌

詠榛

思子之衣將摺爾々保比與島榛原秋不立友

秋雜歌

詠花

竿志鹿之心相念秋芽子之鐘禮零丹落僧惜毛

夕去野邊秋芽子末若露枯金待難

吾妹子之屋前之秋芽子自花者實成而許曾戀益家禮

又巻第八春雜歌

山部宿禰赤人歌

百濟野乃芽古枝爾待春跡居之鸎鳴爾鷄鵡鴨

春相聞

小治田廣瀬王霍公鳥歌

霍公鳥音聞小野乃秋風芽開禮也聲之乏寸

秋雜歌

秋芽者可咲有良之吾屋戸之淺茅之花乃散去見者

太宰諸卿大夫幷官人等宴筑前國廬城驛家歌

娘部思秋芽子交廬城野今日乎始而萬代爾將見

右作者未詳

笠朝臣金村伊香山作歌二首

草枕客行人毛往觸者爾保比奴倍久毛開流芽子香聞

伊香山野邊爾開有芽子見者公之家有尾花之所念

石川朝臣老夫歌一首

娘部志秋芽子折禮玉桙乃道去裹跡爲乞兒

縁達師歌一首

暮相而朝面羞隱野乃芽子者散去寸黄葉早續也

太宰帥大伴卿歌二首

吾岳爾棹牡鹿來鳴先芽之花嬬問爾來鳴棹牡鹿

吾岳之秋芽子花風乎痛可落成將見人裳欲得

大伴坂上郎女晩芽子歌一首

咲花毛宇都呂布波猒奥手有長意爾尚不如家里

湯原王鳴鹿歌

秋芽之落乃亂爾呼立而鳴奈流鹿之音遙者

故郷豐浦寺之尼私房宴歌三首

明日香河逝囘岳之秋芽子者今日零雨爾落香過奈牟

右丹比眞人國人

鶉鳴古郷之秋芽子乎思人共相見都流可聞

秋芽子者盛過乎徒爾頭刺不插還去牟跡哉

大伴坂上郎女跡見田庄作歌

妹目乎始見之埼乃秋芽子者此月其呂波落許須莫湯目

大伴家持和歌

吾屋戸乃一村芽子乎念兒爾不令見殆令散都類香聞

右大臣橘家宴歌

雲上爾鳴都流鴈乃寒苗芽子乃下葉者黄變可毛

朝扉開而物念時爾白露乃置有秋芽子所見喚鷄本名

棹牡鹿之來立鳴野之秋芽子者露霜負而落去之物乎

右二首文忌寸馬養

古今要覧稿巻第四百三十三

草木部 萩

和歌上

萬葉集巻第一 雑歌

大寶二年壬寅太上天皇幸二于參河國一時歌

引馬野爾仁保布榛原入亂衣爾保波勢多鼻能知師爾

右一首長忌寸奥麿

又巻第二 相聞

弓削皇子思二紀皇女一御歌

吾妹兒爾戀乍不有者秋芽之咲而散去流花爾有猿尾

短歌

高圓之野邊秋芽子徒開香將散見人無爾

又巻第三 雑歌

高市連黑人歌

去來兒等倭部早白菅乃眞野乃榛原手折而將歸

黑人妻答歌

白菅乃眞野之榛原往左來左君社見良目眞野之榛原

天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌

如是耳有家類物乎芽子花咲而有哉跡問之君波母

右資人金明軍不レ勝二犬馬之慕一述二心中感緒一作歌

又巻第六 雑歌

大納言大伴卿在二寧樂家一思二故郷一作歌

指進乃栗栖乃小野之芽花將落時爾之行而手向六

又巻第七 雑歌

攝津作

住吉之遠里小野之眞榛以須禮流衣乃盛過去

羇旅作

古爾有監人之覔乍衣丹摺牟眞野之榛原

臨レ時

不時斑衣服欲香衣服針原時二不有鞆

譬喩歌

寄レ木

白菅之眞野乃榛原心從毛不念君之衣爾摺

寄レ花

春日野爾咲有芽子者片枝者未含有言勿絶行年

欲見戀管待之秋芽子者花耳開而不成可毛將有

青蒼者菼也亂也荻也萑也其最短小而中實者蒹也薕也云々

○按に蒹は莖至て細小なりといへ共その中うつろなり萑は肉厚くして中に小孔ありといへ共中幹より以下はうち實して實心竹の如し故本草啓蒙蘆條云按に此條下に蘆荻蒹三品を分ち釋する事諸說皆可なり惟時珍の說不可也荻と蒹との注相反すればなり夢溪補筆談云蘆葦葭蘆也亂萑菼荻也通雅云菼亂萑荻蒹一也葭蘆葦一也とこの二書によりて分別すべし然れば通雅には蒹を荻に混ず誤れりとみえたり

正字通云菼⿱艹剡同說文以レ⿱艹剡爲レ正文菼爲レ⿱艹剡重文非ニ是⿱艹炎ニ旁加レ刀無レ義从レ菼爲レ正

○倘謙曰⿱艹剡は諧聲にして會意の字也その義既に上文にいへるが如く萑の初生極めて銳利なるによりて⿱艹剡とは名付しにて菼は卽その省文なり然るをここに旁加レ刀無レ義从レ菼爲レ正といへるはその字を造りし原意をしらざる誤りなりしかりといへども又說文に倓安也从レ人炎聲讀若談重文倓或从レ剡とみえたるはまさしくこれと反對なりといへどもその義今詳ならず

くがをかしう見ゆるにといひしは說文に招手呼也といへるにその意同じ然れば芀といひ苕といひしはその字によりてその名義を異にせしなるべしと思はるればその實は說文によるに苕从レ艸召聲芀从レ艸刀聲召从レ口刀聲なれば苕召芀はいづれにも一つ聲なるによりて假借せしものなるは葦苕を韓詩にて葦蔄に作れるにて其義は明らけし

劉 禮記 說文

○按に說文に蔛芀也芀葦華と見えたれども爾雅に葦醜芀といへるによる時は葦も萑もすべてその花を芀とはいひしなり故に禮記の鄭注に苅は萑苕とも苅は菼帚ともみえたり

○正誤

新撰字鏡云雚古官反葦也 乎志呂井

○按に萑字或はあやまりて雚に作ることも又その誤りをうけし也且その雚を以てたゞちに葦となし又むしろゐとなせるはあやまり也

和名類聚鈔引玉篇云薍菼也菼音毯 和名阿之豆乃蘆之初生也

又引野王云按荻與レ薍相似而非二一種一矣

按に菼薍荻はもと三名一物なるをこゝに菼薍と荻とをわかちて二種となしその菼薍を阿之豆乃とみしは卽顧野王の誤りをうけしにて顧野王は詩大車の毛傳の誤りをうけし也

詩王風云毳衣如レ菼毛傳云菼䓶也 蘆之初生也

○尙謙曰爾雅に菼䓶也菼薍也とみえたれば菼薍䓶はもと一物にして蘆の初生にはあらず然ればこゝにいふ蘆字は卽萑字の誤りなり又豳風に八月萑葦といへる毛傳に薍爲レ萑葭爲レ葦とみえたりこの薍は卽菼䓶の別名にして蘆の初生をさしていひしにはあらずこれにても又蘆字は卽萑字のあやまりなるをしられたり

齊民要術引詩義疏云薍或謂二之荻一云々一名蓫薚楊州謂二之馬尾一故爾雅云蓫薚馬尾也幽州謂二之旨苹一

○尙謙曰郭注爾雅に廣雅を引て馬尾蔏陸本草云別薚今關西亦呼薚江東爲二當陸一これによれは蓫薚馬尾は共に蔏陸の一名にして荻の一名にはあらす旨苹の名また疑ふへし或は馬尾は蓋し荻花の方言にしていはゆる商陸一名馬尾と同名なるによりてそれを混同してかくいひしにても有べきにや

本草綱目云蘆有二數種一云々短二小於葦一而中空皮厚色

菼揭々又毳衣如レ菼爾雅に菼騅也といへる類是也

騅 爾雅 說文

○說文繫傳云案爾雅釋言云菼騅下注云菼草色如レ騅在ニ青白之間ニ鍇以爲ニ此帛名ニ染レ之如ニ生菼ニ色如ニ今人所染麥綠ニ也蓋此菼亦名爲レ騅非ニ獨其色ニ也

蒹 詩小雅 說文 玉篇

○按に說文に兼幷也从レ又持レ秝兼持ニ二禾ニ秉持ニ一禾ニとみえたりこれによるに蒹もまた禾の如く細くして一握に數十莖を兼持すべきによりてその名を命せしなるべし

薕 爾雅 說文

○按に薕は卽簾の正文なり此草莖を抽て細長薕に作るに堪たり故に名づく說文に薕仄也仄側傾也とみえたるにてその義は押はかるべしまた說文に薕从レ草廉聲また廉从レ广兼聲また蒹从レ草兼聲なれば薕蒹もと同聲なるを玉篇以來薕力鹽切廉力沾切となせしは蓋し郭璞注の爾雅にいはゆる江東の方聲なるべし

烏眍 廣雅

○倘謙曰玉篇眍字ありて眍字なき時は眍は蓋し腽の誤字にてもあるべきにや或は眍は邑の俗字にて歐从レ欠區聲蓲从レ草區聲なれば歐蓲もと同聲にして烏邑烏蓲いづれか其聲をあやまりしにてもあるべきにや

蘿荻 玉篇

芀 爾雅 說文

○倘謙曰雚葦の類秀る時は其花風をうけて刀々然たり故に芀と名づく古今韻會に莊子にいはゆる而獨不レ見也調々之刀々乎を引て刀々風欲レ止微動貌と見えたるにて其義は明らけし又說文繫傳には芀抽條搖遠生華而無ニ莩萼ニともみえたり然るを說文注には釋草云葦醜芀顏注漢書云ニ蒹錐ニ者是也取ニ其脫レ類秀出ニ故曰芀方言錐謂ニ之鍣音䒬といへるはその說いかゞあらん且蒹錐は蓋し蒹のはじめ苗を生ずる狀細にして銳なるものをいひしにて芀をさしてしかいひしにはあらざるべしその芀を或は假借して苕に作れるは卽說文に召評也評召也といへる意にてもあるべくまた源氏物語にかれ〴〵なる前栽の中にをばなの物より殊に手をさし出して招

したれど正歟かやといふべき義ともみえず此字又他書にはみる所なし云々

菅茅（本草啓蒙引ニ本草綱目一）

○按にかやの狀頗る茅の如し故に名づく

雈（詩易大戴禮說文）

○雈字名義いまだ詳ならず向謙曰雈は今の俗にいふ耳づくなるを時珍以て鴟鵂となすものは誤なり扱此花草穗を生ずる狀頗る雈の毛角あるもの丶如し故に雈と名づく其字草に从ふものは鳥類木類にあらざるによりてなり其字をよむ聲は和の如く又丸の如し和丸もと一聲たゞ緩急の異なるのみこれは說文に雈鴟屬从レ隹从レ卄有ニ毛角一所鳴其民有レ旤讀若レ和又云首从レ卄从レ目卄亦聲讀若レ和又云莧从レ兎足苜聲讀若レ丸廣雅音釋云雈丸といへるにてその義はあきらけし

荻（高誘注淮南子、玉篇、萬葉集、新撰字鏡、和名類聚鈔）

○按に淮南子注によるに雈を謂て荻となすものは即楚の方言なりその字もと藡に作る廣雅云藡荻玉篇云藡雈也荻同上と見えたり今本の淮南子にこの字を薗に作れるは蓋し藡字の下體の摩滅せしなるべし然れば荻の字はさら也藡字も原是その方言によりて造りし俗字なり

烏蓲

郭璞注爾雅玉篇の按に郭注爾雅によるに藡を謂て烏蓲となすものは即江東の方言也

蘆荻（玉篇）

○按に蘆荻は即大和本草にいはゆるをぎよしの名に暗合なり

薍（爾雅說文）

○說文注に薍言其形細莖稹密とみえたり今按に藻鹽草にすゝきをみだれ草といひしはけだし此薍字と同意なるべし

⿱艸剡（詩爾雅說文）

○按に陸璣詩疏云薍其初生三月中其心挺出其下本大如レ箸上銳而細又說文云剡銳利なりと見えたれば⿱艸剡は即雈の初め生ずる狀本大如レ箸上銳而細なるによりて剡字に艸冠を加へて造りし字なり然るを說文注に⿱艸剡言其青色といひしは誤りなるべし

菼（同上）

○按に經典皆⿱艸剡を省きて菼に作る詩にいはゆる葭

あらず然るを和歌色葉集にその濱荻の歌を引て濱荻とは蘆の名なりといへる蘆は卽古よりいふ蘆の事なれば其ことわり違へるに似たり

あし 津の國難波俗稱

○按に「物の名も所によりてかはる也難波のあしは伊勢のはまをぎ」といひ傳たる濱荻は卽海邊に生ずる荻の事なればこゝにあしといひしは卽難波の方言にてその濱荻をさしてあしとはいひしなり今の俗には古よりいふ蘆をばよしとのみいひ傳へてさらにあしとはいはぬ也扨和歌色葉集に「難波瀉かりつむあしのあしつゝもひとへに君を我やへたつる」といへる歌を引てなにはがたとは津國難波の事也その江には蘆のおほく有なりあしづゝとは蘆の中にうすやうのごとくあるもの也といひしは古よりいふあしにて此濱をぎにはあらず

かや 日本書紀萬葉集

○按に古書多く草字をよみてかやとす須々岐考云かやてふ義は古言に上より覆ふをかといひ屋舍をすべてやといふ草もて家を作るは覆屋の義なりとみえたり倘謙曰說文に襾覆也从冂上下覆之也讀若レ亞又云椵从レ木叚聲讀若レ賈又云檟从レ木賈聲又云賈从レ貝襾聲とみえたれば古は西土にても覆ふ事をかといひし也然れば唐韻に襾呼訝切椵叚古雅切檟また古雅切といひしは卽その遺聲なれば賈亞もまたそれと同聲なるべきを又唐韻に賈公戶切亞衣駕切といひしは蓋しそれぐの邦の方聲にして共に襾の聲のよこなまりたる也猶くはしき事は小學部啞惡の字の註にみえたり

かるかや 萬葉集

○刈草の字をよめり

ねじろたかゞや 同上

をがや 藻鹽草

○按にをがやは荻を藏玉集に男草といふ意なるべければ姬萓にむかへていふ名にして舊よりいふ招草の義にてはあるべからず

ひめがや 同上

○若がやの事なりといへり

さねがや 同上

萓 和名類聚鈔引二廣益玉篇一

○東雅云萓字は和名鈔に玉篇を引て草名也と註し

風持草 同上

○「をちこちに吹すくる音は聞ゆれと風持草そ音もたゆまぬ」といへる歌を引てかた書に齋宮花盡異名としるしたり

男草 同上

○「忘られす又音つれよ男草風のたよりのたえぬなさけに」といへる歌を引てかた書に堀河院御時草木を合らるゝ時の異名と見えたり

ね覺草 同上

○「秋といへはいかなるよはもね覺草風や夢路の關となるらん」といへる歌を引たり

問連草 同上

○「音つれのうき物なから問れ草袖には露をささふ也けり」といふ歌を引てかた書に二條院讃岐歌としるし又細註に問れ草とよむ事儀屋といふものに荻をとはれ草と詠せしよし順德院の歌註に侍る也とみえたり

濃露草 同上

○「花の名の千種の中に濃露草あはれをそむる露や置らん」といへる歌を引たり

文見草 同上

○荻の異名也堀河院異名にみえたりといへり

風聞草 藻鹽草

袖波草 同上

○是は尾花の異名なりとみえたり

をぎよし 大和本草

うみがや 東雅

○荻は今俗うみがやといふ是也とみえたり

うがや 同上

○昔日向の國人のいひし事を聞し彼國には猶今もうがやといふものゝある也これは葺不合尊の御産屋をふきしもの也といひつぎぬと言けりうがやといひし物は荻なりけんもしらずといへり

うきまがや 近郊田舎間の方言

○按にうきまは地名なり凡かや屋をふくに此かやのみを用ひて他草をまじへざる時は尋常のかやもてふきしより數十年の久しきをたもつといへり

濱荻 萬葉集

○按に碁檀越の妻のよめる濱荻は卽いせの海濱に生いづる荻をさしていひしにて古よりいふ蘆には

神代紀に招禱をよめり又一字もよめり古事記に其遠岐斯八尺勾璁鏡とみゆ遠岐は招禱にてをかみ也かみ反き也又云をこづる日本紀に誘字をよめり招列る義成べし源氏にをこづりとらんの心とみえ賀茂保憲女集にをこづり竿にかゝれる事をくゆると見えたり又云をきゐ鷹にいへり金葉集にみゆ招餌の義也鷹を招き致すの餌也をき鳥をき䲭などいふも同じ又云をきなは大鷹にいふ詞に鷹にはへをといふ同物にて招索の義也又云をきかふ招飼の義鷹を手放て餌を見せてをきたつるをいふ鷹には呼といはずをくといふなりよてをきよびともよめり又云をとり倭名鈔に媒鳥をよみ新撰字鏡に囮をよめり通鑑の注に囮は鳥媒也とみえたりなどいへるにもとづきてその說をなせしはいとめでたし然りといへ共を花はをぎの花がもとにて薄の花もまたよく相似たるによりてそれをも押なべてを花といひしはその義旣に上文にいへるが如くなるべし扨萬葉集に荻の假名を乎疑とかきたれば新撰字鏡には乎支とかき和名鈔には又乎木とも書しによれば蓋し其字の淸濁は通用せしにてなを乎花を乎婆奈と書しに同意なるべし

さゝらをぎ 萬葉集

○按にさゝらはさゝれいしさゝれ浪などのさゝれと同じ事にてをぎの苗を生じていまだ細小なるをさしていふ

をぎの花 藻鹽草

○荻の花萬也但猶以可レ尋歟といへり今按に萬葉集にはいせの濱荻又荻の葉さやぎなどみえたれども荻の花とよみし歌は見えずこれによれば萬の字恐らくは誤字なるべし

露やぐさ 藏玉和歌集

○「をる袖のをらてわすれし露や草かりそめのまも花の袖かも」といへる歌を引てかた書に天智天皇花盡異名とみえたり

秋しり草 同上

○「ね覺して秋知草の風よりや老の袂のまつしほるらん」といへる歌を引て俊成卿とみえたり

山下草 同上

○「夕暮の山下草の山おろし松ふきよする音の淋しさ」といへる歌を引たり

なと訓しはいはゆるをぎすゝき及び今いふかやなどの花の形すべて一様にして風になびくさま物を招くによく似たるにより招花とはよみしなり一說にくさ花をを花とよみしはすゝきの花は秋くさの内にて殊に高く穗に出て人にはよくみゆるものなればしか書しなるべしともいへり

尾花（同上）

○尾花のをは假字にてその語のもとは卽招花の義なりといへ共またその花の形獸の尾にもよく似たるものなれば或はその意にてたはむれ書に尾花ともかきしなるべしいと後世の書なりといへ共旣に通雅にも蘆花如狐尾などみえたり然れば延喜以來をばなに尾花の二字を用ひ來りしもまた專ら獸の尾に似たる意と思ひなせしによりてなるべし

麻花（同上）

○按に麻花の麻もまた假字なりといへ共その穗のいとさゝやかにみだるゝさまは薄紅の糸くるさまにもよく似たればこれもまたたはむれがきに麻花とも書しなるべし

美草（同上）

○萬葉集抄云美草は薄也賀茂眞淵曰美草は眞草といふに同じく秋の百草を兼いふ本居宣長曰美草はをばなとよむべし貞觀儀式大甞祭條に次黑酒十缶云々以美草飾之とみえて延喜式にも見ゆ然ればかならず一種の草の名なり右はすゝきを美草と書ならへるなるべし云々尙謙曰美は蓋し水字にて草はいはゆる刈草ぅ草などの草の如しみかやはこれ水邊に生ずるかやてふ意にて卽荻をさしていふ一說に美尾の字音通なれば美草をまた尾草ともよむべし扱かるかやの一名ををがやといふよしは旣に藻鹽草にみえたり

をぎ（萬葉集、新撰字鏡、和名類聚鈔）

○須々岐考云古言に招き引ををといふ書紀に招禱といひ風招といひ誘といひ和名鈔に攣といひ媒鳥といひ招餌といひ蚇蠖といひ（首尾を一所に引よせつゝ行故に招蟲の意なり今の俗には尺取蟲といへり）萬葉集に鷹を呼を呼久といひ又愛をも惜をもをしとよめり皆此方に招き引意也旗薄の穗の風に靡くが物を招くに似たれば招花とはいふなり荻ををぎといふも招草也是も穗に出たるが動くさまはいとよく似たる物也云々此說は和訓栞云をぎ

按に廉まさに薕に作るべし
大廣益會玉篇云萑胡官切草名細葦也
又云薖徒歷切草名萑也荻同上蘆荻
又云菼他敢切草名萑初生也剡同上
又云薍魚患切草名烏蓲也
又云蓲於于去尤二切烏蓲也
又云蔦音烏蓲即荻也
〇尙謙曰蔦は即ち烏の俗字にして蓋し唐の孫强が加ふる所なり其原文に非ざるはこゝにのみ直音を附せしにて明らけし
又云薕力鹽切草名荻也
又云蒹古廉切荻狼也
〇尙謙曰新撰字鏡によるに荻兼まさに薕荻に作るべし即蘆荻にむかへていふその薕荻をまた薕薖に作れるは既に刑昺が爾雅疏にもみえたりこれまた一證也
陸璣詩疏云薍或謂ニ之荻一至ㇾ秋堅成即刈謂ニ之萑一三月生初生其心挺ニ出其下一本大如ㇾ箸上銳而細有ニ黃黑勃一著ㇾ之汙ニ人手一把ニ取正白一噉ㇾ之甜脆云々
本草圖經云萑今作ㇾ薕者是也菼今以當ニ薪槱一者是也
今人罕能別ニ蒹菼一云々
本草綱目云蘆有數種云々短ニ小於葦一而中空皮厚色青蒼者菼也薍也荻也萑也其最短小而中實者蒹也薕也皆以ニ友生已成一得ㇾ名其身皆如ㇾ竹其葉皆長如ニ箸葉一其根入ㇾ藥性味皆同
『此間五圖(荻、同都筑野產、かや、あぶらかや、蒹二)略之』

〇釋名

をばな萬葉集古今和歌集
〇按にをばなのをは即乎の假字なるを定家卿より以來於の假字を用る事なりこれ字を用ゆる古今の沿革なり猶五十連韻の於は阿行にあるべくをは和行にあるべきを中昔より於を和行に置をを阿行に置しも此たぐひなるべし扨をばなといふ語のもとは蓋し招花の義にて即をぎの花の風に靡とか物を招くに似たればしかおふせし名なるべし
草花萬葉集
〇按に草は刈草鸕鷀草などの草字と同じく荻薄はさら也今いふ萓をもすべて古は草といひしにて一種の草の名にあらずその草花を以て萬葉集にをば

リ初ハ淡紫色後漸ク白色ニ變ズ秋深テ苗枯ル

又云蒹ハ蘆ノ一種形小ナルモノナリ

和漢三才圖會云蒹多出ニ於豫州ニ以編ニ駕窓之簾ニ甚美也

詩（衛風碩人）云葭菼揭々（毛傳云葭蘆菼薍揭々長也）

又（王風大車）云大車檻々毳衣如レ菼（毛傳云菼騅也蘆之初生也箋云菼薍也毳衣屬ニ衣繢ニ而裳繡皆有ニ五色ニ焉其青者如レ騅）

○岡村尙謙曰ふたつの騅字もと離に作る今爾雅によりてこれを改む又蘆之初生まさに萑之初生に作るべし義くはしく正誤に見えたり

又（秦風蒹葭）云蒹葭蒼々白露爲レ霜（毛傳云蒹薕也葭蘆也）

又（豳風七月）云七月流大八月萑葦（毛傳云薍爲レ萑葭爲レ葦）

易（說卦傳）云坤爲レ地爲レ母云々其於レ地也爲ニ萑葦ニ

爾雅（釋草）云菼薍（郭注云似レ葦而小實中江東呼爲ニ烏蓲ニ）

又（釋言）云蒹薕（郭注云似レ萑而細高數尺江東呼爲レ薕）

○按に刑昺疏による時は爲薕二字まさに爲薕藡三字に作るべし

又（同上）云菼騅也菼薍也（郭注引レ詩云毳衣如レ菼菼草色如レ騅在ニ青白之間ニ）

大戴禮（夏小正）云七月秀萑葦（傳云未レ秀則不レ爲レ萑葦秀然後爲レ萑葦又云萑未レ秀爲レ菼葦未レ秀爲レ蘆）

○按に萑舊本雚に作る今說文によりてこれを改む

淮南子（說林訓）云蔏狄苗類絮而不レ可レ爲レ絮（高注云蔏荻也楚人謂ニ之蔏ニ即所レ謂蘆花絮也）

○尙謙曰苗まさに華に作るべし蓋し壞字なり一云荻華を以て蒿苗といひしは蓋しその大略をあげていへるなり

說文（艸部）云萑薍也从レ艸萑聲

又（艸部）云薍（剡也从レ艸亂聲八月薍爲レ萑葭爲レ葦也）

○段玉裁說文注云各本脫ニ萑葭爲三字ニ今補正按此正申明未レ秀爲レ剡既秀爲レ萑之惜八月秀之時也言葭爲レ葦者類言レ之也言葭爲レ葦者類言レ之也豳詩八月萑葦傳云薍爲レ萑葭爲レ葦謂至ニ是月ニ而薍秀爲レ萑葭秀爲レ葦矣許正用ニ毛詩ニ

又（同上）云（萑之初生一曰レ薍一曰レ騅从レ草剡聲）

○說文注云兩一曰謂ニ剡之一名ニ也

菼（剡或从レ炎）

又（同上）云蒹（兼之未秀者）

○尙謙曰薕もと誤りて萑に作り又誤りて萑に作る今これを正す从レ艸兼聲

又（同上）云薕（蒹也从レ艸廉聲）

廣雅（釋草）云藡狄萑丸也

又（同上）云烏昆廉也

烏昵一名蘼荻といふその葉蘆葉に似て短小にして莖極めて細小なり此種諸國にありといへ共舊より伊豫の大洲に産するものその名殊に名高しこれを以てすだれに作れるを伊豫すだれといふこれを尋常のよしすだれに比すれば細小にして美麗最賞すべし今江都にてすだれに作るものは多く常陸の水戸より來るといへりその莖長さ三尺に過ざるはわらみごをぬきとりし如くに此ものゝ花莖のみを拔とりしにて全形にはあらざる也

新撰字鏡草部云荻適同徒歷反蘼荻也乎支

按に玉篇によるに簾荻まさに蘆荻に作るべし蓋し傳寫の誤りなり

又同上云菿菼同通敢反騅也亂也又道感反花初將ㇾ開保々牟

按に騅は䒮騅の誤なり

和名類聚抄草類云荻音狄字亦作蓪和名乎木

八雲御抄云荻下　をぎはら　庭　野などによむ　水邊にも有べし

又云薄　をばな　源氏にをばなの物よりことにてをさしいでゝまねくと云り　おほかたまねくとはほにいでゝまねくそでに似たる也

又云苅萱　たかゞやともいふ　を

按に藻鹽草によるにをの下まさにかやの二字を補ふべし

さねかや　ねじろたかゞやとも

藻鹽草云荻したをぎ　原　のやけはら　庭　からかれたるなり　の上風　のうは風そよぐともなびくともよめり　ともずりのおとのはげしさと讀り葉風にそへて云り新六　たかやかなる　といへり

又云かるかや只かや共よめり　をがや　を　原　さねねじろたかや只たかゞやともいふ　ひめがや若がやの事なり　のね是但未定又かやがれ共　がうら葉も色づく　が下葉　が下をれ　庭の　原　ねじろ　はら　本末なみよるかるかや　霜雪のふるののを　折かへり　立なをる

大和本草云荻ハヲギヨシト云淀川其外處々ニアリ山野ニモ水邊ニモ生ズ中實也ヨシノ如シ少ハ其中トヲレリ葦トマジリ生ズ似タル物ナリ水草ナリ本草ニハ蘆ノ集解ニノセタリ

本草綱目啓蒙云荻ハ水邊ニ生ズ陸地ニ移シテ繁殖シヤスシ大抵菅茅ニ似テ長大ナリ其莖蘆トハチガヒ肉厚クシテ中ニ小孔アリ花モ菅茅花ノ如ニシテ長大ナ

花をば載たれどもこれにも尾花の事をいはざるはその意又和名鈔の如くなるべし然りといへども尾花はをぎの花がもとにて薄もいとよく似たるものなればそれをも推なべて尾花といひしは爾雅にいはゆる葦醜芀また本草圖經にも蘆、葦、蓄、薍、蒹等をあげて其華皆名耆といへると同意也今草屋をつくるに一種かやてふくさあり漢名を菅茅といふ此くさも荻薄と同じく古より山野におのれと生出てその狀すゝきに似てさらに大なるもの也和名鈔にいはゆる萓字をかやとよみしは蓋し此草をさしていひしならん此花もまた荻薄などの花によく似たるものなればこれまた一種の尾花なるべし或はねじろたかゝやなどいひしもまた此草の事なるべし因ておもふに萬葉集に「秋野の尾花か末を押なへて」「秋つけは尾花か上に置露の」などよみしは西土にいはゆる散文の意にて荻にても薄にても或は一種のかやにても其くさには拘はらずすべて野にありて高く穗に抽出しはなの風になびきて物を招くに似たるかたちをさして尾花といひ又「波太ずゝき尾花さかぶき」とよみしは卽對文の意にてはたずゝきと尾花とは別種にて必ず一物にはあらざるべし然るを中昔より尾花といへるはたゞすゝきの花とのみ皆人おもへるはくはしからず又萬葉集に「黑樹とり草もかりつゝ」又「吾せこは借廬作らず草なくば」などいへるかやは卽荻薄及び今いふ一種のかやをも押なべてかやとはいひし也故に古事記にも訓㆓萓草㆒云㆓加夜㆒と見えたれば尾花もまた薄の一種に拘はりしにはあるべからず扨をぎはいづれの國にても水邊に多きものにて春舊根より苗を生じその葉は波太ずゝきかや等に似て長くしてやゝ大なり莖高きものは一丈計低きものは七八尺その莖蘆莖に似て細くして節たかく肉厚くして中に小孔ありといへども根のかたは實して頗る實心竹の細小なるが如し秋に至ればその莖上に一尺計の穗を抽出て花をつくまたはたずゝきかやなどの花に似てはじめ紫色にして後に白色に變ずる事もまた同じ一種松平越中守の大塚の下邸に移しうゑて都筑野のすゝきと稱するものありその實は荻にしてその莖尋常のものより至て低くしてよく花穗を生ずるを異なりとす又一種ひめよし一名よしもどき一名すたれあし一名すたれよし一名かなよし一名ひよく〳〵あり漢名を蒹一名蘼一名

古今要覽稿卷第四百三十二

●草木部

をばな　をぎのはな　蓄荻

をばな一名をぎのはなを古は尾花或は麻花或は草花或は平花などさまぐ〳〵に書しを延喜の頃よりはたゞ尾花の字のみを用ゆる事とはなりにたりそのくさを美草また平疑又文見草又露やぐさ又秋しりぐさ又山下草又風もちぐさ又問連草又禰覺ぐさまた男草又濃露草又風聞草又袖波草又をぎよし又うがや又うみがやまたうきまがや漢名を蓄一名荻（字もと蓪に作りまた蔏に作る）一名烏蓲一名蘆荻その苗のいまだ秀でざるをさゝらをぎ漢名を薍一名菼（字もと薊に作る）一名騅（字或は雖に作る）といふその草の伊勢國の海濱に生いづるを濱荻といひ津の國の難波にてはあしといふ扨波太須々岐の花を又をばなといひしはこれも穗に出たるが動くさまいとよくをぎの花に似たればなりされば萬葉集に「波太須々岐尾花さかぶき黒木もて」とよみし尾花は卽をぎの花にてはたずゝきの花とはもとより別種なり又萬葉集に「波太ずゝき美草かりふき造れりし」とよみし美草と波太須々岐とは一物を槩言せしにあらざるにてその義は明らかなり今もかや屋をつくるにをぎすゝきなどをまじへて葺は卽古の遺風也然りといへ共又寄ゝ花といへる題にて「さを鹿の入野のすゝき初尾花何時か妹かた枕にせん」とよみしは卽序歌の體なればこれは須々岐の花のはじめてさきいづるをさして初尾花とはいひしなりこれにつぎては後撰集に題には尾花のいとたかきをとありて歌には「花薄はに出ることもなきやとは」といひ詞花集にも尾花の風になびくをみてよめるとありて歌には「花薄まねかはこゝにとまりなん」といひ或は續古今集に「手枕に結ふすゝきの初尾花」とよみしは萬葉集にいはゆる初尾花の歌にもとづきしものなるべければこれらは皆すすきの花をもて推なべて尾花とはいひしなるべしこれによれば和名鈔に荻薄の兩條ありといへ共その條下に尾花の名を載せざるは尾花は卽荻の花にも薄の花にも其名を稱すべくして一種の花の名にはあらざるによりてならんか又枕草紙にもあしの花すゝきの

整齊、挑ㇾ菜衣襤褸、張家姑、李家女、隴頭相見涙如ㇾ雨
『此間救荒本草所載絲蕎蕎圖略ㇾ之』
秋萩譜云みやま萩おほく野邊にあり莖だち直にして葉は豆の葉に似てしかも小豆の葉より小なり三葉攅る事萩の如し秋にいたりて長きものは三尺に過ぐ枝頭微紅の花をひらく甚こまかなり一處にあつまりて觀音草の花のごとし熟視すれば花の形萩に似たり實をむすぶ異形なり人の衣に拈す
『此間みやまはぎの圖一葉略ㇾ之』

歪頭菜

救荒本草云歪頭菜出ニ新鄭縣山野中一細莖就ㇾ地叢生葉似ニ豇豆葉一而狹長背微白兩葉竝生□處開ニ紅紫花一結ㇾ角比ニ豌豆角一短小匾瘦葉味甜
救飢採ㇾ葉煠熟油鹽調食
ふた葉萩たにわたし救荒本草蘭山口授云歪頭菜此圖ヨシ鷹峯金閣寺邊ニアリ東山ニナシ苗高サ二三尺叢生ス葉ハ豆ノ一葉足ラヌ如キモノナリ花ハ岩フジノ花ニ似テ小ク花後莢有リ花ハ赤シテ紫ヲ帶五六月比穗ヲナシテ開和名谷ワタシ
『此間二葉萩の圖一面略ㇾ之』

秋萩譜云萩の木こまはぎ萩の形象とは大に異り大なるものは幹二尺餘めぐりあり木のはだ柿の木に似たり枝はたるといへども長からずわづかに二三尺に過きず葉は枝に直につく莖なし多く陳列して紫微の葉のごとくにして疎なり横すぢありてつよくあつし笑靨花の葉に似たり枝小枝ともに萩のごとく柔ならず花は七月葉の間々のうらに付粟のごとくこまかにして白し十月落葉して春葉を生る事諸木と同じ萩と大に異り枝のしだれたるをもつて萩といふ名をつけたるなるべし

萩の木



古今要覽稿卷第四百三十一

●草木部

萩

『此處彩畫五圖略之』

秋萩譜云蒔畫萩はぎの一種にして矮きものなり莖も二尺ばかり有て細き事眞萩の枝よりも細し小枝を生じてかたち常の萩のごとし花の莖細きことかた絲のごとく長さ一寸あまりあり七八月白花をひらく甚こまかなり花一度に開かず一所に三四花づゝ開花すゞなし葉の色うすくして野萩の葉の色のごとし葉飯櫃のかたちのごとくにして横二分ばかり立三分ばかり又少し大なるもあり盆種となすべし

『此間蒔繪萩の圖一略レ之』

秋萩譜云朝鮮はぎ猫はぎ鼠はぎ葉のかたち飯櫃なりにして萩のごとく三葉あつまる仙臺はぎに似たり莖だち直にしてつよくたわみしだれず秋にいたりて長きもの三尺に過ぐ枝頭ごとに花を開く事馬鞭草のごとし



朝鮮はぎ

秋萩譜云絲はぎつる萩小なる草なり枝弱耎にして蔓のごとし地を這ふつるの長さわづかに尺餘なり葉も小なる事二三分ばかりにして丸し末丸く本尖る葉の面むくげあり三葉攅簇する事萩のごとし

『此間絲萩の圖一葉略レ之』

絲蕎蕎

救荒本草云絲蕎蕎（食莖葉）二三月采熟食四月結レ角角不レ用

絲蕎蕎如二絲縷一、昔爲二養レ蠶人一、今作二挑菜レ侶一養蠶衣

るは四葉菜のことゝあらはにしられたる歌はかつてなきなりしかれば何を以かかつみを菰といふは何がしの時代よりなどゝはいはるべきまた一名雨物なりとは誤なりかつみは菰なり

又云花がつみといふは花がた藻（花形藻）の轉語なり其葉四ひらにて花の形に似たる水草なれば花がた藻といふたとへと音相通なりもとみと音相通なり如レ此音相通故花がたもといふ語轉じて花がつみと成たるなりまた花がつみを上略してかつみともいふなり

この説又誤なりかつみの四葉菜にあらざる上はいかでか花がた藻などいふ説はうけらるべき且花がつみを上略してかつみともいふとは次第相違の説なりいかにとなればもとかつみといへるが菰の名にてまた花咲もの故に花てふ字をかうむらせて花がつみといふにて上略して云々とはいひたく考へざるのあやまりなり

校正兼鈔錄　吉田吉藏源元來
編修兼校正　日吉偉三郎源德夫
校正兼圖畫　中山新吾平秀元
編修兼淨寫　若菜三男三郎藤原信孝

校正兼淨寫　松村平兵衞藤原直好
編修兼校正　梅田小太郎源義禮
　　　　　　能勢岩次郎源賢高
　　　　　　南條正之助藤原近行
校正兼淨寫　栗山兵左衞門藤原定興
　　　　　　林源三郎源高典
校正兼鈔錄　山下官左衞門源正房
校正兼淨寫　橋本太刀允藤原好春
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
編修兼校正　大河戶晉平藤原儀成
　　　　　　屋代次郎源通賢
總　　判　　屋代太郎源詮丈

かつ見る人そ戀しかりける

此二首は淺香沼ならでもかつみをよめれば陸奥にかぎりて菰をかつみといふにあらぬことしられたり又むかしより淺香沼に菖蒲ありければにや右近家集に

或女の歌

くるしきに何もとむらんあやめ草

淺かの沼に生とこそ聞

右近は實方と同時の人なるに其比かくよめればかつみふくせつは一定ひがごとなり云々

今按ずるに先にのするごとく契冲の雜記にはすでにかつみは菰の事なりとことわりたるをまたこゝにはさにあらずといふはいかゞこはいまだ考の熟せぬ頃のしわざならんかさらば雜記はこの餘材抄より後にかきたるものなるべしとにかくこの說はみなうけられぬことども多かり先かつみは菰をいふといへど和名にも見えずとはいかゞこの外和名にもるゝもの少なからずあやしむに足らずまた花すゝき花橘などの例にいふべき花にもあらずといへど猶花すゝきとむかへ賞すべきほどの品はあるなりまた六帖の君のをる八重山吹の花がつみ云々此歌は六帖にかつみの部に出たれど全くかつみにあらず花がたみの轉語なるもしるべからず盛衰記にしきみの花から花がたみかつみるからにあはれなりと有て下にしきみ入たる花がつみと有これかつみとはかたみの轉語なること知べしまたかつみふくことひが說にあらず上にも引るごとく著聞集に圓位上人熊野へ參りける道の宿にあやめをふかでかつみをふきたりとありいまも邊鄙にては何草をもふくこと也江府のちかきしゐな町といへる宿にてはかやの青きをふくなり

伊勢貞丈云菰をもて花がつみとする事は俊賴の時代白川院堀川院の御宇の頃よりいひ出せし事歟それより以前古代の歌にかつみとも花がつみともよめるは四葉菜一名田字草の事と心得べし一名雨物なり菰のことを花がつみとよみ來れることも久しく成にければ花がつみに二品有と心得べし菰のごとくするは尤あやまりなり

今按に此說非なりいかで菰をもてかつみとすることの俊賴の時代白河院堀河院の御宇などいふことのしらるべき其故はいにしへの歌にかつみとよめ

袖中抄云今云あしの花といふことはきこえず實より所もなき說にて論らふにたらず

童蒙抄云あの國の風俗にてかつみとはこもをいふなり

今按にあの國の風俗にてとはいかゞかの國のみにもあらずすでに萬葉集には陸奥ならで花がつみとよめる歌あり

古今餘材抄云

陸奥のあさかの沼の花かつみ
かつ見る人に戀や渡らん

六帖にはかつみる人の戀しきやなぞとあり初の五文字顯注にはみちのおくのと有て云々花がつみは菰をいふといへど和名にも見えず六帖にも菰につゞけて別に出したればこと物か又菰も秋になりては花はあれど花薄花橘などの例にいふべき花にもあらず其うへ菰は夏こそ賞する物なるにおとろふる比咲花をもていふべくもあらねばいよ〳〵おぼつかなしまた顯注にかゝる物の名は所にしたがふ事なれば伊勢國に蘆を濱荻といひ又榊をば玉ぐしと申やうにみちのくにゝこもをかつみと申とかやかつみぶきとて五月五日にもかの國には菖蒲をばふかでこもをふくは菖蒲のなきかとおもふに安積の沼にあやめをよむはひが事とも申べしと俊頼もしるしたるに郁芳門院の根合に藤原孝善がよめる

あやめ草引手もたゆく長き根の
いかで淺香の沼に生けん

此歌を金葉に入られたり如何密勘云陸奥のならひにて菖蒲なかりけり實方中將守に成て下られたるに五日にいかにあやめはふかぬぞと尋るに國さぶらはずと申すさて有べきならずあさかの沼のかつみを苅てふくべしとてふかせられたりける後五日はかつみをふくなりと中古の人かたり傳へけり六條右府の子息皇后宮亮信雅朝臣みちのくにの守になりて下りて京へ歸りて申されけるは此事そらごとなりさうぶこよなく多かりと侍るは彼中將の後にや出來けんまたかつみふく事ひがごとならむもしらず今按に萬葉四に

をみなへし咲澤に生る花かつみ
かつてもしらぬ戀もする哉

六帖

君かをる八重山吹の花かつみ

て古書をさぐらざるの誤なりまた菰と蒲と似たるはとはいかゞすでに引れたる和名鈔にも似レ藺とこそ見えたれさほどに菰によく似たらむには似レ菰とこそいふべけれ似レ藺とはいはるまじきなりまた蒲をいにしへは加末とのみいひたるを今雅末といふよしいはれたるはうけられずこの或人はいづこの國人にか今俗加婆とやうに下をにごりてはいへど雅末など上をにごることはなきをやかつ蒲の穗の槌の形なせるよりして蒲槌といふとはいといとみだりがはしき誣說にて論らふにおよばず

花がつみ 萬葉集 古今集

○袖中抄に引る能因がうたまくらにて名義つまびらかなり

○正誤

無名抄云かつみといへるはこもをいふなりかやうのものも所の名も所にしたがひてかはれるか伊勢にあしをはまをぎといへるがごとく陸奥にこもをかつみといへるなめり五月五日にも人の家にあやめをばふかでかつみぶきとてこもをふく也彼國にはむかし菖蒲のなかりけるとぞうけ給はりし此比はあさかのぬまにあやめをよめるはひがごとゝも申つべし

今按に陸奥に菖蒲のなきといへるはあやまりならんあさかのぬまにあやめをよめるひがごとにあらざるべし其證は契沖が古今餘材抄にも引れたるごとく右近の家の集に或女の歌「くるしきになにもとむらんあやめくさあさかのぬまにおふとこそきけ」右近はかの陸奥の守にてかつみふかせたるてふ實方朝臣とは同時の人なればあやめははやくよりあさかの沼にありしなり又釋宗久曰郁芳門院根合に孝善が「あやめくさひく手もたゆくながきねのいかにあさかのぬまにおひけん」とよめるはこの國にもあやめのあるにやと年月ふしんにおぼえしかば此たび人にたづねしに當國にあやめのなきにはあらずされどもかの中將の君の下り給ひし時なにのあやめもしらぬしづが軒端にはいかで都のおなじあやめをふくべきとてかつみをふかせられけるよりこれをふきつたへたるなりとかたり侍りし云々かゝれば孝善の歌の難なく撰集に入たるはうべなり

綺語抄云はながつみとはあしのはなをいふ

○釋名

かつみ 千載集新古今集續古今集

○かつみてふ名のことはりは詳ならねどももしあるひはかてにあつべき實といへるならむかあるひはかてとのみいへる名にてもやあらんそれは穀にもみといひきびひもまたみにかよへりといひ木にくるみはしばみぐみなどいへるたぐひなり美濃國にてかつみ切といひてまこもの實もて製せるもの有よしまた他國にてまこもちといひて此實もて製し或は春このつのをくへばうまきもの丶よし田舍の小兒はおほくとりてくふともいふこれらの説によりてかての意もあるべきかと思ひよれるなりまたおもふに菰を食料にすることと唐土にもある事なり證類本草菰根の條に圖經を引て春亦生ㇾ笋甜美堪ㇾ啖卽菰菜也至ㇾ秋結ㇾ實乃彫胡米也古人以爲ニ美饌一今饑歲人猶採以當ㇾ粮と云ふ又衍義に河朔邊の人は菰の實をとりて粟に合て粥になして食ふ甚濟ㇾ饑といふこと見えたりしかるを或人の説にかつみは蒲槌てふ意もてかまつみと名づけしを後にまをはぶきてかつみといひしものなり其故は菰には花なし花あるは蒲にてかつみは蒲黃なりもとより蒲と菰とは似たる物の別なる物にて倭名類聚鈔にも蒲菰菖蒲各別にいだして蒲にのみ花のことをいへるにてもしるべし土俗は今菰をカツモともカツムともよぶはかつみの轉りたるなれど是も蒲と菰と似たるをもてあやまりきたるなりさて蒲の花をかつみと名づけしはまづ蒲は和名鈔に蒲和名加末草名也似ㇾ藺可ニ以爲ㇾ席也と見えたり今は雅末とのみいへどふるくは加末とのみいひしは舊事紀に葦嚬竈見別命とあるは日本書紀に蘆髮蒲見別王とあるにてもしらるすべて皇朝の言に上をにごるはなしされば既にいふごとく加末とのみいひしを土俗の雅末といふよりうつりて貴人もいまは雅末とのみよぶはならひて正さゞるの誤といふべしさてかつみとはこの花のかたちかの勾鷲都々伊々志都々伊などいふいにしへの槌の形なせるをもて名付しなり云々今按ずるにこの説いたくたがへり先菰に花なきよしいひたるはいかゞすでに袖中抄に能因が歌枕を引れたるをしらぬにかいかで花なきものをばこも花を云々とはいはれんこれおのが説をのみたてんとし

堀川百首
花かつみましりにさけるかきつはた　公實卿
誰しめさして衣にするらん
永久四年百首
且見戀　大進
いかにせんあさかの沼の淺ましや
かつみる人にあかぬこゝろは
夫木集巻第三春部三
春駒はあさかのぬまにあさりして　俊頼朝臣
かつみの上葉踏したく也
同巻第八雜部十
洞院攝政家百首　民部卿爲家
山かつの伏屋のまこもあみめより
かつ亂れいる冬のしら雪
同巻第二十四雜部六
建保三年名所百首あさかのぬま
花かつみかつみちたゆる鴫鳥の　兵衛内侍
あさかのぬまにみなれそめけん
最勝四天王院名所御障子　後鳥羽院御製
さゝ分し淺かのぬまの花かつみ
かつみる夢のあくる程なさ
散木奇歌集長歌
中納言國信の坊城の亭にて人々長うたよませけるに向レ泉述レ懐といふことをよめる
かつきする、あまのあまたの、みるめにも、はゝからぬまの、花かつみ、かつみるさまは、まこもにて、名をかへけるも、うらやまし上下略
菖蒲
慈鎭和尚宇治山百首
東路の野澤のかつみけふはかり
あやめの名をもかりてける哉
壬二集
夏はまた淺かの沼の花かつみ
かつみる花にうつるたひかな
拾遺愚草
ふみしたくあさかの沼の夏草に
かつみたれそふしのふもちすり
爲家卿千首
花かつみおふる澤へのをみなへし
都にしらぬ秋や經ぬらん

娘子部四咲澤二生流花勝見都毛不知戀裳摺可聞

古今集巻第十四戀部四

題しらず　よみ人しらず

みちのくの淺香の沼の花かつみ
かつみる人に戀や渡らん

金葉集巻第三秋部上

水上月の心を　攝政左大臣

あしねはひかつみもしけき沼水に
わりなく宿る秋の夜の月

千載集巻第三夏部

中院入道左大臣中將に侍ける時歌合し侍りける
に五月雨の歌とてよめる　藤原顯仲朝臣

五月雨に淺香の沼の花かつみ
かつみるまゝにかくれ行哉

同巻第六冬部

水鳥の歌とてよめる　加茂重保

おく霜をはらひかねてやしほれ臥
かつみか下にをしのなくらん

新古今集巻第三夏部

最勝四天王院の障子に淺香の沼かきたるところ

野へはまた淺香の沼にかる草の　藤原雅經朝臣
かつみるまゝにしけるころ哉

續千載集巻第三夏部

弘長内裏百首歌奉ける時沼螢　爲氏卿

かりてほす淺かの沼の草の上に
かつみたるゝは螢成けり

同巻第十三戀三

だいしらず　權中納言公雄

花かつみかつみても猶たのまれす
淺かの沼の淺き心は

續古今集巻第七

見戀　今上御製

契をはあさかのぬまとおもへはや
かつみなからに袖のぬるらん

うしつらし淺かの沼の草の名よ　前中納言定家
かりにも深きえにはむすはて

續拾遺集巻第十三

天曆御時の御屏風に　源信明朝臣

花かつみかつ見る人の心さへ
あさかの沼となるそ悲しき

かりてみだりにかりやをつくりてふきはじむ其後にこもかるとかや五月五日の事にはあらずそれは菖蒲をぞふきはべるなる是は宮内卿師綱朝臣の説なり陸奥の司にて下向せる人なり慥なる事と可レ信之このかつみぶきををかしきさまにとりなして盛房がかたりけるが但かの中將はみちのくのところ〴〵の歌まくらみん爲に中將にかへて任也仍謂ニ陸奥中將一さる心なれば菖蒲なくばあさかのぬまのかつみをふけとも申されけん任國のあひだ金吾將軍の合戰出來て國中散々水驛云々またかの國にて逝去畢旁以遺恨然而數奇の名をとゞむるやさしきことなり又萬葉にはこもとよめる歌は多しかつみとよめるうたはすくなし

をみなへしさく澤におふる花かつみ
都もしらぬ戀もするかな

古今著聞集云五月の比圓位上人熊野へ參りける道の宿に菖蒲をふかでかつみふきたりけるを見てよみ侍りける「かつみふく熊野まうてのやどりをはこもくろめとそいふへかりける」後京極殿作庭記云こゝかしこの入江にあしかつみあやめかきつばたやうの水くさをあらしめて云々

八雲御抄云こもみちのくにゝははながつみといふただかつみともをみなへしさく澤におふる花がつみといへり是は中臣女に家持之遺歌按に中臣女に云々は誤なりこのうたは中臣女の家持におくる歌なり非ニ陸奥一如何可レ勘あしねかひかつみもしげきといふも同事なり

後深草院辨内侍日記云五月五日あさがれひにかつみをまゐらせたるを歌をそへてとりて參らせよと仰ごと有しにあやめとおもひてひきたがへたるもおもしろくて「かつみおふるあさかの沼もまたしらてふかくあやめとおもひける哉」

東關紀行云州崎所々に入ちがひてあしかつみなどおひわたれる中にをしかものうちむれて云々

契冲雜記云かつみは菰の異名なり六帖題にこもにつきてかつみを出したればこともの丶やうなれどぬなはにつきてねぬなはを載たる類とすべし

『此間彩畫一圖略之』

和歌

萬葉集卷第四

中臣女郎贈ニ大伴宿禰家持一歌

古今要覧稿卷第四百三十

●草木部

かつみ　花がつみ

かつみとは眞菰の一名なり花がつみは眞菰の花なり袖中抄に能因歌枕を引てつまびらかなりしかるを近きころ人々異説をまうけてうき草もて其ものゝよしいひ或は蒲黄をもて當たるなどいと〳〵みだりがはしき誣説にて論らふにたらず今古説をさぐり今案をくはへて異説をたゞしぬ委しくは正誤に辨ず

袖中抄云かつみぶき「みちのくのあさかの沼のはなかつみかつみる人の戀しきやなぞ」能因が歌枕云かつみとは菰をいふこもはなを花がつみといふ云々私云故六條左京兆の申されしは橘爲仲が任肥後守盛房が下向して歌枕もどのことゝ申けるに陸奥には菖蒲なし五月五日にはかつみぶきとてこもをなんふくといひけるなり而郁芳門院の根合に孝善がよめる

　あやめ草引手もたゆく長き根の
　　いかで淺かの沼に生けん

此うた別の難なくして持になりぬ又俊頼入金葉乎如何とこそははべりしか

江記には右方人々淺鹿沼間在二陸奥一自レ京一月路也不レ可レ逢二今日事一所レ引之菖蒲定(虫喰)□損歟

此難は侍てけれど判者は左歌はあさかの沼によせて根をばひくてもたゆくなりしとよみたることたがひたる心地すれどもすがたうためきたれば持と申云々

判者右方人雖レ加二他難一陸奥に菖蒲と云難は不二出來一歟むかしあやめのなかりければ五月五日にはかつみぶきとてこもをふくなり橘爲仲任にこもふきければ腹立てみをこなひてふかせける在廳のものをめしいだしてみればとしおひかしらしろきものにてありいかでとしのみよりてかゝることはせさするぞといましめければ中將のみたちの御時菖蒲やさぶらはざりけんあさかの沼のかつみをぞふくべきよしさぶらひければ其後かく例に成てつかまつるなりといひければ爲仲はぢてひきいりにけりとぞかたりつたへたれば實方の中將の時よりふくなるべし私云彼國にかつみぶきと云事なりそれは信夫郡に今年のこもを

貞應二年當座百首名所菖蒲　民部卿爲家卿
あやめかる淺香の沼にましりても
かつみにしるき夏むしのかけ

家集院北面にて　前中納言定家卿
手なれつゝすゝむいは井のあやめ草
けふは枕にみをやむすはん

毎日一首菖蒲を　民部卿爲家卿
としふかきおきのふか江のあやめくさ
しつむ下根は引人もなし

百首歌　大藏卿隆博卿
おりたちて引やつくさんけふをのみ
たのむの池に生るあやめを

わかのうらの入江にくちしあやめ草
ことしはしめてよに引れぬる
この歌は續古今撰者にくはゝり侍ける比鎌倉中
書王御會に菖蒲をよめると云々

家集江中菖蒲
あやめくさひくとやしつのおりたちて　源仲正
けふすみのえをふみにこすらん

住吉社三十首
すみの江にひけと盡せぬあやめ草　従二位家隆卿
ちよの五月や契り置けむ

百首御歌
すみの江の汀のあやめからてみむ　慈鎮和尚
ほかの軒端の物となるとも

同
野澤かたあめやゝはれて露おもみ　同
軒によそなる花菖蒲かな　西行上人

同
櫻ちるやとをかされるあやめをは
はなしやうふとやいふへかるらん
此歌家集云かやう院に中の院と申ところに菖
蒲ふきたるばうの侍けるにさくらのはなの散
けるがめづらしくおぼえてよめると云々

正治二年年百首
心さしあさゝはぬまのあやめ草　正三位季經卿
いかゝはねやのつまとみるへき

文治元年七社百首
しけりこしあさゝはをのゝあやめ草　民部卿爲家卿
今は五月とはやかりにけり

同
五月きてかもの社のあやめ草　同
けふはこまさへ引くらふなり

建保三年名所百首御歌
おもひのみますたの池のみかくれに　順徳院御製
しらぬあやめのねの亂つゝ

同
五月雨にいかほのぬまのあやめ草　従二位家隆卿
けふはいつかと誰か引らん

同
五月雨はいかほの沼の菖蒲草　従三位知家卿
かる人なみにくちやはてなむ

みくり現存六
あやめ草さやまの池のなかき根を
これもみくりのならひにそ引　卜部兼直

つくまえのぬま江のみつやふかゝりし
人くるしめのあやめ引なり　權僧公朝

家集さることへて人の物申つかはしける返事に五日
をりにあひて人に我身やひかれまし
つくまの沼のあやめ成せは　西行上人

貞應三年百首沼邊菖蒲
つくま江の入えの沼のあやめ草
この五月雨にかる人もなし　民部卿爲家卿

みくりくるつくまの沼のあやめ草
引と盡せぬ根にこそ有けれ　皇太后宮大夫俊成卿

同
なには人蘆まのあやめあしのやに
やかてそへてやけふはふくらん　同

同
みつかきやさ月のけふのみとひらき
かさるあやめの香さへなつかし　同

大嘗會悠紀方御屛風
なかさはの池のあやめを尋てそ
千代のためしにひくへかりける　後鳥羽院御製

御集十首御歌中江菖蒲
けふとてやなにはほりえのあやめ草
たこのもすそもなく〳〵そ引　從二位家隆卿

家集戀歌中
とほつ人かりちの池の菖蒲草
中々たえねこむも賴もし　後德大寺左大臣

文治六年女御入內御屛風
あやめ草こゝのふしをやとゝのへて
たこのよとのにけふは引らん　參議爲相卿

寄二菖蒲一祝
君か世にひきこそそむれ谷かけの
藥のあやめ長き例に　民部卿爲家卿

貞應三年百首古池菖蒲
あはれなりいく田の池のあやめ草
いかなる人のねかゝよひけん　光俊朝臣

家集

さは水にゑしのおりひくあやめ草
君か臺にいとひふくらし

家集　後頼朝臣
みかきもるゑしのたまえにおり立て
引るあやめはねも遙なり

同　同
ひきかくるみつのみまきのあやめ草
ねに手をそへて玉とつらぬく

祺子内親王　兵衛
たまにぬくけふのあやめは宿ことの
軒端にかけて誰かみさらん

家集物思けるころ　泉式部
なかれつゝみつの渡のあやめ草
ひきかくすへきねやは殘れる

大甞會主基方御屏風　前中納言實房卿
あやめ草ひらの谷水そこふかみ
なかきは千代のはしめ成けり

家集菖蒲　同
水きよきとみのをかはのあやめ草
いつれのねをか分て引へき

老若五十首歌合　後京極攝政
なほさりに袖の菖蒲をかたしきて
枕も夢もむすふともなし

御集菖蒲　法性寺入道關白
しつのやはもとはよもきのかたひさし
あやめ計をけふはふかなん

久安百首　季通朝臣
わかすみかもとのよもきかやとなれや
あやめ計をけふはふかなん

同　上西院兵衛
こもりえのみきはのあやめ引かへて
玉の臺にかゝるけふ哉

承久二年四季百首歌　前中納言定家卿
色はまたわかれぬ軒のあやめ草
さつきもなのるあけくれの空

同
たまのをの長きよちきれしらいとに
まかふあやめのねは細くとも

家集　後頼朝臣
菖蒲かるあさかの沼に風吹は
をちの旅人袖かをるなり

そほちつゝ引かくれともかひなきは
　數ならぬまのあやめなりけり

古今六帖夏
　あやめ草
さはへなるみこもかりてはあやめ草
　袖さへひちてけふやとるらん
さ月てふ五月にあへるあやめ草
　ひくもね長く生初にけり
あやめ草ねなかき命つけはこそ
　けふとしなれは人の引らめ
水かくれて生る五月のあやめ草
　かを尋てや人の引らん
さみたれの玉にぬく日のあやめ草　みつね
　ねにあらはれてなきぬへらなり
かくれぬの底におふれとあやめ草
　ねこめに引てみる人はみつ
あやめ草ね長きみれは澤水の　貫之
　深き心もしりぬへらなり
あやめ草いくよのさ月あひぬらん
　くる年毎にわかくみえつゝ

新撰六帖夏
　あやめ草
いかにせん今は六日のあやめ草　衣笠内大臣家良公
　引人もなきわか身成けり
いつ迚も身のみうきぬのあやめ草　大納言爲家
　逢こともしらぬねこそつらけれ
有漏のみの假のあやめの草枕　九條三位入道知家
　この世は旅の夢そかなしき
床の上にあやめのわか葉片敷て　左京大夫行家
　ねをみせねはやよはの短き
引人も無てやみにしみこもりの　右大辨入道光俊
　うきぬのあやめ何しけるらん

夫木和歌集卷第七夏部一
　菖蒲
つりのをの絲より長きあやめ草　能宣朝臣
　ねなから引てわさ競せん
　この歌はたじまのかみためちかゝ家屏風のゑにさうぶを舟につくりてつりする人のとまる所と云々
家集菖蒲を　大納言經信卿

かくれぬに生るあやめもけふは猶
尋てひかぬ人やなからん

中宮と申ける時五月五日菖蒲のねにそへて遊義門院に奉られける　永福門院

かけてみよ君に心のふかき江に
ひけるかひなきうきねなれとも

御返し　遊義門院

君か代のためしなるまてなかきねに
深き心のほとそ見えける

又巻第十七上雑歌

菖蒲を　中務卿宗尊親王

いつまてかあやめはかりの長きねを
泪もしらぬ袖にかけゝん

又巻第十九下同歌

藤原爲道朝臣第三年に結縁經供養し侍けるついでに寄菖蒲懐舊を　法印定爲

かけてたに思ひやはせしあやめ草
なかき別のかたみなれとは

新續古今和歌集巻第三上夏歌

五月時鳥と云ことを　式部卿邦省親王家少將

心あらは音をそへてなけ時鳥
あやめをむすふ夜半の枕に

正治二年百首歌奉りけるに　三條入道左大臣

片敷のさ夜の枕に通ふなり
あやめにかをる軒の下かせ

文治六年女御入内屏風に菖蒲かりたる所又人家にふきたるかたあり　前中納言定家

あやめ草なかき契りをねにそへて
千世のさ月といはふけふ哉

又巻第十一戀歌一

建保名所百首歌めされけるついでに　順德院御製

思ひのみ益田の池のみかくれに
しらぬあやめのねに亂つゝ

水無瀬殿戀十五首歌合に夏戀を　後鳥羽院御製

さてもいかにいはかき沼のあやめ草
あやめもしらぬそての玉みつ

又巻第十七上雑歌

年ごろこもりゐて侍けるに五月五日内わたりの人の許よりなどあからさまにもなどいひて侍ければ　周防内侍

けふ迄長きねをかけんとは
彼の結縁經のついでに同じくよみて送りける
昔し思ふ涙を袖にかけそへて　後中院前内大臣
けふのあやめのねこそ盡せね
又巻第二十慶賀歌
五月五日枇杷皇太后宮に菖蒲の根を奉らせ給と
て　上東門院
底ふかくひけとたえせぬあやめ草
千とせを松のねにやくらへん
法成寺入道前攝政太政大臣の許に藥玉につけて
つかはしける　枇杷皇太后宮
長き世の例に引はあやめ草
おなしよとのもわかれさりけり
返し　法成寺入道前攝政太政大臣
おり立て引るあやめのねをみても
けふより長き例をもしる
新拾遺和歌集巻第三夏歌
だいしらず　祝部成久
あやめ草五月の今日の郭公
袖にはかけぬねをやそふらん

時鳥おのか五月の時しらは　前關白左大臣
あやめかりふく宿になかなん
又巻第十哀傷歌
枇杷の皇太后宮かくれさせ給て後御帳のうちを
何となくみいれ侍ければしかせ給たりけるあや
めの草の侍けるをみて讀る　江侍従
玉ぬきしあやめの草は有なから
夜床はあれん物とやは見し
等持院贈左大臣かくれて後五月五日讀侍ける
あやめ草ことしはよそにみる袖に　權大納言義詮
かはりてかゝるわか涙かな
又巻第十八雑歌上
朝五月雨　前中納言定家卿
玉水もしとろの軒のあやめ草
五月雨なから明るいく夜そ
新後撰和歌集巻第三夏歌
千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成
立はなにあやめの枕にほふ夜そ
昔を忍ふ限なりける
久安百首歌奉し時　左京大夫顯輔

あやめをはふきそふれとも五月雨の
　ふるやの軒はもるにそ有ける

伏見院の御時五十番歌合に夏雨を讀侍ける
樗さく梢に雨はやゝはれて　前大納言經親
　軒のあやめにのこる玉水

夏歌の中に　院　冷泉
あやめつたふ軒のしつくも絶々に
　晴間にむかふ五月雨の空

百首歌奉し時　左近中將忠季
夕月夜かけろふ窓は涼しくて
　軒のあやめに風渡るみゆ

後宇多院に奉ける百首歌の中に
五月雨の晴間待出る月影に　法印定爲
　軒のあやめの露そ涼しき

又卷第十四戀歌五
絶て久しくとはぬ人に五月五日あやめの根につけてつかはしける人にかはりて
　永福門院左京大夫
しられしな憂身かくれのあやめ草
　我のみ長き音にはなくとも

又卷第十七雜歌下
五月五日爲道朝臣身まかりて後三年めぐりぬるおなじ日數も哀にて前大納言爲世につかはさせ給ける　後二條院御歌
けふといへは別れし人の名殘より
　あやめもつらき物をこそおもへ

御返し　前大納言爲世
今日はなほあやめの草のうきねにも
　いとゝみとせの露そかはかぬ

新千載和歌集卷第十六雜歌上
五月五日藥玉をつかはすとて　前大納言爲定
代々かけて猶こそたのめ菖蒲草
　又引人の身にしなければ

返し　源清氏朝臣
思ふかひなきみこもりのあやめ草
　引とは何の色にみゆらん

又卷第十九哀傷歌
爲道朝臣身まかりてはての日結緣經供養しける時寄二菖蒲一懷舊といふことを　了然上人
忘しなよその袂のあやめ草

題しらず　　よみ人しらず
數ならぬ身はかくれぬのあやめ草
　うき例にや人にひかれん
續千載和歌集卷第三夏歌
題しらず　　源邦長朝臣
難波かたあしふくこやの軒端にも
　けふやあやめの隙なかるらむ
五月雨　　法眼慶融
かりにふく蓬あやめの一本も
　軒はにかれぬ五月雨のそら
又卷第八羇旅歌
藤原爲道朝臣あづまに侍ける時五月五日あやめに添てつかはしける　　前僧正公朝
旅ねには思はさらなむ草枕
　あやめに今宵結ひかへつゝ
返し　　爲道朝臣
かり初の菖蒲にそへて草枕
　こよひ旅ねの心地こそせね
又卷第十六雜歌上
五月四日昔今の事などのどかに申たりけるあし

たにあやめにつけて　　贈從三位爲子
とにかくに昔をかけし昨日より
　袖のうきねは猶もかはかす
出家の後おとづれざりける人のもとへ五月五日菖蒲のねをつかはすとて　　入道前太政大臣
あやめ草かけはなれても墨染の
　袖にはあらぬねそかゝりける
返し　　よみ人しらず
墨染の袖にかこちてあやめ草
　思はぬたかそかけはなれける
又卷第二十賀歌
正應二年關白詔かうふりて五月五日藥玉にそへて奏し侍ける　　後近衞關白前右大臣
いつかとて待しあやめも今よりそ
　君か千年をかけてつかへん
御返し　　伏見院御製
菖蒲草ひきくらへてもつかふへき
　例は長き世にや殘らん
風雅和歌集卷第四夏歌
題しらず　　前大納言尊氏

古今要覽稿卷第四百二十九

●草木部

和歌二

玉葉和歌集卷第三夏歌

五月四日家に菖蒲ふくをみてよめる

あつまやの軒端にねさせあやめ草　平經正朝臣
うゑぬしのふも生すやはあらぬ

菖蒲を讀侍ける　權中納言公雄

けふといへはあやめ計そふきそふる
軒はふりぬる蓬生のやと

後三條院みこの宮と申ける時菖蒲のねめしける奉るとて　辨乳母

谷ふかき岩ねのあやめ君かため
なかき例を引出てつる哉

百首御歌の中に　後鳥羽院御製

あやめふくかやか軒端に風過て
しとろにおつる村雨の露

後鳥羽院に五十首歌奉けるに　宮內卿

しつかふくあやめの末をたよりにて
すみかならふる軒のさゝかに

正治百首歌奉ける時　二條院讃岐

あやめふく軒端すゝしき夕風に
山時鳥ちかくなりけり

又卷第九戀歌

千五百番歌合に　後鳥羽院宮內卿

我戀は人しらぬまのあやめ草
あやめぬ程そねをも忍ひし

又卷第十二同歌四

五月五日さうぶにさして人のもとにつかはしける　小町

あやめ草人にねたゆと思ひしは
我身のうきに生るなりけり

又卷第十四雜歌一

こもりゐて後五月五日菖蒲の根につけて大納言三位につかはしける　從一位兼敎

ねをそへて猶こそ忍へあやめ草
忘れぬ妻のけふの昔を

よみ人しらず

なかゝらぬうきねとみれはあやめ草

我そ物思ふ身とはなりぬる

やかて軒端に枯にける哉

新後拾遺和歌集巻第三夏歌

家にて人々三首歌よみ侍しに菖蒲を　左大臣

あやめ草けふはかけよとなかきねを
袖よりみする時は來にけり

五月五日藥玉を送るとて　枇杷皇太后宮

なかき世のためしにひけはあやめ草
おなしよと野もわかれさりけり

返し　法成寺入道前攝政太政大臣

おり立てひけるあやめのねをみてそ
けふより長き例ともしる

百首歌奉し時菖蒲　前關白太閤

あやめ草けふかる跡に殘れるや
淀野に生るまこも成らん

引むすふあやめの草の枕をは　前關白近衞
旅とやいはん一夜ねにけり

夏の歌の中に　中宮大夫公宗

なかき根を引にまかせて沼水の
ふかさしらるゝあやめ草哉

かくれぬに生てねふかきあやめ草　一品法親王寛尊
心もしらす誰か引らん

百首の歌めされしついでに五月雨

五月雨はあやめの草のしつくより　後光嚴院御製
猶落まさる軒の玉水

夏の歌とて　前中納言匡房

さみたれは宿につくまのあやめ草
軒の雫に枯しとそ思ふ

又巻第七雑歌春

題しらず　源經氏

くちねたゝ岩垣ぬまのあやめ草
うきみこもりは引人もなし

引人のなきにつけてもあやめ草　卜部兼直
うきにしつめるねこそなかるれ

又巻第十四戀歌四

わづらひて久しうこざりける男のもとよりさう
ぶのみをつかはしてみのなりゆくさまをみせ
ばやといへりける返りごとにむすめにかはり
て

旅ねに人の思ひ立らん

又卷第十四戀歌四

法成寺入道攝政ながきねをつかはしたりける返事に　堀河右大臣母

なかしともしらすやねのみなかれつゝ
　心のうきに生るあやめは

二日ばかりあはざりける女に五月五日いひつかはしける　實方朝臣

あはぬまの汀におふるあやめ草
　ねのみなかるゝ昨日けふかな

六日女のもとにいひつかはしける　道信朝臣

佗ぬれは昨日ならねとあやめ草
　けふも袂にねをそかけゝる

又卷第二十賀歌

郁芳門院の根合のうた　春宮大夫師頼

たつのゐる岩かき沼のあやめ草
　契てひかん君かためには

續拾遺和歌集卷第三夏歌

菖蒲を詠侍ける　前中納言雅具

あやめ草一夜はかりの枕たに
　むすひもはてぬ夢のみしかさ

百首歌ゝされしついでに　太上天皇

あやめ草いつの五月に引そめて
　長き例のねをもかくらん

又卷第七雜歌

夏の歌の中に　前右兵衞督爲敎女

あやめ草けふとていとゝかけそへつ
　いつともわかぬ袖のうきねに

又卷第十四戀歌四

白河殿七首歌寄沼戀　後嵯峨院御製

かくれぬにおふるあやめの我なれや
　しけきうきねも知人そなき

男に忘られにける人の五月五日枕に菖蒲をさしておきたりけるをみて　赤染衞門

かはくまもなき獨ねの手枕に
　いとゝあやめのねをやそふへき

あたなりける男の許に五月六日人にかはりてつかはしける　周防内侍

さもこそはかりそめならめあやめ草

年の緒長きためしにそひく
入道前太政大臣
幾千世といはかき沼のあやめ草
長きためしにけふやひかれん
題しらず　つらゆき
郭公聲きゝしよりあやめ草
かさす五月としりにし物を
又巻第十六雜歌一
やしなひ侍けるむすめの五月五日くす玉奉らせ
侍けるにかはりて讀侍ける　右近大將道綱母
かくれぬにおひそめにけるあやめ草
深きしたねは知人もなし
御返し　東三條院
あやめ草ねにあらはるゝ今日こそは
いつかと待しかひも有けれ
續後撰和歌集巻第十六雜歌上
夏歌中に
枕とてむすふはかりそあやめ草　藤原孝繼
ねぬに明ぬる夏のよなれは
身はかくてうきぬの池のあやめ草　正三位知家
ひく人もなきねこそつきせね
續古今和歌集巻三第夏歌
題しらず　貫之
みかくれておふるさ月のあやめ草
長き例に人はひかなん　堀川院御歌
玉もかる池の汀のあやめ草
引へきほとに成にけるかな
人のもとにくす玉につけてつかはしける　和泉式部
身のうきにひけるあやめのあちきなく
人の袖迄ねをやかくへき
百首御歌の中に　土御門院御歌
あやめ生る沼の岩かきかきくもり
さもさみたるゝ昨日今日哉
又巻第九離別歌
五月五日藤原宣雅朝臣常陸介にて下りける時左
大將濟時の馬の餞し侍りけるにかはらけとりて　大中臣能宣朝臣
あやめ草けふしもなとか引わかれ

袂に餘るねこそ絶せね

又卷第八哀傷歌

をさなき子のうせにけるがうゑおきたりける菖蒲を見て讀侍ける　高陽院木綿四手

あやめ草誰しのへとかうゑ置て
蓬か本の露と消なん

なげく事侍ける五月五日人のもとへ申つかはしける　上西門院兵衛

けふくれとあやめもしらぬ袂哉
昔をこふるねのみかゝりて

近衞院かくれ給にければ世をそむきて後五月五日皇嘉門院に奉られける　九條院

あやめ草引たかへたる袂には
昔をこふるねそかゝりける

御返し　皇嘉門院

さもこそはおなし袂の色ならめ
かはらぬねをもかけてける哉

又卷第十一戀歌一

くすだまを女につかはすとてをとこにかはりて　三條院女藏人左近

沼ことに袖そぬれける（みイ）あやめ草
心に似たるねをもとむ（たづねイ）とて

五月五日馬内侍につかはしける　前大納言公任

時鳥いつかと待しあやめ草
けふはいかなるねにか鳴へき

又卷第十四同歌四

内に久しくまゐり給はざりける頃五月五日後朱雀院の御返事に　陽明門院

かた〴〵に引別れつゝあやめ草
あらぬねをやはかけむと思し

又卷第十六雜歌上

三條院御時五月五日あやめのねを時鳥のかたに作りて梅の枝にすゑて人の奉りて侍けるを是を題にて歌つかうまつれと仰られければ

梅か枝にをりたかへたる郭公　三條院女藏人左近
こゑのあやめも誰かわくへき

新勅撰和歌集卷第三夏歌

寛喜元年女御入内屏風五月沼江菖蒲宴のところ　前關白

深き江にけふあらはるゝあやめ草

申ゆるして侍けれはそのよろこびに五月五日に
まかりてよめる　　　　　　　　平　致　經
君ひかすなりなましかはあやめ草
　　いかなるねをかけふはかけまし
千載和歌集巻第三夏歌
久我内大臣の家にて旅宿菖蒲といへる心をよめ
る　　　　　　　　　　　　前中納言雅頼
みやこ人ひきなつくしそあやめ草
　　かりねの床の枕はかりは
菖蒲の歌とてよみ侍ける
　　　　　　　　　　　　攝政前右大臣
さみたれにぬれ〳〵ひかんあやめ草
　　ぬまのいはかき波もこそこせ
　　　　　　　　　　　　内大臣良通
のきちかくけふしもきなくほとゝきす
　　ねをやあやめに添てふくらむ
又巻第十八雜歌下
誹諧歌
五月五日菖蒲をよめる　　　道因法師
けふかくる袂にねさせあやめ草
　　うきはわか身にありとしらすや
新古今和歌集巻第三夏歌
五首歌人々によませ侍ける時夏歌とてよみ侍け
る　　　　　　　　　　　　攝政太政大臣
うちしめりあやめそかをる時鳥
　　鳴やさ月の雨の夕暮
述懐によせて百首歌讀侍ける時
　　　　　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成
けふは又あやめのねさへかけそへて
　　亂れそまさる袖のしら玉
五月五日くす玉つかはし侍ける人に
　　　　　　　　　　　　大納言經信
あかなくに散にし花の色々は
　　殘りにけりな君か袂に
つぼねならびにすみ侍けるころ五月六日もろと
もにながめあかしてあしたになかきねをつゝみ
て紫式部につかはしける　　上東門院小少將
なへて世のうきに流るゝあやめ草
　　けふ迄かゝるねはいかゝみる
返し　　　　　　　　　　　紫　式　部
なにことゝあやめはわかてけふも猶

むかし中院にすませ給ひける頃は見えざりけるあやめを人の中の院のと申けるをみてよませ給ひける　　第三宮

淺ましやみし古里のあやめ草
　我しらぬまに生にける哉

又巻第七戀歌上

五月五日はじめたる女のもとにつかはしける
　　小一條院御製

しらさりき袖のみぬれてあやめ草
　かゝる戀ちにおひん物とは

閏五月侍けるとし人をかたらひけるが後の五月過てなと申ければよめる　橘季通

なそもかく戀ちに立てあやめ草
　あまりなかくも五月なるらむ

又巻第八同歌下

人を恨て五月五日につかはしける

逢事のひさしにふけるあやめ草　前齋宮河内
　たゝかりそめの妻とこそみれ

又巻第十雜歌下

後三條院かくれおはしまして後五月五日一品宮の御帳にさうぶふかせ侍けるに櫻の作り花のさされたりけるをみてよめる　藤原有祐朝臣

あやめ草ねをのみかくる世中に
　折たかへたる花櫻かな

詞花和歌集巻第二夏

だいしらず　　待賢門院堀川

こやの池に生るあやめの長きねは
　引白糸の心地こそすれ

又巻第九雜上

忍びける男のいかゝ思ひけん五月五日の朝にあけて後歸りてけふあらはれぬるなんうれしきといひたりける返事によめる　和泉式部

あやめ草かりにもくらむ物ゆゑに
　ねやの妻とや人のみるらん

ものへまかりける道に人のあやめをひきけるを長きねやあるとこはせけるをしみ侍ければよめる　周防内侍

いかてかくねを惜むらむあやめ草
　うきには聲も立てつへきみを

おほやけの御かしこまりにて侍けるを僧正源覺

るに小辨おそくいだすとてかたの人々とめてつぎの物がたりをいだし侍ければ宇治の前太政大臣かの小辨がもの語はみどころなとやあらんとてこともがたりをとゞめてまち侍ければ岩がきぬまといふもの語をいだすとてよみはべりける　小　辨

引すつる岩かき沼の菖蒲草
思しらすもけふに逢かな

又卷第十七同三

ことありて播磨へまかりくだりけるみちより五月五日に京へつかはしける　中納言隆家

世中の憂におひたるあやめ草
けふは袂にねそかゝりける

五月五日服なりける人の許につかはしける

けふとてもあやめしられぬ袂には　小　辨
引たかへたるねをやかくらん

金葉和歌集卷第二夏歌

五月五日實能卿のもとにくす玉つかはすとて

あやめ草ねたくも君かとはぬ哉　内　大　臣
けふは心にかゝれとおもふに

永承六^ニイ^年殿上にて根合にあやめをよめる

萬代にかはらぬ物は五月雨の　大納言經信
雫にかをるあやめなりけり

郁芳門院の根合にあやめをよめる

あやめ草引手もたゆく永きねの　藤　原　孝　善
いかてあさかの沼に生けん

承暦二年内裏の歌合にあやめを　春宮太夫公實

玉江にやけふのあやめを引つらん
みかける宿の妻とみゆるは

みやづかへしける娘のもとに五月五日くす玉つかはすとて　權僧正永縁母

あやめ草我身のうきを^ニイ^引かへて
なへてならぬに生も出なむ

百首の歌の中にあやめをよめる

あやめ草よとのに生る物なれは　春宮太夫公實
ねなから人は引にやあらん

五月五日家にあやめふくを見てよめる
右近衞府生秦兼久

同しくはとゝのへてふけあやめ草
五月雨たらはもりも社すれ

後拾遺和歌集卷第三夏

宮内卿經長が桂山庄にて五月雨をよみ侍りける

つれ〳〵と音絶せぬは五月雨の　橘俊綱朝臣
軒のあやめの雫なりけり

五月五日はじめたる所にまかりてよみ侍ける

香をとめてとふ人有をあやめ草　恵慶法師
あやしく駒のすさめさりけり

永承六年五月五日殿上根合によめる

つくま江の底のふかさをよそなから　良暹法師
ひけるあやめのねにて知哉

右大臣中將に侍ける時歌合し侍けるによめる

ねやのうへに根さしとゝめよあやめ草　大中臣輔弘
尋て引も同し淀野そ〔をイ〕

とし頃すみ侍けるところをはなれてほかにわたりてまたのとしの五月五日によめる

けふもけふあやめもあやめ變らぬに　伊勢大輔
宿こそ有し宿と覺えね

又卷第十哀傷

赤染匡衡におくれてのち五月五日によみてつかはしける　美作三位

墨染の袂はいとゝこひちにて
あやめの草のねやしけるらん

又卷第十三戀三

陽明門院皇后宮と申ける時ひさしくうちにまゐらせ給はざりければ五月五日うちより奉らせ給ひける　後朱雀院御製

あやめ草かけし袂のねを絶て
更に戀ちにまよふ比かな

又卷第十四同四

五月五日に人のもとにつかはしける

ひたすらに軒のあやめのつく〳〵と　和泉式部
思へはねのみかゝる袖哉

又卷第十五雜一

むらかみの御時うへにのぼりて侍けるにうへ御とのごもりにければかへり下りてよみ侍ける

かくれぬにおふるあやめのうきねして　齋宮女御
果はつれなくなる心哉

五月五日六條前齋院にものがたりあはせし侍け

右作者不知

古今和歌集卷第十一戀歌一

題しらず　よみ人しらず

時鳥鳴やさつきのあやめ草
あやめもしらぬ戀もするかな

拾遺和歌集卷第二夏

延喜御時歌合に　よみ人しらず

五月雨は近くなるらし淀河の
あやめの草もみくさ生にけり

屏風に　大中臣能宣

昨日まてよそに思ひしあやめ草
けふ我宿のつまとみる哉

題しらず　よみ人しらず

けふみれは玉の臺もなかりけり
あやめの草のいほりのみして

足曳の山時鳥けふとてや　延喜御製
あやめの草のねにたてゝなく

又卷第十二戀二

五月五日ある女のもとにつかはしける

いつかとも思はぬ澤のあやめ草　よみ人しらず
たゝつく〳〵とねこそなかるれ

題しらず　みつね

おふれとも駒もすさめぬあやめ草
かりにも人のこぬか侘しき

又卷第十六雜春

女のもとにしろき糸をさうふのねにしてくすたまをおこせ侍てあはれなることゝもをあるをとこのいひおこせて侍けれは　よみ人しらず

聲立てゝ鳴といふとも時鳥
袂はぬれし空ねなりけり

又卷第二十哀傷

天暦御門かくれ給て又のとし五月五日に宮内卿かねみちかもとにつかはしける　女藏人兵庫

さ月きてなかめ増れはあめ草
思絶にしねこそなかるれ

ふくたりといひ侍けるごのやり水にさうふをうゑ置てなくなり侍にける後のとしおひいてゝ侍けるをみて　粟田右大臣

忍へとやあやめも知ぬ心にも
なかゝらぬ世の憂にうゑけん

古今要覽稿卷第四百二十八

●草木部 菖蒲二

和歌 一

萬葉集卷第八 夏雜歌

大伴家持霍公鳥歌一首

霍公鳥雖待不來喧蒲草玉爾貫日乎未遠美香

又卷第十 同雜歌

詠鳥

霍公鳥厭時無菖蒲蘰將爲日從此鳴度禮

右柿本朝臣人麿歌集出 卷十八再出 作者田邊史福麿

又卷第十八

爲贈京家願眞珠歌一首幷短歌

珠洲乃安麻能於伎都美可未爾伊和多利弖可都伎等流登伊布安波妣多麻伊保知毛我母波久吉餘之都麻乃美許登能許呂毛泥乃和可禮之等吉欲奴婆玉乃夜床加多古里安佐爾我美可伎母氣頭良受伊泥氐許之月日余美都追奈氣久良牟心奈具佐余保登等藝須伎奈久五月能安夜女具佐波奈多知波奈爾奴吉麻自倍可頭良爾世餘等都追美氐夜良牟

白玉乎都々美氐夜良波安夜女具佐波奈多知婆奈爾安倍母奴久我禰

又卷第十九

詠霍公鳥歌

霍公鳥今來喧曾無菖蒲可都良久麻泥爾加流流日安良米也

四月三日贈越前判官大伴宿禰池主霍公鳥歌不勝感舊之意述懷一首

和我勢故等手携而曉來者出立向暮去者振放見都追念鴨見奈疑之山爾八峯爾波霞多奈婢伎谿敝爾波海石榴花咲宇良悲春之過者霍公鳥伊也之伎喧奴獨耳聞婆不怜毛君與吾隔而戀流利波山飛超去而明立者松之佐枝爾暮去者向月而菖蒲玉貫麻泥爾鳴等余米安寢不令宿君乎奈夜麻勢

不飽感霍公鳥之情述懷作歌

春過而夏來向者足檜木乃山呼等余米左夜中爾鳴霍公鳥始音乎聞婆奈都可之菖蒲花橘乎貫交可頭良[沼]久麻而爾里響喧渡禮騰母尙之努波由

るにてもあるべし猶考べし
『此間彩畫二枚略レ之』

端午ニ所レ用モノハ白菖ト云又泥菖ト名ク席下ニ敷テ虫ヲ避ベシ不レ入ニ藥材一

以上三說其義皆一意其他諸家本草の說またこれに同じ岡村尙謙云古者西土にて菖蒲と稱するものは卽今のそうぶにして石菖蒲にあらず神農本經に菖蒲生ニ上洛池澤一といへる一言にて其義はおのづから明らけしまた呂氏春秋に冬至之後七十五日菖始生といへりこれは季春之月萍始生仲春芸始生といへるに其義同じいはゆる石菖蒲は其葉四時共に枯ざればこれをさして始生とはいふべからず又周禮に昌本左傳に昌歜といふもまた必ず石菖蒲にはあらず且古方書たゞ菖蒲とのみいひて石字を冠して稱せし事なきによれば古の菖蒲は卽今の池澤中に生ずるそうぶなる事明らけしまた菖蒲の一名を水劍草或は綠劍眞人などいへるも全くその葉の形狀によりて名付し物なるに今の石菖蒲は其葉劍脊なきといふにはあらねど菖蒲の劍脊の殊にいちじるしきにはさらに及ばざるにても古の菖蒲にはあらざる事明らけしまた漳州府志の說にても菖蒲は全く本條をさしていひ石菖蒲は其一種にして且劍脊あるものは卽本條のそうぶなる事彌明らけしされど吳氏本草に菖蒲一名堯韭といへるは今のそうぶよりは其葉極て細小なる石菖蒲こそ其名義には叶ふべけれど爰はいかにも神農本經の說に從ふを以て本義となすべし

本草綱目云石菖蒲葉有ニ劍脊一又香蒲葉似レ莞而褊有レ脊而柔云々

岡村尙謙曰石菖蒲は其葉の正中なだらかに高く起りて其左右はいと薄ければ劍脊なしとはいふべからざれど香蒲に至りてはこれを石菖蒲に比するに絕て脊といふべき處なければ其說全く誤れり予いまだ西土の劍を親見せずといへ共蓋し劍脊といへるは皇朝の刀の如く其中心一道隆起し本より末に至るものならではしかいふべからざる事證類本草に唐本草を引て菁茅卽三脊茅也とあるにてもをしはからるゝなりまた舊說に泥菖蒲は今のそうぶなりといへど時珍の說に泥菖蒲溪蓀俱葉無ニ劍脊一といへり凡今のそうぶ程葉に劍脊あるものは外には絕てまれなるを却てなしといふはまた大なる時珍の誤りなるか又は泥菖蒲に擬せしもの丶其品違へ

按延喜式に蒲を蒱に作れるは字書にみる所なし正字通に蒱蒲音同義別正韻蒱蹬樗蒱與ニ蒲葦一字同引三荀子柔従若ニ蒱葦一按蒲葦从レ水非从レ手荀子俗本譌作レ蒱同文鐸泥正韻樗蒱之蒱亦作レ蒲菖蒲之蒲亦作レ蒱竝非とみえたれば式に蒱に作るものもまた蒲の誤字なるべし

昌陽 同上

○按にこれまた昌盛の意なるべし

水劍草 本草綱目

○按に道家の稱

緑劍眞人 輟耕録

○按に以上二名は其義全く一意にて此物の水中に生じ其葉青緑色にして劍脊ありよりて名づく

石菖蒲 證類本草引集註本草

○按に後世菖蒲の石上に生ずるものを以て上とす故に名づく

堯韭 太平御覧引呉氏本草

○按に本草綱目引ニ典術一云堯時天降ニ精于庭一爲レ韭感ニ百陰之氣一爲ニ菖蒲一故曰ニ堯韭一今按に凡菖蒲を堯韭といへるは麥門冬を禹餘糧又禹芝といひ拘杞を西王母杖石龍芻を西王母簪などいへる類にてたゞ其物を見たてしまゝに異名を付しものなれば堯韭の名數も典術にいふ所のごとくにはあらざるべし

いはあやめ 多識編修治纂要

○按にいはは即石字の義也

せきしやう 同上

○按に此即石菖の字音なり

○正誤

本草辨疑云藥舗ニ菖蒲根、石菖蒲根ノ二種アリ本草ニハ菖蒲、白菖ノ二種アリ方書ニ菖蒲根トアレバ都テ石菖ノコトナリ是一寸九節ノ者也然ルヲ方書ノママニ菖蒲根ト書シテ藥家ニ求ルトキハ皆白菖ヲ賣ナリ誤也石ノ字ヲ付テ可レ求レ之

和漢三才圖會云按菖蒲者總名而本草有ニ五種一今分爲ニ三種一菖蒲石菖白菖是也入レ藥宜レ用ニ石菖根一醫書雖レ曰ニ菖蒲根一不レ可レ惑菖蒲乃石菖之大者長二三尺濶五六分有ニ劍脊一五月五日葺ニ屋檐一者也

用藥須知云今人家庭際ニ種ヘ盆翫ニ供スル石菖蒲根ナリ誤テ五月端午檐ニ挿ムモノヲ用ユルハ非ナリ其

かく日蔭のかづらの如し典藥寮あやめの机をたてまつる其後騎射の事あり云々

神農本經云菖蒲味辛温無レ毒一名昌陽生ニ上洛池澤及蜀郡嚴道ニ一寸九節者良露根不レ可レ用五月十二月採レ根陰乾

呂氏春秋云冬至之後七十五日菖始生

救荒本草云菖蒲今池澤處々有レ之救飢採ニ根肥大節稀ニ云々

漳州府志云菖蒲一名蓀生ニ石上ニ者爲ニ石菖蒲ニ又引ニ孝經援神契ニ菖蒲益レ聰葉長數尺而上鋭有レ脊如レ劔九節者食レ之成レ仙其本芳辛一握四寸切レ之爲レ俎謂ニ之菖歜ニ是文王所レ嗜者

○釋名

あやめぐさ 萬葉集延喜式本草和名和名鈔

○按に東雅にあやめといふ義不レ詳昔も此物の名によりて相論の事ありなどいひ傳へしといへり岡村尙謙曰物のあやめといふは文理の義なり此草水中に叢生し毎葉皆直立してこれを望めば其文理いと正しき草なる故にこれをあやめとは名付しなるべし

そうぶ 古今和歌集物名

○按に此卽菖蒲の字音也

ふくき草 莫傳抄藏玉集

○按に異名分類抄に吹疑らくは葺と歌にも玉の軒ふくふくき草といへり「大内や玉の軒ふくふくき草おほくも千代にひかれてやみむ」

しろみ草 莫傳抄

○按に異名分類抄に白見はもし貌見の誤ならずや言葉のつゞきしがおもはるゝなり他本可レ考「名にしおふ水の鏡の白見草軒のかざりの物とこそひけ」今按にあやめはその根いと白き物なる故に白見草といはんもさゝはりなかるべしされど八雲御抄にしろみ草は芋なりといへば爰の白見草は分類の説のごとく貌見草の誤りにやさはいへあやめもいもゝ其根皆しろき物なる故にまた異物同名なるもしるべからず

しやうぶ 東宮年中行事散木集

○按にこれまた菖蒲の字音也

菖蒲 神農本經

○按に本草綱目云菖蒲乃蒲類之昌盛者故曰ニ菖蒲ニ

れなり憶に羅浮山記に山中菖蒲一寸二十節といへるもまた此石菖蒲根をさしていへるなり今に至りては此二種通用さまたげなしといへ共古人用ひしものは必ず此石菖蒲にあらざれば古方を用ゆる時はよろしく尋常のそうぶ根を用ゆるかたその方意にはかなへり其他石菖蒲の種類極て多きよしは和漢三才圖會以下本草啓蒙等に詳なれど原是玩弄の品にして藥に入べきものにあらざれば爰にはたゞ菖蒲及び石菖蒲の二種をあぐるのみ

延喜典藥寮式云諸國進年料雜藥山城國三十二種云々昌蒲十斤

又云伊賀國二十三種云々菖蒲十斤

又云伊勢國五十種云々菖蒲一斤

又云尾張國四十六種云々菖蒲一斤

又云近江國七十三種云々菖蒲一斤

又云丹後國二十四種云々菖蒲四斤

又云伯耆國二十種云々菖蒲一斤

又云出雲國五十三種云々菖蒲一斤

又云安藝國三十二種云々菖蒲六斤

又云紀伊國三十五種云々菖蒲六斤

又云播磨國五十三種云々菖蒲六斤

又云美作國四十一種云々菖蒲二斤

又云備前國四十種云々菖蒲一斤

又云備後國二十種云々菖蒲四斤

又云土佐國十三種云々菖蒲四斤

又大舍人寮式云凡五月五日典藥寮進二菖蒲草一舍人叩レ門其詞曰漢女草(アヤメ)進(止)(良牟)宮內省輔姓名門候(止)申

續日本紀云天平十九年五月太上天皇詔云昔五日節常用二菖蒲一爲レ縵比來已停二此事一從レ今而後非二菖蒲縵一者勿レ入二宮中一

按に菖蒲を以てかづらとせし事既に萬葉集にみえたれば由來殊に久しきことなり

弘仁式云凡五月五日藥王料菖蒲逢(捴盛二一輿一)雜花十捧(盛レ瓮居レ臺)

三日平旦申內侍司列設二南殿前一(諸衛准レ此)

本朝月令云五月三日六衞府獻二菖蒲幷花等一事

公事根源云五月三日六府あやめの輿を南殿の階の東西にたつ又時の花を折そへて同じくおく四日にはあさがれひの庭に是をたつ主殿寮所々にしやうぶふく

又云五日節會天皇武德殿に出御ありて宴會をおこなはれ群臣に酒を給ふ也人々みなあやめのかづらをか

古今要覽稿卷第四百二十七

●草木部

あやめぐさ　そうぶ　菖蒲

あやめぐさ一名そうぶ一名ふくき草一名しろみ草は漢名菖蒲一名昌陽一名水劍草といへり古より此草を山城、伊賀、伊勢、尾張、近江、丹後、伯耆、出雲、安藝、紀伊、播磨、美作、備前、備後、土佐等より貢せし事くはしく延喜式にみえたり歌には山城の賀茂、鳥羽、美豆野、淀川、名乗池、大和の富緒川、猿澤池、益田池、攝津の難波堀江、昆陽(カヤ)池、玉江、住江、淺澤小野、生田池、長柄沼、伊勢の大淀浦、參河池、多能武池、丹波の平谷、近江の筑摩江、長澤池、紀伊の和歌浦、石見の浮沼池、越前の獵路池、越中の古江、玉江沼、陸奥の安積沼、玉造江、上野の伊香保沼、石垣沼、武藏の狹山池、阿賀須沼等を以て此草の名所とせし事拾遺集以下の撰集に詳なり今は燕子花に似て紫の花咲ものをあやめとし小蘆花をなして葉に劍脊あるものをそうぶといへど古にあやめといへるものは卽今のそうぶにして此紫花のものにはあらず凡古より五月三日には六衞府あやめの輿を南殿の左右にたて（弘仁式本朝月令公事根源）四日には主殿寮所々の宮殿にあやめをふき（公事根源）五日には百官悉くあやめの蘰をかけ（續日本紀延喜式）此日典藥寮よりあやめぐさ（延喜式）及びあやめの机をたてまつる（公事根源）などいへるもまた今のそうぶ也此草春月池澤中に叢生し葉の長さ三四尺廣さ四五分其中心表裏共に一道の劍脊ありて中々に石菖蒲及び他草のさらに比すべきものなし夏に至ればまれに二三寸の青穗をつく狀華撥に似て大にして且堅し其葉霜を經て皆枯るといへ共根は地中にありて盤屈し大さ馬鞭の如にして節多し其最密なるものは一寸の間八九節に至る今藥舖にひさぐ所の菖蒲根卽是也一種いはあやめ一名せきしやうとよぶものあり此卽西土にいはゆる石菖蒲一名堯韭といへる物也今處々の溪澗水石の傍に生ず其葉前條よりも極て細小にしてその中心表裏共になだらかに高く起りて頗る劍脊あるが如し此草四五月に至れば頻に小穗を抽で丶其狀前條に比すに甚だ細し後世方書多く此根を用ゆ卽藥舖にいはゆる石菖蒲根こ

みる所ありて其字を塡められしものなればいかにぞ時珍の說などに拘はりて古の日蔭蘰を論じぬる事やはある噫

○正誤

本草綱目云石松卽玉柏之長者也名山皆有之

按に古の石松は卽時生のものをいふくはしき事は下文にみえたり或は此長字を高長の長にして其草の蔓延するものをさしていひしにはあらざるもしるべからず

大和木草云古今集ニハ山カヅラトヨメリ

按に古今集大歌所の歌「まきもくのあなしの山の山人と人もみるかに山かつらせよ」奥儀抄に山かづらとは神樂にするには正木の葛にて頭をゆふなり葛木綿といふ物を額よりうしろへ引まはしてゆふなりとみえたれば日蔭かづらの事にてはなし

岡村尙謙云近頃の說に石松は卽日蔭鬘なりといへど名醫別錄に玉柏生二石上一如レ松高五六寸本草拾遺に石松生二天台山石上一似レ松高一二尺とみえたりこれによれば石松は卽玉柏の莖高きものにして別に二種蔓生のものありてそれをさして石松といひしにはあらず凡草木の一物にして大小高低の異なる事あるものは多くは其產地の肥瘠によりてなり今石松の玉柏におけるもまた同じ然るを本草綱目には其名の異なるによりて分て兩條とせしは全く誤れり扨石松と玉柏との一物なるよしは旣に嘉祐本草の掌禹錫にみえ和漢三才圖會にも石松を以て玉柏の條下に併せ入るれば寺島良安もまた掌禹錫と其意一つなる事明らけし然るを時珍ひとり石松を以て玉柏の長きものとせしより近頃の人遂に日蔭鬘を以てそれに擬すれども時珍以上絕て石松を以て蔓生のものとする說なきによれば古人のいはゆる石松は全く特生にして其莖玉柏より稍高きものなる事旣に本草拾遺にいへるが如くなるべしかゝれば日蔭鬘を日本紀に蘿字を用ひ和名鈔に女蘿字を訓ぜしをあたれりとしそれをこそ實に漢名とはいふべけれされど孫炎注爾雅云唐也蒙也女蔓也兎絲也一物四名詩云蔦與二女蘿一施二于松柏一毛萇云女蘿兎絲也文選云兎絲附二女蘿一博物志云女蘿寄二生兎絲一兎絲寄二生木上一呉晋本草云兎絲一名松蘿陸佃云在レ木爲二女蘿一在レ草爲二兎絲一廣雅云女蘿松蘿也などくさ〴〵の說あるをよそにして和名鈔には唐韻を引て蘿一名女蘿といひ日本紀には蘿此云比舸礙(ヒカゲ)とみえしは今に至りてその凭據のたしかなることはしるべからずといへども正に舍人親王も順朝臣も各

をとめさひすもいはふ比かな

○釋名

ひかげ古事記 日本紀

○按に凡いづれの山にても日蔭に生ずる草はいと多きものなれど此草を其形狀衆草と異なるによりてひとり日陰の名を得しものなるべし和訓栞には天照御神の磐戸にこもらせ給ひし時うすめ命日影さし出んことを言壽(コトホギ)てたすきにせし故によりての名なるよしみえたれどいかゞあるべき

ひかげぐさ夫木集

ひかげかづら延喜式 和名鈔

○按に神代には此草を以て手次とせしものなれと後には木綿を以て手次としこの草を以てかづらとする故に此名あり和名鈔には蘿蔓二字を以てひかげかづらとよめり

きつねのをかせ本草綱目 引二新校正一

○東雅云をかせは機絲なり山谷の間に生じて絲のごとくなるをいふなり

かみだすき本草啓蒙

○按にこれもうすめの命の古事によりて命せし名なり

きつねのたすき同上但馬方言

やまうばのたすき同上伊豫方言

天狗のたすき同上江戸方言

きつねけさ同上豐前方言

○按に以上五名其意並に同じ

ひかげかつら



むかしをかけて忘やはする　九條三位入道知家

て祭のつかひし侍けるにあるじはこのふたにちんのくし白がねのはこにかがみなど入てつかひは中宮のはらからなればにや日かげとおぼしくてかゝみのうへにあしてにてかきて侍ける

ひかけ草かゝやく影やまかひけん　藤原長能
ますみの鏡くもらぬ物を

古今六帖草

ひかけ

をとめこかひかけの上にふる雪は
花のかさしにいつれたかへり

人しれぬ心を君におく山の
おもひかけてふ草に生けり

あさひかけにをへる山に照月の
うつくしつまを山こしにおきて

新撰六帖草

ひかげ　衣笠内大臣家良公

諸人のかくるひかけの心はに
あまてる神のめくみをそみる　前藤大納言爲家

見る度にひかけのかつらよそなから

しはしたにありとはえこそ頼まれぬ

かさすてふ心はましるひかけ草　左京大夫行家
さすやひかけの草のはの露

さはかりや木の下くらき奥山に　右大辨入道光俊
苔のみとりも花咲にけり
あるへくもなきひかけ草哉

夫木和歌集卷第二十八雜部十

日蔭草　前中納言爲氏卿

日かけもて軒端ふくてふたましつゝ
長きをかけて猶まつれとや

百首歌　慈鎭和尙

消殘るさかねの雪のひまことに
其をもみする日蔭草かな

ひかけ續詞花　讀人しらず

けふかさす神のいかきの玉ひかけ
むかしのことを尋てそ來る

日かけ現存六　從三位行能卿

あかねさす日かけのかつら千代かけて

和名鈔引二唐韻一云、蘿〔魯何反日本紀私記云蘿比加介〕女蘿也
古語拾遺云蘿蔦〔比可氣〕
大和本草云今本邦ニ松蘿ヲヒカゲノカツラト訓ズ未レ知二是否一ヒカゲニ地ヨリ生ズ寄生ニアラズ然陸璣詩疏松蘿蔓二延松上一生レ枝正青爾雅翼無二襍蔓一ト云又青長如レ帶トイヘルハヒカゲニヨク似タリヒカゲノカツラハ我邦古書ニ多シ日本紀神代上以レ蘿爲二手繦一トイヘリ長キカヅラナリ實アリテ多ク生ズ云々又新古今祭主輔親ガ歌ニ「アカネサス朝日ノ里ノヒカケ草豐明ノカサシナルベシ」トヨメルモ是ナリ神樂ノ時神人カザシニスルモノナリ

和歌

萬葉集卷第十九
十一月二十五日新嘗會肆宴（トヨノアカリニ）應 詔歌
足日木乃夜麻之多日影可豆良家流宇倍爾也左良爾梅乎也奴波牟（アシヒキノヤマシタヒカゲカヅラケルウヘニヤサラニウメヲシノバム）
右一首少納言大伴宿禰家持

後撰和歌集卷第十一〔戀歌三〕
五節の所にて閑院のおほい君につかはしける
もろまさの朝臣
ときはなるひかけのかつらけふしこそ
ひの色にふかく見えけれ
かへし
たれとなくかゝるおほみにふかゝらん
いろをときはにいかゝたのまん

後拾遺和歌集卷第十九〔雜五〕
中納言實成宰相にて五節奉りけるにいもうとの弘徽殿女御の御もとに侍りける人かしづきに出たりけるを中宮の御かたの人々ほのかにきゝて見ならしけむもゝじきをかしづきにてみるらんほども哀と思ふらんといひてはこのふたにしろがねのあふぎにほうらいの山づくりなどしてさしぐしに日かげのかづらをむすびつけてたきものをたてぶみにこめてかの女御の御方に侍ける人のもとよりとおぼしくて左京のきみのもとにといはせて某の日さしおかせける
おほかりしとよの宮人さし分て・よみ人しらず
しるき日影を哀とそみし
かくて臨時祭になりて二條前太政大臣中將に侍

古今要覧稿巻第四百二十六

●草木部

ひかげかづら 狐のたすき 蘿

ひかげかづら一名ひかげぐさ一名狐のをかせ一名狐のたすき一名天狗のたすきは卽玉柏の一種地上に蔓延するものなり故に其形狀は全く玉柏と相同じ扨ひかげの物にみえたるは天照御神の天の石窟に隱れ給ひし時天宇受賣命(アマノウズメノミコト)其窟戸の前にて手次(タスキ)となして巧に俳優をなせしを始とし古事記日本紀 其手次とせしものを以て内親王以下命婦女孺及び行列の人々これを鬘とせしは踐祚大嘗祭の時を始とす延喜式 またひかげに日影の字を用ひしは太安麻呂を始とし古事記 それを日蔭の字に代しは藤原忠平を始とす延喜式 此二つは其字異なりといへ共原より皇朝の名なるをそれに西土の蘿字を塡られしは舍人親王を始とし日本紀 さらに唐韻を引て女蘿の字を訓せしば順朝臣を始とす和名鈔 其女蘿の字によりて近頃の說には松蘿にもまた女蘿の名あるによりてひかげは卽猿をかせ也といへど今十一月新嘗會の時用ゆるひかげのかづらは正しく此狐のをかせなれば古のひかげも必ず此物をさしていへること明らけし

古事記云天宇受賣命手ニ次繫天香山之天之日影ニ而爲ㇾ鬘ニ天之眞析ニ而手ニ草結天香山之小竹葉ニ

日本書紀神代巻云以ニ天香山之眞坂樹ニ爲ㇾ鬘以ㇾ蘿 蘿此云ニ比舸礙ニ 爲ニ手繦ニ 手繦此云ニ多須枳ニ

延喜式神祇二云供ニ新嘗ニ料日蔭二荷

又神祇七云凡齋服者十一月中寅日給ㇾ之云々内親王及命婦以下女孺以上亦靑摺袍紅垂ㇾ紐自餘綰ㇾ紐 親王以下女孺以上皆日蔭鬘

又云行列者神服長二人分在ニ左右ニ 着靑楷衣執賢木 神服宿禰一人在ニ巾頭ニ 當色木綿襷日蔭鬘 次神服男七十二人分在ニ左右ニ 靑摺衣日蔭鬘 次神服女五十人分在ニ左右ニ 靑摺衣日蔭鬘男女各執酒柏以弓強葉補白竿 次悠紀國前驅四人分在ニ左右ニ 靑摺衣執賢木 次稻實卜部一人在ニ中頭ニ 當色木綿襷日蔭鬘執靑竹 次造酒兒 細布明衣日蔭鬘乘靑輿々夫四人 次御稻輿 納稻布袋檐夫二人 稻實公 靑摺衣木綿襷日蔭鬘 次戴ニ御膳案ニ 女八人 細布衫木綿襷日蔭鬘垂髻 云云次禰宜卜部在ニ中頭ニ 當色木綿襷日蔭鬘 次國郡司分在ニ左右ニ 並當色日蔭鬘

按に古今集の歌は常の松の種しあればまれには岩根にも生することあるをいふこれとは其意異なれども凡岩根の松は千載集に「神代より久しかれとや動なき岩根に松の種をまきけん」また夫木集に「谷陰や子日にもるゝ岩根松誰にひかれて春をしらまし」などいと多し然るを寺島良安は瓦松を瓦の上の松とよめるたぐひとおもひなして常の岩根松に此萬年松を擬せしは甚た誤れり

根をぬけば數十莖を得べしまたその形狀全く相似て細葉髮の如きものありこれまた別條の一種なり

和漢三才圖會云萬年草紀州吉野高野深谷石上多有レ之長二寸許無レ枝而稍有レ葉似二松苗一好事者採レ之藏レ奩云靈草也欲レ知二行人消息一者投二之於盌水一卜レ之葉開即人存焉凋即人亡也此言可二大笑一不レ知二性澆レ水能活一也

本朝俗諺志云萬年草は紀州高野山の御廟の垣の內にありかたち松の葉のこまかなるやうにて苔の類ひなり一とせに日ありて一度これをとる此枯たる草を水にうかめて他國の人安否をみるに存命なるは水中に活てはへるが如し亡人はかれたる葉そのまゝ也

本草啓蒙云一種高野ノマンネンクサト呼者アリ苔ノ類ナリ根ハ蔓ニシテ長ク地上ニ延ク處々ニ莖立テ地衣ノ如キ細葉簇生ス深綠色ナリ採リ貯ヘ久シクシテ乾キタル者水ニ浸セバ便チ綠ニ反リ生ノ如シ是物理小識ノ千年松ナリ

五雜俎云楚中有二萬年松一長二寸許葉似二側柏一藏二篋笥中一或夾二冊子內一經レ歲不レ枯取置二沙土中一以レ水澆レ之俄頃復活或云是苔變成者然苔無二莖根一彼莖亦如二松柏一有二根鬚一

物理小識云千年松石上草耳

『圖一面略之』

まんねんさう



○釋名

まんねんぐさ 和漢三才圖會大和本草物類品隲本草啓蒙

千年松 本草啓蒙引二物理小識一

萬年松 和漢三才圖會引二五雜俎及衡嶽志一

○按に以上三名正に別條の玉柏と同名異物にして其義和漢共に皆一意なり

○正誤

和漢三才圖會に古今和歌集を引て云「種しあれは岩にも松は生にけり戀をし戀はあはさらめやも」といへるを此萬年草の事とす

名びろうどすぎは漢名を玉柏一名萬年柏一名萬年松といふ此草深山中に生じ莖高さ七八寸枝多く葉密にして其狀全く杉葉に似て極て細に此レ卽日陰鬘の時生のものなり故に其梢穗を出し花をつくることまた日陰鬘と同じはじめ綠色にして後黃白に變ず舊說にいふ紫花のもの國產いまだこれあることをきかず

物類品隲云萬年草ハ其形杉ノ如ク長サ五六寸甚愛スベシ高野山所產ノ萬年草トハ別ナリ

本草啓蒙云玉柏ハ卽石松ノ草本ナル者ナリ深山幽谷ニ生ズ一莖直上高サ五七寸上ニ枝ヲ多ク分チ土馬騣ノ如キ細葉多ク着テ石松ニ異ナラズ夏已後枝頂ニ穗ヲ生ズ長サ一寸許潤サ三分許周圍細鬚アリテ葉ノ形ニ異ナラズ黃白色ソノ苗冬ヲ經テカレズ

『圖三面（紹興本草所載兗州卷柏、同上、とうげひば）略レ之』

○釋名

まんねんそう 本草綱目新校正物類品隲本草啓蒙

○按に平賀國倫云萬年草は下野日光山の方言也

まんねんすぎ 本草啓蒙花戸稱

びろうどすぎ 同上

○按にびろうどすぎは蓋し高野山產する所の萬年草の名の混同せしものに似たり

玉柏 證類本草引二名醫別錄一

○按に柏もと伯に作るを劉禹錫は傳寫するものゝ誤なるよし證類本草にみえたり

千年柏 本草綱目

萬年松 同上

○按に此二名は久しきに耐るもの故に名づく

○正誤

和漢三才圖會云玉柏者萬年草也紀州高野山多有レ之

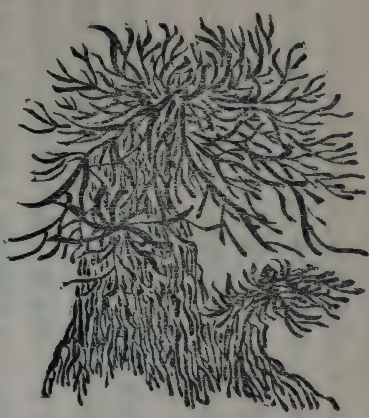
按に萬年草二種あり高野山に產するものは卽物理小識にのする所の萬年草にして本條の萬年草とは其種異なるを今混じて一つにせしは誤なり

一種萬年草 千年松

一種の萬年草は漢名をまた萬年松一名千年松といふ此草諸國深山中極て多しといへ共紀伊高野山に產するもの其名殊に高しこれ卽苔類にして一莖高さ二寸許其梢上に虎の尾苔の如き細長葉多くむらがり生じて別に枝なし其根蔓をなして處々に苗を出す故に一

三五寸无ニ花子一多生ニ石上ニ五月七月採陰乾

いはくみ



○釋名

いはくみ 延喜式本草和名和名鈔本草類編大同類聚方

○東雅云和名鈔に卷柏イハクミ又石韋一ッにイハクミといふとみえたり是二物にして又同しくイハクミの名ある也イハクミの義詳ならず今按に此物いはの上に生し其葉の狀頗る物をくみ合せたるが如くなるによりていはくみとは名付しものなるにや

いはごけ 本草和名和名鈔本草類編

○東雅云イハゴケは石苔の義也

こけまつ 物類品隲千金方藥註本草啓蒙筑前讃岐方言

○按に廣東新語に笞松の名あり卽和漢通稱なり

いはまつ 同上讃岐方言

○按に此卽岩松の意也

いはひば 多識編和漢三才圖會千金方藥註筑前山城武藏方言

○按にいはひばは三才圖會に岩檜葉の字を用ゆ卽岩松の意

卷柏 神農本經

約足 太平御覽本草綱目並引ニ美氏本草一

○按に時珍云卷柏豹足象レ形也

萬歲 證類本草引ニ名醫別錄一　千秋 本草和名引ニ太淸經一　不死草 本草綱目　萬年松 祕傳花鏡

長生草 同上

○按に以上五名其義皆一意時珍云萬歲長生言其耐レ久也浙江通志云柏生ニ四明山一雖ニ甚枯槁一得レ水復鮮レ活俗呼ニ長生草一仙居賦云卷柏萬代而不レ死

まんねんさう

まんねんさう一名まんねんすぎ一名まんねんごけ一

古今要覽稿卷第四百二十五

●草木部いはくみ上

いはくみ　いはひば　卷柏

いはくみ一名いはこけ一名こけまつ一名いはまつ一名いはひばは漢名を卷柏一名豹足一名萬歳一名千秋一名萬年松一名長生草一名不死草といふ古は出雲國神門郡に產するよしその國の風土記にみえまた同國及び美濃備中よりこれを貢せしこと延喜式にみえたり今は諸國深山中處々にこれあり又種樹家に養ふものは多く伊豆より來るといふ此草四時共に枯ず其幹高さ五六寸或は一尺ばかり葉の狀頗る側柏葉三五枝をへるに束ねたる如くに拳攣しこれを側柏葉に比するに稍薄して色殊に青しいまだ花實をみず又一種俗にとうけひば、すそのひば、ひめひば、めひば、かたひばといふものあり其ひめひばは卽兗列卷柏のよし本草啓蒙にみえたり出雲風土記云神門郡凡諸山野所在草木云々

延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥出雲國五十三種云々卷柏一斤
又云美濃國六十二種云々卷柏二斤
又云備中國四十二種云々卷柏六斤十兩
大同類聚方云以波久味々淡久不香之無花實採葉平陰乾無時
和漢三才圖會云卷柏生二深谷石間一人家陰處亦移ニ栽之ニ四時青翠色似二檜柏葉一其大者高尺餘
本草啓蒙云卷柏深山ニ生ズ採テ假山ニ栽ユ年久シキモノハ幹フトク高サ一二尺葉繁密形扁柏ニ似テ薄ク勁シ冬ヲ經テ枯レズ乾ク時ハ葉卷屈シテ雞ノ足ノ如ク潤ヘハ開テモトノ如シ其葉短クシテツマリタルヲトウゲヒバト云ヒ葉長キヲスソノヒバト云一種淺山ニ生ジ只一葉ノミナルヲヒメヒバト云是紹興本草ノ兗列卷柏ナリ
證類本草引二集註本草一云卷柏出二近道一叢二生石土上一細葉似レ柏卷屈狀如二雞足一青黃色用レ之去下近レ石有二沙土一處上
又引二本草圖經一云卷柏關陝沂兗諸州有レ之宿根紫色多鬚春生レ苗似二柏葉一而細碎拳攣如二雞足一青黃色高

べきは元よりの事にて其朝がほは木草和名に出るを以て始とすべきをこゝに和名鈔を引て順朝臣も心えあやまりて牽牛子を和名阿佐加保とかゝれしよりたれも〳〵さなめりとおもひてさとる人なかりしなどいへるはいかゞ

ほとよめりこれらを思ひわたしてあさがほとはあささく花のかほばなをいへるにてひとつの草の名にはあらざる事をいよ〳〵おもひさたむへし拾遺集の物名にも桔梗朝顔牽牛子とみつ出せるはあさがほは桔梗にも牽牛子にもかぎらざればことにしたるなりかくさたかにしられたる事なれど牽牛子は中ごろにひとの國よりわたり來つるものゆへに和名のなければあさがほとのみ世にいひあへれば源順朝臣も此草の名なりとのみ心えあやまりて和名鈔に牽牛子（和名阿佐加保）とかゝれしよりたれも〳〵さなめりとおもひてさとる人なかりしにやあらん

按に古にあさがほの花といひしは一種の草の舜花をさしていひしにてあしたにさくかほ花をなべていへるにはあらず後にけにごしきちかうむくげなどにもその名をおふせしはその花大抵舜花と相似たるによりて也扨新撰字鏡に桔梗をあさがほとよめる二種あり一種は木部にありて桔梗上居頡反下柯杏反加良久波又云阿佐加保とみえ一種は本草木名部にありて桔梗阿佐加保又云岡止々支とみえた（按に岡止々支を以て本草木名部に出せしは蓋しその字の木偏りに从ひしによりての事成べしなを和名鈔に蕣を木波知須といへるによりて蓮類に出し苜蓿を於無奈加豆良といへるによりて葛類に出せしと同じ類のあやまりなり）その岡止々支のあさがほは卽今のきちかうにして加良久波のあさがほはいまだ何物たる事をしらずといへどもその名によりて考れは蓋し木類にてあるべきにや倚謙曰今試に強ていはゞ加良久波は卽韓桑の義なり字鏡既に木槿ありて保己又禰夫利とよむ時は此加良久波は蓋し木槿の一種に扶桑一名朱槿といへるものなるべし其種たま〳〵延喜の頃にも韓國より傳へて葉の形頗る桑に似たるによりて其名を得それをまたあさがほといひしはその花また木槿の如くあしたに開きて夕に萎むものなるが故にてもあるべきにや然れば木槿をあさがほと云しも舊くよりの方言なるべしさて萬葉集の朝がほを以て桔梗なりといふからはいはゆる岡止々支のあさがほを以てその義をあけつらふべき却て同名異物の木類なるべしとおもはるゝ加良久波のあさがほをを引て證となし彼是いへるはこれ大なるあやまり也又拾遺集の物名に桔梗朝顔牽牛子とみつ出せしはその種類をわかつためにしかよみし歌にあらざれば一つ物をさして朝かほともけにこしともいふ

か也なほ第十巻に朝貌乃穂庭開不出と見えたる歌もあさがほの穂といふ事牽牛子花にてはにつかはしからず桔梗は穂ともいふべきさまに花咲ものなり云々

按に此説も昆蟲草木攷と同じく桔梗を以て古の朝貌とせしなり然りといへどもまた萬葉集を引て朝貌乃穂庭開不出といひし穂は螢ほのうなとのほの如くあかき色をおのか顔にあらはさぬ事をしかいひしにてその穂といふよりやがて開とはいひなせしものなればこれは前にも引し「色庭不出朝貌之花」とよみし歌と全く同意なるを桔梗は穂ともいふべきさまにさくもの也といひしはいかゞ

松廼落葉云あさがほとはあしたにさくかほ花をなづけいへるにてひとつの草の名にはあらずそのよしつぎ／＼にときあかすべしまづ新撰字鏡に桔梗加良久波又云阿佐加保とあるもその證なりからくはといふが正しき名にてあしたにさくうつくしき花なればあさがほともいへるなり今の人牽牛子をのみあさがほと思へるは違へり萬葉集十の巻の歌にあさがほ云々「夕かげにこそさきまさりけれ」といへるも桔梗なり牽牛子はゆふかげに花のさくことなし桔梗の花はあさゝきひるしぼみて夕かげに又はなやかにさくものなれば夕かげにさきまさるやうにはいへるなり云々さて朝がほといふこゝろくはしくいはんとすいにしへかほ花といひしはかほのすぐれてうつくしきはなの事なりかほといふは今の世にかほかたちといふ意なりかほかたちのすぐれたる人を中ころにはかたち人といひきそれと同じこゝろなりされば何にまれ朝さきてかほのすぐれたる花をめでゝあさがほといひはやしたるにて一種の花の名にはあらず桔梗もはなのあしたにさきてうつくしき故にめでゝあさがほといひしにて此草の正しき名にはあらざることは新撰字鏡に桔梗加良久波とあり又云阿佐加保としるせるにてもしられたり牽牛子のわたり來てはこれもあしたにうつくしき花さけばしかいひ槿花もさやうなれはあさかほとていへるなりほとはあらねども和漢朗詠集に槿と題してあさがほの歌をいたせばしかいひし事しるし舜も和名鈔に和名木波知須といへるに毛詩にてはふるくよりあさが

の朝果は今いふ晝貌にてその時代よりおくれて後に牽牛花の渡りこしよりその花より先に咲出る花なきを以て遂に古の朝果の名はそれか爲に世にかくれし也その牽牛花をあさかほとよみしは輔仁の本草和名を以て始としまたその書には桔梗を阿利乃比布岐一名乎加止々岐とありて朝果の名はみえずその桔梗を朝貌とよみしは僧昌住の新撰字鏡を以て始としその書の草案は寛平四年の夏出來しものなりといへども本草の文をかきそへしは昌泰年中の事なれば昌住も蓋し輔仁と同時代の人なるべし然れば桔梗を朝貌とよみしはその土地は慥かならざれどもいづれ方言にしてその花の色も咲出る時もまた牽牛花と大抵相似たるによりて却て牽牛花によそへてこれをもまた朝貌と名付しにて桔梗を朝貌とよみしかもとにてその名を牽牛花にうつせしにてはあるべからず故に諸家本草にも桔梗開花紫碧色頗似二牽牛花一とみえたれども牽牛花の桔梗に似たるよしはみえずそれはともあれ萬葉集に「色庭不レ出朝貌之花」とよみしはおのが思ひの朝貌の花の如く色には不レ出といへる意なれば桔梗の花の碧色なるよりは晝貌の花の紅色なるが卽古の朝貌なればあまりくだ〳〵しくいはずとも古の朝貌の桔梗にあらざるよしはおしはかるべし扨新撰字鏡は世に絶てこれなき書なるを村田春海の京に遊べる時ゆくりなく得てよろこびもち來りしよし古言梯にみえたれば宣長千蔭などはさしおき春海ひとりは桔梗のあさがほたる事を曾昌啓よりもはやくしりつらんをしかいひなせしはうたがはし

千草の根ざし云和名鈔に陶隱居本草注云牽牛子和名阿佐加保とありて中昔よりこなた歌にもおほくよみて今世もあさがほといへりさて萬葉集卷第八秋野七種花をよめる歌の中なるあさがほをはじめ同集中にこれかれよめるは今世いふ牽牛子花にはあらずそは田中道麿のこの七種花の歌の說にこのうたあさがほのみ木にてはいかゞなればこれは木槿にはあらず桔梗にやといへる如くにてまことに萬葉のころよめるは木槿にはあらずまた牽牛子花にもあらずて桔梗なるべしすなはち字鏡に桔梗阿佐加保とみえたり是にて萬葉集中によめるあさがほは桔梗なることたし

○此根白色故に名つく傷寒論に白桔梗散あり肘後方に屠蘇白散あり方中皆桔梗を用ひしにてしるし

桔草同上

盧茹同上

○按に盧茹は卽利如の方言なり

符扈同上

房圖本草和名又本草綱目引二吳氏本草一

○時珍曰一名利如一名符扈一名房圖方書並無レ見

　蓋度詞爾

房莖本草和名引二釋藥性一

○尙謙曰房圖といひ房莖といへるはいづれ誤りなるべし或は莖は卽圖の方言にてもあるべきにや

　○正誤

圖史草木昆蟲攷云萬葉集卷第八に憶良詠秋野花歌に朝貌之花あり字鏡に桔梗を阿佐加保と注したり輔仁和名に牽牛子を注したり木にはやく蕣花をよみたり云々いにしへに朝良と秋草によみたるは桔梗なるべしいまにしては牽牛花をのみいへり憶良のよみし朝顏の花を蕣花也といへれど蕣と木槿なりあがれる人の眞心に草の花をよめるうちに但ひとつ木の花をまがへる事あらじかしまた木を草といひ草を何木といひけのあらものにこものを何鳥などいへるは世のややすゑになりて物は名をうしなひ名は物をうしなひて有にかひなくなり行けるに寛平年に僧昌住とかいへる人の撰たる新撰字鏡にたま〳〵いにしへの名を殘したるをみて吾はひとり憶良のよみたる朝貌を桔梗なりと思ひ決たりすでに春海宣長彥麻呂奈美支などにもかたらひき千蔭をはりて後にその家の名代の歌どもをみるうちに「七草にもれしうらみやはれやらぬ霧のまかきのきちかうの花」いかで千蔭にのみいひ殘しけんこれうき事也さて萬葉集卷第十に朝果朝露負咲雖云々こは桔梗にや蕣花にや契冲いふゆふ暮のうるほひによりてこそ花は咲まさりけれといへるなるべしとて後撰集に「夕暮のさひしきものは朝かほの花をたのめる宿にぞありける」とよみたる此歌をしるしとしてまゝいへる朝貌をけにこし花となしたり後撰集に載たるはとまれかくまれ萬葉集の歌に牽牛花の朝貌あることはいかゞ云々

按に此攷に萬葉集の朝果は卽桔梗なりといへ共古

花多くてそのかみ始めて渡りこしもそのたくひにて桔梗にいとよく似たればあさがほの名はおひそめしなるべし近く慶長のころ牽牛花の漢種わたりこしも桔梗ざきなりしよしあるものに見えたりといへりこれもいとよき考なれども予はいづれにも桔梗を朝顔といひしは牽牛花がもとにて桔梗の華もそれに似たるによりてまた朝顔と名付しなるべしとぞおもはる

岡とゝき（本草和名新撰字鏡和名類聚抄）

○按にとゝきはもと沙參の韓名にて東醫方鑑にいはゆる더덕の字なりといへり此種多く岡原上に生してその狀頗る沙參の如し故に岡とゝきと名つく

ありのひぶき（本草和名類聚抄）

○按にありは卽蟻字（此卽蟻の正文なり）にてその狀細小なるものをさしていひひふきは卽ひあふぎの中略にてありのひふきは其華檜扇に似て小なる意にてもあるへきにや今も此華の形扇なるものを扇桔梗といへり蓋し古にも此種ありてしか名付しにてあるへきにや

一重草（藻鹽草）

○此華單葉のもの殊に多し故に一重草と名づく

せいねい（本草綱目啓蒙）

○せいねい江州とみえたり案に苨をよむ聲また泥の如くなれはせいねいは卽薺苨の字音の訛轉なるべし名醫別錄に薺苨を以て誤りて桔梗の一名とせしより遂に此邦にてもその誤りをうけて此方言ありしなるべし

くはんさう（同上）

○くはんさう信州とみえたり按に岡とゝきを中昔よりその字音を以てきちかうといひそれをまたせいねいなといへる方言により考ればくはんさうもまた梗草の訛轉にてもあるへきにや

桔梗（管子戰國策莊子神農本草）

○本草綱目に此草之根結實而梗直故名とみえたり岡村尙謙曰扨桔梗を古今集にきちかうとよみしはこれ漢音にして枕草紙にききかうとよみしは卽呉音なり

利如（呉氏本草名醫別錄）

○利字廣雅犁に作る

白藥（同上）

腹滿腸鳴幽々驚恐ニ悸氣一

吳氏本草云桔梗葉如ニ薺苨一莖如ニ筆管一紫赤二月生レ苗

名醫別錄云桔梗味苦生ニ嵩高二月ニ（一本二の下に八字あり）採レ根暴乾

唐本草云薺苨桔梗有レ葉差互者亦有ニ葉三四對一者皆一莖直上葉既相亂惟以レ根有心無心爲レ別爾

本草圖經云桔梗今在處有レ之根如ニ小指大一黃白色春生レ苗莖高尺餘葉似ニ杏葉一而長橢四葉相對而生嫩時亦可ニ煮食レ之夏開レ花紫碧色頗似ニ牽牛子花一秋後結レ子八月採レ根細剉暴乾用

祕傳花鏡云桔梗生ニ嵩山一冤句春生ニ苗葉一高尺餘邊有レ齒似ニ棣棠一相對而生夏開レ花靑紫色有レ似ニ牽牛一秋後結レ實根可ニ入レ藥用一

和歌

古今和歌集卷第十 物名

きちかうの花　とものり

秋ちかうのはなりにけり白露の
おける草葉もいろかはりゆく

散木奇謌集 雜部 隱題

きゝやう

あやまたぬ花の都をおのれから
うきゝやうなりと思ひけるかな

『此間彩畫六圖略レ之』

筒長桔梗



○釋名

あさがほ 新撰字鏡

按に桔梗はその華牽牛華と同じく朝まだきより咲そめて其色もまた牽子華と相似たるによりて名づく又千草の根ざしには本草圖經を引て桔梗夏開ニ小花一紫碧色頗似ニ牽牛花一とみえまた救荒本草にも頗る似ニ牽牛花一とありてなほ證類本草にみえたる牽牛花の圖の桔梗に似たるなどをみれば牽牛花の漢種は今世に桔梗咲の牽牛花といへる種の牽牛

無レ異至ニ七八月ニ莖端有レ花其形似ニ牡丹及罌粟花ニ而小或白或紫碧色又有ニ花蕋如レ絲者ニ其根不レ堪ニ入藥ニ矣

物類品隲云桔梗所在ニ多シ花紺碧色又白花紫花或ハ二色相雜モノ各單瓣重瓣ノモノアリ近世製シ出ス者六月土用中ニ掘レ根川水ニ浸スコト數日外皮爛ルヲ待テ洗乾スモノ色至テ白シ然トモ虛鬆ニシテ氣薄シ八九月掘取ベシ

本草綱目啓蒙云桔梗山中ニ自生多シ向陽ノ地ニ生ズ大抵沙參ノ形狀ニ似テ毛ナク白色ヲ帶ブコレヲ斷バ白汁アリ圓莖高サ三五尺葉ハ楕ニシテ細鋸齒アリ互生ス或ハ二三葉相對ス六月以後莖頂ニ花ヲ開ク肥タルモノハ葉間ゴトニ開ク單瓣藍紫色ヲ常トスソノ品一ナラズ形ニ單重千葉團扁ノ分アリ色ニ深藍黃白間色ノ別アリ重葉ナル者ニ紫二重、白二重、二重仙臺、牡丹桔梗アリ千葉ナル者ニ紫白アリ扁ナル者ハ摺扁桔梗ト呼ブ深藍、淺藍ノ二品アリ並ニ千葉ニシテ形壓シ扁ミタルガ如ク莖亦扁シ黃ナルモノハ淺黃色又カキイロト呼ブアリ單瓣、重瓣ノ二品アリ間色ナル者ハ白花紫點、仙臺桔梗ト呼ブ又南京桔梗アリ又單葉ニシテ筒ヲナサヾルモノアリ紋桔梗ト呼ブ此數品皆花戸ノ重ズルトコロナリ藥ニハ常品ヲ用テ良トス市中販グトコロ根潔白ナル者アリ是晒シ乾タルナリ六月土用中ニ根ヲ掘取リ流水中ニ浸スコト數日外皮腐爛スルヲ俟テ洗淨シ乾ス故ニソノ色白シ又只皮ヲ去リ乾モ色白シ藥舖ニ三原桔梗ト云ソノ形細長ク末最細シ末細カラザルヲ竹原桔梗ト云皆氣味尤薄ク用ニ堪ヘズ桔梗ノ味苦キハソノ本性ナリ故ニ發明ニ苦梗ト云附方ニ苦桔梗ト云又クハダン桔梗ト呼ブ者アリ色黃ナリ又山ダシト呼ブモノアリ生干トモ云皮色黑ク肉色白シ江州伊吹ヨリ出ス俱ニ八九月ニ根ヲ掘リ採リ皮ヲ連テ乾シ堅實ナルモノヲ用ユベシカクノ如クスレバ苦味アリ舶來ノ者ハ黑色ノ帶皮アリテ微苦亦用フベシ市中ニ楊枝手ト稱スルモノハ嫩根ナリ通用スベシ

管子云五位之土羣藥安生薑與ニ桔梗ニ云々

戰國策云今求ニ柴胡桔梗於ニ沮澤ニ則累世不レ得レ一焉

莊子云樂也其實菫也桔梗也云々

廣雅云犂如桔梗也

神農本草云桔梗味辛微温生ニ山谷ニ主胷脅痛如ニ刀刺ニ

又云播磨國五十三種云々桔梗三十斤
又云美作國四十一種云々桔梗八斤
又云備前國四十種云々桔梗五十斤
又云備中國四十二種云々桔梗二十八斤
又云備後國二十八種云々桔梗三十五斤
又云安藝國三十二種云々桔梗二十一斤
又云讃岐國四十七種云々桔梗十二斤
又云伊豫國三十二種云々桔梗十斤
元良親王集云きちきやうの花云々
枕草紙云草の花はをみなへしきゝやう云々
徒然草秋の草に萩すゝききちかう云々
藻鹽草云桔梗物の名によめり和名に遠加度々支といへり　ありのひふき、これいまだくはしくみず
秋ちかう野は成にけり桔梗の花也きちかうをかくしてよめる也
一重草異名也七月の花也
○「このはをもうらにうたはや　一重草はゝうすやうの露はをけとも」
和漢三才圖會云按桔梗山野及人家多種レ之苗叢生無レ枝椏其葉似ニ杏葉ニ而楕楕狹而長也又圜而長也本草綱目作隋字誤背淡白有ニ微毛ニ自レ本至レ末葉間開ニ碧花ニ凡以ニ紫碧ニ者爲ニ桔梗之正色ニ又有ニ白花者ニ有ニ紫白相間者ニ有ニ單葉ニ有ニ八重ニ皆變ニ於子種ニ初無レ枝椏剪ニ折莖ニ則生レ枝椏其葉對生者亦有
大和本草云桔梗春宿根ヨリ生レ苗山野ニ多シ秋碧花ヲ開ク又白花アリ八重アリ藥ニハ單ノ碧花アル根ヲ冬月及正二月ニ採ヲ爲レ良小根ハ性薄シ大ヲ可レ用花鏡曰以ニ雞糞ニ壅則茂ル○實ヲマケバ早ク生長ス二年開レ花根亦大ナリ花ヲ賞スルニ苗ヒキ、時カレバ叢生シテ花多莖不レ高シテヨシ
用藥須知云桔梗和ヲ可レ用ソノ花單瓣重瓣色ニ紫白ノ二種アリ又根ニ細大アリ藥家小ナル者ヲ謂テ楊枝手ト稱シテ貴レ之然ドモ不レ拘シテ用ベシ一種雞桔梗ト云モノアリ和邦ノ醫遠志ニ充テ、用ルハ非ナリ遠志ハ別ニアリ雞桔梗ニ非ズ
人參譜云桔梗今所在皆有レ之俗呼名ニ鈴鐸人參ニ也二月生レ苗其葉如ニ杏葉ニ三四相値生七八月之間莖端有レ花其形如ニ鈴鐸狀ニ或白或紫碧色其子似ニ罌粟ニ稍小根樣似ニ人參ニ淡白色其味甘苦也去レ皮者潔白如ニ粉留レ皮者ニ黄黑不レ好春秋採レ根日乾用矣
又云一種鈴鐸人參今人家往々栽レ之俗呼名ニ牡丹桔梗ニ者卽是也又有ニ單葉千葉之二種ニ葉莖又與ニ桔梗ニ

古今要覽稿卷第四百二十四

●草木部

あさがほ　をかとゝき　桔梗

あさがは一名をかとゝき一名ありのひふき一名一重草一名くはんさゝり一名せいねいは漢名を桔梗一名利如一名白藥一名梗草一名盧茹一名房圖一名房莖といふこの種は處々の山野及び岡原上に多し二月の頃苗を生じて數莖直上し高さ二三尺より或は四五尺に至る葉の狀大抵杏葉の如くにして鋸齒ありて互生し或は三四葉相對生するもあり七八月の間に莖上に華を開く形牽牛花に似て少さくして五尖ありその華單瓣にして紺碧色なるは常なれどもまた白花のもの紫華のもの淺黃色のもの及び重瓣千瓣またあふぎ桔梗、仙臺桔梗、紋桔梗、南京桔梗等の數種あり扨紹興本草によるにその華重瓣にして三葉相並ぶものは蓋し成州桔梗と同種にしてその華單瓣にて四葉相對するものは卽和州桔梗と同種也又一種和漢三才圖會にいはゆる兩葉對生のものはこれまた解州桔梗と同種なるはともにその圖する所によりて以て推はかるべし

新撰字鏡云桔梗阿佐加保又云岡止々支

本草和名云桔梗和名阿利乃比布岐一名乎加止々岐

延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥山城國三十二種云々桔梗三十斤

又云大和國三十七種云々桔梗二十一斤

又云攝津國四十四種云々桔梗二十三斤六兩

又云伊賀國二十三種云々桔梗三十斤

又云伊勢國五十種云々桔梗九斤四兩

又云尾張國四十六種云々桔梗六十六斤

又云參河國二十一種云々桔梗三十八斤

又云遠江國十三種云々桔梗二十二斤

又云駿河國十七種云々桔梗二十斤

又云武藏國二十八種云々桔梗四斤十二兩

又云下總國三十六種云々薺苨桔梗各五斤

又云常陸國二十五種云々桔梗六十斤

又云近江國七十三種云々桔梗三十五斤

又云美濃國六十二種云々桔梗細辛各三十斤

又云越前國十八種云々桔梗六斤

とより誤りなりといへ共其木槿をまた朝顔とよみしは類聚名義抄に槿音謹あさがほ古作〻堇と見え和漢朗詠集に槿と題して朝貌の歌を出せしにてしるし又新撰字鏡に桔梗をあさがほとよみ古今集物名に牽牛子を字音にてけにごしとよみたれども新古今集には「山かつのかきほにさける朝貌はしのゝめならてあふよしもなし」とよみしは卽貫之の歌なりとみえ又本草和名及び和名鈔には牽牛子和名あさがほとみえたりこれによれば朝貌に數種あるがなかに萬葉集にいはゆる朝貌はさてをき本草和名以來あさがほといひしはおほくはけに（牽牛子）ごしの朝貌なりといへどもそのなかに又木槿をよみしもあるべく或は桔梗をよみしもあるべく或はけにごしの朝貌をよみしに槿と題せしもあるべく或は槿と題してもけにごしの朝貌をよみしもあるべければ今こゝにはそれ〳〵のけぢめなくたゞ本書のまゝにかきあつめて代々の人々の歌どもを出しぬるなり

編修兼校正　岡村尙謙平遜

校正兼鈔錄　山下官介源正房
校正兼淨寫　忠內留太郎紀弘光
校正兼圖畫　葦名隆吉平盛榮
校正兼淨寫　兒山諦之助平紀言
　　　　　　伊庭熊作源秀正
校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春
校正兼淨寫　小林好太郎源直温
編修兼校正　池野貞一郎源好謙
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
編修兼校正　大河戸晋平藤原儀成
總　　判　屋代太郎源弘賢

朝貌のくれを待ぬもおなしこと
千年の松にはてしなければ
僧都源心

百首歌古來歌合
あさかほのあたにはかなき命をは
つとめてたにもしはしたもみん
光明峯寺入道攝政

建保四年百首歌
立まかふ霧の籬に結ほゝれ
また露ほさぬ朝貌の花
民部卿爲家卿

家集
明る夜の空かきくもる村雨に
さかり久しき朝かほのはな
從二位家隆卿

百首歌
片岡の日影しくるゝ柴の戸に
しはしかゝれるあさかほの花
寂蓮法師

百首歌槿花
有明の月は殘れる日影にも
まつかたふくはあさかほの花
右近中將經家卿

建長八年百首歌
しはし猶しほれな果そ夕日影
かくれのをのゝ朝顏の花

同　前大納言顯朝卿
朝顏の名にこそたてれ夕露に
咲そふ草の色も有けり

此歌判者右歌は槿花一日自成レ榮など云白居易之心をうつせる 按に草とよみたれば槿花には有べからず一本に花とあるかたまさるべしされども萬葉集の夕かげにこそさきまさりけれといへるによりしなるべし

山井六　讀人不知
山の井のそこあさかほの花なれは
かけをみしまにうつろひにけり

題不知　深養父
戀しくはあたかの原をいてゝみむ
又朝顏の花はさくやと

同明玉　小野小町
しとけなきねくたれかみをみせしとや
はたかくれたるけさの朝顏

同六五　讀人不知
ねくたれの朝顏の花あさ露に
おもかくれしてみせぬきみかな

按に萬葉集に朝貌とよみしは卽今の晝貌なるにそれをいにしへより木槿なりといひしはも

千年ふる松の緑もおなしことと
　日影まつまのあさかほのはな
我さきにおきてそみつる白露の　前藤大納言爲家
　垣ほにかゝる朝顔の花
忍ひつまおきて別の袖かきに　九條三位入道知家
　面影のこるあさかほの花
朝顔の花をはかなみねぬる夜の　左京大夫行家
　夢のたゝちに名殘とやみん
日影さすとほそにかゝる朝顔の　右大辨入道光俊
　しほめる花や我身なるらん

現存和歌六帖

あさがほ

立迷ふ霧のまかきにむすほゝれ　入道前攝政
　また露ほさぬ朝顔の花
朝顔の夕をまたぬ花のよに　衣笠前内大臣
　おきてあたなる露の身もうし
夕影を待へき物か今朝のまに　藤原行宗朝臣
　問人あれやあさかほの花
朝顔の花よりけなる命もて　三善康義
　あすともいかゝ身を頼むへき

朝顔のなと時のまを契にて　下野
　露よりけなる色に咲らん
いかさまに契か置し白露の　従一位輪子家尾張
　結ふ程なきあさかほの花
暮をまつ契もあらはきぬ／＼の　藻壁門院少將
　袖にはかけし朝顔の花
たくひとや契置けん白露も　鷹司院按察
　くれなはなにのあさかほの花
皇太后宮大夫俊成女
消ぬまの色を哀とみる人も
　花もはかなきあさかほの花

夫木和歌集巻第十一秋部二

槿花

皇太后宮大夫俊成卿
文治六年五社百首槿花
朝貌の露もやちよをへぬへきと
　山路の菊に植そへましを
土御門院御製
百首歌
色かへぬ竹の籬のあさかほも
　おのれはあたの花にて有ける
久安百首無常歌　清輔朝臣

此山のもとにもあらし朝顔の　花をのみ見て我やかへらむ　貫之

堀河院御時百首和歌

槿花　春宮大夫公實

あしかきの末よりみえし朝かほは　おもかけさらぬ花にそ有ける　權中納言匡房

白露のおきてみつれは程もなく　面かはりする朝かほの花　權中納言國信

山里のしの丶あみ戸のひまをあらみ　明てそみつる朝顔の花　右兵衛督師頼

朝顔もうらやまれけり年ふれと　また花さかぬ人の爲には　修理大夫顯季

浦風に浪やをるらん終夜　おもひあかしの朝かほのはな　源顯仲朝臣

世のうさを思ひしれとや朝顔の　咲てはかなき色をみすらん　中宮權大進仲實

あたにのみみつ丶そすくる軒近き　まかきに咲る朝顔の花

朝顔の花の姿のゆかしきに　なにこはなかき秋の夜そとよ　木工頭俊頼

朝顔の花の姿を見つるより　くれを待へき心地こそせね　左近權少將師時

秋くれは霧の籬に立かへれ　ほのかにみゆる朝かほの花　藤原顯仲朝臣

玉ほこの露もさなからおきてみん　けさ嬉しけに咲る朝顔　藤原基俊

世中のはかなき中にはかなきは　暮をもまたぬ朝顔の花　權少僧都永縁

朝顔のはかなき花をいかにして　かしこき人のそのに植けん　阿闍梨隆源

いつ迄かおきてみるへき日影まつ　露にあらそふ朝顔の花　肥後

しの丶めにおきつ丶そみん朝顔は　日影まつまの程しなければ　紀伊

消とみし昨日の露もおきなから　面かはりせぬ朝顔の花　河内

新撰六帖

あさがほ　衣笠内大臣家良公

消ぬまの身をもしる〳〵朝顏の
　露とあらそふ世をなけくかな
續千載和歌集卷第四秋歌上
　弘安百首歌奉し時　前大納言長雅
立こめて日影へたつる程はかり
　霧のまかきに殘る朝顏
又卷第十九哀傷歌
　だいしらず　大納言師氏
朝顏の露に命をくらふれは
　花の匂ひは久しかりけり
朝顏の花はまかきに植てみん　新院御製
　常ならぬ世を思ひしるやと
新千載和歌集卷第四秋歌上
　だいしらず　前中納言匡房
たとふへきかたこそなけれわきも子か
　ねくたれかみの槿の花
新拾遺和歌集卷第十哀傷歌
　だいしらず　少僧都源信
朝顏のあたにはかなき命をは
　つとめてのみそしはしたもみん

贈從三位爲子身まかり侍し頃蟬のもぬけたるを
朝顏の花に付て前大納言爲定のもとに申つかは
しける　頓阿法師
空蟬の世のはかなさを思ふには
　猶あたならぬ朝顏の花
返し　前大納言爲定
うつせみはむなしきからも殘けり
　消て跡なき朝かほの花
新後拾遺和歌集卷第十七雜歌下
世の中を何にたとへんといへる歌を句のかみに
置てあまた歌よみ侍る中に　源順
世中を何にたとへん夕露も
　またて消ぬる朝かほの花
題しらず　花園左大臣家小大進
いかにして思ひ捨まし朝顏の
　昨日の花のありかたき世を
古今六帖
　あさがほ　やかもち
春日野の野への朝かほ面影に
　見えつゝ妹はわすれかねつも

續後撰和歌集卷第十六上雜歌
槿を　參議定經
山かつの柴の袖かき朝顏の
　花ゆゑならて誰か問まし
續古今和歌集卷第四上秋歌
秋歌中に　中務卿親王
夢路にて咲へかりけるおきてみむと
　思ふを待ぬ朝かほのはな
百首御歌の中に　後鳥羽院御歌
しのゝめと契りて咲る朝顏に
　たかふるさとのなみた置らん
又卷第十六哀傷歌
あさがほをみて　前大納言公任
明日しらぬ露の世にふる人にたに
　猶はかなしとみゆる朝かほ
又卷第十七上雜歌
あさがほの花につけてつかはしける
　粟田關白贈太政大臣
朝顏のあしたの花の露よりも
　哀はかなき世にもふる哉

返し　源英明朝臣女
人の世か露かなにそとみし程に
　おもなれにける朝かほの花
續拾遺和歌集卷第十四四戀歌
方たがへにまうできたりける人のおぼつかなきさまにて歸にける朝にあさがほを折てつかはしける　紫式部
おほつかなそれかあらぬか明くれの
　空おほれする槿の花
返し　讀人不知
いつれそと色わく程に槿の
　あるかなきかになるそ悲しき
玉葉和歌集卷第十四一雜歌
正安三年權中納言兼季檢非違使別當に成て侍ける時よみ侍ける　入道前太政大臣
我家にことしの秋も染てけり
　みたひ花咲くあさかほの花
又卷第十七四雜歌
世間常ならず侍ける頃朝顏の花を人の許につかはすとて　紫式部

しらする物はあさかほの花

又卷第二十誹諧歌

人の草あはせし侍けるに朝がほかゞみ草などをあはせけるにかゞみ草かちければよめる

よみ人しらず

まけかたのはつかしけなる朝かほを鏡草にもみせてけるかな

詞花和歌集卷第三秋部

かものいつきときこえて侍ける時本院のすいがきにあさがほの花咲かゝりて侍けるをよめる

禖子內親王

神垣にかゝるとならは朝かほもゆふかくる迄匂はさらめや

新古今和歌集卷第四秋歌上

題しらず

曾禰好忠

おきてみむと思ひし程に枯にけり露よりけなる朝顏の花

貫之

山かつの垣ほに咲る朝顏はしのゝめならてあふよしもなし

新勅撰和歌集卷第四秋歌上

だいしらず

よみ人しらず

おほつかな誰とかしらん秋霧の絕間にみゆる朝顏の花

又卷第十三戀歌三

題しらず

源宗于朝臣

白露の晝を待まの朝顏は見すそ中々有へかりける

業平朝臣

女のもとより歸りてつかはしける

我ならて下ひもとくな朝顏の夕かけまたぬ花には有とも

又卷第十八雜歌三

だいしらず

相模

朝顏の花にやとかる露の身はのとかに物を思ふへきかは

後京極攝政前太政大臣

玉ゆらかゝる朝顏の花

をはり思ふすまゐ悲しき山陰に

病にしづみ侍ける頃新少將身まかりぬと聞て素覺法師のもとにつかはしける

加茂重保

朝顏の露の我身を置なから先消にける人そ悲しき

古今要覽稿卷第四百二十三

●草木部あさがほ

和歌

萬葉集卷第十秋雜歌

詠花

朝果朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮

寄花

展轉戀者死友灼然色庭不出朝容貌之花

言出而云者忌染朝貌乃穗庭開不出戀爲鴨

右作者未詳

後撰和歌集卷第十一戀歌三

あさがほの花まへにありけるさうしよりをとこのあけて出侍りけるに

よみ人しらず

もろともにをるともなしに打とけて
みえにけるかな朝かほの花

又卷第十八雜歌四

ひとり侍けるころ人のもとよりいかにぞととぶらひて侍ければあさがほの花につけてつかはしける

よみ人しらず

ゆふくれの淋しき物は朝かほの
花をたのめる宿にそ有ける

拾遺和歌集卷第三秋

題しらず　よみ人しらず

君こすは誰にみせまし我宿の
垣根に咲る朝かほのはな

又卷第七物名

あさがほ　よみ人しらず

我宿の花のはにのみぬるてふの
いかなるあさかほかよりはくる

又卷第二十哀傷

朝がほの花を人のもとへつかはすとて　藤原道信朝臣

朝かほを何はかなしと思ひけん
人をも花はさこそみるらめ

後拾遺和歌集卷第四秋上

あさがほをよめる　和泉式部

有とても賴へきかは世中を

人秘レ之隱レ黑爲レ白耳といへるは蓋し墨記草の類にて三白草にはあらず蘇敬の說恐らくは誤なるべし

本草綱目云牽牛有二黑白二種一云々白者人多種レ之其蔓微紅無レ毛有二柔刺一云々人亦采二嫩實一蜜煎爲レ果食呼爲二天茄一

案に天茄は別に一種の物にして白牽牛にあらざるを時珍混同して一物とせしは誤りなるよし旣に物類品隲及び本草綱目啓蒙にみえたりまた祕傳花鏡に牽牛及名二天茄兒一云々採二嫩實一鹽焯或蜜浸可レ供二茶食一また遵生八牋に天茄兒卽白牽牛子也といへるは共に時珍の誤りをうけていひし也又物類品隲に天茄子をかきしは卽牽牛子に對していひしにて西土にてはたゞ天茄ともまた天茄兒ともいへ共いまだ天茄子といふ名はみえざるなり

不黄不似藊豆といひ又寇宗奭も牽牛子諸家之說紛々不一陶隱居尤甚言花狀如藊豆殊不相當とひへりこれによれば陶注はけだし傳聲の誤をうけてしかいひしなるべし

酉陽雜俎云盆甑草卽牽牛子也秋節後斷之狀如盆甑其中子似龜蔓如山芋

按に盆甑草は卽本草拾遺にいはゆる合子草有小毒子及葉主蠱毒螫咬擣傳瘡上蔓生岸傍葉尖花白子中有兩片如合子といひ物理識にいはゆる本草載預知子似皂莢子蔓生依木案贊寧曰卽僊沼子生池間苗似牽牛有逆刺節有房殼中有二子者取之三子者勿取爲偏氣不定其二子陰陽和合能除蠱毒其狀如龜經霜帶黑色といへるものにて卽本草和名に仙沼子和名之多都岐俗にいふごきつる一名よめがさら一名まめのごき一名からすのごきにして必ず牽牛子にはあらざる也然るを本草圖經及び本草綱目にも此草を以て牽牛子となすものは共に段成式の誤りをうけしなり扨延喜式(内膳式)に和太々借(此節今のまゝたいびせ)一斗(料鹽二斤)舌附一斗(料鹽二斤二合)とみえたる舌附もまた此仙沼子と同物なり

本草衍義云牽牛花碧色日出開日西合

按に牽牛花は朝とく咲そめて日光をうくる時は卽萎むものなればこゝに日西合といひまた八雲御抄に萬葉集の朝杲云々夕陰にこそ咲まさりけれといふ歌を引せ給ひ夕にも有べきかくもりたる日などは夕までもあるべきかと仰られしはともに御あやまりなり

村家方云牽牛花一名三白草

按に集注本草牽牛子條に又有壹種草葉上有三白點俗以名三白草其根療脚滿下氣亦甚有驗とみえたりこれによれば三白草は牽牛子の下氣療脚滿水腫とその功同じきによりてこれを牽牛子の注に載せしにてその草の形狀相似たるによりての故にはあらず然るをこゝにその三白草を以て直に牽牛子の一名となすものはもとより誤りなりといへ共梶性全く萬安方にも三白草苦寒有毒牽牛子之一名(アサガホ)とみえたるによれば和漢共にその誤りを傳ふるもまた久し扨三白草は和名類聚鈔に加多之呂久佐とみえたり卽今の俗に半夏生といふものなるを唐本草に三白草葉上有三黑點古

如何是常ノ義ナレ共未㦬カノ本説ヲ不レ見乍レ去古ヨリ普ク槿ノ實ヲ牽牛子ト云トゾ仍順和名鈔モ牽牛子ト書テアサガホトヨメリ定テ由有歟先朝顏ト云字數アリ韻府云槿有二黃白者一一ハ名二日及一毛韻ニハ槿ヲバ木名トシテ菫字ヲ用タリ毛晃曰菫草ノ名亦ハ木名一ハ名二日及一一ハ名二蕣葉一云々爾雅云槿又ハ名レ舜其華朝生暮落一ハ名二日及一一ハ名二蕣葉一葢シ取二一瞬義一通テ作レ菫ト云リ打思(ウチ)ニハ草名ナレバ蕣ノ字ヲ正トスベキ歟覺ルニ毛詩ニハ只无二草冠一舜ヲ用タリサレバ毛晃曰蕣ハ槿詩ニ作レ舜云々韻會云蕣ハ木槿朝華暮落取二瞬義一ト云々然バ槿菫蕣舜共ニ朝顏也毛詩云有レ女同レ車顏如二舜華一ト蕣ハ朝開暮ニ落ツル花ナレバ毛詩ノ和訓ニ朝顏ト云事尤一瞬ノ義ニカナヘリ然ニ牽牛子葉ノ本名藤生花ト云狀如二扁豆一田野人ノ牽レ牛來テ爲レ樂易レ之故始テ此名ヲ得ト云リ然レバ牽牛花ハ各別ノ事歟サレバ宋人ノ詩ニ槿花籬下ト秋事早有二牽牛一上レ竹來ト云々此詩ノ意モ朝顏ト牽牛トハ各別ト覺タリ槿舜ナドニ種々ノ註有レドモ未ダ牽牛ノ古事不レ見然共文書廣ケレバ何ナル本草ナンドニカ釋シ侍ルラシ既順和名ニ通ジテ讀メリ定テ由侍

ニヤ

按に槿は今のむくげにして牽牛子は今のあさがほ也その槿の正文は卽菫にして槿は漢魏以下の俗字なりまた蕣華といひ日及といへるはこれもむくげの一名にしてあさがほにはあらず扨草冠なき堯舜の舜字は卽今のひるがほなるを遂に誤りて蕣に混じてあさがほとし且打思には草の名なれば蕣を正也とすべき歟といへるはこれ茱萸は木にして草に从び桔梗は草にして木に从ぶ義をしらざるに由て也また牽牛子華の木名を藤生花といふといへるはこれ集注本草に牽牛子作二藤生一花狀如二稨豆一といひし形狀を誤讀して强て以て此ものゝ名とせし也然といへども古より普く槿字を牽牛子と云といひしは後世の歌書にいはゆる槿と題して牽牛花の歌を載たりその槿は卽木菫にはあらずして牽牛子の假借字なるよしをしるにたれり

集注本草云牽牛子作二藤生一花狀如二稨豆一黃色子作二小房一實黑色形如二梂子核一

按に陶弘景の牽牛子を注せしはたゞその子を見ていまだその花を見ざるなるべし故に唐本草に此花

に狗耳草條なし且牽牛葉は三尖にして頗る楓葉の如くなればそれを以て狗耳に比するもいかゞあらむ然れば狗耳草は別に一種の草名にして牽牛苗の名にあらざるに似たり猶考ふべし

丁香茄兒救荒本草

○此實茄子に似て蔕長くその形頗る丁香の如し故に名づく

天茄兒同上

○按に救荒本草に龍葵また天茄兒苗と名づくこれと同名異物なり

はりあさがほ本草綱目啓蒙

○此花あさがほに似て蔓に柔刺あり故に名づく

丁子なす物類品隲本草綱目啓蒙

○此卽和漢同名なり

とうなすび同上

○とうは卽唐字の義なり

夕がほ本草綱目啓蒙

○名義本書にみえたり

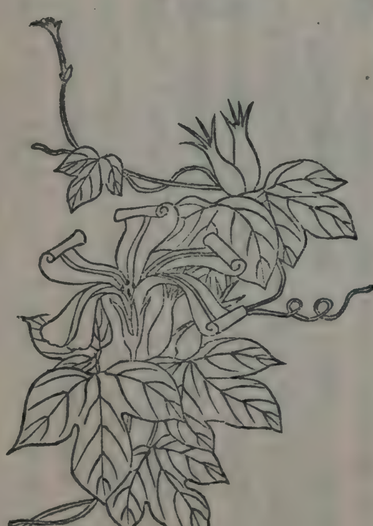
まんばらす同上

もんばらす同上

○此二名は蠻名なりといへり

「此間彩色二十五圖（牽牛子、猩々紅、袴着、采請咲、星月夜、三重絞、梅咲、撫子咲、井出の里、小形筒長、菊咲、櫻咲、牡丹咲、臺咲獅子、切レ咲芭蕉葉、桔梗咲鳳凰葉、小形切咲、桔梗咲（二圖）、孔雀、石疊、采咲、絲咲、丁香茄、）略之」

卷絹



『此間彩畫十二圖略之』

○正誤

壒嚢鈔云　槿アサガホノ實ヲ牽牛子ト云ヲ不レ爾ト云義アリ

し七月織女東向するよしは大戴禮の夏小正に見えたるを始とし七日の夜牽牛織女の天河に聚會するよしは晉の傳云が擬天問にみえたるを始とすそれはともあれ此あさがほはその花牽牛星をまつる頃盛に咲いづるものなるによりてそれをまた牽牛と名付しなるべし扨また大東の毛傳小河鼓謂二之牽牛一といひ周處風土記に七月七日以祀二河鼓織女一といひ又荊楚歳時記に牽牛星荊州本ノマヽ呼二河鼓一云々河鼓黃姑牽牛也皆語之轉などいへるより時は荊楚にては牽牛子を以てまた河鼓子或は黃姑子ともいへるなるべしその河をよむ聲もと莕の如く又可の如し可莕もと一聲たゞ緩急の異なるのみなるは說文に莕从レ艸杏聲また杏从レ木可省聲また河从レ水可聲及び穀麥从レ麥穀聲讀若庫とみえたるにて明らけしまた其黃をよむ聲また莕の如穀の如くなれば黃姑及び河鼓の如きは卽牽牛の方聲なり故にこれを以て語之轉なりとはいひし也またその牛をよむ聲鼓の如くまた姑のごとくなるを本邦にては舊より吳音とのみいひ傳へたれども此宗懔が說による時はまたこれ荊楚の方聲なりといへり扨古今集物名に牽牛子をけにこしといひしは蘭をらに錢をせに木欒子をむくれにし紫苑をしほにといふ同じ例にして和名にはあらず

牽牛花救荒本草

草金零證類本草引雷公

○雷公曰草金零牽牛子是也とみえたり又證類本草に本草圖經を引て零を鈴に作る本草綱目に金鈴象子形とみえたり

江娘子畿輔通志

○牽牛花俗名二江娘子一とみえたり按に本草綱目に樗雞一名二江娘子一とみえたりそれを時珍は其羽文綵故俗呼二江娘子一といふ時は此江娘子も紅娘子の誤りにてもあるべきにや

黑丑本草綱目

白丑同上

○時珍曰牽牛近人隱二其名一黑者爲二黑丑一白者爲二白丑一蓋以二丑屬一レ牛也

假君子輟耕錄

狗耳草本草綱目引救荒本草

○時珍曰狗耳象二葉形一按に今傳ふる所の救荒本草

開寶本草云此藥蔓生花如二鼓子花一而稍大作二碧色一子有二黄殼一作二小房一實黑稍類二蕎麥一比來服レ之以療二脚腫滿氣急一利二水道一無レ不レ差者

蜀本圖經云苗蔓生花碧色子若二蕎麥一三稜黑色九月以後收レ子所在有レ之

本草圖經云牽牛子舊不レ著二所出一州土今處々有レ之二月種子三月生レ苗作二藤蔓一遶二籬墻一高者或三二丈其葉青有二三尖角一七月生レ花微紅帶二碧色一似二鼓子花一而大八月結レ實外有二白皮一裹作レ毬每毬內有レ子四五枚如二蕎麥一大有二三稜一有二黑白二種一九月後收レ之又名二金鈴一

按に炮炙論によるに金の上にもと草字ありしを傳寫するもの誤りて落せしなるべし

本草綱目云牽牛有二黑白二種一黑者處々野生尤多其蔓有二白毛一斷レ之有二白汁一葉有二三尖一如二楓葉一花不レ作レ瓣如二旋花一而大其實有レ蔕裹レ之生青枯白其核與二棠梂子一形一樣但色淺黑爾白者人多種レ之其蔓微紅無レ毛有二柔刺一斷レ之有二濃汁一葉團有二斜尖一竝如二山藥莖葉一其花小于黑牽牛花淺碧帶二紅色一其實蔕長寸許生青枯白其核白色稍粗人亦采二嫩實一蜜煎爲二果食一呼爲二天茄一因二其蔕似一レ茄也（此說誤りあり正誤に辨ず）

祕傳花鏡云牽牛一名草金鈴一名天茄兒有二黑白二種一三月生レ苗即作二藤蔓一或遶二籬墻一或附レ木上長二三丈許葉有二三尖一如二楓葉一七月生レ花不レ作レ瓣白者紫花黑者碧色花結レ實外有二白皮一裹作レ毬々內有レ子四五粒狀若二茄子一差小色青長寸許採二嫩實一鹽焯或蜜浸可レ供二茶食一近又有二異種一一本上開二二色一者俗因レ名之曰二黑白江南花一

救荒本草云丁香茄苗亦名二天茄兒一延レ蔓而生二人家園籬邊一多種莖紫多レ刺藤長丈餘葉似二牽牛葉一甚大而無二花叉一又似二初生嫩糵一葉却小開粉紫邊紫色心筒子花狀如二牽牛花樣一結二小茄一如二丁香樣一而木有レ子生二白牽牛子一亦大味微苦○救飢採二茄兒一煠食或醃作二菜食一嫩葉亦可レ煠熟レ油鹽調食

○釋名

あさがほ（本草和名 和名類聚抄 八雲御抄 藻鹽草）

○名義既に上文及び旋花條にみえたり

牽牛子（名醫別錄）

○名義既に集注本草にみえたり然るを又岡村尙謙曰牽牛織女の名は詩の小雅大東にみえたるを始と

用藥須知云牽牛子黒白二種アリ黒者名二黒丑一白者名二白丑一實白キモノニ花碧色ナルアリ槿ヲ以テ當二牽牛子一誤ナリ槿ハムクゲナリ共ニアサガホト訓ズ

物類品隲云牽牛子黒白二種アリ黒丑ハ黒牽牛子ナリ白色數十種アリ白丑ハ白牽牛子ナリ是牽牛子ノ花實皆白キモノナリ東壁天茄子ヲ白丑トスルハ非ナリ○黒白江南花アリ和名シボリアサガホ花鏡云近又有二異種一一本上開二二花一者俗因名レ之曰二黒白江南花一○重瓣ノモノアリ奇品ナリ不レ結レ實其餘近世色數十ニ及ブ藥用ニハ碧花ノモノヲ用ベシ

又云天茄子和産ナシ○琉球種其蔓微紅ニシテ無レ毛柔刺アリ斷レ之有二濃汁一葉圓ニシテ山藥及ビ甘藷葉ニ似タリ花、牽牛旋花ノゴトク白色ニシテ底紫ナリ午時ニ開キ夕ニ萎ム實牽牛子ニ類シテ蒂長シテ其形丁香ノゴトク又茄子ニ似タリ生ハ青熟ハ白其核牽牛子ニ比スレバ稍大ナリ嫩實ヲ取蜜煎シ或ハ焯茶ニ供シ薑醋ニ拌ゼテ饌ニ供ス對口瘡ヲ治スル神方アリ詳ニ高瀬ガ遵生八牋ニ見エタリ此物本邦ニ産スル事ヲ聞ズ戊寅ノ夏薩商東都ニ齎來ル琉球ニ出ヅト云予卽是ヲ得テ甚愛ス至レ秋實數十百枚ヲ得タリ翌年己卯主品中ニ具ス又同志ノ者ニ贈テ公二于世一案ズルニ東壁天茄子ヲ以テ白牽牛子トス然ドモ蘇頌有二黒白二種一ト云ノ外古人ノ説ナシ牽牛子中又色白モノアリ天茄子形相似タリトイヘドモ其種自別物ナリ且天茄子ハ爲果食ドモ下痢セズ牽牛子ノ功ナキニ似タリ恐クハ東壁牽牛子白實ノモノヲ見ズ妄ニ認テ此物トスルカ

本草綱目啓蒙云時珍曰白者人多種レ之云々此草ハハリアサガホナリ寛延ノコロ薩州ノ商人此ヲ携ヘ來ル今ハ諸州ニ多ク栽ユ春月種ヲ下ス事牽牛子ノ如クス葉ハ何首烏葉ノ如ニシテ光アリ藤ニ柔刺アリ人ヲ傷ラズ花、牽牛花ニ同クシテ小淡紫色筒ニ近シテ色深シ申ノ時開戌時萎ム故ニ今俗ユフガホト呼其蔕肥テ柔刺アリ甚茄ノ蔕ニ似タリ上ニ房ヲ結デ牛好茄ノ形ノ如シ熟スル時ハ白色微褐牽牛子殼ノ如シ內ニ子アリ子形亦同シテ微大白色其嫩ナル者ハ食フベシコレ救荒本草ニ載スル所ノ丁香茄兒一名天茄兒ナリ白牽牛ニ非ズ時珍ノ説誤レリ白牽牛ハ白花ノ牽牛ヲ以テ眞トスベシ

唐本草云此花似二旋葍花一作二碧色一云々

牽牛花に似て小にして淡紫色實をむすぶ事頗る牛好茄のごとし本草綱目啓蒙時珍これを以て白牽牛となすものは誤りなり物類品隲本草啓蒙

本草和名云牽牛子陶景注此出二於田舍一凡人和名阿佐加保

和名類聚抄云牽牛子陶隱居本草注云取レ牽レ牛易レ藥故以名レ之和名阿佐加保此出二於田舍一凡人取レ之牽レ牛易レ藥故以名レ之

源氏物語云かれたる花どもの中に朝がほのこれかれにはひまつはれてあるかなきかにさきて云々

中務集云かたゝがへに人の家にいきてつとめてはぎにあさがほのかゝれるをゝりて云々

枕草紙云草の花はなでしこからのはさら也云々をみなへしきゝやうあさがほ云々

按にあさがほの名素本活板本春曙抄等には落てなけれども眞は後光嚴院宸翰本及び予藏する所の古寫本などにあるによれり

又云歌の題は

春曙抄云よのつねの題のみならず隱題によむべき物どもを聞ゆ

みやこくずみどり云々なつめあさがほ徒然草云秋のくさは萩すゝき云々つた葛あさがほいづれもいとたかゝらずさゝやかなる垣にしげからぬよし

藻鹽草云朝顏朝にさく花也人のかほにもよするなりとぼそにかゝるあさがほにかゝるとも

和漢三才圖會云案牽牛花寅卯辰三時爲レ盛向二日光一則委再不レ開而餘莟開レ花乃一莖數十花遂レ日開不レ經レ旬皆結レ實其花有二深碧淺碧純白淺紅色四種一而紅者希也

又云一種有二小牽牛花一高三四寸末延蔓不レ倚レ架二葉而開レ花故名二二葉牽牛花一亦小美也蓋此生二瘠地一不レ能レ長者也復種二其子一乃如レ之

大和本草云牽牛子朝間花容美シク見レ晛(ヒカゲ)則萎故朝貌ト號ク盆ニ植テ室下ニヲケバ不二早萎一花ニ淡青深青紫色白色アリ本草云有レ毒雄烈弛二人元氣一毒藥ナリ勿二妄用一黑牽牛子花ノ深青ナルヲ可レ用油ヲトリテ燈ニ點ス可也萬葉集ニハ木槿ヲアサガホトス古今集物名部ニケニゴジトイヘルハ牽牛花ナリ順和名鈔ニハ牽牛花ヲアサガホト訓ズ然レバ木槿モ牽牛モ共ニアサガホト云同名異物ナリ○小牽牛花アリ蔓ノ本ニ葉ヨリ花早ク開ク其色紺白碧紫數種アリ晝ニ至テ不レ萎花ノ大サハ如レ常好種ナリ可二栽賞一

古今要覽稿卷第四百二十二

●草木部

あさがほ　牽牛子

あさがほは漢名を牽牛花一名江娘子その子をあさがほのみ漢名を牽牛子一名草金零一名假君子一名黑丑一名白丑その草をまたあさがほ漢名を狗耳草といふこの種は延喜のむかし吳舶の載來りしが今に傳はれるにて本邦固有のものにはあらず故に延喜式典獄寮に牽牛子丸五劑云々又牽牛子三斤十三兩云々右依前件造備訖與臘月御藥同日進之などみえたり牽牛子は卽舶來にして山野自生のものにあらざるよしはまた式にいはゆる諸國進年料雜藥のうちに其名載せざるにてしるし小野蘭山曰牽牛は人家に多く種ゆその花靑碧色のものを黑丑一名黑牽牛をいひ白花のものを白丑一名白牽牛といふ葉の形皆三尖にして互生し微毛あり品類尤多し花鼓子の形をなして五尖あるものは尋常のもの也又五瓣筒まで切れたるものあり又花頭五尖なるものを桔梗ざきといふ葉もまた五尖なりその瓣圓なるものを梅ざきといひ尋常の花のかたちにして中に小瓣あるものを孔雀といふ紫あり淡紫あり紅あり淺紅あり間色なるものあり碧白相間るものを黑白江南花と祕傳花鏡いひ俗にまつやまあさがほといふ又藍色にして紅點なるものあり又千葉にして間色なるものあり瓣多くして重し故に正開する時は莖おのづから折れて實をむすびがたし以上本草綱目啓蒙又特生のものありきあさがほ一名二葉あさがほといふその苗高さ僅に三四寸にして花をひらき晝にいたりてもなを萎まずその花の大さは尋常のものにおなじ扨近年は專ら牽牛花あせはといふこと世におこなはれて三都の人々きそひて此花を賞し異花變生數千百花に至るなかにもその培養の法に熟せしものは樹木を接するがごとくにこの草をも接するといへり奇といふべし又一種はりあさがほ一名丁子なすび一名とうなすび一名まんばらす一名もんばらすあり漢名を丁香茄兒一名天茄兒といふ此種はもと琉球に出るを寶曆戊寅の夏薩州の商人東都に齋來りしと物類品隲いへりその葉の形何首烏葉に似て藤に柔刺あり花は

には葍一名蕾の四字に作れり

幽兗

按に詩注疏及び爾雅疏には兗字を州人の二字に作る

謂二之燕葍一一名爵弁一名藑根正白著熱中灰温喊レ之

詩疏及び爾雅疏に此文を引しには喊を噉につくる

飢荒可二蒸以禦レ飢

按に此條また葍蕾と葍藑茅との二種を混同して誤りて一物となせし也故に燕葍以下の三名は卽藑茅の一名にして河東關内謂二之葍一といふ卽葍の一名なり

正字通云爾雅葍有レ二一名レ當一名レ藑說文汎云茅葍也義未レ詳又云一名蘨不レ知蘨卽爾雅木槿非二藑茅一也

按に說文に藑茅葍也といひしは離黃倉庚也といへるに同し例なればたゞ茅葍也とのみいひしにはあらずまた說文にても葍はおのつから葍、藑はおのつから藑にしてそれを以て汎云せしにはあらず且藑字注に一名蘨といへるによりて蘨卽木槿非藑の說あれどもその一名蕣といひし蘨字はもと舜の誤字なる事をしらざるにこりていたつらにその辭を費やせしなり

又云蘨蕣本字六書本義作レ舜與レ蘨同隸作レ舜作レ橓非レ據此音注則是蘨卽蕣卽木槿也本義又云草名象其蔓地連生形升聲復引楚謂二之葍一秦謂二之藑一以實之似蘨蕣殊種自相矛盾詩云顏如蕣華注樹如李非蔓生本義注誤

按に蕣は木菫にして舜は藑華なり六書本義の說蓋しかくのことし然るを正字通にその二字を混同してその說をなすものは却て誤り也又詩にいふ舜華まさに蕣華に作るべし蓋し傳寫の誤りなり

蘘花同上

○按に尙書に曰若稽古帝舜曰重華とみえたりこゝに蘘花といひしは蓋し重華の訛轉なるべし

串枝蓮盛京通志

○按に串枝は蓋し牽枝の訛轉なり

正誤

大和本草云萬葉集ニ朝顏朝露負咲雖云トイヘリ此歌ヲ以テ見レバ朝貌卽槿花也非ニ牽牛子ニ也

按に古の朝貌は卽今の晝貌にして槿花も牽牛子もともにいにしへは絕てなきものゝよし既に本條に詳なり然りといへ共中古より槿花を以て朝貌といひし事もまた久しければ篤信もその誤りをうけてかくはいひし也

本草臆斷云萬葉集に載せし朝顏は朝露おひて咲といへどの歌解難しこれはもと胡枝花をよみし歌にて朝顏の歌にあらずその意は朝貌は朝露おひて咲といへど此はぎの花は夕にさきまさりて面白しとよみたる也しかるを朝がほの歌とする故に聞えず萬葉にはこの歌を鹿鳴草(ハギ)の歌のうちに出せしにてもその華は熟察すべし

按に萬葉に朝果といひしは卽今の晝顏なるを此臆斷の說にてはその歌の錯簡して鹿鳴草のうちにあるによりてはぎの歌なりといひ且古の朝がほは本槿華にて牽牛花を朝がほといふは後世の事なりされども又歌などにては牽牛花を指すと聞ゆ再可レ考などいひ又近頃の說に朝がほは朝露おひて咲しかうつくしけれども人の顏は朝起し時より夕のかたうつくしければそれを花によそへて夕陰にさきまさるといひし也といへるは共にあやまり也

齊民要術引爾雅云葍蔓茅郭璞曰葍大葉白華根如レ指正白可レ啖葍華有ニ赤者一爲レ蔓々葍一種耳亦如ニ陵苕一華黃白異名

按に三つの蔓字まさに藑字に作るべし蓋し傳寫の誤まりなり扨爾雅に葍葍また葍藑茅の二條ありてもとこれ同名異物なり然るを賈思勰漫に二條の郭注を混同して葍と藑茅とを以て一物とせしはあやまりなり

又引詩云言采其葍毛云惡菜也義疏云河東關内謂ニ之葍一

按に河東以下の七字を孔穎達か注疏に陸璣を引し

あるべからずまた尙書に重華といひしも蕣華によりてその德の最美なるを稱してしかいひしなるべし然れば說文にいはゆる蕣草也といへるは卽その字の本義なれば或は仁聖盛明曰ㇾ蕣といへるなどは却て蕣字の本義にてはあるべからず

葍 爾雅 說文

○按に說文に蕣楚謂ニ之葍一といふ時は蕣は正名にして藑はその方言也然といへ共郭注爾雅による時は藑は卽白花のものをさしていふ

藑 說文

○按に說文に蕣秦謂ニ之夐一とみえたれば藑は卽秦の方言也又說文に瓊赤玉也从ㇾ玉夐聲また藑从ㇾ草夐聲なれば从ㇾ草从ㇾ玉その義一つなるか故に郭注爾雅にも藑華有ニ赤者一爲ㇾ藑とみえたり扨爾雅に葍藑茅といひまた說文にも藑茅葍也とみえたればいはゆる秦謂ニ之藑一二字の下に茅字を落せしにてもあるべきにや

藑茅 爾雅 說文

○按に茅子いまだ詳ならず或云その根茅根の如し故に名づく

旋葍草 本草圖經

肫腸草 同上

○按に肫正文にまさに豚に作るべし名義既に本書にみえたり

燕葍 詩義疏 救荒本草

○按に燕葍は蓋し旋葍の方聲なるべし

爵弁 詩義疏

○按に救荒本草に一種千葉者名穰花とみえたりこれによるに爵字をよむ聲觴の如きは卽その字の原聲にして觴爵もと同聲なれば弁字疑らくは花字の摩滅せしにても有べきにや

天劔草 本草綱目　兎兒苗 救荒本草　狗兒秧 同上　葍子根 同上　秧子根 同上

筋根 神農本草

○名義既に上文にみえたり

續筋根 本草圖經　蔓根 齊民要術引詩義疏

藤長苗 救荒本草

○此種尋常のものにひすれは其苗蔓をなして最長し故に名づく

旋菜 同上

子に琁樹といへる音注に琁窮とみえたるにても琁をよむ聲又窮の如きはその字の原聲にてそれをよむ聲瓊䲨の如きは卽その方聲なるをしるべし然る時は旋葍は卽琁葍旋栄は乃琁栄にて其琁の原文はすべて䔲字也といへりこれまた一說に備ふべし○按に琁をよむ聲䲨の如くそれをよむ聲また規の如し䲨規もと一聲たゞ緩急の異なのるみなればこゝに琁をよむ聲また窮の如きは卽規の緩聲也再按に淮南子に直音を附せしは高誘注に非ざれば此一條は削去かた却てしかるべし

美草上同

○此草華を開きて最美麗なり因て美草と名づく

旋葍花唐本草蜀本圖經

○此卽旋と葍との二名を合せて一名とせし也

鼓子花本草和名引二本草拾遺一證類本草引二本草圖經一

○名義旣に上文にみえたりまた本草綱目にも其花不レ作二瓣狀一如二軍中所レ吹皷子一故名とみえたり

打碗花救荒本草

○按に字書碗字なし蓋し椀のあやまりにてその正文はまさに盌に作るべし打盌もまた鼓子と同じく其花の形によりて名付しなり

牽枝牡丹盛京通志

○按に祕傳花鏡に旋花一名纒枝牡丹とみえたれ共救荒本草には千葉者呼爲二纒枝牡丹一とみえたりそれはともあれ此蔓よく物を纒繞するによりてその名を得しものなるべければこゝに牽枝牡丹といひしは卽纒枝牡丹の方聲なるべし然といへ共牡丹といふ名による時はいづれ千葉にしてうつくしきものしかるべし

掛金燈農圃六書

○按に此花紅色にして物にまとひて高く咲出し形をみたてゝ掛金燈とは名付しなるべし

舜說文

○名義蕣華條にみえたり按に說文に堯高也䑞艸也といふ時は帝堯は卽論語に大哉堯之爲レ君也唯天爲レ大唯堯則レ之とみえたる意にてその德の堯高なるによりてその名をたゝへ帝䑞は其身もと卑賤なりといへ共その德のみなる事蓋しこの草の田野にありてその花のみなるにたとへてその名を得しものなるべければ蕣華一日六葉などいへる義にては

にその聲をわかちて唐韻に川昌緣切とせしはこれ一方の方聲なるに同じ扨說文に舜象形从ㇾ舛々亦聲とみえたれば舜舛もと同聲にしてそれをよむ聲唐韻にいふ舜舒閏切順食閏切の如きはこれその字の源聲なるにその舛をまた唐韻に舛昌兗切とせしはこれ川をよむ聲穿の如きと同じ方聲なりまた說文によるに舛の重文に蹖あり楊雄說舛从足春と見えたるにても舛春また同聲なるは明らけし然るを今傳ふる所の本草はその舜舛をよむ聲穿川の如き方聲を主として作りしものなるによりてさらにその方聲を以て旋花と稱せしより歷代諸家皆その名に因循し遂にその古名の舜䔥たることをしらずして今日に至れるは實に迷へるの甚しき也今の本草中此類また多し皆人よろしく心してみるべしさて又按に說文に瓊从ㇾ玉夐聲重文璚とあり(按に矞は蓋し冏を以てその聲をとる故にそれをよむ聲巂の如しこれは說文に巂周燕也从隹屮象其冠也冏聲唐韻に巂戶圭切とみえたるにて其義は明らけし然る時はその巂の轉聲は卽唐韻にいふ厥愋月切決古穴切の如くなるべきをまた唐韻に矞余律切橘居聿切などいひしは共に各邦の方聲也)瓊或从ㇾ矞又重文瓗あり瓊或从巂又重文琁あり璿或从旋省とみえたるによれば旋花正文まさに琁䔥に作るべしその琁をよむ聲また夐の如きは重文にいはゆる巂矞の字によりても其義は明らけし然るを漢書安帝紀に書にいはゆる璿璣玉衡をあやまりて琁璣玉衡に作りその琁璣を史記天官書には旋璣に作り琁璣同聲とせしより遂にその誤りをうけて本草にも琁を以て作れるなるべしその琁字は說文に从ㇾ玉旋省とありて从ㇾ旋聲といはざるにても琁旋もと同聲ならざる事はしられたり又說文に淀从ㇾ水旋省聲といひし淀を又漩に作れるはたゞ省不省の異なるのみなれども史記にいはゆる琁を璇に作れるはこれと反對にしてその聲を誤れる也扨その琁字は又說文に䔥草也秦謂二之藑一といへる藑字とその聲暗合なれはいづれにも旋花は卽琁華の誤りにてそれをよむ聲夐巂の如くなるはしるしこれによるに古本草には琁華一名䔥華とありしを今の本草にはその一名を落せしなるべしこれは又說文に藑茅葍也一名䔥といへるにてもその義はをしはかるべし又淮南

かつぽう同上

○かつぱう備後とみえたり名義既に上文に出たり

あめふりばな同上

○あめふり花仙臺とみえたり一説にあめふり花といふは飴賣花といふ事の轉語にて飴賣のちやるめら笛にその花の形相似たるによりての事なるべしといへり或は祕傳花鏡に雨打無レ聲皷子花といへるとはその義異なれども此花雨降てもさらにうつろふ事なくそれにぬれたるさまひときはうつくしきによりてしか名付しにてもあるべきにや

からまりばな麁食教草

○此蔓よく物に纒繞して其葉間に花咲出るものなれば名付しならん

おほひるがほ物類品隲 本草啓蒙

○おほは即大字なり

ちよくばな同上

○ちよくばな讃岐とみえたり此即前の晝貌と同名なり

はまひるかほ本草綱目啓蒙

○はまは即濱字なり

かつぽうばな同上

○名義上文にみえたり

はまぢばな同上

○はまぢは即濱地なり

かうづる同上

○かうづる越州とみえたり按にかうづるは容蔓の字にて即かほばなのさくつるといふ義なるべし

へびあさがほ同上

○へびあさがほ相州とみえたり按にへびは蛇いちごのへびと同意なり扨相州江の島にては此ものを以て鮹のけんに用ゆるといへり

あふひかつら同上

○花戸の稱なりといへり按にあふひかつらはその葉あふひに似たりよりて名づく

旋花神農本草 名醫別錄

○岡村尚謙曰旋花正文まさに嫙蕣に作るべしその旋はこれ嫙の訛轉にして即一邦の方聲也これは川順もと同聲にしてそれをよむ聲說文に紃从糸川聲唐韻にいふ紃詳遵切のごときは即その字の原聲なるをまた釋名に川穿也穿地而流也といひしより遂

らざるなり

○釋名

朝貌（萬葉集）

○和訓栞にかほは日本紀に顔面又容貌をよめり形秀の義なるべしとみえたり扨朝貌をまた朝容貌ともかけり此花は朝ことにうつくしして咲いづるによりてその名を得し也

朝果（同上）

○和訓栞に朝果といふはかうの音をかりて轉じて通せしなりとみえたり按に貌鳥を果鳥とかきし卽ちまたこの例なり

容花（同上）

○名義上文にみえたり

波也比止久佐（本草和名 和名類聚抄）

○按に名義いまだ詳ならず東雅に旋花も大戟も共にはやひとぐさといふはその物の始めて出し地方もて呼に似たりといへり然りといへ共旋花も大戟も古よりいづれの國にも多くあるものなればその物の始めて出し地方もて呼といふもいかゞあらむ又本草和名に旋復花一名金沸草和名加末都保一名加末保といへるは旋花一名金沸和名また加末といへる末字の下に蓋し保字の落しものなるべければ旋花も旋復花もまた同名也その旋花の一名を金沸といひしは旣に名醫別錄より誤りしものなればこれらはたゞ旋字によりて共にその名を同してせしなるべし扨隼人は禁中の御垣を守る官人にていにしへはみな薩摩國よりつとめたればはや人の出るさつまといふ程のつゞけにて冠辭には用ひ來れるよし詞草小苑にみえたれども此草にその名をおふせしはいまだいかなる故なる事をしらず

ひるがほ（多識編 和漢三才圖會 大和本草 本草辯）

○此華は朝の五つ過より咲そめて日中に至るといへ共なほ萎む事なきによりて名づく

はたけ朝がほ（本草綱目啓蒙）

○同書にはたけ朝貌（和州）とみえたり

みゝだれぐさ（同上）

○みゝだれぐさ（江州）とみえたり

ちよくばな（同上）

○ちよく花（備前）とみえたり此華酒鐘茶鐘などの形に似たり故に猪口花と名づく

鼓子花、鼓子花、豐年簫鼓競ニ繁華ヿ、今年鼓吹寂無レ譁、
流離滿眼多ニ傷嗟ヿ、

『此間三圖略之』

和歌

萬葉集卷第十秋雜歌

詠花

朝果朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮

秋相聞

展轉戀者死友灼然色庭不出朝容貌之花

言出而云忌染朝貌乃穗庭開不出戀爲鴨

又卷第十四

和我目豆麻比等波左久禮杼安佐我保能等思佐倍己其
登和波佐可流我倍

又卷第八

大伴宿禰家持贈ニ坂上大孃ー長歌之反歌

高圓之野邊乃容花面影爾所見乍妹者忘不勝裳

按に容花の容は容鳥の容と同じ事にてすべての花のうつくしきをさしておふせし名なれ共こゝに容花とよまれしは蓋し今の晝貌にして卽古の朝貌なるべしとおもはるゝは此歌を古今六帖に引しより「高圓之野邊乃」を「春日野の野邊」に作りしはともあれその容花をあさかほに作りしにてしるし扨晝貌を今も備後國にてはかつぽうといひまた濱晝貌をその國名は載せざれどもかつぽう花といふよし本草啓蒙にみえたりそのかつぽう花は卽容花といへる古語の殘りてよこなまりたるなれば古のあさかほの晝貌なるよしはいちじるし然といへ共また萬葉集卷十寄レ花歌に「石走間爾生有貌花乃」また卷十四に未勘國相聞歌に「宇知比佐數美夜能瀨河泊能可保波奈能」とよみしは蓋し莫傳抄にかほよばなはかきつばたなりといへるにてもあるべくまた同じ卷に「美夜自呂乃緖可敝爾多氐流可保我波奈」及び俊賴集に「道すからかれ野にたてるかほか花」とよまれしはこれまた一種の花のうつくしきをさしていひしものなれば此朝貌をさして容花といひしには異なり扨「をかへにたてるかほか花」といひまた「枯野にたてるかほか花」などいへるは蓋し新撰字鏡にいはゆるきちこうの朝貌をさしていひしなるべし然るを岡部衛士の「をかへにたてるかほか花」は槿花なるべしといひしは未だ考のた

小開花狀似ニ牽牛花一微短而圓紛紅色其根甚多大者如ニ小筋一麄長一二尺色白味甘性温

又云玄扈先生曰嘗過レ吳人呼ニ秧子根一弃レ地宏ニ移植備レ荒

又云藤長苗又名旋莯生ニ密縣山坡中一「拖蔓而生レ苗長三四尺餘莖有ニ細毛一葉似ニ滴々金葉一而窄小頭頗齊開ニ五瓣紛紅大花一根似ニ打碗花根一根葉皆味甜

本草綱目云旋花田野塍塹皆生逐レ節蔓延葉如ニ菠菜葉ニ而小至レ秋開レ花如ニ白牽牛之花一紛紅色亦有ニ千葉者一其根白色大如レ筋不レ結レ子

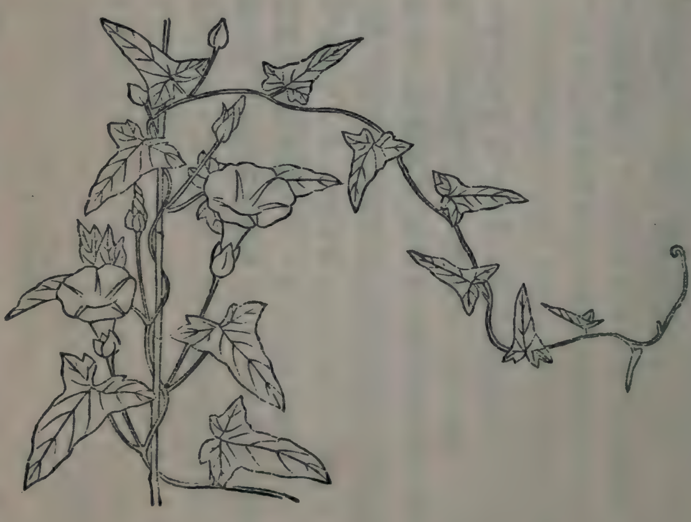
又云一種千葉者色似ニ粉紅牡丹一俗呼爲ニ纏枝牡丹一

按に此文は綱目の釋名中に出卽前にいはゆる千葉のものと一物也

盛京通志云牽枝牡丹蔓生葉狹長而花形圓粉紅色又有ニ千葉者一俗呼串枝蓮

祕傳花鏡云鼓子花又名纏枝牡丹蔓ニ延川澤間一葉似ニ薯蕷一小而狹長花開如レ拳不レ放頂幔如レ缸鼓式色粉紅有ニ千葉者一人多植以爲ニ屛籬之玩一根無ニ毛節一蒸煮味甘可レ啖花不レ結レ子取レ根寸截置レ土灌漑卽活生レ苗昔有ニ一絕對ニ云風吹不レ響鈴兒草、雨打無レ聲鼓子花

ひるかほ



救荒野譜補遺云鼓子花食レ根一名旋花生ニ川澤一蔓生葉似ニ山藥一根無ニ毛節一味甘美荒年堀取蒸食レ之

赤者ニ爲レ蘡薁一種耳といふ文を引てその三つの蘡字を皆あやまりて蔓字に作れりこれによる時は此蔓根の蔓字もまた蘡根の誤りなるはをしてしらる

漢祭甘泉或用レ之其華有ニ兩種ニ一種莖葉細而香一種莖赤有ニ臭氣ニ

神農本草云旋花味甘温一名筋根生ニ豫州平澤ニ五月採陰乾

名醫別錄云旋花一名美草

按に大平御覽神農本草を引て旋華一名美草とみえたり

唐本草云旋花卽生ニ平澤ニ旋葍是也

按に證類本草に唐蕭炳か四聲本草を引て旋徐元切復伏音用レ花葍音福旋徐願切用レ根云旋復根卽葍旋誤矣といへるによれば旋葍まさに葍旋に作るべし卽本草和名に一名葍旋出蘇敬注とへるによく叶へり

其根似レ筋故一名ニ筋根ニ

嘉祐本草云旋花引ニ蜀本圖經ニ云旋葍花根也

按に此文を本草綱目に引しには旋の上に此字ありて根字なし

蔓生葉似ニ薯蕷ニ而多狹長本草綱目に引しには多字なし花紅白色根無ニ毛節ニ蒸煮堪レ噉味甘美根名ニ筋根ニ今所在川澤皆有二月八月採レ根日乾

本草圖經云旋華苗作レ叢蔓葉似ニ山藥ニ而狹長花白夏秋生遍ニ田野ニ根無ニ毛節ニ蒸煎堪レ噉甚甘美別錄云根主續筋故南人皆呼爲ニ續筋根ニ五月採レ花陰乾二月八月採レ根日乾花今不レ見ニ用者ニ下品有ニ旋復花ニ與レ此殊別人疑ニ其相近ニ殊無レ謂也救急方續斷筋法取ニ旋葍草根ニ淨洗去レ土擣量瘡大小傅レ之日一二易レ之乃差止一名肫腸草

按に本草綱目に此文を引しには草の下に象形也の三字あり

俗謂ニ鼓子花ニ也○神農本草以下並證類本草引

本草衍義云旋花蔓生ニ今河北京西關陝田野中ニ甚多最難ニ鋤艾ニ治レ之又生世又謂ニ之鼓子花ニ言其形肖也四五月開レ花亦有ニ多葉ニ者其根寸截置ニ土下ニ頻灌漑方涉レ旬苗巳生蜀本圖經是矣

救荒本草云葍子根俗名打碗花一名兎兒苗一名狗兒秧幽薊間謂ニ之燕葍根ニ千葉者呼爲ニ纏枝牡丹ニ亦名穰花生ニ平澤中ニ今處々有レ之延蔓而生葉似ニ山藥葉ニ而狹

物類品隲云旋花所在多シ菠薐葉ノゴトク三尖ニシテ小ク花牽牛花ノ如クニシテ又小ナリ
又云藤長苗ハ葉旋花ニ比スレバ稍長大ナリ花マタ旋花ノゴトクニシテ大ナリ色淡紅又白花ノモノアリ旋花ト紛レ易シ混ズベカラズ
本草綱目啓蒙云旋花原野ニ尤多シ一タビ生ズル時ハ細長キ白根土中ニ蔓延シテ治シ難キニ至ル春舊根ヨリ苗ヲ生ジ草木ニ纒繞ス葉互生ス形長クシテ尖リ本ニ小兩尖アリ又短クシテ本ニ四尖アル者アリ夏月葉間ニ花ヲ開ク辰後ニ開キ日夕ニ至テ萎ム淡紅色ト白色トノ二品アリ形牽牛花ニ似テ小シ其蕚ハ短濶ノ兩葉コレヲ狹ム牽牛花ノ蕚ノ細長ニシテ五出ナルニ異ナリ
又云一種オホヒルガホアリ葉長大花モ大ナリ
又淡紅色白色ノ二品アリ又一種海濱及ビ江湖邊沙地ニ生ズルヲハマヒルガホト云葉形圓ニシテ厚ク大サ一寸許蔓ハ長カラズシテ花ハ尋常ノ大サナリ又時珍ノイハユル纒枝牡丹ハ是千葉ノヒルガホナリ八種畫譜ニ圖アリ和產ナシ
說文（䑞部）云䑞草也楚謂二之葍一秦謂二之藑一蔓地連華象形从レ舛々亦聲（徐鉉曰䑞今隷變作舜）
又（草部）云藑茅葍也
按に爾雅にいふ葍藑これと同名異物なり
一名蕣从艸舜聲
爾雅（釋草）云葍藑茅（郭注云葍華ニ有赤者一爲レ藑々葍一種耳亦猶二蔆苕一華黃白異名）
楚詞云索藑茅以筳篿兮
按にこゝに葍といふべきを却て藑茅といひしは葢し散文にして上文楚謂二之葍一秦謂二之藑茅一といひしは卽對文也
齊民要術引詩云言采二其葍一云々又引二義疏一云河東關內謂二之葍一
按に詩にいふ葍も河東にて葍といへるも共に爾雅にいはゆる葍藑也の葍にして藑茅の葍とは同名異物なるよしは正誤に見えたり
幽兗謂二之燕葍一
按に救荒本草に葍子根幽薊間謂二之燕葍根一といへるによる時は此燕葍は卽藑茅の葍をさしていふ以下二名またこれにおなじ
一名爵辨一名蔓根云々
按にこの上文に爾雅に葍藑茅及び郭注に葍華有ニ

穂といへるはもとすゝき荻あしなどの華の如く高くあらはれて物に秀でしかたちによりておふせし名なれども朝果のほに出るはほのほ、ほたるなどのほと同じく其色のあかきをさしていひしものなればこれも桔梗の華の碧色なるよりは晝貌の紅色なるかたしかるべし且木槿の古名を蕣といひ旋花の古名を舜華といへるにても晝貌の古名の朝果なるは明らけし抑々げにごしの渡りこし後は此華より先に朝とくさき出る花なきを以てそれをのみ専ら朝がほと稱せしより遂に古の朝貌の名は世にかくれて却てけにごしの花にむかへて此華を以て晝貌の名をおふせし事とぞなりにたるは實に朝果の名の沿革なりさて晝貌は春三月の頃苗を生し蔓をなし或は物にまとひて花さく故に俗またこれをからまり華ともいへりその葉は菠薐葉に似て狹小にして三尖あり根は細長にして色白く味甘し一種おほ晝貌一名ちよく華あり漢名を藤長苗一名旋菜といふその葉尋常のものより殊に大きく長く華もまた大きくして至て美なりよつて再び按ずるに古に䔩といひしは蓋し此種をさしていひしなるべしまた紹興本草に圖する所の施州旋花これと同物なるべし此種また白色のものあり又一種はまひるがほ一名かつぼうばな一名はまろばな一名かうづる一名へびあさがほ一名あふひかづらあり此種は處々の海濱に產して華は尋常のものと一樣なりといへ共葉のかたち厚くして圓く大さ錢の如にてその莖紫赤色なるを異なりとす蓋し齊民要術にいはゆる一種莖赤有二臭氣一といへるものなるべしまた一種千葉のものを救荒本草に纒枝牡丹一名穰花といひ盛京通志には一名串枝蓮とみえたれども本邦にはいまだこの種ある事をきかず

大和本草云鼓子花二種アリ一種ハ葉ニ兩岐アリ蔓長ク三四尺アリ一種ハ葉圓ク蔓短シ花ハ同ジ

按に此種は蓋し今の濱晝貌をさしていひしなり

三才圖會ニ其根似レ筋蒸煮堪レ啖甚甘美トイヘリ花ハ牽牛花ニ似テ淡紅色又白色アリ晝シボマズ故ニ名ヅク○救荒本草ノ葍子根モ亦與レ此同曰採レ根蒸食レ之或晒乾杵碎炊レ飯食亦好或磨作レ麪作二燒餅一蒸食○根ヲ鹽ニ和シテ煑食フ凶年ニハ貧民根ヲホリテ食シ飢ヲ助ク葉モ亦可レ食時珍曰一種千葉者本邦ニアル事ヲ不レ聞

古今要覽稿卷第四百二十一

●草木部

あさがほ　朝貌　ひるがほ　蕣

朝貌一名朝果一名容花一名波也比止久佐俗名ひるがほ一名はたけ朝がほ一名みゝだれぐさ一名かつぽう一名あめふりばなは漢名を旋花一名旋葍花一名鼓子花一名打碗花一名牽枝牡丹一名掛金燈といひその草を舜一名葍一名藑一名藑茅一名美草一名旋葍草一名肫腸草一名燕葍一名爵辨一名兎兒苗一名狗兒秧一名天劍草その根を筋根一名續筋根一名藑根一名葍子根一名秧子根といふ此種は本邦固有のものにしていづれの邦の田野にもよく生出て地に蔓し華をつらぬるものなればけにごしむくげなどの他の邦より渡りこしが今處々に繁衍するたぐひにはあらずその華は夏より秋ふくるまでも日々に開出て狀はけにごしの華に似てやゝ少さくいろ粉紅のもの常に多しといへ共また白色なるもあり白色なるはいはゆる葍にして紅色なるはいはゆる藑也此華はすべてあしたの露を帶てさきそめしより晝を經て夕に至りてもなほしをるる事なくはなやかにさきまさるものなるによりて萬葉集の歌に「朝果は朝露おひてさくといへど暮陰にこそ咲まさりけれ」とはよみし也また上總國の民間にては晝貌の華は朝のよつよりさきそめて夜のよつまでもさくものなりと舊くよりいひ傳へたるといへりこれにてもその華の暮陰にさきまさるよしは明らか也扨古の朝果を近頃の說には新撰字鏡によりて桔梗なりといひ出せしより皆人その說に雷同すといへどもこれは同名異物にて古に朝果といひしは卽今の晝貌にして必ず桔梗にはあらざる也まづ萬葉集に「こひまろひ云々いちしるく色には不レ出朝容貌の花」といひまた「朝貌の穗にはさき不レ出」といひ或は「秋萩の華野の須々岐穗にはいてす」ともいへりその色に不レ出穗に不レ出とはいちしるく色に出穗に出る草をしておのが思ひの外へあらはれぬに譬て朝果の華のさく色にはいでずすゝきの華の如く穗にはいでずといふ意なり扨その色に出るには桔梗の華の紫碧色のものよりは晝貌の華の紅色なるぞかなふべきさて

かゝれば獨搖芝は古といへ共殊にまれなる物にて且仙家のひとり尊ぶ所にして醫家必用の品にあらざれば今絶て其種なきも病を治するにまた何の妨もあらじといふべし又神農本經に離母を以て赤箭の一名とせしは全く朱墨の字相混じて別錄の文を以て本文となすもの也これまた抱朴子に仙方有二合離草一一名獨搖芝一名離母所三以謂二之合離離母一者此草下根如レ芋魁一有二游子十二枚一周二環之一以倣二十二辰一也去二大魁一數尺皆有二細根一如二白髮一雖二相須一而實不二相連一但以レ氣相屬爾とみえたり別錄にいはゆる離母の名全くこれにもとづけり又本草綱目に雷斅を引て凡使二天麻一勿レ用二御風草一二物相似只是葉莖不レ同御風草根莖斑葉背白有二青點一といへるは疑らくは新修本草のする所の吳風草の訛音にして本經載する所の薇銜なるべければ雷斅のいはゆる天麻は卽藏器のいはゆる天麻生二平澤一似二馬鞭草一節々生二紫花一と云ふものと全く一物にして此云天麻とはまた同名異物なり然るを時珍は只藏器のいはゆる天麻草を以て益母草の類となす事のみをしりて雷斅說く所の天麻もまた藏器のいはゆる天麻草ともとこれ一物なる事をしらず疎漏の至りといふべし

岩崎常正の說に御風草は葉背白有二青點一といへば恐らくは今の青天麻なるべしといへり岡村尙謙の說には綱目修治にまた雷斅の說を引て天麻十兩剉安二于瓶中一云々用レ布拭二上氣汗一刀劈焙乾擣用若用二御風草一亦同二此法一といへる御は全く禦と音通にて卽定風草の定なるもまたいまだしるべからず其天麻を定風草といへるは古は甄權が藥性論にみえたりといへり

又西土にて或說に其莖如レ箭旣言二赤箭一疑當レ用レ莖といへるを蘇沈內翰方に此猶不レ然至レ如二鳶尾牛膝之類一皆謂二莖葉有レ所レ似其用則根爾何足レ疑哉といへるは其說いとよろし

本草綱目にもまた此說を載たり

凡皇朝にても延喜式に赤箭の分量を載て一合とあるは後世此子を還筒子と名付て藥に用ゆる事あればもしくは其類ひにてもあるべきかとおもへど古書に總て此子を用ゆる事なきをみれば其實は合字は全く斤字の誤にして延喜の頃も今と同じく其根を用ひし事明らけし

總て生活せざる事其義用樂須知及び品騭にいへるが如し又文會錄に其大和產の天麻を圖せしその圖の傍に和州產和名ノタケ俗名ヌスビトノアシといへるよししるせり凡俗に前胡を以てノタケといへど天麻の和名にノタケといへる事いまだいづれの書にもみえず其俗名ヌスビトノアシといへるは本草辨疑によるに全く仙臺の方言なり然れば天麻をノタケといへるもまた恐らくはいづれの國かの方言にして絕て和名にはあらざるべし若くは和州產とある下に和名ノタケとあれば其和名は即大和名の上略にして大和の方言といへる事なるにや其意さらに解すべからずといふべし又陶弘景は葉生二其端一といひ蘇敬も端有二花葉一といへるは全く其花の下に翩々たる薄皮あるをさして葉とはいひなせし物にて其實は其の葉にあらざる事また物類品騭にいへる如し又赤箭は大抵一根一莖にして其根傍二三子あるもまた甚稀なるものなるに二氏の說に如レ芋有二十二子一爲レ衛或は去レ根五六寸有二十餘子一衛如レ芋などいへるものは蓋し天麻の一名赤箭なるものを以て尋常の赤箭に混じていへるものなるべし

按に近時予が見し所の赤箭は根傍總て小子なく皆一根一莖の物なれども物類品騭に或は小子傍生する事芋子の如きものありといひ本草啓蒙にも又旁に小子多く生ずる事ありといへば此啓蒙の說は蓋し品騭の說に因循し品騭の說は全く陶蘇の說に因循して其實は絕て小子なきものをかくありさまにいひなせしにもあるべからず旣に本草辨疑にも根下に小子あるよしみえたれど辨疑には此花を葱花の如しといへる傳聞の誤りもありそれはともあれ此種稀には其本根の外に芋子の如き小子を生ずる事もあるまじとはいふべからずされど本文の如きは全く予が俗眼を以て見し所に付てしかいへるものなれば後來のものよろしく是を訂正すべしさはいへ如レ此亦非二俗所レ見といへる文による時は其十二子あるものは別に是一種にして抱朴子にいはゆる獨搖芝生二高山深谷之處一所レ生左右無レ草其莖大如二手指一赤如レ丹素葉似二小莧一根有二大魁一如レ斗細者如二雞子一十二枚繞レ之人得二大者一服レ之延レ年といへる物をさしていふなるべしされば時珍も此物を以て此乃天麻中一種神異者如二人參中之神參一也といへり

の赤箭を以て天麻の赤箭と相混じて一物とせしは謬誤最甚しと云べし既に赤箭は枝葉なく天麻は枝葉ありて芍藥の如きのみならず赤箭は四五月に至りて漸く獨莖を發し天麻は春初に苗を生ずるものなれば原より一種にあらざるをしるべしかく天麻は其草本全く赤箭と異なる物といへどもその根を用ゆるに至りては古又大小柴胡湯と大小前胡湯とを通用せしが如く赤箭も天麻も其功能大略相似たるを以ていつとなく二種通用せしによりて遂に其草本の異なるをもかへりみず併せて以て一物とはせしもの也されど天麻は其草本全く赤箭と異なりといへども其根の形狀及び功能による時は蓋し赤箭の一種なりなど西土の人もいひなさば其義なほしかるべきをかく混同せしは唐宋以下諸家本草はさらにもいはず近時の本草家者流に至りてもすべて其說因循して總てその別ある事をしらざるものは實に一犬虛を傳へて萬犬實を失ふものといふべしまた赤箭は前文既にいへるが如く四五月の頃に至りて漸く獨莖を發するものなるに圖經本草には今方家乃三月四月采ㇾ苗七月八月九月采ㇾ根與二本經一參差不ㇾ同難二以葉著一故但從二今法一といへりその三月四月の頃采苗ものはまた春初苗を生じて其葉芍藥に似たる天麻にして本條にいはゆる赤箭にはあらずまた陳承の說に子成熟落返從二幹中一而下至ㇾ土而生といひ時珍もまた天麻子從二莖中一落下俗名二還筒子一といへるを用藥須知には予曾てこれをうたがひ仙臺の一醫其實を採て寄來るを詳察するに包中に極細子ありて百合實に似て種ゑて生活すべきものにあらず試に屢是を種れども終に生せず此物根を以て分つべくして子種すべからざる事百合の如し古人還筒の名は其實の輕虛蒔種するに堪ず根を以て分つべきによりてこれを名づく實莖中より根に歸するにあらざるをしるといひ又物類品隲本草啓蒙等にも還筒子の說甚誤れりといへり然るを文會錄にもまた天麻無實本草還筒子の說誤れりといへるは品隲啓蒙等に誤れりといへるものとは其意また異なりいはゆる文會錄の說の如きは天麻は總て生來實を結ばざるものとおもへるによりて還筒子の說を誤れりとはいへるなり是はまた〳〵彼萬卉園中に大和產の天麻を移し植しものゝ實を結ばざるを見てしかいへるものにて天麻は生來無實ものにあらず只其實を播蒔すれども

賀良鬼乃也賀良といへるも其義全く是に同じ其鬼乃也賀良は新抄本草に太淸經を引て赤箭一名鬼箭とあるによれば卽和漢通名なり又日光也賀良は此もの下野の日光に產する者多きによりて名付し也

盜乃阿之

○按に赤箭の人足に似たるよしは旣に弘景注にもみえたり本草啓蒙にも其說を載たれど今足の上に盜字を冠してこれを稱するものは凡盜の人家をうかゞふには物音もせずひそかにぬき足して往來するものなれば此物の今年植し所には來年は生せずしてひそかに外の所へ行て生ずる事全く盜のぬきあしして往來するに其趣稍似たるによりて俗にこれを盜のあしとはいへる物なるべし

赤箭

○此名義は旣に陶蘇の二氏及び本草蒙筌物類品隲等に見えたり

天麻

○名義いまだ詳ならず本草原始には天麻其根連㆓一十二枚㆒猶如㆓天門冬百部之類㆒形如㆓黃瓜㆒味大辛而麻辣故俗呼爲㆓瓜天麻㆒とみえたりいまだその實をしらず

○正誤

凡赤箭は物類品隲及び本草啓蒙などにいへるが如く梢間に蕾を綴り穗をなす專四五寸その形頗る草蓯蓉の如きものなるに本草辨疑及び和漢三才圖會に葱花に似て一莖一花といへるものは全く傳聞の誤也又開寶本草に赤箭天麻を以て分て兩條に出せしを宗奭以下諸家本草皆もつて一種とすこれまた大なる誤也今按に開寶本草に天麻生㆓鄆州、利州、太山、勞山諸處㆒葉如㆓芍藥㆒而小當㆑中抽㆓一莖㆒直上如㆓箭簳㆒莖端結㆑實若㆓續隨子㆒至㆓葉枯㆒特子黃熟其根連㆓一十二枚㆒猶如㆓天門冬之類㆒形如㆓黃瓜㆒亦如㆓蘆菔㆒大小不㆑定彼人多生噉或蒸煮食㆑之今多用㆓鄆州者㆒佳とみえたりこれは全く天麻の形狀にして赤箭の形狀にあらずまた本草蒙筌に春初始生㆑苗葉彷㆓彿芍藥㆒成㆑叢中起㆑梗二三尺高因名㆓赤箭㆒下發㆑根玉瓜般大此謂㆓天麻㆒といへり此說によりても天麻は卽其形狀赤箭とは異なるものなれど天麻もまた葉中一莖を抽て直上する事正に赤箭と一樣なるによりて又一名を赤箭ともいひしなり然るを宗奭以下諸家其同名によりて本條

レ根也今中品之下所二別出一天麻一目乃與二此赤箭一所レ說都不二相干一卽明別是一物爾然中品之下所レ爲二天麻一者世所レ未二嘗見一レ用

按に中品の下に別出する所の天麻は藏器のいはゆる天麻生二平澤一似二馬鞭草一たるものをさしていへるなり

今就二此赤箭一根爲二天麻一則與二今所一レ用不二相違一然赤箭則言苗用レ之有二自レ表入レ裏之功一天麻則言レ根用レ之有二有レ內達レ外之理一根則抽レ苗徑入而上（入字本草綱目作直）苗則結レ子成熟而落返從二簳中一而下至レ土而生似二此粗可レ識二其外內主治之理一

本草綱目云本經止有二赤箭一後人稱爲二天麻一甄權藥性論云赤箭芝一名天麻本自明白宋人馬志重修本草重出二天麻一遂致二分辨一如レ此云々但根莖並皆可レ用天麻子從二莖中一落下俗名二還筒子一其根曝乾肉色堅白如二羊角色一呼二羊角天麻一蒸過黃皺如二乾瓜一者俗呼二醬瓜天麻一皆可レ用者一種形尖而空薄如二玄參狀一者不レ堪レ用

『此間彩畫一圖略之』

をとくし花



○釋名

乎止乎止之

○名義いまだ詳ならず按に古語に多豆多豆之といふ詞を後世は多止多止之といへど此乎止乎止之とは其義似よるべくもあらず又赤箭は前年に植しものの腐敗して今年に至れば其產地をかへて思ひもよらぬ所に生ずるものなれば前年を乎止止之といひ前日を乎止都比などいへるによりて此名義をとかまくおもへどもいまだ其たしかなる考を得ず

加美乃也

○此もの一莖直上して枝葉なく其狀頗る箭簳の如くなるによりて加美乃也と名づく加美は卽神字の意にして其樣常に異なるによりてなり又加美乃也

故ニ他處ニ植テ再ビ生ゼズ又實ヲ植テモ生ゼズ一種黄白色ノモノアリ形狀ハ異ナルコトナシ又云東都産上品

本草綱目啓蒙云赤箭ハ苗ノ名天麻ハ根ノ名諸州平原及水邊竹林中ニ生ズ四五月ニ獨莖ヲ發スソノ長ズル事速ニシテ直上四五尺ニ至リ圓ニシテ淺黄赤色ナリ故ニ赤箭ト名ク莖ニ節アリ節ゴトニ小薄皮アリ色黒シ初出ノ時ハコノ小皮相包テ筍ノ狀ノ如シ大抵莖二尺許ノ時梢間ニ蕾ヲ綴リ穗ヲナスコト五七寸草蓯蓉(ハマウツボ)ノ形ノ如シ花旋開キ莖旋長ズ花ノ形玄參花ノ如ニシテ大ナリ黄赤色中ニ黄蕋アリ花下ニ莢ヲ結ブ蘭筍(ランノミ)ノ形ノ如ニシテ小ク短シ內ニ細黄粉アリコノ時穗長サ一尺五寸許ソノ根ハ大塊ニシテ横生ス長サ六七寸餘ニシテ木ハ圓カニ末ハ扁クシテ尖ラズ鬚ナク甚ダ人足ニ似タリタマニ直根ナルモノアリ倶ニ淺褐色又旁ニ小子多ク生ズルモアリ秋ニ至レバ苗根倶ニ腐朽シ移シ栽ベキ者ニアラズ又下種スベキモノニモ非ズシテ翌年復忽然トシテ生ズ故ニ赤箭芝獨搖芝ト名ケテ芝類ニ入ル集解還筒子ノ說甚誤レリ根ヲ曝乾シテソノ色羊角ニ同ジ故ニ羊角天麻ト呼トノ時珍ノ說是ナリ本草原始ニハ羊角天麻不レ堪レ用ト云是ハ形瘠テ羊角ニ似タル下等ノ名トス非ナリ藥舖ニ和漢倶ニアリ和ヲ上品トス藥用ニハ透明ナルヲ良トス故ニ方書明天麻ノ名アリ

集注本草云按此草亦是芝類云莖赤如ニ箭簳一葉生ニ其端一根如ニ人足一又云如レ芋有ニ十二子一爲レ衞有レ風不レ動無レ風自搖如レ此亦非ニ俗所一レ見而又復有ニ鬼箭一莖有レ羽其療並相似而益レ人乖異恐非ニ此赤箭一

新修本草云此芝類莖似ニ箭簳一赤色端有ニ花葉一遠看如ニ箭有一レ羽根皮肉汁與ニ天門冬一同惟無ニ心脉一去レ根五六寸有ニ十餘子一衞如レ芋其實似ニ若楝子一核作ニ五六稜一中肉如レ麪日曝則枯萎也得レ根卽生噉レ之無ニ乾服法一

本草衍義云赤箭天麻苗也然與ニ天麻一治療不レ同故後人分レ之爲レ二經中言八月採レ根曝乾故知ニ此卽苗一也圖經所レ載乃別是一物中品之下出ニ天麻一目一注云出ニ鄆州一考今之所レ出赤箭根苗乃自ニ齊鄆一而來者爲レ上今翰林沈公括最爲ニ博識一常解ニ此一說一云古方用ニ天麻一者不レ用ニ赤箭一用ニ赤箭一者卽無ニ天麻一方中諸藥皆同而唯此名或別則用ニ天麻赤箭一本爲ニ一物一並合用

は國產のみにして舶來の物これある事を聞かず一種天麻あり其葉芎藭に似て小さく其叢葉中より別に一莖を抽て頗る箭簳の如し因てまた赤箭と名づく（本草蒙筌）この種は全く前條と同名異物にして國產いまだ是ある事をしらず

延喜式云諸國進年料雜藥出雲國五十三種云々赤箭一合

出雲風土記云飯石郡凡諸山野所レ在草木云々赤箭桔梗

大同類聚方云袁度乎止之味少之甘久四月發二小花一多成レ穗九月採レ根乾而用

按に大同類聚方は全く後世の僞撰なれどもなかなかに近頃の物にもあらざるべければ今其說を爰にかきのせつ且其書を延喜式の後にあぐるもその故よしあるによるなり

本草辨疑云赤箭唐アリ和アリ根ノ形一樣ナリ奧州ヨリ多コレヲ出ス莖青ク赤ク長一二尺大サ指ノ如シ花ハ葱花ニ似テ一莖一花ナリ枝葉ナシ根扁ニシテ長短不レ定根色ウス赤ク乾ケバ黑シ根下ニ小子アリ方言ヌスビトノアシト云

和漢三才圖會云赤箭乃天麻也倭天麻者一莖一花而無二枝葉一爲レ異

文會錄云赤箭天麻關東所在ニ有レ之濃州亦有根ノ形色玄參ノ根ニ似タリ玄參根白ク曝干スレバ黑シ此物ノ根亦白ク曝干スレバ茶褐色玄參經年ノ者一根數枚但此物莖根並ニ腐敗シ明年更ニ生ジ一根一枚ヲ異トスル耳獨莖直上箭簳ノ如ク長二三尺赤褐色ニシテ有二四五節一其節甚不高シテ有二黑帽一梢ニ至リ四五寸週莖著レ花草蓯蓉花ニ似テ亦赤褐色無實然ルニ本草還筒子ノ說アルハ誤レリ但芝菌ノ類ニシテ年々梅雨ノ候時氣ニ感ジテ更ニ生ズル耳

物類品隲云赤箭天麻和名ヌスビトノアシ又タウカシラト云西國ニハ希ナリ關東ニハ多シ莖ノ長三四尺黃赤色ニシテ葉ナシ小薄皮アリテ初生スル時莖ヲ包ミ長ジテ後莖ニ付テヒレノゴトシ蘇頌所謂貼莖微有レ尖小葉ト云モノ是ナリ莖ノ狀矢ノゴトクニシテ赤シ故ニ莖ヲ赤箭ト云莖上數花ヲ開ク大サ二三分許莖ト同色也根魁アリテ横ニ出形小兒ノ臂ノ如ク或ハ小子傍生スルコト芋子ノ如キモアリ其數定ラズ又小子ナキモアリ此物化生ニシテ秋ニ至レバ盡ク朽ルナリ

古今要覽稿卷第四百二十

●草木部

をと〱し　天麻

をと〱し一名加美乃也の物に見えたるは本草和名を始とし再び加良の二字を添てこれを加美乃也加良といへるは和名鈔を始とすまた一名を鬼乃也加良といひ（俗稱）或は日光やから（同上）或は盜乃阿之といふ（同上）此即西土にいはゆる赤箭にして（神農本經）陶弘景集註本草に莖赤如二箭簳一根如二人足一といへるもの是なりこの物古は出雲國より貢せし事詳に延喜式に見え又出雲國はすべて十郡なれども其うちに此ものを生ぜし所はたしかに飯石郡の山野なる事は其國の風土記に見えたり今は武藏所澤より出るものをよろしとす安藝に產するものこれにつぐ（和漢三才圖會）又陸奥仙臺（本草辨疑用藥須知）及び南郡大和宇陀紀伊等より出（本草啓蒙）その他下野日光常陸筑波上總下總及び近郊平原或は竹林中にまゝこれを生ずさて此種赤莖なるは常なれども青莖及び黃白莖のものまたあり（黃白色のものは原物類品隲にみえたり）根皮もまた其莖にしたがひてやゝ其色を異にす今青莖の物を呼て青天麻といひ赤莖のものを以て赤天麻といふその根の狀頗る甘藷の如くにして二種大略相同じたゞ青莖のものは根にまゝ一段のくびれたる所あるを異とす其莖黃白色のものも其根全く二種と同くして別に一名なし凡赤箭の形狀はくはしく文會錄本草啓蒙等に見えたればさらにいふべくもあらねど此青莖のもの及び黃白色の物ある事を載ざるは遺漏といふべしさて赤箭は四月或は八月の頃堀出して曝乾し外皮白色內肉淡黃にして琥珀の如く至て堅きものをよろしとす此即時珍のいはゆる羊角天麻なり（本草綱目）或其は根扁にして乾瓜の如く其色また別條と一樣なるものあり此即弘景のいはゆる根如二人足一といへるものにして時珍のいはゆる醬瓜天麻なり（同上）又青莖のものは其根まゝ黑色を帶る事ありといへども其功能は全く赤莖及黃白色の物に相同じければ皆よろしく通用すべしされど曝乾その法をうしなひて黑色に變じ或は輕虛灰白なるものは用ゆるに堪ず凡赤箭は本草辨疑以下用藥須知本草啓蒙等にも和漢皆これあるよしみえたれど今

るものならん
又麥門冬は五月の頃細になる六瓣の淡紫花を開きてその莖絕て節なきものなるに徐園秋花譜に禹韮苗如㆓鹿葱㆒有㆑節如㆑韡莖末㆑發㆑花如㆓牽牛㆒而小青碧熒熒藝者畜㆓水於盆㆒濡㆓其根抵㆒云々李時珍以㆓呉晉本草㆒併㆓入麥虋冬㆒誤矣と見えたり今按に徐氏いはゆる禹韮は全く錢塘に生じ秋花を開て一種のものにして呉氏本草に麥門冬一名禹韮といへるものとは其種原より異なるものなり徐氏此義をしらず漫にその同名によりて混同しまた時珍を正すは却て大なる誤なり又麥門冬は大葉小葉及び海島上のものといへどもその花みな淡紫色なるものを圖經本草に四月開㆓淡紅㆒如㆓紅蓼花㆒といへるはいかゞあらん

山菅に似よりたるを以て名付しなるべしまた按に山菅は小葉の麥門冬にして大葉の麥門冬は天和の頃より以後の物なれど物によりては後世より却て古のくはしきこといと多ければ延喜のときにはこの大葉のものもありけんを山菅と稱せしにやあらん

蛇の鬚用藥須知物類品隲　尉の鬚和漢三才圖會　龍の鬚江戸俗稱　麥門冬出雲風土記延喜式

○按に此根穬麥に似たるを以て麥門冬と名付たるよしは旣に弘景の說に見えたりされどもそれにては麥字の意は詳なれどいまだ門冬の義をしらず今按にこれを門冬といふものは天門冬の門冬とおなじく卽門冬二合の音髦の義にして此草細根極めて多く形狀髦の如くにして其中に穬麥のごとき連珠をなすに塊あるによりて麥門冬とは名付しなり或は其葉叢生髦の如くまた麥のごとしといへるにてもその義また通ずべし然るを時珍の說に麥鬚曰虋此草根似レ麥而有レ鬚故謂ニ之麥虋冬一俗作ニ門冬一便ニ于字一也といへど字彙に虋は赤苗嘉穀今赤梁粟とありて麥鬚の意見えず時珍天門冬を釋して草之茂者爲レ虋此草蔓茂而功同ニ麥門冬一といへるものといへるはうけがたし

○正誤

按にやますげに二種あり一種は山中に生ずる尋常の山菅にして一種は此麥門冬をいふ凡萬葉集に山菅のみならぬ山すげのみだれなど詠るは卽山生の菅にして全く同名異物なりまた新撰字鏡に麥門冬のやますげに山菅の字を用ひしは全く假借にして山生の菅にあらず然るを和漢三才圖會に山菅のみならぬ事を我によりといへる萬葉集の歌を此麥門冬の條に引用ひしは甚敷誤なり麥門冬は穗をなし花を開き實も多く結ぶものなればそれを以てみならぬとはいふべからず萬葉集の歌は草の實を結ばざるものと人の心の實なきとを兼てよめるなれば麥門冬にあらざること明らけし

又本草辨疑に藏器のいはゆる苗如ニ鹿葱一とあるは大葉の麥門冬なりといへど凡苗如ニ鹿葱一と云るものは其葉極めて肥大なるものをさしていへるなれば尋常の大葉のものよりは本草啓蒙に一種海島上に生ずるものは葉濶さ七八分長さ一尺許にして光ありといへ

圓ク大ニシテ心ヲ去ル是大葉ノ根ナルベシ藝州廣島ヨリ出スハ形長ク小ニシテ心ヲ去ラズ是小葉ノ根ナルベシ下品ナリ集解ニ根肥大者爲レ上ト云稀ニ漢渡アリ長サ一寸許リ濶三四分ニシテ兩頭尖レリ漢種及ビ海島ノ產ハ舶來ト同ジ

名醫別錄云麥門冬ハ秦名二羊韭一齊名二愛韭一楚名二馬韭一越名二羊韭一葉如二韭葉一冬夏長生生二函谷川谷及堤坂肥土石間久廢處一二月三月八月十月採陰乾

吳晉本草云麥門冬ハ一名禹韭一名虋冬一名不死藥生二山谷肥地一葉如レ韭肥澤叢生採無レ時實青黃

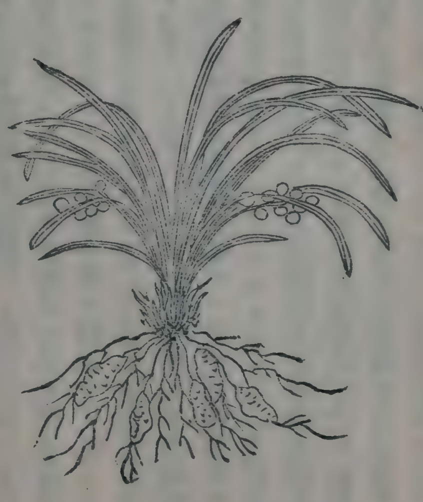
集註本草云麥門穢處々有以二四月一採冬月作レ實如二青珠一根似二穬麥一故謂二麥門冬一以二肥大者一爲レ好用レ之陽澤抽二去心一不レ爾令二人煩一斷穀家爲レ要麥門冬潤時並重既燥卽輕一斤減二四五兩一

圖經本草云麥門冬所在有レ之葉青似二莎草一長及二尺餘一四季不レ凋根黃白色有レ鬚根作二連珠形一似二穬麥顆一故名二麥門冬一四月開二淡紅花一如二紅蓼花一實碧而圓如レ珠江南出者葉大者苗如二鹿葱一小者如レ韭大小有二三四種一或云吳地者尤勝

本草綱目云古人雅用野生者後世所レ用多是種蒔而成其法四月初採レ根於二黑壤肥沙地一栽レ之每年六月九月十一月三次上レ糞及芸灌夏至前一日取レ根洗晒收レ之其子亦可レ種但遲爾浙中來者甚良其葉似レ韭而多二縦文一且堅靭爲レ異

『圖四葉略レ之』

やますげ



○釋名

やますげ 本草和名

○按にこの葉細小なりといへどもその形すこぶる

花モ大葉麥門ノ如シ異草ナリ是大葉狹地筋ノ如ク葉莖ツヨシ根ハ同ジ

用藥須知云麥門冬和ニ大小三種アリ大葉ノ物其根最肥テ味甘シヤブラント呼蘭譜收ニ此草一名ニ珍珠蘭一以ニ葉似一也小葉ノ物ハ蛇ノ鬚ト名付根モ亦細小功用相同ジ又翁草ト稱スル物アリ葉濶シテ觀音草ニ似タリ葉色白シ故ニ名レ之白頭翁ト種類夐(ハルカ)ニ別ナリ名同ヲ以テ誤リ混ズ可ラズ此亦麥門冬ナリ互ニ更用ベシ何モ肥土ニウユレバ根大ナリ

物類品隲云麥門冬數種アリ小葉ノモノ和名ジヤノヒゲト云大葉ノ物ヤブラント云葉ノ形建蘭ニ似タリ一種和名翁草ト云アリ大葉ノ物ニ比スレバ稍小ナリ初生色白シテ後漸ク青ク變ズ一種琉球産和名ノシラム葉長シテ光滑アリ又和俗雞尾蘭ト稱スルモノアリノシラムノ類ニテ葉强シ以上ミナ麥門冬ノ種類ナリ

本草綱目啓蒙云麥門冬是ニ大小葉數種アリ大葉ノ者ヲヤブラムト云樹下竹陰及路旁ニ多ク生ズ葉ノ濶サ三四分許リ長サ一二尺厚クシテ縱道多シ面ハ深綠色背ハ淺シ一根ニ多ク叢生シ冬枯レズ夏ニ至テ叢葉中數莖ヲ抽ヅ高サ一尺餘小花數多ク綴リ長穗ヲナス花ハ六瓣淡紫色綿棗兒(サンタイカサ)花ニ似タリ又白花ノ物アリ倶ニ花後實ヲ結ブ正圓ニシテ大サ南天燭子ノ如シ秋ニ至リ熟シテ黑シ花ハ數多ケレドモ實ヲ結コト少シ又狹葉ノヤブラン數品アリ其海島ニ産スル物ハ葉濶サ七八分長サ尺許ニシテ光アリ花實ハ異ナラズ又漢種ノ麥門ニモ大葉ニシテ海島ノ産ニ略同シテ長シ又一種、種樹家ニ「オキナグサ」ト云アリ一名音羽ラン形狀ハヤブランニ異ナラズタヾ葉白色ニシテ美シ然レドモ夏以後ハ漸ク綠葉ニ變ズマタ一種綠葉ニシテ白色ノ斑文アルアリコレヲ「ベツコウラン」ト云又琉球ノ産ニ「ノシラン」ト云アリ葉長サ三尺許リ濶サ四五分色淺クシテ光アリ花穗ノ莖形扁クシテ葉ノ如シ花ハ白色大サ五分許リ初ハ莖短シ花開クヨリ漸ク長クシテ葉ト等シ實亦大ナリ熟シテ碧色葉間ニ雜リ下垂ス小葉ノ麥門冬ハ路旁ニ多シ人家簷滴ノ處ニ多ク栽ユ葉ノ濶サ一分餘長サ一尺餘年久キ物ハ二三尺ニ至ル一根ニ多ク叢生ス花ハ淡紫色莖ノ長サ四五寸ニ過ズシテ花實共ニ少シ實熟スレバ碧色春ニ至リテ猶アリ根ハ大葉小葉倶ニ連珠ヲナス藥用ニハ心ヲ去ル藥肆ニアルハ皆和産ナリ紀州ヨリ出ダスヲ上品トス形

麥門冬四升云々尾張國三十六種云々麥門冬四升云々參河國二十一種云々麥門冬五升云々遠江國十三種云云麥門冬六升九合云々駿河國十七種云々麥門冬五升云々相模國三十二種云々麥門冬一升云々安房國十八種云々麥門冬一升云々上總國二十種云々麥門冬一斗四升云々下總國三十六種云々麥門冬四升云々常陸國二十五種云々麥門冬六升云々近江國七十三種云々麥門冬一斗五升五合云々美濃國六十二種云々麥門冬二斗七升云々上野國十五種云々麥門冬八升云々若狹國二十四種云々麥門冬二斗丹波國四十三種云々麥門冬一斗云々丹後國二十四種云々麥門冬大一斗三升五合云々但馬國二十一種云々麥門冬八升云々出雲國五十三種云々麥門冬五升云々美作國四十一種云々麥門冬二斗四升云々備前國四十種云々麥門冬二升云々備中國四十二種云々麥門冬一斗云々備後國二十八種云々麥門冬三斗六升云々安藝國二十二種云々麥門冬一升六合云々周防國十九種云々麥門冬七升云々阿波國三十三種云々麥門冬五斤云々讃岐國四十七種云々麥門冬一斗云々伊豫國三十二種云々麥門冬三升云々

本草辨疑云麥門冬和草二種アリ大葉小葉ナリ藥舖ノ者ハ皆小葉ニシテ大葉ヲ用ユルコト人不レ知レ之根大ニシテ味モ甚甘藏器ノ說ニ其苗大者如二鹿葱一小者如二韮葉一大小有二三四種一功用相似ト見エタリ其苗如二鹿葱一モノハ和ノ大葉ニシテ如二韮葉一モノハ和ノ小葉ノ物ナリ又云白實ナルヲ上トシ赤ク皺アリ或ハ黑ク輕虛ナルハ下ナリ四國ヨリ出ツ大葉ノ物所在甚多シ

和漢三才圖會云麥門冬俗云二尉(ジヤウ)之鬚一也出二於河州石川一者最良紀州者次レ之藝州者又次レ之今人家栽二檐下一可三以受二雨滴一本草所謂階前草之名據レ此乎近年藥肆去二其心一售

大和本草云麥門冬大葉ハ葉アツシ五月ニ莖タチテ頭ニ穗ノ如ク長ク連リタル紫花ヲ開キテ實ナル秋熟ス林中ニ多ク生ズ葉蕃茂ス實ヲマクベシ根モ小葉麥門ノ如ニシテ大ナリ觀音草ノ葉ハ薄クシテ少ヒロシ花ナシ能似タリトイヘドモ別ナリ大小麥門冬共ニ藥ニ用ユ性同大葉ハ蘭葉ニ能似タリ庭園ニウヘテモヨシ本草ニモ大小三四種アリト云リ大小麥門冬トモニ根大ナルヲ良トス一種葉ハ大葉麥門冬ニ同ジ葉春及夏初純白ナリ故ニ翁草ト云後漸青クナル根ハ門冬アリ

もいまだそれを藥に入る事をしらざりしなるべし然らば延喜の頃諸國より奉りし麥門冬もまた小葉の物なるべし或云硬き飯にて糊をする時この小葉の麥門冬を入てすれば忽に消するといへり別錄に麥門冬消穀といひ本經に主二傷飽一などいへるにその義よく叶へりといふべし凡別錄小穬麥温中消レ食といひ食性に大麥化二穀食一などいへばその義全く蚯蚓の長蟲蚘蟲を治し神農本經弘景蝦蟇の鼓脹を療し證治大還木賊の瞖膜を退くるの類にて嘉祐本草此物もその狀頗る穬麥に似たるによりて正に消食の功あるものなるべし凡麥門冬は時珍の說に古人惟用二野生者一後世所レ用多是種蒔而成といへり今藥舖うる處のものも多くは糞を用ひ耘灌して作るものなればよろしく行餘に尋常の韮葉のものを撰らみ自堀採て用ゆべきなり又按に麥門冬は古くは出雲風土記にその國意宇郡島根郡等に生ずるよしをのせ延喜式には伊賀尾張以下二十七國より貢せし事をのす今にいたりてはその外諸國より出せりいはゆる二十七國の內に安藝國よりも此ものを貢せしよしみえたり然るを和漢三才圖會に河內に産する物を上品とし安藝のものを下品とすまた本草啓蒙にも安藝廣島より出るものは形長く小にして心をさらずこれ小葉のものなるべし下品なりといへり此二說は全く後世の說にしたがひて小葉のものを下品とすれどそれはともあれ今も安藝より小葉のものゝ出るは蓋舊制にしたがひて用ひ來りしものなるべければ延喜の頃貢せしもまた小葉のものなるべしこれまた古人用ゆる處の麥門冬はすべて小葉の物なりし一證なり

又和漢三才圖會に安藝に産するものを下品とするのみならず近年藥肆去二其心一售とも見えたり其心を去てうるといへるは全く今の大葉の麥門冬の事なれば近年藥肆の四字によりて考ふるにそれより以前の麥門冬はまた心をさらざる小葉のものをもちひし事いよ〳〵あきらけし

出雲風土記云意宇郡諸山野所在草木云々麥門冬獨活云々島根郡諸山野所在草木云々白朮麥門冬云々楯縫郡諸山野所在草木麥門冬茯苓云々神門郡諸山野所在草木云々麥門冬杜仲云々大原郡諸山野所在草木云々薯蕷麥門冬

延喜典藥寮式云諸國進年料雜藥伊賀國二十三種云々

古今要覽稿卷第四百十九

●草木部

やますげ　麥門冬

やますげのたしかに物に見えしは本草和名延喜式等を以て始としそのやますげに山菅の二字を用ひしは新撰字鏡を以て始とす今江戸にてはこれを龍のひげといひ京都にては蛇の鬚（用藥須知）攝津にては尉のひげといふ（和漢三才圖會）此卽西土の古に麥の字を冠せずしてたゞ虋冬と稱するもの是なり（爾雅山海經呉晋本草）その葉全く韮葉に似たるによりて一名を烏韮あるひは羊韮といひ（名醫別錄）（呉晋本草）その苗地にみちてよく叢生し四時枯ざるを以てまた不死草忍冬と名づく（呉晋本草）凡名醫別錄に麥門冬生二堤阪肥土石間久廢處一とあるは卽此種をさしていへるなり一種大葉のものあり今俗これを藪蘭といふその葉尋常の物に比するに極めて長濶にして頗る建蘭葉の如し根もまた大なること小葉の麥門冬に三倍せり弘景以下諸家本草みな肥大なるものを好とせしより藥に入るに後世多くこの大葉の物を貴べども古人の用ひしはすべて小葉の物なるべしまた大葉の一種に翁草鼈甲蘭の斯蘭等の數種ありその形狀は總て下文にのせし大和本草啓蒙等につまびらかなればこゝにはいはず扨韮に大葉小葉の別なく時珍の說に浙中より來る者其葉似レ韮而多二縱文一且堅靱爲レ異といへる物は全く大葉韮にして其種は皇朝の藪蘭あるひは雞尾蘭の類なるべしまた呉晋本草に葉如レ韮肥澤叢生といへるも蓋また大葉の物なるべけれど凡古人韮葉を以て物に譬しは多くは小葉にして僅に一分許の物をさしていへるなり鍼灸甲乙經に人身の經穴を擧て少商在下大指端內側去二爪甲一如中韮葉上又商陽在下手大指次指內側去二爪甲一如中韮葉上又少澤在下手小指之端去二爪甲一一分陷者中上といへるにてもその義はしられたりこれによれば古人用ゆる所の麥門冬は全く小葉の物なる事明らけし皇朝にても天平延喜の比はいざしらず延寶天和の比には藥に入るに皆小葉のものを用ひしなり故に本草辨疑に藥舖のものはみな小葉にして大葉のものを用ゆる事人これをしらずといへり按に當時漸く此大葉のものある事をしるといへど

集にうけらか花もいろにつなゆめとよめるは此花すべて白色なるゆへにその花の如くゆめ〳〵色に出ずなどいへるなり然るを近比本草に朮夏開レ花紫碧色又莖端生レ花淡紫碧紅數色とあれば其說のごとくうけらはいろに出て花のさくものなればといへるならんといへど皇朝の產は白花のみ多くして紅花はいと稀なりさるまれなるものをいかでさはよむべき又本草を引てうけら花の數種あることをいへどそれは圖經本草よりのちのことなり圖經本草は宋の蘇頌の撰なり萬葉集の作者いかでこれをしるべき又俊賴朝臣のうけらが花のさきながらひらけぬことのいぶせさにと（千載集）いふを近比の說にうけらが花は咲ながらひらけぬものにはあらずといへり此說蓋此花を見ずしていへるなるべし此花は薊花の如くにして薊花よりもまた開かずしてさく物なるが故にひらけぬことのいぶせさとよめりまた本草辨疑に陳自明が說に白而肥者是浙朮瘦而黃者是幕阜山所レ出其力劣といへりまた陳嘉謨說に浙朮俗名二雲頭朮一種二平壤一頗肥大由二糞力一歙朮俗名二狗頭朮一雖二瘦朮一得二土氣充盈一勝二浙朮一といへりされども自良の浙朮の肥大を佳とするは誤れり嘉謨の說然るべし其說に從ふべしとあるは誤りなり陳自良は白朮蒼朮の二種を其出る所によりて優劣あるを論じ陳嘉謨はたゞ白朮の一種をその土地によりて佳否あるを論ぜしなれば敢て浙朮の肥大なるを劣れりといふにはあらず

○釋名

乎介良(ヲケラ)新撰字鏡○名義未詳　宇介良萬葉集　さきくさ本草綱目啓蒙　しやみぐさ同上　白朮日本書紀出雲風土記延喜式　朮本草和名倭名類聚鈔　蒼朮本草辨疑

○正誤

本草辨疑に蒼朮は和漢共に骨ありといへど此種は牡丹巴戟の如く中心に堅き骨に似たる物あるにはあらず凡蒼朮は老生姜のごとき細筋ありて是をきれば其刀にさはりて音するものなりかゝれば筋ありとは云べけれど骨ありとはいふべからず又和の朮は四五月に花さく色青くして中間に子あり小豆の大さなりといひ和漢三才圖會も其説を襲て開花青色秋結レ子大如二小豆一といへりされど蒼朮の花は其狀薊花に似て色白くあるひは俗にいふ高野はぎの花に似て稍大なるものなり然るを花さき色青しといへるは蓋いまだ少しも開かざる梂(イカ)彙の青色なるものをさしていへるなり且此種は秋花さく物を四五月とあるにても全く咲出たる形狀にあらざるをしるべし凡白朮は花萎して後梂彙中に紅藍實に似て至て細小の子を結ぶといへ共蒼朮に至りては其實甚輕虛にしてあれども無が如しされば白朮は實をうゆれ共蒼朮は根をわかちうゆるなり然るを子如二小豆一といへるは誤なり又和漢三才圖會に蓋生二山中一者葉硬有二微刺一栽二人家一者葉軟無レ刺といへり按に朮は山中に生ぜし者も葉軟のものは軟にして人家に移し植るといへども葉硬きものは又かたし葉軟にして根の狀芋子の如く味甘きものは弘景いふ處の白朮にして葉硬く周圍に細刺ありて其根老姜あるひは萎蕤の如く味苦きもの赤朮なり皇朝舊より此二物ありといへども人多くしらず漫に嫩根老根を以て蒼朮を分つものは誤なり又物類品隲に時珍の説を引て三五叉のものを蒼朮とするは大なる誤なりといへりこれまた然らず其説の稍間葉似二棠梨葉一其脚下葉有二三五叉一と今ある處西土より傳へし蒼朮の狀時珍の説のごとく莖につく葉は三五岐をなさずと云共脚葉は全く三五岐を分つものなれば强ちに時珍の説を以て誤とはいふべからずけだし品隲白朮處々に產する物葉五叉のものあり三叉のものありといへるは其葉あるひは三葉あるひは五葉のものにして脚下葉の一葉にして三五叉あるものとは全く異なることをしらず漫に叉椏の字を誤混し遂に時珍の説を以て誤とせしは却て大なる誤なり又萬葉

言白而肥者是浙朮瘦而黄者是幕阜山所レ出其力劣昔人用レ朮不レ分二赤白一自レ宋以來始言二蒼朮苦辛氣烈白朮苦甘氣和各自施用一亦頗有レ理並以レ秋采者佳春采者虚軟易レ壞嵇含南方草朮狀云藥有二乞力伽一即朮也瀕海所レ產一根有下至二數斤一者上采餌尤良嘉謨曰浙朮俗名二雲頭朮一種二平壤一頗肥大由二糞力一也易二潤油一歙朮俗名二狗頭朮一雖二瘦小一得二土氣充一也甚燥白勝二于浙朮一寧國昌化池州者並同二歙朮一境相隣也

『圖六葉ヲ略ス』

和歌

萬葉集卷第十四

東歌

古非思家波素氐毛布良武乎牟射志野乃宇家良我波奈乃伊呂爾豆奈由米

或本歌曰伊可爾思氐古非波可伊毛爾武藏野乃宇家良我波奈乃伊呂爾低受安良牟

和我世故乎安杼可母伊波武牟射志野乃宇家良我波奈乃登吉奈伎母能乎

右武藏國歌

夫木和歌集卷第二十八

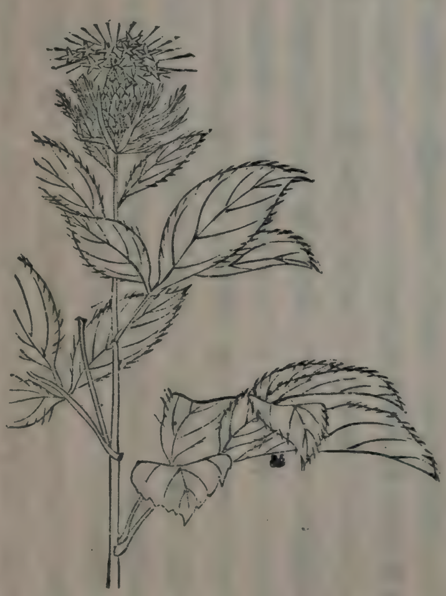
よみ人しらず

あさかゝたしほひのゆたにおもへらは
うけらか花の色に出めやは

正三位知家卿

あさかゝたうけらか花のいとゝまた
花こそ見えぬけふもくらしつ

をけら



朮ハ形狀和産ニ似タリ只其葉狹長ニシテ三五葉ヲナサズ脚葉ハ三五岐ヲ分テ菊葉ノ如クナリテ皆蒂ナキヲ異ナリトス花亦白シ唐種白朮ハ和ノ蒼朮ニ似テ苗長大ナリ高サ三四尺葉大ニシテ狹長薄クシテ淺綠色五葉七葉ナリ梢ハ三葉一葉ニ變ズ花ハ蒼朮花ヨリ大ニシテ紅紫色花後實ヲ結ブ梂(イカノ)槖中ニアリ地ニ下シテ生ジ易シ又根ヲ切テ分チ栽ルモ繁茂シ安シ唐種ノ蒼朮ヲモ亦然リ

集註本草云今處々有以二蔣山白山茅山者一爲レ勝十一月十二月正月二月採好多二脂膏一而甘云々其苗又可レ作レ飮甚香美去レ水朮乃有二兩種一白朮葉大有レ毛而作レ椏根甜而少膏云々赤朮葉細無レ椏根小苦而多膏云々東境朮大而無二氣烈一不レ任レ用今市人賣者一皆以二米粉一塗令レ白非二自然一用時宜レ刮二去之一

圖經本草云春生苗青色無レ椏一名山薊以二其葉似一レ薊也莖作二蒿幹狀一青赤色長二三尺以來夏開レ花紫碧色亦似二刺薊花一或有二黄白一花者入レ伏後結レ子至レ秋而苗枯根似レ薑而傍有二細根一皮黑心黄白色中有二膏液一紫色二月三月八月九月採暴乾乾濕並通用又劚二取生朮一去レ土水浸再三煎如二飴糖一酒調飮レ之更善今茅山所レ製朮煎是此法也謹按朮有二二種一爾雅云朮山薊楊抱薊擇曰此辨下薊生二山中一及平地一者名上也生二平地一者名レ薊生二山中一者名レ朮云々其生二平地一而肥二大於衆一者名二楊抱薊一今呼二之馬薊一然則楊抱卽白朮也今白朮生二杭越舒宣州高山崗上一葉々相對上有レ毛方莖々端生レ花淡紫碧紅數色根作レ椏生二月八月九月採レ根暴乾以二大塊紫花者一爲レ勝又名二乞力伽一凡古方云レ朮者乃白朮也非レ謂二今之朮一矣

本草衍義云蒼朮其長如二大小指一肥實皮色褐氣辛烈須二米泔浸洗一再換レ泔浸二日去二上麁皮一白朮麁促色微褐氣味亦微辛苦而不レ烈古方及本經止言レ朮未レ見分二其蒼白二種一也只緣陶隱居言朮有二兩種一自レ此人多貴白者今人但貴二其難レ得惟用二白者一往々將二蒼朮一置而不レ用

本草綱目云蒼朮山薊也處々山中有レ之苗高二三尺其葉抱レ莖而生稍間葉似二棠梨葉一其脚下葉有二三五叉一皆有二鋸齒小刺一根如二老薑之狀一蒼黑色肉白有二油膏一白朮抱薊也吳越有レ之人多取レ根栽蒔一年卽稠嫩苗可二茹葉一稍大而有レ毛根如レ指大狀如二鼓槌一亦有二大如レ拳者一彼人剖開暴乾謂二之削朮一亦曰二片朮一陳自亮

レ分二二種一稱二乎介良一中華之二朮一類二種自明也
倭之二朮一物而宿根如二老薑一蒼色者爲二蒼朮一嫩根白
色者爲二白朮一其苗高一二尺一朶三葉四五月開花青色
秋結レ子大如二小豆一蓋生二山中一者葉硬有二微刺一栽二人
家一者葉軟無レ刺其葉及根形香氣和漢相似而花色異且
白朮根形不レ似二鼓槌一然唯唯謂下似二雲頭朮一者上耳出二
備後三原一者良伊與今治次レ之武州江戸藝州廣島奥州
仙臺者次之

物類品隲云上古蒼白ヲ分タズ漢産白朮上品享保中種子ヲ傳フ葉五椏ニシテ毛アリ形甚肥大花紅色ニシテ大薊花ノ如ク根佛掌薯ニ似タリ此物實ヲ植テ能生ズ又根ヲ切テ栽レバ盡ク芽ヲ生ズ一兩年ニシテ掘取ベシ數年ヲ經タルモノ重サ數斤ニ至ル

又云蒼朮是亦處々ニ產ス葉ニ椏ナク花白色又紅花ノ物アリ皆下品ナリ漢種上品享保中種子ヲ傳フ大抵和產ノ物ニ似タリ嫩葉ニハ綿ノ如キモノアリ花ハ白色ニシテ根味氣香烈ナリ此物實ヲ植テ生ジ難シ根ヲ分ツコト白朮ノ如ニシテ長ジ易シ

本草綱目啓蒙云朮ニ蒼白アリ各自異種ナリ而シテ本邦ノ市人從來誤テヲケラノ嫩根ヲ以テ蒼朮トシ宿根ヲ以テ白朮トス其後土佐道壽中山三柳等藥ヲ辨ズルニ名アリ舊說ヲ改メ嫩根ヲ白朮トシ宿根ヲ蒼朮トス今ノ藥舖亦是ニヨリ奥州丹州但州播州信州濃州和州等ヨリ出ス處ノ嫩根ヲ以テ白朮トシ宿根ヲ以テ蒼朮トナス然ドモ皆是蒼朮ナリ何ゾ强テ分テ二朮トナスコトヲ得ンヤ和產ノ蒼朮春初出ノ芽ニ白毛多ク綿ヲ被ルガ如シ稍長ズレバ毛ヲ見ズ苗高サ二三尺一根數莖葉ノ形橢ニシテ厚硬深綠色邊ニ細刺アリ三葉ニシテ胡枝子葉ノ如クナル物ナリ五葉ニシテ月季花葉ノ如クナル物アリ皆互生ス其三葉ノ者ハ稍ニテハ變ジテ一葉トナリ其五葉ノ者ハ稍ニテハ變ジテ三葉或ハ一葉トナル秋月枝頭ニ花ヲ開ク形薊花ニ似タリ白色ノモノ多ク紅色ノ物少シ和產ノ白朮ハ蒼朮ヨリ苗長大ナリ葉モ大ニシテ薄ク軟ニ色モ淺シ三葉或ハ一葉ナリ花ハ白花其根肥大ニシテ拳ノ如シ世ニ天目白朮又茶碗白朮ト云此品藥舖ニ出デズ市中ニ貨ル處ノ和蒼朮和白朮ハ皆槩シテ蒼朮ト爲シ用ベシ舶來ニ朮共ニアリ白朮ノ中ニ如意手ト呼モノ漢名雲頭朮又狗頭朮雞腿朮アリ皆上品ナリ此三品皆形ヲ以テ名付片白朮アリ肥根ヲ剖開シテ暴乾シタル者ナリ唐種蒼

朮三十斤駿河國十七種云々白朮十兩安房國十八種云云白朮六斤下總國三十六種云々白朮三斤常陸國二十五種云々白朮二十斤近江國七十種云々白朮三十六斤美濃國六十二種云々白朮三十八斤飛驒國九種云々白朮三十斤信濃國十七種云々白朮二十六斤九兩越中國十六種云々白朮十一斤丹波國三十三種云々白朮十二斤三兩丹後國二十四種云々白朮四斤十一兩但馬國二十一種云々白朮二斤十兩因幡國二十種云々白朮十斤伯耆國二十種云々白朮十斤出雲國五十一種云々白朮五斤石見國十四種云々白朮三斤播磨國五十三種云々白朮九十二斤八兩美作國三十一種云々白朮十斤備前國四十種云々白朮四十斤備中國四十二種云々白朮三十六斤備後國二十八種云々白朮三十四斤六兩安藝國三十二種云々白朮六斤周防國十九種云々白朮一斤四兩長門國十三種云々白朮二斤紀伊國三十五種云々白朮一斤讃岐國四十七種云々白朮十二斤伊豫國三十二種云々白朮六斤

大同類聚方云袁介良味少久年久香之七月發レ花白赤二種共用レ之十月採レ根日爾乾時山中自然爾生者宜

本草辨疑云藥家醫家共ニ古ヨリ蒼朮白朮取違テ用ユ誤ナリ和白朮ハ嫩根蒼朮ハ舊根ナリ柔ニシテ色白ク芋ヲ截樣ノ者ハ白朮ナリ骨アリテ強ク色蒼キハ蒼朮也然ルヲ藥家誤リテ舊根ノ白朮トシ新根ヲ蒼朮トス又蒼朮ノ中ニ白モアリ白ノ中ニ蒼朮モアリ不レ可レ不レ擇唐ヨリ來ル物白朮ハ芋ノ形ニテ柔カ也蒼朮ハ于荓ノ形ニ似テ中ニ骨アリ和ノ產ト形ハ異ナレドモ氣味ハ一同也土地ノ肥瘠ニ依ナルベシ或云朝鮮國ヨリ江府ヘ獻上シタル蒼朮ハ和產ト異ナルコト無ト頃又川白朮ト云物ヲ渡ス形大ニシテ切片テ乾タル者也和ノ朮ハ苗高一二尺葉三葉ヲ一朶トス葉ノ末鋸齒ニシテ毛アリ莖強ク四五月ニ花開色青シテ莖ト同ジ中間ニ子アリ小豆ノ大也蒼朮白朮共ニ一草ニシテ只根ノ新舊ヲ分ツノミ唐ハ葉抱莖ヲ生ズルトス又脚下梢間トノ葉異ナルコト和草ト別也根ノ形ト香氣トハ一樣ナリ土地ニ依カ老人虛人ニハ唐ノ皷槌ノ物ヲ可レ用和ハ性強クシテ中ラル丶コトアリ片朮モ之キトキハ可レ用和ヨリモ性可レ然又和ヲ皆蒼朮トシ唐ヲ白朮トシ用ル人アリ

和漢三才圖會云按唐白朮多如二皷槌一者爲レ佳近年有二川白朮者一即是削朮而所二切片一者不レ佳蓋古倭亦不

古今要覽稿卷第四百十八

●草木部

をけら　白朮

ヲケラの物に見えしは出雲風土記を始とし又ウケラともいふ（萬葉集）此卽西土の白朮なり（弘景註神農本經）上古はたゞ朮とのみ云しに（神農本經素問）陶弘景より白朮赤朮の二種とせり皇朝にて天武天皇の御時百濟の僧法藏をして美乃國にて白朮煎をつくらせ給ひしは白朮の石の史書に見えし始なりまた赤白二種共に山中におのれと生出しものよろしきよし大同類聚方に見えたれど今の本は後世者僞撰なるべければいまだたしかに證となしがたしされども此もの美濃國に產せしはさらにもいはず出雲國意宇郡島根郡秋鹿郡楯縫郡飯石郡等も產し（出雲風土記）また山城大和尾張三河駿河安房等凡三十箇國より貢せしに（延喜典藥寮式）武藏國よりは奉らずされど萬葉集にむさしのうけらがはなとよみ今も此國に至て多くかつ色につなゆめといへる歌の意を按るに卽今の白花のものとしらるまた稀に赤色のものもありアカヲケラといふ（增補多識編）一名ヱヤミグサまたサキクサともいへり（本草綱目啓蒙）卽圖經本草の山薊まして本草綱目の蒼朮なり皇朝にては延寶大和の頃まで舊根を白朮とも新根を蒼朮とせしがそれよりのちは嫩根を以て白朮とし老根を以て蒼朮とせり（本草辨疑）原より同種にして別物にあらざれば何にても難あるまじきなりたゞし日本書紀以下延喜式等白朮をあげて蒼朮をのせず是によりて考ふれば當時いまだ蒼朮の名を立られざりしにや

日本書紀云天武天皇十四年冬十月庚辰遣㆓百濟僧法藏優婆塞益田金鍾於美濃㆒令煎㆓白朮㆒因以賜㆓絁綿布㆒云々十一月丙庚法藏法師金鍾獻㆓白朮煎㆒云々

出雲風土記云意宇郡諸山野所在草木云々白朮云々島根郡云々白朮云々久宇島有㆓白朮小竹㆒云々須々比埼有㆓白朮㆒云々秋鹿郡云々白朮云々楯縫郡云々白朮云云飯石郡云々白朮云々

延喜典藥寮式云諸國進年料雜藥畿內山城國三十二種云々白朮二十五斤大和國三十八種云々白朮三十斤尾張國三十六種云々白朮三十斤參河國二十一種云々白

二花といへるは誤なり
本草啓蒙云延喜式ニ載ルハ當時何ノ草ヲ以テ細辛ト爲シタルヤ詳ナラズ眞ノ細辛ハ近來出タリ
按に延喜式に載る所の細辛は卽今の細辛なる事みらのねぐさの名にても其義明らけし近時本草家者流佐渡のものを以て上品とするは延喜式に佐渡より細辛を貢ずる事四十八斤とあるに其産地相符す故に式にいはゆる細辛は全く今と同物なる事いよいよ明らけし
證類本草の圖に雙葉にして其根粗大なるものを以て華州細辛とし其花地に貼せずして開き筒子様をなすものを以て峕嵐軍細辛として一莖直上し毎葉相對して其狀花しのぶの葉に似たるものを信州細辛とす
按に此名甚だあやまれり凡證類本草圖する所の峕嵐軍細辛と稱するは全く紹興本草圖する華州細辛にして口の細辛なりまた證類本草圖する華州細辛蓋し紹興本草圖する所の信州細辛にして卽皇朝の加茂葵なるべし又證類本草に圖する信州細辛は紹興本草に圖せし峕嵐軍細辛にして救荒本草載する所の珍珠菜の類なるべきかされど紹興本草に圖する信州細辛は證類本草圖する所の雙葉（カモアフヒ）細辛を圖すべきを却て眞細辛に彷彿たる圖を出せしは傳寫するもの丶誤りなるべし扨本草大義にはかゝる誤りをうけて漫に華州信州の細辛を混同して併せて杜衡とせしなるべし
本草原始云細辛生二華陰山谷一葉類二馬蹄一故俗名二馬蹄香一
按に華陰細辛は葉葵の如にして其葉馬蹄に類するものは卽杜衡なる事諸家本草に詳なり今二種混同せしは誤なり

乃好而辛烈不ㇾ及二華陰高麗者一用ㇾ之去二其頭節一又引二李當之一云細辛如二葵葉一赤黑一根一葉相連夢溪筆談云細辛出二華山一極細而直柔靭深紫色味極辛嚼ㇾ之習々如ㇾ椒而更甚二於椒一本草云細辛水漬令ㇾ直是以二杜衡一僞爲ㇾ之也東南所ㇾ用細辛皆杜衡也杜衡黃白色拳曲而脆乾則作ㇾ團又謂二之馬蹄香一

『此間墨繪紹與本草所載華州細辛彩畫みらのねぐさ略之』

○釋名

みらのねぐさ（延喜式本草和名和名鈔）

○按にみらは韮をいふ此根細小頗る韮根の如し故に名づく

ひきのひたいぐさ（本草和名和名鈔）

○本草大義にひきのひたいぐさを以て杜衡の名とす因て按にひきのひたいは其葉白斑滑澤ありて蟾蜍額の如くなるによりて名付しものなるべければ大義の說しかるべしかゝればひきのひたいは原杜衡の名なるを舊より其二種葉根大略相似たるによりて遂に混同して細辛の名とはせしものなるべし

みやまぬなは（本草類編）

○此葉圓長正に蕁葉の如し故に名づく按に本草大義に此名をもまた杜衡とせしは誤りなるべし

たにあふひ（本草大義）

○按に此草山陰溪間に生じ其葉葵に似たり故に名づく

細辛（神農本經）

○按に證類本草引二圖經本草一云眞細辛其根細く其味辛きが故の名なり

小辛（同上）

○按に小辛はなを細辛の如し

少辛（本草綱目引二管子一）

○按に少辛も又小辛の意なり

○正誤

和漢三才圖會云細辛倭漢共用ㇾ之其葉似二小葵一而青有二小白點一夏月開二小紫花一朶短根直外黃內白其氣略如ㇾ椒雖ㇾ辛不ㇾ甚

按に凡細辛は葉青して白斑なく根細して味極て辛きものなり其小白點ありて味雖ㇾ辛不ㇾ甚ものは卽杜衡の類にして細辛にあらず且杜衡は春新葉を生ずる時地に貼して紫花を開くものなるに今其月同

又云美作國四十一種云々細辛十斤
又云備後國二十八種云々細辛三十斤
又云安藝國三十二種云々細辛十五斤
又云周防國十九種云々細辛一斤八兩
又云讃岐國四十七種云々細辛十斤
又云伊豫國三十二種云々細辛二斤
又云土佐國十三種云々細辛二斤
又云石見國十四種云々細辛十五斤
又云阿波國三十三種云々細辛九斤
又云越前國十八種云々細辛五斤
又云長門國十三種云々細辛七斤
又云近江國七十三種云々細辛二十六斤
又云上野國十五種云々細辛六十四斤
又云武藏國二十八種云々細辛二十斤
又云越後國七種云々細辛十斤
大同類聚方云美良乃禰久左味辛久大香之三月發ニ紫色花ヲ平九月採レ根乾用
異名製劑記承應二年板本云細辛日本にあるは葉たうのいもの葉に似てちいさく莖は紫いろなり根一本より三葉四葉づゝ出る也葉のうちにすこしづゝ文あり二八月に根を採てかげぼしにす
用藥須知云細辛和漢共ニアリ形細シテ味辛ク習々トシテ蜀椒ノ氣味ノ如キモノヲ眞トス和ノ細辛ノ中又有ニ好惡ー賀茂葵ハ味薄シ佐渡秋田ハ上ナリ南部ヨリモ出ス皆葉靑シテ圓無ニ白斑ー關東及北地ノ產一種葉有ニ香氣ーモノアリ此ヲ上トス
本草大義云溪葵タニアフヒ葉圓莖紫黑色佐渡州出レ之又駿州及下野日光有レ之江州細辛卽杜衡也漢亦誤用ニ杜衡ー華州信州之細辛乃杜衡也
物類品隲云細辛種類多シ佐渡產上品葉少シ長シ南部產佐渡產ト大抵相似タリ伊豆天城山產上品讃岐大川山產上品葉薄ク至レ冬卽枯ル
本草啓蒙云眞ノ細辛ハ和州大峯ノ麓赤瀧村ニアリ根細ク黃白色コレヲ嚼ハ辛カラズ暫シテ大ニ辛シ加茂葵ノ葉ニ似テ微シ長ミアリテ毛ナシ又葉形變ジタルモアリ三月新葉生ズレバ根上ニ三瓣ノ花ヲ開ク厚シ大サ三四分下ニ圓筒アリテ釜ノ狀ノ如シ紫黑色內ニ小子アリ熟シテ自ラ落チ春ニ至テ嫩苗ヲ生ズ冬ハ葉枯ル又常州江州豆州讃州野州等ニモ產ス
證類本草引ニ集註本草ー云細辛今用ニ東陽臨海者ー形段

古今要覽稿卷第四百十七

●草木部

みらのねぐさ　みやまぬなは　細辛

みらのねぐさ一名ひきのひたいぐさ一名みやまぬなは一名たにあふひは漢名を細辛一名小辛一名少辛といふ古は出雲國諸郡に產するよし其國の風土記にみえまゝ出雲佐渡但馬石見播磨美作備後周防讃岐伊豫土佐安藝越前長門近江上野武藏等より貢せしよし延喜式にみえたり今は大和河內豐前駿河下野常陸陸奥出羽伊豆等の山中またこれあり其葉ふたば草に似て微し長みありて根上より二葉並び生じ其根細小なる事韭根の如くにして味極て辛し扨西土にては古より華州高麗に產するものを上品とし（本草綱目）皇朝にて近時佐渡秋田（用藥須知）及び讃岐南部伊豆等に產するものを上品とす（物類品隲）おもふに延喜の比佐渡讃岐等より貢せしものは上品のものなるべし一種杜衡あり其根細辛に似て稍粗故に和漢ともに舊より相混じて一物とす此卽藥舗にいはゆる近江細辛なり（本草大義）此種また武藏上野等に往々これあるものなれば蓋し延喜の比其國より貢せしものは此物なるべしとおもはるれど杜衡は別に飛驒より貢せしものなれば（延喜式）いにしへ近江より貢せしも全くみらのねぐさにして杜衡にはあるべからずまた一種下野日光山常陸筑波山に產して根上よりたゞ一葉を生じ其根また細くして味辛きものありこれを別條に比するに其葉相似て最大なりおもふに此種は本草綱目に李當之を引て細辛一根一葉相連といへるものなるべし（常毛採藥錄）

出雲風土記云意宇郡凡山野所在草木云々苦參細辛

又云秋鹿郡云々女萎細辛

又云楯縫郡云々伏苓細辛

又云神門郡云々杜仲細辛

又云飯石郡云々女萎細辛

延喜式（典藥寮）云諸國進年料雜藥出雲國五十三種云々細辛一斤八兩

又云佐渡國四種云々細辛四十八斤

又云但馬國二十一種云々細辛一斤十兩

又云播磨國五十三種云々細辛五十五斤

本草啓蒙云川牛膝ハ川芎ノ例ニテ蜀ノ川州ニテ作リタル牛膝ヲ云上品ナリ和産二種アリ野生ノモノヲ採リ數年肥地ニ培養シタル根ヲ眞牛膝トイヒ山野ノモノヲ堀采タル根ヲタヾ牛膝ト云是皆土牛膝ニシテ下品ナリ舶來ノ牛膝ニ比スレバ根短クシテ潤ナク中心ニシテ味初苦ク後甘シ舶來ノ牛膝ハ長サ二三尺肥軟ニシテ潤多ク黄白色ナリ根ヲ切レバ中ニ小白心アリ其味初甘ク後苦シ上品トス今柳葉ノ牛膝ノ根ヲ曝シ乾セバ漢渡ノモノニ異ナラズ然レドモ野生故ニ根短シ肥地ニ培養セバ漢渡ノ如ク長クナルベシ

岡村尙謙曰凡牛膝は腰膝疼痛癥瘕經閉淋疾尿血等の諸症を治するものにて山野自生のものをよろしとすその莧葉のもの柳葉のもの必ず撰ぶべきにあらず然るを和漢共に舊より培養せしもの丶其狀長大柔潤なるを佳品とせしは全く服食家の說に此物は性よく惡血をおひ或は生胎を墮する程の力あるものなればいかに培養を加へてもさらに滋補傷中の功はあるべからざるを唯其狀の長大柔潤なるにか丶はりて正に當歸地黄などの類ひとおもひなして遂に滋補傷中の功あるものとせしは實に謬誤の甚しきなりよろしく山野自生のものをみづから堀采て乾し用ゆべし

又云川牛膝ハ集解ニイハユル夏藍葉ノ牛膝ナリ

按に川牛膝の名はじめて本草綱目にみへたれど吳晋本草にいはゆる夏藍葉のものと全く同種なるや否をしらず又夏藍の名はじめて吳晋本草にみへたれど諸家本草さらに見る所なければまた今の蓼藍なるや否をしらず蓋し莖本赤といへる文による時は夏藍葉のものは全く青莖にして根本のみ赤き常の土牛膝にして別に一種の柳葉のものにてあるべからずかゝれば夏藍は卽今の蓼藍をさしていひしものなるべければ川牛膝はかならず夏藍葉のものにてはあるべからず

いなぎぐさ 醫心方

○以上名義詳ならず

こまのひざ 本草類編

○駒はなを馬の如しおもふに皇朝にては古より牛膝を牛膝(ゐのくづち)とよみ來りしより出來し名なるべしされば千金方藥注にもこまのひざは牛字を午とあやまりたるなりとみえたり

ふしだか 千金方藥注 安房方言

○按に本草啓蒙に此名の出處を延喜式とせしは全く誤りなり

やぶじらみ 本草啓蒙 伊勢方言

○小野蘭山曰此子熟するにしたがひ倒に垂れて人の衣服につく故に名づく

おにごしつ 俗稱

○按に鬼は鬼あざみの鬼に同じ姫牛膝に對していふ

姫ごしつ 同上

○按に姫は姫百合姫萩の姫に同じ

柳葉牛膝 本草啓蒙

○按に葉の狀細長なるによりて名づく

牛膝 神農本經

○證類本草引二集注本草一云其莖有レ節似二牛膝一故以爲レ名也

百倍 同上

○本草綱目云百倍隱語也言其滋補功如二牛之多力一也

牛莖 本草綱目引二廣雅一

○按に牛莖群芳譜に牛脛に作るこれによれば莖脛音通牛脛は卽牛膝の意

山莧菜 救荒本草

對節菜 同上

○本草綱目云其葉似レ莧其節對生故俗有二山莧對節之稱一

土牛膝 證類本草引二圖經本草一

○按に土は近き土地に生ぜし下品のものをいふ

○正誤

用藥須知云牛膝和漢共ニアリ皆眞ナリ但漢ヲ可レ用和ハ性アシ、野ニ生タルイノコヅチハ土牛膝ナリ不レ堪レ用此物培養ヲ經ザレバ藥用ニ入レズ附子ト同例

細者爲ㇾ雌トイヘリ花實ハ栜葉ノモノニ異ナルコト
ナシ
證類本草引ニ圖經本草ニ云牛膝今江〔淮閩粤關中亦有
ㇾ之然不ㇾ及ニ懷州者ニ爲ㇾ眞春生苗莖高二三尺青紫色
有ㇾ節如ニ鶴膝ニ又如ニ牛膝ニ狀葉尖圓如ㇾ匙兩々相ニ對
於節上ニ生ㇾ花作ㇾ穗秋結ㇾ實甚細此有ニ二種ニ莖紫節大
者爲ㇾ雄青細者爲ㇾ雌（此說原ニ於弘景ㇾ）根極長大而柔潤者佳莖葉
亦可ニ單用ニ
『圖ニ面（ゐのくづち、柳葉牛膝）略ㇾ之』

紹興本草所載懷州牛膝



本草綱目云牛膝其苗方莖暴ㇾ節葉皆對生頗似ニ莧葉ニ
而長且尖䙱秋月開ㇾ花作ㇾ穗結ㇾ子狀如ニ小鼠負蟲ニ有ニ
濇毛ニ皆貼莖倒生九月末取ㇾ根水中浸兩宿挼去ㇾ皮
裹ㇾ紮暴乾雖ニ白直可ㇾ貴而挼ニ去白汁ニ入ㇾ藥不ㇾ如ニ留
ㇾ皮者力大ニ也

○釋名

ゐのくづち（延喜式新撰字鏡本草和名和名鈔）
○名義詳ならず蓋しくとこと音通なるべし
ゐのこづち（本草類編和漢三才圖會）
○岡村尙謙曰古今醫統に牛膝一名鼓槌草其莖有
ㇾ節如ニ鼓槌ニとみえたりこれによればこづちは即
鼓槌ゐのは全く猪のにして恐らくは犬山椒犬蓼の
犬の如くゐは其狀相似たるものをさしていひしに
やさらば鼓槌の名和漢暗合の通稱なり然るを本草
啓蒙に讃州にてはゑのこづち又ゑのころづちとい
ふよしかゝればゑのこは全く狗字なれば即狗槌の
義也さはいへゑのこはゐのこを誤りて
いひ傳へしものなるか又はゑはゐの音通なるもし
るべからず
ゐのつひ（新撰字鏡）　つなぎぐさ（本草和名）

又云尾張國四十六種云々牛膝十斤
又云美濃國六十二種云々牛膝二十斤
又云越前國十八種云々牛膝十七斤
又云因幡國二十種云々牛膝二斤四兩
又云伯耆國二十種云々牛膝五斤
又云出雲國五十三種云々牛膝四斤
又云石見國十四種云々牛膝三斤
又云安藝國三十二種云々牛膝十八斤
又云周防國十九種云々牛膝七斤
又云長門國十三種云々牛膝三斤
又云紀伊國三十五種云々牛膝九斤
又云讃岐國四十七種云々牛膝十斤
又云伊豫國三十二種云々牛膝六斤
又云土佐國十三種云々牛膝三斤
本草辨疑云牛膝唐アリ和アリ唐ハ太ク長二三尺許アリテ極モナシ味先甜クシテ後ニ微苦シ和ハ先苦クシテ後微甘シ和ハ燥テ唐ハ潤實ナリ滋補ニハ必ズ唐ヲ用ユ
又云震亨曰凡用二土牛膝一春夏用レ葉秋冬用レ根惟葉汁効尤速今人不レ知レ用レ葉皆根ヲ用ユ

和漢三才圖會云牛膝攝河二州之產最佳
千金方藥註云牛膝山城大和葛上郡戶毛村ヨリ出ス形甚肥大ニシテ漢渡ニ勝ル野生ノモノハ土牛膝ナリ墮胎ニ用ユ一種根青キモノアリ山野ニ多シ雌牛膝ナリ
本草啓蒙云イノコヅチ原野ニ甚多シ宿根ヨリ春苗ヲ生ズ方莖ニシテ節高シ枝葉節ニ對シテ生ズ葉ノ形柳葉ニ似テ小ク尖リ短毛アリ初出ノ葉ハ紫色大ニナレバ綠色トナル又稀ニ柳葉ノモノアリ
　按に此卽尋常の牛膝にして其葉細長柳葉の如きものをいふされど近邊總て此種ある事をきかず
潤サ一寸長サ七寸許リ末尖ル共ニ季夏ニ至リテ枝ノ末ゴトニ細長穗ヲ出シ多ク花ヲ開ク其花ハ長サ一分餘ノ細キモノアリ五瓣ニシテ綠色直生ス後チ其中ニ子ヲ生ズ熟スルニシタガヒ漸ク倒ニ垂レ人ノ衣服ニ著ク川牛膝ハ集解ニ謂ユル夏藍葉ノ牛膝ナリ是ヲモ柳葉牛膝ト云フ山麓及ビ林下陰地ニ生ズ葉ハ柳葉ノ云牛膝ト同シテ毛ナク尖リアリ莖色赤ク或ハ紫其節尤高シ弘景ノ說ニ莖紫節大者爲レ雄是也土牛膝モ節高ケレドモコレニ比スレバヒキシ故ニ弘景ノ說ニ青

古今要覽稿卷第四百十六

●草木部

ゐのくづち　こまのひざ　牛膝

ゐのくづち一名ゐのこづち一名つなぎぐさ一名いなきぐさ一名ゐのつひ一名こまのひざ一名ふしだか一名おにごしつ一名やぶじらみは漢名を牛膝一名牛莖一名百倍一名山莧菜一名對節菜一名土牛膝といふ此草原野道傍極て多し春舊根より苗を生じ高さ二尺餘莖方にして靑く一紅色にして節高し枝葉共に兩々相對し葉は莧菜に似て最大なり秋に至れば毎枝梢穗を抽て五瓣の小綠花を開き細實を結ぶ其根黄白色長さ六七寸或は一尺許に至る憶に延喜式に山城大和伊勢尾張美濃越前因幡伯耆出雲石見安藝周防長門紀伊讃岐伊豫土佐等より貢せし牛膝は蓋し此原野道傍のものなるべし一種俗に柳葉牛膝一名姫牛膝といふものあり其葉極て細長なる事頗る柳葉の如くまた馬蓼の如し其節前條よりも稍高して毎節赤色を帶ぶ此種近邊にては王子山中及び十條村また角筈邊に產す此種は卽西土にいはゆる川牛膝と全く同種なり扨陶弘景は莖節の高低によりて雌雄を分ちたれど皇朝にては葉の圓細によりて鬼姫の名あり

按に本草原始に圖する所の牛膝は其根の形狀によりて獨根のものを雄とし多岐のものを雌とすこれは竹の根上より生ぜし獨枝双枝の別あるによりて雌雄をわかちしに原づきていひしものなれど凡草木の雌雄はたゞ其形狀の異なるによりて其物を分別するのみの名目にして鳥獸の孳尾するものとは其儀異なれば強ていふは拘泥の至りなり

其儀同じからずといへども名醫別錄に牛膝生㆓河内川谷㆒（證類本草）といひ圖經本草に今福州人用云牛膝治㆓婦人血塊㆒極効（同上）ありといひ且延喜の比諸國より貢せし牛膝もまた此種なるべければ藥用に供するには原野道傍のもの最しかるべし

延喜式（典藥寮）云諸國進年料雜藥山城國三十二種云々牛膝二十五斤

又云大和國三十七種云々牛膝七斤

又云伊勢國五十種云々牛膝八斤

せしものとその義全く一般なりかゝれば雀髀斛も蚱蜢斛もすべて尋常の石斛を形容せし名なれば本草一家言に一種小者名二雀髀斛一長纔六七寸といへるぞいとよろしとこれまた一説也

本草啓蒙云雀髀斛紀州熊野山中ニ生ズ根長サ七八分潤サ三分許並ビ連ルコト十餘ニシテ筬ノ形ノ如シ當年ノ新根上ノミニ二葉ヲ生ズ形石斛ヨリ大ナリ六月花ヲ開ク形色石斛ニ同シテ小ナリ

證類本草引二唐本草一云一種大如二雀髀一名二雀髀斛一

○釋名

ばくこくらん 本草啓蒙 種樹家稱

○按に此即麥斛蘭の義なり

おさらん 同上

雀髀斛 證類本草引唐本草 本草和名引稽疑

○按に根並び連ること幾の形に似たり故に名づく

○按に雀髀は其狀によつて名づく

シ淡綠色葉ハ石斛ヨリ短小ニシテ光アリ六月花ヲ開ク白色形最小シ
證類本草引二集註本草一云一種似二大麥一累々相連頭生二一葉一而性冷名二麥斛一

むぎらん



○釋名

むぎらん物類品隲 本草啓蒙

○按に此種狀麥の如くにして葉は風蘭に似たり故に名づく

まめらん本草啓蒙 伊勢方言

○按にまめはなほむきの如し

いぼらん同上土佐方言

○按にいぼは肬目をいふこれまたまめらんの意

ばくこくらん　おさらん　雀髀斛

ばくこくらん一名おさらんは漢名を雀髀斛といふ此種は紀伊熊野及び那智等の山中往々これあり其狀麥斛より最長濶にして數十莖相連り生じ葉は石斛よりも大にして花は却て石莖より小さし岡村尚謙の說に凡萬の物其形の大小に拘はらず彼是相似たるものあればそれにかたどりて其名を命ずるは常なり譬ば香附子を雀頭香といひ小舟を蚱蜢といへるが如し其蚱蜢はもと蟲より出たる名なれどこれを蚱蜢蟲に比すれば其大さ幾萬倍なる事をしらず其雀頭香は鳥より出たる稱なれどその頭を以て香附子にくらぶれば大さまた幾十倍なる事をしらず因て憶に弘景のいはゆる石斛生二石上一細實形似二蚱蜢髀一者爲レ佳といひ蘇敬のいはゆる大如二雀髀一名二雀髀斛一といへるは蓋し一物にて正に雀頭香蚱蜢舟の其物は大小の異なる事ありといへば形狀頗る相似たるによりてその名を命

山幽谷中產之緣ニ木空ニ而生長尺餘
廻村雜記云木斛遠江と三河との境の山中に有レ之候
形石斛に似て紅花を開き申候
本草啓蒙云一種筑前土州ニハ淡黃花ナル者アリ形小クシテ穗ヲナシテ生ズ其根樹皮ニ生ジ石上ニハナシ
證類本草引ニ集註本草ニ云生ニ櫟樹上ニ者名ニ木斛ニ其莖形長大而色淺始安亦出ニ木斛ニ至虛長
本草衍義云木斛折レ之中虛如レ禾草長尺餘但色深黃光澤而已
本草綱目云石斛短而中實木斛長而中虛
本草原始云生ニ櫟木上ニ者折レ之如ニ麥稈ニ中虛名ニ木斛ニ
又云石斛根白木斛根黑

○釋名

木斛證類本草引集註本草及本草圖經
○按に木上に生ずるによりて名づくるよし既に弘景の說にみえたり

○正誤

本草一家言云木斛一名麥斛其莖黃色光澤頗似ニ麥稈ニ故名
按に木斛麥斛は原是兩種なる事上文既にいふが如し今麥斛○麥を以て麥稈の義となし二種混同するものは謬なり
證類本草引ニ本草圖經ニ云生ニ櫟木上ニ者名ニ木斛ニ
按に凡皇朝にて木斛の木上に生ずるものは必ず櫟木にのみかぎらざれば西土といへどもまた同じ事なるべし然るに近世に至り本草原始などにもなほ櫟木といへるものは全く拘れり是はその始櫟木上にて見出せしより集註本草にはしかいへるを後の人すべてその木にのみ生ずるものとおもひなせしは疎漏なり

むぎらん　まめらん　麥斛

むぎらん一名まめらん一名いほらんは西土にいはゆる麥斛なり其形全く石斛に似て極て細小此種諸國深山中處々これあり土佐伊豫紀伊下野薩摩等殊に多し
物類品隲云麥斛ハ深山樹石上ニ生ズ其形麥ノゴトク上ニ一二ノ小葉ヲ出ス光澤ニシテ石斛葉ノ如シ
本草啓蒙云麥斛ハ朽木ニ生ズ一根一葉根ハ麥粒ノ如

レ根纏以ニ人髮鐵絲一絡レ之縣ニ簷前風日處一自生舊注石蔛藥名圖經本作レ斛生ニ石上一根糾結至繁開ニ紅花一莖節上自生レ根須取レ實以ニ桑灰一沃レ之色如レ金者良

岡村尙謙曰物理少識に金釵石解一名長生草開ニ小白花一甚香若ニ根ゞ一間纏以ニ人髮鐵絲一結レ之縣ニ風日中一自生又桂蘭挂レ之亦生とみえたりこれによる時はあらず蓋し本草に紅花の石斛を載て白花のものを漏せしにより正字通には遂に誤りて白花のものを以て石斛に非ずとし漫に青白花を開く蔛菜と相混じて一物とはせしものなるべしされど蔛菜は一年生の水草にして絕て長生の名を得べきものにあらざれば其誤りなる事辭を費さずして明らけし

もつこく

もつこくは卽石斛の一種木上に生ずるもの也故に其花實莖葉ともに石斛におなじたゞその莖最長く或は八九寸或は一尺餘に至るを異なりとすされど筑前山中生ずるものは其花色淡黄のものあるよし本草啓蒙にみえ一種紅花を開くものは廻村雜記にみえたり扱本草圖經以下諸家の說皆木斛不レ堪レ用よしみえたれど弘景の說には木斛不レ入ニ丸散一惟可下爲ニ酒漬一煮用上とあれば絕て藥用に供せざるにはあらず皇國にても伊賀伊勢參河伊豆下總近江丹後因幡備後紀伊伊豫土佐等の國々より此物を貢せし事延喜式にみえたれば我いにしへも二種共に通用せし事明らけし

延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥伊賀國二十三種云々木斛十斤

又云伊豆國五十種云々木斛二十斤

又云參河國二十一種云々木斛五斤

又云駿河國十七種云々木斛五斤

又云伊豆國十八種云々木斛三斤

又云下總國三十種云々木斛五斤

又云近江國七十三種云々木斛二斤

又云丹後國二十四種云々木斛十斤

又云備後國二十八種云々木斛十五斤

又云因幡國二十種云々木斛十三斤

又云伊豫國三十二種云々木斛二斤

又云土佐國十三種云々木斛十三斤

本草一家言云石斛有ニ數種一其極大者名ニ木斛一處々深

事猶珠寶の如くなりしより名付しなるべし

いはとくさ 千金方藥注 本草啓蒙

○按に此もの石上に生じ狀木賊の如し故に名づく

ちくらん 本草啓蒙 薩摩方言

○按に此卽竹蘭の意なり

せんこく 同上紀 伊方言

○按にせんこくは卽石斛の訛傳なり

石斛 神農 本經

○按に右は石上に生ずる義時珍云石斛名義未レ詳

林蘭 同上　杜蘭 證類本草引 名醫別錄

○按に蘭はその花葉頗る建蘭に似たるによりて名づく按に林杜の字疑らくは原一は正字一は誤字なるを後に誤りて一名とはせしものなるべし凡本草中この類おほくあり

金釵石斛 本草衍義 荊州記

○按に宗奭云金釵石斛蓋後人取レ象而言レ之時珍云其莖如二金釵之股一故名今蜀人栽レ之呼二金釵花一荊州紀云來陽龍石山多二石斛一精好如二金釵一是矣

千年潤 本草綱目 典籍便覽

○按に時珍曰經レ年不レ死俗稱爲二千年潤一

長生草 物理 小識

○按に卽千年潤の意なり

○正誤

用藥須知云石槲ニ大小ノ二種アリ和ハ小ナル者ノミ大ナルヲ木槲ト云三體詩五言律ニ槲葉落二山路一トイヘルハクヌギノ葉ナリ注ニ誤テ石槲ノコト、ス槲字偶同ヲ以テ誤レリ

按に此說ほゞ誤りを正すに似たれども和は小なるものゝみといへるは却て誤りにて皇國にもその大なるものいと舊よりありしなり且㭰は槲の誤字にて槲は佳買切音解なれば槲胡谷切音斛とは全く別なり畢究石解は石斛にていにしへより醫家通用なるを漫に三體詩になづみ奇を好で木傍を添しよりかゝる誤りも出來しなり

本草綱目云杜蘭林蘭與二木部木蘭一同名恐誤

按に凡物同名多し此物に蘭の名ある强て木蘭の誤りともいふべからず時珍の說却て誤れるに似たり

正字通云蔛音斛蔛菜生二水旁一葉似二澤瀉一而小花青白色可二蒸啖一一名蔛榮一名長生草開二小白花一甚香取

之
用藥須知云石斛ハ風蘭ニ似タル草ナリ巖石ノ間ニ生ズ大小ノ二種アリ
本草一家言云石斛今京西北野花肆以ニ椶毛一包裹掛在ニ簷楹一以供ニ翫好一與ニ風蘭一並賞者是也此種攝津摩山石岩上生レ之又岩淵山中多生鄉人採以賣ニ四方一云
物類品隲云石斛和產處々深山石上ニ寄生ス花白色粉紅色ノ二種アリ
本草啓蒙云石斛今ハ和漢通名山中岩石上ニ生ズ莖ハ木賊ノ如クニシテ細ク黃綠色寸餘一節々ゴトニ一葉ヲ生ズ形竹葉ニ似テ小ク厚ク光アリ莖長サ三四寸多ク叢生ス夏舊莖ノ節ノ下ニ二花並ビ生ズ形白及花ニ似テ白色又粉紅色ナルモノアリ紅色ナルモノハ稀ナリ共ニ花後實ヲ細ブ蘭莢ニ似テ小ナリ
證類本草引ニ集註本草一云今用ニ石斛一出ニ始興一生ニ石上一細實桑灰湯沃レ之色如レ金形似ニ蚱蜢髀一者爲レ佳近道亦有
本草衍義云石斛細若ニ小草一長三四寸柔韌折レ之如レ肉而實世又謂ニ之金釵石斛一
又引ニ本草圖經一云石斛今荊州廣州及温台州亦有レ之以ニ廣南一者爲レ佳多在ニ山谷中一五月生ニ苗莖一似ニ竹節一（本草綱目竹節作ニ小竹一）節々間出ニ碎葉一七月開レ花十月結レ實其細根長黃色
本草綱目云石斛叢ニ生石上一其根糾結甚繁乾則白軟其莖葉生皆青色乾則黃色開ニ紅花一節上自生ニ根鬚一人亦折下以ニ砂石一栽レ之或以レ物盛挂ニ屋下一頻澆以レ水經レ年不レ死俗稱爲ニ千年潤一處々有之以ニ蜀中者一爲レ勝
『此間圖二面（紹興本草所載温州石斛、すくなひこのくすね）今略之』

○釋名

すくなひこのくすね（延喜式本草和名和名鈔）
○按に少名彥命は皇朝醫藥の祖神なりくすねは即くすりの義蓋し太古の時少名彥命此藥を以て衆病を療せしよりかゝる名は出來しものなるべし凡人の名を以て藥名とせしものは我のみならず徐長卿劉寄奴の類西土にもいと多し
いはぐすり（同上）
○按に此草岩石上に叢生す故に名づく
たから（大同類聚方）
○按にみたからは即御寶の義上古の人此藥を尊ぶ

古今要覽稿卷第四百十五

●草木部

すくなひこのくすね　いはとくさ　石斛

すくなひこのくすね一名いはくすり一名みたから一名いはとくさ一名ちくらんは漢名を石斛一名林蘭一名杜蘭一名千年潤一名長生草をいふ右者出雲國諸郡に產するよし其國の風土記にみえ伊豆下野陸奥美濃紀伊備後安藝丹波但馬伯耆周防等よりこれを貢せし事延喜式にみえたり今は豊前伊豫筑前攝津土佐薩摩等の山中にも往々これあり其狀大略木賊(トクサ)に似て寸々節あり內實して肉の如く長さ三四寸或は六七寸其頭細竹葉に似て稍厚き兩三葉を生じ白花を開く事建蘭の如し憶に此種は紹興本草圖する所の温州石斛と全く同種なるべし又一種淡紅花のものあるよし物類品隲及び本草啓蒙にみえたれど本草綱目に石斛開紅花といひまた雲南通志に五色石斛出祿勸普渡河石壁紺紅者佳といへるものはともに國產いまだ詳ならず出雲風土記云意宇郡凡諸山野所在草木云々石斛前胡

又云島根郡凡諸山野所在草木云々百部根石斛

又云神戸郡凡諸山野所在草木云々卷柏石斛

又云飯石郡凡諸山野所在草木云々杜仲石斛

延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥伊豆國十八種云々石斛十一斤

又云美濃國六十二種云々石斛七十斤

又云下野國十四種云々石斛二十斤

又云陸奥國六種云々石斛八十斤

又云丹波國四十三種云々石斛二十七斤

又云但馬國二十一種云々石斛十斤九兩

又云伯耆國二十種云々石斛二十四斤

又云備後國二十八種云々石斛四十九斤

又云安藝國三十二種云々石斛四十斤

又云周防國十九種云々石斛五斤

又云紀伊國三十五種云々石斛二斤五兩

本草和名云石斛者山精也出范注方又石精也出神仙服餌方和名須久奈比古乃久須禰一名以波久須利

和漢三才圖會云石斛出於豊前中津者良伊豫之產次

又卷第五同歌下
故郷秋を　後京極攝政前太政大臣
出ていにし人はかへらて葛のはの
風に恨むる故郷のあき
うへのをのこども題をさぐりて名所五十首歌つかうまつりけるついでに三寶山を
影やとす月もしくれてみむろ山　今上御製
秋風寒し葛の下露
百首歌奉し時　左衛門督實雅
うらかるゝ野原のま葛吹風に
歸るをみてや秋もゆくらん

又卷第九離別歌
二條太皇太后宮の式部にいひわたりけるをつれなくてすぐる程にこと人につきて東の方へ行けるがあはづといふ所よりかへる人につげてくずの葉のかへらんをまてなどいへりければ國へおひていひつかはしける　左京大夫顯輔
あはつ野の葛の末葉のかへる迄
有やはつへき露の命は

又卷第十五戀歌五
だいらしず　素暹法師
つれなさを恨よとてやときは山
下はふ葛に風のふく覽

又卷第十七雜歌上
鶉をよめる　源廣孝
葛の葉を吹夕風にうらふれて
田子の入野に鶉なく也
正治二年十月歌合に枯野朝　刑部卿宗長
野への色は朝おく霜に結ほゝれ
恨によわるくすの下風

初霜の岡の葛原今よりは
　うら枯わたる秋風そふく
又巻第十一戀歌一
　題しらず　小槻兼治
逢事は猶かた岡のまくす原
　恨もはてすぬるゝ袖かな
又巻第十五同歌五
　寄レ草戀を　伏見院御製
色かはる心の秋の葛かつら
　恨をかけて露そこほるゝ
ともすれはなひくさ山の葛かつら　前中納言匡房
　恨よとのみ秋風そふく
だいしらず　源頼資
契置し露をかことの葛かつら
　くるもおそしと猶やうらみん
かくはかり絶ける物を葛かつら　平貞秀
　くる夜をかけて何恨けむ
弘安元年百首歌に　後西園寺入道前太政大臣
身のうきは思ひ返せはまくす原
　たゝ恨よと秋風そふく

　戀歌に　權大納言教嗣
しられしなかた山陰のま葛原
　恨むる風は身に寒くとも
秋風の便ならてはまくす原　祝部成景
　恨むとたにもいかてしらせん
　寄草恨戀　従三位忠兼
眞葛原露の情もとゝまらす
　恨みし中は秋風そふく
だいしらず　參議經宣
身を秋の末野の原の霜枯に
　猶吹やまぬくつのうら風
ことのはの枯にし後はま葛原　示空上人
　恨むる程のなくさめもなし
新續古今和歌集巻第四秋歌上
　千五百番歌合歌　前中納言定家
水莖の岡の葛原吹返し
　衣手うすきあきのはつ風
　弘安百首歌に　參議致經
秋深きをのゝくす原かれ／＼に
　うらみもよわる松蟲の聲

初霜の岡への𛀙葛恨かね　伏見院御製
おのれ枯行蟲のこゑ哉
だいしらず　後西園寺入道前太政大臣
霜枯の𛀙くすか下のきり〳〵す
いつ迄殘る恨みなるらむ
又巻第十四戀歌四
だいしらず　祝部成良
恨みすよ夏野に茂る葛かつら
下のみたれは苦しけれとも
千五百番歌合のうた　後京極攝政太政大臣
秋は猶葛のうら風恨みても
とはす朽にし人そ戀しき
又巻第十五戀歌五同
戀の歌の中に　從二位家隆
はし鷹のとかへる山の葛の葉の
一かたならす恨つるかな
遠近の風の末なる葛かつら　從二位隆博
いつかたよりか思ひ絶なん
枯はつる眞葛か原の秋風を　山本入道前太政大臣
恨むとはかり思ひけるかな

題しらず　源氏經
露霜のをかへの𛀙葛恨わひ
枯ゆく秋に鶉鳴なり
新拾遺和歌集巻第四秋歌上
白河院鳥羽殿におはしましけるとき野草露繁と
いふ事を　修理大夫顯季
鶉なくあたの大野の𛀙くす原
いく夜の露に結はるゝ覽
又巻第十三戀歌三
民部卿爲明家に歌よみ侍しに遇戀を
恨むへきことのはそなき葛かつら　頓宗法師
くる夜は人のうさも忘て
又巻第十五戀歌五同
寄レ葛戀　平親清女妹
秋風に玉𛀙く葛の下露や
恨にたへぬなみた也けり
今そしる眞葛か原に吹風の　道智法師
恨も戀にかへるものとは
新後拾遺和歌集巻第五秋歌下
だいしらず　藤原行朝

だいしらず　　　　よみ人しらず
まくすはふをのゝしのはら下にのみ
　人を戀るは苦しかりけり
又卷第十四同歌四
戀の歌の中に　　　　鎌倉右大臣
水くきの岡への眞葛枯しより
　身を秋風の吹ぬ日はなし
光明峯寺入道前攝政家の三十首歌のなかに
恨ても戀ても露そこほれける　山階入道左大臣
　忍ふの山の葛の下風
寄レ山戀を　　　　蓮生法師
祈こし三室の山の葛かつら
　神代かけてもうらみつるかな
文保百首歌奉ける時　　　　津守國冬
うかりける三室の山の葛かつら
　ちかひし末も秋風そ吹
題しらず　　　　後九條前內大臣
契のみあたのおほ野のまくす原
　戀のたゝちは秋風そふく
龜山殿十首歌に恨戀　　　　前中納言有忠

恨てもかひこそなけれ秋風の
　吹とふきぬる岡のくすはら
寶治百首歌奉けるとき寄レ風戀　鷹司院帥
秋風に垣ほのまくす吹返し
　恨はかりはたゆる夜もなし
寄レ葛戀といふことを　　　　後宇多院御製
山かつの垣ほかくれの葛かつら
　恨有やととふ人もなし
嘉元百首歌奉しとき恨戀　　　　前大納言爲世
ことのははつらきあまりに枯ぬ共
　冬野の眞葛猶や恨みん
戀の心を　　　　中務卿恒明親王
枯はつる岡の葛はの秋風に
　恨し比を又しのふかな
風雅和歌集卷第七秋歌下
秋歌に　　　　前大納言長雄
風渡る眞葛か原に秋暮て
　かへらぬ物は日數也けり
新千載和歌集卷第五秋歌下
蟲聲欲レ枯といへる心をよませ給ける

前大僧正隆辨あづまへまかるとて秋は歸りのぼるべきよし申侍けるが冬にもなりにければつかはしける　中務卿宗尊親王

秋風と契し人は歸りこず
　葛のうらはの霜かるゝまで

續千載和歌集卷第十二戀歌二

題しらず　大中臣爲賓

逢事はかたのゝみのゝ眞葛原
　恨もあへず露そこぼるゝ

又卷第十五戀歌五

戀の歌の中に　源親教朝臣

枯果は思ひ絶なでまくず原
　何にのこれる恨なるらむ

前大納言通重

とへかしな絶ぬ恨の眞葛原
　風を待まの露はいかにと

弘安百首歌奉ける時　入道前太政大臣

身のうきに思ひ返せはまくず原
　たゞ恨よと秋風ぞふく

だいしらず　安嘉門院大貳

秋風に恨わぶとも眞葛原
　露こぼるとは人にしらせし

洞院攝政家百首歌に　前大納言爲家

海士の住里の苫やの葛かづら
　ひとかたにやは浦風も吹

又卷第十六雜歌上

だいしらず　清原元輔

風はやみ秋はてかたの葛の葉の
　恨つゝのみ世をもふる哉

續後拾遺和歌集卷第五秋歌下

後京極攝政家歌合に野風　從二位家隆

けさみれはいはたのをのゝ眞葛原
　うら枯渡る秋風ぞ吹

題しらず　前大納言資季

まくず原うら吹返す秋風に
　三室の山はいろ付にけり

又卷第七物名

石清水　關白太政大臣

我身のみうしとはいはし水莖の
　岡の葛葉も猶うらむ也

又卷第十一戀歌一

眞葛原下葉はかりの秋ならは
　　思ひ返して恨さらまし
　山階入道左大臣家十首歌に寄二秋風一戀
秋風の吹くに任せて眞葛原
　　我とは人をうらみやはする　安嘉門院四條
新後撰和歌集卷第四秋歌上
　だいしらず　太上天皇
置もあへす亂れにけりな白露の
　　玉まく葛に秋風そふく
又卷第五同歌下
　暮秋の心を　院御製
長月のするゑ野のま葛霜枯て
　　かへらぬ秋を猶恨みつゝ
又卷第十一戀歌一
　題しらず　素暹法師
夏山の茂みかしたにはふ葛の
　　いつあらはれて恨たにせん
又卷第十二同歌二
　光明峯寺入道前攝政家三十首歌に
　　普光園入道前關白左大臣

飛鳥川ゆきゝの岡の葛かつら
　　くるゝや人にあはぬうらみは
又卷第十三同歌三
　題しらず　俊惠法師
我ならぬ葛の裏はもけさ見れは
　　歸るとてこそ露もこほるれ
我せこを松浦の山の葛かつら　鎌倉右大臣
　　玉さかにたにくるよしもなし
又卷第十六同歌六
　だいしらず　院御製
つらかりし心の秋も昔にて
　　我身に殘るくすのうら風
　弘安元年百首歌奉し時　權中納言公雄
思へたゝのへのまくすも秋風の
　　吹ぬ夕ようらみやはする
玉葉和歌集卷第四秋歌上
　初秋の心を　後一條入道前關白左大臣
吹增る風のまゝなる葛のはの
　　うらめつらしく秋はきにけり
又卷第十四雜歌一

返し　和泉式部
秋風はすこく吹とも葛のはの
　恨かほにはみえしとそ思ふ

新勅撰和歌集卷第四秋歌上
千五百番歌合に　宜秋門院丹後
まくす原恨みぬ袖の上迄も
　露置初る秋はきにけり

法性寺入道前關白中納言中將に侍ける時山家早
秋といへる心をよませ侍けるに　菅原在良朝臣
山里は葛のうら葉を吹返す
　風のけしきに秋をしるかな

續後撰和歌集卷第五秋歌上
題しらず　寂蓮法師
今よりの秋の夜風やいかならん
　けさたに葛の恨かほなる

又卷第六秋歌中
秋歌の中に蟲を　後鳥羽院御製
置露のあたの大野の眞葛原
　恨かほなる松蟲のこゑ

續古今和歌集卷第四秋歌上
嘉保二年郁芳門院前栽合の歌　權大納言公實
眞葛はひをきの茂らぬ宿ならは
　おそくや秋の風をきかまし

又卷第六冬歌
冬歌の中に　中務卿親王
日影さす枯野のま葛霜とけて
　過にし秋にかへる露かな

又卷第十二戀歌二
だいしらず　鎌倉右大臣
我せこをまつちの山の葛かつら
　たまさかにたにくるよしも哉

又卷第十四戀歌三
寄二寒草一戀といへる心を　俊惠法師
日にそへて霜かれゆけは葛のはの
　有しはかりもえこそ恨ね

だいしらず　曾禰好忠
まくす原風たに寒く吹こすは
　見えぬ人をも恨さらまし

續拾遺和歌集卷第十四戀歌四
百首歌奉し時　權大納言長雅

秋風に吹返されて葛のはの　藤原正家朝臣
いかに恨し物とかはしる

千載和歌集卷第五秋歌下
瞻西上人雲居寺にて結縁經の後宴に歌合し侍けるに野風の心をよめる　藤原基俊
秋にあへすさこそは葛の色つかめ
あなうらめしの風のけしきや

新古今和歌集卷第四秋歌上
題しらず　中納言家持
神なひの三室の山の葛かつら
うら吹返す秋はきにけり

千五百番歌合に　顯昭法師
水くきの岡の葛はも色付て
今朝うら戀し秋の初風

又卷第五同歌下
郁芳門院の前栽合によみ侍ける
獨寢やいとゝ淋きさをしかの　藤原顯綱朝臣
朝ふすをのゝくすのうら風

又卷第十二戀歌二
忍戀の心を　清輔朝臣
人しれず苦しき物は忍ふ山
下はふ葛の恨み也けり

又卷第十三同歌三
人しれず忍ける事をふみなどちらすと聞ける人につかはしける　相模
いかにせん葛のうら吹秋風に
下葉の露のかくれなきみを

又卷第十四同歌四
后の宮久しく里におはしける頃つかはしける
葛のはにあらぬ我身も秋風の　天暦御歌
吹につけつゝうらみつる哉

又卷第十六雜歌上
寄ㇾ風懷舊といふことを　皇太后宮大夫俊成女
葛の葉の恨みに返る夢の世を
忘れ形見の野への秋風

又卷第十八同歌下
和泉式部みちさだにわすられて後ほどなく敦道親王にかよふときゝてつかはしける
うつろはてしはし信太の杜をみよ　赤染衞門
歸りみすそる葛のうら風

千早振神のいかきにはふくすも　貫之
秋にはあへすうつろひにけり

又卷第十五戀歌五
題しらず　平さだふん
秋風の吹うら返す葛の葉の
恨みても猶うらめしき哉

後撰和歌集卷第十二戀歌
人をいひはじむとて　兼覽王
足引の山下しげくはふ葛の
尋て戀る我としらずや

拾遺和歌集卷第四冬
題しらず　よみ人しらず
神無月時雨しぬらし葛のはの
うらこかるねに鹿ぞ鳴なる

又卷第六別
題しらず　讀人しらず
忘るなよ別路に生る葛のはの
秋風吹ば今かへりこん

又卷第十九雜戀
だいしらず　よみ人しらず
風はやみ峯の葛はのともすれは
あやかりやすき人の心か

後拾遺和歌集卷第四秋上
秋たつ日よめる　惠慶法師
淺茅原玉まく葛のうら風の
うら戀しかる秋はきにけり

又卷第十三戀三
あひそめて又と逢侍らざりける女につかはしける　叡覺法師
秋風になひきなからも葛のはの
うらめしくのみなどかみゆ覽

又卷第十九雜五
人のあふぎに山里の人もすまぬわたりかきたるをみてよめる　大中臣能宣朝臣
を鹿ふすしけみにはへる葛のはの
うら淋しけにみゆる山里

金葉和歌集卷第七戀部上
女の許にまかりたりけるに今夜はかへりねと申ければ歸にける後ひとひはいかにおもひしなど申ければいひつかはしける

古今要覽稿卷第四百十四

草木部　くず

和歌

萬葉集卷第七譬喩歌

寄草

姫押生澤邊之眞田葛原何時鴨絡而我衣將服

又卷第十春相聞

寄花

藤浪咲春野爾蔓葛下夜之戀者久雲在

夏相聞

寄草

眞田葛延夏野之繁如是戀者信吾命常有目八方

秋雜歌

詠花

眞葛原名引秋風吹毎阿太乃大野之芽子花散

詠黃葉

鴈鳴之寒鳴從水莖之岡乃葛葉者色付爾來

秋相聞

寄黃葉

我屋戸之田葛葉日殊色付奴不座君者何情曾毛略解云座の上一本來の字有

又卷第十二寄物陳思

水莖之崗乃田葛葉緒吹變面知兒等之不見比鴨

赤駒之射去羽許眞田葛原何傳言直將吉

又卷第十六有由緣雜歌

大埼之有磯乃渡延久受乃往方無哉戀渡南

作者未詳歌一首

成棗寸三二粟嗣延田葛乃後毛將相跡葵花咲

又卷第二十

多可麻刀能努敝波布久受乃須惠都比爾知與爾和須禮牟和我於保伎美加母

右一首主人中臣淸麿朝臣

波布久受能多要受之努波牟於保伎美能賣之思野邊爾波之米由布倍之母

古今和歌集卷第五秋歌五

神のやしろのあたりをまかりける時にいがきのうちの紅葉をみてよめる

べからず

本草綱目啓蒙云葛云々七月梢葉ノ間ニ花穗ヲ出ス長サ三五寸下垂ス

按に下垂スまさに下垂セスに作るべしこれは傳寫するもの誤りて垂の下にセ字を落せしなり今現に此花の形狀をみれば其義は明らけし

重文圻二云垠或从レ斤又云根从レ木艮聲又云䶑从レ堇
艮聲有二重文䜣二云籒文䶑从レ喜又云近从レ辵斤聲又
云芹从レ草斤聲とみえたりしかれば唐韻に垠圻語
斤切近渠遴切芹巨斤切斤擧欣切とあるは卽倉頡の
遺聲にして根古痕切䶑䜣古閑切とあるは共に各邦
の方聲なりこれによるに斤根もと同聲にして黃斤
は卽黃根なりひめくずの根その色淡黃なるにより
て此名を命ぜし也然るを時珍の說に黃斤未詳とい
へるは漢魏以下小學絕て諸家皆倉頡讀をしらざる
が故也

黃芑（本草和名引二釋藥性一）

○按に斤乃讀近の如くまた讀芑(キ)の如し芑(キ)斤(キン)もと一
聲たゞ緩急の別あるのみ說文云听从レ日斤聲讀若
レ希又云旂从於斤聲唐韻云旂渠希切とみえたるに
てその義は明らけし

黃葛（同上）　黃葛根（同書引二養性要集一）

○正誤

和名類聚鈔云葛穀一名鹿豆
按に鹿豆は卽鹿藿實の名なり葛また鹿藿と名づく
故にこゝには二種混同して遂に鹿藿實の名を以て
誤りて葛穀の一名とせしなり

本朝食鑑云葛有二野生一有二家種一其蔓延長取收可レ作二
布袴一其葉有二三尖一似二斯手拍(コノテガシハ)一而長云々
按に葛有二野生一有二家種一といへるは全く本草綱目
の文をとりてかきし也然れども用藥須知に漢土に
は家園に植てこれを用ゆるを家葛と名づく和は皆
野生也とみえたりまた其葉三尖の字も綱目により
てかきしものなれ共時珍は如二楓葉一而長といひ蘇
頌は葉頗似二楸葉一而小なりともいへり然るを今こ
の手がしはに似たりといふは全く誤り也或は元祿
の頃別に葛葉に似たるこのてがしはといふもの有
しにやうたがはし

東雅云舊事記古事記日本紀等に伊弉諾神(イザナキカミ)の黑鬘ゑび
かづらと化りしといふ事みえたれば葛をかづらとい
ふもこれらの緣にやありけんさらばそのかといふは
かみ乃謂也かみは卽髮也云々
按にかづらのかは屋ねをふく草乃名をかやといふ
かと同じ意にて古語に上より覆ふ事をかといふよ
し既に上文にもいへるが如くなればかづらは卽覆(カ)
蔓(ツラ)の義にて髮をかみとよむかの字の義にてはある

雞齊根 神農本經

○按に雞字をよむ聲稽の如く齊字をよむ聲齋の如しその雞齋二合の聲のつまりたるが卽葛の聲となれば雞齊は卽葛字の緩聲也これは爾雅に莔貝母といへる貝母は卽莔の緩聲なるが如しされば葛といひ雞齊といひ莔といひ貝母といふはたゞその聲の緩急によりてその名を異にすれどもその意すべて一つなりまた案に齊字をよむ聲茨の如きはすなはち齋の急聲なりこれは詩鄘風に牆有レ茨不レ可レ掃也といへる茨字を說文に引しには薺に作りまた漢書賈誼傳步中二采齊一といへる師古注に采齊樂詩名也字或作レ薺又作レ茨といへるにてその義は明らけしこれによれば蘇長史黃環を注して今太常收二劔南來者一乃雞屎葛根非也といへる雞屎は卽雞齊と通聲なるべければ本經にいはゆる雞齊根は別にこれ一種の葛根をさしていひしにてもあるべきにや

葛脰 唐本草

○名義蘇敬注にみえたり

藨羅 本草和名引二養性要集一

○案に藨羅まさに蕪蘿に作るべし此根蕪菁の如く又蘿菔のごとし故に名づく

播骨 同書引二雜要訣一

○骨字もと赤に作る故に標注に赤字無攷とみえたれ共本草和名に圈一名播赤とあるをその書鹿藿條には釋藥性を引て蔨一名播骨に作り又黃斤一名播骨とあるによりて今これをあらたむ然りといへ共蔨は鹿藿の名にして此物の名にあらず雜要訣には葛また鹿藿の名あるによりて遂に混同してこゝにも蔨の名をのせしにて其骨字はすなはち胥の俗體にて本草和名には仁諝音義の諝字をもまた謂に作れり

葛藤根 藥性奇方　土瓜 泉州府志

○葛俗呼二土瓜一とみえたりこれはその根の形王瓜と相似たるによりて名づく

葛華 名醫別錄 萬葉集　葛穀 名醫別錄 唐本草

○名義既に蘇敬注にみえたり

黃斤 名醫別錄本草和名引二釋藥性一

○案に斤をよむ聲近の如く根をよむ聲また近の如きはともに倉頡の原聲なり說文云垠从レ土艮聲有二

○即葛根の二字をよめり
くずのね（本草和名） かづね（本草綱目啓蒙）
○筑前の方言なりといへり
くぞ（同上）
○南部の方言なりといへり
いのこがね（同上）
○備後の方言なりといへり按にいのこは野猪子にて其獸よくかづねを堀喰ふによりて名付しにてもあるべきにやこれは西土にて鹿の此草をくらふによりて鹿藿の名あるにその意おなじ
くずかづらのね（和名類聚鈔） くずかづらのみ（同上）
くずばな（萬葉集）
○按に葛花をよみし歌は山上憶良の秋の七種の歌によみしより外にはあらじとぞおもふなほたづぬべし
ひめくず（俗稱）
○此草すべて葛に似て極めて細小なり故に姫葛と名づく
紅粉皮（同上）
○この莢紅色なるによりて名づく

葛（毛詩 說文）
○按に葛从レ曷諧聲也といひしは時珍の說なれ共一說に此草莖葉莢並に褐色なる毛茸ありて衆草に異なる故に葛と名付しといひまた神農本經に葛根主ニ消渇一とみえたれば其功能を以て葛と名付しともいへりいまだいづれが是なる事をしらず
鹿藿（爾雅 名醫別錄）
○時珍曰鹿食ニ九草一此其一種故曰ニ鹿藿一案に藿本經及び諸家本草皆その言を略きて藿に作るといへ共今爾雅說文等に从ひて藿に作るこれ正文なればなり
絺綌草（說文 本草原始）
○按に此名は毛詩葛覃にいはゆる爲レ絺爲レ綌といひしにもとづきしなり
葛根（神農本經 日本書紀）
○按に葛字をよむ聲害（ガイ）のごときはこれその原聲にして唐韻にいふ葛古達切のごときは即轉聲也尙書（コン）湯誓云時日曷（コノヒイヅクンゾホロビン）喪といへるを孟子に引しには時日害（ヒイヅクンゾホロビン）喪に作りまた廣雅に害曷盍（カイカイカイ）何也といひしにてその義は明らけし

それ正しき訓ざまなるべしまた垂仁天皇の御時に葛野といひし地名をかどのともよみたりその葛野を以て古にくずのとはよまず又葛綱をくずあみ葛城をくずのきとよみし事なきによればくずの名の起りしはそれらをしか訓しよりはるかにをくれて出來し名にて天智天皇の御時の童謡にあか駒のいゆきはゞかる麻矩儒播羅(マクズハラ)とよめるを始とすれば此御時よりその以前にくずは國樔人の造り出せしによりて此童謡にもその名を移して草の名とせしにてもあるべきにやされば新撰字鏡に葛をたゞかづらとのみよみしは卽古き訓の殘れるにて和名鈔に葛穀をくずかづらのみ葛脰をくずかづらのねとよみしはくずとかづらとの二名を併せて一名とせしなり凡代かはり時うつりて物の名も異成事なるは和漢其例殊に多したゞこのくずのみにはあらず○因に云葛野をかどのとよむは菊理媛をくゞりひめとよめると一つ意にてくゝりといふもかどゝいふも皆字音なれは此かどのゝかはかづらのかとは異なり

まくず 同上

○まはほむる詞にて卽常のくずといふ

かづら 日本書紀 新撰字鏡

○東雅云かづらとは古語に詞の上の助にかといふ事ありつらとはつるといふ詞の轉せし也つるとは卽蔓也萬葉集抄につとはつゞくといふ詞也つゝといふもつゞく義也とみえたりさらばつるといふもつらといふもつゞらといふも並につゞくといふ義也といへり今案にかづらのかは覆屋葺(カヤブキ)などのかやのかにて古語に上より覆ふ事をかといへば此草も樹木をまとひ山谷をわたりてよく物をおほふによりて覆蔓(カツラ)といひしなり扨靑き事をかあを黑き事をかぐろなと舊よりいふといへ共此かづらのかは詞の上の助にかといふ事ありといはんより覆蔓(カツラ)のかたしかるべしまた日本釋名にらとるると通ずればかづらはなかづるの上畧なりといふてかづらをたゞ長蔓の義とせしはいかゞあらん

くずかづら 和名類聚鈔 八雲御抄　　まつなぐさ 莫傳抄

○「秋見れは花紫の松無草かゝる露さへ玉とこそなれ」といふ歌を引たり

かづらね 日本書紀

切の聲の如きは卽葑蕪の急聲なりさて蕪菁を江北の人はまた蔓菁ともいへり（唐本草云蕪菁北人名二蔓菁一）さて蔓字の讀冒の如きもまた倉頡の原聲にてこれも說文に蔓从レ艸曼聲又云曼从レ又冒聲とみえたるにてその義は明らけくまた讀播の如く蕃の如きはこれ風字に芃凡の兩聲あるに同じくまた讀萬葉集の萬の如きは卽凡の轉聲也扨蘿蔔をまた萊菔といへ共その正文は卽蘆菔なりその蘆字の讀骨の如きは（蘆骨同聲なるよしは委しく小學部にみえたり）これ倉頡の原聲にしてもし蕪蘿の漢魏以上に有しものならば必ずこれを蕪蘆といひて蕪蘿とはいはざるべしその蘆字の讀また羅の如きは郭璞注の楊氏方言に蘆菔羅蔔二音とみえたるを始とすれば蓋し晉時の方聲にしてまた讀魯國の魯の如きは玉篇に蘆力胡切とみえたればこれは梁の頃の方聲なり此方聲等の數聲を併せ考れば播骨は卽蕪蘿の訛轉なる事明らけし因てまた案に說文に蘆々菔也一曰薺根也といひし薺根は卽神農本經にいはゆる雞齊根の雞字の落しなるべしよの常の薺根はその根至て細小にして別にそれを薺根など名づくべきものにあらざれば也その雞齊根は卽葛根の一名にてその根の形によりてはそれをまた蕪蘿ともいひしは蓋し蘆菔をあらためて蘿蔔とかきし頃よりの名なるべし

『此間くず彩色畫四枚（くずひめくず野あづきべにかは）略之』

○釋名

くず（日本書紀萬葉集古今和歌集）

○按にくずの名義詳ならず源君美の說に葛讀でくずといふは細屑の義にて其根を粉となして啜ふによりて此名ありといひたれ共屑はくづの假字にて葛はくずのかなゝればこの說うけがたし岡村尙謙曰くずはいづれにも此根を粉とせしものゝ名にて其もとは草の名にては有べからず今も大和の吉野よりいづるものその名殊に高しよりて考るに古此粉をはじめて造り出せしは蓋し吉野の國樔人の其土に產するかづらの根をとりてつくりしによりて直にその地名をもて遂に此粉の名とせしにてあるべし扨神代に天吉葛をあまのよさづらまたよそづらとよみしはあまのよさかづらよそかづらのかもじを略きたるにて神武天皇の御時に葛綱を結ぶをかづらあみとよみ葛城をかつらぎとよみしはこれ

又采葛云彼采ㇾ葛兮一日不ㇾ見如二三月一兮
說文解字云葛絺綌草也从ㇾ草曷聲
神農本經云葛根味甘平主二消渴身大熱嘔吐一一名雞齊根生二汶山川谷一葛穀主二下利十歲已上一
名醫別錄云葛根無ㇾ毒一名鹿藿一名黃斤五月採ㇾ根曝乾葉主二金瘡一止ㇾ血花主二消酒一
集注本草云卽今之葛根人皆蒸食ㇾ之當ㇾ取二入ㇾ土深大者一破而日乾ㇾ之生者擣取ㇾ汁飮ㇾ之解二溫病發熱一其花幷小豆花乾末服二方寸匕一飮ㇾ酒不ㇾ知ㇾ醉南康廬陵間最勝多ㇾ肉而少ㇾ筋甘美但爲ㇾ藥用ㇾ之不ㇾ及二此間一爾五月五日日中時取二葛根一爲ㇾ屑療二金瘡一斷ㇾ血爲二要藥一亦瘧及瘡至良
唐本草云葛穀卽是實爾陶不ㇾ言ㇾ之葛雖ㇾ除ㇾ毒其根入ㇾ土五六寸已上者名二葛脰一音豆脰頸也服ㇾ之令二人吐一以ㇾ有二微毒一也根本之案に此之字よむべからず主二猘狗嚙一幷飮二其汁一良蔓燒爲ㇾ灰水服二方寸匕一主二喉痺一
本草圖經云葛根生二汶山川谷一今處々有ㇾ之江浙尤多春生ㇾ苗引二藤蔓一長一二丈紫色葉頗似二楸葉一而青七月著ㇾ花似二豌豆花一不ㇾ結ㇾ實根形如二手臂一紫黑色五月五日午時採ㇾ根曝乾以二入ㇾ土深一者爲ㇾ佳今人多作ㇾ粉食ㇾ之甚益ㇾ人以上證類本草引
本草綱目云葛有二野生一有二家種一其蔓延長取治可ㇾ作二絺綌一其根外紫內白長者七八尺其葉有二三尖一如二楓葉一而長面青背淡其花成ㇾ穗纍々相綴紅紫色其莢如二小黃豆莢一亦有ㇾ毛其子綠色扁々如二鹽梅子核一生嚼腥氣八九月采ㇾ之本經所謂葛穀是也唐蘇恭亦言葛穀是實而宋蘇頌謂葛花不ㇾ結ㇾ實誤矣其花晒乾亦可二煠食一

播胥　雞齊根

案に播胥また藩胥に作る蓋し蕪蘿の訛轉なり抑蕪蘿は漢魏以下の人の命せし名にて卽蕪菁と蘿蔔とのかしら字をとりて併せて以て一名とせしなりこれは葛根の形狀蕪菁の如くまた頗る蘿蔔の如くなるによりて也その蕪字の讀豐の如きは卽倉頡の原聲にてこれは說文に蕪从ㇾ草無聲また云無豐也案に豐は卽聲と義とを兼ていひしなり从二林爽一とみえたりまた今本の楊氏方言に蘴蕪菁也とあるを和名鈔に引し古本には蘴を葑に作れりこれによるに葑蕪蘴の三字皆同聲なりといへ共蘴は俗字蕪は假借葑はその正文なりまた讀玉篇にいふ蕪亡夫

リテタヽキ其汁ヲトリ粉トシ餻トシテ食ヒ飢ヲ助ク遠村ノ民ハ妻子家人ヲ盡ク携テ山ニ入廬舍ヲ作リ居ル苗生シ粉ナキ時山ヲ出ヅ其救レ人コト五穀ニツグリ葛蕨ノ山野ニ多ク生ズルハ天地ノ民ヲメグミ玉フ自然ノ理ナリ民ヲアヅカル人モ天地ノ心ヲ體シテ民ニ仁アルベシ日本ノ醫書ニ野生ノ者ハ有レ毒種二家園一者可レ用トイヘリ本草ニハ此説不レ見凡葛ハ多ハ野生ナリ本草有二野生一有二家種一トイヘド日本ニハ家園ニ無レ之野生ノ者ノ毒レ人コト未レ聞レ之野葛ト云毒草ハ別物ナリ○葛布ヲ昔ハ喪服トスフヂ衣ト云蔓草ノ内紫藤ノ下ニ詳ニ記ス葛カヅラヲ藤ト云本草綱目啓蒙云葛山野倶ニ多ク自生アリテ甚ダ繁延ス唐山ニハ家園ニモ栽ユコレヲ家葛ト云フ野生ノ者ヲ野葛ト云フ又毒草ニ野葛アリ別物ナリ混ベカラズ是ハ冶葛ト音相同ジツタウルシノ事ナリ鉤吻ノ釋名ノ註ニ詳ナリ木邦ニハ葛ヲ家園ニ栽ユル事ナシ皆山野ノ者ヲ採ル其葉互生ス圓尖ナル三葉一蔕ニシテ眉兒豆（フジマメノ）葉ニ似テ大ナリ梢葉ハ毎葉三尖ニシテ小豆葉ノ形ノ如シ蔓ト共ニ褐毛多シ肥タル者ハ葉大サ尺ニ過グ和州芳野山ノ產別テ肥大ナリ七月梢葉ノ間ニ花穗ヲ出ス長サ三五寸下垂ス花ハ豆ノ花ニ似テ紫赤色上代ハ名花ナク此花ヲモ賞セシニヤ萬葉集秋七種ノ歌ニアリ花後莢ヲ結ブ黃豆（シロマメ）莢ニ似テ狹薄褐毛多シ江州水口及高宮邊ニテ蔓ヲ採リ水ニ漬シ皮ヲ去リ織テ器トナスフヂコウリト云フ根ヲスリシボリ水飛シテ葛粉トス城州ニテハ和州ノ芳野葛ヲ上品トス甚潔白ナリ然レドモ近年僞雜多シ若州ノ熊川及他州ノ產ハ色潔白ナラザレドモ僞雜ナシ葛粉ヲ和方書ニ水粉ト云フ唐山ニテ水粉ト云ハ鉛粉ノ一名ニシテ京オシロヒナリ

又云葛根藥舖ニ生乾トサラシトニ品アリサラシハ白色ニシテ粉ヲ帶ブ生乾ハ黃褐色藥用ニ入ベシ唐山ニテハ生葛ヲモ用ユ故ニ乾葛ト云フテ分ツ

毛詩國風周南葛覃云葛之覃兮施二于中國一維葉萋々毛傳云葛所三以爲二絺綌一萋々茂盛貌

又同上云葛之覃兮施二于中谷一維葉莫々是刈是濩爲レ絺爲レ綌服レ之無レ斁毛傳云莫々成就之貌

又邶風旄丘云旄丘之葛兮何誕之節兮

又王風葛藟云緜々葛藟在二河之滸一

又同上云緜々葛藟在二河之涘一

又同上云緜々葛藟在二河之漘一

和名類聚鈔云葛蘇敬本草注云葛穀一名鹿豆（葛音割和名久須加豆良）乃美葛實名也葛䕷（音豆和名久須加豆良乃彌）葛根入レ地五六寸名也

枕草紙云くずの風にふきかへされてうらのいとしろくみゆるおかし

八雲御抄云葛　滿　夕万　くず花　くずかづら　藻鹽草云葛　まくず（まくずが原共）　夕ー　ー花　ー葉（みれのくずはとも）　ーかづら　はふー（又野邊はふくずとも）　玉まくー（六月也）　ーのうら風（うらみたる也そうじてくずをばうらみにそゆる也）　田ー（萬田葛葉日ごとに色付といへり）　風の吹うらかへすー（かへるによする也）　かきほのー　吹風に露もすまはぬーの葉

本朝食鑑云葛有二野生一有二家種一其蔓延長取收可レ作二布袴一

和漢三才圖會云按葛蔓長者二三丈其葉靱（シナヘテ）薄微似二于楮葉一而面青背白至レ風則能飜恰如レ反レ掌婆娑而作レ聲故稱二歌人葛葉裏見一譬二人恨一其蔓青黑色有二微毛一强靭（シナヘテ）不レ可二截斷一本草綱目謂二紫色一者枯舊色也以堪レ縛二器物一

又云葛根出二於和州金剛山一者良丹波次レ之葛粉吉野瀑葛爲二最上一西國亦多有レ之春月取レ根搗爛漬レ水一宿以二白堊一爲レ上其次灰白色者（名布久）野人充レ食渣如二絲瓜一以代レ薪凡此物葉及蔓至レ根其用居二多大一爲民利用

大和本草云蔓ハ蔓草春月發生ス其カヅラヲ用テ繩トス皮ヲ布トス葛布ヲカタビラトス和漢同ジ又喪服トス古コレヲ藤衣ト云其カヅラヲ又藤トモ云河州ノフヂキ寺古來葛井寺トカク其葉ハホシテ多ク收ヲキ馬ニ飼ベシ生ナルヲモ飼フ根ヲ冬月或春末レ生レ苗時ホリテ用ユ長キハ數尺乾シ用ユ葛根是ナリ生根ヲツキクダキ汁ヲトリ水飛シ曝シテ粉トス葛粉ナリ其功用多シ藥トシ餈（モチ）糕トス味最好シ又粉ヲ水ニ和シ沸湯ヲ多ク加フレバ糊ノ如シ或水ヲ不レ用熱湯ヲソヽギテ飲ム皆瀉ヲ止メ泄瀉ヲ治シ酒毒ヲケス又夏月冷水ニ入カキタテ、飲ム能止レ渴不レ傷レ胃本草ニ葛粉ノ能ヲ稱スル事スクナシ然レドモ功能多ク且飢渴ヲ救ヒ甚民用ニ利アリ本草葛根性平然レドモ消渴大熱ヲ解シ酒毒熱毒ヲ去ル葛花ハ酒ヲケス藥ニ入用ユ○葛粉ハヨク渴ヲ止ムレドモ其性和平熟シ食スレバ不レ損二脾胃一其蔓葉花皮根粉用テ益レ人又粉ヲ用糊トス皆民用ヲタスク葛粉ハ吉野ヨリ出ル者最ヨシ冬月曝乾ス凡凶年ニハ貧民春初ヨリ山中ニ入日々葛蕨ノ根ヲホ

く同名異物なり

日本書紀（顯宗天皇紀）云白髮天皇二年冬十一月播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於赤石郡親辨新嘗供物適會縮見屯倉首縱賞新室以夜繼晝爾乃弘計天皇謂兄億計王曰避亂於斯年踰數紀顯名著貴方屬今宵云々天皇起自整衣帶爲室壽曰築立稚室葛根築立柱者此家長御心之鎭也取擧棟梁者此家長御心之林也取置椽橑者此家長御心之齊也取置蘆萑者此家長御心之平也取結繩葛者此家長御壽之堅也云々

又（天智天皇紀）云天智天皇十年十二月癸亥朔乙丑天皇崩于近江宮癸酉殯于新宮于時童謡曰阿箇悟馬能以喩企波々箇屢厤矩儒播羅奈爾能都底擧騰多挹尼之曳雞武

延喜式（典藥寮）云諸國進年料雜藥山城國三十二種云々葛根三十二斤

又（同上）云伊勢國五十種云々葛根十斤

又（同上）云近江國七十三種云々葛根二十二斤

又云紀伊國三十五種云々葛根十一斤

又云葛花旋覆花各一斤

又云安房國十八種云々葛花旋覆花各一斤

又云上總國二十種云々葛花旋覆花各二斤

又云若狹國二十四種云々葛花三兩

本草和名云葛根一名葛穀（蘇敬注云是卽實耳）一名鷄齊根一名鹿藿一名黃斤一名葛脰

蘇敬注云根入土五六寸者也脰頸也仁諝靑豆一名黃葛根一名麃羅（出養性要集）一名䕡一名播胥（已上出雜要訣）

○按に胥字もと赤に作る今釋藥性に依て是を改む

和名久須乃禰

又云鹿藿一名鹿豆實名菇一名䕡一名藩胥（已上二名出釋藥性）

○按に黃斤また播胥と名づく蓋し同名異物なりなほ葛根また鹿藿の名あるがごとし

和名久須加都良乃波衣

○案に波衣醫心方に波江に作る蓋し嫩苗也說文云藟尗之少也此卽嫩苗の義なるべし

又引釋藥性云黃葛一名黃芭一名黃芹一名播胥

○按に此四名ともに鹿藿の條下にあり今分ちて別條となす者は黃斤と鹿藿とは其種異なるによりて也

新撰字鏡云䕡九卷反鹿豆也天豆也阿地萬女

古今要覽稿卷第四百十三

●草木部

くず　くずかづら　葛

くず一名まくずといへども本名はかづらといふ顯宗天皇紀に初て見えたり一名くずかつら一名まつなぐさ俗名くぞは漢名を葛一名鹿藿一名絺綌草といひその根をかづらね一名かづね一名葛かづらのね一名くずのね一名いのこがね漢名を葛根一名雞齊根一名葛脰一名廡羅一名播骨一名葛藤根一名土瓜その華をくずはな漢名を葛華その實をくずかづらのみ漢名を葛穀といふ古よりその葛穀を禁中へ奉りし事はいまだいづれの書にもみえずといへ共延喜の比にはその葛華を安房上總紀伊若狹より奉りその葛根を山城近江伊勢また紀伊より貢せしよし典藥寮にみえたり此種はいづれの國の山野にもよく生出るものにて春時苗を生じ蔓をなすその蔓長さ一丈よりして三四丈に至り樹木をまとひ山谷をわたりて繁延しその葉は頗る眉兒豆（フチマメ）白扁豆（ヒラマメ）等に似てやゝ大なる三葉を一朶としその色は面青く裏白くして野苧麻葉の如し莖葉共に褐色なる毛茸あり秋に至ればその梢葉の間に穗を抽出て紫赤華を開く恰も紫藤華の如しといへ共その穗紫藤華よりも短くして且下垂せざるを異なりとす華後莢を結ぶかたちしろまめの莢に似て狹くして薄く褐毛殊に多し中に數子あり綠豆に似て扁たし根は形蕪菁（カウ）のごとくまた土瓜の如くその最長大なるものはさらに大蘇菔（ミヤシゲダイコン）に似たり一種姫葛ありその莖葉すべて尋常のものに似て細小にして黃華を開き小莢を結び根もまた相似て細小にしてその色華よりもやゝ薄し蓋し此種は名醫別錄に載る所の黃斤釋藥性にのする所の黃葛一名黃芑養性要集に載る所の黃葛根なるべし先輩これを以て本經木部に載る所の黃環となすものは誤り也又一種その莖葉華色全く姫葛と一樣にしてその莢紅色なるを俗に紅粉皮（ベニカハ）といひまた一種紅粉皮（ベニカハ）とその形狀一樣にしてその莢長くして紅色ならざるものあり此二種は共にその根極めて細小にして黃葛根とは相似て別種なりおもふに此種は爾雅に載る所の蔨鹿藿其實莥といへるものにて本條の鹿藿とは全

ト云節人參ハ其大ナル根ナリ又近年世上ニセリ人參トテ芹ニ似タル草ヲウフ味モ芹ニ似タリムカゴノ如クナル其根味甘シ未レ詳ニ其性一本邦ノ醫人參ノ價貴キ故代用ルモノ多シ

岡村尙謙曰節人參は卽三枝五葉草にして芹とは其葉全く異なるものなり又せり人參は一名ムカゴ人參ともいひて其葉木香花葉に似て三葉或は五葉を生じその莖を抽て花を開く事は頗る芹に似たるによりての名なるに今芹に似たる草をうゆるといふはいとわろし又ムカゴの如くなるといふ如の下疑らくは實字を脫す

廣參品云楓葉人參ハ本草辨疑誤爲ニ參類一今洛比叡山及鞍馬山中陰温處多產レ之葉如ニ楓葉一又似レ芹家園ニ培養スレバ葉稍大二月開レ花似ニ槿花一白色花圃ニ名ニ朝鮮須美禮一モノニ甚相似タリ葉綠色莖微紅根淡黃ニシテ胡蘿蔔ノ嫩根ニ似タリ漢名未詳

岡村尙謙曰本草辨疑に人見道伯の藥園に紀州熊野より移し植し人參の三椏五葉の葉形を小楓に似たりといへるはやゝ其比類を失へる書法なれど其草は必ず別種物にあらず然るを廣參品に本草辨疑を以て却て誤りとし小楓の二字になづみて別に一種物の叡山スミレを以てそれに擬せしは杜撰なるべしやつがれ此頃上言人參書を見しに遠藤出羽と申者（此卽本草辨疑の作者なり）私へ物語仕候を誰今存合候へば當子迄五十年ばかり前後と覺罷在候（當子といへるは卽寬保四年甲子也）此出羽と申候は先年人見道伯と申方の藥園に紀州熊野より出候直根人參の由にて數十本被ニ植置一候其形狀三椏九葉にして其尺何れも一尺許と相見申候根はいかやうと尋候得は道伯被申候は不審までにも不レ及朝鮮人參に氣味香氣共に少しも違不レ申候由左樣に候はゞ下葉一葉風味仕度由達而望申に付て右の下葉吳申候間風味仕候殊の外苦く臊く滑に御座候得共先樣への挨拶には眞人參の樣に御座候と申候旨はなし申候と見えたればこれにても楓葉人參の杜撰の甚しきをしるべし且其尺何れも一尺許とある文によれば本草辨疑に莖土より一寸程延てといへる寸字は必ず尺字の誤りなるべし

より國産の人參を俗にとちのは人參一名とちの樹人參或はとち人參などいへるは其義全く和漢暗合にして其樹の下のみ此物の多く生出るばかりにて其名を命せしにもあるべからず又按に建陽縣志に百丈紅一名土人參とみえたりいはゆる百丈は蓋し此百尺と其意全くおなじ事なるべし

○正誤

和漢三才圖會云尾人參(ヒゲニシジン)朝鮮西土共有レ之蔓生而與ニ人參ニ一類異種者也高一二寸葉似ニ人參ニ而小蔓出ニ於莖ニ布レ地至處生レ根如ニ草石蠶樣ニ取ニ其蔓根ニ爲レ藥纖者似ニ蓽薢髭ニ故名ニ髭人參ニ每唐船皆將ニ來之ニ稱ニ小人參ニ性堅實其功勝ニ於大人參之浮虛者ニ

岡村尙謙曰廣參品に鬚人參と稱するもの六七十年已前始めて將來す古昔不レ用ものか諸家本草に不レ載唯清張璐玉が本草逢原參蘆條に參鬚の名を出す其餘未レ見レ之此物和產を以て考レ之直根參は鬚あるものにあらず卽三椏五葉草の横梁根に付たる鬚なり諸本草不レ載といへ共固より參類なり可レ用韓より來るものは質黄白味好し漢より來るものは赭黄色味劣とみえたり此說によれば西土及び朝鮮より來れる鬚人參は卽竹節人參の鬚なり然るを和漢三才圖會に一種草の蔓をなして生じ其苗高さ一二寸のものとなすは全く傳聞の誤りなりさはいへ西土及び朝鮮より來れる鬚人參は卽今の御種の鬚と稱する類ひにて其實は尋常の人參の鬚にして竹節人參の鬚にはあらざるもまたしるべからず

又云近年得ニ唐人參種ニ多植レ圃攝州平野庄多出レ之二月下レ種初生一莖三葉及レ長數椏皆三葉其葉厚潤有ニ深刻ニ而無レ筋略似ニ銀杏葉ニ每八月中心抽ニ一莖ニ高三四尺開ニ細白花ニ如レ蓋似ニ蒴藋及胡蘿蔔花ニ秋後結レ子細小亦似ニ胡蘿蔔ニ霜後枯宿根亦能生也九月採レ根如ニ胡蘿蔔ニ而淡白色以ニ甘草汁ニ蒸乾則能類ニ人參ニ但頭無横文蘆頭不ニ括縮ニ耳功能亦不レ及故用者鮮矣

岡村尙謙曰此種は俗に平野人參といふものにして木草に所謂防葵なれば眞人參とは絕て別種なり又此種は文祿年中朝鮮征伐の時攜來りしを平野にて培養せしものなるにそれを唐人參種といへるはまた誤れり

大和本草云節(フシ)人參ト云モノアリ葉ハ芹ニ似タリ根ニ節アリヒゲ多シ山中陰濕ノ地ニ生ズ其鬚ヲヒゲ人參

髭人參同上

○按に根鬚を束ねて其狀髭の如くなるによりて名づく

珠人參同上

○按に此根圓なる事頗る珠の如きものをいふ

蝌斗人參同上

○按に此根短身長尾にして狀蝌斗の如しよりて名づく

蕪人參同上

○按に此根圓なる事頗る細小なる蕪菁の如し故に名づく

直根人參同上

○按に其根縱直にして桔梗の如し故に直根と名づく

單股人參同上

○按に此根一本にして岐ある事なし故に單股を以て其名とす

人參神農本經王符潛夫論

○按に昆陽漫錄に潛夫論を引て治ㇾ疾當ㇾ得二人參一反得二支羅服一と見えたれば人參の字は神農本經以下後漢以前も既に其字を用來れるなり其名義の如きは人參傳に物理小識を引て爾雅に人參二天地一故以名ㇾ之とみえたり然るを時珍の說に人蓡年深浸漸長成者根如二人形一有ㇾ神故謂二之人蓡神草一蓡字從ㇾ浸亦浸漸之義蓡卽浸字後世因二字文繁一遂以二參星之字一代ㇾ之從二簡便一爾然承ㇾ誤日久亦不ㇾ能ㇾ變矣惟張仲景傷寒論尙作二蓡字一といへるは其說違へりといふべし

百尺杵證類本草引圖經本草

○按に百尺杵の名諸家本草明解なし岡村尙謙曰杵は全く杼とその字通ぜしものにて卽今のとちの樹和名鈔に杼音杵又當旅反與ㇾ芧同和名とちとみえたれば杼のとちたる事其義おのづから明らけし凡西土の俗に百尺杵といへるは卽杼樹のいと高く直聳せし狀をさしていひしなり人參はしか高くおひ出るものにはあらずといへども中心一莖を抽て細花を開き小實を結び毎三椏おの〳〵五葉を連ねて年久しきものは或は八九葉に至り其狀全く杼葉に似たるによりて其莖極て細小なるものといへどもそれを反語して俗に百尺杵とはいひし也されば舊

蔓熊膽固非ニ同効品類ニ乃其以レ味爲レ名と見えたり人參傳の說またこれに同じ然るを東雅に古にカミといひし語を轉じてクマといへり石見淡路等の鄕名神稻とみえしは古の遺言なり人參一名神草ともいへば此名あるかといへるは全くクマの字を解してノイの字はいまだ解し得ざるものなり

爾古太 本草和名 本草類編

○按に此卽爾古介の訛轉なるか又は太字は介字の誤なるか又字典に苦唐韻康土切集韻々會孔五切竝音笘とあれば爾古太は卽似苦膽にて古多爾と全く同じ意なるべし再按に延喜式に丹參を爾古太久佐と訓じ大同類聚方に邇古多味苦久香之無レ毒九月採レ根日爾乾而用といへるにこたは卽丹參の和名にして此物の一名にあらず又新撰字鏡に茋字を爾古多と訓じ東人云加乃爾介といへる茋は爾雅に蒞茋といへる茋にて卽薺苨なりこれは紹興本草に圖する滁州兗州等の人參は皆薺苨をさしていひしたぐひにて古はすべて其根の人參に相似たるものに其名を假借してまたにこたともかのにげともいひしものなるべし

古多邇 大同類聚方

○按に龍膽の一名を苦膽(コタニ)といへり此物も其味苦き事苦膽の如なるによりてまたこたにと名づく或云にこたこたには原一名にていづれかあやまりなるべしといへりなを考べし

竹節人參 大和本草廣參品人參譜

○按に此根橫生じて狀竹根の如し故に名づく

とちのは人參 俗稱

うこき人參 同上

○按に此葉小なるものはうこきの如く大なるものはとちのはの如し故に此二名あり

薩摩人參 同上

○按に此種多く薩摩より來るよりて名づく

吉野人參 同上

○按に此種また大和の吉野山多くこれを產す故に名づく

小人參 同上

○按に此卽傍根細小にして鬚の如き物をいふ

折人參 同上

○按に根鬚細小にし折たるがごとし故に名づく

古今要覽稿卷第四百十二

●草木部 かのにげぐさ下

○釋名

かのにげぐさ 新撰字鏡本草和名 和名鈔本草類編

○岡村尙謙曰かのは卽鹿のにして鹿茸を鹿乃和加豆乃紫苑を加乃之太といふに同じ爾介は蓋し爾古介の省呼にて和名鈔にいはゆる毳字の意なり凡皇朝の古に人參と稱するものは卽今の竹節人參にして今鬚人參と稱するものは卽竹節人參の細根全く鬚に似たるによりての名なれば古にいはゆる鹿乃(カノニ)毳草(コゲクサ)も又其形の細小なる事頗る鹿の細弱毛乃如くなるに比してしか名付しなり凡古に尒古介といひ今はこれを比介といへるは古今人情すべて一なるが故にしてなほ古にあづさといへるは赤小豆莢(アヅキサヤ)の省呼にして後世はそれを木豇豆といへるに其義同じ然るを舊説に梁書玩孝緒傳を引て 孝母有レ疾藥須レ得ニ生人蔆一舊傳鐘山所レ出孝緒躬歷ニ幽險一忽見ニ一鹿前行一孝緒隨レ後至ニ一所一遂滅就視果獲ニ此草一母得レ服レ之遂愈とあれば和名鈔に人參をかのにげくさと訓せしは卽鹿逃草(カノニゲグサ)の義なりといへり今按に此説かのにげぐさの名義にはいとよく叶ぬれど凡皇朝古人の種々の藥物にそれぞれの名をおふせしは或は形狀により或は功能により或は彼是相似たるによりての事にしてかゝる故事を以て其名をおふせし事は此物の外には絕てあるまじければ其說穿鑿に過て却て古人の意をとり失ふものに似たり且諸家本草嘗て其事を載ざるにても阮孝緒が事につきてかのにげぐさの名は出來しものにはあらざるべしかくいふ時は古人の博識なるを誣るに似たれども其實は鹿乃毳草の義とするかた却てその意には叶へるものなるべしまた壒囊抄には爾介を以て鹿乃爾介加牟の義として鹿齸草の義とし人參譜には深山生ニ人參一處殊無ニ蚊蟲一を以て蚊逃草の義とす皆いまだ穩ならず

くまのい 同上

○按に藥選云人蔆原來味苦故名ニ久末乃伊一久末乃伊卽熊膽方語而以ニ其與一レ此同ニ俗呼一見レ之則知人

小花ヲ簇生ス五瓣ニシテ淡緑色中ニ白蕊アリ亦五加花ニ似タリ又紫藥ナル者アリコレヲ紫花人參ト云城州岩屋ニアリ花後實ヲ結ブ形圓ニシテ緑色秋冬ニ至リテ紅熟ス又一種頭ニ一黑ヲ點ジ相思子ノ如キ者アリ又莖上數枝ヲ分ツモノアリ實ヲ結ブ事至テ繁麗觀ルニ堪タリ其實地ニ落チ春ニ至リ苗ヲ生ズ一莖三葉次年ハ一莖五葉三年ニハ二椏五葉四年ニ至テ三椏五葉トナル然レドモ肥地ニ種ルモノハ初年一莖三葉次年二椏三五葉三年ニ至リテ三椏五葉トナル三椏ノ後ハ皆花實ヲ生ズ其葉大ナルモノハ尺餘ニ及ブ鋸齒ニ粗密アリ色ニ淺深アリ體ニ厚薄澤澀アリ皆生ズル所ノ地ニ因テ異ナリ讃州山中ニ生ズル者ハ葉細長ニシテ鋸齒最大ナリコレヲ細葉ノ人參ト云俱ニ根ニ横圓直ノ分アリ横根ノモノ圓根ノ者ハ並ニ白色ニシテ臊氣アリ味至テ苦シ用テ蟲ヲ殺シ積聚ヲ治直根ノ者ハ形狀韓參ニ似テ鬚少ク味微甘又人形ノ者モアリ京師ノ山中ニ生ズル者ハ横圓ノ二品ノミ紀州熊野和州芳野ニ生ズル者ハ三品雜リ生ズ薩州加州白山信州松本木曾豆州等ニモ直根ヲ出ス又御種人參ハ形狀和人參ト同シテ皆直根ナリ其異ナル所ハ實ノ形正圓ナラズシテ早ク熟スルニ在リコレヲ劈ケバ一實ノ内ニ二三子並ビアリ故ニ其形扁シ六月實紅熟スル時下種スレバ生ジヤスシ外皮乾燥スレバ生ジ難シ

又云本草從新ニ珠兒參苦寒微甘其性大約與二西洋人參一相同不レ過二清熱之功一出二閩中一ト云文房肆考ヲ珠參苦而微甘形如二芡實一ト云モノ卽今ノ科斗人參ナリ

太平御覽引吳氏本草云人參神農甘小寒相君雷公苦岐伯黃帝甘無レ毒扁鵲有レ毒或生邯鄲三月生葉小兌核黑莖有レ毛三月九月採レ根々有二手足面目一如レ人者神

證類本草引二本草圖經一云人參今河東諸州及泰山皆有レ之又有二河北榷場及閩中來者一名二新羅人參一然俱不レ及二上黨者佳一其根形狀如二防風一而潤實春生レ苗多二於深山中背陰近椵漆下濕潤處一初生小者三四寸許一椏五葉四五年後生二兩椏五葉一未レ有二花莖一至二十年後一生二三椏一年深者生二四椏一各五葉中心生二一莖一俗名二百尺杵一三月四月有レ花細小如レ粟蘂如レ絲紫白色秋後結レ子或七八枚如二大豆一生青熟紅自落根如二人形一者神二月四月八月上旬採レ根竹刀刮二去土一暴乾無レ令レ見レ風

『此間彩畫人參諸種十二葉略之』

砂交りなり作法の妙術最得たる者なり其外往々作る者夥し土地に由て少しづゝ參根の肌或は長短肥瘦の分あり不可根(フカネ)と稱する者あり又誤て不形(フカタチ)とも云へり其根枝多くして常根に違者を指て云なり又居根(アハリネ)と稱する者あり又溜根(タマリネ)とも云へり其根一寸位下より八九根に分り殊に根細多し掘出し土上に置時は居る者なり故に俗呼て居根と稱す又人形(ヒトガタ)の人參あり其狀に四等あり其根手脚有て全く人形に類するもの上なり其次は肩一段下て出來るなり又其次は腹の所より兩手を出すなり或は兩手ありて兩足なく或は兩足ありて兩手なきものあり或は左の手ありて右の足なきもの多く有之兎角蘆頭の下より整しく兩手を出すもの良也其狀全きもの極て稀なり又龜胸樣人形(キキヤウデノヒトガタ)と稱するものあり左右の手外へ出て龜胸(キキヤウ)の形に似たり甚下品なり

又云

○余幸ありて元文二年丁巳の夏辱く台命ありて朝鮮人參の實二十粒を賜卽百花街中に植て繁茂する事年あり其根一二根全く存する者あり二十有八年に及べり其根大なる者長一尺餘圍み一虎口に過ぐ又莖の高三四尺にして其實一株にして百有餘粒を結ぶ其曾孫種生ずる事夥し又玄孫種に至る者あり依之其舊根を掘出し當時の新根と氣味をためし試るに少しも異なる事なし

物類品隲云本邦ノ俗人參ト稱スルモノ甚多シ皆眞物ニアラズ但シ枝五葉草ト云モノハ人參ナリ大和本草ニ人參生根昔朝鮮ヨリ來リ江戸ニアリ今ハ無レ之ト然レバ昔モ朝鮮ヨリ種ヲ傳トイヘドモ種藝ノ法ヲ不知シテ種ヲ絕ト見ヘタリ享保中台命アリテ朝鮮ニ所徵ノ種官園及日光尾張等諸處盛ニ植ユ葉ノ形狀和ノ三枝五葉草ト大抵相似タリ季春細白花ヲ開キ實ヲ結ブ初青後鮮紅色實ノ形扁ニシテ內ニ兩核アリ根ハ直根ニシテ味甘シ朝鮮ヨリ製來モノニ比スレバ氣味薄トイヘドモ和參ノ味苦澁ナルモノト同日ノ談ニアラズ

本草啓蒙云和人參ハ今諸國ニ產ス皆深山幽谷雜木多キ陰地ニ生ズ一莖直上シ梢ニ三枝ヲ分チ枝ゴトニ五葉ヲ生ジテ五加葉ノ如ク皆鋸齒アリ然ドモ三椏五葉ニ限ラズ年久キモノハ六七椏八九葉ニ至ルモノアリ又層椏ナル者アリ並ニ椏中別ニ一莖ヲ出シ其梢ニ細

形狀ニ一般但根橫生如ニ黃精及老姜輩ー根下多レ鬚爲レ異橫根味極苦鬚亦苦又有ニ甘者ー此卽所謂竹節參及參鬚是也但味有ニ甘苦之二種ー甘者入レ藥今諸州所レ產參鬚氣味大同小異但馬參鬚（藥肆所賣下同）苦味多甘味少爲ニ下品ー丹波參鬚同レ前下品信濃參鬚氣味稍甘爲ニ上品ー薩州參鬚氣味尤勝但上好者不レ出ニ他州ー日光參鬚氣味尤好右昔日所レ試者其他諸州所レ產俟ニ他日ー講究

又云勢州松坂隱士松本駝堂所レ獻者三椏五葉直根如ニ防風ー味甘但比ニ韓產ー氣味稍薄宜ミ再加ニ培養ニ云獲ニ此於紀州奥熊野和氣村山中ー後復奉ニ公命ー採ニ數根ー而獻于レ時享保辛巳七月此眞種也但難レ得耳予友岩永玄浩云往年藥肆信濃獲ニ此種於駿州ー以獻

又云元文中朝鮮國獻ニ韓參種子ー時命ニ四方ー而頒ニ栽之ー尾州栽者形質黃潤氣味甘馥最堪レ用其他栽者不レ及レ之予親目ニ擊其形ー三椏而五葉赤實而直根與ニ本邦產者ー相同

又云元文三年戊辰朝鮮人參種子自ニ江戶ー公命アリテ京都所レ望者ニ被ニ下置ー卽培養ノ法ヲ被レ添相渡サルル旨觸アリ

人參耕作紀云傳聞古者高麗國の人參を倭國に貢する事一兩度にも及といへり然れども其養方不鍛煉の故にや終に育せず享保中に至り又對州より百濟人參及遼東人參の種十株を貢するなり誠に時至れるかな命有て野州日光山及今市の邊に殖させ給ひぬ是に於て歲々繁茂增長して花實爛熳たり其根員數千萬根に及べり故に萬民危篤の症を免れ死命を全する事此時より滿足ぬ是誠に衆藥の嚆矢國の大功巍々蕩々として是より大なるはなし

又云人參を培養し作るに意を用ゆべき事あり遼東人參の種を作りて尤宜し其根殊に頭小にして橫紋多く是を製して上好となる但一通りに朝鮮種人參と稱するあり是は百濟人參の種にして其根殊に頭丸く橫紋少く色白し是を製して次となるもの也

又云下野日光山御神領の農民市平作の人參甚上品なり盛に繁茂せり其形正直にして枝なし四五年なるもの其根長き事一尺四五寸におよべり殊に橫紋多して細鬚少し人參の上品是に過るはなし其土地を察するに山土の白眞砂子なり今市宿の邊にて作る所の人參甚上品なり陸作り（クガツクリ）と稱する者あり其狀瘦て皮厚く橫紋多くして甚にし其土地を察するに山土の本黑ほく

又云阿波仁井田村直根上人參有

又云土佐若草山木屋の邊直根上人參其外上品の草藥類數種あり

又云飛彈は田畑殊に少なく深山なり直根上人參あり

又云出羽の牛の首と云所石地藏あり此邊直根上人參あり

一本堂藥選云近年薩摩州多產鬚人蔘時月堀取廣爲世用呼爲薩摩小人蔘味甘而頗苦氣近眞人蔘近道所々亦有之野人有識之者堀采而賣之氣味功用雖稍薄於直根蔘優於韓來煮過蔘鬚遠矣近日京北之木船芹生和州之金峯葛城紀州之那智等諸山產眞人蔘呼爲直根蔘其莖以上椏葉花實色香皆與竹節蔘一樣唯根爲異莖色或青或紫長短不等莖頭爲三椏椏頭各五葉肥者至四椏五椏六椏瘦者二椏或莖頭唯五葉無椏葉甚似烏蘞苺葉又微似五加葉大小不等椏心抽長莖莖頭開碎白花花房攢簇頗似五加花又有微紅色者結子初青熟深紅大似相思子大小不等而竹節蔘根如竹鞭横生肥長者至一二尺餘左右鬚根無數横根味甚苦而鬚根甘横根雖至肥大而鬚終不成眞蔘形眞根蔘莖本竹節之處細與莖略同無左右鬚根大根接竹節末形如沙參大小肥瘦盡眞蔘形大根頭之竹節卽是蘆頭大根味甘而頗苦有餘味氣新如韓蔘

草木辨疑云諸州所產人參有直横及蕪菁根等三種

用藥須知云髭人參ハ今四邊深山中背陰ノ地ニ生ズ近世一種三椏五葉ノ中ニ直根ノモノアリ味甘香形漢參ニ似タリ和參ノ中ニ此一種稍好シ

人參譜云竹節參今武州多摩郡山中最多二月生苗三種五葉至四五月高一二尺莖葉皆與信州人參無異矣其根如竹根生肥土者其根如黃精節々有臼形一年生一臼二年生二臼至十年後有十臼今藥店名信州人參者卽是也至四五月莖端有花其形似胡荽花白色至六七月結實其形似五味子生青熟紅其子自落九月十月採根日乾

又云信州人參信州及甲州駿州等山中最多其花葉並與竹節參無異只根樣似桔梗黃白色氣味或近眞

廣參品云和人參三椏五葉中心抽莖著花碎白張傘又有紫花者好生山陰樹下與圖經本草所說人參

は五十五錢ありしを其守に乞てこれを松平越中守の大塚の園中に植しかば其明年に至り苗を發して莖高さ四尺許に至り花を開き實を結びしといへりかゝれば耕作記に圖する所の大根のものもまたあやしむにたらず

出雲風土記云楯縫郡凡諸山所ㇾ在草木云々杜仲人參

延喜式典藥令諸國進年雜藥攝津國四十四種云々人參三斤

又云伊勢國五十種云々人參二斤八兩

又云甲斐國十二種云々人參四斤

又云陸奥國六種云々人參四十五斤

又云若狹國二十四種云々人參三斤

又云越前國十八種云々人參十四斤

又云丹波國四十三種云々人參二斤

又云美濃國四十一種云々人參三斤

又云伊豫國三十二種云々人參九斤

又云太宰府十二種云々人參二十斤

續日本紀云聖武天皇天平十一年

大同類聚方云古多遍味苦久微之香之四五月開ニ小白花ニ乎八九月爾採ㇾ根晒乾天用

本草辨疑云一草アリ莖土ヨリ一寸程延テ三椏生ジ長四五寸椏ノサキニ五葉アリ小楓ニ似タリ中ニ一莖直ニ上テ長五六寸白花アリ紫花アリ結實生ハ青ク熟ハ紅ナリ此草人見道伯ノ藥園ニアリ葉ヲ嚙ンデミレバ朝鮮人參上品ノ者ト味毫厘モ異ナラズ眞ノ草ナルベシ未ㇾ見ニ根形ヲ此種紀州熊野ヨリ得ルト一種薩摩人參アリ古來人參ノ代ニ用之

又云薩摩人參ト云ハ元薩州ヨリ出タル故也今ハ諸方ヨリ出ㇾ之莖葉花實ノ形本人參ト一同ニシテ三椏五葉也根ノ形異ニシテ味甚苦シ橡ノ木ノアル下ニハ必生ト云

和漢三才圖會云人參往昔本朝有ㇾ之而中古不ㇾ用之出ニ於薩摩ニ者名ニ小人參ニ又和列吉野山中有ニ自然生者ニ又有下得ニ眞朝鮮種ヲ植者上並其葉根與ニ朝鮮ニ不ㇾ異然甚希而未ㇾ足ニ賣買ニ

本朝奇跡談云大和芳野山所々直根人參あり

又云下野日光山華嚴の瀧の邊直根上人參其外藥草品品あり

又云紀伊熊野山の内所々に直根上人參あり

北國産の御種人參を製し試たるに其氣味眞にせまれり宗哲曰北極出地三十五六度以北の産ならでは上品ならず三十五六度以南の産は輕虛にして藥用にたへず輕虛の物は水に入てうかぶなり水に入て沈むにあらざれば眞ならずとなり享保の御惠の今の御代に大成せしはいとかしこき事ならずやあふぎても猶あまり有御事にこそさて其傍根細小にしてまた御種の鬚と稱するものは本根よりも臭氣少なくして味甘し予は却て其功本根よりも勝れりとぞおもはる凡西土の古は人參の上黨に産せしを以て第一とせしものなれどもその土人年ごとに力を盡して堀採し故なるにや其種後には絕てまれなるを以てすべて遼東參を最上とす今またこれを培養するに遼東の種は頭小にして橫紋多く鬚少くして上品なり百濟の種は頭圓く橫紋少く其色白くして鬚多く下品なり（人參耕作記）さて寛永の比より寶曆の比までは朝鮮の使來聘するごとに必ず遼東百濟の人參五十觔を貢せしものなるにそれより以後は彼にても其種至て少なきとみえて其數を減じて僅に二斤を貢せしなり又宗對馬守江都參府の年ごとに人參一斤を奉るは舊よりの例なるに近頃に至りては其種いよ〳〵朝鮮にも少なきにや參府の節に至といへ共僅に一斤の人參を調ずる事あたはざるを以て其月を延て漸くに穿鑿をとげ其一斤の數にみつるを待てあとより奉りぬる事とはなれりかゝれば朝鮮人參も古の上黨人參の如く後々は絕まじきものにもあらず享保の比掛卷もかしこき御惠にて其種を召よせ給ひしより今に至りて諸國に繁衍せしは實に莫大なる仁惠仰ぐべくたうとむべし又證類本草に名醫別錄を引て人參如ニ人形一者有レ神といひしより吳氏本草及び藥性論にも人形者上といへるは卽本草綱目に載る所の孩兒參にして皇朝にてもたま〳〵生出る事ありといへ共實に千萬根の內にて漸く一二根ならではこれなきもの也其狀大略四等にして上中下龜胸樣の異なるあり又其形の變ずるものに至りては不可根（フカネ）居根（スワリネ）及び數十年を經るもの長さ一尺餘圍み一虎口に過るものあるよしは詳に人參耕作記にみえたり往時出羽國米澤に御種人參數百株を移し植しを佐藤成裕壯年の時其地に至り各數十年を經るもの三株を堀得てこれをみれば其狀全く蘿蔔の如くにて色白く數根連り生じて一株は重さ百十五錢一株は八十二錢一株

此種を駿河國より見出して奉るといへり（廣參品）扨世に鬚人參一名薩摩人參一名吉野人參或は小人參折人參また髭（カモジ）人參といふものは卽竹節參の傍根細小なるなり此種は薩摩下野信濃などに產するもの味甘して上品とし但馬丹波に出るものは味殊に苦くして下品なり（同上）凡此竹節參は古より皇朝にをのれと生出しものにして延喜の比迄は諸國より貢せし事上文にみえたる如くなれどそれより以後は其味殊に苦きが故なるか又はいかなる故ありてか此種世に絕てしるものなかりしを漸く元和の比に至りて朝鮮の方長老といへる僧（此僧和僧にて南禪寺の僧ともいふ）松前に流人となりて久敷居たりしが此僧其所の山にて始めて見出し朝鮮の人參此地にも有とて其地の人に敎しよし高橋宗倫が人參傳にみえ然るを元和寛永の比始めて陸奥國より人參を出すといへるは岩氏人參辨にみえ又元和のはじめ潮州澄海縣の人河欽吉といへるもの淸夷の兵亂を避て皇國に歸化し日向國都城に居て醫を業とし寛永の比同郡の山中に到り始めて人參を採てみづからこれを製して用ひしよし本草纂疏にみえたり此諸說によれば其人によりてをの〳〵見出せし土地はたがひありといへ共古の人參の再び世にあらはれしはいづれにも元和寛永の比よりの事なるべしさて古の太宰府は今の長崎の如く外國の海船著到の地なれば延喜の比それより貢せし人參は蓋し海外の產なるべしされば聖武天皇天平十一年渤海郡王欽武が貢せし方物四種のうちに人參三十斤と（續日本紀）みえたりかゝれば凡海外より人參を貢せしも延喜の比よりはいとふるくよりありし事明かなり今海外より來れる人參に唐山朝鮮廣東の異なるあり其品またをの〳〵同じからざるよしは諸家本草に詳なればこゝにはいはず今御種人參といへるは享保の御代宗對馬守をして朝鮮に令し遼東百濟の二種の參十株を召寄られそれを江都の官園下野の日光山にうへさせ給ひしを始とす今に至りては其種諸國に傳りて處々に多く繁衍せり此種朝鮮より來れる物に比すれば少しく臭氣ありて氣味稍薄きはこれを製するに法を得ざるゆへなり石坂宗哲甲州に在し時神津宗益といふ醫より其法を傳たり宗益寛保の比京に上りて朝鮮板の東醫寶鑑を買得たりその書の内に諺文にて書たる一紙をはさめりそれを諺文を解する人によませたれば人參の製法なり宗哲此法にて

古今要覧稿巻第四百十一

●草木部 かのにげぐさ上

かのにげぐさ　くまのい　人參

かのにげぐさ一名くまのい一名にこた一名こたにには西土にて桐君雷公の說とところ人參味苦といへる物にして即今の竹節人參也また一名をとちのは人參一名をうこき人參といふ此種古は出雲國楯縫郡に產せし事其國の風土記にみえまた攝津伊勢甲斐陸奥若狹越前丹波美作伊豫及び太宰府より貢せし事延喜式にみえたり今は山城大和紀伊讃岐肥前肥後加賀薩摩尾張信濃近江遠江駿河上野下野常陸伊豆武藏など皆これあり其他諸國深山幽陰の地また極て多し其莖葉花實はいづれの國におひ出るもおほよそ相似たりといへ共其根に至りては横圓其の異なるあり草木辨疑本草啓蒙岡村尙謙曰すべて本根は質堅くして味苦く其傍根細小なるものは味甘くして苦みを帶ぶ故に本根は諸積腹痛及び飜胃吐血を治し其細根は五勞七傷及び一切の虛證に用ひてしるしあり人參譜

○今按に人參の本根細根を以て各其主治を異にするは其義全く穿鑿に過たるに似たりといへ共雷公の說に當飯の功能を論じて止レ血破レ血頭尾效名不レ同若要レ破レ血即使ニ頭節硬實處一若要下止レ痛止上レ血即用レ尾若一併用無レ效不レ如レ不レ使とみえたりかかれば人參細の如きも其細根本根を以て其主治を異にするものはまた甚意味ありといふべし

其根の横なるものは所謂竹節人參にして其一名を節人參といへ共西土にて竹節參と云物とは同名異種なり又圓なるものは珠人參(タマニンジン)一名蝌斗人參(カヘルコ)一名蕪人參(カブラ)一名芳野人參といひ西土近世にてはこれを珠參或は珠兒參といふ又直なるもは即直根人參一名を軍股人參といふ此直根人參の一種に其狀西土の人參とひとしく其味また甘香なるものあり用藥須知此即神農本經に人參味甘といひ宋の俗間にて百尺杵と圖經本草いへるものと全く同種なりといへ共これは節人參などの如く處々に多くあるものにはあらず此種は享保の始め伊勢松坂の人松本駝堂台命を蒙り紀伊國熊野に至りこれを採て奉り岩永玄浩の說にも往年藥肆稻野信濃もまた

小草神農本經

○本草原始云此草莖葉青色而極細小故以二小草一名レ之

細草同上

○此即小草の意なり

○正誤

本草啓蒙云市中ニ販クモノ舶來ニシテ遠志ト呼ブモノアリ根柔軟ニシテ滋潤藥用ニ良トス是和産細葉ノ者ナルベシ又オニ遠志ト呼ブモノアリ根堅强ニシテ滋潤ナラズ下品ナリ是和産大葉ノ者ナルベシ然ドモ和産ハ皆根狹細ニシテ入用ニ堪ヘズ

按に凡西土の遠志は其形狀姫萩と全く異る事旣に上文にいへるが如し然るを啓蒙に藥舖姫遠志とよぶものを細藥の姫萩とし鬼遠志と呼ものを大葉の姫萩とすその說一理ありといへども其實は大和本草用藥須知等の舊說に因循しさらに西土遠志の莖葉をしらずして漫に牽强して其說をなすものといふべしまた本草饎に弘景の注に狀似二麻黃一而靑といへるを以て莖の形とし馬志の說に似二大靑一而小といへるを葉の狀とせしは其說いとよろしけれどまた姫萩を以て西土のものに擬せしは其誤り全く諸家本草と同じ抑姫萩は紹興本草圖する所の遠志五種のうちに於て絕てその形狀の如きものなきによればこれは全く遠志に似たる一種の小草なるもまたいまだしるべからずされど遠志を以て古久佐と訓せし事は修治纂要をはじめとすれば勅號記以下の遠志はけだし此草をさしていひし物なるべし

『此間彩畫一葉こくさ略之』

又引圖經本草云遠志今河陝京西州郡有レ之根黄色形如ニ蒿根一苗名ニ小草一似ニ麻黄一而靑又如ニ畢豆葉一亦有下似ニ大靑一而小者上三月開レ花白色根長及ニ一尺一四月採ニ根葉一陰乾今云曬乾用泗州出者花紅根葉俱大ニ於他處一商州者根又黑色俗傳夷門遠志最佳古方通ニ用遠志小草一今醫但用ニ遠志一稀レ用ニ小草一

救荒本草云遠志今密縣梁家衝山谷間多有之葉似ニ石竹子葉一又極細開ニ小紫花一亦有下開ニ小紅白花一者上根黄色形如ニ蒿根一長及ニ一尺許一根葉俱味苦救飢採ニ嫩苗葉一煠熟換レ水浸去ニ苦味一淘淨油鹽調食

本草綱目云遠志有ニ大葉小葉二種一陶弘景所レ說者小葉也馬志所レ說者大葉也大葉者花紅

○釋名

こくさ 修治纂要 圖解本草

○此卽小草の義にして和漢またく同意なり

姬萩 用藥須知 本草譜

○皇朝の人隨軍茶を呼て萩とす正に西土にいはゆる萩とは其種全く異なり又姬は細小の義此草花葉すべて萩に似て細小故に姬萩と名づく

雀萩 本草啓蒙江戶 種樹家の稱

○雀もまた細小の義

野茶 大和本草 本草譜

○此草山野に生じてその葉茶葉に似て極て小故に名づく

芝萩 本草啓蒙

○皇朝の人結縷草を呼て芝とす此草多く結縷草中に交り生ず故にこの名あり

遠志 神農本經 郭璞注爾雅

○本草綱目云此草服レ之能益レ智强レ志故有ニ遠志之稱一

葽繞 神農本經 爾雅

○名義いまだ詳ならず正字通云葽伊交切音腰爾雅葽繞棘蒬葽卽葽繞也詩豳風四月秀葽註不レ榮而實曰レ秀葽草名又草盛貌漢禮樂志豐草葽通雅云狗尾之秀萋非ニ遠志葽繞一狗尾曰レ莠猶ニ狼尾曰一レ狼也廣雅棘蒬遠志也劉向說此味苦々葽一曰狗尾草智按莠葽々繞相去甚遠莠爲ニ狗尾草一孔子惡レ之豈可下以ニ莠葽一存ニ兩可之說一爾雅孟狼尾說文董節或作レ稂如ニ狼尾一猶レ言ニ狗尾一也皆有實如レ黍號曰ニ稂莠一特以ニ大小遲速一分耳

がみるところの形狀と相合する時はさらに疑ふべきことにあらず今此もの多く西土及び朝鮮よりきたりて東醫寶鑑志條また本草を引て葉如二麻黃一而靑といへる文を載る時は朝鮮に產するところのものもまた西土のものと同種なること明らけし我にいはゆるこくさなるものは其根大小の異なるありといへどもすべて瘦細にして藥に用ゆるに堪へず此種は蓋し福田方にいはゆる鎌倉遠志の類ひなるべし其地畢豆葉本草綱目のもの及び根黑色同上のものも共に國產いまだ詳ならず

大和本草云遠志ハ小葉似二黃楊木一而小ナリ處々有之其葉小ナリ小草ト稱スルモ宜ナリ西土ノ俗ハ野茶ト云花淡紫色ナリ又海濱ニ小草アリ莖小ニシテ高キ事一二尺花ハ桔梗ニ似テ甚小ナリ根亦小ナリ根粗遠志ニ似タル故俗アヤマリテ遠志トス非也

用藥須知云和漢共ニアリ皆眞ナリ和ニ大葉小葉ノ二種アリ花肆ニ呼二姬萩一者是也近世ヒナキキヤウノ根ヲ以テ遠志ニ充ハ誤ナリ其雞桔梗ハ却是薺苨ノ類也

本草大義云遠志雖レ有二和產一今所レ用者皆漢產已但姦商往々混二佗木之根一可二撰用一

本草纂云遠志郭璞陶弘景言似二麻黃一馬志等言似二大靑一而小者似殊不二同屬一然實一物也似二麻黃一者莖而似二大靑一而小者葉也郭陶未二嘗見一レ葉耳倭多有レ之大葉者根大性佳小葉者根細小綿二布池塘一葉似二黃楊一而莖彷二彿麻黃一根狀氣味全與二漢產一同開二紅紫花一眞似二胡枝一

本草啓蒙云山野陽地ニ多シ苗高サ二三寸許一根數莖莖ゴトニ數枝ヲ分チ葉互生ス形圓小黃楊葉ニ似テ薄ク深綠色冬ヲ經テ枯レズ霜ヲ被ルモノハ紫色ナリ三月葉間ニ深紫色ノ花ヲ簇生ス胡枝子花ニ類シテ中ニ蘂多シ花後實ヲ結ブ形圓扁大サ二三分楡錢ノ形ニ似タリ內ニ小扁子アリ一種細葉ノ者アリ佳品トス又一種大葉ノ者アリ高サ一尺許葉モ亦大ニシテ五六分許花モ大ナリ

郭璞注爾雅云葽繞今遠志也似二麻黃一赤華葉銳而黃其上謂二之小草一

證類本草引集註本草云小草狀似二麻黃一而靑

又引開寶本草云遠志莖葉似二大靑一而小比二之麻黃一陶不レ識也

古今要覽稿卷第四百十

●草木部

こくさ　遠志　ひめはぎ　すゝめはぎ　のちや　しばはぎ

こくさ一名姫萩一名雀萩一名野茶一名芝萩は卽西土にて遠志一名葽繞一名小草一名細草といへるものなり此草西土にては凡五種にして商州泗州解州齊州威勝軍紹興本草に生じ其州ごとに其品同じからず皇國にては山野向陽の地最多しこれに小葉大葉細葉及び特生蔓生叢生等の別ありて其種類ひとしからずいはゆる小葉のものは二月比苗を生じて高さ三四寸葉は萩葉に似て極て細小にして互生し俗にみかむ草とよぶものに似て周圍に鋸齒なきを異とす此草春の末に至り葉間に或は深紫花或は淡紫花を開く事また萩花の如しまゝ紅色のもの白色のもの或は紫白間雜のものありといへども紫花のもの常に多し其大葉のものは其葉黃楊葉に似て稍大にして莖高さ八九寸或は一尺許に至り細葉なるものはその葉石血葉に似てその莖小葉のものよりやゝ高しともに花後小實を結ぶ其狀圓扁にして楡錢及び過藍菜實に似て至て少さし又特生蔓生叢生のものは以上の三種互にこれあり別に種類あるにはあらず岡村尙謙曰弘景及び郭璞注のする所の遠志は國產いまだこれある事をしらず故に延喜式諸國の貢藥中絕て此物を載ず本草和名及び和名鈔等また和名なし漸く勅號記に至り遠志和唐同じといひ福田方に遠志唐山のものは太くながく肉厚し日本のものはをとれり但し鎌倉遠志といふものは上品也といへり此草今また何ものたる事をしるものなし予文政元年の秋本主の難波の城の戍りに從ひし時衆藥の眞僞精粗をきはむべきがために時々暇を乞て道修街の藥舖に至り訪尋せし事凡數十月にして始めて西土の遠志葉連根のもの數十莖を得たりよりてこれを冷水に漬し一宿を經てみればその葉全く百藥草葉に似て密ならず又頗る石竹子葉に似て極て細小にしてその莖靑細なる事全く麻黃に彷彿たり此卽弘景及び郭璞などの注するところのものにして今世すべて使用する所のものもまた此根なり又救荒本草に遠志似ニ石竹子葉一極細といひ且その圖する所の草本正に予

淺茅にましる床夏の花

新千載和歌集卷第三夏歌

三條院いまだみこの宮と申ける時帶刀陣歌合に

常夏の花なかりせは山かつの　よみ人しらず

垣ほを人はたつねさらまし

編修兼校正　岡村尚謙平遜

校正兼鈔錄　山下官介源正房

校正兼淨寫　忠內錔太郎紀弘光

校正兼圖畫　葦名隆吉平盛榮

校正兼淨寫　兒山諦之助平紀言

伊庭熊作源秀正

校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春

校正兼淨寫　小林好太郎源直溫

編修兼校正　池野貞一郡源好謙

編修兼圖畫　志村愛助平知孝

編修兼校正　大河戶晋平藤原儀成

總　判　屋代大郎源弘賢

郭公鳴つゝ出る足曳の
　やまとなてしこ咲にけらしも

瞿麥露滋といふことを　高倉院御歌
白露の玉もてゆへるませのうちに
　光さへそふ床夏の花

又巻第十六雜歌上　花山院御歌
だいしらず
獨ぬる宿の床夏あさな〳〵
　涙の露にぬれぬ日そなき

續古今和歌集巻第三夏歌
瞿麥を　侍従行家
露をたにうちもはらはぬ床夏は
　たかうき中の花に咲らん

新後撰和歌集巻第三夏歌
瞿麥帶露といへる心を　内大臣
夏草のいつれともなき籬にも
　露の色そふ床夏の花

續千載和歌集巻第三夏歌
夏歌の中に　西宮左大臣
もろともにみん人もかな獨のみ
　おれはかひなき床夏の花

寛和二年内裏歌合に　藤原惟成
心してうへしもしるく撫子の
　花のさかりを今も見る哉

又巻第十六雜歌上
百首歌奉し時　權大納言經繼
おろかなる老の泪の露けきは
　日夕の影のやまとなてしこ

續後拾遺和歌集巻第七物名
瞿麥の花　俊頼朝臣
朝ねかみかきなてしこの花なれは
　思ひみたれて戀や渡らん

又巻第八離別歌
夜思瞿麥といふ事を　皇太后宮大夫俊成
草枕たひねの程もいかならん
　宿をみをさし常夏の花

風雅和歌集巻第十五雜歌上
河原院にて法橋顯昭歌合し侍けるに故郷のなでしことといふことを　藤原隆信朝臣
うゑて見し籬は野へと荒はてゝ

一條攝政の北方ほかに侍けるころ女御と申しける時　贈皇后宮
しはしたに影にかくれぬ時は猶
　うなたれぬへき撫子の花

後拾遺和歌集卷第三夏
宇治前太政大臣家に三十講の後歌合し侍けるによみ侍りける　中納言定頼
床夏の匂へる庭はから國に
　おれる錦もしかしとそ見る

道濟か家にて雨夜とこなつを思といふ心をよめる　能因法師
いかならん今夜の雨にとこ夏の
　今朝たに露のおもけなりつる

だいしらず　曾禰好忠
きて見よと妹か家ちに告やらん
　我ひとりぬる床夏のはな

又卷第十哀傷
一條院うせ給ひてのちなでしこの花の侍けるを後一條院をさなくおはしましてなに心もしらでとらせ給ひければおぼしつることやありけん　上東門院
見る儘に露そこほるゝ遅れにし
　心もしれぬなでしこの花

又卷第十九雜五
人のこをつけんとちきりて侍けれどこもりゐぬときゝてこと人につげ侍にければよめる　法眼源賢
思きや我しめゆひし撫子を
　人の笆の花とみんとは

詞花和歌集卷第二夏部
なでしこのはなを見てよめる　藤原經衡
うすくこく垣ほに匂ふ撫子の
　花の色こそ露も置ける

贈左大臣の家に歌合しはべりけるによめる　修理太夫顯季
種まきしわか撫子の花盛
　いくあさ露のをきてみつらん

千載和歌集卷第三夏歌
なでしこの花の盛なりけるを見てよめる　和泉式部
見るに猶此世の物に覺えぬは
　から撫子の花にそ有ける

新古今和歌集卷第三夏歌
題しらず　大中臣能宣朝臣

又巻第五上秋歌
かれにける男の七日の夜まできたりければ女の
よみて侍ける　　　　　　　　よみびとしらず
ひこほしの稀にあふよの床夏は
　打はらへ共露けかりけり

又巻第十二戀歌
角ておこせて侍けれど宮仕する人なりければ暇
なくて又の朝に常夏の花に付ておこせて侍ける
置露の懸る物とは思へとも　源もろあきらの朝臣
　かれせぬものはなてしこの花

かへし
かれすともいかゝ頼まむ撫子の
　はなは常磐の色にしあらねは

又巻第十二四同歌
わすれにける女を思ひ出てつかはしける
うちかへし見まくそほしき古郷の　讀人不知
　やまとなてしこ色やかはれる

又巻第十四六同歌
源たゝあきらの朝臣十月ばかりに床夏を折て送
侍ければ　　　　　　　　よみ人しらず
冬なれと君かかきねにさきたれは
　むへ床夏にこひしかり鳬

拾遺和歌集巻第二夏
家にさきて侍けるなでしこを人のがりつかはし
ける　　　　　　　　　　伊勢
いつくにも咲はすらめと我宿の
　やまと撫子誰にみせまし

又巻第十三戀三
天暦御時ひろはたのみやす所久しくまゐらざり
ければ御ふみつかはしけるに　御製
山賤の垣ほにおふる撫子に
　思ひよそへぬ時のまそなき

廉義公家の障子の繪に撫子おひたる家のこゝろ
ほそげなるを　　　　　　清原元輔
思しる人にみせはや終夜
　わか床夏にをきゐたる露

又巻第十六雜春
四十賀し侍ける時の屏風に　つらゆき
常夏の花をしみれはうちはへて
　過る月日の數もしられす

爾佐伎波麻須等母
宇流波之美安我毛布伎美波奈弖之故我波奈爾奈曾倍
弖美禮杼安可奴香母
　右二首兵部少輔大伴宿禰家持追作

古今和歌集卷第三夏歌
　隣より常夏の花をこひにおこせたりければ惜て
此歌を讀てつかはしける　　みつね
ちりをたにすゑしと思ふ咲しより
　いもと我ぬる常夏の花

又卷第四秋歌上
　寛平御きさいの宮の歌合のうた
我のみや哀と思はん蛬　　素性法師
　なくゆふかけのやまとなてしこ

後撰和歌集卷第四夏歌
　だいしらず　　よみ人しらず
とこ夏に鳴てもへなむ時鳥
　しけきみ山になにかへるらん
　女子もて侍ける人におもふ心侍てつかはしける
ふたはより我しめゆひし撫子の　よみ人しらず
　花の盛を人におらすな

　だいしらす　　讀人しらず
人しれすわかしめしのゝ撫子は
　花咲ぬへき時そきにける
我宿の垣ねにうへし撫子は
　はなにさかなんよそへつゝみん
とこ夏の花をたに見はことなしに
　過す月日もみしかかりなん
常夏に思ひそめては人しれぬ
　心のほとは色に見えなん
　返し
色といへはこきもうすきも頼まれす
　やまと撫子散よなしやは
　師尹朝臣のまたわらはにて侍ける時とこ夏の花
をゝりてもちて侍ければこの花につけて內侍の
かみのかたにおくり侍ける　　太政大臣
撫子はいつれともなく匂へとも
　おくれてさくは哀なりけり
　だいしらず　　よみ人しらず
なてしこの花ちりかたに成にけり
　我待秋そちかくなるらし

於保伎見能、等保能美可等々、末伎太末不、官乃末爾末、美由伎布流、古之爾久太利來、安良多末能、等之能五年、之吉多倍乃、手枕末可受、比毛等可須、末呂宿乎須禮波、移夫勢美等、情奈具左爾、奈泥之故乎、屋戸爾末枳於保之、夏能能之、佐由利比伎宇惠天、開花乎、移低見流其等爾、那泥之古我、曾乃波奈豆末爾、左由利花、由利母安波無等、奈具佐無流、許己呂之奈久波、安麻射可流、比奈爾一日毛、安流部久母安禮也、

反歌

奈泥之故我花見流其等爾乎登女良我惠末比能爾保比於母保由流可母

同閏五月二十六日大伴宿禰家持作

又卷第十九

于レ時積雪彫二成重巖之起一奇巧綵發二草樹之花一屬レ此掾久米朝臣廣繩作歌一首

奈泥之故波秋咲物乎君宅之雪巖爾左家理家流可母

遊行女婦蒲生娘子歌一首

雪嶋巖爾殖有奈泥之故波千世爾開奴可君之挿頭爾

又卷第二十

五月九日兵部少輔大伴宿禰家持之宅集飮歌二首

和我勢故我夜度乃奈弖之故比奈良倍弖安米波布禮杼母伊呂毛可波良受

右一首大原眞人今城

比佐可多乃安米波布里之久奈弖之故我伊夜波都波奈爾故非之伎和我勢

右一首大伴宿禰家持

同月十一日左大臣橘卿宴二右大辨丹比國人眞人之宅一歌三首

和我夜度爾佐家流奈弖之故麻比波勢牟由米波奈知流奈伊也乎知爾左家

右一首丹比國人眞人壽二左大臣一歌

麻比之都々伎美我於保世流奈弖之故我波奈乃未等波無伎美奈良奈久爾

右一首左大臣歌

十八日左大臣宴二於兵部卿橘奈良麻呂朝臣之宅一歌三首

奈弖之故我波奈等里母知弖宇都良宇都良美麻久能富之伎吉美爾母安流加母

右一首治部卿船王

和我勢故我夜度能奈弖之故知良米也母伊夜波都波奈

古今要覽稿卷第四百九

●草木部なでしこ

和歌

萬葉集卷第三雜歌

大伴宿禰家持贈同坂上家之大孃歌一首

石竹之其花爾毛我朝旦手取持而不戀日將無

又家持見砌上瞿麥花作歌一首

秋去者見乍思跡妹之殖之屋前之石竹開家流香聞

又卷第八春相聞

大伴宿禰家持贈坂上家之大孃歌一首

吾屋外爾蒔之瞿麥何時毛花爾咲奈武名蘇經乍見武

夏雜歌

大伴家持石竹花歌一首

吾屋前之瞿麥乃花盛有手折而一目令見兒毛我母

夏相聞

瞿麥者咲而落去常人者雖言吾標之野乃花爾有目八方

秋相聞

笠女郎贈大伴宿禰家持歌一首

毎朝吾見屋戸乃瞿麥之花爾毛君波有許世奴香裳

又卷第十夏雜歌

詠花

見渡者向野邊乃石竹之落卷惜毛雨莫零行年

野邊見者瞿麥之花咲家里吾待秋者近就良思母

夏相聞

寄花

隱耳戀者苦瞿麥之花爾開出與朝旦將見

又卷第十七

宇良故非之和賀勢能伎美波奈泥之故我波奈爾毛我母
奈安佐奈佐奈見牟

又卷第十八

詠庭中牛麥花歌一首

比登母等能奈泥之故宇惠之曾能許己呂多禮爾見世牟
等於母比曾米家牟

右先國師從僧清見可入京師因設飲饌饗
宴于時主人大伴宿禰家持作此歌詞送酒清
見也

庭中花作歌一首并短歌

を蘇頌の廣雅に缺文ある事をしらずして漫に茈萎蘧麥を以て一物とせしは大なる誤りなり然といへども集注本草に紫葳是瞿麥根といひ本草和名瞿麥條に疏文を引て根名二紫葳一とみえたればその誤りを傳ふるもまた久し

通雅をみるに云時珍謂ニ蘧麥石竹ー爲ニ洛陽花ー近似而非ニ一物ー也蘧麥卽南天竺草爾疋之大菊蘧麥也一名石竹子 時珍辯下宋本 草名ニ燕麥杜姥草ー之誤上以ニ燕麥ー爲ニ雀麥ー雀瞿二字相謁是矣至曰ニ石竹卽洛陽花ー則非也今洛陽花非ニ一種ー不レ似レ竹（按に竹の上に石字の落しにても有べきにや）有ニ五色ー其後レ此而開者曰ニ剪春羅ー大者曰ニ剪絨花ー瞿麥則是野生非ニ洛陽花ー此必以ニ洛陽錦ー爲ニ瞿麥ー猶下北人以ニ虞美人花ー爲中鶯粟上也と此說にては石竹と瞿麥はもと一物にて洛陽花はまた洛陽錦ともいひて蓋し俗にいふ仙翁花小倉仙翁類のものなれば此種は石竹と異なるものにて時珍の說ところの洛陽花とは同名異物なるものをそれを蘭山の薩州種のなでしこと混同して說をなせしも誤なれば方密之がその同名異物なるものを以て時珍の說を駁するもまた誤りなりまた大和本草に草花譜を引て千瓣なるを洛陽花といひ和漢三才圖會にも畫譜を引て單瓣者名ニ石竹ー千瓣者名ニ洛陽花ーといひ汝南圃史には石竹千葉洛陽花單葉ともありてその說おの〳〵同じからずといへ共もとより石竹中にて八重一重のたがひあるのみなればこれにても方密之が時珍の說を駁せしは却てあやまりなるをしるべし

又云古方ノ石竹子ハ皆瞿麥ヲ用ユベシ

按に石竹の名西土にては日華本草に出たるを始とすそれより以前にもその名ありし事は旣に釋名にいへる如くなれども絕て傳はらざれば漢魏より隋唐までの方に石竹子といふ名はさらにみえず然るを蘭山のかくいへるは宋あたりの方を古方とおもへるにやうたがはしされば時珍は近古方家治ニ産難ー有ニ石竹花湯ーといへり近古の字最穩かなり

圖經本草云瞿麥廣雅謂ニ之茈萎ー是也

岡村尚謙曰邢昺が爾疋疏に廣雅を引て茈萎麥句薑蘧麥とあるを今本には茈葳陵苕蘧麥也に作るこれによりて考るに二本もと互に缺文ありて今本陵苕の下に也麥句薑の四字を脫し邢氏みる所の本には萎の下に陵苕也の三字をかくこれは廣雅にまた茭鷄頭也周麻也云々周麻の上に收靡の二字を脫せしとその義同じ（一云周麻の下に升麻の二字を闕なり）されば茈萎は卽神農本經の紫葳（ノウゼンカツラ）一名陵苕にて唐本草にいはゆる凌霄の事なれば蘧麥とはその種絕て異なるもの也然る

洛陽花本草綱目汝南圃史草花譜
十姉妹河間府志
○按に今俗此十姉妹をじうしまつと唱るものは未
末混同のあやまり也

○正誤
藻鹽草に俊頼のよめるいしたけといへる歌を引て云此歌の心はむかしある國に鳥田の時主といふ勇士ありわが家のうしろの山に一つの石ありかの石せきれいありて人をなやます仍時主くだんのいしを射るすなはち矢たちぬ矢ぬけずして花さきぬ此花なでしこ也花かさなりてさくと云々藏玉にあり
按に石竹の名義は既に釋名にいへるが如く竹に似て小さき意にてもとよりから國の名なるにそれをかくいひなすは其名のから國よりいでし事をしらざるものゝ作りなせし中昔の物語なればとるにたらず
大和本草云古今集ノ歌ニミドリナル一ツ草トゾ春ハ見シ秋ハ色々ノ花ニゾ有ケルトヨメルハカラナデシコ也
按に此歌は古今集秋歌上にありて題しらずよみ人しらずの歌にてその實は廣く秋さく千種の花をさしてよみしにてからなでしこの一種にかぎれるにはあらず然るを篤信のかくいへるはたま〱その考をうしなひしなり
用藥須知云瞿麥子和名ナデシコノ實原野ニ多ク生ズ石竹子亦功用相同ジ此ヲカラナデシコト云石竹ヲ大和ナデシコト云テ別レ之云々
按に石竹を大和といへる石竹の二字はまさに瞿麥に作るべし蓋し傳寫の誤にて校合のたらざる也
本草綱目啓蒙云時珍ノ洛陽花ト云者ハ即薩州種ノ瞿麥也故通雅ニ時珍ノ説ヲ駁シテ至レ曰二石竹即洛陽花一則非也瞿麥則是野生非二洛陽花一云々
按に小野蘭山の薩州種といふものは今種樹家にて大坂なでしこといへるものにて即野なでしこの一種なり時珍のいはゆる洛陽花といへるは即今の石竹なるよしは大和本草用藥須知等にもみえたりされば薩州種のなでしこを以て時珍の洛陽花に擬せしは蘭山一人の説にて誤りなりまた通雅に石竹は即洛陽花非也といへる説を引て方密之が洛陽花を薩州種のなでしこと一物とせしもまた誤りなり今

れば石竹はその莖葉すべて竹に似て少さき意也扨石竹の名の西土の書にみえしは日華子の諸家本草を始とし本邦にては萬葉集に載る所の大伴家持卿の歌をはじめとすこの卿は聖武天皇の天平年中の人にて日華子は宋の開寶の時の人なれば家持卿の日華子に先だつ事凡二百三四十年にて其比本邦に傳はりてありし本草は弘景の集注本草に蘇敬の新修本草及び本草稽疑本草雜要訣釋藥性等なり今に至りてはその書皆散逸すといへ共集注新修の二書は僅に證類本草に載しが卽古の眞面目を存するものにてその書中に石竹の名はみえず然れば家持卿のよまれし石竹は必ず本草稽疑雜要訣などの書にありしによりてそれをとり用ひられしものなるべし扨この事を日華子及び時珍などのしらざりしは遺憾なり

牛麥花 萬葉集

岡村尙謙曰牛麥花の名はじめて大伴宿禰家持卿歌の序にみえたり此卽漢名なり然といへ共西土の書の今に傳はれるものにはみえずされはその書の絕て今に傳はらざるものゝうちに僅に牛麥花の名ありしをそれをとりてかく書れしものなるべし扨牛字ぎうといふは漢聲にて其聲のつまりたるがくとなれば牛麥は卽瞿麥にてその牛字をまた牽牛子牛王などの牛の如くいふは卽吳國の方聲にして漢聲のつまりたるにはあらず

石菊 汝南圃史 祕傳花鏡

○汝南圃史云石竹今人誤爲㆓石菊㆒按に石菊は卽石竹の方聲なり

錦竹 閩書南產志 八閩通志

○此花紅紫斑爛頗る錦のごとし故に名づく

繡竹 祕傳花鏡

○繡竹は卽錦竹の意なり

南天竺草 聖濟總錄 本草綱目 通雅

○按に天竺は卽國名にてその國名を添て稱するものは此邦にてもいふからなでしこ朝鮮なでしこの意とおなじかるべし

天南竹 閩書南產志 八閩通志

○按に天南竹は南天竺の倒語にて上文にいはゆる巨句麥をまた麥句薑といへるにその意同じかるべし

のなでしこ 江戸俗稱

ちやせんばな 本草綱目啓蒙

○陸奥の方言なりといへり

大菊 爾疋說文名醫別錄

○名義いまだ詳ならず

大蘭 名醫別錄

○名義上におなじ一說に蘭字の草書菊字に似たりよつて誤れりといへり

蘧麥 爾疋說文

○本草綱目云蘧字有渠衢二音

瞿麥 神農本經

○集注本草云子頗似レ麥故名二瞿麥一本草綱目云案陸佃解二韓詩外傳一云生二子兩旁一謂之瞿此麥之穗旁生故也岡村尙謙曰巨句麥の名による時は蘧麥は卽巨麥にて此房麥粒に似て極めて巨大なるによりて蘧麥とも巨麥ともいひしものなるべければ時珍のいはゆる麥之穗旁生といへるは恐らくは誤りならん又瞿字臞と同じ爾疋云臞瘠也說文云臞少肉也司馬相如傳云形容甚臞周禮注云瘦瞿腐敗などいへるにてその義は明らけしされば本經に瞿麥といへるは此莖葉すべて麥苗に似て極めて瘦細なるによりて名付しにても有べきにや凡物は一つなれ共それを方言にてとなへの異なるによりてまた其義も異なるは古書中其例殊に多したゞ此瞿麥のみにあらず

巨句麥 同上

○按に巨麥を巨句麥といへるは高麗を古は高句麗といひまた吳國をさして鉤吳ともいへるに同じ

句麥 通雅

○按に巨句麥を句麥といへるは高句麗をまた句麗ともいへるに同じこれによりて再按に蘧麥はもと諧聲にてそれを方聲によりては瞿麥とも巨句麥ともまた句麥とも麥句薑ともいひしにてもあるべきにや

麥句薑 郭璞注爾疋邢昺疏引廣雅

○按に薑は卽巨の緩聲にして麥句薑は乃巨句麥の倒語也

石竹 本草綱目引日華本草

○按に凡物の大なるに馬字を冠らしめ小なるに石字をつけていへるは舊より西土のならはしなりさ

亦同レ時但石竹千葉洛陽單葉石竹葉青碎花艶麗洛陽較レ之稍劣石竹結ニ細黑子一々少洛陽亦結ニ細黑子一々多此其瓣也

岡村尚謙曰時珍の石竹は今いふ野撫子にて洛陽花は舊よりいふ唐撫子也こゝにいふ石竹洛陽花もまたそれと一樣なりといへ共たゞ千葉單葉を以てその種をわかつものはこれ當時の一説なり今に至りては二種共に千葉のもの單葉のものありてそれにてはわかち難したゞその花瓣に鋸歯あるを石竹とし缺刻あるを洛陽花と定むべし

○釋名

なでしこ 萬葉集新撰字鏡本草和名和名類聚鈔

○按になでしこの名義は大和本草に榮雅抄を引ていひしにしたがふべし

やまとなでしこ 千載和歌集

○按になてしこに大和のもしを冠らしめて大和なでしこといへるはから國の人より我ものを稱するやうにも聞なさるれどこれはからなでしこにむかへていへる名なればさにはあらず

とこなつ 古今和歌集古今六帖和名類聚鈔

○古今餘材抄云瞿麥をなでしことといふは本名なりとこなつといふは異名なりとこなつとは此花夏秋冬の三時にわたる故に總名をもて常夏といふとこ夏とは常の義なり萬葉集に立山の雪をよめるに常夏にきえずと云々一説に大鏡裏書云染殿大后少之時容姿絕麗號ニ瞿麥御一取ニ美艶一耳今瞿麥稱ニ常夏一蓋避レ諱也といへり

日暮しぐさ 藻鹽草

いしのたけ 俊頼家集

○此卽石竹の義訓也君が代の例にひかん春日野の石の竹にも花咲にけりとみえたり

かたみぐさ 莫傳抄

○昔大和國に人の子のなでしこをつくりてけるが其後死して親我子のつくりたるなでしことて是を申なり云々「きてみればなきよの人のかたみ草いくたびわれは袖ぬらすらん」とみえたり

なつかし草 篠目抄

○ふるさとのこれにそおもふ夏ことになつかしくさの袖のくれなゐ」とみえたり

かはらなでしこ 藻鹽草和名集廣益地錦抄

用小者復一種葉廣相似而有毛花晩而甚赤按經云
採實々中子至細燥熟便脱盡今市人惟合莖葉用而
實正空殼無復子爾 同上
圖經本草云瞿麥生泰山川谷今處々有之苗高一尺
以來葉尖小青色根紫黑色形如細蔓菁花紅紫赤色
亦似映山約二月至五月開七月結實作穗子頗似
麥故以名之立秋後合子葉收採陰乾用河陽河中府
出者苗可用淮甸出者根細村民取作刷帚爾疋謂之
大菊廣雅謂之茈萎是也 同上○正誤に辨す
救荒本草云石竹子本草名瞿麥生太山川谷今處々
有之苗高一尺已來葉似獨掃葉而尖小又似小竹
葉而細窄莖亦有節梢間開紅白花而結蒴內有小
黑子救飢採嫩苗葉煠熟水浸淘淨油鹽調食
本草綱目云石竹葉似地膚葉而尖小又似初生小竹
葉而細窄其莖纖細有節高尺餘梢間開花田野生者
花大如錢紅紫色人家栽者花梢小而嫵媚有細白粉紅
紫赤斑爛數色俗呼爲洛陽花結實如燕麥內有
小黑子其嫩苗煠熟水淘過可食
祕傳花鏡云石竹一名石菊又名繡竹枝葉如苕
　一說に蘆葦の花を芀といへば芀苕音通にて後世に
苕といへるは蓋し今のよしの事なるべしといへり
然りといへ共說文云苕草也又云芀葦華也玉篇云苕
徒彫切苕草可作帚とみえたればこゝにいふ苕は
別に一種その葉石竹に似て帚となすべきものにて
　よしの類にては有べからず
纖細而青翠夏開花紅赤深紫數色千葉如剪茸結子
細黑向陽喜肥每年起根分種方茂但枝條柔弱易至
散漫須以小竹枝扶之花開亦耐久而惜不香若
能使霜雪不侵其幹若漸老亦可作盆景分
枝扦插皆活
又云洛陽花一名蘧麥葉似石竹叢生有節高一二尺
花出枝抄本柔而繁五色俱備又有紅紫斑爛者植
令苗頭無長短諸色間之開成片錦饒有雅趣
將開如卷旗以漸舒展嘗以正午開至晩則卷明
日復舒頻摘去子則花開不絕
閩書南產志云錦竹一名石竹叢生高尺許花如纈錦李
大白有石竹繡羅衣之句俗呼天南竹
八閩通志云石竹一名錦竹俗呼天南竹
汝南圃史云石竹莖如細竹枝葉如苕其花紫色類翦
碎者別有洛陽花又名瞿麥與石竹葉相類開花

色也是藥種に用人家に植る物花娬媚是せきちく也と本草にあり又弘景が云兩種あり一種はひとへ大きく花のへりにまたありといへり是かはらなでしこ花のへりに切込のまたなきは石竹なり

又云阿蘭陀石竹は葉長くせいたかく花大りんせんやうさらさも紅もうす色もあり朝鮮なでしこは花本紅ひとへへりに切込のまたなく葉長し此兩種は和の草にてなし渡りなれども本草綱目にのせず後に出るなるべし日本へは寛文年中に渡る實ならず枝をさしめにす

本草綱目啓蒙云瞿麥此草山野ニ極テ多シ葉細長シテ深綠色兩々相對ス夏秋ノ間草ヲ生ズ野生ノモノハ皆淡紅色也山生ノモノニハ稀ニ紅花ノモノアリ共ニ花後小圓長角ヲ結ブ內ニ小扁黑子アリ熟スレバ角頂自開キ風ニ隨テ子落ツ此子ヲ收テ藥用ニ入ル一種薩摩種ト呼ブ者ハ花尤大ニシテ單葉千葉紅白紫深淺間色數品アリ觀ルニ堪タリ此種ヲ下シテ花色ヨク變ズ野生ノ者ハ然ラズ時珍洛陽花ト云フ者ハ卽薩摩種ノ瞿麥ナリ（正誤に辨す）故ニ通雅ニ時珍ノ說ヲ駁シテ至レ曰ニ石竹卽洛陽花一卽非也瞿麥則是野生非ニ洛陽花一此必以ニ洛陽錦一爲ニ瞿麥一猶下北人以ニ虞美人花一爲中瞿粟上也ト云リ（正誤に辨す）又俗ニ石竹ト呼者アリ卽漢名ノ石竹ナリ和名カラナデシココレモ亦トコナツト云フ野生ナシ家園ニ多ク種テ花ヲ賞ス色ニ數品アリテ甚觀ルニ堪タリ花瓣ミナ鋸口ナリ瞿麥ノ瓣ノ端細ニ分レテ絲ノ如ナルニ異ナリ千葉ノ者ヲ十姉妹（河間府志）ト云フ同名多シボサツイバラ及鶺鴒又一種ノ鳥ニ十姉妹ノ名アリ古ヨリ瞿麥一名石竹トス故ニ方書ニ石竹子ト云フ者皆瞿麥子ナリ後世ハ分テ二種トス今本邦ニモ二品アリ然レドモ古方ノ石竹子ハ皆瞿麥ヲ用ユベシ

爾疋（釋草）云大菊蘧麥（郭璞注云一名麥句美卽瞿麥）

說文解字（草部）云菊大菊瞿麥也从レ草匊聲

又（同上）云蘧々麥也从レ草遽聲

廣雅（釋草）云茈葳陵苕蘧麥也

神農本草云瞿麥味苦寒一名巨句麥

名醫別錄云瞿麥味辛無毒一名大菊一名大蘭生ニ太山川谷ニ立秋採レ實陰乾（證類本草引）

集注本草云今出ニ近道一一莖生ニ細葉一花紅紫赤可レ愛合ニ子葉一刈取レ之子頗似レ麥故名ニ瞿麥一此類乃有ニ兩種一一種微大色邊有ニ又椏一未レ知ニ何者是一今市人皆

大和本草云瞿麥（ナデシコ）ハ石竹ナリ和名ナデシコ又トコナツト云本草ニ異名石竹（セキチク）田野ニ生者花大如レ錢紅紫色人家ニ栽ル者花稍小而嫵媚有ニ細白粉紅紫赤斑爛數色一俗呼爲ニ洛陽花一又陶弘景ガ說ニ有ニ兩種一一種微大邊有レ叉椏今案日本ニテモ野生ノ者ハ花モ葉モ大ナリ俗ニ是撫子ト云花邊ニマタアリト云是ナリ是ヤマトナデシコ也近年コレニモ數種アリ園中ニ栽ルモノヲ石竹ト云時珍ガ云ヘルゴトク色々アリ是カラナデシコ也昔唐ヨリ來レル故カラナデシコト名ク然レバカラヤマト共ニナデシコト云ベシ今俗山ニアルヤマトナデシコヲバナデシコト云園ニウフル唐撫子ヲバ石竹ト云テナデシコトハ云ハズ古今榮雅抄ニ唐撫子ハ色々也大和ナデシコハ皆紅梅色也トイヘリ今山野ニアルナデシコモ皆花アカシ本草ニ云ヘルモ同ジ今ハヤマトナデシコニモ色々アリ云々藥ニハ兩樣トモニ用ユ撫子トハ花ノ形チイサヤカニ其色愛スベキヲ以テ名ヅクトコナツトハ其花春ヨリ秋マデサカリ久シクサキツヾクユヘニ名ヅクト榮雅抄ニイヘリ毎月子ヲマケバツネニ花アリ花萎（シボミ）タルハ莖ヲ切去ベシ又花サク高濂ガ草花譜ニハ千瓣ナルヲ洛陽花ト名ヅクトイヘリ千葉ノ石竹ナリ本草ニ云ヘルニコトナリ○凡石竹ハ八月ニ早ク實ヲマクベシ來春花ヲヒラク春マケバ蠹（キリマシ）苗ヲキリテ育シガタシ二三月魚汁ト尿トヲマゼテソヽグベシ其後ハ肥ヲ不レ用苗長ゼントスル時梢ヲ摘去レバ枝多ク花多シ又正二八九月サシテモ活ク小竹ヲ立テ苗ヲ結ベシ風ニ散漫セズ西陽雜俎曰蜀中石竹有ニ碧花一日本ニハ青キ石竹花アルコトヲ不レ聞又紅夷（ヲランダ）石竹ハ大ニシテ香アリ紅白重葉單葉或紅白相マジルモアリシボリト云染色ノ如シ

用藥須知云瞿麥子和名ナデシコノ實原野ニ多生ス不レ須ニ栽種一石竹子亦功用相同ジ此ヲカラナデシコト云石竹ヲ（正誤に辨ず）大和ナデシコト云テ別レ之石竹千葉ノモノヲ洛陽花ト名ク媚嫵可レ愛近來一種阿蘭陀石竹ト云アリ千葉ニシテ色甚深紅香氣アリトイヘドモ少シク有レ毒不レ可レ入ニ藥劑一アンシヤレンアンチヤヒルト名ヅク鵞毛石竹アリ花瓣剪裁似ニ剪秋羅花瓣一

廣益地錦抄云瞿麥藥種には田野に多くあるむらさきひとへ成物實をとりて用是をかはらなでしこと云花壇に植るは八重ひとへ色々有り本草に石竹なでしこ一種と有各別なり田野に生る者花大く錢の如く紅紫

はいまだよまず　萬をとめこがゐまひのにほひに似
といへり女のゐみがほに似也　後撰なでしこの花ち
りがたといへりこれ花のちるにはあらじしぼめる也
　菊をはなこそちらめねさへかれめやといへる定也
萬むかひの野べのなでしこ
藻鹽草云瞿麥　とこなつ
　注八雲御抄におなじたゞし四時の美を四時美とか
　きての丶字なきは御抄にことなり
すこのとこなつ注御抄におなじ　なでしこ　からなでしこ
やまとなでしこ　かはらなでしこ　なでしこの花
ちりがた注御抄におなじ　をとめこがゐまひのにほひにると
いへり注上におなじ　一もとのなでしこうゑて　庭のとこ夏
ませゆひて花もこぞめのいろ　山がつのかきほにさ
けるその丶なでしこ　むかひの野べのなでしこ　日
暮しぐさなでしこの異名と云々

石竹

　「から國にありけることはいざしらずあづまのお
くにおふるいしだけ」これ俊頼の歌なりあるひは
石の竹との丶字ありてもいへり多くはの丶字あり
雪しまのいはほにおふるなでしこ萬　いやをちにさく
わかやどにさけるなでしこ云々いやをちとは次第
〳〵にさけるなり
　うなだれぬべきなでしこのはな　君がたねまくと
　こなつ

和名集井異名襲劑記云瞿麥和名河原ナデシコ蘗殼實
ヲ用ユ莖葉ヲバ用ユベカラズ蘗殼ハ剉ミ實ハ其マヽ
使フ
和漢三才圖會云按瞿麥卽石竹也今以爲二一種一共葩周
圍有二刻齒一而有二切叉一似二剪紅紗(テクラセン)一者爲二瞿麥一無二切
叉一者爲二石竹一並出於二豫州一者良丹波紀伊次レ之
又云倭(ヤマト)瞿麥　莖葉細弱花有二紅紫白赤斑爛(シボリ)單葉千葉
數種一
又云南京瞿麥　株太莖細而葉大二於倭一其單瓣紅
又云藤(フヂ)瞿麥　莖太高尺餘葉厚形似二匙首一而深青色抱
レ節兩々對生其花數朶小形似二桔梗一而白帶レ紫蔕(テヘタ)長
淺青
又云倭(ヤマト)石竹　莖葉細柔其花有二數品一從レ春至レ秋皆
變二於子種一而異品者爲二珍賞一
又云阿蘭陀石竹　株莖大葉硬强花亦大有二數品一名二阿(ア)無シ之ン
也閉(ヤヘ)伊(イ)流(ル)一

然といへども和泉式部の歌にみるに猶此世の物と覺えぬはと千載和歌集よみしは全くからなでしこの事にてからより渡りこし後は山野にをのれと生出るものをさして大和なでしこといへるは寛平の御時にきさいの宮の歌合を始とし古今和歌集それよりつぎ〳〵の撰集家集などにその名をよみし歌殊に多し扨やまとなでしこは小野の日あたりよき所に生出て葉は少さきさゝの葉に似てそれよりは極めて細く莖は麥稈ムギワラに似て節ありて青くまたほそしその高さ二三尺に至れば梢ごとにひとへなる五瓣の花を開き大さは錢程ありて後に房をむすびそのうちに少さき黑子あまたありまたからなでしこはこれにくらぶれはその莖やゝ大く葉もまた相似て少しく大いなり花を開く事淺深紅紫また白花のものあり此種は時珍の說に洛陽花といへるものにてその花瓣に鋸齒ありて缺刻はなきもの也また紹興本草に圖する所の絳州瞿麥といへるもこれと全く一物なりまた阿蘭陀石竹南京瞿麥朝鮮なでしこやまと石竹の數種ありいはゆる阿蘭陀石竹朝鮮瞿麥の二種は後光明天皇の寛文年中に渡りこしものなれども廣益地錦抄今あるものは阿蘭陀石竹の一種のみにてその餘は皆詳ならずまた弘景の說に一種葉廣相似而有ㇾ毛花晩而甚赤と本草集注いへるはこれ卽今の仙翁花にて寺島良安の說に藤瞿麥フヂナデシコ葉厚形似二匙首一其花數朶形似二桔梗一而白帶ㇾ紫と和漢三才圖會いへば共に今ある草なれども眞の瞿麥にはあらず

出雲風土記云仁多郡凡諸山野所ㇾ在草木云々瞿麥升麻

延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥伊賀國二十三種云々連翹瞿麥各六斤

又同上云近江國七十三種云々瞿麥一斤二兩

又同上云出雲國五十三種云々瞿麥一斤六兩

又云上總國二十種云々瞿麥具子此郎今いふ子安貝なり各三斤

又云下總國三十六種云々瞿麥六斤

本草和名云瞿麥仁諝音衢陶景注云子頗似ㇾ麥云々一名巨句麥楊玄操音九懼反根名二紫葳一華名ㇾ蘘已上二名出二疏文一和名奈天之古和名類聚鈔云本草瞿麥一名大蘭和名奈天之古一名止古奈豆枕草紙云草の花はなでしこからのはさら也やまとのもいとめでたし

八雲御抄云瞿麥　とこなつ　こすのとこなつとはすみよしのこすなりこすは濱也　から　やまと　萬葉六とこなつは四時の美とかけり夏秋は歌によむ春冬

古今要覽稿卷第四百八

●草木部

なでしこ　とこなつ　瞿麥　石竹

なでしこ一名やまとなでしこ一名とこなつ一名ひぐらしぐさ一名かたみぐさ一名なつかしぐさ一名かはらなでしこ一名いしのたけ一名のなでしこ一名ちやせんばなは漢名を大菊一名大蘭一名遽麥一名瞿麥一名巨句麥一名句麥一名麥句薑一名石竹一名石菊一名錦竹一名繡竹一名南天竺草一名天南竹といふ此草は古よりいづれの國の山野にもをのれとよく生出るものなれどもその名の慥に□物にあらはれしは允明天皇の御時に出雲國に生いづるよしその國の風土記にみえたるをはじめとし出雲風土記仁多郡條聖武天皇の御時には雪島のいはほにおふるなでしこと萬葉集いひ野邊みれば瞿麥(ナデシコ)の花咲にけりと同上いひまた見渡せば向ひの野邊の石竹(ナデシコ)或は瞿麥(ナデシコ)はわがしめし野の花同上など歌によみて皆人それ〴〵の思ひを述延喜の御時にはいはゆる出雲及び伊賀近江また上總下總などよりも此子を採て藥用に奉りし也延喜式典藥寮そのをのれと生出る中に野邊のものはその花淡紅色にて山生のものは稀に紅色のものあり本草綱目啓蒙今は野邊のものといへどもまた白色のものありこれは弘景の說に一種微大邊有ニ叉椏一といへるものにて近ごろはこれにも數種あり大和本草また近世薩摩種といふものありその花尤大にして單葉千葉及び紅白淺深間色の數品ありてみるに堪たり此たねをまくときは花色よく變じ野生のものはしからずとも本草綱目啓蒙いへりこれ卽野邊に生出るなでしこの一種にして又からなでしこありこれ淸少納言のからのはさら也と枕草紙いへるものにて今は字音のまゝにこれを石竹(セキチク)とのみいひてなでしことはいはず淸少納言は深養父の孫元輔の女にして圓融院の御時の人なればそれより以前に渡りこしものなれば歌にいしたけまたいしの竹とよめるは此からなでしこの事なるべしとおもひしが春日野に石の竹にも花咲と夫木和歌集いひあづまのおくにおふる石竹藻鹽草引ニ俊賴歌一ともよみしによれば舊よりよみ來りしなでしこと同じ事にて淸少納言のいはゆるからのをさしていひしにはあらず

御集葵を古來歌二　後一條入道關白

をのかはに日かけもとむる草よりも
猶心なき身をいかヽせん

文應元年七社百首　民部卿爲家卿

くもりなき日かけにむかふあふひ草
かけてあまねきよを賴らん

同　同

神まつる日つきにならふもろかつら
同しかさしそ見るもかしこき

百首歌五首中　藤原爲顯

かも山や日かけにむかふあふひ草
かたふきやらぬほとそ久しき

柳下影供百首　從二位行家卿

みあれひく時は來にけりけふもかも
かつらき山に葵とるらむ

千五百番歌合　前中納言定家卿

あふひ草かりねの野邊に時鳥
曉かけてたれをとふらん

同　法橋顯昭

たれもみなたのみをかくるみあれ山
神のめくみにあふひとをしれ

寛元三年結緣經百首歌　民部卿爲家卿

かも山のみあれをちかみいまこそは
神のみやつこあふひかるらめ

夏歌中堀川院御時百首　大納言師賴卿

日かけ山おふるあふひのうらわかみ
いかなる神のしるしなるらん

建長八年百首歌合　右近中將忠基卿

日かけ山けふのかさしのもろは草
かけて賴むと神は知るらん

同　從二位行家卿

あふひ草かくる時きぬかのおくの
わかきかつらのしつえはやとれ

堀川院百首　俊賴朝臣

けふくれはしとろにみゆる山かつの
をとろのかみもあふひつけたり

山家百首葵藏老駿　源仲正

おきなさひけふそ昔にさしかへる
あふひのわか葉おいかけにして

けふかさしては誰かかさゝん

長久二年四月土御門右大臣家歌合葵　源　賴　實

けふみれはかけてかへらぬ人そなき
あふひそ神のしるし成けり

花園左大臣家小大進

うらやまし入日のかけのさそふには
にしへもなひくあふひ草哉

額字百首蔦枝句中開露　前中納言定家卿

かけ見ゆるひとへのころもうちなひく
あふひもすゝし白きすたれに

文治六年女御入內御屏風賀武下御社師邊賣付たる人あり　三條入道左大臣

けふはみなをりにあふひをかさす哉
たのむみおやの神のしるしに

寬喜元年女御入內御屏風人家有樹陰簾懸葵　西園寺入道太政大臣

もろかつら日かけやおそき玉すたれ
あけてもすゝしならの下かせ

同　民部卿爲家卿

神まつるときはきぬらしやと每に
けふはあふひのもろかつらせり

同　從二位家隆卿

あふひ草けふかけそふる玉かつら
なかきちきりも神のまに〳〵

此歌或註云玉かつらかけそふる事不審と云々

文應元年七社百首　民部卿爲家卿

いつくにもおなしかさしのもろかつら
ときにあふひをかけて待哉

家集　前中納言定家卿

川たけの葉こしの色もまかふ哉
玉の簾にかくるあふひは

喜祿四年百首賀茂癸　民部卿爲家卿

あふひ草かさり車のけしきまて
けふはことなるものそとそ聞

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成卿

あはれにそ草の中にももろかつら
神のかさしとひかれそめける

同　同

よそなからけふの日よしのまつりにも
かものみあれはあふひ成けり

夫木和歌集卷第七夏部一

葵

百首歌　順德院御製

たれしかもまつのを山の葵草
　かつらにちかくちきりそめけん

あふひ親好六　光明峯寺入道攝政

ちはやふる神にかさせるもろかつら
　よろつよかけてたゝしとそ思ふ

光臺院入道二品親王家五十首　從二位家隆卿

わするなよゝるへのみくさうちはらひ
　君にあふひのかけを待つゝ

光明峰寺入道攝政家歌葵秋風　前大納言資季卿

神まつるけふのみあれのかさし草
　秋風かけてわれやたのまん

葵現好六　中原師光朝臣

そのかみのみかけの山のもろはくさ
　けふは見あれのしるしにそとる

永萬二年五月輕成卿歌合月　清輔朝臣

あふひくさとるやみかけの山邊には
　月のかつらもともにみえけり

御集葵　中務卿御子

うかりけるみかけの山のもろは草
　かけきやかゝるなけきせんとは

人もみなかつらかさしてちはやふる　貫之
　神のみあれにあふひなりけり

經信卿家集　六條右大臣

かつらめのあゆにはあらすあま人の
　かつくあまきぬけふにあふひそ

この歌は四月祭のころすさかのあまうへときこゆる人になかきゝぬをつかはすとてよめるといふなり

堀川院御時百首葵　仲實朝臣

神山のそのゝ葵をくさりつゝ
　けふのみあれにかさしつる哉

家集　周防內侍

なへてにはかけてもいはし君かため
　ちよまつのをのあふひ草みて

この歌は院御時松尾にまいりて歸りあふひまいらするとてよめるとぞなり

家集　平祐擧

かたをかやいかきのはらのあふひ草

る　　　後京極院

わか袖に神はゆるさぬあふひ草
　心のほかにかけてみるかな

上西門院いつきときこえ給ひける時待賢門院かんだちめにわたらせ給たりけるに御ともにさぶらひて齋院の女房のなかにあふひにつけてつかはしける　　　兵衞

もろかつらかゝるためしはあらしかし
　けふ二葉なるちよをそふれは

二葉なる千年をそふるもろかつら
　しめのうちには例にそ引　崇德院安藝

まつりの使つとめ侍し事を思出て讀侍ける
　後宇多院宰相典侍

忘れすよいのるみ山のあふひ草
　かけし昔も遠さかれとも

新後撰和歌集卷第三夏歌

住吉社によみて奉ける百首歌中に
　皇太后宮大夫俊成

いかなれは日かけにむかふあふひ草
　月のかつらの枝をそふらん

祭の使にて思ひつゞけ侍ける　藤原爲藤朝臣

こととしとや契おきけんあふひ草
　わきて心にかけしかさしを

古今六帖草

あふひ

思ふなかさけにゐひにし我なれは
　あふひならてはやむくすりなし

新撰六帖草

あふひ　　　衣笠内大臣家良公

もろかつらあふひまれなるかなしさを
　こゝろの中にかけぬまそなき

哀なりみあれの後のあふひ草　前大納言藤爲家
　なにゝつくへき我身なるらん

玉くしけみあれのけふの葵草　九條三位入道知家
　かけにし世々も年ふりにけり

いく二葉さてのみよゝに葵草　左京大夫行家
　神のかさしそかけて久しき

右大辨入道光俊

よしさらはかけしやけふのあふひ草
　としにまれなる契なりけり

やそうち人のかさしにそさす

藤原爲道朝臣二たび賀茂の祭の使つとめて侍けるにいひつかはしける　よみ人しらず

君か代に二たびかさす葵草
神のめくみもかさねてそしる

返し　藤原爲道朝臣

君か代に又立かへりあふひ草
かけてそ神のめくみをはしる

堀川院に百首歌奉ける時あふひを　前中納言匡房

大宮のひかりになひく神山の
けふのあふひや日かけ成らん

玉葉和歌集巻二十神祇歌

賀茂祭の近衞使つとめて後程なく春宮亮になりてつぎの年本宮の使つとめ侍けるに思ふ事ありて　前中納言隆良

神はよも思ひも捨しあふひ草
かけて二たひつかへつるかな

續千載和歌集巻第九神祇歌

見あれの日おとづれて侍ける人の返事に　祐子內親王家紀伊

もろかつらかた〳〵かくる心をは
衾とも見しかものみつかさ

續後拾遺和歌集巻第三夏歌

久安百首歌奉ける時　皇太后宮大夫俊成

千早振賀茂の社の葵草
かさすけふにもなりにける哉

だいしらず　順德院御製

たれしかも松のを山のあふひ草
かつらにちかく契そめけん

新千載和歌集巻第三夏

藤原雅宗朝臣近衞使つとめ侍ける時思ひつゞけ侍ける　前中納言雅孝

ことしまて四代かけきつるあふひ草
たゝぬ契は神やうくらん

正治二年百首歌奉りける時　前中納言定家

もろかつら草のゆかりにあらぬとも
かけてまたるゝ郭公かな

新拾遺和歌集巻第三夏歌

嘉暦四年御著帶の後祭の日あさかれゐの御几帳に葵のかゝりたりけるを御覧じてよませ給け

堀川院の御時百首の歌奉りける時あふひをよめる　藤原もとゝし
あふひ草照日は神の心かは
　影さす方にまつなひくらん
賀茂のいつきおり給ひて後まつりの見あれの日人のあふひを奉り侍けるにかきつけられて侍ける　前齋院式子內親王
神山の麓になれしあふひ草
　引別ても年そへにける
新古今和歌集第三夏歌
　齋院に侍ける時神たちにて　式子內親王
忘めやあふひを草に引結ひ
　かりねのゝへの露のあけほの
あふひをよめる　小侍従
いかなれはその神山のあふひ草
　年はふれとも二葉なるらん
新勅撰和歌集卷第三夏歌
　だいしらず　讀人しらず
千早振賀茂の卯月に成にけり
　いさうちむれて葵かさゝん

文治六年女御入內屛風に　後德大寺左大臣
いくかへりけふのみあれに葵草
　頼をかけて年のへぬらん
　寬喜元年女御入內屛風に　權中納言定家
久かたのかつらにかくる葵草
　空の光にいくよなるらん
續古今和歌集卷第三夏歌
　夏歌中に　從二位家隆
少女子かゆふかみ山の玉かつら
　けふはあふひをかけやそふらん
承元二年祭使神館にとまりたるあしたいひつかはしける
思ひやるかりねの野への葵草　前中納言定家
　きみを心にかくるけふかな
堀川院御時百首歌に　祐子內親王家紀伊
年をへてまつのを山の葵こそ
　色もかはらぬかさしなりけれ
新後拾遺和歌集卷第三
　中務卿宗尊親王家の百首歌に
神祭るけふは葵の諸かつら　前右兵衛督敎定

古今要覽稿卷第四百七

草木部あふひ

和歌

萬葉集卷第十六

作主未詳歌一首

成棗寸三二粟嗣延由葛乃後毛將相跡葵花咲

古今和歌集卷第十物名

あふひかつら　よみ人しらず

角計あふひの稀になる人を
いかゝつらしと思はさるへき

人めゆゑ後にあふひのはるけくは
わかつらきにや思ひなされん

後撰和歌集卷第四夏歌

加茂のまつりの物見侍ける女のくるまにいひ入て侍ける　よみ人しらず

行かへるやそうち人の玉かつら
かけてそ頼むあふひてふ友を

返し

ゆふたすきかけてもいふなあた人の
あふひてふなはみそきにそせし

後拾遺和歌集卷第十九雜五

後一條院おさなくおはしましけるときまつり御覽じけるにいつきわたり侍けるをり入道前太政大臣いだき奉て侍けるをみ奉りてのちに太政大臣の許につかはしける　選子內親王

光出しあふひの影をみてしかは
としへにけるも嬉しかりけり

返し　入道前太政大臣

もろかつらふたはなからも君にかく
あふひや神のしるし成らん

詞花和歌集卷第二夏部

齋院の長官にて侍けるが少將に成てかもの祭のつかひして侍けるをめづらしきよし人のいはせて侍ければよめる　大藏卿長房

年をへてかけしあふひは變らねと
けふのかさしは珍らしき哉

千載和歌集卷第三夏歌

而非二二物一時珍以レ根麁氣臭者爲二杜衡一支離決裂遂與二文選楚辭等古人所レ指之杜衡一不二相合一予爲二杜蘅一說二千歲之寃一

按に杜蘅は原香草といへ共細辛とは全く別種なり故に博物志云杜蘅亂二細辛一山海經云其臭如二蘼蕪一名曰二杜蘅一又云浮戲之山多二少辛一とかゝれば杜蘅少辛は必ず一物にあらず且杜蘅の西土に産するものは其種國産よりは香氣至て勝れるものなるが故に名醫別錄に杜蘅作二浴湯一香二人衣體一酉陽雜俎に馬蹄香其葉甚香などいへり凡和漢全く同種のものといへ共風土の異なるによりては其品の優劣あるはもとよりのことなるに今松岡玄達ひとり國産の杜蘅の其香氣彼より劣れることをしらず漫に杜蘅細辛を以て一物とせしは謬誤甚しされど國産にても一種加州に産するものは葉口にして香氣多きよし本草啓蒙にみえたれど此種も根は至て芳香なれど葉には絶て香氣なければさらに山海經の其臭如二蘼蕪一といへるものともおもはれず又葉を杜蘅とし根を細辛とすれどもおよそ葉に香氣多きものは細辛といへ共世にいと稀なるものなればいかゞあらん

べきかさすればつぶねぐさは猶みらのねぐさの如く根の狀全く其草の圖に似たるによりて命ぜし名なるべきか

かんあふひ 本草啓蒙

○按に此草嚴寒の時といへ共其葉かれずして其狀葵の如し故に名づく

ちやうじやのかま 同上越後方言

○按に此花の狀頗る釜の如しよりて名づく

おけばな 同上

○按に其狀おけに似たるをいふ

ちやがまのき 同上山城鞍馬方言

○按に茶釜もまた其狀相似たるをいふきは甘草をあまきといへるきの如し

かげのあふひ 同上

○按にかげは山のかたはらをいふ

つぼばな 同上

○按につぼもまた其狀によりて名づく

杜蘅 證類本草引ニ名醫別錄一

○本草圖經神農本經云爾雅杜又名土鹵然杜若亦名杜蘅或疑是杜若據ニ郭璞注ニ云似レ葵而香故知是此杜蘅也今按に本草類編に細辛をみやまぬなはと訓ぜしによれば蓋し杜蘅の蘅も荇と音通にて其葉頗る荇菜に似たるによりて命ぜしなるべし

馬蹄香 唐本草

○葉似レ葵形如ニ馬蹄一故俗云ニ馬蹄香一

土鹵 爾雅

○名義詳ならず

土荇 本草和名引ニ釋藥性一

○按に荇は荇菜をいふ

杜葵 本草綱目

○山海經云杜衡狀如レ葵

土杏 正字通

○案に杏は卽莕菜にして詩周南にいはゆる荇菜なり

杜細辛 本草綱目引ニ土宿本草一

○正誤

用藥須知云杜衡細辛一物也按ニ爾雅一蘅杜衡杜若之通名而保ニ于芳草一本草有ニ杜衡一亂ニ細辛之說一諸家因襲而不レ正終杜衡細辛分爲ニ二物一不レ知ニ杜衡莖葉細辛是根名一也猶ニ莎草香附天麻赤箭之例一分ニ苗根之名一

圓ニ末尖リ莖ノ附ドコロカケテ馬蹄ノ形ノ如シ大サ二三寸形圓ナルモノアリ長キモノアリ又苦蕎麥葉ノ如キモノアリ質皆厚シ冬ヲ經テ枯レズ一カブニ葉叢生ス莖紫黑色葉ニ白斑文アリ其斑數品アリ葉中左右相對シテ白キ者アリ中央ノミ白キ者アリ葉後白キモノアリ中央一線白キ者アリ滿葉細白條綱ノ如キモノアリ又全ク斑ナキ者アリ三四月花ヲ開ク紫黑色此花ヲ鹽藏ニシテスイモノニス味淡シ花ノ形釜ノ如クシテ上ニ三瓣アリ根ハ細辛ヨリ粗クシテ臊氣アリコレヲ藥舖ニテ近江細辛又土細辛ト名ケテ細辛ニ充テ貨ル眞ノ細辛ニアラズ一種葉小ニシテ香氣多キモノアリ是山海經ニ其臭如ニ蘼蕪一ト云モノナリ加州ニ產ス大サ八分許ニシテ圓ク扁シコレヲ錢葉ノ杜衡ト云フ世ニ錢細辛ト云ハ非ナリ

證類本草引ニ集註本草一云杜蘅根葉都似ニ細辛一惟氣小異爾處々有レ之方藥少用惟道家服レ之令下ニ人身衣一香上

又引ニ唐本草一云杜蘅葉似レ葵形如ニ馬蹄一故俗云ニ馬蹄香一生ニ山之陰水澤下濕地一根似ニ細辛白前等一今俗以ニ及已一代レ之謬矣

又引ニ嘉祐本草一云按爾雅杜土鹵注杜蘅也似レ葵而香

山海經云天帝山有レ草狀如レ葵其臭如ニ蘼蕪一名曰ニ杜蘅一可ニ以走レ馬食レ之已レ癭郭璞注云帶レ之令ニ人便レ馬或曰馬得レ之健走

人引ニ圖經本草一云杜蘅春初於ニ宿根上一生ニ苗葉一似ニ馬蹄形狀一（本草綱目に形を下に作る）高二三寸莖如レ麥藁麄細每窠上有ニ五七葉或九葉一別無ニ枝蔓一又於ニ葉莖間罅內蘆頭上貼地生ニ紫花一其花似ニ見不見一闇結レ實如ニ豆大一（本草綱目闇を暗に作るこれによれば闇は闇の誤にて暗と其字通用せしものなるべし）窠內有ニ碎子一似ニ天仙子一苗葉俱青經レ霜卽枯其根或窠有レ似ニ飾箒一（本草綱目に或窠を成空に作り飾を飯に作る）密閙細長四五寸微黃色（本草綱目寸の下粗レ於ニ細辛一の四字あり）味辛江淮俗呼爲ニ馬蹄香一今人多誤用故此詳述也

本草衍義云杜蘅用レ根似ニ細辛一但根色白葉如ニ馬蹄一之下市者往々亂ニ細辛一須ニ如レ此別レ之爾雅以謂似レ葵而香是將也杜衡與ニ細辛一相對使レ見ニ眞僞一況細辛惟出ニ華州一者良杜蘅其色黃白拳局而脆乾則作レ團

○釋名

ふたまかみ（本草和名 和名鈔）

○名義詳ならず

つぶねぐさ（同上）

○按につぶ疑らくは別に一種の草の名にてもある

害レ人

○釋名

あふひぐさ 夫木和歌集

○按に此葉頗る葵葉に似たり故に名づく

もろはぐさ 同上

ふたばぐさ 同上

○按に此二名並に雙葉の義

かざしぐさ 同上

○按に賀茂の競馬に必ずかざしとす故に名づく

もろかづら 同上

○按にもろはもろ葉の略かづらはかざしとなすによりて名づく

かたみぐさ 莫傳抄 藏玉集

○按に莫傳抄云唐に王の草花を好みてうへられける中にあふひを御このみありて其後崩御なりての跡に皇子達このあふひをうへて手向になさるれば此草を記念草とは云ひしなり

かもあふひ 大和本草 本草啓蒙

○按に此草賀茂の御陰山に産す故に此名あり

雙葉細辛 證類本草引二雷公一

○按に此草根上より一莖を抽出る事僅に一寸許上より兩莖を分ち雙葉對生する故に此名あり

ふたまかみ かんあふひ 杜蘅

ふたまかみ一名つふねぐさ俗名かんあふひ一名ちやうじやのかま一名おけばな一名ちやがまのき一名がけのあふひ一名つぼばなは西土にいはゆる杜蘅一名馬蹄香一名土鹵一名土苓一名杜葵一名土杏一名杜細辛なり此物古は飛驒國より貢せしこと延喜式にみえたれど今は處々山中陰濕の地に往々是あり形狀は大略細辛に似て一根兩莖或は三莖を生し數根相連りて數里むらがり生ず花は其兩莖の間よりいで地上に貼し狀細辛花に似て紫黑色內空にして底に付て蕋の如きものあり其內に至て微細なる實數十粒あり頗る罌粟子を二ッ三ッに碎きしが如くにして黃白色葉はすべて光澤ありて蟾蜍背の如し一種武藏多摩郡に產するものは其葉白斑なくして光澤稍薄し其他また數十種あり其形狀はくはしく本草啓蒙にみえたり延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥飛驒國九種云々杜衡十斤本草啓蒙云カンアフヒハ山ニ多クアリ陰地ニ生ズ葉

古今要覽稿卷第四百六

●草木部

あふひぐさ　かもあふひ　雙葉細辛

あふひぐさ一名もろはぐさ一名ふたばぐさ一名かざしぐさ一名もろかつら一名かたみぐさ一名かもあふひは雷公のいはゆる雙葉細辛（本草啓蒙）にして證類本草あやまりて圖する所の華州細辛なり此草諸國山中多くこれありといへ共舊より山城の御蔭山（本朝月令には採二楓山葵一爲二挿頭一とみえたり）に產するもの其名殊に高し毎年四月中の酉の日加茂より此あふひを禁中及び江都へ奉るよし又五月五日競馬ありのるもの皆此草を以てかざしとし見るものこれを簾にかくるといへり（和漢三才圖會）其義いかなる故なる事をしらずといへ共憶に山海經に杜衡可二以走一レ馬郭璞注云帶レ之令二人便一レ馬或曰馬得レ之而健走（證類本草引二嘉祐本草一〈圖經本草に令二人便一レ馬を可二以走一レ馬につくる〉）などいへることあるによりてこのあふひぐさをばそれに代へ用ひしものなるべし又は舊より賀茂にては此章を以てまさしく杜蘅にあてしもしるべからず扨此草は根上より獨莖を生じ長さ一寸或は七八分にして兩莖をわかち其上各一葉をつく形圓にしてさき尖り頗る冬葵葉の如くにして綠色毎葉龜甲に似たる紋理あり其根は細辛よりも麁にして味辛といへ共細辛よりは稍薄し

江家次第賀茂祭使云々給二挿頭華一（公卿以下執レ之近代殿上人取レ之但頭不レ取云云可レ尋）賀茂祭無二此事一往年參內後到二內藏寮一著座懸レ葵之故也

公事根源（賀茂祭）云當日使は近衞の中少將つとむ昔夢のつけ侍りしよりけふ人々あふひ桂の鬘をかくる也賀茂松尾の社司まへの日しかるべき所々へすてまつる

和漢三才圖會云葵祭四月中酉日云々獻二葵草於神前一（此山中村四月初申日取葵獻）元明帝（和銅四年）始行レ之凡稱レ葵者是也此日社司進獻二葵於禁裏及大樹一用二掛之簾一也然近世中絕焉於レ是元祿七年有二嚴命一與發令復行レ之

本草啓蒙云加茂アフヒヲ以テ細辛ニ充ル古說ハ穩ナラズ加茂アフヒハ雙葉細辛ナリ根粗クシテ辛味少シ

證類本草引二雷公一云凡使細辛一一揀去二雙葉一服レ之

按に延喜の比は陸奥出羽などより甘草を貢せし事既に上文にいへるが如くなれど後世に至ては其種いとまれなるを以てをのづから海外の產をおほく用ひしによりて武備志にはかくいへりされど後世といへ共此種絕てなきといふにはあらざるよし既に和漢三才圖會にも其說を載たり

大和本草云昔ハ日本ニ甘草アル事ヲシラズ

按に延喜式には心付かざるものといふべし

又云或人ノ說ニ甘草ハ黃芪葉ニ似テコハシ

按に或人の說は本草辨疑に駿州富士山に此草ありといふ物と一物にして前にいふ所の莖も葉も萩の如く根はかつらの如しといふ物とは全く別種なり憶に此草は今の人富士黃芪などいへる類ひなるべしまた本草大義に藤甘草を以て誤て漳州府志の甘藤となし或は本草籑に今甲斐產者葉似レ藤而蔓生といへるもまた其誤り前說と一樣にしてさらに山梨郡巨麻郡などに產する眞物をしらずして漫に甘草を以て蔓生となすものといふべし又本草啓蒙に甲斐の產を以て福州の種となすものは予いまだそのよりどころをしらず且南京甘草を以て其形福州の種に異ならず只葉圓大といへど南京の種は却て福州の物より其葉細小なるよし岩崎常正嘗ていへり因憶に其圓大といへるは全く其嫩苗を見たるにて年を經て繁茂せしものゝ小葉なるはさらにしらざるなるべし

和漢三才圖會云大者名ニ粉草一

按に此說は本草蒙筌に撰ニ壯大橫紋者一名ニ大粉草一といへるによりての事なれど本草原始には汾地草有ニ大小一今以レ大爲ニ粉草一而泥ニ干小一者不レ用不レ知レ非ニ粉草一迺汾草也選下壯大如ニ土樣一者上宜レ用といへりかゝれば粉草の粉は全く汾州の汾にして此種其地に產するものいと上品なるを以てしか名付し也然るを本草從新に大而結者良出大同名ニ粉草ニ彈レ之有ニ粉出一といへるは全く僻說なるべし本草啓蒙また粉草を辨じて原始を引しは其說よろしけれど今粗皮輕虛なるもの薄く切れば皆粹けて細末となるものを以て粉草となすは非なりといへるは原より非なれども粉の儀從新の說とはまた異なり

之粉草一其經虛細小者皆不レ及レ之𠷈積霏雪錄言安南甘草大者如レ柱土人以架レ屋不レ識果然否也

○物理小識云今重二秦粉草一正以二西邊風勁一其根直深故其力厚劉客生言西寧鎭番甘草最多葉似二天竹一但冬凋耳根鬚直下數丈外域成レ樹

あまき



『此間福州產あまき一圖之レ略』

○釋名

阿末岐 本草和名 和名鈔 大同類聚方

○此卽甘木の義なり

安萬久佐 大同類聚方

○此卽甘草二字の和訓なり本草啓蒙に此名を載せて和名鈔を引ものは誤也

之呂不知乃ね 康賴本草

○甘草の葉は全くしろふぢの葉に似たり故に名づく

甘草 神農本經

○本草原始云甘草生レ汾者佳入二藥用一根因二味甘甜一遂名二甘草一

蜜甘 名醫別錄

○これまた味によりて名づく

國老 同上

○集註本草云此草最爲二衆藥之主一經方少レ不レ用者猶如二香中有二沈香一也國老卽帝師之稱雖レ非レ君爲レ君所レ宗是以二能安和一草石而解二諸毒一也藥性論云甘草諸藥衆中爲レ君治七十二種乳石毒解一千二百般草木毒調和諸藥有功故號二國老之名一矣

○正誤

武備志云日本甘草至難至貴者也

種而人間幾希ト今官園ニ此種ナシ又甘草苗漢土ニ徴コトヲ聞カズ

本草綱目啓蒙云甘草ニ同名アリ茶蘗甘藤モ甘草ト名ク舶來ニ數種アリ南京ヲ上トシ福州ヲ次トス新渡ノ福州ハ甚ダ大ニシテ緊實ナラズ南京ハ皆細クシテ潤アリ南京ノ中ヨシホト名ケテ外皮縦ニ小皺紋アリ緊實ナルヲ擇ビ用ユベシ凡甘草ハ根ノ大小ニ拘ラズ外皮薄ク肉色深黄ナル者佳ナリ根大ナリト雖モ皮厚ク肉色淺輕虚ナルモノハ良ナラズソノ朽テ黑色ヲ帶ビ或ハ蛀モノハ並ニ用ルニ堪ヘズ本經逢原ニ中心黑者有レ毒勿レ用ト云市人根ノ最細小ナル者ヲワラ手或ハワラ甘草ト呼ブ下品ノ稱ナリ形歪斜ニシテ節アル處ヲ擇ビ出シ剉賣ヲキリコミト云櫃中ニテ折碎タルモノヲ折甘草ト云フ朝鮮甘草ハ味過テ甜シ良ナラズ紅毛甘草ハ甚大ナリ味ハ美ナレドモ性劣ト云今世上ニ栽ルモノハ南京福州ノ二種アリ然ドモ南京ノ種甚ダ稀ナリ福州ノ種ハ甲斐國山梨郡上於曾村伊兵衛下石盛村與兵衛等ノ園中ニ傳ヘ栽シモノ弘マリ京師浪華ノ種樹家ニモ多シ奥州南部ニモ多ク蒔テ藥用スト云フ其苗春舊根ヨリ生ズ高サ二三尺ソノ葉互生形シラフヂノ葉ニ似テ莖葉ニ毛刺アリ花ハ豆花ニ似テ淡紫色葉間ニ簇生スト云其實莢ヲナス小豆莢ニ似タリ子モ相似テ扁ク小シ秋深ルニ至テ苗枯ルソノ根横行シテ藤蔓ノ如シ外皮紫赤色肉黄色味甘シ享保以來舶來南京甘草櫃中ヨリ得ルトコロノ子ヲ下シテ生ズルコト數度ソノ形狀福州ノ種ニ異ナラズ只葉圓大ニシテ莖葉糙澁ナラズ

集註本草云今出二蜀漢中一悉從二汶山諸夷中一來赤皮斷理看レ之堅實者是抱罕草最佳抱罕羌地名亦有火炎乾者理多虚疎又有下如二鯉魚腸一者上被レ刀破不レ復好青州間亦有不レ知又有二紫甘草一細而實乏時可レ用圖經本草云甘草今陝西河東州郡皆有レ之春生二青苗一高一二尺葉如二槐葉一七月開二紫花一似二柰冬一結レ實作二角子一如二畢豆根一長者三四尺麁細不レ定皮赤上有二横梁一梁下皆細根也今甘草有二數種一以二堅實斷理者一爲レ佳其輕虚縱理及細韌者不レ堪惟貨湯家用レ之

本草衍義云甘草枝葉悉如レ槐高五六尺但葉端微尖而糙澁似レ有二白毛一實作レ角生如二相思角一作二一本一生子如二小扁豆一齒嚙不レ破今出二河東西界一

本草綱目云今人惟以二大徑寸而結緊斷文者一爲レ佳謂二

和漢三才圖會云甘草出ニ於南京陝西河東山西一者爲レ上皆稱ニ之南京甘草一出ニ於福州一者細脆帶ニ微苦味一又細而如レ稍者俗謂ニ之藁手一又大者名ニ粉草一俗謂ニ之鞭手一往昔日本有ニ甘草一延喜式云々如ニ今絶不レ出雖ニ希有一而細硬不レ佳

大和本草云甘草ハ莖モ葉モ荻ノゴトシ根ハカツラノ如シ根則甘草也大ナルヲ良トス小ナルハ性薄シ昔ハ日本ニアル事ヲシラズ近世甲斐國ヨリ多ク出ヅ唐ヨリ來ル甘草トクラベシニ少シモ不レ異性ヨシト云奥州ニモアリ鼠好テ食シテ根タヘヤスシ子ヲウヘテ三年後ノ是ヲトル其根如ニ竹根一繁茂ス或云深山所々有レ之黄芪葉ニ似テコハシ

用藥須知云甘草漢ヲ可レ用和邦ニモ甲斐國產之形大ニシテ節々斷皮ノモノヲ上トス一種阿蘭陀甘草ト云アリ甚大ナリフトサ一寸餘ニ及ブ形美ナレドモ性特ニ劣ル用ユルニ不レ堪近世藥家ニ朝鮮甘草ト稱スルアリ但味甜ニ過テ不レ好不レ堪レ用南京福州共可レ用

本草纂云甘草今甲斐產者即如ニ鯉魚腸一者葉似レ藤而蔓生又生ニ奥州一鼠好食レ之

本草大義云甘草藥舖有ニ三種一曰阿蘭陀甘草甚太徑一寸許曰朝鮮甘草味過レ甘兩劣ニ于南京福州產一矣又有ニ上中下一藥商名呼ニ堅鞭一者爲レ上呼ニ中鞭一者爲レ中赤皮粗理肉色淡黄堅實者爲レ佳品下名ニ伐籠一又屈曲有ニ節瘤一者名ニ良香手一可レ用又有ニ和產一延喜式云々今不レ聞レ出レ近取ニ甲州及駿州富士山之邊一方其如レ蔓呼ニ藤甘草一者非ニ甘草一漳州府志所レ謂甘藤也根形小而味淡薄者是也

物類品隲云甘草稻若水云今甲斐地方山皆有レ之貝原氏云近世甲斐國ヨリ多ク出ヅ直海氏云古ヨリ富士甘草トテ富士山ヨリ出ヅト按ニ今官園ニ所有ノモノ本甲斐國ニ出ヅ然レドモ山中多出ル事ヲ聞カズ又其他處產スルモノ未レ見レ之甲斐產苗ノ長二三尺葉ハ紫藤葉ニ似テ稍小ニシテ微毛アリ根皮紫赤色肉黄色ニシテ味甘シ此物甲斐國山梨郡上於曾村伊兵衞同郡下石盛村與兵衞園中ニアリ其始所レ出未レ詳或云甲斐深山中ヨリ出ヅ或云武田信玄漢土ヨリ得テ植ルモノ今尚存スト何レカ是ナルコトヲ知ラズ享保中阿部將翁軒台命ヲ奉ジテ甲斐國ニ至リテ是ヲ得タリ今東都及駿府官園ニアルモノ是也駿府ニテハ甚繁茂ス東都ニテハ繁茂セズ戸田氏非藥選云一種稱ニ南京樣一者御園之

又一種其葉頗る甲斐のものと相似て稍少にして圓く白毛絶てなく其根紫赤色にして最肥大なるものあり岩崎常正の說に此種は往時松平讃岐守目黑の下邸に有平賀國倫背て植置しものゝよしなれど今は絶てなし世にいはゆる南京甘草は蓋しこれなるべしといへり其他此種今またこれある事を聞かず

岡村尙謙云甘草は古よりこれ有といへ共其貢せし國は僅に陸奥以下三箇國に過ずされど其貢せし國は僅に三箇國なりといへ共其分量の多きをみれば其國々には必ず此物はいと多く生出し物にて菊花或は熊膽などの如くそれを貢せし國もまた其物もいとまれなるものとは其儀全く異なりといふべし若くは古といへ共おのれと山中に生出しものは稀なれどもそれを人間に移し植てさらに繁衍せしものを製していと多く貢せしにてもあるべきにやそれはともあれ古者砂糖なき比は甘葛煎を以て諸物の甘味を調ぜしものなるにもし今の甘草の如く味甘きものまた古にも多くして其貢せし數の如くならば必ず此物を煎じなして甘草煎などいふべきにさなきをみれば古の甘草は疑らくは其味甘葛よりもやゝ劣れる物にて全くは志呂布智の根などにして今ある甘草とは其種絶て異なるものなるもいまだしるべからず

延喜式云諸國進年新雜藥陸奥國六種云々甘草十斤

又云出羽國二種云々甘草五斤

又云常陸國二十五種云々甘草二十五斤

本草和名云甘草出二陸奥國一

康賴本草云甘草日本內於二奥州一有レ之

大同類聚方云阿末岐味大爾甘久微香之無レ毒五六月開レ花七月熟レ實乎九月採レ根乎乾用

本草蒙疑云甘草ニ上中下アリ藥舗ニ上ヲ堅鞭ト云次ヲ中鞭ト云又次ヲ切込ト云又名上中下アリ最下ヲ良香手云ト云良香ニ似テ細小ナリ細キ者ヲ藁甘草ト云

又云太クシテ皮薄ク色黃ニ堅實ナルヲ爲レ上細クシテ堅實ナルヲ中トシ大小ニヨラズ輕虛ニシテ色ウルミ或ハ蛀ヒ又ハ朽テ黑色アリ皮厚クシテ脫タル皆下ナリ

又云駿州富士山ニ此草アリト云延喜式ニモ常陸以下ノ三箇國ヨリ貢レ之トアリ今採コトヲ失シテ人不レ知レ之露下朽ルコト可レ惜哉

古今要覽稿卷第四百五

●草木部

あまき　甘草

阿末岐一名阿末久佐一名志呂布智のねは西土にて甘草一名蜜甘一名國老といへるもの也今彼より舶來せるうちに南京の廬州山西の汾州より出るものを上品とす(和漢三才圖會)其皮赤く斷理賢實にして味極て甘し弘景の説に抱罕草最佳(本草綱目)といへるは蓋しこれと同種なべるし次は福建の福州より出(同上)其狀麁大輕虛にして且中心或は黑色を帶るありまた喝蘭及び朝鮮より來れるは其品皆南京山西のものにしかざるよし諸家本草にいへるが如し扨皇國にて古は此種陸奥出羽常陸より貢せし事詳に延喜式にみえたれど今は其國々に產する事ある事を聞かずされど和名本草及び康賴本草にも甘草陸奥よりいづるといひそれより下りては和漢三才圖會にまた延喜式を引て各國今絕不レ出まれに有といへ共細硬にして佳ならずといひ大和本草にも甘草奥州にあり鼠好て食して根絕えやすしまた太田澄元の説にも陸奥棚倉山中甘草あり卽大和甘草是也と或人のいへるによれば出羽常陸の二箇國はしらずといへ共近比までも陸奥にはたしかに此種有しとぞ一種今甲斐の地方に產するものあり其葉シラフヂの葉に似て莖葉共に微しく細白毛及び糙澁ありて其根橫行藤蔓の如く外皮紫赤色內肉純黃麁細定りなしといへ共その味最甘し故に大和本草に甲斐のものは唐より來る甘草とくらべしに少しも異ならず性よしといへり又東都及び駿河の御園に養へる甘草を世の人おほくは漢種のやうにいひなせどもこれは享保中阿部將翁台命を奉じて甲斐に至り擕來りしものなるよし詳に物類品隲にみえたればそれにて漢種にあらざる事明らけし扨此種は延喜の比陸奥出羽などより貢せしものと全く同種なるべきや今千歲の後絕て其實をしるものなしといへ共康賴本草に甘草を志呂布智のねと訓せしは全く其形狀二種相似たるによりての事なれば其比陸奥より出せし甘草はいづれにも今甲斐に產するものと同種なるべければ延喜の比に貢せしものもこれにて其おほよそはおしはかるべし

香子の名なしこれは大和本草にその抄を引て香子は猪舌ともいふといへる文によりて遂に抄にも香子の名有とおもひしなりいはゆる大和本草に香子といひしは其文の上に萬葉集の歌を引て堅香子とあるそのくだり故に堅字を省きてたゞ香子と書しなり然るを抄にも其名有とおもへるはひが事なり

說に此草を旱藕とするは穩ならずといへりこれはいとよき考なれども大和本草カタコの上に和品としるせしによれば其實は篤信も若水の說をよろしとせしにはあらざるべし

又云萬葉十九攀二折堅香子草花一歌アリ古抄ニ云香子ハ猪舌トモ云春紫色ノ花サク今按に是カタコナルカ新撰六帖ニモカタカコノ歌アリ

按に新撰六帖にはかたかしと有こゝにカタカコと書しは誤なりさるは古今六帖に萬葉の歌を古點のまゝにかたかしとのせたるゆへに新撰には木なりと思ひて橿の字を用ひたるなり

採藥使記注云カタクリハ花萎ミテ後ニ葉ヲ生ズ花ノ時葉ナキ故ニ姥ユリトモ云

按に此說あやまりなりかたくりは先葉を生じて後に莖をぬき出て花さくものなるに今花萎みて後に葉を生ずるといふはうたがはし且姥ゆりは舊說に象山其母に擬せしものにてかたくりの名にはあらざるべし

本草啓蒙云山慈姑和名アマナ車前葉山慈姑和名カタクリ又云團慈姑ハ常ノ山慈姑ナリ

岡村尙謙云かたくりは卽山慈姑にしてあまなは一種の團慈姑なり凡山慈姑のはじめてものにみえしは藏器本草なり其葉似二車前一といへはかたくりは卽山慈姑にして正に本條たる事明けしまた其根如二慈姑一といへど其實は根の狀細長くして葱本に似たるもの故に日華本草に有二一種團慈姑一根如二小蒜一とみえたりこれはかたくりの根の細長きにむかへて團といひ且それを以て一種とはいひしなり然るを皇國諸家の說ふるくより團慈姑を本條とし本條の山慈姑を以て車前葉の三字を冠して一種とせしは全く時珍の說の誤りをうけて藏器の說をよそにせしものなれば謬誤殊に甚しされど松岡子敕ひとりは其父恕菴の說を敷衍して嘗て千金方藥註を作りて山慈姑に車前葉韮葉の二種あり車前葉のものはかたくりにして韮葉のものはあまななりといへり其車前葉のものを以て韮葉のさきに擧しは其說啓蒙よりもまされり

又云猪舌 萬葉抄

香子 同上

○按に萬葉集抄にかたかこ又はゐのしりとありて

寺井の上の堅かしの花
○按に「くみまがふ」を「ふみとよむ」と改作りしは攀折の攀を誤りて木にのぼる事とせしによりての事なるべし

新撰六帖

妹かくむ寺井の上の堅かしの　衣笠内大臣家良公
花咲ほとに春そなりぬる

誰か見む身をおく山に年ふとも　前藤大納言爲家
世に逢ことの堅かしの花

小車のもろ輪にかゝる堅かしの　九條三位入道知家
いつれも強き人こゝろかな

かつはまた岩にたとふる堅かしも　左京大夫行家
つれなき人の心にそしる

人こゝろなへておもへは堅かしの　右大辨入道光俊
花はひらくる時もありけり

按に以上六首は萬葉集の舊き點により木なりとおもひしなり古より甜擣白擣葉廣熊擣などいへる事あれどもかたかしといふ名はみえずかしは諸木にすぐれて堅強なるものなればかたかしともいふべけれど既にかしといへるは卽かたかしといふ意におふせし名なるべければそれを重てこの木の名とせんはいかゞあるべきされば仙覺抄の說のごとくかたかごとよめるにしたがふべし堅香子辨また右の歌を載せて古今六帖新撰六帖共に堅香子の子を字音にて橿と申木のことゝ心得しは誤にて御座候萬葉集等の目安にも堅香子の花はつゝじに似たる草なりと御座候へば別に心得違も有間敷樣に奉存候なるほど堅香子の花はつゝじによく似申候草に御座候先年鉢植に仕獻　上仕入二上覽一候事御座候云々

大和本草云カタコハ高二尺許莖紫色葉面ニ有二黑點一花カザグルマノ如シ紫色ナリ比叡山ニアリ正月ノ末開レ花尤美シ根ノ形芋ノ如ク又蓮根ノ如シ若水云本草紫參下ニ出タル早藕ナルベシ

按に凡かたしはは其莖高きものといへ共僅に六七寸に過ざるものなるに今二尺許といへるはおそらくは傳聞の誤りなるべし陸奥南部のものといへ共さはおひ出ざるよしなればいかで比叡山あたりのものゝしか生出る事やはあるまた其花風車の如く根蓮根の如しといふもかなはず按に本草啓蒙に古

○慈姑をくわいといへばこれをもしかいへるものなるべし井を伊と書るは原より俗語なればなり

くわ 同上安藝方言

○卽くわいのいを省きしなり

かたはな 同上北國方言

○片葉菜の儀と又はかたかごばなのつゞまりたるなるべし

だいぼせ 同上伊豫大州方言

○卽ぶんだいゆりの儀にてだいのぼせの略なるべし

かゝゆり 本草啓蒙江戸方言

○かゝは國名にやまたはかたかごゆりの略にや

かたゆり 同上

○かたこゆりの略なり

こむへいる 同上下野日光方言

○名義詳ならず

こむへいろう 同上

○按に日光の方言こむへいろといへる名堅香子辨に見えたり

山慈姑 本草拾遺嘉祐本草

○此草山中に生じて根の狀水慈姑の如し故に名づくされど此根は細長きかたにて全く水慈姑の如く正圓ならずといへどもそのおほよそを以てしか命せしなりこれは千金方藥註にかたごは根蒜に似て

かたくり



小なりといひ佐渡國上にかたはなの根は水仙に似たりといへるもまたそのおほよそを以ていひしにても其義はをしはかるべし

○正誤

古今六帖　大伴宿禰家持

武士の八十をとめらかふみとよむ

れより轉じて花の色白くして赤斑點あるゆりを鹿の子百合といへるたぐひもあればかならず白斑にのみかぎりていひしにはあらざるべし旣に鹿は黃質白斑と本草にみえたればまことの鹿の子まだらはさなくばいひがたかるべきにても其儀はをしはかるべし

ゐのしり 萬葉集抄

○按に大和本草にゐのしりを猪舌の二字に作るによれば篤信のみし仙覺抄の利字は全く多字なる事しるしこれは之多字を片假名にてシタとかきしタ字のなかの一點の落しよりあやまれるものなるべし之かれば猪舌は眞葉の狀を以て名付けしものなればなほ大葉子を牛舌草といひ小車を狗舌草と云へる類なり

かたこゆり 常毛採藥錄

○かたしはかたかこの畧ゆりはこの花百合花に似たるによりて也

かたつは 同上木曾方言

○つは音便にて卽片葉の義なり

かたくり 堅香子辨採藥使記千金方藥註南部方言

○これはかたこゆりといふ名のつゞまりたるなりこゆの反くなるにて其義はあきらけし

かたこ 大和本草千金方藥註越前大和陸奥方言

○卽かたかこのかをはぶきしなり

はつゆり 採藥使記千金方藥註江戶方言

○採藥使記註に此草正月の比花さく故に初ゆりと名づく

ぶんだいゆり 同上

○此草は少さき草いで其花のうつくしさ文机の上などに置てめづべきものなるによりてかくは名付しなるべし

かぜふきぐさ 千金方藥註越前湯尾峠方言

○論語に草加ニ之風ニ必偃といへるが如く此草一葉のものも二葉のものもすべて直立せず其狀全く風をうけてふしたるが如くなるによりて名づく

むかごからむし 同上若狹木芽峠方言

○名義詳ならず

ねずみゆり 同上西國方言

○名義上におなじ

くわい 同上攝津方言

ニ似タリ花モユリニ似テ紫色正二月ノ比花サク其根ヲトリ葛ノ如ク水飛シテ水ニテヲリ餅トナシ食フ葛ヨリハ色白ク甚ミゴトナル物ナリ土人專ラ久痢ニ用ヒテ益アリト云ナリ

千金方藥註云山慈姑ニ車前葉韭葉ノ二種アリ車前葉ノ者ハ和名カタコ一名カタクリ山城叡山四明洞下八瀨陸奧南部大和八智河上ノ山ヨリ出ヅ南部八智ノ者ハ粉ニ造リ毎年宮ヘ獻ズ二月初ニ生ズ葉ハホト、ギス草ニ似タリ又萎蕤ノ初生ニ似タリ淡青色光アリ根淡黃色蒜ニ似テ小ナリ根地ニ入コト深シ斷エヤスシ生ニテ食フベシ三月紅白暈單瓣ノ花ヲ開ク一莖一花形ユリニ似テ瓣長シ花謝ノ實ヲ結ブ四月苗枯ル翌年宿根ヨリ生ズ韭葉ノ者ハ和名アマナ一名ムギクハイ上加茂社前芝原妙心寺邊其外處々ニ生ズ

本草綱目啓蒙云藏器ノ說ニ葉似二車前一ト云ハ車前葉山慈姑ナリ深山ニ多ク生ズ葉ノ形萎蕤葉ニ似テ厚ク白綠色面ニ紫斑アリ嫩根ノモノハ只一葉ナリ年久キモノハ二葉トナル二葉ノモノハ二三月兩葉ノ中間ニ一莖ヲ抽ヅ高五六寸頂ニ一花ヲ倒垂ス大サ一寸半許六出淡紫色蕾ハ紫色深シ形山丹花ニ類シテ瓣狹細クシテ末皆反卷ス又稀ニ白花ナルモノアリ花謝シテ實ヲ結ブ大サ三分許形圓ニシテ三稜アリソノ色亦白綠ナリ根ノ形葱本ニ似テ白色性寒ヲ喜故ニ東北ノ地方ニ產スルトコロノ者苗根最肥大ナリ土人ソノ根葉ヲ採リ烹熟シテ食フ又根ヲ用テ葛粉ヲ造ル法ノ如ク製シテ粉ヲ取ル甚潔白ニシテ葛粉ノ如シ餅トナシテ食フカタコモチトヨブ奧州南部及和州宇陀ヨリ此粉ヲ貢獻スカタクリト云

本草綱目引二藏器一云山慈姑生二山中濕地一葉似二車前根一如二慈姑一又引二大明一云零陵間有二一種團慈姑一根如二小蒜一

○釋名

堅香子（萬葉集）

○名義詳ならず强ていはゞ堅は片字の意にて片葉の略香子は鹿子にして斑文あるをいふ此草はじめ生出て一とせ二とせのうちはすべて片葉にて狀おほはこの葉に似てしろみを帶なかにわきて白き筋及び紫のまだらある故に片葉鹿の子といひしなり凡鹿の子は伊勢物語の歌にも鹿の子まだらに雪の降らんなどみえて白斑の物をいふは常なれどもそ

古今要覽稿卷第四百四

●草木部

かたかこ　ゐのしり　かたくり　かたこ　山慈姑

堅香子は萬葉集にみえて今の世にかたくりといふ物なり漢名を山慈姑といふ凡仙覺抄よりこのかた歌よむ人々はこの草をしるものまれなるにみちのくの南部より此根を粉となして奉りしは寛文の頃を始とし上言堅香子辨阿部將翁が下野ふたら山におのれとおひ出しを採て物に植え奉りしは享保の頃を始とす同上又大和國八智よりもおなじく粉に作りしを奉つるといへり千金方藥註これはその始たしかならずといへ共いづれにも寛文よりはこのかたの事なるべし扨かたくりはふたら山のみならずいづくの深山にもいとよくおひいづる物にて葉の狀は大葉子(オホバコ)葉の如くまどかにて稍長くまた甜野老(アマトコロ)葉に似て色青くしてすべてしろみをおびおもてに紫黑色の斑あり其根嫩(ワカ)き時はたゞ片葉にて年ふるものは二葉となる花は片葉のうちには咲ず二葉ならびいづるものはかならず二月の頃其葉のなかより四五寸ばかりの莖をぬき出て花をつく狀つゝじあるはゆりなどのはなに似てさかしまに垂れはなびらはかみにそりかへりて色は薄紫なり又こむらさきも有しろきもあり近きあたりにては鼠山大宮八幡の境内にいと多し

萬葉集卷第十九云攀ニ折堅香子草花ニ歌一首物部能八十乃𡢳嬬等之把亂寺井之於乃堅香子之花

○仙覺抄に此歌の落句古點にかたかしの花と點せり是をかたかこの花とよむべしかたかこ又はゐのしりといふは花咲草なり其花の色は紫也云々按に攀は山にのぼるをいひ折は花に莖をそへて採をいふ此攀折の二字によりて或はかたかこをかたかしとはおもひ誤れるものなるべし

上言堅香子辨云私儀此堅香子堅くりと申もの享保年中下野國日光山より始て取出し獻上仕候此草は本朝固有の物にて奥州南部より根を製し獻上に相成候其譯は能存候南部より獻候は寛文年中よりの事に御座候

採藥使記云奥州南部ニカタクリト云草アリ其形百合

名萎蕤一名菀竹
本草綱目云圖經本草曰世傳青黏是黃精之正葉者
按に此數說によれば萎蕤も黃精も原是一種のやうにきこゆれども凡百卉の內その形狀相似たるを以て同名を稱する事和漢其例殊に多し旣に阿末奈はもと萎蕤の名なるを黃精にもまたこれを稱し露久佐はもと黃精の名なるを萎蕤にもまたそれを稱し且萎蕤も黃精もともに甜野老ととなへ或は楠も樟も同じく久須の枝と訓ずる類あげて數べからずかくその名を同くすれどもその物に至りては必ず二種を以て一物とせしものにはあらずいはゆる西土にて黃精一名萎蕤一名白及地節一名黃芝などいへるもその儀全くこれにおなじ然るを或人の說に苗を萎蕤とし根を黃精とし萎蕤も黃精も原是一物にしてたゞ苗根によりて其の名を異にするものといへるは其理なきにあらずといへ共また必しも然らざるに似たりもとより萎蕤は苗の形を以て名付黃精は根の形によりての名なる事は古今韻會及び本草綱目の釋名に詳なればさらにいふべくもあらず古より萎蕤黃精は黃精にしてそれ〳〵に命名者の主とする所ありて其物によりて其名を異にせしものなれば萎蕤も黃精も必ず一種にはあらざる事明らけしさはいへ名醫別錄の萎蛇の蛇は音移にして卽爾雅の萎萎と一物なるを別錄を作るもの絕て此儀をしらず漫に萎蛇を以て別に有名無用部にのせしは全く重出なり詩召南云委蛇委蛇小雅云維虺維蛇其音義しるべし又岡村尙謙の說には詩鄘風に委委佗佗爾雅に委委佗佗美也とこれによれば委蛇卽美草の義にして述異記にいはゆる麗草の意なりといへりこれまた一說
康賴本草云女萎惠比禰久佐
按に古書に絕てこれなき名なれば其義疑ふべしもしくは此根槪節にして鬚多く其形は少しく海老の形に似たるによりてしか訓ぜしものなるにやされど海老はえの假字にして惠の假字にあらざれば其義いよ〳〵疑べし又壒囊鈔に惠具を以て女萎の訓とせしは袖中抄に據ていふなり袖中抄はヱミクサの上下略とおもひしなるべし猶ヱクの部にくはしく記す

須壽百合本草纂本草啓蒙

○此花風鈴に似たり故に名づく

甜野老大和本草本草纂

○味甘くして其狀野老に似たるを以てこれを名づく

女萎神農本經

○此草女の體に似て柔麗委迤たるを以て女萎と名づく

委萎太平御覽

○按に字彙に萎腇輭弱貌とあれば萎萎の義として しるべし

萎蕤證類本草

○按に吳氏本草に萎を葳に作る古今韻會に葳蕤草木葉垂之貌といへりおもふに此苗すべて直上せず花また下垂して正に纓緌の如くなるによりて萎蕤とは名付しなり○和名鈔葳蕤の上に女字ありて女葳蕤の三字につくる

○正誤

本草綱目云蘇敬曰女萎功用及苗蔓與ニ萎蕤一全別列在ニ中品一今本經朱書女萎能效璺字即萎蕤之切

按に女萎二種あり一種は本條にして一種は蔓草なり今これを詳にするに蘇敬のいはゆる女萎は卽荊襄間の方言にして弘景のいはゆる今療下痢方多用ニ女萎一といへるものと全く同種也今混同して以て一ッとなす物は謬誤最甚し

本草原始云女萎苗葉類ニ冬青一但冬青凌レ冬不レ凋故獲ニ女貞之譽一此物秋末卽萎故有ニ女萎之名一

岡村尙謙云女萎の苗葉かならず女貞に似ず且萎字を以て枯萎の儀となすものはまた大なる誤なり凡女萎は其草狀頗る女體に似て柔麗委迤たるを以て名付し物なるが故に其一名を女草また姓草或は麗草ともいへる事詳に述異記にみえたり又時珍の說に本經女萎の爾雅委萎二字卽別錄萎蕤也上古鈔寫訛爲ニ女萎一爾といへりこれよき考に似たりといへば今述異記によりて深く其儀を考ふる時はいまだ必しも然らざるに似たり

本草和名云別錄萎蕤一名地節一名玉竹又引ニ太淸經一黃精一名萎蕤瑞草經黃芝卽黃精魏志樊阿傳靑黏一名黃芝一名地節

證類本草云隋羊公服ニ黃精一法云黃精是芝草之精也一

白裏青根大如ㇾ指長一二尺可ㇾ啖
本草綱目云萎蕤處々山中有ㇾ之其根橫生似二黄精一差
小黄白色性柔多ㇾ鬚最難ㇾ燥其葉如ㇾ竹兩々相値亦可二
采ㇾ根種ㇾ之極易ㇾ繁也
又別錄云萎蕤生二太山山谷及丘陵一立春後採陰乾
又云弘景曰按二本經一有二女萎一無二萎蕤一別錄無二女萎一
有二萎蕤一而爲ㇾ用正同疑女萎卽萎蕤也惟名異爾今處
處有二其根一似二黄精一而小異服食家亦用ㇾ之
○岡村尙謙曰吳氏本草に萎萎一名萎蕤とあれば萎
蕤の女萎たる事その義疑べからず
太平御覽云吳氏本草曰萎萎生二太山山谷一葉青黄相値
如ㇾ薑二月七月採
救荒本草云萎蕤今南陽府馬鞍山有ㇾ之苗高一二尺莖
班葉似二竹葉一濶短而肥厚葉尖處有二黄點一又似二百合
葉一脚頗窄小葉下結二青子一如二椒粒大一其根似二黄精一
而小異節上有ㇾ鬚味甘性平無ㇾ毒
通雅云鹿藥卽延壽果也開寶本草有二鹿藥一甘温似二黄
精一鹿食二其根一胡洽言鹿食二九種解毒之草一此其一也
或云卽是萎蕤今北京甞食二延壽果一一名鹿跑草言鹿好
ㇾ淫旣傾而仆辟牝鹿啣二此根一與食ㇾ之卽復起其味甘而
微澁比二黄精一細長于司直曰鹿藥
『此間彩畫二圖略ㇾ之』

○釋名

惠美久佐本草和名 和名鈔
○按に惠美の儀いまだ詳ならず又大同類聚方に惠
美を依美に作るものは其假字たがへりといふべし
再按に古事記及び萬葉集などに惠美或は惠麻比と
いふは卽咲字の意也さて麻比の反美なればゑみと
いふもゑまひといふも其語のことば一ッにて此草
いとしなやかなるさまいかにも少女のゑまひする
にやゝ似たればとてゑみくさとは名付し物なるべ
しされば西土にて女草或は麗草などいへるにも其
義よく叶へり
阿末奈同上
○此卽甘菜の意なり本草綱目に萎蕤嫩葉及根並
可二煮淘食茹一とみえたり
烏百合大和本草 物類品隲
○莖葉ともに百合に似たり故にからすゆりといふ
猶其形小瓜に似たるを以て玉瓜を烏瓜といふに同
じ

又云備中國四十二種云々女萎
又云阿波國三十三種云々女萎
又云讃岐國四十七種云々女萎
大同類聚方云依美久佐（ヨサミクサ）味甘久無レ香無レ毒七月爾採レ根乎陰乾用
本草辨疑云今ノ世ニ黄精ト云モノ皆萎蕤ナリ藥家ニ賣モノモ黄精ニアラズ京近邊所々山中甚多シ唯黄精ハ希ナリ花葉根共ニ能似テ只根ノ大ニ節高ク黄ナル者黄精ニシテ平直ニ節ヒキク長ク黄白ナルモノハ萎蕤ナリ
和漢三才圖會云萎蕤河州金剛山之産良其莖帶二紫色一葉似レ竹而厚窄不二對生一而向レ上花如二風鈴状一白色本末帶レ青結レ子
用藥須知云葳蕤ハ南部地方ニ出ルヲ上トス藥家ニ地黄牛ノ黄精ト稱スル是ナリ眞ナリ可レ用物類品隲云萎蕤所在ニ多シ黄精ト一類二種ナリ黄精ハ根節アリテ生姜ノゴトシ萎蕤ハ節ナクシテ地黄ニ似タリ
本草啓蒙云萎蕤ハ山中陽地ニ生ズ春舊根ヨリ苗ヲ生ズル時筍状ヲ成シテ出ルコト黄精ノ如シ微紫色苗亦直上セズ長サ一二尺或ハ四五尺形黄精ニ似タリ其莖黄精ヨリ粗大ニシテ三稜本紫ニシテ末ハ青シソノ節紫黒色ソノ葉互生ス形長橢ニシテ細縱理アリ質厚強ニシテ光滑ナラズ白色ヲ帶又葉狹長ナルモノアリ細葉ノ萎蕤ト云倶ニ花實ノ形狀ハ黄精ニ異ナラズソノ根白色横行ス長サ二寸許年々增長シ一尺餘ニ至ル竹節ノ形ヲナサズ大サ小指ノ如シ味甘ク生ニテ食フベシ乾カスモノハ淡茶褐色ニシテ滋潤透明ナリ藥舖ニ貨モノ舶來アリ奥州南部ヨリ出スハ最肥大ニシテ良トス蒸熟タルモノアリ誤リテ蒸黄精ト云フ凡黄精萎蕤ノ形狀相似テ混淆シヤスシ世人多ク誤リ認ム宜シク二條ヲ參考シテ辨明スベシ
又云鹿藥ハ深山背陰ノ地ニ生ズ春宿根ヨリ苗ヲ發ス形狀萎蕤ニ似タリ大小三種アリ大ナル者ハ高サ二三四尺中ナル者ハ一尺許小ナルモノハ數寸葉ハ萎蕤ヨリ柔薄ニシテ色深シ花ハ三月莖梢ニ穗ヲナシテ簇生ス白色大サ三分許後圓實ヲ結ブ大サ南天燭子ノ如シ城州和州ノモノハ熟シテ綠黒色甲州野州ノモノハ熟シテ赤色ナリ夏ニ入ル時ハ苗枯ルソノ根横生シテ節アリ黄精根ニ似タリ長サ三五寸許冬ヲ經テ枯レズ
爾雅注云萎萎葉似レ竹大者如二箭竿一有レ節葉狹長而表

古今要覧稿卷第四百三

●草木部

ゑみくさ
あまな　ころ　女萎　からすゆり　すゞゆり　あまと

惠美久佐一名阿末奈は俗に烏百合一名須壽百合また甛野老とよぶ物にして西土にいはゆる女萎一名萎萎一名萎蕤といへる卽是也此草彼土にては太山々谷或は滁州舒州及び漢中に生ずるよし諸本草及び爾雅にみえたり皇朝にては出雲國諸郡に產せし事其國の風土記にみえまた出雲備中阿波讃岐等より貢せし事延喜式にみえたり今は河內金剛山の產を宜しとし（和漢三才圖會）又陸奥南部より出すは其狀最肥大にしてまたよろしとす（本草啓蒙）其他諸國山中向陽の地殊に多し近くは道灌山飛鳥山鼠山等皆これあり此草莖紫色を帶て高さ二三尺葉おほよそ黃精に似て稍厚く形竹葉の如し花は葉の間に沙參の如き青白花を開き兩々相並びて垂下り青實を結ぶ大さ南天燭子の如し其根亦黃精に似てたゞ竹節狀をなさゞるを以て其別をなす事全く諸家本草にいへるが如し卽太平御覽に吳氏本草を引て萎萎桐君雷公扁鵲甘無レ毒といへるもの也又吳普の說に葉青黃相値如レ姜といひ時珍の注に葉如レ竹兩々相値といへるも蓋し同種なるべし一種其葉極て狹長なるものを細葉の萎蕤といふ（本草啓蒙）此種また諸國山中及び近邊まゝこれありその花實の形狀は全く相同じ藥にも通用すべし又太平御覽に吳氏本草を引て萎萎神農苦黃帝辛といへる兩種は古より國產いまだこれある事をきかず又別に雪笹（本草啓蒙）とよぶものあり此卽西土にいはゆる鹿藥（開寶本草）一名鹿跑草（通雅）なりこれに大小三種の別ありといへども其苗おほよそ萎蕤に似て穗をなし白花攢簇をする事は下文に詳なり

出雲風土記云出雲郡凡諸山野所在草木云々藍漆女萎

又云秋鹿郡凡諸山野所在草木云々百部根女萎

又云飯石郡凡諸山野所在草木云々白朮女萎

又云仁多郡凡諸山野所在草木云々續斷女萎

又云大原郡凡諸山野所在草木云々白歛女萎

延喜式云諸國進年料雜藥出雲國五十三種云々

女葦　斤（葦まさに萎に作るべし蓋し傳寫の誤りなり）

よりて黄精にもまたこの名を命せしなり
○正誤
本草綱目集解云恭曰黄精根陶説以二鬼臼黄連一爲レ比殊無二髣髴一
按に凡黄精は其根節ありて平ならず故に弘景の注に根如二鬼臼黄連一といへり今これを詳するに東坡詩集に鬼臼歳生二一臼一如二黄精根一而堅痩とみえたれば黄精根はもとより鬼臼に似たる事明らけし又黄連は形細小なりといへども保昇の説に江左者節高若二連珠一といへりかゝれば此二種を以て其比類とせしは其形状を説得たり然るを蘇敬注に殊無二髣髴一といへるものは全く白及樣の黄精をのみ黄精として其他の種類は絶てしらずといふべし
又云黄精葉似二柳及龍膽徐長卿輩一
按に此説その比類を失へり紹興本草圖する所諸州の黄精十種を載其中絶て蘇説のごときものなきにてもその誤りは明らけし
圖經本草云黄精四月開二細青白花一如二小豆花狀一
按に黄精は萎蕤と同じくその種類多しといへども其花に至りては皆筒咲にして末は五瓣にわかれ頗る沙參の花に似たるにその花如二小豆花一といへるはまた比類を失ふこと甚しき也
本草辨疑引二修治纂要一云黄精ハ丹波雲州ナドニ有レ之所ノ者是ヲアマトコロト云根ヲ堀テ食味甘シ根ハ麥門冬ニ似テナカミアリテツヾケリ葉ハ粽ヲ包ム篠ニ似テ筋アリ霜ノ降比ニナレバ葉皆黄色ニナル是誤也根麥門冬ニ似タル者ニ非ズ專ラ生姜ニ似タル者也葉ハ篠ニ似根ハ麥門冬ニ似タル者ハ清水賀茂相坂山ナドノ陰所ニ生ズル本草綱目ニハ淡竹ト云草也黄精トハ各別也又和名アマトコロトアルニ依テ姦商萆薢ヲ片テ充レ之不レ可レ不レ擇
本草啓蒙引二物理小識一云偏精ヲ萎蕤ト爲ハ非ナリ
按に此二説皆よく其誤りを正すものといふべし

有二脂潤一俗方無レ用レ此而爲二仙經一所レ貴根葉花實皆可二餌服一酒散隨レ宜具在二斷穀方中一黄精葉乃與二鈎吻一相似惟莖不レ紫花不レ黄爲レ異而人多惑レ之其類乃殊遂致二死生之反一亦爲二奇事一

圖經本草云黄精今南北皆有レ之嵩山茅山者爲レ佳三月生苗高一二尺以來葉如二竹葉一而短兩々相對莖梗柔脆頗似二桃枝一本黄末赤四月開二細青白花一如二小豆花狀一子白如レ黍亦有二無レ子者一根如二嫩生薑一黄色二月採レ根蒸過暴乾用今遇二八月一採山中人九蒸九暴作レ果賣甚甘美而黄黑色江南人說二黄精一苗葉稍類二鈎吻一但鈎吻葉頭極尖而根細蘇敬注云鈎吻蔓生殊非二比類一恐南北所レ產之異耳

本草綱目云黄精野生山中亦有レ劈レ根長二寸稀種レ之一年後極稠子亦可レ種其葉似レ竹而不レ尖或兩葉三葉四五葉俱對節而生其根横行狀如二萎蕤一俗采二其苗一煠熟淘二去苦味一食レ之名二筆管菜一

『此間二圖（おほゑみ、同漢種）今省略之』

○釋名

於保惠美（エミクサ）和名鈔 醫心方

○萎蕤に似て其根やゝ大なるをもつておほゑみと名づく

夜末惠美 本草和名 和名鈔

○夜末は卽山字の義なり

阿末奈 本草和名 康賴本草

○萎蕤と同名圖經本草云初生苗時人多採爲レ菜茹謂二之畢菜一味極美

佐々百合 本草鷳物類品 隲本草啓蒙

○葉篠の如くまた百合のごとし故に名づく

鳴子百合 用藥須知 本草鷳

○その義萎蕤を鈴百合といふがごとし

甜野老 大和本草 圖解本草

○萎蕤と同名

黄精 名醫別錄

○時珍云黄精爲二服食要藥一仙家以爲二芝草之類一以三其得二坤土之精粹一故謂二之黄精一

玉竹 吳氏本草 名醫別錄

○玉は美稱詩にいはゆる有レ女如レ玉といへる玉のごとし

白及 圖經本草引二隋羊公一 本草和名引二太清經一

○白及は俗に云朱蘭なり其根の形全く相似たるに

クルノ說アリ不ニ必拘一又京北花圃ニ小葉ノ黄精ト稱スルアリ卽寶鐸(ホウチヤク)草ナリ非ニ黄精一南部地方ニ出ルヲ上トス

物類品隲云黄精ニ偏精正精ノ別アリ本邦ニ所レ產ノモノハ皆偏精ニシテ正精ハナシ偏精所在ニ多シ南部產上品莖葉甚大ナリソノ正精ハ享保中漢種ヲ傳テ今官園ニアリ根葉和產ト畧相似タリ葉薄兩々相對シテ出ヅ是正精ニシテ偏精ニ比スレバ功用勝レリトス惜ラクハ世上至テ希ナリ

本草啓蒙云黄精山中陰地ニ生ズ數品アリ皆春宿根ヨリ苗ヲ生ズ初メ地ヲ出ル時籜アリテ包ミ小笋ノ狀ノ如シテ直上セズ圓形嫩綠光澤アリテ百合莖ニ似テ細ク瘦ソノ葉互生ス竹葉黄精ハ葉形狹長ニシテ竹葉ノ如ク又百合葉ニ似テ柔薄光滑ニシテ細縱理アリ長サ三五寸四五月葉間ニ花ヲ開ク本ハ筒ニシテ末ハ五瓣ニ分レ形沙參花ノ如クニシテ蒂ナシ色白クシテ瓣ハ微綠ミナ下垂シテ生ズ後圓實ヲ結ブ南天燭子ヨリ大ナリ熟スレバ黑色中ニ細子アリ其根白色横生シテ節アリ年ゴトニ一節ヲ增シ年ヲ積テ漸ク長ジ生時味微簽本草原始ニ生刺ニ人喉一ト云ハ是玉竹黄精ナリ大葉黄精ハ葉長大ニシテ粗苗高サ四五尺ソノ根節圓扁大サ一寸餘横ニ連生シテ白及根ノ形ノ如シ山人煮熟シテ食フ味薯蕷ノ如シ是白及黄精ナリ圓葉黄精ハ苗高サ一二尺莖ハ竹葉ノ者ヨリ細ク葉ハ萎蕤葉ヨリ短ク硬クシテ光アリソノ花亦小ナリ根ハ竹葉ノ者ニ異ナラズ唐種ノ黄精アリ卽享保年中ニ渡ルトコロナリト云フソノ形狀玉竹黄精ニ異ナラズ惟ソノ葉互生シ或兩葉相對シ或五七葉相對スルモノ一莖ニ雜リ生ジ紹興本草ニ圖スルガ如キヲ異ナリトス是正精ナリ藏器ノ說ニ偏精功用不レ如ニ正精一ト云此ニヨルトキハ唐種ト稱スルモノヲ上品トスベシ和產ハ皆偏精ナリ此外品類猶多シ藥舖ニ販ク者舶來ナシ皆和產ナリ奥州南部ヨリ出スヲ上品トスソノ形最肥大ナリ又蒸黄精ヲ出ス黑色ニシテ味熟地黄ノ如シ用テ果食ニ供ス蘇頌ノ說ニ蒸黄精ノコトヲ云フ本草原始ニ熟味甘甜堪レ食熟深黑色象ニ地黄一有ニ二三岐者一有ニ一二岐者一ト云フ是ナリ熟ハ九蒸九曝スルヲ云

集註本草云黄精今處々有レ之二月始生一枝多葉葉狀似レ竹而短根似ニ萎蕤一萎蕤根如ニ荻根及菖蒲一概節而長直黄精根如ニ鬼臼黄連一大節而不レ平雖レ燥並柔軟

又云美作國四十一種云々黄精三斤十兩

又云備中國四十二種云々黄精五斤

大同類聚方云袁保衣民味甘久無レ毒四五月乃內發レ花九十月採レ根切レ髭乎日乾用

本草辨疑云黄精ハ本朝諸山ヨリ多ク出レ之トイヘドモ大概萎蕤ニシテ眞ノ黄精ニハアラズ藥家ニ賣モノ皆萎蕤ナリ今自堀撰レ之ミルニ根ノ形長六七八寸色黄ニ生地黄ノ如ク節ハ大ニシテ生姜ヲ長ク雙ベタル如ノ者ト又節平ニ直ナルトアリ葉ハ二種共ニ笹ノ葉ニ似テ長ト又圓クシテ長トアリ葉ノ間ニ圓キ實アリ其節大ニシテ生姜ヲ長ク雙ベタルガ如キモノハ卽黄精ニシテ節平ニシテ直ナルモノハ萎蕤也近時黄精豐後ヨリ來ル又江府近山ニモ間有レ之唐ヨリ來ル者アリ形白芨ニ似テ細小ナリ節高シ細小ニシテ難二見分一トイヘドモ是眞ナリ生ノ時ハ甚大ナレドモ乾レ之トキハ細小ニナル者ナリ

和漢三才圖會云黄精形狀漢和相似而和者味帶レ苦出二於河州金剛山一者良江州高島郡者次レ之武州所澤又次レ之今所レ渡者多萎蕤也藥肆取二肥者一爲二黄精一瘦者爲二萎蕤一又云黄色節高者黄精黄白色節低者萎蕤也

大和本草云黄精ト萎蕤ト相似タリ黄精ハ莖青シ萎蕤ハ莖紫ナリ萎蕤根ハ與二蘆根一相似タリ藥肆ニ生姜手ノ黄精ト稱スルハ是眞ノ黄精也地黄手ノ黄精ト稱スルハ萎蕤也黄精萎蕤ノ葉有二兩々相對者一有下不二相對一者上相對スルハマレナリ黄精ハ根ツクチイモノ如ク莖葉青黄色ニシテ長シ萎蕤ハ根細ク莖赤クシテ桃枝ノ如シ葉短ク青白色粉ノ如クニ白シ黄精ハ葉ニ尖アリ萎蕤ハ葉ノサキヒノ如シ

圖解本草云今倭生者葉似レ竹兩々對生其根橫行狀如二生姜一黄色也難レ乾結レ子亦如二菝葜子一葉下有二一宛一華色淡青狀如二小豆華一萎蕤葉似レ竹而不レ尖子三粒宛根似二地黄一爲レ異

本草辨疑云黄精諸州有レ之以二南部者一爲レ佳莖葉青綠色根似二白芨一山谷肥土者苗高三四尺根大如レ拳葉似二百合一或二三葉或四五葉但對レ節生藥舖稱二生姜樣一者是也本草不二相對一者名二偏精一相對者黄精及九蒸九曝之說此皆方士之誕語又後世穿鑿鎖碎之徒所レ爲惟以二充實者一爲レ佳也

用藥須知云黄精和眞ナリ藥家ニ生姜手ト呼是ナリ本草ニ葉不二相對一者ヲ扁精トシ對生スルヲ黄精ト名ヅ

古今要覽稿卷第四百二

●草木部

おほゑみ　やまゑみ　あまな　さゝゆり　なるこゆり　あまところ　黄精

於保惠美一名夜末惠美一名阿末奈は俗にさゝ百合一名鳴子百合一名甜野老と呼ものにして西土にいはゆる黄精一名玉竹一名白及といへるもの也古は出雲國諸郡に產するよし其國の風土記にみえまた出雲越前備中美作下總等よりこれを貢せし事は延喜式にみえたり今また以上の諸國及び豐後伊豫丹波安藝山城大和陸奥武藏等よりこれを出す其草本凡數種竹葉大葉圓葉等の別あり其形狀は本草辨疑以下の諸書に詳なりいはゆる竹葉のものは其葉極て細長しまた百合葉に似てその根横行して節多し此卽さゝ百合なり近時これを以て西土にいはゆる玉竹黄精なりといへり（本草啓蒙）一種大葉のものは其莖葉尋常の者より極て長大にして根の狀白及の如し此卽古の於保ゑみにして往時商舶載來る所の白及狀の黄精なり（本草辨疑）又圓葉のものは其葉竹葉のものより短して頗る萎蕤葉に似て稍圓し西土にいはゆる葉狀似レ竹而短（本草集註）といへるものに近かるべし岡村尙謙云一種蝦夷地方に出るものは其莖葉極て肥大にして莖高さ七八尺葉長さ八九寸に至り根もまた隨て大なり夷人是を惠止良（都）伎或は惠止良（都）知といふ此卽西土にいはゆる黄精似レ薑而一幹對分葉長尺許本草謂如二竹葉一不レ背也（物理少識）といへるものと全く同種也と又一種其莖葉すべて黄精に彷彿たるものを俗に奈倍和里草といふ此種は嘗て平賀國倫遊歷の時三河國志度村山中よりはじめて携來れるよし予いまだ其毒の有無を試みずといへどももし大毒あらば實に弘景とく所の黄精葉の鈎吻に的當のものといふべし

出雲風土記云意宇郡凡諸山野所在草木云々連翹黄精

又云飯石郡凡諸山野所在草木云々大薊黄精

又云仁多郡凡諸山野所在草木云々秡葜黄精

延喜式云諸國進年料雜藥下總國三十六種云々黄精二斤

又云越前國十八種云々黄精十二兩

又云出雲國五十三種云々黄精二斤

に半夏(ヱグ)の若菜もつみは殘さし」

此歌は前說の如くゑぐと芹とを異物とおもひあやまりてかくはよまれしなり且半夏の字を以てゑぐとよめるは味によりて假借せしものなれど其誤り全く女萎の字をゑぐとよめるにおなじされどゑぐを野邊によめる歌外にはみえず因て憶に信實は實に半夏をゑぐと心得られて此歌はよまれしもまたいまだしるべからずしかいへど半夏は初春七草つめる比には其苗おひ出るものにあらざれば此說もとりがたし

萬葉考云ゑぐは東國にては與呉といひ土佐人はゑぐといへり葉は藺に似て少さく根は白く小き芋有て味少しゑぐし俗に黑くわゐといふものゝ類なり

此說またひが事なり凡黑くわゐの類は二三月の比は絕て其葉なきものにて漸く五月の比に至り衆草におくれてふとゐに似たる丈短き葉を生ずるものなればいかでゑぐにはあたるべき萬葉集に惠具採と有をつむとよめばゑぐは全く其葉をつむものなるが故にまたゑぐの若菜ともいへりもしくは葉もなき比に根のみを尋てほりとるものならでは黑くわゐの類とはなし難きにてもその誤はいちじるし

又今土佐國にてゑぐといふものは絕てなく具也(グヤ)といふものはおほきよしこれは田澤に生じて考の說の如く葉は藺に似て少く內空にして和かなり赤黑なる毛ありて葉のもとをつゝめりそを取去ば根は白く小き芋ありて味少しゑぐし民家に喰ふまた鶴の好ものにて田澤にはしをさして求レ食は必ず此具也を求る故とぞこの事のよく考の說と叶ひたるがうへに具也、具和とも音通へばかにかく思ひ合されてひとつものなる事はしるきなりと土佐國高知の人いへりかゝればゑぐはかならず土佐の方言にはあらず其具也の如きはよく考の說にはかなひぬるものともいふべけれど絕て古のゑぐとは異なる事旣にいへるが如し

なるべしされど女萎はいづくにても日あたりよき山邊におひ出て一名をあまなといひ其味甘き物にて山田の澤などにおひ出るものにはあらず又雪消の比水草にて蘇枋色に花さく草は今海内を尋ねても絶てこれあるまじき草なればゑぐの山田の澤あるは水田のあぜなどにいとよく生あるものとはその草またく異なるものなるべし凡ゑぐは賤の女もつみて常に食料に供しぬるものなれば芹の異名となすかたいと穩なるべしそれをいかにぞいづれのくにへ尋ねても絶てまれなる水草をもてゑぐとはなすべけんかゝれば袖中抄の說は傳聞の誤の甚しきなり

又云ゑぐとは芹をいふと云儀あれど六帖には芹のほかに別にゑぐをあげたり但ふるき文はくはしくあきらめずして物の異名をもたゞさず名のかはりたるを別にかける事もあれば一定にあらず俊賴朝臣わかなを仲實朝臣がもとへつかはすとてよめる歌

　をかみ河むつきにはゆるゑこのうれを
　　つみしなへてもそこのみためそ

かへし

　心さしふかきみたにゝつみためて
　　いしみゆすりてあらふねせりか

今云此歌はゑぐをゑごとよめりかへしはせりとよめりゑぐと同物とおもへるか

此贈答の歌にてゑぐのねせりたる事いと明らけし然るを六帖に芹とゑぐとを分て兩條とせしは全く名を異にして其物同じきをしらざる物なるべし

歌林樸樕云仲實の返事ニ芹トヨメルハ俊賴ノ送ラルル若菜ノ内ニヱグモ芹モアルベケレバカケ歌ニハヱグトアルヲ返シニ芹ヲモ賞シテカヘサレタル事モ有ベシコレヲ必證據ニハ引ガタシ只六帖ノ旨ヲ守リ芹ノ外ニヱグ有ト定ベシ顯昭ノサヽレタル女萎ノ說尤正說也

かく芹の外にゑぐ有と定むべしといへど顯昭のいはゆる女萎は何物たる事をかうがへきはめずしてしかいへるものなれば其說さらにうけがたしたとへばゑぐは異ものにもせよ蘇枋色の花咲水くさは世に絶てなきものなればしばらく芹にあてし說にしたがへるなり

新撰六帖に信實朝臣歌「七草の數ならねとも春の野

味甘歛註に俗云ゑぐしとみえたり芹は茄子よりも亦ひときはゑぐきものなれば其味を主としてかくはおふせしなり色葉和難集に或説を引てゑぐはすべての若菜の名なり會供と云意にて白馬の節會にまいる物なればなりといへりその説のよしあしはさしおきてこれも片田舍の方言なる事しるべし其故はいづくにもあれ若菜をつみて節會の料に奉しより此名のいできしものなるべければなり

ゑご 袖中抄

○顯昭云くとことは同音也

せり 日本紀 萬葉集

○せりは俗にセリ、アフセリ、タスセリ、アグルなどのセリと同じ意にて此草むらがりおひ出てつめども跡よりきほひおふる物なるによりて名づく按に日本紀に鹿葦津姫忿恨云々即放レ火燒レ室初火燄明時生兒火明命次火炎盛時生兒火進命又曰ニ火酸芹命一とみえたり凡火進といふも火酢芹といふも其意は一つなるべければ後に芹をセリといへるもこれにて其義おしはからる

根芹 風雅集

○芹は舊より根莖をたうとむもの故に根芹とはいへるなり俊成卿歌「いさやこら若菜摘てん根芹生る淺澤小野は里遠くとも」

根白草 莫傳抄

○同書云根白草はせりなり「瀨々にたつ浪こそ花よ根白くさつむ我袖に雪はふりつゝ」凡せりは根の色至てしろきものなれば根白草とは名付しなり

つみましぐさ 篠目

○同書云つみましぐさはせりなり「春くれはこやせり河の瀨々にこそつみまし草の名はあらはるれ」按につみましぐさは芹の名義にはよくかなへりといふべし

小芹 堀河院百首

○名義字の如し證歌上文にみえたり

○正誤

袖中抄云ゑぐとは女萎と書は花すはうにさく草の水邊にある也

ゑぐに女萎をあてたるはヱミグサの中下略とおもひしなるべし新撰六帖に女萎と書るも此誤を襲し

和歌

詞花集

だいしらず　曾禰好忠

雪消はゑぐの若菜もつむべきに
春さへ晴ぬ深山邊の里

夫木和歌集

殷富門院大輔

賤の女かゑぐのわかなは生ぬとや
鳥羽田のおもの畔つたひゆく

新撰六帖

衣笠内大臣家良公

いかにせん山澤ゑぐもつまなくに
衣手ぬれて戀つゝそふる

前藤大納言為家

あふ事はかた山澤にゑぐつむと
おもひし袖の今もかはかぬ

九條三位入道知家

春はまつゑぐの若葉をつむとてや
おりたちそむる賤か小山田

右大辨入道光俊

ふめはいる春の薄氷下解て
山澤女蕘(ヱグ)をつみそかねつる

○按に詞花集以下の六首は蓋し萬葉集の歌に本づきてたゞ其趣をおもひやりてよめる歌にしてたしかにゑぐの狀をみて其實景をよみしにはあらざるべし

ゑぐ



○釋名

惠具（萬葉集古今六帖新撰六帖）

○ゑぐはゑぐしの下略にて味によりて名付し片田舍の方言なるべし和名鈔に崔禹錫食經を引て茄子

古今要覽稿卷第四百一

●草木部

ゑぐ　ゑご　せり

惠具は萬葉集に出またの名をゑごといひ蘇枋色の花さく草のよし袖中抄にみえたれど祕藏抄にはゑぐは芹なりといへり此說にしたがふべし扨芹字は火酢芹命をホノスソリノミコト日本紀とよみまた美濃の芹田をセムタ和名鈔とよみ來れど歌にはセリとよめり此物は古より天皇の供御にも奉りし延喜式ものにてすべて山田の澤あるは水田のくろ及びいさゝ小川のほとりなどにおのれとおほく生ずればその草のさまは世の人皆よくしれるものなりいはゆる山田の澤いさゝ小川などにおひ出るものを舊き根芹あるは根白草といひ今はそれを水芹といふまた水田のくろあるはいづちにもあれ水をはなれし所におひ出るものを旱芹といふ旱芹は根もとあかくしてうまからず水芹は根白くして莖長く味いとよろしそのよろしきものといへどもひとたびゆがかざれば少しくゑぐみあるは此草の性なればその名をゑぐとおほせしもことわりなり

萬葉集云爲君山田之澤惠具採跡雪消之水爾裳裾所沾

○按に堀河院百首に仲實歌「かすかのゝ雪消の澤に袖たれて君か爲にと小芹をそつむ」とよめるは裳裾と袖とのたがひありといへ共其歌の意はおほよそ相同じ

又云足檜木之山澤回具乎採將去日谷毛將相母者責十方

○祕藏抄云「賤の女か山田にえくのわかなつむうくひす袖をぬらしつる哉」小大君えくのわかなは芹なりうくひすそでとは脇縫したる衣の袖をいふなり

○按にえぐのえ字正にゑにつくるべし

和歌色葉集云ゑぐとは芹の異名也或云若菜のおさなくまたしきをゑぐといへりひが事にや色葉和難集云ゑぐとは芹をいふなり風土記にみえたり

○按に風土記はいづれの國の風土記なるや爰に其國名を載ざるはいと惜き事也

古今童蒙抄云ゑぐとはせりとはひとつ物の名也

按に芑字まさに芐に作るべし蓋し傳寫の誤りなり字典に集韻を引て芐與苄同字彙に地黄也といへり又字典に唐韻を引て芑墟里切韻會を引て音起爾雅釋草に芑は白苗注に今白梁粟詩大雅維穈維芑詩小雅薄言采レ芑疏に芑菜似二苦菜一又草名詩大雅豐水有レ芑字彙に詩緯を引て李氏曰毛以レ采レ芑爲レ菜豐芑爲レ草穈芑爲レ穀王氏皆以爲レ穀字典に山海經を引て歷石之山其木多二荆芑一とみえたれば古より芑を以て地黄となすことはなきなり

圖經本草云地黄似二車前葉一

按に凡地黄は其葉芥葉に似て厚く鋸齒あらきものなるにかくいへるは誤なり又一名を芑といへる芑字まさに芐に作るべし

實作㆑房如㆓連翹㆒子甚細而沙褐色根如㆓人手指㆒通黃色麁細長短不㆑常三月八月採㆑根種㆑之甚易根入㆑土即生一說古稱種㆓地黃㆒宜㆓黃土㆒今不㆑然大宜㆓肥壤虛地㆒則根大而多㆑汁其法以㆓葦席㆒圓編如㆓車輪㆒徑丈餘以㆓壤土㆒實㆓葦席中㆒爲㆑壇壇上又以㆓葦席㆒實㆑土爲㆓一級㆒比㆓下壇㆒徑減㆓一尺㆒如㆑此數級如㆓浮屠㆒也乃以㆓地黃根節多者㆒寸斷㆑之蒔㆓壇上㆒層々令㆑滿逐㆑日以㆑水灌㆑之令㆓茂盛㆒至㆓春秋分㆒時自㆓上層㆒取㆑之根皆長大而不㆓斷折㆒不㆑被㆓斸傷㆒故也得㆑根暴乾出㆓同州㆒者光潤而甘美

本草衍義云地黃葉如㆓甘露子㆒花如㆓脂麻花㆒但有㆓細斑點㆒北人謂㆓之牛嬭子㆒花莖有㆓微細短白毛㆒

本草綱目云今人惟以㆓懷慶地黃㆒爲㆑上亦各處隨㆑時興廢不㆑同爾其苗初生塌㆑地葉如㆓山白菜㆒而毛澁葉面深青色又似㆓小芥葉㆒而頗厚不㆓叉丫㆒葉中攛㆑莖上有㆓細毛㆒莖稍開㆓小筒子花㆒細黃色結㆑實如㆓小麥粒㆒根長四五寸細如㆓手指㆒皮赤黃色如㆓羊蹄根及胡蘿蔔根㆒曝乾乃黑生食作㆓土氣㆒俗呼㆓其苗㆒爲㆓婆々奶㆒古人種㆑子今惟種㆑根山居錄云地黃嫩苗摘㆓其旁葉㆒作㆑菜甚益㆑人本草以㆓二月八月㆒採㆑根殊未㆑窮㆓物性㆒八月殘葉猶在㆓葉中㆒精氣未㆓盡歸㆑根二月新苗已生根中精氣已滋㆓於葉㆒不㆑如㆓正月九月採者殊者殊好㆒又與蒸曝相宜禮記云羊苄豕薇則自㆑古已食㆑之矣

○釋名

さをひめ 延喜式

○按に名義いまだ詳ならず和訓栞云さほひめは棹姫など書り春を司る神なりといへど小春姫の義なるにや山姫をいふなるべし關東にては地黃をかく稱せりとみえたり○大同類聚方佐乎を差保に作るものはその假字違へりといふべし

地黃 爾雅本草綱目 爾雅注　苄 爾雅禮記爾雅翼云苄以㆓沉下㆒爲㆑貴故字從㆑下　芑 名醫別錄　地髓 神農本經

○正誤

名醫別錄云乾地黃味苦生地黃大寒

按に凡地黃は味甘く性寒平無毒の物なり然るをかくいへるは全く誤れるも神農本經に乾地黃味甘寒生者尤良本草拾遺に地黃生乾即平宜藥性論に生地黃味甘平無毒などいへるにて其義明らけし

又云一名芑

モノ和名千里駒ト云根堅シテ藥用ニ堪ズ或云是本草綱目地黃ノ附錄ノ胡面莽ナラント未レ詳

圖解本草云地黃倭產者佳唐僞ニ牛膝萎蕤ニ倭自ニ山城一乾出者莚ニ包ミ腐シ篩テ掛レ土ヲ重スレ斤ヲ故藥力薄

本草啓蒙云地黃葉ハ芥葉ニ似テ厚ク鋸齒粗ク淺綠色ニシテ皺ミ兩面ニ毛アリ初ハ地ニ就テ叢生ス其宿根ノ者ハ春薹ヲ抽コト高サ六七寸肥地ノ者ハ一尺許葉互生ス四月莖梢ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク形チ筒子ニシテ末五瓣ナリ胡麻花ニ似テ大ニシテ黃白色ニ淡紫色ヲ雜ユ花ノ後實アレドモ熟セズ其莖枯テ旁ヨリ新葉ヲ生ズ根ヲ采ル者ハ花ヲ開クコトヲ忌故ニ宿根ヲ栽ス十月ニ根ヲ堀リ出シ乾土中ニ貯ヘ置キ五月ニ至リテ去年ノ節ヲ采リ熟土ニ栽ユル時ハ卽生長ス蘆頭ト根トノツナギヲ節ト云又五月ニ去年ノ新根ヲ數段ニ切テ栽ルモ可ナリ大和高市郡地黃村ニ多ク地黃ヲ作リ出スコトヲ大和本草ニ載スレドモ今ハ其地ニ地黃ヲ栽ス其隣村ノ越村ニテ多ク作ル藥店ニ漢渡ノ地黃アレドモ皆陳久ニシテ佳ナラズ和產ヲ良トス其內大和山城皆根長大ナリ優レリトス其蘆頭ノ下細クシテ疙瘩多キ者ヲ地黃ノ節ト呼ブ藥ニ入レズ筑前ヨリ來ル地黃ハ肥大ナレドモ甚短シ劣レリトス乾地黃ハ冬堀リタル時直ニ暴乾シ肉黃色ナル者良ナリ然レドモ久ヲ經レバ黑キニ變ズ藥店ニ未ダ全ク乾カザル者ヲ貯ヘ置キクサリテ色黑キ者多シ宜ク撰ブベシ

又云胡面莽ハ苗葉甚地黃ニ似テ大ナリ冬凋マズ繁茂シヤスシ夏薹ヲ抽ルコト一尺許リ莖圓カニ紫赤色葉ハ深綠色皆毛茸多シ互生ス莖端葉間ゴトニ花ヲ生ズ桐ノ花ニ似テ長サ一寸餘筒ノ中黃白色ニシテ深紫點アリ筒ノ末ハ五瓣ニ分レ紫赤色其根橫ニ生ジ深黃色甚地黃ニ似タレドモ暴乾スレバ堅硬ナリ是地黃ノ類ニシテ用ユルニ堪ザル者ナリ唯栽テ花ヲ賞スルノミ

集註本草云地黃生ニ渭城一者乃有ニ子實一實如ニ小麥一淮南七精散用レ之中間以ニ彭城乾地黃一最好次歷陽今用ニ江寧板橋者一爲レ勝作レ乾者有レ法搗レ汁和蒸殊用ニ工意一而本經直云ニ陰乾一色味乃不ニ相似一更恐以ニ蒸作一爲レ失乎大貴時乃取ニ牛膝萎蕤一作レ之人不レ能レ別

圖經本草云今處々有レ之以ニ同州一爲レ上二月生レ葉布レ地便出似ニ車前葉一上有ニ皺文一而不レ光高者及ニ尺餘一低者三四寸其華似ニ油麻花一而紅紫色亦有ニ黃花者一其

は蓋し此千里駒にしてこれを舶來のものに比するに其根堅硬にしてさらに滋潤なきを以て供御の料には山城國に於て別に舶來の種を作られしものなるべし今に至りては其種諸國に繁衍し國產のものはおのれと別種のやうになりて何人か千里駒などゝ其名をおふせしもしるべからずされど式にのする所の地黃を考ふるに美濃國一斛武藏國五斗六合信濃國一斗四升とありて其地自生の藥を奉りしよりは其分量のいと多きをみれば若しくは人力をつくして養ひたてし物を奉りしもまたいまだしるべからず猶考ふべし

延喜式云諸國進年料雜藥尾張國四十六種云云地黃六斗四升

又云美濃國六十二種云云地黃一斛

又云相模國三十二種云云地黃

又云武藏國二十八種云云地黃五斗六合

又云常陸國二十五種云云地黃一斗三升

又云上野國十五種云云地黃一斗

又云下野國十四種云云地黃

又云信濃國十七種云云地黃一斗四升

又云加賀國七種云云地黃四斤十一兩

又云凡山城國地二町在ニ葛野郡十三條水谷下里一四至東限ニ岑山一南限ニ堀越山谷口一西限レ岑北限ニ辛河合一永爲下殖ニ供御地黃一地上

大同類聚方云差保比女味嗆久甘之少香之四月五月發黃花乎八月採根陰乾而用

和漢三才圖會云地黃和州之產良山州次レ之有ニ白花者一稱ニ白地黃一最爲レ上但肥大者佳和州高市郡地黃村相傳往昔始出ニ地黃一之處今亦有レ之而勝ニ他處者一頁

大和本草云和地黃ノ上品ハ大和ヨリ出ヅ唐ヨリ來ルニマサレリ大和ニ地黃村アリ多ク產スコレヲウフルニ下濕ノ地ヲイム上ニアクタアルヲイム又新糞ヲ忌ム間遠クウヘテ其間ニ久シキ糞水ヲソヽグベシ甚繁昌ス凡服ニ地黃一人忌ニ三白一三白ニ葱蒜蘿蔔也出ニ于丹溪心法一又俗醫菘蔓菁ヲモ地黃ヲ服スル人ニ忌ト云ハ非也

用藥須知云地黃近世山州和州ニ多ク植レ之貢ニ于四方一乾地黃ハ日乾火乾陰乾者名ニ乾地黃一熟地黃ハ酒ニテ蒸熟シ成モノナリ諸家本草有ニ九蒸九曝之說一是道家九ヲ貴ブ胡說ニ因襲ス蒸トキハ氣味共ニ脫シテ不レ堪レ用不レ可ニ信用一

物類品隲云地黃大和產上品淡黃花ヲ開ク一種紫花ノ

古今要覽稿卷第四百

●草木部

さをひめ　地黃

さをひめは西土にいはゆる地黃なり其一名を芐といひ苣といひまた地髓ともいへり岡村尙謙曰此種古は尾張美濃相模武藏常陸上野下野信濃加賀等の諸國より典藥寮に貢せし事延喜式に見えたりされど供御のものは別に山城國葛野郡のうち二町を以て永く地黃を殖る地とせしよし同書に見えたり舊說に大和高市郡地黃村は往昔地黃を出せし處のよし〔和漢三才圖會〕いひ傳ふれど延喜の比に絕て其事なきをみれば蓋し地黃村はそれよりはるかにをくれて殖し所なるべし今また山城の富野及び長池大和の越村等にて多くこれを作りて四方にひさぐをみればいづれにも此二箇國は地黃を殖るにはいとよき土地なるべし又伊勢駿河甲斐等にも地黃を產せし事其國の風土記にみえたれどこれまた後世に殖しものなる事其書僞撰なるにて明らけし凡地黃に白夫（シラフ）赤夫（アカフ）の二種有白夫は根細くして皮薄く肉厚して皮の皺紋緻密なり藥用に上品とす然れども此種養ひがたく腐り易し赤夫は根肥大にして皮厚く皺紋密ならずして疙瘩（コブ）あり下品とす然れども此種養ひ易く繁茂し易し冬月かこはざれどもたもちやすし故に諸州共に此種を栽ゆ是卽筑前種なり古は和州に白夫の種を栽ゆ故に大和の地黃を上品とす其後大和には赤夫の種を栽山城には白夫の種を栽ゆ故に山城を上品とす今に至りては山城にも赤夫を栽ゆる故に大和も山城も同品にして優劣なし是皆赤夫は養ひやすくして其根肥大なる故に利に走る故なり然れども其白夫の種の廢するを惜むべし〔本草啓蒙〕一種千里駒〔物類品隲〕一名駒止女久佐〔廻村雜記〕有此種はもと下野日光山中に出づ其葉全く地黃に似たるを以て俗に地黃とよぶものは誤也〔同上〕といひ或は本草拾遺のする所の胡面莽なるべしと〔物類品隲〕いへりいまだ其當否をしらず岡村尙謙曰今の地黃は蓋し其種原（モト）海外より來れる物にして千里駒は卽國產の地黃なるべし故に千里駒は諸國山中まゝ自然ありといへ共地黃に至りては絕て自生ある事をきかず因て憶に延喜の比諸國より奉りし地黃

○按に嵯峨は山城の地名なり此草其地の嵐山に多し故に名づく

やぶうど同上

○按に此草或は竹叢中に生ず故に名づく

はなうど同上

○按に此花しゝうどに似て半邊瓣長くしてうつくし故に名づく

くはずうど同上

○按に此草臭氣ありて食べからず故に此名あり

増上寺白芷江戸方言

○按に此草増上寺に多し故に名づく白芷は蓋し其根の形或は臭氣少しく相似たるによりての稱なるべし

これと同種なるべし
本草啓蒙云ウドモドキノ根暴乾スレバ紫色鞭節ニシテ香氣アリテ本手ノ羌活ニ相似タリ氣味ハ少シ異ナレドモ代用テ可ナルベシ其草京師淸瀧河ノ旁ニ生ズ高雄邊ニ最多シ苗葉花實シヽウドニ異ナラズ惟莖葉ノ節深紫色切レバ香氣アリ舶來本手ノ羌活一名竹節手ノ羌活ト呼ブモノ眞物ナリ根ニ節アリ又横文多ク紫黑色ニシテ香氣アリ味辛シ然レドモ久シク渡ラズ近年他ノ藥品中ヨリ擇出スモノアレドモ少シ新渡獨活中ニモ少ハ混入セリ寛政末年ニ渡ル羌活ハ眞ノ竹節手ナリ

〇釋名

うどもどき 本草啓蒙
〇按にもどきは俗にいふがんもどきと同じく其狀相似たるものをいふ
うどたらし 同上
〇按にたらしはたぶらかしの略語にや
高雄羌活 同上
〇按に此草山城高雄山極て多し故に名づく
やまうど 常毛採藥錄 常陸白井方言
〇按に凡うどの山中に生ずるものをさして山獨活といふは常なれどそれとは同名異物なり

さがうど 増上寺白芷

さがうど一名やぶうど一名はなうど一名くはずうど一名増上寺白芷は市人或は羌活に混じて鬻するものなり此草春宿根より數葉を生じ一枝五葉を一朶とす其一葉の狀大略梶の葉に似て極て細長くまた蘿蔔葉に似て短く深缺刻ありて各五尖をなす其枝幹は共に中空にして白毛殊に多しこれを折ときは液汁出て臭氣あり夏に至れば其梢上に細枝を分て傘狀をなし小白花を攅簇し後實を結ぶ頗る過藍菜(グンバイナヅナ)のごとし
本草啓蒙云一種京師嵯峨ノ嵐山ニヤブウドヽ稱スルモノアリ葉ハシヽウドヨリ大ニシテ蘿蔔葉ノ態アリ花ハ五月ニ開クシヽウドニ似テ周圍ノ花半邊長ジテ美シ其根生乾共ニ白色臭氣多シ市人用テ羌活ニ僞ルモノアリ宜シク擇ビ去ベシ
『此間彩畫一葉さがうど略レ之』

〇釋名

さがうど 本草啓蒙

品トス總テ羌活ト稱シテ四方ニ貨スソノ本手ノ羌活ト稱スルモノハ眞ノ羌活ナリ其前胡手ト稱スルモノハ輕虛ニシテ黃色味辛シ是眞ノ獨活ナリト云傳レドモソノ後久シク渡ラズ馬皮手ト稱スル者ハ今多ク渡ル是下品ナレドモ獨活トスベシ即シヽウドナリ新渡ノ獨活寛政中京師ニ來ル即シヽウドノ根ナリ

『此間彩畫しゝうど略レ之』

○釋名

しゝうど 庶物類纂大和本草用藥須知草木辨疑本草竊

○按に古にしゝといへるは即鹿の事にて野猪の名にはあらずされど此名は後世俗間の稱なれば全く野猪をさしてしゝとはいひしものなるべし

いぬうど 大和本草用藥須知本草竊

○按にいぬは犬山椒犬蓼などの犬と同じく其狀相似たるものをいふ正にしゝうど及びしかなゝどの義とはおなじ獸名なれども其意異なり

うまうど 本草啓蒙山城貴船方言

○按にうまは即馬字の義なり

しかな 大和本草筑紫方言

○按に此即鹿菜の義なり

からな 用藥須知草木辨疑

○按にからは其狀尋常のものに異なるによりて大葉の車前を唐おほばこなどいへる類ひのからにして其種必ず彼より來れるといふにはあらず

○正誤

庶物類纂にしゝうどを以て羌活とし又うどもどきの名を混じてその一名とす

按に本草啓蒙にしゝうどを以て獨活としうどもどきを以て羌活とす是は後世の說によりしなれども今二活を分別するに至りては啓蒙の說最然るべし

うどもどき　高雄羌活　文州羌活

うどもどき一名うどたらし一名やまうど一名高雄羌活は即獨活の一種にして蓋し紹興本草に文州羌活と稱するものなるべし此草は下野日光山足尾山及び諸國山中處々これありといへども山城の高雄山に產するもの其名殊に高し其苗葉花實は共にしゝうどに似て稍小にしてたゞ毎節深紫色根もまた紫色にて節しげく香氣あるを異なりとす 憶に 圖經本草に今人以二紫色而節密者一爲二羌活一といへる宋人の羌活もまた

古今要覽稿卷第三百九十九

●草木部

大葉獨活　文州獨活

大葉獨活は卽紹興本草に圖する所の文州獨活なり今下野の日光山足尾山信濃の和田峠及び鹽尻峠等皆これあり此草春苗を生じて一枝三椏其頭各三葉をつく狀前條より極めて濶大にして葉面光澤ありて枝莖毛茸なし夏に入れば根上より一莖を抽て高さ五六尺に至り其梢數枝を分ち小白花を攢簇す狀傘蓋の如し憶に集註本草に獨活色微白形虛大一莖直上といへるもまたこれと同種なるべし

『此間墨繪文州獨活彩畫大葉獨活略之』

しゝうど　しかな　茂州獨活

しゝうど一名じぬうど一名うまうど一名しかな一名からなは卽紹興本草に圖する所の茂州獨活なり此草一莖五椏を一朶とし枝葉各對生す其葉大略うどに似て狹長にして鋸齒細か也第一枝は左右各五葉を生じとまり葉には深缺刻ありて遠く望めば宛も三葉の如し第二枝は三葉にしてとまり葉の深缺刻は前と一樣にて頗る五葉の如く又中枝は第一枝と同じく全く五葉にして下の兩葉第一枝より稍巨大なるを異とす憶に圖經本草に獨活如二青麻一六月開レ花といへるもまたこれと同類なるべし扨此草は諸國山中處々これあるものにて稻若水以下諸家本草多く以て羗活となせど今改めて獨活となすはたゞ古說に從ふのみならず皇朝はもとより羗地にはあらざるによりて也

本草啓蒙云シヽウドハ山中ニ多生ス苗大抵ウドニ似タリ葉モ亦相似テ異アリ食用ニ中ラズ莖葉ニ毛アリテ糙澀ス夏以後薹ヲ起シ葉互生ス秋ニ至リ高サ六七尺枝端ゴトニ小白花ヲ開ク數百攢簇シテ傘蓋ノ如シ後實ヲ結ブ並大葉芎藭ニ異ナラズソノ根白色臭氣烈シク微香アリ暴乾スレバ內淡白色ニシテ外皮淺黑色市人呼テ眞羗活トスル者ハ非ナリ是獨活ノ一種下品ナル者ナリソノ氣味最猛烈病人厭ヒテ服スル事能ハザルモノ多ケレドモ代用ユベシ古漢土ハ獨活羗活ヲ一器ニ混入ス長崎ニテ擇分チ本手馬皮手前胡手ノ三

ルヲ穩トスベシ

按に土當歸は別に一種の物にしてうどゝは異なるもの也救荒本草に杜當歸生ニ密縣山野中ニ其莖圓而有ニ線楞一葉似ニ山芹菜葉一而硬邊有ニ細鋸齒刺一又似ニ蒼朮葉一而大毎三葉攅ニ生一處一開ニ黄花一根似ニ前胡根一又似ニ野胡蘿蔔根一其葉味甜今人遇ニ當歸缺一以ニ此藥一代レ之とみえたり扨醫學綱目に此文を載て杜を土に作り山野中の下に苗高一尺許の五字ある時は土當歸は全く小草にしてうどの高さ八九尺より一丈餘に至るのものとは異なり又土當歸は葉似ニ山芹菜葉一又似ニ蒼朮葉一而大毎三葉攅ニ生一處一開ニ黄花一とあればうどの枝葉濶大にして一朶四十餘葉もありて小白花を攅簇するものとはおのづから異なればうどを以て土當歸に擬するは誤りなり然るをこのふみにはウドに充を穩とすべしいへるは杜撰甚し

證類本草引ニ名醫別錄一云獨活一名獨搖草此草得レ風不レ搖無レ風自動

按に百卉皆風なき時に動きて風ある時に搖かざるものなし因て憶に獨搖はもと獨活の隱し名にてもあるべきを其搖字につきて漫に其名義を附會せしは全く輕身延年などの語と同じく蓋し方士の妄言なるもしるべからず故に庶物類纂に淸波雜志を引て云王右軍帖獨活無レ風則搖有レ風不レ動石脾入レ水則乾出レ水則濕出レ水則濕可レ見入レ水則乾何日知レ之近年夷堅成レ志序ニ其略ニ云葉晦叔聞ニ於劉季高一有ニ估客一航レ海不レ覺入ニ巨魚腹中一未ニ能死一遇下其開口吸レ水時上適木土在乃取レ斧斫ニ所魚一魚覺レ痛躍レ身入ニ大洋一擧船人及魚皆死式戯難レ之曰一舟皆死何人談ニ此事於世一乎類ニ前說一とみえたり又通雅に獨搖有レ八一羌活一鬼臼一鬼督郵一天麻一薇銜一白楊一移楊又媚藥有ニ無風獨搖草一又抱朴子云獨搖芝一名薇銜智玫薇銜卽麋銜白楊卽移楊除レ此共八といへど予いまだ以上數種のもの風なき時に搖きて風あるときに動かざるものある事をきかず

りて此名を命せしにや或は靑は生の訛轉にて羗生はなほ羗活の意なるにや

護羗使者同上

胡王使者證類本草引名醫別錄太平御覽引ニ吳氏本草一

○按に本草綱目云獨活以ニ羗中者一爲レ良故有ニ此二名一也

獨搖草名醫別錄

○按に獨搖の名義名醫別錄及び集注本草等にみえたりされど獨搖は蓋し獨活の隱名なるもしるべからずくはしくは正誤にしるす

○正誤

或人云本草綱目に日華子を引て獨活は是羗活母也とあるによりて邦人其說を和して舊根を獨活とし嫩根を羗活とす

按に證類本草に日華子を引て獨活卽是羗活同類也とみえたりこれによれば日華子は獨活羗活を以て正に一類二種とせしものなり然るを證類本草の一本に其同字を誤りて母字に作り本草綱目には其誤字によりて漫に類字をも削去せしは杜撰なり舊說また其誤字によりて根の舊嫩を以て二活を分ちたるは全く證類本草の誤字によりしものにて本草綱目の誤りをうけていへるにはあらず

本草綱目啓蒙云和名鈔ニ獨活ヲウドト訓ズソノ後正保年中ヨリウドノ宿根ヲ獨活トシ嫩根紫色ナルモノヲ羗活トシ或ハウドノ全根ヲ獨活トス皆非ナリ

按に制剤記に獨活羗活は黃色にしてわだかまる處を獨活といひ紫にしてほそながき處を羗活といふとみえたり扨此書の奧書に永祿五年十月日雖知苦齋道三とあれば二活の別は正保よりは十二年も以前の說なるにそれを以て正保年中の事とせしは無稽なりまた全根を以て獨活とせしは掛卷母かしこき聖武天皇の天平以前よりの事なれば和名鈔よりはいと舊き皇朝の傳說なり憶に日本紀に欽明天皇十五年春二月百濟國奉勅貢ニ採藥師施德潘量豐德丁有陀一とみえたればうどを以て獨活とせしは蓋し其比よりの事なるべし然るをこゝに或はなどいへるはいかゞ

又云土當歸土救荒本草ニ杜ニ作ル和名ウド本草綱目ノ本條ニ其形狀ヲ闕トイヘドモ獨活ノ集解ニ根ノ形狀ヲ說キ救荒本草ニ略苗ノ形狀ヲ載スルニ據リテ考レバウドニ充

色秦隴人呼爲二山前獨活一古方但用二獨活一今方既用二獨活一而又用二羗活一玆爲レ謬矣

本草綱目云獨活羗活乃一類二種以二中國者一爲二獨活一西羗者爲二羗活一蘆頭所レ説頗明按易簡方云羗活須レ用下紫色有二蠶頭鞭節一者上獨活是極大羗活有レ臼如二鬼眼一者尋常皆以二老宿前胡一爲二獨活一者非矣

『此間墨繪一葉紹興本草所載鳳翔府獨活、彩畫うど略レ之』

○釋名

うど 出雲風土記延喜式本草和名和名鈔

○按に東雅にうどの義詳ならずとみえたり或はうばうばらなどのうと同じくとはとげの下略にて此莖毛刺至て多きにより此名あるにや本草纂疏にはうどは中空の義也といへりいまだ其當否をしらず

つちたら 本草和名和名鈔

○按に東雅につちたらはたらの木といふもの丶葉に似たる故にかくいひしにやなをつまびらかならずとみえたり

のたら 新撰字鏡

○按に東雅の説によれば此もの田野に生じて其葉たらの葉の如くなるによりて名付しにや

しか 大和本草本草綱目啓蒙

○按に此物鹿好てこれを食ふ故に名づく

獨活 神農本經

○按に文州獨活は一莖直上して叢生せず故に名づく證類本草引二集註本草一云一莖直上不レ爲レ風搖一故名二獨活一本草原始云獨一也活生也一莖直上不レ爲レ風搖一故名又本草從新引二喩嘉言一云羗活之獨乎者卽眞獨活とみえたりされど康熈字典引二埤雅一云獨猨類也似レ猨而大食猨今俗謂二之獨猨一蓋猨性羣獨性特猨鳴三獨叫一是以謂二之獨一也とあれば獨は蓋し獸の名にしてなを天名精の一名を鹿活草といひしうどを筑紫の方言に鹿栄此一名をまたしかといへる類ひにて獨好て此草を食つて生活する故に獨活といひしもしるべからず

羗活 同上

○按に此卽羗獨活の省呼なり凡獨活は羗中より來るものをよしとす故に名づく

羗靑 同上

○名義詳ならず按に蓋し羗地の産は其色靑きによ

レ之トキハ各用テ功用不レ異古ノ採藥使モソノユヘアリテ採傳ヘタルナルベシ然ラバ改メズトモ和ヲ用テ可レ然カ或ハ唐ヨリ渡トイヘドモ亦多カラズ殊ニ數千里ヲ隔テバ其來ル道ニ年ヲ經テ蛀ヒ易シ藥力損亡スルトキハ功能不レ異トコロノ和草ヲ用テ可ナルベシ

和漢三才圖會云　按獨活二月生レ苗似ニ蘆筍一而有レ節有ニ短毛一青碧色而紫黄白微班且有ニ小點一謂ニ獨活芽（ウドメ）一爲レ蔬和レ酸茹レ之香美可レ賞既長高四五尺一椏五葉有ニ細鋸齒一面背皆有ニ細毛一六月開ニ白花一作レ叢婆娑如ニ絲毛一秋結レ實以ニ根上近レ莖帶レ紫處一爲ニ羌活一以ニ根株塊而黄色處一爲ニ獨活一如ニ白朮蒼朮之分別一蓋花形色倭漢不レ同今將來之羌活間有ニ無レ節者一是疑土當歸矣止擇ニ用倭羌獨一可也備中平福之産佳藝州廣島者次レ之羽州最上獨活芽有ニ長二三尺者一太柔可レ食總關東之産太長畿内産僅五七寸一種有ニ削羌活一缺ニ氣味一不レ可レ用

用藥須知云獨活和漢共ニアリ和ハウドノ根ナリ世ニウドハ其氣味ノ薄キヲ以テ疑フモノアリ然レドモ賣モノ久ク水ニ漬シテ氣味ヲ脫ス欲ニ其色白一ナリ山中ヨリ掘リ來リ新ニ製スルモノ氣味ヨシ可レ用

千金方藥註云獨活ハ備中平福安藝廣島等ヨリ出ス市家莖ヲ羌活トシ根ヲ獨活トス獨活ハ緊實羌活ハ輕虛ナリ

證類本草引ニ名醫別錄一云獨活一名羌活生ニ雍州川谷或隴西南安一二月八月採レ根暴乾

又引ニ集註本草一云此州郡縣並是羌地羌活形細而多レ節軟潤氣息極猛烈出ニ益州北部西川一爲ニ獨活一色微白形虛大爲レ用亦相似而小不レ如

又引ニ圖經本草一云獨活羌活今蜀漢出者佳春生レ苗葉如ニ青麻一六月開レ花作レ叢或黄或紫結レ實時葉黄者是夾ニ石上一所レ生葉青者是土脉中所レ生本經云二物同一類今人以ニ紫色節而密者一爲ニ羌活一黄色而作レ塊者爲ニ獨活一而陶隱居言獨活色微白形虛大用與ニ羌活一相似今蜀中乃有ニ大獨活一類ニ桔梗一而大氣味亦不下與ニ羌活一相類上用レ之微寒而少レ効今又有ニ獨活一亦自ニ蜀中一來類ニ羌活一微黄而極大收時寸解乾レ之氣味亦芳烈小類ニ羌活一又有ニ槐葉氣者一今京下多用レ之極効驗意此爲ニ眞者一而市人或擇ニ羌活之大者一爲ニ獨活一殊未レ爲レ當大抵此物有ニ兩種一而西蜀者黄色香如レ蜜隴西者紫

又云神門郡凡諸山野所在草木云々續斷獨活
又云飯石郡凡諸山野所在草木云々當歸獨活
又云大原郡凡諸山野所在草木云々前胡獨活
延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥山城國三十二種云々獨活十斤
又云大和國三十七種云々獨活二十五斤
又云攝津國四十四種云々獨活五斤
又云伊賀國二十三種云々獨活八斤
又云伊勢國五十一種云々獨活三十五斤
又云美濃國六十二種云々獨活十斤
又云尾張國四十六種云々獨活十六斤
又云參河國二十一種云々獨活二斤
又云安房國十八種云々獨活四斤
又云下總國三十六種云々獨活五斤
又云常陸國二十五種云々獨活二斤
又云越前國十八種云々獨活四斤
又云丹波國四十三種云々獨活三十四斤
又云但馬國二十一種云々獨活五斤
又云因幡國二十種云々獨活十斤
又云伯耆國二十種云々獨活十二斤
又云出雲國五十三種云々獨活十二斤
又云石見國十四種云々獨活六斗斗は斤の誤なり
又云播磨國五十三種云々獨活三十五斤
又云美作國四十一種云々獨活九斤
又云備前國四十種云々獨活五斤
又云安藝國三十二種云々獨活十八斤
又云周防國十九種云々獨活七斤
又云紀伊國三十五種云々獨活十斤
又云讚岐國四十七種云々獨活二十斤
又云伊豫國三十二種云々獨活十七斤
又云土佐國十三種云々獨活二斤
大同類聚方云都知多良味少久苦辛之六七月發花平細白色九十月採根日曬乾用
本草辨疑云羌獨活和ト漢トハ徽シ似テ大ニ別ナリ又漢ニモ二品アリ節アリテ鞭ノ如クナル者ト節無シテ黑皮ノ者ト也節アル者眞ナルベシ今所渡ノ內ニ節ナキ者ハ決シテ土當歸ナルベシ土當歸今和ノ諸山ニ多シ諸家本草說トコロ和ノ形ト異ナリ然トイヘドモ和草ヲ用ヒテ其功アルコト已ニ年尙シ凡柴胡防風羌活古來和草ヲ誤リ用ル者ト云人多シトイヘドモ細ニ考

古今要覽稿卷第三百九十八

●草木部

うど　つちだら　獨活

うど一名つちだら一名のだら一名しかは漢名を獨活一名羌活一名羌青一名護羌使者一名胡王使者一名獨搖草といふ古は出雲國諸郡に産せし事其國の風土記にみえまた出雲伯耆因幡但馬越前丹波石見播磨美作備前安藝周防紀伊讃岐伊豫土佐及び山城大和攝津伊賀伊勢美濃尾張參河安房常陸下總等より貢せし事延喜式にみえたり凡うどは春二月の頃苗を生じ蘆筍に似て極て太くして節あり色青碧にして毛刺多し其高さ八九尺より或は一丈許に至る葉は頗る高助桑に似て稍小にして葉本の一方楕なれどもいづれもとまり葉はしからず其葉すべて細鋸齒ありて紋理また高助桑に同じ此草本幹につく數枝は皆互生にして其枝より兩枝を分て對生し其上三枝各五葉をつく其兩枝は共に一枝一葉を對生し衆草の枝々對生するものとは甚だ異なり其上また二葉づゝ兩所に對生し其先三葉をつく其一枝一葉對生するものは上一葉にして下一枝なり其一枝には左右共に五葉にして全く七枝四十一葉を一朶とす秋に至れば其梢枝の間に小白花を攅簇し頗る接骨木花に似たり實を結ぶまた接骨木實の如し憶に紹興本草所圖鳳翔府獨活またこれと同種なるべし扨後世に至りてはうどの舊根を獨活とし嫩根を羌活とす今藥舖ひさぐ所のものもまた然りされど延喜の比諸國より貢せし雜藥のうちに獨活ありて羌活なきものは正に神農本經にいはゆる獨活一名羌活とある古説に從ひしものなるべしされど今に至りては此種數種ありて其葉根また各同じからざる事なほ黃連に五加葉菊葉芎藭葉芹葉等の數種あるが如くなればそれの土それの草を産するにまかせて各採得て以て藥用に供するをよろしとす

出雲風土記云意宇郡凡諸山野所在草木云々麥門冬獨活

又云島根郡凡諸山野所在草木云々苦參獨活

又云秋鹿郡凡諸山野所在草木云々白朮獨活

又云出雲郡凡諸山野所在草木云々商陸獨活

百部といへる類にて其名をまた或は牆靡といへるもしるべからずされど天門冬は既に髦顚棘也とみえたれは原より重出すべきよしもあらず因ておもふに牆靡字口ともあり此虋冬は何れにも天門冬にあらずして其實は蓋麥門冬をさしていへる物なるべし然るを圖經本草にも爾雅及び山海經の虋冬を引てまた此門冬となすものは混同の甚しきとおもはる又本草綱目小救荒本草を引て天門冬俗名萬歲藤又名婆蘿樹といへるを時珍の說に爾雅の蘠蘼を古經の錯簡なりといへるが如く蓋し別條の錯簡なるべし凡救荒本草は周定王一時に集めなをし未定の書なればその誤いと多したとへば漏蘆は其種類本草中に七種ありてその產地各異なるものなるに其產地の異なるを一つに混じて一種の野生姜の條に誤て書並べしがごとし今云萬歲藤の名も此草冬月にいたれば皆枯て常春藤なとの類にあらざればその義はなはだ疑ふべしされど證類本草に神仙傳を引て甘始者服天門冬在人間三百餘年などいへる妄言もあればそれらによりて其名を命せしもまたしるべからざれど婆羅樹に至りては別條の誤りてこゝに錯簡せし物なる事あきらけし又本草原始に天門冬根似浣練素白越人名爲浣草といへるは全く博物志に天門冬可以浣縑素白如絨紵金城人名爲浣草といへる文を誤讀せしものなりもし然らざれば根似の下或は百部などの二字を脫せしなるべし

○按に須岐末呂久佐の中略なるべし須岐末呂とは卽杉麻呂の意にして猶以奈古を以奈古麻呂猿を猿丸といふがごとし俗に須岐加豆良といふもまた杉蔓の意にして杉葉に似て蔓延するがゆゑなりこの形狀をかく杉葉に比していへるは古今人情一つなればなり

天門冬集註本草

○岡村尙謙曰時珍の說に草之茂者爲虋俗作門此草蔓茂而功同麥門冬故曰天門冬故曰天棘爾雅云髦顛棘也因其細葉如髦有細棘也顛天音相近也とみえたり爾雅にいはゆる髦は卽門冬二合の音にしてまた天顛通音なれば天門冬は卽顛髦の義なり此草蔓延すること頗る顛髦のごとくなるによりて名づく時珍門冬を以て功同麥門冬といへるは全く誤れり虋といひ門といふも共に其音をかりていへるものなればその字に付て源のあるにあらず

スギカツラ大和本草　クサスギカツラ上同　ソウチク上同　キシカクシ上同　絺體博物志　顛棘上同　浣草上同　顛勒上同　蘠蘼爾雅　虋冬上同　棘刺集註本草　淫草藿抱朴子　管松上同　無不愈上同　百部上同　萬歳藤救荒本草　婆羅樹上同

○正誤

抱朴子云天門冬一名顛棘在㆓東嶽㆒名㆓淫羊藿㆒在㆓中嶽㆒名㆓天門冬㆒在㆓西嶽㆒名㆓管松㆒在㆓北嶽㆒名㆓無不愈㆒在㆓南嶽㆒名㆓百部㆒在㆓京陸山阜㆒名㆓顛棘㆒雖㆔處々皆有㆓其名不同㆒其實一也

岡村尙謙按に神農孝經に天門冬一名顛棘といふ時は此草いづれにありても顛棘は其一名なる事明らけし淫羊藿百部もまた本條の名をかりて强て以東嶽南嶽に生ずる天門冬の一名とはせしものにて原より方言といふにもあらずかく產地の□□なるによりて漫にその名をも異にするよしを書しるせしは全く服食家の隱名を用て此物をして奇とせんが爲に設けたることにて醫家に於ては原より無用の辨といひつべし又同書に天門冬を一名地門冬といへるは例の隱名に投たるにて諸本草に所見なきことなり又爾雅に蘠蘼虋冬注云門冬也とあるを時珍の說に蘠蘼の營實苗而爾雅指爲門冬蓋古書錯簡也といへり去ど天門冬は牆邊などに靡きて蔓延するものなれば時珍抱朴子にいはゆる在南嶽名百部と云るを釋して其形與治肺之切頗同百部故亦名

新修本草云此有ニ二種一苗有レ刺而澁者無レ刺而滑者俱是門冬ゾ俗云ニ顚刺浣草一者形貌詔レ之雖レ作ニ數名一終是一物二根浣垢俱淨門冬浣草互名レ之也

圖經本草云天門冬春生藤蔓大如ニ釵股一高至ニ丈餘一葉如ニ茴香一極尖細而疎滑有ニ逆刺一亦有レ澁而無レ刺者其葉如ニ絲杉一而細散皆名ニ天門冬一夏生ニ白花一亦有ニ黃色者一秋結ニ黑子一在ニ其根一枝傍入伏後無レ花暗結レ子其根白或黃紫色大如ニ手指一長二三寸大者爲レ勝頗與ニ百部根一相類然圓實而長一二十枚同撮二月三月七月八月採レ根四ニ破之一去レ心先蒸半炊間暴乾停留久仍濕潤入レ藥時重炕焙令レ燥ニ洛中一出者葉大幹麁殊不ニ相類一嶺南者無花餘無ニ他異一謹按天門冬別名爾雅謂ニ之蘠ニ〈亡彼功○按蘼上脫ニ字〉一名虋冬ゾ〈虋與門同〉山海經云條谷之山其草多芍藥虋冬ゾ是也抱朴子及神仙服食方云天門冬一名顚棘在ニ東嶽一名ニ淫羊藿一在ニ中嶽一名ニ天門冬一在ニ西嶽一名ニ管松一〈本草原始云天門冬因ニ形類レ松一名ニ管松一〉嶽名無不愈在ニ南嶽一名ニ百部一在ニ京陸山阜一名ニ顚棘一雖ニ處々皆有ニ其名不同一其實一也在ニ北嶽地陰一者尤佳欲レ服レ之細切陰乾搗下篩酒調ニ二一錢一已日五六進レ之二百日知レ可ニ以強ニ筋髓一駐顏色與レ鍊成松脂同蜜丸益善服者不レ可レ食ニ鯉魚一北方以ニ顚棘一爲ニ別名一而張茂先以爲ニ異類一也凡服レ此先試浣レ衣如レ法者便非ニ天門冬ニ若如ニ博物志所說一則有レ刺而葉滑便不中服然令所有往々是此類用者須レ詳レ之

詩

自揆林頭一甕雲、幽人先已醉其芬、天門冬熟新年喜、麯米春香竝舍聞、菜圃漸疎雲漠々、竹扉斜掩雨紛々、擁衾睡覺知何處、吹レ面東風又ニ纈文一、

庚辰歲正月十二日天門冬酒熟、手自漉レ之、且漉且嘗、遂以大醉、醒而賦レ此、東坡居士軾稿、

きじかくし



釋名

須末呂八佐〈本草和名　新撰字鏡〉

月熟レ實平九月採レ根平去レ皮而乾用
和漢三才圖會云天門冬出ニ於豫州宇和島一者佳藝州廣島者次レ之本草服ニ天門冬一禁レ食ニ鯉魚一誤食中毒未萍汁解レ之今漬ニ沙糖一食レ之故可レ有ニ與レ鯉合食一不レ可レ不レ知
用藥須知云天門冬和漢共ニアリ和タ、一種蔓生繁茂シ易シ俗ニ大葉ノ麥門冬ヲ誤テ天門冬ト呼ブ是ニアラズ
物類品隲云天門冬所在ニアリ莖長丈ニ至ル葉絲形ノ如ク莖ニ刺アリ秋ニ至テ圓實ヲ結ブ根數十相連ル
又云野天門冬ヲ東壁誤テ百部ノ一名トス然レトモ是別物ニシテ百部ニアラズ是亦大小二種アリ大ナルモノ和名ソウチクト云形天門冬ニ似タリ他物ニ纏ハズシテ生ズ貝原先生云キジカクシ赤實アリ一種實ナキヲソウチクト云是百部ノ雄ナルベシト此說誤ナリソウチク又赤實ヲ結ブ小ナルモノキジカクシト云是即サウチクノ矮生ナリ是亦赤實ヲ結ブ又實ヲ結バザルモアリ
本草綱目啓蒙云天門冬自生ハ海邊ニアリ紀州豆州四國等最多シ花戸ニモ多ク栽ユ三月宿根ヨリ苗ヲ生ズ一根叢生藤蔓甚繁延ス枝ヲ分テ纖葉ヲ生ズ形杉葉ノ如ニシテ長ク軟ニシテ光リアリ深綠色始メ出ル時枝ノ本ニ柔刺アリ後ニハナシ一種長ズルニ及テモ硬刺アルモノアリ夏丹葉間ニ小白花ヲ開クキジカクシノ花ニ似タリ後圓實ヲ結ブ南燭子ヨリ小ク熟スレバ白色中ニ黑子透見ス秋後苗枯ル一種草木ニシテ高サ尺ニ及バザル者アリ根ハ冬ヲ經テ枯ル又一科ニ數十根簇生ス長サ三寸許大サ五六分兩頭尖リ新舊相易ル採ラザル時ハ腐ス根ヲ採リ蒸シテ皮心ヲ去リ藥用ニ入ル藥舖ニハ肥前五島ヨリ多ク來ル
集註本草云今處々有レ之以ニ高地大根味甘者一爲レ好張華博物志云天門冬逆將有ニ逆刺一逆將本草綱目作莖間葉滑者名ニ絺體一一名顚棘可三以浣ニ縑素白一如ニ絨紵類一金城人名爲ニ浣草一擘ニ其根一温湯中挼レ之以浣レ衣勝レ灰此非ニ門冬一相似爾按如ニ此說一今人所レ採皆是有レ刺者本名顚勒亦粗相似以浣ニ垢衣一則淨桐君藥錄又云葉有レ刺蔓生五月花白十月實黑根連ニ數十枚一如レ此殊相亂而不ニ復更一有ニ門冬一恐門冬自一種不ニ即浣草一耶又有ニ百部根一亦相類但苗異耳門冬蒸剝ニ去皮一食レ之甚甘美止レ饑雖ニ暴乾一猶脂潤難レ擣必須三薄切暴ニ於日中一或火烘レ之也俗人呼レ苗爲ニ棘刺一煮作レ飲乃宜人而終非ニ眞棘刺一爾服ニ天門冬一禁レ食ニ鯉魚一

に方法本草に天門冬は和産却て唐山の物に勝れたりといへりこれよく天門冬をしれるものなり一種特生の物あり（本草啓蒙）その形狀蔓生るたかふことなし藥用に差別なし又俗にソウチクといふものあり（物類品隲）舊說に野天門冬とす（本草綱目百部根釋名）此種また特生にして其高さ凡七八尺にいたるその葉天門冬に似て稍細にして茴香葉のごとし蓋救荒本草に圖する所の天門冬は全く此物を摸せしなるべしまたキレカクシとよぶものあり（大和本草物類品隲）これまたソウチクと大略一にして但矮になるを異とすされど此二種はその根全く救荒本草に圖する所の天門冬とおなじくよのつねの草根にして魁をなさゞる時はその實は似て非なるものなりさて西土には天門冬の種類多く白花の外に黃花あるひは紫花のものあるよし圖經本草に見えまた充州溫州定州梓州西京等に產する六種の天門冬の圖は紹興本草に見えたり凡西土はその地はなはだ廣大なれば種々の物品を生ずれども後世その品類を辨別するにいたりては或は浮花の說になづみあるひは舊說の誤を襲たぐひいと多しかけまくもかしこき我大己貴少彥名のふた柱の命の御心を以て心とせし法眼の人ありて彼土物品の種類を悉く辨別せしめなばこれらのごときも詳ならんことを希ふのみまたこの種皇朝にては瀬海の地に產するもの多くして山生の物至て少なし傳聞比叡山かつて此物を生ぜしが每歲京都の人きそひてこれを採しより今は絕てみえずとかゝれば皇朝にも山生のものなしとはいふべからざれど瀬海のものよりはその種はなはだまれなるは自是風土のしからしむるなりまた抱朴子天門冬生㆓高地㆒根短味甛氣香者上其生㆓水側下地㆒者葉細似㆑蘊而微黃根長而味多苦氣臭者下とみえたり西土にも山生のみならず水側下地に生ずるもあること明らけしされど皇朝の產は多く瀬海の地に生ずれども其品却てよろしこれ又風土の然らしむる故なるべし

延喜式典藥寮式云諸國進年料雜藥播磨國五十三種云云天門冬三斤十兩備前國三十種云々天門冬一斤安藝國三十二種云々天門冬十二兩伊國三十五種云々天門冬五斤阿波國三十三種云々天門冬五斤讚岐國三十七種云々天門冬十三斤伊豫國三十二種云々天門冬七斤

大同類聚方云須方路味苦久不香無毒四月發㆑花五六

古今要覽稿卷第三百九十七

●草木部

すまろ草 天門冬

スマログサの物にあらはれしは本草和名新撰字鏡等を以てはじめとす今はこれをスギカツラといひあるひはクサスギカツラといふ岡村尙謙曰この草春宿根より苗を生じ狀初生の蕨のごとくにしてその色青くすこしあかみを帶漸々に長成して樹木に蔓延すその葉極めて尖細にして長さ一寸許かたち杉葉の如し此を細に見れば杉葉は三葉つゝ其莖の周圍に付て密なりこれは二葉對生し稍疎なるを異なりとす夏にいたればその葉の本に二三分許の花莖を抽て相並びて細白花をひらき小青實を結ぶその大さ小葉の麥門冬の實の如しその實秋を經て淡黄白色に變じ内の小黑子外より透通りて鮮なる事硝子の内に一粒の小丸子あるをみるが如し蘇頌の說に天門冬秋結二黑子一といへる圖經本草即これなり凡天門冬は その葉はじめ 出る時數の本に柔刺ありて後には絕てなく一種は長ずるに及ても莖に硬刺あるものあり本草綱目啓蒙これは蘇敬の說に此有二二種一苗有レ刺而澁者無レ刺而滑者俱是門冬といへるもの是なり唐本草 されどその刺と稱するもの尋常の木刺と異なるによりて弘景の說にも俗人呼レ苗爲二棘刺一終非二眞棘刺一爾といへりさはいへ今都下にこれあるものは刺あるもの至てまれにして刺なきもの極めて多し因て思ふに弘景のいはゆる呼レ苗爲二棘刺一といへる棘刺は即葉の形尖細にして棘刺に似たり此葉の外にさらに棘刺あるものをいへるにあらざればその義全く蘇說と異なりといふべし扨根は一科に二三十枚相つらなりて頗る麥門冬の長大なるものに似たりその根を採得る時は正に熱湯を以てそゝぎて曝乾すべししからざれば脂潤ありて乾きがたきものなり凡麥門冬等を製するもまた此法をよろしとすさて天門冬は延喜式に安藝備前紀伊阿波讃岐伊豫等より貢せし事みえたり今もまた安藝の廣島伊豫宇和島和漢三才圖會阿波德島紀伊田邊等より是を出すその他肥前五島本草綱目啓蒙相模七里濱及び處々瀕海の地往往みなこれあり藥に用ゆるは國產を以て最上とす故

ヲ開ク小刺薊ノゴトク花色黄白又淡紅ナルモノアリ又三葉ナルモノアリ華彙

本草綱目啓蒙云越前ニテ朮ヲワレモカウト云

『此間墨繪麝草一葉略ㇾ之』

鈴子香（ジヤカウサウ ワレモカウ）　夢溪補筆談

京北山中ニ生ズ二月宿根ヨリ苗ヲ生ズ高サ二三尺方莖葉節ニ對シテ生ズ形チ不老草ノ梢葉ニ類シヤヽ細腰ニシテ踈齒アリ莖葉ヲ採リ遠ク拂ヘバ暗ニ香氣馥郁タリ宛モ當門子ノ如シ親シク搓揉スレバ却テ草氣アリ四五月淡紫花ヲ開ク一朶二三蕚葉間ニ垂綴ス形チ白鐵樹花ニ似テ小ニシテ寸許圓蕚鈴狀ニ類ス花脱シテ蕚内ニ細子ヲ結ブ各々四粒アリ華彙

○弘賢曰以上四種はワレモカウと名づけし義いまだ考ず

薫集類抄引二本草一云茅香花唐人説崐崘之趾雪山之砌多生二此草一所レ謂吉祥草忍辱草等是也

『此間彩畫一葉茅香略レ之』

本草綱目啓蒙云茅香漢渡ナシ武州原野處々ニ自生アリ葉ハ白茅（ツバナ）葉ノ如ニシテ白色ヲ帶ブ夏月穗ヲ出ススズメノカタビラノ穗ニ似タリ根ハ白色細長ク茅根（ツバナ）ノ如ク土中ニ繁延ス根葉共ニ香氣多シ葉ハ秋後ニ枯ル

『此間墨繪三葉（淄州茅香丹州茅香、崎嵐軍茅香）略レ之』

茅香花味苦溫無レ毒主二中惡溫胃一止二嘔吐一療二心腹冷痛一苗葉可三煮作二浴湯一辟二邪氣一令二人身香生一劔南道諸州其莖葉黑褐色花白卽非白茅香也

今附云茅香味甘平生安南如二茅根一

圖經曰

茅香花生二劔南道諸州一今陝西河東京東州郡亦有レ之三月生レ苗似二大麥一五月開二白花一亦有二黃花者一或有二結實者一亦有二無實者一並正月二月採レ根五月採レ花八月採レ苗其莖葉黑褐色而花白者名曰二茅香一也

『此間墨繪（茅香、茅類）二葉略レ之』

延寳年中開板せる宮城野といふ草花を集し册子にも此一種を載てわれもかうと題せり大和本草云地楡ワレモカウなり別にワレモカウといふ物あり芒類也花如レ穗似二荻花一といふ物すなはち是なり弘賢按ずるに茅香の轉訛せしなるべし

『此間墨繪地楡略レ之』

玉豉　一名地楡　ワレモカウ　梁湘王繹金樓子

比叡山鞍馬及ビ近道處々山野ニ生ズ蘇頌圖經本草ニ云今平原川澤ニアリ宿根ヨリ二月ノ中二苗ヲ生ズ初生地ニシテ獨莖直上高サ三四尺對シ分テ葉ヲ出ス楡ノ葉ニ似テ稍狹ク細長ニシテ鋸ノ齒ノ狀ニ似テ青色七月花ヲ開椹（クワ）ノ子ノ如クニシテ紫黑色根外黑ク裏紅ニシテ柳ノ根ニ似タリ今按ニ花ニ紅白ノ二種アリ華彙

『此間墨畫一圖略レ之』

朮　チケラ

諸州山谷ニ多クアリ春苗ヲ生ズ葉棧及ビ棠梨葉ノゴトシ莖蒿ノ幹ノゴトク青赤色高サ二三尺夏秋ノ交花

弘賢曰これは一品宮の衣服を狭衣の評し給ふなり歌のまへにありし雪のあしたに齋院のかれのかさねたてまつりし御ねくたれすがたぞおもひ出られ給ふはなやかなる色あひよりもめづらしくもみえしかなとまづおもひいでられ給ふとありて心に齋院よりもこの宮をとり給ふとおぼすなりわれもかうは芳草なるをにほひなくすさまじくとおぼせしはあまりたかぶり給ふ心ばへをさしてにほひなくすさまじとにやさればこそ歌に秋しもをこるにほひなりけりとよまれしなり流布の本には秋しもをとると書たれどそれにてはきこえがたし草のさまにもかなはず此草は秋さかりなるものなりさて常は其時節の物を相應にすめれどこゝはその人がらにあはせてあまりなることゝおもはるゝゆへこの比はあまりをとなしくこそとの給ふなりをとなしくとはをとりたるといふ義なり

十寸鏡草枕云院はわれもかうみだれおりたるかれのの御狩衣うすいろの御ぞ紫苑色の御さしぬき

弘賢云みだれおりたるといへる茅香のさまあきらかなりこれによればこの比まではまぎらはしきことあらざるにや

○釋名

われもかう源氏物語狭衣名義詳ならず

○弘賢曰ワレモカウは和名にあらずその證は本草和名及び和名類聚鈔等にみえず古今和歌六帖等にものせずよりて按ずるにモカウとは茅香の轉ぜしにてワレとはわら〱としたる形故ワラの轉語なるべし八雲御抄に忘草をわら〱と有と記させ給ひしぞ思合せらる閩人呼レ茅如レ麻といふこと本草綱目茅香の條下にみえたれば唐土にも似たること有なり

茅香本草

かうばう本草啓蒙云江戸

○弘賢曰すなはち香茅の字香なり

香茅

本草綱目時珍曰蘇頌圖經復出香麻一條云煎湯浴風甚良此卽香茅也閩人呼レ茅如レ麻故爾今併爲レ一

嗢尸羅同上引金光明經

線子檀本草啓蒙引輟耕錄

吉祥草　忍辱草

古今要覽稿卷第三百九十六

●草木部

われもかう

今世ワレモカウといふ草四種あり源氏物語狹衣等にみえたるは茅香といふ芳草にて四種の外なり今按いはゆる四種は茅の類一地楡二蒼求三麝草四なりこの內茅の類茅香の轉訛なるべし外三種はよりどころをしらず

源氏物語匂ふ宮云秋はよの人のめづる女郎花をさしかのつまにすめる萩の露にもをさ〳〵御心うつし給はず老をわするゝきくおとろへ行くふぢばかまものげなきわれもかうなどはいとすさまじき霜がれの比ほひまで覺しすてずなどわざとめきてかにめづるおもひをなむたてゝこのましうおはしける

弘賢曰よき香ある草をのみめでゝ香をりなき花には心うつさずといふ香草のうちにワレモカウをかぞへ入たれば茅の類ならびに地楡蒼求ともにかなはず麝草のみ香氣あれどものけなきといふにかなはずされば茅香なるべしといへり茅香はものけなきといふにもかなひ霜がれの比ほひまでおぼしすてずわざとがましきまで香にめづるおもひをなさんたてゝこのましくといへるによくかなへりそのゆへは生草にても香氣愛すべく乾草にては浴湯香印香諸供養香等に用ること薰集類抄にみえたるうへワレモカウとはワラ〳〵としたる茅香といふ名の轉じたるにて有べきとおもはるゝなり

狹衣云かうぞめの御ぞどもにあをきこきうすきわれもかうのをりもの奉りたるもいとゞにほひなくすさまじき心ちしたるにも云々

むさしのゝ霜がれにみしわれもかう
秋しもをごるにほひ成けり

弘賢曰流布印本にはをとるとあり花鳥餘情によりてあらたむ

上略ひとりごとさへくちふたがりぬるをなほいとわびしうおもひあまり給ひて冬ふかき霜がれの雪のあしたこそこの色はをかしけれこの比はあまりおとなしくこそ有けれとの給ふ云々

に此二説は銀杏の老たる樹に木瘻を生じて乳房の如きものたるゝによりて相模人のちゝのきといふはたま〳〵同名なるのみ既に仙覺鈔にちゝの木の葉は似二楊梅葉一といへばいてふとは異なることいちゞるし

詞草小苑云ちゝといふ木古書にみえず又今とてもあらずおもふにもし橡(トチ)の實なるべきか字鏡に橡は木の實止知とみえたり又今の人父をとゝといひ栂(ツカ)をとがといふなどにおもへば古はとちをちゝともいひけむこれを銀杏子などいふ説はおぼつかなし

ちゝを橡の轉語といふは誤なり又ちゝといふ木今もあらずといへるは伊勢國に古言の殘れるをしらざるなり

萬葉集類林引或說云ちゝの木は今現にオッチヰといふ伊豆の天城山にあり椎子の類の方言なり

ちゝの木は天仙果なる事をしらずして漫にオッチヰとよぶ物をちゝとし椎子の類とせしはあやまりなり

むもれ木（土佐方言）

○土佐人の説に此實むもれくさき故に名づくといへり按に南嶺子頼政卿の辭世を擧てむもれきの花さく事もなかりしにとよめるは無花果の事なり花さかずして實のなる故にみのなるはてはといへり云々弘賢此説をうたがひて他國の人に逢ごとに無花果をむもれ木といふやと問しに土佐國人いはく山中に大樹ありてむもれ木といふ板にひきて畫などに造るされど無花果にはあらず天仙果なりとこれをきゝて始めて頼政卿の作意を感吟せし也抑無花果のいちゞくは寛永年中西喃洋の種を得て長崎にうつせしが今は諸國にひろまりしごとし大和本草にみえたれば古は絶てなかりしなるべし岡村尙謙埋木の歌は萬葉集に弓削河原之埋木また埋木之下從其戀などあるを始とすべし古今集以下代々の撰集及び家集によめる埋木もまた萬葉集と同じ意にていづれの木にても谷の底水の中などに久しくうづもれて有をいふ頼政卿のよめる埋木も即此意なり然るを南嶺子は花さかずしてみを結ぶ一種の無花果とせしは此歌の詞によりて後世よりおしはかりし強ごとなり凡みのなるはてといひしは花さく事もなきよしなげかれし詞にむかへて辭世の歌なればさはよまれしものなるべしといへりこれは普通の說なり

天仙果（本草綱目無花果附錄 祕傳花鏡）

○此果花なくして實を結び全く尋常の果と異なるによりて天仙の名を命せしなり普濟方天仙蓮あり其種今何物たる事をしらずといへどもこれまた尋常の蓮にはあらざるべし

正誤

冠辭考云ちゝてふこのみは伊豆國の大島などにありて楊梅に似つと或人の萬葉注に書たれど其國人にとふにたしかになしといへり後に箱根人にとひつればちゝのみはしらずちゝの木は今いてふといふ木なりこれが老たるは乳房の如き物の垂ればいふならんといへり

和訓栞云今相模人はいてふの木をちゝの木といへり又東國にて此木にねぎごとすれば乳よく出るといへりとぞされどちゝの實は銀杏なるべし

ちゝは乳の如き白汁出るによりて名づけし物なる

に此菓一月而熟故名一熟と云しはおそらくは誤なるべし

もといちゃく

三河國土人の說に此品はもとよりいちゃくといひたるを今の大なる實のいちゃくわたりてよりその名をうばはれたればもといちゃくとよぶとぞ

いしづく本草一家言本草啓蒙肥前佐賀及び筑後の方言

○按にいしづくは卽いちゃくの訛轉なり

いぬびは和漢三才圖會本草啓蒙

○いぬは犬山椒犬蓼の如く其形相似たるをいふ

藪枇杷本草一家言播磨姬路方言

○藪は生ずる處をいひ枇杷は相似たるをいふ

山枇杷本草啓蒙肥前の方言

○名義上におなじ

ゐのびは同上

○卽いぬびはの意なり

ゐのび大和方言

○ゐの枇杷の下略なり

からすのびは山城方言

○烏よく此果をくらふゆゑに名づく

さるがき駿河方言

○其意烏枇杷のごとし

いぬとうがき安藝方言

○とうがきは常の無花果をいふ此果また無花果に似たりよりていぬとうがきと名づく

さるのしり山城方言

○本草一家言云其實底赤而似二猴尻一故名

うしのした豐前方言

○うしの舌は葉の形によりて名づく

うしのひたひ周防方言

○名義詳ならず

かきほうづき伊勢方言

○此葉柿葉に似て實あかき事ほうづきのごとし故に名づく

いぬほうづき伊豫方言

○其意犬枇杷のごとし

まめつた同上　まめきんは同上　こたか薩摩方言　かくろ同上

いたふ土佐方言　いたつほう攝津大阪方言

○ゐの枇杷以下の數名本草啓蒙にみえたりまめつた以下名義詳らかならず

ス味ヨシ無花果ハ近世ワタルイチヂクニ似タル故ニ
其名ヲカリテ無花果ヲモイチヂクト云
本草啓蒙云イチヂクハ種樹家ニコレヲ龍眼ト呼甚非
也諸國ニ多シ小木ナリ民家ニ栽テ籬トス挿テ活シ易

『此間圖二面(天仙果、一種長葉のもの)今略レ之)』

ちゝのみ



シ葉ハ辛夷(コブシ)葉ニ似テ厚ク互生ス切レバ白汁出夏月葉
間ニ實ヲ生ズ形無花果ニ同ジ只大サ四五分初ハ緑色
熟シテ赤シ小兒採リ食フ破レバ内ニ細子アリ木饅頭(イタビ)
ノ如シ

本草綱目云天仙果出ニ四州ニ樹高八九尺葉似ニ荔枝ニ而
小無レ花而實子如ニ櫻桃ニ纍々綴ニ枝間ニ六七月熟其味
至甘宋祁方物賛云有ニ子孫枝ニ不レ花而實薄言采レ之味
埒ニ蜂蜜ニ

○按祕傳花鏡引ニ此文ニ宋祁以下二十一字無其他大
同小異

○釋名

ちゝのみ 萬葉集 仙覺鈔

○ちゝは乳字の義にて此葉を摘みとれば白汁出る
故に名づく

いちゞく 大和本草 本草啓蒙

○或曰イチヂクは映日菓の上下略にして轉音なり
岩崎常正曰或説に此樹實を結ぶ事多しといへども
すべて一時には熟せずたとへば今日一つ熟すれば
また明日一つ熟し日毎に一つ〳〵づゝ熟する意に
て一熟ともいへるといひ和漢三才圖會無花果の注

古今要覽稿卷第三百九十五

●草木部

ちゝのみ

ちゝの木　むもれ木　いちゃく　天仙果　いぬびは

ちゝのみは今もちゝの木一名いちゃく一名いぬびは一名むもれ木とよぶものゝ實にして西土にいはゆる天仙果なり凡萬葉集父の枕詞にちゝのみとよめるはいかなる物にやいまだ詳ならざりしを春木隼人にきけり伊勢國には細葉の天仙果ありて木をちゝのきといひ實をちゝの實といふよしはじめて明證を得て古名の傳れる事を感じたり本草啓蒙に諸國の方言を載て伊勢にてはちゝたつほ筑後にてはちゝふとあるにても天仙果のちゝのきたる事明らけし抑天仙果は暖國の産にして二種あり一種は柿葉の如く一種は枇杷葉の如し仙覺鈔にちゝの木は葉似二楊梅葉一といへるはおもふに此枇杷葉のものゝ形狀をおほよそにいひしなるべし萬葉集云慕レ振二勇士之名一歌一首知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美己等云々又云陳二防人悲別之情一歌一首知知能未乃知知能美許等波多久頭怒能云々仙覺鈔云ちゝの木は葉似二楊梅葉一菓如二胡黏子一（萬葉集類林引二仙覺鈔一黏を頽に作る）熟時色赤鴨好食レ之云々（類林云鴨疑鵯乎）此木在二走湯山一又伊豆大島此樹茂盛也云々

此二つの云々の字による時はちゝの木の似二楊梅葉一といへるは仙覺よりは以前の說なる事しるべし代匠記云ちゝのみは木の實なり葉は柳櫻の如くして實は胡黏子の如し伊豆の國走湯山及び伊豆の大島などにおほしといへり

此胡黏子も胡頽子の誤りにして柳櫻は楊梅のあやまりなるべし

和漢三才圖會云天仙果和列山中有レ之冬凋春生レ葉似二讓葉一潤靑末尖六七月無レ花結レ實一樹二三顆狀似二枇杷一而小初靑熟赤紫色内滿二白細子一小兒喜食

大和本草云イチジクハ無花果ト同名ナリ葉ハ木犀ニ似テウスク冬ヲツ其實無花果ヨリ小ナレドモ能似タリ秋冬ニ至テ熟スレバ内ニ多肉アリテ恰無花果ノ如シ味甘シ小兒好デ食ス實靑キ時ワレバ白汁アリ村落林木ノアル處ニアリ村民其葉ヲトリ飯上ニ置蒸テ食

きしものなれど補遺の說は唐本草に薊草葉圓といへるが圓字を本草綱目にはおとせしによりて遂に其說をなせしものなり畢究西土にても後世に至りては綱目をのみたうとみて古の本草をよむものいと稀なるが故にかゝる誤りもいできしなりまた補遺に薊草味簽嚥不下といへるは唐本草にいはゆる薊草味甘註に堪噉別本注に莖魚食之甚美といへるものとは其味も殊に違へりかつ補遺に薊を蘐に作るはその誤り明らけし

大和本草に三才圖會を引て浮薔をミヅナギとよめり按にこれは三才圖會に圖する所の花葉のさまによりて其說をなせしものなれど其實は救荒野譜に浮薔卽浮蘋菜圓白花者是者葉尖黃花者其名曰莕其根莖亦可食爲蔬とあれば浮薔はやがて綱目にのする水鼈とおなじものにて今の俗チャン〳〵藻一名トチカヾミとよぶもの也かく本文のいと明なるもかへりみずいたづらに畫きしものゝあやまりをうけて其圖にのみかゝはりて其說をなしはた浮薔の浮は浮萍の浮と其意の同じきをわきまへざるはいといぶかしき事なり又水葱は一本立の草にして枝又あるものにはあらず萬葉集に柄者指爾家牟とよめる柄字はまたくひさくなどの柄と同じ意にて其一本立の莖をさしていひしなり然るを萬葉集略解に枝なりと注せしはそのことはりたがへり

れを世の中のことにとりなしていへるものなるべしされど古今六帖に載しことなし草は一種の草をさしていひしにはあらざるに似たり

水奈岐

多識編に此名及び一名奈汁比を澤潟の名とせしは誤なり汁比及反伎なれば奈汁比はまたゝなぎにしてまた水奈岐は原より此物の名なる事しるべし

美豆あふひ 大和本草 本草啓蒙

○みづは水にてあふひは葵をいふされど西土にて水葵といへるは莕菜の一名なり

澤桔梗 同上

○此草池澤に生出てその花きちかうに似たりゆゑに名づく

水葱 萬葉集延喜式七卷 食經楊氏漢語抄

○按に救荒本草に水葱といへるは今の俗にふとゐとよぶなり唐六典に水葱席といへるもまたふとゐにて識なせしものなるよし然れば此云水葱は其莖あをくして圓かなるさまふとゐに似たるによりて名付しなりといふべし

蔛菜 本草和名

○證類本草に菜を草に作るものは傳寫の誤りなり

蔛榮 同上

○榮は菜字の誤りにてのちに一名とはなれるなり本草中この類いと多し

接余 同上

○莕菜もまた接余といふ二種其葉おほよそ相似たるによりてなり或は余を輿に作るは其音の通へるによりてなり

穀菜 同上

○名義詳ならずされど穀は說文に百穀之總名なりといへども穀とは米をさすなり此の草おほく穀田中に生出るによりて此名をおふせて草冠は後にそへしものなるべし

○正誤

救荒野譜補遺云蔛草食レ葉云々 松岡玄達 これをサシオモダカ 澤瀉をもさしおもだかといへど此さしおと訓ずもだかは世に和產の澤瀉とよぶものなり

按にさしおもだかは其葉澤瀉よりもいと細長して蔛草の葉のまどかにて微しく長く澤瀉に似てさゝやかなるものとは其さま大に異なり凡さしおもだかを蔛草とせしは其說救荒野譜補遺の圖にもとづ

ノ池澤中ニ生ジテ形最大ナル者ヲミヅアフヒト云一
名ナギ一名サハギ、ヤウ是三才圖會ノ浮薔ナリ
唐本草云蔛草葉圓似ニ澤瀉ニ而小花青白赤堪レ噉所在
有レ之別本注云江南人用蒸レ魚食レ之甚美五月六月採ニ
莖葉ニ暴乾

みづあふひ



○釋名

奈疑 日本書紀萬葉集康頼本草

○名義詳ならず憶に奈はなめの下略にて背字の義疑は葱にて此草を採て其葉をつまみされば其くさのさま葱のごとくあるひは葱とおなじやうにこれもあつものに調じぬればしか名付しにや又は物のなめらかなるをなめともいへば滑字の意にてもあるべし又は水門をみなと水底をみなそこといへばこれもみなぎにて水葱の二字を訓ぜしにてもあらんされどもなのみを省く例あるまじければこれも強てはいひがたかるべし又はなぎは其葉のさまさなぎの葉に似たる故にといはゞその名義いとやすらかなれど木のなぎは舊は物にみえず漸く古今六帖新撰六帖などをその始とすべければこれは却て其葉草のなぎに似たるによりて名付しものなるべし

古奈伎 萬葉集

○こは小字の意にて此葉のさゝやかなるかたをさしていひ萬葉集に殖子水葱の字を用ひしは飢子哭の意をふくめるにや

ことなし草 言塵集

○凡なきといふもなしといふも其意同じければそ

まれなるが故なるべし

日本書紀云天智天皇十二月癸亥朔乙丑天皇崩于近江宮癸酉殯于新宮于時童謡云美曳之弩能曳之弩能阿喩阿喩擧曾播施麻倍母曳岐愛倶流之衞奈疑能母縢制利能母縢阿例播倶流之衞

萬葉集云大伴宿禰駿河麻呂娉同坂上家之二孃歌一首春霞春日里爾殖子水葱苗有跡云師柄者指爾家耳

又云上野國歌可美都氣努伊可保乃奴麻爾宇惠古奈宜可久古非牟等夜多禰物得米家牟

又云上野國歌奈波志呂乃古奈伎我波奈乎伎奴爾須里奈流留麻爾末仁安是可加奈思家

又云詠酢醤蒜鯛水葱歌醤酢爾蒜都伎合而鯛願吾爾勿所見水葱乃羹物

延喜式云營水葱一段苗二十圍惣單功五十三人耕地二遍把犂一人馭牛一人牛一頭耕理平和一人糞百二十擔運單功二十人殖功十五人五月播殖三度十五人度別五人採功十五人三度

本草和名云蔛菜七卷食經云水葱和名奈岐

和名類聚鈔引唐韻云蘐胡各切水菜可食楊氏漢語抄云水葱奈木一云蔛菜蔛音與斛同今按蔛宜作[illegible]斛者石斛他草名也

○字書に蘐字なし本草和名蘐を蘐に作るを是なりとす新撰字鏡に茈蘐二字奈支字彙に蘐胡各切音斛蘐菜生水中可食とみえたりこれにて其あやまりなる事はいちじるしされど茈字字彙に七各切音錯行草聲とありていまだなぎのことゝする意はみえず

和漢三才圖會云水葵生池澤中莖端一葉如萍蓬草樣而小又抽莖生小葉似山丹反那木葉故名那岐開花似桔梗花而深紫色數朶甚美又有白花者結子中有細子

大和本草云浮薔ハ三才圖會ニ載タリ其ヱガケル葉花澤桔梗ナリ六七月採取湯淖晒乾再泡鹽炒拌食或醬醋拌食生食亦可トイヘリ水澤ニ生ズ厚クシテ慈姑ニ似タリ夏秋紫碧花ヲ開ク堪久可愛和俗ニ水葵トモ澤桔梗トモ云花色桔梗ニ相似タリ又有白花者葉圓而短與碧花有異

本草綱目啓蒙云蔛草ハ即水アフヒノ小ナル者ナリ田中ニ生ズ一根數葉始ハ鴨跡草葉ニ似テ厚ク深緑色光アリ後漸ク圓葉ヲ出ス秋ニ至テ莖ノ高サ三四寸五瓣ノ花ヲ連綴ス大サ三四分深碧色又白花ナル者アリソ

古今要覽稿卷第三百九十四

●草木部

なぎ

なぎ一名コナギ一名コトナシグサ一名ミツアフヒ一名水ナギ一名サハギ、ヤウは西土にいはゆる水葱一名蔛菜一名蔛榮一名接余一名蕿菜なり此草春の末池邊澤の邊或は田つらなどに生出て大小二種ありともに其はじめは葉いと細して穀精草のと田石菖のこと後に出る葉はそれをばさまかはりて小なるは圓かなるうちに微しく長みありてさながら竹柏の葉にもまがふべく大なるは圓かにしてまた〳〵あふひの葉に似てすゑ尖れり夏たけて其小なるは高さ四五寸大なるは一尺ばかり或は二尺にも莖たちて秋に至れば其くきのすゑ穂になりてきゝやうの如き六瓣の花あつまり咲大さ四五分も有其小なるは花もちいさしまた所によりては花のいろ白きもあれど（大和本草）小なるかたにはなしまた柿色なるもありてすべては三四種なり

扨葛飾の釜屋堀にとなるうなぎ澤舊はこなぎのいとよく生出しところなりといへばまたくこなぎ澤のよこなまれるを今は其草絶てなきをみれば其名のよこなまれるもことはりあるに似たりされど津の國大坂より枚方へとほる道の奈疑澤には今にこなぎ多く生出たるは行かふ人の歌よむ料ともなりていとめでたしまた此草のたしかに物にみえたるは天命開別大皇かみさり給ひし時の童謠を始とし（日本書紀）その草の苗なりといひしも今はえさしつらんと思ひはかりしは大伴宿禰駿河麻呂の歌を始とし（萬葉集）其花をめでゝきぬにすりまた其草を妹にたとへて戀しき種をもとめしよしはともに上野國歌を始とし（同上）あるは鯛のうまきをとめて此あつものはほりせぬよしは酢醤蒜鯛水葱歌を始とし（同上）あるはこれを田つらにやしなひ立て天皇の供御に奉りしは內膳式を始とす（延喜式）かれ古は歌にのみよみしにはあらず供御の料にも奉りしものなれば和名鈔にも芹蕁などゝ同じくこれを水菜類に載たり今も片田舎にてはあつものに調ずるよし聞ゆれど都下の人はこれを盆に植て花をのみもてあそび絶て食料となさゞるは菜蔬多かるうへにまた此草の

○按に南柴胡は北柴胡に對していふ此種時珍以上絕てみる所なし

○正誤

千金方藥註云山城白川山ニ螢草アリ郎救荒本草ニ獐牙菜ト名ヅク此柴胡ニ近キ者ナリ代用ユベシ

按に本草啓蒙によるに山城白川山に產する螢草は卽南柴胡にして救荒本草に載る所の獐牙菜とは別種なり今相混じて一となすものは全く同名によりてあやまれるなり

○按に松岡子敕の説に土茱は周防國の方言なりといへり

韮葉柴胡圖經本草 本草綱目

竹葉柴胡同上

○正誤

製劑記云花白クウス赤キハ是白柴胡也

按に此種今詳ならず白柴胡は蓋し銀柴胡のことなるべしされど銀柴胡はもと銀州銀縣の竹葉柴胡にして別に一種の花及び根などの白きものにあらず本草辨疑云頃銀柴胡といふものを渡す形白く大にして嚙てみる氣味なきものなりこれは時珍のいはゆる一種似ニ桔梗沙參ニ白色而大市人僞物にして銀州に産する其根赤色なるものにあらず

螢草　大柴胡　南柴胡

螢草一名大柴胡は漢名を南柴胡といふ此草近郊原野處々これあり其葉獐牙菜葉に似て葉面淡青色にして背白色を帶ぶ其面九縱道ありて其間に細き横紋多しこれを肥地に移し植る時は其葉朝鮮玉簪の如く長さ尺許濶さ三四寸にいたり其莖幹最太くして四五莖を連生す其花實は正に本草啓蒙にいへるが如く前條と全く一様にしてたゞ微大なるを異なりとす

本草綱目啓蒙云城州白川山ニ一種大葉ナルモノアリ其葉紫蕚葉ノ如ク長サ一尺餘濶サ二三寸秋ニ至リ粗莖ヲ起シ高サ六七尺枝ノ末ゴトニ花ヲ開ク花實亦相同シテ微大ナリ是集解ニ謂ユル南柴胡ニシテ最下品ナリ今藥舗ニ鎌倉柴胡ト稱スルモノハ薩州肥後邊ヨリ出ス數蘆連生シ澀味アルモノヲ雑ユ是南柴胡根ナリ

本草綱目云北柴胡根如ニ前胡ニ而軟南土所産者不レ似ニ前胡ニ正如ニ蒿根ニ強硬不レ堪ニ使用ニ

『此間彩畫はたるそう一枚略レ之』

○釋名

螢草千金方藥注 本草啓蒙

○按に螢草はもと獐牙菜の名なり此藥頗る獐牙菜に似たり故にまた螢草と名づく

大柴胡本草啓蒙

○按に此もの根葉北柴胡に似て極て大なり故に大柴胡と名づく

南柴胡本草綱目

後之産次レ之
用藥須知云柴胡和産共ニ可レ用但漢ハ多クハ陳舊ニシテ蠹蛀多シ性味脱シテ不レ堪レ用鎌倉ト稱スルモノ眞ナリ可レ用
本草綱目啓蒙云鎌倉柴胡眞ナリ卽集解ニ竹葉韮葉ト云モノ是ナリ春未ダ薹立ザル時地ニ叢生スル葉ハ細長シコレヲ韮葉トシ薹タチテ後ハ葉短シコレヲ竹葉トス二物アルニ非ズト炮炙全書ニ云リ然レドモ今國ニヨリテ濶葉ノ者一種アリ是竹葉柴胡ナリ其尋常ノ者ハ韮葉柴胡ナリ今藥肆ニ鎌倉柴胡ト稱スルモノ僞雜多シ用ユルニ堪ヘズミシマ柴胡ト呼ブモノ佳ナリ柴胡ハ京師四邊ニ産セズ勢州紀州中國四國九州ソノ餘諸州ニ生ズ葉ハ麥門冬葉ニ似テ短クウスク堅條多シ又稍濶クシテ箬竹（チマキザサ）葉ニ似タル者アリ皆莖ニ紫條アリ秋ニ至テ長サ二三尺葉互生ス形漸ク短小ニナリ葉間ゴトニ枝叉ヲ分チ小花ヲ開ク攢簇スル事芹ノ花ノ如ク黄色ニシテ茴香花ノ形ノ如シ實モ茴香ニ似テ小シ此實ヲマキテ生ジ易シ舶來ノ者ハ唐ノ筆防風ノ形ノ如ク蘆頭ニ毛アリ今ハ稀ナリ和ハ單蘆ニシテ細長ク澀味ナキモノヲ眞トス今藥舖ニ三島柴胡ト稱スルモノハ東國ヨリ出ス此ニハ單蘆ナルモノ多シ藥用ニ入ルベシ
證類本草引ニ圖經本草ニ云柴胡今關陝江湖間近道皆有レ之以ニ銀州者ニ爲レ勝二月生レ苗甚香莖青紫葉似ニ竹葉ニ稍緊亦有下似ニ麥門冬ニ而短者上七月開ニ黃花ニ生ニ丹州ニ結ニ靑子ニ與ニ他處者ニ不レ類根赤色似ニ前胡ニ而強蘆頭有ニ赤毛ニ如ニ鼠尾ニ獨窠長者好
本草綱目云北地所レ產者根如ニ前胡ニ而軟今人謂ニ之北柴胡ニ是也入藥良其苗有下如ニ韮葉ニ者竹葉者上以ニ竹葉者ニ爲レ勝
『此間墨繪二枚（紹興本草所載江寧府柴胡、同丹州柴胡）彩畫一枚のぐさ略レ之』

○釋名

のくさ　藻鹽草
○按に此草多く岡野に生ずゆへに野草と名づく
鎌倉柴胡　本草辨疑　和漢三才圖會　大和本草　藥用須知
○按に本草啓蒙云今ハ鎌倉ヨリ柴胡ヲ出サヾレドモソノハジメ鎌倉ヨリ出セシ故舊ニ仍テイマモカマクラ柴胡ト稱ス
つちな　千金方　藥註

苗有ニ芸蒿山菜茹草之名一而根名ニ柴胡一也蘇恭之説殊缺レ明古本張仲景傷寒論尙作ニ茈字一也

按に唐本草に茈薑茈草を引且此根紫色などいひて後に作ニ茨音一大謬矣といへるは全く時珍の説のごとく蘇説珠缺レ明といふべしされど茈胡の茈音紫一に柴に作るものはその假借なることをしらずみだりにその假借の字によりてさらに説をなし老則采而爲レ柴といへど柴胡は原より小草にして柴となすべきものにあらずゆゑに本草原始には柴をもつて根の事とし狀如ニ前胡一強梗如レ柴などいへどこの説もまたいかゞあらん

のぐさ　鎌倉柴胡　韮葉柴胡

のくさ一名かまくらさいこ一名つちなは漢名韮葉柴胡といふ此卽唐宋以下方書用るところの柴胡なり此種上總下總上野下野武藏常陸伊豆駿河及び伊勢紀伊播磨肥後薩摩日向等の諸國皆これありといへども舊より相模鎌倉の産をもつて最上とす今その地の産は至て稀なりといへども津久井縣あたりの山野には極めて多きよし近道にては鐵山及び駒場野等またあり

此草二月の比苗を生じ狀おほにらの葉或は大葉の麥門冬に似て短く葉中すべて細縦理ありて横紋なし隨て其叢葉中より細葉を抽て秋に至れば高さ二三尺に至りその梢細枝叉を分ち小黃花を攢簇し後細實を結ぶともに茴香の花實の如し根は單蘆にして黃赤色また土地によりては黑色を帶るものありその根嫩なる時は鼠尾の如く年をふるものは巨大にして或は數蘆を連生し頗る珊瑚菜の如き疣瘩あるものあり一種國によりて濶葉にして箬竹葉に似たるものあり此卽西土に所謂竹葉柴胡なるよし本草啓蒙にみえたり此二種いづれにも初春及び晩秋の比とりて並に緊實精新なるものをよろしとす

和漢三才圖會云按柴胡有ニ鎌倉河原之二種一以ニ鎌倉柴胡一爲ニ最上一唐人亦求レ之美稱

又云鎌倉柴胡根縮短長者二寸許

按に今關東産するところの柴胡は根の長さ三四寸より或は六七寸に至るものありその縮短二寸許のものゝみにあらず蓋し此種は關西産にして下品のものなるべし

淡赤色本相州之産而今多出ニ於武陽一者良日向薩摩肥

茹草同上 ○本草綱目云茈胡生₌山中₋嫩時則可ㇾ茹故有₌山菜茹菜之名₋

芸蒿同上

○正誤

大和本草云鎌倉柴胡與下本草所記之形狀及自₌中華₋所ㇾ來者上相同コレヲ用ユベシ本邦ノ俗古來アヤマリテ雞腿兒ヲ用テ河原柴胡ト稱ス形狀性味大異不ㇾ可ㇾ用

本草啓蒙云河原柴胡ハ庸醫誤用テ解雅ノ材トスコレ菜類ニシテ柴胡ノ類ニ非ズ即救荒本草ノ委陵菜一名翻白菜ニシテ本草原始ノ翻白草一名雞腿根ナリ

按に此二說はともに唐宋以下の柴胡をしりて絕て古の柴胡はしらざるものなりさて雞腿兒は七葉三葉の別ありて救荒本草に圖するところのものは七葉のものにして本草綱目に說ところのものは三葉のものなり然るを本草原始には本草綱目に載る所の雞腿兒の氣味形狀主治等を悉くのせてその圖ばかりを誤りて救荒本草の委陵菜を圖せしより大和本草にはそのあやまりをうけてみだりに雞腿兒を以て河原柴胡とは訓ぜしなり又本草啓蒙に河原柴胡に救荒本草の委陵菜を引しはその說是なりといへどもふたゝび本草原始の雞腿根を引しはもとこれ原始の圖の全くあやまりなることをしらざるものなればその因襲の甚しきまた大和本草に同じ畢竟雞腿兒をのちに河原柴胡と訓ぜしそのもとはかかる誤によりて遂にその名の出來しものなるべし或は二種同名によりてそのものをあやまりしともいふべけれど委陵菜の河原柴胡は元和九年の製劑記をもつてはじめとすれば雞腿兒を河原柴胡と訓ぜしよりは遙かに以前のことなること明らけし

唐本草云茈是古柴字上林賦云茈薑及爾雅云藐音邈茈草並作₌茈字₋且此草根紫色今太常用₌茈胡₋是也又以ㇾ木代ㇾ糸相承呼爲₌柴胡₋且檢₌諸本草₋無₌名ㇾ此者₋傷寒大小茈胡湯最爲₌痰氣之要₋若以₌芸蒿根₋爲ㇾ之更作₌茨音₋大謬矣

按に茈胡の茈音紫は卽唐以前の說にて茈薑茈草の茈をも併せて紫の音となすものは誤れり

本草綱目云茈字有₌柴紫二音₋茈薑茈草之茈皆音紫茈胡之茈音柴茈胡生₌山中₋嫩則可ㇾ茹老則采而爲ㇾ柴故

のぜり延喜式本草和名和名鈔
○按に此草叢生野芹の如し故に名づく正に本草啓蒙に村家方を引て柴胡一名山芹の名ありおもふにこれとまた〳〵會意なり
はまあかな本草和名本草類編
○按に此根紫赤色なるによりてあかなと名づくはまは夫木集にいはゆる長柄の濱眞間の濱などの濱にてすべて河原の沙地をさしていへるなり
あまあかな和名鈔
○按に證類本草に日華子を引て柴胡味甘とみえたれば此種味甘きものもあれどこゝのあはおそらくはばの誤りなるべし
かくもんし
○製劑記の承應板の製劑記にはしの下にやの字あり
のかんたう同上
○共に名義詳かならず岡村尙謙曰用藥須知に白頭翁を注して近來以レ之充二柴胡一誤也といひまた美濃の方言を載てかくもちの名ありこれによればかくもんしは蓋しかくもちの轉にて白頭翁の名なるべく又本草啓蒙に白頭翁の一名にらかんさうの名ありこれによればのかんたうはまたらかんさうの轉にてこれも白頭翁の名なるべければ此二名は全く河原柴胡の名にあらざるべし又惣灸全書に白頭翁をも河原柴胡といへるはけだしこれらのあやまりよりまた誤れるものなるべし
河原さいこ同上用藥須知大和本草本草蒙啓
○按に此草處々の河原に多し故に名づく
うらじろ本草啓蒙
○此草葉うらすべて白しよりてうらじろとなづく
茈胡神農本經急就篇延喜式
○按に唐本草茈胡を注して此根紫色とみえたりたとへそのものはことなりといへども皇朝にてあかなと訓せしもまたその說によりしものなるべししかるに戰國策及び圖經本草以下多く柴胡に作る柴字また才柴の二音ありて茈と一樣なれば卽假借なり胡字の義いまだ詳ならず
地薰神農本經
○按に西土の產此草香氣多し故に名づく
山菜名醫別錄

意也且傷寒論に傷寒五六日嘔而發ㇾ熱者柴胡湯證具而以ニ他藥一下ㇾ之柴胡證仍在者復與ニ柴胡湯一此雖ニ已下ㇾ之不ㇾ爲ㇾ逆必蒸々而振却發熱汗出而解又陽明病脇下鞕滿不ニ大便一而嘔舌上白胎者可ㇾ與ニ小柴胡湯一上焦得ㇾ通津液得下ニ胃氣一因和ㇾ身濈然而汗出解也といへど今あるところの竹葉茈胡にては絕てこの功能ある事なし

○又按に神農本經に茈胡ありて前胡なければ前胡は卽古の茈胡の一名にて猶獨活ノ一名羌活の類ひなるを名醫別錄に至りて始てそのものを區別し遂に二種とせしものなるもしるべからず

といへりこれまた一說也出雲風土記云島根郡凡山野所在草木云々芎藥柴胡

延喜式典藥寮云諸國進年料雜藥　尾張國四十六種云々茈胡十二斤

又云美濃國六十二種云々茈胡十斤

又云阿波國三十三種云々茈胡一斤

又云安藝國三十二種云々茈胡六斤

又云播磨國五十三種云々茈胡十斤

製劑記云黃色ナル花サキテ根ノ紫色ナルヲ河原柴胡ト云カハラニ多ク生ズ

和漢三才圖會云河原柴胡根長四五寸許紫赤色者爲ㇾ上純紫者次ㇾ之白者爲ㇾ下

本草啓蒙云河原柴胡ハ胡蘿蔔葉ニ似テ背ニ白毛アリ中夏ニ至リ五出ノ黃花ヲ開ク根ハ赭黑色藥舖ニ粗皮ヲ去テ乾シ貨ル

證類本草引ニ名醫別錄一云茈胡一名芸蒿辛香可ㇾ食生ニ洪農川谷一二月八月採根暴乾

又引ニ集註本草一云今出ニ近道一狀如ニ前胡一而强博物志云芸蒿葉似ニ邪蒿一春秋有ニ白蒻一音弱長四五寸香美可ㇾ食長安及河內並有ㇾ之此茈胡療ニ傷寒一第一用

救荒本草云委陵菜生ニ田野中一苗初搨地生後分ニ莖叉一莖節稠密上有ニ白毛一葉彷彿類ニ柏葉一而極闊大邊如ニ鋸齒形一面青背白又似ニ雞腿兒葉一而却窄又類ニ鹿蕨葉一亦窄莖葉稍間開ニ五瓣黃花一其葉味苦微辣

本草綱目云其苗如ニ邪葉一者最下也按夏小正月令云仲春芸始生倉頡解語云芸蒿也似ニ邪蒿一可ㇾ食亦柴胡之類入ㇾ藥不ニ甚良一故蘇恭以爲ㇾ非ニ柴胡一云

『此間彩畫一葉かはらさいこ略之』

○釋名

り以前の説なるべしたとへ相似て別種のものにもせよ古にいはゆる茈胡は絶て竹葉のものにあらざる其形狀の大略を丶しはかるべし又時珍の説に如ニ邪蒿一者最下也（本草綱目）

〇按に唐宋以下用る所の茈胡は竹葉韭葉のものをよしとす故に邪蒿葉のものを以て最下とはいひしなり

といへるを遠藤元理は河 原茈胡の類歟（本草辨疑）といへり又河原茈胡は解散に用ひ鎌倉茈胡は虛熱に用ゆるは人皆これをしれりされど虛熱にも河原に卽効ありといふ人多し且和の草は形異なれども根樣と主能同きものなれば古の採藥使も所以ありて用ひ來るとみえたり本草に不レ合とて捨レ之ことなかれ（同上）ともいひ松岡玄達も河原茈胡は和方久しく用ひきたりて解熱の功は茈胡に彷彿たり（用藥須知）

〇此說また竹葉のものを主として茈胡を辨ぜし故に彷彿とはいへるなり

といへば彼是おもひ併せていづれにも仲景方などには唐より以前の茈胡を用ひたきものなり又岡村尙謙の説には茈胡前胡はもと一類二種なり故に古人これを通用す蘇頌の説に前胡春生レ苗青白色似ニ斜蒿一初出時有ニ白芽一長三四寸味甚香美又似ニ芸蒿一（圖經本草）といへるは弘景博物志を引て芸蒿葉似ニ邪蒿一春秋有ニ白蒻一長四五寸香美可レ食（集註本草）といへるにその形狀全く相似たり又神農本經に茈胡味苦平主ニ心腹中結氣寒熱邪氣一推レ陳致レ新生ニ洪農川谷一名醫別錄に前胡味苦療ニ痰滿胷脅中痞心腹結氣風頭痛一去ニ痰實一下レ氣治ニ傷寒々熱一推レ陳致レ新弘景注に前胡生ニ下濕地一爲レ療殆欲レ同ニ茈胡一唐本草に傷寒大小茈胡湯最爲ニ痰氣之要一圖經本草に前胡今最上者出ニ吳中一又壽春生者皆類ニ茈胡一而大氣芬烈味亦濃苦療レ痰下レ氣最要と此諸説による時は茈胡前胡はその形狀のみならずまた氣味功能及び產地も全く相似たるもの故に古人必ずこれを通用せしなり正に外臺祕要のする所の張仲景の大前胡湯小前胡湯は卽今傳る所の傷寒論の大小茈胡湯なるにてもその義はあきらけしよしや邪蒿葉のものは其眞物にあらずといへども前胡は原より皇朝に居多の物なれば若古方を用ゆる時は彼竹葉韭葉等の淡味にして絶て香氣なきものを用るよりは却て苦味芳香なる前胡を用ゆるをよろしとす此卽仲景の

古今要覽稿卷第三百九十三

●草木部

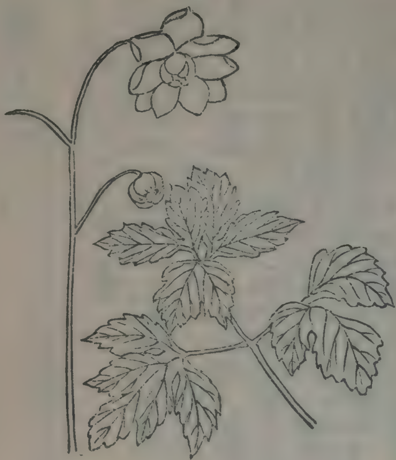
のせり　はまあかな　茈胡

のせり一名はまあかな一名あまあかな一名かくもんし一名のかんたう一名かはらさいご一名うらしろは漢名を茈胡一名地薫一名山菜一名茹草一名芸蒿といふ古は出雲國島根郡に産せし事其國の風土記にみえ尾張美濃阿波安藝播磨等より貢せし事は延喜式にみえたりいままた阿波安藝及び備前紀伊能登佐渡越後等より此物を出すといへども豐後臼杵の産最よろし和漢三才圖會凡此草はいづれの國にても河原の沙地に生じまた岡原上にも多しその苗はじめ地に搨して生じ後に莖叉を分つ葉の狀大略柏葉に似て濶大にして面青背白その莖高さ一尺許にして五瓣の黃花を開く其形蛇苺花に似てやゝ小さし根は牛房の如くに直下し紫赤色にして鼠尾よりは太しされど河原に生ずるものは其葉岡原のものに比するに殊に大にして頗る蕨葉の如く根もまた隨て長し藥に入るには二種並に通用すべし扨茈胡に邪蒿葉竹葉韮葉等の別あり憶に梁以上に用ゆるものは卽邪蒿葉のものにして唐以降に用ゆるものは全く竹葉韮葉のもの也その邪蒿葉のものは蘇敬の說に以二芸蒿根一爲二茈胡一大謬矣唐本草といひしより後世方書絕て用ゆるものなしまた蘇頌の說に茈胡有レ似二斜蒿一圖經本草といへどもいまだその形狀を詳にせず漸く明に至りて周定王の救荒本草を作し時此草を載て新に委陵菜或は翻白菜などゝ其名を命せしは全く其時の本草家者流の誤りなりといへども古の茈胡の再び世にあらはれしは正に此時を始とすさはいへ茈胡の一名を地薫或は芸蒿といふ時は古の茈胡はいかにも其草本至て芳香なるものなるべければ今の河原茈胡のさせる香氣なきものとは相似て別種なるもしるべからずされど世に竹葉茈胡或は鎌倉茈胡と稱するものも蘇頌の說に二月生レ苗甚香圖經本草といへど今あるところのものは絕て香氣なし全く其風土の異なるによりての故なるべし抑此草を以て茈胡とせしは皇朝古來相傳の說にして蓋し欽明天皇の御宇よりのことなるべければ其說のもとづくところは唐よ

蓮花升麻

蓮花升麻は武州秩父山中及日光山にもあり根の形大葉升麻に似て鬚多く葉はあはもりに似て色濃く光澤ありて毛なし莖紫色なり三四月比花を開く三四枝を分て枝梢ごとに一萼あり大さ錢の如く八九瓣ありて狀蓮花の如く中心薄紫なり

蓮花升麻



葉のものにして即雞骨升麻なれば地錦葉のものとは其種異なり今二種混同して其説をなすは謬なり

大葉升麻　日光升麻　鬼臉升麻

大葉升麻一名日光升麻は漢名を鬼臉升麻といふ此草一枝三葉にして毎節上紫黑色なるは尋常のあはぼと同じけれど其枝葉は極めて大なり凡三葉の內中葉は葉の狀正しく形くまいちごに似て濶大にして鋸齒あらく缺刻深し其面深綠色にして背淡青色葉中すべて七縱道あり其縱道の間また文理ありて斜正ひとしからず又左右の兩葉は共に中葉より長椭にしてをのをの六縱道あり其葉本の一縱道は二つに分れて岐をなしまた頗る七縱道の如し此根あはぼより大にして外黑く內白ければ本草綱目にいはゆる鬼臉升麻には的當なり

本草綱目云今人惟取二裏白外黑而緊實者一謂二之鬼臉升麻一去二鬚及頭蘆一剉用

『此間彩畫一枚大葉升麻略レ之』

○釋名

大葉升麻俗稱

○名義字の如し

日光升麻同上

○按に此草下野日光山中極て多し故に名づく

鬼臉升麻本草綱目 本草彙言

○按に鬼臉は蓋し此葉の狀甚だいかめしきによりて名付しものなるべし康熙字典引二集韻韻會一竝音奄切音檢集韻頰也韻會目下頰上也

一種大葉升麻

一種の大葉升麻は下野日光山に產す上野妙義山殊に多し此種一枝三葉なるは全く前條と同じけれど其葉芋葉の如く莖葉心につくを異なりとす其葉の大さ六七寸より或は八九寸に至る中葉は上に二つの深缺刻ありて三尖をなし葉面に七縱道ありて左右の葉は中葉に比するに稍長椭にしてともに九縱道あり此種花を開く事前條及びあはぼと其時を同すれば根を採にはいづれ九月の末十月の比然るべし

『此間彩畫一枚一種大葉升麻略レ之』

○正誤

草木辨疑云今人充二升麻一者有二五種一野苧麻卽俗呼ニ之邪蒿澳一海根卽俗呼ニ之迷紫盧結一落新婦一名小升麻卽俗呼ニ之盂划麼纛一又呼ニ之脫纛盂十一升麻苗高一二尺葉似二麻葉一而青色五六月開レ花成レ穗宛如二粟穗一白色六月以後結レ實黑色俗呼ニ之迷紫虎德一者是也乃本草原始所謂鬼臉升麻也又一種有下葉似二石龍芮一者上卽是雞骨升麻也已上之四種倶非レ眞名二升麻一者處々有レ之不レ可レ不二詳辨究一

按ニ用藥須知ニ升麻和漢共ニアリ和ニ五種アリ其中宜二審擇一鳥足草栗盛草野苧麻水引草此四種ノ根ヲ以テ升麻ニ充ルハ誤ナリ鳥アシ粟モリノ二種ハ綱目升麻集解ニ出セル落新婦ナリ卽小升麻ト名ク野マヲノ根ハ野苧麻根也水引草ハ海根ナリ皆升麻ニ非ズ不レ可レ用眞ノ升麻ハ近來出ヅ和名水筆ト云京都藝花家ニテハアハボト云是本草原始所謂鬼臉升麻ナリ又一種葉石龍芮葉ニ似タルモノアリ是雞骨升麻ナリ味薄シとみえたり草木辨疑の說は全く此文を復文して修飾を加へしものなりいはゆるみづふでの形狀はすべて圖經本草の文によりて四五月を五六月に作るといへどもその五六月の比に花さくものは必ず鳥足草にしてみづふでにはあらずまた鬼臉升麻は始めて本草綱目本草彙言等に出て本草原始には其名をだに載せす然るを用藥須知にはそれを本草原始とはおもひ誤りしものなりさる事をもしらで草本辨疑には原文のまゝに復文せしものは因循に過たりまた鬼臉升麻と雞骨升麻との差別は詳に各條にみえたればこゝにはいはず扨用藥須知に鳥足草栗盛草等の四種を以て升麻に充るは誤なりといへるを草木辨疑には鳥足草に栗盛草を併て一物とし已上之四種倶非レ眞といふ時は其雞骨升麻をもさらに眞にあらずといふに似たりこれは修飾の時原文の四種を三種に改め作るべきを其まゝに打捨をきしより遂にその義の解すべからざるに至れるは校正もまた行屆かざるによりてのあやまりなり

本草啓蒙云アハボハ三枝九葉ヲ一葉トス又九枝二十七葉ニモナル其一葉ヲ離セバ地錦葉ノ如シ云々

按にあはぼに二種あり地錦葉のものあり細葉のものあり今九枝二十七葉にもなるといへるは全く細

骨の義をしはかるべし

綠升麻（本草從新）

○按に雞骨升麻は其根青綠色故にまた綠升麻と名づく

○正誤

用藥須知云一種葉石龍芮葉ニ似タルモノアリ是雞骨升麻ナリ味薄シ

按に葉石龍芮に似たりといへるは全く本草啓蒙にいはゆる地錦葉のものと一にして卽鬼臉升麻の一種なり然るを今以て雞骨升麻となすは誤れり

あはぼ　みづふで　鬼臉升麻一種

あはぼ一名みづふで一名さらしなは時珍のいはゆる鬼臉升麻の一種なり今道灌山飛鳥山及び王子山中等皆これあり春宿根より苗を生じ三枝九葉を一朶とす其一葉の狀兩缺刻ありて地錦葉の如く綠色にして光澤あり鋸齒多し夏に至りて長莖を抽てそれにつく葉は互生にしてすべて每節上は紫黑色なり秋のなかば比より梢上に穗をなし六瓣の白花をつく根は細小にして外黑く內白しこの根を採には正に九月の末十月の比をよしとす

本草啓蒙云アハボハ春宿根ヨリ新葉ヲ叢生ス凡三枝九葉ヲ一葉トスソノ一葉ヲ離セバ地錦ノ葉ノ形ノ如シ厚クシテ光澤アリ莖ハ細ク硬ク光アリテ粟ノ稗ノ如シ夏月長䑓ヲ抽テ秋ノ末ニ至リテ花ヲ開キ長キ穗ヲ成ス肥タルモノハ穗ニ數枝ヲ分ツ花大サ三分許六瓣初ハ白色微紅開ケバ白クシテ內ニ白蕋多アリテ絲ノ如シ滿開スレバ瓣ハ見ヘズシテ蕋ノミ見ユ瓣モ亦早ク脫シテ絲ノミ殘レリ

『此間彩畫一葉あはぼ略ㇾ之』

○釋名

あはぼ（用藥須知本草綱本草大義）

○本草啓蒙云升麻の花は粟の穗の如くにして白色なり故に名づく

みづふで（同上）

○本草啓蒙云此花筆頭の形に似たりよつて水筆と名づく

さらしな（本草綱本草啓蒙）

○按に此葉嫩なる時煠き熟して食ふべし故にさらしなと名づく

古今要覽稿卷第三百九十二

●草木部 升麻二

とりのねぐさ　おしぐさ　雞骨升麻

とりのねぐさ一名おしぐさ一名細葉升麻は漢名を雞骨升麻といふ此草諸國山中極て多し近道にては道灌山飛鳥山等またあり其枝葉甚だ繁くして九枝二十七葉を一朶とす其葉の狀はあはぼに似て至て細小なれども鋸齒は却てあらくして深く且尖れり根もまたあはぼより太くして外黑く內靑し一種下野日光山に產するものは九枝二十七葉は全く前條と同じけれど其缺刻深き事蝦手(カヘデ)の如くにして鋸齒あらき其上の赤升麻に似てとまり葉すべて缺刻深くして三葉並び生せしが如く其下の二葉もまた缺刻深くして頗る四葉の如し又一種近江伊吹山に產す其色近道のものと同くして味極て苦きものを本草啓蒙には雞骨升麻なりといへどいまだ其葉の狀いかなるよしを載せず或說に伊吹山の產は其葉極て大にして近道のものとは別種なるべしといへりされど其根の狀雞骨の如くにして外皮黑色內肉靑綠なるものはいづれも雞骨升麻なれば正に葉の大小に拘はりて其品を辨ずるものはよろしからず

證類本草引二集註本草一云升麻今出二益州一好者細削レ皮靑綠色謂二之雞骨升麻一

『此間彩畫一葉とりのねぐさ略之』

○釋名

とりのねぐさ醫心方

○岡村尙謙云とりのねぐさは卽とりのほねぐさの省呼にして弘景のいはゆる雞骨升麻をいふこれによれば丹波康賴はとりのあしぐさを用ひずして別に雞骨升麻を撰びて用ひし事しられたり

おしぐさ同上

○名義詳ならず

細葉升麻俗稱

○按に名義字の如し

雞骨升麻證類本草引二集註本草一

○按陶弘景註二常山一云細實黃者呼爲二雞骨常山一本草蒙筌云常山擇レ如二雞骨一入レ藥方靈とこれにて雞

小升麻同上引二本草拾遺一

○此葉升麻より少さし故に名づく

あはもりそう

あはもりそう一名あはもりせうまは卽落新婦の一種なり此草春本幹葉莖共に生じて細毛あり一枝三椏を分ち每椏九葉を生じ其數大略不同ある事なし其一葉の狀はなつゆきそうよりは細長にして厚く背面共に光澤あり其本幹は色靑くして節赤くそれにつく葉は皆互生なり四月の比其梢別に數白莖を抽て五瓣の小白花を開く此種はあはゆきそうよりも先だちて穗をなし花を開くといへども其狀は全くあはゆきそうに同じ

本艸啓蒙云アハモリサウハ苗ナツユキサウヨリ短小ナリ葉細長クシテ當歸葉ノゴトク厚シ花ハナツユキサウヨリ早ク開ク

『此間彩畫一葉あはもり草略之』

古の本經には非ざる事明けし

あかせうま　なつゆき　落新婦

あかせうま一名なつゆきそうは漢名を落新婦といふ春根上より五六莖を抽て其上三枝を分ち三枝の上また三枝を分ちて其枝葉とりあしよりも至て繁く大略四五十葉を一朶とす其葉は却てとりあしよりも細小にして薄く莖葉共に微毛あり夏に至れば其莖の中心より別に一莖を抽てそれに兩三枝を互生す其中心の莖には毛茸極めて多く始め黄色にして後白色に變じ其頭數穗を分て五瓣の小白花をつく又淡紅色の物あり根は頗る菖蒲根に似て短く又黄精根に似たる概節あり或は長根を生じて節なき所もあれどいづれも鬚根甚多し一種下野日光山に產するものは其葉至て薄く長さ二寸五分廣さ一寸三四分にして鋸齒あらく上葉は蝦手（カヘデ）の如き深缺刻ありて三葉の如く下の二葉は右は缺刻淺くして全く一葉なれども左はまた深缺刻ある事上葉と同じ又一種其葉なつゆきより稍圓くして鋸齒深して細かに葉先極て尖細なるものあり憶に藏器の說に落新婦亦大小有レ殊也（本草拾遺）といへるは蓋し此類ひをさしいひしなるべし

本艸啓蒙云ナツユキサウハ小葉ニシテ葉ノ枝數アハユキサウヨリ又多シ其餘形狀同ジ花ハ白色亦淡紅色ノ者アリ

證類本艸引ニ本艸拾遺ニ云陶云人言升麻是落新婦根非也相似耳解毒取レ葉作ニ小兒浴湯一主レ驚按今人多呼ニ小升麻一爲ニ落新婦一功用同ニ於升麻一亦大小有レ殊

『此間彩畫三葉（あかせうま、一種日光山の產又同上）略之』

○釋名

あかせうま（俗稱）

○あかせうまは根の色によりて名づく

なつゆきそう（本草啓蒙）

○此花夏に至りて開き其色白くして雪の如し故に名づく

落新婦（證類本草引ニ集註本草及本草拾遺一）

○落新婦また絡新婦に作る弘景云蜘蛛數十種亦班者名ニ絡新婦一と憶に此根黄赤色にして其數根連生するもの一根をとればそれに長き鬚根ありて狀頗る蜘蛛の如し故に名づく

麻は今のみづひき草なるべきにや

用藥須知云鳥足艸ハ升麻ニアラズ眞ノ升麻ハ近來出ヅ藝花家ニテアワボト云

岡村尙謙云升麻凡數種あり太平御覽に吳氏本草を引て升麻神農味甘といへるものは全くとりあし升麻にして必ずあわぼにはあらず又名醫別錄に升麻生二益州山谷一二月八月採レ根日乾とみえたり凡藥物の根を採ものは其氣根に充盈する時をよろしとす故に古よりかく其採時をば詳にしるせし也しかるに今のあわぼの如きは八月の比さかりに花咲ものなれば此比にあたりては其氣上に專にして根には全く充盈せざる時なれば古人のいはゆる升麻は必ずとりあしにして絕てあわぼにはあらざるなり然るを後世に至りてはあわぼのみをたうとみてとりあしは全く升麻にあらざるよしいへるはさらに神農氏及び名醫別錄の升麻をしらざるものといふべしされど彼北部間に出るものは其形虛大なるによりてひとり弘景に重せられざるものは益州の產とは其地方全く異なるによりての故なるべし

張元素云升麻升二陽氣於至陰之下一補二脾胃一藥非レ此爲二引用一不レ能レ取レ効

李果云升麻升二胃中淸氣一凡元氣不足者用レ此於二陰中一升レ陽

岡村尙謙云此二說はすべて升麻の升を以て升降の升とおもひなせしより遂に其主治を附會せし者にて本經中絕て其說ある事なし且犀角なき時は升麻を以て代用る程の者いかにぞさる功能のあるべき

本草綱目云升麻味甘苦平微寒無レ毒主下解二百毒一殺二百精老物殃鬼一辟二瘟疫一瘴氣邪氣蠱毒入レ口皆吐出中惡腹痛時氣毒癘頭痛寒熱風腫諸毒喉痛口瘡上久服不レ夭輕レ身長レ年

これ證類本草の全文なり今其書によるに升產味甘苦平の六字また主解百毒以下十六字及び久服以下の八字は全く白字にして神農本經の文なり又微寒無毒の四字及び邪氣蠱毒以下の二十九字はすべて墨字にして名醫別錄の文なり然るを綱目には相混じて一つとなし以て本經の文となすものは校合のたらざるなり又今傳ふる所の盧復本の神農本經に上品中此升麻の一條を脫せし疎漏殊に甚しかゝれば今傳ふる所の神農本經は必ず後人の僞作にして

用ニ此縣之產一其效宜レ不レ減ニ于犀角一焉薩州曾士考昌啓云牧當ニ是收訛一收周同音本草升麻一名周麻可ニ以證一焉（通雅作ニ收靡縣一）とみえたりまた名醫別錄に周麻生ニ益州山谷一といへるは前漢地理志益州郡收麻縣註李奇曰靡音麻卽升麻殺毒藥所レ出也といへるに其產地全く相符する時は牧は卽收の誤なる事明らけし扨牧靡の收靡たる義は既に上文に詳なれども其名義に至りてはいまだいかなる故なる事を載ず因て憶に詩周頌我其收之の傳に收聚也字彙に施靡は連延貌などみえたれば收靡は蓋し此根數根相聚りて連り生ずるものなるによりてしか命せしものなるにや猶考ふべし

雉脚（本草啓蒙引ニ村家方一）

〇此卽皇朝にて升麻をとりのあしくさと訓せしに其意同じ

〇正誤

大同類聚方云度利阿之味苦久微香無レ毒八月細實乎結布九十月採レ葉乎陰乾而用

按にとりあし升麻は味苦きものにあらず又八月實を結ぶといへるは全くあはぼにしてとりあしとは其種異なり且九十月採葉といへるは弘景のいはゆる落新婦取レ葉挼作ニ小兒浴湯一といへる文によりていひしものなれば混同せしなり

大和本草云本邦ノ俗醫升麻ト稱シテ用ル物二種アリ一種ハ鳥ノ足ト云其葉芹ニ似タリ一種ハタデ升麻ト云葉モ莖モ犬タデニ似タリ二種共ニ升麻ニアラズ必不レ可レ用又引ニ若水說一云升麻ハ葉強クシテ宮根空木ニ似タリ又苧葉ニ似テ葉大ナリ葉皆向上根叢生ス又有ニ能似者一勿ニ誤混一

按にとりあしは上文既にいへるが如く弘景のいはゆる北部間の升麻にして落新婦と異なり憶に篤信のいはゆる鳥あしは其葉芹葉に似たりといふ時は別に一種小葉の赤升麻にして本條のとりあしにはあらず又舊より野苧麻或は水引草の根を以て升麻に擬せしよし用藥須知にみえたれば若水のいはゆる升麻の葉強きものといへるは疑らくは此野苧麻の類なるべし又篤信のいはゆる蓼升麻といへるもの今また何物たる事をしらずされど本草啓蒙に古は金線草（ミツヒキサウ）の根を升麻に僞り賣る故にたで升麻みづひき升麻の名ありとみえたりかゝれば篤信の蓼升

うたかくさ 本草和名 和名鈔

○名義詳ならず

あはゆきそう 本草啓蒙

○此花白色にして雪の如しよつて名づく

けあきせうま 俗稱

○此葉欅葉に似たり故に名づく

升麻 神農本經

○本草綱目云其葉似レ麻其性上升故名今按に西土にて舊より麻と稱するものは多くは大麻をさしていふ凡大麻は葉狹長にして一枝に七葉或は九葉をつくるものなれば其狀全く升麻とは異なりされど桐君藥錄に薰草葉如レ麻兩兩相對といひ山海經に薰草麻葉而方莖氣如二蘼蕪一といへるはたゞ一葉の狀相似たるによりて麻葉といひしものなれば升麻の麻もまた一葉の狀によりて命せし名なるべし或は古に麻といへるは卽蔄麻葉の事なりともいへり岡村尙謙云下文引ところ醫賸の說によれば升周全く音通にて正に升字を以て升降の升となして此藥の功能を附會するものはよろしからず又升字延喜式本草和名證類本草等皆十の右傍に一點ありて升に作るこれは古文に升を廾に作り斗を廾に作りて其字全く相似たるによりて升合の升には後に一點を加へてこれをわかちしなり今人漫に升字を以て本朝の俗字のやうに思ひなすものはあやまれりさはいへ升麻の升の一點は蓋し收麻の收字の靡滅せしがいさゝか殘れるものにてはいはゆる點なき字に點を加へしものとは其義異なるもしるべからず

周麻 證類本草引二名醫別錄一

○本草綱目云張揖廣雅及吳普本草並云升麻一名周麻升則周或指二周地一如下今人呼二川升麻一之義上今別錄作二周麻一非二省文一卽脫誤也云々されど醫賸に載する所曾士考の說による時は周收音通にして必しも脫誤にはあらず其義下文にみえたり

牧靡 酈道元水經註

○按に醫賸云水經註牧靡音麻縣名云收靡可二以解一毒百卉方盛鳥多誤食二烏喙一口中レ毒必急飛往二牧靡山一啄二牧靡一以解レ毒也李奇註二漢書一云牧靡卽升麻也而段柯古云牧靡不レ知二何藥一也蓋失レ考耳子謂方書云無二犀角一以二升麻一代レ之來二允辨一其誤一然若

按此升字は蓋し胡字の誤りなるべし
又云甲斐國十二種云々升麻十斤
又云美濃國六十二種云々升麻十斤
又云上野國十五種云々升麻三斤二兩
又云越前國十八種云々升麻六斤
又云丹波國四十三種云々升麻十斤
又云美作國四十一種云々升麻十斤
又云備前國四十種云々升麻三斤
又云備後國二十八種云々升麻一斤
又云紀伊國三十五種云々升麻十兩
又云阿波國三十三種云々升麻十兩
又云讃岐國四十七種云々升麻二十斤
又云伊豫國三十二種云々升麻七斤
又云土佐國十三種云々升麻四斤
和漢三才圖會云升麻和漢同而（甘有微澁味）但葉似レ楡而長有二微毛一爲レ異耳河州金剛山者良備中平福豐前中津之産次レ之
本艸大義云鳥脚升麻者弘景所謂北州及建平之産之種類乎生則根色外紫黑肉黃色而心微紫色乾則變二紫褐色一味微苦澁也用二痘疹及産婦一間有レ驗也

本艸啓蒙云此草向陽ノ山ニ多シ加條ノ葉ニ似タルモノ九枝二十七葉ホドツクモノ一葉ナリ夏臺ヲ抽テ花ヲ開クミヅフデヨリ早シ穗ハ長大ニシテ枝多ク花數ハナハダ多シ花ハ尤細小ニシテ一分ニ盈タズ色白シ又淡紅色桃紅色ノ者アリ此根皮ハ赤黃色又赤色ナリ藥肆ニコレヲ賣ルボウデク、リデト云アリ又皮ヲ削タルヲケヅリ升麻ト云
證類本艸引二集註本艸一云升麻北部間亦有形又虛大黃色建平間亦有形大味薄不レ堪レ用人言是落新婦根不二必爾一其形自相似氣色非也
又引二圖經本艸一云升麻春生レ苗高三尺以來葉似二麻葉一並青色四月五月着レ花似二粟穗一白色六月以後結レ實黑色根紫如二蒿根一多レ鬚二月八月採日暴乾
『此間彩畫一葉（一種日光山之産）略之』

〇釋名

とりのあしくさ（延喜式本艸和名和名鈔）
〇按に新撰字鏡にとりのあしくさを鳥足草に作るとりは雞をいふ此草一莖三枝を分ちて其形頗る雞足の如し故に名づく正に村家方にいはゆる雞脚の名と其義全く暗合なり

古今要覽稿卷第三百九十一

●草木部 升麻一

とりのあしくさ　あわゆきそう　升麻

とりのあしくさ一名うたかくさ一名あわゆきそう一名けあきせうまは漢名を升麻一名周麻一名牧靡といひまた韓名を一名雉脚といふ古は出雲國神門郡仁多郡等に產するよし其國の風土記にみえ大和攝津伊勢尾張參河甲斐美濃上野越前丹波美作備前備後紀伊讃岐伊豫土佐等よりこれを貢せし事延喜式にみえたり扨此草は春舊根より苗を生じ每枝葉皆三枝九葉を一朶とす其一葉の狀は大略麻葉に似て短かく頗る楡葉及び欅葉の如し夏に至れば其叢葉中より獨莖を抽て數穗を分ちて小白花を攢簇す憶に蘇頌のいはゆる升麻四月五月着レ花似二粟穗一白色（證類本草引二圖經本草一）

○岡村尙謙曰凡升麻に鬼臉雞骨の外其種類多しといへどもすべて秋の末に至りて花を開くものなるに今四月五月着レ花といへるは卽此とりあしをさしていひしなるべし

といへるは蓋しこれと同種なるべしまたとりあしの根はすべて其色黃褐なるものなれば弘景のいはゆる升麻北部間亦有形又虛大黃色（同上引二集註本草一）といへるもまた此とりあしの根なる事明らけし喜多村直安正云とりあしの一種下野日光山に產するものは每莖太くして黃褐色三枝或は十一葉程もありて葉の狀とりあしよりも扁く葉面光澤ある事頗るみづなの如し此根赭褐色にして功能またよろしとかゝれば藥に入るには此二種並に通用すべし

出雲風土記云神門郡凡諸山野所レ在草木云々石斛升麻

又云飯石郡凡諸山野所在草木云々卑薢升麻

又云仁多郡凡諸山野所在草木云々瞿麥升麻

延喜式（典藥寮）云諸國進年料雜藥大和國三十七種云々升麻八斤

又云攝津國四十四種云々升麻三斤

又云伊勢國五十種云々升麻三十九斤二兩

又云尾張國四十六種云々升麻十斤

又云參河國二十一種云々升麻子三合

九十七

迴浮淡抹影芃々、消息蓬萊有レ路通、濡レ露風吹無レ限意、濃陰香拂酒杯中、

九十八

芳譽疎陰別有レ天、淡根洒落伴二風烟一、石家瓊帳三更夢、且與二蘭花一共醉眠、

九十九

淡月清風入レ座來、寒烟帶レ露浥二花腮一、微光輕拂千般景、豈用移レ根上苑栽、

一百

苒々空山臥二白雲一、飄然幽影自芳芬、吟二成百首一眞堪レ唉、千載知心我與レ君

附　六言

無レ聲無レ色幽眞、有レ香有レ態可レ挹、幾根仙質蒼々、一點芳心孰識、

自二一字一至二七字一

蘭、蘭、芽紫、穎丹、花可レ愛、葉如干、嵓谷渺々、風雪安々、參差月動レ影、淡靜露生レ寒、幽香聞着堪レ佩、清遠見レ之自歡、不レ為三桃李逐二時眼一、寧與二烟雲一伴二翠巒一、

細、薄暮葉搖萬里風、

八十四

山深露白鴈來遲、相對凄々挹侶レ癡、淸楚涵レ虛雲影薄、巢鰥心事許二誰知一、

八十五

遠岸含レ烟鳥自來、初晴幽態更恢々、當年按レ劔厲二凡眼一、翡翠新顏不レ喜レ開、

八十六

夕陽影裡晚鐘鳴、山色浪紋石上生、秉レ燭不レ辭連夜賞、綠陰花下萬條輕、

八十七

萬里遙天白露秋、葳蕤山外與レ雲遊、牧人自笑朦朧眼、錯認二間花一去放レ牛、

八十八

競レ華鬪レ妍幾時休、葉送二淸秋一自去留、可レ笑紅顏難二久住一、幽姿輝映碧光浮、

八十九

葉底春容水石涼、倚レ風閒度影蒼茫、今朝莫レ却二花前飮一、客子何心賦二海棠一、

九十

葱々曉月籟聲淸、疎放香生四野晴、識得幽花奇絕處、春風枉費二馬蹄輕一、

九十一

月明輕露轉淸凄、烟外長天一樣齊、不下向二人間一逞中異色上、寒花葉裡鷓鴣啼、

九十二

絲垂曉色出二秋華一、萬頃烟波眺望賒、寧使二當時人見一レ棄、難下將二淑態一委中泥沙上、

九十三

月色春光舞一場、風行遠近自然涼、綠條露冷雖レ微レ力、淸致難レ同二穠夜香一、

九十四

風寒月冷掃二陰霾一、秀骨暮烟倚二斷厓一、馥郁裁成顏色好、飄二搖石徑一遠空排、

九十五

灑レ露花開不レ倚レ妝、虛嵓翠影石雲傍、悠揚冷致非二輕薄一、坐覺淡香與最長、

九十六

含レ情微蘂野雲堆、掩映鮮明細々開、香骨幽懷人欲レ去、曉風烟色任二敲推一、

蕭條綠影露千莖、瘦臉新々分外淸、丹壑溟濛風月冷、遊人問レ我不レ知レ名、

七十一

不下隨二群草一襯中香車上、淸質長天茂二歲華一、若使三陶君生二此日一、且將二詩酒一話二蘭花一、

七十二

遙々澄藹送二春歸一、日影篩レ金山正肥、不下向二畫堂一親中貴客上、洩レ香陰色透二斜暉一、

七十三

夜窓飛舞點二靑空一、碧水凉雲冷淡中、不レ費二胭脂一韻更遠、含レ星葉拂海天風、

七十四

風搖□色欲レ沈レ山、野徑尋レ芳去復還、藹々雲端隨二顯晦一、凄淸長伴二白猿間一、

七十五

耿々生平志未移、白雲何處不二相隨一、素華嵓外俗緣斷、風雨無レ情任二倒吹一、

七十六

幽格任從雀燕猜、絕レ機自笑侶二嬰孩一、澄潭裊娜懸二秋月一、疎蘢輕盈次第開、

七十七

飄二搖芳徑一影怡々、醉二倒春風一各自持、螢度風行香散漫、月窺輕色露中滋、

七十八

輕落二曉烟一却自然、寒花冷露出二窓前一、蟲鳴暮色葉生レ白、送盡寒風雪夜天、

七十九

艷麗山中幾變更、峯頭靜々懶二逢迎一、悠然早却二紅塵想一、烟鎖二嵓前一照レ眼淸、

八十

冷々雲霞世外心、滿山紅白孰知音、谷寒瀉レ露透二初日一、一榻風淸影漏レ金、

八十一

萬條輕翠匝二山雞一、浮二動寒空一性不レ羈、淸麝撲レ衣如レ有意、淡雲疎雨拂二靑絲一、

八十二

霏微古澗寂無レ譁、江外閒雲隱々遮、玉面輕吹月吐レ白、寒香融レ雪落二人家一、

八十三

滿地香痕不レ計レ叢、翠茵勝景伴二閒翁一、曛烟歛々蟬聲

五十七

月冷風搖韻更長、清光素色四時香、五侯家裡誰堪レ比、自レ此號爲二百草王一、

五十八

遠樹颸々月滿レ樓、淡然幽韻孰堪レ儔、明皇擊レ鼓休二相問一、惟有二清風伴レ我遊一、

五十九

自下與二空山水石一盟上、間香玉砌出二天成一、素容藹々淡二人意一、我伴二寒花一對二月明一、

六十

苔色芳葩點レ露鮮、繰レ風織レ雨住山緣、從レ今不レ作二洛城夢一、那管淒々泣二杜鵑一、

六十一

嵓前婉々弄二飛泉一、松竹清光影共聯、咲口一開憑二世看一、儼然華髮滿二山巓一、

六十二

蒼間冷質夕陽邊、鮮妍依徹入二雪篇一、綠葉天孫機上織、花開花落不レ知レ年、

六十三

淡蕩寒花雪後天、夜深風韻與悠然、金刀剪落誰堪レ贈、喜與二鶴猿一同レ窟眠、

六十四

秀葉誰云不レ可レ攀、遠レ峯簇々豈容レ刪、秋雲弄レ影絕二人夢一、湛露青山相對間、

六十五

溫柔幽態意難レ窮、穆々蟲吟萬壑空、月下聞レ香肌骨爽、低頭無レ語笑二東風一、

六十六

介色孤姿天外來、低二昂山上一幾徘徊、不レ愁風雨香飄レ袖、靡々花饒玉露開、

六十七

春風殘雨點レ苔斑、任三女矜誇妬二玉顏一、每笑桃花貪レ結レ子、蕭二騷澗曲一出二塵寰一、

六十八

花可レ餐兮葉可レ衣、幽香浥レ露映二寒暉一、何須粧點迎二人意一、嵓壑風輕散二夕霏一、

六十九

地濶天清眼界寬、孤標風雪自安々、層岑白氣三更雨、鮮翠空山不レ怕レ寒、

七十

レ跡、風打ニ空花ー侶ニ點頭ー、

四十四

綠波春色罩レ陰菲、默々無レ言琬琰輝、莫レ道芳姿人不レ識、歌姬爭挿ニ鬢邊ー皈、

四十五

高崖月出幾枝橫、繞々菁葱水石聲、雲外餘香玉與潔、而今何羨錦官城、

四十六

幽姸㠑々崖外身、風搖ニ綠髯(鬟イ)ー畫難レ眞、蘭亭曲水寒陰蔭、只見尋レ枝摘レ葉人、

四十七

渺々寒風葉上浮、幾叢競秀意幽々、忘レ機淸影間中趣、嘯ニ傲高山ー雪滿レ頭、

四十八

石壁嵓々月上レ枝、曉花幽致任レ風攲、孤懷冷骨落ニ天外ー、也侶ニ東山高臥時ー、

四十九

皓月淸風四面涼、一庭唉語冷凝レ霜、淸香自有ニ仙人概ー、何必眈々擬ニ六郎ー、

五十

歲々山崖與ニ水津ー、白雲爲レ友石爲レ憐、色々相對如ニ相語ー、淡質淸肌不レ媚レ人、

五十一

峯頭綠影四時華、露葉飛香伴ニ落霞ー、泉石相忘天地濶、幽間何處不レ爲レ家、

五十二

淸々飀蕩拂ニ峯巒ー、雙眼盈々靜處觀、每對ニ春風ー時自舞、何煩公子倚ニ欄干ー、

五十三

綠陰蘸レ水遠天平、月到ニ蘭花ー透レ骨淸、白露鐘聲啼鳥換、山中閱盡幾枯榮、

五十四

疎影淸姿無ニ是非ー、春山杳々靜相依、間花翠色臨レ笑、也罵黃鳥織ニ玉衣ー、

五十五

漠々烟雲古澗隈、禪機花色鏡中臺、飄レ紅綰レ綠悅ニ人眼ー、我勸ニ蘭花ー酒一杯、

五十六

輕風挺々和ニ秋聲ー、月下香飄落レ夢淸、嶺外烟霞堪レ作レ侶、也㗰紅紫愛ニ空名ー、

寒烟月下色盈々、一段遷疎不二世情一、我愛二蘭花一花愛
レ我、間風綠影碧天淸、

三十一

映レ日寒英欵々新、白雲流水淡相親、幽香不三以レ無レ人
減一、堪レ笑桃花去避レ秦、

三十二

幾年杖屨遍二名山一、索レ酒敲レ詩水石間、每見蘭花似二鶴
瘦一、悠々自與二白雲一間、

三十三

烟浮二芝室一吐二蕾香一、翠影依々露冷レ裳、不レ學二眞妃含
レ淚態一、豈將二湯餠一試二何郎一、

三十四

離々茂影碧天晹、露白輕芬幾倍加、石上題レ詩山月曉、
不レ知是我是蘭花、

三十五

漠々濃陰倚二石根一、日移二秋影一淡無レ痕、而今不レ用金
鈴護、剪々風翻雲水村、

三十六

茸々楚畹月明時、綠野風生碧澗垂、寂々不レ生二人我
相一、何勞黃鳥怨二空枝一、

三十七

半窓月上也如レ銀、嶺外烟飛品々新、花骨比レ秋骨更
淡、殷勤雅概伴二諸人一、

三十八

綠葉尖々露二紫芽一、一簾翠色雨中晹、淸香素面雲深處、
也勝二河陽滿縣花一、

三十九

淡白輕黃野徑遮、年々香惹牧童衣、瀟疎彷彿龍蛇影、
驟雨狂風奈レ汝何、

四十

鶴髮飄々映二玉容一、婆娑淡影白雲封、王孫相見不二相
問一、且向二空山一作二臥龍一、

四十一

幽葩冶色團々開、那肯隨レ風去不レ回、一葉自能藏二世
界一、靜觀蝴蝶出レ墻來、

四十二

隱々寒山鳥自呼、淸馨嫩蘂老龍鬚、顚レ風舞レ日娟々
色、何羨秦封二五大夫一、

四十三

素質籠レ烟淡欲レ流、一塵不レ染韻悠々、幽香定處混無

十七

結レ實不レ貪色々空、孤衷未レ許問二東風一、何時得レ獻二玉
鸞闕一、分二與瑤池一植二幾叢一、

十八

苒々嵓前斂二夕暉一、誰人淸賞悟二禪機一、自知不二是蝶蜂
侶一、豈向二高唐一作二綠衣一、

十九

葉滿二空山一花滿レ林、國香秋佩冷沈々、不下粧二紅粉一
入中時眼上、一譜絲桐彈至レ今、

二十

幽々抱レ露碧雲堆、千嶂月明老鶴陪、寄レ語樵人莫二採
去一、香痕擢レ潁碧霄開、

二十一

參差月影有無中、天外蒼烟罩二碧叢一、蘂々淸香菩薩面、
新姿露冷咲迎レ風、

二十二

翠羽交加拂二石牀一、生來在々水雲鄕、雖（タトヒ）然冷淡臞二仙
骨一、曾重二王家姓子香一、

二十三

一片孤心不レ可レ更、枝々幽韻鳥聲淸、風搖二綠影一欄
干外、也倣二葵花向レ日傾一、

二十四

九畹悠遊自在開、千嵓萬草獨爲レ魁、芳香不レ異二蟾宮
桂一、淸骨何殊二嶺上梅一、

二十五

一片芳心格外崇、懸弧有レ兆夢先通、風來肯作二童兒
舞一、碧幹堪レ爲二壯士弓一、

二十六

輕影疎々映二日暉一、幽香仙骨世間希、雖レ無二桃李夭嬌
態一、也咲沾レ泥柳絮飛、

二十七

凝レ烟帶レ露擅二淸奇一、古澗芳菲獨秀時、野鶴白雲應二是
伴一、空林月冷映二仙姿一、

二十八

萋々醉態似二相扶一、鮮色空山半有無、朗月淸風誰共語、
願隨二隱叟一結二茅廬一、

二十九

輕香幻影透二衣襟一、月下幽間映二水深一、不盡芳馨公子
概、臨レ風開謝總無心、

三十

踈影輕風月色寒、

四

露洗風翻竹石陪、天然香噴滿二山隈一、孤芳苒々誰相問、咲盡遊蜂欲レ作レ媒、

五

山色溶々不レ染レ塵、一生冷骨出二幽眞一、幾囘月下靜中賞、疑是天台得道人、

六

百草山中第一香、蒙茸石上自含レ芳、雨花朶々高低影、消却人生冷熱腸、

七

遠々玲瓏透レ月涼、堦前輕影色蒼々、自無二枝節一風生レ麝、豈與二瓊葩一鬬二野塘一、

八

不レ占二繁華一翠壁垂、平生幽格畏二人知一、谿來色相都空盡、恰似二高僧不レ語時一、

九

嵓谷深々隱二姓名一、折來袖裡暗香清、曉風片々隨レ雲去不レ落二人間價重輕一、

十

種々天香玉骨幽、任レ烟任レ雨趣悠々、隋園艶冶今何在、豈向二御溝一逐レ水流、

十一

樵夫刀斧不二相加一、靜看清芬逸輿賖、因憶當年騷子恨、滿身霜雪臥二蘭花一、

十二

淡々蘭花賽二百花一、新晴渺々籠二烟紗一、風流雅態眞難レ比、種二得千林一勝二帝家一、

十三

映レ月仙容帶二曉霜一、丹砂未レ點也芬芳、紛々綠葉隨レ風舞、冷蕋窓前別有レ香、

十四

石壁斑々月炤時、耐レ寒紫穎向レ風欹、劔溪流水深千尺、綠葉也堪レ作二釣絲一、

十五

山深不レ問二綺羅春一、洞口飄々匝レ路新、白晝風來翻二翠浪一、而今誰是佩レ香人、

十六

喜見天香處々栽、芳姿映レ水猶徘徊、疎々月影無二拘束一、也與二群花一作レ伴開、

古今要覽稿卷第三百九十

●草木部　蘭六

蘭詩

蘭花詠自叙

蘭花與諸花不同一段天眞逸致飄飃然出人意表自夫隋園金谷奇花怪草鬪紫爭紅非不昭々人耳目不轉眼而凋零狠藉月冷煙空祇留爲遊子恨非如蘭花淡々洒脫令人心賞不盡一挹幽格如對維摩詰話無生妙理曠爾玄絕又如入羅浮太華最深處飲石脂玉漿開拓無限心胸蘭花眞與諸花不同者也余少時每遊名山勝圃凡遇蘭花輒留連不置索酒敲詩取紙筆潑墨摹寫如是者久之覺心眼津々乎有味如是者又久之日無不遊遊無不盡其趣日無不盡盡無不盡其致彷々兮彿々兮不知我是蘭花蘭花是我也且不知蘭花是盡盡是蘭花也且不知我與蘭花同在大地中且又不知造化許多無窮徵義又都不出我與蘭花中也人從傍觀者莫不謂痴謂狂謂顚而余吟嘯自若亦不之顧也噫今二十餘年矣蘭花依然在我依然在崎嶇磊落感慨欷歔此時不向天地外覷破人羣做一了事丈夫日眈々視人休戚作生涯我咲蘭花蘭花亦當咲我也夫蘭花之妙妙不與繁花爭麗又妙不爲繁花所奪又抄其芳馨而不自誇其芳馨不艷不冷無榮無辱今人競尙虛文厭棄澄寂果能與蘭花號稱知己者古今來有幾人耶古今來有幾人耶蘭花眞與諸花不同者也嗟々世間喧嘩易盡一味蘭淡光景令人心賞不盡者又豈獨一蘭花也耶而蘭花之深林幽谷淸香自韻又豈在世人之知與不知也耶彙集百詠請質同志歲庚子冬至後三日無心道人嘯菴鄧會題于如是堂

蘭花百詠　古閩鄧　會嘯菴著

其一

蘭花深谷四時叢、點綴幽間造化工、最愛蕭踈經レ雨後、仙顏盡日咲二春風一

二

月炤二芳心一玉色融、香生二世界一碧天中、遙觀雅淡垂二靑帶一勝過山花滿樹紅、

三

懶敢飛香繞二翠巒一深根屈曲老龍盤、蘭花花是神仙也、

わか紫にそへてにほへる
人しらてたちきる山のからにしき
をくらの山の紅葉成けり

新撰六帖

らに　衣笠內大臣家長公
から衣すそのに匂ふ藤袴
ふみちらしたる鹿の跡かな

前藤大納言爲家
紫をくたくあらしはまたたへて
野を盛なる蘭かな

九條三位入道知家
けさはまたたれきてみよと藤袴
玉ぬく露のつかりしつらん

左京太夫行家
むらさきの色そめはてぬ藤袴
うすきや草のゆかり成らん

右大辨入道光俊
秋の野に今さかりなる藤袴
またきてみれとあかれやはする

現存六帖

らに　藤原爲氏朝臣
たれかきてぬしとそいはん藤袴
のことに露の色はそむとも

入道前攝政
いろ〳〵に咲ぬとすれと藤袴
やかてもろくも秋風そふく

藤袴ほころひわたるのへにこそ
ぬはれてふせるうづらなくなれ

貞應三年百首蘭薫枕　民部卿爲家卿
旅人のいる野のはらの藤はかま
たか手枕に又にほふらん

千五百番歌合　西園寺入道前太政大臣
たれとたにいはたのおの丶蘭
おほめくからに匂ふそてかな
中務卿のみの鎌倉
ふるさとのみかきか原の藤袴
たかぬきかけしかたみなるらん

古今六帖
らに　ならのみかど
折人の心のま丶にふちはかま
むへも色こく咲てみえけり
おみなへしなか藤袴おりつれは　そ　せ　い
秋の紅葉をそめつけにして

躬恒集
しらに
山ちかみ人にもみえぬす丶むしは
秋わひしらに今そなくなる
らに
秋風に香をのみそふる花なれは
匂ひからにそ人につまる丶

源順集
しらに　辨　君
別れゆく秋をしゑらになく鹿は
いのちをさへやと丶めかぬらん
あたし野の草村にのみ交りつる　もりふむ朝臣
匂ひに今や人にしられん

このもりふむ朝臣のあだしのは野の名たしかならねばにやあらんありとしる人すくなしまたかみに花もみえてしもに匂ふといふにつけて覺束なあだしのみれは花もなし空に匂ふといふや何そも此歌ことなることばにはなけれども添ところすくなきにいまひともじをくはへてしらにといへる所すこしまされり

元眞集
らに
むさしの丶草のゆかりに藤はかま

あふとみるよのうつりかもかな

此歌判者云鄭文公之家にいやしき妻女ありけり其名を燕姫と云夢に天使きたりて蘭をあたへて云是汝が子とせよといへり此事をよまれたるにこそと云々

顯昭判之

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成卿

ふちはかま草の枕に結ふ夜は
夢にもやがてにほふ成けり

同　同

藤袴咲ぬるときはむさし野の
若紫か色もみえけり

同　同

ふち袴匂ふうてなもよそなりき
あやなくふれし苔の袖には

文應元年七社百首　民部卿爲家卿

かすか野の草のゆかりも藤袴
草のゆかりも露そくたくる

文治三年八月廣田社歌合寄蘭戀　源仲房

あふことはかた野のゝへの藤袴
たれきてみよと露けかるらし

長治元年五月季廣朝臣歌合　大江盛佐

みやき野やたつねてきつる蘭
しるくも匂ふ夕まくれかな

天仁二年十一月顯季卿歌合蘭　橘能元

藤袴はたおるむしのおかたして
女郎花にはきするなりけり

百首御歌　慈鎭和尚

藤はかまきる人あらはかた岡の
もすそ立枝のはしのかりきぬ

文集百首前頭更有蕭條初老菓衰蘭兩三叢　同

秋の霜にうつろひけれは蘭
きてみる人もかれ〳〵にして

家集蘭を　六條院宣旨

藤袴ほころひぬとやたつた姫
秋の野ことにぬきすてゝけり

老菊衰蘭兩三叢　前中納言定家卿

ふちはかまあらしのくたく紫に
又白きくの色やならはん

家集　權大納言實家卿

[illegible]すそ野の原のともに匂へる
ぬき置しかたみもしらず藤袴
　あらしの風の色にまかせて
壬二集
ふちはかま月の枕に匂ふなり
　夢はたひねの露にくたけて
夢ちより露や置らん蘭
　さむれはやかて袖そしほるゝ
むらさきの竹の色の蘭
　ちきり有てや匂ひそめけん
ふちはかまならふ匂ひもなかりけり
　花は千種の色かはれとも
藤袴なひくまかきの夕暮に
　空さへにほふ秋のむら雨
夫木和歌集卷第十一秋部一
大甞會悠紀方御屛風　前中納言匡房
かまふ野の若紫の蘭
　ちよの秋までにほふとそおもふ
天德二年八月右大將家にて秋露を思てちらすと云事を　元輔

ほころひて花咲にけり藤はかま
　匂ひをむすふ露にまかせて
天永二年七月内大臣家歌合草花　藤原宗國
たつた山すそのに匂ふ藤はかま
　玉ぬきかくる露や置らん
家集蘭を　源有仲
きてみれは大江の山の彼方まて
　いくのともなき藤袴かな
同　元眞
むさし野の草のゆかりに藤袴
　わかむらさきにそめて匂へる
長寛二年白河歌合草花　燈達法師
藤袴ねさめの床にかほりけり
　夢ちはかりとおもひしものを
此歌判者俊成卿云すがたことばいひしりてきこゆ但是は本文にやあらんそのかみ左傳と申ふみをうかゞひ侍りしにこそ鄭文公の宴燕姫夢蘭をえたる詞見侍しがされば眞韓詩にも夢斷燕姫曉枕薰とつくれり是等の心にやあらんと云々
藤はかま夢ちはさこそ通ひけれ　野宮左大臣

のことにみれはほころひにけり
秋霧の野毎にたてるふちはかま　阿闍梨隆源
たれかぬひけんほころひにけり
立田山ふもとに匂ふ藤はかま　肥後
たかきてなれし移り香そこは
蘭たれきなれけんなつかしき　紀伊
香に匂ひつゝ色はふりせす
秋霧や立かくしけんおほつかな　河内
野ことに匂ふふち袴かな

拾玉集
蘭
ふるさとにかへりきてこそ藤はかま
ぬしなき色をあはれにはみれ
散はてゝ今は色なきふちはかま
たれかは野へにきてもみるへき
花の色はちくさなれとも紫の
ゆかりうれしきふちはかまかな
かねてよりまちしもしるく藤袴
秋の野ことにほころひにけり
ませのうちに移しうへてし蘭
いろなつかしく匂ふくれかな
年をへて秋の野ことに匂へとも
きる人もなきふちはかまかな
秋の野にたかためとてか染置し
ぬしおしけなる蘭かな
あきの野にほにみえわたる蘭
しからむ鹿や主となるらん（ねきそへてイ）
藤袴わか旅衣幾日へて
そのをたよりにぬしとなるらん
ふちはかま草の枕に匂ふなり
誰ぬきをけるありかなるらむ

長秋詠藻
むらさきのいろをはのこせ藤はかま
露はあらしにくたけちるとも

拾遺愚草
藤袴あらぬ草はもかをるまて
夕露しめるのへの秋かせ
霧のまに一枝おらんふちはかま
あかぬ匂ひや袖にうつると
秋のきてほころひぬとや蘭

かさねて匂ふ秋のしらつゆ

新後撰和歌集卷第四秋歌上

だいしらず　　土御門院御製

藤はかまきつゝなれゆく旅人の
すそ野の原に秋風ぞふく

元輔集

きんたうの朝臣つほさかにまうてゝ侍しみちに
きくの花きしつらにさきてはへりしかば

老のきくおとろへにけるふち袴
きしにのこりてありとこたへよ

元眞集

七月山寺にまいるついでに野への草村の露をみ
る

秋の野をけさきてみれは藤袴
わかぬきかけしつゆもはらはす

堀河院御時百首和歌秋二十首

蘭　　春宮太夫公實

秋はきてまたおもなれぬ蘭
野ことにみれはほころひになり

ぬき懸し主は誰ともしらねとも　　權中納言匡房
一野に立てる蘭かな

秋の野にむら／＼みゆる藤袴　　權中納言國信
むらさき深くたれかそむらん

ぬしもなきものとおもへと藤袴　　右兵衛督師頼
秋の野風になるゝなりけり

あきの野に香さへにほへる蘭　　修理太夫顯季
きてみぬ人はあらしと思ふ

さゝかにの絲の綴めやあたならん　　源顯仲朝臣
ほころひわたる藤袴かな

野ことにそほころびにける蘭　　中宮權大進仲實
秋のきるにはたへぬ成けり

そめかけて籬にさらす蘭　　木工頭俊頼
またきにとりのふみちらすかな

秋毎に誰きてみよと藤はかま　　左近權少將師時
きぬ笠岡に匂ふなるらん

秋風にすそのかほらす蘭　　藤原顯仲朝臣
たれともなしにわかぬしにせよ

あき風の日々／＼ふけは蘭　　藤　原　基　俊
きる人なしにほころひにけり

ぬしやたれぬふ人なしに蘭　　權少僧都永縁

詞花和歌集卷三秋部

堀河院御時百首歌奉けるによめる

主やたれきる人なしに蘭　隆源法師

みれは野ことにほころひにけり

新古今和歌集卷第四秋歌上

蘭をよめる　公猷法師

ふち袴ぬしはたれとも白露の

こほれてにほふけふの秋風

新勅撰和歌集卷第四秋歌上

久安百首歌奉りける秋歌　左京太夫顯輔

わきも子の裾野に匂ふ藤はかま

露はむすへとほころひにけり

續古今和歌集卷第四秋歌上

題しらず　土御門院小宰相

猶ふかくあはれやそはん藤はかま

ぬしさためたる匂ひとおもはゝ

露のぬきあたになるてふふち袴　土御門院御歌

秋風またてたれにかさまし

續拾遺和歌集卷第四秋歌上

述懷百首歌中に　皇太后宮太夫俊成

ふちはかまあらしたちぬる色よりも

くたけて物はわれそかなしき

だいしらず　長覺法師

からころもすそのに匂ふ藤袴

きてみぬさまにほころひにけり

續千載和歌集卷第四秋歌上

故鄉秋蘭といふことを　前僧正道性

藤はかま何匂ふらんすみすてゝ

のとなる庭はたれかきてみむ

續後拾遺和歌集卷第四秋歌上

みこの宮と申なる時内に奉らせ給ふける

みな人のそのかに移る藤はかま　嵯峨天皇御製

きみか爲にと手折つるかな

御かへし　平城天皇御製

みな人の心にまかふふち袴

むへいろふかくにほひけるかな

新千載和歌集卷第四秋歌上

元亨三年七月内裡にてうへのおのこども三首歌

つかまつりける時朝草花　後山本前左大臣

朝毎につかふる道の藤袴

古今要覽稿卷第三百八十九

●草木部 蘭五

○和歌

萬葉集第八 秋雜歌

山上臣憶良詠二秋野花一

芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花

古今和歌集卷第四上 秋歌

是貞のみこの家の歌合によめる　としゆきの朝臣

なに人かきてぬきかけし蘭　くる秋毎に野邊をにきはす

ふちはかまをよみて人につかはしける　貫之

宿りせし人のかたみか藤はかま　忘られかたきかに匂ひつゝ

ふちはかまをよめる　そせい法師

主しらぬ香こそ匂へれ秋の野に　たかぬきかけし蘭そも

又卷第十九 雜體

誹諧歌

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　在原むねやな

秋風にほころひぬらし藤袴　つゝりさせてふきり〳〵すなく

後撰和歌集卷第七 秋歌下

題不知　讀人しらず

藤はかまきる人なみや立なから　時雨の雨にぬらしそめつる

金葉和歌集卷第三 秋歌

待二草花一といへることをよめる　皇后宮美濃

藤袴はやほころひて匂はなむ　秋の初かせ吹たゝすとも

攝政左大臣家にて歌合し侍けるに蘭をよめる　源忠季

さほ川の汀にさける藤袴　なみのよりてやかけんとすらん

藤はかまをよめる　右兵衛督伊通

かりにくる人もきよとやふちはかま　秋の野毎にしかのたつらん

さゝかにの絲の綴めや仇ならん　神祇伯顯仲

ほころひわたるふちはかまかな

竹柏蘭 俗稱

○竹柏は葉の形によりて名づく

葉寒蘭に似て堅く綠色にして少しく黄を帶び長さ一尺三四寸花もまた寒蘭に似て淡白色にして深紅なる黑點多しその莖また紅色にて一莖に八九花をつけて寒中に開く根は小慈姑の如き青色なる玉あり扨鳳蘭は和漢蘭稱に本世肅の說を引て琉球の產にて葉の長さ三四尺はゞ至て濶く奇品なり近時渡らず又曹氏を引て鳳蘭は大葉なり琉球には配節蘭一名報節蘭といふこれ眞の鳳蘭なりといへば鳳蘭は其種紅寒蘭とは異なるものなるべし

和訓栞云冬に至り花咲を鳳蘭といふ

『此間彩畫一枚紅寒蘭略之』

○釋名

紅寒蘭 俗稱

○此蘭花時葉形全く寒蘭と同じくその花紅色也故に名づく

鳳蘭 琉球名

竹柏蘭

竹柏蘭(ナギ)は漢名いまだ詳ならず葉の形常の蘭とは大に異なり大略竹柏の葉に似て肥大又頗る仙人指甲蘭に似て末尖り秋に至りて一幹三四花を開く其狀建蘭に似て白色にして淡綠を帶ぶ花內の二瓣には別に紫色の星點あり此種相模國箱根及び鎌倉等に多しすべて二色檜などの朽たる所に寄生す又駿河遠江にもあるよし和漢蘭稱にみえたり

和漢蘭稱云ナギ蘭ハ葉深綠色ニシテナギノ葉ノ形ニ似テ長ク薄ク柔ナリ駿州遠州邊ノ山ヨリ來ル



○釋名

博蘭　呉蘭

博蘭は漢名を呉蘭といふ花は秋に至り一幹五六花を開く形狀幽蘭に似て圓く紫黑色にして頗る藜蘆の花の如し葉は金燈草に似て黑綠色にて光澤あり長さ一尺三四寸濶さ七八分此種近時多く唐山より來る一種黑蘭ありと和漢三才圖會にみえたれど今詳ならず

蘭譜云呉蘭色深紫有二十五萼一幹紫莢紅得レ所レ養則岐而生至レ有二二十萼一花頭差大葉則高大剛毅勁節蒼然可レ愛

和漢三才圖會云黑蘭長尺許葉花並似二秋蘭一而小其花黑赤色

『此間彩畫一枚博蘭略之』

○釋名

博蘭 俗稱

○博は葉黑の意此葉黑綠色故に名づく或は博江廣大の義にて葉のひろきによりて名付しもしるべからず

呉蘭 蘭譜祕傳花鏡

○呉は國の名此蘭呉地より出故に呉蘭と名づく

黑蘭 和漢三才圖會

○此花紫黑色故に名づく

寒蘭　冬蘭

寒蘭一名おほらんは漢名を冬蘭といふ和漢蘭稱に寒蘭はこれまた蘭花の類なり一莖數花對州土州豫州紀州勢州等の暖國海近き山よりいづ葉に長短狹濶あり花は靑色のもの多しまた紅紫及び黃色のものあり十月の比にさくといへり今圖する所のものは卽狹葉靑花のものなり

通雅云冬蘭葉較二秋蘭一差大（これ卽寒蘭の一種濶葉のもの也）

『此間彩畫一枚寒蘭略之』

○釋名

寒蘭 種樹家稱

○此花寒中に開くを以て寒蘭と名づく

大蘭 和漢蘭稱

○大蘭は土佐の方言のよし蓋し大葉のみなるべし建蘭と同名異種なり○名義字の如し

紅寒蘭

紅寒蘭は今俗これを鳳蘭といふ卽冬蘭の別種なり其

古今要覽稿卷第三百八十八

●草木部 蘭四

紫幹蘭 潘花

紫幹蘭は漢名を潘花といふ形青幹蘭に似て紫花紫心毎瓣深紫色の縦道あり其幹また紫色にして七八花をつく葉もまた青幹蘭に似て面深緑色背淡青近年此種多からず

蘭譜云潘花色深紫有二十五萼一幹紫圓匝齊整疎密得レ宜花中近レ心所色如二吳紫一艶麗過於二衆花一葉則差小

花史左編云蘭花紫梗青花者爲レ上紫梗紫花者次レ之

『此間彩畫紫幹蘭一枚略之』

○釋名

紫幹蘭 俗稱

○此幹紫色よつて名づく

紫寒蘭 種樹家稱

○按に種樹家にて幹を寒に作るものは蓋しその花寒蘭に似て紫色なるによりての故なるべし

潘花 蘭譜祕傳花鏡

○潘は人の姓なり蘭譜に仙霞の潘氏西山於二仙霞嶺一得レ之故更以爲レ名といへり

青幹蘭 青莖蘭

青幹蘭一名青莖蘭一名青々蘭は琉球及び唐山より來る葉は漳蘭に似て稍細くして薄し長さ一尺餘秋に至りて一幹三四花を開く狀蘭花の如くにして淡青色此卽花史左編に載る所青梗青花のものなるべし

和訓集云青しべあり莖まで青し

花史左編云蘭花紫梗青花者爲レ上青梗青花者次レ之

『此間彩畫一枚青幹蘭略之』

○釋名

青幹蘭 俗稱

○此幹青色故に名づく

青莖蘭 同上

○青莖は猶青幹のごとし

青々蘭 同上

○此蘭花莖共に青色故に青々蘭といふ

ニ白ク覆輪アリ

○釋名

隈蘭和漢三才圖會

○此蘭葉に白き隈あり故に名づく

古今輪際種樹家稱

○名義詳ならず或説に古今輪際はその花輪古今に稀なるによりて名付しといへど今按に古今輪際は疑らくは古金輪際にて此葉の色古金にて覆輪をとりしが如くなるによりての俗名なるべしさらばこの名は全く金稜邊の誤名なり

青莖蘭同上

○青くきらんは正に青幹蘭と同名なり

青燒及山城方言

○或説云此蘭花幹共に青くして葉に白き隈ありて刀劍の燒及の如し故に名づく

鍛冶屋樣種樹家稱

○或説に此蘭は遠州横須賀の鍛冶屋にてはじめて生出しより鍛冶屋樣と名付るよし或は此蘭の一名をまた青燒及といへばそれに付て全く鍛冶屋の名をおふせしもしるべからず

玉花蘭　爪白

玉花蘭一名金輪際一名爪白一名赤燒及は其葉初出の時紫色にして長ずる時は全く建蘭と一樣なれどもこれを建蘭に比するに其葉先の左右六七分許變白なるを異なりとす花は古今輪際に似て覆輪なしされど和漢蘭稱の説には今漳蘭の爪白を玉花蘭といへども先年小笠原大膳大夫の園中の玉花蘭は葉短く中濶く八九分程あり花色はいまだしらずと群芳園種樹家彌三郎のいへるよしこれまた一説なり

○釋名

玉花蘭種樹家稱

○或説云此葉白色なれども少しく黄を帯ぶ故にかく名付しなるべし

金輪際同上

赤燒及同上

○此葉芽出しの時赤色を帯ぶ故に名づく

爪白同上

○此葉尖れる所色白し故に名づく

葉中には相まじれる事下に出せる古今輪際に同じきものあり此種今江都に絕てなきにやまた花を生ずることを聞ず

蘭譜云金稜邊色深紫有二十二萼一出二於長泰陳家一色如二吳蘭一花片則差小幹亦如レ之葉亦勁健所レ可レ貴者葉自二尖處一分二二邊各一線許直下至二葉中處一色映レ日如二金線一

汝南圃史云金稜邊花莖俱紫其色鮮妍夐出二他紫之上一一幹十二萼花質豐腴而嬌媚動レ人香淸而都勝二於上品一數倍葉蒼翠勁健自尖起分二兩邊一各綠一黃紋直至二葉中一映レ日鮮明如二金線一可愛舊譜以レ此爲二紫花中品外之奇一

祕傳花鏡云金稜邊花豐腴而嬌媚每幹十二萼色同二吳蘭一妙在レ葉自二尖上一生二一黃線一直下如二金絲一喜レ肥

按に蘭譜の文を省略して尖上のてに今二邊名の四字を脫せしものにや

○釋名

縞蘭 種樹家稱

○此蘭葉ことに縞あり故に名づく

粟樣 同上

○此蘭縞ありて黃色粟の如し故に名づく

金稜邊 蘭譜汝南圃史

○稜は此葉の西邊にしまありて金の如くさら〱するをいふ葉に劍脊あるをいふにはあらず

隈蘭 古今輪際

隈蘭一名古今輪際一名靑莖蘭一名鍛冶屋樣一名靑燒〆は其種薩摩より來る或は遠江よりもいづるよし葉の形狀は大概靑幹蘭に似て正覆輪をとりしが如く葉先より兩邊に分れておの〱白縱道ありて葉本に至る事金稜邊の如し其花また靑幹蘭に似て每瓣葉と同じく覆輪狀をなすもまた奇なりかゝれば其金稜邊に對して今これを銀稜邊と名付んも强たる名にはあらざるべし扨和訓栞に蘭に間道のものあるよしみえたれど金稜邊なるや銀稜邊なるや其色をいはざれば今詳ならず

和漢三才圖會云隈蘭葉端緣限白其花似二秋蘭一而香太深

和漢蘭稱云古今輪際ハ薩摩ニ出建蘭ノ類ニシテ花莖靑ク花モ綠色靑幹蘭ノ花色ノ如ニシテ瓣頭葉ノ如ク

○此葉劍脊あり故に名づく

玉整花（汝南圃史）

○正誤

大和本草云大蘭アリ葉大ナリ春花ヲ開ク春蘭トモ云稀ナリ

按におほらんは卽建蘭にして夏秋の比花さくものなるに今春花さくといへるは混同せしにやされど春蘭とも云稀なりといふ文による時は別に一種春花さく同名のものも有しにやその義疑ふべし

雌蘭　房州蘭

雌蘭一名房州蘭は漢名を漳蘭といふ其葉全く建蘭に似てや丶薄くして短く斜にしだれて頗る吉祥草の如しその花を開き實を結ぶ事また建蘭と一樣にしてただ花莖紅色なるを異なりとす此卽建蘭の一種にして其品稍劣れるものなり

蘭品云有漳蘭出ニ于漳州ニ其葉軟弱矮小不ニ直立ニ卽今所レ翫之蘭也

和漢蘭稱云一種房州ニ産スルモノハ葉薄ク短クシテ直立セズ此卽漳蘭也

物理小識云建蘭葉直起其斜披者漳蘭也

○釋名

雌蘭（蘭品本草鷹）

○雌蘭はおほらんに對して葉のしたる丶をいふ

房州蘭（種樹家稱）

○此蘭多く安房國に産す故に名づく

漳蘭（物理小識）

○漳は州の名漳を以て名づけしはなを房州蘭といふがごとし

縞蘭　金陵邊

縞蘭一名粟様は漢名を金稜邊といふ此種もと駿河より來る卽建蘭の一種なり其葉のさまより二つに分れておの／＼黄色の一縦道あり直に下りて葉本に至る正に蘭譜及び汝南圃史に載る所の金稜邊は卽これにあつべし又叢葉のうちには或は葉の正中にのみ一縦道ありて左右ふはなきものありおもふに祕傳花鏡に載る所の金稜邊はけだしこれをさしていひしなるべしまた或は其葉のなかは二縦道に分れてその右或は左にはたゞ一縦道ありてすべて三縦道をなすものも數

蘭之香尤甚二于春蘭一也細葉者春花々少闊葉者秋花々多今沅澧間所レ生在レ春則黃在レ秋則紫

昭代叢書引二蘭言一云凡蘭開皆有二一滴珠露一含二于蕊間花下一此謂二蘭膏一甘香不二啻沆瀣一多取損レ花

物理小識云蘭結レ子曰二蘭筍一長房八棱秋霜裂而子飛去預護之熟亦可レ種也

○狂歌

雅莚醉狂集秋券

蘭花　正親町一位公通卿

山蜂の姿を花に咲出て
にほひや遠く人を追らん

○釋名

雄蘭 蘭品本草綱

○雄蘭は葉のたちたるをいひ雌蘭は葉のしだれたるをいふあながちに雌は實を結び雄は實を結ばざるをいひしにはあらず

大蘭 地錦抄

○此葉長くして大なるによりておほらんと名づく

駿河蘭 種樹家稱

○此蘭關東にては駿河の產を上品とす故に此名あり

蕙 郭璞注山海經

○蕙はもと零稜香の名あり此蘭芳香頗る零稜香の如しよつて假借してまた蕙とは名づけしなり

秋蘭 玉篇

○舊く蕙といへる秋花咲ものなるが故に此名あり

薰草 證類本草引二集注本草一

○薰草もまた零稜香の名なり然るを梁の頃の俗間にては蘭花をさして薰草といひし事既に工文にみえたり

秋蘭 本草衍義

○秋蘭はなを秋蕙の意の如し

建蘭 本草滙花史左編福州府志

○建は閩の建陽の地をいふ此蘭其地に多し故に建蘭と名づく或は此葉直起するによりて建を以て建立の義となすものは是ならず既に漳州府志にも王敬美を引て蘭以レ建名福興四郡尤盛と見えたりされど福州府志による時は建蘭はもと吳越の人の稱せし名の四方にひろまりしなり

劍葉蘭 事物紺珠

どもは根はしからずさすれば花根ともに全く大毒はなきものなるを殺レ人などいへるはけだし傳聞の誤りなるべし

和漢三才圖會云蘭最不レ忍ニ寒暑風雨ニ故多鉢ニ植之ニ唯豫州大洲紀州若山及遠州作ニ圃畦ニ種レ之能茂盛長三尺者多本草所謂秋芳者卽眞蘭花也

和漢蘭稱云蘭花品類多シ近海暖國ノ產也伊豫大洲ノモノ葉硬ク狹ク長シ名產也紀州木ノ本新宮尾鷲ノ產次レ之（其地ハ和歌山ヨリ五十里許熊野ニ近シ）遠州駿州豆州ノモノ又次レ之

蘭品云建蘭大葉直立稱ニ雄蘭ニ駿河州宮崎山中多生レ之行厨集云建蘭葉浸レ油黑レ髮而不レ落又云蘭花藏ニ書中ニ能碎レ蠹

增補地錦抄云おほらんはうす黃色のやうにみゆる盛の時はふん／＼たる香ありて家內に薰ずるなり蘭は葉長く大かふなるをよしとす大蘭は葉長し又云大蘭は靑莖なり

山海經云有レ草焉其葉如レ蕙注蕙香草蘭屬也或以レ蕙爲ニ薰葉ニ失レ之音惠

按に葉字疑らくは草字の誤ならん

玉篇云蕙胡桂切香草秋蕙也

兩類本草引集註本草云桐君藥錄薰草葉如レ麻兩兩相對云々狀如レ茅而香者爲ニ薰草ニ人家頗種レ之者非也

按に此說は蘭花を以て薰草とせしをそしれるなり其義全く山海の注と相反す

本草綱目云蘭花生ニ福建ニ者葉如ニ菅茅ニ而秋花黃山谷所謂一幹數花爲レ蕙者

爾雅翼云一幹六七花爲レ蕙

本草衍義云秋芳者爲ニ秋蘭ニ

三才圖會云蘭劍脊細長花紫者乃是福建眞品

物理小識云蘭今貴ニ建蘭ニ一幹九花以ニ葉直起者ニ爲レ上

福州府志云一幹數花曰レ蕙閩蕙種最多蘭譜所レ載陳夢良金邊

按に金邊は卽金稜邊詳に下文にみえたり

魚魫在々有レ之皆蕙類也吳越人呼爲ニ建蘭ニ

格致鏡原引ニ學圃雜疏ニ云一莖一花者曰レ蘭雖レ不レ足貴香自可レ愛今日絕重ニ建蘭ニ却只是蕙

又引ニ格物叢話ニ云蕙似レ蘭而葉差大一幹五六花々時在ニ夏秋間ニ香不レ及レ蘭也

又引ニ野客叢書ニ云世言春蘭秋蘭各有ニ異芬ニ不レ知秋

古今要覽稿卷第三百八十七

●草木部 蘭三

雄蘭 駿河蘭 建蘭

雄蘭一名大蘭一名駿河蘭は漢名を蕙一名秋薫一名薫草一名秋蘭一名建蘭一名劍葉蘭一名玉整花といふ凡蘭は海濱近き暖國の産をよしとす故に和漢三才圖會に豫州大洲紀伊若山及遠州者能茂盛といひ和漢蘭稱（増山河内守家臣淺倉幸右衛門義方著）には伊豫のもの名産遠江駿河の産これにつぐといへりされど今江都にある所はすべて駿河の産を移し植て培養せしものなれど其品最よしおもふに伊豫の産は我いまだ其種をみずといへども今ある駿河の種はかならずそれより劣れるものにはあらざるべし抑駿河の種は葉頗る菅茅の如くにして叢生し色青緑に少しく黒みを帶び直立して劍脊あり長さおほよそ二尺より三尺餘に至る初秋の比に至ればその葉心より淡黃色なる花莖を抽て其梢七八花或は九花を開く又溫暖の地にてはその花五月の比に開く故に西土にても建蘭盛㆓於五月㆒（格致鏡原引學圃雜疏）或は建蘭五六月放㆓一幹九花㆒（祕傳花鏡）などいへりその花の形狀は五瓣黃白色にして每瓣紫黑色の細縱道ありまた花內に二に瓣を生じその瓣並に紫黑色の星點あり香氣殊に高し故に漳州府志に建蘭芬部方今爲海內所㆑雅度他種無㆓能見㆒勝者とみえたりさて蘭には花蕋の間に細になる白露珠ありてこれをなむれば味いと甘し此郎西土にいはゆる蘭膏（蘭言祕傳花鏡）なりまた花後實を結ぶ狀馬蘭に似て長さ二寸許これを蘭筍（物理小識）といふ內に白き粉の如きものありこれをまけども遂に苗を生ずる事を聞ずさすれば西土にて其子熟亦可㆑種也（同上）といへるは甚疑ふべし又根は天門冬に似て細く其色また相似たりこれを土續斷（草木通志略）といふ俚俗或は採て引風の藥とす今これを試るに根は味甘く香氣なしされど五雜俎に蘭根食㆑之能殺㆑人不㆑可㆑不㆑愼とみえたれば用ゆるものよろしく斟酌すべし又花は味辛くして苦しこれを五雜俎に閩建陽人多取㆓蘭花㆒以㆓少鹽水㆒漬三四宿取出洗㆑之以點㆑茶絕不㆑俗とみえたれど事物紺珠には峽中儲毒蘭花第一といへり今その花を試るに多く服すれば少しく逆上の氣味あるものといへ

蕚每瓣絲縱道ありて花心白きが上に殊に潔白なる星點多く芬香衆蘭よりも高し此種長崎より來る即商舶の輸する所なりといへ共近時皆枯槁して絕てある事を聞ず今圖する所のものは淸人張秋穀の消夏三友圖（此圖は御鎗組椿忠太の藏する寫也忠太名弼畫名を椿山と云）の眞寫を其まゝに摸せし也一種其花莖共に白莖の色と同じく瓣には靑みを帶て靑縱道なく每瓣しろくきよりも至て瘦細にて秋に至りて四五花を開き花心潔白にして香氣高く其葉に白縱道なきものあり岡村尙謙の說には凡宋の趙時庚が蘭譜以下の書に素蘭白蘭の目ありといへ共素心蘭の名はみえず憶に素心蘭は花幹葉よりも高く抽出て汝南圃史にいはゆる出架白の狀と一樣なれば此即事物紺珠に素蘭花生葉上といへるものと全く一物にして淸俗にては其花心の殊に潔白なるによりてそれを素心蘭と名付しものなるべし一種其花瘦細なるものは蓋し和漢三才圖會に載る所の白蘭にしてこれまた素蘭なるべしといへり此說もまた然るべきにや

增補地錦抄云白莖は葉も花も莖も白し是を上とす今は中絕してすくなし

和漢蘭稱云素心蘭ハ蘭花ノ類ニシテ葉短ク光アリ花莖白ク蘤靑ク花中白色ニシテ雪ノ如シ開ケバ花外ノ筋バカリ靑シ瓣頭丸ク花形常ノ蘭ト小異アリ雄蘭ニアラズ雌蘭ニアラズアイダノ蘭也

和漢三才圖會云白蘭葉似二秋蘭一而弱秋開靑白花香太深

○釋名

白莖（增補地錦抄）

○此幹色白きによりてしろくきと名づく

素蘭（事物紺珠行廚集）

○素は繪事後素の素と同じ

素心蘭（淸俗稱）

○此蘭花心極て白色故に素心蘭と名づく

四方蘭

四方蘭は今俗誤りて金稜邊といふものなりその葉面深緑色にして背淡青白每葉ねぢれて頗るねぢあやめの如し花は三月比に開き一幹數花にして狀春蘭に似てやゝ細に其瓣内黄褐色にして兩邊淡黄なり漢名いまだ詳ならず

和漢蘭稱云四方蘭ハ蘭花ノ類ニシテ葉短クヨレテ馬蘭葉ノ形ノ如シ

〇釋名

四方蘭（和漢蘭稱）

〇名義詳ならずけだし此葉軟弱にみだるゝによりて名付しにや

小蘭　王小孃

小蘭一名姫蘭は漢名を王小孃といふ其葉極て細小にして長さ一尺餘濶さ二分許秋白莖抽て三五花をつく形寒蘭に似て白色にして黄を帶び瓣ごとに五紅線ありて心には同じ色の星點多し凡此花は五瓣なりといへ共上瓣は大にして三方に分離し二瓣は小にして上より心をおほふて分離せず香氣衆蘭よりもやゝ劣れり增補地錦抄云小蘭は大らんのごとく葉みぢかく葉はみだれてあしゝ

和漢蘭稱云小蘭ハ蘭花ノ類ニシテ葉狹ク短ク夏ノ末秋ノハジメニ花ヲ開ク白色ニシテ紅ノ筋アリ琉球ノ產也

祕傳花鏡云王小孃花只云莖葉亦瘦弱

〇釋名

小蘭（地錦抄和漢蘭稱）

〇小蘭は大蘭に對していふ

姫蘭（同上）

〇姫は細小の義なり

王小孃（蘭譜祕傳花鏡）

〇王小孃は卽姫蘭の儀和漢暗合なり

白莖　素心蘭

白莖は清俗にて素心蘭といふもの也其葉建蘭に似てやゝ短く葉中一縱白道ありて葉本より直に葉先に至る祕傳花鏡にいはゆる金稜邊の如し夏の比或は秋に至りて其葉中より白莖を抽て淡青白花を開く事は九

芳香半臆淸供可ㇾ以ㇾ錦々不ㇾ絶矣其澆壅之法亦同二甌
蘭一
本草原始云一幹五六花或九花而香不ㇾ足者名ㇾ蕙花同
春開但蘭先而蕙繼ㇾ之
花史左編云興蘭卽蕙草也其葉長

○釋名

春鳳蘭 花肆稱
○此蘭鳳蘭に似て初春に花ひらく故に春鳳蘭と名づく

蘭蕙 祕傳花鏡
○按に獨頭にして春花さくものを蘭といひ數花にして秋花咲ものを蕙といふ此蘭春蘭にをくれて春花を開きて花數にして蕙と異ならざるによりて其一名を併せてこれを蕙蘭と名付しならん

九節蘭 同上
○此種西土のものは一莖八九花を開きて八九節あり故に其多節を稱して九節蘭とは名付しなり

興蘭 花史左編
○興は地名なり汝南圃史云若二空與抗州一皆有二本山蘭蕙一其花香與ㇾ閩持但質則一妍一癯而遠不ㇾ逌矣抗最早出興卽繼ㇾ之

○正誤

蘭品云爾雅翼以二一幹一花者一爲ㇾ蘭一幹數花爲ㇾ蕙卽據二黃山谷之說一也
按に蘭に獨頭數花の別あり獨頭のものは春花を開き數花のものは秋花を開く故に獨頭のものを春蘭といひ數花のものを秋蕙といふされど古に蘭といへるは卽燕尾香にして此蘭にはあらず又古に蕙といへるは全く零陵香にして此蘭及び燕尾香とも異なるを後には此蘭の芳香なるに其名を奪はれて遂に藥に入るにも燕尾香を捨て此蘭を用ゆるに至れるは誤りなり又蘭一名、蕙といふ說あるによりて遂に秋花さくものに零陵香の名を假借し强て蕙の名を冒せしは杜撰なりかゝれば蘭も蕙ももとこれ假借なりといへども其舊襲の久しき今に至てはいかゞはせんさはいへ春蘭秋蕙の名は季唐よりも以前の事にしてその說旣に玉篇にみえたれば正に果の頃より其別はありしものなるに今黃山谷を引てその鼻祖となすは全く本草綱目の誤りをうけて其原始を詳にせざるなり

○釋名

おほはくり大和本草　○此蘭はくりに似てその花葉共に大なり故におほはくりと名づく

弱脚蘭蘭譜　○蘭品云弱脚蘭以ニ其葉瘦弱一不ニ直立一也

獨頭蘭同上　○蘭品云此物一莖一花故有ニ獨頭之稱一

蓀祕傳花鏡草花譜　○蓀は色と香草の名にして卽石菖蒲なり此蘭西土の産は香氣殊に多し故にその名を假借してまた蓀と名づくされど後せい蓀といへるは多くは今の花あやめをさしていへば此蓀は蓋し其花の紫白なるによりて名付しものならんか

○正誤

大和本草云大ハクリハ獨葉ナリ石葦ノ一葉ナルガ如シ

按に蘭譜にいはゆる獨頭蘭は卽一莖一花のものをいふ此云獨葉石葦の如きものは蓋し仙人指甲蘭などを思ひたがへるにてもあるべし

春鳳蘭　蘭譜

春鳳蘭は漢名を蕙蘭一名九節蘭一名興蘭と云その形狀鳳蘭に似て葉に光あり花は二三月の頃に開く一幹七八花其瓣甌蘭よりも瘦細にして末尖り其色淡黄にてかはいろの縱道ありこれを土窖中に入をく時は初春に花を開く事甌蘭に同じさて顧野王の頃小蕙といへるは全く秋蕙にして秋花さく蘭をいひ黄山谷以下に蕙といへるは春秋に拘はらずすべて蘭の數花を開くものをいふ憶に渠の比はいまだ蘭の種類世に多からざるによりてたゞ春蘭秋蕙を以て其別をなせしなり後世に至りては其種類おのづから多く出て春月數花を開く蕙をも見出せしより遂に蕙は春秋にかゝはらぬ名とはなりぬこれは全く時勢のしからしむる所にして必しもあやまりを傳へしにはあらず世に蕙を翫ぶものよろしく古今によりてその違ひある事をおもふべし

祕傳花鏡云蕙蘭葉同ニ甌蘭一稍長而勁一莖發ニ八九花一其形似ニ甌蘭一而瘦卽香味亦不レ及焉但後ニ甌蘭一而開猶可レ繼レ武甌蘭先ニ建蘭一而放聊堪ニ接續一建蘭則一歳

杭蘭花史左編 秘傳花鏡

○草花誑云甌蘭三種惟杭城有レ之

拜節蘭閩書南產志 漳州府志

○節は正月の節をいふ

○正誤

蘭品士幽蘭總稱也

按に唐楊烱が幽蘭譜による時は幽蘭は全く燕尾香の名にして蘭花の稱にはあらず後世これを以て春蘭の名となすものは卽假借なり又蘭品に春蘭此亦幽蘭屬但比ニ幽蘭一品稍劣といへるも幽蘭の以て建蘭の名とせしは矛盾せり本草綱目に蘭花生ニ近處一者葉如ニ麥門冬一而春花生福建者葉如ニ菅茅一而秋花又引ニ遯齋閑覽一今人所レ種如ニ麥門冬一者名ニ幽蘭一とみえたれば幽蘭は卽春蘭にして其葉如ニ菅茅一而秋花さくものとは全く異なり然るを今以て蘭花の總稱をなすものは字義に於ては害なしといへども今名幽蘭とは其意甚たがへり

本草原始云江南之蘭只春芳郁荊楚閩廣秋復再芳故有ニ春蘭秋蘭一不レ同也

按に春花を開きて芳郁たるものは春蘭にして秋蘭は別にこれ一種顧野王のいはゆる秋蕙なり今春蘭秋蘭を混じて一物とし荊楚閩廣は其地江南と異なるによりて春蘭再び秋をむかへてまた花を開くといへるは杜撰なり

おほばくり弱脚蘭

おほばくりは漢名を弱脚蘭一名獨頭蘭といふ卽春蘭の一種なり今下總國眞間國府臺邊に多し其葉は全く春蘭に似てやゝ濶く花莖青く花また相似て大なり色靑し一種其花紫白色なるものを西土にて蓀といふ近處いまだこれ有ことを聞ずといへども伊豫對馬などには寒蘭に在紫及び靑黃色の數種あれば此蘭の紫白色なるもまた必ずなきにしもあらざるべし

大和本草云大ハクリハハクリノ葉ニ似テ大ナリハクリノ類ナリ山草ナリ蘭草ニモ似タリ趙時庭ガ蘭譜ニ所載人獨頭蘭ナリ

蘭譜云獨頭蘭色綠花大如ニ鷹爪一一幹一花高二三寸葉瘦長二三尺入臘方花熏馥可レ愛百香有レ餘祕傳花鏡云一種葉較レ蘭稍濶而柔花開ニ紫白一者名レ蓀

草花譜云甌蘭一種開ニ花紫白一者名レ蓀葉較レ蘭稍濶

○釋名

はくり大和本草

按にはくりは蓋しはゝくりの略はゝくりは卽貝母なり此根頗る貝母に似たり故にまたはゝくりと名づくなるべしまた或説にはくりは其花の色全く貝母の花に似たりよつて名づくともいへり

ほくり和漢三才圖會 蘭品本草啓蒙

ほくろ蘭品本草纂 本草啓蒙

○以上二名ははくりの說轉なり

春蘭玉篇 本草衍義

○此蘭春月花咲を以て春蘭と名づく按に春蘭の名舊は楚辭にみえたり蓋し今の蘭花をさしていひしにや凡楚辭に蘭と稱するに春蘭秋蘭幽蘭石蘭木蘭の別ありて其種各おなじからずいはゆる木蘭は卽木蓮にして石蘭は別に一種の物されど其秋蘭幽蘭は全く今の藤袴なれば春蘭は蓋し今の蘭花なるべしさはいへ春蘭兮秋鞠長無ㇾ絶兮終古九歌といひし春秋の二字は全く文章の上の事にてたゞ蘭菊をわかつためにそへし文字なるべければ其爰は春蘭といへども藤袴をさしていひしもしるべからずまた琴賦嵇叔夜に春蘭被ニ其東一沙棠殖其西擬古詩陸士衡に歎友蘭時往といへる注に蘭時春時也といひしは全く今の蘭花にして藤袴をさしていひしにはあらずかかれば蘭花を以て春蘭と稱せしは全く晋人よりはじまりし事にて戰國の頃は絕てなき事なるにや倘考べし

蘭玉篇 脩水記

○蘭はもと燕尾香の名にして此草の名にあらずされど其葉芳香ならずといへどもその花芳香なるによりて遂に燕尾香の名を以て此草には假借せしなり或は花字を添てこれを蘭花といへるは本草綱目にみえたり

幽蘭本草綱目引陳遊齋 閲覽本草原始云蘭生ニ于澤林一似ㇾ愼ㇾ獨也故稱ニ幽蘭一

○此蘭すべて幽谷に生ず故に名づく

報春先祕傳花鏡

○蘭品云春蘭正月上旬旣放故名ニ報春一

甌蘭草花譜 花史左編

○按に甌に東甌西甌の別あり西甌は越の別種にして東甌は閩中の地なり此云甌は卽東甌をさしていふ

市衣袂皆馥（蘭品云按此云柔葉弱花正月開者卽訶孤耑也）

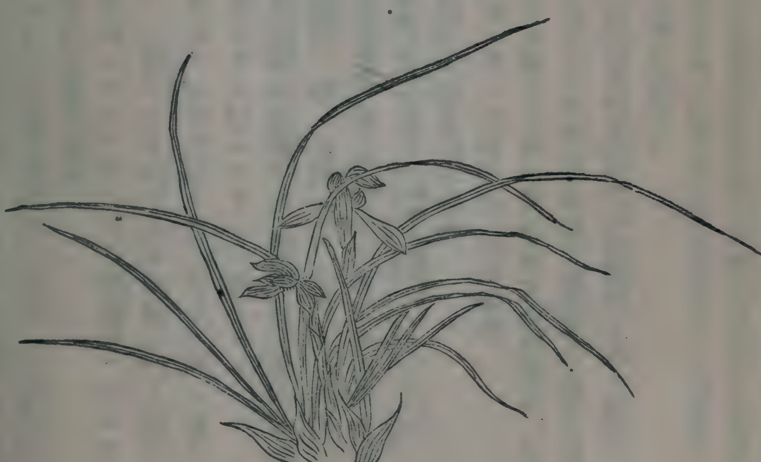
草花譜云甌蘭三種惟梳城有之花如建蘭香甚一枝一花有紫花黃心有白花黃心者紫如胭脂白似羊脂花甚可愛出法華山採其原墩者種背陰處可治開花紫白者名孫

花史左編云杭蘭或云甌蘭有紫花黃心有白花黃心花香可愛正月間杭人取堆泥堂促開故花不香須買大木根內無竹針者取橫山黃土揀去石塊種之見天不見日羊鹿糞灌之來年花盛一說用水瀉炭種之上蓋靑苔茂花且頻洒水花香

秘傳花鏡云甌蘭多生南浙陰地山谷間葉細而長四時常靑秋發蕋冬盡春初開花有紫莖玉莖靑堂者一莖一花其紫花黃心白花紫心者酷似建蘭而香尤甚盆種之淸芬可供一月故江南以蘭爲香祖冬月當藏暖處經霜雪恐凍傷其蕋然較建蘭入窖則不必也

漳州府志云拜節蘭色微紫以歲首開花故名（蘭譜以下引書並出蘭品）

格致鏡原引格物叢話云蘭叢生山谷紫莖赤節綠葉一幹而一花幽香淸遠可挹花或白或紫或淺碧花時常在春時



古今要覽稿卷第三百八十六

●草木部 蘭二

はくり　ほくり　春蘭

はくり一名ほくり一名ほくろは漢名を春蘭一名蘭一名幽蘭一名報春先一名甌蘭一名杭蘭一名獨頭蘭といふ諸國山中陰地處々これあり近邊にては道灌山飛鳥山及び大宮八幡宮の境内等に産すその葉麥門冬に似て黑綠色光澤ありて一梁に叢生し長さ八九寸より一尺餘に至る此花最早きものは正月上旬に開き遲きものは二三月に至りて開く其花五瓣にて紫莖頭にたゞ一花をつく形狀建蘭に似たり淡黃色にして少し靑みを帶び後蘭筍を結ぶこともまた建蘭の如し此卽王篇顧野王のいはゆる春蘭にして修水記黃山谷のいはゆる蘭なりされど皇朝に産するものは其香建蘭に比するに稍劣れり故に本草啓蒙にほくろは卽春蘭の一種なりといへどこれは全く風土の異なるによりての故なるべし

和漢三才圖會云春蘭葉似レ蘭(蘭の上疑らくは秋字を脱す)而細短長不レ過二七八寸一春月開レ花亦似二秋蘭一香稍淺冬月采二其根一似二慈姑一能治二皸瘡一

大和本草云ハクリ、山ニ生ズ幽蘭葉ニ似タリ莖ニミゾアリテ三角ナルガ如シ花モ幽蘭ニ似テ微香アリ山人其根ヲ取アブリテヘラニテオセバ糊ノ如クナルヲ用テアカヾリノ口ニツクレバ能クイユ

蘭品云春蘭亦幽蘭屬但比二幽蘭一品稍劣亦有二微香一羅願黃庭堅謂一幹一花爲レ蘭者正指レ此也其開最蚤正月上旬既放二其根一至二枯職一賤民冬間堀採搗坭傳凍瘡皺裂不下復鬨上賞二其花一 按に大和本草及び蘭品にいはゆる幽蘭は卽建蘭をさしていふ

玉篇云蘭力千切香草春蘭也

脩水記云一幹一花而香有レ餘者蘭也

本草衍義云蘭今江陵鼎澧州山谷之間頗有レ之山外平田卽無多生二陰地幽谷一葉如二麥門冬一而濶且韌長及二一二尺一四時常靑花黃綠色中間辨上有二細紫一點春芳者爲二春蘭一色深云々

荊溪疏云蘭出二荊溪一者葉柔花柔弱比二閩浙産一不レ同又易致 龍池銅官之間彌レ坂盈レ谷山人杖桃藤東筐筥登レ市毎歲正月二月之交買而入レ郭者價賤於土人行

證類本草引圖經本草云有二一種一山蘭生二山側一似二劉寄奴一葉無レ椏不二對生一花心微黄赤能破レ血

按に證類本草澤蘭條集本草を引て今山中又有二一種一甚相似莖方葉小强不二甚香一といへるものも圖經本草の山蘭と蓋し一物なるべし



○釋名

ひよどりばな 蘭品本草啓蒙

○此花鵯の來る比に咲をもて俗に此名を命ぜしなり

やまどりさう 本草纂　山蘭 圖經本草

○此草山中に生じて其葉蘭草と同じ故に山蘭と名づく

○正誤

本草綱目云山蘭即蘭草之生二山中一者

按に形狀をいはざれば蘭草と異なる事なきがごとし

草木部蘭二

はくり　はくり春蘭

おほはくり弱脚蘭

春鳳蘭蕙蘭

四方蘭

小蘭王小孃

白莖素心蘭

蘭品引家語云孔子見ㇾ蘭嘆曰夫蘭當ㇾ爲二王者香草一
按に今傳ふる所の孔子家語此文なし憶に琴操に孔子反ㇾ魯隱谷之中見二香蘭獨茂一喟然嘆曰夫蘭當ㇾ爲二王者香一云々蘭品は蓋し此文を引たがへしものなるべし
本草綱目云蘭草八九月開ㇾ花成ㇾ穗如二鷄蘇一花紅白色中有二細子一
按に蘭草紅白花を開くものは既に蜀本圖經にみえたれど其穗をなし鷄蘇の如きものは時珍以上みる所なし恐らくは時珍いまだ眞物をみず漫に傳聞の誤りをうけてしかいへるものなるべし或は西土には別に一種蘭草の穗をなすものあるにやうたがはし
通雅云凡稱二幽蘭一卽黃山谷之所ㇾ名蘭花也凡稱二蘭茝一之蘭卽今省頭香
按に幽蘭賦に隰有ㇾ蘭兮蘭有ㇾ枝又鴻歸燕去紫莖歇露往霜來綠葉枯悲二秋風之一敗一與二蒿草一而爲ㇾ芻とみえたれば幽蘭は卽今の蘭草にしてそれを以て蘭花の稱とするものは全く假借なり然るを後世に至りて專ら蘭花を以て幽蘭と稱するものはそのもとをしらざるなり
昭代叢書引二蘭言一云蘭生二幽谷一不三以ㇾ無ㇾ人而不ㇾ芳
又蘭言に引云孔子曰幽蘭生二于空谷一不二以ㇾ無ㇾ人而不ㇾ芳
按に此二說は古の蘭を以て强て蘭花とせしより遂に深林を幽谷に作り又芝蘭を幽蘭に作りしは杜撰なり

ひよどりばな 山蘭

ひよどりはな一名やまどりぐさは漢名を山蘭といふ近邊山野處々これありその莖葉すべて蘭草に似て狹長にして岐なく香なし秋後花を開くまた蘭草に似て淡紫色及び白色のもの有事正に下文にいふが如しされど皇朝の産は其葉對生にて西土のものは互生なるを異なりとす
蘭品云此種於二蘭草中一別是一種意態甚似二蘭草一但其葉比ㇾ之狹長不ㇾ作ㇾ岐且不二潤澤一無ㇾ香花有二紫白二色一秋後著ㇾ花近郊山中多有ㇾ之
本草啓蒙云山蘭アリ山野ニ生ズ葉ハ長クシテ岐ナク桃葉ニ似テ鋸齒深シ花ニ白色淡紫色ノ二品アリ

○文選云蘭以レ秋芳

蘭澤 證類本草引唐本草 ○本草拾遺云蘭草五六月採陰乾婦人和レ油澤レ頭故云二蘭澤一

大澤蘭 本草綱目引炮炙論 ○此蘭澤蘭に似て其葉大なり故に大澤蘭と名づく

幽蘭 離騷思玄賦幽蘭賦 ○楚辭九章云蘭茝幽而獨芳また曹子建七啓云薫以二幽若一流芳肆市注若杜若也若稱二幽若一猶蘭曰二幽蘭一也

香水蘭 開寳本草 ○馬志云時人皆煮水以浴療レ風故名二香水蘭一

燕尾香 同上 ○馬志云其葉有レ岐俗呼二燕尾香一

紫菊 菊譜 正に馬蘭と同名

孩兒菊 同上 ○澤蘭また孩兒菊と名づく時珍云小兒喜佩レ之故有二孩兒菊之名一也又引二訂蘭說一古之蘭草卽今之俗名二孩兒菊一者

待女花 格致鏡原引二採蘭雜志一 ○淮南子云男子樹レ蘭美而不レ芳採蘭雜志云蘭待二女子一同種則香故名二待女花一

○正誤

日本紀の舊點に蘭をあらゝぎと訓ず

按にあらゝぎは卽荒々葱の義にて延喜式に載する所の蘭なれば此蘭とは全く別種なる事蘭葱の條にいへるが如し今は訓を以て藤袴と混同せしは誤なり

和漢三才圖會云按古蘭草木有二本朝延寳年中一大宛國姓爺始渡レ之其形狀如二本草綱目說一而葉似二茗葉一而厚故俗謂二之茶蘭一四五月開レ花如二蓼穗一而不二悉開一初青後黄色一枝甚香盛止一日而餘枝亦追開故花盛至二數日一常好レ水畏レ寒如二冬日一被二紙袋一以令レ不レ中二風寒一或時破二油盞一漫レ水其水可レ灌レ根

按に蘭草の藤袴なる事は皇朝古來相傳の說にして其原づく所は蓋し漢以上の說なるべし然るを今茶蘭を以てこれに擬するは全く時珍の說に蘭草は開レ花成レ穗といへる形狀にのみ拘はりしものにして杜撰勿論なり

細子ニ雷斅炮炙論所謂大澤蘭卽蘭草也小澤蘭卽澤蘭也禮記佩ニ悅蘭茝楚辭紐ニ秋蘭ヲ以爲レ佩西京雜記載漢時池苑種レ蘭以降レ神或雜レ粉藏ニ衣書中ニ辟レ蠹者皆此ニ蘭也今吳人蒔レ之呼爲ニ香草ト夏月刈取以ニ酒油ニ灑制纓作ニ把子ニ貨爲ニ頭澤佩帶ト與ニ別錄所レ出ニ大吳之文ニ正相符合

又引ニ陳遯齋閑覽言楚騷之蘭或以爲ニ都梁香ニ或以爲ニ澤蘭ニ或以爲ニ猗蘭ニ當下以ニ澤蘭ニ爲上レ正（蘭品云澤蘭卽大澤蘭）



〇釋名

ふぢばかま（日本紀萬葉集本草和名）

〇東雅云ふぢばかまといふ義詳ならず其花淡紫色此に藤といふ色に似て其瓣の筩をなせしが袴に似たる所あればなを（俗に葉の袴などいふがごとし）藤袴とはいひしなるべし

らに（源氏物語）

らには蘭の轉音なり

蘭（易素問禮記家語左傳說文）

〇開寶本草云葉似ニ馬蘭ニ故名ニ蘭草ニまた陸機の說下文にみえたり

蕳（詩經）

〇陸機疏云鄭俗三月男女秉ニ蕳于水際ニ以自拔除蓋蘭以闌レ之蕳以閑之其義一也

蘭草（神農本經）

〇名義蘭に同じ

香蘭（琴操）

〇此蘭芳香故に名づく

王者香（同上）

國香（左傳）

秋蘭（離騷）

〇蘭品云典籍便覽以ニ王者香國香ニ爲ニ蘭之一名ニ

之峻茂兮願竢レ時乎吾將レ刈
又(同上)云結二幽蘭一而延佇
又(同上)云民好惡其不レ同兮惟此黨人其獨異戸服レ艾以盈レ要兮謂二幽蘭其不一レ可レ佩
又九歌(東皇太一)云蕙肴蒸二兮蘭藉一奠二桂酒兮椒漿一
又(湘夫人)云沅有レ茝兮澧有レ蘭思二公子一兮未二敢言一
又(少司命)云秋蘭兮麋蕪羅生兮堂下綠葉兮素枝芳菲々兮襲レ予夫人兮自有二美子一蓀何以兮愁苦秋蘭兮青々綠葉兮紫莖滿二堂兮美人一忽獨與レ余兮自成
又九章(招魂)云光風轉レ蕙氾二崇蘭一些
又(同上)云皐蘭被レ徑兮斯路
秋風辭(漢武帝)云蘭有レ秀兮菊有レ芳
西都賦(班孟堅)云芳草被レ隄蘭茝發色曄々猗々若下摛錦與二布繡一燭中燿乎其陂上
思玄賦(張平子)云纗二幽蘭之秋華一兮又綴レ之以二江蘺一
嘯賦(成公子安)云坐二盤石一漱二清泉一藉二皐蘭之猗靡一蔭二修行之蟬蜎一
高唐賦(宋玉)云秋蘭茝蕙江蘺載レ菁
遊仙詩(郭景純)云翡翠戲二蘭苕一容色更相鮮
招隱詩(左太沖)云秋菊兼二糇糧一幽蘭間二重襟一

古詩云傷彼蕙蘭花含レ英揚二光輝一過レ時而不レ采將下隨秋草一萎上(秋風辭以下引二書出文選一)
唐楊炯幽蘭賦云幽蘭之芳草稟二天地之純精一抱二靑紫之奇色一挺二龍虎之嘉名一不レ起レ林而獨秀必固レ本而叢生爾乃丰茸十步綿二連九畹一莖受レ露而將レ低香從レ風而自遠
又云、江南則蘭澤爲レ洲東海則蘭陵爲レ縣隰有レ蘭兮蘭有レ岐
劉蒙菊譜云孩兒菊花如二紫茸一叢茁細碎微有二菊香一或云即澤蘭也與レ菊同レ時又常及二重九一(蘭品蘭草條引二此文一)
證類本草引唐本草云此是蘭澤香花也八月花白人間多種之以飾二庭池溪水一澗傍往々亦有(祕傳花鏡云蘭葉與二澤蘭一相似紫梗亦節高四五尺其葉光潤尖長開レ花喜レ生二水旁一人多種二於庭池一可下殺二蠱毒一除二不祥一著衣書中能避上二白魚蛀一)
又引二蜀本圖經一云蘭草葉似二澤蘭一尖長有レ岐花紅白色而香生二下濕地一(此云澤蘭即小澤蘭なり)
本草綱目云蘭草澤蘭一類二種也俱生二水旁下濕處一二月宿根生レ苗成レ叢紫莖素枝赤節綠葉對レ節生有二細齒一但以二莖圓節長而葉光有一レ岐者爲二蘭草一莖微方節短而葉有レ毛者爲二澤蘭一嫩時並可レ挼而佩レ之八九月後漸老高者三四尺開レ花成レ穗如二雞蘇一花紅白色中有二

乘レ馬乞レ蘭者一、而數二昔日之罪一、以欲レ殺、爰乞レ蘭者頼
搶レ地、叩頭曰、臣之罪實當二萬死一、然當二其日一不レ知二
貴者一、於レ是、皇后赦二死刑一、貶二其姓一、謂二稻置一、
源氏物語藤袴云らにの花いと面白きをも給へりける
をみすのつまよりさし入て云々
東雅云凡遠を貴み近きを厭ひぬるはつねの情なりさ
れど我國のいにしへよりいひつぎし所のごとき漢人
の說に合がたき事もあるをば世の人おほくはこれを
すてゝ彼をとるべしなどいふめり蘭のごときは毛詩
騷經にみえしより始の彼國にしても其名あらはれ聞
えしものなれど後には其物さだかならぬ事のごとく
にもなりけり我國にしてはうたがふべき所もなく今
もありけるさらば我國のいにしへよりいひつぎし所
ことごとく疑ふべき事にしもあらず
本草啓蒙云蘭草野生多シ春宿根ヨリ苗ヲ叢生ス圓莖
ニシテ班點ナシ葉節ニ對シテ生ズ形長クシテ左右ニ
岐アリテ周圍鋸齒深クシテ香氣多シ乾セバ愈烈シ夏
月簷ニ掛レバ二旬餘モ香氣アリテ惡臭ヲ避べシ六七
月ニ至リ莖高サ三四尺或ハ六七尺枝ノ木ゴトニ傘ノ
如ク細小花多シ攢リ開ク淡紫色ナリ又白花ノモノア
リ藥ニ用ユル蘭葉ハ此蘭草ノ葉ニシテ蘭花ノ葉ニ非
ザル事本草綱目ノ正誤ニ詳ニ辨ズ然ルニ綱目以後ノ
書本草必讀本草原始ソノ餘諸書ニ猶誤リテ蘭花ノ葉
トスル說多シ

易繫辭傳云同心之言其臭如レ蘭
禮記內則云子婦奉二父母舅姑一佩二茝蘭一
孔子家語在厄云芝蘭生二於深林一不三以レ無レ人而不二レ芳君
子修レ道立レ德不下爲二困窮一而改上レ節
又六本云與二善人一居如レ入二芝蘭之室一久而不レ聞二其香一
卽與レ之俱化按に芝芷音通也大戴禮此文を引て芝蘭を芷蘭に作る
詩鄭風云士與レ女方秉レ蘭
春秋左氏傳云鄭文公妾燕姞夢二天與一レ蘭曰蘭有二國香一
人服媚レ之文公遂與二之蘭一而御レ之生二子穆公一
說文云蘭香草也
事文類聚引二琴操一云猗蘭操者孔子所作也孔子聘二諸
侯一莫二能自任一自レ衞反レ魯隱谷之中見二香蘭獨茂一喟
然嘆曰夫蘭當レ爲二王者香一今乃獨茂與二衆草一爲レ伍乃
止レ車援レ琴皷レ之自傷レ不レ逢レ時託二辭於蘭一云
楚辭離騷云紉二秋蘭一以爲レ佩
又同上云余既滋二蘭之九畹一又樹二蕙之百畝一云々糞枝葉

古今要覽稿卷第三百八十五

●草木部　蘭一

ふぢばかま　らに　蘭

ふぢばかま一名らには漢名を蘭一名蕑一名蘭草一名香蘭一名王者香一名國香一名秋蘭一名蘭澤一名大澤蘭一名幽蘭一名香水蘭一名燕尾香一名紫菊一名孩兒菊一名待女花といふ此草古より諸國に野生多し春舊根より苗を生じ叢をなし夏を經て莖高さ三五尺に至り秋をむかへて每枝傘狀をなし細小なる淡紫花を攢簇す此卽劉蒙がいはゆる孩兒菊花如紫茸叢苗細碎（菊譜）といへるものなり又一種蘇敬注に蘭澤八月花白（證類本草引唐本草）といへるものも稀に野生ありといへども保昇のいはゆる花紅白色（證類本草引蜀本圖經）のものはいまだこれある事をきかず其葉は山蘭に似て綠色にして末尖り細鋸齒あり又岐ありて燕尾の如きものと一莖の內には多く相交りてさらに山蘭樣の物のみにあらず此葉生なる時は香氣薄けれど莖葉を連ねとりて室中に掛おき日をへて乾枯すればその香氣殊によしさて皇朝にて蘭の物にみえたるは忍坂大中姬の一根蘭（ヒトモト）を採て鬪雞國造に與へられしを始とし（日本紀）これを歌によみて秋の七種の數に入しは山上憶良を始とし（萬葉集）それを字音にてらにと唱へしは紫式部を始とす（源氏物語）凡西土にては宋以降は蘭花を尊みて古の蘭とせしより此蘭世に隱れて絕てしるものなかりしを明に至り時珍の本草綱目を撰びし時離騷辨證訂蘭說等によりてさらに蘭花を以て別種とし此蘭を以て古の蘭とせしは信ずべしされど我朝にてもさせる混同もなく允恭天皇の頃より今に至りて蘭のふぢばかまなるは實に人心の正直仰ぐべく尊むべし

日本紀（允恭紀）云允恭天皇二年春二月丙申朔、己酉、立忍坂大中姬、爲皇后、云々、初皇后隨母在家、獨遊苑中、時鬪雞國造從傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后嘲之曰、能作園乎、汝者也、（汝此云那鼻苔也）且曰、壓乞戶母、其蘭一莖焉、（壓乞、此云異提、戶母、此云覩自）皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蠛也、（蠛此云摩愚那岐）時皇后結之意裏乘馬者辭无禮卽謂曰、首也、余不忘矣、是後、皇后登祚之年、覓

筆ニ簾帳蕭々翠雨寒、

題柯敬仲竹　元泰不華

梁王宅裏參差見、山簡池邊爛熳栽、記得九霄秋月上、
滿庭清影覆ニ蒼苔一、

題柯學士畫竹　元陳基

羣王仙人佩レ水蒼、金莖分レ露服ニ琳瑯一、曾將ニ天上昭華
琯一吹作ニ飛龍一奉ニ玉皇一、

遵道竹枝　元張雨

篔簹谷口白雲生、雲裏琅玕萬玉聲、驚破幽人春枕夢、
一牕斜月半梢橫、

題雲林竹　明張簡

笠澤莊頭道士家、書牕風竹翠交加、新梢便有ニ凌雲勢一、
高出ニ牆檐一掃ニ落花一、

題宋好古墨竹　明危素

我憶東曹粉署郎、琅玕寫就拂レ雲長、秖疑散步雲林曲、
獨聽ニ秋聲一待ニ晚涼一、

早朝待レ漏題ニ楊諭德竹一　明王隧

禁鐘纔動曉風微、新竹疎々對ニ瑣闥一、不ニ是日高簾不一
レ捲、怕教ニ空翠濕ニ朝衣一、

題竹　明王紱

宮樹棲鴉拜ニ夕郎一、洞門煙靄竹蒼々、珮聲搖曳歸來晚、
香篆初消月滿レ牀、

竹　明徐渭

昨夜牕前風月時、數竿疎影響ニ書幃一、今朝搨向谿藤上、
猶覺秋聲筆底飛、

題薛淡園墨竹　明僧道衍

淡々煙中映ニ夕曛一、疎々石上拂ニ晴雲一、展圖却憶西岡
夜、坐聽ニ秋聲一亦君レ君、

題王鹿鶴墨竹　明僧德祥

輞川竹裏舊題詩、畫裏如今似見之、滿耳秋聲人不レ到、
彈琴長嘯月來時、

蒼雲十畝蔭平寛、露葉風枝繞レ舍寒、莫レ遣先生賦歸去、且令三小吏報二平安一、

新竹　　宋　關　名

根露蒼龍脊骨寒、葉盤丹鳳尾梢端、風雷未レ化秋塘影、魚鼈長猜是釣竿、

細香軒　　金　路　鐸

霜雪青々玉一叢、肯從二桃李一借二薫釀一、不レ知香界何從立、憑二仗清風一問二犛龍一、

墨竹　　金　龐　鑄

一谿流水玉涓々、谿上修篁接二暮煙一、誰倩下能二詩文一與可上筆可端移得小江天、

其二

灞川急雨暗秋空、無限琅玕淡墨中、斂甲擬々軍十萬、欲下將二貔虎一戰中斜風上、

琳宮詞　　元　許　有　壬

涼入二簾幃一夜色輕、瑤臺添レ月更虚明、一壺天地渾無レ迹、只有二清風一動二竹聲一、

扇上竹　　元　楊　載

種竹何須レ種二萬竹一、一枝分レ影亦檀欒、秋宵更受風披拂、聽取清音入レ夢寒

題金顯宗書墨竹　　元　柳　貫

海潤二星輝一大定年、生綃筆々寫二蒼煙一、若爲二夢裏篔簹谷一、直到二洋州雪筏邊一、

墨竹　　元　歐　陽　元

雨枝淡々與濃々、垂葉應レ無二霾靡容一、玉立滿身都是雨、何人能識二葛陂龍一、

題竹石圖　　元　陳　旅

藍田水曲青玉立、雨過秋光滿林濕、故人結レ屋傍二幽崖一、靜愛石牕晴翠入、

題雨竹　　陳　旅

江上鷓鴣留レ客住、黄陵廟下泊レ船時、一林春雨垂々綠、消得晴風爛熳吹、

題王虚齋所藏鎭南王墨竹　元　廼　賢

帝子乘レ鸞謁二紫清一、滿天風露翠衣輕、間將二十二參差玉一、吹向二雲間一作二鳳鳴一、

蘇東坡竹　　元　吳　鎭

晴梢初放葉可レ數、新粉纔消露未レ乾、太似三美人無二俗韻一、清風徐灑碧琅玕、

蘇東坡竹　　元　黄　公　望

一片湘雲濕未レ乾、春風吹下玉琅玕、强扶二殘醉一揮二吟

不レ厭東谿綠玉君、天壇雙鳳有ニ時聞一、一峰曉似朝仙
處、靑節森々倚ニ絳雲一、

其二

須レ題內史琅玕塢、幾醉山陽琴瑟邦、剩養ニ萬莖一將レ掃
レ俗、莫レ教ニ凡鳥鬧ニ雲門一、

其三

一谿雲母間靈花、似レ到ニ封侯逸士家一、誰識雌雄九成
律、子喬丹井在ニ深涯一、

其四

嘯入新篁一里行、萬年如レ甕鎖ニ龍泓一、驚巢翡翠無ニ詩
處一、閒倚ニ雲根一刻ニ姓名一、

其五

靑嵐彙亞思ニ吾祖一、綠潤偏多憶ニ蔡邕一、長聽南園風雨
夜、恐生ニ鱗甲一盡爲レ龍、

其六

迸玉間抽上釣磯、翠苗番次旣霞衣、山童泥乞靑驄馬、
騎過春泉掣手飛、

其七

一節呼レ龍萬里秋、數莖垂レ海六鼇愁、更須瀑布峰前
種、雲裏闌干過ニ子猷一、

其八

丘壑誰堪話ニ碧鮮一、靜尋春講認ニ嬋娟一、會當ニ小殺一靑瑤
簡、圖ニ寫龜魚一把ニ上天一、

其九

懸圃千春閉ニ玉叢一、洪陽一祖碧雲空、不レ須騷屑愁江
島、今日南枝在ニ國風一、

對竹　唐　李中

懶穿幽徑衝ニ鳴鳥一、忍踏ニ淸陰一損ニ翠苔一、不レ似間々倚
レ枕聽、秋聲如レ雨入レ軒來、

竹林　宋　林逋

寺籬斜夾千梢翠、山燈深窄萬籜乾、却憶貴家廳館裏、
粉牆時畫數莖看、

壬戌正月晦與ニ仲元一自ニ淮上一復至ニ齊安一　宋　王安石

風暖柴荊處々開、雪花沙淨水泂々、意行竹却得前年
路、看ニ盡梅花一看レ竹來、

霜筠亭　宋　蘇軾

解籜新篁不ニ自持一、嬋娟已有ニ歲寒姿一、要レ看凜々霜前
意、須レ待ニ秋風粉落時一、

橫山堂　宋　孫覿

七言絶句

從韋二明府續處覓綿竹　唐杜甫

華軒藹々既他年、到綿竹亭出縣高、江上舍前無二此物一、幸分二蒼翠一拂二波濤一、

晩春歸山居題窓前竹　唐劉長卿

谿上殘春黃鳥稀、辛夷花盡杏花飛、始憐幽竹山窓下、改二清陰一待二我歸來一、

清水驛叢竹天水趙云余手種一十二莖　唐柳宗元

檐下疎篁十二莖、襄陽從事寄二幽情一、祇因更使二伶倫見一、寫盡雌雄雙鳳鳴、

葺夸陵幽居　唐李涉

負レ郭依レ山一徑深、萬竿如レ束翠沈々、從來愛物多成レ癖、辛苦移レ家爲二竹林一、

題李次虛窓竹　唐白居易

不レ用裁爲二鳴鳳管一、不レ須截作二釣魚竿一、千花百草凋零後、留向二紛々雪裏一看、

問移竹　白居易

問君移竹意如何、愼勿レ排二行但間窠一、多種少栽皆有レ意、大都少校不レ如レ多、

高司馬移竹　唐馬戴

叢居堂下幸君移、翠掩二燈窓一露葉垂、莫レ羨孤生在二山谷一、無三人看二著拂レ雲枝一、

竹風　唐唐彥謙

竹映二風窓一數陣斜、旅人愁坐思無レ涯、夜來留得江湖夢、全爲二乾聲一似二荻花一、

庭竹　唐唐球

月籠二翠葉一秋承レ露、風亞二繁梢一暝掃レ煙、知道雪霜終不レ變、永留二寒色一在二庭前一、

苦竹徑　唐陸希聲

山前無數碧琅玕、一經清森五月寒、世上何人憐二苦節一、應下須細問二子猷一看上、

春日山中竹　唐裴說

數竿蒼翠擬二龍形一、峭拔須レ教二此地生一、無限野花開不レ得、半山寒色與レ春爭、

竹　唐李建勳

瓊節高吹二宿レ鳳枝一、風流交レ我立忘レ歸、最憐瑟々斜陽下、花影相和滿二客衣一、

竹　唐陳陶

翔一、

臨階竹　唐盧照鄰

封霜連二錦砌一、妨露拂二瑤階一、聊將二儀鳳質一、暫與二俗人一諧、

竹里館　唐王維

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不レ知、明月來相照、

斤竹嶺　唐王維

檀欒映二空曲一、青翠漾二漣漪一、暗入商山路、樵人不レ可レ知、

斤竹嶺　唐裴廸

明流紆且直、綠篠密復深、一徑通二山路一、行歌望二舊岑一、

雨後對後檐竹　唐崔翰元

含レ風搖二硯水一、帶レ雨拂二牆衣一、乍似秋江上、漁家半掩レ扉、

庭竹　唐劉禹錫

露條鉛粉節、風搖青玉枝、依々似二君子一、無三地不二相宜一、

竹谿　韓愈

無レ塵徒不レ掃、有レ鳥莫レ令レ彈、若要レ添二風月一、應レ除二數百竿一、

竹谿　韓愈

藹々谿流漫、梢々岸篠長、穿レ沙碧簳淨、落水紫苞香、

題竹　唐李羣玉

一須含二秋綠一、森風十萬竿、氣吹朱夏轉、聲掃二碧宵一寒、

竹　宋徐鉉

勁節生二宮苑一、虛心奉二豫遊一、自然名價重、不レ美渭川侯、

竹　宋朱子

種レ竹宮牆陰、經レ年但憔悴、故園新綠多、宿幹轉蒼翠、

題紙上竹　元鮮于樞

陰涼生研池、葉々秋可レ數、京華客夢醒、一片江南雨、

一葉竹爲二竹叟禪師一作　元吳鎮

誰云古多レ福、三莖四莖曲、一葉研池秋、清風滿二淇澳一、

岳生畫竹　元鄭元祐

修篁含二雨餘一、枝拂清風起、掃破碧玲瓏、高堂淨如レ洗、

叢竹國　明高啓

窈窕復蒙籠、千山萬竹中、幽人獨驚起、秋雨共二秋風一、

略上人房竹　高啓

幽篠半梢横、山窓颸月明、上人禪定久、不レ怕有二秋聲一、

心老歲寒、百草千花盡零落、請君來向此中看、

丹陽觀竹自宮中移賜　金李　獻能

素士如林待紫靑、紫靑新許住蓬瀛、娟々粉節霜筠出、矗々煙梢玉削成、福地根莖蒙化育、中天雨露借思榮、緣章封事朝來奏、又聽風前彩鳳鳴、

竹陰　元白　珽

占斷人間瀟灑地、全身水墨畫篔簹、非煙非霧一林碧、似雨似晴三經涼、翠袖佳人黯空谷、白鬚道士隱南塘、數竿醉日君須記、移向西軒補夕陽、

賦文子方家篔簹竹影　元虞　集

數箇篔簹一小亭、南窓承日映寒靑、水精簾裏珊瑚樹、雲母屏前翡翠翎、却憂微風動肅瑟、翻疑薄暮倚娉婷、憑君縱有鵞谿絹、莫與空山結定形、

種竹　元洪　希文

移得霜根趁雨栽、檣陰踏破一方苔、甫能引汝淸風到、未暇招渠俗子來、猿訝便當書案立、鶴知早避釣船回、不妨更了歲寒計、早晩栽松兼種梅、

居竹軒　元倪　瓚

翠竹如雲江水春、結茅依竹住江濱、堦前迸筍從侵經、雨後垂陰欲霜鄰、映葉黃鸝還自語、傍人白鶴亦能馴、遙知靜者忘聲色、滿屋淸風未覺貧、

僑心寺看竹　明章　敞

山深無數碧琅玕、愛靜人來取次看、地匝翠雲侵骨冷、經迷蒼雪蔽天寒、風敲玉佩驚淸夢、月侵金波起宿鸞、我欲平分僧半榻、煩君日々報平安、

風雨種竹　明李　東陽

石欄沙露雨聲乾、爲欠肅々一兩竿、深帶土膏從地底、嗔移茅屋過江干、方於辰日依時種、影待晴天拂翠看、試倚蓬窓聽疎密、布袍沾盡不知寒、

竹　明吳　寬

種竹能招鳳鳥來、月明淸影拂書堆、筍鞭遇石猶斜出、花米逢春莫亂開、此物似賢今合薦、吾家醫俗舊曾栽、若從後圃論高節、梨白桃紅孰取材、

種竹　明文　徵明

分得亭々綠玉枝、雨餘生意滿堦墀、凌霄已展疎々葉、護粉聊營短々籬、肯信移來眞是醉、不愁俗在未能醫、人間此夜頻前席、涼月虛牕更自宜、

五言絕句

賦得臨池竹　唐太　宗

貞條障曲砌、翠葉貫寒霜、拂牖分龍影、臨池待鳳

開、他日會應ニ威鳳至一、莫レ辭公府受ニ塵埃一、

題竹　唐秦韜玉

削玉森々幽思淸、阮家高興尙分明、捲レ簾陰薄漏ニ山色一、欹レ枕韻寒宜ニ雨聲一、斜對ニ酒缸一偏覺レ好、淸籠棋局最多情、却驚九陌輪蹄外、獨有ニ谿煙一數十莖、

竹　唐鄭谷

宜レ煙宜レ雨又宜レ風、拂レ水藏レ郵復間レ松、移得蕭騷從ニ遠寺一、洗來疎淨見ニ前峰一、侵堦蘚拆春芽迸、繞レ徑莎微夏蔭濃、無レ賴杏花多ニ意緖一、數枝穿レ翠好相容、

洗竹　唐王貞白

道院竹繁敎略洗、鳴琴酌レ酒看ニ扶疎一、不レ圖結レ實來ニ雙鳳一、且要ニ長竿一釣ニ巨魚一、錦籜裁冠添ニ散逸一、玉芽修饌稱ニ淸虛一、有時記得三天事、自向琅玕節下書、

題友人庭竹　唐段文珪

叢篁蕭瑟拂ニ淸陰一、貴地栽成碧玉林、盡待ニ花開一添ニ鳳食一、可レ憐風撃伏ニ龍吟一、細竿離立霜文靜、錦籜飄零粉節深、何事子猷偏寄レ賞、此君心似ニ主人心一、

竹　唐韓漑

綠色連レ雲萬葉開、王孫不レ厭滿庭栽、凌レ霜盡節レ無ニ人見一、終日虛心待ニ鳳來一、誰許風流添レ興詠、自憐瀟灑出ニ塵埃一、朱門處々多ニ閒地一、正好移レ陰覆ニ翠苔一、

竹　唐李中

森々移得自ニ山莊一、植向ニ空庭一野興長、便有三好風來ニ枕簟一、更無三閒夢到ニ瀟湘一、簷ニ來砌蘚一經ニ疎雨一、引ニ下谿禽一帶ニ夕陽一、閒約羽人同賞處、安ニ排棋局一就ニ淸涼一、

次韻劉貢父西省種竹　宋蘇軾

要レ知西掖承平事、記取劉郞種竹初、舊德終呼名字外、後生誰續笑談餘、成陰障レ日行當レ見、取筍供庖計已疎、白首林間望ニ天上一、平安時報故人書、

次韻何文縝種竹　宋韓駒

杜陵窮老覓レ榿栽、不レ似何郞種ニ筲材一、三徑莫レ憂荒草合、一樽如下與ニ故人一開上、未レ堪急雨枝々打、便有ニ幽禽日日來一、坐誦東坡食無レ肉、詩腸日午轉飢雷、

移竹　宋劉克莊

借居未レ定先栽レ竹、爲愛疎興聲與ニ薄陰一、一日暫無能鄙客、數竿雖レ小亦蕭森、牕間對了添ニ詩料一、郭外移來費ニ俸金一、自笑明年何處在、虛檐風至且披レ襟、

義師院叢竹　宋郭長倩

南軒移植自西壇、瘦玉亭々十數竿、得レ法未レ應輸ニ老柏一、託レ根兼得レ近ニ幽蘭一、雖レ無ニ穠艷一包ニ春色一、自許貞

古今要覽稿卷第三百八十四

●草木部 竹二十二

○詩二

佩文齋詠物詩選

七言律

竹　唐 崔 涯

領二得谿風一不レ放レ廻、傍窓綠砌徧庭栽、行招二野客一爲二鄰住一、看引二山禽一入レ郭來、幽院獨驚秋氣早、小門深向二綠陰一開、誰憐翠色兼二寒影一、靜落三茶甌與二酒杯一、

和令狐舍人酬峰上人題山欄孤竹　唐 楊 巨 源

滿院氷姿粉籜殘、一莖靑翠近二簾端一、離叢自欲レ親二香火一、抱レ節何妨レ共二歲寒一、能讓二繁聲一任二眞籟一、解將孤影對二芳蘭一、范雲許レ訪西林寺、枝葉須下和二彩鳳一看上、

南庭竹　唐 李 紳

東南舊美凌レ霜操、五月凝陰入レ座寒、煙惹レ翠梢含二玉露一、粉開二春籜一聳二琅玕一、莫レ令三戲馬童兒一見上試引二爲レ龍道士一看、須レ信下結レ根香實在上、鳳々終擬下二雲端一、

鄰人自金仙觀移竹　唐 李 遠

移居新竹巳堪レ看、劚三破莓苔一得二幾竿一、圓節不レ敎レ傷二粉籜一、低枝猶擬拂二霜壇一、牆頭枝動和レ煙綠、枕上風來送二夜寒一、第一莫レ敎漁父見、且從蕭颯滿二朱欄一、

題新竹　唐 方 干

靑苔劚破植二貞堅一、細碧竿排鬱眼鮮、小鳳々聲吹二嫩葉一、短蛟龍尾裊二輕煙一、節環膩色端匀粉、根稜秋光暗長鞭、怪得入門肌骨冷、綴風粘月滿二庭前一、

越州使院竹　方 干

莫レ見凌風飄粉籜、須レ知礙石作二盤根一、細看枝上蟬吟處、猶是筍時蟲蝕痕、月送二綠陰一斜上レ砌、露含二寒色一濕遮レ門、列仙終日逍遙地、鳥雀潛來不二敢喧一、

竹　唐 羅 鄴

翠葉纔分細々枝、淸陰猶未レ上二階墀一、蕙蘭雖レ許二相依日一、桃李還應レ笑二後時一、抱節不レ爲二霜雪改一、成林終與二鳳凰一期、渭濱若更徵二賢相一、好作二漁竿一繫二釣絲一、

新竹　唐 薛 能

柳營茅土倦二麤材一、因向二山家一乞レ翠栽、淸露便敎終夜滴、好風疑是故園來、欄邊匠去朱猶濕、溉後虫浮穴暗

迥去侵花地、斜來破二蘚牆一、籜乾猶抱レ翠、粉膩若二塗粧一、逕曲莖難レ數、陰疎葉未レ長、嬾嫌吟客倚、甘畏二夏蟲傷一、映レ水如二爭立一、當レ軒自著行、北亭樽酒興、還爲二此君一狂、

間居日清淨、修竹自檀欒、嫩節留ニ餘籜一、新叢出ニ舊闌一、細枝風響亂、疎影月光寒、樂府裁ニ龍笛一、漁家伐ニ釣竿一、何如道門裏、青翠拂ニ仙壇一、

同郭參謀題崔僕射淮南節度使廳前竹　唐　劉長卿

昔種ニ梁王苑一、今移ニ漢將壇一、蒙籠低レ冕過、翠青捲レ簾看、得レ地移レ根遠、經レ霜抱レ節難、開花成ニ鳳實一、嫩筍長ニ魚竿一、藹々軍容靜、蕭々郡宇寬、細音和レ角暮、疎影上レ門寒、湘浦何年變、山陽幾處殘、不レ知軒屏側、歳晩對ニ袁安一、

賦得竹箭有筍　唐　席夔

共愛東南美、青々歎有レ筍、貞姿衆木異、秀色四時均、枝葉當レ無レ改、風霜豈憚レ頻、虛心如レ待レ物、勁節自留レ春、鮮潤期ニ捿鳳一、嬋娟可レ並レ人、待看初籜卷、粉澤更宜レ新、

杜中丞書院新移ニ小竹一　唐　王建

此地本無レ竹、遠從ニ山寺一移、經レ年求ニ養法一、隔レ日記ニ澆時一、嫩綠卷ニ新葉一、殘黃收ニ故技一、色驚寒不レ動、聲與レ靜相宜、愛護出ニ常數一、稀稠看ニ自知一、貧家綠未レ有、客散獨行遲、

題ニ盧秘書夏日新栽レ竹二十韻　唐　白居易

湘竹初封植、盧生此考槃、久持ニ霜節苦一、新託ニ露根難一、等度須當砌、疎稠要滿欄、買憐分ニ薄俸一、栽稱作ニ閒官一、葉剪藍羅碎、莖抽ニ玉琯端一、幾聲清淅瀝、一簇綠檀欒、未レ夜青嵐入、先秋白露團、拂レ肩搖ニ翡翠一、熨レ手弄ニ琅玕一、韻透ニ窗風起一、陰鋪ニ砌月殘一、炎天聞覺レ冷、窄地見疑寬、梢動勝ニ搖扇一、枝低好ニ桂冠一、碧籠煙羃々、珠灑雨珊々、晚籜晴雲展、陰牙蟄虺蟠、愛從抽ニ馬策一、惜未レ截ニ魚竿一、松韻徒煩レ聽、桃夭不レ足レ觀、梁慚當家杏、臺陋本司蘭、撑撥詩人興、勾牽酒客歡、靜連ニ盧簟滑一、涼拂ニ葛衣單一、豈止消時暑、應三能保ニ歲寒一、莫レ同ニ凡草木一、一種夏中看、

賦得震爲蒼筤竹　唐　朱慶餘

爲レ擢東方秀、蕭然異衆筍、青葱纔映レ粉、蒙密正含レ春、嫩擇霑ニ微雨一、幽根絕ニ細塵一、乍憐分ニ徑小一、偏覺帶レ煙新、結實皆留レ鳳、垂陰似レ庇レ人、願爲レ竿在レ手、深水釣ニ頹鱗一、

新竹　唐　李建勳

裊々薰風軟、娟々湛ニ露光一、參差仙子杖、迤邐羽林槍、

偶自山僧隱、移歸傍二砌栽一、好風終日起、幽鳥有二時來一、篇月牽二詩興一、籠煙伴二酒杯一、南窓睡輕起、蕭颯雨聲廻、

新竹　唐 張 蠙

新鞭暗入レ庭、初長兩三莖、不二是他山少一、無二如レ此地生一、垂梢叢上出、柔葉箨間成、何用高唐峽、風枝掃レ月明、

賦レ竹　南唐 孫 岘

萬物中瀟灑、修篁獨逸レ群、貞姿曾冒レ雪、高節欲レ凌レ雲、細韻風初發、濃煙日正曛、因レ題偏惜レ別、不レ可二暫無一レ君、

和謝仲弓廷評栽竹　宋 梅 堯 臣

移得二谿邊翠一、來爲二庭下陰一、惜レ根存二舊土一、帶レ筍助二新林一、暗換蕭々葉、知虛寸々心、東風莫二搖撼一、培擁未レ應レ深、

次韻子由綠筠堂　宋 蘇 軾

愛レ竹能延レ客、求レ詩剩二桂牆一、風梢千纛亂、月影萬夫長、谷鳥驚二棋響一、山蜂識二酒香一、只應三陶靖節、會聽二北牕涼一、

對レ竹　元 黃 庚

門對二南鄰竹一、青々玉萬竿、雖レ然無二地種一、且得隔籬者、露葉晴猶濕、風枝夏亦寒、但教休二剪伐一、日用報二平安一、

寄題竹軒　元 杜 本

綠竹猗々處、華軒楚々暮、暮留雛鳳宿、曉聽蟄龍吟、月進二牕櫺影一、雲移二几席陰一、居然淇澳趣、莫レ使下俗塵侵上、

盆竹　元 僧 善 住

瓦缶不レ多土、娟々枝葉蕃、豈知二公鳳尾一、元是古龍孫、蒼雪灑二禪榻一、細香浮二酒尊一、王猷來レ此見、應三亦爲二銷魂一、

竹戶　明 楊 愼

竹戶少二塵埃一、濃陰欝不レ開、靜聞二淸露墜一、涼送二好風來一、鳥下彈二瓊粉一、蟲行篆二紫苔一、無三人共欣賞一、坐嘯獨悠哉、

竹亭　明 僧 德 祥

滿園惟種竹、々裏置二幽亭一、犬吠靑松路、人來白鷺汀、花溝安二釣艇一、蕉地著二茶餅一、老耳思二鳴鳳一、何常借二比聽一、

五言排律

沈十四拾遺新竹生讀經處同諸公之作　唐 王 維

清切紫庭垂、葳蕤防㆑露枝、色無元月變、聲有惠風吹、高節人相重、貞心世所㆑知、鳳々佳可㆑食、一去一來儀、

嚴鄭公宅同詠竹　唐杜　甫

綠竹半含㆑籜、新梢纔出㆑牆、色侵㆓書幌㆒晚、陰過㆓酒樽㆒涼、雨洗娟々淨、風吹細々香、但令㆑無㆓翦代㆒、會見拂㆑雲長、

和徐侍郎中書叢條韻　唐蔣　渙

中禁夕沈々、幽篁別作㆑林、色連㆓雞樹㆒近、影落㆓鳳池㆒深、爲重凌㆑霜節、能虛應㆑物心、年々承㆓雨露㆒、長對㆓紫庭陰㆒、

和㆓王相公㆒題㆓中書叢竹㆒寄㆓上元相公㆒　唐郎　士元

多時仙徑裏、色並翠琅玕、幽意含㆓煙月㆒、清陰庇㆓蕙蘭㆒、枝繁分㆑露重、葉老愛㆑天寒、竟日雙鸞止、孤吟爲一看、

池上竹　唐揚　巨原

一叢嬋娟色、四面清冷波、氣潤晚煙重、光閒秋露多、翠筠入㆓疎柳㆒、清影拂㆓圓荷㆒、歲晏琅玕實、心期有㆓鳳過㆒、

新竹　唐元　稹

新皇纔解㆑籜、寒色已青葱、冉々偏凝㆑粉、蕭々漸引㆑風、扶疎多透日、寥落未㆑成㆑叢、唯有㆓團々節㆒、堅貞大小同、

題㆓劉秀才新竹㆒　唐杜　牧

數莖幽玉色、曉夕翠煙分、聲破㆓寒牕夢㆒、根穿㆓綠蘚紋㆒、漸籠當檻日、欲㆑礙入㆑簾雲、不㆓是山陰客㆒、何人愛㆓此君㆒、

栽㆑竹　杜　牧

本因㆑遮㆑日種、却似爲谿移、歷々羽林影、疎々煙露姿、蕭騷寒雨夜、敲劼晚風時、故國何年到、塵冠桂一枝

竹逕　杜　牧

盤逕入依々、旋驚幽鳥飛、寺㆓多苔色古㆒、踏㆓碎籜㆒聲微、鞭節橫妨㆑戶、枝梢動拂㆑衣、前谿聞㆓到處㆒、應接釣㆑魚磯、

新栽竹　唐杜　荀鶴

斷破莓苔地、因㆓栽十數莖㆒、牕風從㆑此冷、詩思當㆑時清、酒入㆓杯中影㆒、棋添㆓局上聲㆒、不㆑同㆓桃與㆑李、瀟灑伴㆓書生㆒、

庭竹　南李　咸用

嫩綠與㆓老碧㆒、森然庭砌中、坐消㆓三伏景㆒、吟起數竿風、葉影重還密、梢聲遠或通、更期春共看、桃映小花紅、

庭竹　唐李　中

レ貧、但憂ニ積雨霧一、日暴少ニ精神一、終然勤ニ灌漑一、枝葉還如レ新、因レ玆悟爲レ學、黽勉在ニ斯晨一、

七言古附長短句

賦得堦前嫩竹　　陳張正見

翠竹梢雲自結叢、輕花嫩筍欲レ凌レ空、砌曲橫レ枝屢解レ籜、堦前疎葉强來風、欲レ知抱レ節成レ龍處、當ニ於山路葛陂中一、

綠竹引　　唐宋之問

靑谿綠潭々水側、修竹嬋娟同一色、徒生仙實鳳不レ遊、老向ニ空山一人詎識、妙年秉レ願逃ニ俗紛一、歸臥ニ嵩岳一弄ニ白雲一、含レ情傲睨慰ニ心目一、何可ニ一月無ニ此君一、

竹一字至七字○一字可疑　　唐張南史

竹々被山連谷出、東南殊草木葉細、枝勁霜停レ露宿、成レ林處々雲抽レ筍、年々玉天風乍起、爭韻池水相涵更綠、却尋庾信小園中、閒對ニ數竿一心自足、

刑部看竹郊孟郊體　　宋歐陽修

花姸兒女姿、開落一何速、竹比ニ君子德一、猗々寒更綠、京師多ニ名園一、車馬紛ニ馳逐一、春風紅紫時、見レ此蒼翠玉、凌亂迸ニ靑苔一、蕭疎拂ニ華屋一、森々日影閒、濯々生意足、幸此接ニ淸賞一、寧辭薦ニ芳醁一、黃昏人去鎖ニ深廊一、枝上月明春鳥宿、

野竹　　元吳鎭

野竹野竹絕可レ愛、枝葉扶疎有ニ眞態一、生平素守遠ニ荊榛一、走壁懸厓穿ニ石罅一、虛心抱レ節山之阿、淸風白月聊婆娑、寒梢千尺將如レ何、渭川淇澳風煙多

畫竹　　明吳鎭

與可畫レ竹不レ見レ竹、東坡作レ詩忘ニ此詩一、高麗老繭氷雪古、戲寫歲寒巖壑姿、紛々蒼霰落碧篠、謖々好風扶ニ舊枝一、猙獰頭角易ニ變化一、細聽夜深雷雨時、

綠筠軒爲姚宰作　　明姚執

綠筠隱々翳ニ牕戶一、此是姚侯讀書處、搖空翡翠晚宜レ人、食レ實鸞鳳曉相語、稚子牽レ衣惜ニ春露一、候卒編レ籬護ニ秋雨一、何當便棄ニ人間事一、抱レ琴走覓ニ湖山一住、

過ニ華端叔草堂一寫ニ晴竹於壁上一　　明王紱

我愛君家遠ニ城郭一、遶レ擔竹色侵ニ簾幙一、醉中揮レ翰寫ニ晴梢一、湖雲一剪春陰薄、看來頓覺風氣淸、耳邊恍若レ聞ニ秋聲一、嘯歌到レ晚不ニ歸去一、高ニ臥翠陰一呼ニ月明一、

五言律

和ニ黃門盧侍御詠一レ竹　　唐張九齡

有二鮮妍一修莖無二擁腫一節高迷二玉簇一籜綴疑二花捧一詎必太山根、本自仙壇種、誰令レ植二幽壤一復此依間冗、居然霄漢姿、坐受二藩籬壅一噪集二鸜鵒鳥一炎昏繁二蠛蠓一未レ遭二伶倫聽一非レ安子猷寵、威鳳來有レ時、虚心豈無レ奉、

新竹　唐陸龜蒙

別隝破二苔蘚一嚴城樹軒楹、恭聞稟二璇璣一化質離二青冥一色可レ定二難頸一實堪レ招二鳳翎一立窺二五嶺秀一坐對二三都屏一晴月窈窕入、曙煙霏微生、昔者尙二借宅一况來二處賓庭一金罇縱傾倒、碧露還鮮醒、若非レ抱二苦節一何以偶二惟馨一徐觀稱龍出、更賦錦苞零、

新竹　唐皮日休

笠澤多二異竹一移レ之植二後楹一一架三百本、綠沈森冥々、圓緊珊瑚節、鈐利翦翡翠、儼若二青帝伏一矗如二紫姑屏一械々微風度、漠々輕靄生、如三神語二鈞天一似三樂奏二洞庭一一瓻九藏冷、再開百骸醒、有レ根可二以執一有レ覆可二以馨一願稟二君子操一不二敢先彫零一

寒竹　唐僧皎然

袅々孤生竹、獨立山中雪、蒼翠搖二勁風一嬋娟帶二寒月一狂花不二相似一還共凌レ冬發、

竹軒　宋司馬光

玆軒最瀟落、歷々種二琅玕一正晝薄雲稀、蕭々風雨寒、翠陰涼宴坐、疎韻成二淸歡一錦籜栽二夏扇一玉筍供二春盤一晴蝸潛二葉底一暝雀投二林端一幽興遇レ物愜、高懷隨レ處安、且免一日無、何須千頃寬、

新竹　宋朱子

春雷殷二檐際一幽草齊二發生一我種南窓竹、戢々已抽レ萌、坐獲幽林賞、端居無二俗情一

風竹如水聲　金蔡珪

好竹風淅々、流水聲冷々、吾廬兼有レ此、要レ是佳二友生一北牕午夢斷、冷簟無二飛蠅一端疑故人至、喚作寒泉鳴、攬レ衣起徘徊、自笑還自驚、無三須問二形似一自可レ名二雙淸一

題朱邸竹木　元虞集

猗々淇園竹、結根盤石安、枝幹相扶持、風雨不レ可レ干、其實鳳所レ食、君子思二保完一恒恐二聲影疎一蕭條霜露寒、金玉愼二高節一千載承二淸歡一

題竹　明吳寬

脩然數君子、落々但長身、東家每借看、步去不レ嫌レ頻、移栽幸許レ我、已自前年春、自我得二此輩一園居豈爲

新栽竹　唐白居易

佐邑意不適、閉門秋草生、何以娛二野性一、種レ竹百餘莖、見此谿上色、憶得山中情、有レ時公事暇、盡日繞レ欄行、勿レ言根未レ固、勿レ言陰未レ成、已覺庭宇內、稍々有二餘清一、最愛近レ牕臥、秋風枝有レ聲、

酬下元九對二新栽竹一有レ懷見上レ寄　白居易

昔我十年前、與レ君始相識、會將二秋竹心一、風霜侵不レ得、始嫌梧桐樹、秋至先改レ色、不レ愛楊柳枝、春來軟無レ力、憐君別レ我後、見レ竹長相憶、常欲レ在二眼前一、故栽二庭戶側一、分レ手今何處、君南我在レ此、吟二我贈レ君詩一、對レ之心惻々、

題二小橋前新竹一招レ客　白居易

雁齒小紅橋、垂檐低二白屋一、橋前何所有、苒々新生竹、皮開坼二褐錦一、節露二青抽玉一、筠翠如レ可レ飡、粉霜不レ忍レ觸、閒吟聲未レ已、幽翫心難レ足、管領好風煙、輕欺凡草木、誰能有レ月夜、伴二我林中宿一、爲レ君傾二一杯一、狂歌竹枝曲、

東樓竹　白居易

瀟灑城東樓、遶レ樓多二修竹一、森然一萬竿、白粉封二青玉一、卷レ簾睡初覺、攲レ枕看未レ足、影轉色入レ樓、牀席生二浮綠一、空城絕二賓客一、向レ夕彌幽獨、樓上夜不レ歸、此君留レ我宿、

竹窓　白居易

常愛輞川寺、竹窓東北廊、一別十餘載、見レ竹未二曾忘一、今春二月初、卜居在二新昌一、未レ暇レ作二廐庫一、且先營二一堂一、開レ牕不レ糊レ紙、種レ竹不レ依レ行、意取北檐下、窓與レ竹相當、遶レ屋聲淅々、逼レ人色蒼々、煙通檐靄氣、月透玲瓏光、是時三伏天、天氣熱如レ湯、獨此竹牕下、朝廻解二衣裳一、輕紗一幅巾、小簟六尺牀、無レ客盡日靜、有レ風終夜涼、乃知前古人、言事頗諳詳、淸風北牕臥、可三以傲二義皇一、

郵竹　唐元稹

庭有二肅々竹一、門有二闐々騎一、囂靜本殊途、因依偶同寄、亭々乍干レ雲、嫋々亦垂レ地、人有レ異二我心一、我無レ異二人意一、

寺院新竹　元稹

寶地琉璃坼、紫苞琅玕踊、亭々巧二於削一、一々大如レ拱、冰碧林外寒、峰巒眼前聳、槎枒矛戟合、屹佐龍蛇動、煙泛翠光流、歲餘霜彩重、風朝竿籟過、雨夜鬼神恐、佳色

懷風枝轉弱、防レ露影逾濃、既來丹穴鳳、還作二葛陂龍一、

賦得臨池竹應制　唐虞世南

葱翠梢雲質、垂彩映二清池一、波泛含レ風影、流搖防レ露枝、龍鱗漾二嶰谷一、鳳翅拂二漣漪一、欲レ識凌冬性、惟有二歲寒知一、

與東方左史虬修竹篇　唐陳子昂

龍種生二南岳一、孤翠鬱亭々、峰嶺上二崇崒一、煙雨下二微冥一、夜聞二鼯鼠叫一、晝聒二泉壑聲一、春風正澹蕩、白露已清泠、哀響激金奏、密色滋玉英、歲寒霜雪苦、含彩獨青々、豈不レ厭二凝冽一、羞比二春木榮一、春木有二榮歇一、此節無二彫零一、始願與二金石一、終古保二堅貞一、不レ意伶倫子、吹レ之學二鳳鳴一、遂偶雲和瑟、張樂奏二天庭一、妙曲方二千變一、蕭韶亦九成、信蒙雕斲美、常願レ事二仙靈一、驅馳翠虬駕、伊鬱紫鸞笙、結レ交嬴臺女、吟弄昇レ天行、攜レ手登二白日一、遠遊戲二赤城一、低昂玄鶴舞、斷續彩雲生、永隨二衆仙一逝、三山遊二玉京一、

慈姥竹　唐李白

野竹攢レ石生、蒼煙映二江島一、翠色落レ波深、虛聲帶レ寒早、龍吟曾未レ聽、鳳曲吹應レ好、不レ覺蒲柳凋、貞心常自保、

對新篁　唐韋應物

新綠苞初解、嫩氣筍猶香、含レ露漸舒葉、抽叢梢自長、清晨止二亭下一、獨愛二此幽篁一、

顏侍御廳叢篁詠送薛存誠　唐盧綸

玉幹百餘莖、生君此堂側、拂レ簾寒雨響、擁レ砌深谿色、何事鳳々雛、茲焉理歸翼、

竹　唐張南史

竹價長東南、別種殊草木、成レ林處々雲、抽レ筍年々玉、天風起成レ韻、池水涵更綠、間臨庾信園、數竿心自足、

竹　唐戴叔倫

卷籜正離披、新枝復蒙レ密、脩々月下聞、裊々林際出、豈獨對二芳菲一、終年色如レ一、

竹雞　唐李益

訪レ竹越二雲崖一、即林若谿絕、寧知修幹下、漠々秋苔潔、清光溢二空曲一、茂色臨二幽澈一、采摘愧二芳鮮一、奉レ君歲暮節、

竹逕偶作　唐權德輿

退朝此休々、閉レ戶無二塵氛一、支レ策入二幽逕一、清風隨二此君一、琴觴恣二栽仰一、蘭蕙相氤氳、幽賞方自適、林西煙景曛、

古今要覧稿卷第三百八十三

●草木部竹二十一

○詩一

佩文齋詠物詩選

五言古

詠竹　齊 謝朓

窻前一叢竹、青翠獨言奇、南條交ニ北葉一、新筍雜ニ故枝一、月光疎已密、風來起復垂、青扈飛不レ礙、黃口得ニ相窺一、但恨從レ風籜、根株長別離、

秋竹曲　謝朓

㜲娟綺牕北、結レ根未ニ參差一、從レ風既裊々、映レ日頗離々、欲レ求ニ棗下吹一、別有ニ江南枝一、但能凌ニ白雪一、貞心蔭ニ曲池一、

賦得竹　梁 元帝

嶰谷管新抽、淇園節復修、作レ龍還ニ葛水一、爲レ馬向ニ并州一、柯亭臨ニ絕澗一、桃枝夾ニ細流一、冠學ニ芙蓉勢一、花堪ニ威鳳遊一、卭王若レ有獻、張騫應レ拜レ侯、

擔前竹　梁 沈約

萌開籜已垂、結レ葉始成レ枝、繁蔭上蔚々、促節下離々、風動露滴瀝、月照影參差、得レ生君戸牖、不レ願夾華池、

綠竹　梁 吳均

嬋娟鄣綺殿、繞弱拂ニ春漪一、何當レ逢ニ採拾一、爲レ君笙與レ篪、

和ニ新浦侯一齋前竹　梁 江洪

本生ニ出高嶺一、移賞入ニ庭蹊一、擅欒拂ニ桂橑一、蓊葱傍ニ朱閨一、夜條風折々、曉葉露凄々、籜紫春鶯思、筠綠寒蛩啼、不レ惜ニ凌雲茂一、遂聽ニ羣雀棲一、願抽ニ一莖實一、試看ニ翔鳳來一、

賦得山中翠竹　陳 張正見

修竹映レ巖垂、來風異夾レ池、複澗藏ニ高節一、重林隱ニ勁枝一、雲生龍未レ上、花落鳳將レ移、莫レ言捿ニ嶰谷一、伶倫不ニ復吹一、

賦得夾池修竹　陳 賀循

綠竹影參差、葳蕤帶曲池、逢レ秋葉不レ落、經レ寒色詎移、來風韻ニ晚徑一、集鳳動ニ春枝一、所レ欣高蹈客、未レ待ニ伶倫吹一、

詠竹　北齊 蕭放

窓打雨は聞もわかれす

竹爲師といふ事を

九重や庭の河竹かはらぬは　後小松院御製
代々の跡あるしるへとそ思ふ

禁中竹を

昔思ふこゝろをかはせ河竹の　權中納言雅緣
三代にあひぬる身はふりぬとも

百首歌奉し時

代々經ぬる末葉なり共呉竹の　二品法親王道朝
園生の色はかはらずもかな

永和百首歌に

風そよく庭の呉竹よもすから　崇賢門院
みし世にかよふ夢たにもなし

里竹といふ事をよませ給うける

いつまてか里の名にあふの呉竹　崇光院御製
ふしみにのみも我世つくさむ

おなじ心を　八條入道前內大臣

忘れすよ伏見の里のはる〳〵と
みゆきに馴したけの下道

弘長百首歌に竹

呉竹の身のうきふしの數々に　前大納言爲氏
我世のほとをおもひしるかな

題しらず　後押小路前內大臣

うきふしのしけき身なれは影なひく
名さへかひなき窓の呉竹

呉竹の葉に置露や世中の　前大僧正禪守
うきふし玄けきなみた成らん

編修兼校正　岡村尙鎌平遜
校正兼淨寫　皃山諦之助平紀言
伊庭熊作源秀正
校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春
校正兼淨寫　小林好太郎源直温
校正兼鈔錄　屋代次郎源通賢
編修兼校正　池野貞一郎源好謙
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
校正兼淨寫　大河戶晉平藤原儀成
校正兼鈔錄　榊原猪右衞門源長行
編修兼圖畫　岩崎源三源常正
總判　屋代大郎源弘賢

百首歌奉し時庭竹
家の風猶吹絶す十代あまり　右大臣
またかけ靡く庭の呉竹
竹をよめる
呉竹の四代の君にはつかへきぬ　正三位有範
おもひ出殘る一ふしもかな
むなしきを友とはすれと呉竹の　前中納言爲相
うきふし計身にそ數そふ
新後拾遺和歌集巻第一春歌上
嘉元々年後宇多院に百首歌奉ける時
後照念院關白太政大臣
呉竹のねくらかたよる夕風に
聲さへなひく春のうくひす
又巻第八雜秋歌
百首御歌に時雨を
呉竹の緣は時もかはらねは　土御門院御製
時雨降にしまかきともなし
だいしらず
木にもあらす草にもあらて咲花や　紀親文朝臣
竹のさ枝にふれる白雪

又巻第二十慶賀歌
花園院位におはしましける時大なるたかんなを
奉らせ給とてつゝみ紙に書付させ給うける
百敷に緣そふへき呉竹の　後伏見院御製
かはらぬかけは代々久しかれ
御返し
もゝしきに移し植てそ色そはん　花園院御製
はこやの山の千世の呉竹
新續古今和歌集巻第十二戀歌二
寄竹戀を
うきふしに又かへるともせめてたゝ　讀人しらず
一夜は靡けいさゝむら竹
又巻第十七雜歌上
康安二年春の頃木幡にすみ侍て歌合しけるに
竹間鶯といふ事を
呉竹のその世の春はよそなから　二品法親王覺譽
昔忘れぬ鶯のこゑ
又巻第十九同歌下
おなじ百首歌に庭竹を
呉竹のよとこね近き風の音に　權大納言爲遠

呉竹の園生の道やまよはまし　忠房親王
かしこき君か御代にあはすは

百首歌奉りし時庭竹

軒近き竹の園生の世々の風　一品法親王尊胤
つらなる枝に吹そ傳へん

題しらず　二品法親王承覺

つたへきて世々にかはらぬ竹のその
身にうきふしを殘さすもかな

又卷第二十慶賀歌

建武二年正月十三日内裏にて竹有二佳色一といへる事を講ぜられけるに

百敷や生そふ竹の數ごとに　等持院贈左大臣
かはらぬ千世の色そみえける

式部卿久明親王家にて竹不レ改レ色といふ事をよみ侍りける

萬代も色はかはらし此君と　平貞時朝臣
あふけはたかき園のくれ竹

文保百首歌奉ける時

君かため千世のためしを求子の　前中納言實任
かざしに折し庭の呉竹

百首歌奉りし時庭竹

九代に二代かさねて河竹の　按察使實繼
おなしみかけにあふかかしこさ

新拾遺和歌集卷第七賀歌

百首歌たてまつりし時庭竹

紫の庭にみとりの色そへて　前關白左大臣九條
行末とほき千世の呉たけ

正和五年内裏造營の比竹臺のくれ竹を尋られけるを奉るとて結付ける

世々をへしみかきの竹の種なれは　後照念院關白太政大臣
末も千年の色そ添へき

又卷第十五戀歌五

中務卿宗尊親王家百首歌に戀

しらせはや竹の籬にはふ蔦の　藤原基隆
下にうらむるふしのしけさを

又卷第十九雜歌中

世をなけかせ給うて　三條院御製

つく〳〵とうき世にむせふ河竹の
つれなき色はやる方もなし

山陰や竹のあなたに入日落て　伏見院御歌
林の鳥の聲そあらそふ

又巻第二十賀歌

建武三年中殿にて竹有二佳色一といふ事を講せられけるに

百敷や生そふ竹の數毎に　前大納言尊氏
かはらぬ千世の色そ見えける

新千載和歌集巻第一春歌上

元亨四年二月後宇多院に十首歌奉ける　時聞レ鶯といへる事を　後照念院關白太政大臣

呉竹のよゝにつたへて鶯の
高きにうつる聲そなれぬる

又巻第四秋歌上

秋たつ日よませ給うける

風渡る軒端にそよく呉竹の　院御製
一夜のうちに秋そ來にける

月前竹風を　後鳥羽院宮内卿

色かへぬ竹の葉しろく月さえて
積らぬ雪を拂ふ秋かせ

呉竹の葉分の露にさそはれて　前僧正道性
月もたまらぬ秋風そ吹く

又巻第六冬歌

題しらず

呉竹の葉分の風ははらへとも　藤原雅朝朝臣
積りにけりな雪のした折

又巻第十七雑歌中

題しらず

我みても窓の呉竹ふりにけり　靜仁法親王
しらぬ昔をいく世へぬらん

貞和二年百首歌奉りし時

植置て心むなしき我友に　入道前太政大臣
なかきよ契る窓のくれたけ

述懷歌とてよめる

里つゝき竹の園生の近けれは　土御門院小宰相
ふきふししけき身をやかこたん

入道二品親王尊圓家に百首歌よませ侍ける時竹を

さかえ行竹の園生のなかりせは　法印淨辨
いかなるかけに身をかくさまし

文保百首歌に

心老ニ歲寒一、百草千花盡零落、請君來向ニ此中一看、

丹陽觀竹自宮中移賜　金李獻能

素士如林待ニ紫靑一、紫靑新許住ニ蓬瀛一、娟々粉節霜筠出、矗々煙梢玉削成、福地根莖蒙ニ化育一、中天雨露借ニ恩榮一、緣章封事朝來奏、又聽風前彩鳳鳴、

竹陰　元白斑

占斷人間瀟灑地、全身水墨畫ニ篔簹一、非レ煙非レ霧一林碧、似レ雨似レ晴三經凉、翠袖佳人黯ニ空谷一、白鬚道士隱ニ南塘一、數竿醉日君須レ記、移向ニ西軒一補ニ夕陽一

賦文子方家篔簹竹影　元虞集

數箇篔簹一小亭、南窓承日映ニ寒靑一、水精簾裏珊瑚樹、雲母屛前翡翠翎、却憂微風動ニ肅瑟一、翻疑薄暮倚ニ娉婷一、憑レ君縱有ニ鵞谿絹一、莫レ與空山結ニ定形一、

種竹　元洪希文

移得霜根趂レ雨栽、檣陰踏破一方苔、甫能引レ汝淸風到、未レ暇招レ渠俗子來、猿訝下便當ニ書案一立上、鶴知下早避ニ釣船一回上、不レ妨更了ニ歲寒計一、早晚栽レ松兼種レ梅、

居竹軒　元倪瓚

翠竹如レ雲江水春、結レ茅依レ竹住ニ江濱一、堦前迸筍從ニ侵經一、雨後垂陰欲霜レ鄰、映葉黃鸝還自語、傍レ人白鶴亦能馴、遙知靜者忘ニ聲色一、滿屋淸風未レ覺レ貧、

偁心寺看竹　明章敞

山深無數碧琅玕、愛レ靜人來取次看、地匝翠雲侵レ骨冷、經迷ニ蒼雪一蔽レ天寒、風敲ニ玉佩一驚ニ淸夢一、月侵ニ金波一起ニ宿鸞一、我欲ニ平分一借半榻、煩レ君日々報ニ平安一、

風雨種竹　明李東陽

石欄沙露雨聲乾、爲欠ニ肅々一兩竿一、深帶土膏從レ地底、嗔移茅屋過レ江干、方ニ於辰日一依レ時種、影待ニ晴天一拂レ翠看、試倚ニ蓬窓一聽ニ疎密一、布袍沾盡不レ知レ寒、

竹　明吳寬

種レ竹能招ニ鳳鳥一來、月明淸影拂ニ書堆一、筍鞭遇レ石猶斜出、花米逢レ春莫ニ亂開一、此物似レ賢今合レ薦、吾家醫俗舊曾裁、若從ニ後圃一論ニ高節一、梨白桃紅孰取レ材、

種竹　明文徵明

分得亭々綠玉枝、雨餘生意滿ニ堦墀一、凌霄已展疎々葉、護粉聊營短々籬、肯信移來眞是醉、不レ愁俗在未ニ能醫一、人間此夜頻前席、凉月虛牕更自宜、

五言絕句

賦得臨池竹　唐太宗

貞條障曲砌、翠葉貫ニ寒霜一、拂レ牖分ニ龍影一、臨レ池待ニ鳳

開、他日會應二威鳳至一、莫レ辭公府受二塵埃一、

題竹　　　　唐秦韜玉

削玉森々幽思淸、院家高興尚分明、捲レ簾陰薄漏二山
色一、欹レ枕韻寒宜二雨聲一、斜對二酒缸一偏覺レ好、淸籠棋局
最多情、却驚九陌輪蹄外、獨有二谿煙一數十莖、

竹　　　　唐鄭谷

宜レ煙宜レ雨又宜レ風、拂レ水藏レ郵復間レ松、移得蕭騷
從二遠寺一、洗來疎淨見二前峰一、侵堦蘚拆春芽迸、繞レ徑莎
微夏蔭濃、無レ賴杏花多二意緖一、數枝穿レ翠好相容、

洗竹　　　　唐王貞白

道院竹繁敎略洗、鳴琴酌レ酒看二扶疎一、不レ圖結レ實來二
雙鳳一、且要二長竿一釣二巨魚一、錦籜裁冠添二散逸一、玉芽修
饌稱二淸虛一、有時記得三天事、自向琅玕節下書、

題友人庭竹　　　　唐段文珪

叢篁蕭瑟拂二淸陰一、貴地栽成碧玉林、盡待二花開一添二鳳
食一、可レ憐風擊伏二龍吟一、細竿離立霜文靜、錦籜飄零粉
節深、何事子猷偏寄レ賞、此君心似二主人心一、

竹　　　　唐韓溉

綠色連レ雲萬葉開、王孫不レ厭滿庭栽、凌レ霜盡節レ無二
人見一、終日虛心待二鳳來一、誰許風流添レ興詠、自憐瀟灑

出二塵埃一、朱門處々多二閒地一、正好移レ陰覆二翠苔一、

竹　　　　唐李中

森々移得自二山莊一、植向二空庭一野興長、便有三好風來二
枕簟一、更無三閒夢到二瀟湘一、蔭二來砌蘚一經二疎雨一、引二下
谿禽一帶二夕陽一、閒約羽人同賞處、安二排棋局一就二淸涼一、

次韻劉貢父西省種竹　　　　宋蘇軾

要レ知西掖承平事、記取劉郎種竹初、舊德終呼名字外、
後生誰續笑談餘、成陰障レ日行當レ見、取筍供庖計已
疎、白首林間望二天上一、平安時報故人書、

次韻何文縝種竹　　　　宋韓駒

杜陵窮老覓レ榿栽、不レ似何郎種二笛材一、三徑莫レ憂荒草
合、一樽如下與二故人一開上、未レ堪急雨枝々打、便有二幽禽
日日來一、坐誦東坡食無レ肉、詩腸日午轉飢雷、

移竹　　　　宋劉克莊

借居未レ定先栽レ竹、爲愛疎與聲與二薄陰一、一日暫無能
鄙客、數竿雖レ小亦蕭森、牕間對了添二詩料一、郭外移來
費二俸金一、自笑明年何處在、虛檐風至且披レ襟、

義師院叢竹　　　　宋郭長倩

南軒移植自西壇、瘦玉亭々十數竿、得レ法未レ應輸二老
柏一、託レ根兼得レ近二幽蘭一、雖レ無二穠艶一包二春色一、自許貞

古今要覧稿卷第三百八十四

●草木部竹二十二

○詩二

佩文齋詠物詩選

七言律

竹　唐崔涯

領二得谿風一不レ放レ廻、傍窓緣砌徧庭栽、行招二野客一爲二鄰住一、看引二山禽一入レ郭來、幽院獨驚秋氣早、小門深向二綠陰一開、誰憐翠色兼二寒影一、靜落三茶甌與二酒杯一、

和令狐舍人酬峰上人題山欄孤竹　唐楊巨源

滿院氷姿粉籜殘、一莖青翠近二簾端一、離叢自欲レ親二香火一、抱レ節何妨レ共二歲寒一、能讓二繁聲一任二眞籟一、解將孤影對二芳蘭一、范雲許レ訪西林寺、枝葉須下和二彩鳳一看上、

南庭竹　唐李紳

東南舊美凌レ霜操、五月凝陰入レ座寒、煙惹レ翠梢含二玉露一、粉開二春籜一聳二琅玕一、莫レ令三戲馬童兒一見上、試引二爲レ龍道士一看、須レ信下結レ根香實在上、鳳々終擬下二雲端一、

鄰人自金仙觀移竹　唐李遠

移居新竹已堪レ看、刷三破莓苔一得二幾竿一、圓節不レ教レ傷二粉籜一、低枝猶擬レ拂二霜壇一、牆頭枝動和レ煙綠、枕上風來送二夜寒一、第一莫レ教漁父見、且從蕭颯滿二朱欄一、

題新竹　唐方干

青苔劚破植二貞堅一、細碧竿排鬱眼鮮、小鳳々聲吹二嫩葉一、短蛟龍尾褭二輕煙一、節環膩色端匀粉、根稜秋光暗長鞭、怪得入門肌骨冷、綴風粘月滿二庭前一、

越州使院竹　方干

莫レ見凌風飄粉籜、須レ知礙石作二盤根一、細看枝上蟬吟處、猶是笴時蟲蝕痕、月送二綠陰一斜上レ砌、露含二寒色一濕遮レ門、列仙終日逍遙地、鳥雀潛來不二敢喧一、

竹　唐羅鄴

翠葉纔分細々枝、淸陰猶未レ上二堦墀一、蕙蘭雖レ許二相依日一、桃李還應レ笑二後時一、抱節不レ爲二霜雪改一、成林終與二鳳凰一期、渭濱若更徵二賢相一、好作二漁竿一繋二釣絲一、

新竹　唐薛能

柳營茅土倦二麤材一、因向二山家一乞レ翠栽、淸露便教終夜滴、好風疑是故園來、欄邊匠去朱猶濕、溉後虫浮穴暗

迥去侵花地、斜來破ニ蘚牆一、籜乾猶抱レ翠、粉膩若ニ塗粧一、逕曲莖難レ數、陰疎葉未レ長、嬾嫌吟客倚、甘畏ニ夏蟲傷一、映レ水如ニ爭立一、當レ軒自著行、北亭樽酒興、還爲ニ此君一狂、

間居日清淨、修竹自擅欒、嫩節留ニ餘籜一、新叢出ニ舊闌一、細枝風響亂、疎影月光寒、樂府裁ニ龍笛一、漁家伐ニ釣竿一、何如道門裏、青翠拂ニ仙壇一、

同郭參謀題崔僕射淮南節度使廳前竹

唐　劉　長　卿

昔種ニ梁王苑一、今移ニ漢將壇一、蒙籠低レ冕過、翠青捲レ簾看、得レ地移レ根遠、經レ霜抱レ節難、開花成ニ鳳實一、嫩筍長ニ魚竿一、藹々軍容靜、蕭々郡宇寬、細音和レ角暮、疎影上レ門寒、湘浦何年變、山陽幾處殘、不レ知軒屏側、歲晚對ニ袁安一、

賦得竹箭有筠　　唐　席　　夔

共愛東南美、青々歎有レ筠、貞姿衆木異、秀色四時均、枝葉當レ無レ改、風霜豈憚レ頻、虛心如レ待レ物、勁節自留レ春、鮮潤期ニ捿鳳一、嬋娟可レ並レ人、待看初籜卷、粉澤更宜レ新、

杜中亟書院新移ニ小竹一　　唐　王　　建

此地本無レ竹、遠從ニ山寺一移、經レ年求ニ養法一、隔レ日記ニ澆時一、嫩綠卷ニ新葉一、殘黃收ニ故技一、色驚寒不レ動、聲與レ靜相宜、愛護出ニ常數一、稀穊看ニ自知一、貧家綠未レ有、客散獨行遲、

題ニ盧秘書夏日新栽レ竹二十韻

唐　白　居　易

湘竹初封植、盧生此考槃、久持ニ霜節苦一、新託ニ露根難一、等度須當砌、疎稠要滿欄、買隣分ニ薄俸一、栽稱作間官、葉剪藍羅碎、莖抽ニ玉琯端一、幾聲清淅瀝、一簇綠檀欒、未レ夜青嵐入、先秋白露團、拂レ肩搖ニ翡翠一、駮レ手弄ニ琅玕一、韻透牕風起、陰鋪砌月殘、炎天聞覺レ冷、窄地見疑寬、梢動勝ニ搖扇一、枝低好ニ桂冠一、碧籠煙羃々、珠灑雨珊々、晚籜晴雲展、陰牙蟄虺蟠、愛從抽ニ馬策一、惜未レ截ニ魚竿一、松韻徒煩レ聽、桃天不レ足レ觀、梁慚當家杏、臺陋本司蘭、撑撥詩人興、勾牽酒客歡、靜連盧簟滑、涼拂ニ葛衣單一、豈止消時暑、應ニ能保ニ歲寒一、莫レ同ニ凡草木一、一種夏中看、

賦得震爲蒼筤竹　　唐　朱　慶　餘

爲レ擢東方秀、蕭然異衆筠、青葱纔映レ粉、蒙密正含レ春、嫩籜霑ニ微雨一、幽根絕ニ細塵一、乍憐分徑小、偏覺帶レ煙新、結實皆留レ鳳、垂陰似レ庇レ人、願爲レ竿在レ手、深水釣ニ頳鱗一、

新竹　　唐　李　建　勳

裊々薰風軟、娟々湛ニ露光一、參差仙子杖、迤邐羽林槍、

偶自山僧隱、移歸傍二砌栽一、好風終日起、幽鳥有二時來一、篩月牽二詩興一、籠煙伴二酒杯一、南窓睡輕起、蕭颯雨聲廻、

新竹　　唐 張　蠙

新鞭暗入レ庭、初長兩三莖、不二是他山少一、無二如レ此地生一、垂梢叢上出、柔葉籜間成、何用高唐峽、風枝掃レ月明、

賦レ竹　　南唐 孫　峴

萬物中瀟灑、修篁獨逸レ群、貞姿曾冒レ雪、高節欲レ凌レ雲、細韻風初發、濃煙日正曛、因レ題偏惜レ別、不レ可二暫無一レ君、

和謝仲弓廷評栽竹　　宋 梅　堯　臣

移得二谿邊翠一、來爲二庭下陰一、惜レ根存二舊土一、帶レ筍助二新林一、暗換蕭々葉、知虛寸々心、東風莫二搖撼一、培擁未レ應レ深、

次韻子由綠筠堂　　宋 蘇　軾

愛レ竹能延レ客、求レ詩剩二桂牆一、風梢千纛亂、月影萬夫長、谷鳥驚二棋響一、山蜂識二酒香一、只應三陶靖節、會聽二北牕涼一、

對レ竹　　元 黃　庚

門對二南鄰竹一、青々玉萬竿、雖レ然無二地種一、且得隔籬者、露葉晴猶濕、風枝夏亦寒、但敎休二翦伐一、日用報二平安一、

寄題竹軒　　元 杜　本

綠竹脩々處、華軒楚々暮、暮留雛鳳宿、曉聽蟄龍吟、月進二牕檽影一、雲移二几席陰一、居然淇澳趣、莫レ使下俗塵侵上、

盆竹　　元 僧 善　住

瓦缶不レ多土、娟々枝葉蕃、豈知二公鳳尾一、元是古龍孫、蒼雪灑二禪榻一、細香浮二酒尊一、王猷來レ此見、應三亦爲二銷魂一、

竹戶　　明 楊　愼

竹戶少二塵埃一、濃陰欝不レ開、靜聞二淸露墜一、涼送二好風來一、鳥下彈二瓊粉一、蟲行篆二紫苔一、無二人共欣賞一、坐嘯獨悠哉、

竹亭　　明 僧 德　祥

滿園惟種竹、々裏置二幽亭一、犬吠青松路、人來白鷺汀、花潚安二釣艇一、蕉地著二茶缾一、老耳思二鳴鳳一、何常借二比聽一、

五言排律

沈十四拾遺新竹生讀經處同諸公之作　　唐 王　維

清切紫庭垂、葳蕤防レ露枝、色無二元月變、聲有惠風吹、
高節人相重、貞心世所レ知、鳳々佳可レ食、一去一來儀、

嚴鄭公宅同詠竹　唐杜　甫

綠竹半含レ籜、新梢纔出レ牆、色侵二書幌一晚、陰過二酒
樽一涼、雨洗娟々淨、風吹細々香、但令レ無二翦代一、會見
拂レ雲長、

和徐侍郎中書叢篠韻　唐蔣　渙

中禁夕沈々、幽篁別作レ林、色連二雞樹一近、影落二鳳池一
深、爲重凌レ霜節、能虛應レ物心、年々承二雨露一、長對二紫
庭陰一、

和二王相公一題二中書叢竹一寄二上元相公一　唐郎　士元

多時仙徑裏、色並翠琅玕、幽意含二煙月一、清陰芘二蕙蘭一、
枝繁分レ露重、葉老愛レ天寒、竟日雙鸞止、孤吟爲一看、

池上竹　唐楊　巨源

一叢嬋娟色、四面清冷波、氣潤晚煙重、光間秋露多、翠
筠入二疎柳一、清影拂二圓荷一、歲晏琅玕實、心期有二鳳過一、

新竹　唐元　稹

新皇纔解レ籜、寒色已青葱、冉々偏凝レ粉、蕭々漸引
レ風、扶疎多透日、寥落未レ成レ叢、唯有二團々節一、堅貞大
小同、

題二劉秀才新竹一　唐杜　牧

數莖幽玉色、曉夕翠煙分、聲破二寒牕夢一、根穿二綠蘚紋一、
漸籠當檻日、欲レ礙入レ簾雲、不二是山陰客一、何人愛二此
君一、

栽レ竹　杜　牧

本因レ遮レ日種、却似爲二谿移一、歷々羽林影、疎々煙露姿、
蕭騷寒雨夜、敲劼晚風時、故國何年到、塵冠挂一枝

竹逕　杜　牧

盤逕入依々、旋驚幽鳥飛、尋二多苔色古一、踏二碎籜一聲
微、鞭節橫妨レ戶、枝梢動拂レ衣、前谿閒二到處一、應接釣
レ魚磯、

新栽竹　唐杜　荀鶴

斷破莓苔地、因二栽十數莖一、牕風從レ此冷、詩思當レ時
清、酒入二杯中影一、棋添二局上聲一、不レ同二桃與一レ李、瀟灑
伴二書生一、

庭竹　南唐李　咸用

嫩綠與二老碧一、森然庭砌中、坐消二三伏景一、吟起數竿風、
葉影重還密、梢聲遠或通、更期春共看、桃映小花紅、

庭竹　唐李　中

レ貧、但憂ニ積雨霽一、日暴少ニ精神一、終然勤ニ灌漑一、枝葉還如レ新、因レ玆悟爲レ學、黽勉在ニ斯晨一、

七言古附長短句

賦得堦前嫩竹　　陳張　正　見

翠竹梢雲自結叢、輕花嫩筍欲レ凌レ空、砌曲横レ枝屢解レ籜、堦前疎葉强來風、欲レ知抱レ節成レ龍處、當ニ於山路葛陂中一、

綠竹引　　唐宋　之　問

青谿綠潭々水側、修竹嬋娟同一色、徒生仙實鳳不レ遊、老向ニ空山一人詎識、妙年秉レ願逃ニ俗紛一、歸臥ニ嵩岳一弄ニ白雲一、含レ情傲睨慰ニ心目一、何可ニ一月無ニ此君一、

竹 一字至七字 ○ 一字可疑　　唐張　南　史

竹々被山連谷出、東南殊草木葉細、枝勁霜停レ露宿、成レ林處々雲抽レ筍、年々玉天風乍起、爭韻池水相涵更綠、却尋度信小園中、問對ニ數竿一心自足、

刑部看竹郊孟郊體　　宋歐　陽　修

花妍兒女姿、開落一何速、竹比ニ君子德一、猗々寒更綠、京師多ニ名園一、車馬紛ニ馳逐一、春風紅紫時、見レ此蒼翠玉、凌亂迸ニ青苔一、蕭疎拂ニ華屋一、森々日影間、濯々生意足、幸此接ニ清賞一、寧辭薦ニ芳醁一、黃昏人去鎖ニ深廊一、枝上月明春鳥宿、

野竹　　元吳　鎭

野竹野竹絕可レ愛、枝葉扶疎有ニ眞態一、生平素守遠ニ荊榛一、走壁懸崖穿ニ石罅一、虛心抱レ節山之阿、淸風白月聊婆娑、寒梢千尺將如レ何、渭川淇澳風煙多

畫竹　　明吳　鎭

與可畫レ竹不レ見レ竹、東坡作レ詩忘ニ此詩一、高麗老繭氷雪古、戲寫歲寒巖壑姿、紛々蒼霰落碧篠、謖々好風扶ニ舊枝一、猙獰頭角易ニ變化一、細聽夜深雷雨時、

綠筠軒爲姚宰作　　明姚　　執

綠筠隱々翳ニ牕戶一、此是姚侯讀書處、搖空翡翠晚宜レ人、食レ實鸞鳳曉相語、稚子牽レ衣惜ニ春露一、候卒編レ籬護ニ秋雨一、何當便棄ニ人間事一、抱レ琴走覓ニ湖山一住、

過ニ華端叔草堂一寫ニ晴竹於壁上一　　明王　紱

我愛君家遠ニ城郭一、遠レ擔竹色侵ニ簾幙一、醉中揮レ翰寫ニ晴梢一、湖雲一剪春陰薄、看來頓覺風氣淸、耳邊恍若レ聞ニ秋聲一、嘯歌到レ晚不ニ歸去一、高ニ臥翠陰一呼ニ月明一、

五言律

和ニ黃門盧侍御詠レ竹　　唐張　九　齡

有二鮮妍一、修莖無二擁腫一、節高迷二玉簇一、籜綴疑二花捧一、詎必太山根、本自仙壇種、誰令レ植二幽壤一、復此依閒冗、居然霄漢姿、坐受二藩籬壅一、噪集二勸鵾烏一、炎昏繁二蠛蠓一、未レ遭二伶倫聽一、非安子歛寵、威鳳來有レ時、虛心豈無レ奉、

新竹　　唐　陸　龜　蒙

別隝破二苔蘚一、嚴城樹軒楹、恭聞稟璇璣、化質離二靑冥一、色可レ定二雞頸一、實堪レ招二鳳翎一、立窺二五嶺秀一、坐對二三都屏一、晴月窈窕入、曙煙霏微生、昔者尚二借宅一、況來二處賓庭一、金罍縱傾倒、碧露還鮮醒、若非レ抱二苦節一、何以偶二惟馨一、徐觀稚龍出、更賦錦苞零、

新竹　　唐　皮　日　休

笠澤多二異竹一、移レ之植二後楹一、一架三百本一、綠沈森冥々、圓緊珊瑚節、釤利翦翡翠、儼若二靑帝仗一、矗如二紫姑屏一、槭々微風度、漠々輕靄生、如三神語二鈞天一、似三樂奏二洞庭一、一㪷九藏冷、再聞百骸醒、有レ根可二以執一、有レ筱可二以馨一、願稟二君子操一、不三敢先彫零一、

寒竹　　唐　僧　皎　然

袅々孤生竹、獨立山中雪、蒼翠搖二勁風一、嬋娟帶二寒月一、狂花不二相似一、還共凌レ冬發、

竹軒　　宋　司　馬　光

茲軒最瀟落、歷々種二琅玕一、正晝薄雲稀、蕭々風雨寒、翠陰涼宴坐、疎韻成二淸歡一、錦籜栽二夏扇一、玉筍供二春盤一、晴蝸潛二葉底一、暝雀投二林端一、幽興遇レ物愜、高懷隨レ處安、且免一日無、何須千頃寬、

新竹　　宋　朱　子

春雷殷二檐際一、幽草齊二發生一、我種南窻竹、戢々已抽レ萌、坐獲幽林賞、端居無二俗情一、

風竹如水聲　　金　蔡　珪

好竹風淅々、流水聲冷々、吾廬兼有レ此、要レ是佳二友生一、北牕午夢斷、冷簟無二飛蠅一、端疑故人至、喚作寒泉鳴、攬レ衣起徘徊、自笑還自驚、無三須問二形似一、自可レ名二雙淸一、

題朱邸竹木　　元　虞　集

猗々淇園竹、結根盤石安、枝幹相扶持、風雨不レ可レ干、其實鳳所レ食、君子思二保完一、恒恐二聲影疎一、蕭條霜露寒、金玉愼二高節一、千載承二淸歡一、

題竹　　明　吳　寬

脩然數君子、落々但長身、東家每借看、步去不レ嫌レ頻、移栽幸許レ我、已自前年春、自我得二此輩一、園居豈爲

新栽竹　唐白居易

佐邑意不適、閉門秋草生、何以娛ニ野性一、種レ竹百餘莖、見此谿上色、憶得山中情、有レ時公事暇、盡日繞レ欄行、勿レ言根未レ固、勿レ言陰未レ成、已覺庭宇內、稍々有ニ餘清一、最愛近レ牕臥、秋風枝有レ聲、

酬下元九對ニ新栽竹一有レ懷見上レ寄　白居易

昔我十年前、與レ君始相識、曾將ニ秋竹心一、風霜侵不レ得、始嫌梧桐樹、秋至先改レ色、不レ愛楊柳枝、春來軟無レ力、憐君別レ我後、見レ竹長相憶、常欲レ在ニ眼前一、故栽ニ庭戶側一、分レ手今何處、君南我在レ此、吟ニ我贈レ君詩一、對レ之心惻々、

題ニ小橋前新竹一招レ客　白居易

鴈齒小紅橋、垂檐低ニ白屋一、橋前何所有、苒々新生竹、皮開柝ニ褐錦一、節露ニ青抽玉一、筠翠如レ可レ飡、粉霜不レ忍レ觸、閒吟聲未レ已、幽翫心難レ足、管領好風煙、輕欺凡草木、誰能有レ月夜、伴ニ我林中宿一、爲レ君傾ニ一杯一、狂歌竹枝曲、

東樓竹　白居易

瀟灑城東樓、遶レ樓多ニ修竹一、森然一萬竿、白粉封ニ青玉一、卷レ簾睡初覺、攲レ枕看未レ足、影轉色入レ樓、牀席生ニ浮綠一、空城絕ニ賓客一、向レ夕彌幽獨、樓上夜不レ歸、此君留レ我宿、

竹窓　白居易

常愛輞川寺、竹窓東北廊、一別十餘載、見レ竹未ニ曾忘一、今春二月初、卜居在ニ新昌一、未レ暇レ作ニ廐庫一、且先營ニ一堂一、開レ牕不レ糊レ紙、種レ竹不レ依レ行、意取北檐下、窓與レ竹相當、遶レ屋聲浙々、逼レ人色蒼々、煙通檐靄氣、月透玲瓏光、是時三伏天、天氣熱如レ湯、獨此竹牕下、朝廻解ニ衣裳一、輕紗一幅巾、小簟六尺牀、無レ客盡日靜、有レ風終夜涼、乃知前古人、言事頗諳詳、淸風北牕臥、可三以傲ニ羲皇一、

鄭竹　唐元稹

庭有ニ肅々竹一、門有ニ闐々騎一、囂靜本殊途、因依偶同寄、亭々乍干レ雲、嫋々亦垂レ地、人有レ異ニ我心一、我無レ異ニ人意一、

寺院新竹　元稹

寶地琉璃柝、紫苞琅玕踊、亭々巧ニ於削一、一々大如レ拱、冰碧林外寒、峰巒眼前聳、槎枒矛戟合、屹仡龍蛇動、煙泛翠光流、歲餘霜彩重、風朝竿籟過、雨夜鬼神恐、佳色

懷風枝轉弱、防レ露影逾濃、既來丹穴鳳、還作二葛陂龍一、

賦得臨池竹應制　唐虞世南

葱翠梢雲質、垂彩映二清池一、波泛含レ風影、流搖防レ露枝、龍鱗漾二嶰谷一、鳳翅拂二漣漪一、欲レ識凌冬性、惟有二歲寒知一、

與東方左史虬修竹篇　唐陳子昂

龍種生二南岳一、孤翠鬱亭々、峰嶺上二崇崒一、煙雨下二微冥一、夜聞二鼯鼠叫一、晝聒二泉壑聲一、春風正澹蕩、白露已淸冷、哀響激金奏、密色滋玉英、歲寒霜雪苦、含彩獨青々、豈不レ厭二凝冽一、羞比二春木榮一、春木有二榮歇一、此節無二彫零一、始願與二金石一、終古保二堅貞一、不レ意伶倫子、吹レ之學二鳳鳴一、遂偶雲和瑟、張樂奏二天庭一、妙曲方二千變一、蕭韶亦九成、信蒙雕斲美、常願レ事二仙靈一、驅馳翠虬駕、伊鬱紫鸞笙、結レ交嬴臺女、吟弄昇レ天行、携レ手登二白日一、遠遊戲二赤城一、低昂元鶴舞、斷續彩雲生、永隨二衆仙一逝、三山遊二玉京一、

慈姥竹　唐李白

野竹攢レ石生、蒼煙映二江島一、翠色落レ波深、虛聲帶レ寒早、龍吟曾未レ聽、鳳曲吹應レ好、不レ覺蒲柳凋、貞心常自保、

對新篁　唐韋應物

新綠苞初解、嫩氣筍猶香、含レ露漸舒葉、抽叢梢自長、清晨止二亭下一、獨愛二此幽篁一、

顏侍御廳叢篁詠送薛存誠　唐盧綸

玉幹百餘莖、生君此堂側、拂レ簾寒雨響、擁レ砌深谿色、何事鳳々雛、玆焉理歸翼、

竹　唐張南史

竹價長東南、別種殊草木、成レ林處々雲、抽レ筍年々玉、天風起成レ韻、池水涵更綠、間臨庾信園、數竿心自足、

竹　唐戴叔倫

卷籜正離披、新枝復蒙レ密、翛々月下聞、夔々林際出、豈獨對二芳菲一、終年色如レ一、

竹雞　唐李益

訪レ竹越二雲崖一、即林苦谿絕、寧知修幹下、漠々秋苔潔、清光溢二空曲一、茂色臨二幽澈一、釆摘愧二芳鮮一、奉レ君歲暮節、

竹逕偶作　唐權德輿

退朝此休々、閉レ戸無二塵氛一、支レ策入二幽逕一、清風隨二此君一、琴觴恣二栽仰一、蘭蕙相氤氳、幽賞方自適、林西煙景曛、

古今要覽稿卷第三百八十三

●草木部竹二十一

○詩一

佩文齋詠物詩選

五言古

詠竹　　齊　謝　朓

窓前一叢竹、青翠獨言奇、南條交二北葉一、新筍雜二故枝一、月光疎已密、風來起復垂、青扈飛不レ礙、黃口得二相窺一、但恨從レ風籜、根株長別離、

秋竹曲　　謝　朓

㛹娟綺牕北、結レ根末二參差一、從レ風既裊々、映レ日頗離々、欲レ求二棗下吹一、別有二江南枝一、但能凌二白雪一、貞心蔭二曲池一、

賦得竹　　梁　元　帝

嶰谷管新抽、淇園節復修、作レ龍還二葛水一、爲レ馬向二幷州一、柯亭臨二絕澗一、桃枝夾二細流一、冠學二芙蓉勢一、花堪二威鳳遊一、卬王若レ有獻、張騫應レ拜レ候、

擔前竹　　梁　沈　約

萠開籜已垂、結レ葉始成レ枝、繁蔭上欝々、促節下離々、風動露滴瀝、月照影參差、得レ生君戶牖、不レ願夾華池、

綠竹　　梁　吳　均

嬋娟鄣綺殿、繞弱拂二春漪一、何當レ逢二採拾一、爲レ君笙與レ篪、

和二新浦侯一齋前竹　　梁　江　洪

本生二出高嶺一、移賞入二庭蹊一、檀欒拂二桂橑一、蓊葱傍二朱閨一、夜條風折々、曉葉露淒々、籜紫春鶯思、筠綠寒蛩啼、不レ惜二凌雲茂一、遂聽羣雀棲、願抽二一莖實一、試看二翔鳳來一、

賦得山中翠竹　　陳　張　正　見

修竹映レ巖垂、來風異夾レ池、複澗藏二高節一、重林隱二勁枝一、雲生龍未レ上、花落鳳將レ移、莫レ言棲二嶰谷一、伶倫不二復吹一、

賦得夾池修竹　　陳　賀　循

綠竹影參差、葳蕤帶曲池、逢レ秋葉不レ落、經レ寒色詎移、來風韻二晚徑一、集鳳動二春枝一、所レ欣高蹈客、未レ待二伶倫吹一、

詠竹　　北齊　蕭　放

窓打雨は聞もわかれす

竹爲師といふ事を

九重や庭の河竹かはらぬは　後小松院御製
代々の跡あるしるへとそ思ふ

禁中竹を

昔思ふこゝろをかはせ河竹の　權中納言雅緣
三代にあひぬる身はふりぬとも

百首歌奉し時

代々經ぬる末葉なり共呉竹の　二品法親王道朝
園生の色はかはらずもかな

永和百首歌に

風そよく庭の呉竹よもすから　崇賢門院
みし世にかよふ夢たにもなし

里竹といふ事をよませ給うける

いつまてか里の名にあふの呉竹　崇光院御製
ふしみにのみも我世つくさむ

おなじ心を

忘れすよ伏見の里のはる〳〵と　八條入道前内大臣
みゆきに馴したけの下道

弘長百首歌に竹

呉竹の身のうきふしの數々に　前大納言爲氏
我世のほとをおもひしるかな

題しらず

うきふしのしけき身なれは影なひく　後押小路前内大臣
名さへかひなき窓の呉竹

呉竹の葉に置露や世中の　前大僧正禪守
うきふしゝけきなみた成らん

編修兼校正　岡村尚鎌平遜
校正兼淨寫　兒山諦之助平紀言
　　　　　　伊庭熊作源秀正
校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春
校正兼淨寫　小林好太郎源直温
校正兼鈔錄　屋代次郎源通賢
編修兼校正　池野貞一郎源好謙
編修兼圖書　志村愛助平知孝
校正兼淨寫　大河戸晉平藤原儀成
校正兼鈔錄　榊原猪右衞門源長行
編修兼圖書　岩崎源三源常正
總判　屋代大郎源弘賢

百首歌奉し時庭竹
家の風猶吹絶す十代あまり
またかけ靡く庭の呉竹　右大臣

竹をよめる
呉竹の四代の君にはつかへきぬ　正三位有範
おもひ出殘る一ふしもかな

むなしきを友とはすれと呉竹の　前中納言爲相
うきふし計身にそ數そふ

新後拾遺和歌集卷第一春歌上
嘉元々年後宇多院に百首歌奉ける時
後照念院關白太政大臣
呉竹のねくらかたよる夕風に
聲さへなひく春のうくひす

又卷第八雜秋歌
百首御歌に時雨を
呉竹の緑は時もかはらねは　土御門院御製
時雨降にしまかきともなし

だいしらず　紀親文朝臣
木にもあらす草にもあらて咲花や
竹のさ枝にふれる白雪

又卷第二十慶賀歌
花園院位におはしましける時大なるたかんなを
奉らせ給とてつゝみ紙に書付させ給うける
百敷に緑そふへき呉竹の　後伏見院御製
かはらぬかけは代々久しかれ

御返し
もゝしきに移し植てそ色そはん　花園院御製
はこやの山の千世の呉竹

新續古今和歌集卷第十二戀歌二
寄竹戀を　讀人しらず
うきふしに又かへるともせめてたゝ
一夜は靡けいさゝむら竹

又卷第十七雜歌上
康安二年春の頃木幡にすみ侍て歌合しけるに
竹間鶯といふ事を　二品法親王覺譽
呉竹のその世の春はよそなから
昔忘れぬ鶯のこゑ

又卷第十九同歌下
おなじ百首歌に庭竹を
呉竹のよとこね近き風の音に　權大納言爲遠

呉竹の園生の道やまよはまし　忠房親王
かしこき君か御代にあはすは

百首歌奉りし時庭竹

軒近き竹の園生の世々の風　一品法親王尊胤
つらなる枝に吹そ傳へん

題しらず　二品法親王承覺

つたへきて世々にかはらぬ竹のその
身にうきふしを殘さすもかな

又卷第二十慶賀歌

建武二年正月十三日内裏にて竹有㆓佳色㆒といへる事を講ぜられけるに

百敷や生そふ竹の數ごとに　等持院贈左大臣
かはらぬ千世の色そみえける

式部卿久明親王家にて竹不㆑改㆑色といふ事をよみ侍りける

萬代も色はかはらし此君と　平貞時朝臣
あふけはたかき園のくれ竹

文保百首歌奉ける時

君かため千世のためしを求子の　前中納言實任
かさしに折し庭の呉竹

百首歌奉りし時庭竹

九代に二代かさねて河竹の　按察使實繼
おなしみかけにあふかかしこさ

新拾遺和歌集卷第七賀歌

百首歌たてまつりし時庭竹

紫の庭にみとりの色そへて　前關白左大臣九條
行末とほき千世の呉たけ

正和五年内裏造營の比竹臺のくれ竹を尋られけるを奉るとて結付ける

後照念院關白太政大臣

世々をへしみかきの竹の種なれは
末も千年の色そ添へき

又卷第十五戀歌五

中務卿宗尊親王家百首歌に戀

しらせはや竹の籬にはふ蔦の　藤原基隆
下にうらむるふしのしけさを

又卷第十九雜歌中

世をなげかせ給うて　三條院御製

つく〲とうき世にむせふ河竹の
つれなき色はやる方もなし

山陰や竹のあなたに入日落て　伏見院御歌
林の鳥の聲そあらそふ

又巻第二十賀歌

建武三年中殿にて竹有二佳色一といふ事を講せられけるに

百敷や生そふ竹の數毎に　前大納言尊氏
かはらぬ千世の色そ見えける

新千載和歌集巻第一上春歌

元亨四年二月後宇多院に十首歌奉ける時聞レ鶯といへる事を　後照念院關白太政大臣

呉竹のよゝにつたへて鶯の
高きにうつる聲そなれぬる

又巻第四上秋歌

秋たつ日よませ給うける　院御製

風渡る軒端にそよく呉竹の
一夜のうちに秋そ來にける

月前竹風を　後鳥羽院宮内卿

色かへぬ竹の葉しろく月さえて
積らぬ雪を拂ふ秋かせ

呉竹の葉分の露にさそはれて　前僧正道性
月もたまらぬ秋風そ吹く

又巻第六冬歌

題しらず　藤原雅朝朝臣

呉竹の葉分の風ははらへとも
積りにけりな雪のした折

又巻第十七中雜歌

題しらず　靜仁法親王

我みても窓の呉竹ふりにけり
しらぬ昔をいく世へぬらん

貞和二年百首歌奉りし時　入道前太政大臣

植置て心むなしき我友に
なかきよ契る窓のくれたけ

述懐歌とてよめる　土御門院小宰相

里つゝき竹の園生の近けれは
ふきふししけき身をやかこたん

入道二品親王尊圓家に百首歌よませ侍ける時竹を　法印淨辨

さかえ行竹の園生のなかりせは
いかなるかけに身をかくさまし

文保百首歌に

庭静なる冬のさ夜中

策々窓戸前又聞新雪下といふ事を

初雪の窓の呉竹ふしなから　前中納言定家
おもる上葉のほとそきこゆる

題しらず

ふりすさむ夕の雪の空はれて　前大僧正覺實
竹の葉白き軒の月影

冬歌とて

山本の竹はむら／＼うつもれて　院　一條
烟もさむき雪の朝あけ

夕雪　前大納言爲兼

くるゝまてしはしは拂ふ竹の葉に
風はよわりて雪そ降しく

屛風の繪に雪の降たる所

みよし野の山より雪は降くれと　貫之
いつともわかぬ我宿の竹

又巻第九旅歌

題しらず

ふかき夜に關の戸いてゝ足柄の　藤原頼成
山本くらき竹の下みち

又巻第十六雜歌中

百首歌奉し時　徽安門院一條

をちかたの里は朝日にあらはれて
烟そうすき竹のひと村

風すさふ竹のさ枝の夕つく日　前大納言實明女
うつりさためぬ影そさひしき

五首歌合に雜遠近を

雪かゝる遠山松は見えすなりて　太上天皇
籬の竹に雨こほるなり

竹を

一本とおもひて植し呉竹の　前權僧正良海
庭みえぬまてしけるふるさと

寶治二年百首歌人々にめされけるついでに里竹を

おもひ入深山の里のしるしとて　後嵯峨院御歌
憂世へたつる窓の呉竹

題しらず

跡もなき賤か家居の竹の垣　院御歌
犬の聲のみ奥ふかくして

山家鳥

嘉元百首歌奉ける時竹　　二品法親王覺助
うきふしもしらぬにはあらぬ吳竹の
　言の葉しけき世にましるらん

又卷第二十神祇歌
賀茂臨時祭試樂の日舞人かざしの竹折けるを御
覽じてよませ給うける
霜さむみけふは挿頭にさす竹の　　御　製
　大宮人の袖かへすなり

風雅和歌集卷第一春歌上
餘寒の心を
朝風は外面の竹に吹あれて　　永福門院
　山の霞も春さむきころ

文保三年奉ける百首歌に　　前大納言爲世
明ぬれとおのかねくらをいてやらて
　竹の葉かくれ鶯そなく

梅をよませ給ける
道の邊や竹ふく風の寒けきに　　伏見院御歌
　春をませたる梅か香そする

又卷第三同歌下
春歌の中に
あしからの山の嵐の跡とめて　　前中納言爲相女
　花の雪ふむ竹の下みち

又卷第四夏歌
文保三年後宇多院に百首歌奉ける時夏歌
　　後山本前左大臣
さらに又日影うつろふ竹の葉に
　涼しさみゆる夕立のあと

題しらず
日の影は竹より西にへたゝりて　　祝子內親王
　夕風すゝし庭の草むら

又卷第七秋歌下
題しらず
朝日影うつる梢は露落て　　前太宰大貳俊兼
　外面の竹に殘る薄霧

秋木
吳竹のめくれる里を麓にて　　院　御　歌
　烟にましる山のもみち葉

又卷第八冬歌
冬の御歌の中に
霜こほる竹の葉分に月さえて　　今上御歌

嘉元百首歌に同じ心を
吳竹のよゝの昔も忍はれて　前關白太政大臣
忘れぬふしの多くも有かな
題しらず
その世こそ猶戀しけれ百敷や　新院御製
我友とみし庭の吳竹
虫十首御歌の中に
軒近きまかきの竹の末葉より　土御門院御製
忍ふにかよふさゝかにの糸
續千載和歌集卷第五秋歌下
二品法親王家五十首歌に竹間月
さす竹の大宮人はとひもこて　正三位爲實
葉末の月をひとりこそみれ
又卷第十七雜歌中
題しらず
我宿は軒端の竹のよゝをへて　藤原保能
かはらぬ跡と身こそふりぬれ
百首歌奉し時
これまても君か爲とそ植置し　前關白太政大臣
今九重の庭のくれたけ

又卷第二十賀歌
竹をよませ給うける　後二條院御製
おなしくは八百萬代をゆつらなん
わか九重の庭の吳竹
竹鶯を
玉敷の庭の吳竹幾千世も　伏見院御製
かはらぬ春のうくひすの聲
乾元二年二月內裏にて竹遐年友といふ事を人々
つかうまつりける時
鶯の聲のうちにもこもりけり　萬秋門院
みかきの竹の萬代の春
續後拾遺和歌集卷第十六雜歌中
題しらず
竹の葉のさやく夜每に寢覺して　菅原孝標朝臣女
何ともなきに物そ悲しき
風渡る窓の吳竹うきふしに　前大納言俊光女
さもやすからぬ世を歎くかな
寄竹述懷を
かくてたに猶うきふしそ忘られぬ　前中納言爲方
太山の里の窓の吳竹

三十首歌めされし時連日雪といふ事を
した折の竹の音さへ絶はてぬ　あまりにつもる雪の日數に　民部卿爲世

曉雪を
曉につもりや增る外面なる　竹の雪折聲つゝくなり　藤原行房

竹雪
吹拂ふ嵐はよわる下折に　雪にこゑある窓のくれたけ　前大納言伊平
夕まくれふるともみえて白雪の　積れはなひく庭の呉竹　前大僧正良信

消雪といふ心を
降埋む雪のすかたとみえつるは　消行方そ竹に成行　從三位親子

雪埋竹
雪埋む園の呉竹折ふして　ねくらもとむる村すゝめ哉　西行法師

題しらす
へたてつる垣ねの竹も折れふして　雪にはれたる里の一村　右兵衞督雅孝

又卷第七賀歌
題しらず
つかへつゝ行末遠くたのむ哉　竹の園生に代々をかさねて　前大僧正禪助

又卷第二戀歌二
八月ばかりにまうでのぼりける人の竹の葉に露置たるかた書たる扇を落して侍りけるを程へて返しつかはすとて
東雲におきて別れし人よりは　久しくとまる竹の葉の露　和泉式部

又卷第十六雜歌三
山家嵐
山颪は垣ほの竹に吹捨て　嶺の松よりまたひゝくなり　前大納言爲兼

雜歌の中に
さとひたる犬の聲にそしられける　竹より奧の人の家居は　前中納言定家

寶治百首歌に里竹を
誰里の家居なるらむかた山の　ふもとにめくる竹の一村　前大納言爲氏

一夜宿かる竹のした道

新後撰和歌集卷第三夏歌

題しらず

風そよく軒端の竹にもる月の　源俊定朝臣
夜のま計そ夏も凉しき

又卷第十八雜歌中

弘長三年內裏百首歌に窓竹

いかにして窓に年へし笛竹の　前大納言良敎
雲井に高くねを傳へけん

又卷第二十賀歌

千五百番歌合に

朝夕に千年の數そ聞えける　惟明親王
松と竹とにかよふ嵐は

玉葉和歌集卷第一春歌上

竹間鶯と云ことを

窓ちかき竹の葉風も春めきて　平貞時朝臣
ちよの聲ある宿のうくひす

後法性寺入道前關白家百首歌に鶯を

なほさりに一村植し吳竹を　正三位季經
ねくらにしめて鶯そなく

嘉元々年百首歌奉ける時鶯

雨そゝく園のくれ竹枝たれて　左近大將實泰
夕へのとかに鶯そなく

又卷第三夏歌

夏月透竹といふ事を

さえくもる影そ程なき吳竹の　前關白太政大臣
夜わたる月の明やすき比

夏歌の中に

枝にもる朝日の影のすくなさに　前大納言爲兼
凉しさ深き竹の奧かな

吹風の竹になる夜は秋來ぬと　前大納言有房
おとろくはかり袖に凉しき

又卷第五秋歌下

月歌の中に

暮るまのまかきの竹を吹風の　常磐井入道前太政大臣
なひくに出る秋のよの月

後鳥羽院に五十首歌奉りける中に月前竹風

ふし佗て月にうかるゝ道のへに　前中納言定家
垣ねの竹を拂ふ秋風

又卷第六冬歌

植てみる松と竹とは君か代に　素性法師
千年行かふ色もかはらし
貞元二年初齋宮侍從厨おはしけるに庚申夜人々
まゐりてあそひけるついてによみ侍ける
昔より色もかはらぬ川竹の　順
よゝをは君かそへわたらん
續古今和歌集卷第四秋歌上
千五百番歌合に
竹の葉にあさひく糸や七夕の　前大納言忠良
ひとよのふしの亂なるらん
又卷第五同歌下
建保四年内裏秋十首歌の中に
深草や竹の葉山の夕霧に　從二位家隆
人こそみえね鶉なくなり
又卷第七神祇歌
竹のよも我世もともに老にしを
くちはさやにも置る霜かな
此歌は北野の御歌となん
又卷第十四戀歌四
寄竹戀と云事をよませ給ける

吳竹のよゝの契りもしられけり　土御門院御歌
うきふしゝけき戀のむくひに
又卷第十七雜歌上
百首御歌中に
ふしわふる籬の竹のなかきよも　順德院御歌
猶置あまる秋のしら露
又卷第十九同歌下
堀川院御時百首に竹を
吳竹のうきふしゝけく成にけり　俊賴朝臣
さのみはよもとおもひし物を
夕暮にまがきの竹に雀の鳴を聞て
日くるれは竹の園生にゐる鳥の
そこはかとなく音をも鳴哉
續拾遺和歌集卷第五秋歌下
題しらず
吳竹のは山の霧の明方に　法印定圓
猶よをこめて殘る月かけ
又卷第九羇旅歌
題しらず
あしからの山の麓に行くれて　平時長

又卷第十八同歌下
題しらず
竹の葉に風吹よはる夕暮の　宮内卿
物のあはれは秋としもなし
新勅撰和歌集卷第四秋歌上
題しらず
ふみ分む物ともみえす朝ほらけ　正三位家隆
竹のは山の霧の下露
又卷第七賀歌
堀河院竹不ㇾ改ㇾ色といへる心をよませ給うける
に　富家入道前關白太政大臣
色かへぬ竹のけしきにしるき哉
萬世ふへき君かよはひは
天德二年左大臣五十賀屛風
我宿の千世の河竹ふしとほみ　清原元輔
さも行末のはるかなるかな
勅使にて齋宮にまゐりてよみ侍ける
吳竹のよゝのふること聞からに　中納言兼輔
君は千年のうたかひもなし
又卷第十釋教歌
薩埵王子の心をよみ侍ける
身をすつる衣かけゝる竹の葉の　殷富門院大輔
そよいかはかりかなしかりけん
又卷第十六雜歌一
家に五十首歌よみ侍ける秋歌
此里は竹の葉分てもる月の　入道二品親王道助
昔の世々の影を戀らし
續後撰和歌集卷第十七雜歌中
長治二年三月中殿にて竹不ㇾ改ㇾ色といふ題を講
せられ侍けるに御製を承及びて奏し侍ける
川竹の流てきたる言葉は　京極前關白家肥後
よにたくひなきふしとこそきけ
御返し
神代よりなかれ絶せぬ川竹に　堀川院御製
色ますことのはをそゝへける
門跡のことをおもひてよみ侍ける
たのむそよ跡へん竹の園の内に　前大僧正慈鎮
我後のよを思ひ置く哉
又卷第二十賀歌
右近大將定國四十賀の屛風に

友こそなけれ冬の山さと

題しらず

くれ竹の折ふす音のなかりせは　坂上明兼

夜深き雪をいかてしらまし

又卷第十賀歌

みこにおはしましける時鳥羽殿にわたらせ給へりける比八條院內親王と申ける時かの御かたにて竹遐年友といへるこゝろを講ぜられけるによませ給うける

いく千代と限さりける吳竹や　院御製

君かよはひのたくひ成らん

植て見るまかきの竹のふし每に　後三條內大臣

こもれる千世は君そかそへん

我友と君かみかきの吳竹は　皇太后宮大夫俊成

千世にいくよのかけをそふらん

新古今和歌集卷第三夏歌

鳥羽にて竹風夜涼といふ事を人々つかうまつりしに

まと近きいさゝむら竹風吹は　春宮權大夫公繼

秋におどろく夏のよの夢

又卷第六冬歌

題しらず

時雨ふる音はすれとも吳竹の　中納言兼輔

なとよとゝもに色もかはらぬ

夜深聞雪といふ事を

あけやらぬねさめの床に聞ゆ也　刑部卿範兼

まかきの竹の雪の下をれ

おなじ家にて所の名をさぐりて冬歌よませ給けるに伏見里の雪を

夢かよふ道さへたえぬ吳竹の　藤原有家朝臣

ふしみの里の雪の下をれ

又卷第七賀歌

延喜御時屛風歌

年每におひそふ竹のよゝをへて　貫之

かはらぬ色を誰とかはみん

又卷第十七雜歌中

述懷百首歌よみ侍けるに

いかにせん賤かそのふの奧の竹　皇太后宮大夫俊成

かきこもるとも世中そかし

試樂の日よめる　　橘　俊　宗
おもひきや衣の色はみとりにて
みよまて竹をかさすへしとは

又卷第十八四同歌
綠竹不ㇾ辨ㇾ秋といふこゝろを　　大藏卿師經
みとりにて色もかはらぬ吳竹は
よのなかきをや秋としるらん

金葉和歌集卷第四各歌
竹風似ㇾ雨といへるこゝろをよめる　　前中納言基長
なよ竹の音にも袖をかつきつゝ
ぬれぬにこそは風と知りぬれ

又卷第五賀歌
長治二年三月十五日內裏にて竹不ㇾ改ㇾ色といへることをよませ給ひける　　堀河院御製
千代ふれとおも變りせぬ河竹は
なかれてのよの例成けり

又卷第七上戀歌
逢不遇戀といへる事をよめる　　左京大夫經忠
一夜とはいつか契し河竹の
なかれてとこそおもひ初しか

詞花和歌集卷第八戀下
女のもとより夜ふかくかへりてあしたにつかはしける　　藤原實方朝臣
竹の葉に玉ぬく露にあらねとも
またよをこめておきにける哉

たのめたりける男をいまや〳〵とまちけるにまへなる竹の葉に霰の降かゝりけるをきゝてよめる　　和泉式部
竹の葉に霰降よはさら〳〵に
獨いぬへき心地こそせね

又卷第九雜上
冷泉院へたかんな奉らせ給とてよませ給ける　　花山院御製
世中にふるかひもなき竹のこは
わかへむ年をたてまつる也

御かへし　　冷泉院御製
年へぬる竹のよはひを返しても
此よを長くなさんとそ思ふ

千載和歌集卷第六冬歌
醍醐の淸瀧のやしろに歌合し侍りける時よめる　　讀人しらず
降雪に軒端の竹も埋れて

うつろはぬ名になかれたる河竹は
いつれの世にか秋をしるへき

拾遺和歌集巻第五賀

承平四年中宮の賀し侍ける屏風に

色かへぬ松と竹とのすゑのよを　齋宮内侍
いつれひさしと君のみそみむ

又巻第十三戀三

題しらず　よみ人しらず

いかなりしときくれ竹の一夜たに
いたつらふしを苦しと云らん

又巻第十八雑賀

九條右大臣五十賀屏風に竹ある所に花の木ちかくあり

花の色も常磐ならなんなよ竹の　もとすけ
長きよにおく露しかゝらは

清和女七のみこの八十賀重明のみこのし侍ける時の屏風に竹に雪ふりかゝりたるかたあるところに

白ゆきは降かくせとも千世迄に　つらゆき
竹の緑はかはらさりけり

かたらひ侍ける人のひさしうをとせず侍ければたかうなをつかはすとて　よみ人しらず

君とはていくよへぬらん色かへぬ
竹のふるねのおひかはるまで

又巻第二十哀傷

子にをくれてよみ侍ける

弱竹のわかこのよをは知すして　平兼盛
おほしたてつと思ける哉

朱雀院うせさせ給ひけるほどちかくなりて太皇太后宮のをさなくおはしましけるを見たてまつらせ給ひて

呉竹のわか世はことに成ぬとも　御製
ねはたえせすもなかるへき哉

後拾遺和歌集巻第十二戀二

題しらず

けふよりはとく呉竹のふし毎に　源定季
夜はなかゝれとおもほゆる哉

又巻第十七雑三

同じ御時藏人にて侍けるに世中かはりて前藏人にて侍けるを當時に臨時祭の舞人にまかり入て

古今要覽稿卷第三百八十二

●草木部竹二十

○和歌

萬葉集卷第五雜歌

梅花歌

烏梅乃波奈知良麻久怨之美和家曾乃ゝ多氣乃波也之爾于具比須奈久母 少監阿氏奧島

又卷第十一古今相聞往來歌

寄物陳思

刺竹齒隱有吾背子之吾許不來者吾將戀八方

又卷第十四東歌相聞

宇惠多氣能毛登左倍登與美伊低ゝ伊奈婆伊豆思牟伎氐可伊毛我奈藝可牟

柿本朝臣人麻呂歌集中出見レ上已詮也 元暦本詮作レ記

古今和歌集卷第十八雜歌下

寛平の御時にもろこしのはう官にめされて侍ける時に東宮のさぶらひにてをのこどものさけたうべけるついでによみける

なよ竹のよなかき上に初霜の おきゐて物を思ふ比かな　藤原のたゞふさ

後撰和歌集卷第二春歌中

ねやのまへに竹のある所にやどり侍て

竹近く夜床ねはせし鶯の 鳴聲きけは朝いせられす　藤原伊衡朝臣

前栽に竹の中に櫻の咲たるをみて

櫻花けふよく見てん吳竹の 一夜の程にちりもこそすれ　坂上是則

又卷第十二戀歌二

題しらず

逢事のよゝをへたつる吳竹の ふしの數なき戀もする哉　藤原清正

又卷第十八雜歌四

女ともだちのつねにいひかはしけるを久しう音づれざりければ十月計りに「あた人の心といひし言の葉は」といふふる言をいひつかはしたりければ竹の葉にかきつけてつかはしける　よみびとしらず

龍鬚竹 竹譜詳録本草彙言湧幢小品
按龍鬚は卽石龍蒭の龍蒭と同じ卽此幹の細小なる狀頗る長鬚の如くなるによりて名づく
龍絲竹 同上
龍絲もまた龍鬚の意なり

○正誤

湧幢小品云辰州有㆓龍絲竹㆒
閩書南產志云一種小竹曰龍孫竹
按孫まさに絲に作るべし蓋し傳寫の誤り也また笋の一名を龍孫といへるは山堂肆考にみえたり

兒篠

兒篠一名しまざゝ一名やなぎ葉ざゝは卽龍須竹の一種なりその高さ僅に五六寸或八九寸その葉細長頗る根笹に似て毎葉青白色の細縱道あり佳麗最愛すべし故に皆人これを以て庭砌間の石傍或は小樹下に植てかざりとすその小樹下にありて年を經るものはその樹とその高低をあらそひて樹もし三尺許なる時は此さゝもまた三尺許に至るその三尺許のものは大抵五節にして梢上に五七葉をつけ或は一兩枝を生ずるものありその枝幹並に細小にして恰も篠の如し

和漢三才圖會云兒篠高尺許葉最細長八九枚生㆓於頂上㆒有㆓白縱理㆒如㆑線青白相交甚可㆑愛本草所謂龍絲竹指㆓此等㆒乎
增補地錦抄云兒篠は葉ちいさきさゝなり青き葉に白すぢありて成程美事也
『此間彩畫一葉ちござゝ略㆑之』

○釋名

兒篠 和漢三才圖會
此篠極て細小にして且愛玩すべきによりて兒篠と名づく
しまざゝ 俗稱
國俗青黃赤白に拘はらずすべて細縱道あるものを以てしまと稱す此葉また青白縱道あり故に名づく
柳葉ざゝ 本草一家言
此葉細長柳葉の如し故に名づく

○正誤

本草一家言云有㆓邊白竹㆒葉邊皆白和名知古篠
按に邊白竹の名いまだいづる所をしらずまた知古篠は必ず葉邊にかぎりて白きものにはあらず

にして後路の人皆踐踏して過行べきによりて名付し也

○正誤

本草一家言云千里竹和名根篠

按通雅云似竹之小草有十種云々一種曰千里竹高七八寸葉似竹而幹似蘆根實草也廬山不之可以降火此說によれば千里竹は幹蘆根に似ものなればその幹根篠よりは至て太きもの也されば千里竹は別に一種草にして根篠にはあらざるべし

龍鬚竹

龍鬚竹一名龍絲竹はもと西土より來るその幹極めて細小にして鍼の如くまた絲の如し高さ僅に八九寸その葉また細小ほゞ結縷草に似たり此種は辰州に生ずるよし本草綱目にみえたれば今あるものも蓋しその地の產なるべし又一種幹高さ六寸許にて根傍別に二白須を生じて其長さ本幹よりも五倍するものあるよし竹譜詳錄にみえたれども此種舶來ある事を聞ず

本草一家言云有龍絲竹生山陵莖細如絲

丹洲圖竹云此小竹極纖細堪盆玩一望似結縷草而直親見群芳園中

竹譜詳錄云龍絲竹亦名龍須竹生辰陽山谷間高不盈尺細僅如鍼凡所以爲竹者無不具張得之譜云予頃過一朋舊家見盆池崑石上有小竹一竿長六寸許枝葉蒼翠根旁別生二白須盤屈水中伸則長於幹五倍龍鬚之稱疑出於此張南軒亦賞移寘石斛中暮春生筍森然可喜因賦詩云小竹如鍼能具體方春苗筍又堪憐者是也

本草彙言云龍絲竹高盈尺細如鍼出辰州

本草綱目云辰州龍絲竹細僅如鍼高不盈尺其葉或細或大

湧幢小品云辰州有龍絲竹生山谷間高不盈尺細僅如鍼

秘傳花鏡云龍鬚竹生辰州及浙之山谷間高不盈尺而枝幹細僅如針可作盆玩但遇冬不可見霜雪閩書南產志云辰州有一種小竹曰龍絲竹生山谷間高不盈尺細僅如針凡所以爲竹無不具前輩詩有小竹如針能具體卽此也

『此間彩畫一葉龍鬚竹略之』

○釋名

古今要覧稿巻第三百八十一

●草木部 竹十九

さゝ

さゝは小竹の惣名にして漢名を筱といひ野にあるを野ざゝといひ藪にあるを根ざゝといひ箱根山中に生ずるを箱根笹といふ[増補地錦抄]今處々の山野及び堤坂上に數百歩叢生しその高さ一二尺葉は女竹に似てやゝ小さし一種八丈篠あり其高さ僅に一尺を過ずその葉尋常のものと相似たり今松平越中守大塚の下邸にあり此種は西土にいはゆる趁篠の類にても有べきにや又隅田村に鐙摺のさゝありその高さ鐙より上に出る事なしと[江戸砂子]いへりその他種類なほ多し

古事記[允恭天皇大御歌]云佐々婆阪宇都夜阿良禮乃多志陀志爾(サヽバニウツヤアラレノタシダシニ)云々

日本書紀云筱此云佐々

萬葉集巻十一云妹之髪上小竹葉野之(イモガカミアゲサヽハヌノ)

和名類聚鈔引二蔣魴切韻一云篠[和名之乃一云佐々俗用二細々小竹二字一謂二之佐々一]竹也

江戸砂子云鐙摺の笹はすだ村若宮近所木母寺より六七町ばかり北にありむかし八幡太郎義家奥州征伐の時此所の笹の葉末鐙をすりて馬上より眺望のさはりなし此笹の丈これにかぎるべしとのたまひしより此笹のびずといふ今はなし

竹譜詳錄云一種出二姑蘇靈巖山中一者極短高者不レ過二二尺一一枝三葉亢細可レ玩土人呼爲二趁篠一

『此間彩畫三葉さゝ略レ之』

○釋名

さゝ[古事記日本書紀萬葉集和名類聚鈔]

さゝは細小の義小石をさゞれ小蟹をさゝがに小浪をさゞれなみなどいへる類なりまたさゝめくさゝやかなどの語にても其義はしるし

八丈篠[俗稱]

此さゝ八丈島より來る故に名づく

鐙摺笹[江戸砂子]

笹は皇朝の俗字なり

趁篠[竹譜詳錄]

按に趁は玉篇に除珍切履也とみえたれば此篠矮小

枝竹にはあらずまた東坡志林を引きて桃竹葉如レ椋といへるもまた同物にて此桃枝竹には非ず然るを篤信の蒴篠を桃枝竹に混同して其說をなせしはあやまれり

とうよし

とうよしは漢名いまだ詳ならずその本幹を採て剪すてし根株のかた七八寸或は一尺許のものたまゝ南方の海濱に漂着する事ありその狀蘆幹に似て極めて大にして肉厚く竅至て小にして節また蘆節の如し小野蘭山はこれを事物紺珠の猫頭竹にあてたり然りといへども今是を詳にするに的當のものにはあらず

本草綱目啓蒙云トウヨシハ蘆葦ノ形狀ニ似テ甚大ニシテ厚シ颶風ノ時海濱ニ漂着ス世人用テ花尊トス云云

○正誤

本草綱目啓蒙云苗竹ハ「トウヨシ」也薩州ニハ栽ル者アリ「トウキンチク」ト呼ブ其根甚大ナリ根ノ形ノ似タルニ因テ猫頭竹ト名ルコト事物紺珠ニ見エタリ一名猫竹群芳譜又茅竹毛竹ニ作ル同上

按に本草綱目に筍竹ありて苗竹なし小野蘭山は何れの木によりて苗竹を以て猫竹と混同してその說をなせしにや甚疑ふべし又猫頭竹は竹譜詳錄に載る所の貍頭竹一名麻頭竹といへる物にてとうよしにあらず又或人とうよしの事を薩摩の本草家曾昌啓に問しに我國その種絕てなしといへりされば薩州に栽るものありといふもとうぎんちくの名も共に傳聞の誤なるべし

紅紫色如桃枝皮故云公作蕈者非也
本草綱目引本草拾遺云省籐生南地深山皮赤大如指堪縛物片々自解也
古文眞寶前集
桃竹杖引
（東坡跋桃竹杖後云桃竹葉如椶身如竹密節而實中犀理瘦骨蓋天成拄杖竹也嶺外多種此竹而不知為桃竹流傳四方視其端有眼者蓋自東坡出也○工部遇亂久留梓州懷故郷之思使君章彝以雙桃枝贈之桃竹出己渝間其為物靈異公作此引以謝之）
江心蟠（音盤）石生桃竹（爾雅謂桃皮山海經謂桃枝竹也）蒼波噴（盆去）漫尺度（徒去聲丈尺也）足斬根削皮如紫玉江妃水仙惜不得（江賦冰夷倚浪以傲睨江妃含嚬而矊眇注冰夷水仙也）梓（音子）潼（音童黄鶴曰梓州為梓潼郡以東倚梓林西枕潼水而得名）使（去聲）君（指章彝時為梓州刺史）開一束滿堂賓客皆歎息憐我老病贈兩莖（音行）出入爪甲鏗（音硜鏗鏘）有聲老夫復欲東南征（欲征東南方往吳楚）乘濤（音陶）鼓枻（楫也）白帝城（公孫述自立號成都為白帝城）路幽必為鬼神奪拔劍或與蛟龍爭重（平聲）為告曰杖兮杖兮爾之生也甚正直慎勿見水踴躍學變化為龍（神仙傳壺公遣費長房歸以一竹杖與之騎長房騎杖忽然到家以竹杖投葛陂顧之乃青龍也）使我不得爾之扶持滅跡於君山湖上之青峯噫（音依）風塵傾（胡孔反）洞兮豺虎咬（古肴反）人（喩當時盜賊也）忽失雙杖兮吾將曷從
○釋名

とう（用薬須知大和本草一家言本草啓蒙）此郎籐字の音なり和名にはあらず
と（江戸方言）此郎とうの下略なり
やまとうかつら（丹洲竹譜）此郎琉球名なりといへり
籐（齊民要術玉篇正字通）　籐竹（竹譜詳錄）　籐（正字通）
省籐（本草拾遺）
按に省は蓋し亦の轉聲或は方言なるべし
桃枝竹（竹譜詳錄引或說）
○正誤
大和本草云桃枝竹本草拾遺ニ出タリ綱目二十七卷竹筍類ニノス桃竹筍ノ性ヲアラハセリ桃枝竹ノ性ハノセズ時珍曰皮滑而黄四寸有節可以為席尚書顧命云敷重篾席蔡傳篾席桃枝竹席也山海經遵生八牋桃竹ヲノス桃枝竹ト同ジ杜子美有桃竹杖引餘姚縣志云翦堪作蔑志林云桃竹葉如棕身如竹密節而實中蓋天成拄杖也
按に大和本草に本草拾遺及び本草綱目を引ていへる桃枝竹は即上文にいはゆる椶櫚竹の事にて此桃

べての蔓草とはその類を異にし別に葉木より細子蔓を生ずる事なきによりて此葉先を以て物に纏繞するためなるべきか

大和本草云今タウダケトテワリテ繩ノ如クニシ物ヲマク物是也簟ニモ作ル夏月ノ臥席トス本邦ニ此種アル事ヲ不レ聞本草ニ其竹叢生スト云椶竹ナドノ如ク一處ヨリ多生ス大アリ小アリ小ナル者モ長シ又杖トスヘシ

用藥須知云萪籐出二正字通一馬尾籐白萪籐其細小者也

和名トウ

丹洲圖竹云藍水翁曰本草載二蔓竹一柔者可レ爲二繩索一今按蔓竹葉如レ蘆其莖心堅實而柔靱琉球名山登宇蔓（或云蔓竹は萪籐にはあらず別に一種のものなりといへり猶考へし）丹洲曰此卽科藤也　正字通云籐徒恒切蔓生似レ竹

又云明和安永ノ頃四谷長島長兵衞此生草舶來ノ者一盆ヲ得テ秘藏セリ予モ始テ一見ス寒威ヲ怖テ遂ニ枯萎ス此物嶺南熱國ノ産ナレバ本邦ノ風土ニ適セザルナリ紅毛人ノ杖ニ用ユルモノ徑リ寸許ノモノアリ聳直ナレドモ膝下ニ半分ヲ敷テ撓曲スレバ彎屈スル事偃月狀ノ如シ實家田村家ニ藏セリ

本草綱目啓蒙云省籐舶來多シ形細竹ノ如ク內實シ甚長シ皮黃白ニシテ光アリ全ク用テ諸器物ヲ造ル皮ノミ細ク割テ傘ノ柄或ハ弓ヲ卷キ肉ノミ割テ竹器ノ邊ヲ卷ク唐山ニテハ丸ナガラ並ベ編テ夏ノ席トス皮ヲ細クシ織テ席トス此物嶺南熱國ノ産ナリ赤籐黃籐白籐ノ三種アリ巨者爲二籐棍一ト瓊州府志圍ミ數寸ノ者アリト齊民要術ニ云リ然レドモ舶來ノ者ハ細キ者ノミナリ紅毛人ノ杖ニハ徑リ寸許ナルモノアリ苗如レ竹無レ枝蔓延被レ地長數丈不レ値二剪伐一可レ繚二繞數十里一莖ニ皮アリテ外ヲ包ミ竹籜ノ如シト海澄澄縣ニ云リ又至テ細ク絲ノ如クシテ器ニ造ル南方ノ名産ナリ瓊州府志ニ籐器出二萬州一穿織倶精緻擅二名天下一ト云リ先年籐ノ苗琉球ヨリ來ル寒氣ヲ畏ル故浪華ニテモ冬ヲ經ガタシ形ハ蘆ニ似テ蔓生葉ハ竹ニ似テ強ク光澤アリ

齊民要術引二臨海異物志一云萪籐圍數寸重二於竹一可二以爲レ杖篾以縛レ船及以爲レ席勝レ竹也

玉篇云萪苦遇切萪籐生二海傍一

竹譜詳錄云萪竹淸源志云番船上嘗有萪篾來貨又云或云二桃枝竹一出二海南番中一如二椶櫚一其皮作レ簟如レ竹又

千年草同上

山城の方言なりといへり

朱竹廣東新語

朱蕉同上

此二名は色によりて名づく

鐵樹七修類藁 秘傳花鏡

廣東新語云朱竹通體鐵色微朱以二其難一レ長故又名二鐵樹一或云此幹內實して色黑し故に名づく

とう　とうたけ　蔛籐

とう一名と、一名とうだけ、一名やまとうかつらは漢名を蔛藤一名蔛籐一名籐といふこれに黃籐赤籐白籐の三種ありと本草啓蒙引二瓊州府志一いへり今呉舶の載來るものは狀籐竹の如くにして葉を生せし處の本竿は頗る竹節狀の趣ありといへども至て低してさらになきが如しその根のかたと梢とを剪去たるものにて長さ一丈四五尺もあるをみればその全形の蔓延長數丈不レ値ニ剪伐ニ可レ繚ニ繞數十里一同上といへるはさもありぬべしその節狀をなしたる間はをの〳〵七八寸より一尺許に至り內堅白にして外淡黃色のものなればいはゆる黃籐なるべし赤籐は一名紅籐一名省籐一名桃枝竹といふこれ桃枝竹は其色紅紫似二桃枝皮一故名と竹譜詳錄いへるものにて椶櫚竹の一名桃枝竹とは前種なりまた白籐はその狀細になるものなりと用藥須知いへどもこれは蓋し黃藤の風土によりてその色を異にし或はその籐の嫩なる時剪採りしものは後に白色に變せしもしるべからずといへども黃籐は海傍に生じ赤籐は山中に產するものなればその種の別種なることは明らけし扨本草啓蒙に先年籐の苗琉球より來る寒氣を畏るる故に冬を經がたしといひ丹洲竹譜に明和の頃長嶋長兵衞といふ人舶來の生草一盆を得たりといへるもともに同時同種のものにて呉舶の載來りしにはあらざるべしさて竹譜に圖せし所の生草は葉の狀極めて蘆葉に似たりといへどもその葉本に莖を包むべき韡なきを異なりとす扨蔓草類はその親蔓の樹木に纏繞する外に每葉の本よりも別に細小なる子蔓を抽出しその先いづくともなく圓く輪をなして細條小枝に纏繞するものはたとひ大風雨の時といへど、ぞその親蔓のさらにその樹木より離散する事なきためなるはしるし然るに此籐の葉先も極めて細長にして又その狀いくつともなくまるく輪をなすものは蓋し此籐はす

とは別種なり書禮にいはゆる篾席次席は郎爾雅にいはゆる桃枝竹を以て作りしものなるに今蘄竹と混同してその說をなすは誤なり

千年木朱竹

千年木一名千年草は漢名を朱竹一名朱蕉一名鐵樹といふ葉の狀芭蕉葉に似て極めて細小また頗る山姜葉に似てやゝ長大にして周圍紅色恰も臙脂を以て染たるが如き數葉幹梢に叢生すその幹椶櫚竹に似て毛なく中實して色黑し年を經るものは稀にその叢葉中より穗を抽て六瓣花を開く狀吉祥草花に似て微しく大にして外紅紫色內淡白なり此種は近頃西土より來り性甚た寒を忌る一種朱竹あり陳氏竹譜に出これとは同名異物なり

七修類藁云予友烏鎮王雨濟爲二橫州二判一嘗云橫之馴象衞指揮般貫家有二盆樹一株一高可二三四尺一幹葉皆紫黑色葉小類二石楠一質理細厚問二於主人一曰此鐵樹也每レ遇二丁卯年一則花開四瓣紫白色如二瑞香一較少圖耳一開累月不レ凋嗅レ之有二草氣一吾支生時花今復二次矣予以諺謂二事難成者一則曰須鐵樹開レ花然則果有二此樹一耶

秘傳花鏡云鐵樹類二石楠一質理細厚幹葉皆紫黑色花紫白如二瑞香一四瓣少圓一開累月不レ凋嗅レ之乃有草氣因憶古人嘗見事或難レ成便云除須二鐵樹開一花疑無此樹及馴象衞般指揮園中見レ有二此樹一高可二三四尺一詢二其名一則曰鐵樹每レ遇二丁卯年一便放レ花其年果花移置二堂上一治酒歡飲作レ詩稱レ賀若非到レ此目睹則安知眞有二是木一耶及聞二海南人一言此樹黎州極多有二一二尺長者一葉密而紅樹儼類レ鐵其枝椏穿結甚多二畫意一盆玩最佳但人取罕見故稱レ可耳（五臺山有二鐵樹一每年六月開レ花）

廣東新語云朱蕉葉芭蕉而幹椶竹亦名二朱竹一以三枝柔不二甚直挺一故以爲レ蕪葉紺色生二於幹上一幹有レ節自レ根至レ杪一寸四三節或六七節甚密然多一幹獨出無二旁枝一者吾家種レ之成レ林客有二見者一愛二其葉一則以爲二朱蕉一而朱竹之名隱愛二其幹一則以爲二朱竹一而朱蕉之名隱愛二其花一則以爲二鐵樹開レ花不レ易而皆以爲二鐵樹一而朱蕉朱竹之名玆隱嗟夫一物也而三名三名而不レ得二其成一其亦善二於自隱一者歟

○釋名

千年木（庶物類纂）

武藏の方言なりといへり此もの數年を經るといへどもその幹生長しがたきによりて名づく

名義詳ならず按に桃枝群芳譜に桃絲に作るこれによるに桃枝は蓋し桃絲の義にて説文に絩綺絲之數也とみえたりこれは絩絲は卽多絲の意此竹叢毛多きによりてえか名付しにてもあるべきにや

桃竹 東坡志林續竹譜格古要論廣東新語

此卽桃枝竹の枝を省しにてその意梭櫚竹を梭竹といへるにおなじ

桃絲竹 廣群芳譜

陶竹 格致鏡原

陶桃音通なり

實竹 本草綱目

實心竹また實竹と名づくこれと同名異物なり

木竹 太平府志仁和縣志

此竹中心充實木の如し故に名づく

石竹 太平府志

此竹名間に叢生す故に名づく

蒲葵竹 竹譜詳錄八閩通志

此竹葉を生ずる事頗る蒲葵に似たり故に名づく

古散竹 八閩通志

また同名のものあり

桃笙 竹譜詳錄八閩通志

楊子方言云簟謂ニ之笙一此竹皮黃骨にして簟となすによろし故に桃笙となづく

樸竹 秘傳花鏡群芳譜

樸木音通なり

筋頭 同上

唐志に合州土貢ニ桃枝竹實一とみえたりこれによれば筋頭はその狀至て少なるによりて名付しなり

短栖 同上

栖棲通用此竹樸竹に比するに至て短し故に名づく

○正誤

竹譜詳錄云桃枝竹出ニ江浙一兩淮處々亦有レ之叢生形如ニ慈竹一節長二尺許差薄今蘄人批取ニ標皮一作レ簟滑淨可レ人禮所謂冬虎皮夏桃枝是也書顧命篾席黼純孔安國曰篾桃枝竹周禮春官司九筵畫純次席鄭氏曰次席桃枝席有ニ次列一成レ文云々

按に桃枝竹二種あり一は梭櫚竹をいひ一つは蘄竹をいふその蘄竹は華夷花木考に蘄竹黃州府蘄州出以ニ色瑩者一爲レ簟節疎者爲レ笛帶レ鬚者爲レ杖とみえたり此種は爾雅にいはゆる桃枝四寸有レ節もの

八閩通志云桃枝竹叢ニ生石間一可ニ以爲レ杖節間相去常四寸亦謂ニ之桃笙一言可レ爲レ簟又謂ニ之蒲蔡竹一以ニ其葉如レ椶也

肇慶府志云椶竹人家多植但山中經ニ數十年一者乃堅實黃黑紋相錯可レ愛

叙州府志云椶竹色如ニ沈香一亦爲レ杖

臺灣府志云椶竹皮似レ椶而節密高不レ滿ニ四尺一

四川總志云椶竹省城出葉似レ椶有レ刺其中實而不レ虛

群芳譜云椶竹有ニ三種一上曰ニ筋頭一梗短葉垂堪レ置ニ書几一次曰ニ短柄一可レ列ニ庭堦一次曰ニ樸竹一節疎葉硬全缺ニ温雅一但可レ作ニ扇骨料一耳性喜レ陰畏ニ寒風一冬月藏不レ通レ風處三月方可レ見ニ天原一不レ見レ日秋分後可レ分須下出レ盆視中其根鬚不ニ甚牢固一處上劈開栽レ盆欲ニ變化多一盆則盆六更注灌用ニ浸豆汁一極肥舍レ此俱不レ堪レ用

秘傳花鏡云椶竹有ニ三種一上曰ニ筋頭一梗短葉垂可レ作ニ書几一次曰ニ短柄一可レ列ニ庭堦一再次曰ニ樸竹一節葉梗但可ニ削作ニ扇骨一細ニ微之一用ニ其幹一似レ竹非レ竹黑色有レ皮心實肉内有ニ白鬃紋一

竹譜詳錄云檳榔竹生ニ南海一見ニ杜臺卿淮賦一云賓郎之筍盛冬所レ育

○釋名

椶櫚竹 和漢三才圖會大和本草庶物類纂本草一家言本草啓蒙

本草綱目云椶櫚皮中毛縷如ニ馬之騣鬣一故名俗作ニ棕鬣一音閭鬛也又和名鈔云椶櫚ニ二音忽閭俗云ニ種魯一とみえたり今も俗に椶櫚をしゆろといへども枕草紙にはすろの木とみえたりそのすはそうの聲のつまりたるにてしゆはその聲の伸たるなり扨此竹幹葉すべて椶櫚に似たり故に椶櫚竹と名づく即和漢通名なり

犬椶櫚竹 大和本草啓蒙

犬は犬蓼犬山椒の犬の如し其形相似て異なるものをいふ

琉球椶櫚竹 本草啓蒙

觀音竹 和漢三才圖會本草啓蒙

此竹もと琉球の觀音山にいづ故に琉球椶櫚竹或は觀音竹ともいへりまた西土にて觀音竹といへるはこれと全く別種なり

椶竹 益部方物略記續竹譜本草綱目格古要論群芳譜秘傳花鏡嶺南雜記

桃枝竹 爾雅山海經桂海虞衡志八閩通志

此卽椶櫚竹乃櫚を省きしなり

ヲスベシ一處ニ叢生ス其莖杖ニシテ輕ク勁クシテ不レ折諸草木ノ内杖ニ用ユルモノ是ヲ尤ヨシトス

本草綱目啓蒙云椶竹和名シユロチク葉椶葉ニ似タル竹ナリ秘傳花鏡ニ筋頭、短棲、樸竹ノ三種ニ分ツ其筋頭ハ和名觀音チク又琉球シユロチクト云高サ尺餘ニ過ス琉産ナリ其短棲ハ高サ二尺餘ニ至ルソノ樸竹ハ和名イヌシユロチク高サ四五尺ニ至ル下品ナリ扇骨ニ用ユルハ此樸竹ナリ

尙書云篾席黼純 孔安國注云篾桃枝竹也

爾雅云桃枝四寸有節 郭璞注云今桃枝節間相去多四寸

岡村尙謙曰此卽今の犬椶櫚竹なり桂海虞衡志に說ところまた證とすべし

山海經云嶓家之山嚣水之上多ニ桃枝竹一

山海經圖讃云嶓家美竹厥號ニ桃枝一薄叢幽藹從容爵猗篁以安レ寢杖以扶レ危

桂海虞衡志云桃枝竹多生ニ石上一葉如ニ小椶櫚一人以ニ大者一爲レ杖

續竹譜云椶竹蜀中多有レ之皮葉皆似レ椶亦謂ニ之桃竹一

本草綱目云椶竹一名實竹其葉似レ椶可レ爲ニ柱杖一

益部方物略記云椶竹性叢産葉似レ椶有レ刺徑不ニ二三寸一或云桃竹未ニ得其詳一

又云葉椶身竹族生不レ蔓有レ皮無レ枝實中而幹

格古要論云椶竹出ニ西蜀廣西一葉如ニ椶櫚一其身似レ竹堅且實又名ニ桃竹一

典籍便覽云椶竹出ニ西蜀廣西一葉似ニ椶櫚一身似レ竹堅且實堪レ作ニ書竿一又嫩者名ニ桃絲竹一皆可レ作レ扇

格致鏡原云物類相感志椶櫚竹出ニ南海一葉似レ椶身斑可レ愛嶺表人用作レ杖心堅實亦名ニ陶杖一蜀中亦生復似ニ科藤之屬一也

嶺南雜記云椶竹幹如レ竹而實心密節皮青色外有ニ椶皮一節包レ之葉與レ竹無レ異最難レ長可レ爲レ杖

圓機活法云志林桃竹葉如レ椶身如レ竹密節而實中蓋天成柱杖也

養餘月令云桃竹古姚有レ之似ニ椶竹一而花紋粗質鬆色淡ニ於椶竹一蜀中貨至者多以作ニ書竿一妙甚一名桃絲竹

廣郡芳譜云桃竹葉如レ椶身如レ竹密節而實中犀理瘦骨蓋天成柱杖也出ニ巴渝一出レ豫者細文一節四寸北人呼爲ニ桃絲竹一續竹譜以爲桃竹卽椶竹椶竹

廣東新語云有ニ桃竹一產ニ青霞谷中一葉如ニ椶身一如レ竹密節而實中犀紋瘦骨高丈餘猺人以爲ニ弩弦一

古今要覽稿卷第三百八十

●草木部竹十八

椶櫚竹　しゆろちく

椶櫚竹は和漢通名にてその一名を椶竹一名桃竹一名桃枝竹一名陶竹一名桃絲竹一名實竹一名木竹一名石竹一名蒲葵竹一名古散竹一名綯竹一名桃笙といふ此種に大小の異なるあり其大なるを俗に犬椶櫚竹といひ漢名を樸竹といふ葉の狀全く椶櫚に似て少さく深綠色にして光澤ありその幹また椶櫚に似て至て細小にして高さ四五尺毛多く節繁く中心實して頗る實心竹の如し年を經るものは梢の葉間に七八寸の穗を抽出て細小華をつく狀金粟蘭(チヤラン)華に似てやゝ粗なり小なるを俗に琉球椶櫚竹一名觀音竹といひ漢名を筋頭といふその狀大椶櫚竹に似て至て少さく高さ僅に一尺許に過す葉は淡綠にして薄く光澤ありて葉の先すへて下垂するものは此竹の天稟なり又一種椶櫚竹あり漢名を短栖といふその葉幹また大椶櫚竹に似て高さ僅に二尺許に過ざるを異とす近時別に一種觀音竹といふものあり其葉厚して大椶櫚竹よりも濶く色深綠にして葉先下垂せす幹最肥大にして毛あり其幹三五年をふるものは大椶櫚竹とおなしく梢の葉間に穗をなし華をつく狀及己華に似てはじめ淡黃色にして後白色に變じまた根上より每幹おの〳〵筍を抽て叢生恰も枝の如しこれ尋常の椶櫚竹に異なるところなり思ふに此種は杜臺卿の淮賦にいはゆる檳榔竹にてもあるべきにや

和漢三才圖會云按椶櫚竹來ニ於琉球一葉似ニ椶櫚葉一而無レ枝高者丈餘身有ニ黑毛一節不レ高喜ニ陰處一惡ニ風日霜雪一年久者開レ花亦似ニ椶櫚花一其竹不ニ中空一故雖レ曰ニ實竹一爲レ節弱脆

又云觀音竹卽椶竹之小者人植レ盆玩レ之初出ニ琉球觀音山一故名レ之

大和本草云椶竹ニ大小アリ大ニ二種アリ一種ハ葉短クツヨシ小ニシテ不レ高一種ハ色淡黑葉六ニ莖高ク長ジヤスシ是ヲ犬椶櫚竹ト云フ

又別ニ一種小椶竹アリ甚小也盆ニ植テ可レ愛葉莖與レ大同性甚寒ヲオソル暖處ニ宜シ冬春ハ上ニオホヒ

○釋名

五枚篠（和漢三才圖會）
此篠毎節間五葉を生ずるによりて名づく

豐後篠（增補地錦抄）
此篠もと豐後より來る故に名づく

おかめざゝ（俗稱）
近時歳暮處々の市福女の面を此篠に結付てひさぐによりて此名有り

○正誤

和漢三才圖會云五枚篠所謂越王竹高止ニ尺餘一者此等之類乎

南方草木狀云越王竹根生ニ石上一若ニ細荻一高尺餘南海有レ之南人愛ニ其青色一用爲ニ酒籌一云越王棄ニ餘算ニ而竹生これによれば越王竹は小竹なりといへども五枚篠の類とは異也また一種越王筋竹あり竹譜詳錄に番禺志を引て細如ニ箭幹一毎ニ一節一可レ爲ニ一筋ニ故呼ニ越王筋竹一とみえたれば此竹も五枚篠よりはその節間至て疎なるもの也

ちまきざゝは卽白箬竹の一種なりその幹極めて細小にして頗る箸の如し高さ三四尺その葉大抵六七葉を以て一朶とす長さ五寸餘ひろさ一寸二三分葉すべて上に向きて下垂する事なくまた年を經るといへ共葉邊さらに變白せざるものは卽此さゝの性也

竹譜詳錄云白箬竹所在有レ之莖小ニ於箸一葉如ニ掌大一而長

『此間彩畫一葉ちまきざゝ略レ之』

〇釋名

ちまきざゝ　俗稱

此葉角黍をつゝむによろし故に此名ありまた熊篠小熊篠等をも所によりてちまきざゝといへるは共に角黍をつゝむによりてなれば此ものに拘はりしにはあらず

五枚篠　おかめざゝ

五枚篠一名豐後篠一名おかめざゝは高さ一尺八九寸より或は三四尺に至るその幹極めて細小なりといへ共毎節隆起する事頗る雄竹の如し此竹すべて根上二三節より三枝或は四枝を分ちて三葉四葉を一蓋としそれより以上は毎節五枝を別ちて五葉を一蓋とすその枝長さ四五分にして二節あり葉は卽其二節上より生じて蓋をなすを以てこれを熟視せざる時は唯葉莖のみにして枝なきが如し其梢上に至りてはまた三枝を生じ三葉を一蓋とする事なを根上の二三節と同じ扨根上の三葉節の左側に付て生ずる時は其次の五葉は必ず節の右側に生じ二葉は左に向三葉は右に向ふその右に向ふ三葉は中の一葉大にして左右の二葉はやゝ小さし其大なる一葉は左に向二葉の小さきは根上の三葉とその大さ略同じその葉の狀大抵雄竹に似て雄竹よりは短くまた濶大にして甚薄しその幹すべて葉のつくかたは扁にして中に一線路高く起り葉のつかざるかたは全く正圓なる事常竹と一樣なり今人此竹を採灑を去りて箸とす甚だ雅趣ありまた此筍は四月の末五月のはじめに生じ狀茅針に似てやゝ扁たく其籜紅紫淡黃の兩色相交りて別に紅紫色の細縱道ある事全くはちくの如し

和漢三才圖會云五枚篠高尺餘葉深靑色似ニ篠竹葉一而短毎莖五葉叢生能繁茂植ニ庭院一玩レ之

增補地錦抄云豐後篠はくまざゝに少し似て各別なり

『此間彩畫二葉五枚篠略レ之』

かる丶故やき葉といふ
又云小ぐまざ丶は熊笹のちいさきもの也
江戸砂子云笹寺は四谷山長善寺といふ大木戸の前にあり當寺を笹寺といふは寛永の比御鷹野の時立よらせ給ふ其比は寺號なく長善庵といふ庵室なり此所藪の中にて小笹隈笹深かりければ笹寺とよぶべしと嚴命ありしと也むかしをうしなはざるしるしとて方一坪笹を植てかこむなり
竹譜詳錄云福州西鄕安樂村有ニ箬竹一一種葉大長三尺廣六寸餘新安志云箬竹羅生葉大可ニ以苴裏一本經逢原云箬生小竹而葉最大故可ニ以之爲レ笠
通雅云箬葉大可ニ裏レ粽夾レ篷者也
閩書南產志云箬葉竹其葉可ニ以作レ篷
肇慶府志云箬葉如レ葦而葉極多舟人作レ篷皆用俗呼ニ次篷葉一
建昌縣志云箬竹幹小葉大篷笠之用
邵武府志云箬竹其幹高不レ過ニ尋大一而葉獨大ニ於諸竹一今人以製ニ般篷及籠一皆此端午人家用以糉
南昌府志云箬竹幹小葉長大可レ造ニ篷笠一
福寧州志云箬葉大可レ爲レ篷莖如レ箭
杭州府志云篛竹與レ箬同葉長濶可レ爲ニ角黍一
八閩通志云篛葉似ニ竹葉一而大舟人以製レ篷者
右本經逢原以下の引書は庶物類纂に引所を以て再びこゝに載せしなり
『此間彩畫くまざゝ二葉略レ之』

〇釋名

熊笹　庶物類纂和漢三才圖會本草一家言
按に熊笹は隈篠の意にて葉にくまあるによりて名づく
馬笹　和漢三才圖會
馬は葉の大なるによりて名づく
燒葉笹　增補地錦抄
名義上にみえたり和漢三才圖會にいはゆる燒葉ざさは卽熊笹の一種小なるものなればこれと同名異物也
へりとりざゝ　越前方言
此卽隈篠の意なり
箬竹　竹譜詳錄本經逢原
玉篇に箬而灼切竹大葉也篛同上とみえたり

ちまきざゝ

按に竹魚は筍の狀魚尾の如くまた細魚の如きものなるに今蚱蜢竹のその葉糾結して蟲狀の如きものと混同せしは誤れり

くまざゝ　やきばざゝ

くまざゝ一名うまざゝ一名やきばざゝ一名へりとりざゝは漢名を箬竹一名篛竹といふ其幹矢竹に似て細小にして高さ凡三四尺或は六七尺その三四尺のものは毎節相さる事三四寸にして六七尺のものはそれに準じて稍疎なりその枝はまた矢竹の如く獨枝にして長し一幹中四枝或は五枝を生ず又一幹獨立して絕て枝なきものあればその枝却て本幹より太きもありすべて一樣ならずといへ共其葉は梢抄に横出して頗る傘蓋の如し毎梢大抵六葉にして下の一葉は甚細小なれどもその餘の五葉は長大にして長さおの〳〵七寸餘廣さ二寸許新葉はすべて青色にしてその正中に黃白色なる一縱道ありて葉本より葉先に至るその左右また相並びて細十線路ありてともに二十線路葉本より葉先に至る事全く正中の一縱道に同じその老葉は葉の周圍皆三分許變白して恰も刀劍の燒刄に異ならずまたその葉中に方解石の細小なるものを並べし如くにかどだちたる斑文をなすものあり和漢三才圖會に秋出二縱文點一黃白色といへるは蓋しこれをさしていひしなるべし一種こぐまざゝあり其高さ六七寸或は一尺許にて一幹に兩三枝を生ずるものあればまた本幹のみにして傍枝なきもありてその頭おの〳〵五葉或は四葉をつく狀くまざゝに似てやゝ小なり此葉も若き時は青色にして老る時は葉邊一分許變白する事くまざゝに同じまた和漢三才圖會にくまざゝ燒葉ざゝを以て兩種とし燒葉ざゝはその高さ不過尺といへるは卽此こくまざゝの事なるべし扨くまざゝは諸國山中極めて多きものにて江都にも處々これあるがうちに四谷大木戸の前なる笹寺のもの其名殊に高しこれは寛永の比御鷹狩の時この寺に立よらせ給ひしにそこにこざゝ熊ざゝいと多かりけるをみそなはし給ひて以來は笹寺とよぶべしと上意ありしよし江戸砂子にみえたり今も方一坪程にくまざゝを植置しは卽その遺跡なりといへり

和漢三才圖會云馬篠葉大一枝六七葉其大者尺許廣二寸至レ秋出二縱文點一黃白色甚美

增補地錦抄云燒葉笹はくまざゝの事也葉のへり白く

て筍を幹中の節間に生じて梢上の葉間には生ぜざるを異なりとす又或人の説にさゝうをは卽木葉石の類にて竹葉のをのれと水中に枯落しが年を經て遂に魚に化せしなり故に半體は既に魚に化すれども半體はいまだ化せずして竹葉のまゝなるものまれにあり此魚を產する所は飛驒國舘が嶽あたりの溪澗にてこれ眞のさゝうをなりといへるは卽同名異物なり凡無情の有情に化するその類多ければ竹葉の魚に化することかならず有まじき事にもあらず

飛驒人荏野翁云篠魚こそあやしき物には有けれ吉城郡高原郷のおくなる平湯のむらてふところにのみありて此飛驒のくにのうちにても餘所にありてふ事をさ〳〵きこえず笹のもとの節に枝にはあらで魚の形して成出たりさみだれの雨を得て谷水に落ひたりてやがて鰭ふり出てつひにいはなといふ物になれりといへり其岩魚てふものは鱒の子の二年へたるばかりにて喰たる味も見たるさまも大かたますの子にかはれるところなきをいさゝか文のたがへるのみなりけり山河の岩間の淵にすめば然は名によぶなるべしいたく年經たるは三尺にあまるばかりなるも有となん竹根の蟬となり山薯蕷のむなぎに成てふたゝびたましひなきものゝ魂ある物になれる例すくなからねば是はたそら言と強ていひくだすべきにもあらじかし

竹譜詳錄云 魚尾竹西蜀邛州四十里許 白鶴山白鶴觀ニ古者仙人ノ四月老翁得道之所其山生ニ細竹ノ葉土毎ニ一梢末ニ有ニ細簳ノ左右相對一二寸許ニ簳亦對生如ニ魚尾狀ニ視レ之宛如ニ細魚ノ人傳四月老翁釣レ魚其下折レ竹貫レ之遂成ニ此種ニ又名ニ穿魚ニ

『此間彩畵さゝうを四葉墨畵同ニ二葉略レ之』

○釋名

さゝうを飛驒國方言

此卽小竹魚の義なり

魚尾竹竹譜詳錄

名義書にみえたり

穿魚同上

名義上に同じ

○正誤

國史草木昆蟲攷云さゝうをは今諸所にあり陶穀清異錄云江湖有ニ一種ノ其葉糾結如ニ蟲狀ノ 山民此曰ニ蚱蜢竹ノ卽これ也

按に篃を山海經には䉋に作る廣雅及び玉篇に篃莫悲切竹名また𥳑美秘切竹長節深根者とみえたりされども江南のものは概節なる事既に竹譜にいへるかごとし

篏竹同上

本書に江漢の方言なりといへり玉篇云篏苦怪切竹箭也然れば此竹箭に作るべきものなるによりて名づく

篏笴同上

漢中の方言なり玉篇云簳各干切箭簳竹也笴同上とみえたるにて其分はしるし

箭竿太平御覽引竹譜

竹譜云篃竹溪江間謂二之箭竿一とみえたり今本竹譜此文なしされど箭竿といひ箭笴といへるは同意なり

竿篏彙書詳注

按に筍譜に竹譜を引て篃竹江漢間謂二之竿篏一とみえ太平御覽に引書はその江漢を溪江に作り竿篏を箭竿に作るまた玉篇に篏蘇旱切篃篏又桑葛切廣雅に篃文素篏但桃支也とみえたりこれによれば篏は桃支竹の誤なりされば竿篏は箭竿の誤りにて鄧善長はその誤をうけていへるなり

湘箬閩中賦

按に湘は地名にて箬は此葉の大なるを比していふ

篛廣雅

曹憲音至とみえたり

○正誤

彙書詳注云篃竹高一尺葉大如レ履

按に竹譜に篃竹一尺數節といへるは此竹の概節なるによりてなり然るを今高さ一尺といへるは誤なり

さゝうを

さゝうをは飛驒國吉城郡高原郷の奥平湯の村にのみ生ずる竹筍の名なり此竹は熊篠の類にて幹細く葉大なりその節間より母竹に似やはしからざる一巨筍を生じて長さ五七寸圍み二寸五分許細魚に似て每籜魚鱗の如しその國の人の說に岩などいふ魚になるといへり此卽西土にいはゆる魚尾竹 一名穿魚なる べし此種は 諸國時にこれ あるもの といへども 飛驒國に產するもの殊にその名高しされども皇朝の產はすべ

筍は魏の時漢中の大守王圖が奉りしものにて冬生ずるよし（同上）或は夏秋にいづると（竹譜詳錄）いひ或は冬夏に生ずるとも（五雜俎）いへりこれは其風土の寒暖によりてそれ〴〵に遲速あるものなれば別種にはあらず一種長節のものあり郭璞注山海經に今漢中郡出二箭竹一厚裏而長節根深筍冬生二地中一といへるによれば王圖が奉りしは蓋し此竹の筍にてその密節なるは即江漢の産なり扨後漢書冦恂傳に伐二淇園之竹一爲レ矢百餘萬とみえたりその淇園はもと殷の紂王の竹箭園なれば此竹を以て矢に作るもその由來久しまた此種は古より邦産絕てなきものなれども既に長崎より此葉をめづらしみて携來るものまたこれあるのみならず詩の菉竹は即此篃竹なる事を世にしるもの少なければ多識の一助ともなさんもの也

竹譜云 篃亦箘徒概節 而短江漢之間謂二之䈆竹一 自注引二山海經一云其竹名レ篃生非二一處一江南山谷所レ饒也故是箭竹類一尺數節葉大如レ履可二以作一レ篷亦中作レ矢其筍冬生廣志云魏時漢中大守王圖每レ冬獻レ筍俗謂二之䈆笴一

又云根深耐レ寒茂二彼淇苑一 自注云北土寒冰至レ冬地凍竹根類淺故不レ能レ植唯䈆根深故能晚生淇園衞地殷紂竹箭園也見二鮑彪志一淮南子云烏號之弓貫二淇衞之箭一也毛詩所謂瞻二彼淇澳一綠竹猗々是也

筍譜云鄗竹筍自注云長節而深根筍冬夏皆生郷人堀レ土取レ筍廣志作二篃竹一可レ作二屋椽一山海經同也

又云篃筍自注引二竹譜一云江漢間謂二之竿䈆一一赤數葉葉大如レ履可二以作一レ篷今詳二葉如一レ履即王彪之閩中賦云湘箬也其筍亦不レ大止是箬葉異二諸竹一耳又此竹與二鄗竹一同也

五雜組云篃竹細竹也 長數尺許其筍 冬夏生可レ食近日黃白仲詩有二篃竹爲一レ椽之語一誤矣

本草彙言云篃竹一尺數節亦可レ作レ矢葉大如レ扇俗謂二之䈆笴一可二以作一レ篷

又云細竹若レ箭可二以作一レ箭

山海經云英山云々其陽多二節䈆一

又云牡山云々其下多二竹箭竹䈆一

又云暴山云々其下多二竹箭䈆箘一

廣雅云箭䈆（嫗䉥）至也

○釋名

篃竹（竹譜）

みすゞ 萬葉集

みは三熊野などのみと同じくほめたる詞なれば本書に水薦と書たるは假借なり

のすゞ 日本書紀

本書に野薦の字を用ひしによれば即野生のものをいふなり

すゞだけ 本草一家言

本書に鈴竹の字を用ひたり即假借なり

やのたけ 和漢三才圖會

此即箭篦竹の義なり

やまだけ 越前方言

按に東陽縣志に山竹の名あり即和漢通名也

箬箭 山居賦

此葉箬に似てその簳箭に作るべし故に名づく

箈 周禮爾疋

説文云箈竹萌也从ㇾ竹怠聲按に心部云怠从ㇾ心台聲口部云台从ㇾ口㠯聲とこれにて箈字の古聲を押はかるべし

箭萠 筍譜

僧賛寧曰初生謂二之萠一

○正誤

日本書紀云野篤（ノスヾ）

或人云篤は篶の誤りなるべし今按に説文に薦獸之所ㇾ食草也从ㇾ廌从ㇾ草古者神人以ㇾ薦遺二黄帝一々曰何食何處曰食ㇾ薦夏處二水澤一冬處二松柏一とみえたれば薦は即竹の名にあらざれば或人の説しかるべしされども竹譜詳錄に篶竹一如二紫竹一但色正黒耳といへるはすゞ竹とはその物異なり冠辭考の標注にすゞ竹はしの竹の類にていとちいさくて黒き竹なり四國などにてすゞといふていへるは蓋し鵑胡淡竹の類なるべし凡しやこたん竹はこのすゞ竹とその枝葉全く一様にしてたゞその本幹に紫黒斑紋あるものなれば古はこれをも押なべてすゞとはいひしものなるべきにや猶考ふべし

篃竹

篃竹一名篾竹一名篾笴一名箭竿一名竿簳一名湘箬一名篛は箭竹の類にて一尺の間に數節ありその葉大さ履の如く竹譜また扇の如し本草彙言此竹は詩衛風にいはゆる淇澳の綠竹竹譜にしてその葉は今長崎に來れる商舶の箬葉と同じく篷に作れるものなり邦産絶てなし此

此すゞは鞍馬の福にてさぶらふぞさればとて又むかでめすなよ（和訓栞云筍の皮をむかぬを蜈蚣に寄ていへり蜈蚣は鞍馬の福といひならへり今白きを貴べりスヾも煤を寄てよめるにや）

和漢三才圖會云箭篦竹葉大ニ於馬篠ー而竹似ニ鳳尾竹ー節間長肉最厚硬用作ニ箭篦ー甚佳出ニ於肥州大村ー本草一家言云一種似レ箸而幹高本根屈曲筍甜可レ食代ニ歟冬莖ー饒食俗呼ニ鈴竹ー即箸類也

用藥須知云箈（按蕨正文當レ作レ意）スヾタケノコ箭竹蔛也出ニ禮記內則ー

周禮（職方氏）云東南曰ニ揚州ー其利金錫竹箭

爾雅（釋地）云東南之美者有ニ會稽之竹箭ー

山海經云竹山云々其陽多ニ竹箭ー也（箭篠）

又云羭次之山云々其下多ニ竹箭ー

又云翠山云々其下多ニ竹箭ー

又云綦山云々其下多ニ竹箭䉋箘ー

山居賦云二箭殊レ葉箬箭大葉云々

華夷花木考云篠幹小節長葉大堪レ作レ箭俗呼曰ニ箭竹ー

會稽縣志云箭竹別名曰レ篠幹直可ニ以爲レ矢所謂會稽竹箭是也

邵武府志云篠竹一名箭竹幹小節長可ニ以爲レ箭周禮楊州之域其利金錫竹箭是也

東陽縣志云山竹幹細而節長可レ以ニ筆管ー筍味極佳土人採レ之入ニ城市ー即爭取レ之所在皆是箭竹中實如レ箭葉甚大俗名ニ箭箬ー利用實多

筍譜云一名篠自注云箭竹蔛即會稽箭竹也

又云周禮楊州之利竹箭亦有ニ篠蔛之別名ー矣擧ニ成數實物ー惟筍箭蔛也皆四月生也

○釋名

すゞ（新古今集　風雅集）

冠辭考に古事紀の須々鉤（スヾ）を神代紀に踉蹡鉤（スヾチ）と書たるはすゞろく意也同紀に美人驚而立走伊須々岐伎（伊は發語下の伎は氣利反にて辭なり）といふも立走すゞろきたる也此外祝詞などにも多しとみえたりされはすゞは此竹風吹時は大葉細竿の故を以て常竹よりはすゞろきぬるを以て名付しなるべしまた岡村尙謙の說にはすずはさゝと同意にて物の細小なるをいへる古語なれば鷦鷯をさゞき雀をすゞめといへる類なるべし又風雅集にすゞか竹かといへるによればすゞはもと筍の名にて此筍の細小なるをさしていひしなるべしといへり

古今要覽稿卷第三百七十九

●草木部 竹十七

すゞ　やまだけ

すゞ一名みすゞ一名すゞたけ一名やのたけ一名やま竹は漢名を箬箭といひ筍をすゞだけのこ漢名を簝一名箭筎といふこれは雪國の山に生ずる小竹にして信濃に多し（詞草小苑）その葉箬に似て幹高く本根屈曲すと（本草一家言）いへりまた加賀越前等に産するものはその葉箬よりも至て長大にして葉邊變白せず幹は矢竹に似て每節平かにして高さ一丈許大さ指の如しまた肥前の大村よりいづるものはその節間殊に長し（和漢三才圖會）即一物なり歌には大和の吉野山城の鞍馬紀伊の熊野等の諸山のもの其名高しされど太古の時五百箇野篶（イホツノスヾ）と（日本書紀）いへるは山生のものにはあらず此筍籜青綠にしてその籜枯るときは色白しすべて北國地方にては大竹稀なるを以て土民古より此筍を採て雪花菜に鹽をまじへて藏し置て食用とす西土にても周禮に簝菹鴈醢といひ爾雅に簝箭筎といへるは即此竹の筍なれば彼土にても此筍を食用に供せしかは由て來ること久しき事なり扨西土にて矢に作れる竹數種ありといへ共古より會稽に産するものその名高く即今のすゞたけにして山居賦にいはゆる箬箭なれば和漢三才圖會にいはゆる大村の箭竹葉大ニ於馬篠一といへるに暗合のもの也蓋し大村の産は此竹のその所を得て本根といへ共屈曲せず矢に作るには至てよろしきものなるべしされども古より皇朝にて矢に作りしは尋常の笄箭にして此箬箭を用ゆる事を聞ず凡箬箭は諸國山中に極めて多きものなれば今より後は肥前人の用ひしにならひて此竹を以て矢に作りなばその勁强西土會稽の産にも劣らざる事明らけし

日本書紀（神代卷）云使下山雷者採二五百箇眞坂樹（イホツマサカキノヤソタマクシ）八十玉籤一野槌者採中五百箇野篶（イホツノスヾノヤツタマクシ）八十玉籤上

萬葉集卷第二（相聞）云水篶（ミスヾカル）刈信濃乃眞弓云々

風雅和歌集卷第二十賀歌云たかむなのほそきを奉られて是はすゞか竹かいづれと見わきてと云々

古今著聞集云石泉法印祐性鞍馬寺の別當にて彼よりすゞを多くまうけたるを或人の許へ遣すとてよめる

仰葉竹同上
名義字のごとし
村松竹
村松竹は越後國村松に產する竹にして其幹矢竹と一樣なりといへども每節矢竹よりも密にして其間僅に三寸より三寸五分をすぎずその性柔靭にして折難きによりて領主堀丹波守の藩にては皆此竹を以て打毬杖を作れり扨皇朝にて矢をつくるには其篦長さ人々によりておの〳〵たがひありといへどもその人の腹中より中指の先に至るを以て度とす節はいづれも四節あるを撰びてその內の一節はかならず羽のうちにあるを佳とすされども此村松竹は節ごとにすゑこけて其節密なるのみならず枝を生ずるかたの凹處至て深ければ矢にはつくり難きものなるべし岡村尙謙曰予いまだ村松竹の葉を親見せずといへども此竹は蓋しすゝ竹の一種密節なるものにて其葉極めて大なるべしいかにとなれば此節の枝を生ずるかたの凹處圓にして極めて深し凡凹處圓にして深き竹は此竹のみならずすべて其葉は大なるものなればなりといひ竹譜に箘亦箘徒 概節而短 又云是箭竹類 一尺數節葉大如レ履といへるは即此竹の事なるべしといへりいまだその實をしらず
○釋名
村松竹越後方言
村松は即地名なり

笄は此葉の狀相似たるをいふ

箭幹竹廣西通志

此幹箭に作るべし故に名づく

一種矢竹

一種の矢竹は今松平越中守大塚の下邸にありその高さ大抵五六尺にして枝幹全く矢竹のごとし葉もまた矢竹に似て五葉或は四葉を以て一朶としその上葉はすべて二葉相對して毎葉白色間道ありまた一株のうちといへども間道なくしてその色矢竹と一樣なるも交はれり此種は往時淸俗の攜到せしを長崎より輸せしものなりといひ傳ふその他またこれあることを云らず

『此間彩畫一種やだけ圖略レ之』

通絲竹

通絲竹は枝幹幷に矢竹に似て節の平らなる事も亦矢竹の如しその葉皆仰出して上に向ひ下垂する事なきは此竹の性也その葉の狀矢竹よりも極めて細小にして長さ一尺許廣さ三四方をすぎず毎莖おほよそ五葉を以て一朶とし其五葉のうちにて上の二葉は對生にして下の三葉は互生なりその幹新年のものは籜ありといへども年を經れば皆落る事矢竹の如し此種その根蔓盤結して叢生數十百幹にいたるもの今松平越中守大塚の下邸にあり一種仰葉竹ありその竹前條と一樣にして毎莖上八九葉或は六七葉つくるを異なりとす此種今巣鴨の種樹家にあり岡村尙鎌曰書乃孔傳に箘簵美竹也とみえたりされば此竹矢竹種類のうちにてことに美なるものなればけだし本文にいはゆる箘簵にしてまた常の矢竹は葉の廣さ一寸許なれ共これは僅三四分を過ざれば山居賦にいはゆる笄箭なるべし扨古人の此竹を撰みて矢に作るものはその幹の直上するのみならず葉にても直立して絕て餘竹と異なるは矢の直達するに其形狀もよく叶ひぬるが故なるべしとこれまた一說なり尙考ふべし

『此間彩畫通絲種圖略レ之』

○釋名

通絲竹種樹家稱

此葉極めて細長なるを以て遠くこれを望むときは恰も絲の如くまたいたつて細になるものは葉の長さ二寸許廣さ一分をすぎざれば近くよりてもなを絲のごとし故に此名を命せし



○釋名

の 和名類聚鈔
和訓栞に箆をのとよむは矢の度なるべし今按に神代巻に云天照大神背負三千箭之靫ユキ（千箭此云知能梨）とみえたればのは即のりの下略にてのりは即箭字の古訓なり

のだけ 増補地錦鈔 東雅
此即矢竹の義なり

やだけ 江都方言

やのだけ 和漢三才圖會 庶物類纂 大和本草 本草一家言
此即箭幹竹の義なり扨箭幹竹の名廣西通志にみえたれば即和漢同名なり

箘簬 尙書 呂氏春秋
按に木に箘桂あり草に簬草あり即甘草の一名なり又栞に簬莖栞ありともに此箘簬より出し名なればその物をみて此竹の大さをしるべし扨鄭玄の說に箘簬は兩種竹也といへども說文には箘箘簬也簬箘簬也古文簬从レ輅といへるは全く一竹にて其說孔傳と同じければ今これにしたがふ

笄箭 山居賦

とて僅に一葉を送りしを親見するに其狀尋常の矢竹の葉に似て少しく厚きやうにおもはるゝのみなれば江戸砂子にいはゆる葉の先丸きものとはこれも異なり一說に傳敎大師携來りし竹は比叡山の竹林院にありといへりいまだその實をしらず

日本書紀（天武紀）云十一年十一月癸卯朔甲辰筑紫大宰請ニ儲用物ニ絁一百疋云々箭竹二千連送ニ下於筑紫一

延喜式（織部司）云凡雜機用度料篦竹河竹各百株每年山城國進又篦六百株大和國進

又（造酒司）云新給料云々篦竹卅株（作ニ匳口一及餝柄料一）

又（同上）云鎭魂祭料云々篦竹六株

又（主膳式）云主膳監年料云々篦竹八十株

又（內匠寮）云篦竹百五十株

又（集人司）云凡應レ供ニ大嘗會一竹器云々蒸笥七十二口煠籠七十二口（籸篦竹口別六株）乾索餠籠二十四口（口別十三株）籮六口（口別十五株）預前造備送ニ宮內省一

又（同上）云年料竹器云々薰籠大一口（口徑二尺二寸高二尺七寸）料篦竹五千株中一口（口徑一尺八寸高二尺）料篦竹卅株漉紙簀十枚（長各二尺四寸廣一尺四寸）料篦竹各廿株茶籠廿枚（方二尺）料篦竹各六株

和名類聚鈔（竹類）引ニ唐韻一云篦（音毘和名乃）箭竹名也

大和本草云矢篦竹ハ節ヒキク直シ肉厚ク葉大ナリ篠竹ノ類ナリ

本草一家言云箭竹可ニ以爲ニ箭幹一丹波州多出レ之充ニ筆管用一

本草啓蒙云箭竹ハ形狀メダケニ似テ細ク葉篛葉ノ如シ

尙書（禹貢）云惟箘簬楛

　孔傳云箘簬美竹也鄭注云箘簬是兩種竹也

竹譜云箘簬載レ籍貢名ニ荊鄙一

又云箘簬二竹（按此說原ニ於鄭注一）亦皆中レ矢皆出ニ雲夢之澤一禹貢篇出レ荊書云底ニ貢厥名一言下其有ニ美名一故貢上之也大較故是會稽箭類耳皮特黑澁以レ此爲レ異呂氏春秋云駱越之箘然則南越亦產不ニ但荊一也

山居賦云二箭殊レ葉笄箭細葉云々

爾雅翼云箘簬亦堪レ爲ニ矢箭一大者爲レ筆

廣西通志云箭幹竹節密肉厚

　按にこゝに節密といへるは會稽の箭竹節間三尺とあるにむかへていへるものなれば卽今の矢竹なるべし

古今要覽稿卷第三百七十八

●草木部 竹十六

の　やだけ

の一名のだけ一名やだけ一名やのたけは漢名を箘簬一名笄箭一名箭幹竹といふものふときものは中指よりふとくほそきものは季指よりも細し高さ大抵八九尺より一丈許に至るその節女竹よりも平かにしてすこぶる蘆節に似たり每節相さる事凡八九寸或は一尺餘枝は始より獨枝にして双枝のものなしその梢にいたれば双枝あるひは三枝なるもあれども女竹の始より三五枝を叢生するものとは其性同からず葉は長さ一尺餘廣さ一寸許にて一朶に四葉五葉或は七八葉のものありといへども葉さき對生にしてその餘は常竹のごとくすべて互生なり此竹新年のものは女竹とおなじく籜落すといへども年をふるものは多くはしからず凡古より皇朝にて矢に作りし竹は此竹にてそれを延喜の比には山城大和より貢せし也延喜式既に天武天皇の御時箭竹二千連を太宰府に送り下せしもまた畿内の産なるべし今も年毎に大和の芳野より難波の大城へ此竹二千二百幹を貢するよし扶桑紀行また備中の矢島及び丹波等にも此竹を産しその餘の諸國にもまた極めて多し今江都にて皆人使用するものは上總より來るといふさて延喜の比は此竹をもつて熬筒煠籠薫籠及び籮茶籠等をつくりしものなれども今竹器をつくるにはおほく篠竹或は箱根竹或は淡苦の二竹を用ひて此竹を用る事を聞ず一種天台竹一名影向竹といふものあり今東叡山瑠璃殿の左右にありてその枝葉全く矢竹に似て矢竹よりは細小なりおもふに此種はもと尋常の矢竹を移し植しものなるべけれども竹臺の瘠地なるによりてかくはなりしものなるべしされば江戸砂子に影向竹は上野中堂の前にありて葉のさき丸くあとさきなきやうにて常の竹とは異なりとみえしは今あるものと別種なるもしるべからずまた同書に此竹もと天竺祇園精舍の竹を宸且の天台山へ移されしを傳教大師の持來りて山城の比叡山中堂の前に植置れしを再び東叡山に移せしもの也とみえたり岡村尙謙曰近頃京師の人予に比叡山の竹葉なり

にがたけは苦竹の義にてなよ竹をにが竹といへるはこれと同名異物なり

苦竹名醫別錄圖經本草

台州府志云苦以二筍味苦一故名レ之

甜苦筍圖經本草

此筍味甜にして苦を帶ふ故に名づく

○正誤

和漢三才圖會云苦竹和名加波多介其筍籜紫斑味苦辛云々

大和本草云苦竹國俗呉竹ト云又眞竹ト云

按に呉竹ははちく類の甘竹にしてかは竹はなよ竹の苦竹なれば此二說並に非なり扨眞竹の苦竹の此邦に渡りこしはいづれの比なるか其始をしらずといへども梶原性全の頓醫抄に淡竹をから竹と訓じ苦竹をにがたけと訓ずそのから竹は呉竹の意にてにがたけは苦竹の義なれば此にが竹はなよ竹しのめなどの味苦きものをさしていひしにあらざるは今と同じ事なるを以て多識編にも苦竹和名にがたけ今按末太計とみえたりさればま竹苦竹の渡りこしは嘉暦の頃よりははるかに以前の事にてもあるべきにや凡竹の種類甚だ多しと云どもま竹苦竹より外に極めて長大なる竹はあるまじければ此竹をこそ古よりおほ竹といふべけれ然るを和名鈔に楊氏漢語抄を引て淡竹を以ておほだけと訓じ却てま竹苦竹の長大なるものを載せざればその比までは淡竹より外に長大なる竹はなき事明らけしされば三才圖會にま竹の苦竹を以て川竹の苦竹とせしは其物を混同せしのみならず絕て古に此竹なき事をしらざる誤り也

本草一家言云護基竹名末竹（マダケ）

按にまだけは五月筍を生じて其味少しく苦きものなるに今以て護基竹となすは誤れり護基竹は汝南圃史に四月生レ筍肥而甘とみえたるにてその義は明らけし

るとはさらにもいはず或は樹木の陰にありて殊に日光をうけざるものはその竹脆軟にして萬竿並立といへども常に風のために動搖せらるゝものは甚勁堅なり又節低きものを佳品とし秋採ものを上品とす扨舊より弓材に用ひし竹は皆まだけにて山城志に葛城郡太秦嵯峨二村産者勁堅といへども今は同郡八幡山に産するものを以て最上とし且その弓材にきり採し跡のいを厚き根本はすべて刀劍の目針に用ゆるといへり扨ま竹の筍ははちくよりをくれて五月の比に生じその籜上に紫斑點ありその長大なるは味少しく苦くやゝ簽を帶といへどもその地上を抽出る事僅に四五寸の時其根下を深くほり穿ちて採得るものは味殊に甘美にして淡竹筍よりも勝れるはこれ予が常に試むる處なり

和漢三才圖會云苦竹有ㇾ白有ㇾ紫其筍味苦籜紫斑其竹色青節間不ㇾ促大者周一尺六寸長六七丈

大和本草云苦竹國俗直竹ト云筍ノ味微苦シハチクニヲトレリ筍生ズル事ヲソシ其大ナル者周リ尺餘其籜紫白色斑文アリ用テ笠トシ履ノ緒トス其外用多シ

庖厨備要和名本草云苦筍マダケノ子ナルベシ諸家タダ苦竹筍ヲ最貴トス然レドモ苦竹ニ二種アリ其竹粗大ナルハ味殊ニ苦シ竹肉アツク葉長大ナルハ筍ノ味スコシ苦シ俗ニ甜苦筍ト云食品ニヨロシ

本草綱目啓蒙云筍ヲクレテ出テ味蘞籜ニ斑點アルモノヲ苦竹ト云俗名マダケ

圖經本草云苦竹有㆓二種㆒一出㆓江西閩中㆒本極粗大筍味殊苦不ㇾ可ㇾ噉一出㆓江浙㆒肉厚而葉長濶筍微有㆓苦味㆒俗呼㆓甜苦筍㆒是也

竹譜詳錄云苦竹處々有ㇾ之其種二十有二北方有㆓二種㆒一種節稀而堅厚叢生枝短葉長一種與㆓淡竹㆒無ㇾ異但筍味差苦江西及谿洞中出者本極大筍味甚苦不ㇾ可ㇾ食浙西出者筍微苦可ㇾ食云々

閩書南山志云若竹笋苦而味佳

『此間彩畫ニ一葉末竹略ㇾ之』

○釋名

まだけ 增補多識編本朝食鑑食用簡便

本草一家言にまは斑字の意にてまだら竹の省呼なりといへり

こまだけ 近在方言

にがたけ 頓醫抄多識編宜禁本草

竹譜詳錄引ニ新安ニ志云篁竹筍類ニ紫筍ニ不レ可レ食

按にかじろ竹はその筍はちくと同じく味淡甘なるを今不レ可レ食といへるはいかゞされども西土には篁竹の一種にその筍食ふべからざるものありしにや疑はし

まだけ　にが竹

まだけ一名にが竹は漢名を苦竹といひ筍を甜苦筍といふ近道處在これあるものは多く細小のものなりといへども青梅練馬村及び下總松戸邊に出るものは肥大にして圍み一尺餘長さ三四丈に至る其根上より二三尺の間ははちくと同じく其密にしてそれより以上ははちくよりも節疎なり其密なるは毎節相去る事凡四五寸にしてその疎なるは一尺より一尺五六寸に至る其節の合たる貌本竿も枝節も皆一様にして上節高く起りて下節は極て低し正にはちくの本竿節は低しといへども枝節は却て高きものとはその狀全く異なり此種丈高きものは十七八節以上にて始めて枝を生じ丈低きものは八九節その至て細小なるものは或は四五節より枝を生ず其始の枝は獨枝にして其次の一節よりは双枝なりまた始めより双枝にして絶て獨枝なきもありすべて一様ならずといへどもこれははちくと違ひ根上の數節に一分許の小黄芽ありて舊年の竹今年に至り新葉を生ずる比は其黄芽おのづから抽出て小青筍となりて舊枝の外に別に新枝を生ずその枝はおほく獨枝なりこれによれば西土の說に獨枝双枝を以て竹の雌雄を分ち筍は多く雌より生ずるといへるは誤れり扨まだけはその節小黄芽あるによりて根上の數節いまだ枝葉なき處も一道の凹處ありてはちくの下節の全身をのづから圓きものとはその狀異なりされども毎節下の粉白色なるは二竹大略相同じ葉は三葉四葉或は五七葉を以て一朶とすれどもはちくよりは稍長大稀疎にして且毎葉下にすべて二三分許の細毛ありその色黄褐にして籜の上邊に生ずる毛よりも稍細し又此竹年を經て老竹となる時は四月の比新葉を生ぜんと欲する枝梢皆しだれて遠くこれを望めば頗る小竹の竹實を生ずるに彷彿たり凡まだけは其いを（俗に竹肉を呼ていをとすいまだその名義をしらず）はちくより厚くして性最堅勁なり和漢三才圖會に山州嵯峨豆洲大島（按に伊豆の大島は古より大竹ある事を聞ずこれによれば大島は蓋し韮山などの傳聞の誤りなるべし）和州內山遠州端雲寺豐州筑州皆佳とみえたり其風土に應ずると應ぜざ

り

かはじろ竹　かじろ竹

かはじろだけ一名かじろ竹は漢名を䈽竹一名水白竹といふこれ卽はちくの一種なり故に其狀すべてはちくと一樣にしてたゞ全身白粉ありて霜のごときを異なりとす凡西土の說に 䈽竹似二淡竹一而促節 大者宜レ刺レ船細者可レ爲レ笛と圖經本草竹譜詳錄にいひまた淡竹南方者高二丈許節密皮薄北方者止二高丈許一と竹譜詳錄にいへるによれば彼土に產するものは二竹共に促節にして皇國に產するものは每節疎にして高さ三四丈に至るものは得あらじとぞおもはるこれは風土のしからしむる處にしてさらに別種にあらず

圖經本草云䈽竹似二淡竹一堅而促節體圓而質勁皮白如レ霜大者宜レ刺レ船細者可レ爲レ笛

竹譜詳錄云䈽竹處々有レ之大似二淡竹一堅而促節體圓而質勁節下粉白如レ霜大者最宜レ爲二船篙一細者亦中二雜用一

〇釋名

かはじろだけ 多識編 本草觽

かはしろは卽皮白の義なり

かじろだけ 本草觽 本草啓蒙

此卽かはじろ竹の省呼なり

䈽竹 名醫別錄 圖經本草

按に䈽字正文菫に作るべし菫は菜の名にて說文に根如レ薺葉如二細柳一とみえたり此竹また細葉䈽の如し故に名づく又本草和名云芹竹注云仁諝音斤正作菫とみえたり菫字竹冠に從はず

水白竹 本草原始

按に淡竹の一名を水竹といへるは本草細目にみえたり此竹また淡竹に似て全體白色なり故に水白竹と名づく

〇正誤

類聚名義抄云䈽竹ナヨタケ

物類品隲云䈽竹和名ナヨタケ又メダケ又カハタケ

按になよ竹は紹興府志に載る處の苦竹にして䈽竹とは別種なり䈽竹は圖經本草に 堅而促節大者宜レ刺レ船細者可レ爲レ笛とみえなよ竹は其節間極めて疎にして笛には作るべけれども船をはさすべからざれば其誤りいはずして明らけしこの二書䈽竹をなよ竹といへるはともに誤り也

ものなりといへりいまだその實をしらずまた産物考に孟宗竹和名ワセタケといふ文による時は孟宗竹は蓋し琉球名なるもしるべからず

唐孟宗竹 續西遊記　わせ竹 中山傳信錄産物考

狸頭竹 竹譜詳錄

名義上文にみえたり

猫彈竹 同上

麻頭竹 同上

福州の方言なりといへり

猫兒竹 續竹譜漳州府志

〇正誤

本草綱目啓蒙云江南竹和名孟宗竹云々

按に此説は八閩通志に江南竹麤大而堅直筍冬生といへる文によりて孟宗竹を充しものなれども竹譜詳錄に江南竹一面出二三枝一といひ通雅に江南竹葉肥幹薄不レ可レ爲レ篾葉大可二裹レ粽交レ蓬者也といへば孟宗竹は江南竹には充らざるなり

國史草木昆蟲攷云孟宗竹は彙苑詳註に猫竹大者徑七八寸高而堅實筍生二於冬一曰二冬筍一不レ出レ土而味佳といへるものなり群芳譜に茅竹又作二毛竹一皆一聲之轉也云々

按に八閩通志云猫竹方言謂二之麻竹一大者徑七八寸土人或取二其葉一以裹二角黍一筍夏生また閩書南産志云猫竹方言謂二之麻一可二以椽一可二以器一削レ之可二以刀一其葉夏月可三以裹二角黍一とみえたり凡角黍を裹には孟宗竹の如き細小なる葉にてはつゝむべからざれば猫竹は卽孟宗竹にはあらずまた餘姚縣志云毛竹或作レ猫又作レ茅致富全書云毛竹遍身毛刺其本堅厚需用最多其葉大卽靑箬取作二笠及舟蓋諸用一筍冬初卽生名二蕈筍一味最鮮とみえたりこれによれば毛竹或は猫竹に作るものもまた孟宗竹にはあらずされども秘傳花鏡云猫竹一作二毛竹一浙閩最多幹大而厚葉細而小異二於他竹一人取編レ牌作レ舟或造レ屋皆可常塾縣志云幹巨而葉細者爲二猫竹一安慶府志云猫竹大而堅厚適レ用筍可レ食竹不レ生處埋二死猫一頭一明年筍卽生故曰二猫竹一江西新城縣志云猫竹筍似二猫頭一故名竹最長大などいへるは孟宗竹に近きやうなれども廣群芳譜に猫兒竹長沙有レ之下豊上細其筍甚甘美大者重十餘斤按毛竹一名猫竹與レ此各別とみえたれば猫竹は孟宗竹にはあたらざるな

鶴膝狀をなしてはちくの枝節よりもやゝ高くして常竹と異るは此竹の性なり扨孟宗竹は舊より皇朝になかりしものにて正德の比西土の種をはじめて琉球より傳へしを薩摩に移し植しが今は四方にひろまりしよし國史草木混蟲攷にみえたりさればそれより以上は寒竹及び鳳尾竹などの冬月筍を生ずる物を以て孟宗竹とは名付しなりこれ即此竹の舊より我にあらざる確證なり

中山傳信錄產物考云孟宗竹和名ソセタケ按其幹高丈餘其葉狹小而下垂甚可レ愛穀雨之節出笋籜皮厚有レ毛

續西遊記云薩隅の邊に唐孟宗竹といふ竹あり人家に多し常の竹よりは薄く節低く葭に似たり然ども甚だ太くして大なるものは二尺廻り以上に至る花生に用ひて甚だ見事也此竹元來唐土より來れりといふよりて薩州にて唐孟宗とよぶ也

本草綱目啓蒙云カンチク一名孟宗竹云々今別ニ大竹ニ孟宗竹ト呼ブアリ琉產ナレドモ今ハ京師ニテモ繁殖シ園ミ尺餘ニシテ花尊ニ作ルベキ者アリ

國史草木昆蟲攷云孟宗竹正德中に中山人たねを薩摩に致したり今は即ち四方に盛茂す

竹譜詳錄云狸頭竹一名貓彈竹處々有レ之江淮之間生者高一二丈徑五六寸衡湘之間者徑二尺許其節下極密上漸稀枝葉繁細筍充ニ庖饌一絕佳此筍出時若近地堅硬或礙ニ磚石一則無レ問ニ遠近一但遇ニ可レ出處一即穿レ土而出猶下狸首鑽レ隙無上レ不ニ通透一也故寓ニ此名一亦有ニ高止一丈許者一下半特無ニ枝葉一人家庭院栽植枝葉扶疎清陰滿レ地殊可ニ愛悅一然竹身下麁上細竿大葉小不レ宜ニ圖畫一廣中出者筍味不レ佳江西及衡湘間人入レ冬覘ニ其下地縫裂處一掘食レ之謂ニ之冬筍一甚美留不レ取至レ春亦腐朽別生ニ春筍一爲レ竹福州人謂爲ニ麻頭竹一

續竹譜云貓兒竹長沙有レ之下豐上細其笋甘美大者重千餘斤

漳州府志引ニ華夷考一云貓兒竹大者徑七八寸高而堅實笋生ニ冬春之交一

『此間彩畫二枚孟宗竹略レ之』

○釋名

孟宗竹（中山傳信錄產物考本草綱目啓蒙）

此竹冬月筍を生ずるを以て吳の孟宗の古事によりて玄か名付し也されども孟宗の母に供せしは竹譜詳錄に雲竹筍なりといひ或は江南竹笋の早く出る

淡竹 名醫別錄

此筍味淡甘故に名づく

水竹 本草綱目

時珍曰淡竹今人呼ニ水竹一

○詩

本經逢原、

詠淡竹　　呉之文

矗々烟梢千嶂外、娟々粉節一溪中、疎飄細響遙疑レ雨、寒動淸陰似レ帶レ風

○正誤

本朝食鑑云淡竹筍者籜有ニ紫黄黑斑一而美筍肉亦甘脆碧色有レ香大美又云淡筍籜者皮厚而難レ敗苦筍皮薄弱易レ損爾

按に籜有ニ紫黄黑斑一は苦竹にして淡竹にあらずまた皮厚而難レ敗は苦竹籜にして皮薄易レ損は淡竹籜なり野必大の說これと相反す混同甚し

汝南圃史云貴竹即淡竹笋苦不レ可レ食

按に字彙に筀音貴とみえたりこれによるに貴筀もとより音通なれば貴竹は卽筀竹にして淡竹とは全く別種なり

孟宗竹　わせたけ

孟宗竹一名唐孟宗一名わせたけは漢名を貍頭竹一名猫彈竹一名猫兒竹といふその高さ二丈餘圍み八九寸にして毎節間はちくより短かし其節の狀上段至て低く下邊は稍高しこれを細査すれども全く下邊のみにて上段なきが如し凡諸竹は半體以下その太さ毎節大概同じけれども孟宗竹は根上第一二節よりして第三四節は少しく細く第三四節よりはまた第五六節はやや細し毎節漸々にかくのごとくして梢上に至る故に下麁にして上細なるは卽此竹の性也その根上より六七節の間は節殊に密にしてすべて節下は粉白なる事はちくの如しその大なるものは卽十七八節以上よりして枝を生ず小なるものはそれに準じてしらるこれも始の一節は獨枝にして後に双枝なるもあれば始め一節は双枝にして後に獨枝を生じそれより以上はまた双枝なるもあり葉は全くはちくの葉に似てはちくよりも極めて繁く毎枝みな三葉にして時に二葉なるも交はれり凡はちくま竹の類の大なるものは節低くして小なるものは殊に節高しといへども孟宗竹は細大の別なくすべて本幹節は毎節低くして枝節は却て

竹林大久保加賀守御預りにて漫に採る事を禁ずるを以て土人或はおとめ竹ともいふといへりおもふにおほたけの方言たま〳〵古名にあへるはめづらし扨はちくは四月の比筍を生じて籜上に細線なる紫紋理及び細毛ありてま竹のごとき斑花ある事なしその籜の先また一小籜葉を生じその傍にちゞれたる細毛あり其毛玉蜀黍毛に似て至て短かく又頗る海蝦の後足に生ずる赤毛の如し此筍味淡甘にして苦味ある事なきを以て世多く庖厨の料とす延喜式に加茂神祭齋宮陪從人給食料筍子二十一把とあるも此淡竹筍なるべし又蘇沈内翰方に除苦竹外悉謂之淡竹といへる本草綱目には誤矣といひ竹譜詳錄には恐未盡然とみえたりされど齋民要術に竹者中國所レ産不レ過ニ淡苦二種一といへるは其言沈氏に勝れり

和名類聚鈔云篠（楊氏漢語抄云淡竹於保多介）竹名なり

倭漢三才圖會云淡竹白竹（俗云波知久）其筍籜白味淡甘其竹色亦白節間促ニ於苦竹一大者四五寸長二三丈

大和本草云淡竹淡トハ不レ苦ナリ東坡淡竹ハ苦竹ニ對シテ文ヲナストト云筍ノ味甘美ナリ其皮與ニ苦竹一不レ同無ニ斑文一褐色ナリ苦竹ノ皮ノ民用トナルニシカズ苦竹ヨリ筍早ク生ズ

本草綱目啓蒙云淡竹ハ一名水竹（發明）俗ニハチクト呼ブ其筍早ク生ジテ味蘞ナラズ籜ニ斑ナシ其竹節ニ白粉アリ

圖經本草云今南人入レ藥燒瀝惟用ニ淡竹一品一肉薄節間有レ粉者

本草綱目云淡竹有ニ大小二種一此竹汁多而甘沉存中言苦竹ノ外皆爲ニ淡竹一誤矣

竹譜詳錄云淡竹處々有レ之凡三種南方者高二丈許大概與ニ䈂竹一相類但節密皮薄節下粉白甚多葉

『此間彩畫一枚於保多計同筍略レ之』

○釋名

於保多計（和名鈔引楊氏漢語抄）

此即大竹の義なり

はちく（食用簡便和漢三才圖會）

東雅云はちくは白竹なり

からたけ（頓醫抄異名製劑記）

此卽漢竹の義なり其意吳竹に同じ

あはだけ（多識編）

あはは卽淡字の義なり

圖經本草云甘竹似レ篁而茂卽淡竹也
按に甘竹淡竹はもと兩種なり故に集注本草に先淡苦の二竹をあげて後に一種薄殻者名ニ甘竹一とみえ食療方にも淡竹上甘竹次とみえたるにてその義明らけし又和名鈔によるに篁字は卽簧字の誤りなり

おほたけ　はちく

おほたけ一名からたけ一名あはだけ一名はちくは西土にいはゆる淡竹一名水竹也その高さ凡二三丈圍み七八寸にしてすべて地上より一二尺の間は節密にて毎節相去る事二三寸それより以上は節疎なる事六七寸より或は八九寸に至る其節の合たる貌上節少しく高く起るといへども下節の籜の脫せし跡よりも稍低しこれを細査する時は毎節上に細小粒の如き物横にならび付てその大さ頗る罌粟殻子のごとしこれは全く細根となるべき物の地を離れて發する事あたはざるを以て皮中に其きざしを含めるなり此種丈高きものは地上より十五六節或は十七八節以上にて始めて枝を生じ丈低きものは十一二節或は七八節以上にても枝を生ずるなりその始の枝は双枝にて其次の一節は獨枝を生じ又其次の一節より以上は皆双枝なるもあれば又始め獨枝にして其次の一節よりは直に双枝となるもあれども大概は始より双枝は多くして獨枝は少なし凡枝を生じて双枝なるは始の一節の左枝は太く右枝は細く其次の一節は右枝は太く左枝は細し毎節相互にかくの如くして梢上に至る其双枝より又小枝を生じ小枝よりまた細枝を分ちて其梢ごとにをの〱葉をつく其葉長さ二三寸廣さ三分許にて其先二葉相對し三葉は其下につきてすべて五葉を一朶とす又三葉のもの及び二葉相對して其葉細小なるものありといへどもそれは全く年を經て下葉のをのれと枯落しにて必ずその性質にはあらずまたはちくの本竿節はま竹より低といへども枝節は却てま竹よりも高く其狀頗る鶴膝の如し扨其枝を生ずるかたは左にても右にても節上より竹身に細長なる一道の凹處ありて枝を生せざるかたは全く正圓なりまた其竹身すべて白粉を帶るといへども殊に下節の本の周圍は純白なる事恰も一分許に截し白紙を別に貼せしが如し或人曰舊より相模國小田原に大竹とよぶものあり卽淡竹にして其竿高さ三四丈圍み八九寸にして先こけず故に幟竿旗竿の用には必ずこれを供する也今は此

徒然草云呉竹は葉ほそく河竹は葉ひろし御溝にちかきは河竹仁壽殿のかたによりて植られたるはくれたけなり

榻鴫曉筆云呉竹と申はべるは歌などにはたゞ竹の惣名のやうによめるが然はあれどくはしくいへばよのつねの竹より葉はそきなりまた河竹といふは葉ひろし云々

古今和歌集序云この人々をおきて又すぐれたる人もくれ竹の世々にきこえかたいとのより〳〵にたえずぞありける

古事談云一條院御時臨時祭試樂實方中將依二遲參一不レ賜二挿頭花一加舞之間進二寄竹臺許一折二呉竹枝一挿レ之優美之由滿座感歎依レ之試樂挿頭永用二呉竹枝一

又云一條院御時於二清涼殿一有二御酒宴一之日讃岐守高雅朝臣奉レ仕二包丁一左府拔二竹臺笋一石灰壇ニテ燒テシキ申ケレバ度々聞食ケルヲ高雅朝臣微音ニ本自引戸ハト云ケリ

和漢三才圖會云䈞竹和名久禮太計又有二漢竹唐竹等一皆異品也今按據二和名鈔一䈞竹卽淡竹之類小細黃潤長不レ過レ丈人多植二庭院一可二以爲一レ杖或爲二格子欞子一佳

日本紀略云弘仁四年十二月癸巳云々此歲天下呉竹實如レ麥其後枯盡

〇釋名

呉竹 日本後記古今和歌集楊氏漢語抄竹取物語江家次第

此竹もと呉國より來る故に名づく

䈞竹 和名鈔引文字集略

按和名鈔注に䈞音甘とみえたれども䈞はもと俗字なれば甘に作るを正とす

甜竹

集注本草楊氏產乳方竹譜詳錄

〇正誤

和漢三才圖會云按䈞實中竹也本草無二䈞竹者一

按に本草に此竹とあるは卽䈞竹にて竹冠に從ふものは却て後世の俗字なりされば本草に此竹なしといへるは誤りなりまたこれを實中竹なりといへるは其說はじめて唐韻にみえたり古說にはあらず

大和本草云苦竹國俗呉竹ト云又眞竹ト云

按に呉竹は卽淡竹の一種なり然るを今苦竹となすは誤れり

古今要覽稿卷第三百七十七

●草木部 竹十五

吳竹

吳竹は古より仁壽殿前の北のかたに植られし竹にて卽淡竹(ハチク)の一種細小なるもの也故に今俗またこれをさしてはちくといひ漢名を筀竹一名甜竹といふその高さ大抵一丈許にて枝葉極めて繁茂し其狀頗る淡竹に彷彿たりといへども每節却て淡竹よりも密にして高し順朝臣の文字集略を引て筀は篁に似て節茂り葉滋きもの也と和名鈔いひ兼好法師及び一條禪閤の說にも吳竹はよの常の竹より葉細しと徒然草榻鳴曉筆いへるは卽これなり凡吳竹の名は古今和歌集竹取物語等にみえたれど萬葉集にはいまだその名を載ざるによれば此竹の吳國より來れるは平城天皇よりはるかに後の事なるべしと思ひしに日本紀略に弘仁四年天下の吳竹ことごとく枯しよしみえたればその天皇よりも以前に此種の渡りこしものなるはしるしされば吳竹臺河竹臺を作られしもそのはじめ詳ならずといへどもいと舊くよりの事なるべし吳竹臺の竹の枝を折て臨時祭試樂の時に賓方中將の挿頭花に伐られし事は古事談にみえその臺に生ぜし筍を採てこれを石灰壇にて燒て奉りしは清涼殿にて御酒宴の日なるよしも同書にみえまた吳竹を以て木燧(ヒキリ)及び杵箕等の臺の足に作りし事は延喜式にみえ人多く庭院に植おきて杖となし或は格子の檽子となすよしは和漢三才圖會にみえたり今江都にては此竹を以て火にて炙り瀝を去て曝し竹となし作簾家の用にそなへ或は若竹を採て釣竿となし其枝は別に縛束して若竹をその柄とし以て掃箒とす其使用多きなり扨日本紀略に天下の吳竹悉く枯るといひしは此竹のみ枯てその餘の竹は枯る事なき意なれば本草辨疑に寛文六年より本朝の竹悉く枯て皆根を斷つ淡竹の外はかれずといへるにその意全く同じければいよいよ古に吳竹と稱するものは卽淡竹の類なる事これにても押はかるべし

延喜式踐祚大嘗祭云木燧一荷納筥二合吳竹爲足覆以絲纈夫一人云々次杵(キネ)四枚絹以布袋吳竹爲足夫一人次箕二枚褁以曝布吳竹爲足夫一人和名類聚鈔竹類云筀竹文字集略云筀音甘楊氏漢語抄云吳竹也和語云久禮太介似レ篁而節茂葉滋者也

にて一軸を分披し寒山はたゞ掃箒を携へたり邦人此書の趣を主とし此竹もとより掃箒となすによろしきを以て遂に此名を命ぜしなり

篲篠（竹譜）

説文云 彗掃竹也从ニ又持ㇾ甡重篲文あり云彗或从ㇾ竹玉篇云篲詳恵切掃帚也

拂雲箒竹（箚譜）

按に拂雲箒竹は廬山の方言なり竹譜に篲篠性不ㇾ卑植必也嵓崗とみえたれは此竹山巌上に植置て掃箒となすによろしきを以てまた拂雲の名を命ぜしにや

○正誤

竹譜詳録全德品中篠竹條竹譜を引て篲篠を載また異形品中台竹の後に別に拂雲箒竹を載て各條とす

按に箚譜によるに掃雲箒竹は即竹譜の篲篠なる事はその形状の同じきのみならず産地もまた同所なるにても明らけし然るを李息斎は其名の同じからざるに迷ひ漫に分ちて各條にいだせしはあやまれり

箖竹（竹譜太平御覽竹譜詳錄）

按に廣雅に箖翳也とみえたれば箖はその葉梢上に繁茂する意をのづから明らけし

○正誤

庶物類纂云箖箊竹一名箖竹

按に箖竹と箖箊竹とは別種なるは竹譜詳錄及び本草彙言にも其種を二種に分ちて各條に出せしにて明らけし

寒山竹

寒山竹は卽篠竹の一種にして漢名を簭篠一名拂雲箒竹といふその質女竹に似て節低く高さ七八尺大さ小指の如し毎節相さる事六七寸許にて其枝は五枝或は十枝或は九枝なりまた左右によりて互に大小の異なるあり凡女竹の類はその始皆三枝なるも年をへて新葉を生ずる比はその舊枝の節間にまた二小筍を生じて新舊相交りて五枝とはなれるものなれば此枝の九枝十枝なるもそれと同じ事なるべしその枝はすべて女竹よりも殊に長くして繁し故に掃帚となすによろしその葉また女竹よりも細密にして五葉或は四葉を以て一朶とし遠くこれを望めば頗る地膚子草の狀の如しこの種今本所押上村の種樹家にありその他おほくこれある事をしらず

竹譜云簭篠蒼々接ㇾ町連ㇾ篁性不卑植必也嵩崗踰ㇾ矢稱ㇾ大出ㇾ尋爲二長物一各有ㇾ用掃ㇾ之最良

又云簭篠中二掃箒一細竹也特異二他篠一見二廣志一至大者不ㇾ過ㇾ如ㇾ箭長者不ㇾ出二一丈一根（筍譜によるに根の上疑らくは竹字を落せり）杪條等下節生惟高陰動有二町畝一廬山所ㇾ饒也掃箒之選潯陽人往々取下ㇾ都貨焉

竹譜詳錄云簭篠出二江浙閩一喜生二山岡之上一連延數十畝高不ㇾ過二七八尺一大不ㇾ踰ㇾ指枝繁勁細爲二掃箒一最良

又云拂雲箒竹出二廬山一莖大如ㇾ指竹杪細葉翠密如ㇾ箒彼人採爲二方物一以相遺贈張得之云名二簭篠一竹根杪條等特異二他篠一中ㇾ爲二掃箒一

筍譜云拂雲箒竹筍出二廬山一莖大如ㇾ指竹杪細葉密翠如ㇾ箒彼土人採爲二方物一贈ㇾ人謂二之拂雲箒竹一纖長也

『此間彩畫一枚寒山竹略ㇾ之』

○釋名

寒山竹（種樹家稱）

按今畫工の寒山拾徳の像をゑがけるに拾徳は兩手

會稽縣志云箭竹別名曰レ篠

按に筱と箭とはもと別種にて說文に箭矢竹也筱箭屬小竹也といへるはこれその本義也邦人また筱を以て小竹と訓み箭を矢竹と訓めるは即和漢暗合也その筱また以て矢に作るべし故に萬葉集に「あふみのややはせのしぬをやにはかて」とみえたり此は說文にまた筱可レ爲レ矢といへると全く同意なり然る時は筱も箭もともに矢に作るべきを以て爾雅に筱箭なりといへりされども筱は小竹の統名にして箭は即そのうちの一種なりされば禹貢に筱簜既敷といへる筱もまた箭のみをさしていひしにはあらず然るをこの二説に箭を篠なりといへるは筱は小竹の統名なることをしらざる誤り也

たかしの　おほしの

たかしの一名おほしのは漢名を箖竹といふ即女竹の一種長大なるものなり近時琉球より其種を傳へて今薩摩にあり水戸殿本草者佐藤成裕云一種の女竹はその大さとひ竹の如くにして極めて高く枝葉梢杪にのみむらがり生じて下幹には絕てなしその葉全く女竹に似て大也凡此竹長さ百尺なるを以て行路八九町もこなたより其梢杪あらはにみゆるといへり予藏する所のものはやゝ小なるものなりといへどもこれを尋常の女竹に比するに三倍して頗る吹火筒の如しされどもその筍の味甘美なるや否をしらずまた箖箊竹ありその葉薄して廣し竹譜即遼篛の類なりと物理少識いへるはこれとは別種なり

竹譜云林於竹葉薄而廣越女試レ劍竹是也

竹譜詳錄云箖竹出二襄洲臥龍山諸葛孔明祠中一長百尺只梢上有レ葉土人多取作二幡竿承露一筍甚美

本草彙言云箖竹長七十丈只梢上有レ葉出二襄洲臥龍山諸葛亮祠中一

又云箖箊竹葉薄而廣吳都賦所レ謂竹則篔簹箖箊即越女試レ劍竹是也桃枝是其中最細者

物理少識云襄州臥龍山武侯祠箖竹百尺梢上生レ葉

又云吳都賦篔簹箖箊即試レ劍竹葉廣遼篛類也

○釋名

たかしの俗稱

おほしの同上

此竹しの竹に似て極めて高大なり故にこの二名あり

古今和歌集卷第十一戀歌一

題しらず

淺ちふの小野の篠原忍ふとも　よみ人しらず

人しるらめやいふ人なしに

山家集中雜歌

我なれや風をわつらふしの竹は

おきふしもの丶心ほそくて

○釋名

しぬ日本書紀萬葉集

按になふの反ぬなればしぬは卽しなふの義なり

しの延喜式和名鈔

東雅にしぬといひしのといふは轉語せしにて義異なるにあらずとみえたりされどシノといふはシとはサといふ語の轉せしにて卽細也ノとは卽篦なりといひしはいかゞあらん

ほそたけ新撰字鏡

此卽細竹の訓なり

筱說文玉篇

按に說文に筱は从㆑竹攸聲とみえまた犬部に獘从㆑犬攸聲讀若㆑叔とみえたれば玉篇云筱先鳥切は卽古今通聲なりされども玉篇にまた篠同上といへるは俗字にて正文にはあらず

○正誤

新撰字鏡云篻篠也志乃云々

按に吳都賦云篻簩有㆑叢劉淵林注云篻竹大如㆑戟中實勁强交趾人銳㆑之爲㆑矛甚利又箭譜云篻竹實中簩屬筍堅大可㆑食と此諸說による時は篻と篠とは別種なり

和名類聚鈔云篠細々竹也

按に廣縣に篠は細竹也筱同上と注して細々竹とはなし

和漢三才圖會云志乃一名長節間竹(ナヨタケ)

按になよ竹はなゆ竹と一物にてしのとはその形狀既に大小のたがひあればそれを一つにして古人のいひしことなきは萬葉集に名湯竹十縁皇子(ナユタケノトヲヨルミコ)小竹之眼笑思而(シヌノメノシヌビテ)などみえたるにてしるしされども兼名苑注に長間笋をシノメと訓たるは此二種を混稱せしもふるくよりのことにて三才圖會はその誤をうけていへるなり

爾雅翼云箭篠也

分長八尺といへるも此類をさしていひしなるべし扨此竹を舊より箱根竹といへばその產地はかならず相模國なるべしとおもひけるに或人の說に箱根竹は伊豆國に產せしにて相模國にはあらずといへりよつて和漢三才圖會を閱せしに伊豆國土產箱根竹とありて相模國の土產には此竹を載ずこれによれば箱根竹は全く今の淺草海苔のたぐひにて或人の說妄ならざるべし

日本書紀神代紀云篠小竹也此云斯奴

又神功紀云小竹宮小竹此云之努

萬葉集卷第八云細竹目人不顏面云々

又卷第七云小竹之眼笑思而宿者云々

延喜式四時祭云凡六月十二月晦日御贖料小竹者月廿五日以前申辨官令山城國採進之

又同上云六月晦日大祓御贖云々小竹廿株徑各二分長八尺

又同上云中宮御贖云々小竹廿株

新撰字鏡竹部云篠方標反平竹也細竹也篠也志乃久保曾太介

和名類聚鈔竹類引蔣魴切韻云篠先鳥反和名之乃一云佐々俗用小竹二字謂之佐佐細竹也

又同上引兼名苑注云長間笋今案和名之乃女笋靑最晚生味大苦也

尙書禹貢云篠簜既敷

說文竹部云筱箭屬小竹也

嘉興縣志云竹篠編地叢生葉大小不等可爲籬爲等

『此間彩畫一葉しの略之』

萬葉集卷第七雜謌

詠草

妹所等我通路細竹爲酢寸我通靡細竹原

旋頭歌

池邊小槻下細竹苅嫌其谷君形見爾監乍將偲

右柿本朝臣人麿之歌集出

譬喩歌

寄草

如是爲而也尙哉將老三雪零大荒木野之小竹爾不有九二

淡海之哉八橋乃小竹乎不造矢而信有得哉戀敷鬼乎

又卷第十一古今相聞往來歌

寄物陳思

神南備能淺小竹原乃美妾思公之聲之知家口

をんな竹(庶物類纂)
和漢三才圖會に女竹を女子竹に作る
女竹(俗稱)
ない竹(同上)
ないは卽なゆの訛轉なり
みかま竹(庶物類纂)
大和國の方言なりといへり
にが竹(大和本草)
此筍味至てにがし故に名づくといへり
苦竹(和名類聚鈔引二四聲字苑紹興府志一)
筆管竹(竹譜詳錄)
此竹筆管に作るべし故に名づく
秋竹(同上)

○正誤

萬葉集抄云なゆたけは唐竹をいふにや
按になゆ竹は卽俗にいふにが竹なり懐竹抄の一本ににが竹は倭竹なりとみえたれば唐竹にあらざること明らけし

しぬ　しの

しぬ一名しの一名ほそだけは漢名を篠といふ之は延喜式にいはゆる小川竹のやゝ小なるものにて今所在極めて多しその幹深青色にして高さ七八尺その枝は五枝なるもあれば三枝なるもありてすべて一樣ならず凡篲篠の如きは年を經る時は一節の間九枝或は十枝を生ずれども此竹はしからずその葉長さ七八寸廣さ四五分にして毎莖六葉を一朶とす此筍は四五月の比に生じ青色にして味至て苦しこれは和名鈔にいはゆる長間笋(シノ)にして此笋また抽出て忽ちに若竹となる時はその節上節下並に粉白なる事小川竹よりも甚し一種伊豆の大島に產するものを俗に大島竹といふ今おほく此竹を以て庭砌の藩籬とすその竹細長にして節間殊に長し一說に此種は有德廟の御代の事なるよし矢竹に代用ゆべきと上意有てその谿間に植付させ給ひしが今は多く繁衍せしといへり又一種箱根竹あり矢竹よりまた細長にして枝葉は大略前條と相似てやゝ細小にして其葉さらに落がたきによりてそのままにて掃箒となすによろし其性いたつて柔靭なるをもつて竹籠を作るもの多く此竹を用ひ或は筆管となし或は烟管となすもまた此竹なるよしこれは嘉興縣志にいはゆる竹篠にして延喜式にいはゆる小竹徑二

詠草

妹所等我通路細竹爲酢寸我通靡細竹原

旋頭歌

池邊小槻下細竹苅嫌其谷君形見爾監乍將偲

右柿本朝臣人麿之歌集出

譬喩歌

寄草

如是爲而也尚哉將老三雪零大荒木野之小竹爾不有九二

淡海之哉八橋乃小竹乎不造矢而信有得哉戀敷鬼乎

又卷第十一 古今相聞往來歌

寄物陳思

神南備能淺小竹原乃美妾思公之聲之知家口

古今和歌集卷第十一 戀歌

題しらず

淺ちふの小野の篠原忍ふとも　よみ人しらず

人しるらめやいふ人なしに

山家集 雜歌中

我なれや風をわつらふしの竹は

おきふしものゝ心ほそくて

〇釈名

川竹 古今和歌集延喜式和名類聚鈔

大和本草に川竹を皮竹に作るこれは此竹年を經るといへどもその籜落ることなきによりてなり岡村尙謙曰川竹の皮竹なるはいかにもその本義なるべし徒然草に御溝にちかきは河竹なりといへるによれば古に河竹に作れるは即御河竹の上略也夫木集に載る常磐井入道の歌に「百敷の玉の砌の御河竹」とみえ又大和國の方言にもみかま竹の名ありみかまはけだしみかはの訛轉なるべしといへりこれ一說なり

奈用竹 萬葉集

名湯竹 同上

冠辭考云奈用竹名湯竹はたをやかなる女の姿をなよゝかなる竹に譬ていへりなゆ竹は女竹にて皮竹ともいふなゆなよ音通へりといひ詞草小苑にもなゆは萎る義にてそのしなへをいふといへりされども和名鈔に兩節間俗云レ與とみえたればなよ竹は卽ながよ竹の中略にてすなはち長節竹の義なるべきか

うつろはぬ名になかれたる河竹は
　いつれの世にか秋をしるへき
堀川院御時百首
木枯にそのゝ河竹かたよりに　權中納言國信
　なひけと色はかはらさりけり
夫木和歌集卷第廿八雜部十
光臺院入道二品親王家五十首竹霜
　　前中納言定家卿
五代までなれてふりぬるかは竹の
　また下かけに霜そ置そふ
文治六年女御入内御屛風
久しかれ君千世までの川竹に　隆信朝臣
　色はへまさる床夏のはな
洞院攝政家百首
風吹は汀になひく河竹の　從二位賴氏卿
　おともあらはにこほる波哉
弘長元年百首竹みかは竹
　　常盤井入道太政大臣
百敷の玉のみきりのみかは竹の
　君か世なかくうゑや初けん

古今和歌集卷第十七雜歌下
寬平の御時にもろこしのはう官にめされて侍ける時に東宮のさぶらひにてをのこどものさけたうべけるついでによみける
なよ竹のよなかき上に初霜の　藤原たゞふさ
　おきゐて物を思ふ比かな
堀川院御時百首
鶯のねくらにしむるなよ竹の　藤原顯仲朝臣
　いつれの枝か住よかるらん
風ふけはなひく物からなよ竹の　紀伊
　おもふふし〳〵ありけなる哉
夫木和歌集卷第廿八雜部十
三島社七百首歌
なよ竹のとをよる風の涼しきは　權僧正公朝
　一夜へたてゝ秋やきぬらん
天元四年四月小野宮歌合
秋待ぬいねかとみしはなよ竹の　讀人しらず
　下はとねさすこにこそ有けれ
○和歌
萬葉集卷第七雜謌

和名類聚鈔竹類云箸竹四聲字苑云箬音與㆑若同辨色立成云若竹加波多計本朝式用㆓河竹二字㆒竹名也

山槐記云治承二年十一月十二日御產奉㆑勅切㆓御臍緒㆒云々安倍資忠遣切㆓生氣方東河竹㆒卽持參口徑一寸許長五六寸亮重衡朝臣取㆑之參㆓御前㆒作㆓竹刀㆒只一削作㆑刀方不㆑再云々或用㆓銅刀㆒今度用㆑竹也

徒然草云吳竹は葉ほそく河竹は葉ひろし御溝にちかきは河竹仁壽殿のかたによりて植られたるはくれたけなり

八代集抄云かは竹は纏㆑皮似㆑蘆竹也

體源抄云助支丸ハ倭竹也或人云昔興福寺維摩會ノ時舞人狛光高等例ニ任テ廳屋ニ着テ餔食其屋星霜多積テ垣壁半ハ穿ッ助抜ノ中ニ一竹アリ笛竹ニヨシ土中ニテ年序ヲ歷トイヘドモ其樣末㆑變光高截テ笛竹トス果シテ優美ナリ累代相傳ヘテ則房ノ世マデ在㆑之今ハ傳ル人ナキナリ

大和本草云女竹ハ淡竹苦竹ノ內ニ雌雄アリ其雌竹ニハアラズ國俗ニ女竹ト云テ葉モ身モカハレルアリ大竹トナラズ皮オチズ故ニ皮竹ト云又苦竹ト云筍ノ味苦キ故ナリ眞竹ノ漢名苦竹ト云トハ別也吉田兼好ガ曰吳竹ハ葉細ク皮竹ハ葉廣シト云ヘリ又小ナルヲバ篠竹ト云女竹ニ二種アリ節高ト節低トアリ按に女竹に節の高きもの關東には絕てなし筍ノ味苦クシテ眞竹ニ甚ヲトル壁ノ材トシ簣竹ニ用ヒ魚ノ筍トスルニ眞竹ニマサレリ民用多シ

紹興府志云苦竹味苦不㆑堪㆑食有㆓黃苦靑苦白苦紫苦㆒幹細而直可㆔以爲㆓筆管㆒圖經越出㆓筆管㆒是也竹譜詳錄云筆管竹出㆓廣右山中㆒節圓正一如㆓苦竹㆒大者止中㆓筆管㆒作㆓火炮㆒者取爲㆓焨火之筒㆒又云秋竹生㆓七閩山中㆒大者不㆑過㆓拇指許㆒枝幹柔弱葉長細大概如㆓四季竹㆒興化軍尤多拆爲㆑篾耐㆑溼而遲腐

『此間彩畫一葉川竹略㆑之』

〇和歌

後撰和歌集卷第十八雜部四

河竹

女ともだちつねにいひかはしけるを久しう音づれざりければ十月ばかりにあだ人の心といひしはアラズ言の葉はといふふるごとをいひつかはしたりければ竹の葉にかきつけてつかはしける

よみ人しらず

古今要覽稿卷第三百七十六

草木部竹十四

川竹　なよ竹　女竹

かは竹は舊より吳竹臺にむかへて御溝ちかきかたに植られし竹にて古歌には奈用竹或は名湯竹といひ俗にはない竹一名をんな竹一名め竹一名みかま竹一名にが竹といひ漢名もまた苦竹といふ其幹正圓にして高さ一丈五六尺あるひは二丈許にして其節の狀上節なだらかに隆起して下節の籜を生ぜし所と其間男竹に比すればやゝ疎にして節々相さる事凡八九寸或は一尺五六寸に至る此竹新年のものは大略三枝にて二年にいたれば三枝の間別に二小筍を抽出て新舊相交りて五枝となりまた新年の物といへどもその中幹より以上は始より五枝或は稀に六枝を生ずる者なり葉はすべて細長にして長さ八寸廣さ六寸許にて或は新枝舊枝によりて廣狹のことなる事ありといへども皆六葉を以て一朶とするは此竹の性なりあるひは四葉五葉なるもあるはその六葉のうちのをのれと枯落しにてかならず全形にはあらずまた延喜式に小川竹ありこれは其竹前條よりは細小にて篠竹よりもやゝ大なるをさしていひしなり別種にはあらず扨此竹性濕に耐て朽腐する事最遲きによりて舊より人家宮殿の壁の棧とすむかし猶光高といへる舞人興福寺維摩會の時その寺の垣壁の竹を採て笛に作りしを助支丸(シタチ)と名付累代相傳して則房の世までありしよし詳に體源抄にみえたり今俗に女竹をもつて篠笛草苅笛を作るものは卽この遺風なるべしされば廣倭本草に此竹を以て本草綱目に載る所の笛竹なりといひしもまた意味あり又筆管竹秋竹ありともに竹譜詳錄にみえたり蓋し女竹の類なるべし

萬葉集卷第三（雜歌挽歌）石田王卒之時丹生王作レ歌云名湯竹(ナユタケ)乃(ノ)十緣皇子(トヲヨルミコ)云々

又卷第七（相聞）吉備津釆女死時柿本朝臣人麿作レ歌云秋山(アキヤマノ)下部留(シタヘル)妹奈用竹乃(イモガナヨタケノ)騰遠依子等者(トヲヨルコラハ)云々

延喜式（内匠寮）云御輿一具云々盖一枚（長六尺廣五尺四寸）盖椽料簀子木廿六枚（縫簀氏供）盖下棧料川竹十株

又（織部司）云凡雜機用度料篦竹河竹各白株每年山城國進

と本草一家言いふ此種西土に産するものは毎節蟲を生じて新蟬のいまだ翼を生ぜざるものに似たりと竹譜詳錄いひ共本邦に産するものは其蟲の形飛廉の如しと本草一家言いへり凡西土にては此竹七閩山中及び婺州福州等にありといへども本草にてはたゞ肥前國のみにしてその他これある事を聞ず

本草一家言云有二蟲竹一生レ蟲形如二油蟲一者肥前佐賀産レ之和名沈竹

竹譜詳錄云蟲竹生二七閩山中一叢生如レ蘆毎節生二一蟲一如二新蟬之未レ翼者一外無二竅隙一隨レ竹而生竹將レ老乃穴二其傍一而出今婺州東陽山中亦有レ之八閩通志三山志福州府志同

○釋名

沈竹本草一家言

按に沈竹は蓋し蟲竹の訛轉なるべし又一種沈竹あり○竹譜詳錄云沈竹生二延平山谷一質重易レ沈削爲二小弩箭一投レ水亦沈遇レ風不レ爲二欹側一射者取レ焉とこれと同名異物なり

蟲竹

竹普詳錄八閩通志三山志福州府志

木の屬木に从ひ竹の屬竹に从ふは常なれども今國名までに竹冠を加ふるものはさらに本義を失へるなり

箟竹 廣志遵生八牋

按に箟竹は卽箟簩竹の省呼なるべしとおもへどもこれは舊より箟の下に簩字のありしが磨滅せし物なるべし凡箟竹は簩竹とおなじく毒あるもの也故に筍譜に箟竹生㆓海畔山㆒而竹與㆑筍悉有㆑毛傷㆑人則死泊㆓船海嶼㆒愼勿㆘取㆓毛筍㆒食㆖廣志云箟竹堪㆑作㆑笛既有㆑毒豈可㆑作㆑笛此同㆑名而殊㆑實也と見えたり今按に僧賛寧の同名殊實といへるはこれまた一説なりといへども其實は箟の下に簩字の缺文ある事をしらざるに依てかくはいひなせし物なるべし

澀竹 桂海虞衡志竹譜詳錄

此竹全身麤澀あり故に名づく

澀勒竹 楊升菴文集肇慶府志

鳥計竹 竹譜詳錄

名義つまびらかならず

○正誤

楊春縣志云箟簩竹皮最堅利云々其葉有㆑毒能螫㆑人

按に箟簩竹もと毒なし故に廣志に任㆑作㆑笛とみえたりその毒ある物は卽箟竹及び簩竹一名百葉竹なり然るを陽春縣志に百葉竹を以て混じて同物とし箟簩竹にも毒ありといへるは思牢竹に箟簩の字を假借せしより遂に此竹にもまた毒有とおもひあやまれるなり且劉淵林の說に簩竹有㆑毒夷人以刺㆓虎豹㆒中㆑之輒死といへるに依時は此幹もとより毒ありたゞ葉のみにあらず

本草綱目云百葉竹一枝百葉其性或柔或勁或滑或濇々者可㆓以錯㆑甲謂㆓之箟簩㆒滑者可㆓以爲㆑席謂㆓之桃枝㆒勁者可㆔以爲㆓戈刀箭矢㆒謂㆓之矛竹箭竹筋竹石痲㆒柔者可㆑爲㆓繩索㆒謂㆓之蔓竹弓竹㆒

按に百葉竹は簩竹の一名にして箟簩竹の一名にあらずまた箟簩桃枝矛竹箭竹筋竹蔓竹等はその種もと百葉竹と異なるは竹譜筍譜及び諸書に詳なり然るを時珍に至りて以上數種をすべて同類としその原を百葉竹一本に歸せしは誤りなり

沈竹

沈竹は漢名を蟲竹といひその產地は肥前國佐賀に有

竹譜詳錄云䈽簩竹出㆓廣右安南㆒又名㆓澀竹㆒節長二尺餘每節上

邊生㆓八稜㆒云䈽竹皮薄而空多徑不ㇾ餘㆓二寸㆒皮上有ㇾ粗可ㇾ爲㆓銼子銼甲㆒利勝㆓於鐵㆒若鈍以㆓漿水㆒澆ㇾ之如ㇾ舊快利

按に䈽竹正に䈽簩竹に作るべし扨此文はもと上文に引る廣州記の文を取て遂を餘に作り錯子錯甲を銼子銼甲に作りまた皮上有麤澀文の六字を皮上有粗の四字に作れる也その皮上有粗の文は誤りて粗の下に澀文の二字を落せしなりされば今いふ䈽竹も又原書による時は䈽簩竹の簩字を落せしものなる事明らけし

楊升菴文集云韻書四豪簩字下注云䈽簩竹名而不ㇾ詳㆓其說㆒按㆓異物志㆒南方思牢國産ㇾ竹可ㇾ礪㆓指甲㆒竹譜云可ㇾ挫ㇾ爪是也崔鷃詩曰時一出㆓輕芒㆒皚々落㆓微雪㆒又李商隱射魚曲曰思牢弩箭磨㆓青石㆒繡額蠻渠三虎刀是知㆓亦可ㇾ作ㇾ箭今東廣新州有㆓此種㆒製成㆓琴樣㆒爲㆓礪甲之具㆒用ㇾ之頗久則微滑當㆘以㆓酸漿㆒漬㆖ㇾ之過㆓信宿㆒則澀復ㇾ初字又作㆓澀勒㆒東坡詩倦看㆓澀勒㆒暗㆓蠻村㆒農政全書云䈽簩竹出㆓䈽簩國㆒可ㇾ礪㆓指甲㆒新州有㆓此種㆒製㆓成琴樣㆒爲㆓礪甲之具㆒用久微滑以㆓酸漿㆒漬ㇾ之過ㇾ宿快利如ㇾ初亦可ㇾ作ㇾ箭

正字通云䈽相咨切音思簩竹一枝百葉有ㇾ毒如ㇾ華大秦出㆓䈽簩㆒以鎊㆓犀象㆒利㆓于鐵㆒澀者以錯ㇾ甲異物志南方志牢國産ㇾ竹可ㇾ礪㆓指甲㆒竹譜云可ㇾ挫ㇾ爪今廣東新州有㆓此種㆒製㆓成琴樣㆒爲㆓厲甲之具㆒用久則微滑當㆘以㆓酸漿㆒漬㆖之過㆓信宿㆒澀復ㇾ初一名澀勒

陽春縣志云䈽簩竹皮最堅利可ㇾ作ㇾ刀割ㇾ澀可ㇾ礪㆓爪甲㆒其葉有ㇾ毒能螫ㇾ人異物志出ㇾ自㆓南方思牢國㆒云

『此間墨繪二枚東藪竹譜所載澀竹圖同䈽簩竹圖略ㇾ之』

〇釋名

䈽簩竹（南方草木狀廣州記竹譜詳錄）

按に䈽簩正文まさに思牢に作るべし南方異物志に思牢國産ㇾ竹可ㇾ礪㆓指甲㆒といへるもの是なり此竹はじめてその國より傳へたるに依て思牢竹と名づく猶沙古丹よりいづる竹を沙古丹竹といふが如し西土もとまた䈽竹及び簩竹あり後人その二種竹の名を併せて遂に思牢を䈽簩或は思勞に作る物は假借なり又農政全書に䈽簩竹出㆓䈽簩國㆒といへり凡

林中といへどもその大小に依て異同ある事既にかくのごとし此竹もまた刺竹と同じく上半截分澀ある事砂紙の如く且根に近き三四節には刺ある物多し故に貴州通志以て刺竹となしまた澀勒と名づけ且その方なる物杖となすべしとはいへる也其方竹を以て刺竹といへるは蜀人もまたしか唱るよし格古要論にみえたり

典籍便覽云刺勒竹又名ニ澀勒一

物理小識云東坡咏ニ澀勒一卽笆籬竹有レ刺者

按刺勒竹は卽棘竹の一名にして澀勒は卽澀竹の一名なり然るを此二書及び諸志並びに二種を混じて一ツとなすは誤り也

簜篣竹

簜篣竹一名澀竹一名澀勒竹は今松平越中守大塚の下邸にありその高さ大抵五六尺にして枝幹全く矢竹の如し葉もまた矢竹に似て五葉或は四葉を以て一朶としてその上葉はすべて二葉相對して毎葉白色の間道あり又一株の中といへども間道なくしてその色矢竹と一様なるも交はれり此種は往時清人の攜來し物なるよし今その全形を詳にするにこれ卽矢竹の一種その葉間道あるもの也故に箨おちざる事また矢竹の如し此種もし眞物なる時は李息齋がいはゆる簜篣竹亦有下止如ニ筆管一者上と竹譜詳錄いへるもの成べしされども簜篣竹は毎節上半截澀如ニ沙紙一と同上いへり今ある物はその竹至て細小にしていまだ麤澀を生ずる事なきによりてその眞僞を辨ずるに至りては更にその任據する所を知らず一種烏計竹あり其狀同ニ簜篣竹一但不レ澀と同上いへるは全く今ある所の物に相似たりといへ共此種大者以充ニ屋材一止可レ爲レ柱と同上いへば是も亦今ある物とはその種異なる物なるべし又東藪竹譜に澀竹簜篣竹を分て二種とし澀竹の圖には分澀ありて簜篣竹の圖には麤澀なしいはゆる大塚にある物は蓋し此簜篣竹と一物なるも知るべからずされども澀竹簜篣竹はもとこれ一物なるに何によりてかく二つに分ちけるにや疑はし

南方草木狀云簜篣竹皮薄而空多大者徑不レ過ニ二寸一皮麤澀以鎊ニ犀象一利勝ニ於鐵一出ニ大秦一

廣州記云簜篣竹皮薄而空多大者徑不レ逾ニ二寸一皮上有ニ麤澀文一可レ爲ニ錯子錯甲一利勝ニ於鐵一若鈍以ニ漿水一澆レ之還復快利

按に笆字棘刺の義なし或は笆はもと巴郡の巴にて巴菽巴戟天の巴と同じ此竹はじめその地より傳へしによりて名付或は此竹枝幹ともに毎節鈎刺多き物なればその鈎刺の狀巴字に似たるに依てしか稱せしにても有べきにやそれはともあれいづれにも笆は棘刺ある竹の名にて後世竹籬をすべて笆籬といへるは此笆竹を以て藩籬とせしがもとにて笆籬よりして笆竹の名の出來しにはあらじ

欜竹 廣志

按に柴籬を欜といひ竹籬を籬といへば欜正文將に籬に作るべし或は籬を欜に作る物は誤り也又由梧竹一名籬竹また笆竹と名づくこれと同名異物なり

笆籬竹 物理小識

鷄距勒 高要縣志

按に鷄距は卽棘刺の狀相似たるをいふなり

竻竹 桂海虞衡志 養餘月令 本草彙言 貴州通志 竹譜詳錄 通雅

按に竻は勒の俗字なるべし高要縣志云勒竹諸志作ニ竻竹一取ニ其多力一とこれ一說なりまた玉篇に竻竹根也とみえたりこれは竹譜に棘竹根大如ニ十石物一縱橫相承如ニ緣車一といへるに依て名付しにてもあるべきにやされども竹譜詳錄に南方呼レ刺爲レ竻といへるによるときは竻竹は卽刺竹と同意にて以上の說幷に牽强に近かるべし

箭竻 貴州通志

荅黎竹 竹譜詳錄

此二名其義詳ならず

筥竹 同上

按に筥は卽棘の訛轉にて此竹を以て圓器を作る意にてはあるべからず

○正誤

庶物類纂引ニ桂海草木志一云棘竹一名澁竹

按に草木志もと此文なし且澁竹はその麤澁頗る砂紙の如き物にて刺棘ある物には非ず然るを稲若水の混同して一ツとなすものは誤りなり

貴州通志云刺竹出ニ府屬一卽竻竹又名ニ澀勒一竹譜云笆竹有レ刺其方者可レ作レ杖

按に貴州もと刺竹なし故に其土に産する方竹の圓なる物を以て誤て刺竹とす凡方竹は徑一寸或は七八分の物は其竹みな方をなすといへ共夫より以下徑四五分なるは常竹と同じく圓にして方ならず一

諸羅縣志云簕竹高四五丈大者圍尺五六寸旁枝橫生而多レ簕堅利人不二敢犯一密者可レ禦レ盜草屋取爲二梁柱一器物資レ之用甚廣

養餘月令云竻竹出二兩江一苞生叢密節間多レ刺民居植レ之以當二藩籬一宋新州守黃濟以二州治無一レ城募レ民環二植山竹一雞犬不レ能二穿入一必竻竹也

日詢手鏡云竻竹大如二釣絲一自レ根至レ梢皆密節々有レ刺長寸許山野間每數十家成二一村一共植二此竹一環レ之以爲二屏翰一則蛇鼠不レ能レ入足レ可レ爲二備禦計一聞徭賊亦皆恃レ此爲二金湯一官軍亦無レ可二奈何一後見二續竹譜一云南人呼レ刺爲レ簕音勒邕州舊以爲レ城蠻蜑來侵不レ能レ入今鬱林州種二此城外一呼爲二護城一桂海虞衡志則書以レ竻不レ知二孰是一

陽春縣志云小者名二刺竹一大者名二澀勒一長刺密節可レ蔽二村砦一鄉落村墟多植レ此園繞久レ之刀斧不レ能レ入禽畜不レ能レ過

四川總志云刺竹成都出皆環レ節而生

『此間墨畫一葉東藪竹譜所レ載刺竹圖略レ之』

〇釋名

いばら竹 和漢三才圖會

按にいばらは古言にむばら或はうばらともいふ皇國にて舊より茨字を用ひ來れるは詩の墻有茨によりし物なれども西土にて茨竹といへるはこれと別種なり

むばら竹 增補多識編

和訓栞云むばら神代記に茨をよめりむばらからちなどいふ是なりうばらともいへり荆もよめり古歌に梅のうばらともいへるは刺あるの通稱なるべし又むばらこきむばらくろなどもみえたり

棘竹 南方異物志 南越志竹譜

按に大にして重喬なるものを棗といひ小にして叢生するものを棘といふ棘性刺多し故にすべて刺ある物をさしてまた棘といふ

刺竹 嶺表錄異白孔六帖 竹譜詳錄續竹譜

說文云刺直傷也

刺勒竹 花夷花木考 番禺縣志

玉篇云勒抑勒也

勒竹

高要縣志番禺縣志閩書南產志

笆竹 竹譜筍譜 遵生八牋

也或卒崩根出大如二十石物一縱橫相承如二繆車一一名笆
竹見二三倉一筍味落二人鬚髮一
竹譜詳錄云竻竹一名䈥竹一名荅黎竹一名欏竹一名宮
竹出二廣右兩江一安南尤多卽刺竹也南方呼レ刺爲レ芳叢
生大者二尺圍肉至厚幾二於實中一彼人破以爲二弓材一枝
葉喜下垂自レ根至レ梢每枝節間對二生一刺一尖抄彎曲若
レ鉤人家環植以爲二垣牆一初植二數莖一作二一叢一三五年
後枝蔓自相糺纒又多二鉤刺一雖二雞犬羔豚一不レ能レ徑又
竹譜云棘竹駢深一叢爲レ林云々南方異物志云棘竹有
レ刺長七八丈大如レ甕酉陽雜俎云棘竹一名笆竹節皆有
レ刺數十莖爲レ叢南夷種以爲レ城卒不レ可レ攻或自崩根
出大如二酒瓮一縱橫相承狀如二繅車一筍食レ之落二人齒一
按此棘竹卽竻竹刺竹是也廣志名二欏竹一嶺表錄異云竻
竹枝上有レ刺南人呼爲二刺勒一自レ根橫生レ枝展轉如レ織
野火焚燒只燎二細枝一嫩葉至レ春復生轉復牢密邕州舊
以二刺竹一爲レ牆蠻蛋來侵竟不レ能レ入又如二新州一舊無
レ城紹興間黃濟來爲レ守以二竻竹一環二植之一號二竹城一
廣志云欏竹細而多レ刺
南越志云宋昌（本ノマヽ）縣有二棘竹一長十尋大如レ甕其間短有二輒
六七丈一也爲レ竹叢薄葉下有二鉤刺一或有レ條末如二芒
刺一
白孔六帖云王式徙二安南都護一浚レ壕繚レ柵外植二刺竹一
冠不レ可レ冒
典籍便覽云勒竹中心堅塞枝幹相交枝上有レ刺南人呼二
刺勒竹一又名二澀勒一出二嶺南一
桂海虞衡志云竻竹刺竹也芒棘森然
本草綱目云有二棘竹一一名竻竹芒棘森然大者圍二尺可
レ禦二盜賊
本草彙言云棘竹十數莖叢生大者有二二尺圍一肉至厚中
實生二交州諸郡一夷人破以爲レ弓其筍食レ之落二鬚髮一
閩書南產志云勒竹杖上有レ刺中心堅塞枝幹相交通雅
云兩廣今多二刺竹一々生卷曲煩猥竹譜名爲二笆竹一李石
名爲二欏竹一可レ作二欏笆一也
貴州通志云竻竹卽簕竻嶺南竹也又名二澀勒一蘇軾詩倦
看二澀勒一暗二蠻村一是也肇慶府志竻竹俗呼二刺竹一竹譜
云笆竹有レ刺可レ作二藩落一本草綱目訛爲二竻竹一高要縣
志云勒竹三種小者竿蕭疎可レ玩大者名二雞距勒一以作二
樊圃一枝幹盤固刀斧不レ能レ施雞犬不レ能レ穿新州有二勒
竹城一是也又一種梃幹數丈節間微刺質厚堅利兵仗所二
必須一筍不レ堪レ甜諸志作二竻竹一取二其多力一

しほ竹は阿波國の名產なり予此頃得しは幹の長さ三尺許にて周圍に凹處數縱道ありて下節上より上節下に至るその凹處にまた巨細の異なる有て各おなじからず節は五節にして第一節は節間相去る事四寸九分第二節はその間五寸六分また第三節四節に至りては六寸六分或は七寸二分もあり其節の狀苦竹よりも低くして頗る淡竹の如し又竹肉を細査すれば上下の肉は左右の肉よりも少しく厚きを以てたての徑一寸九分よこの徑一寸七分にして竹身正圓ならざるものは此竹の性也一種山竹といふ物ありこれを前條に比するにその凹處やゝ淺し本草一家言　此二種は實に本邦の異竹にして西土廣しといへどもいまだこれ有事をきかず

本草一家言云阿波國有二異竹一呼二皺竹(シホダケ)一其幹皺面線路有二縱文一幹大者徑數寸好事者以作二花瓶一又一種線溝淺者呼二山竹一一類一種也

『此間彩畫一葉しほ竹阿州產略レ之』

○釋名

しほ竹本草一家言

按しほ竹を一家言に皺竹に作て皺面線路有といへばしほは卽しはの俗語成べし或は物の枯萎する時は必ず皺文あるものなればしぼみ竹の義なるも又知るべからず

山竹同上

此二名は共に阿波國の方言也

いばら竹

いばら竹一名むばら竹は漢名を棘竹一名刺竹一名刺勒一名勒竹一名笆竹一名欏竹一名笆籬竹一名竻竹一名簕竻一名筥竹一名荅黎竹といふ今此種絕て植る物なしといへ共和漢三才圖會に棘竹希に是ありといひ東䕫竹譜にもまた刺竹の圖を載たり其圖のいづる所いまだ詳ならずといへどもいはゆるむばら竹の名は既に增補多識編にみえたればいづれにも舊はありしものなる事しるし

和漢三才圖會云棘竹希有レ之然小而未レ見二大者一

竹譜云棘竹駢深一叢爲レ林根如二推輪一節若二束鍼一亦曰二笆竹一城固是任箯筍既食鬢髮則侵

又云棘竹生二交州諸郡一叢生有二數十莖一大者二尺圍肉至厚實中夷人破以爲二弓扱一節皆有レ刺彼人種以爲レ城卒不レ可レ攻萬震異物志所下種爲二藩落一阻中過層墉上者

尺〈北戸録〉或は一丈許〈秘傳花鏡〉に過ざるものなるにかの曼陀羅は幅一丈五尺ありと〈和漢三才圖會〉いへばその軸にして節なき竹は卽通竹なる事明らけし扨此竹西土にては溱州に產し〈北戸録〉木邦にては備後國に產すると〈本草觽〉いへりその他また有事をしらず

和漢三才圖會云中將姬者横佩右大臣豐成之女也云々禪尼來云汝當下調二數萬蓮絲一織中曼陀羅上也事叡聞勅二忍海連一令レ採二近江大和河内三國蓮莖一獻二九十餘駄一化女來設二藁三把油二升一浸二油於藁一爲レ燈亥子丑三時織二成曼陀羅一其幅一丈五尺用二無節竹一爲レ軸實此三國無雙靈寶也

岡村尙謙云當麻曼陀羅緣起圖說に此曼陀羅乃化人用二蓮莖一取レ絲之所レ織也幅方一丈五尺下以二一夜生無節竹一爲レ軸用二子丑寅三時一造就と見えたりされば此曼陀羅の軸は一夜に生ぜし無節竹なれは尋常の通竹にてはあらざるに似たり尙考ふべし

本草觽云無節竹出二備後姬谷一俗呼二尺八竹一

北戸錄云案王最曰溱州通竹直上無節空心也〈華夷花木考 彙苑詳注同〉

本草綱目云無節竹出二溱州一空心直上卽通竹也

秘傳花鏡云通節竹產二於溱州一其幹直上無節而中心空洞無レ隔亦異種也

〇釋名

尺八竹〈本草觽〉

按に無節の物にして尺八の名ある事疑はし或は此竹を以て尺八の笛を作るによろしきによりて此名を命ぜしにや又尺八は丈八の誤りにてその節間一丈八尺も有といふ意にてもあるべきにやいまだ其實をしらず

通竹〈北戸錄 本草綱目〉

本草啓蒙云無節竹は節の角なく空心にして閣漏（タケドヒ）に用ゆべきもの故に通竹の名あり康熙字典に筩に作る

通節竹〈秘傳花鏡〉　無名竹〈本草綱目〉

〇正誤

本草啓蒙に本草洞論を引て云無名竹一名無心竹

按に此竹空心直上のものなるに無心の名疑はしその空心直上の字は北戸錄および本草綱目にもみえたれば此無心は盖し空心の誤りにてもあるべきにや

しほ竹

古今要覽稿卷第三百七十五

●草木部 竹十三

疎節竹

疎節竹は和漢通名にてその節間極めて長き竹なれば笛を造るに至てよしその節間三尺許なるは笛二管をとり四尺許なるは三管を取べし今筑後柳川にありと（丹洲圖竹）いふまた東海道大磯の驛なる 鴫立澤に西行法師の遺物とて竹杖ありその長さ四尺大さ一握許にて節はその兩端にあり一説に此杖は寶曆の頃長崎の譯司吉雄幸作が贈れる所にしてその實は西行のつぎしものにはあらずと（同上）いへり

北戸錄云高潘州出二千歲蕨柱杖之類一甚多更有二疎節竹一五六尺一節僧道多以爲レ杖

農政全書云疎節竹六尺一節

本草彙言云疎節竹五六尺一節出二高潘州一見二通志一秘傳花鏡云疎節竹其幹最高每二一節一差一丈許出レ自二黎母山陽一

『此間彩畫一葉疎節竹圖略レ之』

○正誤

俗說に今鴫立澤にある疎節竹はその昔し西行法師のつきし杖なりしといへり

按に鴫立澤は今大磯の内なる小磯といふ所にあり此地は西行法師の鴫立澤の秋の夕暮といへる歌にたよりて連歌師宗祇の柴庵を結び居られし所にてうつし置わが影ながら世のうさをしらぬ翁ぞうらやまれぬるとよみしは其時の歌なるよしその後また三千風といふ俳人もその遺蹟をしたひてこゝに住居せし時鴫立し澤邊の庵をふきかへて心なき身のおもひでにせんとよみしは今そこの碑に殘れりまた六十餘州一枝杖三千世界兩眼中といふ對句も此所にての事なるよしされば西行法師の杖のこゝに傳はれるよしなしもし此杖吉雄幸作が物にあらざれば或は三千風のつきし物なるべし

尺八竹 無節竹

尺八竹は漢名を通竹一名通節竹一名無節竹といふ此種は卽孝謙天皇の御代に中將姬の織し曼陀羅の軸にせし竹と蓋し一種なり凡疎節竹は一節の間大抵五六

レ鐵毎節二三寸
湧幢小品云黒竹如レ藤長丈八尺色黒如レ鐵毎節長二三寸名二觀音竹一產二占城國一
竹譜詳錄云烏竹生二慶元等山中一大者五七寸圍形狀與二龍須竹一大同但筍出時烏紫色日乾致レ遠味珍他筍不レ可レ及也
茅亭客話云有二絲竹一葉細而青莖瘦而紫亦謂二之黒竹一
『此間墨繪一葉東藪竹譜所載烏竹圖彩畫一葉くろ竹略レ之』

○釋名

くろ竹俗稱　黒竹雲南通志　烏竹漳州府志寧波府志　觀音竹瀛海勝覽彙苑詳註
絲竹茅亭客話

○正誤

庶物類纂云黒竹一名觀音竹一名絲竹
按に觀音竹は長さ一丈餘にて其色黒きもの故に一名を黒竹といひ其竹占城國に產するを以て或は占城觀音竹ともいへりまた茅亭客話に有二絲竹一云々亦謂二之黒竹一といへるは卽同名異物にて絲竹は必ず觀音竹にあらず然るを混じて一物となすは誤れり

本草綱目啓蒙云烏竹ハ黒竹ナリ本草彙言ニ黒竹長一二尺許純墨色出二西山一
按本草彙言には西山の下に見二文徵明太史墨竹銘一又蘄水縣鳳棲山下有二墨色小竹一俗云王羲之洗レ筆池崖畔出也乃三十四字ありこれによれば彙言にいはゆる黒竹はもと墨竹の誤りにて西山に出るものも鳳棲山下にいづるものも其大さは大抵おなじ物なるべしそれを以て綱目の烏竹に混同せしは誤りなり又庶物類纂黒竹一名觀音竹の條に本草彙言を引しは高さ僅に二尺許のものと長さ一丈七八尺のものとを混同せりこれも彙言の黒竹は卽墨竹のあやまりなる事をしらざる誤りなり

もあらざれば斑竹は忌とも紫竹は忌べからずその二女の涙かゝりしといふももとは西土のふるき俗説にして斑竹の斑文あるものまた紫竹の紫色なるも皆其竹の天禀なりされば涙かゝりし故に斑文の出來したといふも同類のものなるによりて忌といふもともに拘れり今の俗説に紫は色のうつろひやすきものなりとて婚姻の衣服などにはその色を用ひざるよしふるくより紫竹を忌もしくはこの類ひにてもあるべきにや

廣大和本草云紫竹云々大和本草ニ彼ニナシト云ハ非也

按に大和本草紫竹條の標註に和品の二字ありて彼になしといふ文はみえず然るを直海龍の漫に其文をつくりて強て篤信をそしれるはいかゞ

くろちく

くろ竹は漢名を黑竹一名烏竹といふ卽和漢通名なりまた一名を篶竹或は烏歩竹ともいふ此竹小野蘭山は播磨にありと（本草綱目啓蒙）いひ谷川士淸は薩摩にありと（和訓栞）いふ佐藤成裕曰薩摩の産はその竹雄竹に似て幹極めて紫黑色なりとこの種播磨に産するものと同種なるや否をしらず今松平越中守大塚の下邸にあるものは高さをよそ七八尺枝葉並びに紫竹に似て其色紫竹よりも極めて黑し此種は卽漢産のよし一種觀音竹ありまた黑竹と名づくその幹細小にして長さ二丈八九尺狀古藤の如し（瀛涯勝覽 彙花詳註）また一種烏竹ありたゞ筍をいだす時その色黑し（竹譜詳錄）また絲竹一名黑竹あり（茅亭客話）ともに和產これある事をきかず

本草綱目啓蒙云竹ハ黑竹ナリ本草彙言ニ黑竹長二尺許如ニ指大ー純黑色葉玄碧出ニ西山ート云雲南通志ニ黑竹色黑可レ爲ニ簫管ート云和產播州ニアリ竹譜詳錄云篶竹一如ニ紫竹ー但色正黑耳

本草綱目云烏者黑而害母

廣群芳譜引ニ雲南通志ー云黑竹出ニ懷穹ー色黑可レ爲ニ簫管ー按此與ニ原譜黑竹ー異（按に原譜黑竹は蓋し觀音竹をいふなるべし）

漳州府志云烏竹其色如レ漆

寧波府志云烏竹其笋最佳

邵武府志云烏歩竹大如ニ斑竹ー笋極佳

瀛涯勝覽云觀音竹如レ藤長丈八尺許色如ニ黑鐵ー每寸約二三節

彙苑詳註云觀音竹出ニ占城ー如レ藤長丈八尺許色黑如

番禺縣志云紫竹幹如レ指紫色長不レ滿二五六尺一
當塗縣志云紫竹質堅厚二於斑竹一
建昌縣志云紫竹生二本土一者幹小而脆惟紫黒色可レ供二觀美一堪レ用者少
仁和縣志云紫竹小而色紫可レ爲二簫管一其細者宜レ筆
會稽縣志云紫竹可レ爲二簫管一九節者佳
邵武府志云紫竹與二斑竹一相類但其色純紫可レ作二金柄一亦可レ作二簫笛一
紹興府志云紫竹可レ爲二簫管一九節者佳
江西通志云紫竹小而勁直色紫可レ備二簫管一九節者佳笋味亦美

○歌

夫木和歌集卷第廿八雜部十

竹

百首歌
紫の竹のまかきの藤はかま　従二位家隆卿
　契ありてや匂ひそめけん

逍遙院殿家集
ませのうちにはひさしけりな紫の
　竹のふかねはこなたかなたに

『此間彩畫二葉むらさきだけ及同筍略レ之』

○釋名

むらさき竹 家隆卿百首 逍遙院家集
胡麻竹 俗稱
此竹紫黒斑極めて細少にして頗る胡麻の如し故に名づく
紫竹
益部方物略記竹譜詳錄本草綱目致富全書華夷花木考

○正誤

紫君 庶物類纂引二張文潛賛一　紫苦 丹鉛錄　觀音竹 事言要玄集 致富全書

壒囊抄云世ニ紫竹ヲ忌ハ堯ノ女娥皇女英舜崩御ノ後湘浦ノ南蒼梧野ニ納奉リケレバ二人ノ妃常ニ行湘浦ノ岸ニ立テ泣給ヘル涙竹ニ懸リテ斑ラニ染リケル也後ニ生出タルモノ湘浦ノ竹ハ皆斑ラナリトイヘリ此竹メヅラシキ故ニ移シ植テ世ニ弘マレル也昔ナキ人ヲ戀涙染リシ故ニ此竹ヲ忌ナリ今紫竹斑竹ト二ツニイヘ共同類ナルベシ

按に紹武府志に紫竹與二斑竹一相類といひ高要縣志にも紫竹稍類二斑竹一而通身紫色なりといへどもその實は別種也且紫竹は娥皇女英の涙かゝりし竹に

竹譜詳錄いへると同日の談也
大和本草云和品紫竹色紫黑淡濃紫白相雜レリ
和漢三才圖會云按竹本朝亦有ニ數種ー云々紫竹篠竹多
有レ之
又云紫竹林在ニ蒲原郡彌彥庄鳥屋野トヤノ東派西方寺支ニ配之ー親鸞聖
人三年居住弘法之地也而未ニ飯伏ー者衆於レ是以ニ所
レ携紫竹節ー挿レ地曰我所レ勸念佛宗愜ニ佛意ー則此竹
當ニ活生ー果不日繁茂而枝葉猶ニ倒生ー人無レ不ニ感信ー
其竹林南北三十五間東西二十間今亦存在焉
本草綱目啓蒙云紫竹ハ卽苦竹ノ品類ナリ生ジタル年
ハ綠色ナリ翌年ヨリ變ジテ紫黑色トナル蘇頌ノ說ニ
苦竹有レ白有レ紫ト云丹鉛錄ニ又有ニ苦竹ー黃苦青苦白
苦紫苦ト云是ナリ
益部方物略記云紫竹蜀諸山中尤多園池亦種爲レ玩然
生二年色乃變三年而紫
竹譜詳錄云紫竹出ニ江浙兩淮ー今處々有レ之如ニ筀竹淡
竹苦竹ニ或大或小但色有ニ淺深ー通名ニ紫竹ー有ニ初綠
而漸紫者ー有ニ筍出卽紫者ー世共謂ニ之紫竹ー用ニ之織柄
柱杖ニ甚佳亦有下製ニ簫笛ー者上根亦紫色節々匀停於ニ馬
箠ニ尤宜新安志云紫竹斫レ之益繁諺云一年青二年紫三
年不レ斫四年死
續竹譜云紫竹其莖如レ染出ニ青城蛾眉山ー可レ作ニ莖竿
簫管ー
遵生八牋云紫竹杭產色紫黑可レ作ニ笙簫笛管諸用ー俱
可故雅尙者多蓄レ之
本草綱目云紫者黯色黝然
致富全書云紫竹高可ニ丈餘ー大僅手握相傳紹興中有
レ商泛レ海阻レ風山下見ニ一僧ー背後有レ竹斬レ之作レ杖隨
レ及有レ光倏忽卽是落伽山觀音座後旃檀林紫竹又名ニ
觀音竹ー可レ作ニ簫笛ー
通雅云紫竹斑竹皆有ニ大者ー又有下極小如ニ瀟湘竹ー者上
廣西仙廻深山有レ之
秘傳花鏡云紫竹出ニ南海普陀山ー其幹細而色深紫段
之可レ爲ニ簫管ー今浙中皆有
華夷花木考云紫竹小而色紫宜ニ傘柄簫笛用ー
江陰縣志云紫竹初觧レ籜猶レ青久之色乃變
陽春縣志云紫竹莖細節密不ニ甚高ー深紫色植ニ之庭際ー
可レ稱雅玩堪レ爲レ杖亦可レ製レ簫聲極清亮
高要縣志云紫竹梢類ニ斑竹ー而通身紫色質堅重堪レ作
レ器

古今要覽稿卷第三百七十四

●草木部 竹十二

むらさき竹　胡麻竹

むらさき竹は今いふ紫竹にして即和漢通名なりその一名を紫君一名紫苦一名觀音竹といふ此種はじめ籜をとく時なを青く漸くにして紫に變ずるもあり筍いでゝ即紫なるもあり 竹譜詳錄 江陰縣志 また一年は青くして二年に至りて紫に變じ 新安志事物紺珠 或は二年にて色を變じ三年にして紫なるもあり 益部方物略記 今有るものはその幹濃紫にして高さ八九尺徑四五分にて雙枝のもの多く獨枝のもの少し葉は細小にして大抵淡竹の如し李息齋竹譜に紫竹今處々にあり筆竹の如く淡竹のごとく苦竹のごとしといへる中に淡竹の如くといへるは即これと同種なるべしいはゆる淡竹は每枝細小にして箒となすによきもの也紫竹の枝もまたこれとおなじく箒に作るべし然るに苦竹筆竹の如しといへるものは和產いまだ詳ならずまた俗に胡麻竹といへるは紫黑色の斑點ありて別種のやうに見ゆれどもその實は紫竹の年を經て再びその色を變ぜし也今隅田川木母寺のうしろ及び榎木戶また河口邊此竹殊に多し扨京都將軍家の頃は紫竹にて作れる鞭を平人はもたずと 弓馬故實 いへり西土にても馬箠に用ゆるよし 竹譜詳錄 もまた此竹を傘柄その外杖などに用ゆる事西土にてもみる事なり一種舶來のものありその高さ大抵七八尺根上より四五節の間は双枝にしてそれより以上は三枝なり其三枝の狀左右の枝は大にして中枝は至て細してその色は上節より染出して下節のかたに至る節また紫色にして枝にも紫斑あり葉は前條よりも細小にて二葉三葉を一朶とし葉本に細褐毛あり此種は今松平越中守大塚の下邸にあり凡筆竹は淡竹よりもその葉やゝ細小なるものなれば竹譜に紫竹筆竹の如しといへるは蓋しこれをさしていひしなるべし又越後國の方言にさかさ竹といふものあり即其國七不思議の一つなりこれは親鸞上人の紫竹の杖をさし置れしが根つきて遂に竹林に成しと 和漢三才圖會 いへり西土にても越州蕭山縣の東に黃竹山あり其上に黃竹多しこれは范蠡の鞭をのこし置しがやがて筍を生じて林となりしと

た梢葉に至りては却て青色にして縱道なきもあり此即西土にいはゆる間道竹なりといへ共邦産たゞ幹水竹の如く每叢或は十四五葉に至らざるを異なりとす今松平越中守大塚の下邸に杢目竹といふものあり即これと同種也又一種その葉大なる事苦竹と一樣にして每青葉のうちたまく左枝に一葉或は右枝に一葉その葉の正中或はかたよりて一行二行の間道あるものありこれは全く苦竹の變生なり

增補地錦抄云翁竹は葉の色しろく青筋ありてしまの如く遠く見越てながむれば雪ふり竹を見るごとくをしなべてしろきやうにみゆるなり

竹譜詳錄云間道竹生二兩浙山中一人家庭院亦有レ植レ之者一竿如二水竹一節差密葉如二毛頭竹一頗瘦長葉上有二淡黃間綠細勒道五七行一每叢或至二十四五葉一吳興周公謹密有二別業一在二杭一叢數本

『此間彩畫一名翁竹略レ之』

○釋名

翁竹（增補地錦抄）

○名義上文にみえたり

杢目竹（種樹家稱）

○杢目はもと木の條理あるをいふ此葉間道木の條理あるが如し故に名づく

間道竹（竹譜詳錄）

雲南通志云漢竹卽南中志所謂節相去一丈可レ受二一斛一者今產不レ過二二三尺一受二升合一而已

○釋名

漢竹（廣志竹譜詳錄）

○按漢竹名義詳ならず黃群芳譜引二美陽國志一云僕竹出二永昌郡一云々筍譜本草作二漢竹一疑僕字之訛なりと此說しかるべしされども今傳ふる筍譜には漢竹の外に䈻筍ありて出二溫處建寧一竹如二苦竹一長節而薄可レ作二屋椽一筍則春生可レ食とみえまた竹譜詳錄本草彙言等にも漢竹僕竹を以て各條に出し且二竹の生處おの〳〵異なるによれば蓋し一物にはあらざるべし

一種まだけ

一種のまだけは竹譜詳錄に載るところ廣西山中のものと同種なり岡村尙謙嘗て巢鴨の種樹家より移し植るものその高さ八九尺その葉尋常のまだけと同じく三四葉或五七葉を以て一朶とすれどもその狀やゝ細小なるを異なりとすまた新竹の梢葉に至りては九名或は十名また或は十一名を以て一朶となすは頗る方竹の嫩苗葉の如し此竹中幹より以上は每節雙枝の間別に一小細枝を生じてすべて三枝なりといへ共その節の狀及び葉本に細褐毛あるは尋常のまだけに同じまた松平越中守大塚の下邸に猪名野篠原の竹あり卽まだけの一種三枝なるものにて卽園中のものと同種也或は尋常のまだけの叢林中にて其幹細小なるものはたま〳〵三枝を生じてこれと一樣なるものありそれは全く變生にして一種のものにはあらざるなり竹譜詳錄云苦竹處々有レ之廣西山中一種散生每節間生二三枝一葉長如二筆竹一色深綠瑩淨婆娑極可二人意一筍味苦病二積熱一者食レ之甚良或云可二生食一

『此間彩畫一葉一種しまだけ略レ之』

おきな竹

翁竹一名杢目竹は漢名を間道竹といふ其幹節幷に苦竹に似て高さ一丈餘圍み四五寸に至る此竹始め獨枝にして後に雙枝のもの多しその雙枝を必ず左右互に大小の異なる事なりなを苦竹の如し葉は大抵淡竹葉に似て五葉を一朶とすまた三葉のもの四葉のものあるは年を經て二葉或は一葉のをのれと枯落しにて全形にはあらず其葉表裏の透りて淡黃白色の縱道三五行靑葉中に間して兒篠の如く葉本より葉先に至るま

もひしに籠葱竹は恵陽志に葉如二芭蕉一大長及二一丈一といひ番禺志に籠葱竹葉大如レ手徑二三尺といふ時はこれとは別種なり扨佐藤成裕壯年の比遊歴せし時肥後の小國といふ所より二里ばかり山間の人家なき所を過て豐後の肥田といふ所に行しにその間に竹村ありその名は忘れたれどもすべて其所はいと高き土山にして其山頭に大竹幾萬幹群り生じて水田はなくたゞ畠のみ少しはありといへ共其畠にも夏の比はおのづから筍を生じて抜とらざれば忽ちに竹藪となるかく竹の多き處故に土人の家居は皆竹を以て作れば床はさらなり柱も障子も薪までも皆竹を用ゆるなりそこの男女は終日竹の事にのみかゝりて別に農業を勤むる事もなしこれは古よりの竹村なれば三度の飯にも竹筍の乾したるを糧とし小兒の時より痘瘡も至て輕くして壯健なる事世にたぐひなしまた別に惡病も煩ふ事なければ醫を頼む事もなしとそれをのみ土人はほこりがほに物語しけり又筍を製するには柔き比採て湯に浸し或は蒸などして日に乾し用ゆる時に水に浸し煮て食するに其味殊によろし凡半里餘も左右皆竹林にして其道傍に材木を積たるが如く竹を切て積置或は輪竹にして近國へ出しまた屋材の用に供す凡かくの如く竹の夥敷ある所は世にはまたとあるまじきなり扨その家居のさまは皆人々の巧にまかせて面白く作りしものなれば中々に言語には述難しといへり和訓栞に漢竹豐後より出るといへるは蓋し此村の事なるにや　本朝俗諺志云　相州西郡の内金子村さかわより二里半に金子市左衛門といふ百姓あり此藪の竹一尺八寸廻り六七間の末にて一尺廻り程あり藪はやうやう十間に廿間ばかり一間に一本ヅヽありめづらしき竹藪なり此竹所望すれば最初の契約にて根からはきらず三尺ばかり上より切て切口に何か藥をぬり竹の皮にて幾重も包み大切にする也

廣志云永昌有二漢竹一圍三尺餘大者一節受二一斛一小者數升爲二椑榼一

筍譜云漢竹筍大者一節受二一斛一小者受二數斗一可レ爲二榑榼一其筍一節可レ受二二三升一味雖レ甘而澁

竹譜詳錄云漢竹出二交趾九眞一廣中亦有レ之大者一節受二一斛一小者受二數㪷一可レ爲二尊榼一其筍一節亦可レ受二二三升一味甘而澁

本草綱目云永昌漢竹可レ爲二桶斛一

瑇瑁竹 駿河方言

○此竹斑文極めて大なりといへ共その狀瑇瑁斑に彷彿たり故に名づく

玳瑁竹 陳氏竹譜

○玉篇云瑇徒戴切瑇瑁或作レ玳瑁莫舊切珪長四寸天子執レ之又莫對切瑇瑁也本草綱目云玳瑁音代昧又音毒目時珍曰其功解レ毒々物之所ニ娼嫉一者故名

玳瑁竹 紫簕竹

玳瑁竹は漢名を紫簕竹といふ其高さ二尺許葉は熊笹に似て細小にして長さ八九寸廣さ一寸餘其葉おほよそ七八葉を以て一朶とす或は五葉六葉のものあるは必ず下葉の枯落しにて全形には非ず其葉面また熊笹の如く正中に淡黃色なる一縱道ありて其左右おのおの八線路相並て共に葉本より葉先に至る此竹小なりといへども其節間獨枝を生じ及び籜おちざる事また熊笹の如し但毎節下紫黑色なるを異なりとす此種今松平越中守大塚の下邸にあり既に移し植しより十餘年を經るといへども其時の儘にて更に生長する事なしといへりされば此竹は大竹には非ずして箸の類なる事明らけし

竹譜詳錄云白簕竹在處有レ之莖小ニ於箸一葉如ニ掌大一而長紫簕竹亦同但莖色黑紫耳

按和產紫簕竹其葉細小なるものは風土のしからしむる所にして別種にはあらず

『此間彩畫一葉玳瑁竹略レ之』

○釋名

玳瑁竹 種樹家稱

○按に此竹は莖多く紫黑色にして斑文絕てなし然るを玳瑁竹といへるは蓋し種樹家の强名なるべし

紫簕竹 竹譜詳錄

○撫州府志云箸名又名簕竹

漢竹

漢竹は和漢通名なり江村如圭は漢竹伊豫に生じ以て桶に作るべしと 本草鷇 いひ谷川士清は漢竹桶となすべきもの豐後よりいづると 和訓栞 いへりまた相模の金子村に產するものもこれと同種なるべしおもふに此種は蓋しま竹のその土地に應じてよく生育し其幹極めて長大にして圍み二尺餘に至るものにて別種にはあるべからずまた竹譜詳錄に籠葱竹生ニ羅浮山一因名ニ羅浮竹一々皆十圍といへるも大略此類なるべしとお

古今要覽稿卷第三百七十三

●草木部竹十一

瑇瑁竹

瑇瑁竹は今駿河國藤川の傍なる木島郷にあり卽ま竹の一種斑文ありて最長大なるもの也往時或人故ありて駿河國に至り始めて此竹を見出しその上下を截去て長さ七八尺餘圍み九寸許の物を攜來りしを親見するにその節半體は黄色にして半體は節間皆大斑文ありてその狀一樣ならず或は一方にくびれたる所ありて晩に生ずる胡瓜(キウリ)のまがりて最大なるが如く或は左右にくびれありて約腹壺(ヒャウタン)の如く或は本小末大にして頗る團扇の狀の如く或はくびれたる所なくしてたゞ紫黒色のみなるもありてその斑文いづれも下のかたは色こく上のかたはやゝ薄し凡斑竹は皇朝にても西土にてもその品僞造のもの多しといへ共此竹の如きはおのづから節ごとにその斑文のかく異なるものは實に天下の奇竹なり爰には年を經て幹枯せしたゞ壹幹の形狀のみをあぐれどもその生竹及び細小なる竹も極めて多しといへば其斑文の變化百出これと異なるものも亦おほかるべしまた或人の其地に至る時土人此幹を擘て簑となし蛇籠を作りて藤川に於て供水を遮きりしといへりかゝる奇竹を以て尋常の用に供するものは最おしむべし扨此瑇瑁竹は舊より駿河國にのみ產してその他諸國またこれある事なきを以て諸家本草絕て此竹を載せず往時或人其地に至りて攜來りしを始めとす故に世人嘗て此種をしるものなし又竹譜筍譜及び本草綱目等にもいまだ此竹を載せざるをみれば西土にはかくの如き瑇瑁竹はあらざるべし彼にいはゆる瑇瑁竹は弓竹とて每節斜に出りて長さ十餘丈にして斑文有ものなればこれとは別種也また照代叢書に載る所の陳定九が竹譜に玳瑁竹產二廣西一幹色如二玳瑁一明亮直透二於內一といへるはこれとは別種なるべし

陳定九竹譜云玳瑁竹產下廣西近二交趾一地上幹色如二玳瑁一明亮直透二於內一笋味甘籜亦斑々可レ愛

『此間彩畫玳瑁竹一葉略レ之』

○釋名

實滿機按是亦實竹也

雲南記云雲南有二實心竹一文彩斑駁殊好可レ爲二器物一其工以爲二檜幹交牀一天中記引○按竹譜詳錄引交作レ故

南征八郡志云龔冷縣有二大竹一數圍實中任二屋梁柱一覆二用之一則當レ瓦淵鑑類函引

建昌縣志云實竹節長幹小厚肉黴竅可レ作二鞭箠一筍味爲レ佳

南昌府志云實竹四月始有レ筍

江西通志云實竹可レ筆四月始有レ笋

八閩通志云實竹可三剖爲二器用一

『此間彩畫丹洲圖竹所載實心竹圖三枚略レ之』

○釋名

實竹竹譜詳錄建昌縣志江西通志八閩通志 實中竹本草集注 實心竹本草綱目雲南記 滿心竹竹譜詳錄 服腸竹竹譜詳錄本草彙言

○正誤

本草綱目云實心竹其外皆圓

按に實心竹はこれを他の竹に比するにその溝渠至て深きものなり凡他の竹の溝渠あるものは大抵一節の間半ばにして盡るものなれども此竹は下節上より上節下に至るまでその溝渠の深さ一樣なるはこれその天性なり然るを綱目に其外皆圓といへるは蓋し傳聞の誤りならんか

至ては鍼を穿つべき程の細小竅あり又小野蘭山の見たりしは徑り一寸餘のものにて舶來せしは徑り二三寸のものありと（本草綱目啓蒙）いひ栗本瑞仙院の杉原氏より贈りしといへるもまた蘭山の見しと同じく其徑一寸許のものなれども別に圖せしは長さ五寸許の竹にてやゝ細しすべてこれ一物なりまた西土には實竹に文彩斑駁なるものあれば至て大なるは梁柱或は瓦にもなすべきものありまた滿心竹服傷竹と（竹譜詳錄）いへるものありこれは蓋し實竹の土地によりて方言の異なるものにてもあるべきにや

本草觿云實中竹松前竹島生レ之串ニ海參一以寄レ遠者是

本草綱目啓蒙云實心竹ハ即弘景ノ說ノ實中竹ナリ阿州一宇山ニ産ス徑寸餘舶來ノ品ハ二三寸ノ徑ナル者アリ本草彙言ニ文彩斑駁可レ爲ニ器物一丹洲圖竹云此竹戊子ノ暮杉原氏ヨリ得タリ根ニ近キ所ハ實シテ心ナシ二尺許リ上ハ細孔アルベシ尋常一般ノ竹ニ比スレバ微扁ニシテ中心充實ニシテ溝深キモノ也

又云實心竹略シテ只實竹ト云心ニ空孔ナシタマ〳〵孔アレバ針竅ノ如シ本草綱目啓蒙云實心竹ハ即弘景ノ實中竹ナリ云々意ニ此ニ斑駁ト云ハ人工ニテ斑ヲ作爲スルモノ多シ天然ノ斑文ニ非ズ

集注本草云竹類甚多入レ藥用ニ篁竹一云々又有ニ實中竹篁竹一並以レ筍爲レ佳于レ藥無レ用（證類本草引）

本草綱目云竹惟江河之南甚多小曰レ篠大曰レ簜其中皆虛而有ニ實心竹一出ニ滇廣一其外皆圓云々

竹譜詳錄云實竹枝葉節莖出處一如ニ淨瓶竹一但無ニ腹項一心不ニ空虛一枝葉差少今好斷取作ニ馬箠一幹甚堅靱

按に淨瓶竹は竹譜に江浙閩廣倶有レ之枝葉與ニ淡竹一不レ異但去レ地一二節便擁腫有レ項有レ腹宛如ニ一瓶一以上幹節如ニ常竹一其質極堅人取爲ニ柱杖一とみえたりおもふにこれ布袋竹の一種なり

又云滿心竹生ニ廣西陽朔山中一枝葉一如ニ篥竹一但幹實無レ心故名湖湘之間亦有レ之筍味佳雲南記云雲南有ニ實心竹一文彩斑駁可レ爲ニ器用一唐僧淸晝有ニ實心竹杖詩一按此或卽滿心竹是也

又云服腸竹江南諸郡往々有レ之大者五六寸圍長二丈許其中實四月以後出レ筍味甚美枝葉與ニ他竹一亦類服腸之義未レ聞贊寧曰大者五六寸圍長二丈中實古人用以削ニ弩箭一四月筍美

按庶物類纂引ニ本草彙言一云服腸竹大者五六寸其中

脆而味美
丹徒縣志甘露寺一僧道行孤高李贊皇廉問日嘗與レ之遊及レ罷レ任以二方竹杖一枝一留贈焉方竹出二大宛國一堅實而正方節眼鬚牙四面對出實衞公所レ寶也及三再鎭二浙右一其僧尙在公問曰所レ奉竹杖無レ恙否對曰已規圓而漆レ之矣公嗟惋彌レ日
高要縣志云方竹今寺觀及別業中多植レ之質薄易レ折
嘉興府志云方竹其體方而色白十月生レ笋異種不二多得一

右桂苑叢談以下の引書は庶物類纂に引所也

『此間彩畫四方竹二葉略レ之』

○釋名

四方竹（丹洲圖竹木草綱目啓蒙） 四角竹（木草綱目啓蒙） 方竹（北戸錄筍譜竹譜詳錄本草綱目）
刺竹（格古要論）

○正誤

通雅云方竹出二君山一云々益部方物記贊方竹中實但小耳此未レ見二北戸錄澄州之大方竹一也

按に澄州まさに隔州に作るべし蓋し傳寫の誤なり今北戸錄の文を詳にするに澄州産二方竹一體如レ削成一堪レ爲レ杖云々隔州亦出大者數丈とみえたりこれによれば澄州に産するは尋常の方竹にして大なるものは隔州より出るなり然るを本草啓蒙にもまた通雅の文を引て其字を改めざるものは疎漏の至り也

實竹

實竹一名實中竹一名實心竹は和漢通名にて舊より陸奥國松島の竹島（本草綱目啓蒙）及び阿波國一宇山に（本草綱目啓蒙）産するものその名殊に高し今江戸には此種有ことをしらざればいまだ其枝葉を見ずといへども李息齋竹譜に實竹一に淨瓶竹の如しと見えたればその枝葉は蓋し布袋竹と大抵一樣のものなるべしまた陸奥國松島に産するあり近頃大窪柳太郎（秋田の藩の人字を天民といひ號を詩佛また江山といふ）その地に遊歷して二竿攜來りて杖とせしをみるに一竿は長さ四尺餘徑り五分許にて毎節ま竹よりも高くしてその間相去る事三寸許その枝を生ずるかたは溝渠ありて常竹よりも至て深くして下節上より上節下に至る一竿は長さ五尺許にてその節間六七寸或は八寸許なるもありてやゝ太しいづれも根に近き所の二三節は常竹と同じくその節間つまりて短しその根のきり口は共に充實して心なしといへども梢上のきり口に

非山人家扶老也姑置弗取

明宋學士文集云皇帝視朝之暇燕處武樓中每召一二臣鄰諮詢治道時吏部尚書臣詹同在帝座右歷談古帝事旁稽物理而偶及於竹帝曰竹之類其亦多乎臣同對曰其類實繁晉戴凱之所譜至五十餘種或根如盤輪或節若束針或細則勝箭或鉅可爲舟有未能歷擧者大概其色皆青其體皆圓也唯吳越山中有名方竹者最爲奇異四稜直上弗偏弗頗若有廉隅不可犯之色以故士大夫愛之往往采而爲節帝曰信有諸乎臣同復對曰老臣焉敢謬言既退獲一枝以獻帝摩挲觀之悅曰臣同其亦信人哉於是親御幹墨草方竹記一通

留青日札云怪竹見唐書不知今爲何竹名甚奇高宗遣官者采怪竹江南將蒔上苑荊州長史蘇良嗣囚之今上亦嘗遣使采江南方竹即此類也方竹寧波志云葛仙翁煉丹于定海靈峯植竹筋化爲竹而方

攬茝微言云李文饒鎭潤州日與甘露寺僧善瀕行以方竹杖餉之是公所寶及再鎭問僧前竹杖無恙否已規圓而漆之矣公嗟惋彌日嗚呼一竹杖也知者以爲珍不知者則尋常視之矣世間萬物皆如此此不足論古人所謂身外皆長物也以有道者觀之奚啻如山僧視竹杖已乎庸知此僧非爲文饒說法也續說郛引

致富全書云方竹本方可徑寸而長似紫竹種出天台近有移至吳中亦活

秘傳花鏡云方產方澄州桃源杭州今江南俱有體方有如削成而勁挺堪爲柱杖亦異品也

本草彙言云方竹形方葛仙植于定海靈峯者見寧波府志又方竹體如削成勁挺堪爲杖產澄州見北戶錄又益部方物誌有方竹贊又澧州西游州鐵治辰山產方竹又隔州亦出方竹長者數丈

格古要論云方竹出西蜀浙江杭州府西湖飛來峯山上亦有之其竹節上有刺蜀人謂之刺竹

養餘月令云方竹澄州產洞庭亦有之體如削成勁挺可堪爲杖亦不讓張騫筇竹杖也桃源山中亦有但鄆傳雜沓不堪斬削耳寧波志云葛仙翁煉丹於定海靈峯植竹筋因化爲方竹

邵武府志云方竹其枝葉皆如常竹但其幹稍方爲異耳可爲杖筍味亦美

武夷山志云方竹其形方正如削每曲皆有秋間生筍肉

土ニ扞挿シテ活シ易シ用テ杖トス唐山ニハ大竹ニモ方ナル者アリ通雅ニ方竹出君山閩浙詹同以方竹獻取其四稜廉隅益部方物記贊方竹中實但小耳此未見北戶錄澄州之大方竹也ト云（按に澄字は誤寫なり正誤に辯ず）

本草綱目云有方竹出蜀州其節或暴或無或促或踈

北戶錄云澄州產方竹體如削成勁挺堪為杖亦不讓張騫筇竹杖也其隔州亦大者數丈

筍譜云南方有方竹今澧州游川鐵冶多竹內實微通心若釵股許筍可食亦實湘州人取竹作床椅有四稜上穿孔入當耳

竹譜詳錄云方竹兩浙江廣處々有之枝葉與苦竹相同但節莖方正如益母草狀深秋出筍經歲成竹高者二丈許無甚大者為柱杖最佳番禺志云竹方而實心編織不及他竹止以方為異矣武陵圖經云方竹出桃源山四方而不觚其材中杖會稽續志云方竹中堅而外方玉峯山所植贊寧云澧州辰山方竹其方二寸出天台玉霄峯者最妙或云人家忌種指為不祥筍亦不中食常德節推聽植之韓魏公作記

桂苑叢談云太尉朱崖公兩出鎮于浙右前任罷日遊甘露寺因訪別于老僧院公曰弟子奉詔西行祇別和尚老僧者熟于祇接至于談話多空敎所長不甚對以他事由是公憐而敬之煑茗既終將欲辭去公曰昔有客遺筇竹杖一條聊與師贈別亟命取之須臾而至其杖雖竹而方所持向上節眼鬚牙四面對出天生可愛且朱崖所寶之物即可知也別後不數歲再領朱方居三日復因到院問前時柱杖何在曰至今寶之公請出觀之則老僧規圓而漆之矣公嗟嘆再彌日自此不復目其僧矣太尉多蓄古遠之物云是大宛國人所遺竹唯此一莖而方者也

陳子陸意見云余嘗與人論造化所生之物自然而成者如果實雞卵之類多是圓少有方者山石間成方體亦非自然僅有方竹一種亦非四方可見造化以圓為貴而無方截廉隅老子曲即全之說非歟我也直方之道人所以裁成天道者亦不可過甚

益部方物略記云竹筒皆圓此獨方形倍於竅細節稜々

考槃餘事云有方竹上生九節其崇不滿七尺有棕竹合竹之字竹俱可作杖有三代時立鳩飛鳩杖頭周身金銀塡嵌用以飾杖上懸二三寸長小葫蘆小靈芝及五嶽圖卷暮年攜之探奇歷怪多有相長之益若萬歲藤藜藋為杖形雖奇怪此為老衲行具恐

古今要覽稿卷第三百七十二

●草木部 竹十

四方竹　四角竹

四方竹一名四角竹は漢名を方竹一名刺竹といふ今江戸所々にこれあるといへどももとは肥後國の産なりと（丹洲圖竹）いひまた琉球より來りしものなりとも（本草綱目啓蒙）いへり所謂江戸にあるものはその高さは九尺より一丈許に至り毎節相去る事三四寸にしていづれの節間にも上によりて細澁砂ありと砂紙を摩するが如しまた地上より一二節には周圍に細小根つらなり生じてそれより以上は毎節すべて細小根となるべきもの皆突起して頗る黍粟の類をならべたるが如く粒々まばらに付てその先或は尖りたるもありその所より切て二三節をこめて地中に挿置ときはをのづから黍粟狀の如きもの延び出て遂に細小根となるといへども五月の比の梅雨しきりに降つゞきぬる時にあらざれば大方は根付難きものなり扨此枝は根上十二三節にて始めて獨譜を生じそれより雙枝三枝となりて梢上に至るこれ新竹の形狀なり年を經る時はその譜節よりまた二箇三箇を抽出て五枝六枝或は七八九枝をも叢生すその葉の狀矢竹に似て極めて細く長さ五寸餘廣さ五分許にして葉先最細尖なり新枝は四葉三葉を一朶とし舊枝は五葉六葉或は七葉を一朶とすその葉先に至りては皆二葉對生して正に木樝子葉の葉先の如し此筍秋末より生じ冬に至りて成長すその籜すべて紫色なる小斑ありて愛すべく味またよし

丹洲圖竹云方竹ハ肥後ノ産ナリ今ハ東武所々ニアリ大ナルモノ一握許竹林陳久ニシテ肥大ニ至レバ徑二寸餘ニ至ルモノ稀ニアリ又徑三寸餘ナルヲ花樽ニ造レルヲ往年親ク目擊セリ線稜アリテ美觀ナリコレ琉球産ナルベシ普通ニアルモノトハ逈ニ異ナリ鋸斷ノ處方形ナリ今書匣ニ造レル方竹アリコレハ嫩條ノトキ四角ナル銅線ヲハメテ造作スルモノト云自然ノモノニ非ズ

本草綱目啓蒙云方竹ハ琉産ナレドモ今ハ諸國ニ栽ル者多シ徑七八分形四稜ニシテ鋭ナラズ全身ニ沙アリ根上ノ三五節四圍ニ小根連リ出テ刺ノ如シ故ニ斷テ

く竹の高大なるものをいふ
厤手古竹丹洲圖竹云厤手古竹は琉球名なりといへり

○正誤

本草一家言云簜竹和名業平竹而書篠簜之簜大竹也一節中入二米一升一豐後大角村生二此竹一呼二大角竹一與二前條業平竹一同名異物也

按爾雅疏に簜無二大小之異一といへるは大小皆簜竹なるをいふ然るに一家言に大なるを大角竹とし小なるを業平竹とし分て二種となすは誤れりいはゆる大角竹は蓋し漢竹にしてこゝにいふ業平竹また的當のものには非ず

爾雅云簜竹

按に竹字の上書の孔傳によれば蓋大字を脱せりよろしく補ふべし云簜大竹また說文云簜大竹なりとこれ古來相傳の定流なればなり然るを郭注にたゞ竹別名とのみいへるは先ひとわたりは聞えたる樣なれどもその實は本文に缺文ある事をしらざる誤也

玉篇云簜徒黨切唐韻云簜徒朗切

按簜字古聲煬養の如し故に說文に簜从レ竹湯聲水部云湯从レ水昜聲黑部云䵘从レ黑昜聲讀若レ煬又高誘注淮南子云煬養と見えたりその他陽从レ阜昜聲暘从レ日昜聲簜从レ竹昜聲とあるも皆同聲なり然るを玉篇以下簜湯簜等を以て徒黨切また徒朗切となすは是近音にてその實は訛聲なり

これは本邦にても駿州薩州等の温暖の國々にてしかなす時は必ず生育すべし扨此竹に大小の別あり儀禮註に篠笮簫之屬といへるは卽細小なるものをいひ尙書に篠簜といへるはその書橘柚註に小なるを橘といひ大なるを柚といふ例にて此簜は卽長大なるものをいふまた說文に簜可レ爲レ幹筱可レ爲レ矢とみえたり此幹といへるは卽弓幹の事なればこれも簫管の屬より長大なるもの也されば爾雅疏に李巡を引て竹節相去一丈曰レ簜といへるもまた一物にして別種にはあらず旣に丹洲圖竹に載し簜竹は徑一寸許のものなれば此竹温暖の肥地に産する物は極めて長大濶節のものある事明らけし

丹洲圖竹云簜竹琉球名麻手古竹藍水翁云苦竹之大葉者其葉似レ箸而色淺綠

尙書禹貢云篠簜旣敷孔註云簜大竹

儀禮大射禮云簜在二建鼓之間一鄭注云謂二笙簫之屬一

爾雅釋草云簜竹郭注云竹別名

說文云簜大竹也从レ竹湯聲夏書云瑤琨筱簜々可レ爲レ幹筱可レ爲レ矢

爾雅疏引二李巡一云竹節相去一丈曰レ簜又引二孫炎一云竹闊節者曰レ簜

桂海虞衡志云簜竹葉大且密略如二蘆葦一

陽春縣志云簜竹箟直節疎有レ類二水竹一其筍亦佳

竹譜詳錄云簜竹生二嶺南江廣之間一俱有レ之叢生極高葉大且密一葉有下生至二十八九葉一者上節上每苗二小筍三一簳破成レ枝中間一枝彷彿與二本身一等傍二枝亦粗大皆佳出尤易レ植至レ秋根旁出二大筍一綿々不レ絕隔レ年成レ竹或云擘二下節間筍一植レ之亦活江西人呼爲二横枝竹一筍色甚白味甚佳名二玉版筍一過二母梢一極細長彎曲垂下如二柳絲搖曳一

『此間竹譜詳錄所載簜竹墨繪二葉彩畵二葉略レ之』

○釋名

小町竹

按に小町竹は靑木嘐左衛門方にて從來申傳たる名にて是れは女子竹などいへるたぐひにてその竹の狀の柔なるをさしていふ

簜竹 尙書儀禮爾雅說文

○本草一家言云簜高大之意按に虞書湯々洪水方割といひ又詩衞風にも淇水湯々といへり其湯々は卽水の盛なる貌なれば簜竹の簜もまた湯々の湯の如

『此間彩畫一枚大名竹略レ之』

〇釋名

大名竹長崎聞見錄

大明竹佐藤成裕說

〇按に此大名竹は長崎の方言なりといへどもその名義詳ならず蓋し大名は地名にて其所より持來りし竹なるが故にしか名付しとおもへども大名は北京の地名なればそれも强てはいひ難かるべし又俗に大明樫といへるは其葉常の樫よりも長大にして異やうの物なれば此種はもと大明より來れるといふ意にて俗に大明樫と名付しものなれば此竹の大名も又大明の字の假借にて卽大明より來れるといふ意なるべき歟

〇正誤

長崎聞見錄云大名竹は薩摩にも多し

按に薩摩に多しといへる大明竹は蓋し臺明竹にしてそれを俗に大明竹ともいへば同名によりて二種混同せしものならずや岡村尙謙曰和漢三才圖會に大妙竹似二長節竹一而大周三寸許葉亦大也可レ作レ笛といへる大妙竹は卽大名竹に同じ故に國產部には大名竹筍四時有レ之とみえたりされば長崎に移し植し舶來のものも薩摩に產せし本邦自生のものも其質は同種にて今種樹家にていふ大名竹の葉長節竹より細小なるはその形狀三才圖會と相反すれば蓋し別種なるもしるべからず

小町竹

こまちだけは漢名を篛竹といひ琉球名を麻手古竹といふ今本所外手街辨天小路青木曙左衞門庭中にあり其竹高さ一丈五尺許徑六七分節隆起して頗る筇竹の趣ありといへども筇竹よりは至て低しその節間相さる事おほよそ一尺餘每節三枝を生じその枝諸竹より長じ每枝七八葉或は十葉或は十二三葉をつくその一葉の狀苦竹に似て極めて大にして頗る箬葉の如くその葉本すべて細褐毛ある事又苦竹の如し此筍諸竹と同じく四五月の頃に生ずれども秋に至ればまた根節上再び小筍を抽出て年を經て枝となる此竹嶺南に生ずるものは秋根旁大筍を出し綿々として絕ずと竹譜詳錄いへども本邦のものは然らずこれは風土に寒暖の異なる事あるによりて也また江西の人は此竹の下節間に生ずる小筍を擘とりてそれを植る亦活すと同上いふ

りてをの〳〵異同ある事かくの如くなれば必ず一幹竹を以てその形狀をつくすべからざるは此竹の種類の天稟なり

『此間彩畫二葉大明竹之圖略レ之』

○釋名

大名竹（庶物類纂廣大和本草和訓栞）

○山城國の方言なりといへり按此大名竹は枝葉臺明竹に似たるによりて名づくしかれば大名は卽臺明の假借也

大明竹（同上）

○是又臺明竹の假借也

だいも竹（庶物類纂）

○越中の方言なりといへり此卽大名竹の省呼なり

陽明竹（種樹家稱）

○陽明の義詳ならず或は此竹もと禁中の陽明門のほとりに有し故にしか名付るともいへり

一種大名竹

一種大名竹一名大明竹は淸俗これを龍頭竹といふ此種は徃時高舶の載來りしを肥前國長崎の官園に植られたり其葉は孟宗竹の如くにて大さ熊笹のごとし幹のふとさ徑一寸六分許毎枝疎にして節高からず其根數株地上にあらはれ出て狀龍頭の如しと（佐藤成裕說）いひまた大名竹は大にして其葉やはらかに見ゆ八九月の頃筍を生じて又大なりと（長崎聞見錄）みえたり其他また此竹ある事をきかず

長崎聞見錄云長崎の人大名竹といふは是一種の物なり此竹大きにして其葉和らかにみゆ八九月の頃筍を生ず是またいたつて長大なりしかも和らかに味よろし但皮を去り切て一兩日も水に浸し置のち煮て食ふべき也然らざれば苦味あり此竹薩摩に多きとなん唐人の食料に持きたるはます〳〵太き也長崎にて御藥園にあり人家にも稀に植置ものある也

佐藤成裕曰長崎官園有レ竹土俗呼レ之爲二大明竹一余在二是鄕一一日遇二華客一問二是竹一答曰今謂二之龍頭竹一云余未レ考二此名之所レ出蓋淸俗土名而不レ見二諸籍一乎

按に本草彙言に龍頭竹生若二龍頭一出二成都府彭縣大隋山一といひ陳氏竹譜に龍頭竹產二山左登萊山中一華山巴蜀亦有レ之根狀如二龍頭一腹實止通二一線一堅勁可レ作レ杖といへり淸俗のいはゆる龍頭竹蓋しこれと一物なるべきにや尙考ふべし

古今要覧稿巻第三百七十一

草木部 竹九

一種大名竹

一種大名竹一名だいも竹一名大明竹一名陽明竹はその高さ一二丈許徑八九分或は一寸餘節ははちくに似て毎節相去る事八九寸枝はその十二三節以上より始めて双枝或は三枝を生じその次よりは毎節六七枝を叢生して梢末に至る此枝はすべて常竹よりも甚だ短くして長さ七八寸或は一尺餘其枝節は最密にして其間相さる事一寸四五分葉はその先に二葉相對し其下に四葉五生しすべて六葉を以て一朶とすされどもその六葉下に別に一葉の枯落し細簭あるをみれば全形は蓋し七葉なるべし其葉の長さ葉先の二葉は五六寸にして廣さ六七分其下の四葉はそれより少しく短しといへども又長短細大の異なるあり扨根上よりの十二三節の間は竹身正圓にして枝を生せし處より四五節の間は凹處ありて雌竹よりやゝ長くそれより以上に至りては凹處雄竹に以て最深く正に半身を削去しが如し毎枝節もすべて凹處ある事また梢幹と同じ又始の双枝を生ぜし下の一二節には必ず來年に至りて兩三枝を生ずべき小黄芽ある事布袋竹の如し其簭本幹のものははじめ筍を生じて竹となるにしたがひて枯落すれども枝幹はさらに年を經ておちざる事正に雌竹の簭と一様なり又此竹叢林中にては根上第一二節より黄芽を生ずるもあれば第四節或は第六七節よりして黄芽を生ずるもあり是を常竹に比するにその黄芽上に凹處なきを異なりとす又根上より第八九節は双枝を生じそれより以上は皆五六枝を生ずるもあれば第十五節より始めて獨枝を生じそれより以上は三枝五枝或は七八枝を生ずるもあり又根本には絶て黄芽なくして第四節より四枝を生じそれより二節は三枝にしてそれより以上は五六枝を生ずるもあれば始め双枝を生ずる事二節にしてそれより一節は獨枝を生じそれより二節は三枝を生ずるもあり又根本の二三節尤地中を離れて周圍に細小根を連り生ずる事頗る方竹の如きもあれば絶てその細小根の地上にあらはる事なきもありすべて其竹の新舊及び長短によ

雲兮天遠㆒採㆓幽蘭㆒而齧新嗟碧鮮之得㆑地乃叢茆而相親吾議㆓爾德㆒豈止㆓乎千㆒畝之渭濱萬石之封君㆒者也

『此間墨繪東皴竹譜所載義竹之圖及竹譜詳錄所載慈竹及筍之圖略㆑之』

○釋名

南京竹

庶物類纂大和本草綱目啓蒙

慈竹述異記開元天寶遺事酉陽雜俎益部方物略譜

茅亭客話云此竹叢生根不㆑離㆑母故名㆓之慈㆒也

義竹

開元天寶遺事竹譜詳錄義烏縣志

孝竹

述異記遵生八牋南昌府志紹興府志會稽縣志

叢竹通雅楊州府志

子母竹述異記

博聞類纂子母作㆓母子㆒閩書南產志云慈竹古名㆓子母竹㆒

兄弟竹竹譜詳錄引㆓晉安海物記㆒　慈孝行農政全書月令通考彙苑詳注　慈姥竹常塾縣志當塗縣志

孝順竹嘉興縣志義烏縣志

王祥竹紹興府縣志會稽縣志

王祥は人の名にて二十四孝のうちの一人なり

釣糸竹益部方物略部

名義上文引ところの格致鏡原にみえたり

挑糸竹嘉興縣志平湖縣志

挑は釣の假借なり嘉興縣志には糸を子に作るまた假借なり

赤竹新城縣志　紫雲蓋致寶全書引㆓海錄㆒　籠竹益部方物略記　苦竹同上〇またけと同名

秋竹竹譜詳錄引㆓海物記㆒　四季竹竹譜詳錄引㆓新安忠㆒

○正誤

彙苑詳注云慈孝竹其筍一年兩出云々又云叢竹夏月始筍不㆑可㆑食云々

庶物類纂云按彙苑詳注分㆓慈竹叢竹㆒爲㆑二者誤也

太平府志云慈姥竹云々又云慈竹云々

庶物類纂云按太平府志載㆓竹慈姥之兩條㆒者繫㆓重出㆒

易哂榮枯之有期我蓬轉於岷徼遂萍流於江氾分兄弟於兩鄉隔晨昏於萬里撫貞客而骨媿伏嘉號而心死庶因感而長懷遂策情而勵己

唐喬琳

維竹稱慈幾乎有知九族敦叙孝友威儀是竹必滋五服相殘骨肉攜離是竹必衰苟自家而刑國亦觸類而增思苯尊固護櫝欒櫛比如束之稠如插之密勁節中聳攢根內實聲唯戛風影不透日類宗族之親比同朋友之造膝至若暮歲窮律霜凝雪霏陶鈞無發生之理松柏有後凋之期是竹也叢篁劈開芽筍怒長紫籜連披青筠紛上有偕老之情感饋親之養如受制於籬界不旁侵於土壤雨露之澤謝爾衆芳細葉未吐貞心已長恥高標而迴出斯衷曲而不楊匪趨時於律候寧隨韻於笙簧保無用而以道自將愧不才而與物俱昌苟成陰於隙地作盛景之清涼重曰夫緜々瓜瓞兮知有子母邕々鴻鴈兮如次弟兄於家則疏附禦侮於國則盤石維城田氏不分庭之荊陳家則應天之星莫不欝映棠棣急難鶺領斯竹也共根連茄一本千莖年深轉密歲晚彌榮一可以厚骨肉一可以敦友生於靈臺而莫非信性彰慈孝而感通神靈

宋蔡囊

種植至多強名萬彙物拔其華玆乃當天地之正氣有美竹兮特稟夫慈名而榮被豈有懷於本根兮何千竿蓊然而環待若夫吳郡名園王家新第遠閣斜欄橫塘靜水或薰風晝來或秋露宵墜日遲留兮簷外陰移人悽悄兮屏間籟起方且濯峭格而清舉定檀欒之生意或翅而舉者若堂有高年兮勤素風而講議或亞而側者若家有令子兮聞話言而沉思悵而出門而事遠遊兮滋宿雨之清淚雍如奉危而介眉壽兮羃春煙而怡醉紫芽蟠聯馨兒季穉去者奔追迎者嬉戲踈者如招並者如倚雖復貫千狀於巧筆曾莫形其髣髴借如秋晚霜重兮萬木稜々而僵悴隴檜盡兮塞月高堤楓丹兮楚江紫此君也束藍田之苗玉刻炎州之稍翠固節虛心兮雖大鈞不能奪其志於是揖三荊於堂下結蔓藟於河涘襲氣同根之豆亥驩承孽之棣顧威鳳之時下亦孝鳥之來寄設有用於律篇天聲發兮太和備覩此芳物悲哉遠人昔我從軍兮南之海濱今我辭家兮西遊洛塵悵然於舊國舊都感莊生之論恭止乎維桑諷梓與周傳之陳指白

嘉興縣志云慈竹一名孝順竹又名桃子竹夏則筍生叢內冬則生其外故名
常塾縣志云細而叢生者爲慈姥竹惟可供庭砌之玩致道觀中
義烏縣志云慈竹卽子母竹王勃賦如母子之鉤帶似閨門之悌友又名孝順竹卽義竹冬筍出于外夏筍出于內李白有慈姥竹詩
當塗縣志云慈姥磯竹其竹圓緻異常中簫管故磯一名鼓吹山李善云慈姥山竹簫笛有聲以節疎而體圓也今亦少竹
浦城縣志云孝順竹叢生新筍初抽皆環衞其母平湖縣志云慈竹一名桃絲竹
新城縣志云慈竹一名赤竹
會稽縣志云慈竹小而密土人多植之以當籬援冬月筍生竹外繞其母故又名孝竹一名王詳竹
閩部疏云延福以南有竹叢生涉冬抽萠慈竹類也而長刺雲大者拱抱吳越慈竹迥出其下

○賦

歷代賦彙

慈竹賦有序　唐　闕名

按に義烏縣志に王勃賦を引て如母子之鉤帶似閨門之悌友といふ文ありまた八閩通志に王勃を引て宗生族茂天長地久萬抵爭盤千株競糾の文ありされば此賦を作れるは王勃なる事明らけし

廣漢山谷有竹名慈生必向內示不離本脩莖巨葉攢根沓抵叢之大者或至百千株焉嗟縈結蹤乎咫步好事君子徙爲階庭之翫焉吁嗟非此土所有乃有厭流俗之譏動鄉關之思者蓋撫高節而興感覽佳名而思歸遂爲賦

有竹猗々生於高波左連瑤帶右雜瓊枝恨幽客之方賞嗟君侯之不知徒蔚丹谷遷榮綠池氣凜々而猶在色蒼々而未離屈巖壑之容貌充階庭之羽儀爾其劃地分域駢陰抗趾疊幹龍如迴攢根鳳峙防碧落於霄末翳紅光於夕始祟柯振而煙靄生繁葉動而風颸起擁涼砌之晨肅屏炎扇之晝滓至若白藏載謝玄英肇切塞北河堅江南池裂覩衆茂之咸悴驗貞輝之獨潔抽勁綠以垂霜總嚴青而負雪蓋同類之常禀非殊方之異節若乃宗生族茂天長地久萬祗爭盤千株競糾如母子之鉤帶似閨門之悌友恐孤秀而成危每羣居而自守何美名之天屬而和氣之冥受嗟乎道之存矣物亦有之不背仁以貪地不藏節以遁時其故眞不自炫用不見疑保夷險之無

皆唯々帝因呼爲ニ義竹一
酉陽雜爼云慈竹夏月經レ雨滴汁下レ地生レ蕈似ニ鹿角一
色白食レ之已レ痢
益部方物異記云慈竹性叢產根不ニ外引一其密間不レ容
レ笴笋生ニ夏秋一閱レ歲枝葉乃茂別有ニ數種一節間容ニ八
九寸一者曰ニ籠竹一一尺者曰ニ苦竹一弱梢垂レ地者曰ニ釣
糸竹一或取ニ節修膚緻者一用爲ニ簟笠一
竹譜詳錄云慈竹兩浙江廣處々有レ之高者至ニ二丈許一
叢生一叢多至ニ數十百竿一根窠盤結不レ引ニ他處一四時
出レ筍經レ歲始成レ竹子孫齊榮前抱後引故得ニ此名一晋
安海物記云義竹亦曰ニ兄弟竹一秋叢生曰ニ秋竹一注云其
筍叢生俗謂ニ之兄弟竹一筍味不レ中レ食也新安志云慈竹
叢生不レ離レ母四時有レ筍㚆々如ニ釣竿一一名四季竹今
秋竹別ニ四季竹一見
農政全書云慈孝竹大叢長幹中聳羣篠外護向レ陽高臺
種茂羣芳譜高臺種茂作則茂宜種高臺
致富全書云海錄紫雲蓋慈竹也其本叢生其色與レ形俱
與ニ他竹一廻別冬夏俱出レ笋冬繞ニ於母竹之外一夏生ニ於
母竹之內一人取ニ其慈孝名義一多植レ之種極易レ生
月令廣義云慈竹四時生レ筍其竹內實而節疎

月令通考云孝慈竹筍四月生江南人以レ灰煮食レ之其竹
內實節疎性弱可レ代レ藤形緊細
彙苑詳注云慈孝竹其筝一年兩出冬則外生夏則內生似
レ有ニ子母相顧之意一故名
遵生八牋云杭產孝竹冬則筍生ニ叢外一以衞ニ母寒一夏則
筍生ニ叢內一以凉ニ母熱一其竹幹可レ作ニ釣竿一叢生可レ愛
格致鏡原云慈竹秋筝高數丈尾甚柔細如ニ釣絲一又名ニ
釣絲竹一歷レ冬及レ春始開レ葉其葉左右竝列如ニ鳥翎狀一
初歲極嫩土人破爲レ篾裂以成レ麻可レ爲レ履號ニ竹麻履一
出ニ叙州府一
通雅云慈孝竹則叢竹四時筍
蘇州府志云慈姥竹叢生俗名ニ慈孝竹一
松江府志云慈竹寒則顯生暑則隱生有ニ母子相親之義一
鄉聚家々種レ之
南昌府志云慈竹又名ニ孝竹一
紹興府志云慈竹冬月筝生ニ竹外一繞ニ其母一故又名ニ孝
竹一又名ニ王祥竹一
楊州府志云慈竹僧贊寧笋譜其竹內實而節疎性弱可
レ代レ藤形緊而細叢數竿笋不ニ外迸一然不レ堪レ食蘄黃間
名ニ叢竹一近來楊州多植ニ之窓戶一

古今要覽稿卷第三百七十

草木部 竹八

南京竹 慈竹

南京竹は俗稱なり漢名を慈竹一名義竹一名孝竹一名叢竹といひまた一名子母竹一名兄弟竹一名慈孝竹一名慈姥竹一名孝順竹一名王祥竹一名釣絲竹一名雲蓋ともいふこれ卽鳳尾竹の別種なり故にその枝幹並に鳳尾竹に似て每葉鳳尾竹よりも長しその高きものは二丈許竹譜詳錄低きものは六七尺本草綱目啓蒙叢生數十百竿に至り根窠盤結して他處に引す竹譜詳錄その筍一年に兩出し夏筍は中より發して涼を母竹に讓り冬筍は外より發して母竹の寒を護ると致富全書遵生八牋いひまた數種あり其節間相去る事八九寸なるを籠竹と益部方物畧記いひ一尺許なるを苦竹と同上いふその梢弱くして地にたるゝを釣糸竹と同上いふ扨江都にて舊より義竹といへるは多摩川のこなたなる新田社の境内にありその葉並常に尋常の苦竹マダケと一樣なりといへどもその筍叢外に發する事なしこれは延福以南有レ竹長刺レ雲蒸竹類也と岡部疏いへるにその趣相似たりといへども此筍の叢外に發せざるは植しより數百年を經て皆人常に其邊を往來して其地至堅なるを以ての故なるよし或人いへりされば此義竹は慈竹類にはあらざるべし

庶物類纂云慈竹俗名奈莫氣莫他計ナンキンダケ山城州

大和本草云慈竹本草曰一名義竹叢生不レ散人栽爲レ玩今按是近年所レ來唐竹歟或曰南京竹天寶遺事云有レ竹叢密笋不レ出レ外因號ニ義竹一

本草一家言云孝順竹一名慈竹冬夏再生レ筍冬筍生ニ外邊一似レ護ニ母竹一夏筍抽ニ裏面一如レ淸ニ母竹一故名

本草綱目啓蒙云慈竹ハ竹細シテ高サ六七尺ニ過ズ其叢外ニ出ズ

述異記云南中生ニ子母竹一今慈竹是也漢章帝三年子母竹筍生ニ白虎殿前一時謂ニ之孝竹一羣臣作ニ孝竹頌一太平御覽同

開元天寶遺事云太液岸有レ竹數十叢牙筍未ニ嘗相離一密々如レ栽也帝因與ニ諸王一閑ニ步于竹間一帝謂ニ諸王一曰人世父子兄弟尙有ニ離心離德一此竹宗本不ニ相疎一人有下懷ニ貳心一生ニ離間一之意上者觀レ此可ニ以爲レ鑑諸王

べし又云青葉を敦盛の物といふ不審（イブカシ）平家物語にも盛衰記にも敦盛の最後に腰にさゝれし笛は小枝とあり又高倉の宮の御最後までも御腰にさゝせ給ふといふも小枝なりこの笛治承四年に光明山の鳥井の前にて宮御こと有し後に敦盛の手にわたりしかと思ふに是は同名にして別物なりこの小枝は平忠盛笛の上手にて鳥羽院より下し給りしを經盛相傳有しより敦盛もたれしと平家物語にあり盛衰記には經盛砂金百兩宋朝へ渡して求られし笛なりと見えしいづれか誠ならむ宮の持せ給ふ御笛は有識抄に引記せし承平三年四月の笛の目錄の中にみえたる小枝なるべし二つながら今傳はりてあるかなきかしらず長門本にも紫檀の家に入たる漢竹の篳篥と見えて其餘の異本にも青葉といふ事はみえず

臺明竹（本草綱目纂疏　三國名勝考）
臺明寺に產する故に名づく薩摩の方言なりといへり

大妙竹（和漢三才圖會）
大妙竹（同上大和本草）
按に臺明竹を大妙竹或は大名竹に作る物はともに假借なり○懷竹抄一本に黃竹は甘竹に似たれども大名の姿の竹也とみえたりされば大名竹は近時の名にあらず

青葉笛竹
臺明寺古鐇銘平治文書建長解文
二葉笛竹（建長解文）　笛竹（平治文書）　青葉竹（筱埃隨筆）　四季竹（竹譜詳錄）
群芳譜
四時竹（竹譜詳錄）
此筍四時に生ず故に此二名あり

○正誤
體源抄云青葉ノ笛ハ甘竹笛也昔シ蟬ニ碧鮮ノ二葉アリ白露常ニ其上ニ凝ル故ニ青葉ト號ス尤靈物トスルニ足レリ
按に青葉笛は青笛竹にて作れるよしは慥に臺明寺古鐘銘及び平治建長の文書解狀にてしるし然るを爰に甘竹にて作るといへるは傳聞の誤りなりまた東齋隨筆に青葉笛はまた鬼丸ともいふ朱雀門の樓上の鬼の笛なりしを伯雅の三位のとりかへて吹て得られし笛なり此笛には葉二つ有て其色一つは赤し一つは青し是に朝ごとに露置けるといへるもまた事を奇にせる誤りなるべし
俗傳に壽永の頃平敦盛の持し笛は卽青葉の笛にて今現に攝津國須磨寺の什物に有といへり
春湊浪語云青葉笛は無雙の名物にてはじめは葉二といひける事江談抄にみえてその後宇治殿平等院を造りて寶藏に納められしを後冷泉院めされて參らせしことも江談抄に見えました有識抄に青葉は攝津國須磨にあるよし言傳へ侍り傳記など見侍らざるなりとあれば須磨等にあるもの其虛實はきはめ知りがたし此青葉實なる物ならば天下第一の名管にて富家殿（忠實公）の仰に本朝の横笛は葉二をもて第一とす第二青竹第三柯亭第四大水龍第五小水龍なりと體源抄に見えし程の物なるが一とせ旅行の次に見しに名ある物ともおもはれずあらぬ物なる

奉レ祀ニ大穴持命一例祭十一月末申日此一山を青葉山と稱ふ地名便覽にみえたり大隅州名所の一なり青葉竹は即此山の名産俗に臺明竹といふ社檀は益救(ヤク)の杉材にて昔時名匠一の鉈を以て造立たりといふ

又云 天智天皇 太子にて 筑紫へ 御下向の時此地へ過(オホム)臨(コギリ)あり青葉竹を以て笛材の貢ニ御所一に定められしより笛竹の事につき或は天使(チョクシ)を遣され或は綸旨を給り在廳人及び臺明寺主僧へ下知し竹林を愛護すべきの旨を諭され又おなじく武家執權の奉書等若干通臺明寺に筒藏す（俗に臺明寺文書といふ） 臺明寺は 竹林山 衆集院 と號す自ニ天智帝一の勅額所と稱ふ然ども當時勅願の定額寺(ゴショクイ)あるを聞ず是皇太子の時此地へ御過ありその後登極ありてより青葉竹を以て貢御に命せられしをいへる成べし笈挨隨筆にむかし天智帝筑紫に六年迄止りたまふその間に九州の地を廻見遊ばし大隅國に至り給ひ（此時大隅國てふ名はいまだなし日向國内也） 此邊に笛につくるべき竹や有ると御尋ねあるに當所の民これ山の竹に候とて一本を青葉つけながら伐て奉りけるを帝笛につくらせたまふにその調律(シラベ)に叶て音聲めでたかりければ都へ還御の後も青葉ながら伐て奉りし笛竹を貢まゐらせよとて大内にもてはやし數々笛に造出されけるほどに世世に傳りしも多く壽永に平家敦盛なども是を秘藏せしを俗に敦盛の笛は節にひゞき作りたる後蟬より青葉を生じたる事と云なしけるその本をしらぬみだり言なりと記したり此事いかなる傳へ有て記したるかは知らねども其實を得たるとはおもはる也又青葉竹を今臺明竹といふ他國には無き物なれば蒲葵など丶おなじく朝廷御用に召れし物なり

竹譜詳錄云四季竹出ニ浙東慶元山中一浙西亦或有レ之高不レ過ニ八九尺一節如ニ苦竹一筍如ニ笄篇一枝生ニ節間一叢密小箨亦隨生ニ節間一不ニ脫落一葉長細而柔媚甚宜ニ圖畫一又名ニ四時竹一以ニ四時生一レ筍故名冬春筍大夏秋筍小

群芳譜云四季竹節長而圓中ニ管籥一生ニ山石一者音淸亮（農政全書同）

秘傳花鏡云四季竹四季生レ筍幹節長而圓取爲ニ樂器一聲中ニ管籥一若生ニ山谷一者音更淸亮可レ人

台州府志云四季竹四季生レ筍不レ絕

『此間彩畫ニ一葉臺明竹大明竹略レ之』

○釋名

者園可五六寸節間遠者逮二尺以作管籥其音妙爽遠聞故近古謂之笛竹其葉狹長青翠異常其筍貫四時而生四季之稱即出於此其筍中含液宛如凝脂味更美獨在諸筍之上夏月最爲盛藩人以充珍饌按臺明寺實我藩之古刹也檢古鐘銘此銘天延中所撰其古鐘今尚存從天智御宇迨今爲笛竹貢御所又檢平治建長年間之解狀文書等其事相同二狀今尚存在其院而亦建長年以後充調御之用者數回皆載在藩之舊史因考國史無所經見焉蓋近古之流例因不登錄青史歟亦不可知矣按長府鍐本平家談所載青葉筆箓及播磨須磨寺青葉笛竹皆別種也占春本草綱目纂疏卷第九下

麑藩名勝考與書云臺明寺は是古刹にして山中幽邃奇古更に甚して園中におのづから一種の竹あり世にいふ青葉笛竹是なりつたへいふ天智の御世よりおふるものなりとぞ寺中に鐘あり其銘云隅州臺明寺是臺明笛之貢御所白馬龍蹄之清蹋也巖石廻外澗水横中遠近仰於靈細○索秋[illegible]依　爰古鐘銘云　天延九年之比鐘改昔日之小鐘云々此銘嘉正元年丁巳冬十一月十九日　大檀那當國守護代　左尉藤原朝長稟頼勸進者當山住僧阿闍梨亮午大工高麗行則同助行と記せり又其寺の什物に解狀文狀數通あり今其文一二を抄出す

上略　件貢抑笛竹任先例可切調進之由所令下知也云々平治元年七月十一日目大中臣判權大椽檜前判　外略　又臺明寺青葉笛竹爲住僧等恣切用奉穢事云々永曆二年八月廿九日國司代勾當源判目大中臣判　外略　又應保三年二月十日臺明寺大衆等解狀乃內　上略　右謹檢舊記當山者无像孤獨靈窟朝廷鎭護道蹋也　天智天皇御宇之時被定笛竹貢御所遙四百餘歲根本大伽藍也云々又建長二年臺明寺勸進牒の內夫以臺明寺者天下無雙之靈窟人間第一之梵宮也云々故老相傳天智天皇御宇青葉二葉笛竹貢御所自被定最以後五百八十九歲云々可遂往生淨土之望敬白建長二年八月九日勸進衆徒等敬白深壽大法師判　外略　所謂笛竹今も猶四時青翠にして千株にみつ吾藩の士人しかる故をしるもの罕なりまして世の人も是を知るもの鮮なし嗚呼物の隱顯みなかくの如し嘆ずべし

封內名勝考云大隅國囎唹郡山路村青葉山日吉山王地主權現とも稱すその地主園は臺明寺の門より西二十間許に森山ありて大樟の下に右室を立てその故址を傳ふ

古今要覽稿卷第三百六十九

●草木部 竹七

臺明竹 青葉笛竹

臺明竹一名大妙竹一名大名竹は古名を青葉笛竹一名二葉笛竹或はその二字を畧してたゞ笛竹ともいひ漢名は四季竹一名四時竹といふ此竹古より大隅國囎唹(ソヲ)郡清水(シミヅ)郷臺明寺山中に產す此境內に天延年に鑄たる古鐘あり其銘に此山中竹從ニ天智天皇御宇ー剪爲ニ笛竹ニ給其音淸妙名謂ニ青葉笛竹ー以來爲ニ笛竹ー貢ニ御所ニと(國史見蟲草木攷)見えその竹は竿類ニ苦竹ー大者圍可ニ五六寸ー節間遠者逮ニ二尺ー其葉青翠異レ常其筍貫ニ四時ー而生其筍中含レ液宛如ニ凝脂ー味更美なりと(本草綱目纂疏)みえたり予が往時(本多甲馬)より惠まれしを家にひめ置しは其竹長節竹に似て徑一寸許にて節間相去る事一尺五六寸其節低き事また長節竹の如し今江都に有物はその高さ一丈五六尺圍み三寸餘その根上より二三節はその節密にしてその間相去る事三四寸それより以上は節疎なる事八九寸より或は一尺五六寸に至るまた地上の第一二節には周圍に細小根連り出て頗る方竹の如きもあり此竹始めの枝は三枝或は五枝なりといへども中幹より以上はすべて七八枝を叢生しそれに簳付て年を經ておちず葉は全く長節竹に似て細長にして大抵八九葉を一朶とす此筍大隅國に產する物は四時を期して生出るといへども江都に移し植るものは夏月のみ最盛なるはまさに風土の寒暖によりての事なりといへりされども今江都にある物は予がひめ置し竹とは更に別種の物なりとおもはる

和漢三才圖會云大妙竹狀似ニ長節竹ー而大周三寸許葉亦大也可ニ以作レ笛

又云薩摩國土產大名竹筍四時有レ之

大和本草云大名竹倭名ナリ節間長ク赤黃條アリ竹柔ニシテ不レ堪レ爲レ器

本草綱目纂疏云四季竹大隅臺明寺古鐘銘勒青葉笛竹者是也(大隅國臺明寺在ニ囎唹郡清水鄉ー)平治文書謂ニ之二葉笛ー或曰ニ笛竹ー薩人曰ニ臺明竹ー(俗誤作ニ大明竹ー)群芳譜云四季竹節長而圓中ニ管籥ー生ニ山石ー者音清亮大隅臺明寺山中自ニ往昔ー有ニ竹林ー今尙琅玕萬株成ニ一叢之林ー其竿類ニ苦竹ー大

○釋名

羅漢杖竹竹譜詳錄

此竹形狀常に異なるを以て羅漢杖竹と名づく

『此間彩畵二葉（榊原猪右衞門所藏左右枝竹圖、丹洲圖竹所載相思竹圖）略之』

○釋名

左右枝竹俗稱

按に左右枝竹或は雙枝竹に作る名義字の如し然るを丹洲圖竹に相思竹に作るものは假借なり凡西土にて相思竹といへるは二幹相並びて生出る竹をいふ故に農政全書に相思竹兩々生ㇾ笋とみえたりされば俗に從ひて左右枝竹に作るかた却てその意を得たりといふべし

毬竹

毬竹は今所々の人家まれにこれあるもの也別に一種のものにはあらずすべて孟宗竹の類を以てその上幹を切去ときはその梢上をのれと數十細枝を雜出し年を經れば繁葉細密にしてその狀頗る毬の如し岡村尚謙曰番町邊を行しに誰やらが屋敷のこなたにてその毬の大さ徑三尺許のものをみたり今なほあるや否をしらず

和漢三才圖會云本綱百葉竹一枝百葉云々按一枝百葉竹未ㇾ知ㇾ有也否一今苅二下枝葉及中心一梢項上遺二枝葉一則葉甚茂盛如二一枝百葉一作成者也

竹譜詳錄云毬竹每于二杭州街市人家一見ㇾ之植二盆檻中一高不ㇾ過二一二尺一下獨竿上叢密別無二種類一人力爲ㇾ之以二筍初解ㇾ籜時一折二去上梢一則竿抄雜二出小枝一無數三二年後枝葉轉密盤葉團々如二毬之狀一繁細可ㇾ愛故名

『此間墨繪一葉竹譜詳錄所ㇾ載毬竹圖略ㇾ之』

○釋名

毬竹竹譜詳錄

名義上文にみえたり

羅漢杖竹

羅漢杖竹は今井上筑後守藩內にて植るものありその高さ凡七八尺にして每節擁腫或は佛面の如く或は鶴膝の如くその屈曲恰も龍の如くまた蛇の如し葉は苦竹と一樣にして葉本に褐毛あり此即苦竹の變生なり別種にはあらず

竹譜詳錄云羅漢杖竹生二紹照府一即古榮州也東有二榮黎山一山中產二此竹一屈曲如二龍蛇之狀一

『此間彩畵井上筑後守藩內所植羅漢杖竹圖一葉及墨繪竹譜詳錄所載羅漢杖竹圖一葉略之』

○正誤

庶物類纂に齊民要術を引て山海經云龜山多二扶竹一

按に扶はもと挟の壞字にて即筇竹をいふ然るを庶物類纂扶竹條に此文を引しは誤りなりこれは廣群芳譜に筇竹山海經謂二之扶竹一郭璞注謂二之扶老竹一按筍譜云此與二扶竹並レ節者一不レ同といへる説によりしものなるべけれ共佩文齋もその實は扶は挟の壞字なる事をしらざるによりてしかいひしなり後世に至りてはかゝる類ひにて物の異名の出來し事本草中殊に多し大和本草云扶竹フタマタヾケ云々

按に扶竹は雙竹にしてふたまた竹にあらず然るを篤信のかくいへるものはふたまた竹にもまた雙竹の名あるによりて漫に混同して一物とせし也

瑯琊代醉編云扶竹之笋名曰二合歡一

按に筍譜に扶竹云々今詳是竹爲レ筍便有二合歡貌一並出とみえたり然るを張鼎思及び王蓋臣の葦弁に此文を誤讀して直に合歡を以て扶竹筍の名とせしは蓋し强名なり

左右枝竹

さうし竹は世にまれなる竹にて大さ僅に一握許に過ず一節の左右におの／＼双枝を對生せしは頗る二竹を合せて一幹とせしが如し故にその凹處もまた左右に相對して下節上より上節下に至るその凹處左右に相對するによりてをのづから竹身圓扁にして縱の徑一寸七分横の徑九分許にて今一節は其双枝前後に相對するを以て凹處もまた從ひて前後に相對すればその竹身の圓扁なる狀また前節間とは相反せりその節隆起してやゝ苦竹の趣ありといへどもその全形を熟視する時は蓋し淡竹の變生なり此種は榊原猪右衞門が家に舊より藏せしものにて其長さ僅に八九寸に過ずまた丹洲圖竹に載しは此竹よりも細小にして徑六分許のもの也また先年染井の種樹家にありし生竹は高さ一丈五六尺にして地上より十二三節を經てそれより以上は毎節左右前後互に雙枝を生ずる事前種と一様にして其梢杪に至ては常竹と同じ此種もまた淡竹の變生せしにてそのあたり近き竹林中より移しうゑしもの也といへりさて廣群芳譜に瑞竹一本十六節上分二兩枝一といひ上高縣志に黄敏堅園產レ竹一本兩枝といへるはこれと一物のやうなれどもその書に兩枝といひしは即兩莖の事なればこれとは別種也

本時有二三婦一幼年孀居守レ節八十餘終以レ類

菽園雜記摘抄云嘗記正統十年予家祖園新竹二本皆自二數節一以上分二兩岐一交翠可レ愛家僕俟二其老一斫而芟二去旁枝一用以入二取藍草一飼レ猪景泰二年新居後園黃瓜一蔓生二五條一結蔕與二脫レ花處一分張爲レ五瓜之背則相連附園丁採入衆琉一過兒童擘而食レ之後仕二于朝一有下以二瑞竹瑞瓜圖一求二題詠一者上閲レ之則皆予家所二嘗有一也況他竹之瑞一本予家並生二二本一他瓜僅二三又非二連理一予家五瓜連理不二尤瑞一乎使三當時長老父兄有二造レ言喜レ事一者諂諛歸二之府縣一誇艶歸二之家庭一動レ衆傷レ財其爲レ不レ靖多矣惟其悃幅無レ華故人之所謂祥瑞一切不レ知レ動二其心一惟不レ知レ動二其心一故驕侈不レ形而災害不レ作可三以保二其家於悠久一也傳曰天下本無事庸人自擾レ之其斯之謂歟

『此間墨繪四葉（竹譜詳錄所載雙梢竹圖、同上所載騈竹圖、同上所載籃竹屈折作葫蘆形者圖、板橋邊所生多岐竹圖）及男谷彥四郎庭中所生雙竹圖略之』

○釋名

ふたまた竹　和漢三才圖會大和本草本草一家言

雙梢竹　筍譜竹譜詳錄本草彙言

合歡竹　筍譜湖廣總志永竹府志

按に筍譜又云合歡竹筍出二南嶽諸州山溪間一郴州最多其筍初生合歡形勢及レ成レ竹也或三莖合或兩莖合斷二其間一有レ竅竹皮或斑點文僧斷作二針筒一用也と

これ眞の合歡竹なり此云合歡竹正にこれと同名異物なり

天親竹　五雜俎本草彙言清異錄

按に雙梢竹は古名にして天親竹は後世の名なり故にその名ふるき物にみえず

雙竹　司馬溫公傳家集

騈竹　竹譜詳錄

按に說文に騈駕二馬也从レ馬幷聲とみえたりこれ騈字の原聲本義なり

扶竹　筍譜群芳譜秘傳花鏡

此即雙梢竹と同名異物なり

相思竹　楊升庵文集詩經類考本草彙言

桃釵竹　留青日札

雙竹　筍譜瑯瑘醉編

此即眞の雙竹也天親竹また雙竹と名づく正にこれと同名異物なり

交趾今竹有二桃釵之形一筝亦有二柔麗之異一崖名二相思崖一竹曰二相思竹一孟郊詩云竹嬋娟籠二曉烟一指二此竹一也

農政全書云相思竹出二廣東一兩々生レ笋

留靑日札云武林西山舊有二香竹一院名曰二扶竹一其筍名二合歡筍一即四川涪州相思崖桃釵竹一竹相思竹也

長壽縣志云相思崖在二黃草峽上一崖產二相思竹一竹連理若二桃釵之形一今絕レ種矣見二益州記及涪州古志一

秘傳花鏡云雙竹生二浙之武林西山一其妙在二脩篁嫩篠對抽竝胤一色最可レ愛

又云相思竹レ出自二廣東一似二雙竹一而差大皆兩々相對而生

廣群芳譜云宋史五行志太平興國八年十月乙酉蜀州獻二瑞竹一一本十六節上分二兩枝一

又云淳化二年二月射洪縣安國寺竹二莖同レ本六月舒州竹連理

又云大中祥符八年四月開元寺桃竹一莖上分二十八節一皆相對

彙苑詳注云東陽劉道德家筋竹林忽生二連理一

婺源縣志云萬曆丁未春瑞竹生二于玉川後龍山一一本自二十節以上一分爲二兩岐一節々相偶直上枝葉蓁盛

湖廣總志云大中祥符元年八月黃州獻二一本雙莖竹一

又云大中祥符六年武岡民園產二異竹一竹生二兩株一同一本上生二四莖一

長沙府志云寧宗慶元庚申安化縣治產二瑞竹一一根三幹

寶慶府志云宋祥符九年武岡何文化園竹生二兩株一同レ本上分二肆莖一

浦江縣志云祝氏祖塋孤竹三四節已上再分二兩岐一而放梢亦復生二于倪氏園一萬曆癸卯又生二于張元慥園一

南昌府志云竟城三佛寺產レ竹一本而二幹

高安縣志云唐中和七年昇元觀生二瑞竹一自レ根至二三尺處一岐爲二兩竿一

上高縣志云成化二年修仁團黃敏堅園產レ竹一本兩枝

九江府志云宋祥符四年四月瑞昌縣民李讓家筀竹去レ地五尺許分爲二二莖一知州范應辰以聞

西湖遊覽志餘云宋時楊德温居二崇新門外一揷二枯竹一以引二薜荔一月餘枯竹復生頃之其妾溺レ水死明年園竹忽發二兩岐一扶疎可レ愛未レ幾其妹死元時白廷玉家竹亦兩岐其年廷玉死乃知反レ常之物皆非二吉兆一也

義烏縣志云正統間花溪梃二瑞竹三竿一虞氏園竹三竿一

傳家集云本草類同而種殊者竹爲レ多抗州廣嚴寺有二雙竹一相比而生擧林皆然其尤異者生二古樹腹中一自二其頂一出森然駢竦樹如二龍蛇相縈繑一首硏然一

近時西丸御留守居男谷彥四郎の庭砌に年ふりし枯松の腹中よりその梢を貫き出てふたまたに分れし竹は細き淡竹にしてその狀頗る廣巖寺中にありて尤異者といへるに暗合のもの也

竹譜詳錄云扶竹出二武林山中一與二他竹一無レ異但生レ筍時皆對抽幷胤有二合歡之意一山海經注又以二扶竹一爲二節竹一未レ詳

又云騈竹一根數節之上分爲二兩竿一各生二枝葉一別無二種類一特常竹之變猶二連理木幷蓆蓮之屬一故亦罕レ有楊州焦大易招討家一株纔有二數尺一玉泉山樸翁和尙賜二予一柱杖一甚妙後轉賜二廉廷臣都運一今姑蘇東李博提擧家園怡老堂有二一株一高五尺餘呂端明園中亦有二一株一是薑竹之騈生者高約七八尺園丁屈折作二葫蘆形一枝葉茸細可レ愛予宦二嘉禾一後圃亦得二一株一兩節之上分爲二三幹一枝葉敷榮是筀竹之變者尤奇椅

五雜俎云天親竹武夷城高巖寺後有レ竹本出レ土尺許分二兩岐一直上此亦從來未レ見之種按宋史五行志天禧間太平興國寺亦有レ此而大中祥符間黃州江陵武岡晉原諸處且以二祥瑞一稱レ賀矣

本草彙言云天親竹末皆兩岐出二浙中一

又云雙梢竹又名二合歡竹一初生二枝葉一卽分二兩梢一出二九嶷山一

又云相思竹對抽幷胤出二蜀涪州一

華夷花木考云秦維言二雙竹一自是一種有二成レ林者一因出二三杜杖兩岐一後問二浙人一云此是天親竹有レ時出一番雙筍故例皆分岐亦非二年々有一レ之

清異錄云夫親竹分岐竹也

輟耕錄云廷玉先生斑號二湛淵一錢唐人家多レ竹忽竿上岐爲レ二人皆異レ之賦二雙竹杖詩一未レ幾先生歿先生有二二子一或以爲二先兆一云

瑯琊代醉編云武林山西舊有二雙竹一院中所レ產修篁嫩篠皆對抽幷胤王子敬竹譜所謂扶竹譬猶三海上之桑兩々相比謂二之扶桑一也扶竹之筍名曰二合歡一按律書注伶倫取二嶰谷之竹一陽律六取二雄竹一吹レ之陰呂六取二雌竹一吹レ之

庶物類纂云謹按丹鉛總錄文同事要玄言徹作レ胤

楊升庵文集云蜀涪州有二相思崖一昔有二童子丱女一相說

古今要覽稿卷第三百六十八

●草木部 竹六

ふたまた竹

ふたまた竹は漢名を雙梢竹一名合歡竹一名天親竹一名雙竹一名駢竹といふ此種は古より處々の竹林中にたま〳〵生いづるものなるによりてまた瑞竹の名ありその狀本は一幹にして末は兩幹に分る丶もの也凡西土にては種々の竹ありて筆竹簟竹筋竹等にもまた兩幹にわかる丶ものありといへども本邦にては淡苦二竹の外に有事を聞ずまた扶竹一名雙竹あり此種ははじめ筍を生ずる時より兩々相對して既に竹となりても根株は一つなるもの也また相思竹一名桃釵竹あり此種も留青日札には扶竹の一物なりと見えたり扨雙梢竹の兩幹にわかる丶ものはその根上より僅に一尺許の處にて分る丶もあれば或は十節以上より十六節に至りて分る丶もあり原是變生のものなるを以てたゞ兩幹に分る丶のみならずまた三幹四幹に分る丶もあれば八九幹よりして十八幹にわかる丶もありすべて此數種のものはさらに別名なしといへどもその統名を瑞竹といへるは群芳譜長沙府志及び湖廣總志にみえたり

和漢三才圖會云雙岐竹攝州天王寺有レ之淡竹之二岐者處々亦希有

大和本草云扶竹ハ雙竹(フタマタ)對生ス王子敬ガ竹譜ニ出タリ其筍ヲ合歡ト云日本ニモ往々有レ之瑯琊代醉載レ之本草一家言云有ニ扶竹一又名ニ天親竹一雙生竹(フタマタ)

筍譜云雙梢竹筍出ニ九疑山第二重麓臺側一筍長獨莖及レ生ニ枝葉一卽分爲ニ兩梢一葉密而細亦謂爲ニ合歡竹一與下象ニ扶桑一者上少同

按竹譜詳錄引無ニ亦謂以下十三字一湖廣總志引正與レ此同又按象ニ扶桑一者卽指ニ扶竹一而言也

又云扶竹筍今出ニ武林山西一舊謂ニ雙竹一院中所レ產脩篁嫩篠皆對抽幷胤相傳云玆竹自ニ永泰一已來有レ之焉翊巖諸爲ニ其記一王子敬竹譜云會稽箭竹錢塘扶竹蓋此雙竹卽扶竹也譬猶ニ東方之地產レ桑兩々並生謂ニ之扶桑一矣今詳是竹爲レ筍便有ニ合歡貌一幷出愚曾著ニ扶竹賦一　按竹譜詳錄引並生閒有ニ枝而二字一

本草綱目云暴節竹出ニ蜀中一高節磥砢卽笻竹也
竹譜詳錄云高節竹出ニ瓊管黎母山一大而節闊丈餘節又高也漢書張騫傳注瓚曰邛山名此竹高節可レ作レ杖齊民要術引ニ漢書一云邛都高節竹可レ爲レ杖與レ此不レ同又云銀鋌竹又名ニ高節竹一色如レ金其節隆起莖旋彎削ニ節密處一宛如ニ銀鋌之狀一非ニ鶴膝人面之類一別爲ニ一種一筍可レ食七閩處々有レ之
廣羣芳譜云笻竹杖蜀中無レ之乃出ニ徼外蠻峒一蠻人持至ニ瀘叙間一賣レ之一枝纔四五錢以ニ堅潤細痩九節而直者一爲ニ上品一
秘傳花鏡云漢武帝遣レ人開ニ牂牁一致ニ邛竹杖一
四川總志云邛竹出ニ邛州之邛崍山一卽古臨邛地也漢張騫奉ニ使西域一得ニ高節竹一還而植レ此今人取以爲レ杖鶴膝者佳又叙州亦出ニ此竹一雅州復有ニ一種一名ニ羅漢竹一皆爲ニ杖之具一
四川叙州府志云笻竹產ニ山箐一體甚堅可レ爲レ杖
『此間彩畫ニ一葉丹州圖竹所レ載笻竹圖笻竹略之』

○釋名

こぶだけ俗名

高節竹漢書竹譜詳錄

此竹毎節極て高し故に名づく

笻竹本草綱目

漢書張騫傳注云邛山名ニ此竹高節一可レ作レ杖と後人これによりて邛を笻に作り以て高節竹の一名とせし也

暴節竹同上

暴節は卽高節の義也

銀鋌竹竹譜詳錄

○釋名

鶴膝竹（竹譜詳錄 閩中記）

鶴膝はその節擁腫して頗る鶴膝に似たるをいふ

皷槌竹（竹譜詳錄）

此竹皷槌に似たり故に名づく

木槵竹（同上）

木槵は無患子也皷搥といひ木槵といへるは共に其節の擁腫せし狀をいふ

高節竹（筇竹）

高節竹一名筇竹一名暴節竹は俗名をこぶだけといふ近頃舶來なしといへども六七十年以前にはまれに舶來ありしを松平播磨守園中に移し植られしがわづかに三四年を經て二間四方程にも繁茂せしよし今は絕てなしされども多紀安節の家に傳來せし一枯竹有每年醫學館藥品會の具品とす其竹を親見するに全形赤色にしてやゝ黑みを帶び徑三四分もありて長さ三尺許其うちに五寸程を隔てゝ六節あり節の狀頗る算珠子に似て殊に扁大にしてめぐり三寸許ありといへどもそのめぐりに薄くするどなる所はなしおもふにこれは杖などにするとて其するどなる所はけづり去しものなるべし一種高節竹ありまた銀鋌竹と名づくその色金の如し（竹譜詳錄）卽同名異物なり此種また舶來絕てなし

丹洲圖竹云暴節竹俗ニコブダケト云扶老竹一名筇竹ト云モノ是也舶來ノモノ多紀氏ノ家藏ニアリ

山海經云龜山多扶竹（郭璞注云邛竹也高節實中中杖也名之扶老竹）

漢書云張騫之大夏見筇杖問之云賈人市之身毒國

竹譜云竹之堪杖莫尙於筇磥砢不凡狀若人功豈必蜀壤亦產於餘邦一曰扶老名實縣同又云筇竹高節實中狀若人刻爲杖之極廣志云出南廣邛都縣然則邛是地名猶高梁薑張騫傳云於大夏見之出身毒國如感邛杖終開越巂越巂則古身毒也張孟陽云邛竹出興古盤江縣山海經謂之扶竹生尋伏山去洞庭西北一千一百二十里黃圖云華林園有扶老三株如此則非一處賦者不得專爲蜀地之生也禮記云五十杖於家六十杖於鄉者扶老之器也此竹實旣固杖又名扶老故曰名實縣同也

齊民要術云邛都高節竹可爲杖所謂邛竹

羅浮山記云邛竹本出邛山張騫西至大夏所見也而此山左右時有之鄉老以爲杖

龜文竹

龜文竹は人面竹の類にて世に稀なるものなり西土にては崇陽縣寶陀岩に生じて僅に一本のよし秘傳花鏡いひ傳ふれども往時琉球に産せし事ありしもまためづらしその竹高さ一丈餘節間矮促にして節々龜甲紋をなすと琉球産物志いへり國産いまだこれある事を聞かず

琉球産物志云龜文竹高サ丈餘圍ミ尺許節々作ニ龜甲紋ニ蓋奇品也懇望不レ易レ得

農政全書云龜文竹産ニ崇陽縣寶陀岩ニ製レ扇甚奇

湧幢小品云崇陽縣有ニ龜文竹ニ惟寶陀岩産レ之竹僅一本製レ扇甚奇聞今亦絶レ種矣

秘傳花鏡云龜文竹産ニ於寶陀岩ニ昔年僅一本以レ之製レ扇甚奇今不レ可レ得矣

『此間墨繪一葉丹州圖竹所載龜紋竹圖略レ之』

〇釋名

龜文竹 農政全書 湧幢小品 秘傳花鏡

文字あるひは紋に作る

鶴膝竹　皷槌竹

鶴膝竹一名皷槌竹一名木榑竹は和漢通名なり此種閩嶠に産するものは莖幹管削にして毎節擁腫し宛も鶴膝の如し竹譜詳錄治削をもちひずして杖となし老を扶るは靈壽杖に似たりと閩中記いへり今絶て植るものなし最おしむべし一種杭州の靈隱山中に生ずるものは節密にして內實し天壇藤の如しと竹譜詳錄いへり此種またこれある事をきかず

竹譜詳錄云鶴膝竹又名ニ木榑竹ニ生ニ杭州西湖靈隱山中ニ節密而內實略如ニ天壇藤ニ間有ニ突起ニ如ニ鶴膝ニ人亦取爲ニ柱杖ニ生ニ于閩嶠ニ者俗名ニ皷槌竹ニ節筎擁腫而莖管削宛如ニ鶴膝ニ筍可レ食葉世程閩中記云鶴膝竹出ニ古田縣ニ似ニ靈壽杖ニ不レ須ニ治削ニ人多取以扶レ老

八閩通志云鶴膝竹莖瘦節大可レ爲レ杖笋味甚美

本草彙言云鶴膝竹節下大上小似ニ鶴膝ニ閩人又呼爲ニ槌竹ニ

高要縣志云鶴膝竹節高如ニ鶴膝ニ亦軒墀之玩

廣羣芳譜云鶴膝竹狀節下大上小似ニ苦竹ニ閩中土人呼爲ニ槌竹ニ堪レ作ニ柱杖ニ按此卽雲南志所レ謂鷄腿竹蓋卬竹類也

泉州府志云搥竹肉厚而竅小

『此間墨繪二葉東藪竹譜所レ載鶴膝竹の圖及竹譜詳錄所レ載鶴膝竹圖略之』

眼竹一東坡送二與羅浮長老一者即此竹也或云天竺所レ産者形似尤奇肇慶府志云佛肚竹出二陽江封川一俗呼二人面竹一節小而中大堪レ作レ杖

天台山方外志云佛面竹北山間有二佳者一可レ作レ杖不レ堪二他用一故植レ之者寡

廣東新語云人面竹節小而中大小處如二人面一大處如レ腹亦曰二佛肚竹一

高要縣志云佛肚竹今所在多有レ之俗呼二人面竹一節小竿中大差堪レ作レ杖

桂海虞衡志云人面竹節密而凸宛如二人面一人采レ之爲二杖杖一

五雜俎云有二人面竹一其節紋一一覆一仰如レ畫二人面一然

農政全書云人面竹出二剡山一節極促四面參差竹皮如二魚鱗一面凸頰如二人面一

海澄縣志云人面竹華夷考云節密而凸宛如二人面一故名淳祐志名二佛眼竹一

諸羅縣志云人面竹高四五寸通志一名二佛眼竹一可レ供二玩賞一

紹興府志云人面竹剡山有レ之竹徑幾レ寸近レ本逮二三尺一節極促四面參差竹皮如二魚鱗一而凸頰類二人面一

八閩通志云人面竹其幹與二常竹一無レ異惟兩節間突起如二人面一可二以爲一レ杖

又云人面竹亦曰二佛眼竹一

『此間墨繪竹詳錄所レ載人面竹一名佛面竹圖一葉及彩畫二葉丹州圖竹所レ載人面竹一名佛面竹圖略レ之』

○釋名

佛面竹（通雅竹譜詳錄方氏墨譜）

人面竹

竹譜詳錄本草彙言廣東新語肇慶府志宋長石飲食書云人面竹節作二龜文一遠視似二眉目一

鬼面竹（竹譜詳錄）　佛肚竹（廣東新語肇慶府志）

佛眼竹（八閩通志海澄縣志）

按に以上五名共に譬喩にしてあながち眼目口鼻の狀を具せしにはあらずされどもわけてこれをいふ時は大なるものを佛面竹或は佛肚竹といひ小なるものを人面竹或は佛眼竹といふ又或は佛眼竹は蓋し節間に少しく凹凸ありて頗る眼目の狀あるによりて名付しにてあるべきにや

拉母七孤（ラムチク）（庶物類纂）

近江州及び和泉州の方言なりといへり

古今要覽稿卷第三百六十七

●草木部 竹五

佛面竹　佛肚竹

佛面竹は和漢通名にて一名を人面竹一名を鬼面竹一名を佛肚竹一名を佛眼竹といひまた俗名を拉母七孤(ラムチク)といふ下野國茅橋邊の竹林(丹洲圖竹)及び伊豫國吉田領大乘寺境內にありと(國史草木昆蟲攷)いへり其狀大小のたがひありといへどもすべて地上一二節或は三四節より左右邪正兩節相對して大龜甲紋の如く中間高く起りて頗る人面のごとくまた佛肚の如し方于魯が墨譜に每節間二句一聯の七佛偈を鐫成せしは即此竹にて西土にも至て稀なりと(丹洲圖竹)いへり今按に此種西土にも大小のたがひありてその大なるは即華嚴寺の什物にせしと丹洲圖竹に載しのみにて其產地いまだ詳ならずといへども竹譜詳錄に天竺國に產するものは形似て尤奇とみえたればもしくは天竺より傳來せし物にてもあるべきにやまた小なるものは兩浙江廣にいづると(竹譜詳錄)いひまた高要縣には所在多くこれありと(高陽縣志)いへり此種は尋常の人面竹にして方氏墨譜に所謂佛面竹もまたこれと一物なるべし丹洲圖竹云佛面竹大サ長サ圖ノ如シ古色光澤愛スベシ正面ヨリコレヲ見レバ大龜ノ甲紋ニ似タリコヽニ圖スルハ側面ヨリ一看セル所也方氏墨譜ニ佛面竹アリ其狀此圖ト一般ナリ大サ一握許ニシテ節間盡ク二句一聯ノ七佛偈ヲ書シテ鐫成セルモノナリ唐山ニモ稀ニシテ得ベカラザルモノトシ貴重ストミエタリ本邦下野州茅橋ト云所ノ竹林ニ此狀ノ竹アレドモ小ニシテ見ルニ耐ズト云

國史艸木昆蟲攷云方于魯墨譜及び李息齋竹譜に圖載せし佛面竹は奇の奇なるものなりこれ蓋竹譜の人面竹の屬なり伊豫國吉田領大乘寺境內に生たるとて其國人その圖をもたらして予に質すに即佛面竹也

通雅云華嚴寺佛面竹作ㇾ筒即人面竹之大者僧侈ニ其名ニ遂信ㇾ之邪

竹譜詳錄云人面竹又名ニ鬼面竹ニ又名ニ佛面竹ニ兩浙江廣俱有ㇾ之去ニ地上ニ一二節皆左右邪正兩節相對中間突起長圓宛然如ニ人面ニ或多至ニ十數節之上ニ始平正如ニ常竹ニ筍亦可ㇾ食人多採以爲ニ柱杖ニ福建人呼爲ニ佛

○正誤

本草一家言云瀟湘竹一名斑竹云々

按に瀟湘竹は別種にてその種二種有といへども共に斑文ある物に非ずされば此瀟湘竹は湘妃竹の誤寫なるべし

東遊記云秋田津輕邊熊笹多し彼地にては根曲り竹といひ蝦夷にてはシヤコタンといふ

按に熊笹とシヤコタン竹とは相似て別種なるを混じて一ツとなすは誤なり

博物志云堯帝之二女常泣以二其涕一揮竹々盡成レ斑

按に斑竹の斑文あるはこれ天稟にして堯女の涙かかりし後に此竹はじめて斑文を生ぜしにはあらず然るを博物志にかくいへるは上世一時の俗談を其まゝに記せしなりまた江西通志に蘇東坡の黃州に謫せらるゝ時筆を取りて詩を賦し墨を竹上に洒ぎしが遂に斑竹となりしといへるは同じ類ひの俗談なりされどもおなじ俗ながら蘇東坡の斑竹は扨おき堯女の涙かゝりしといふ斑竹は蓋し疊暈なきものなるべきを諸書に疊暈あるものとせしは恐らくは非ならんいかに堯女の涙痕なればとてその斑疊暈をなす理あらんや

り彪もまた虎の斑文あるをいへばなり又庶物類纂にとらふ竹は越後の方言なりとみえたり

とら竹本草綱目啓蒙

小野蘭山曰とら竹は薩摩の方言なりと此卽とらふだけの中略なり

まだら竹同上

まだらは卽斑字の義なり

豐後竹同上

おかめざゝと同名なり又此竹豐後の姥が嵩に產するよしは和漢三才圖會にも見えたり

らう竹同上

今俗らを竹といへるは卽らう竹の訛轉なり小野蘭山曰考𦊆(ラウ)は東天竺の國の名也占城に近く安南の西北に接す其國斑竹數品あり最初此竹にて煙管を造り渡す故に今煙管に用ゆる細竹をすべてらうといふ

玳瑇竹和訓栞

また同名あり

鼈甲竹

上野の方言なり凡玳瑇といひ鼈甲といふは共に斑文あるをいへる也

斑竹桂海虞衡志竹譜詳錄漢隱居詩話彙書詳注八閩通志江陰縣志安慶府志

說文云辨駁文也竹譜詳錄云 斑竹處々有ㇾ之其類最蕃凡生二斑花一者皆然斑花或大或小或勻或細或不ㇾ等或重暈或單暈色或深淺各隨二出產風土一變易

斑皮竹太平御覽北戶錄書叙指南　花斑竹四川總志

研竹福州府志引三山志

按に玉篇小研摩也とみえたれば研竹は蓋し若竹の名にして苔を摩研して斑を出す意にて名付しにや

暈竹竹譜詳錄　苔竹寰宇記　湘妃竹竹譜詳錄太平府志　淚竹竹譜詳錄　湘竹新誠縣志　靈竹代檀集

赤錢竹竹譜詳錄

按に玉篇に錢子踐切老聃姓とみえたり此錢はそれとは異にして斑文の大さ錢の如くなるを以て命せし名にて竹冠は後に加へしものなるべし

眞珠竹同上　雨點竹同上　雲竹同上　淸白竹同上　龜紋竹同上

按に丹洲圖竹に栽るところの龜紋竹は每節間矮促にして其狀龜甲紋に似たるをいひ此龜文竹は斑文の狀龜甲に似たるをいふ

道州斑竹同上　顧家斑竹同上　電斑竹同上　舍利王斑竹同上

八閩通志云斑竹永福縣鶴洋多產レ之差不レ及二湘江者一
海澄縣志云斑竹節間有二斑文一似二湘妃淚痕所レ餘者一
又有二一種一名二瀟湘竹一
靖江縣志云斑竹有二紫斑一一名湘妃竹
常熟縣志云質脆而有レ斑者爲二斑竹一可二以適一レ用
懷寧縣志云斑竹篾可レ製レ器
金壇縣志云斑竹相傳自二湘江一來猶是湘妃淚灑遺レ竹
安慶府志云斑竹有二竹斑一類二湘妃竹一
太平府志云斑竹一名湘妃竹青幹有二紫斑文一可レ治レ器
新城縣志云斑竹一名湘竹可レ作二器用一
番禺縣志云斑竹如二紫竹一青中間有二斑點一而無二螺紋一
不レ如二湘竹一
臺州府志云斑竹斑暈紫黑而點大又號二越竹一
『此間槩繪五枚（東藪竹譜所載斑竹圖、同上暈竹圖、同上電斑竹圖、同上龜紋竹圖、竹譜詳錄所載暈竹圖、）彩畵二枚（沙古丹竹）略レ之』

○釋名

篇遲久和名類聚鈔

順曰此間斑竹音篇遲久按に斑篆文辨に作るこれ正文なり說文に辨从レ文辨聲とみえたれば玉篇に辨皮兗（ヒヘン）切又方兗（ハウヘン）切といひ唐韻にもまた方兗切といへるは卽古聲なりこれは說文に辨从レ刀辨聲辦从レ力辨聲瓣从レ瓜辨聲とあるにても知るし然るを俗の辨玨に从ひ斑に作り其字斑と相似たるによりて玉篇以下の字書二字混同し遂に斑を以て布還切となすは誤れりされば斑布還切は漢音にして方兗切は吳音なりなどいふ說もまた古聲と違へるにあらずや

沙古丹竹本草一家言東遊記

按に沙古丹は蝦夷の地名なりその地多く此竹を產す故に名づく或人の說にシヤコタンはシヤコハンの誤りなるべしといへりこれは廣東新語に蘭生二虱斑一謂二之鷓胡斑一とみえたるに依ていへるならんその實はシヤコタンの地名なる事を知らざるなり和漢三才圖會云義經奔二蝦夷一島民皆敬服終二天年一死其地曰二沙古丹一建二神祠一甚崇信每稱二南無義經一とこれにて沙古丹の地名なる事明けし

とらふ竹

庶物類纂和漢三才圖會大和本草本草一家言にはその二字を用ひ和漢三才圖會には虎彪の字を用ひた

又云苦竹寰宇記云信州貴溪水南流上源數十里生二苦竹一苦痕點暈狀如レ琢レ玉幹直可レ爲レ杖

又云涙竹生二全湘九疑山中一博物志云舜南巡狩不レ返葬二於蒼梧之野一堯二女娥皇女英追レ之不レ及至二洞庭之山一涙下染レ竹成レ斑妃死爲二湘水神一述異記云舜南巡葬二於蒼梧一堯二女娥皇女英涙下沾レ竹文悉爲レ之斑亦名二湘妃竹一

又云道州斑竹生二高巖一小二於箭一文如二螺旋一不レ雜

又云顧家斑竹述異記云姑蘇之境有二陸家白蓮顧家斑竹一亦猶三花有二魏紫姚黃之稱一

又云電斑竹出二雷州一地理志云雷州貢二電斑竹一即此物也

又云舍利王斑竹幹有二虺文一六帖云昔西域舍利王獻レ樂有二大小匏琴一皆以二虺文斑竹一爲レ之取二聲於匏一以合レ律

太平御覽云斑竹博物志云河庭虞帝之二女啼以レ涕揮レ竹々盡斑今下雋有二斑皮竹一

北戶錄云湘源縣十二月食二斑皮竹筍一諸筍無二以及レ之

吳錄云馬援至二荔浦一見二冬筍一名曰二苞筍一博物志云斑皮斑堯女以レ涕揮レ竹々盡斑也

代檀集云靈竹俗傳孟宗所レ泣斑竹也

典籍便覽云湘竹斑細而色淡有二暈中一點紫一作二簫管一最佳

彙書詳注云斑竹卽吳地產湘妃竹者其斑如二涙痕一杭產者不レ如亦有二二種一出二古辣一者佳出二陶虛山中一者次レ之土人裁爲レ筋甚妙

學圃雜疏云斑竹筍不レ中レ食大而鮮澤色者可レ用亞二湘妃一亦佳竹也

日詢手鏡云斑竹有二二種一出二古辣一者佳出二陶虛山中一者次レ之余携二數竿一回乃陶虛者不二甚佳一吳人甚珍重以レ之爲二扇材及文房中秘閣之類一丈許値錢二三百文

格古要論云湘竹出二廣西一斑細而色淡有二暈中一點紫一與二蘆葉上斑一相似作二簫管一最貴

羣芳譜云滇之新化州山中生二細竹一長者十餘丈本粗而末細其上有二虫蝕處一去レ之則斑痕如二湘竹一斷以爲レ箸

雅

致富全書云斑竹又名二斑皮竹一長短大小不レ等可レ作二扇邊一又與二紫竹一竝取充二文房諸具之用一

江陰縣志云斑竹質脆其文斑

福川府志云斑竹三山志名爲二硏竹一

湘妃ニ然作ニ器具ニ所レ用最廣秘傳花鏡また赤錢竹眞珠竹雨點竹雲竹清白竹龜紋竹及び道州斑竹顧家斑竹電斑竹舍利王斑竹あり共に和產いまだ詳ならず

延喜式內藏寮云斑竹千六百隻遠江國所進

和名類聚鈔竹類云斑竹兼名苑云一名涙竹此間斑竹音篤遷久

和漢三才圖會云按虎彪竹出ニ豐後姥之嵩ニ篠竹之類而竹黃白色有ニ黑斑文ニ微似ニ虎皮之紋ニ故名レ之用爲レ筇爲ニ煙筒ニ佳

大和本草云斑竹漳州府志云節間有ニ斑文ニ似ニ湘妃涙痕所レ餘者ニ今按本邦處々ニアリ

本草一家言云瀟湘竹一名斑竹和名虎斑竹薩州地方產レ之土人呼ニ鷓胡淡竹ニ

本草綱目啓蒙云斑竹ハ皮上ニ黑斑アルヲ云豐後越前肥後土佐其餘諸州ニ出ヅ大小ノ別アリ臨桂雜識ニ品類ヲ詳ニス唐山朝鮮ヨリ來ル杖及机卓等ニ造ル者僞リ多シ

東遊記云秋田津輕邊極めて北地故松なく竹なく云々熊笹甚多し深山は皆是なり彼地にては根曲り竹といひ蝦夷地にてはシヤコタンといふ蝦夷にあるは尤大にしてふとし長さ八九尺ふとさも杖程なるもの多し

國史草木昆蟲考云斑竹今好事のもの筆管となせし物にして諸山中或はこれありいにしへは我にある事を知らず漢隱居詩話に竹有ニ黑點ニ謂ニ之斑竹ニ非也湘中斑竹方生時每點ニ上苔錢ニ封レ之云々此眞斑竹也とみえたり槃むかし日向國に往し時端山麓の內に斑竹を得たりしにげに漢說と同じ又相模國箱根山中のものも亦しかり

華夷花木考云斑竹甚佳卽吳地稱ニ湘妃竹ニ者其斑如ニ涙痕ニ杭產者篠幹小節長葉大堪レ作レ箭俗呼曰ニ箭竹ニ

按に杭產斑竹幹小葉大といへるは卽沙古丹竹に的當のものなり

竹譜詳錄云暈竹出ニ湘全間ニ嶺南安南俱有レ之竿類ニ苦竹ニ節長大小不レ等初竹青上生ニ白苔花ニ漸々著ニ竹上ニ成レ斑及レ洗ニ去苔蘚ニ紫褐斑暈層々間錯殊可ニ人意ニ筍不レ入ニ食品ニ若ニ他斑竹ニ止一沁痕無ニ疊暈ニ也全州西猺洞中及爵林山中出者竹色正白斑花尤分明最爲ニ上品ニ桂海虞衡志謂ニ之斑竹ニ云桂林屬縣皆有レ之所レ記略同

又云赤錢竹眞珠竹雲竹雨點竹清白竹龜紋竹右已上六種皆暈竹之類彼人但以ニ斑花之似者ニ輒取以名耳

古今要覽稿卷第三百六十六

●草木部 竹四

篇遅久　沙古丹竹

篇遅久は斑竹の字音にて和漢通名なり其一名を花斑竹一名斑皮竹一名研竹一名箭竹ともいふこれに數種あり今とらふ竹一名とら竹一名まだら竹一名らう竹一名沙古丹竹一名豐後竹一名玳瑇竹一名鼈甲竹といへるは其高さ大抵五六尺にして徑三分餘毎節相去る事四五寸枝は中幹より以上に生じ總て獨枝にしてその高さ本幹と同じ或は四枝或は二枝なるもあれども葉は其梢杪に並びつきて六葉を以て一朶とす或は四葉五葉のものは下の一二葉の枯落しにてその葉長さ一尺一寸廣さ二寸八分許また肥地に植るものは長さ一尺五寸餘廣さ三寸二分許に至る葉の正中には尋常の熊笹と同じく葉本より葉先に通じて一縱小道あり其左右又十二三道の細縱理相並びて共に葉本より葉先に至る此種蝦夷地方に產するものは風雪に襲はれて本根おのれと彎曲して狀弓形の如くなれ共他國に產するものはしからずすべて毎節下紫黑色にして斑紋ありその斑毎幹上節より染出て下節に至るされども大方は半ばにして一節間すべて紫黑色なるもの少なしまた此竹中幹より以上はたゞ青色にして尋常の熊笹と同じく斑文絕てなし此種は今小笠原相模守本所柳島の別莊にありて數百萬幹池邊に叢生し灑々最愛すべしまた松平越中守大塚の下邸にも多しこれ卽延喜式及び和名鈔に載る所の斑竹なり畢究此斑竹はすゞ竹の一種斑文あるものなれば肥地に生ずるものはその高さ一丈許に至るものありまたすゞ竹と同じく採て以て竹箭となすべし故に華夷花木考にも斑竹杭產者堪レ作レ箭とみえ本邦にては遠江延喜式豐後和漢三才圖會越前肥後土佐その餘諸州に出づ本草綱目啓蒙一種暈竹一名苦竹一名湘妃竹一名淚竹一名湘竹一名靈竹あり此竹方ニ生時一毎點上苔錢封レ之甚固土人硏レ竹浸レ水用ニ草穰一洗ニ出苔錢一則紫暈爛斑可レ愛此眞湘中斑竹也と漢隱居詩話いへるは本邦にても日向及び相模の箱根山中に有と國史草木昆蟲考いへりまた生ニ於江浙間一者其斑直一淚痕無レ暈桂海虞衡志產ニ於吳越諸山一者其斑紋雖レ不レ及ニ古辣

この下缺文あり蓋し金絲竹の三字なるべしまたは
筋竹の二字にてもあるべきにや
本草觽云金絲竹似二大名竹一有二小筋一出二竹譜一
竹譜詳錄云金絲竹生二湘潭間一一名白絲竹一名刷絲竹
本笋竹之類以二其易一レ活人多植二於盆檻中一久々不レ瘁
竿上細黄數道如二刷絲一然故名志書撫州歳貢二金絲竹
布一
八閩通志云金絲竹紋如二金絲一故名
閩書南產志云金絲竹如レ枝
續修臺灣府志云金枝竹一名箭竹大如二小指一出二樸仔
雒等社一土番以爲レ箭
漳州府志云七絃竹色自帶二微紅一中有二青紋一大小相間
如二琴絃狀一
臺灣府志引二臺海采風圖一云七絃竹幹白有二青線紋五
六七條一葉與二□竹一同
『此間彩畫二一葉高麗竹略レ之』

高麗竹 種樹家稱
○釋名
此竹はもと琉球より薩摩に傳へしが今は四方にひ
ろまりしよしされば此高麗は卽朝鮮おほはこ唐お
ほはこの類ひにてあながちにその地より來りしに
よりて名付しにはあらず
蘇枋竹 同上蘇枋は色によりて名づく　筋竹 大和本草○按筋竹は金明竹と同名　金枝竹 竹譜詳錄　七絃
八閩通志閩書南產志　白枝竹 竹譜詳錄　刷枝竹 同上○玉篇云刷拭也三蒼云刷掃也
竹 漳州府志臺灣府志　箭竹 續修臺灣府志

黄金間碧玉一

按に黄金間碧玉竹は竹身黄にして溝青く碧玉間黄金竹は竹身黄にして溝青なれば上文に引所の諸書にてしるし然るをこゝに莖黄にして青糸の間するを碧玉間黄金竹とし莖碧にして金糸の間するを黄金間碧玉竹となすものは誤れり且數縷青絲數縷金絲といふ時は恐らくは金絲中の類をさすに似たり最うたがはし

増補地錦抄云金竹また簺竹ともいふ

按に簺竹は即かはしろ竹の名なれば此簺字は蓋し筋字の誤りなるべし

高麗竹　まち竹

高麗竹一名蘇枋竹一名筋竹は漢名を金絲竹一名白絲竹一名刷絲竹一名七絃竹一名箣竹といふその幹節並に女竹に似て高さ三五尺大さ小指の如し毎節相去こと五寸許にて三枝五枝或は七枝を叢生すまた大枝よりわかれし小枝に至りては双枝なるもあれば獨枝なるもあり其三枝なるは若竹にして五枝七枝なるは老竹也これも女竹とおなじく年を經れば三枝五枝の間に別に二箭を生じて其枝を増し小枝の双枝獨枝なるもまた二箭三箭を生じて五枝三枝となるは本幹と同じ葉もまた女竹に似て細小にして四葉五葉七葉等の不同ありといへども其葉莖に二葉三葉の枯落し小篠現に存すれば全形は即七葉一朶なるべし扨此竹わかき時は通幹艶紅色なる事頗る蘇枋を以て物を染しが如しそれに五六七行の青線路ありて宛も刷絲の如く老る時はその紅色をのづから淡黄に變じて青色また薄し今種樹家往々これを培養するものあり其奇麗最變すへし往時此竹を薩摩より東都に奉りし事あるよしされば今ある物は蓋しその遺種なるべしまた西土にては撫州より此竹を製して布とせしを貢せし事竹譜詳錄にみえ樸仔離等社の土番にては此竹を以て箭に作るよしは臺灣府志にみえたり

大和本草云一種スヂ竹ト云竹アリ女竹ノ類ナリ白キタケ筋アリ大名竹ニ似テ同ジカラズ

按に金絲竹の一名をまた白綫竹ともいへばすぢ竹は即金絲竹の時ありてその色を變ぜしものなるべし

本草一家言云一種概節似レ蘆幹有二線路一青黄紫相雜爲二縱文一名

嘉興縣志云黄金間碧玉逐レ節靑黄相間亦不レ易レ得者
江陰縣志云金竹色黄故名俗云黄金間碧玉
八閩通志云斑挑枝竹一曰二界金竹一又曰二黄金間碧玉一
竹林譜記云閩人呼二其笋一爲二黄笋一亦名二黄竹一
竹譜云對靑竹一邊靑一畔紫二色相映可レ愛筍蒴可レ食
出二成都一近孟昶據レ蜀作二對靑竹亭一焉
華陽國志云成都有レ竹名二對靑一半靑半紫二色相映可
レ愛
事物紺珠云對靑竹一邊靑一畔紫二色相映俗呼二黄金
嵌碧玉一
典籍便覽云對靑竹半邊靑半邊紫二色相映可レ愛出二成
都一
因樹屋書影云成都有竹名二對靑一半靑半紫二色相映可
レ愛見二華陽國志一余在二泉州一見二此種一甚多但細如二拇
指一絶無二巨者一

『此間彩畵二葉金明竹略レ之』

○釋名

金明竹（和漢三才圖會 庶物類纂）

稻若水金明竹は武藏の方言なり

金竹（庶物類纂 本草一家言 增補地錦抄）

稻若水曰きんちくは加賀の方言なり

しまだけ（庶物類纂）

稻若水曰しまだけは駿河の方言なり

ひよんちく（同上）

稻若水曰豐前の方言なり

筋竹（本草一家言）

按に金竹金明竹はその色をいひ筋竹は節間に靑縱
道あるをいふ

やう竹（增補地錦抄）

按にやう竹の名諸家本草に所見なし蓋し木器に金
銀箔をきたるを樣器といふ事あればそれに比し
たる名義なるべき歟

黄金間碧玉竹（竹譜詳錄 五雜俎 遵生八牋）　金鑲碧篏竹（秘傳花鏡）

黄金間碧（本草彙言）

按黄金間碧は蓋し碧の下に玉字の落しなるべし

斑挑枝竹（八閩通志）　界金竹（同上）　黄竹（同上）　越閃竹（紹興府志）　閃竹（同上）　間竹（同上）　對靑竹（成都古今記 本草彙言）　靑黄竹（廣西通志 瓊州府志 南寧府志）

○正誤

肇慶府志云間玉間莖黄如レ金數縷靑絲間レ之故名二碧
玉間黄金一又云黄金間皮色碧翠數縷金絲間レ之故名二

竹共いひやう竹ともいふ
竹譜詳錄云黄金間碧玉竹一與二金竹一同但枝節間凹處一道深綠越産以レ是名者又異
又云碧玉間黄金竹亦同レ上但竿色全綠枝節間凹處一道深黄
學圃雜疏云金竹中美者曰二黄金間碧玉一色澤殊レ常中界二一道綠一尤可レ愛有二一種大者一曰二碧玉間黄金一稍不レ逮然與二黄金竹一相對廢レ一不可余圃中倶不レ乏
遵生八牋云黄金間碧玉竹杭産竹身黄金每節直嵌二翠綠一條一不レ假二人爲一出レ自二天巧一也
又云碧玉間黄金竹杭産竹身全綠每節直嵌二黄金一條一亦天成也
彙苑詳注云碧玉竹黄金間碧玉竹
湧幢小品云成都有レ竹青黄相間謂二之黄金間碧玉一
五雜俎云黄金間碧玉竹其節一黄一碧正直如レ界然
致富全書云黄金間碧玉幹青黄色間レ節或一節半青半黄
群芳譜云黄金間碧玉産二成都一青黄相間
廣群芳譜云黄金間碧玉成都古今記云對青竹々黄而溝青每節若二間出一浙中亦有レ之會稽甚多彼人呼二黄金間碧玉一按筍譜云竹則一邊青一畔紫其色又與レ此小異
本草彙言云對青竹黄而兼レ青成都所レ出今兩浙亦有レ之惟會稽頗多呼爲二黄金間碧一
茅亭客話云對青竹身黄色有二一脈青一節々相對故謂二之對青一
皷山志云黄金嵌碧玉竹生二靈源洞一
物理小識云成都黄竹溝青
秘傳花鏡云金鑲碧嵌竹産レ自二成都一近日浙杭亦有與二常竹一無レ異但幹上每節兩青兩黄相間
福州府志云黄金間碧玉竹一黄一青横竪相間山中多有レ之高湖産者絶鉅
鎭江府志云閃竹卽宋景文黄魯直所謂對青竹宋贊曰翠溝如レ畫黄賦曰金碧其相今以二幹碧溝黄者一爲二碧玉間黄金一幹黄溝青者爲二黄金間碧玉一
南寧府志云青黄竹通志青黄間碧玉
紹興府志云對青竹惟會稽頗多彼人呼爲二黄金間碧玉一今或稱曰二閃竹一又曰二間竹一又云二越閃竹一宋祁贊翠溝如レ畫黄庭堅賦金碧其相
瓊州府志云青黄竹筍半青半黄
廣西通志云青黄竹俗云青黄間碧玉

金明竹、一名金竹、一名筋竹、一名しまだけは漢名を黄金間碧玉竹一名金鑲碧嵌竹一名黄金間碧一名斑桃枝竹一名對青竹一名青黄竹一名越閃竹一名界金竹一名閃竹一名黄竹一名間竹といふ岡村尙謙曰本所押上村の人家に一叢林あり高さおほよそ一丈五六尺圍み二三寸其幹地上より四五節を經て始めて双枝或は獨枝を生ず其枝左右細大の異なる及び其節の隆起頗る苦竹(マダケ)と一樣なりといへども枝を生ずる節より以上は凹處皆青色にして枝を生ぜざるかたは黄色也されども黄色なる中にも其青色なる凹處を少しく離れて別に一行の深青細縱道あり其細縱道二行相並ぶものは青色やゝ薄し又下節の枝なくして正圓なる所も青黄色を互にする事頗る上幹の如し其幹を二つにわれば內白肉は外面の青黄に拘らずすべて淡青色を帶て常竹の如く純白ならず其葉また苦竹に相似たりといへども葉上に細縱白道二三行雜出しすべて青色ならざるは苦竹に異なり此筍また苦竹とおなじく五月の頃に生じその籜青黄紅の數縱道あり其狀頗る刷絲の如くにして紫斑點ある事又苦竹のごとし其奇麗最竹幹よりも勝れり味は大抵苦竹筍と相似て食ふべしまた幹葉共に小にして毎節間三枝を生ずるものありその左右の枝は大にして中枝は至て細小なりこれは尋常の苦竹のたま／＼三枝を生ずるものあるに同じ別種にはあらず又和漢三才圖會に銀明竹一名紗地竹ありその籜色白して溝綠色とみえたりこれは金明竹の土地によりて其色を變ぜし物なるべし一種碧玉間黄金竹ありこれは竹身綠色にして節間の凹處一道黄色なる物なれど今甚稀なりまた一種竹身半は青く半は紫にて二色相快ずるものを舊は對青竹といふよし僧贊寧が筍譜にみえたり本邦には絕て此種ある事をきかず

和漢三才圖會云一種有₌金明竹₋外黄溝中綠色
又云俗云銀明竹者籜色白惟溝中綠色甚美也槁則綠變一如₌尋常竹₋

大和本草云黄金碧竹譜ニ出タリ黄竹ニシテ青筋アリ雄竹ナリ大名竹ニ似テ不レ同京都北野草木屋ニモアリ本草一家言云黄金間碧玉竹和名金竹又名₌筋竹₋其形狀出₌于五雜俎₋雙槐齊抄呼爲₌對青竹₋

增補地錦抄云金竹ふとき竹は杖ほどあり竹の色黄なりはゞ三分程の青すぢえまの如くに一筋づゝあり籔

百鎰先寒一徑深、潜疑造化鑄成レ林、貪夫或有ニ凭レ欄者ニ、不レ見ニ彩篁一但見レ金、

『此間彩畫一葉丹洲圖竹所載黄竹圖略レ之』

○釋名

黄金竹 俗稱 金竹 竹譜詳錄汝南圃史蘇州府志江南通志

黄竹 竹譜詳錄晉安海物志邵武府志八閩通志

以上三名和漢同意なり下の黄皮黄竿の二名ともまた同じ按に續竹譜に穆天子作ニ詩三章一以哀レ民謂ニ之黄竹之歌一とみえたりその竹は今いふ黄竹なるか金竹なるか其實をしらずといへどもいづれにても黄竹は古名にて金竹は後世の名なれば古は今の金竹をさして黄竹といひしも知るべからず古詩にいはゆる林中枝々金琅竹といへるもまたしかり八閩通志に班桃枝竹一曰界金竹又名ニ黄竹一といへるは同名異物なり

黄皮竹 廣東新語 黄竿 靖江縣志

○正誤

事物紺珠云金竹節有ニ金色一

按に金竹は通幹皆金色のものにて節のみ金色のものにはあらず彙苑詳注及格致鏡原に金猫竹其節有ニ金色一とみえたれば節のみ金色のものは卽金猫竹なる事明らけしされば事物紺珠にいはゆる金竹は蓋し金猫竹の猫字の落しなり然るを庶物類纂金竹條に紺珠を引しは脫字をしらざるあやまり也

竹譜詳錄云金竹生ニ江浙間一一如ニ淡竹一

岡村尚謙云 竹譜詳錄黄金間碧玉 竹條に 碧玉竹一與ニ金竹一同とみえたり此文によれば碧玉竹も金竹も其狀一樣の物なるはしるしまた薩摩琉球及び安房等に產する金竹も今ある碧玉竹と同じく苦竹(マダケ)に似たるものなれば竹譜詳錄にいはゆる江浙間に生ずる物もそれとおなじ形狀なるべきを同書に金竹一如ニ淡竹一といへるは前後矛盾に似たりされどその葉の淡竹に似たるものは蓋し風土の異なるによりての故なるにやうたがはし

汀州府志云黄竹一名界金竹

按に黄竹は通幹黄色のものなれば界金竹の名は命ずへからず然るを汀州府志に其名を載せしは黄金間碧玉竹もまた一名を黄竹といへるによりて誤れるなり

金明竹 金竹

古今要覽稿卷第三百六十五

●草木部 竹三

黄金竹

黄金竹は漢名を金竹といふ此種江浙の間に生ずるものはその狀淡竹の如く(竹譜詳錄)琉球薩摩等に產するものは苦竹(マダケ)に似て小なり(丹州圖竹)また安房よりいづるものは高さ二丈許にて生竹の時はさまでの黄色にあらずといへども乾す時は其色鮮黄頗る眞金の如し(佐藤成裕說)又黄竹一名黄皮竹あり竹譜詳錄に黄竹叢生與ニ慈竹ー一類といひ晉安海物志に黄竹節紫色黄とみえたれば金竹と同種にはあらざるなり

丹洲竹譜云金竹狀似ニ苦竹ー而小其幹皆金黄色琉地多有レ之

本草綱目啓蒙云汝南圃史ニ、金竹幹色純黄似レ金ト云廣東新語ニ有ニ黄皮竹ー凡竹非レ青則綠此獨黄古詩云林中枝々金瑯玕、一丈二尺拂ニ雲端ヿ謂レ此ト云薩州ニ金竹アリ黄ニシテ青色ナシ節長二尺笛ニ作ルベシ大竹モアリ

竹譜詳錄云金竹生ニ江浙間ー一如ニ淡竹ー高者不レ過ニ一二丈ー其枝幹黄淨如ニ眞金ー故名竺法眞羅浮山疏曰羅浮山有レ竹色如ニ黄金ー

又云黄竹叢生與ニ慈竹ー一類但成レ竿卽黄色故名越州蕭山縣東三十里有ニ黄竹山ー上有ニ林竹ー色微黄狀如ニ刀削ー志云是范蠡遺ニ鞭於此山ー生レ筍爲レ林卽此竹也

晉安海物志云黄竹節紫而色黄筍可レ爲レ爼

本草綱目云黄者如レ金

蘇州府志云吳郡志金竹不ニ甚大ー色如レ金今不ニ多見ー

江南通志云金竹金色如ニ蒸粟ー

汀州府志云黄竹小而黄色一名界金竹其笋季夏方生

邵武府志云黄竹幹可ニ以釣ー簚可ニ以纜ー其色黄

八閩通志云黄竹小而黄色

松溪縣志云黄竹小者可レ爲ニ筆管ー

鉛山縣志云竹黄節長肉薄植レ之易レ成

靖江縣志云黄竿色黄亦脩偉

○詩

江南通志

詠金竹　蔣　堂

那類ニ鳳尾ニ盆種可レ作ニ淸玩一
肇慶府志云鳳尾竹出ニ對州一笋大肥美爲ニ諸笋冠一
漳浦縣志云鳳尾竹梢葉森秀如ニ鳳尾一舊志名ニ觀音竹一
金壇縣志云鳳尾竹以ニ其細小似ニ鳳尾一故名
安慶府志云鳳尾竹々小而細形如ニ鳳尾一可レ供ニ盆玩一
漳州府志云鳳尾竹通志云梢葉森秀狀如ニ鳳尾一
江陰縣志云鳳尾竹蕭疎如ニ鳳尾一有ニ僅尺許者一有ニ高丈餘者一
會稽縣志云鳳尾竹葉眇小亦慈竹別種
泉州府志云鳳尾竹俗呼ニ觀音竹一七邑倶有
右農政全書以下の諸書は庶物類纂に引所を以て再びこゝには載せしなり
『此間彩畵一葉鳳凰竹略レ之』

〇釋名

鳳凰竹和漢三才圖會
此葉繁茂頗る鳳尾に似たり故に名づく
土用竹本草一家言
此竹四時に筍を生ずるといへども土用竹殊に多し故に名づく
孟宗竹和漢三才圖會
寺島良安曰此筍冬月生故俗曰ニ孟宗竹一
鳳尾竹竹譜詳錄農政全書致富全書
名義上文にみえたり
觀音竹泉州府志漳浦縣志
按紫竹及び黑竹もまた觀音竹と名づくこれと同名異物なり

産するものは土人以て藩籬とす此即致富全會にいはゆる鳳尾竹高五六尺のものにてまた薩摩にいづるものは駿河の産に一二倍するもの多ければその葉の大さも又隨てしるべし此即江陰縣志にいはゆる鳳尾竹有二高丈餘者一といへるもの也扨此筍至て細かなりといへども子母竹の如く一株のうちにて叢生し他處にいづる事なきは會稽縣志にいはゆる鳳尾竹而慈竹別種なりといへるに相符し薩摩にいづるものはその筍尋常のものより大なれば肇慶府志にいはゆる鳳尾竹笋大肥美といへるに暗合のもの也されども和漢三才圖會に此筍最細長甚苦不レ可レ食といへるは尋常の筍にして薩摩の産はかならずしからざるものなるべし

和漢三才圖會云鳳尾竹、俗云鳳凰竹也篠（シノダケ）竹之類而高不レ過二五六尺一葉細二三分許甚茂竹大如二筯及箭篦一而肉厚今年生者葉亦竹畧肥大舊年者却瘦細九洲平戸多有レ之

本草綱目啓蒙云鳳尾竹ハ花戸ニ誤テ鳳凰竹ト云一名土用ダケ 同名アリ　シユンヤウチク 上州　サンシヤウダケ 播州　小キンチク 薩州　人家ニ多ク栽ユ叢生シテ幹細ク長サ五七尺葉濶サ二三分長サ一寸許排生シテ椏ノ葉或ハ番蕉（リウキウソテツ）葉ノ如シ冬ハ葉枯茎ハ枯レズ夏土用中ニ筍ヲ生ズ故ニ土用ダケト云泉州府志ニ俗呼觀音竹ト云又云、觀音竹云々、江州初陽有二一種一上二高五七寸一人家多植二之水石之上一云々、

大和本草云鳳尾竹俗呼二觀音竹一泉州府志ニ出本邦ニモアリ葉ヒロク竹小ナリ綱目ニ所謂鳳尾竹葉細三分與レ此異、

本草一家言云有二鳳尾竹一六七月間抽レ筍和名土用竹、至レ冬葉枯

竹譜詳錄云鳳尾竹生二江西一一如二筀竹一但下邊枝葉稀小至レ梢則繁茂搖々如二鳳尾一故得二此名一

農政全書云鳳尾竹纖小猗那、植レ盆可レ作二清玩一

百花藏譜云鳳尾竹類有二高梗者一高可二三尺餘一葉甚緻密其小者高不レ盈レ尺笋生二四季一生輙摘二其梢一枝幹叢生葉々排比可レ爲二几案之玩一然不レ若二水竹之勁秀一也

致富全書云鳳尾竹高五六尺竿細葉多形如二鳳尾一庭砌可レ種

群芳譜云鳳尾竹高二三尺纖小猗那植二盆中一可レ作二書室清翫一

秘傳花鏡云鳳尾竹紫幹高不レ過二二三尺一葉細小而猗

その節の延たるをさして名付しものなるに此竹はさまで節の遠きものにあらざればなゆ竹と名付るかた勝るべしされども松岡成章はただちに此竹を以て古のなよ竹に擬せしもしるべからず

琉球竹俗稱

○正誤

和漢三才圖會云業平竹似二長節竹一而葉似二苦竹葉一增補地錦抄云なりひら竹は男竹の如にて節は女竹の如し

按に業平竹はその葉女竹にて節は男女の如し然るを此二説に一ッは葉苦竹の如しといひ一ッは節女竹の如しといふはともにあやまり也

南藏院傳説云在原業平朝臣歌枕見に武藏國みよしのの里に住所もとめ給ふ時末世のためにかたちをみづから三尺に彫刻せられしを里人祉を立て業平天神とまつれる卽當院内の社也その社のあるを以て竹をもきた業平竹と稱せり云々

按に業平朝臣のこゝに來られしといふは妄說なるうへに此竹此境内にのみあらざれば此說受がたしおもふに業平竹はその狀たをやかなるを以て名付しがもとにて爰には神と竹とのその名同じきによりて後にうつし植しものなるべし或說には成平と云相撲をまつれるなりといへり

鳳凰竹

鳳凰竹一名土用竹一名孟宗竹は漢名を鳳尾竹一名觀音竹といふその幹矢竹に似て大さ箸の如くまた箸より細きもあり高さ大抵二三尺にして節間相去る事三寸餘より四寸許にいたる其枝はすべて獨枝にして年を經るものはその獨枝の本より別に一小筍を抽出て双枝となるといへども女竹の如し三五枝を生ずるもの絕てなく且籜おちざるものは此竹の性也葉の狀ま竹に似て本廣く末尖りて長さ一寸四五分廣さ三分許にて葉本に細褐毛ある事またま竹に似て極めて短かし凡每枝梢葉々排比する事八九葉より十二三葉にいたるを一朶とす其始めの葉は大にしてそれより以上は一葉ごとに漸々にちいさく其葉先の葉は長さ三分廣さ一分許にいたるかくいへるものはたゞ一株叢生のうちにてその幹大なるものゝ形狀なりといへども其內には枝幹極めて纖細にして絲の如くまた線のごときもまじはりてすべて細大齊しからず此種駿河に

て是を大名竹に比すれば其枝葉また疎なりこれ新竹の形狀なりといへども年を經るものは舊枝の外別に小籜を抽出て新枝を分ち枝葉殊に繁しされどもその梢抄に至りては新舊ともに極めて柔弱にして或は右或は左に下垂するものはこれその天稟なり此竹今本所中の鄕南藏院境內なる業平天神の社側および龜井戶天神の社前その外本所中處々に多し（是は蓋し竹譜詳錄に載る所の龍尾竹の一種にてもあるべきにや）一種琉球竹あり其枝葉大かた業平竹と一樣なりといへども新竹の時は每節かならず三枝を生じ其節間に細褐毛ありその梢抄に至て一種の大名竹と同じく直上して下垂する事なきを異なりとす又此箬は一種の大名竹および業平竹と一樣なりといへども每籜上の小箬至て狹長なるはひとりこの箬の天稟なり

和漢三才圖會云業平竹似二長節竹一而葉似二苦竹葉一者名レ之中將業平之容貌人以爲レ女而男也此竹擬レ之名乎

本草一家言云有二篤竹一和名業平竹又名二奈與竹一增補地錦抄云なりひら竹は男竹の如くにて節は女竹の如し女竹男竹の見分なき故になり平といふよし（此說誤なり下に辯ず）

江府名跡志云本所中ノ鄕業平天神社云々業平竹女竹（メダケ）男竹（オダケ）也（同上）

竹譜詳錄云龍尾竹出二雲南一每節止二長二三寸一枝短密觀レ之狀如二龍尾一故名

『此間彩畵二一葉業平竹及二一葉琉球竹之圖略レ之』

○釋名

業平竹（和漢三才圖會本草一家言增補地錦抄）

○名義上文にみえたり

和合竹（南藏院稱）

○按に此竹を社內に植しはいつの頃よりの事なるかそのはじめをしらずといへども其側に木札を建て和合竹の名を記したり是は男女の中むつまじからぬに此竹の枝葉を細白紙にて結び置時はおのれとその中和合しけると□されば此名は業平朝臣の好色の事につきて漫に巧み出せし強名なるべし

那與竹（本草一家言）

○按に此なよ竹は梢抄至てやはらかにして下垂しやすきによりて名付し也古にいふなよ竹なゆ竹のなよ竹にはあらずおよそなよ竹は長節竹の義にて

は李時珍の說に瀕廣に出とあれば希有の物にして皇朝にてクレタケと云し物とは思はれず甘竹は陶弘景の說に薄殼葉最勝とあれば園裏に栽て愛玩せんも口なるべしさて其甘竹は蘇頌の說に篁に似て茂る卽淡竹也とあり篁竹は陶弘景筍爲レ佳藥無レ用と云は自一種のものなり是に似たりと云又卽淡竹なりと云は卽是淡竹の一種にして今園裏に栽るカンチクとは自別種なり又按に李息齋竹譜に甜竹葉類ニ淡竹ニ亦繁密、大者徑三四寸小者中ニ筆管ニ尤細者可レ作ニ掃帚ニと云は彌以て俗に云カンチクならぬこと明らかなり

大和本草云寒竹冬筍生ズマタ孟宗竹トモ云黑色ク細シ

按に江戸にては寒竹の笋秋より生ず九州と地誼おなじからざるにや

本草綱目啓蒙云紫は紫竹也和名カンチク、モウサウチク同名アリ人家ニ栽テ籬トス小竹ナリ高サ五六尺甚繁茂ス冬月笋ヲ生ズ故ニ孟宗竹ト云

按に此に所謂紫は本草綱目に頌曰苦竹有レ白有レ紫といふ紫なれば蘭山今俗に寒竹と云ものを苦竹の一種とせしと聞ゆ然れ共俗に寒竹と云ものは苦竹と類を同くせず貝原篤信和品たがふべき也

業平竹

業平竹一名和合竹一名なよ竹は高さ一丈四五尺にして圍み一寸六七分その根上第一節より毎節左右互に凹處および小黄芽ありその凹處は下節より上節下に至るといへども常竹よりはその幅至てせまくして且淺しおよそ此竹はその黄芽ある七八節を經て始めて獨枝を生じそれよりまた三四節の間はおの〳〵三枝を分ちその三四節より以上は四枝或は五枝を分つ其三枝なるは中枝の長さ二尺七八寸もあれば左右の枝はやゝ短くして長さ二尺許その四枝なるは一枝僅に四五寸にして三枝のうちの短きものよりもまた短し葉は女竹に似てやゝ長大にして六七葉を一朶とすその長さ六七寸廣さ七八分或は一寸許その葉の正中には淡黄色なる一縱細道ありて其左右にもおの〳〵七線路あり共に相並びて葉本より葉先に至るその葉本には必ず雄竹の如き長さ二三分許の細褐毛あり此竹大略一種の大名竹に似て其節間相去る事また八九寸なりといへども毎枝却て大名竹よりもやゝ長きを以

ス籬トナリ高サ五六尺甚ダ繁茂ス其成熟ノ者ハ黒色斑ヲナス大ナルモノハ傘柄ニ用ユ

楊州府志云紫竹人家庭心多苍叢而生中實其色深紫可レ愛

『此間彩書ニ二葉寒竹、同實略レ之』

○釋名

寒竹

　庶物類纂大和本草一家言增補地錦抄本草綱目啓蒙

孟宗竹同上

以上名義上文に見えたり又鳳尾竹の一名を孟宗竹といふ即同名異物なり　紫竹楊州府志

○正誤

廣大和本草云江南竹和名カンチク汀州府志云江南竹寒中生レ筍名曰ニ雪竹一即チ此竹也然ルニ寒竹ヲ和品トスルハ誤ナリ

本草一家言云有ニ雪竹一倭名寒竹云々

按に寒竹は即紫竹なり然を此二説に雪竹となすは誤れり竹譜詳錄に雪竹生ニ江西一枝葉似ニ筀竹一而稀疎毎節長三尺許其薄比ニ江蘆一差堅原筍色純白故名或云孟宗冬月哭而生レ筍者即此竹也張得之譜云出ニ清涼一深冬生レ筍冒レ雪一云即江南竹筍之早出者とみえたりこれにてかの誤りなる事明らけし又云江南竹江浙閩廣間皆有レ之大概與ニ淡竹一相同但一面出ニ三小枝一葉頗繁盛安南生者枝葉頗長大筍亦可レ食と見えたりされば雪竹と江南竹とを以て一物となすもまた誤れり

寒竹

寒竹は長七八尺に過ず人家境界の際に殖ゆれは繁茂して垣籬となり板竹に勝れり新井筑後守君美はこれを以ていにしへのくれ竹ならんと東雅いへり貝原篤信は和品なりと大和本草いへれば異邦になきものと定めしなり小野蘭山は本草の紫竹を以て寒竹にあつ本草綱目啓蒙

東雅云倭名鈔に管竹は楊氏漢語抄にいふ呉竹也クレタケといふと見えしは即今俗にカンチクといふもの其字の音を以て呼也雪竹俗に寒竹といふものには異なり

按に管竹の音を以て今俗にいふカンチクなりといえるなり然れ共管竹は唐韻に實中大竹なりと見ゆ實中大竹といへば陶弘景の所謂實中竹にや或は陶弘景の甘竹をさすか未知べからずと云ども實中竹

る事人面の如く或は鶴膝の如くにして人面竹は兩節の間突起する事人面の如くまた佛面の如きものなればもとより一種にはあらざる也

寒竹　孟宗竹

寒竹一名孟宗竹は漢名をまた紫竹といふその性叢をなして數十百幹に至る故に人家多く分ち植て藩籬とす此竹徑り三四分にして高さは九尺或は一丈許節極めて繁し中幹より以上は大略一尺の間五節にしてそれより以下は四節なり凡諸竹は上節高くきりて下節は低く上下相合して一節となるはその常なれども此本幹は上節ありといへども至て低く籜を生ずる下節のみあるが如く又枝節に至りてはそれと相反して上節却て高く起り下節は更になきが如しその籜細斑紋ありて頗るま竹の籜の斑紋に似たり扨此枝は根上より十三四節以上にて始めて双枝を生ずる事凡二節にて夫より以上は毎節すべて三枝なり凡竹の三枝なるは左右の兩枝は長大にして中枝は却て細少なるものなれども此枝はそれと相反して中枝は長く左右の枝は短かしその中枝の長きといへるも僅に一尺許に過ず其枝には十二三節有て毎節各兩三枝をわかち長さ三四寸廣さ四分許の細小葉を繁茂しいはゆる其枝を生ぜざる根上十三四節にはすべて小黃芽ありて此芽年を經る時はおのれと抽出ておの／＼三枝を生ず其比には彼二節の双枝なるも別に一小筍を生じて一枝を添る也凡竹類多しといへども此竹より短枝密節繁葉なるはなくまた本幹細小なる故を以て梢抄に至りては枝葉下垂する事業平竹の如し扨大和本草に寒竹冬筍を生ずといへども今江都にては此筍秋より生じて冬に至れば生長母竹よりも高し蓋し風土の異なるよるなるべし其筍の狀すゝ竹よりも甚だ細小なりといへども味甘美殊に食ふに堪たり

大和本草云寒竹冬筍生ズ又孟宗竹トモ云色黑ク細シ

本草一家言云有二雪竹一和名寒竹又名二孟宗竹一冬時抽レ筍皮斑似二護基竹一

增補地錦抄云寒竹は色黑く細き竹なり冬の中に竹の子いづる故寒竹と云又漢竹は爰になき物にや平經盛は沙金百兩を宋朝に渡し取寄て笛に作りけるとぞ今いふ寒竹はこれにてはなし寒の中に筍を生ずる故又孟宗竹ともいふ

本草綱目啓蒙云カンチクハ紫竹ナリ人家ニ栽テ籬ト

人面ハ倭名布袋竹、又名ニ古散竹ハ漢有ニ虎散竹ト與レ之不レ同、

本草綱目啓蒙云ホテイチクヲ本邦ニテハ杖トス元琉球産ナル故大和本草ニハ琉球竹トイフマタコサンチクトモ云漢名人面竹（本草彙言）ト云ヘリ竹譜詳錄云、多般竹人面竹之類、去レ土一二節之上生レ節、無長斜正不レ等、或如ニ人面ハ或如ニ鶴膝ハ或如ニ鱗甲ハ或如ニ螃蟹ハ或如ニ縮頸之鼈ハ或如ニ藏六之龜ハ五七寸節後方如ニ常竹ハ故名、東陽金華山中尤多、

『此間彩畵ニ一葉布袋竹 及竹譜詳錄所載多般 竹圖略レ之』

○釋名

布袋竹（本草一家言本草綱目啓蒙）

此竹節間圓起突出頗る畵にかける布袋和尚の面のごとくまたその腹の如くなるによりて名づく

琉球竹（大和本草）

此竹もと琉球より來る故に此名あり

虎攅竹（和漢三才圖會大和本草本草綱目啓蒙）

按に三才圖會に虎攅竹は俗稱なりといへども其名義に至りてはいはず本草一家言に古散竹に作り廣大和本草には五三竹に作る此竹の節或は三或は五相連れるによりての名なるよし又古散竹はこれと別物なればだゞ音通にてその名を假借せしのみなり或はコサンは鼓山にて閩中の地名なるもしるべからず

多般竹（竹譜詳錄）

此竹每節極めて多般故に名づく

○正誤

和漢三才圖會云虎攅竹是暴節竹乎

按に暴節竹は俗にこふ竹といふ卽筇竹にして皇朝にかつてもなきもの也

本草一家言云鶴膝竹一名佛面竹一名雞髓竹倭名布袋竹

按に鶴膝竹と佛面竹とはもと兩種にてまた布袋竹とも異なり然るを今三種混同して一ッとなすものは誤れり又雞髓竹の名は廣群芳譜にみえたりこれも鶴膝竹の一名にして布袋竹にはあらず

本草綱啓蒙云ホテイ竹ハ漢名人面竹ト（本草彙言）云へり

按に人面竹は通雅によるに佛面竹の小なるものなれば布袋竹とは別種なり其狀布袋竹は每節擁腫す

古今要覽稿卷第三百六十四

●草木部

布袋竹　琉球竹

布袋竹一名琉球竹一名虎攅竹は漢名を多般竹といふ此竹根上より二三節以上は其節密なること凡五六節或は八九節其最密なるは十一二節に至る其節或は斜或は正にして毎節擁腫宛も人面のごとく或は鶴膝のごとく或は蛴螬の如く或は縮頸の鼈の如しそれより以上は節疎にて節の狀眞竹に似て上高く下低し凡密節上より末に至りては其節下に擁腫なきは此竹の常なれども稀には擁腫あるもあり葉ははちくに似てやや長大にして繁しその先二葉相對し一葉はその下に付てすべて三葉を一朶とす姑の枝はその擁腫をなす密節上よりして並び生じ或は密節中及び密節下よりも生ずるものあり又はじめの枝獨枝なるもあればその節に黄芽を含めるものあり其枝を生ずる方は竹身互に凹處ありといへ共其正中少しく高く起りて其凹處全く兩道なり此竹高さ八九尺より一丈許に至る邦人從前此竹を杖とすその質至て輕して雅趣あり實に扶老の材なり此筍狀小なりといへ共味ひ衆筍に勝れたりされども人多くこれを啖ふ事をしらず又俗に武田竹とよぶものありこれは武田信玄存生の時手づから杖を土にさし込置しが根付しものにて今に其竹を節の所よりきれば花菱の紋あらはに見ゆるといひ傳ふ此竹の產する所は甲斐國府中の傍なる信玄居城の跡なるよし今松平越中守の大塚の下邸にその種を移し植られしを親見するに全く今の布袋竹なり別種にはあらず

大和本草云琉球竹又コサン竹ト云琉球ヨリ來レリ大サハ杖鞭ノ如シ形狀其葉ハ吳竹ノ如シ節間或ハ近ク或ハ遠シ近キ者ハ五六分遠者五六寸一本ノ內ニテ遠近アルコト如レ此筑紫ニコレアリ

和漢三才圖會云、按出ニ於日向佐原ニ有下名ニ虎攅竹一者上、高五六尺其葉小、自レ根上一尺計間有ニ節七八數一、礧砢甚奇也、卽節竹良、恨稍瘦細性不レ勁、是所謂暴節竹乎、

本草一家云、鶴膝竹、其根上十節許、促ニ腫脹凸起如ニ

古今要覧稿卷第三百六十三

●草木部 竹二

とらふたけ

とらふたけは西土にて斑竹また涙竹といひしものなり皇朝にわたりこし始は延喜前後にもやありけん源順朝臣倭名鈔をかゝれし時未だ和名なく斑竹の音を以て唱へしにてしられたりしかれども近世になりて豐後國姥が嵩（倭漢三才圖會）越前肥後土佐（本草綱目啓蒙）より出るといへば全く皇朝になしともいひがたきにや

倭名類聚鈔云斑竹兼名苑云斑竹一名涙竹

此間斑竹音籓遲久○按に廣韻に斑布還切とあり還音セン卽布還切へンとなる字典韻補を引て卑連切とあり卑連切また音へンとなる但還字をクワンとよむによりクワの反カとなりフカの約ハとなるにより被還切ハンと注すれども古くはフセン切に從ひしと見えたり

大和本草云、斑竹漳州府志云、節間有ニ斑文一似ニ湘妃涙痕所レ餘者一今按本邦處々ニアリ

倭漢三才圖會云、虎彪竹、俗稱按虎彪竹、出ニ於豐後姥之嵩一、篠竹之類而竹黄白色有ニ黑斑文一微似ニ虎皮之紋一故名レ之、用爲レ節、爲ニ煙筒一佳、

本草綱目啓蒙云斑ハ斑竹ナリマダラダケ、トラフダケ、トラダケ、薩州豐後ダケ、ラウダケ、老過（ラウ）ハ東天竺ノ國ノ名占城ニ近ク安南ノ西北ニ接ス其國斑竹數品アリ最初コノ竹ニテ煙管ヲ造リワタス故ニ今煙管ニ用ユル細竹ヲ總ジテラウト云斑竹ハ皮上ニ黑斑アルヲ云豐後越前肥後土佐其外諸州ニ出大小ノ別アリ臨桂雜識ニ品類ヲ詳ニス唐山朝鮮ヨリ來ル枝及机卓等ニ造ルモノ僞リ多シ一名花斑竹（四川總志）斑皮竹（書叙指南）涙竹（同上）湘妃竹（群芳譜）研竹（福州府志）

令熟以馬糞和泥塡高尺許如無馬糞以礱糠代之候至雨霽劚取南枝斬去竹梢并以草繩移種東北角每數竿一叢以河泥壅之勿以足踏及用鋤築實如慮風搖須作架扶之蓋竹性向西南故須種東北諺云東家種竹西家治地是也若生竹米滿林輒枯法於初時擇一大竿截留二三尺鑽通其節以犬糞實之或云如欲引竹於隔籬埋貍或死貓於墻下明年筍自迸出唯聚皂莢棘或芝蔴萁埋之土中可以障之每年冬初宜用田泥壅根筍殼名花箬收取覆甑毛竹筍籜外毛內光亮質硬不卷與他筍箬異可作鞋底

以爲席謂之桃枝勁者可以爲戈刀箭矢謂之矛竹箭竹筋竹石麻柔者可爲繩索謂之蔓竹弓竹苦竹把髮其色有青有黃有白有赤有烏有紫有斑斑者駁文點染紫者黯色黝然烏者黑而害母赤者厚而直白者薄而曲黃者如金青者如玉其別種有棘竹一名笏竹芒棘森然大者圍二尺可禦盜賊椶竹一名實竹其葉似椶慈竹一名義竹叢生不散人栽爲玩廣人以筋竹絲爲竹布甚脆

汝南圃史云竹幹淩青雲而直上枝葉瀟疎開色青翠風來有聲東坡居士曰可使食無肉不可居無竹無肉令人瘦無竹令人俗人瘦尙可肥士俗不可醫傍人笑此言似高還似癡若對此君成大嚼世間那有揚州鶴竹譜所載竹類甚詳今止說吳地所種者而次之一曰毛竹遍身毛刺其本堅厚需用最多其葉大卽青箬取作笠及舟蓋諸用筍冬初卽生名潭筍味最鮮出荊溪苕溪剡溪一帶山中過玉山入江右東粤所產則味苦以石灰醃過方食其味失矣此竹非種山土不活一曰護基竹本高大而葉粗種易盛宜於園宅故名護基四月生筍肥而甘一曰燕竹三月初燕來生筍故以燕名其本青細筍味鮮喜潮鹵地故嘉定上海獨盛一曰貴竹五月生筍又名五月貴卽淡竹又名五月淡可劈篾又名篾竹一曰紫竹高可丈餘大僅一握又名觀音竹可作簫笛一曰斑竹又名斑皮竹長短大小不等可作扇邊一曰金竹幹色純黃一曰黃金間碧玉幹青黃色間節或一節半青半黃一曰方竹本方可徑寸而長似紫竹一曰慈竹一名子母竹一名孝竹植之極易生一曰鳳尾竹高五六尺本細葉多形如鳳尾一曰水竹作盆中清玩喜瘦不喜肥宜澆水及冷茶百卉志云竹有雌雄雌者多筍凡物欲辨雌雄當自根上第一枝觀之双枝者爲雌獨枝者爲雄酉陽雜俎云竹六十年易根則結實枯死筍譜云竹根曰鞭以鞭行時八月爲春二三月爲秋凡百穀皆以始生爲春、成熟爲秋也種法須俟五月十三日岳州風土記謂之龍生日齊民要術謂之竹醉日又謂之竹迷日一云宜用辰日黃山谷詩根須辰日劚、笋看上番成、一云宜用臘月杜少陵詩東陵竹影薄、臘月更宜栽、一云宜每月本命日如正月一日二月二日之類然諺云種竹無時雨過便移多留宿土記取南枝凡大暑大寒中必不能活宜忌之種須掘闊溝鋤治

太き竹は絶てなし夫故人家の邊に南國の如く竹藪といふ物なし山中に笹ありこれも熊笹にて竹の用に立べき物にあらず南國にては竹程人家の重寶なるものはなく一日もなくては叶はぬやうに覺ゆれども斯のごとく竹なくてもさのみ不自由なる樣にもみえず只桶の輪のみ何方にても難義にみゆ津輕秋田邊にては榎の木の皮の樣にみゆる物を曲て樺にてとぢ桶とし用ゆまた太き木をくりぬきたるもみゆ邊土は人民等いとま多き故丁寧なる細工をして用はたりぬにや

冠辭考云刺竹(サスタケ)は立竹(タツタケ)也古事記に夜久毛多都伊都毛(ヤクモタツイヅモ)とあるを萬葉集に八雲刺(サス)出雲とかき古事記に意富加波(オホカハ)良能宇惠具佐(ラノウヱクサ)萬葉集に宇惠多氣能毛登左倍登與美(ウヱタケノモトサヘトヨミ)神代紀に所レ植此云ニ多底婁(タテル)一など有を交へみれば刺も立もうゑも古へは同じことにて生立てある謂也佐須陀(サスタ)氣能根彌(ケノキミ)は立竹のくみといふを音の通ふまゝに轉じてきみといひしなり刺竹之大宮人はかの君とつゞけ給ひしより君のます宮にも冠らす成べし奈良の朝に至りてはよろづの古語を旣にいひなれて久方のそらといふより日月雲などにも轉じつゞくる類也又萬葉集に刺竹の舍人壯裳云々こは又右の大宮とつゞけたるになれて刺竹を卽大宮の事としたるなりかのあをによしをやがて奈良のことゝしもゝしきを大宮の事といひなせるがごとし

本草綱目云、竹惟江河之南甚多、故曰九河鮮レ有、五嶺寔繁、大抵皆土中苞筍、各以レ時而出、旬日落レ籜而成レ竹也、莖有レ節節有レ枝枝有レ節節有レ葉、葉必三レ之、枝必兩レ之、根下之枝、一爲レ雄一爲レ雌、雌者生レ筍、其根鞭喜行ニ東南一、而宜ニ死猫一畏ニ皂刺油麻一、以ニ五月十三日一爲ニ醉日一、六十年一花、花結レ實、其竹則枯、竹枯曰レ箹、竹實曰レ篗、小曰レ篠、大曰レ簜、其中皆虛而有ニ實心竹一出ニ滇廣一、其外皆圓而有ニ方竹一出ニ川蜀一、其節或暴或無或促或疎暴節竹出ニ蜀中一、高節磥砢卽筇竹也無節竹出ニ溱州一、空心直上卽通竹也篃竹一尺數節出ニ荆南一、笛竹一節尺餘出ニ吳楚一、篔簹竹一節近レ丈出ニ南廣一、其幹或長或短或巨或細交廣由吾竹長三四丈其肉薄可レ作ニ屋柱一、簹竹大至ニ數圍一、其肉厚可レ爲ニ梁棟一、永昌漢竹可レ爲ニ桶斛一、篥竹可レ爲ニ舟船一、嚴州越王竹高止尺餘辰州龍絲竹細僅如レ針高不レ盈レ尺、其葉或細或大鳳尾竹葉細三分龍公竹葉如ニ芭蕉一、百葉竹一枝百葉其性或柔或勁或滑或澁澁者可ニ以錯一レ甲、謂ニ之𥰡篣一、滑者可ニ

大和本草云、竹類和名多介、又云、千尋草、○晉戴凱之有二竹譜一、曰種類之中有レ物、曰レ竹不レ剛不レ柔非レ草非レ木、又曰、山海經爾雅皆言、以レ竹爲レ草、然則稱レ草有レ難レ安云々、竹是一族之總名、一形之偏稱也、植物之中有二草木竹一、猶三動品之中有二魚鳥獸一也、○篤信謂、竹ハ非レ草非レ木別ニ可レ爲二一類一草ニモ木ニモ屬シガタシ戴凱之ガ說可レ從古今集ニ高津內親王歌ニ「木ニモアラズ草ニモアラヌ竹ノヨノハシニワガ身ハナリヌベラ也」ト詠ルハ竹譜ニイヘルニ合ヘリ○種樹書、種レ竹法、兩三竿作二一本一、移蒔二其根一、自相持則尤易レ活也、植時不レ須レ斬、只作二兩重架一尤妙、又曰、種レ竹處當レ積レ土、僉稍高二於傍地一二三尺、則雨潦不二侵損一、月令廣義、六月截レ竹不蛀事、林廣記曰、三伏日臘月、伐レ竹不レ蛀、今國俗ハ八月ニ伐ル○造二竹紙一法天功開物ト云書ニ詳ナリ竹紙ハ中夏ヨリ來ル○竹筍與レ笋同時珍曰性滑利多食スレバ瀉ス僧家謂二刮胃篦一

本草綱目竹筍ノ毒ハ生薑胡麻ヲ以テケス竹ヤブニ胡麻カスヲスツレバ來年竹ウスクナルトイヘリ然レバ筍ヲ食フニ此二種ヲ加フベシ筍ハ糞アル方ニ多ク生茂ス

凡竹筍ハ淡竹ヲ上トシ苦竹ヲ次トス此外ハ味不レ美淡竹筍ハ早ク苦竹筍ハ遲シ筍久ク日ヲフレバ味オトリ且脾胃ヲ傷ル新ク取タルヲ早ク食ヘバ味ヨク性ヨシ風ニアツベカラズ水ニ入ベカラズ皮トモニ久シク煮ルベシ汁ヲ取テ加ヘ羹トスベシ蒸食尤ヨク煨食モ亦ヨシ是僧贊寧ガ筍譜ニ出タリ壽養叢書云筍宜レ食レ新不レ新病人勿レ食李笠翁以レ是爲二食中第一品一言二其味之美一也新者不レ去レ皮久煮テ他物ヲ雜ヘズ只一物ヲ煮レバ味美ナリト云新キヲ早ク鹽ニ淹セバ旬餘ハ生筍ニ不レ異久キヲヘテモ味不レ惡又熱湯ニ浸シ乾テ久キニ堪フ竹林ニ蕎麥稈ヲオケバ筍生ゼズ松柏ノ百尺ニ至ルハ百年ノ久キヲ以ス竹ハ只旬日ノ間ニ生長シテ干(オカシ)レ霄入レ雲是植物ノ尤靈ナル者也

續西遊記云すべて暖國には竹よく生育す寒國は竹にあしく信濃國には竹一本も生せず甚だ不自由なる事なり桶の輪には竹にあらざれば叶ひ難き故三河尾張より輪に作りて送り來り甚だ高直なり壁のえつりは山茅を用ゆ大いなる茅ある故に多くは竹のかはりにこれを用ゆ他より思ふとは格別にして又相應にかへ用ゆる物の生ずるも天地の妙なりそれより北方越後出羽奥州も南部領邊は人民一生竹をみざるものあり

日本書紀景行紀云、天皇幸美濃、左右奏言之、玆國有佳人、曰弟媛、容姿端正云々、天皇欲得爲妃、幸弟媛之家、弟媛聞乘輿車駕、則隱竹林云々、

又垂仁紀云、十五年春喚丹波五女納於掖庭、第一曰日葉酸媛云々、第五曰竹野媛云々、

古事記雄略紀云、上略夜麻能加比尒、多知邪加由流、波毗呂久麻加斯、母登幣爾波、伊久美陀氣游斐、須惠幣爾波、多斯美陀氣游斐云々、

日本書紀繼體紀云、莒母唎矩能、簸都細能賀婆庚、那餓例倶屢、駄開能、以矩美娜開、余囊開、漠等陛鳴磨、莒等儞都倶利、須衞陛鳴磨、府曳儞都倶唎云々、

又孝德紀云、秋七月、被遣大唐使人高田根麻呂等、於薩摩之曲竹嶋之門、合船沒死、唯有五人、繫胷一板、流遇竹嶋、不知所計、五人之中門部金採竹爲筏、泊于神嶋云々、

又天武紀云、十一年十一月癸卯朔甲辰筑紫大掌諸儲用物絁一百疋云々、箭竹二千連、送下於筑紫、

又崇峻紀云、物部守屋大連資人捕鳥部萬、萬名也將一百人守難波宅、而聞大連滅、騎馬夜逃、向茅渟縣有眞香邑、仍過婦宅而遂匿山云々、有司遣數百衞士圍萬、萬即驚匿篁叢、以繩繫竹引動、令他惑己所入、衞士等被詐、指搖竹馳言、萬在此、萬即發箭、一無不中、

和名類聚鈔竹類云、竹四聲字苑云、竹知六反和名多計草也、一云、非草非木、兼名苑注云、篛王孼反竹總名也、

江家次第云、主上出御著御倚子、藏人頭歸出殿上、告出御成之由於公卿、公卿著御前座、殿上人自仙華門著座、主上召人、藏人頭微音稱唯、昇候依御氣色又微音稱唯、退下著淺履、經侍臣座後幷長橋末、又手渡御前、到瀧口戸下、告召成由於行事、藏人皈經吳竹臺東入仁壽殿露臺、自南第一間復座、陪從自瀧口戸進入、發物聲進寄梯欄下、舞人進寄吳竹臺下云々、

禁秘抄云、東庭竹臺二、又云、中殿東庭竹臺、近代木工寮役歟、天德内匠寮作吳竹架云々、

八雲御抄草部云、竹　かは　くれ　むら　いさゝむら
萬　さゝ　ふえ　より　なよ　わか　源氏　うゐ
萬植なり　とよ初學　まの　まにやはしのしの　から後抄
いし竹名　ゆさゝ　ちひろのいほつのたかむら　こを
むすびてつりはり求めし竹なり

なし旗竿となし竹束(タケタバ)となし竹鑰となし筧となし棧となし傘骨となし扇骨となし簾笛となし床簀となし竹椅となし編筵(アジロ)となし書架となし籠筥となし柱杖となし花尊(ハナイケ)となし水滴(ミヅイレ)となし杓となし箸となし松明となし火繩となし筆管烟管となし釣竿黐竿となし纑(タガ)となし簾となすその用殊に多くしてさらにその德を君子に比するのみならずまた凡草衆木にも勝れて實に天下の良材なりまた簭は和名鈔に蔣魴切韻を引て簭竹上大皮也注に簭音擇和名笋乃宇波加波とみえ和漢三才圖會には簭可二以織レ履可二以縫レ笠又堪レ裹二膠飴一淡竹簭 淡赤 乾色苦竹簭黄有二黑點潤色一 山城嵯峨爲レ上丹波次レ之若 狹豐後又次レ之筑前安 藝其次也とみえたり又古より竹葉竹筎竹瀝を藥用に供するは常なれども藥撰には凡撰レ竹不レ拘二淡竹苦竹一取二生竹身一去レ節水洗 破作二細 條一剉如二麻豆一 使用須下臨二使施一切上不レ可二剉過歷レ日若至二細者一不レ佳又枯竹無レ効又云竹身兼二竹葉竹瀝之雙効一近日博施甚覺二捷功一とみえたり今按に神農本經名醫別錄以下子母秘錄楊氏產乳等に竹根を用ゆる事ありこれまた得やすきものにしてその効頗る生竹身にもまされるを後世絕て用ゆる事なきは最惜むべき事なり

古事記云、卽遣二豫母都志許賣(ヨモツシコメ)一令レ追、爾(カレ)伊邪那岐命云々亦刺二其右御美豆良(ミミヅラ)一之湯津々間櫛(ユツツマグシ)引闕(ヒキカキテ)而、投棄、乃生レ笋(タカムナ)是拔食之間、逃行、

又云、天照大御神云々曾毘良邇者(ソビラニハ)負二千入之靫(チノリノユキ)一云々、亦所レ取二佩伊都(イツ)此二字以音之竹鞆(タカトモ)一云々、

日本書紀一書云伊弉諾尊又投二湯津爪櫛(ユツツマグシ)一此卽化二成笋一醜女亦以拔噉レ之、噉了則更追、

又云、初火燄明時生兒火明(ホアカリノ)命、次火炎盛時生兒火進(ホスヽミノ)命、又曰二火酸芹(ホスセリノ)命一、次避二火炎一時生兒火折彥火々出(ホヲリヒコホヽデ)見(ミ)尊、凡此三子火不レ能レ害、及母亦無レ所二少損一、時似二竹刀一截二其兒臍一、其所レ棄竹刀終成二竹林一、故號二彼地一曰二竹屋(タカヤ)一、

又云、有二一長老一、忽然而至、自稱二鹽土老翁一云々、卽取二囊中玄櫛一、投レ地則化二成五百箇竹林一、因取二其竹一作二大目麁籠(マアラコ)一、內二火々出見尊於籠中一、投二之于海一云々、

又云、彥火瓊々杵尊于レ時降到之處者、呼曰二日向襲之高千穗添山峯(ソホノヤマノタケ)一矣、及二其遊行之時一也、到二于吾田笠狹之御碕一、遂登二長屋之竹嶋一、乃巡二覽其地一云々、

るにあらざれば竹の根もまた小竹根にはあらざるべし然るを或人の說に皇朝自然生の竹はすべて篠類にして大竹は皆後世外國より持來れるが繁衍せしなりといへりこれは魏志倭人傳に其竹篠簳桃支といへる文によりてしかいへるなるべけれどもそれは全く我產物の十が一をおほよそに西土にて書しるせし物なれば或は我海濱諸島上には多く篠竹類の小竹を產するを見てその一偏に拘はりてさらに國中に大竹ある事をしらず又は信濃加賀越前越後などの雪國には古より今に至るまで絕て大竹ある事なしたゞ熊笹須壽(ス)竹(タケ)の類のみにして出羽及び陸奧なども南部領に至りては生涯竹をみざるものもあるよし續西遊記にみえたりこれによれば皇朝といへども竹は暖國の產にして寒國には絕てなきものなりおそらくは西土の人かかる事を傳へ聞て漫にその說をなせしもしるべからずもとより魏志載る處誤り多し既に篠簳桃支といへど桃支は古より國產絕てこれある事を聞ずまた其地無二牛馬虎豹一といへり虎豹は我產にあらずといへども牛馬は神代より多しまた男子無二大小一皆黥レ面文レ身といへども文身のものは至賤の最狡猾なるもののたま／＼なす處にして何ぞこれを以て男子無二大小一といはんやその他神功皇后の殉葬奴婢百餘人などいへるもまた傳聞の誤りなれば魏志に說ところもとより信ずるにたらずそれはともあれ皇朝自然生の竹は皆篠簳のみにして大竹なしといへるはその說うけ難し日本紀崇峻紀云捕鳥部萬依逃二匿篁(タカムラ)叢一以レ繩繫レ竹引動令三他惑二已所一レ入肥前風土記云値嘉(チカノ)嶋有二篁(タカムラ)篠一和名鈔云孫愐切韻篁竹叢也注音皇和名太加無良俗云太加波良及び竹字をたけと訓ぜしは卽長高の意なるにてその義はおしはかるべし

扨西土の說に竹を以て君子に比せしは竹は天地の和を稟て堅貞の操を全くし虛心正直にして歲寒といへどもさらに其狀を變せざるによりてなり故に王子猷はこれを嘯詠して何可三一日無二此君一といひ蕭穎士は竹箴を作りて君子秉レ心惟其正直といへり既に詩衞風にも綠竹猗々有二斐君子一といへば竹を以て君子に比する事その由來久しされば皇朝にても古より佐須陀氣能枳彌(サスタケノキミ)或は刺竹之大宮人と歌にもよめるは和漢人情一つなるが故なりまた其用をいふ時は中々に凡草衆木の及ぶ處にあらずまづ弓材となし矢料と

根原五十番歌合に寄二竹臺一戀と云る題の歌に「よそに見し雲井の庭の川竹の」と入道大納言の詠りしは是也又竹取物語に「吳竹の世々の竹取」古今和歌集序に「吳竹のよゝに聞え」また「吳竹のうき節を人にいひ」延喜式に吳竹を以て筥の足とせし事有に因ば此竹の吳國より來れるは醍醐天皇よりは遙に以前の事なるべし抑石淸水臨時祭は天慶五年四月廿七日に起り平將門亂逆報賽也と江家次第に見えたれば二竹臺を作られしは孰にも天慶より以前の事なれば恐くは醍醐天皇の比なるも知べからず堀河百首に「吳竹は色もかはらで瑞籬の久しき代より緣なる哉」と公實卿のよめる歌あり其みづがきは卽崇神天皇の宮名なれば吳竹は蓋し其比吳國より來りしやうにも聞ゆれど此みづがきはたゞ久しきといふ詞の枕辭なればあながちに崇神天皇の時に此竹の渡りしと云にはあらず吳竹の名萬葉集になき[illegible]にても平城天皇の頃にはいまだなきものなる事明らけし其吳竹河竹の二種を葉の廣きと細きによりて辨別せしは徒然草を始とし凡ての竹の舊くより歌によみ來りしをおほよそに集めて書しるせしは八雲御抄を始とすそれより下りては和漢三才圖會大和本草等おの〳〵その種類を載るといへども僅に十餘種なり本草一家言に至り頗る增補ありといへどもいまだ穿鑿を遂ざるを以て大略二十餘種に過ずそも〳〵竹は皇朝固有の物といへどもまた近時海外より渡りこし物も多し今を以てこれを見ればその種類殆百種にも近かるべし扨西土の書にたゞ竹と稱するものは卽大小の通名なるは論なし我古に竹とのみ稱せしは全く大なる物にして篠と稱するものは卽小なるものなり故に小竹(シノ)宮小竹(ミヤシノ)祝小竹田(ハフリシノダ)の類は皆その字の如く小なるものなれども竹林(タカハラ)竹屋(タカヤ)竹爲(タケヲ)レ從類はすべて大なる物をさしていふ既に萬葉集に刺竹宇惠竹辟竹の名ありといへども其竹はかならず名湯竹細竹目をさしていへるにあらず且刺竹宇惠竹は素より一種の竹の名にあらざるによれば名湯竹細竹目の外に舊くより別種の竹の大なる者ありし也されど今世のごとくにそれ〴〵の漢名を命じて區別せしものにあらざればそれをばすべて竹とのみ稱し或は刺竹宇惠竹などゝ歌には詠るなるべし又雄畧天皇の御製に「木の根の根ばふ宮竹の根の根足宮(ネタルミヤ)」といへる事みえたり其木の根は小木根をさしていへ

古今要覽稿卷第三百六十二

屋代弘賢著

●草木部　竹一

竹　たけ

竹の物に顯れしは天照大御神の伊都の竹鞆をとりおはしてと（古事記）みえたるぞ初なるべき其後彦火火出見尊の生れ給ひし時臍帶（ホソノヲ）を切し竹刀（アラヒエ）化して竹林と成しと（日本書紀一書）いひつたへたれどもその竹林の生出ざる先に旣に竹鞆及竹刀に作りし竹は自然生のものなるべし伊弉諾尊の湯津爪櫛（ユツツマグシ）をなげ給ひしが笋と成しを豫母都志許賣（ヨモツシコメ）の此を拔て喰ひしと（古事記日本書紀）鹽土老翁（シホツチノヲヂ）が玄櫛を地に投しが竹に化せしを採て大目麁籠（オホマアラコ）を作りしと（日本書紀一書）は共に竹刀の化して竹林と成しと同じく化生のものにして自然生には非るにやされども天津（アマツ）彦火瓊々杵根尊（ヒコホノニニギネノ）の天降りまして國見し給ひし處を長屋の竹嶋と（日本書紀）云へるは自然生の竹ある嶋にして化生のものにはあらじまた大足彦忍代別（オホタラシヒコオシロワケノ）天皇弟媛（オトヒメ）の家に幸せんとし給ひしよしを聞て弟媛の隱れし（景行紀）竹林も亦自然生の竹にして物の化せしにはあらじ其自然生の竹を以て堤に植られしは坂手池を作りし時を始とし（同上）此を以て人の名とせしは丹波竹野媛（開化紀）上野君祖竹葉瀨（仁徳紀）を始とす又伊久美陀氣多斯美（イクミタケタシミ）陀氣（タケ）の名は雄略天皇の御歌にみえ（雄略紀）初瀨の河に流れこし伊久美陀氣（イクミタケ）を以て箏を作り笛を作る由は春日皇女の歌（繼體紀）に有竹の筏を作りて薩摩の曲（クマ）に死を免しは門部金と（孝徳紀）云人にて箭竹二千連を筑紫に送り下せしは太宰府の請へるに因て也（天武紀）又名用竹（ナヨタケ）名湯竹（ナユタケ）細竹（シヌ）目刺竹（メサスタケ）宇恵竹（ウエタケ）辟竹（サキタケ）打竹（ウツタケ）の名は萬葉集に出河竹（カハタケ）小川竹呉竹（クレタケ）斑竹（ハンチク）等の稱は延喜式にみえたり其河竹に苦竹の字を塡しは和名鈔に辨色立成を引呉竹に箽竹の字又於保多介に篌竹の字を塡しは同書に楊氏漢語抄を引るを始とす扨呉竹河竹を禁中に植られしはいつの比よりの事なるや其始をしらずと云ども江家次第に石淸水臨時祭試樂の時主上出御云々藏人飯經（二）呉竹臺東（一）入（二）仁壽殿露臺（一）とみえ又禁秘抄には東庭竹臺二とみえたり其一つは河竹臺なる事しるし公事

古今要覧稿第五目錄終

古今要覽稿第五目錄

草木部下

古今要覽稿

第五